

前期レフ・トルストイの生活と創作
——「内なる女性像」から生じた問題とその解決を中心に——

佐藤雄亮

目次

はじめに：アプローチと仮説	5
先行研究	10
トルストイの主要な評伝について	17
マルクス主義的、歴史主義的トルストイ論：レーニンからバフチンまで	31
第1部 カフカス	35
第1章 『幼年時代』における終生のテーマ： 母の愛と魂の不滅を確信するも、いかに生きるべきかは分からない…	36
補説：イヴァン・バナエフの熱狂	42
第2章 ヤースナヤ・ポリャーナ前史：祖父ニコライ・セルゲーエヴィチ・ヴォルコンスキーの生涯	48
補説：ロシア・ウサーズバ文化における、ニコライ・ヴォルコンスキーのヤースナヤ・ポリャーナ	88
第3章 トルストイのほんとうの生い立ちは？	91
第4章 大学時代：「実験」の開始	107
第5章 帰郷からコーカサス行きまで：創作という新たな「実験室」	117
第6章 『襲撃』：真の勇気とは？	121
第7章 『森を伐る』：兵士のキリスト	132
第8章 カフカスの高みとは	137
付録：トルストイは「サヴォアの助任司祭の信仰告白」をどう読んだか ——「魂の不滅」と「善」にかんするトルストイの考察の全文——	147
第9章 理想の女性像	152
補説：ソロモニーダとの淡すぎる関係	163
第10章 袋小路	165
補説：「魂の弁証法」について	173
第11章 現実そのものを変える：農業経営と教育活動	174
第12章 農婦の愛人：アクシーニャ・バズイキナ	202
第2部 1812年と『戦争と平和』	211
I 1812年	211
はじめに	211
第1章 ナポレオンはなぜロシア遠征を敢行したか？	221
第2章 ナポレオンのロシア侵入からスモレンスクの会戦まで	229
第3章 スモレンスクからボロジノまで	240
補説：バグラチオンと大公女エカテリーナ・パーヴロヴナとの恋愛事件	244
第4章 ボロジノの会戦	249
第5章 祖国戦争後半の焦点：「問題はいかに実行するかだ」（クラウゼヴィッツ）	268
第6章 ボロジノの会戦後の退却からモスクワ放棄決定まで	272
第7章 フィリの軍議	281
第8章 露軍がモスクワを放棄し、仏軍が入城	290
第9章 モスクワの大火	296
第10章 犯人はだれか？	303
第11章 モスクワからタルーチノまで	318

第12章	タルーチノで日々力関係が逆転	332
第13章	「ただ逃げること」の難しさ	336
	補説：ベレジナ川でナポレオンを捕捉、撃滅する作戦の計画書	339
第14章	トルストイによる祖国戦争の歪曲と真実と	345
	結論：祖国戦争の真実と夢	352
II	『戦争と平和』論：夢と夢の出会い、そして生命の誕生	355
	補説 二つのディテール：「下あごのくぼみ」と「絶えず働こうと用意しているような手」	371
III	「作者の逸脱」と視点の問題	374
補遺	祖国戦争にかんする個別の証言と研究	383
	1) 陸軍中將ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記	383
	補説：ヤースナヤ・ポリャーナと「禿山」	401
	——なぜモレンスク近くにスライドさせたか——	
	補説：ミハイル・ヴェレンチャーギン惨殺事件	421
	2) セルゲイ・グリーンカの『1812年についての回想』	425
	——ツァーリに放火をまかせられた男——	
	3) デカブリスト、マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポステルの手記	444
	——祖国戦争の残したものは？——	
	4) ミハイロフスキー＝ダニレフスキーによる最初の公式の祖国戦争史	454
	5) スターリン時代の大家エフゲニー・タルレ	460
	6) ヴィクトル・シクロフスキーの『『戦争と平和』の素材と文体』	466
第3部	『アンナ・カレーニナ』	471
	はじめに	471
第1章	トルストイは「殺人者」か：二つの悲恋にかんする藤沼貴氏の未発表の説	474
第2章	「アルザマスの一晩」と、もう一人のアンナの鉄道自殺	485
第3章	「女性的なるもの」を殺し、葬る	489
第4章	ブラックホールとしての世界：	
	『アンナ・カレーニナ』における「ひげもじやの小さな男」と「赤い袋」	493
	補説：ブラックホールとしての世界の表現	533
第5章	アンナ・カレーニナの愛のドラマ	538
	補説：カレーニンについて：トルストイのもうひとつの自画像	573
	参考資料1：19世紀ロシアの離婚事情について	576
	参考資料2：アンナが乗った鉄道	579
	参考資料3：その他のシンボル	586
第6章	『見知らぬひと』はアンナ・カレーニナか？：	
	レフ・トルストイと画家イヴァン・クラムスコイ	590
第7章	後期トルストイ論への序章：『復活』とはどんな作品か	618
結論		624
文献目録		635

はじめに：アプローチと仮説

およそあらゆる男性は、心のなかに理想の女性像を秘めている。女とはこういうものである、こうあるべきものであるという根源的なイメージで、自覚されていることも、されていないこともある。この女性像はときに、現実の女性に——たとえば、自分の母親に——結びついている。しかし、どんな実際の女性にも基づいていない場合も多い。どこからそんな女性のイメージがわいてきたか、神のみぞ知る、だ。とはいえ、こうした女性像はたしかに存在するのであり、それは、すべての男性の世界観をかなりの部分規定している——かりに、それがあまり意識されていないとしても¹。

トルストイの理想の女性像は、いったいどんなものだったのか？ かんたんに言うと、彼はどんなタイプの女性が好きだったか、ということだが、それを知ること自体は、べつだんむずかしいことではない。

トルストイ研究の権威、故リディア・オプリスカヤの言う、「トルストイ的美女」のイメージははっきりしている。目の覚めるような美貌、こわい波うつ黒髪（ときに、メドゥーサを思わせる）、野性的なまでの生命力、圧倒的に強靱で優雅な肢体、豊かな胸、あふれんばかりの愛情、強烈な官能性、傲岸なまでの誇り高さ。マリアーナ（『コサック』）、ナターシャ・ロストワ（『戦争と平和』のエピローグ）、アンナ・カレーニナ、カチューシャ・マースロワ（『復活』）——みな、同じタイプだ。

マリアーナは、可愛いというタイプではなく、まさに**美女**であった！ 彼女の顔立ちは、きっぱりしすぎているように、ほとんど粗野にさえ見えたかもしれない——もし、そのすらりと伸びた上背と、たくましい豊かな胸と肩、それに、とりわけ、黒い眉の下の影におおわれた、きびしいと同時に優しい切れ長な黒い眼、いつくしむような口許の表情と微笑がなかったならば。彼女は、めったに微笑まなかったが、しかしその微笑は、いつも驚嘆させた。微笑みから、乙女の力強さと健やかさがあふれでるのであった。どの娘も美しかったが、しかし、娘たち自身も、ベレッキーも、糖蜜菓子をもってきた従卒も——みな思わず知らずマリアーナの方に目をやり、娘たちみんなに話しかけ

¹これは、ユング心理学でいうと、根源的、元型的な女性のイメージである「アニマ」、またはやはり元型的なイメージである「母親コンプレックス」、またはこの両者の混交に当たるだろう。

これらのイメージはしばしば、すぐれた知性の持ち主にさえ十分に意識されておらず、いきなり、少年のように純情な「老いらくの恋」を引き起こしたりすることがある。徳富蘇峰の最晩年の恋愛などはその典型だろう。

しかし、「赤毛の美女」の餌食になるのは、内面のナイーブな投影に陥る「老教授」にかぎらず、男子たるもの、だれにとっても他人事ではない。「アニマ」や「母親コンプレックス」は、いくら高度に意識化されても、汲み尽せぬものがあり、その牽引力は生涯つづくようである。ドストエフスキーや泉鏡花の作品などは、その非常に分かりやすい例だ。

るつもりが、彼女に向かって話すようにならぬのだ。彼女は、他の者たちの間であって、誇り高く陽気な女王のように見えた。(『コサック』 *太字は原文イタリック——佐藤)²

概して、トルストイは、上流社会の貴婦人に魅力を感じず、チェチェン、ダゲスタンなどコーカサスの山岳民、コサック、ジプシー、農民などの女性に惹きつけられた——彼らの強力な、野性的な生命力に、自然のふところに抱かれての労働の生活に。

貴族の女性は、社会のお荷物で、他者におんぶされて生きており（貴族の男も、その点おなじだが）、ひ弱で、生活に真の目的がなく、したがって真の生活意欲がなく、ゆえにセックス・アピールも弱々しく、立派な教養も、要するにアクセサリーにすぎないと感じられたのだ。

とりわけ、美しく強く健康な農民女が重労働に従事しているのを見ると、トルストイは、胸がときめいたようである。

若い女房は、軽々と、楽しげに、器用に働いていた。大きな固まっている干し草の山は、すぐには熊手で掘り起こせなかった。彼女は、まずそれを十分ほぐしたうえで、熊手をさっと突っ込み、しなやかなすばやい動作で、熊手に全身の体重をかけ、赤い帯をむすんだ背をそらして身体を起こすと、こんどは白い前掛けの下から豊かな胸をぐっと突きだしながら、器用に熊手を持ちかえ、干し草の束を高々と荷車の上へ放り上げるのだった。(『アンナ・カレーニナ』3章11節)

問題は、トルストイ自身地主貴族であるから、これらの、自分が惹かれるタイプの女性と真に対等の関係になり、生活をともにするのは、たいへんむずかしいということだ。なぜなら、彼は、彼女たちを権力によって支配する立場にあるからである。要するに、彼は主人であり、彼女らは奴隷なのだから——。彼と彼女らのものの考え方、世界観はまったく異なり、利害は根本的に対立する。まさにこの理由によって、トルストイは、女性との愛において、最も深刻に倫理的、社会問題と直面したのである。とりわけ、農婦の愛人、アクシーニャ・バズイキナとの愛憎において。作家は、『コサック』(1853-1862)を執筆するなかで深くこの問題を追求し、完全に自分のコンプレックスを自覚する。

² Толстой Л. Н. Полное собрание сочинений в 90 томах. Юбилейное издание. М.: Гослитиздат, 1928—1958. Т.6. С.97-98.

以下、この全集からの引用は、巻数と頁数のみを、(6, 97-98)のように本文中に示す。ただし、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』などの、ロシア内外で広く知られた作品については、(『戦争と平和』3巻2編21章)、(『アンナ・カレーニナ』7章31節)のように、巻、編、章、節の数字のみ記す。

さて、これまで述べた「トルストイ的美女」以外に、もう一つ、別のタイプの女性たちが、作家の作品に登場し、枢要な役割を演ずる。それは、子どものために自分を捧げつくす、まさに献身的な母親だ。ママン（『幼年時代』）、マリア・ボルコンスカヤ（『戦争と平和』）、キティーとドリー（『アンナ・カレーニナ』）などがそれである。これらの母親像は、あきらかに、作家の母マリア（旧姓ヴォルコンスカヤ）についてのイメージにもとづいている。こちらは「母親コンプレックス」と言ってよかろう。

トルストイは、まったく母親を覚えていなかったが（彼女は、トルストイが1歳11ヶ月のときに亡くなった）、にもかかわらず、母の肖像画を見て生き身の彼女を想像したいという欲求を感じなかった、と本人が言っている——こうした場合、なんとか生前の母親の顔をみたいと思うのがふつうであろうに。

その理由は、トルストイの伝記作者、ニコライ・グーセフも指摘しているように、「トルストイは、心のなかで自分の母親の理想的イメージをつくりあげ、それを大切にしていた。そして、そのイメージが何かで損なわれるのがいやだった」³。作家自身は、伝記作者パーヴェル・ビリュコフに書き与えた『思い出』のなかで、たまたま母親の肖像画が一枚も残っていなかったことに触れながら、こう語っている。「私は、ある程度そのことを喜んでいる。なぜなら、そのおかげで、私のいただく母のイメージには、その精神的すがたしかなくなり、そのために、私が母について知っていることは、何もかもすばらしいことばかりになったからだ」（34, 349）

母の理想的イメージは、最晩年にいたるまで変わることなく、トルストイの心中に聖物のように保たれた。まあ、一種のマザコンと言ってもよかろう。青年時代には、母のイメージは、未来の妻に対するあこがれにも結びついたのである。「レーヴィンの脳裏では、彼の未来の妻は、彼にとって母がそうであったような、魅力的かつ神聖な女性の理想像を再現するものでなければならなかった」（『アンナ・カレーニナ』第1章27節）

ところが——ここが問題なのだが——こういう理想の母は、トルストイにとって理想の女、「完全な女」ではなかった！ 繊細で教養豊かな貴婦人、ママンが野性的なコサック娘、マリアーナでありえないのは、わかりきった話だ。両者は、本質的に異なったところがあるから、統合がほとんど不可能なのはあきらかである。しかし、両者を統合しなければ、完全に満たされた結婚、家庭生活はありえない。それなら、ママンのタイプと結婚してマリアーナのような愛人をもてばいい、と考える向きもあろうが、トルストイの場合、そうはいかなかったのである。

³ Гусев Н.Н. Лев Николаевич Толстой: материалы к биографии с 1828 по 1855. М., 1954. С.59-60. 以下、グーセフの評伝からの引用は、この第1巻『1828年から1855年まで』からなら、（グーセフI、59—60頁）のように、第2巻『1856年から1869年まで』からなら、（グーセフII、〇〇頁）、第3巻『1870年から1880年まで』からなら、（グーセフIII、〇〇頁）と、本文中に略記する。

作家は、結婚、家庭生活へのあこがれが人一倍、異常なほど強かった。なんとしても、家庭の愛と調和がほしい。そして、しあわせな家庭を基盤とした理想的な生のありかたを、実生活でも創作でもけんめいに追い求めた（すくなくとも『戦争と平和』執筆の時期までは）。言い換えれば、トルストイの理想的世界像は、幸福な家庭をベースとして世界全体が愛と調和でむすびつくといった、あくまで家庭を基礎とした一元的、包括的なものだったということだ。女性の愛にもとづいた世界の調和へのあこがれは、さまざまな変遷をへながらも、『幼年時代』から『アンナ・カレーニナ』まで貫流する中心テーマであり、一目瞭然であるから、証明の要はなかろう。

ここでひとつ考慮すべきは、ロシア人一般にみられる思考の型である。多くのロシア人は、個人生活から、ひろく社会生活全般、政治、経済にいたるまで規定してくれるような、巨大な一元的思想、広義の宗教をどうしても求めたがる。いや、そもそもそういうイデオロギーのもとでしか、生きたことがない（帝政時代は、正教の名においてすべてが規定され、ソ連時代は、共産主義が、個人のモラル、行動から外交まで律した。現在は、一元的イデオロギーが崩壊した点で、おそらく歴史上はじめての事態であり、ロシア人は心理的に不安定な状態に陥っている——。歴史学者ウラジーミル・ブルダコフ〈Владимир Булдаков〉は、筆者との私的な会話のなかで、こう指摘した）。ロシアの思想家たちも大半がこの型で、ホミャコフもソロヴィヨフもレーニンも、思想の内容こそ千差万別だが、「大ぶろしき型」という点では大同小異だ。

トルストイもまた例外ではない。幸福な家庭は一切の基礎であり、生の全体と不可分である。だから、それが得られなければ、理想の生の追求が無意味になる。「永遠に女性的なるもの」が、自分にとって「絵に描いた餅」でしかなく、無縁であることが運命づけられているとすれば、すなわち、世界の愛と調和が根本的に不可能であるとするならば、結局、世界とは、神とはいったいなんなのだ、ということになる。したがって、作家の内なる女性像には、ありとあらゆる問題が絡まってくるわけである。

「トルストイ的美女」という見果てぬ夢は、この意味で作家にとって十字架であり、彼の生に重くのしかかった。だが、われわれに肝心なのは、彼が十字架をいかに荷い、生を創造していったか、ということだ。

トルストイは、独特のやりかたで、この難問を解決する。『戦争と平和』においては、虚構の世界で創造的ファンタジーを羽ばたかせることによって、つづいて、『アンナ・カレーニナ』においては、問題そのものを葬り去ることで、『アンナ・カレーニナ』は、言ってみれば、いっさいの「女性的なるもの」の殺害、埋葬の物語である。作者トルストイは、アンナにおいて、自分の内なる最高の女性像を具象化し、そして葬らねばならなかったのだ。

こうして作家にあっては、作品だけでなく、生の全体が驚くべき創造物となった。

本稿では、こうした観点から、トルストイの生涯と作品を考える。つまり、内なる女性像、そして、それと不可分にむすびついた理想的世界のイメージから、作家の創造全体を一挙に

とらえようとする試みである。この視点から、一方では、作品分析をおこない、また一方では、歴史的状況と作家の生活を掘り起こす。これまであまり焦点をあてられなかった「負の側面」をもふくめて。

彼にとって、日常生活は、創造のための素材にすぎなかったかもしれない。創造をもとの素材に還元するだけなら、「元の木阿弥にもどす」だけだったら、なんの意味があろう。だが、それを熟知しなければ、素材がどれだけ化けたか、昇華されたかもわかるまい。

具体的な手順としては、最初に処女作『幼年時代』をみて、そのあとは時系列にしたがって生涯と作品をみていく。『幼年』には、終生のテーマが、上に述べたような理由ではっきり示されているからだ。それを道標に進んでいこうというのである。しかし、その前にまずは先行研究を概観しておこう。⁴

⁴ 本稿の構想の概略は、国際シンポジウム『境界を超えるトルストイ』（2010年11月6日熊本学園大学）で、「トルストイ的ヒロイン——超えられない境界」という題名で発表したことがある。このシンポは、トルストイの没後百年を記念して、日本ロシア文学会の主催で、「知的交流会議助成プログラム」の助成と GCOE プログラム「境界研究の拠点形成」の協力のもとで行われたものだ。その後、この原稿は、日本ロシア文学会と上記 GCOE プログラムの共同出版（編者は中村唯史山形大学教授・SRC 客員）という形で刊行された。

Юсуке Саго «Толстовские героини и непреодолимые «границы»» // «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» edited by NAKAMURA Tadashi, 2011 by the Slavic Research (GCOE・日本ロシア文学会共同出版『境界を超えるトルストイ』) . C.5-25.

先行研究

類似のアプローチの先行研究は、筆者の調べたかぎり皆無にちかい。藤沼貴氏の「カチューシャの系譜」がほとんど唯一の先駆的業績だ⁵。これはおそらく偶然ではない。ロシアの文学研究では、いまだに「下ネタ」を忌避する傾向が強いからである。

一例をあげると、トルストイの愛人、農婦の人妻アクシーニャ・バズイキナは、作家の生涯と文学、思想を語るうえで欠かせない人物なのに、パーヴェル・ビリュコフによる伝記『大トルストイ伝』（原久一郎訳）にも、浩瀚なニコライ・グーセフの『レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ：伝記のための資料』⁶にも、ほとんど登場しない。グーセフがこの女性のことを知らなかったはずはないが、作家の名誉を汚すものとして捨象したか、文学、思想とは無関係と決めつけ、切り捨てたものと思われる。今でも、トルストイに「不名誉」な話もちだすと、露骨にいやな顔をされることがめずらしくない。一般読者はもちろん、専門家でもそうだ。大文豪、預言者にたいして失礼な！というわけである。

これがたとえばフランスなら、ルソー研究者がことさらに、スキャンダラスな面を避けるというようなことは考えられまい。ルソーは、感動的な教育論『エミール』を書いたが、内縁の妻テレーズ・ルヴァスールに産ませた子供5人をみんな孤児院に送っている。この矛盾のなかにルソーがいる、と考えるのが常識だろう。だが、ロシアにはロシアの事情がある。

ロシアのトルストイ研究に話をもどすと、いきおいこの種の資料は公開されにくい。たとえば、故リディア・オプリスカヤは、現在刊行中の新トルストイ全集⁷の編纂にあたり、あらゆる資料を手にする立場にあったが、彼女から直接筆者が聞いたところによると、カフカス時代の日記の性病罹患にかかわる部分は、いまだに非公開だ。理由は、「みっともないし創作そのものに関係ない。文豪のイメージを傷つけるから」。しかし削られた日記は、カフカス時代の生活、コサック女性との交流について、いろいろ教えてくれる可能性がある。作家の妹マリアの不倫の恋にかんする資料が出始めたのも、ようやくここ30年ほどのことだ⁸。だから、外国での研究もなかなか進まないことになる。とはいえ、この方面の論考は皆無ではない。

まず1928年、トルストイの生誕100年に古典的な労作が出ている（ちなみに、90巻全集刊行もこの年に刊行がはじまり、58年に完結している）。ウラジーミル・ジダーノフによる『レ

⁵ 「信州白樺」第34・35号合併号（レフ・トルストイ特集）1979年11月発行、44—57頁。

⁶ この評伝については、次節で詳しく述べる。

⁷ Толстой Л. Н. Полное собрание сочинений: В 100 т. / РАН. Ин-т мировой лит. им. А. М. Горького; Ред. коллегия: Г. Я. Галаган, Л. Д. Громова-Опульская, Ф. Ф. Кузнецов, К. Н. Ломунов, П. В. Палиевский, А. М. Панченко, С. М. Толстая, В. И. Толстой. М.: Наука, 2000—...

⁸ Толстой С.М. Единственная сестра// Прометей: Историко-биографический альманах серии «Жизнь замечательных людей» / Сост. Ю.Селезнев. Т.12. М.: Мол. гвардия, 1980. С.269 — 287; Переписка Л.Н.Толстого с сестрой и братьями. М., 1990.

フ・トルストイの生涯における愛』⁹だ。ジダーノフは、夫人エヴェリーナ・ザイデンシヌールとともに、テキスト校訂学の最高峰をなした研究者である。

この本のねらいは、序文に示されているように、心理学の発達を受けて、トルストイの個人生活、とくに性にもメスを入れ、パーヴェル・ビリュコフ、ニコライ・グーセフらの評伝の欠落を埋めて、作家の生涯と創作の全体像を再現しようとする事だった。

その際、現在にいたるまで未刊行のものもふくめ、多数の資料を駆使しているが、あくまでも一次資料を中心とし、作家の自伝的作品などの使用は慎重に行っている。たとえば、後述するパーヴェル・バシンスキーの評伝では、いわゆる改心後の中編『悪魔』をそのまま、農婦の愛人アクシーニャとの関係にもちこみ、トルストイが彼女に「悪魔的なもの」を感じていたとしているのに対し、ジダーノフは、たんねんに日記、書簡などを読み解いて、そうした見方を否定している——トルストイにとってエロスが悪魔に墮したのは、改心後の話だから、という理由で。

ジダーノフの記述の仕方は、ビリュコフやグーセフに近く、それまで分散していた大量の資料を有機的に結合し、引用におのずと語らせるといふものだ。安易な解釈はむしろ自ら抑制している。

私は分散していた文書を集め、それらを体系化し、自らの名においてではなく、登場人物たちの言葉によって、可能なかぎりの記述を行おうとした。この本は、将来の伝記が書かれるために、資料を体系化しようとした、その最初の試みと見ていただくべきであり、私が慎重に記した結論は副次的な位置しか占めていない。しかし、こうした本書の性格が、私にそれを刊行する権利を与えるのである。(同書の序文)

実際、本書の結論的な部分は、かなり一般的だ。いわく、性に目覚めて「悪癖」に陥り、やがて娼家に通うようになる。自己嫌悪にかられつつ、清純な女性への憧れをつのらせる。カフカスでの女性との付き合いは、日記を見るとかなり「散文的」であったが、時がたつにつれて、カフカス体験が記憶のなかで美化され、『コサック』のマリアーナという「集合的イメージ」に結晶する。トルストイが初めて本気で好きになったのは農婦のアクシーニャで、その愛が、結婚への「地ならし」をした。ソフィア夫人との関係は、問題もあったが、最初はおおむね幸せであった。問題としては、彼の愛人への未練、結婚当初の夫人の性的淡白さ（というより嫌悪感）、双方の嫉妬深さ、トルストイの目標喪失（創作にも教育活動にも興味を失っていた¹⁰）などがあつた。ところがやがて、トルストイの心の底に深く根を張っていた、死への恐怖が目覚めてくる一方、夫人との関係も、とくに次女マリアの出産をきっかけにひ

⁹ Жданов В.А. Любовь в жизни Льва Толстого. М.: Планета, 1993.

¹⁰ ジダーノフは、トルストイが結婚したために一時的に教育活動に興味を失った、としているが、これは、後述するように、正しくない。結婚以前に、当局の圧力で学校閉鎖に追い込まれたのである。

びが入る（*これについては、本文でくわしく述べるが、ソフィア夫人は産褥熱で危うく死にかかり、医師はこれ以上子供を産まないよう勧めたにもかかわらず、トルストイは言うことを聞かなかった——佐藤）、云々——。

ざっとこういったところで、それだけ見ると、なんだという感じだが、ジダーノフの目標は十分達成されており、トルストイの個人生活の全体像がみごとに再現されている。ジダーノフの龐大な知識と、全身的、直観的な把握のなせるわざだ。

彼は、「大画家の直観力と一方に偏しない歴史家の精確さとが幸福に結合している伝記作者」が将来、「現代的な魂の苦悩」を描いてくれるのを待つとしているけれども、いまのところ、彼を超える「画家兼歴史家」は現れていない。

ジダーノフの目の確かさを物語る例として、トルストイの義妹タチアーナあての 1863 年 3 月 23 日付けの手紙にかんするくだりがある（同書 65-70 頁、90 巻全集 61, 10-13）。結婚半年後の一見幸福な新婚時代に書かれた手紙だが、ソフィア夫人がある日突然、陶製の人形に変わってしまったという奇想天外な内容だ。それも、比喩などではなく、文字どおり陶器になったという、そのときの状況と「人形」の姿形を、真面目くさった口調で長々と事細かに、当時 16 歳の少女だった義妹に「報告」しており、これが 1926 年に初めて発表されたときには、評家はみな当惑した。たんなる冗談という意見も出たが（たとえばウラジーミル・チュエルトコフ）、ジダーノフはこれに与せず、「夫婦関係の性的側面が無意識のうちに反映したもの」だろうと推測している。つまり、さっき触れた、ソフィア夫人の性的淡白さ、不感症、その夫婦関係への影響などを示唆している、と。

だが、筆者（佐藤）の印象では、どうもそれだけでは割り切れない不気味なものが残っているようだ——トルストイがこの手紙をわざわざ義妹に書いた真意も含めて。¹¹

¹¹ 陶製の人形になったソフィア夫人

この義妹タチアーナあての手紙によれば、1863 年 3 月 21 日午前 10 時、トルストイが早朝からあちこち出歩いた後、寝室でひと眠りしていると、ソフィア夫人が扉を開け、服を脱いで近づいてきたので、目を開けたところ——「ソーニャが見えたんだが、ぼくと君（義妹）が知っているソーニャじゃなくて、陶製のソーニャなんだ！（*下線部の原文はイタリック——佐藤）」

この後、陶製の妻の微細な描写がつづく。等身大で、冷ややかな肩、首、腕をむき出しにし、両手は前で組み、髪は大きくうねり、ぜんぶ一塊の陶器になっていた。髪、目は黒く、唇は洋紅（カルミン）で赤く塗られている。下着もその襞もすべて一塊の陶器だった。「手に触れると滑らかで、気持ちいい手触りだが、冷たく、陶製だ」。「お前は陶器なのか？」と聞くと、「ええ、そうよ」という答。トルストイはぞっとしたという。

足を見るとやはり陶器で、板の上に乗っている（板も身体もひとつつながりだ）。板は、茶色と、一部緑色に塗られており、土と草を表している。左足の後ろ側の膝より少し高いところに、やはり陶製の柱が、つかい棒のようにくっついている。棒は、木の切り株のように着色してある。よく見ると、下着の襞の一部と肩が少し欠けており、頭の天辺と唇の色がちよっと剥げていた。

トルストイが呆然としていると、人形は彼ではなく、自分のベッドのほうを見ながら、ゆらゆら揺れ出す。横になりたいのかと思い、抱きかかえると、いきなり、掌におさまるほど小さくなる。それで、ベッドに寝せ、彼女のナイトキャップを二つ折りにして、かけてやる。やはり冷たい陶器のままだが、お腹が盛り上がっていた（夫人は当時妊娠中で、3 ヶ月後、6 月 28 日に長男セルゲイを出産する）。「ぼくは奇妙な感情を味わっていた。突然、彼女がこんな有様であることが気持ちよくなり、ぼくは驚くのを止めた」。二人はそのまま寝入る。

われわれは、事あるごとに、ジダーノフが提出した、こうした事実にもどらなければなるまい。

ジダーノフの後は、残念ながら、この方面の研究は事実上封印されてしまい、連邦崩壊後も成果に乏しい。しかし最近、パーヴェル・バシンスキーによる優れた評伝『レフ・トルストイ：楽園からの逃走』¹²が出た。

これは、農婦の愛人アクシーニャのことや夫婦関係にも踏み込み、「下ネタ」も存分に駆使して書かれている。それというのも、トルストイの生涯と創作の原動力を「家庭というプロジェクト」¹³に見ているからだ。中心テーマが結婚生活と家庭である以上、この手の話を避けるわけにもいかない。それに、ソ連時代とちがって、この方面の検閲、自己検閲は大幅に緩んでいる。

バシンスキーは、幼年時代の家庭の「楽園（Рай）」を再現することこそが、トルストイの全生涯を貫く情熱だと考え、彼の女性関係、夫婦関係、家庭のありかたを実に丹念に再現する。その緻密で生き生きした記述は圧巻で、ついに夫婦仲と家庭の崩壊にいたる過程が眼前に彷彿とする。

翌日、食堂に行くと、妻はいつも通りの、肉体をもった彼女だったが、二人きりになると、同じことがくり返され、小さな陶器になってしまう。「でも、彼女はこれを苦にしていないし、ぼくも同様だ。正直言うと、変に聞こえるだろうが、ぼくはこのことを喜んでいる。彼女が陶器であるにもかかわらず、ぼくたちはとても幸せだ」

ところがある日、トルストイが留守にしていた隙に、陶器の妻は、飼い犬のドーラにおもちゃにされ、あやうく壊されかかる（*トルストイはディケンズが好きで『デイヴィッド・コパフィールド』を古今最高の小説として挙げているから、その主人公の愛妻の名 Dora を、愛犬につけたのではないか）。それで、特製の箱を注文し、そこに仕舞えるようにした。箱の外側はモロッコ皮を、中は暗赤色のビロードを張った。

だが、「突然、恐ろしい不幸が起きた」。彼女が机の上に立っていたとき、ナターリア・ペトロヴナ（居候の貴族の女性オホートニツカヤ）がそこを通り、落としてしまったのだ。左足は、膝上から、つかい棒の切り株といっしょに欠けてしまった。「アレクセイは、白色塗料と卵の白身でくっつけられると言っているが。モスクワでやり方を知っている人はいないかな。送ってください」。これで手紙は終わっている――。

（アレクセイ〈Алексей Степанович Орехов、1882年死亡〉は従僕で、トルストイのカフカス、セヴァストーポリ行きに同行した）。

筆者（佐藤）の暫定的な解釈では、犬ドーラは、トルストイのエロス、リビドーであり、箱は、ヤースナヤ・ポリャーナの屋敷、卵は将来生まれる子供と「家庭の幸福」だ。人形の破壊は、言うまでもなく、夫婦生活の破綻である。「家庭の幸福」は「運命の女」に克てないのだ。

おそらく、この手紙は、そのアレゴリーによる一貫した展開をみると、「無意識的な反映」などではなく、逆に、高度に意識的に、自分の女性関係、結婚生活の全貌を表現し、かつその行く末を予測したものだ。

それを、作家の兄セルゲイと不倫の恋に陥りつつあった義妹に、男女関係の深淵にかんする警告として、示したのだと思う。義妹を愛しすぎていた作家の嫉妬も、そこにあったかもしれない。二人の恋にそれを冷ます微妙な毒をたらし込んだのである。詳しくは、追い追い本文で検討していくこととし、ここでは、ライトモチーフ的な言い方にとどめておく。

¹² Басинский П.В. «Лев Толстой. Бегство из рая». М.: Астрель, 2010.

¹³ Там же. С.430.

だが、彼自身の家庭の崩壊が、なぜ『クロイツェル・ソナタ』にみるような、性の全否定と女性全般とエロスへの呪詛（と見える）に行き着くのかは、どうもよく分からない¹⁴。自分の家庭が崩壊したからといって、性も土地所有も——つまり、家庭生活の基礎をまるごと——否定する必然性はないからだ。世に、深刻な家庭問題を抱える人は多いが、トルストイ主義のような思想に走る者は例外だろう。

この断層を説明しうる視点は、本書には導入されていない。

要するに、この評伝は、良くも悪くもホームドラマで、そういうものとしては最高のできばえだが、そこに問題もあるということだ。ソ連時代に掃いて棄てるほどあった硬直したイデオロギー臭からは、みごとに脱しているが、思想性、社会性を完全に捨象してしまうのも、やはり正しくない。

とはいえ、バシンスキーは、資料の徹底した渉猟と熟読に加え、思い切り「足も使って」、驚くべき成果を多々挙げている。それはとくに、作家の家出の再現に顕著だ。ひとつ例を挙げておこう。

トルストイは家出するとまずオープンチナ修道院（*Оптина пúстынь*）を訪れる（ここにはかつて、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老〈*старец Зосима*〉のモデルとなった高僧アムヴローシー長老〈*Старец Амвросий, 1812-1891*〉がおり、トルストイも1877年に会ったことがあった）。

このときもトルストイは、長老と会って話をしたかったらしい。なにを話したかったかは想像するしかないのだが、バシンスキーは、とにかくまず自分をその空間に置いてみようとする。もちろん、みずから現地に足を運び、当時の僧院と巡礼宿舎の状況をできるだけ具体的にたしかめ、トルストイが僧院に着いてなにをしたか、翌朝どんなコースで散歩したかまで虱つぶしに調べあげていく。その結果、たいした意味もなさそうな、この散歩のコースが、だいじなことを語りかけてくるのだ。

宿舎は僧院の外にあって、僧院の敷地に入るには門をくぐらなければならないのだが、じつはトルストイはついに門のなかに入らなかった。門の近くを入ろうか入るまいかと逡巡するかのように、門の前を行ったり来たりしていたのが分かったのだ。いったん宿舎に戻ってから、雪の舞うなかを、もう風邪を引いていたのに、もういちど同じ場所にもどって門前を行きつ戻りつする。読者は、自分もその場に立ち会い、行きつ戻りつするトルストイを目の前にみているような気がしてくる。そして、その心境がおのずと浮かび上がってくるように思われるのだ。トルストイは結局、ついに門をくぐることなく、長老に会うことなく出発し、一週間後に、風邪をこじらせて肺炎になり死去する——。バシンスキーの徹底した調査と豊かな文学的才能は、こういう光景に結晶する。この評伝は、一步一步このように展開していく。

¹⁴ たとえば、次の箇所をみよ。

Там же. С.417.

疑いなく、この本は、近年のトルストイ研究における最良の成果のひとつであり、ベストセラーとなったのも頷ける。

ウラジーミル・ポルドミンスキー『トルストイについて』¹⁵も面白い。

本書の『クロイツェル・ソナタ』への序文¹⁶で、ポルドミンスキーは、作家の女性関係と夫婦関係をきめ細かに追い、なぜあの『クロイツェル』に至りついたかを明らかにしようとする。それによると、トルストイは、兄たちに娼家に連れていかれ初体験したときは、ベッドの脇で泣いたというほど潔癖であった。こういう傾向はのちのちまで保たれ、息子イリヤの口から、「まだ女性と関係したことがない」と聞いたときは、感極まって「子供のように号泣した」ほどであったが、同時にトルストイは、並外れた性欲の持ち主であって、数多くの女性遍歴（そのほとんどすべてがプロの女性）を経ては、しばしば自己嫌悪に陥るといふ男だった。

その彼がほんとうにほれ込んだのは、農婦の愛人アクシーニャだけだったのだが、トルストイは、家庭願望がきわめて強く、「父の生活をそっくりそのまま再現する」ことを望んでいたため、この「家庭プロジェクト」（ポルドミンスキーの表現）を実現するため、アクシーニャとは別れ、宮廷医の令嬢ソフィアと結婚した。

しかし、この18歳の、かなり神経質で潔癖な少女は、結婚前に婚約者の日記を読まされて、ショックに打ちのめされる。結婚生活でも、夫人の言葉によると、「自分が欲望の対象でしかない」としばしば感じ、夫が結婚後も農婦の愛人への未練を引きずっていることと、結局自分は「その他大勢のなかのひとりにすぎない」との疑念に傷つきつづけた。

「転換」後に書かれた『クロイツェル』は、じつはこうしたソフィア夫人の感じ方と共通点をもつものだった。それは、性というエゴイズム、暴力、支配、そしてそれに対する女性の反撃——すなわち、やはり性を通じての男性支配——を突いていたからだ。

ところが、夫人は今度は、夫による性の否定を、自分自身の否定、自分が献身的に夫とともに築いてきたはずの家庭の全否定と受けとり、溝はさらに深まる…。

ポルドミンスキーの論は、このように実に鋭く、しかも綿密に展開される。しかしながら、バシンスキーの場合と同じく、トルストイの思想の全射程とその「転換」とを説明し切れていない恨みが残る。

¹⁵ Порудоминский В.И. «О Толстом». СПб., Алетейя, 2005.

¹⁶ トルストイが書いた有名な、『クロイツェル・ソナタ』の「後書き」にひっかけている。

なお、2006年には「偉人伝シリーズ」で、アレクセイ・ズヴェレフとウラジーミル・トゥニマノフによる大部の評伝『レフ・トルストイ』が出ているが、主だった事実を雑駁に寄せ集めた印象で、引用の典拠も示されておらず、残念ながら、論評に値しない¹⁷。

2010年に、作家の没後100年を期して出された、やはり「偉人伝シリーズ」の『ソフィア・トルスタヤ』も同じ理由で、批判に耐えない。なにしろ、トルストイの家出から死、葬儀までが、1頁足らずで片付けられている¹⁸。

さて、さきほど触れた藤沼貴氏の「カチューシャの系譜」のアプローチに話をもどそう。『コサック』のマリアーナから『復活』のカチューシャにいたる、被支配階級、下層出身のヒロインに焦点をあて、それがはらむ性、倫理、社会的問題の展開を追っていくのは、本稿と重なるのだが、いくつかの点で筆者には異論がある。

1) 藤沼氏は、マリアーナはカフカス時代の現実に根をもつものではなく、「はじめから作中人物として創り出されたものと考えられる」と述べておられるが、はたしてそうか。

2) 同氏は、あつかう対象を下層出身の女性にかぎっているが、上に述べたような理由で、ナターシャ・ロストワ、アンナ・カレーニナなど貴族女性も「カチューシャの系譜」にふくめて考えるべきではないか。

3) 同氏の論考では、いわゆる改心、アルザマス一夜などをはさむ、前期と後期の創作のちがいが必ずしもあきらかでない。なるほど、氏は、性、倫理、社会的問題の認識の度合いにおいて、オレーニン（『コサック』）とネフリュードフ（『復活』）のあいだに大きなへだたりのあることを指摘されてはいる。だが、これだけでは、前期と後期の世界観の相違を説明できない。トルストイの全著作を通読すると、たしかになにかが起ったという、動かしがたい実感があり、その一方で、後期の思想そのものは、すでに前期に存在する、いやそれどころかカフカス時代にもう出そろっているという矛盾にぶつかるのである。筆者としては、まさにこのトルストイ的ヒロインこそが、その隠れた分水嶺に光を当てうると考えているのだ。

¹⁷ Зверев А.М., Туниманов В.А. «Лев Толстой». М.: Молодая гвардия, 2006 (Жизнь замечат. Людей: Сер. Биограф.; Вып. 1016).

¹⁸ Никитина Н.А. «Софья Толстая». М.: Молодая гвардия, 2010 (Жизнь замечат. Людей: Сер. Биограф.; Вып. 1229). С.235.

トルストイの主要な評伝について

本稿では、こと作家の生涯の事実関係にかんするかぎり、ニコライ・グーセフの評伝「レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ：伝記のための資料」に依拠するケースが多くなる。これは、筆者だけでなく、どのトルストイ研究者の論文でもそうだ。ここで、その理由とあわせて、ビリュコフ、エイヘンバウム、シクロフスキーなどによる主な評伝について、その特徴と問題点を指摘しておこう。

ビリュコフ

最初の大部で総合的な評伝で、いまだにグーセフと双璧なのが、ビリュコフの『L.N.トルストイの伝記』¹⁹だ。

パーヴェル・イワーノヴィチ・ビリュコフ（1860－1931）は、90巻全集の総監修を行ったウラジーミル・チェルトコフ（1854－1936）とならぶ、トルストイの高弟だが、肌合いはまったくちがう。チェルトコフの言動や手紙をみると、そのあまりの独断専行と陰険さが鼻につき、ときに悪魔的な感じさえ受けるのに対し（ここでは、そのことについては深入りしないが）、ビリュコフのほうは、「誰も怒らせたことがなく、誰に対しても悪いことをしたことがないどころか、逆に多くの人を可能なかぎり手助けした」²⁰といった人物であったらしい。

それは、彼の記述の仕方にも感じられるのだが、その反面として、トルストイという様々な顔をあわせもつ怪物を描くには、ちょっと人が良すぎるかもしれないと思えるときもある。文学とは難しいものである。

ビリュコフの評伝の特長

とはいえ、この評伝には、今なおかけがえのない長所がたくさんある。なんといっても、ビリュコフが長年トルストイと身近に接していて、その人となりを深く愛し理解していたのにくわえ、記述は、書簡、著作をはじめとする資料そのものに語らせるという、実直な態度を貫いていることだ。その結果、やや聖者伝風に傾きすぎているきらいはあるが、見事に全体像が造形されることになった。

それから、トルストイ自らがビリュコフに書き与えた『思い出』（先祖のことと幼年時代の回想）を含んでいることも大きい。なるほど、そこにはトルストイの記憶違いなどの誤りも多々あるが、逆に、彼がどこでどう間違ったか、どんなイメージをもっていたかを知るこ

¹⁹ Бирюков П.И. Биография Л. Н. Толстого в четырех томах. М.: Госиздат, 1922—1923.

日本語訳：原久一郎訳『大トルストイ』I、II、III、勁草書房、1968—1969年。

（＊日本では、ビリュコフが定着しているが、発音はビリュコフのほうが近い）。

²⁰ Булгаков В.Ф. О Толстом. Воспоминания и рассказы. Тула, 1978. С.260.

ブルガーコフは、トルストイの最後の秘書である。

とができる。事実はどうだったか、とともに、彼自身はどう思っていたか、思ったがっていたかを確認することで、その偏差から、彼の個性が浮かび上がってくるだろう。

ビリュコフが、トルストイの意図を最大限尊重して監修した『トルストイ全集』（スイチン刊）²¹も、独自の価値を失っておらず、作品によっては、90巻全集をはるかに凌いでいる。これについては、本稿の第1部「カフカス」第6章（『襲撃』：真の勇氣とは？）のところでくわしく述べる。

ビリュコフは、革命後亡命し、一時ソ連に戻るが、体制に違和感を覚え、再度出国して、スイスで亡くなった。

グーセフ

こんなビリュコフとある面で——その人物も、評伝も——対照的なのがほかならぬニコライ・グーセフ（1882-1967）である。グーセフは、チェルトコフとソフィア夫人が、作家の著作権をめぐり激しく対立していた1907年に、チェルトコフ自身の推薦で、作家の秘書になった人物だ。グーセフもチェルトコフも、革命、内戦、スターリン体制をしたたかに生き延び、長年、トルストイ研究を統括する立場にあった。

筆者が、国立トルストイ博物館の某研究員に直接聞いた話では、グーセフは、自分の気に染まない人間を片端から内務省（内務人民委員部）に密告していたとか…。真偽のほどは確認する興味もないし、その要もあるまいが、あの評伝はいかにもそうした人物の書いたもののように思えなくもない。

大プロジェクト

グーセフの『レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ：伝記のための資料』は、まさに膨大な資料を収集・整理し、なおかつ見事に統一されたコンセプトのもとにまとめ上げたものである。この本を読んでいると、まるで軍隊を一糸乱れず統率する武将のように、多数のスタッフを思うさま持ち駒として駆使できた、学者としても官僚としても抜群の力量を持った人間が脳裏に浮かんでくる。

評伝の第1巻²²は、トルストイのセヴァストーポリ時代まで（1828-1855年）を扱っているが、これだけで700頁超もあり、質量ともに多くの点で、ビリュコフをはるかに抜き去っているのは一読すれば明らかだ。

以下、1855-1869年、1870-1880年、1881-1885年の各巻が、それぞれ1957年、1963年、1970年に出ている（グーセフの没後、この「伝記のための資料」を、弟子筋に当たるリ

²¹ Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений Льва Николаевича Толстого / Под ред. и с примеч. П. И. Бирюкова: в 20 т. М.:Т-во И. Д. Сытина, 1912-1913.

²² Гусев Н.Н. Лев Николаевич Толстой: материалы к биографии с 1828 по 1855. М., 1954.

ディア・オプリスカヤが継続し、1899年のところまで書き継いだが、2003年の彼女の死とともに中断されている)²³。

「伝記のための資料」にくわえ、やはりグーセフによる『年譜』²⁴は、最も網羅的で、精度も高く、トルストイ文献の基本の基本である。

ニュートラルな「伝記のための資料」

という次第で、現在にいたるまで、グーセフの評伝の意義を否定するトルストイ研究者はいないが、問題点も無きにしも非ずだ。

グーセフは決して、一線を超えて価値判断を下すことがない。このかなりニュートラルな「伝記のための資料」に、独創的な解釈や見解を期待することはできない。もっとも、これは伝記ではなく、将来伝記が書かれるための資料集成にすぎないと、グーセフ自身断っているし（そこには政治状況も影響していたと推測される）、しかも、全体を並々ならぬ深さでつかんでいる確かな眼が感じられるので、「中性的」な記述自体は欠点とはいえないかもしれない。

だがその眼は、必ずしも信用できぬ、油断のならぬものである。トルストイのイメージを傷つけるようなネガティブな資料は黙殺したり、場合によっては、本稿の第1部カフカスの「トルストイの農奴解放の試み」のところで指摘したように、事実を歪曲したりすることさえあるからだ。すべては、社会主義および（社会主義リアリズム）を予告した預言者の線で、きびしく取舍選択されているから、いちいち眉に唾をつけてかかる必要がある。もっとも、これはグーセフにかぎったことではないが。

エイヘンバウム

ボリス・エイヘンバウムの評伝²⁵は、数々の重要な指摘を含んではいるものの——それらについては、本稿のなかでたびたび援用している——、長所と裏腹の問題点（と思われるも

²³ Опульская Л. Д. Лев Николаевич Толстой: Материалы к биографии с 1886 по 1892 год / АН СССР. Ин-т мировой лит. им. А. М. Горького; Отв. ред. К. Н. Ломунов. М.: Наука, 1979.

Опульская Л. Д. Лев Николаевич Толстой: Материалы к биографии с 1892 по 1899 год / АН СССР. Ин-т мировой лит. им. А. М. Горького. М.: Наука, 1998.

²⁴ Гусев Н. Н. Летопись жизни и творчества Льва Николаевича Толстого, 1828—1890. М.: Гослитиздат, 1958; Гусев Н. Н. Летопись жизни и творчества Льва Николаевича Толстого, 1891—1910. М.: Гослитиздат, 1960.

²⁵ Эйхенбаум Б. М. Толстой論を年代順に挙げておく。

Эйхенбаум Б. М. Молодой Толстой // О литературе: работы разных лет. М., 1987. С. 33—138. 日本語訳はボリス・エイヘンバウム（山田吉二郎訳）『若きトルストイ』みすず書房、1976年。

Эйхенбаум Б. М. Лев Толстой. Кн. 1: 50-е годы. Л., 1928.

Эйхенбаум Б. М. Лев Толстой. Кн. 2. 60-е годы. Л.-М., 1931.

Эйхенбаум Б. М. Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974.

Эйхенбаум Б. М. Лев Толстой. Исследования и статьи / Сост. И. Н. Сухих. СПб, 2010. これは、エイヘンバウムのトルストイ研究を一冊にまとめている。

の) もいくつかあるので、ここでは敢えてそれを挙げておこう。まず第一に、当時進行中だったゲーセフの仕事を踏まえておらず、基本的な事実は、ビリュコーフにもとづいていることだ。

もう一点は、フォルマリストたちの基本的なコンセプトに関連するのだが、すべてが手法の問題に還元されてしまうきらいがあること。この点を十分説明するために、『若きトルストイ』から『レフ・トルストイ：六十年代』にいたる記述を——そのなかでもとくに『戦争と平和』にかんする部分に焦点を絞り——くわしくパラフレーズし、エイヘンバウムの見解をできるだけ正確に再現するように努める。かなり長くなるが、あらかじめ寛恕を乞う。そして、パラフレーズした後で、筆者の見解を示すことにする。

「概括」と「細かさ」による制約

エイヘンバウムによれば、若きトルストイは、ニュートラルな客観的視点などというもの、そもそもあり得ないと考えていた。個々の人物が見た個々の事物だけがある、というわけだ。そこでトルストイは、特定の人物の目を通した、微細をきわめた描写、すなわち「細かさ」と、そこからの道徳的、哲学的逸脱である「概括」の交錯する、ルポ的作品を書いていた。

しかし、特定の視点から描くルポでは、人間と事物の断片が浮遊しているばかりで、社会全体、世界全体は再現されえない。ということは、なんらかのまとまったストーリー

(сюжет) を紡ぎ出すのは、至難の業であり、「大きな問題」には取り組めないということだ。こうしたジレンマは、処女作『幼年時代』から、カフカス時代の軍記物『襲撃』、『森を伐る』を経て、クリミア戦争に取材して書かれた『セヴァストーポリ物語』にいたるまで、一貫して課題であり続けた、とエイヘンバウムは述べる（この点についての筆者の見解は、本稿の第2部「1812年と『戦争と平和』」の「作者の逸脱」と視点の問題」で、具体的に述べておいた）。

『戦争と平和』における「ホメロスの逸脱」

そこでトルストイは、エイヘンバウムによると、「ジャンルを高め」、「叙事詩のジャンルに移行する」ために、「ホメロスの逸脱」を行った²⁶。ただし、その逸脱の内容は、ホメロスとは異なり、哲学、歴史であったが。こうして生み出された叙事詩（エポペーヤ）が『戦争と平和』にほかならない——。

なぜ、このような形で「ジャンルを高め」ることになったのか。この間の経緯を、エイヘンバウムは、『レフ・トルストイ：六十年代』の末尾でこうまとめている。

²⁶ Эйхенбаум Б.М. «Лев Толстой». Книга вторая (60-ые годы). Л.-М., 1931. С.376. 以下、この節での本書からの引用は、本文中に、(エイヘンバウム II、376頁) のように記す。

『戦争と平和』のテキストには、10年間の歳月（1863－1873年）に、ロシアとトルストイの行動に生じた変化が現れている。彼が当初抱いていた「反歴史主義」（*進歩史観に対する批判的態度——佐藤）は、かなりつましい——分量の面でも資料の面でも——戦争と家庭の年代記を書くよう、彼に指し示したのだが、トルストイは、当時のアクチュアルな諸問題に促されて、この年代記を、歴史的叙事詩すなわち「エポペーヤ」に変え始めた。そしてそこへ、哲学的・歴史的視点からなるひとつのシステムを導入したのである。「反歴史主義」は、歴史的「ニヒリズム」に変わり、ロマン（長編小説）・年代記は、或る新たなジャンルに変わった。このジャンルは、「ロマネスクな行動」²⁷が、歴史的資料および哲学的判断と交叉することで生じた。だが、このジャンルは、「否定的な」ものであった。というのは、それを形作る諸要素が、互いに敵対するもののように対立し合っていたからである。（エイヘンバウムII、401－402頁）

すなわち、初めトルストイは、「反歴史主義」の立場から、今も昔も変わらぬ世の営み（戦争と家庭）を、とくにイギリスの作家アンソニー・トロロープを範として描いた。つまり、「イギリスの家庭的ロマンに完全に則り、戦争は、冒険的な題材の要素として利用した」（エイヘンバウムII、269、280頁）のだが、進歩、改革、科学、理性の時代である、60年代という時代そのものに、彼もまた「感染」していた（エイヘンバウムII、402頁）。しかし、その感染の仕方は、一風変わったものであったという。

エイヘンバウムの説明するところでは、トルストイはこの時代にあって、保守的、貴族主義的であって、なおかつ科学的ともいふべき、独自の「非現代人たち」の代表者のような位置を占めていた。その「トルストイ・サークル」のメンバーは、歴史家ミハイル・ポゴージン、チェスの名人、セルゲイ・ウルソフ（Сергей Семенович Урусов）、ユーリー・サマーリンなどであった。

『戦争と平和』における歴史観、戦争観の多くは、彼らによるもので（もしくは、彼らの考えがトルストイを触発して生まれたもので）、グループによって共有されていた。この作品における「ホメロスの逸脱」の中身はこれらの思想である、とエイヘンバウムは主張する。

以下、その中身をエイヘンバウムの記述に沿って具体的に見ていこう。

ポゴージンとウルソフの「歴史の微分」

²⁷ ルソーは『告白』で、自分はものごとを時系列順には描かない、あらゆる感情、思考、行動をそれらが現れるままに描く、とあらかじめ断っている。この方法をフランスの哲学者アランは「ロマネスクな方法」と呼んだ。

アラン『文学論集』77章、『アラン ヴァレリー：世界の名著 66』所収、中央公論社、1980年、276－278頁。

まずポゴージンについては、彼の著書『歴史の箴言 Исторические афоризмы』が重要である、とエイヘンバウムは指摘する。そのなかでポゴージンは、歴史における因果関係、自由と必然といった一般的問題をさかんに論じているのにくわえ（これ自体は、歴史意識が先鋭化した当時、珍しいことではなかったが）、大抵の場合、物理、力学の比喻を持ち出したり、数学用語を援用したりする。これらは、『戦争と平和』の特徴でもある。

たとえば、こんな箇所がある。「歴史にも、独自の対数、微分、そして啓蒙された人間にしか分からぬ神秘がある」。この神秘とは、ポゴージンによれば、自由と必然の関係だ。

また、次のような、ほぼそのまま『戦争と平和』に見出される文章さえある。「一人ひとりが、自分のために、自分の計画にしたがって行動するのだが、それとは別の最高の計画が遂行されていく。そして、個々人の生活史の生煮えの、細々した、腐敗した糸が絡み合って、石造りの歴史の布地が織られていくのだ」（エイヘンバウムII、331-336頁）

一方、セルゲイ・ウルソフは、1860年代半ばに、高等数学の本をいくつか著しており、とくに、歴史と戦争の理論に「力の平行四辺形」や微分などの数学的分析を応用して法則を見出すことに、非常な関心をもっていた。そして、トルストイは、ちょうど「歴史的、哲学的逸脱」を書いていた時期に、彼との旧交を温めている（エイヘンバウムII、345-375頁）。²⁸

ブルードン、メーストルとのかかわり

こうした「非現代人」グループでの交流にくわえ、エイヘンバウムは、「財産、それは窃盗である」（『所有とは何か』、1840年）という言葉で有名な思想家ピエール・ジョゼフ・ブルードンと、ジョゼフ・ド・メーストルによるインスパイアの可能性も挙げている。

ブルードンのラディカルさ、無政府主義、歯に衣着せぬ毒舌、「集合力」の理論²⁹、そして著書『戦争と平和』（1861年）。トルストイが西欧旅行中に彼と会ったのは、この著作が書き終えられた直後だった。

²⁸ ところで、ポゴージンとウルソフが数学に依拠しているのは偶然ではなく、ここには「党派争い」も絡んでいると、エイヘンバウムは指摘する。雑階級は、ダーヴィニズムなどの生物学を好んだのに対し、貴族たちは「純粋な」数学、物理学、天文学を好む傾向があったという（エイヘンバウムII、357-358）。

たしかに、このエイヘンバウムの指摘は一理あるかもしれない。『アンナ・カレーニナ』1章3節に、リューリクの末裔であるオブロンスキーが、「もし家柄を鼻にかけるなら、リューリクで止って、始祖の猿を拒んだりしちゃいけない」と自虐的な冗談を飛ばす場面がある。

²⁹ **ブルードンの集合力の理論**には、たしかにトルストイの『戦争と平和』における群集の活動の捉え方に通じるものがあるので、当該箇所を引用しておこう。

「資本家は労働者の日当を支払った、と人は言う。正確には、資本家は日々労働者を雇い入れるたびにその日の日当を支払ったと言わなくてはならない。これはまったく同じことではない。なぜなら、労働者たちの結合と調和、彼らの努力の集中と同時性との結果から生ずるこの巨大な力に資本家は少しも支払っていないからだ。二百万の擲弾兵が数時間でルクソルのオペリスクをその土台の上に建てた。ただの一人が二百日でどれだけのことが成し遂げられると人は思うであろうか。しかるに、資本家の計算では賃金の額は同じだったのだ。ところで、砂漠を耕地にし、家を建て、工場を営むことは、オペリスクを建て、山を移すのと同じである。最少の富、最も貧弱な建造物、微々たる産業の運営も、一人

トルストイが後に著した小説と同名のこの本には、ナポレオン観でも共通点がある。「卑小な魂につきもののありとあらゆる特徴。すなわち、傲慢、虚栄、人間性の完全な欠落、人々への侮蔑」（エイヘンバウムII、302頁）

（*トルストイの『戦争と平和』の主人公ピエールには、このフランスの野人的な思想家の面影が見られるという説もある——彼の名もまたピエールである。もちろん、プルドンだけが、この集合的人物像の唯一の源泉であるはずはないが——佐藤）

プルドンの『戦争と平和』にはまた、次のような、トルストイに通じる女性観、女性蔑視を開陳している箇所もある。

戦争は、男女の間に、巨大な、そしていかんともしがたい不平等を打ち立てる。この自然の巨大な法則、すなわち戦争を理解する者にとっては、戦争における女性の無能は、さらに何百万もの数の他の無能力に値することになる。実際、家庭生活は、女性にとって唯一の使命だ。（エイヘンバウムII、306頁）

トルストイは、ここまで露骨な物言いはしなかったが、心中で膝を叩いたかもしれない（*ポルドミンスキーの評論のところでみたように、男性側からの圧倒的な暴力的支配、そして、それに対する女性の、性を通じた反撃というのが、トルストイの女性観の一つのポイントだ——佐藤）。

ジョゼフ・ド・メーストルについては、その反合理主義、深遠な人間知、ナポレオン観にくわえて、彼の著作が『戦争と平和』のあちこちに素材として使われていることを、エイヘンバウムは指摘する。たとえば、不眠症に悩む老ボルコンスキー公爵が毎晩寝場所を変える場面があるが、これも、メーストルがストローガノフ伯の死を描いた文章からとった（エイヘンバウムII、308—316頁）。

このようにエイヘンバウムは、ポゴージン、ウルソフ、プルドン、メーストルらの著作、思想のなかに、『戦争と平和』の素材になったものが多々あることを、ものの見事に論証する。

「影響関係ではなく、構成が問題である」

ではとうてい足りないほど種々様々な仕事と才能の協力を必要とする。経済学者たちがこれに気づかなかったのは、驚くべきことだ。そこで、資本家が受け取ったものと支払ったものとを清算してみよう」
プルドン『所有とは何か』（長谷川進・江口幹訳）、三一書房、1971年、141頁（この著作は1840年に書かれている）

「総和」というものには、機械的な加算では尽くせないなにかがあり、それが歴史をも動かしている。その不思議をトルストイは、『戦争と平和』で徹底的に追求することになる。

もつとも、エイヘンバウムは、自分は影響関係を云々するのではないと断っている。つまり、トルストイがどこから借用したとか、だれからどんな影響を受けたとかいったことを言いたいのではない、と。

すべてこれらの比較は、<...> トルストイの同時代の具体的テキストにより、彼のテキストを理解し解釈するのが目的である。私は、この場合、借用だとか影響だとかが自ずと、まったくどうでもよくなってしまおうような、そんな前提から出発している。その前提とは、事実の歴史的關係性 (историческая соотносительность фактов) が必然的であり、不可避であるということだ。(エイヘンバウムII、305頁 *下線は原文イタリック——佐藤)

自分は、歴史的關係性、相対性を前提として出発しているので、一義的な影響などというものは考えられない。それはどうでもいいことだ。ではなにが問題なのか。構成が問題である、とエイヘンバウムは言う。

その構成とはどんなものかといえば、さっき引用した通りで、見やすいように図式化すると、次のようなものとなる。

(家庭と戦争のイギリス風年代記) + (ブルードン、メーストル、「非現代人」グループの思想による「粹付け」) = 『戦争と平和』

なるほど。では、この「構成」は結局なにを語るのか？ これについては、エイヘンバウムは、以下のドストエフスキーの言葉に代え、自身は一言も語らない。

これはすべて地主の文学ですよ。それは言うべきことをぜんぶ言い尽くしてしまいました(レフ・トルストイにあっては、それは見事なものでしたが)。しかし、この最高度に地主的な言葉は、最後のものとなりました。(エイヘンバウムII、403頁)³⁰

А знаете — ведь это всё помещичья литература. Она сказала всё, что имела сказать (великолепно у Льва Толстого). Но это в высшей степени помещиье слово было последним.

その言葉とはなにか？ それこそが問題なのではないか？...

以上が、エイヘンバウムの『戦争と平和』にかんする見解だ。

³⁰ 1871年5月18(30)日付のニコライ・ストラーホフ宛書簡の一節。

Достоевский Ф.М. Собрание сочинений в 15 томах. Ленинград; «Наука». Ленинградское отделение, 1988—1996. Т.15. С.490.

このように、エイヘンバウム描くところのトルストイは、あたかも、歴史にあやつられて、手持ちのツールを組み合わせるかのようで、作品はその論理的関係に帰するのであるが、問題は、そこに作者の世界観、世界感覚がどの程度現れているか、である。³¹

なるほど、いくつかのコンポーネントは見事に取り出し、分解して見せたが、しかしこれでは、壮麗な大建築から、何本かの柱と数種の建材のみを取り外すのに似ている。これは、せっかくの完成品を「元の木阿弥」に戻すというものではないのか。

結論のどんでん返し

という次第で、エイヘンバウムの記述の展開を追ってきて、この“結論”にいたると、どうも拍子抜けの感を禁じえない…。と、筆者はずっと思ってきたのだが、つい先ごろ——もう本稿を書き終えようというところになって——、実はこの結論には、もう一つ奥があり、いわば二重底になっているかもしれないことに、はたと気がついた。

³¹ 中村唯史氏は、「1910-20年代のエイヘンバウム—— フォルマリズムとの接近と離反の過程——」（「スラヴ研究」No. 59（2012）所収）で、エイヘンバウムの世界観と美学の変遷を詳細に跡づけ、彼がフォルマリズムに接近した後、離反して、大部なトルストイ伝の執筆に向けた成り行きを浮かび上がらせている。

中村氏によれば、対戦、革命、内戦、貧困、飢え…のなかで相次いで両親、息子、友人たちを失ったエイヘンバウムは、「生から自立した表象を構築することで生を超克」しようとして、フォルマリズムに近づき、それは『若きトルストイ』をはじめとする数々のすぐれた論考に結実したが（なぜとくにトルストイを選んだかといえば、彼が、生と表象、内容と形式の乖離に高度に自覚的だからだ）、その一方で、絶えずエイヘンバウムは、生の深淵、圧倒的な盲目的暴力、不可知性に脅かされていたという。

生は多様であり、これを一つの要因に帰することなどできはしない。[...] 生は川のように間断なき奔流として動いているが、しかしその川からは無限数の細流が流れ出ており、その一つ一つが独自のものである。いっぽう芸術は、この奔流の分流ですらなく、それらの上に架かる橋だ。（エッセイ「5=100」. Эйхенбаум Б. «5=100» // Книжный угол, 1922. № 8. С. 40.）

芸術の素材は、「間断なき奔流」である物自体である。だとすれば、精巧に作られた橋それ自体からだって、いつ何時激流が噴き出し、橋を微塵にしないともかぎらない…。中村氏は、エイヘンバウムのターニングポイントを次のように説明し、論を結ぶ。

素材となるべき事実が本来的に「物自体」であるならば、どんなに完璧な計算で作られた表象であれ、その構造の内には不可知性の深淵がぽっかりと穴を開けていることになる。けれども後半生のエイヘンバウムは、もはやこの深淵を克服したり、穴を充填しようとしたりはしなかった。彼は事実を畏怖し、これに跪拝するかのようになり、自身の解釈や介入を最小限に抑制して、渉猟したトルストイ自身と彼をめぐる膨大な言説とを倦まず引用する作業に没頭していく。30年を費やし、彼の死によってついに未完に終わるトルストイ伝の執筆である。

しかし、本文で『レフ・トルストイ：六十年代』を詳細に見たところからして、エイヘンバウムのコンセプトは、『若きトルストイ』以後も、あまり変わっていないようである。おそらく彼は生涯、表象と生の深淵とのあいだで引き裂かれ、「橋」が砕け散るのを恐れていたと思われるが、その橋の堅固さについては、本稿を書き終えるまで、結論を保留しておこう。本稿もまた、トルストイがいかに生と表象、「内容」と「形式」を一体のものとして捉えようと格闘したかを跡づけるものだからである。

問題の鍵は、このドストエフスキーの手紙にあった。なぜ、ドストエフスキーなのか？そして、なぜ他ならぬこの手紙が引用されたか？——たんに「地主の文学」ということなら、レーニンでもいいわけだ。スターリン時代の1931年に、『戦争と平和』論の縮めの部分で、わざわざこの「反動作家」を援用するには及ぶまい。

で、ドストエフスキーのこの長文の書簡を熟読してみると…「地主の文学」は、その意味するところを見事に逆転させてしまう。結論に、「どんでん返し」が起きるのだ。

この手紙を読むと、まず作家の激した口調に驚く。それは、手紙が書かれた時期と関係があり、エイヘンバウムは、(おそらく、わざと)1871年という年しか記していないが、5月18(30)日に、ドレスデンで書かれている。あのパリ・コミューンが、いわゆる「血の1週間」の惨禍をへて壊滅した、そのわずか2日後なのだ。

パリを、コミューンを見ていただきたい。〈…〉19世紀を通じ、この運動は、地上の天国を夢見るか(フーリエの共同体からはじまって)、あるいは行動に出る瀬戸際までいったのですが(48年、49年、そして今)、なんら肯定的なことを言えぬ、情けない無力をさらけ出したのです。実のところ、相も変らぬルソー、そして理性と経験(実証主義)による世界の作り直し。彼らが新しい言葉を発せられないのは偶然ではない——それを証する事実は、もういい加減十分ではありませんか。連中は首をちょん切っている。なぜか？それがいちばん簡単だからにすぎません。なにかものを言うのは、比べものにならぬほど難しい。³²

スローガンと化したルソーや「理性」、実証主義では、理想社会建設どころか、殺し合いに終わるのが必定であると、作家は断ずる。

なぜか。「西欧はキリストを失った」からである。これはドストエフスキーの持論で、この手紙ではそれ以上突っ込んで説明していないが、後年、1880年に『作家の日記』で最も詳しく展開している。

それによると、「キリストを失った」とは、すなわち「道徳的根源が根本からぐらぐらにな」ったということである。その結果として、人々の真の友愛、結合はもはや不可能となり、もっぱら「空腹をみたす」目的でしか団結できなくなっている。欧州の市民制度とはなにか？それは、欧州がそれ以外の世界を奴隷化し、最大限の表面的幸福、物質的利益を引き出すために、数世紀にわたって築いてきた収奪の装置にすぎず、ゆえに、根本的に脆弱で、対立を孕んでいる。今や、欧州の「第三階級」と「第四階級」は、そして欧州と残りの

³² Достоевский Ф.М. Там же. Т.15. С.487.

世界は、たがいに「空腹をみたす」べく、いよいよ対決を先鋭化させている。「総決算」の大戦争は不可避だ——。³³

ドストエフスキーによれば、ベリンスキーやグラノフスキーら「西欧派」は、こういうことはまったく分からず、心の問題が脱落した一般論の高みから、ゴーゴリ、プーシキン、トゥルゲーネフのような作家を見下している。だが…

これはすべて地主の文学ですよ。それは言うべきことをぜんぶ言い尽くしてしまいました（レフ・トルストイにあっては、それは見事なものでしたが）。しかし、この最高度に地主的な言葉は、最後のものとなりました。

こういう文脈で、あの引用箇所は出てくるのである。なるほど、それは地主の文学だ。だが、「それに取って代わる新しい言葉は、まだ発せられていません」³⁴

人類の血塗られた歴史における最後の言葉が、「地主の文学」であり、その先は断崖だ、というのがドストエフスキーの考えなのであった！…

もしかすると、エイヘンバウムもまた、内心密かにそう考えていたのではないか？ ロシア革命、内戦のなかで両親や息子を亡くした彼は、その修羅の体験を1871年のパリと重ね合わせていなかったろうか？ よもや彼は、古びた歴史の遺物に後半生を捧げたのではあるまい？

こう見てくると、エイヘンバウムの評価の難しさを改めて痛感する。あのフォルマリズムのどこまでが本音で、どこまでが時代の強いた韜晦か、見分けるのはほとんど不可能だからだ。

とはいえ、全然異なる時代状況の1922年に書かれた『若きトルストイ』にも、悪しき「形式愛好者」として批判される余地はあろう。

スタイリスト

どうもエイヘンバウムには、一種のスタイリスト的な面があり、すぱっと割り切り、格好よく論じたい気持ちが強すぎて、論が空回りして見えるように思えることがなくはない。

たとえば、彼は『若きトルストイ』で、『コサック』はロマン主義のパロディーであるという。なるほど、ロマン主義というものが、エイヘンバウムが引き合いに出しているような、そして『コサック』の主人公オレーニンがカフカス行きの前に妄想しているような、ス

³³ ドストエフスキー『作家の日記』6（小沼文彦訳）、ちくま学芸文庫、1998年、68—144頁。

これは、ドストエフスキーが、1880年の有名なプーシキンについての講演のあと、法学者で評論家のアレクサンドル・グラドーフスキー（Александр Дмитриевич Градовский）の批判に答えた論文である。

³⁴ Достоевский Ф.М. Там же. Т.15. Там же. С.490.

テレオタイプな大自然と文明の対立だとか、狂気のような恋だとか復讐だとかの類だとすれば、トルストイは「ロマン主義と戦っている」かもしれない。

しかし、ロマン主義がそんなものにすぎないなら、ゲーテだって、シラーだって、コンスタンだって、ユゴーだって「戦って」いるだろう。エイヘンバウムは、プーシキンやレールモントフのカフカス物を「ロマン主義」だと決めつけるが、そうかんたんには割り切れまい。マルリンスキーでさえそうだ。と同時に、これらの作家たちはみな、本来の意味でのロマン主義的ななものかを迫及しているにちがいない。

(ロマン主義は、旧来のイデオロギーとアンシャン・レジームの崩壊にともない、人間が巨大な自由を獲得する反面、抛り所のない孤独に放り出されたところに生まれる。この自由と孤独の状態は、基本的に、現代まで変わることなく、続いている——ただ、心の奥深く内攻してしまっているのです、19世紀のロマン主義者たちとはちがって、あまり意識されることがない。それだけ「病」は重くなっているかもしれないが。ロマン主義の根底は、こういう長いスパンの巨大な現象であることを、まず念頭に置かねばなるまい。当然、その現れ方は多様をきわめたものとなる)。

エイヘンバウムのように、ロマン主義だとかセンチメンタリズムだとかいった概念を、卑俗なイメージで狭く限定し、そのイメージの間にうまく「橋」をかけても、上滑りに終わるのではあるまいか。

トルストイは『コサック』で、ロマン主義をパロディー化したうえ、「ルソーの牧歌的トーンに回帰する」と、エイヘンバウムは言う。だが、「ルソーの牧歌的トーン」とはなにか、「回帰」とはどういうことか。いわゆる「自然人」エミールに回帰するとでもいうのか。本稿第1部「カフカス」の「カフカスの高みとは」で、トルストイとルソーの対決をくわしくとりあげるが、それは到底「回帰」などという簡単なものではなかった。

乗松亨平氏は、論文「トルストイ『コサック』におけるカフカス表象の「現実性」」で、『コサック』を詳細に分析したうえ、ロマン主義のパロディーとは一義的には言えないとしており、十分な説得力がある³⁵。

³⁵ 「スラヴ研究」No.51、2004年、295-320頁。

乗松論文の眼目は、このこと自体にはなく、ロマン主義のパロディーと見えるものの、一義的でないその中身の方にある。それはつまり、「事実性」と「現実性」の捩れだと、乗松氏は言う。

『コサック』におけるロマン主義的な「カフカス幻想」は、事実ではないが、主人公オレーニンに対しては強制的に作用する。どうにもならぬものとして感じられるかぎりにおいて、その幻想は固有の必然性をもっており、「現実性」がある。この「現実性」とは、主体と表象の固有で必然的な関係性にほかならない。これを看過し、自分の立ち位置と「事実」を自明視して、そこから一方的に「幻想」を断罪することの非を、この作品は、読者と研究者に示唆している——。これが乗松氏の結論だ。

なるほど、「あばた」が「えくぼ」と確かに見える以上、その幻想もひとつの現実である。カフカスとマリアーナへの執着も現実だ。だが、その執着の「固有の必然性」とはなんなのか、それはどこから来るのか、どう始末すればいいのか、それが問題だったのだ、とトルストイなら言うにちがいない。これは、研究上の一般的方法論を志向する乗松論文の課題外だが、われわれにとっての問題はそこから始まる。

乗松氏が指摘するように、マルリンスキーでさえ、たとえば、「37に及ぶ『アマラト・ベク』の脚注は単なる「描写」を超えた学問的厳密性を装っており」、「学問的・実証的記述は本文中にもたくしこまれ」ている。そしてそれが、「マルリンスキー流」と呼ばれた装飾的文体と交錯しては、作品全体がひとつのトーンにまとめられているので、エイヘンバウムが言うようなステレオタイプとして切り捨てることはできない。

シクロフスキー

シクロフスキーの『レフ・トルストイ』³⁶は、邦訳がある³⁷。

この評伝の問題点は、当時進行中だったグーセフのそれを一部しか踏まえておらず（まだ第1巻しか出ていなかった）、ビリュコフとエイヘンバウムに依拠している場合が多いことだ。

率直に言って、今となつては、中途半端な資料を雑駁に寄せ集めた印象で（それも典拠をきちんと示していないことが間々ある）、上の3作のような一定のコンセプトも、独創的見解もあまり見当たらない。残念ながら、往年のシクロフスキーのラディカルさと覇気を期待すると肩透かしを食う。彼のトルストイ論で重要なのは、作品論である『『戦争と平和』の素材と文体』³⁸だ。

『『戦争と平和』の素材と文体』

さて、その『『戦争と平和』の素材と文体』であるが、まず前半部分の第1―第4章では、「素材」について論じられている。つまり、『戦争と平和』では、どんな資料（戦史、回想録、日記、書簡など）が用いられているのか、なぜほかならぬそれらの資料が選ばれたのか、といった問題だ。後半の第5―第10章では、「文体」、つまり手法と表現が論じられる。

「素材」については、本稿の第2部で祖国戦争にかんして詳しくみた後でパラフレーズすることとし、ここでは、後半の「文体」の内容のみを要約しておこう。

断片的ディテールの強調

シクロフスキーによれば、『戦争と平和』における描写は「性格づけ」になっていない場合が多い。たとえば、ベズーホフ邸の細部の描写は、そのまとまった完結したイメージ、特徴を明らかにせず、断片的なディテールがいくつか示されるにすぎない³⁹。読者はついに最後まで、ベズーホフ邸の構造も、ロストフ家のそれも知ることがない。

³⁶ Шкловский В. Б. Лев Толстой. М.: Мол. гвардия, 1963 (Жизнь замечательных людей; Вып. 6 (363)).

³⁷ ヴィクトル・シクロフスキー『トルストイ伝』、川崎淡訳、河出書房新社、1978年。

³⁸ Шкловский В.Б. Материал и стиль в романе Льва Толстого "Война и мир". М., 1928.

³⁹ Там же. С.90.

戦闘などの事件や人間や死などの描写でも同じである。『戦争と平和』の作者は、ボロジノの会戦が全体としてどう推移し、どこで何人死んだ、という書き方はしない。「トルストイに必要なのは、ディテールを示すことだけだ。戦争、殺戮の全体ではなく、現実の人間の死を示せば足りるのである」⁴⁰

人間の描写について言えば、たとえば、ボルコンスカヤ公爵夫人（主人公の一人、アンドレイ公爵の妻）では、「うぶ毛の生えた、微笑を浮かべた、短い上唇」に描写が集中し、それがさまざまな状況で、繰り返し描かれていく——作品冒頭の夜会でのかいにも楽しげな彼女から、産褥死したあとの死顔にいたるまで。さらにアンドレイは、妻の死後建立された大理石の天使の顔にも、あの「少し持ち上がった短い上唇」を見出す。⁴¹

シクロフスキーは、この唇というディテールこそが彼女の個性、人格（личность）を開示する、と言う。ただし、人物、状況の重要度に応じて、ディテールにもいろいろあり、たとえば、スペランスキーとナポレオンの「白い手」は、ボルコンスカヤ公爵夫人の唇のような「流動的イメージ」ではなく、コンテクストによって異なる意味をもつことはない、とシクロフスキーは指摘する。また、副次的人物には、一つの特徴のみが旗か符牒のように付与され、もっぱらそれで区別される。

こういったディテールの強調が、『戦争と平和』における「異化」の手法なのであり、これによって、日常的な、手垢のついたイメージが突破され、生々しい、より直接的な知覚が開示される、とシクロフスキーは主張するのである。

「異化」という名の自動化

以上のシクロフスキーの見解に異論はないが、とはいえ、「自動化」した卑俗なイメージを崩す「異化」の手法は、『戦争と平和』にかぎらず、いたるところに、多種多様な形態で使われている——臨済宗の公案から漫才、カリカチュア、アニメ、日常会話にいたるまで。これらをすべて「異化」という言葉で片付けるのでは、自動化の再現にはかならず、元も子もないだろう。

『戦争と平和』の異化が『天才バカボン』のそれと違うのは自明の理だが、ではその本質はどこにあるのか？ 手法という次元でのみ論を展開するシクロフスキーの視野にはこの問題が入ってこないが、筆者としては、それは人間の知覚の構造そのものに深く根ざしていると考える。客観的な、完結したイメージなどというものはそもそもない。個々の人間が個々の状況で捉えた、断片のみがある、と。

ならば、その断片がひとつの有機体、コスモスとして感じられるのはなぜなのか？ 断片の寄り集まりにすぎない人間から、かけがえのない「個性」が立ち上がってくるのはなぜなのか？ これらの問いについては、本文のなかで追い追い答えていくことにする。

⁴⁰ Там же. С.92.

⁴¹ Там же. С.96-98.

マルクス主義的、歴史主義的トルストイ論：レーニンからバフチンまで

ここで、本稿のテーマとは直接関係ないけれども、レーニンをはじめとする、マルクス主義および「歴史主義」によるトルストイ論について、ざっと一瞥しておこう。これらは、実に長いあいだソ連、ロシアのトルストイ研究を支配してきた。マルクス主義の立場からのトルストイ論というと無数にあるわけだが、そのほとんどは、芸術家としては、批判者としては偉大だが、その思想のポジの部分、つまり無抵抗主義などの宗教的、哲学的思想は反動的で有害である、というに尽きる。

プレハーノフとルクセンブルク

代表的な論文の一つ、ゲオルギー・プレハーノフの「カール・マルクスとレフ・トルストイ」⁴²を例にとると、彼はまず、トルストイには弁証法的発想は皆無で、肯定と否定、黒と白で何でも裁断する「形而上学者」だと断ずる（チェルヌイシェフスキーの言う、トルストイの「魂の弁証法」が、一見独断調の後期の著作にどのように吸収されているか、というようなことは、プレハーノフは考えようとしなない）。そして、『青年時代』でネフリュードフ公爵が召使をぶん殴る場面などを引用して、トルストイは、「殴られた方よりも殴った方に同情する」と指摘する。つまり、この作家は、被害者の立場に立つことはできず、彼にとっての問題は、加害者の道徳的煩悶であるにすぎないので、いきおい、その道徳的矯正がもつばら問題となる。こういう人間は、個人主義者であり、自分以外の客体がないから、死を恐れる、と。

（この辺はなかなか鋭い。だがこれは、旧来の宗教、イデオロギーとアンシャン・レジームとが崩壊した近代および現代という時代全体の問題だ。すでに述べたように、人間は大きな自由を得た反面、抛り所がなくなって孤独に陥り、死の恐怖にもろに曝されつつ、一切を自分で切り開いていかねばならぬことになった。万人共通の大義にすぎたって、万人が互いにむすびつき、孤独と死を克服するのは、もはや至難となったのである。）

要するに、プレハーノフによれば、なるほど、トルストイは、上流階級が人民を搾取する様をもののみごとに描破したとはいえ、それももつばら道徳的観点からであった。つまり、上流階級の道徳的悪が諸悪の根源だという偏った見かたをしている――。

ローザ・ルクセンブルクも「社会を思索したトルストイ」⁴³という論文を書いている。彼女は、プレハーノフと対照的にトルストイの愛読者で、その徹底したラディカルな思考と理想

⁴² ゲオルギー・プレハーノフ「カール・マルクスとレフ・トルストイ」（左近毅訳）、『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、河出書房新社、1978年、78-98頁。

⁴³ ローザ・ルクセンブルク「社会を思索したトルストイ」（八木浩訳）、『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、1978年、68-74頁。

主義に感動しているが（とても温かい文章で、彼女の人柄がにじみ出ているように感じられる）、しかし結局、この作家は「社会主義の偉大なユートピア主義者の列に加えられうる」と結ぶ。要するに、尊敬に値するが、もはや歴史的過去ということで、結論的には、プレハーノフとあまり変わらない。

「ロシア革命の鏡としてのトルストイ」

その点、レーニンの名高い「ロシア革命の鏡としてのトルストイ」⁴⁴は、トルストイの本質を鋭く抉り、ロシアの革命運動の特徴を深く洞察しているのにくわえ、文章が抜群に、なんというか檄文的に上手いので、一読、強烈な印象を与えられる。その要旨はつぎのようなものだ。

トルストイは、1861年の農奴解放から1905年の第一次革命までのロシアの農民の気分を鏡のように反映している。農民の鬱積した怒りと同時に、奴隷根性が、トルストイの諸作における激烈な批判と無抵抗主義として現れている。ところが、その屈従に慣れ、専制の砦であった「奴隷」たちが、1905年には、外国人たちも驚いたことに立ち上がった。もっとも、それは尻すぼみに終わったが。

兵士は農民の事業への同感に満ちていた。彼の目は土地を想起しただけで燃えた。一度ならず軍隊のうちで権力が兵士大衆の手にうつった、——しかし、この権力を決定的に利用するということはほとんどなかった。兵士は動揺した。二日後には、しばしば数時間後には、いずれかの憎悪する上官を殺して、彼らは他のものを釈放し、権力と交渉にはいり、それから銃殺されるために立ち、笞刑にされるために横たわり、ふたたび軛をかけられた、——まったくレフ・ニコラエヴィチ・トルストイの精神において！⁴⁵

とはいえ、レーニンによれば、資本主義の発達は、幾百万農民を戦いに駆り立てた諸条件をさらに先鋭化している。革命は必然である——。

レーニンのトルストイ論の問題点

こういう形で、トルストイと農民と革命とのつながりを明示したのが本論の特長だが、しかし、トルストイ論としてみると、いくつか問題がある。

農民の気分を映し出した「鏡」は、トルストイただ一人であり、それがこの作家の本質をなすという意見には賛成できない。宗教的でもありアナーキーでもあり奴隷的でもある農民、民衆は、ほかの作家たちも描いているからだ。

⁴⁴ ウラジーミル・レーニン「ロシア革命の鏡としてのトルストイ」（蔵原惟人訳）、『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、1978年、63-67頁。

⁴⁵ 前掲書、65-66頁。

ドストエフスキー（とくに『死の家の記録』）もチェーホフも、トルストイの描きえなかつた民衆とその世界を表現している。たとえば、チェーホフは中編『谷間』で、この世は巨大な悪の機械みたいなもので、善というのは所詮、それを動かすための「機械の安全弁」にすぎないかもしれぬ、と示唆している。こういう考えは、「信仰」に憑かれたドストエフスキーにもトルストイにも持ちえないものだろう。

『谷間』のヒロイン、リーパは、赤ん坊を熱湯に放り込まれて殺されるが、その当の下手人の経営する煉瓦工場で、煉瓦の赤い粉を顔にくっつけながら、嬉々として働いている。まことに不気味な「安全弁」であり、爆発は必至と思われる。これもまたみごとな「鏡」ではないか。

また、トルストイの無抵抗主義は、自ら鞭打たれるために身を横たえるたぐいのものとは思えない。トルストイは、人類改造計画ともいべきグローバルな教育、啓蒙、出版プロジェクトを展開し、いってみれば、筋金入りの教養と高度な意識をもつプラトン・カラターエフたちを続々と生み出そうとしていた。

法橋和彦氏は近著で、革命後レーニンがトルストイの無抵抗主義を内心恐れていたことを指摘したうえで⁴⁶、「トルストイ＝ガンディーを継承する無抵抗主義をより高度な戦略として精錬する必要性を今日ほど切迫感をもって要求される時代はない」⁴⁷と締め括る。実際、グローバルな高度情報化社会のもとでは、そうした戦略の有効性はむしろ高まっているかもしれない。こういう高度に意識的な戦略を、レーニンの言う、無意識的な奴隷的屈従と同一視することはできない。

ちなみに、法橋氏は同書で、トルストイとマルクス、エンゲルスとの徹底した比較を試みているが⁴⁸、その彼らも、どんな「分配」の方法を考え出そうと、人間そのものが変わらなければ元の木阿弥だと言っているに等しい、と筆者には思える。「全面的に発達した個人」が誕生し支配と隷属の権力構造がなくなるような「生産組織」が必要だと彼らは言うのだが、人間に権力的思考があるかぎり、そんなものができるはずはないからだ。だからこそ、トルストイは意識の変革にこだわる。

歴史主義というステレオタイプ

もう一つ、これはマルクス主義批評にかぎったことではないが、トルストイを論じるに際ししばしば援用される歴史主義的な考え方があつた。歴史は単純なもの、低次のものから複雑で高次のものに向かって不可逆的に進んでいくという考えで、進歩史観も、ダーヴィニズムも、文芸理論の社会主義リアリズム理論も、ミハイル・バフチンの『小説の言葉』⁴⁹なども、

⁴⁶ 法橋和彦『古典として読む『イワンの馬鹿』』、未知谷、2012年、138-142頁。

⁴⁷ 前掲書、270頁。

⁴⁸ 前掲書の訳注9（79-84頁）など。

⁴⁹ ミハイル・バフチン『小説の言葉』（伊東一郎訳）、平凡社ライブラリー、1996年。

これである。

『小説の言葉』によると、抒情詩のようなモノローグ的、単音楽的なジャンルは、不可逆的に次第に解体していき、ついには小説という「解体のジャンル」にいたる。どんな古代の抒情詩も、現代の三文小説におよばず、あらゆる面で低次の現象だということになるが、そんなことがあり得ようか。これには無数の反証を挙げることができる。

かりにバフチンの「ポリフォニー」が、正教のソボルノスチのアレゴリーだとすると、彼のこういう論も字義どおりに受けとらず、行間を読んだほうがいいかもしれない。解体とはむしろ危機の表現であり、したがって下降、墮落を意味するかもしれない。だとすると、ポリフォニーは、神との再度の一体化の試みかもしれないのだ。

歴史主義の一元流、ヘーゲル『歴史哲学講義』⁵⁰をみると、歴史主義的な考え方というものがいかに現実合わないかがよく分かる。これは天才的な著作ではあるが、弁証法的発展の図式に無理に生きた歴史を押し込んでいるので、とくにローマ史などは奇怪な記述が目立つ。ヘーゲル自身からして、ふと我に返ったかのように、ユリウス・カエサルのような人物の生涯はそれ自体がひとつの芸術品のようなのだ、と感慨をもらしたりしている。してみると、歴史とは有名、無名の「芸術品」の集積の、定かならぬ、弁証法などでは尽くせぬつながりだということになる。結局、そこに投げ返されるのだ。

*本文中の引用の露訳は、基本的には、諸先輩の翻訳を参考にしつつ佐藤が行ったが、すぐれた翻訳は、そのまま引用させていただいたものもある。

⁵⁰ ヘーゲル『歴史哲学講義』（長谷川宏訳）全2巻、岩波文庫、1994。

第1部 カフカス

人が幼年時代にもっている瑞々しさ、屈託のなさ、愛の欲求、そして信仰の力がいつの日かよみがえることはあるのだろうか？ 二つの最高の美德——無邪気な明るさと無限の愛の欲求——だけが唯一の生の欲求であった頃にまさる時期がありえようか？

(『幼年時代』15章)

Вернутся ли когда-нибудь та свежесть, беззаботность, потребность любви и сила веры, которыми обладаешь в детстве? Какое время может быть лучше того, когда две лучшие добродетели — невинная веселость и беспредельная потребность любви — были единственными побуждениями в жизни?

トルストイには、自分の人生でいちばん幸せだったのは、母の愛につつまれた幼年時代だったと思われた（もっとも、彼は母をほとんど憶えていなかったが）。そして、まさにこの幼年時代にこそは、世界の愛と調和の基礎となり得るなにもものかがあったと、彼は確信していたのである。この「なにものか」とはいったいなんなのか？ いかにかそれを見出し、世界の調和に達することができるのか？ 作家の全生涯は、もっぱらその探求にささげられたと言っている。

この点についてはだれにも異論はあるまい。先ほども触れたが、パーヴェル・バシンスキーは、評伝『レフ・トルストイ：楽園からの逃走』で、『幼年時代』のとくに「幼年時代」と題された章を引きながら、こう端的に指摘する。

このくだりは、彼が何からその人生の道を歩み始めたかだけでなく、それをいかに終えようと夢見ていたかも示している。ここには、本質的に、トルストイの生涯の精神的ベクトルがすべて反映している。⁵¹

したがって、彼の処女作が幼年時代についての作品となったことは、偶然ではない。そして、この作品、すなわち『幼年時代』における課題が、「なにものか」を見出し認識することだったのも。

おなじ課題が、以後のカフカス時代の作品においても——すなわち、ほかの自伝的作品、軍記物、そして、みずからの信仰をめぐる思索でも——、一貫して、系統的に追い求められていく。しかしながら、その課題を果たすことは、当時の彼にはどうしてもできなかったのである。

⁵¹ Басинский П.В. Там же. С.73.

先回りしてライトモチーフ風に述べておくと、トルストイが気づいたのは、自分の内なるなんらかの「情念」、「悪」が、「なにものか」に近づくのを妨げているということであった。どうやら、「情念」は、幾分かは、「理想の女性」への執着と重なっているらしい（トルストイのなかで「理想の女」のイメージは、カフカス時代にはじめて明瞭に生じたのである）。だが、「情念」は、なかなか根がふかく、「女」に尽きるようなものではなかった…。彼が「情念」の全貌を認識しえたのは、ようやく数年後、すでにカフカスを去った後のことだった。ここまでが、本稿の第1部「カフカス」の内容となる。

具体的な論述の手順としては、まずは、トルストイの全創作と生涯のライトモチーフである『幼年時代』を論じ、そのイデーを確認する。こうして、われわれの進むべき指針を得たのち、作家の実際の幼年時代にさかのぼり、以後、時系列に沿って、作品と生涯をみていく。ただし、トルストイの幼年時代をみるのに先立って、彼が生まれ育ったヤースナヤ・ポリャーナという小宇宙の性格をよりよく理解するため、これを建設した母方の祖父ニコライ・ヴォルコンスキーの生涯をくわしく再現することから始める。

という次第で、まずは処女作『幼年時代』をみよう。

第1章 『幼年時代』における終生のテーマ：母の愛と魂の不滅を確信するも、いかに生きべきかは分からない…

『幼年時代』の不滅の「歌」

処女作『幼年時代』（1851-1852）を読んだ人は、ママンが最後に夫へ書いた手紙、そしてその死を忘れることはできまい。トルストイ研究者、故リディア・オプリスカヤは、ママンは「歌 песня」だと筆者に言ったことがある。

生命といっしょに、あなたと子供たちへのわたしの愛は終わってしまうのでしょうか？ そんなことはないとわたしは悟りました。この感情なくしては、およそどんな私たちでの存在も理解できないのに、その感情がいつか滅びてしまうなんて、考えられません。それほど、いまこの瞬間わたしは、それを強く感じているのです。わたしの魂は、あなたがたへの愛なしには存在できません。けれども、わたしは、自分の愛が永遠に存在することを知っています。わたしの愛のような感情は、もしそれがいつか消えうせてしまうものならば、そもそもはじめから生まれるはずがなかった、ということひとつをとっても。<…>

でも、どうして涙がこみあげてくるのでしょうか？… なぜ、子供たちから愛する母親を奪わなければならないのでしょうか？ なぜ、あなたに、こんなに辛く思いもかけぬ打撃を与えなければならないのでしょうか？ なぜ、このわたしが死ななければならないの

でしょう——あなたがたの愛がわたしの生をかぎりなく幸せにしてくれているこのときに？

主の御心のままにあれ。(『幼年時代』25章「手紙」)

*下線部は原文イタリック——佐藤。

生命といっしょに愛が終わってしまうことはない。愛なくしては、この世であれ、あの世であれ、どんな存在も、魂も、意味を失う。愛なくしては、魂は存在できない。しかし、なぜこの私が死んで、愛する者を打ち砕かなければならないのか？なぜ、私は彼らから過ぎ去り、思い出とならなくてはならないのか？「はたして残ったのは、ただ思い出だけなのだろうか？」(第15章「幼年時代」)。そして、いつかすべての人の記憶から消え去らねばならないのか？——

この死という最大の謎をまえに、ママンは「主の御心のままにあれ」と祈るのだが、ニコレーンカは、『幼年』でも、それにつづく『少年』、『青年』でも、謎に真っ向からぶつかり、解き明かそうとする。ママンの死と埋葬に際して、彼がありとあらゆるものを——自分の悲しみ、人々の悲しみ、偽善、ママンの顔に表れた黒いしみ、異常な厳しさと平安、死臭、等々を——凝視するのはそのためだ。これが、これらの作品の根本的な動機である(だから、この作品は、悲しみと感傷に沈んだ湿っぽい作品にならない。前向きの気迫にみちた作品なのだ。テーマとは一見裏腹に、読者を元気にしてくれる)。

「思い出に似たあるもの」

その動機、ニコレーンカの問題意識を要約するところなるだろう。幼年時代とママンは、どこへいったのか？ほんとうに永遠に過ぎ去ったのか。過ぎ去ったのは、人間が勝手に考え出したニュートンの時間に対してだけではないか。ママンの愛は、永遠に存在し、自分と世界の調和のみなもとでありつづけているのではないか。いや、ひとつひとつの思い出さえもが、それどころか一刹那一刹那が、いわば独自の魂をもち、永遠に在るのではないか——。

ママンは、自分の先生であるフィールドの協奏曲第2番を弾いていた。わたしはとうとうとしていた。そして、わたしの想像には、なにか軽やかで、明るく、透明な思い出が浮かんだ。ママンは、ベートーベンのソナタ「悲愴」を弾きだした。すると、わたしは、なにか哀しく、重苦しく、暗いことを思い出した。ママンはよくこの二つの曲を弾いた。それでわたしは、それらがわたしのうちに呼び起こした感情をとともよく覚えている。その感情は思い出に似ていた。だが、なんの思い出か？ぜんぜんありもしなかったことが思い出されるような感じだった。(11章「書齋と客間の仕事」)

ママンが弾く「悲愴」は、「思い出に似たあるもの」である。時を超えていつでも在るかのようである。そして、このときの情景もまた、「思い出に似たあるもの」としか自分には思えない、とニコレンカはいうのだ。次の第2章「ママン」冒頭の光景にも、そんな根深さが感じられる。

ママンは、客間にすわって、お茶を注ぎ分けていた。片手でティーポットを押さえ、もう一方の手でサモワールの栓を押さえていたが、お湯はティーポットからあふれ、お盆に流れていた。ママンはそれをじっとみていたのに、気がつかなかった。わたしたちが入ってきたのにも気がつかなかった。(2章「ママン」冒頭)

ちなみに、これとどこか似た情景が『アンナ・カレーニナ』にもある。ヴロンスキーが競馬の前にアンナを訪れると――

彼女は、大きな刺繍をあしらった白い服を着て、テラスの片すみの花のむこうがわにすわっていたが、ヴロンスキーの入ってくるのに気づかなかった。黒髪の渦巻いた頭を傾け、手すりに置いた冷たいじょうろに額をおしつけて、彼があんなに知りぬいている指環をはめた美しい両手で、じょうろをおさえていた。(『アンナ・カレーニナ』2章22節)

アンナの言葉を借りれば、「自分の幸福と不幸のことを考えている」(2章22節)。つまり、女が自分の運命にじっと思いを凝らしているすがただ。こんな情景を、トルストイは、実際にどこかでみたか、それとも、どこからともなく心に浮かんできたのか、彼自身にも定かではなかったような気がするが、いずれにせよ、その美と哀しさには、汲み尽くせないものが残る。こういう瞬間は、それ自体が生き物のようである。幼年時代を、ママンをかたちづくる一単位で、彼女のイメージから不可分だが、同時に、独立した小さな魂のようでもある。

こういう時間を超えた小さな魂、「思い出に似たあるもの」が、切れ目なくつながって、幼年時代をかたちづくっている。その根底にママンの永遠の愛があり、幼年時代の世界全体を支え、それに隈なく浸透している。この愛と調和の世界は永続するはずだから、たえず現在として、連続する流れとして体験されるべきものである。作者にとって、この無常な世界で確かなものは、これしかない。この永遠の魂が寄り集まり溶け合った愛の世界しか、生の拠りどころになりえない。

これが『幼年時代』の根本的な世界認識である。端的に言えば、不滅の魂たちが愛によって調和した世界が、この無常な世界の根底にあるはずであり、それとの確かなつながりを取り戻せば、この世界も一変するはずだ、という不拔の確信だ。幼年時代の核心を再建し世界に敷衍できると、作者は信じるのである。

これに関連して、作品の構成について一言述べておこう。語り手のニコレンカにとって、ママンの手紙と死は、幼年時代を通じて、いや生涯を通じて最も痛切な思い出であり、それについて思い起こそうとすると、はからずも母との別れとなった、田舎での一日のこと、そして、母から手紙を受けとった日のことが、切れ目なく、朝から晩までつづけて思い出されてくる。鎖につながれたようにぜんぶ立ち上がってくる。そして——帰宅して見た死の床の、もはや意識のない母、その死、埋葬、老いたる女中頭ナターリア・サーヴィシナの死が、ひとつづきに浮かんでくる——。

ニコレンカの心のなかでは、これらすべてが、ママンの手紙と死に向って、不幸な予感をはらみつつ流れていくのである。それで、全体がこういう構成になった。トルストイ自身、『回想』で、『幼年時代』に対するスターンの影響をみとめているが、ただ理由もなく『トリストラム・シャンディ』などの「意識の流れ」風の手法を借りてきたわけでない。

一つの予感

こうして生のひとつの基盤を見出したトルストイは、『少年時代』、『青年時代』と書きついでいく。ところが——。

自分の成長のあとをよく調べてみるのが、ぼくにはおもしろかったんです。肝心なのは、生の痕跡のなかに、なにかひとつの原理を——自分を導いてくれるような欲求を——見出したかった、ということなんですね。ところが、おどろいたことに、なんにもみつからなかったんです。出てきたのは、偶然と...運命だけだ！ (1, 103)

『幼年時代』の草稿で作家は、早くも先を見通したようにこう書いていた。生の認識とは、運命と偶然の「玉ねぎの皮むき」にすぎないのか…。彼の心中を忖度するとこんな感じになるだろう。自分が齢を重ね、「成長」するにしたいが、いよいよ「偶然と運命」に翻弄されるばかりで、あの神聖な思い出は風化し、幼年時代の核心を再建するどころか、なし崩し的に墮落していくようにしか思えない。自分が見出した生の基盤はそのままでは、いかに生きべきかの原理を与えてくれるものではなかった！...そうこうしているうちに自分もまた、母を突然襲った運命に見舞われるのが落ちではないだろうか——。トルストイが『幼年時代』を完成したのは、不条理きわまる死が日常茶飯だったカフカスの戦場である。

ぼくは、戦いにおもむくにあたって、決死の覚悟を固めたので、これまでやってきたことは、放り出しただけでなく、忘れてしまったほどだ。(1852年3月20日の日記〈46, 93〉)

こういう状況で『幼年』は書かれるのである。不条理な死が跳梁する状況に身を置いて、トルストイは、母の気持ちをはるかによく分かるようになったにちがいない。思いもかけず死に直面した母の気持ちとその愛が。このように、いわば死を介して、トルストイは母と対話をつづけ、それを深めていく。ところが彼女は、いかに生きるべきか、その「原理」までは教えてくれない。そのこともまたいよいよ明らかになっていった――。

しかし、ひとつの予感、『幼年』に示されている。それは、神がかり、ユロージヴィのグリーシャだ。この放浪無宿で、「頭が弱い」60歳の老人を、ママンはたいへん尊敬している（もっとも、グリーシャは、頭が弱いふりをしているだけかもしれない。ひとりで祈るときは、「いつものせかせかした、頭の弱そうな表情ではなく、落ち着いて、考え深げで、威厳さえあった」（12章「グリーシャ）」というのだから）。

それは、グリーシャがママンの父、ニコライ・ミハイロヴィッチ公爵⁵²の臨終の日時をぴたりと言い当てたのをはじめ（第5章「ユロージヴィ」）、いくつもの予言が的中したからだけではない。

（彼は、ママンが男の子たちと別れ、遠からず死ぬことも予言する。「ああ、かわいそうに！ ああ、切ない！ かわいい者たちが...飛んでいってしまう」。「かわいそうに！...あの女のひとが飛んでいった...はとが空に飛んでいく！ ああ、墓に石をのせられて！...」（5章「ユロージヴィ」）。

ママンがグリーシャを愛し尊敬しているのは、つねに2プード（32.76キロ）の鉄鎖を身につけ、年中はだしで歩く精神力（5章「ユロージヴィ」）、信仰の深さ、ビジョンの深さのためだ。いや、むしろ、ママンにとっては、この老いたる巡礼の信仰と予言とはひとつのもの、「見神」である。

彼女もまた、死の床にたおれたとき、「死」を見るのだが、この点で、二人は近いところにいる、とニコレーンカは感じているようだ。「母への愛と神への愛が、なにかふしぎにひとつの感情に溶け合うのだった」（15章「幼年時代」）

森に面した窓に、満月にちかい月の光が皓々とさしこんでいた。ユロージヴィの長く白いすがたは、一方から、蒼白い銀色の月光に照らし出され、反面が黒い影になっていた。その影は、窓わくの影といっしょに床に落ち、壁をつたって天井までとどいていた。外では、夜まわりが鉄の板を打ち鳴らしていた。

<...> グリーシャは身じろぎもしなかった。胸から重い吐息がもれていた。月に照らされた、見えぬ眼のごった瞳には、涙がやどっていた。

「主のみ心のままに！」 彼は、突然、まねのできぬ調子でさげび、床にぬかずいて、子供のように声をあげて泣いた。<...>

⁵² 『幼年時代』28章「最後の悲しい思い出」に、ママンの父の名が出てくる。

おお、偉大なるキリスト教徒グリーシャ！おまえの信仰は、神をまちかに感じるほど強く、おまえの愛は、ことばがひとりでに流れ出るほどに大きかった——おまえは、そのことばを理性で確かめはしなかった...そして、ことばをみいだせず、泣きぬれて大地に倒れふしたとき、おまえはどれほどの高き賛美を神の偉大さにささげたことか！...

(12章「グリーシャ」)

グリーシャの祈りの場面は、ママンの「歌」となる作品の最深部である。ニコレンカが予感するのは、グリーシャのビジョンに参入する道だ。月夜に、大地に身を投げるグリーシャ。ゲッセマネのキリストをだれしも連想するが、これはそのパロディーでも、それをただなぞったわけでもない。おのずとキリストの行為に導かれたというふうに描かれている。生の矛盾と絶望、そのきわまるどころから祈りが流れ出し、神が現れ、信仰が開ける、と。

(グリーシャは、ママンの命が尽きようとしていることを洞察し、ほかならぬ彼女のために、「主のみ心のままに！」と祈ったのかもしれない)。

ここでひとつ注意すべきは、夜警が打ち鳴らす鉄の板の音である。鉄の音は、トルストイの作品にあっては、あたかも異界から発せられる警告であるかのようで、悲劇の前兆になっていることが多い(これについては、『アンナ・カレーニナ』でくわしく述べる)。ところが、鉄はここでは、いつもの不気味なつんざくような音をたてない。それは、グリーシャの絶望と法悦に溶け合っているかのようだ。

ここでの月夜の描写も注目される。月夜とそれが呼び起こす「女」や至高なるものへの憧れは、以後多くの作品にさまざまにかたちを変えて現れることになるだろう。トルストイの月夜のイメージは、彼の世界感覚の変遷の指標となる。だがそれが、これほど宗教的に純一なかたちで、否定的なニュアンスをまじえずに描かれることは二度とない。

こうした鉄と月夜の描写は、グリーシャの内面世界が世界全体と極めて深いレベルで調和していることを示唆している。

以上、『幼年時代』のイデーについて述べた。しかし、もう一つ問題が残っている。ママンという形象のきわめて特異な性格だ。この特異な「歌」によってイデーがうたわれる以上、その歌がはっきりと聞きとれなければ、イデーも結局のところ分からないことになる。そこで、次節では、この歌すなわちママンの形象について考えてみよう。

補説：イヴァン・パナーエフの熱狂

『幼年時代』の本質を考えるうえで、ひとつおもしろいのは、イヴァン・パナーエフの尋常ならざる反応だ。妻アヴドーチャ・パナーエヴァの『回想』⁵³によると、1852年、雑誌「現代人」9月号に、無名氏 L.N.の『わたしの幼年時代の物語』が出たとき、同誌の編集長パナーエフは、文字どおり熱狂し、「毎晩だれか知り合いのところで朗読して聞かせるほどの入れ込みようだった」。ついには「作品をまるごと暗記してしまった」というから、普通ではない。

ところで、パナーエフはもともと「現代人」を主催していたのだが、このころは名目上の編集長になりきっていた。彼は当時、失意の人で、40年代末に「現代人」は詩人ネクラソフが切り回すようになり、妻までが詩人のもとに去った。

しかし、パナーエフは、最晩年、1860-62年に名作『文学的回想』をものし、非常な評判をとる。このとき、彼の頭には『幼年』のことがあったかもしれない。という意味は、彼は、ただつらい現在から逃れるために、子供時分からのもとの来し方を回顧したのではあるまいということだ。そこには、なにか生命の原型のようなものがふくまれているという漠然たる感触があった。その「原生命」とでもいうべきものに、もういちど触れられるという予感だ。

それを啓示したのは、ほかならぬ『幼年』だったと、両作品を読むと、どうしても考えなくなる。パナーエフが、ただ甘美な思い出と感傷だけを『幼年』に読みとったのだったら、どうして彼があんなに熱狂したはずがあろうか。「残ったものはたして思い出だけであろうか?」、否そうではない!との確信がなければ。

ママンという「歌」の特異な性格

ママンの印象は、鮮烈そのもので、圧巻である。とくに手紙は、まさに絶唱と呼ぶにふさわしい。女性の魂が直に響いてくるのを感じる。まさに、「心のありとあらゆる響きがこだまする」⁵⁴。しかし、これが或る特定の具体的な女性像かという点、言葉につまる。しかも、その魂の響きは、同時に作者自身の生きたみごとな思想でもあるとも感じられるのだ。「死せる女主人公の手紙にトルストイが盛った考えは、彼自身のものでもあったと考えられる」(グーセフ I、362頁)。受ける印象は純一で、まことに鮮やかなのだが、それを分析すると矛盾がでてくる。

ママンにかんする研究者の見解がまちまちで、真っ向から対立することもあるのはこのためだ。主な意見としては――

⁵³ Панаева А.Я. «Воспоминания». М.: «Захаров», 2002. Гл.10.

⁵⁴ 草稿の「読者へ」(1, 208)

1. ママンは、トルストイが早世した母をほとんど覚えていないせいで、非現実的である。
2. ママンは非現実的で、影がうすいが、それは現実の再現に失敗したからではない。ママンは、トルストイの「心にわきでてくるもの」に発しながら、普遍性をもつべきフィクションとして創造された。それが非現実的と感ぜられるということは、普遍的な虚構として十分に生きていないことを示す（藤沼貴）。
3. ママンは「歌」である（リディア・オプリスカヤ）。
こう言ったオプリスカヤはその意味するところを説明しなかったが、これはもちろん、多くのロシア研究者が言うような「母性愛の高らかな賛歌」という単純な意味ではあるまい。

現実には知らないから、文学的リアリティーが得られない、という1は、論外である。ダンテは地獄に行ったことはなかったし、トルストイも馬になったことはなかったが（『ホルストメール』）、それは高度なリアリティーに達するさまたげにならなかった。ただし、ママンにある種の普遍性、非現実性といったものがあるのは否定できない。藤沼氏が言うとおりに、ママンが、「普遍的虚構」をめざして創られたことはまちがいないが、しかし、読後感が雄弁に物語るとおり、「影がうすい」とはどうてい思えない。それはたしかに「歌」だと感ぜられるのだが、一歩進んでその内実を明らかにせねばなるまい。

そこで、視角を変えて、創作過程に眼をむけ、ママン像の変遷を跡づけてみよう。ヒントが得られるかもしれない。

『幼年時代』の創作過程とママン像の変遷⁵⁵

①第1稿の導入部：事実そのままを目指す

⁵⁵ リディア・オプリスカヤ氏は1978年に、自伝三部作の校訂を行い、三作のテキストを刊行した。Толстой Л. Н. Детство. Отрочество. Юность / АН СССР; Изд. подгот. Л. Д. Опульская; Отв. ред. Д. Д. Благой. М.: Наука, 1978.

草稿類も収録し、解説（Первая книга Льва Толстого. С.479—508）では、各稿の内容と創作過程を分析している。また、90巻全集の修正箇所が一覧になっている（С.509—510）。

『幼年時代』だけとって、修正には重要なものがいくつもあるので、いつの日か、日本語訳の当該箇所が、このオプリスカヤ版によって改訳されることを期待する。2つだけ例を挙げておくと——

Стр. 65, строка 14: обнять тебя и благословить их — вместо: обнять и благословить их (по автографу и «Современнику»).

これは、ママンが自分の病を夫に手紙で伝える場面である。草稿および「現代人」に掲載された版と比較、校合した結果、「あなた（夫）を抱き、子供たちを祝福します」→「子供たちを抱き、祝福します」

Стр. 72, строка 23: Нашей называла — вместо: Нагашей называла (по автографу и «Современнику»).

ママンの死後、ナターリア・サーヴィシナが思い出話をする場面で、90巻全集では、「わたくしのことをナーシャとお呼びになっていました」とあったのが、やはり草稿および「現代人」に掲載された版と比較したところ、「ナターシャ」が正しいことが分かった。

第1稿⁵⁶は、1851年3月、モスクワで書かれたと推測されている。カフカス行き直前だ。

その導入部によると、この作品は、幼年時代から成年にいたるまでのことを書いた「手記」だった。そして、作者は、「自分のあらゆる弱点」をごく率直にさらけだすはずだった。しかし、あんまりあけすけなので、「公衆の裁きに任せるのをためらう」。それで、ある人物に審判を委ねるべく手記を送り、「聴罪司祭になり、審判者となってくれ」と頼んだ、という体裁になっている。

だから、それは、「完全に自伝的な性格をもつもので、その内容からして、これまでの全生涯の懺悔にちかいものになるはずだった」(グーセフ I, 341 頁)⁵⁷。そして、トルストイ自らがそこに書いているように、「生の痕跡のなかに、なにかひとつの原理を、自分を導いてくれるような欲求を見出したかったのです」(1, 103)。

ところが、そういう内容の手記は、どういうわけか書かれずに終わった。作家は後年、自分をネタにしたあけすけなルポ的作品をたくさん書いているのに、なぜだろう(数々の軍記物、『地主の朝』、『吹雪』、『ルツェルン』など)。ルポ的懺悔という作品の体裁そのものに理由があったとは思えない(たとえば、気恥ずかしいとか)。理由は、書かれるべき内容のなかに、つまり、自分の幼年時代のなかに、どうにも書けないものがあつた、ということかもしれない。

②第1稿の本文：一転して虚構の母

そのせいかどうかは、とりあえず保留するとして、先に行こう。第1稿導入部の後の本文では、もはや作家の幼年時代そのものは描かれない。パパのモデルは、知人イスレーニエフ家のあるじ、A.M.イスレーニエフ。ソフィア夫人の母方の祖父である。ちなみに、トルストイは、ソフィア夫人の母、リュボーフィー・アレクサンドロヴナとは、ほぼ同い年で幼なじみだった。フランス人家庭教師ミミも、同家にモデルがおり、その娘ユーゼンカは、そのままの名で登場する(ユーゼンカは、最終稿ではカーチェンカになる)。

もともと、一部はトルストイ家のことも混じってはいる。リュウヴォチカは妹マリアで、兄ボロージャは兄セルゲイだ。家庭教師カルル・イワーヌイチ、女中頭で家政をとりしきるプラスコーヴィア・サーヴィシナ(最終稿では、ナターリア・サーヴィシナ)、その他いく人かの召使等にも、トルストイ家にモデルがいる。こういうモデル問題はもう完全に論証済みである。⁵⁸

⁵⁶ Первая (незаконченная) редакция романа — 1, 103—166.

Толстой Л. Н. Детство. Отрочество. Юность / Изд. подгот. Л. Д. Опульская, 1978. С.249-306.

⁵⁷ オプリスカヤもグーセフと同見解である。実際、導入部を読むかぎり、そうとしか考えられない。

Толстой Л. Н. Детство. Отрочество. Юность / Изд. подгот. Л. Д. Опульская, 1978. С.341.

⁵⁸ 90 巻全集収録の第1稿、トルストイの『思い出』、グーセフIの342—344頁、N.N.アポーストロフ『生けるトルストイ』を参照。

さて、この第1稿のママンはというと、トルストイの母だけでなく、ほかのどんな特定の人物ともほとんど結びつかないのだ。グーセフの調査によれば、イスレーニエフの妻との接点が多少なくはない、というていどである。

まずママンは、イスレーニエフの妻とおなじく内縁の妻である（ママンは、死ぬまえに書いた手紙で、子供たちが「私生児として」生まれたことを彼らに詫びている）。

もうひとつ、ママンは、1818年に、最初の夫、「愚鈍で、粗暴で、無教養な」D公爵と別れたあとで、1819年冬に、グリゴリー・オルロフ將軍の副官だったパパと舞踏会で会い、同棲をはじめた、という設定になっている（1, 104）。実際、パパのモデル、イスレーニエフは、ミハイル・フォードロヴィッチ・オルロフ伯爵の副官だった（グーセフ I, 343 頁）。

とはいえ、ママンとイスレーニエフの妻とのつながりはこれだけだし、トルストイの現実の母とは、事実上の接点がまったくない。ということは、この第1稿のママンは、虚構であることになる。

ところが、もうひとつ注目されるのは、この虚構のママンの外見の描写に、バルザックなみに延々とまる2ページも費やされていることなのだ（2, 104-106）。

「美貌ではないが、なみはずれて感じの良い顔立ち」、「貴族的な腰」、「大きな、黒い、いつも濡れた瞳は、まぶたとまつ毛でなかば閉ざされ、やさしい情熱的な表情をたたえている」、「眼の特徴はというと、両目の間隔が、絵画の規範よりもせまいこと」、「唇は、かなり厚く、濡れており、ママンの主な性格——感じやすさ——を現している。そして、たえず表情を変える。あかるいほほえみを浮かべたり、悲しげな微笑をたたえたりするが、とにかくいつでも微笑していた」等々というぐあいだ。

このように、トルストイは、第1稿の導入部では、現実の自分の母親を描こうとしていたのに対し、その本文では、一転して、虚構の母になっている。ということは、トルストイが表現しようとした「母」は、どちらでも表現しうるものだったことになるのではないかな？ すなわちそれは、ある普遍的なイデーであり、それにリアリティーを与えるために、あんなに外見の描写を重ねたのではあるまいか。

③第2稿：最終稿（第4稿）に近づく

第2稿は、すでに最終稿（第4稿）に近いものになっている。内容と構成の面で、本質的なちがいはない（1, 167-212; グーセフ I, 368 頁）。

『思い出 Воспоминания』（1903-1906）は、先に触れたとおり、最晩年の作家が伝記作者パーヴェル・ビリュコフに書き与えたもので、未完に終わった。以下、『思い出』からの引用は、（34, 352）のように、90巻全集の巻数と頁数で示す。

Апостолов Н.Н. Живой Толстой: Жизнь Льва Николаевича Толстого в воспоминаниях и переписке. СПб.: Лениздат, 1995. С.56-57.

ママンの外見描写は、第1稿と打って変わって、ほとんどなくなる。最終稿にいたっては、「黒い頭（つまり、黒髪）」（第1章「カルル・イワーヌイチ先生」）、「いつも変わらぬ善良さと愛情を現している琥珀色の瞳」、「やさしい、やせた手」ていどだ。

このママン像の変遷をどう考えるか？

ゲーセフは、次第に自分の母に引っぱられたためだろうと推測している。とくに、ママンの死について書いているうちにそうなったが、トルストイは母をほとんど覚えていないので、外見を描きようがなかった、と（ただ、ママンは手紙の最後で、「さようなら、ベンジャミン（“mon petit Benjamin”）」と、ニコレンカに呼びかけている。これは、作家の母マリアが幼い息子につけた呼び名だった（34, 352））。

ゲーセフ説は基本的に正しいと思われるが、では、なぜ当初の導入部での「事実そのまま」から、第1稿本文での「虚構の母」にスライドしたのだろうか？

筆者の見たところ、トルストイは、初めはなにもかもありのまま書くつもりだったが、果たせなかった。ひとつには、母を知らないことが原因だろうが、あとで詳述するように、人に語り得ない幼年時代の「陰」のせいもあると思われる。とにかくうまくいかなかったので、つづく第1稿本文では、虚構の母親像を創ろうとしたが、やっぱりうまくいかない。それで、ついに腹をくくり、自分の母への思いを、欠落はそのままに描き出そう、ということになったのだろう。あるのは、ごく断片的な記憶と兄などから聞いたこと、そして母の愛への不拔の確信と憧れのみだ。

なるほど欠落は大きいですが、母のイメージ、母への思いは、たしかに自分のなかで生きており、疑いようがないから、それを描き出すしかない、と。

（ちなみに、ママンの名はナターリア。パパはピョートル（第18章「イワン・イワーヌイチ公爵」）。つまり、『戦争と平和』のペアとおなじだ。『幼年』のナターシャとピエールは、幼年時代の家庭の基盤をなしていたが、『戦争と平和』では、ナターシャとピエールのペアは、世界という家族全体の根底に置かれることになるだろう）。

だから、作家の思念は、最初から一貫して、自分の母のまわりをめぐるにいたっていたのだが、第2稿にいたり、自分のほんとうに知っているもの、自分にいちばん痛切なものを書く覚悟をかためた。それは、わずかな記憶と手がかりを通し、自分にとって母とはなにか、なんでなければならないか、と母と自分にひたすら問うことであり、そこから得た答だった。だからこそ、ママンは、あのように一見非現実的、理念的だが、真に普遍的で、美しい女性像であり、しかもそれが同時に作者自身の思想でもある。そして、それがひとつの「歌」となる——こうした実にユニークな性格をもつことになったのである。

では、その歌とはいったいなんなのか。むろん、母への思いである。しかし、母を思うことは、母の自分への思いを思うことでもある。「母は私のことをどう思っていたのか？」。母は彼に答える…。こういう対話をくり返していくことで、思いはひたすら深まりゆき、つ

いにあの手紙となった。母を知らぬトルストイが、書簡に最良の表現をみいだしたのは理解できることだ。こうして、肉声と感情と思念とが一体をなす、魂の響きを得られた。それらはもともと一体のものであり、人為的に分離されるにすぎない。この響きが歌である。要するに、本質的に対話的である、母への思いが、完璧に表現された、ということだ。結局それは、われわれが日常生活でたえず出会う、真に生きたことばと別物ではない。

こうして、不条理な死を介しての母との対話が、みごとな歌となり、その歌が、母の愛と魂は不滅であるとたしかに告げた。しかし、その不滅の確信は、この不条理な現実をいかに生くべきか、その指針をつねに教えてくれるとはかぎらなかった――。

トルストイは、自伝的作品と並行して軍記物を書き、自分の信仰について思索をふかめることで、さらに前進していく。だが、それをみるまえに、トルストイの現実の幼年時代と母をふりかえる必要がある。そしてそのためには先ず、彼が生い育ったヤースナヤ・ポリャーナの小宇宙を建設した、母方の祖父ニコライ・ヴォルコンスキーの生涯を回顧せねばならない。

『幼年』が昇華されて出てきた増埒は、多くの点で『幼年』と似ても似つかぬものであった。それを知るのは、「歌」を元の木阿弥にもどすためではない。「歌」がどんな場所から、なんのために、だれに向って歌われたか、たしかめるためだ。この歌は純粹きわまりない。それはおそろしく根が深いということでもある。それを知らなければ、我々もトルストイといっしょに前進することはできない。

第2章 ヤースナヤ・ポリャーナ前史：祖父ニコライ・セルゲーエヴィチ・ヴォルコンスキーの生涯

私は、ヤースナヤ・ポリャーナをぬきにしては、ロシアというものをイメージすることがむずかしいし、自分のロシア観といったものも考えにくい。ヤースナヤ・ポリャーナがなければ、もしかすると私は、わが国にどんな一般的な法則が必要かもっとはつきり分かるかもしれないが、しかしこんなに祖国に愛着することはないだろう。(5, 262)⁵⁹

Без своей Ясной Поляны я трудно могу себе представить Россию и мое отношение к ней. Без Ясной Поляны я, может быть, яснее увижу общие законы, необходимые для моего отечества, но я не буду до пристрастия любить его.

1. 祖父ニコライ・ヴォルコンスキーの権力との相克。娘マリアとの近すぎる関係。生からの防波堤としてのヤースナヤ・ポリャーナ

(1) 祖父の呪縛

トルストイの幼年時代を知るためには、まず、母マリアの父、つまり作家の祖父ニコライ・セルゲーエヴィチ・ヴォルコンスキー（1753年3月30日－1821年3月3日）の生涯を振り返ったほうがよいだろう。ニコライの人生は、多くの点でトルストイの幼年時代のありかたを決定し、独特の虚構性をもちこんだように思われるからだ。一見よけいな道草に思われるかもしれないが、必要な作業である。

この聡明で誇り高い人物は、陸軍大将にまで上りつめながら、不可解な理由でパーヴェル一世時代に退役する。そして、ヤースナヤ・ポリャーナに自分好みの庭園と邸宅を造って、この小宇宙に一人娘マリアと閉じこもってしまう（現在のヤースナヤは、ほとんどが彼の手になるものだ）。この父娘の関係は、たとえば森鷗外と茉莉や、ほかならぬ作家と次女マリアのそれを思わせるような、あまりにも近すぎるところがある。あとでみるように、ニコライの妻は早く亡くなり、夫婦生活は幸福ではなかったらしい。ニコライにとってヤースナヤは、外界に対する砦であるばかりでなく、おそらくは生そのものに対する防波堤でもあった。

作家は、ヤースナヤに生を受け、生涯の大半をここで過ごし、この小宇宙の空気を絶えず呼吸していた。トルストイの「愛と調和」には、この防波堤のなかで育まれた虚構という面があると思われる。ということは、後年作家が展開したトルストイ主義の根底にも、この小宇宙のイメージが横たわっているのではないかと…

⁵⁹ 1858年に執筆された未完のルポ『村の一夏 *Лето в деревне*』

そうだとすれば、この意味で作家は、極言すると、自分が生まれるまえに死んだ祖父と生涯にわたり交流し、その世界感覚に呪縛されつづけた面があるといえるかもしれない。以下、この作業仮説をたしかめていこう。それには、祖父ニコライが生きた場を繕ざらいし、彼が生に対して防波堤を築くにいたったその理由を感得することが必須である。あえて「道草を食う」ゆえんだ。

(2) 祖父ニコライの出世。エカテリーナの寵愛。突然の「長期休暇」…原因は？

ヴォルコンスキー家は、ロシアの名門の一つで、ニコライの生きた時代だけでも優秀な人物を何人も出している。ピョートル・ミハイロヴィチ・ヴォルコンスキー（1776–1852）は、アレクサンドル一世の軍事・戦略問題でのブレインで、1813–14年の「解放戦争」では、実質的なロシア軍総司令官（参謀総長 *начальник Главного штаба*）として、連合国間の利害、意見の対立を調整しつつ、勝利に多大の貢献をなした。その後も、1823年にいたるまで参謀総長としてロシア軍のトップでありつづけた。

陸軍中将ドミトリー・ミハイロヴィチ・ヴォルコンスキー（1769–1835）は、祖国戦争からデカブリストの反乱にいたるまで長年にわたり詳細な日記を残しているが、その衝撃的な内容のためか、1990年に祖国戦争の部分が公開されたのみである。1812年の裏面を暴露したこの日記は、『戦争と平和』を論じるときに大いに活用するつもりだ。

セルゲイ・グリゴリエヴィチ・ヴォルコンスキー（1788–1865）は、陸軍少将、デカブリスト。前記ピョートル・ヴォルコンスキーの義弟（妻の弟）にあたり、彼とはとても親しかった。その妻は、祖国戦争で勇名をはせたニコライ・ラエーフスキー将軍の娘マリア・ニコラエヴナだ。この黒髪の美女は、詩人ニコライ・ネクラソフ『デカブリストの妻』⁶⁰のヒロインになった。この美声で歌がうまい「舞踏会のヒロイン」には、ナターシャ・ロストワの面影がある⁶¹。

祖父ニコライの父、セルゲイ・フョードロヴィチ（1715–1784）は、陸軍少将。七年戦争に従軍している。ちなみに、1763年にヤースナヤ・ポリャーナの領地を入手したのは彼である（グーセフ I、27頁）。妻はチャアダーエフ家出身のマリア・ドミートリエヴナ（1775年死亡）。だから、思想家ピョートル・チャアダーエフは、作家の遠縁にあたる。夫妻のあいだには4人の男子が生まれた。ニコライは末子である（グーセフ I、627頁）。4人兄弟の末というのは、偶然、作家とおなじだ。

⁶⁰ «Княгиня М. Н. Волконская» (1873) — вторая часть поэмы «Русские женщины» //

Некрасов Н.А. Полное собрание сочинений и писем в 15 томах. Л.: "Наука", 1982. Т.4.

⁶¹ トルストイの未完の断片『デカブリスト』の主人公ピエール・ラバースフは、『戦争と平和』のピエールを思わせる、おっちょこちょいだが巨大な風格をもつ人物で、シベリアから帰還した老デカブリストだ。その妻ナターリアは、かつては「社交界の女王」だった黒髪の美女で、「ボロジノの会戦で有名なニコライ・クリンスキーの娘」である。これは明らかに、ニコライ・ラエーフスキー将軍の娘マリアを踏まえている。

ニコライ（1753－1821）も、父とおなじく軍人になり、1780年近衛軍大尉、81年大佐（精鋭部隊の第二擲弾兵連隊長）、87年旅団長。88年には第二次露土戦争のオチャコフ要塞包圍攻防戦に参加する。この攻防戦は、総司令官グリゴリー・ポチョムキンと名将アレクサンドル・スヴォーロフの反目もあり、陥落させるまで6ヶ月もかかった。89年少将。93年12月には、プロイセン皇太子（未来のフリードリッヒ・ヴィルヘルム三世）の結婚式に際し、臨時特命大使としてベルリンに派遣される（グーセフ I、28－29頁）。順風満帆にみえた。

しかもニコライは、女帝エカテリーナの愛顧をかたじけなくしていたようだ。80年には、女帝のオーストリア皇帝ヨーゼフ二世との会見に随行し、会見後は、ニコライにヨーゼフの印象をもらしている⁶²。また、87年の有名なクリミア行幸にもおともしている。

数百の男と関係をもったともいわれる女帝は、ニコライを信頼していただけでなく、もしかすると、褥に引き入れていたかもしれない。彼は、醜男を自認するトルストイとちがってなかなかの美男子だったし、作家自身が『戦争と平和』でそのことを暗示しているようにもとれる。女帝の棺を前にして、ニコライ・ボルコンスキー（モデルはニコライ）と、女帝の最後の愛人プラトーン・ズーボフは、だれがさきに接吻するかで争う（『戦争と平和』3巻2編3章）。

ところが、ニコライのキャリアは、突然、暗転する。1794年7月24日、2年間という長期休暇を命じられるのだ。理由は不明だが、半端な処置ではないから、よほど高位の人物の逆鱗に触れるとか、重大な過失を犯したとかいったことが考えられる。

作家によれば、その理由について、トルストイ家の言い伝えがある。彼はそれを再三いろんな人に語っているから、重視していたようだ。1909年に、ニコライ・モロストヴォフとピョートル・セルゲーエンコの『レフ・トルストイ：生涯と創作』⁶³を校正した際には、わざわざこの話を入れるように著者に指示しているくらいだ（グーセフ I、29頁）。伝記作者パーヴェル・ビリュコフに書き与えた『思い出』でも、まさにこの話から祖父の物語をはじめている。

祖父について私が知っているのは、女帝エカテリーナのもとで陸軍大将という高位にのぼったが、ポチョムキンの姪で愛人、ヴァーレンカ・エンゲリガルトとの結婚を拒否したため、突然、自分の地位を失った、ということだ。ポチョムキンの申し出に祖父は、「なんだってあいつは、おれがあいつのお手つきなんぞと結婚すると思ったんだ？」と答えた。

この返答のせいで、祖父は、出世が止まっただけでなく、アルハンゲリスク市の長官に左遷されてしまった。同地で、パーヴェルの即位まですごしたらしい。退役したとき

⁶² «Русская старина», 1872, I. С.136-137.

⁶³ Сергеев П.А., Молоствов Н.Г. «Л.Н.Толстой. Жизнь и творчество. 1828-1908 гг. : Критико-биографическое исследование». СПб, 1909-1910.

に、エカテリーナ・ドミートリエヴナ・トルベツカーヤ公爵令嬢と結婚し、父セルゲイ・フョードロヴィチから譲り受けたヤースナヤ・ポリャーナに居を構えた。(34, 351)

淫乱な大権力者に対して断固たる態度をとったというので、トルストイは感動したらしい(ポチョムキンが姪たちと肉体関係をもっていたのは、よく知られた事実だ)。だが問題は、グーセフが指摘しているとおおり、この言い伝えがまちがいだらけであることだ。ニコライが長期休暇を命じられた94年には、ポチョムキンは、とっくの昔の91年に死んでいるから、この件には関係がない。この顕官の生前には、ニコライのキャリアは上昇をつづけていた。

それに、ヴァーレンカ・エンゲリガルト(Варенька Энгельгардт)は、79年にS.F.ゴリーツィンと結婚しているから、ニコライがポチョムキンと衝突したとすれば、79年以前のことになるが、このときニコライは26歳の大尉にすぎず、この青二才が全能の顕官にあえて逆らうとは、考えにくい⁶⁴。さらに、ニコライがアルハンゲリスクの総督(военный губернатор)に任命されたのは、98年のパーヴェルの治世のことなのだ。もう一つおまけに、ニコライの妻、エカテリーナ・ドミートリエヴナ(Екатерина Дмитриевна Волконская〈Трубецкая〉, 1749-1792)は、アルハンゲリスク在職当時には亡くなっている。

いくらなんでもまちがいが多すぎるようだ。しかし、ニコライの長期休暇は厳然たる事実である。なにかが起きたのはたしかだ。ここからさきは憶測するしかないが、それはもしかすると、表ざたにしにくい、特別なことがらで、だからこそ、嘘で固めてごまかす必要があったのではないだろうか?... いずれにせよ、さまざまな点から見ても優秀かつ几帳面なニコライが、みすみすそれほどの過失を犯すとは、どうも考えにくい。

パーヴェル一世(1996年即位)の治下では、ニコライのキャリアはどうなったろうか? これまたなぞが残るのである。

(3) パーヴェル治下でのニコライのキャリア。出世しながら、なぜか、みずから退役願を提出。その心中は?

1797年6月、パーヴェル一世は、アゾフ銃兵連隊長(少将)であったニコライの報告書を突っ返した。報告書は、年に3度連隊の状態を報告するものだったが、ツァーリは、その内容を不十分だとして、今後は毎月報告書を提出するよう命令してきたのである。要するに、「おまえの報告は不十分だ」と報告書に難癖をつけたか、あるいはもっと悪く、「おれはおまえを信用していない」というシグナルを送ってよこしたのだ。

翌7月、ニコライの連隊に査察官がやってきたときには、彼は病気を理由に出頭しなかった。パーヴェルは仮病だと思って怒ったらしく、間髪をおかず、7月18日をもって免職。し

⁶⁴ グリゴリー・ポチョムキン(1739-1791)は、1770年代以降に女帝の愛人となり、74年か75年には密かに教会で結婚式を挙げたと推測されている。これと前後して、ポチョムキンは出世街道を駆け上がり、74年に陸軍参議会の副総裁、84年に総裁(つまり軍のトップ)となる。

かも通常の退役とちがって、あらゆる位階と特権を剥奪し、無位無官の平（ひら）の貴族に落としてしまった（グーセフ I、30 頁）。

パーヴェルの処置に反発したニコライが、抗議のしるしに仮病をつかった——。こうグーセフは考えている。たしかに、これは仮病だったかもしれない。あのパーヴェルの「検察官」が来たとなれば、ふつうの人間は、病身を押してでも出頭するだろうから。あのパーヴェルを相手に仮病をつかうとはいい度胸である。

だが、どうも度胸がよすぎるようだ。前年には希代の名将アレクサンドル・スヴォーロフさえ解任されているくらいだから、首が飛ぶ覚悟がなければできないことである。こんな些事に首をかけて抗議する価値があるだろうか？ なぜニコライはあえて危険を冒したのか？

しかし、彼のキャリアは、まだ終わりにならない。フランス革命戦争、第一次対仏大同盟（1793–1797 年）、ナポレオンのイタリア遠征によるその崩壊、第二次対仏大同盟結成（1798 年 12 月–1801 年）という激動の時代が、優秀な軍人を必要としたからだ。

第二次対仏大同盟の結成直後の 98 年 12 月 25 日、ニコライは軍に呼び戻され、しかも一階級昇進して中將となる。2 日後、アルハンゲリスクの総督（военный губернатор）に任命される。これは、仏軍の同地への上陸に備えたものだった。仏軍の攻撃に備えよ、との、パーヴェル自筆のニコライへの指令が残されている（グーセフ I、30–31 頁）。

ところが、99 年 5 月に、ニコライはまたもやパーヴェルの逆鱗に触れる。アルハンゲリスク市の都市警備司令官（комендант）、カラーエフ少将が、紙幣発行銀行（1786 年に帝国政府が創設）のアルハンゲリスク支店長、アルセーニエフを、「無礼な口の利き方をした」かどで、営倉に放り込んだ。これを聞きつけたニコライは、越権行為だとして、ただちにアルセーニエフを釈放するよう、カラーエフに指令を発するとともに、一件をパーヴェルに報告に及んだ。

ツァーリは、カラーエフの肩をもち、みずから筆をとって、「無礼な態度をとって収監されたアルセーニエフを釈放するとは、貴官の行為は正しくない」«поступил дурно, освободив Арсеньева, посаженного за грубость»⁶⁵、アルセーニエフを再逮捕し、追って沙汰があるまで営倉に留め置けと、ニコライの処分を引っ繰り返す命令書をよこした。

しかし、この件がニコライのキャリアに影響することはなかった。そのすぐ後、99 年 7 月には、大將に昇進しているからである。それなのに...ニコライは、99 年 11 月に退職願を提出し、同月受理される。まだ 46 歳の若さだった。その後ニコライは、二度と勤務に復することも、貴族団の選挙に参加することさえもなかった（グーセフ I、31–32 頁）。国家と縁を切ってしまったかたちだ。

⁶⁵ 「貴官の行為は正しくない」«поступил дурно」という表現自体は、当時としてはニュートラルなものであり、罵倒などのニュアンスはない。

ときあたかもスヴォーロフのアルプス越えの直後、ナポレオンのクーデターと政権掌握の直前である。こういう歴史の激動のさなかに、未曾有の大戦争を予感しつつ、軍を去るとは！ どのような事情があったのか？...

しかも、先回りして述べておくと、以後のナポレオン戦争、祖国戦争という、文字どおりの国家存亡の危機に際しても、彼はヤースナヤ・ポリャーナを動こうとしなかった。彼の識見とコネからすれば、復職はむずかしくなかったはずだが。

『戦争と平和』のボルコンスキー老公爵が、ナポレオン侵入に奮い立って、民兵を村々から徴集して戦おうとするのに対し、ニコライは、娘を守って避難した以外、これといった行動を示さなかった。その点まったくちがう。グーセフはその心中を計りかねているが（グーセフ I、32 頁）、この謎が、ニコライ・ヴォルコンスキーという人物を解く鍵である。そして、それがヤースナヤ・ポリャーナの小宇宙の基底にすわっていたことになる。

(4) エカテリーナの性と権力：女帝派とパーヴェル派の争い、1794 年に頂点に

ここで、ちょっと角度を変え、捌め手から迫ってみよう。ニコライ隠棲のなぞを解くには、彼が処罰された当時の全般的状況がヒントになるかもしれない。彼が女帝に長期休暇を命じられた 1794 年には、彼女と息子パーヴェル、両派の争いが頂点に達していたことが、一つ注目される点だ。

両派の争いには、ロシア伝統の皇帝と有力貴族の対立がからんでいる。貴族は、クーデターで即位した女帝の正統性のあやしさ、パーヴェルとの不仲などにつけこみ、勢力争いを演じてきた。帝権そのものを狭めようと画策することもあった。たとえば、ニキータ・イヴァーノヴィチ・パーニンは、クーデター成功に大いに貢献し、女帝の初期の外交を担った重臣であったが、制限君主制導入をもくろんだ。スウェーデンを模範とし、有力貴族によって構成される元老院を設け、国権の中枢にすえようとしたのである。これは実現しなかったが、もう一つ問題だったのは、パーニンがパーヴェルの教育係で、彼に強い影響力をもっていたことだ。有力貴族が皇太子を政治的に利用する火種は常にくすぶりつづけたのである。

さらに問題だったのはフリーメーソンである。これが、流行のサロンか知的遊戯の場にすぎないと思われたうちはよかったが、フランス革命の勃発でその意味が一変した。当時の多くのロシア人にとって結局のところ玩具でしかなかった啓蒙思想が、生きて動き出した。机上の空論が、政治的な力に裏打ちされたイデオロギーに変じた。女帝にとっては、フリーメーソンは、革命を輸出しうる国際的ネットワークに変わったようにみえた。

彼女ははじめ、ロシアのメーソンとジャコバンとのつながりを疑った。メーソンが女帝暗殺を企んでいるとの噂も流れた。しかし、明敏な女帝は、革命の推移をみるうちに、メーソン＝革命の陰謀の本家本元などという憶測は捨てたはずだ。もし革命の黒幕だとすると、その黒幕同士がアメリカ独立戦争で殺し合い、ジャコバン派の恐怖政治とテルミドールの反動

で肅清し合ったことになるから。とはいえ、メーソンの人脈、ネットワークが政治的に利用されたのはまぎれもない事実であり、女帝としてはそれを無視することはできなかった、ということだろう⁶⁶。

廷臣のメーソンは、ニキータ・イヴァーノヴィチ・パーニン、アレクサンドル・クラークン、アレクセイ・ゴリーツィン、アレクセイ・ラズモフスキー、アレクサンドル・ヴォロンツォーフと弟セミョーン・ヴォロンツォーフなど、枚挙にいとまがない⁶⁷。

メーソン熱はたいしたもの、外国の同志との交流も盛んだった。仏思想家サン・マルタン⁶⁸に心酔し、直接会う者までいた。パーヴェル妃マリア・フョードロヴナ、ヴォロンツォーフ兄弟、アレクセイ・ゴリーツィン、アレクセイ・ラズモフスキー、ニコライ・レプニンなどだ。アレクサンドル・クラークンにいたっては、サン・マルタンの教団に入り、その思想を鼓吹した⁶⁹。

とくにパーヴェル周辺は、彼の教育係だったニキータ・パーニンをはじめ、メーソンが多く、結局、パーヴェル自身までメーソンに引き込まれてしまった⁷⁰。先回りして言うと、トルストイの祖父ニコライ・ヴォルコンスキーもまたメーソンだったらしい。

だから、問題は複雑である。たんに啓蒙主義的思想とメーソンが流行っていたところに革命が起きて、シンパを揺り動かした、というだけの話ではない。革命を輸出するパイプである（と女帝にはみえた）メーソンや啓蒙主義者が、女帝とパーヴェルの対立にむすびついたというところが肝心だ。女帝には、メーソンや共和主義者らがパーヴェルをかついでクーデターを起こしかねないという深刻な懸念が生じた。現に、ニキータ・パーニンらによるパーヴェル擁立、立憲君主制導入の計画があった。

しかも、メーソンは秘密結社だから、その活動の実態がよくわからず、よけい疑心暗鬼をかきたてる。暴力による王政転覆をめざす（と多くの人が思い込んでいた）イルミナティ⁷¹のような過激結社との関係は、本当はどんなものなのか？…

⁶⁶ См. «Отечественная война и Русское общество». М., издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Том I, IV. Русское общество Екатерининской эпохи и французская революция. В. Н. Бочкарева.

⁶⁷ アレクサンドル・クラークン（Александр Борисович Куракин, 1752-1818）は、『戦争と平和』のワシーリー・クラギン公爵のモデルとなった外交官で、1796年より副宰相を務めた。華麗な衣装を好み、ダイヤモンド公爵の異名をとった。

アレクサンドル・ヴォロンツォーフ（Александр Романович Воронцов (1741—1805) は、アレクサンドル一世治世初期の最高文官（外相）。『戦争と平和』に実名ででてくる。弟セミョーン（Семен Романович Воронцов, 1744—1832）は、長年イギリス大使をつとめた。在英期間は、1785年以來ほぼ半世紀におよぶ。この兄弟については後述する。

⁶⁸ ロシアのフリーメーソンの中心人物であったイワン・エラーギン（Иван Перфильевич Елагин, 1725-1794）が、サン・マルタンの著書『誤謬と真理』（1775）に傾倒し推奨したのをきっかけに、ロシアのメーソンはサン・マルタンの影響をつよく受けることになった（笠間啓治『19世紀ロシア文学とフリーメーソン』、近代文芸社、1997年、46—51頁）。

⁶⁹ 笠間啓治『19世紀ロシア文学とフリーメーソン』、近代文芸社、1997年、49、66頁

⁷⁰ Бакунина Т.А. Знаменитые русские масоны. М: Интербук, 1991. С. 49—50.

ロシアのメーソンが傾倒した仏思想家、サン・マルタン自身も、女帝にとって政治的に無害とはいえない。彼は、カトリック教徒を称していたが、「教会」と「聖職者」は否定した。あらゆる人間は司祭であり、預言者になりうる存在である。いや、第二のキリストにすらなりうる、という。

唯物論者、無神論者には反対したが、反教会、反聖職者、迷信の打破という点では、彼らと意見が一致し、フランス革命を熱烈に支持した⁷¹。ロシアで危険視されたのも当然だろう。

こういう状況のもとで、革命直後の90年から92年にかけて、アレクサンドル・ラジーシチェフとニコライ・ノヴィコフの事件が起きる。というよりも、女帝が国内の引き締めのため、あえて事件にしたのだと思われる。

そして女帝は、93年1月のルイ十六世処刑をきっかけに、仏革命政府をおおやけに非難しはじめ、通商関係、人的交流を絶つ（仏滞在中のロシア人官僚は即時帰国を命じられる一方で、王党派以外のフランス人をロシアより追放する）。

女帝はこうして足元を固めつつ、1794年に宮廷会議にパーヴェルから帝位継承権を奪うことを正式に提起するが、重臣たちに反対されてあえなく失敗する。トルストイの祖父ニコライが2年間の長期休暇を命じられたのは、まさにこの1794年7月24日であったことに注意されたい。

女帝は、巻き返しをはかっているうちに、96年11月に死去する。おおよそこういう流れになる。

女帝が激動のさなかパーヴェル派とメーソンにいかに対処しようとしたか、事の本質は、ラジーシチェフ、ノヴィコフ事件を通してうかがうことができる。で、次節ではこれを詳しくみたく、改めて権力闘争の実態に迫ろう。作家の祖父ニコライの、謎の長期休暇が、これと関係しているならば、なんらかの示唆を与えてくれるはずだ。

(5) ノヴィコフ、ラジーシチェフ事件

ノヴィコフ事件は、フリーメーソンであるニコライ・ノヴィコフが、「禁書を印刷、出版し」、またそれらの書物を「やんごとなき方（*皇太子パーヴェルのこと——佐藤）に建築家ワシーリー・バジェーノフ（Васи́лий Ива́нович Баже́нов）を通じて手渡し、結社に引きず

⁷¹ ドイツの秘密結社。「啓明結社」とも訳されている。1776年バイエルンで、インゴルシュタット大学教授アダム・ヴァイスハウプトによって設立された。一切の隷属のない、原始共産主義的社会の建設をめざした。内部にメーソン風の位階制をもつ。

ヨーロッパ各国に支部が置かれ、会員数については諸説あるが、急成長したのは事実である。確証はないが、ゲーテ、シラー、ヘルダー、ミラボー伯なども会員だったとの説がある。

フランス革命勃発直後の1789年末にカリオストロが逮捕され、「フランス革命はイルミナティの陰謀によるもので、自分もそのメンバーである」などと「自白」した。これを受け、ローマ教皇ピウス六世は、イルミナティを名指しで断罪する。こういった経緯もあり、政治状況が急転し過熱するなか、イルミナティの名はひとり歩きするようになっていく。

⁷² 『キリスト教神秘主義著作集 17、サン・マルタン』（村井文夫訳）、教文社、1992。

り込もうとしたかど」で、悪名高いシュリッセルブルク監獄に収容された、というものだ。1792年に逮捕され、同年中に禁固15年が言いわたされた（ノヴィコフ自身が認めた「罪」は、禁書の印刷と出版だけであったが）⁷³。この事件でいちばんふしぎなのは、政治的には小物の彼だけが異常にきびしく罰せられ、ヴォロンツォーフ兄弟、アレクサンドル・クラークンらの大物は、ほとんど手をつけられなかったことである。

アレクサンドル・パイピンは、ノヴィコフが厳罰に処せられた理由として、建築家バジェーノフがあることないことを誇大にしゃべったこと、ノヴィコフが「イルミナティ」をある程度肯定するような言動をなしたことなどを挙げているが、はっきり決めかねている⁷⁴。パイピンが自認しているように、なぜノヴィコフだけが、というなぞが残るからだ。大物のメーソンたちが共謀して、ノヴィコフに責めを転嫁したという陰謀論もある。

筆者の見るところでは、上の重臣たちは大物すぎて手を出せなかったという単純な理由ではないかと思う。ニキータ・パーニンら一部貴族にかつがれて帝位についたエカテリーナの立場は、けっして磐石とはいえなかった。メーソンの重臣たちをかたっぱしから処罰したのでは、自分の権力が引っくりかえってしまう（だいたい、メーソンに入り関係書籍を読むこ

⁷³ См.: Пыпин А.Н. «Масонство в России». М.: Век, 1997. С.286.

なお、女帝の勅令（Указ Екатерины II А. А. Прозоровскому. 1 августа 1792）に、ノヴィコフの「罪状」が、6項目にわたり列挙されているが、これを読むと、その滅茶苦茶な理屈におどろく。

「罪」の一つ目は、ローゼンクロイツェル（黄金薔薇十字団 Gold-und Rosenkreuzer）が秘密結社であり、その会員が守秘義務を負っていて、政府が要求しても秘密を明かさぬ誓いを立てていること。

二つ目の罪は、会員たちが、ロシア政府のほかに、ブラウンシュヴァイク公にも従い、庇護を受け、彼に対し、露政府による迫害を訴えたこと。

三つ目は、プロイセンがロシアにあまり友好的でないのに、ローゼンクロイツェルの指導者、ヨーハン・クリストフ・ヴェルナー（1732—1800）と密かに文通していたこと。

ちなみにヴェルナーは、ヨーハン・ルドルフ・フォン・ビショッフスヴェルダール（1741—1803）とならんで、プロイセンでの同団体の流行の立役者で、1781年には、プロイセン皇太子（のちのフリードリヒ・ヴィルヘルム二世）を入会させることに成功し、自らは、1788年にプロイセンの宗務省の長に任じられていた。

四つ目と五つ目が、本文で述べた、パーヴェル勧誘と禁書の印刷、出版だ。

六つ目は、団体の規約に、「神殿」、「位階」などが、ノヴィコフの手により記載されていること。ノヴィコフは、これはアレゴリーにすぎないと主張しているのに、勅令によれば、「ノヴィコフとその仲間が、知恵弱き者たちを動揺、墮落させんがために用いる悪辣さと欺瞞を証拠立てている」という。「知恵弱き者」とは、パーヴェルに対する露骨な皮肉にもなっている。

罪状はこれだけだ。ところが、勅令によれば、罪は重大だという。

「ノヴィコフは、自分の秘密の企みを明かしてはいないが、上述の、既に明らかにされ、ノヴィコフ自身が認めた罪だけでも、極めて重大であり、最も重い容赦なき刑罰に値する。しかし、我々は、このような場合においても、我々の持ち前たる博愛心にもとづき、悪行を悔い改める時間を与えるべく、上の刑罰を免じ、シュリッセルブルク監獄に禁固15年を言い渡すものとする」

こう勅令は結ばれている。要するに、秘密結社に入っている者なら誰でも有罪になり得ることになる。そう思わせて恫喝することが狙いだったと思われる。

Бумаги А. А. Прозоровского по делу Н. И. Новикова / Публ. и примеч. А. К. Афанасьева // Российский Архив: История Отечества в свидетельствах и документах XVIII—XX вв.: Альманах. М.: Студия ТРИТЭ: Рос. Архив, 2009. Т. XVIII. С. 571.

⁷⁴ Пыпин А.Н. Там же. С.270—271, 280—290.

と自体は、なんら不法ではなかった。女帝からしてヴォルテールやディドロと文通までしていたのだ)。

ロシアという国は(現代にいたるまで未だにそうだが)、貴族とツァーリ、すなわち、小ボスと大ボス、地方ボスと中央のボスとの微妙なバランスの上に成り立っている。ごくかんたんに言うと、「お前たちは地方(自分の領分)で好き勝手にやっていいから、中央では私を支持しろ」という一種独特の馴れ合いの封建制である。

ルソーは『社会契約論』で、この「大きすぎる国」を非効率な中央集権の例として挙げた(同書は、1762年、つまりエカテリーナ即位の年に書かれている)。この巨大すぎる農業・資源国は(当時は、穀物、木材、毛皮が主要産物)、たしかに地味な中央集権の国だが、けっして一枚岩の強権がすみずみまで貫徹しているわけではない。ピョートル一世のような暴力的剛腕は、むしろ例外なのだ。たいていは、貴族とツァーリの馴れ合いで均衡をたもっている。ピラミッド型の強権というイメージは、多分に張子のトラなのである。

こういうシステムというかアンチ・システムは、中央が地方に十分金をばらまけるときはいいが、飢饉や宮廷の権力争いなどちょっとしたことで、たちまち脆さを露呈する。エカテリーナの治世初期には、彼女の即位に貢献したニキータ・パーニンら有力貴族が、国家改造計画を提案。その内容は、常設の「皇帝会議」を設立して、皇帝の権力をせばめるものだった。女帝は、即位の翌年1763年に貴族を抑えるために、「貴族の自由にかんする委員会」を設置したが、ミハイル・ヴォロンツォーフらは、あべこべに勤務義務からの解放、君主による財産没収の禁止、体刑の廃止などを要求した。地方の不可侵の小ツァーリたることを求めたわけである。

エカテリーナの地方改革は、各県、郡に貴族団を創設して地方の権限を明文化してゆだねることで、中央・地方の関係を安定化させようとしたものだ。要するに、女帝は、ロシアという国の本質を見切ったうえで、「ここまでは好きにやれ」とはっきり線引きをした。ロシア独特の封建体質をうまく制度化したということだ。こうして、貴族に対して気を使うべきところは、使いすぎるくらいだったが、それでも、貴族たちは、女帝とパーヴェルの対立を利用したり、立憲君主制導入をねらったりして(つまり、帝権をせばめようということだ)、虎視眈々と権限拡大をもくろみつづけた。⁷⁵

だから、1790年代に話をもどすと、大革命が進行し、メーソンが革命を広げるパイプとして利用されていることが疑われ、パーヴェルまでメーソンに入会させられるという状況では、なんらかの手を打たないわけにはいかない。それでみせしめのため、小物のノヴィコフを思い切りきびしく処断して、かつて1764年にイヴァン六世が殺された悪名高き監獄に彼を放り

⁷⁵ このロシアの「封建制」とエカテリーナ二世の地方改革については、筆者は以前、「ロシアNOW」の「今日は何の日」の「5月2日：未来の女帝エカテリーナ2世生まれる」(2013年5月2日付)に書いたことがある。

http://jp.rbth.com/arts/2013/05/02/2_42787.html (2015年8月8日最終閲覧)

込み、メーソンどもを震え上がらせようとした。その一方で、メーソンの活動とその関係書籍を禁じる、という間接的措置をとったのだろう。

やはりメーソンであったラジーシチェフの事件も、本質的にはおなじだろう（ちなみに、彼はノヴィコフの雑誌に寄稿しており、1790年に逮捕された）。『ペテルブルクからモスクワへの旅』の出版が悪いというが、いちおう検閲を通っているのだし、市場に出たのはわずか25部にすぎない。政治的影響という点でも、彼は税関の一官吏にすぎないから、たとえば、やはり事件の容疑者であったアレクサンドル・ロマーノヴィチ・ヴォロンツォーフとはくらべものにならない。捜査当局は、ラジーシチェフの『旅』が、ヴォロンツォーフら複数の手になる共作であると疑っていたのである⁷⁶。しかしラジーシチェフは、単著であると言い張った。その主張が認められたかたちで、結局、彼ひとりが罰せられ、死刑宣告を受ける。のちに刑一等を減じられ、シベリア流刑10年を言いわたされた（同1790年）。

ところで、さっき触れたアレクサンドル・ヴォロンツォーフは、ラジーシチェフとは商業参議会の上司と部下の関係でとても親しく、大いに目をかけていた。ヴォロンツォーフは長年、1773年から1794年まで同参議会の長官を務めていたのである。

しかも、ラジーシチェフが逮捕、流刑されてからも、護送中に枷をはずすようにはからったり、金、衣服、書籍を送ったり（はじめは毎年500ルーブル、のちに1000ルーブルを与えた）、家族のシベリア移住の面倒をみたりと、援助を惜しまなかった⁷⁷。

こういうヴォロンツォーフの行為を女帝はさぞ苦々しく思っていたにちがいない。果たせるかな、彼は、50歳にもならぬのに「引退」を余儀なくされる。1794年のことだった。そして、これに先立つ1791年には、フリーメーソン禁止令が出されている。

ちなみに、ヴォロンツォーフとラジーシチェフとノヴィコフは、ペテルブルグのおなじメーソンのロッジ、ウラーニア（*ложа Уединенных муз* 〈Урании〉）の会員だった。作家のカラムジン、スマローコフもこの会員である⁷⁸。

(6) 賭けに負けた女帝

こうしてエカテリーナ二世は、ラジーシチェフとノヴィコフの処罰でメーソンたちの心胆を寒からしめて、その活動を禁止し、足元を固めつつ、同1794年に決定的な行動に出る。前にちょっと触れたように、重臣たちを招集して、自分亡きあとはパーヴェルではなくアレク

⁷⁶ Елисеєва О.И. Екатерина Великая. М.: Молодая гвардия, 2010 (Жизнь замечательных людей: сер. биогр.; вып. 1267). Глава 15. Путешествие из Петербурга в Сибирь.

Подковыркин П.Ф. История русской литературы XVIII века. Глава. А.Н. Радищев («Путешествие из Петербурга в Москву». История создания).

⁷⁷ Там же.

⁷⁸ Энциклопедия «Санкт-Петербург». 2-е изд., испр. и доп. СПб: ООО «Бизнес-пресса»; М.: Российская политическая энциклопедия (РОССПЭН), 2006. Статья «Масонские ложи».

サンドルを即位させることを提起し、公式にパーヴェルを廃そうとしたのだ。理由は、息子の「性格と無能」である。

ところが、複数の重臣が、「わが国は、ずっと以前からパーヴェル・ペトローヴィチを後継者と仰ぐのに慣れております」と反対した。ヴァレンチン・ムーシン＝プーシキン

(Валентин Платонович Мусин-Пушкин) も、「即位されれば、ご気性も変わるでしょう」とやんわり一蹴し、女帝はいったん退かざるをえなくなった。

イギリス大使チャールズ・ウイトワース (Charles Whitworth, 1752- 1825) は事態を重視し、本国に報告した。「女帝がこのうえゴリ押しするとは思えません。彼女はロシアのことをよく弁えており、こういう時代にあつては、こんな専横があるていど危険をはらんでいることを理解できるはずだからです」

ところが、彼女はあきらめず、翌 1795 年、アレクサンドルに直に自分の意向を告げる。アレクサンドルはしかし、こう言って体よく逃げた。

かりに、ほんとうに人々が父の権利を侵そうとしているのだとしても、わたしはそうした不正から身をかわすことができます。私と妻はアメリカに逃れ、そこで自由で幸福になり、もはや私たちのことを耳にする者はいなくなることでしょう。

Если верно, что хотят посягнуть на права отца моего, то я сумею уклониться от такой несправедливости. Мы с женой спасемся в Америку, будем там свободны и счастливы, и про нас больше не услышат.⁷⁹

女帝の死の前年のことである。彼女はだんだん追い込まれていくような思いだったかもしれない。彼女の老いはもはやだれの目にもあきらかで、パーヴェルの存在感は徐々に増していく。

こういう状況では、プラトーン・ズーボフ (1767—1822) のような、なんでも言うことを聞く若い愛人を軍の重職につけて頼りたくなるのも分からないではない。老いたる女帝は、その治世の最後の数年、ズーボフに入れあげ、この「美貌以外とりえがない男」に、国政に口出しすることを許すようになった。末期症状である。ポチョムキンは、彼を退けようと、女帝に直談判したが、果たせず、その帰途病没している。1791 年のことだ。その後は、ズー

⁷⁹ この間の事情については、以下の著書を参照。

Данилов А.А. Справочные материалы по истории России IX—XIX вв. М., 1997.

Эйдельман Н. Грань веков: Политическая борьба в России: Конец XVIII — начало XIX столетия. М., 1986.

Российские самодержцы (1801—1917). М., 1994.

Государственные деятели России XIX — начала XX в.: Биографический справочник. М., 1995.

以下のような、「歴史小説」仕立てのものもある。

Оболенский Г.Л. Император Павел I; Карнович Е. П. Мальтийские рыцари в России. М.: Дрофа, 1995. Глава восьмая Гатчина.

ボフの権勢はいやまし、かつてポチョムキンが占めていた黒海艦隊司令長官、砲兵隊総司令官など、軍の要職多数が彼の手に落ちる。

一つの推測。トルストイの祖父ニコライが衝突したのは、おなじ愛人は愛人でも、ポチョムキンではなくて、ズーボフだったのではないか？ ニコライは、ズーボフ派を刺激するような言動をなし、女帝の怒りを買ったのではないか？ 『戦争と平和』でニコライ・ボルコンスキーが争ったのがほかならぬズーボフであることを思い出そう。ツァーリを怒らせたという、穏やかでないので、ヴォルコンスキー家とトルストイ家の人々が上のような伝説を考え出したのではないか——。こういう推測が成り立つ余地はある。

だが、この推測の正否にかかわらず、ニコライ隠棲の謎はもっと深い。これだけでは、パーヴェル治下の1799年の不可解な退役が説明できないからだ。

以上、ニコライが事実上の停職、免職に等しい長期休暇を与えられた1794年前後の状況を一通りみたところで、ふたたびニコライ自身のことにもどり、考察をつづけよう。

(7) フリーメーソン、ニコライ・ヴォルコンスキーは「危険人物」？

こういうむずかしい時代に、ニコライはなにを考え、どう行動したのか。彼はどのような思想のもちぬしだったのか。資料はとぼしいが、あるていどの推測は可能だ。ヤースナヤ・ポリャーナの2万2千冊におよぶ蔵書は、現在までに徹底的な整理がなされ、それぞれの本のデータばかりか、各頁の書き込み、下線が付された箇所などまで分かるようになって⁸⁰。

これをみるかぎり、残念ながら、ニコライによる書き込み等は特定されていないようだが（ルソーなどはとくに多数の下線が付されているが、だれによるものか特定できない）、出版年代から、彼が入手し読んだ本はだいたい分かる。ジャンルは多岐にわたり、重いものも軽いものもある。彼の蔵書（と考えられるもの）をざっと挙げてみよう（グーセフ I、630—631頁）。

1) 仏思想

フェヌロン、サン＝シモン公爵ルイ『回想録』（著者は社会主義者サン＝シモンの遠縁）、モンテーニュ、モンテスキュー、ヴォーヴナルグ、ヴォルテール、ルソー、リヴァロール、シャトブリアンなど

2) 仏文学

⁸⁰ Библиотека Льва Николаевича Толстого в Ясной Поляне: библиографическое описание:

T. 1: Книги на русском языке: В двух частях. М.: Книга, 1972.

T. 2: Периодические издания на русском языке. М.: Книга, 1978.

T. 3: Книги на иностранных языках: В двух частях. Тула: Издательский Дом «Ясная поляна», 1999.

モリエール、ラシーヌ、ル・サージュ、ラ・ロシュフコーなど。

ラ・ショッセ、「十八世紀ヴォードヴィル集」などの仏軽演劇

3) 仏以外の文学作品と文学史

4) 音楽

仏オペラのアリアの楽譜

5) 美術

ジョルジョ・ヴァザーリ『画家・彫刻家・建築家列伝』（イタリア語）。

ホメロス、プルタルコス、ヴェルギリウスなどギリシャ・ローマ古典

6) 説話、寓話

『千夜一夜物語』など

7) 歴史書

ロシア史が2点（著者は Pierre Charles Levesque⁸¹と Nicolas-Gabriel Le Clerc⁸²）、イギリス史、イタリア史、シラー『三十年戦争史』など

⁸¹ Pierre Charles Lévesque (Петр Карл Левек, 1736-1812)

フランスの歴史家、版画家。同国初のまとまったロシア史を書く。両親は初め、息子を画家・版画家にしたく思い、ある画家の弟子にするが、この方面では大した才は示さなかったので、1748年に学院に入れると、ひじょうに熱心に勉強し始め、つねに成績も優秀だった。ところが、卒業まぎわに両親が経済的な理由でパリを離れざるをえなくなり、レヴェクも学校をやめて、自分でパンを稼がねばならなくなった。ここで昔の版画修行が役立ち、しばらくは版画の注文で糊口をしのいだが、学問への思い止みがたく、やがて著した哲学的論文（「道徳的な男 L'homme moral」など）がディドロの目に止まった。ディドロは、文通していたエカテリーナ二世に彼を推薦。1773年、レヴェクは女帝に招かれて、ペテルブルクの幼年学校で教鞭をとるようになった。当地で彼はロシア語を学びつつ、ロシア史を書くことを思い立ち、歴史的著作を読み漁る。80年に『ロシア史 Histoire de Russie』が完成、フランスに帰国して出版すると、当時、同国ではまとまったロシア史が皆無に近かったこともあり、大きな成功を収めた。その第一版は早くも87年にロシア語に訳されている。このロシア史はその後も書き継がれ、1800年にはエカテリーナ二世の時代まで達する。革命の時代は、政治から距離を置き、学問に没頭し、多数の著作を著している。

Русский биографический словарь : в 25-ти томах. — СПб.—М., 1896—1918.

⁸² Nicolas-Gabriel Le Clerc (Николай Габриель Леклерк, 1726-1798)

フランスの医学者、歴史家。初めは軍医として活動、後に医学行政（軍病院の汚職対策）で業績を上げ、貴族に列せられるが、まもなく宮廷の陰謀と革命で、地位も年金も失った。二度ロシアを訪れている。最初は、女帝エリザヴェータの時代の1759年のことで、彼女の愛人キリール・ラズモフスキーの侍医となる。4年間の滞在ののち、フランスに帰国しオルレアン公の侍医となるが、69年にロシアに舞い戻り、77年まで、エカテリーナ二世のもとで様々なポストを歴任または兼務する（皇太子パーヴェルの侍医、幼年学校・学科部門の校長など）。この間、ロシア文学に親しみ、いくつかの著作の仏訳を手がける（ヘラスコフの長詩『チェシュメの戦い Чесменский бой』〈1770年の露土戦争におけるチェシュメ湾での海戦を題材にしたもの〉、ロモノーソフの長詩『ピョートル大帝』、エカテリーナ二世の喜劇など）。また、広範な人脈を通じて大量の資料を集め、6巻の『古代から現代にいたるロシアの物質、道徳、市民および政治の歴史 "Histoire physique, moral, civil et politique de la Russie ancienne et moderne"』をまとめる。

8) アメリカ合衆国関係

『ジョージ・ワシントンの生涯』(全5巻)、『アメリカ合衆国の統計、歴史、政治』(全5巻)

9) キリスト教関係

聖書と注解、教会史など

10) 自然科学

ヨハン・ゲオルク・シュロッサー⁸³の『世界史』、ヨハン・ヘンケル⁸⁴の『鉱物学』、ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク⁸⁵など

11) 畜産学

12) 地理

13) 娘マリアのための教材と思われるもの

ジャンリス夫人⁸⁶の著作、仏英辞典、独文法(仏語)、イタリア語文法、ロシア各地域の地図など

ただし、提供された資料をそのまま使ったり、ノヴィコフの事典からそのまま借用したりと、必ずしもオリジナルな著作とは言えない面がある。これらの他にも、医学関係を含め、多数の著作を残した。

Русский биографический словарь, 1896—1918.

Леклерк, Николай-Гавриил // Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона : в 86 т. (82 т. и 4 доп.). СПб., 1890—1907.

⁸³ ヨハン・ゲオルク・シュロッサー (Johann Georg Schlosser, 1739-1799) は、ドイツの法学者、歴史家。ゲーテの妹、コルネーリアの夫。

⁸⁴ ヨハン・ヘンケル (Johan Henkel, 1679-1744) は、ザクセンの医師、化学者、鉱山学者。

⁸⁵ ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク (Georg Christoph Lichtenberg, 1742-1799) は、18世紀ドイツの物理学者、思想家。物理学者としては電気の研究で知られ、思想家としては、生涯おりにふれて思索を書きためたノートが有名だ。講義に器具をもちいる実験を初めて導入した科学者の一人でもある。ショーペンハウアー、ニーチェ、フロイト、ヴィトゲンシュタイン、レフ・トルストイらが彼を高く評価している。トルストイの『読書の輪 Круг чтения』にも、リヒテンベルクの思索が多数収録されている。

邦訳：『リヒテンベルク先生の控え帖』(池内紀訳)、平凡社、1996年。

⁸⁶ ジャンリス夫人 (Félicité de Genlis, 1746-1830) は女性作家。小説、戯曲、子ども向けの物語、教育書、エッセー、回想録など多様なジャンルの膨大な著作を残したが、核は教育の理論と実践だ。彼女は、後に国王となるルイ・フィリップ(在位1830-1848)の養育係・家庭教師でもあった。

彼女の教育理論は、おそらく、トルストイの母にもある程度は適用されたと思うので、やや詳しく見ておこう。村田京子氏の論文による(「国王ルイ・フィリップの養育掛ジャンリス夫人の女子教育論——『アデルとテオドール』」、女性学研究(17)、2010年)。

ジャンリス夫人の代表作の『アデルとテオドール、または教育に関する書簡——王族および男女の子どもに関する三つの異なる教育プランを含む』(1782年)は、書簡体小説で、ダルマヌ男爵夫妻とその親しい友人とが交わす69通の手紙で構成されており、夫妻の教育の理論と実践、そして子供の成長が主題

面白いのは、フランス啓蒙思想とならんでアメリカ合衆国関連の大部の書籍があることだ。啓蒙思想の実験場としてのアメリカに興味をいただいていたのかもしれない。

代表的な古典が揃っている一方で、自然科学もあり、しかも後世に残る業績が選ばれている。いわゆる「汚い本棚」ではなく、独自の価値判断と見識を感じさせる。

となっている。この辺り、ルソーの『エミール』を思わせる

理論書ではなく小説仕立てにしたことについて、彼女は『回想録』のなかで、こう説明している。「同じ考えが筋立てのなかに活かされると、その思想は必ずはるかにいい形で展開される。その結果、より役立つものとなる」

ジャンリス夫人の教育は、身体の鍛錬や衛生をもカバーする幅広いものだが、その重要な特徴の一つは、子供の年齢と成長の度合いに応じて、段階的に教育を行っていくこと。彼女はとりわけ読書を重視し、年齢別の詳細な読書リストを作っている。こうした方針は、次のような反省に立っている。

「最高の教育を受けたと言われている人々が、一般的に、読書に一番関心がない人たちなのです。それもそのはずで、こうした育ちの良い人は 14 歳で、優れたフランスの書物を全て読んでしまっているからです。その年では本の価値がわからないため、非常に退屈な印象しか残らず、その結果、当然のことながら彼らは読書を嫌い、読書を断念してしまうのです」（作中のダルマヌ男爵の見解）

特徴の第二は、子供に宗教的感情を植え付け、「人生のいついかなる時も神さまが見て聞いている」と思わせ、悪い行いを子供自らが正していくよう仕向けること。しかも、作中のダルマヌ夫人は、娘の嘘や隠し事を見抜くことで、いかなる行為も「母親の絶対的な全知の眼差し」から逃れられないことを娘に悟らせている。村上氏によれば、「言わば、教育者が神の役割を果たしているわけだ。全てを知り、全てを洞察する教育者の神のような視線は、小説全体のライトモチーフとして、至る所に見出せる」

村上氏は、ジャンリス夫人の教育を総括して、「子どもの生活すべてをプログラム化するジャンリス夫人の教育法は、完璧に見える半面、子どもたちから夢みる時間、想像力を働かせる時間を奪い、自ら考える力を失わせてしまう危険性がある」と疑問を呈しながらも、それが夫人の長年の育児、教育から練り上げられたもので、理論一辺倒の机上の教育論とは一線を画す点を強調されている。

「この作品は 15 年にわたる考察と観察の成果であり、子どもたちの性癖や欠点、策略を終始一貫して研究してきた成果による」（『アデルとテオドール』再版の序文）

なお、夫人のもう一つの代表作『お屋敷の夕べ』（1784）も大変なベストセラーとなり、早くも 1787-1788 年に露訳されている。訳者はカラムジンだと推測されている。連作小説の形式で、15 の物語からなり、内容はすべて教訓的だ。

藤沼貴氏は、『近代ロシア文学の原点：ニコライ・カラムジン研究』（れんが書房新社、1997 年）で、この作品が広く迎えられた理由について、「道徳を人間の具体的な行為のなかで検証し、道徳そのものと、その生きた担い手である人間の本性について考えさせる働きをした」（553 頁）と指摘されている。

要するに、大革命前後の不安な、一切が流動する時代状況にあって、夫人の著作は、ひとつの道標と目されたわけだが、しかし結局、いかなる教育論も、生かすも殺すも教師次第である。夫人の名を振りかざして杓子定規な教育を施した教師、そしてその被害者の子供は少なくなかったはずだ。

『戦争と平和』でナターシャは、四角四面な優等生タイプの姉ヴェーラに向かって言い放つ。「あんたには心つてもものがないのよ、あんたはただのジャンリス夫人よ！」（1 巻 1 編 11 章）

なお、『戦争と平和』でクトゥーフは、ボロジノの会戦を前に、ジャンリス夫人の小説『白鳥の騎士あるいはシャルルマーニュ（カール大帝）の宮廷』（Les Chevaliers du Cygne ou la cour de Charlemagne; 2-e изд., Париж, 1805 г.）を読みふけている。決戦を控え、ローエングリーン伝説を読んでいたわけで、さりげなく老将軍の心境をうかがわせるエピソードだ（3 巻 2 編 16 章）。

驚くべきことに、後年、クトゥーフ関連のアーカイブが新たに発見され（クトゥーフの書き込みのある夫人の本も見つかった）、上の挿話が必ずしもフィクションでないことが判明した。クトゥーフは、ボロジノの会戦後、気を紛らすためにしばしばジャンリス夫人を読んだ、と書いていたのである。大作家の洞察力！...

Барбазюк В.Ю. Феномен С. Жанлис в России начала XIX века // Русская речь. 2012. N 1. С. 62.

もうひとつ大事なものは、ニコライがフリーメーソンだったと思われることだ。ちなみに、妻エカテリーナ（トルベツコーイ家の出身）の従兄弟、ニコライとユーリーのトルベツコーイ兄弟（Николай Никитич Трубецкой と Юрий Никитич Трубецкой）はローゼンクロイツェル（黄金薔薇十字団 Gold-und Rosenkreuzer）の指導者で⁸⁷、ニコライ・トルベツコーイのほうはノヴィコフとも親しかった。

しかし、グーセフは、いくつかの理由を挙げて、ニコライ＝メーソン説に疑問を呈している。すなわち、

- ①蔵書にメーソン関連のものがわずかしかないこと。
- ②ゲオルギー・ヴェルナーツキー（Георгий Владимирович Вернадский）の作成した、メーソンと推測される人物のリストに名がないこと。
- ③ニコライの娘マリア（つまり作家の母）の発言。1810年にニコライは、「何人かの影響力ある人物に会い」、マリアを社交界デビューさせるために、彼女を連れてペテルブルグを訪れ、同年6月25日から8月3日まで滞在しているのだが、同地で7月15日にマリアが、メーソンのメンバー、セルゲイ・セルゲーエヴィチ・ゴリーツィン⁸⁸に会った際に、

⁸⁷ Толстой С.Л. Мать и дед Л.Н.Толстого. М., 1928. С.34.

ロシアのフリーメーソンの中心人物のひとり、イヴァン・シュバルツ（Иван Егорович Шварц, 1751-1784）が、1781年にベルリンでローゼンクロイツェル（黄金薔薇十字団 Gold-und Rosenkreuzer）に接し、同志たちに紹介して以来、この国にもローゼンクロイツェルを名乗る一派が現れた。そして彼らが、同国のメーソンを牽引していくことになる。シュバルツが死んでからは、ノヴィコフがその跡をついで、露ローゼンクロイツェルを主導する（笠間啓治前掲書 51—63頁）。

1781年にロシアにローゼンクロイツェルが本格的に入ってきたのは偶然ではない。このころ同団体は最盛期をむかえ、まさにこの年にプロイセン皇太子（未来のフリードリヒ・ヴィルヘルム二世）まで入会しているからだ。

⁸⁸セルゲイ・セルゲーエヴィチ・ゴリーツィン（Сергей Сергеевич Голицын, 1783-1833）の母親は、前に書いたが、ポチョムキンの姪ヴァーレンカ・エンゲリガルトで、トルストイ家の伝説によれば、ニコライが押し付けられそうになったあの令嬢だ。

セルゲイ・セルゲーエヴィチの父は、セルゲイ・フョードロヴィチ（С.Ф.Голицын）で、彼はその三男である。

セルゲイ・セルゲーエヴィチは、1805年以来多くの対フランス戦役に参加し、1810年には陸軍大佐、1812年には参謀総長レオンチー・ベニグセンの指揮下にあり、1813年に少将に昇進。音楽の才に恵まれ、ロマンスの作曲でも知られている。

彼は、いくつかのフリーメーソンのロッジに属していた（ложи Соединенных друзей, ложи Северных друзей...）。彼の兄弟のアレクサンドルとヴラジミールも、メーソンの目立った活動家であった。

マリアは、セルゲイの弟ニコライ（1787—1803）と婚約したが、彼は、結婚前に亡くなってしまった（34, 352）。

・グーセフ I の 36—37、46—47、636—637 頁。

・Княжна М.Н.Волконская «Дневная записка для собственной памяти» (Подготовка текста и комментарии Т.Г.Никифоровой) // Наше Наследие (Иллюстрированный культурно-исторический журнал), № 87, 2008.

「フリーメーソンの話ばかりしている」と日記⁸⁹に書いており、グーセフの印象では、「メーソンへの共感を表していない」（グーセフ I、635—638 頁）。

しかし、これらはいずれも決め手にならないだろう。蔵書がすくないのは、メーソンが何度も長期間禁止されたことを考えれば、むしろ当然といえる。だれが禁書を麗々しく書架に並べておきましょうか。また、ヴェルナーツキーのリストは、完璧なものではない。メーソンの完璧なリストなどそもそもありえないのだ。娘マリアの言葉も、どうにでも解釈できる。長々とメーソンの話をしたのは、ニコライが「身内」だから、と考えることも可能だ。

では、ロシアのローゼンクロイツェルというのは、実際のところ、どういう人たちだったのか。はたして、政治的な危険性をもっていたのか。彼らの思考と行動様式は、思想をつづった著書、論文よりもむしろ、私信、日記などによく現れていることがある（思想の根幹は、カバラ、錬金術、ヘルメス文書、グノーシス主義、ヤコブ・ベーム、サン・マルタンなどである）。

たとえば、ノヴィコフの懺悔だ。この結社のメンバーは、それぞれに精神的指導者をもっており、定期的にあらゆるできごとを年に4回懺悔しなければならなかった⁹⁰。ノヴィコフのそれは異常なまでの真率さと倫理感、向上心にあふれており、読む者を動かす。

「わたしはいまだ神の愛から遠い」ことを嘆き、自分の怠け心を嘆きつつ、「早く起き、遅く寝るのがつらい。ぬかるみのなかを友のために外出するのがつらい。いまだにそういうことがしばしばある。しょっちゅうあるのです。わたしは涙を流しながらこのことを書いております」⁹¹という具合で、いっさいを容赦せず、自分の悪をえぐりだしていくのだ。

これは例外的ケースで、たいていの場合、懺悔は形式に流れたはずだ、なんととってもノヴィコフは特別な人間だから、と思われるかもしれないが、そんなことはない。ローゼンクロイツェル、オシプ・ポズデーエフの直弟子だったピョートル・ヤーコヴレヴィチ・チトフという人物がいる（1758—1818年。四等文官、元老院第二局局長）。この人は、毎日の夢を克明にし、それを解釈して自分の意識下の欲望、悪徳をとらえることを日課にしていた。その日記が相当量残っているのだが、その深さと徹底は生半可なものではない。

⁸⁹ Княжна М.Н.Волконская «Дневная записка для собственной памяти».

この日記は、ニコライの娘マリアが、父に連れられて1810年にペテルブルクに旅行したときに書きつづったもので（国立トルストイ博物館所蔵）、トルストイの長男セルゲイの著書に掲載されているが（Толстой С.Л. «Мать и дед Л.Н.Толстого». М., 1928.）、2008年に、同博物館首席研究員、タチアーナ・ニキーフオロヴァ（Т.Г.Никифорова）が、オリジナルから新たに編集し直した。

⁹⁰ Пыпин А.Н. Там же. С.298-299.

⁹¹ Там же. С.301.

のちに作家トルストイは、この夢日記に着目し、ほとんど一字一句たがえず、ピエールの夢日記にした（『戦争と平和』2巻3編10章）⁹²。

ちなみに、『戦争と平和』にヨシフ・バズデーエフという、ピエールの「恩人」となるフリーメーソンがでてくるが、そのモデルが、チトフの師、オシプ・ポズデーエフ（Осип〈Иосиф〉 Андреевич Поздеев, 1742-1820）である。ポズデーエフは、19世紀初めにはローゼンクロイツェルの長老となっていた。

以下に、両者の夢日記のうち一箇所だけ例として挙げておこう。最初に原文、そのあとに拙訳を示す。

<p>ピョートル・チトフの日記（1812年5月12日）</p> <p>Нынешнюю ночь видел сон, будто О<сип> Ал<ексеевич> в моем доме сидит, и я рад очень его прибытию и, желая его угостить, будто неумолчно с посторонними болтаю. Потом вспомня, что ему такое угощение не может быть приятно, я почувствовал в себе желание приблизиться к нему и его обнять, но только что приблизился, он будто стал мне тихо что-то из Орденского учение говорить, но так тихо, что я будто многого не расслышу. Потом будто вышли мы вон из комнаты, и не помню — что-то мудреное: сидячи или лежачи на полу, он мне говорил, а мне [будто] захотелось показать ему мою чувствительность и я, не вслушиваясь в его речи, стал себе воображать свое состояние и обещаемую нам божию милость. Появились у меня слезы, и я мысленно был доволен, что он это заметил, но он, взглянув на меня с досадою, вскочил, пресекши свой разговор словом: «Кой ч...», не договорив последнего точно так, как написано. Я оробел, подошел к нему и спрашивал, не ко мне ли сказанное им в досаде слово относилось, но он, не сказав мне ничего, показал ласковый вид, и после вдруг очутились [на] в спальне моей, где стоит двойная кровать, куда он на край лег. Я будто все пылая к нему желанием ласкаться, прилег тут же. Он вдруг спрашивает: «Скажите, П<етр> Я<ковлевич>, какое вы имеете главное пристрастие? Узнали ли вы его? Я думаю, что вы его уже узнали». Я, смутившись сим вопросом, отвечал, что лень, но он дал мне чувствовать, что он думает, что похоть. Но я, разумея одну похотливость</p>	<p>ピエール・ベズーホフの日記（『戦争と平和』2巻3編10章）</p> <p>7-го декабря. Видел сон, будто Иосиф Алексеич в моем доме сидит, и я рад очень и желаю его угостить. Будто я с посторонними неумолчно болтаю и вдруг вспомнил, что это ему не может нравиться, и желаю к нему приблизиться и его обнять. Но только что приблизился, вижу, что лицо его преобразилось, стало молодое, и он мне тихо, тихо что-то говорит из ученья ордена, так тихо, что я не могу расслышать. Потом будто вышли мы все из комнаты, и что-то тут случилось мудреное. Мы сидели или лежали на полу. Он мне что-то говорил. А мне будто захотелось показать ему свою чувствительность, и я, не вслушиваясь в его речи, стал себе воображать состояние своего внутреннего человека и осенившую меня милость божию. И появились у меня слезы на глазах, и я был доволен, что он это заметил. Но он взглянул на меня с досадою и вскочил, пресекши свой разговор. Я оробел и спросил, не ко мне ли сказанное относилось; но он ничего не отвечал, показал мне ласковый вид, и после вдруг очутились мы в спальне моей, где стоит двойная кровать. Он лег на нее на край, и я, будто пылая к нему желанием ласкаться, прилег тут же. И он будто у меня спрашивает: «Скажите по правде, какое вы имеете главное пристрастие? Узнали ли вы его? Я думаю, что вы уже его узнали». Я, смутившись сим вопросом, отвечал, что лень мое главное пристрастие. Он недоверчиво покачал головой. И я, еще более смутившись, отвечал, что я хотя и живу с женою, по его совету, но не как муж жены своей. На это он возразил, что не должно жену лишать своей ласки, дал чувствовать, что в этом была моя обязанность. Но я отвечал, что я стыжусь</p>
---	---

⁹² Щербаков В.И. Неизвестный источник «Войны и мира» («Мои записки» масона П.Я.Титова) в жур. «НОВОЕ ЛИТЕРАТУРНОЕ ОБОЗРЕНИЕ» №21 (1996). С.130-151.

плотскую, сказал, что нет, что я к жене давно не прикасаюсь. Он возразил, что не должно жену лишать своей ласки, давая знать, что будто как бы это была моя обязанность. Но я ему отвечал, что я не должен сего делать, потому что она нездорова, и потом все сокрылось, и я, проснувшись, нашел в мыслях текст: И живот бе свет человеком. И свет во тьме светится и тьма его не объят. NB: Лицо у О<сип> Ал<ексеевич> моложавое и весьма здорового цвета.

昨晚、こんな夢を見た。オ<シプ>・ア<レクセーエヴィチ>が拙宅にいたようで、私は、彼の来訪がとてもうれしく、歓待したく思っていた。私は他の人たちと絶えず喋りつづけていたようだった。そのあとで、こんなもてなしが彼の気に入らないかもしれぬと思ひ出し、彼に近寄り、抱擁したいと思ったが、近寄るや、彼がフリーメーソンの教えのなかの何かを小声で話しはじめたようだったが、声が小さすぎて、多くの部分が聞きとれない。それからわれわれは、部屋から出たようで、よく覚えていないが、そこでなにか奇妙なことが起きた。床に座るか横になるかして、彼は私になにか話しており、一方私は、彼に自分の感じやすさを見せたくて、彼の話に耳を傾けずに、自分の状態と、われわれに約束された神の恩寵とを思い描き始めた。そして、涙が目に浮かび、彼がそれに気がついたことが満足だった。だが、「Кой ч... (*たぶん、Кой чертで、畜生！とか悪魔め！といった強い苛立ちを表す言葉——佐藤)」と、最後の言葉をはっきり言い切らずに、話をやめ、忌々しげに私を見て、さっと立ち上がった。私は怖気づき、彼に近寄って、今忌々しげにお話しになったことは私に関係したことではないのか、と尋ねたが、彼は私にはなんにも言わず、優しい顔をして見せた。そのあと突然われわれは、ダブルベッドのある、私の寝室にいた。彼はその端に横になり、私は、彼に甘えかかりたい気持ちが燃え上がり、同じところに横たわったようだった。彼は突然尋ねた。「ピ<ョ>ートル>・ヤー<コヴレヴィチ>、あなたのいちばんの欲望はなんですか？あなたはそれを認識されましたか？もう認識されたことと思います」。私はこの間に当惑しながら、怠惰が私の主な欲望です、と答えたが、彼は、淫欲だと考えていることを仄めかした。しかし私は、もっぱら肉欲のことだと解して、私はずっ

этого; и вдруг все сокрылось. И я проснулся и нашел в мыслях своих текст св. Писания: *Живот бе свет человеком, и свет во тьме светит и тьма его не объят.* Лицо у Иосифа Алексеевича было моложавое и светлое. В этот день получил письмо от благодетеля, в котором он пишет об обязанности супружества.

12月7日

こんな夢を見た。ヨシフ・アレクセーエヴィチが拙宅にいたようで、私はとてもうれしく、歓待したく思っていた。私は他の人たちと絶えず喋りつづけていたようだったが、突然、それが彼の気に入らないかもしれぬと思ひ出し、彼に近寄り、抱擁したいと思った。だが、近寄るや、彼の顔が変わり、若くなり、フリーメーソンの教えのなかの何かを小声で話しているが、声が小さすぎて、聞きとれない。それからわれわれは、部屋から出たようで、そこでなにか奇妙なことが起きた。われわれは床に座るか横になるかして、彼は私になにか話している。一方私は、彼に自分の感じやすさを見せたくて、彼の話に耳を傾けずに、自分の内なる人の状態と、私に与えられた神の恩寵とを思い描き始めた。そして、涙が目に浮かび、彼がそれに気がついたことが満足だった。だが、彼は話をやめ、忌々しげに私を見て、さっと立ち上がった。私は怖気づき、今お話しになったことは私に関係したことではないのか、と尋ねた。しかし、彼はなんにも答えず、優しい顔をして見せた。そのあと突然われわれは、ダブルベッドのある、私の寝室にいた。彼はその端に横になり、私は、彼に甘えかかりたい気持ちが燃え上がり、同じところに横たわったようだった。すると彼は私に尋ねたようだった。「正直におっしゃっていただきたいのだが、あなたのいちばんの欲望はなんですか？あなたはそれを認識されましたか？もう認識されたことと思います」。私はこの間に当惑しながら、怠惰が私の主な欲望です、と答えた。彼は信じかねるというふうに、頭を振った。私はさらに当惑して、自分は、あなたの忠告により、妻と同居しているけれども、ふつうの夫婦のように暮していない、と答えた。これに対して彼は、妻を愛撫してやらないのはよろしくないと反対し、これは私の義務だと仄めかした。しかし私が、それは恥ずかしいと答えると、突然、一切が消えてしまった。そし

<p>とまえから妻には触れていないと答えた。彼は、妻を愛撫してやらないのはよろしくないかと反対し、これは私の義務だと仄めかした。しかし私が、それはすべきではない、彼女は健康でないから、と答えると、そのあと、一切が消えてしまった。そして私は目が覚めると、聖書の一節が脳裏に浮かんできた。「命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」(*『ヨハネによる福音書』1章4-5節——佐藤)。N.B. (注意せよ) : オクシプ>・アレクセーエヴィチ>の顔は、若々しく、極めて健康な顔色だった。</p>	<p>て私は目が覚めると、聖書の一節が脳裏に浮かんできた。「命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」(*『ヨハネによる福音書』1章4-5節——佐藤)。ヨシフ・アレクセーエヴィチの顔は、若々しく明るかった。まさにこの日、私は恩人から手紙を受けとった。そのなかで彼は夫婦の務めについて書いていたのである。</p>
---	--



オシプ・ポズデーエフ

(Осип (Иосиф) Андреевич Поздеев, 1742-1820)

版画⁹³

問題は、結社のメンバーにとって師の権威は絶大であり、しかもその師にあらゆる秘密を握られてしまうということだ。これは強力な権力とそれへの絶対的服従を生みかねない。

とにかく、ノヴィコフやチトフの情熱は途方もないものだ。この時代の熱気は、今日のわれわれにはもう想像が困難である。そういう情熱と熱気が、フリーメーソンに渦巻き、ある強大な権力のもとに統合されうる可能性を、女帝は恐れていたと推測される。イルミナティなどの過激組織との関係もよく分からない。イルミナティとはいっさい関係をもつなかれ、というお達しが、ローゼンクロイツェル幹部から出ている⁹⁴ということは、逆に、なんらかの交渉があることを暗示しているかもしれない。そして、それらの結社が、パーヴェルをかつ

⁹³ Морозов А.В. Каталог моего собрания русских гравированных и литографированных портретов. Т.т. 1-4 и Алфавитный указатель. Москва, товарищество скоропечатни А.А. Левенсон, 1912-1913. Т.3. С.351.

<http://www.rulex.ru/rpg/portraits/24/24322.htm> (2015年9月5日最終閲覧)

⁹⁴ Пыпин А.Н. Там же. С.310-313.

ぎ、自分を退けて、国家体制を引っくりかえすかもしれない…。こんなことを女帝は思い、危惧していたと思われる。要するに、女帝の目には、この組織は十分危険にみえたということだ。

だから、女帝にしてみれば、トルストイの祖父ニコライに注意する理由はあったことになる。

さて、ここにひとつ面白いエピソードがある。ニコライの友人、P.F.カラバノフ⁹⁵の思い出話だ。彼がニコライから直接聞いたところでは、1793年、ベルリン派遣のまえ、女帝はこの新任大使とさまざまなことがらについて話し合ったが、そのなかに、例のアレクサンドル・ヴォロンツォーフのことがあった。その部分をすべて引いてみよう。

ニコライ「ヴォロンツォーフ伯は、国をになう政治家としての叡智をそなえておりません」

エカテリーナ「なぜ、そう思うのですか？」

ニコライ「たしかに伯は、すばらしい教養と該博な知識を有しております。多くの書を読み、見聞を広めてられました。しかしロシア人にはそれだけでは足りません。伯は祖国のことを知らず、自分の部下たちの性質をよく知りません。部下とはさまざまな具体的関係をもたねばなりませんから、伯は過ちを犯すことになりましょう」

エカテリーナ「そなたの申すことはまったく正しい」⁹⁶

В 1793 г. Екатерина, отправляя кн. Николая Сергеевича Волконского к прусскому двору с препоручениями, много разговаривала с ним о посторонних предметах и коснулась графа Александра Романовича Воронцова). „Он не имеет настоящего ума государственного, сказал Волконский.

— „Почему вы так заключаете?“ возразила императрица.

— „При отличном воспитании, обширных сведениях, он много читал, слышал и видел, но для русского этого недостаточно; потому что он не знает ни отечества, ни свойств своих подчиненных, с которыми имеет частые сношения, то должен ошибаться“, отвечал князь.

— Очень справедливо, довершила императрица.

(От помянутого кн. Волконского, бывшего в числе избранных в обществе императрицы).

⁹⁵ П.Ф.Карабанов (1767-1851)

カラバノフは、ポチョムキンの親戚にあたり、妻は名門ガガーリン家の出身である。そのため、多くの貴顕、歴史的人物を身近に知っており、彼らについての逸話を多数収集した。プレオブラジェンスキー連隊に数年勤務したのち退役している。彼の集めた逸話は、死後にまとめられ、出版された。古文書、版画、コインなどの収集家としても知られる。

⁹⁶ Исторические рассказы и анекдоты, записанные со слов именитых людей П. Ф. Карабановым // Русская старина, 1872. Т. 5. № 1. С. 146-147.

グーセフ I、627—628 頁。

カラバノフが書き記しているのは、こういう断片的なやりとりだけで、前後の脈絡が分からないのが残念だが、それでも、いろいろ推測できることがある。

1793年といえば、前にみたように、国の内外は大揺れだった。フランスでは国王夫妻が処刑され、ロシアでは、女帝とパーヴェルの関係がいよいよ緊迫する。前年の92年には、ノヴィコフの判決が出て、ニコライの妻の従兄弟、トルベツコーイ兄弟、ロプヒーンなどローゼンクロイツェルの指導者も、首都を監視つきで追放されるなど、処罰されたばかりだ。90年にシベリア流刑を宣告されたラジーシチェフは、まだ流刑地に移動中で（なにしろ長旅だ）、元上司で同志のアレクサンドル・ヴォロンツォーフが、なにくれとなく世話を焼いていた。ヴォロンツォーフが『ペテルブルグからモスクワへの旅』の共作を疑われていたことも、ニコライは知っていたはずだ。

だから、女帝からヴォロンツォーフのことを聞かれてピンとこなかったわけがない。これは尋問だと。お前も彼の仲間ではないかと、質しているのだと。ニコライの返事をあからさまな表現に翻訳するところなるだろう。

ヴォロンツォーフ伯は、政治家として失格だ。伯はたしかに、啓蒙思想、フリーメイソンなど、外国の思想に通暁しているばかりか、広範な国際的人脈をもっている。そして、その思想をロシアに適応しようとしている。だが、それは誤りだ。ロシアはフランスではない。わたしは、彼とちがって、ロシアの現実を承知している。わたしは、彼のような危険人物ではない！

ニコライは女帝の前で、ヴォロンツォーフをこう批判して、自分を守ろうとしたのだろう。ほかにもいろいろしゃべり、「情報提供」をしたかもしれない。わざわざこういう話を、名門出身で顔の広いカラバノフにしているのもおもしろい。それによってアリバイを作り、反ヴォロンツォーフの立場を鮮明にしたのだと思われる。

ニコライの「証言」がヴォロンツォーフにどのくらい実害があったかは分からないが、いざれこの会見のもようは、彼の耳にも入ったろう。快く思ったはずがない。

ほどなく93年末に、ヴォロンツォーフは、「引退」を余儀なくされてしまう。形式は、みずからの意志にもとづく辞職、引退だが、実質は公職追放である。彼の辞表に対する女帝の受理の言葉が残っているが、それはつぎのような異常なものだ。

なるほど、彼に才能があることはたしかです…。しかし、彼の才能は私に仕えるうえで最も重要なものではないし、彼は私の僕ではない、ということは、私はつねに知っていましたけれども、ましてや今となつては、とくと思い知りました…。心に強いることはできません。忠勤を励むように強いる権利は私にはありません。それがいかなる臣下

であれ、その者が忠勤を励んでいると私に思わせることもできません。永遠に袂を分かち、きずなを解きましょう。どうとも勝手にするがいい！⁹⁷

Не спорю, что он ... таланты имеет. Всегда знала, а теперь наипаче ведаю, что его таланты не суть для службы моей и что он мне не слуга. Сердце принудить нельзя; права не имею принудить быть усердным ко мне. Заставить же и меня нельзя почитать усердным ко мне кого ни на есть. Разведены и развязаны на век будем. Черт его побери!

怒りと嫌悪があらわと言うもおろか。ニコライもまた翌1994年に、ヴォロンツォーフ同様の厳しい処分を受けて終わった。女帝とパーヴェルとの対立、メーソンとしての活動、あるいはその他なにかで、黒と判定されたわけだ。これが、ニコライにとっての94年の真相である。ところで、ニコライの「長期休暇」は、2カ年ではなく、無期限だったかもしれない。2年後、1796年11月6(17)日には、エカテリーナが死んでいるからだ。グーセフは、2年という期間の典拠を示していない。

(8) パーヴェル即位から祖国戦争まで。政争の海に沈んだニコライ

さて、ニコライは、パーヴェルの時代にいったん返り咲き、重用されるが⁹⁸、その後、突如99年11月に、46歳の若さで完全に退役してしまったことはすでにみた。ツァーリとのあいだで二、三の不快事はあったが、ささいなもので、キャリアには影響していないから、実にふしぎなのだが、ひとつの推測が可能だ。

パーヴェルは、イギリスと断交し、ナポレオンに接近しようとしたが、もともとロシアは、穀物、木材などの一次産品をイギリスに輸出するのが通商の根幹だ。ロシア貴族も英国も困り果て、ついにツァーリの強制排除に動いた。99年11月のニコライ退役から1801年3月のパーヴェル暗殺までは、1年あまりを残すのみ。ニキータ・ペトローヴィチ・パーニン(1770-1837)らが、まさに99年から暗殺計画を練っていた。イギリスも艦隊をバルト海に派遣し、イギリス大使チャールズ・ウイトワースみずからも陰謀にくわわる⁹⁹。多くの証言、回想が

⁹⁷ Алексеев В.Н. «Графы Воронцовы и Воронцовы-Дашковы в истории России». М.: Центрполиграф, 2002. С.90-91.

Записки графа Александра Романовича Воронцова // Русский архив. 1883. Кн. 1. Вып. 2. С. 224-225.

⁹⁸ パーヴェル時代の返り咲きも、ニコライがメーソンだったことの傍証になる。パーヴェルは、ノヴィコフ、ラジーシチェフら、メーソンを釈放する一方、スヴォーロフを筆頭として軍の大粛清を断行しているからである。ニコライが、そういう嵐を生き残ったのは、彼の思想と行動が、大ざっぱに言って、女帝ではなく、パーヴェル寄りとみられた証左だと考える。

⁹⁹ ちなみにウイトワース大使は、女帝の最後の愛人、プラトーン・ズーボフの実の姉、オリガ(Ольга Александровна Жеребцова)の愛人であり、彼女も、プラトーン、ニコライの兄弟も、陰謀に参加している。オリガの近親者、ピョートル・ヴァシーリエヴィチ・ロプヒーン公爵によれば、英大使は、オリガを通じて資金援助するとともに、ズーボフ兄弟らメンバーと接触したという。パーヴェル暗殺では、参加者たちの証言によると、兄弟は主要な実行犯となり、ニコライは直接パーヴェルに手を下した。彼が真っ先に、重い黄金の煙草入れで、パーヴェルのこめかみを打ち、彼が倒れると、複数の人間で絞殺したという。

次の事典の Ольга Александровна Жеребцова の項目をみよ。

示すように、「このままでは済むまい」という雰囲気濃厚に漂っていたころだ。国全体が「漠然たる期待、恐怖、あるいは信念」によって反逆への道を歩みつつあった（アダム・チャルトリススキの回想）¹⁰⁰。

18世紀を通じてクーデターなしに代替わりしたほうがめずらしいから、無警戒な人間がいたら、そのほうが変だ。あるていどのことは、ニコライも先を読んでいたろうし、情報をキャッチしていたかもしれない。

問題は、クーデターが成功しても失敗しても、宮廷と軍の大粛清が避けられないことだ。なにしろ、流血をともしなわなかったパーヴェル即位でも、あれだけの大量処分だ。こういう場合、まず身を引いて成り行きをみたとしても不思議はない。

ところが、ぶじにパーヴェル暗殺をやりすぎし、アレクサンドルが即位しても、ニコライは復職しなかった。おそらく、したくてもできなかったのである。

なぜなら、自分が政治家失格よばわりした、あのアレクサンドル・ヴォロンツォーフがアレクサンドル一世のもとで華々しく復活したからだ。ヴォロンツォーフは、1802年に最高文官（государственный канцлер）¹⁰¹に就任して外交を担うが、それだけではない。彼は、「若き友人たち」の構成する秘密委員会¹⁰²の「アタマン」（詩人ガヴリーラ・デルジャーヴィン）でもあった。政権の文字どおりの支柱になってしまったのだ。

Суарева О.В. Кто был кто в России от Петра I до Павла I, Москва, 2005.

¹⁰⁰ Мемуары кн. А. Чарторыйского. М., 1912. Т.1.

アダム・チャルトリススキはこの回想で、パーヴェル即位後の状況、人々の疑心暗鬼、恐怖、そして暗殺の詳細について語っている。ただし、惨劇の細部は、証言によって異なる。とくに、本稿でもあとで触れるが、軍人レオンチー・ベニグセン（当時中将）の果たした役割である。

この軍人は、チャルトリススキによれば、いったん怯んで企てを放棄しようとしたズーボフ兄弟ら将校たちを押しとどめ、もう後戻りはできぬと叱咤し、「事の命運を決した」。が、そのベニグセン自身の回想によれば、彼の役割は、かなり二義的なものにすぎない（これについても後述）。チャルトリススキは、暗殺の経緯を、ほかならぬベニグセンらの口から聞いた、というのが…。

¹⁰¹ 「最高文官 государственный канцлер」とその訳語について

ロシアの最高文官（一等文官）は、ピョートル一世が1709年に正式に導入し、1722年制定の「官吏等級表」で一等官に位置づけられた。外務大臣に相当する、外交のトップの役職である。

しかし、カンツレルは常に置かれたわけではなく、非常時に際して、江戸幕府の大老職のように導入されたから、文字どおり最高文官だったのだが、18世紀後半には、職務上カンツレルにならない文官に——つまり、外交官以外に——一等文官を授ける必要が生じ、「действительный тайный советник I класса」が設けられた（ちなみに、1834年、ヴィクトル・コチュベイーが初めて内相のカンツレルとなった）。

カンツレルには「尚書」という訳語が用いられることがあるが（たとえば、川端香男里訳のR. ヒングリー『19世紀ロシアの作家と社会』、中央公論社、236頁）、あまりなじみがない。宰相と訳されることもあるが、首相を連想させてしまう。といて、そのまま「一等文官」、「最高文官」とするのも芸がない。もっとも、カンツレルが外交のトップに与えられていたことを考えれば、ふつうは「外相」、「外務大臣」と訳してもいいかもしれない。

¹⁰² メンバー4人のうち、チャルトリススキ、コチュベイー、ノヴォシリツェフの3人はメーソンだ（笠間啓治前掲書149、163頁）。パーヴェル・ストローガノフは、革命当時フランスにあってジャコバン派と付き合っていた。

ここで、くだんのアレクサンドル・ロマーノヴィチ・ヴォロンツォーフ（Александр Романович Воронцов, 1741—1805）についてまとめておこう。

ヴォロンツォーフ家は名門中の名門で、多くの人材を生んだが、なかでも彼は、相反する顔をもつ、なかなかの怪物である。在仏当時の1758年からヴォルテールと付き合いがあり、その後も文通をつづけていた。自身、文筆家として知られ、ヴォルテールの翻訳¹⁰³、ロシア論、アレクサンドル治世初期の改革の試みを方向づけた建白書などがある¹⁰⁴。

彼は、元老院（すなわち貴族）の権限を強化して法文化することで、帝権をせばめ、その恣意をふせごうとした。おおざっぱに言えば、かつてニキータ・イヴァーノヴィチ・パーニンが目指したのと同じ方向だ。

本多作左右衛門ふうのご意見番的なところがあり、エカテリーナ二世治世下の無駄づかい、奢侈をきびしく批判して、ボルドー・ワインの輸入を禁止させたりした。フリーメーソンとしての活動とラジーシチェフとの関係については、前にふれたとおりだ。

ところが、こういうリベラルな顔の半面で、じつに生臭い政治家でもあった。ラジーシチェフ事件では、自分の関与が疑われて立場が危うくなると、仮病をつかって様子見をし、ラジーシチェフが減刑されて流刑になるや、せっせとこの部下の世話を焼きはじめる。危険が薄まるタイミングを計っていたわけだが、これには彼の巨額の横領事件もからんでいた。

ヴォロンツォーフが長年管轄した税関は、今も昔もとくべつに実入りのいいポストで、ラジーシチェフ事件では、ヴォロンツォーフの横領も問題になった。150万ルーブルもの大金が、書類に記載されないまま彼のふところに流れたらしい。しかし、ラジーシチェフは、この件について黙りとおした。彼は、ヴォロンツォーフの最も信頼する部下だったから、多くのことを知っていたはずだが。ヴォロンツォーフの援助は、これに対する返礼の意味合いもあったと考えられる。彼はついに150万ルーブルを返さずじまいだった¹⁰⁵。

ついでに言えば、ラジーシチェフも、金には不自由しなかったようだ。『ペテルブルグからモスクワへの旅』のなかに、100ルーブルないばかりに結婚できない百姓娘がでてくるが、主人公は同情して、即座に金をやろうとする。ラジーシチェフは富裕な地主の出ではあるが、それにしても気前がよすぎるようだ。

引退後のヴォロンツォーフは、剣呑なパーヴェル時代を悠然とやりすごし、パーヴェル暗殺後アレクサンドルが帝位につくや一気に、政権の黒幕として返り咲く。しかも、ただ受身

¹⁰³ ヴォルテールのいくつかの著作をロシアで初めて訳し、それらは1756年に出版されている。留学中の1758年に、プロイセンのマンハイムで、ヴォルテールの知遇をえた。また同じころダランベールとも知り合っている。

Алексеев В.Н. Там же. С.81-82.

¹⁰⁴ Докладная записка «Примечания на некоторые статьи, касающиеся до России» (1801), записка «Грамота Российскому народу» (1801), «Примечания о правах и преимуществах Сената», «Записка о России в начале нынешнего века» (1802).

Алексеев В.Н. Там же. С.92-98.

¹⁰⁵ Елисеева О.И. Там же.

で棚ぼたを待っていたわけではなく、暗殺計画を彼があらかじめ知り、パーヴェル後をにらんで着々と戦略を練っていたのはまちがいない。

というのは、弟セミョーン（Семен Романович Воронцов, 1744-1832）は、すでに述べたように、長年イギリス大使をつとめた人物で、パーヴェル時代もロンドンにいたのだが、彼が陰謀に関与していたからである。歴史家ナタン・エイデルマンによると、関与の根拠は――

第一に、陰謀が練られる 1799 年末以前にもう、セミョーンが、コチュベレイとウイットワース英国大使という、陰謀の中心人物ときわめて親しい関係にあったことが、セミョーンの書簡からたしかめられること。

第二に、1801 年 2 月 5 日付けのノヴォシリツェフあて書簡で（彼もまた陰謀家の一人だ）、あからさまにパーヴェル排除の必要性を示していることだ。当局に手紙を開封されるおそれがあるので、アレゴリー風の表現がなされているが。

手紙の内容を要約すると、「われわれ国民が乗っている船は、船長が気が狂って船員をぶん殴っているのです、このままだと嵐を乗り切れず、沈んでしまう。船員が船を救わなくてはならない。船員は 30 人で船長はたった 1 人なのに、彼に殺されるのを恐れるなんてこっけいだ」（手紙の内容は、時間差があるので、数週間前のロシアの状況にもとづいていると考えられる）。エイデルマンは、「30 人对 1 人」というのは、まもなく起こる、パーヴェルの寝室での暗殺劇のシナリオを反映している可能性があるとも指摘している¹⁰⁶。暗殺決行は 1801 年 3 月のことである。¹⁰⁷

セミョーンとアレクサンドルはとても仲のよい兄弟だった。一身にかかわるこれほどの大事を教えなかったはずはあるまい？ だとすれば、兄はもちろん、パーヴェル後の構想を描き、そのために動いていただろう。

アレクサンドル・ヴォロンツォーフにかんする同時代人の人物評をみると、だれもが才能を認めながら、こわもてで煙たがられる、といったイメージが浮かんでくる。「才能ゆたかで進取の気にあふれ、頑固で厳格。<...> ポチョムキンは彼を憎悪し、ほかの大臣たちは怖がっていた。女帝は、彼があまり好きでなかったが、尊敬しており、貿易はほぼ無条件で彼の裁量にまかせていた」¹⁰⁸

これまた、だれもが認めるところだが、アレクサンドル・ヴォロンツォーフは、勤務に異常なまでに精励し、たいへんな読書家、勉強家であった¹⁰⁹。痔になったのは、デスクワークが過ぎたためである。結局、これが命とりになってしまった。人を圧伏するところがあり、彼が引退したときには、数少ない親友のひとりであるアレクサンドル・ベズボロドコでさえ、

¹⁰⁶ Эйдельман Н. Я. Там же. Глава VIII - IX.

¹⁰⁷ 筆者はこれについて、「ロシアNOW」の「今日は何の日」の「3月11日：パーヴェル1世暗殺」に書いたことがある。

http://jp.rbth.com/arts/2013/03/11/1_41755.html（2015年8月8日最終閲覧）

¹⁰⁸ Сегюр Л.-Ф. Пять лет в России при Екатерине Великой. СПб., 1865. С. 111-112.

¹⁰⁹ Алексеев В.Н. Там же. С.99.

「やれやれ、やっと先生がいなくなった！」と小躍りして喜んだと、アダム・チャルトルイスが回想している¹¹⁰。

1802年秋、ヴォロンツォーフは、カンツレル（最高文官）の外相となった。アレクサンドル一世が省（ministerium）を創設したのにもない、ロシア帝国初の外務大臣に任命されたのである。ところが、拜命後まもなく彼は、持病の痔疾が悪化し、早くも1804年1月に、事実上引退せざるをえなくなる。ツァーリから「無期限の休暇」を与えられ、大臣のポストを名目上保ったまま、アダム・チャルトルイスに外務省を委ねることを余儀なくされたのである。1805年12月3日に死去。生涯独身で子孫は残さなかった¹¹¹。



アレクサンドル・ロマーノヴィチ・ヴォロンツォーフ
(1741–1805)¹¹²

彼の近親者のなかにも、史上有名な人物が少なくない。彼の父ロマン・イラリオノヴィッチ（1717–1783）は、フリーメイソンの中心人物の一人である¹¹³。ロマンの兄（つまりアレクサンドルの叔父）、ミハイル・イラリオノヴィチ（1714–1767）は、1858年から1862年までカンツレル（最高文官）を務めた。

アレクサンドル・ヴォロンツォーフの妹エカテリーナ・ロマーノヴナ・ダーシコヴァ（1743–1810）は、エカテリーナ二世即位に重要な役割を演じ、のちに科学アカデミー院長、

¹¹⁰ А. Чарторыйский. Там же. Т.1. С. 264.

¹¹¹ Алексеев В.Н. Там же. С.97-98.

¹¹² 無名画家による1780年代の肖像画（国立ウラジーミル・スーズダリ博物館所蔵）

http://www.vladmuseum.ru/rus/unique_exhibits/index.php?sid=1005（2015年9月5日最終閲覧）

¹¹³ ロマン・ヴォロンツォーフは、イヴァン・エラーギンのロッジのメンバーである。ほかにも、「Урания», «Скромность»などいくつかのロッジに属し、中心的役割を果たしていた（Алексеев В.Н. Там же. С.50-51）。ロッジ・ウラーニアに息子アレクサンドル、ノヴィコフ、ラジーシチェフが入っていたことは、本文中で述べたとおりだ。

ロシア・アカデミー総裁となった。姉エリザヴェータ（1739-1792）は、エカテリーナの夫であるピョートル三世の愛人だ。¹¹⁴

なお、アレクサンドル・ヴォロンツォーフは、『戦争と平和』第一巻に実名で登場し、ピエールの外務省就職の世話をしてくれることになっている。

こういう相手と一族にいらまれたのでは浮かばれない。トルストイの祖父ニコライ・ヴォルコンスキーとしては、批判した相手がじつに悪かったとしか言いようがない。アレクサンドル・ヴォロンツォーフが新政権の中枢に座ってしまったせいで、ニコライには出世の目はもうなくなったということだ。もし、ニコライが、メーソン内部のことを女帝に明かしたとか、『ペテルブルグからモスクワへの旅』のヴォロンツォーフ共作や横領の件でなにか情報を話したとかいうことがあったとすれば（仮定の話だが）、なおさらのこと、ニコライは村八分になってしまう。こうしてニコライは、孫トルストイの言葉を借りれば、「忘れ去られるという最悪の結果」に陥ったのである。

先ほど述べたとおり、10年もたった1810年にニコライはようやく御輿を上げ、娘 MARIA とペテルブルク旅行をする。6月18日にモスクワを立ち、6月25日、ペテルブルク着。一ヶ月あまり滞在し、8月2日に同市を出立している。

1810年には、ヴォロンツォーフはすでになく、ミハイル・スペランスキー¹¹⁵の改革の最盛期で、皇帝の諮問機関「国家評議会」が開設され、たいへんな騒ぎとなっていた。ニコライはもう57歳になっていたから、自分の復職などよりもむしろ娘の社交界デビューと良縁を求めたのだろうが、空振りに終わった。

前に触れたように、娘 MARIA は、ペテルブルク旅行のかなりくわしい日記を残しており、そのおかげで、首都までの旅程がどうだったか（1日平均およそ100露里移動したというから猛スピードだ）、どんな名所旧跡を見学し、だれと会ったか、といったことは分かる。そういう記述をいくつか抜き出してみると――

「ペテルブルクに足を踏み入れるや、通りが均整に配置されているのが目に飛び込んできた」とか（6月25日）、「カザン寺院の壮麗さは、自分のあらゆる想像を超えた」とか（6月29日）、「冬宮は、その巨大さと美しい高貴な外観で自分を驚嘆させた」とか（6月29日）、エルミタージュの「不朽のラファエルは、生き生きした崇高な表現とすばらしい色彩でかわだっている」とか（7月9日）、名高いピョートル像の銘「ピョートル一世に エカテリーナ

¹¹⁴ ちなみに、クーデター後にピョートル三世がエカテリーナ二世の意志で殺害されたのは確実である。

¹¹⁵ スペランスキーも、アレクサンドル・ヴォロンツォーフの人脈に属していた。彼は、ウラジーミル県、チェルクチノ村（Черкутино）の司祭の子に生まれたが、抜群の才能を見込まれて、アレクサンドル・クラークの弟、アレクセイの秘書に採用される。1801年夏からは、「秘密委員会」のメンバー、ヴィクトル・コチュベイに仕える（同委員会は当時、参議会の省への改組にとりくんでいた）。すでに述べたとおり、アレクサンドル・クラークもコチュベイも、ヴォロンツォーフととても親しく、同委員会はヴォロンツォーフの強い影響下にあった。

二世」が、女帝の強烈な自尊心を感じさせる、自分を大帝と同列に置くものだ、しかし、彼女はじっさい大帝につぐ偉大な君主なのだから、まあ許されるだろうとか（6月30日）、初めて目にした蒸気機関が、かまの炎で多くのスプリングを動かし、ひどい騒音をたてることから、鍛冶神ウルカヌスの鍛冶場を想わせたとか（7月18日）¹¹⁶——そういったたぐいの印象記が半分を占めている。

残り半分は、マリアがだれと会ってなにをしたかが、かんたんに記されているだけだ。会見のくわしいもようはほとんど書いてないし、社交界デビュー、出会った男性、花婿候補などの印象が一言も出てこないのはいささか奇異である。さだめし胸をときめかしたはずだし、だいたいそのためにわざわざペテルブルクに出て来たのではなかったか？

もっとも、日記はニコライが目を通し、まちがいを直したりしているのだから、そういうことは書きにくかったのかもしれないが、娘の日記に細かく目を配る父親というのも、これもまた問題だ¹¹⁷。

それにこの日記、概して「よそ行き」でありすぎる。ニコライの重要人物（大蔵大臣グーリエフ¹¹⁸、ピョートル・ヴォルコンスキーなど）との会見のようすが、会ったという事実しか分からないのは、まあ、しかたあるまい（どうせ娘にはそんなことはしゃべらなかつたらうから）。しかし、いわゆる生臭い話、さしさわりのありそうな批判、悪口、秘密、告白、プライベートなことがらなどはまず皆無。どこに出しても問題がなさそうな優等生的作文で、まるで、だれかに読まれるのを前提に書いたような印象を受ける。1810年6月18日のモスクワ出発から、8月3日まで一日も欠かさずきちようめに付けているのに、なぜか7月1-8日だけ脱落しているのも妙である。おそらく、この期間に社交界デビューがあったはずだが……。

¹¹⁶ スコットランド生まれの技術者、**Чарльз Берд (Charles Baird, 1766–1843)** が、1786年に創設した蒸気機関の工場を訪れたのである。この工場では、1815年にロシア最初の汽船を建造している。

¹¹⁷ マリアの旅行日記をオリジナルから校訂したタチアーナ・ニキーフォロワ (Т.Г.Никифорова) は、こう述べている。この旅行日記は、父ニコライの手で文体上の修正が数箇所なされているので、父はこの日記を「点検していたと推測される」*«…позволяют предположить, что он осуществлял контроль над писанием дочери»*。

・ **Азарова Н, Никифорова Т. Из биографии матери Л. Н. Толстого : "Всё, что я знаю о ней, всё прекрасно" // Наше Наследие (Иллюстрированный культурно-исторический журнал), № 87, 2008.**

・ **Княжна М.Н.Волконская «Дневная записка для собственной памяти».**

¹¹⁸ マリアの日記によると、ニコライは、ドミトリー・グーリエフ (Дмитрий Александрович Гурьев, 1758–1825) に何回か会っている。グーリエフは政治家で、1810–1823年に大蔵大臣 (министр финансов) を務めている。ペテルブルクの貧しい貴族の家の出で、1872年から一兵卒として軍務につくが、ポチョムキンに気に入られ、さらにプラスコーヴィヤ・サルティコワ伯爵夫人 (графиня Прасковья Николаевна Салтыкова <1830年死亡>) と結婚したことで、上流階級の一員となり、皇室に近づく足がかりを得る。アレクサンドル一世の即位前から知遇をえており、「若き友人たち」とも親しかった。その後、「若き友人たち」がつぎつぎに政権中枢から去っていくなかで、スペランスキーと良好な関係を築き、1810年には大蔵大臣となる。アレクサンドル一世の治世は激動の時代で、財政的にも困難をきわめたが、そのほぼ全期間にわたって経済政策を指導した。

徹底的に「検閲」しながら、こういう「日記」を娘に書かせるとは、ニコライはやはり一風変わった男だ。娘のほうも、父の薫陶の結果、自己検閲が身につけてしまっていたのかもしれない。要するに、この日記は、この父娘がいかに世間に対して身構えていたかを物語るように思う。19歳にしては豊かで幅広い知識がうかがえるとか、生き生きした描写だとか、論者たちはとかく褒めたがるが、眼目はべつのところにある。

こういうガードを固めた作文ではあるが、とはいえ、旅行の結果が不本意であったことはなんとなく察せられるのだ。マリアの日記は、覚書風にできごとをならべ、「楽しくすごしたが、これといったことは起こらなかった (Не случилось ничего примечательного)」という言葉でしばしば終わる。まあまあ楽しかったが、語るに足ることはなし。

7月19日にピョートル・ヴォルコンスキーを訪ねたときも、「訪問の意をあらかじめ伝えてあったのに、私たちの来訪は彼らをいくぶん当惑させた」*«Они сказали нам, что их предупредили о нашем приезде, однако ж мы привели их в некоторое смятение»*とある。ピョートルは、さきに述べたように、ヴォルコンスキー一族の出世頭で、アレクサンドル一世の戦略問題のブレーンであった。訪ねた理由は、「子供の顔を見ること」だとマリアは書いているが、もちろん、それだけではなかつただろう。彼女のしかるべき結婚相手の斡旋と、ニコライの復職はむりでも、各方面にコネをつけることを頼んだのだろう。しかし、頼まれた相手はどうも困ったらしい。

こうして、「これといったこと」はついに起こらないまま、1810年8月2日に父娘はペテルブルクを後にする。マリアにとっては最初で最後のペテルブルク旅行だった。

1810年は、『戦争と平和』では特別な年だ。アンドレイ公爵の勤務再開、スペランスキーとの出会い、ナターシャの社交界デビュー、そしてアンドレイと彼女の恋と婚約。ニコライ老公爵も、ナターシャに会いに、娘マリアと首都にやってくる。

だが、トルストイの祖父、ニコライの現実の1810年は、侘しいものだったのだ…。

やがてニコライは、1812年、全国民がひとつに結集した（と神話化されている）祖国戦争をむかえる。

(9) 祖国戦争では、的確に情報をキャッチしつつ、いちはやく娘とタンボフに避難

最初にちょっと述べたが、ニコライの甥でドミトリー・ミハイロヴィチ・ヴォルコンスキー（1769-1835）という陸軍中将（祖国戦争当時）がいた。フリートラントの会戦で腕を負傷していったん退役したのだが、ナポレオンのモスクワ入城直前に軍に復帰している。その彼の日記にニコライのことが出てくるのだ¹¹⁹。

¹¹⁹ 第2部「1812年と『戦争と平和』の「個別の証言と研究」における「陸軍中将ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記」の抄訳を参照されたい。

それによると、ドミトリーはモスクワの状況と戦況を手紙で叔父ニコライに書き送っていた¹²⁰。露軍のモスクワ撤退は混乱をきわめ、住民やコサックによる略奪、強姦が横行。軍の士気は低下し、兵士の多くが泥酔していた。ドミトリー自身からして、竜騎兵6名と下士官2名が護衛してくれたおかげでやっと脱出できたという。軍に合流するまえに、9月10日、ニコライの安否をたしかめるべくヤースナヤ・ポリャーナを訪れてみると、彼と娘はタンボフに立ったあとだった。

私は、ひとり軽四輪馬車に乗り、叔父（*ニコライ・ヴォルコンスキー——佐藤）のところへでかけた。道すがら、叔父がまだここに（*ヤースナヤ・ポリャーナ——佐藤）にとどまっているか知るために、居酒屋に立ち寄ってみると、酔っぱらった下士官がいた。彼は、どうせみんな敵から逃げているんだろうぜ、と言っていたが、その粗暴な態度で、いかに民衆が動揺しているか、如実に示してくれたのである。村に着くと私は、叔父が娘をつれて二日前に、タンボフにいるゴリーツィナ公爵夫人のもとに出発したことを知った（*ゴリーツィナ公爵夫人とは、あのポチョムキンの姪のヴァルヴァーラ・ヴァシーリエヴナ・エンゲリガルト〈1752—1815〉である——佐藤）。民衆のあいだに混乱と騒動がはじまったので、叔父はそうせざるをえなかったのだ。

（ドミトリー・ミハイロヴィチ・ヴォルコンスキー日記の1812年9月10日（ユリウス暦）の記述。ちなみに、モスクワ放棄がフィリでの軍議で正式に決まったのは9月1日である）¹²¹

『戦争と平和』では、マリア・ボルコンスカヤの逃避行はきわめてドラマティックだ。ナポレオン軍が迫るなか、父ニコライ老公爵が急死し、しかも、スモレンスク付近にある領地ボグチャーロヴォで、農民たちが反乱を起こしかかり、身動きがとれなくなる。まさに間一髪のところを、たまたま通りかかった未来の夫ニコライ・ロストフに救い出され、彼に途中まで送られて、叔母の住むボロネジにぶじに着く。

だが実際には、トルストイの母マリアをがっちりガードしていたのは、父ニコライだったのである。

ニコライが祖国戦争に際会してなにを感じたかは分からない。タンボフ行き以外なにも知られていないからだ。ドミトリーとの往復書簡などが出てくれば、話はべつだが。あんがいトルストイ博物館の古文書部に保管されているかもしれない。

デカブリスト、マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルは、祖国戦争の全戦役に参加し、小説には書けないような悲惨と国家のエゴを見聞きしつつも、「一切を犠牲にしようとする、ある大きな愛があった」と回想する。

¹²⁰ 1812 год... Военные дневники / Сост., вступ.ст. А.Г.Тартаковского. М.: Сов.Россия, 1990. С.147.

¹²¹ Там же. С.145—146, 410.

今現在から離れて、あの過ぎ去りし時に思いを馳せるとき、そこにはるかに多くの温かみを見出す。両者のちがいは、一言で言い表される。「愛していた」のだ。われわれは1812年の子だ。祖国のために、あらゆるものを犠牲に供することは——たとえ命そのものでも——心の欲求だった。われわれの感情はエゴイズムとは無縁だった。神がそれを証される...¹²²

こういう愛が、啓蒙主義者や共和主義者やフリーメーソンに啓示をあたえ、デカブリストを生むにいたったわけだが、ニコライ自身は、この戦争になにをみたのだろうか。

啓蒙主義も、メーソンも、その世界観も、世界変革の夢も、そしてこの戦争さえも、ついにほんとうには彼を動かさなかった。筆者には、そんな気がしてならない。なるほど、ヤースナヤ隠棲の初期は、在職当時を思い出して苦しんだかもしれないが、その後は、あまりにも生活の変化の痕がみられないからだ。ニコライには、結局のところ、農民経営、ヤースナヤ・ポリャーナの屋敷・庭園の建設と娘の教育以外なにもなかったかのように思える。

そのヤースナヤでの娘との水入らずの生活は、どのようなものだったのだろうか？

(10) ニコライの地主としての生活。ヤースナヤ経営は趣味？

祖父はとてもきびしい地主だったが、残酷なことをしたり罰したりしたという話は一度も耳にしたことがない。それは当時ごくありふれたことがらだったのに。私の考えでは、たぶんそういうこともあったのだろうが、私がよく祖父のことを尋ねた召使と農民たちは、あんまり手放して祖父の偉さと賢さを敬っていたので、父に対する非難は聞いたことがあったけれども、祖父にかんしては、その知恵と経営手腕と、農民たち、とりわけ大勢の召使への配慮をほめたたえる声ばかりだった。祖父は、召使たちのために美しい建物を建て、いつも食事が十分足りているばかりでなく、きちんとした身なりをして気持ちよくすごせるように心を配っていた。祭日には、彼らのために娯楽を設け、ブランコをしつらえ、輪舞をさせた。

祖父がそれにもまして心がけたのは、当時のあらゆる賢い地主とおなじく、農民の暮らし向きをよくすることであった。そして実際、農民は豊かな暮らしをしていた。まし

¹²² Воспоминания и письма М.И.Муравьева-Апостола. В кн. Мемуары декабристов. Южное общество. Под ред. И.В.Пороха и В.А.Федорова. М.: Изд-во Моск.ун-та, 1982. С.177—178.

マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの回想は、1886年に発表された。正確な執筆時期は、本書には示されていない。この回想については、第2部「1812年と『戦争と平和』」の「個別の証言と研究」における「マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの回想」でくわしく述べる。

てや、祖父の高い地位が、郷、郡の警察、委員¹²³に畏敬の念をおぼえさせ、お上からの迫害をまぬがれさせたから、なおさらのことである。(34, 351)

トルストイは、地主としての祖父について、ほとんど手放しの賞賛ぶりだ。ニコライの経営は、『戦争と平和』のニコライ・ロストフやアンドレイ公爵のそのベースになったようである。だが、根本的なちがいがあある。ニコライ・ロストフは、とにかく農業経営が生きがいで、金に余裕ができれば、どんどん土地を買い足し、経営を拡大していったし、とにかく「百姓が好きでたまらなかった」ことになっている。一方、作家の祖父はといえば、なかなか一筋縄でいかない。

作家の父ニコライ・トルストイが MARIA・ヴォルコンスカヤと結婚したのは、衆目の一致するところ、彼女が財産家だったからだ。祖父ニコライは、モスクワに広大な屋敷をいくつも所有し、多額の現金も動かした。甥の結婚に際しては、ポンと5万ルーブルをプレゼントしているくらいだ(ちなみに、娘 MARIA も女友達が結婚するときに7万5千ルーブルを贈っている)。ヤースナヤ・ポリャーナのほかに、モスクワ近郊とオリョールにも領地があった(グーセフ I、35、628-630、638-640 頁)。

こういう財力があってのヤースナヤ経営だから、トルストイの賞賛は、そのままには受け取れない。だいたいヤースナヤは生産性が低い土地だったのにくわえ¹²⁴、19世紀前半は、地

¹²³ 原語は *заседатель*。県の貴族団が選挙で選ぶ後見人 (*заседатель в Дворянскую опеку*) のことだろう。未成年の孤児の領地や破産した領地などの管理が彼らに委ねられた。

¹²⁴ ヤースナヤ・ポリャーナの生産性については、ニコライ・ヴォルコンスキーの約1世紀後のくわしいデータが残っている。以下は、パーヴェル・バシンスキーの調査による (*Басинский П.В. Там же. С.408-411*)。

家計簿を見ると、経営規模の大きさに比して、収益の低さが目立つ。1913年の時点では、馬27頭、雌牛26頭、雄牛1頭、子牛24頭、豚11匹、羊9匹、鶏78羽という、それだけみるとなかなかのものだが、その収入たるや、1910年には4626ルーブル49コペイカ、支出は4523ルーブル11コペイカで、純益は103ルーブル38コペイカ(!)。

1911年は、これよりはマシだが、収入が6371ルーブル93コペイカ、支出は5633ルーブル46コペイカで、差し引き738ルーブル47コペイカ。

ちなみに、当時の物価は、筆者が「トルストイの農奴解放の試み」のところにくわしく分析したように、1913年当時の1ルーブルは、おそらく現在の10ドル=約千円を切っているだろう。要するに、利益はないに等しかったということだ。トルストイは、1862年に結婚してから80年代初めまでは、大いに経営改善に努めているし、その後はソフィア夫人が引き継ぎ、少なからぬ資金をつぎ込んで努力しているのだが。

では、当時のトルストイ家の主な収入源は？ 作家の印税である。これをみても、彼が著作権を放棄しようとしたことが、トルストイ家にとってはまさに死活問題だったのがわかる。大家族をかかえていたソフィア夫人が猛反対したのもむりはない。最後に、ヤースナヤ・ポリャーナにおける1910年の収支の細目を、額の多い順に示しておこう(単位はルーブル)。

支出

雇用者への給料 1690.76
日雇いの手間賃 576.02
建物の建築と修理 308.20
干草と藁を買う 411.36

主経営が時代遅れになって、収益が急速に悪化し、地主は借金漬けで、破産があいついだ時代だ。ヤースナヤを継いだ作家の父、ニコライ・トルストイはかなり経営に熱心だったが、家計は大赤字だったのである。祖父（ニコライ・ヴォルコンスキー）にしても、ヤースナヤしか領地がなければ、いくらがんばっても、鼓腹撃壤とはいかなかったはずだ。こうした事情については、作家とその父の経営のところで詳しくみることになるだろう。

ヤースナヤは、作家の祖父ニコライにとっては、まあ、趣味とってはなんだが、金持ちが余裕で、自分の好みに合わせて家庭菜園をつくるようなものだったと思われる。ほかに収入源もあったから、むりのない範囲で経営し、農奴の生活に配慮できたということだろう。しかし、農民との関係には、作家がおそらく知りながらもあえて触れない面があった。

(11) 農奴との関係。愛に傷ついた人

個々の農奴との関係については、召使プラスコーヴィヤ・イサーエヴナにかんする作家の思い出話から、あるていど推測できるので引用してみよう。プラスコーヴィヤは、『幼年時代』の婆や、ナターリヤ・サーヴィシナのモデルになった人だ。作家が伝記作者パーヴェル・ビリュコフに書き与えた『思い出』によると、「婆やについて書かれたことは、ぜんぶほんとうのことだ」という。

プラスコーヴィヤ・イサーエヴナを私はかなり正確に、『幼年時代』のなかで描いた（ナターリヤ・サーヴィシナという名前で）。私が彼女について書いたことは、すべて実際にあったことだ。プラスコーヴィヤ・イサーエヴナは皆に一目置かれる女で、家政婦（экономка）だった。ところで、彼女のこじんまりした部屋には、われわれ子供たちの長持があった。私は今も覚えているが、最も気持ちの良い印象のひとつは、授業の後で、あるいはその途中で、彼女の部屋に座り込み、彼女と話したり、話を聞いたりすることだった。たぶん彼女は、私たちがとりわけ幸福で、感動的なまでに開けっぴろげになっているこんなときに、私たちと会うのを好んでいた。「プラスコーヴィヤ・イサーエヴナ、お祖父さんはどうやって戦ったの？ 馬に乗って？」。ぺちゃくちゃしゃべりながら、ただなにか話したり、聞いたりするために、こう尋ねたものだった。

備品の購買と修理 228.75

雇用者の食費 114.45

以下、細かい出費が続く

収入

草場の賃貸 1200.04

土地の賃貸 342.50

余剰乳製品の販売 258.95

有角獣の販売 147.50

以下、細かい収入が続く

「いろいろでございましたよ、騎馬だったり、徒歩だったり。でも、お祖父さまは、陸軍大将でいらしたんですよ」。彼女はこう答え、長持を開けると、彼女が「オチャコフの香」と呼んでいる樹脂をとりだすのだった。彼女の言葉によると、この樹脂は祖父が、オチャコフ¹²⁵の近くから持って来たものなのであった。聖像の灯明で、紙に火をつけ、それで樹脂を焚くと、気持ちの良い香りの煙が立ち上るのである。

<...>

彼女の献身と誠実さのほかに、私がとくに彼女を愛していたのは、彼女と老婆のアナ・イワーノヴナとが、祖父と「オチャコフの香」の神秘的な側面を体現しているかのよう思われたからだった。(34, 372-373)

1788年のオチャコフ要塞包囲攻防戦のおみやげを、1830年代なかばの作家の幼年時代まで、半世紀もだいに宝物のようにとっていたのである。プラスコーヴィヤがアイコンのまえで「オチャコフの香」の樹脂を焚くようすが目に見えるようではないか。彼女がニコライに深く心服し、愛していたことは疑いようがない。

だが、『幼年時代』でプラスコーヴィヤについて書いたことはすべてほんとうだ」ということは、ニコライは彼女に対して、つぎのような残酷な仕打ちをしたことになる。

『幼年時代』13章「ナターリヤ・サーヴィシナ」

前世紀の中ごろ、粗末な服を着て裸足だが、陽気で太った頬の赤い小娘のナターシカが、ハバロフカ村の家々を駆け回っていた。その父であるクラリネット奏者サツヴァの忠勤と願いによって、私の祖父は、彼女を「上奉公」にとりたてた。つまり、祖母の女中にくわえたのだ。小間使いナターシカは、その務めにつくと、慎み深さと勤勉さで抜きん出ている。母が生まれ、子守が必要になると、その務めがナターシカにまかされた。この新たな役目でも、彼女は、その仕事ぶりと幼い女主人へ献身と愛情をつくしたので、褒められたり褒美をもらったりした。だが、仕事でしょっちゅう顔を合わせている、若くて威勢のいい給仕フォーカの髪粉と留め金つきの靴下が、彼女のぶっきらぼうではあるが愛情豊かな心を虜にしてしまった。彼女は思い切って自分で祖父のもとへ赴き、フォーカとの結婚の許しを願い出たほどだった。祖父は、彼女の願いを忘恩と受けとり、激怒して、可哀想なナターリアを、荒野の村の家畜小屋に追放してしまった。だが、6ヵ月後、だれもナターリアの代わりになる者がいなかったため、彼女は屋敷の以前の仕事にもどされた。粗末な衣をまとって追放先からもどると、彼女は祖父のところへ行き、その足元に身を投げ、元通り慈悲をかけ、ご寵愛をいただけるように、また、自分の頭

¹²⁵ オチャコフは、1788年の露土戦争でオチャコフ要塞包囲攻防戦が行われた、黒海沿岸の都市である。現在はウクライナに所属し、ドニエプル河口に近い。

にとり付きかかった馬鹿な考えをお忘れくださるよう、二度とそのようなことは繰り返しません、と懇願した。実際、彼女は約束を守った。

以来、ナターシカはナターリヤ・サーヴィシナとなり、頭巾を被るようになった。そして、彼女は、自分の愛情のありたけを自分のお嬢さまに注いだのである。

Глава XIII. НАТАЛЬЯ САВИШНА

В половине прошлого столетия по дворам села Хабаровки бегала в затрапезном платье босоногая, но веселая, толстая и краснощекая девка Наташка. По заслугам и просьбе отца ее, кларнетиста Саввы, дед мой взял ее в верх - находиться в числе женской прислуги бабушки Горничная Наташка отличалась в этой должности кротостью нрава и усердием. Когда родилась матушка и понадобилась няня, эту обязанность возложили на Наташку. И на этом новом поприще она заслужила похвалы и награды за свою деятельность, верность и привязанность к молодой госпоже. Но напудренная голова и чулки с пряжками молодого бойкого официанта Фоки, имевшего по службе частые сношения с Натальей, пленили ее грубое, но любящее сердце. Она даже сама решилась идти к дедушке просить позволения выйти за Фоку замуж. Дедушка принял ее желание за неблагодарность, прогневался и сослал бедную Наталью за наказание на скотный двор в степную деревню. Через шесть месяцев, однако, так как никто не мог заменить Наталью, она была возвращена в двор и в прежнюю должность. Возвратившись в затрапезку из изгнания, она явилась к дедушке, упала ему в ноги и просила возратить ей милость, ласку и забыть ту дурь, которая на нее нашла было и которая, она клялась, уже больше не возвратится. И действительно, она сдержала свое слово.

С тех пор Наташка сделалась Натальей Савишной и надела чепец: весь запас любви, который в ней хранился, она перенесла на барышню свою.

暴君化した地主貴族なら、よくあるたぐいの話かもしれない。しかし、ことニコライとなると、ちょっとふしぎな気がする。それに、召使どうしが結婚するのはめずらしくないのに、ニコライはまるで、ふたりが好き合ったこと自体に怒ったようだ。なにかの理由でよほど苛立っていたのだろうか。

ひとり娘マリアは、フランス革命の翌年、1790年の生まれだから、このエピソードは、90年代はじめのことである。この当時、ニコライの家庭でも、家庭の外でも、いやロシア国外でも、嵐が吹き荒れていたのはたしかだ。92年には、作家の「おばあさん」、ニコライの妻エカテリーナが死去する。93年にはベルリン大使になるも、94年に突然の長期休暇を言いわたされ、この風雲急を告げる時代に、無為の2年間を送ることになる。こういう状況では、鬱状態に陥ることもあったろうが、しかし、半年もこのようなかたちで罰しつづけるとは...

ここでひとつ、ニコライの恋愛、女性関係をみてみよう。どうもこの人は、夫婦関係をふくめて、女性関係の分からない人である。夫人にかんする資料は、ごく少なく、影が薄い。

この点、『戦争と平和』のボルコンスキー老公爵もおなじだ。妻のことを思い出したくないか、思い出さないように申し合わせているかのような感じさえ受ける。

ニコライの妻、エカテリーナ・ドミートリエヴナ（1749–1792、旧姓トルベツカーヤ）は、ニコライより4歳年上で、40歳をすぎて娘をひとり産み、2年後には亡くなった。分かっているのはそれだけだ。作家は、『戦争と平和』の初期の草稿である『三つの時代 Три поры』に、こう書いている。

老公爵の妻は、「早く亡くなった。彼は、彼女としかあわせではなかった。無意識のうちにはあったが、彼女が亡くなったことに不満ではなかった。なぜなら、彼は彼女にうんざりし、いちども愛したことはなかったからだ」（13, 79 およびグーセフ I, 37 頁）

「いちども愛したことがない」なら、なぜ結婚したのだろうか？... ここで思い出されるのが、ニコライがポチョムキンから、姪にして愛人のエンゲリガルトを押し付けられたという言い伝えだ。これは、筆者の勝手な想像だが、もしかすると、この話は、部分的に正しいのではないか。エカテリーナ・トルベツカーヤは、だれかから、エンゲリガルトのように押し付けられたか、あるいは逆に、ニコライのほうが名門トルベツコーイ公爵家の令嬢と欲得ずくの結婚をしたのではないか？ トルベツコーイといえば、『戦争と平和』のボリス・ドルベツコーイが、年上のジュリーの財産めあてに結婚するのを思い出す。

そこで、『三つの時代』を見直すと、こんな箇所がある。「公爵の財産は多くなかったので、勤務を退くと、大金をもっていた D 公爵令嬢と結婚し、伝来の領地に行き、塔だの城だの庭だの公園だの池だの噴水だのを持っていた封建時代の男爵さながらに、普請を始めた」（13, 78）。おそらく、事実もこのとおりであったであろう。

つまり、ニコライの結婚は、権力の犠牲になったか、あるいは、みずから金と力のために犠牲に供した、ということである。だから、「いちども愛したことがない」¹²⁶

では、妻を亡くし、その数年後に46歳の男盛りで隠棲してからはどうだったのだろうか。独り者で田舎住まいの地主貴族には、お定まりのコースがある。農奴を愛人にすることだ。あとでみるように、彼の娘婿のニコライ・トルストイも、作家自身も、作家の妹婿ヴァレリアンも、みなそのパターンに滑り落ちていった。気に入った女を内縁の妻にし、家計の切り盛りなどをさせるケースもよくあった。地主貴族のいわゆる「家政婦 экономка」の多くがそれである。

やはり家政婦であったプラスコーヴィヤは、そのたぐいの愛人だったのではないだろうか？ だから、ニコライは過剰に反応し、残酷な仕打ちをした。半年後、呼び戻された彼女が、ニコライの足元に身を投げ、「また可愛がってください」と懇願したのは、また元の鞘に戻してくれ、ということではあるまいか。彼女の半世紀にわたる、ニコライとその家族へ

¹²⁶ こう見てくると、『戦争と平和』のボリス・ドルベツコーイという人物がどんなところから生まれてきたかも分かる。この美貌の、どこか薄っぺらで、慎重で要領のいい出世主義者は、ニコライ老公爵、そしてトルストイの祖父ニコライの「影」あるいはパロディーなのだ。

の献身には、そういう裏面もあるのでは？ いずれにせよ、プラスコーヴィヤか、ほかのどれかは別として、その手の愛人はいたことだろう。『戦争と平和』のニコライ老公爵と居候のブリエンヌ嬢との奇妙な関係は、そのことを暗示しているようにも思える。

こうみてくると、筆者の推測が正しいとすれば、ニコライの女性関係は、権力でスポイルされたところがあったようだ。たしかに、ニコライは、自ら一切の公務から退き、国家権力と絶縁しようとしたけれども、自分の内なる権力的思考から逃れることはできなかったのである——権力に損なわれた女性関係と性もふくめて。『戦争と平和』のボルコンスキー父子の女性への深い侮蔑は、この「性的権力」への憎悪が投影されたものではあるまいか。そして、娘との近すぎる関係は、その反動ではないか。そんな気がする。

(12) 「箱庭」ヤースナヤに閉じこもる

現在のヤースナヤ・ポリャーナは、ほとんどすべてニコライの手になったものであり、建設は、彼が死ぬまで、祖国戦争をはさんで20年もつづいた。それにしてもなんという20年だったことだろう！

2棟のイタリア様式の離れ（現存）のまんなか大きな母屋が造られた。家は、彼の生前には完成せず、2階は木造だった。死後、娘婿ニコライ・トルストイ（作家の父）が、石造に改築したが、のちに作家が、ギャンブルでこしらえた借金を返すため売り払うという、情けない運命をたどった。

領地経営のほうはしかし、(10)で述べたように、生きがいというようなものではなく、まあ、趣味だろう。全般に、地主貴族の経営は空洞化し時代遅れになりつつあったから、『戦争と平和』のニコライ・ロストフのような経営はフィクションでしかなかった。いくら貴族が祖国戦争で民衆のもてる可能性に目覚めたとしても、それは地主の農村経営で実現されうるものではなかったのである。

ニコライは、ヤースナヤの敷地内にイギリス風公園とフランス風公園をつくり、召使からなるオーケストラを編成し、ハイドンなどを演奏させていたらしい（グーセフ I, 36 頁）。箱庭をつくって遊んでいるような感じだ。

この箱庭を訪れる人の目に最初にとびこむのは、あの門の塔だ。雨天でも、なかに寝とまりできるようになっている。ニコライの在世当時は、ここに門番が常駐し、通行人とごく稀な来客を監視していた。門は、箱庭を外界から遮断し、いわば真空パックする。門から大通り、通称「プレシペクト」が母屋にまっすぐのびている。母屋のなかから外に向って身構えている、いかめしいニコライのようすがなんとなく目に浮かぶ。虚構の王国に君臨する立憲君主といったところか。

だが、この箱庭づくりは、遊びというにはあまりにも切羽詰まったものだったろう。ここでの娘とふたりきりの生活を、全生涯のあいだ支えてくれねばならぬ。それだけの重量がかかっているからだ。『戦争と平和』の「禿山」のあの時間が止まったような空気は、ここから

来ているのだろう。アンドレイ公爵は、アウステルリッツ後に、いわば世間から自分を切り離し、ばかばかしい、無意味だと思いながら、せっせと普請と経営に精を出す。ニコライの心も、あのように暗かったのではないだろうか。

屋敷が面している街道は、当時キエフ街道と言った。19世紀前半まで数世紀にわたり、ロシアの北と南をむすぶ大動脈であり、モスクワ、ペテルブルクをはじめ北からウクライナ、カフカスなど南方へ向かうには、かならずこの道を通らねばならなかった（ゲーセフ I、54-55頁）。屋敷前の街道を歴史が通り過ぎていったわけだが、この門は、外界と時間の流れを断ち切るのである。

なぜ、ニコライは、箱庭に追い込められたのか。彼は、権力と性と運命の戯れに嘲弄された人である。そして、権力的思考は、彼自身の内部にも根を張っていた。それに対峙しうるだけの拠りどころが現実には見当たらなかったから、彼は生を適当に捨象する装置を考え出して、閉じこもったのだ。たんなるエゴイズムでも逃避でも独善でもない。あの梃子でも動かない感じは、そのまま絶望の深さを物語る。それは、のちにトルストイその人が戦わなければならなかった絶望と別ものであろうか？...

最晩年のニコライは、おそらく、『戦争と平和』のボルコンスキー老公爵そのままだったのではないかと思う。老公爵は、ひどい不眠症で、毎晩ベッドを移動し寝場所を変える。悶々としながら、若いころを思い出す。皺ひとつない若々しい將軍だった彼が、はじめてポチヨムキンの幔幕に入っていったときに感じた、「この寵臣への焼けるような羨望の念」、そして、女帝のなきがらの手に接吻する順番をズーボフと争ったときのこと。「ああ、あのころに帰りたい！」（『戦争と平和』3巻2編3章）。もうどうにも居場所がないのだ。これは、ニコライの心を透視したような感じをおぼえる。

そして、こういう発想は、孫のトルストイにもみられるようである。彼は、幼いときから、現実と生に内在する暴力を過剰に恐れていたような面がある（とくに『狂人の手記』をみられたい）。生身の現実と生がこわい。それで、まず生をさえぎる「防波堤」の内側に身を隠し、そこから物を考える。砦に閉じこもる結果、生活が一面的になるから、生のあらゆる領域にわたる総合的思想を求めたくなる。しかし、そういう偏頗な思想に飽き足らず、結局、家出願望をはぐくむ。こういう一種独特の、自己回転する発想法が、祖父から孫に、ヤースナヤとともに受け継がれたのではないか——。だが、先を急ぐまい。

補説：ロシア・ウサーヂバ文化における、ニコライ・ヴォルコンスキーのヤースナヤ・ポリャーナ

坂内徳明氏は近年、「ウサーヂバ（貴族屋敷）研究」を紹介、提唱する一連の論文を書かれているが、なかでも、「ロシア荘園文化の発見：ニコライ・ヴランゲリと彼の仕事」¹²⁷では、ロシア・ウサーヂバ文化という地平を深く掘り下げるとともに、そのパイオニアであるニコライ・ヴランゲリ¹²⁸の仕事をくわしく紹介されている。ここでは、その地平から、トルストイの祖父ニコライ・ヴォルコンスキーが創設し閉じこもったヤースナヤ・ポリャーナの意義を見直してみたい。

まず、坂内氏の所説を筆者（佐藤）が自分なりに咀嚼したところを要約すると次のようになる。

「ウサーヂバ *усадьба*」は、ロシアの地主貴族の邸宅と領地の総称で、きわめて独特の、生活と文化の複合体である。かつてピョートル一世の改革を担った新興貴族たちは、農奴制の拡大、強化につれ自身の所領も増えていくなかで、国家勤務から解放され、農奴に課された国税（人頭税）の番人たることが主な任務となった。その結果、地主貴族たちは、巨大な富と、自領でのほとんど無制限の権力、そして、いわば無期限の有給休暇をもらったようなものであったが、これは同時に、社会的には無用の存在に転落する契機をはらむものでもあった。

こうして「お役御免」となった貴族たちは、外界からあるていど独立した自分の城を築き、ほとんど絶対的な権力と恣意にまかせて農奴を使役し、独特の生活様式、生活空間、庭園、美術、工芸等々を創り出した。大通人のニコライ・シェレメチェフ伯爵（1751－1809）と、その農奴で後に妻となった、当代最高のソプラノ歌手プラスコーヴィア・ジェムチュゴワ（1768－1803）のような人々さえ現れた¹²⁹。ウサーヂバはたしかに閉鎖的な空間ではあったが、そこでは、地主貴族と農奴、

¹²⁷ 一橋大学大学教育研究開発センター、「人文・自然研究」8、2014年、223－293頁。

¹²⁸ ニコライ・ヴランゲリ（1880－1915）は、ウサーヂバ文化研究のパイオニアとなった芸術学者である。白軍の指導者の一人で「黒いバロン」の異名をとったピョートル・ヴランゲリは実兄だ。

ニコライ・ヴランゲリは1909年8月25日に、ヤースナヤ・ポリャーナにレフ・トルストイを訪ねている。ウサーヂバの意義をめぐり突っ込んだ会話が交わされた可能性があるが、残念ながら、資料がない。筆まめなトルストイもなぜか、日記にも手紙にも書いていないし、『マコヴィツキー・ノート』にも記されていない（このノートは、トルストイ家の住み込みの医師だったドゥシャン・マコヴィツキーが、晩年の作家の言動を克明に記したものだ）。

ちなみに、ヴランゲリとトルストイは、手紙をやりとりしたことがあり、旧知の間柄だった。ヴランゲリは、前年の1908年に、作家と親しいミハイル・ポートキンを殴打する事件を起こし、カザーチイ練兵場の拘置所に収監されて、獄中からトルストイに手紙を出したからだ。

この事件は、90巻全集の解説によると、次のようなものである。1908年11月にサンクトペテルブルクの「芸術奨励協会」を会場として開催された展覧会「昔の日々」展でのこと、貴賓が帰った後で、協会の副総裁だったポートキンが電気を消すように、展覧会の責任者のヴランゲリに命じた。すると彼は、これを拒否し、両者とも激昂して、激しい口論になった。そのあげく、ヴランゲリが平手打ちを食わしたという（79, 139-141; 78, 263-265）。

¹²⁹ プラスコーヴィア・ジェムチュゴワは1787年には、シェレメチェフ伯爵家のクスコヴォの宮殿の劇場で、エカテリーナ二世臨席のもとで、フランスで活躍した作曲家グレットリのオペラ「Les Mariages samnites」の主役エリアナを演じた。女帝はその出来栄に驚嘆し、ダイヤモンドの指環を贈ったという。

このプラスコーヴィアとニコライ・シェレメチェフ伯爵との悲しいロマンスは有名だ。

ニコライは、彼女を農奴身分から解放し、1801年に密かに結婚した。しかし彼女は、わずか2年後、長男ドミトリーの妊娠、出産で持病の結核が悪化し、産後3週間で亡くなった。

都市と農村、近代と前近代、西欧文化とルーシの民衆文化がぶつかり、貴族と農奴が双方の側から実験を行い得る場でもあった——。

しかし、筆者（佐藤）の印象では、ウサーヂバ文化の最大の特徴は、ある種の「幻影性」にあったようだ。それというのも、ウサーヂバはその本質からいって、地主貴族という滅び行く階層の一人ひとりが閉じこもった「貴族の巣」であり、無制限の恣意と権力とファンタジーにまかせて織った、十人十色の夢にほかならなかったからである。そうした夢の多くが、一代かぎりであり、結局なにももたらすことなく、夢見る人間を腐らせるだけなのは自明の理だ。

だがおもしろいのは、たぶんそうした危うさは承知のうえで、多くの貴族たちが夢と幻の世界に身を沈めたことである。トルストイの祖父、ニコライ・ヴォルコンスキーをみても、作家自身をみても、夢の牽引力は生半可なものではなかった。その牽引力の正体を見極めるのはかんたんなことではないし、第一、個人ごとに異なるだろう。

坂内氏もまた、ウサーヂバ文化研究のパイオニア、ニコライ・ヴランゲリの論文「地主のロシア」¹³⁰を紹介したうえで、こう言う。少し長くなるが、本質を突いた名文だと思うので、当該箇所をすべて引用する。

「農奴の時代が多くを与えた」とするヴランゲリは、ロシアのウサーヂバの時空間の中で古くから存在する（あるいは、存在したと思われる）文化の痕跡が根絶していく様を絶望感とともに記述した。しかし、その記述はペシミズムにとどまることがない。目前で倒壊していく家屋敷、あるいは廃墟の中に、ほんのかすかな残像や微音、香りを見つけ出し、「ロシアには未だ古き芸術がある」と確信するのである。領主屋敷の白壁と白い円柱、蠅の羽音、女主人の罵声、そして、キセル煙草の匂い、蠅の糞の臭い、果実の砂糖煮の香りと味——まったく動かぬとしか思えない日常の中で、モノによって喚起される感性の、ほんの瞬間的なきらめきにこそ意味がある。

ここには、貴族趣味への後ろ向きの憧れも、甘美なノスタルジーも、月並みな感傷も、まったく感じられない。崩壊からの残像と残滓、と同時に、ありうるモノの兆候と兆し——その両者が混淆する「幻影」（ボリス＝ムサトフの絵に見るような）の世界が広がる。

また、ここには、明確な理念や理想もなく、明示的な理論も方法もディシプリンもないし、ありえない。まぼろしの「危うさ」とその中で生を営む人々の意志（これこそまさに、ロシア語のヴォーリャである）に真正面から対峙することを、はたして研究と呼ぶことができるだろ

ニコライは妻の遺言で病院付きの救貧院を建て、数年を経ずに亡くなった。救貧院の美しい建物は現在、ロシア最大の救急病院「スクリフォソフスキー記念病院」となっている。

二人が密かに式を挙げた教会も、モスクワのポヴァルスカヤ通り 5 番地（ノーヴィ・アルバート通りの書店「ドーム・クニーギ」の隣）に現存し、恋人たちの名所になっている。

*ロシア NOW の紙版および電子版の拙稿「都心を見たら離宮群へ」（2012年 5月 18日）、および同電子版の「オスタンキノ宮殿が完成」（「今日は何の日」、2013年 7月 22日）を参照。

¹³⁰ Врангель Н. Н. Старые усадьбы. Помещичья Россия. Старые годы. 1910. Июль-сентябрь.

うか。

あるのは、目の前で一瞬一瞬、崩れ去っていく「確かなモノ」だけである。ウサーヂバの像は、このような磁場の下で立ち現れる。

「まぼろしの『危うさ』とその中で生を営む人々の意志」——才能に恵まれ意志力にも富んだニコライ・ヴォルコンスキーは、なぜそのようなものを選びとったのだろうか。なぜ孫のトルストイは、作家として大成した後々までも、あんなにヤースナヤ・ポリャーナに執着したのだろうか。ニコライの生涯を可能なかぎり跡づけてきて思うのは、たぶんそれは、自分自身をふくむ人間というものに対する深い絶望だったろうということである。

いくら財産があろうが、いくら自己実現しようが、社会がどう変化しようが、人間は決して幸福になることはできない。人間に内在する暴力と不幸と死と風化を免れることはできない。自分から逃げることはできない。それを確信したニコライは、動くのをやめたのである。これはそのままトルストイにも幾分か受け継がれた。そう思われる。

第3章 トルストイのほんとうの生い立ちは？

はじめに

前章でみたように、作家の祖父ニコライ・ヴォルコンスキーは、自分自身に、またおよそ人間というものに絶望し、ヤースナヤ・ポリャーナに砦をつくって閉じこもった。彼は、生の盲目的な暴力（トルストイの言葉を借りれば、「偶然と運命」）と権力から逃れようとしたのだが、しかし、堅固な砦を築けたのは、やはり自分のもてる権力のおかげであり、農奴の犠牲あつてのことである。しかも、その無風状態の人工空間にあつて、彼の内なる権力的思考はかえって肥大することになったはずだ。おそらく、晩年のニコライは、『戦争と平和』の老公爵のようにいよいよ粗暴になり、そのことで自分も苦しみながら、どうにもできないという状態だったのではあるまいか。そして、その「箱庭の王様」を宥めるものとしては、やはり農奴の献身（家政婦イサーエヴァなどの）しかないのだ。こんな砦は、結局人間を腐らせるだけだろう。

トルストイが生まれたとき、この砦は本質的にあまり変わっていなかったと推測される。祖父ニコライが1821年に死んでからまだ7年しか経っていない。しかも、後を継いだマリアは極端な父親っ子で、父親同様に外界に対して身構えているところがあった。

とはいえ、幼いトルストイからしてみれば、子供たちへの愛と育児に自分を捧げつくした母親と、献身的な召使たちに囲まれた環境は、文字どおり真綿でくるまれたように、あるいは羊水のなかを漂っているように、快適ではあったろう。と同時に、ある種の危うさと腐敗の因子をトルストイに感じさせたのではないかと、思われる。

その腐敗の因子は、社会的に無用の存在に成り下がりつつあった地主貴族の虚無感であり、そこからのぞき見た人間存在そのものの深淵ということになるだろう。

そういう一筋縄でいかない小宇宙に生まれたトルストイの生い立ちは、実際のところどういうものだったろうか。ごく大ざっぱに言えば、中の上どころの地主貴族の子弟として相当な物質的生活を享受し、最初は母、ついで叔母タチアーナ・ヨールゴリスカヤという愛情深い養育者にも恵まれた反面、破綻寸前の農業経営、父のアルコール中毒、両親の不審な死（と犯罪？）など、不可解で暗い側面もすくなくない。

以下、それらを順次ふまえて、幼いトルストイのうちにどのような意識が育まれたかをみる。

男っばい母と、その不可解な死

トルストイ自身は、母マリア・ニコラエヴナ（1790年11月10日－1830年8月4日）をほとんど覚えていない。彼がわずか1歳11ヶ月のときに亡くなったからだ。記憶といえば、作家晩年の『思い出』に語られている二、三のあまりにも断片的なものだけである。

母マリアは、いったいどんな人だったのか。残された資料をみると、総じて彼女は、子供たちにすべてを捧げつくす母親で、たいそう教育熱心だったが、彼女をモデルにした『戦争と平和』のマリア・ボルコンスカヤにくらべると、意志的、実務的なところが目立つ。

父ニコライから手ほどきを受けて、領地の経営にとりくみ、ヤースナヤ・ポリャーナの庭園の詳細なメモ（Опись саду）を残している。メモには1811年の印が押しあり、樹木を一本残らず数えた徹底的なもので、当時のヤースナヤをうかがわせる貴重な資料ともなっている（グーセフ I、46頁）。¹³¹

長子ニコライの教育でも、男らしさ、勇敢さ、意志力の育成に重きをおいていた。その一方で、当時流行りの「感じやすさ」（чувствительность）や「誠実さ」（сердечность）は、女々しさと決めつけ、切って捨てる傾向があったようだ（グーセフ I、49頁）¹³²。マリアが日々記したニコライの「行状日誌 журнал поведения」から、彼女の教育方針とその実行の様子がわ

¹³¹ 「トルストイ年鑑 2002」のノヴィコワによる資料分類も参照。

Новикова С.Д. «Все, что я знаю о ней, все прекрасно...»: О подготовке книги «Духовный облик матери Л.Н.Толстого» (по материалам ОР ГМТ) // В кн.: Толстовский ежегодник-2002 / Под общей редакцией В.Б.Ремизова. Тула: Власта, 2003. С.522-529.

¹³² しかし、トルストイの母マリアは、「感じやすい」男性を主人公にした恋愛小説を書いている。

彼女は散文の文学作品を書いており、二つの大きな作品が保存されている。フランス語で書いた魔法のおとぎ話『森の双子』（волшебная сказка «Лесные близнецы»）と、2部からなる中編小説『ロシアのパミラ、または例外なき規則は無し』（повесть в двух частях «Русская Памела, или Нет правил без исключения»）。後者は題名からみても内容からいっても、サミュエル・リチャードソンの『パミラ』（1740年）を下敷きにしていることは明らかだ。

リチャードソンの『パミラ』は、美しい15歳の小間使いが好色な若主人に誘惑されるが、はねつけ、改心した若主人と結婚して地主夫人になるという話だが、マリア版の『パミラ』では、誇り高く怒りっぽいラズミン（Разумин）公爵の息子、エヴゲーニーが主人公である。ラズミンがラズム（叡智）から来ていることを考え合わせると、この公爵のモデルが自分の父ニコライであることは一目瞭然だ。ヒロインは、農民の娘、サーシェンカ。彼女は、善良で温かな公爵夫人の養い子である。となると、トルストイの『復活』を連想させなくもない。

若公爵には、「男らしくヒロイックなところ」（нечто мужественное и геройское）がある一方で、「非常な感じやすさと優しささえ」（большой чувствительностью и даже нежностью）兼ね備えている。「彼の端正で美しい顔立ちは、このうえなく美しい魂を現し、生き生きとしている」（правильные и красивые черты оживлены выражением прекраснейшей души）。彼は、「鋭い透徹した知力を持ち、それは、認識で豊かになり、洗練された言葉で飾られていた」（ум острый и пронизательный, обогащенный познаниями и украшенный изящной словесностью）。また、「彼の炎のような魂は、あらゆる偉大なことをなした」（пламенная душа его была способна ко всему великому）。

この怪物のような主人公が、農民の娘、サーシェンカと恋に落ちる。彼女の母親は、公爵夫人の小間使いで、農奴の身分から解放されていた。しかし、サーシェンカは、自分の出自が恋人とのあいだの越えがたい壁であることを自覚しており、自分の感情と戦うのだ。「元農奴が、公爵の心を捉えたりしていいのかしら？」 «Отпущеннице ли занимать сердце князя?»

小説は未完だが、ハッピーエンドに向かってすすんでいく。ふたりの理想の愛が、老公爵の身分意識と公爵としての誇りに打ち勝つのである。（Азарова Н, Никифорова Т. Там же）

それにしても、マリアは自分の恋愛小説をなぜこんな設定にしたのだろうか？ もしかして、エヴゲーニーとサーシェンカとの関係には、自分とフランス女性の居候ルイザとの、身分違いの「友情」が入り込んでいないだろうか。二人の奇妙な関係については、本文で後述する。

かる。この日誌は、2冊のノートが残っており、期間は、1828年5月10日－23日、および1829年2月14－19日、4月23日－5月9日。

たとえば、4歳の息子が、撃たれて死んだ鳥の話を読んで泣き出したとき、母親は息子に言い聞かせる。「こんな度をすぎた感じやすさは、男の子にはまったく不適當ですよ」«сия излишняя чувствительность для мальчика совсем не годится»。その日の夜も、母は同じ「問題」を閻魔帳に書き込んでいる。息子が、犬が噛み合ったのを見てひどく泣いたのだが、彼女はそれが不満で、その恥ずべきことを説教したのである。「やっとなたちは、こんなことで泣くのが男の子にとって恥ずかしいことを納得させた」«Наконец, мы ему растолковали, что мальчику стыдно об этом плакать»。息子が虫を怖がったときは、「臆病の気味がある」«трусоват»と思い、気に入らない。母は、息子が「良い子」だったときには、ご褒美としてサーベルの帯剣を許していた。

ただし、理屈ぬきで無理やり「男らしい男」に仕立て上げようとしたわけではなく、いちいち説明し、話し合っ、納得づくで誘導しようとしていたのは注目すべきである。

「行状日誌」の記述には、母が息子に「忠告し」または「勧め」、息子が「それに同意して」、母は喜ぶというパターンが目立つ。たとえば、しばらくいっしょに遊んでいるうちに母が疲れたので、もう家に帰りましょう、と言うと、息子は「それに同意した」とか、息子がふざけてお祖母さんのトランプをぐじゃぐじゃに混ぜてしまったが、母は厳しく罰することはせず、「ばかな考えが浮かばないように、なにかほかのことをするように勧めた」ら、息子は「言うことを聞いた」といった調子である。

母は、権威に盲従しない独立心、思考力、判断力を育てたかったようだ。グーセフの言うとおりに、これは一定の教育原理にもとづくものだろう（グーセフ I、50 頁）。

要するに、マリアは、いかにも、ニコライ・ヴォルコンスキーの子という感じがするのである。『戦争と平和』の父と娘のコントラストは、少なくとも残された資料からは見当たらない。この作品では、父は意志的、男性的、理知的、実務的だが、娘は虫も殺さぬ女らしさを持ち、深い宗教心をいだき、内心、家を出て巡礼になるのに憧れている。しかし、こんな特徴は、実際のマリアには見出せないどころか、むしろあの厳格な「老公爵」を思わせるころさもある。『戦争と平和』の公爵令嬢マリアの女らしさと宗教心は、作者が自分の憧れを投影したものだろう。『幼年時代』のママンがそうであったように。

とはいえ、『戦争と平和』のマリアでいちばん印象的で、一読したら忘れられない「輝かしい眼」、あの「暖かい光の束を放射するかのような眼」は、現実に根をもったものであるらしい（グーセフ I、56－57 頁）。グーセフによれば、トルストイは、母の従姉妹 V.A.ヴォルコンスカヤかタチアーナ・ヨールゴリスカヤから聞いた話にもとづいて、こういう特徴をくわえた可能性がある。その根拠をグーセフは示していないが、もう一つ、こういう状況証拠も挙げている。スタホヴィチ（А.А.Стахович）によると、トルストイは、まだ『戦争と平和』を書くまえ、1850年代の末に、自分の妹マリアについて、彼にこう言ったという。「ぼくの

妹は、母のように輝かしい眼をしている」*«У нее лучистые глаза, как были у моей матери»*¹³³

ところが母マリアには、もうひとつ注目すべき点がある。結婚前の数年間、フランス人女性と奇妙な「友情」をむすんでいたことだ（ゲーセフ I、638–640 頁）。この関係は、情熱的な同性愛としか思えないような面があり、後述するマリアの不思議な行為もあって、ヴォルコンスキー一族全員の憤懣を買い、モスクワ中でうわさになった。相手は、フランス娘のルイザ（Луиза Генессиен）だ。『戦争と平和』のブリエンヌ嬢のモデルである。マリアは、ルイザとの「友情」について、タチアーナ・ヨールゴリスカヤへの手紙のなかでこう回想している。

これは、際限なくつづく怒り、涙、仲直り、侮辱、それから有頂天でロマンティックな友情の発作です。（ゲーセフ I、638 頁）

Это вечные обиды, слезы, примирения, оскорбления, а затем порывы восторженной и романтической дружбы.

この「ロマンティックな愛情」には、『戦争と平和』には書かれていない後日談があり、これがスキャンダルとなった。マリアは、父の死後、モスクワ郊外の領地を売り払い、ルイザに与えたのである。さらに彼女は、ルイザの妹であるマリアと、自分の従兄弟、ミハイル・アレクサンドロヴィチ・ヴォルコンスキーとの結婚を周旋した。ヴォルコンスキー一族は、この結婚を「恥さらし」と呼び、マリアの行為を「破廉恥 непристойный」とののしった。結婚式は 1821 年 4 月に挙行されたが、一族は全員これみよがしに欠席したのである。

しかし、マリアは屈せず、女友達の妹への贈り物としてオリョール県の領地をやろうとした。

一族のドミトリー・ミハイロヴィッチ・ヴォルコンスキーが 1822 年 5 月 17 日の日記に記しているところでは、マリアの農奴、召使たちが思いとどまるように女主人にお願いしたところ、そのなかのペトルーシカなる男が牢に放り込まれてしまった。ドミトリー・ヴォルコンスキーは、まえに触れたように、祖国戦争の真相を生々しく日記に書き残している人物だが、マリアについても貴重な情報を提供してくれる。

トルストイの長男セルゲイは、自著のなかで、この処分を祖母が自ら下したのかどうかは定かではないものの、知らなかったとは考えられない、われわれの知るかぎり、これが祖母の生涯でただ一つの汚点だ、と述べている¹³⁴。

結局、マリアは、オリョールの領地を贈るのはやめたが、そのかわりに 7 万 5 千ルーブルをミハイルに与え、あくまでも自分の意志と「情熱」を貫いたのである。

¹³³ Стахович А. Ключки воспоминаний «Толстовский ежегодник 1912 г.», М., 1912. С.34.

¹³⁴ Толстой С.Л. Там же. С.52.

この同性愛を思わせる情熱には、彼女の父（作家の祖父）ニコライの歪んだ性、異性への不信が、微妙に影響していないだろうか？…

以上、トルストイの母マリアについてみてきたことから、次のことが言えよう。祖父ニコライが創った「箱庭」は、マリアに引き継がれた後も、根本ではあまり変わっておらず、そこに彼女の母性愛と実務能力が浸透して、子供たちをがっちりとし、支えていたと考えられる。しかしそれは、農奴制という暴力をもって生の暴力を制しようとする矛盾した性格を相変わらずもっていたうえ、そもそも農奴制そのものが急速に非効率化、空洞化しつつあった。滅びを運命づけられた地主貴族のなかには、自分で自分をもてあまし自堕落な生活に沈んだ者も少なくなかったわけで、そういう状況が、この箱庭に、マリアとニコライの夫婦関係に、そして夫妻と農奴たちの関係にまったく波風を立てなかったとは思えない。公開されている資料だけでは、その辺のことはよく分からないが。

ちなみに現在、母マリアにかんする資料の刊行準備が国立トルストイ博物館で進んでおり、トルストイ年鑑 2002 には、マリアが書いた詩が初公開されている。内容からみて、ニコライ・トルストイとの結婚話が持ち上がり、マリアが嫁ぐ決心を固めた時期に書いたものらしい。

あなたとはまだお会いしたことがないけれど
それでも愛しています
人づてにあなたのことを知りました
あなたに私の詩をささげましょう

私たちの知り合い方はちょっと風変わり
それはもう議論の余地なし
でも、あなたについて聞きました
浮かれた社交界はお好きでないとか

しかも私たちはおたがいのことを知っている
直接お会いしたことはないけれど
私たちはずっと前からお近づきになりたいと願ってきました
そして、ぺちやくちゃ気軽におしゃべりしたいと

どうしよう？——もしうまくいかなかったら！
ペンをインクに思い切り浸し

頭に浮かぶことをかたっぱしから
やけくそで書きつけるしかないわね

О ты, кого я не видала,
Но не смотря на то люблю,
Кого заочно я узнала
К тебе я стих свой обращаю

Знакомство сие не обычно,
Конечно, в этом спору нет,
Но о тебе, дружочек, слышно,
Что ты не любишь модный свет.

К тому же мы друг друга знаем,
Хоть не видалися в глаза.
Давно сойтися мы желаем
И поболтать тара — бара.

Что ж делать? — коль не удастся!
Перо в чернила обмакнуть,
И все что вдруг на ум придется,
Отважным почерком черкнуть.¹³⁵

だれもが認める不美人で、もう 30 歳をすぎているが、金持ちのマリア¹³⁶。若き名門の貴公子だが、貧しいニコライ¹³⁷。このふたりの「利害が一致した」。彼らの結婚については、こ

¹³⁵ Новикова С.Д. Там же. С.522-529.

¹³⁶ マリアが父ニコライの死後、相続したのは、登録農民数 700 人（男子全員）、モスクワの広大な邸宅（現在の地下鉄「フィリョーフスカヤ線 Филевская линия」のアルバーツカヤ駅のあたりにあった）、モスクワ近郊の領地「マイダロヴォ Майдарово」、ヤースナヤ・ポリャーナ、オリョール県の領地である。

Азарова Н, Никифорова Т. Там же.

¹³⁷ ニコライ・トルストイの父（つまり作家の祖父）イリヤ・アンドレーエヴィチ・トルストイ（1757—1820）が、贅沢三昧の生活を送り、領地経営も乱脈で借金だらけだったため、息子のニコライは、遺産相続を拒否せざるをえなくなった。ちなみに、イリヤには自殺説がある（グーセフ I、21—24、623—626 頁）。

イリヤの浪費癖は生涯直らず、その負債額は、1819 年の時点で、378891 ルーブル、利子も入ると約 50 万ルーブルに達していた。

それで勤めに出ることにした彼は、1815 年にカザン県知事のポストを得たのだが、そのわずか 1 週間後に、カザン市で大火が発生し、街の半分が焼失するという、まことに前途多難を思わせる幕開けとなった。自分の領地さえともに経営できず、とてつもない放漫財政で破産した人間

ういう見方がもつばらだ。トルストイ自身も、そういう双方の「計算」をみとめたうえで、母は父に「恋してはいなかったと思う」と言う（伝記作者ビリュコフに書き与えた『思い出』）。だが、この詩をみるとそうとも言えないのではないかと、「トルストイ年鑑」で詩を紹介したノヴィコフは通説に疑問を呈する。たしかに、詩からは、冗談めかしてはいるが弾む女心が感じられるような気もする。書かれた状況がはっきりしないと断言はできないけれども。

早く資料をまとめて刊行してほしいものだ——もちろん、未公開のものもふくめて。それというのも、トルストイの母マリアの生涯には、女友だちルイザとの関係、後で述べる夫とタチアーナ・ヨールゴリスカヤとの三角関係にくわえ、その最期にも謎が残るからである。マリアの死にかたにはどうも不審な点があるのだ（グーセフ I、57–58 頁）。

グーセフが言うとおりの、公式の記録では、長女マリアを産んで産褥熱で亡くなったことになっているが、「教会簿 церковная книга」には、たんに「熱病 горячка」と記されているし、出産から死までは5ヶ月もたっているのだから、産褥熱にしてはちょっと長すぎるようだ。

トルストイ家の隣人、オガリョーフ（Ю.М.Огарева）は、マリアの死に立ち会ったのだが、その回想によると、「神経性の熱病 нервная горячка」になり、わずか数日で死んだという¹³⁸。

これだと脳炎のようなものになり、急激に進行して死にいたった、と考えられる。ソフィア夫人が「夫の叔母たちから一度ならず聞いた話」もこれを裏付けている。それによると、マリアはたしかに出産が原因で亡くなったのだが、しかしお産の直後ではなく、数ヶ月たってからである。「精神の錯乱のようなものが現れた。息子ニコレンカの勉強をみてやっていると、そうと気がつかずに、本を変な持ちかたをしていることがあった」（1919年にソフィア夫人が、死因にかんするグーセフの質問に答えたもの）。

最もくわしい証言を残しているのは、死の原因になったという長女マリア（作家の妹）当人で、1911年に、作家の住込み医師だったドゥシャン・マコヴィツキーに次のように語っている（グーセフ I、58 頁）。

が、行政官として成功できるわけもない。事実、彼は、知事として目立った成果を挙げることはできず、自身の財政も好転しなかった。

そこへもってきて、知事の椅子を狙う政敵が、県貴族団を動かして、イリヤの「途方もない職権乱用」、汚職、財政の乱脈を、アレクサンドル一世の側近中の側近、アレクセイ・アラクチュエフに訴えてた。1819年夏のことである。10月には、元老委員からなる監査委員会が現地に調査のために派遣され、その結果を受けて、1820年2月5日、ツァーリは、「判明した乱脈と職権乱用のため」、カザン知事を罷免する勅令を発した。

イリヤは、その勅令がカザンに届くのを待たず、2月23日に、「病気のため」みずから職を退いた。そして、弁明する暇もなく、1820年3月21日に没する。62歳であった。

その死があまりにも急であったことと、彼の陥った絶望的な立場から、自殺説も唱えられているが、証拠があるわけではない。彼はもう若くはなかったし、病気だったという証言もあるので、ショック死かもしれない。

『戦争と平和』では、イリヤ・ロストフ老伯爵は、息子ペーチャの戦死に耐えられず病死するという設定だった。

¹³⁸ Воспоминания Ю. М. Огаревой // «Голос минувшего», 1914, № 11. С.113.

母は脳の炎症で亡くなったのです。ある日突然、支離滅裂なことを口にするようになり、座って本を読んでいたかと思うと、本が逆さまになっていたりしました。私の子供たちにタチアーナ・フィリップヴナという乳母がいたのですが、母に仕えていたときはまだ若い娘でした。彼女が話してくれたところによると、母はいつもブランコに乗るのが大好きだったそうです。母には自分のブランコがあって、いつでももっと高く揺らすようにと頼んでいました。あるとき、とても強く揺らしたら、板が外れて母の頭を強打しました。母は頭をひつつかむと、長いこと立ちすくんでいました。その間ずっと頭を抱えていました。農奴の娘たちは——当時はこういうことで罰せられることがあったので——怯えていました。「だいじょうぶ、だいじょうぶ、お前たち、恐がらないでいいよ。私はだれにも言わないから」。これは、私が生まれて間もなくのことでした。その後、母はいつも頭痛がするようになったのです。

Мать умерла от воспаления мозга. Она вдруг стала говорить бог знает что, сидела — читала книгу — книга перевернута вверх ногами. У моих детей была няня Татьяна Филипповна, она при ней была молоденькая девушка. Она рассказывала, что мать всегда очень любила качаться. У нее были качели, она всегда просила, чтобы ее выше раскачивали. Раз ее раскачали очень сильно, доска сорвалась и ударила ее в голову. Она ухватилась за голову и долго так стояла, все за голову держалась. Девушки крепостные — тогда наказывали — испугались. — «Ничего, ничего, вы не бойтесь, я никому не скажу». Это было вскоре после моего рождения. После этого у нее всегда болела голова.

精神錯乱はどうもほんとうらしい。しかし、その原因が数ヶ月前の出産とは考えにくい。妹マリアの言う「頭の強打」のほうがもっともらしく聞こえる。かりにそうだとすると、なぜ頭を打ったのか。ほんとうにブランコでか。

ありふれた原因で、つまり、だれかの重大な過失だとか犯罪だとかの理由なしに、頭を打ち、脳炎などを引き起こしたということなら、死因をごまかす必要はなかなただろう。いずれにせよ、なにか世間に公にしにくい、後ろ暗い事情が——たとえばの話だが、何者かに殴打されたなどの——あったということになるのでは？ まさか、「過度の飲酒に陥りがちだった」（ゲーセフ I、102 頁）夫ニコライに殴られた、というようなことはあるまいが…。

ちなみに、妻の死に際しての夫の態度にも、やや不審な点が残る。さきほど引用したオガリョーヴァは、こんな回想を残している（ゲーセフ I、59 頁）。

伯爵さま（*トルストイの父——佐藤）のお悲しみは、感情というよりは、意識にもとづくものでした。そのおかげで、伯爵さまは落ち着いておられたので、身内の方々は喜んでいらっしやいました。でも 8 年間にわたる結婚生活で、あのお方（*トルストイの母——佐藤）は、お幸せであったと申せます。今では伯爵さまは、あのお方を衷心か

らお哀れみになり、善きキリスト教徒としての義務を果たされたのです。

Скорбь графа была основана скорее на сознании, чем на чувстве. Этому он был обязан спокойствием, которое радовало его семью. Тем не менее можно сказать, что в продолжение восьми лет совместной жизни она была с ним счастлива. Теперь он ее искренне жалел и исполнил по отношению к ней долг доброго христианина.¹³⁹

どことなく奥歯に物のはさまった言い方だ。これを伝えるグーセフの記述のしかたも、死因をめぐる謎について、いくつかの証言をならべて、最後に不可解な夫ニコライの態度を記して終わるといふ、思わせぶりなものだ。あとは勝手にご想像ください、という書き方である。トルストイの叔母たち、妹マリアはもちろん、グーセフも真相を知っていたかもしれない。しかし、まあ、この手の謎が明るみに出ることには、おそろくないだろう。

こうして、のちにトルストイが再建しようとした世界、母の愛につつまれた世界を、彼は直接にはほとんど知らなかったばかりか、その世界は、彼が物心つくころには早々と、不可解な理由でもろくも滅んでしまった。その死は謎として、あるいは人に語りえぬ秘密として残ったのである。その謎の闇は濃い。

父、母、叔母ヨールゴリスカヤの三角関係？

早世した母になりかわってトルストイを育てたのは、三親等の叔母タチアーナ・ヨールゴリスカヤ（1792－1874）だ。ヤースナヤ・ポリャーナの「箱庭」の三代目女主人である。

彼女の父は、作家の父方の祖母ペラゲーヤ・ニコラエヴナ・トルスタヤ（ゴルチャコフ家の出）の従兄弟に当たる。タチアーナの母が早く亡くなり、父が再婚したため、孤児となってしまった。そこで、トルストイ家に引きとられて、作家の父ニコライらとともに養育された。このあたりの経緯は、彼女をモデルとした『戦争と平和』のソーニャと同じだ。

ところが、このタチアーナ叔母は、トルストイの『思い出』によると、若いころは「すごく魅力的なブリュネットで、火のような気性」だったという。

ターニチカは——うちでは彼女はそう呼ばれていたが——父と同年の1795年生まれで（*これはトルストイの記憶ちがいで、父は1794年、タチアーナ叔母は92年の生まれだ——佐藤）、私の叔母たちとまったく分け隔てなく育てられ、みんなに優しく愛されていた。実際、そのしっかりした、果敢で精力的で、それと同時に献身的な性格からして、愛さずにはいられなかったのである。彼女の気性をよく現しているのが「定規事件」である。それについて彼女は、肘と手首のあいだの、ほとんど掌ほどもあろうという大火傷の痕を見せながら、物語ってくれたものだ。彼女は子供たち同士で、ガイウス・ムキ

¹³⁹ Воспоминания Ю. М. Огаревой. С.113.

ウス¹⁴⁰の物語を読んでいるうちに、だれも同じことはできまい、という議論になった。

「あたしはできるわ」と彼女は言った。「できるもんか」と私の代父であるヤズィコフは言い返した。そして、これもいかにも彼らしいことだが、定規をろうそくにかざして、すっかり炭になり煙を上げるまで焼き上げた。「ほら、これを腕に押し付けてごらん」と彼は言った。彼女はむき出しの腕を差し伸べた。当時の少女はみなデコルテを着ていたのである。そこでヤズィコフは、焼けただれた定規を押し当てた。彼女は顔をしかめたが、腕はひっこめず、定規が腕の皮ごと剥がれたときに、呻いただけだった。大人たちが彼女の腕の傷を見て、どうしたのかと聞くと、彼女は、ガイウス・ムキウスと同じ体験を味わいたかったので、自分でやったのだ、と答えた。

このように彼女は、あらゆる面で断固とした献身的な女性だった。

こわい波打つ黒髪を豊かなお下げに結び、黒メノウのような眼をして、元気滲刺とした表情の彼女はさぞかし魅力的であったにちがいない。叔母ペラゲーヤ・イリーニシナの夫、ウラジーミル・ユシコフは、たいへんな女たらしであったが、年取ってから、恋する人たちが前の恋人について語るような気持ちをこめて、彼女のことを思い出しながら、「トゥアネット、ああ、実に魅力的な女だったなあ！」と言うのだった。

(34, 364-365)

『戦争と平和』では、腕を焼いたエピソードは、ナターシャのものになっている。しかし、もともとはソーニャ（そのモデルはヨールゴリスカヤ）がやったのである！ ソーニャがこういう激しい女になっては、作品のバランスがくずれるだろう。ソーニャとは、「持てるものをも取り上げられ」、影を薄くされたヨールゴリスカヤである。

この情熱的ブリュネットが、トルストイの父を愛しながらも、貧しさゆえに身を引いたの

¹⁴⁰ ガイウス・ムキウス・スカエウォラ (Gaius Mucius Scaevola) は、共和制ローマ（紀元前 509 年 - 紀元前 27 年）初期の伝説的英雄。

ローマは、紀元前 509 年に、第 7 代国王タルクィニウスを追放し、共和制を樹立したものの、王はエトルリア王ポルセンナらと図り、ローマへの復帰をもくろんでいた。軍事的才能に秀でたポルセンナは、ついにローマを包囲する。

ローマ市民ガイウス・ムキウスは、夜陰に乗じてポルセンナを暗殺しようとするが失敗し、囚われの身となる。ポルセンナの尋問に対し、ムキウスはこう言い放つ。

「私はガイウス・ムキウス、ローマ市民だ。あなた方の敵である。私は、敵を殺す覚悟と同じく、死ぬ覚悟もできている。我々ローマ人は、勇気をもって行動し、不幸に遭っても勇気をもって甘受するのだ」

ポルセンナは怒り、ムキウスを火であぶって拷問しようとする、ムキウスは自ら先に松明をつかみ、右手に押し当て、焼けるにまかせた。

ローマ人の勇猛果敢さに感じ入ったポルセンナは、彼を解放し、ローマと和平を結ぶ。右手が焼けただれて使えなくなったムキウスは、スカエウォラ（左手の）と呼ばれるようになったという。

このムキウスは、『戦争と平和』のアンドレイ公爵の遺児ニコレンカにとっても憧れの英雄であり、エピローグ第一部の最後に言及される。

は、ソーニャとおなじだ。しかし、ヨールゴリスカヤには、『戦争と平和』にはない後日談がある。

トルストイの父は、妻の死後数年を経た 1836 年 8 月に、すでに 44 歳になっていたヨールゴリスカヤにプロポーズし、子供の養育を頼む。彼女は、結婚は断ったが、養育は引き受け、同居をつづける。こうして彼女は、未来の作家の母代わりとなったのであるが、不思議な関係だ。作家の父と母と叔母、三者の関係は、どんなものだったのか。ヨールゴリスカヤは、『戦争と平和』のソーニャのように、「何も感じず」、猫のように家に居つき、ただ家事のみをこなし、それで満足している女だったのだろうか（グーセフ I、96-97 頁）。

ニコライの求婚に対するヨールゴリスカヤの返書が残っている（出されずに終わったらしいが）

寛大なお申し出ですけど、どうかご容赦くださいませ。それはむだなことで、私はお受けすることはできませんし、そうしたくもありません。光栄なご求婚をお断りすることで、むごい悔恨の念にさいなまれつつも、私はいつまでも、あなたが私に与えてくださった尊敬の念の気高い証についての思い出を、自分の恥ずところなき心に抱いていくことができます。これは、私の悲しい人生において、孤独において神から残された唯一の幸福であり、それを私はあなたに負っています。私はかくして、あなたのかくも気高く美しい魂より私に与えられた、この最後の希望を拒まなければならないのです。（グーセフ I、97 頁）

Избавьте меня, пожалуйста, от великодушных предложений, которые будут бесполезны и которые я не могу и не хочу принять. Вместе с жестоким сожалением об отказе от вашего почетного предложения, я буду хранить всегда в своем благодарном сердце воспоминание о благородном доказательстве уважения, которое вы мне дали. Это единственное счастье, оставленное Богом в моей печальной жизни, в моем одиночестве, и им я обязана вам. Я, значит, должна отказаться от этой последней надежды, поданной мне вашей душой, столь благородной и столь прекрасной.

ヨールゴリスカヤの強烈な情念と鉄の意志と誇りが感じられないだろうか？

トルストイ家の家計は「倒産寸前」だった

ロシアの地主貴族は、国家にとっては、人頭税という国税徴収の番人だった。番人を務めるために国家勤務から解放され、農民が逃亡しないように目を光らせ管理してきたのだが、トルストイが生まれたころは、ちょうど歴史の変わり目にあたっていた。地主貴族の非効率な経営は、もう社会のお荷物で、それは、トルストイ家の家計にも現れている。

『幼年時代』では、イルテーニエフ家の家計は火の車といっても、収支とんとんで、ママンの領地、ハバーロフカ村の収入に手をつければ、まあなんとかやっつけていけるという程度だ

が、トルストイ家はもっと悲惨だった。

作家の父ニコライが死んだ1837年の総収入の6割ほどが、後見会議への借金、利子返済に消えている（グーセフI、128頁）。しかも、全収入の4分の1ちかくは、ニコライが同37年に買ったばかりの「金の成る」ピロゴーヴォ村からのものだ。ということは、37年までは同村からの収入はなかったわけだから、これをのぞくと、収入は3万4千ルーブル、支出は4万7千ルーブル強、うち2万6千が後見会議への支払いという大赤字だったことになる。これはもう「倒産寸前」ではないか？

ニコライは、父イリヤみたいな浪費家ではないし、経営にも熱心だったが、それでもこういう破目になるのは、地主経営全般の危機的状況を物語っている。実際、この時代に中小の地主は、急速に没落しつつあった¹⁴¹。ニコライがむりに危ない橋を渡ってでもピロゴーヴォを買わざるをえなかったのがわかる気がするが、それが彼の死を早める結果となった。

父は犯罪を犯し、殺された？

1837年6月21日、トルストイが8歳のとき、父ニコライが謎の死をとげた。

ニコライは、友人チェミャーシェフから破格の安値でピロゴーヴォ村を買ったが、その直後にチェミャーシェフは脳内出血で倒れた（死にはしなかったが）。同村の法定相続人であったキャリアキナは、この売買は「チェミャーシェフの健康状態につけこんだ不正なもの」だとして、裁判を起こしたが、被告ニコライは、裁判をめぐる奔走のさなか路上で倒れ、急死してしまった。死後、ニコライ宅からチェミャーシェフの手形、証券類が発見されたことから、裁判はいよいよ過熱し、キャリアキナがニコライを詐欺、横領罪で皇帝に直訴するところまでいったのである。

実際、ニコライが詐欺、横領の罪を犯した可能性、さらには殺害された可能性さえあるが、しかし、裁判は、コネをフルに使った名門トルストイ家側の勝ちとなった。判決が出たのは、彼の死後4年近くたった、1841年2月28日のことであった¹⁴²。

真実は今日にいたるも不明だが、ニコライの死の直後から毒殺説がまことしやかにささやかれた。ニコライの行動も不可解だ。なぜ彼が法定相続人をさしおいてこんな危ない橋を渡ったのか、理解に苦しむ。こういう悲劇（と犯罪？）の結果、トルストイ兄妹は孤児になったのである（グーセフI、102-113、150-151頁）。

なるほど、トルストイの幼、少年時代は、母と叔母ヨールゴリスカヤの愛につつまれて比較的しあわせだったかもしれない。だがその幸福には、さまざまな影が深くさしていた。地主貴族の全般的没落、農民との関係の不安定化、トルストイ家の家計の大赤字、父の不審な

¹⁴¹ 当時の農奴制をとりまく状況については、本稿第1部第11章の「トルストイの農奴解放の試み：地主をやめるのはむずかしかった…」のところで、さらにくわしく述べる。

¹⁴² この日付に関連し、本稿第3部『アンナ・カレーニナ』、「参考資料3：その他のシンボル」の「28という数字」を参照されたい。

死、犯罪と暴力…。

これは偶然ではない。こうした影が、滅びつつある暴力（農奴制）をもって生の暴力を制するという、矛盾した構造に根ざしていたことは指摘した。母と叔母が祖父ニコライから引継いだ「箱庭」は、子どもたちにはそれこそ天国のように快適な人工空間であったにちがいないが、彼らがそれに執着すればするほど、その矛盾と滅亡の運命は、いよいよ鋭く感じられることになる。しかも、生の根本的不条理からは、だれも守られ得ないのだ。「天国幻想」を与えることは危険である…。

自分の足元がある日突然、根底から崩れ去るのでは、という不安感に、トルストイは、ごく若いころから絶えずつきまとわれていたように思われる。その不安感に、自身の死の恐怖がむすびついていく。

幼年時代の最初の「発作」

そういった不安と恐怖をトルストイはのちに、「改心」後の1884年に、『狂人の手記』で振り返っている。この自伝的な要素の濃い作品は、「改心」の最大の引き金となった「アルザマス一夜」を事実そのままに生々しく描いたもので、そのまさに圧倒的な恐怖の根源をたどると、幼年時代のこの「発作」に行き着くと、作者は考えているのだ。かなり長い引用になるが、とても印象的なので、当該箇所を全文を、中村白葉の名訳で引く。

今でもおぼえているが、五つか六つくらいのときのこと、私が床につこうとしていた時であった。——ニッケ色（*原文は「茶色 *коричневый цвет*」——佐藤）の着物を着て、頭に頭巾をかぶり、あごの下の皮膚のだらりとたれた、背の高い、やせた女の乳母エヴプラクシヤが、私の着物をぬがせて、寝台の上へ乗せてくれようとした。

「ぼく自分で、自分でする」私はこう言いだして、寝台の手すりをまたいだ。

「さ、おやすみなさいまし、おやすみなさいまし、フェーデニカ、まあごらんないまし、ミーチャのお利口さまなこと、もうちゃんとおよっていらっしゃる」と彼女は頭で弟のほうを指し示しながら、言った。

私はずっと彼女の手につかまったまま、床のなかへ飛び込んだ。それから手をはなし、毛布の下ですこし足をばたばたやって、それにくるまった。私はどんなにいい気持ちだったろう。私はしずかになると、考えるのだった——《ぼくは乳母やが好きだ。乳母やはぼくとミーテニカが好きだ。ぼくもミーテニカが好きだし、ミーテニカもぼくと乳母やが好きだ。乳母やはタラースが好きだ。ぼくもタラースが好き、ミーテニカも好きだ。タラースもぼくと乳母やが好き。ママはぼくと乳母やが好き。乳母やはママも、ぼくも、パパも好き。そしてみんなが好きで、みんないい気持ち》

その時不意にもの音が聞こえ、家政婦が駆け込んで来て、砂糖入れのことでなにやら怒ったように叫びだすと、乳母も怒ったような声で、わたしはそんなものもらないと言

っている。そこで私は、痛いような、恐ろしいような、わけのわからぬ気持ちになって、恐怖、ぞっとするような恐怖に襲われ、頭から毛布をかぶって隠れてしまう。でも、夜具の下の暗闇の中でも、私の気持ちはかるくならない。私は思い出す、ある時私の目の前で子供が打たれたことのあるのを、子供がわんわんわめいていたのを、その子を打っていたときのフォーカの顔のいかにも恐ろしかったことを。——「どうだ、もうしないな、もうしないな！」彼はこう言いながらのべつ打っていた。子供は言った——「もうしないよう」ところが、その男は言うのだった——「もうしないな？」そしていつまでも打っていた。

その時、私に発作が起こったのである。私は泣きだし、泣いて、泣いて、長いことだれも、私をなだめることができなかった。つまりこの慟哭、この絶望こそ、私の今の狂気の最初の発作だったのである。

なお、おぼえている、二度目にそれが起こったのは、伯母がキリストの話をしてくれた時であった。伯母は話をして、出て行こうとしたが、私たちは言った——

「もっと、イエス・キリストの話をして」

「いいえ、だめ、今はひまがないから」

「ううん、話して」

ミーテニカまでが話をせがんだ。そこで伯母も、前に私たちに話したのと同じことを話しはじめた。彼女は、人々が彼を十字架にかけ、打ち、苦しめたが、彼は終始祈るばかりで、彼らを非難しなかったということを話したのである。

「伯母さん、なんでみんなはその人を苦しめたの？」

「わるい人たちだったからさ」

「でも、その人はいい人だったんでしょ？」

「ええ、でも、もうたくさん、もう八時ですよ。聞こえるでしょ？」

「なんだって、その人たちあの人を打ったの？ あの方はゆるしたのに、なんだってみんなは打ったの？ 痛かったでしょう？ 伯母さん、あの人痛かったでしょう」

「ええ、けどもうたくさん、わたしはお茶を飲みに行かなくちゃ」

「でも、ひょっとすると、それは嘘ね、ほんとは打ちはしなかったんでしょ？」

「ああ、もうたくさんよ」

「いや、いや、行かないで」

そして、私にはまた発作が起こった。私は泣いて、泣いて、そのあと頭を壁へ打ちつけはじめた。

幼年時代に私に起こった発作は、こんなぐあいであった。¹⁴³

¹⁴³ 中村白葉訳『狂人の手記』、「トルストイ全集 9」所収、河出書房新社、1973年、96—97頁。

ここでの恐怖は、「アルザマスの一夜」をさえしのぎ、しかもより純粋な私たちで現れているかもしれない。トルストイはそう考えているようだ。

しかし、このような恐怖にもかかわらず、同じ幼年時代そのもののなかに、それに対峙し得る「なにものか」が含まれているとの確信が彼にはあり、それが『幼年時代』を書かせたことは、前にみたように疑いない。

虚構の歌が、等身大の母親の代わりに、世界観の根底におかれる

以上、トルストイの幼年時代を一瞥したところで、処女作『幼年時代』について若干補足しておこう。

彼としては、実際の幼年時代の暗さと母の不在から、それをありのままに書くことは、いずれにせよ、できない相談だったろう。しかし、自分のわずかな思い出や、人からの伝聞、なかんずく母の愛をいっぱいを受けた長兄ニコライの話などから、母の愛を疑うことはできなかった。生活に脆弱で陰惨な面があるからこそ、母へのあこがれと、その愛への「信仰」（と言ってもいいと思う）は、いよいよ深く確かめられ、大きく育っていった面もあるだろう。

こういう場所から、『幼年時代』の歌は歌われる。作家は、自分のなかの母のイメージを、具体的状況から切れたところで、普遍的な歌として歌いだす。それは、自分の世界像の基底であると同時に、あらゆる人にとって普遍的な意味をもつはずの問いでもあった。ママンと『幼年』は、この意味で虚構なのである。

母親とは、こういう存在でなければならない、こうであってほしい、こういうものではあるまいか？と自分に問い、他者に問い、自他を納得させようとする。こんな理念的な性格をおびた歌だ。

これがトルストイに歌えたぎりぎりの歌だったから、あれほど美しかったのだが、しかし、こういう虚構が、等身大の母親の代わりに世界観の根底に置かれたことは、やはり、そこにある種の不安定さと抽象性をもたらしたように思われる。

そしてトルストイは、『幼年時代』の世界の、ヤースナヤ・ポリャーナの小宇宙の「箱庭」的性格を、果たしてどのくらい認識していたか？ かりに深く認識できていたとしても、この虚構の小宇宙に対する執着が彼の血肉と化していて、抜きたいものだったとしたら？…

トルストイの祖父への手放しの礼賛をみると、「箱庭」の認識が晩年にいたるまで容易でなかったことはまちがいあるまい。それに、ヤースナヤへの愛着が実に根深いものであったことは、本人がしばしば語っている。

トルストイの幼、少年時代はこういうものであった。彼がそこからどんな課題をうけとり、いかに解決しようとしたかは、まもなく大学時代に明らかになるだろう。彼は早くもこの時期に、生涯をつらぬく独自の的方法論を見出していた。その後の彼の創作活動も、これにした

がって行われる。彼は退学直前から日記をつけはじめたので、この時期からは直接内面をうかがい知ることができるのだ。

第4章 大学時代：「実験」の開始

トルストイはなぜ東洋語学部を選んだのか。

兄たちはカザン大学数学科に入っているのに、彼は同じ大学の東洋学部を選んだ。なぜこの学部を選んだかというニコライ・ゲーセフの質問に、トルストイは「外交官になりたかったからだ」と答えている（ゲーセフ I、160 頁）。

外交官といえば、作家の先祖、ピョートル・トルストイは、ピョートル一世のもとでロシアの初代トルコ大使を務め、ロシアとイスラム圏のせめぎ合いを、身をもって味わっており、任地で2年間投獄される憂き目にもあった。トルストイが当時いたカザンは、旧カザン・ハン国の首都。ロシア人と非ロシア人、正教徒とイスラム教徒が、たがいに憎み恐れつつ「同化」する場だった。のみならず、国策としての同化政策の研究と実践、東洋学研究の一大中心地でもあり、カザン大学はその方面で世界最高峰にあった¹⁴⁴。

またトルストイは、元デカブリストでカフカス戦争を戦っていたアレクサンドル・ベストゥージェフ（筆名マルリンスキー）の愛読者だった。その作品のロマンティズム、ヒロイズムと「碧眼のチェルケス娘」から受けた感銘を、トルストイ自身おりにふれて語っている。以上のことがらが打って一丸となり、彼に東洋学部を選ばせたと考えられる。

ルソーによるインスパイア、そして生涯つづく「実験」の開始

①ルソーによるインスパイア

学生トルストイは、若い民法学者、ドミトリー・メイエル教授（Дмитрий Иванович Мейер, 1819—1856）に目をかけられ、エカテリーナ二世の『訓令』とモンテスキューの『法の精神』の比較を日記でおこなっている（1847年3月18日—3月26日）。これは、『訓令』の各章ごとに、女帝の「目立った思想」を抜き出し、それにかんする自分の意見、感想を記したもので、若きトルストイの非常に特徴ある徹底した思考がみられる。分量も、90巻全集で二十数頁におよぶ充実したものだ（46, 4-28）。この「比較」は、あまり論じられることがないので、とくに注目すべき点を挙げ、やや詳しくみていこう。

まず、「私有財産にかんする法律」では、彼女が、他人の財貨を盗んだ者は、弁償するか、できなければ死刑というのに対し、トルストイは、国家が弁償してやれば、国は国民を失わずにすむではないか、と言う（46, 8）。身体を「かたわにする」（уродовать）ような刑は廃止すべし、と女帝が

¹⁴⁴ たとえば、トルストイとほぼ同世代であった東洋学者ニコライ・イリミンスキー（Николай Иванович Ильминский, 1822—1891）は、1851—1854年に、コンスタンティノーブル、ダマスカス、カイロ等の中近東の諸都市で研究を重ねた後、カザン神学大学のトルコ語とアラビア語の教授に就任して、強引な反イスラム政策は逆効果であり、教育を通してじっくり着実に同化すべきとの提言を行った。そして具体的には、キリスト教文献を、タタール語の口語から新たに作った文章語に翻訳したうえ、ロシア文字で表記するという画期的な方針を打ち出している。

・山内昌之『世界の歴史 20：近代イスラームの挑戦』（中公文庫）、2008年、353—357頁。

「寛容さ」を示してみせると、では、死刑はどうか、身体と魂を切り離すのはまさに「かたわにする」以外のなにものでもないではないか、と反論する (46, 9)。さらに、彼女自身からして、死刑の見せしめの効果は長続きしないことを認めていると、その自家撞着を突く (46, 16)。

一見、揚げ足取りにみえるが、「法が完全であるためには、倫理的法則と等しくなければならない」 (46, 15) という確信にもとづく腰の据わった批判である。結局、当時のトルストイのイメージする法は、こういう意味での「自然法」と良心にほかならず、しかも、彼はそれを真っ向微塵にどこまでも押し通す。その結果、彼の批判は、エカテリーナの、政治的方便としての法の相対的性格と鋭い対照をなすのである。

そうした観点からトルストイは、容疑者を拘留することは、「最悪の不正」だと言う。

無実の者と犯罪者に同じ罰を科し、富者と貧者を差別しているからだ。富者は容易に保釈され得るが、貧者はむずかしい。(46, 12)

(ちなみに、容疑者を延々と拘留しつづけるのは、現代にまでいたるロシアの悪弊である。)

だが問題は、個々の条文の不備にとどまるものではない。そもそも、「専制国家では、判決のみならず法律が専制君主の恣意で適用されるので、法に保護された市民の安全などというものはあり得ない」(同) と、トルストイは断じる。

では、地主貴族であるトルストイ自身が享受していた農奴制(奴隷制)は、どうか。君主は臣下の状態をできるかぎり改善する義務があるが、いきなり奴隷制を廃止することはできない、という女帝の言葉を引いたうえで (46, 18)、彼はこう述べる。

わが国では、奴隷制があるかぎり、農業と商業は盛んにならない。他者に隷属する人間は、自分の財産の永続的保有だけでなく、自身の運命についてさえ確信がもてないからだ。(46, 19)

なるほど、では、地主貴族自身はどうあるべきなのか。自己解体すべきか？ 否！ トルストイは逆に、「ロシアの貴族は、貧困のために滅びつつあり、ほとんど滅びてしまった」と、危機感を露わにし、その原因の一つとして、貴族の自由が専制君主により制限されており、商工業などを自由に行えないことを指摘する。

もしわが国に、専制を制限するような貴族階級があったとしたら、商業以外にもたくさんやれることがあつたらう。<...>現代の貴族がその高き使命を理解せんことを。その使命は、貴族が強くなることにのみ存するのだ。専制は何によって支えられているのか？——国民が十分啓蒙されていないことによって、あるいは、国民のなかの抑圧された部分の側から、十分な力が行使されていないことによって、支えられているにすぎない。(46, 21)

国民が啓蒙されて専制を制限し、貴族が強くなって政治・経済上のフリーハンドを得るのが、国の繁栄にもつながる、とトルストイは言う。もしかすると、当時の彼は、共和制ローマのような政体を思い描いていたのかもしれないが、彼の徹底した倫理的思考は、それをはるかに突き抜けて進む可能性を早くも孕んでいた。

最後に彼は、『訓令』についての総評を記す。

『訓令』のいたるところに、二つの対立した原理が見出される。当時全欧がその影響下にあった革命精神と、専制の精神とで、後者を彼女は、虚栄心から、拒否することができなかった。彼女は、前者の優越を自覚していたものの、『訓令』では後者が優勢である。共和制の思想は、大半がモンテスキューから借用したもので、それを彼女は、(メイエルが正しく指摘したとおり)、専制を擁護する手段として用いているが、そのほとんどが失敗している。(46, 27)

法は、トルストイなりに理解した自然法と良心しか、結局のところ、みとめない。自分がもし何かに従うとしたら、そういう法のみ(あるいはそれに一致したものだけ)。あくまでも自由でありたい。エカテリーナだろうがだれだろうが、頭を下げるのはいやだ、というのがはっきり見える。このラディカルさと独立不羈と思考の徹底は、只者ではないという印象だ。トルストイが啓蒙主義思想にインスパイアされたのは否定できず、その筆頭はやはりルソーだったろう。

②実験の開始

このようにトルストイは、自分の自由を徹底的に貫けるような社会にあこがれたが、その根源にあるべきもの、真理については、非常に独特の考え方をしていた。

日記の第1頁においても、『哲学的断片』においても(1, 226)、この世界にはたしかになにか根源的なもの、真理があると感じられる、とトルストイは言う。しかし、それは自明なものではなく、それと一致することはとてつもなくむずかしい。社会は、「全体」の一部にすぎず、矛盾だらけでくだらなく、人間を押しつぶすことさえある、と。

こうした根源的なもののイメージは、幼年時代に味わった愛とつながっているだろう。自分がどうしても疑いえないもの、それは、母の愛である。しかし、それを自分は直接には知らない(それは自明なものではない)。その愛=根源的なものが、ひとりでの自分のありかたを規定してくれるわけでもない(それと一致することは至難)。したがって、人間の社会もまた、根源的なものによっておのずと規定されるわけではなく、矛盾だらけでくだらない。社会は、暴力と死によって、人間と愛を押しつぶすことさえある…。トルストイはすでに、幼年時代の「愛と調和」の虚構性のあるていど認識しているようだ。

では、どうしたらいいか。『哲学的断片』によると、トルストイは、「一切がそこに帰せられ、一切がそこから導き出されるような単一の原理がある」という仮定で、実験をはじめた。いろんな具体的事物にかんして、「自分のための規則」をつくり、それを実行するなか

で、あらゆる現象、矛盾をつなぐ原理を見出そうとしたのだ。こうして「ありとあらゆることがら」について規則をつくり観察していった結果、つぎのようなことがわかった。あることがらの原因は、意識にとっては明らかでないが、感情にとっては明らかである、また別のことがらは、意識には明らかだが、感情にはそうではない。さてどうするか？

方法はひとつしかない。両方の原因をみることだ。<...> 私はふたつの部分からなっている。自分は霊的なひとつの存在である。(1, 226)

この実験は、はるかに後年の創作原理にまで関係している。単一の原理、真理への予感をいだきつつ、あらゆる具体的事物、矛盾を意識と感情の両方で、倫理的、実践的な態度でとらえていく、というのが彼の創作原理だからだ。エイヘンバウムはこれを一面的に、手法上の問題として、「概括」と「細かさ」と定義した。チェルヌイシェフスキーのいう、トルストイの二つの特長、「純粋な倫理性」と「魂の弁証法」も、これとべつものではない。自分が現にいかんにか生きていくか、いかんにか生き死ぬべきか、認識し行動するために、魂の運動を徹底的に凝視したということだから。

これが、作家にとっての芸術である。表現をきわめるということは、自分の生きかたについての認識をきわめることである。それはすなわち行動することであり、生きる実験、死ぬ実験をすることである。

だがトルストイは、実験を大学でおこなうことはできなかった。成績不良で法学部に転科したあげく、1847年4月に退学したからだ。

退学の真の原因は？ 恩師メイエルは当局のスパイ？

トルストイ家の領地が分配されたおかげで、カザンの後見人のもとで「部屋住み」に甘んじる必要がなくなった。それにくわえて、大学に適応できず、成績は不振をきわめ、おまけに馬の合わない教師もいた——。こういったことが、退学、帰郷の理由とみなされてきたが、どうも納得できない。トルストイの東洋学部入学は、先にみたように、真摯な動機に裏付けられていたのではないか？ 自分の自由になる領地ができれば、あっさりおさらばとは妙である。だいたい、彼ほどの知的能力をもっていたら、大学など「楽勝」ではないか？ 大学を中退すればキャリアにさしつかえることも考えないはずがなかった。

まず、当時の世界情勢からみていこう。1840年代といえ、ロシアをふくめて、全ヨーロッパで大小多数の秘密結社ができて、やがて来る1848年の革命（フランス、イタリア、ドイツ、オーストリア、ハンガリー）の原動力の一つになっていく時代だ。ドストエフスキーが入っていたペトラシェフスキー・サークルも、巨視的には、こうした結社の一つと位置づけられよう。トルストイ退学前年の1846年には、ポーランドで民族解放運動が起こり、露墮両軍が鎮圧し、また同年キエフでは、秘密結社「キリーロ・メフォージスコエ」が結成され、

翌47年には摘発、そのメンバーであった詩人タラス・シェフチェンコが逮捕されている（とくに、長詩『夢』がニコライ一世の逆鱗に触れた。この詩でシェフチェンコは、デカブリストの乱の後、皇后アレクサンドラ・フョードロヴナが心労で痩せこけ、チック症状が現れたことを皮肉っている）。各大学には、治安機関のスパイが学生として送りこまれ、学生の私生活も、細かく監視されるようになった。アレクサンドル・ゲルツェンは47年に亡命しているが、これは偶然ではないだろう。ちょうど逃げ時だったということだ。トルストイの退学も47年だったことを思い出していただきたい。

ペトラシェフスキー・サークルは1849年に摘発されて大事件になったので、別格のようなイメージがあるが、実際はどうか。このサークルは例外的存在だったのか。トルストイが学んでいたカザン大学の状況をみてみよう。

ナロードニキのイデオログで革命家のワシーリー・ベルヴィ・フレロフスキー（Василий Васильевич Берви-Флеровский, 1829-1918）は、トルストイとは法学部で同窓で、面識があったらしいが¹⁴⁵、そのベルヴィの回想によると、トルストイの退学後、アンドレイとニコライのベケット兄弟など、ペトラシェフスキー・サークルに属するペテルブルク大学学生が何人か、カザン大学にやってきて、交流をもった、という¹⁴⁶。カザン大学にも歴史の波は押し寄せていたのである。

ゲーセフも、当時の学生たちが、ドミトリー・メイエル¹⁴⁷の指導もあって、ベリンスキーを「むさぼるように読み」、レールモントフ、ルイレーエフらの作品の発禁本をまわし読みをしていたことを指摘している。しかも、学生を監督する立場にある教授のメイエルが、ベリンスキーの人となりと仕事について、学生たちに「熱をこめて語った」というのだから、驚く（ゲーセフ I、210-211 頁）¹⁴⁷。

「1845年には、ブラゴヴェシチェンスキー（Н. Благовещенский）、オソーキン（Е.

¹⁴⁵ トルストイは1947年1月28日の大学の時間割に、「ベルヴィが邪魔した Берви помешал（46, 245）」という一句を書き記している。ただし、90巻全集の解説によると、ワシーリーの兄ウラジーミルは、トルストイの兄、ドミトリー、セルゲイと同窓だったので、トルストイの言及は、ワシーリーではなく、ウラジーミルにかんするものである可能性もある（46, 469）。

¹⁴⁶ エイヘンバウム『トルストイ：70年代』の『戦争と平和』の後」の章を参照。トルストイのカザン時代の交友関係について書かれている。ただしこの論考には、明らかなまちがいと議論の余地のある解釈が散見するので、この論文に対するアレクサンドル・シフマンの反論「レフ・トルストイはペトラシェフスキー・サークル会員だったか？」とあわせて読む必要がある。もつとも、こっちの論文には、逆の方向に、つまりなにがなんでもトルストイとペトラシェフスキー・サークルとのつながりを否定したいという力みが感じられなくもないので、これまた要注意である。おそらく真実は中間にある…。

・ Эйхенбаум Б.М. Лев Толстой: Семидесятые годы. Л., 1974. С.12-14.

・ Шифман А.И. Был ли Лев Толстой петрашевцем? // Вопросы литературы. 1967. №2. 9.

¹⁴⁷ グーセフは、当時のカザン大学法学部の学生で後に歴史学者になったピョートル・ペカルスキー（П.П.Пекарский）などの回想を典拠としている。この頃のカザン大学法学部の全般的状況については、次の論文を参照。

Емельянова И. А. Юридический факультет Казанского университета в 40 - 50-е годы XIX века // Правоведение 1980, № 5. С. 83 - 89.

Осокин)、ラトフスキー (Н. Раговский) など、それぞれにペトラシェフスキー・サークルの会員たちとつながりのある若い教員が、カザン大学に着任した¹⁴⁸。ベルヴィによれば、メイエルとこれらの教員は、「フーリエの教説を広めていた」¹⁴⁹という。

ドストエフスキーの主な罪状は、正教会を批判したベリンスキーのゴーゴリアての手紙¹⁵⁰を朗読したことにすぎず、しかも当初は銃殺刑を言い渡されていたことを思い出していただきたい (死刑執行直前に、4年の懲役刑とその後の兵役に減刑)。

実際のところ、ペトラシェフスキー・サークルとの違いは相対的なものにすぎなかったと思われる。農民蜂起の檄文や秘密文書の印刷・配布までは、話が進まなかったらしい、というだけのことだ。メイエルがトルストイに目をかけていたことはもう述べた。

ただ、そうなると思われるのは、当時の状況のなかで、こういう危険な活動を大っぴらにやっていたメイエルが、ペトラシェフスキー事件後の 1850 年代なかばには学部長に出世し、1855 年にはペテルブルグ大学法学部教授に「栄転」するということだ。たしかに、このメイエルという人物、抜群にできる人で、人柄も立派だったようだが、もしかすると、政府の「ひも付き」ではなかったか？ 学生、同僚を監視し、「情報提供」していたのではないか...。真偽のほどはわからないが、どちらにしても、こういう疑心暗鬼に陥りうる状況だったということが肝心である。唯一心服できそうな人物が、実はいちばん危なそうだと、というのは、なんともやりきれないことではないか。

一方、渦中にあったトルストイ自身が、こういう状況をどうみていたかだが、グーセフはこう述べている。トルストイは、ペトラシェフスキー事件の発覚後も、事件のことなど、ほとんどなにも知らず、だいたい革命思想など、興味も関心もなかったろう、と (グーセフ I、260 頁)。

だが、これは筆者には信じられない。日記の『訓令』と『法の精神』の比較をみるだけで、この弱冠 18 歳の若者が、どれほど骨太の教養と独自の問題意識をいっていたかが明らかだ。「理性」とも「全体」とも調和しない、現実の人間社会、ロシア社会が、俎上に乗せられて、その人為性、権力的思考を、徹底的に暴かれるという趣である。普遍的なモラルに立脚して、共和制を突き抜けて、無政府主義に近づいている感じで、これだけ透徹した深い思惟をなした青年が、ウィーン体制を根底から揺るがしつつある全欧州の潮流に風馬牛だったとは！

¹⁴⁸ Шифман А.И. Там же. С.61.

¹⁴⁹ "Голос минувшего", 1915, N 3. С.138.

ただし、シフマンとガラガンが指摘するように、メイエルとペトラシェフスキー・サークルを直接むすびつける材料は、このベルヴィの証言以外にはない。

Шифман А.И. Там же. С.63.

Галаган Г., Л.Толстой и петрашевцы, "Русская литература", 1965, № 4. С.140.

¹⁵⁰ 「キリストと教会、まして正教会との間にあなたはどのような共通点を見出したのです？ <...> 教会とは位階制にほかならず、したがって不平等の擁護者、権力への追従者、人間同士の博愛の敵、迫害者でした」などの批判が含まれている。

原卓也・小泉猛編訳『ドストエフスキーとペトラシェフスキー事件』、集英社、1971年、121-122頁。

以上まとめると、すでに多くの論者が指摘しているように、トルストイにとって、概して大学はつまらなかった。メイエルとその学生たちも、政治という次元だけでものを考え、トルストイの日記のことは借りれば「一面的」である。しかし問題は、つまらないだけでなく、剣呑でもあったことだ。メイエルは、どうも怪しげなところがあって、付き合っていると、痛くもない腹を探られ、ろくでもないことになるかもしれない。なるほど、俺の能力をもってすれば、大学を卒業するくらいわけないが、まあ逃げたほうが無難だろう。「政治主義者たち」と心中するのは御免である。こういうのが、だいたい退学の理由だったと考えてよいのではないか。

結局、あのスタンケーヴィッチ・サークルの時代、ゲルツェン、オガリョフ、ゴンチャロフらの世代とはちがって、もう大学にはどこにも身の置き所がなかった、ということだ。このころは、トルストイの学生時代に比べれば、もうすこし息がつけて、そんなに直線的に政治化していない時代だったといえよう（もっとも、1830年代の前半にはもう、フランス7月革命を受けて、大学に対する締め付けがいちだんと厳しくなるが）。

こうしてトルストイは当面のあいだ大学のみならず、カザン、モスクワ、ペテルブルグなどの大都市でも生活しにくくなり、主に自領ヤースナヤ・ポリャーナで暮らすことになった。同地の農村が、大学時代にはじめて「実験」の場となるのである。

トルストイとペトラシェフスキー事件とのかかわり

大学退学に関連し、最後にだめ押しとして、トルストイとペトラシェフスキー事件とのかかわりについて、筆者の考えを示しておこう。彼が置かれていた状況と、退学の原因がみやすくなると思うからだ。

ドストエフスキーの秘密

まずは搦め手から攻めていこう。ペトラシェフスキー事件というと、現在ではなによりも作家ドストエフスキーが連座したことで有名だ。さっき述べたように、彼の主な罪状は、正教会を批判したベリンスキーのゴーゴリアての手紙を朗読したことだったが、実は、ドストエフスキーが親友の詩人アポロン・マイコフに打ち明けたところでは、ドストエフスキーら7人は、ペトラシェフスキー・サークル内に秘密の小サークルをつくり、秘密文書を印刷する計画を決定していた。そして彼らは、メンバーの一人の設計図をもとに、手押し印刷機の部品をサンクトペテルブルクの各所に注文して、逮捕される直前に組み立て終わっていた。マイコフも、ドストエフスキーからこのサークルに入るよう誘われたという。警察の捜索に際し、うまく印刷機を隠しおおせたからよかったもの

の、見つかったいたら…。以上は、マイコフがドストエフスキーの死後に、文学史家でデルプト大学教授のパーヴェル・ヴスコヴァートフあてに書いた手紙による¹⁵¹。

これが事実ならば、ドストエフスキーは生涯、こういう恐るべき秘密をいだいて生き、死んだことになる。『罪と罰』のラスコーリニコフのような秘密を抱えた人間の描写や、『悪霊』の印刷機をめぐるエピソード、それに絡むシャートフの惨殺などの場面が鬼気迫るのもむべなるかな、だ。

ウラジーミル・ミリューチン

ちなみに、この「過激派」の小サークルには、ウラジーミル・アレクセーエヴィチ・ミリューチン（Владимир Алексеевич Милютин, 1826-1855）が含まれていた。ミリューチンはペテルブルク大学法学部卒で、すでにトルストイのカザン大学在学中から知られた経済学者、評論家になっており、雑誌「祖国雑記」と「現代人」にも寄稿していた。とくに前者に書いた「イギリスとフランスのプロレタリアートと貧困状態」、後者に寄せた「マルサスとその論敵たち」は注目を集めた。彼は逮捕を免れたが、1855年に銃で自殺している。サークルでの活動が影を落としているかどうかはわからないが、さてこの人物がトルストイと幼なじみなのである。『懺悔』によると、作家が11歳のころ、ミリューチンがある日曜日に遊びに来て、「神はいない」という「新発見」を告げたという。

ペトラシェフスキー事件の前後にも、二人のあいだになんらかの交渉があった可能性がある。というのは、会員の逮捕がはじまったのは、1849年4月22日から23日にかけての夜で、トルストイはこの年の1月からサンクトペテルブルクに滞在していたのだが、1849年2月13日に兄セルゲイあてに、「ミリューチンを見つけた」と書いているからだ。これはおそらく、ウラジーミル・ミリューチンのことだろうと、90巻全集の第56巻の解説を担当したM.ツャヴロフスキーは推測している（59, 33）。

シフマン論文では、ミリューチンは事件当時すでにサークルを離れていたことになっているが、マイコフの証言が正しければ、彼はまさに事件の核心におり、その核心部分はトルストイのすぐそばを「横切っていた」わけだ。

ニコライ・カシキンとアレクサンドル・ベクレミシェフ

また、ペトラシェフスキー・サークルの主要メンバー、ニコライ・カシキン（Николай Сергеевич Кашкин, 1829-1914）は、トルストイ自身によると、『カスカスの思い出より：ある降等兵 Из кавказских воспоминаний. Разжалованный』のモデルの一人だ。この作品の主人公の降等兵グシコーフは、かつては社交界の花形で、語り手の「私」は彼と1848年にモスクワで知り合ったのだが、「あのばかげた不幸な事件」のあとで久々に、カフカスで再会するという筋である。

¹⁵¹ 原卓也・小泉猛編訳『ドストエフスキーとペトラシェフスキー事件』、143－154頁。

カシキンは、デカブリストのセルゲイ・カシキンの息子で、リツエイ（貴族の子弟のための学習院）を卒業し、外務省に勤務するかたわら、1848年10月に自宅で社会主義とフーリエ主義の信奉者たち12名ほどを集め、「カシキン・サークル」を開いた。49年4月に逮捕され、軍法会議は初め死刑判決を下したが、一兵卒としてのカフカス勤務に替えられる。53年、ジェレズノボツク（Железноводск）でトルストイと知り合う。56年に恩赦を得て、58年に軍を退役し、カルーガ県に居を定める。カシキンとトルストイは、「君僕」のあいだがらで、生涯交流があった。

このように、ペトラシェフスキー事件につながる者たちは、カザンでもペテルブルクでもカスカスでも、トルストイのごく身近なところにいたのである。当時を生きていた人間にとっては、いつなんどき似たような事件が起きて自分も摘発されるか分からなかった。恐怖はまだ過ぎ去っておらず、事件はその意味で終わっていなかった。

やはり会員だったアレクサンドル・ペトローヴィチ・ベクレミシェフ（Александр Петрович Беклемишев）も、文字どおりトルストイの「隣にいた」。彼は、トゥーラ県アレクシンスキー郡（Алексинский уезд）の地主で、アレクシンスキー郡は、ヤースナヤ・ポリャーナのあるクラピーヴェンスキー郡に隣接する。

ベクレミシェフは、リツエイを卒業し、内務省に勤務していたが、1848年からペトラシェフスキーを訪ねるようになり、1849年3月、ペトラシェフスキーのところで、農奴解放にかんするメモを朗読した。これは、「二人の地主の往復書簡」と題されており、フーリエの考えにしたがって農業経営を行うというものだ。5月23日に逮捕されたが、9月には釈放され、1851年にはクルリャンディア県副知事に任命。復帰が早すぎるような気がする…。

トルストイが彼と付き合っていたことは証明されていないが、聞いたことくらいはあったろうし、ベクレミシェフのことにかぎらず、大いに興味をもって、いろいろと調べていたと思われる。

それというのも、ロシアの政治は今も昔も、権力者の恣意によるところが大きく、サバイバルするためには、政治的嗅覚を研ぎ澄ませておかねばならないからである。その嗅覚の鋭さは、平和ボケした法治国家日本ではなかなか想像しにくいものがある。と同時に、万一を考え、差しさわりのありそうなことはみだりに喋らず、文章にも残さない（あとで「売られる」かもしれないからだ）。トルストイの頭の中を考える場合にも、こと政治にかんしては、この点を考慮せねばならない。

見守りつつ距離を置く

このように、トルストイと事件およびその関係者とのかかわりを跡づけていくと、あちこちに接点になり得る人物や状況が浮かんでくるのだが、と同時にはっきりしたコミットメントは確認できないことが分かる——事件後のカシキンとの交流を別にすれば。一方で彼が、深い関心と独自の問題意識をもって事態を見守り、思索していたことはまちがいあるまい。

だが彼には、一面的な社会主義者たちには共感できない部分があり、一定の距離を置き、慎重に構えていたようだ。そこへ事件が起きた。それは、トルストイの知人を何人も巻き込んで、文字どおり目の前で起きた大事件だった。

ペトラシェフスキーら会員の逮捕がはじまったのは、1849年4月22日-23日の夜で、トルストイがこの年の初めからサンクトペテルブルクに滞在していたことはすでに書いた。9月までに252人が取調べを受け、22人が軍法会議にかけられて、21人が当初は死刑判決を受けるというすさまじさで、見せしめ効果を思い切りねらったものだった。

トルストイはどうしたかという、5月末か6月初めに（正確な日時は確定できない）、モスクワへ立ち去っている。

ボリス・エイヘンバウムによれば、トルストイは会員たちと付き合いがあり、巻き添えになるのを恐れて、事件の震源地から逃げた。また、当時の日記が欠けているのは、会員とかかわりのある部分を破棄したためだ、と推測している。

だが、アレクサンドル・シフマンはこれに反論し、付き合いといえるほどの関係は確認できないこと、当時トルストイが多額の借金を抱えていて、兄セルゲイが5月11日付の手紙で、「できるだけ早く帰って来い」と催促していることなどを根拠に、トルストイがペテルブルクを去ったのは、要するに借金の処理のためだと断定している。また、日記が破棄されたという推測についても、はっきりした証拠がないとして退けている¹⁵²。

だが、筆者（佐藤）は、これに納得できない。返済を迫られている借金があっても、いよいよとなれば、親戚縁者が借り替えてくれたはずで、別に自分が帰らなくてもいい。もちろん兄としては、金のかかる首都滞在でこれ以上借金を増やされては困るから、呼び戻したがるのは分かるが、カフカス時代のトルストイは、一度も帰省しなかったではないか。

筆者の考えではやはり、トルストイは、ペトラシェフスキー事件に並々ならぬ関心をもって成り行きを注視しており、側杖を食うのを恐れていたと思う。実際、ペトラシェフスキー・サークルの会員の犯した「罪」をみれば、だれが逮捕されてもおかしくない状況だったのだ。

一つおもしろい事実がある。事件当時、トルストイが滞在していたホテル「ナポレオン」は、マーラヤ・モルスカヤ通り（Малая морская улица 24）とヴォズネセンスキー通り（Вознесенский проспект 10）が交差する角にあったが、それは、シーリ（Я.К.Шиль）の持ち家（マーラヤ・モルスカヤ通り 23 A に現存）のすぐ真向かいで、そこにドストエフスキーのアパートがあった¹⁵³。彼はここで4月23日早朝に逮捕されている――。

¹⁵² トルストイとペトラシェフスキー・サークルとの接点については、以下の論文を参照。

・ Эйхенбаум Б.М. Толстой и петрашевцы, "Русская литература", 1959, № 4.

・ Галаган Г., Л.Толстой и петрашевцы, "Русская литература", 1965, № 4.

・ Шифман А. Был ли Лев Толстой петрашевцем? // Вопросы литературы. 1967. №2.

¹⁵³ Галаган Г. Там же. С.144.

第5章 帰郷からコーカサス行きまで：創作という新たな「実験室」

若い大金持ちの坊ちゃんが勝手気ままに暮らせるとなると、遊惰放蕩に流れるのは、まず自然の成り行きである。この時期のトルストイも、ときに「三拍子」そろった放蕩にふけりながらも、結局のところ、創作活動にたどりつく——。当時のトルストイについては、細部の違いこそあれ、だいたいこのような記述がなされてきた。

だが、彼の場合、放蕩（と見えるもの）と、これまでに見た彼の「実験」とは別物なのであろうか？ 放蕩と、その後のトルストイの真に恐るべき飛躍、成長とのあいだの断層をどう説明するか？

すでに見たように、10代後半の大学生時代から強烈な問題意識をいだいていたトルストイの場合、放蕩は、自分自身を素材とした実験でもあったのではないか？ ありとあらゆる状況で、自分の感情と思考の動きを凝視していたのではあるまいか？ 「単一の原理、真理への予感をいだきつつ、あらゆる具体的事物、矛盾を意識と感情の両方で、倫理的、実践的な態度でとらえていく」作業は、したたかに続けられていたのではないか？ それがゆえの、外面上の極端な迷走だったのではないか？ 逆説的に聞こえるかもしれないが、ふつうの人間が、極度の乱脈、無秩序に耐えるのは案外むずかしく、世間体のいい適当な「秩序」に逃げ込むのが落ちなのである。

深い問題意識にもとづく実験が、強靱に貫かれていたからこそ、その後のまさに驚異的な飛躍も可能になった。それをはっきり証明するだけの資料は、概して資料の乏しいこの時期にはないのだが、筆者にはそのように思われる。

そうした一貫した日常の実験を積み重ねた結果として、若きトルストイは、自分にふさわしくまた現時点で可能である、新たなそして巨大な実験室にたどりついた。それがすなわち、文学活動の開始とカフカス行きだ。

この章では、カフカス行きにいたるまでの彼の歩みを、この観点からざっと跡づけておこう。『幼年時代』そのものについては、すでに検討した。

①農地経営：農民との深淵

帰郷した若い地主は、自伝的な中編『地主の朝』によれば、自身の家計の乱脈と農民たちの貧困を目の当たりにして衝撃を受け、まず領地の経営改善にとりくんだが、すぐにその難しさを思い知らされる。経営改善を実行するためには、1847年の相続時で1470デシャチーナ（1デシャチーナ=1.09ヘクタール）、農奴330人（男子）、およそ90チャグロ¹⁵⁴という広大

¹⁵⁴ チャグロ (тягло) は、課税単位で、男女一人ずつ一組。ふつうは夫婦だが、三人一組の場合もある。年齢的には、たいてい男は18-55歳、女は結婚から50歳まで。つまり、働きざかりの年齢層だ。

な領土の経営実態、および各農家の実情を知り尽くさねばならない。これはほんとうのプロフェッショナルでなければできないことだ。だが、トルストイがぶつかった壁は、こういう実際上の問題だけではなかった。

地主貴族と農民は、利害が真っ向からぶつかり、両者のあいだには積年の敵意と不信感が根をはっている。しかも、農奴制がその歴史的役割を終え、貴族が没落していく状況では、地主が地主であるままで農民と良好で合理的な関係を築くというのは、幻想にすぎなかった。だが、当時のトルストイはまだそのことをよく分かっていなかった。彼の悪戦苦闘は、『地主の朝』その他からうかがうことができる。彼はいずれ、戦地から帰国したあとの1856—58年に、ふたたび農民と全力で格闘することになるだろう。

②農民学校：記憶に刻まれた子供たちとの交流

もうひとつトルストイが試みたのは、農民学校だ。彼の回想するところによれば、1849年にヤースナヤ・ポリャーナで農民の子弟のための学校を開いた。この学校についてはほとんど資料が残っていないが、かつての生徒エルミール・バズイキンが作家の死後、1911年に思い出を語っている（ゲーセフ I、261—263 頁）。

それによると、生徒数は20名ほどで、体罰は厳禁だった（もっとも教師がトルストイの方針に反して体罰を用いることもあった）。教師は、父ニコライの時代に音楽を演奏していた召使（屋敷勤めの農奴）。科目は、初等読本、算数、教会史など。トルストイもときどきやってきて読み書きを教えたり、子供たちと遊んだりした。たとえば、トルストイはあるときいきなり、「みんなのなかで池にもぐって、底の泥をとって来られるものはいないか？」と聞くなり、ドボンと飛び込み、しばらくして泥をつかんで上がってきた。それをみて、子供たちも我さきにつづいたという。つぎつぎに奇想天外な遊びを考え出しては子供たちを熱狂させた。¹⁵⁵

トルストイがこのころから、子供の心をつかみ熱狂させる能力をもっていたのはたしかだ。しかし、それだけでは彼が漠然と夢見ていただろう教育を実現するには不十分である。教育の理念、方法論、教材、カリキュラム、教員、スタッフ等々をどうするか。こういう具体的問題を突っ込んで研究し解決するのは、半端なことではすまない。

だから、この時期の教育活動はいわば瀬踏みにとどまったが、だが同時に、農民の子弟との交流は心に刻まれたはずだ。経営改善の無残な失敗のあと、教育以外には、農民との「架け橋」はなにもなかったからである。

③創作開始

¹⁵⁵ Панкратов А. Толстой – школьный учитель // Русское слово, 1912. № 257 от 7 ноября.

これは帝政時代の日刊紙（1895—1918）で、1897年以降は、イワン・スイチンが発行権を持っていた。この号は、トルストイ死去二周年を記念している。

残された資料で確認できるかぎりでは、トルストイは1850年12月にはじめて創作に手を染めたが、内容は、「ジプシーの生活に取材した中編小説 повесть из цыганского быта」という以外なにも分からない。しかし、ジプシーの音楽と美女といえば、トルストイはもう当時から目がなかった。モスクワ、ペテルブルグは言うにおよばず、故郷ヤースナヤ・ポリャーナに近いトゥーラにも、ジプシーの大歓楽施設があり、彼はもちろんそこに入り浸っていた。次兄セルゲイにいたっては、ジプシー娘（合唱団歌手）のマーシャ・シーシキナと同棲し、のちに正式に結婚する。

それに、ジプシーのテーマは、トルストイの非常に深いところにふれる。差別と被差別、支配と被支配の関係にある二つの世界、その二つの世界の男女の悲恋というテーマだ。だからトルストイは、ジプシーを生涯にわたって何度も作品に描いたのである¹⁵⁶。類似のテーマをもつプーシキンの傑作『ジプシー』も頭にあったかもしれない¹⁵⁷。

だが、なぜか「ジプシーの中編」は放棄されてしまい、原稿も破棄されたのか、残っていない。放棄された理由は、資料がないのでなんともいえないが、あまりにも露骨かつスキャンダラスで、おまけに自分や兄たちのプライベートに触れたからか。このあとの創作の性格からそう推測されるのである。では、それはどんなものだったか。

「ジプシーの中編」以後の創作は、のちに『幼年時代』になったものか、それに関連した習作がほとんどである。これら一連の作をつらぬく究極の目的は、ありとあらゆる現象を総ざらいし、そこから「生を導いてくれるような一般的原理」を抽出することだった。『幼年時代』の前半は、わずか一日の出来事を描いたものだし、『昨日の話』は、昨日の話をする

¹⁵⁶ 『戦争と平和』、『生ける屍』、『愛はいかに滅びるか（クリスマス週間の夜 Святочная ночь）』（1853年に書かれたこの作品には、ジプシー音楽にかんする評論風の一節がある）など。また、『復活』のヒロイン、カチューシャは、旅回りのジプシーと百姓女の間に生まれた。

なお、トルストイは次兄セルゲイにジプシーの言葉を手ほどきされ、手紙のなかでも使っている。どんな言葉をどこで使っているか徹底的に調査したユニークな論文がある。

(Шаповал В. В. Цыганская речь у Льва Толстого // Сибирский лингвистический семинар. Новосибирск, 2001, № 2. С. 48-53)

トルストイの「ジプシー語」の例を挙げると、たとえば、セルゲイとマーシャあてにカフカスのチフリス（現トビリシ）から出した手紙（1851年12月23日付〈59, 132〉）に、こう書いている。

ジプシーの言葉はすっかり忘れてしまいました<…>。「カママトゥ」だけは覚えているので、それを心からあなたに言いたい。

По Цыгански я совсем забыл <…> Одно помню камамату и говорю его тебе от души.

「カママトゥ камама ту」は「あなたを愛する」の意味で、サンスクリット語のカーマ（愛）と同根であると考えられる。経典『カーマ・スートラ』のカーマだ。

¹⁵⁷ 『ジプシー』はトルストイの愛読書で、若いころから晩年にいたるまで、日記、書簡、作品のなかで、数度触れている。最初の言及は、カフカスを去った年つまり1854年の7月9日の日記に現れる。「プーシキンでぼくを驚かせたのは『ジプシー』だ。奇妙なことだが、今まではよく分からなかった」（47, 10）。つまり、カフカス、コサック体験を経てから、身にしみるようになったわけである。

なお日本では、「ジプシー」が差別用語とされ、かわりに「ロマ」が使われるケースが増えているが、ジプシーにはロマ（北インドのロマニ系に由来する）以外の民族も含まれるため、定着するにはいたっていない。

にはまず、おとといの話をせねばならぬというので、一昨日のことを片端から語っているうちに終わってしまう。しかも、その語りかたは、いく人もの研究者が指摘するように、ローレンス・スターンのそれを思わせるものになっている。当時トルストイは、スターンの『トリストラム・シャンディー』、『センチメンタル・ジャーニー』を熟読していた。

『トリストラム・シャンディー』の語り手は、自分の生涯を物語るのだが、まず両親による「しこみ」の瞬間からはじめるという奇想天外ぶりで、その“瞬間”がまた一風変わったものだ。作品の展開も人を食っており、思考と感情のおもむくままに脱線に脱線を重ねていく。

「ねえ、あなた」私の母が申したのです。「あなた時計をまくのをお忘れになったのじゃなくて？」——「いやはや、呆れたもんだ」父はさげびました。〈…〉「天地創造の時このかた、かりにもこんな馬鹿な質問で男の腰を折った女があったらどうか？」¹⁵⁸

だがトルストイはただスターンを真似したのではない。さっき実験について述べたことからあきらかなように、自分の実験にふさわしい語り口をそこにみて、意識的にあるていど利用したということである。「単一の原理、真理への予感をいだきつつ、あらゆる具体的事物、矛盾を意識と感情の両方で、倫理的、実践的な態度でとらえていく」には、まさにこういうやりかたが好都合だからだ。かりにトルストイがスターンを読まなかったとしても、いずれ彼は、独自の「ロマネスクな方法」に達したろう（前に触れたように、ルソーは『告白』で、自分はものごとを時系列順には描かない、あらゆる感情、思考、行動をそれが現れるままに描く、とはじめに書いている。この方法を哲学者アランは「ロマネスクな方法」と呼んだ¹⁵⁹）。だから、「ジプシーの中編」に話をもどすと、ジプシーとの付き合いやどんちゃん騒ぎをその調子で描破するわけにはいかなかったらう。

とはいうものの、こういうやりかたでトルストイの文学的実験がそのままうまくいったわけではなかった。彼が自認するとおり、これは玉ねぎの皮むきみたいなもので、いくらむいても、「生を導く原理なんてぜんぜん出てこなかった。出てきたのは、偶然と運命ばかりだった」（『幼年時代』第1稿導入部〈1, 103〉）。

彼の実験が最初の成功を収めるには、なんらかの「にがり」が必要だった。そのなにかを探求しながら、彼はコーカサスへ旅立つのである。

¹⁵⁸ ローレンス・スターン『トリストラム・シャンディー』（朱牟田夏雄訳）、岩波文庫、上巻（全3冊）、1969年、35頁。

¹⁵⁹ 北米を代表するトルストイ研究者の一人であるドンナ・オールヴィン氏は、ルソー『告白』における人間と出来事の描写の仕方が、トルストイをインスパイアした可能性を指摘している。筆者はこれに賛成だ。

ドンナ・オールヴィン「Л.Н.Толстой и философия открытого отказа от философии」// Толстовский ежегодник 2002. С.418—422.

第6章 『襲撃』: 真の勇気とは?

運命の声を聞き、カフカスへ

エカテリーナ二世は、不凍港とコンスタンティノーブルを求めて、黒海とカフカスに進出しはじめた。いわゆる南下政策だ。カフカスの諸民族のなかで最も頑強に抵抗したのは、また今日にいたるまで抵抗しつづけているのはチェチェン人である。1850年代にはカフカス征服をもくろむニコライ一世の軍隊と、イマーム（宗教最高指導者）シャミーリの指導するチェチェン、ダゲスタンが激烈な戦闘をくりひろげていた。露軍の戦法は、要塞線を延ばしつつ森林を伐採して相手を追い込み、征服地を広げていくというものだった。

トルストイがカフカスにやってきた1851年には、ロシア軍あいてに数々の戦功をたてたダゲスタン人（アヴァール人）、ハジ・ムラートが、シャミーリと不和になり、ロシア軍に寝返るという事件が起きている。

ニコライ一世は、ハジをうまく利用して相手の勢力を切り崩すことをせず、正面から大攻勢をかけた。「ハジ・ムラートの投降は『黒人ども』が戦意を喪失した証である」というわけだ。これは逆に、チェチェン、ダゲスタンを結束させて戦意を高め、露軍はいたずらに犠牲者を増やす結果となった。立場を失ったハジは、露軍から脱走したが、コサックに殺された。この辺のいきさつは、トルストイの軍記物、『襲撃』、『森林伐採』、そして最晩年の『ハジ・ムラート』などに描かれている。¹⁶⁰

¹⁶⁰ トルストイとハジ・ムラートは、ちょうど同じ時期にグルジアのチフリス（現トビリシ）に滞在している。

トルストイは1851年5月30日に、テレク・コサック村、スタログラドコフスカヤ村に着き、同年11月1日から翌年初めまでは、試験を受けて正式に軍隊に入るため、チフリスに逗留した。

すると、51年11月15日、地元チフリスの「カフカス」紙が、「シャミーリとハジ・ムラートの深刻な不和」について伝え、12月11日には、その不和の結果、ハジが露軍に寝返ったことを報じた。その後、ハジがチフリスに連れて来られると、同市はたいへんな騒ぎとなり、この「怪物」を「舞踏会やレズギンカでもてなした」という。

これに関連し、トルストイは12月23日、次兄セルゲイにこう書いている。「シャミーリに次ぐ№2のハジ・ムラートが先ごろ、ロシア政府に投降しました。これはチェチェン第一の勇士（ジギート）でつわものですが、卑劣なことをしましたね」（59, 132-133）。トルストイのハジにかんする最初の言及である。

- Присяжнюк И.В. Уроки повести Л.Н. Толстого «Хаджи-Мурат».
http://lit.1september.ru/view_article.php?ID=200901210 (2015年9月5日最終閲覧)
- ゲーセフ I、319-324頁。

なお、この時期のカフカスとハジ・ムラートについては、以下の著書を参照。

- Лорис-Меликов М.Т. «Записка о Хаджи-Мурате» // «Русская старина», 1881. Т. 30. С.668-679.

ハジは投降した際、アルメニア人の騎兵将校、ミハイル・ロリス＝メリコフに、生い立ち、シャミーリとの確執、逃走の経緯などについて語っている。これはその聞き書きである。ロリス＝メリコフは、後にアレクサンドル二世のもとで内務大臣として内政の改革案を作成し、承認されたが、まさにその当日、1881年3月1日（13日）に、ツァーリが「人民の意志」派により爆殺され、案は白紙撤回された。

なぜトルストイは、突然カフカスへ旅立ったのか。まず、消極的な理由からいうと、農村にこれ以上とどまって「三拍子」にはまった生活をしていてもしかたない、ということがあったろう。経営改善と教育活動の「瀬踏み」はもう終わったので、当面農村にいらなくてもいい。

では、なぜカフカスなのか。大学入学のところでみたように、ロシア人のいわゆる「東」(Восток)は、トルストイを惹きつけつづけていた。しかもそこへ、おりよく長兄ニコライが休暇で一時帰郷した。彼は、長年カフカスの最前線で軍隊に勤務し、同地の状況を知悉していた。トルストイはその兄に同行をすすめられ、承諾する。出発は、1851年4月29日のことだった。

肝心なのは、カフカス行きが、決してたんなる気まぐれや好奇心でも、逃避でもなかったことだ。出発に先立つ51年3月にはすでに、『幼年時代』第1稿を書き終え、創作にたしかかな手ごたえを感じていたから、よけいそんなことはありえない。ゲーセフが言うように、「ひとりになるため、貧苦を味わい、貧苦のなかに身をおくため、危険をあじわい、危険のなかに身をおくため、おのれの過ちを労苦と窮乏であがなうため、古い軌道から抜け出し、一切を新たにはじめるため」¹⁶¹ということだったのか。

だが、トルストイの本音は、言葉にすると嘘になるような類のものだったのではないか。一般にだれしも、大きな決断であればあるほど、何者かによる無言の促しを感じ、運命の声を聞くものだ。彼がカフカスに着いたのちに「自分はなぜここへ来てしまったのか？わからない」と自問自答するのは、運命への驚きだと理解すべきだろう。

本格的文筆活動を開始：農民＝兵士のキリスト

まさにコーカサスでトルストイは、本格的文筆活動を開始し、一気に一流作家と認められるにいたる。彼の同地での創作は、あえていえば、二とおりにわけられる。一つは、主として自分の内面に目を向け、過去を思い起こし、生を導く原理をとらえようとするもの。『幼年時代』にはじまる自伝三部作などがこの系列に入る。これについては、冒頭ですでにくわしく述べたとおりだ。

もう一つは、主に、若きトルストイを圧倒した外界に目を向けたもの。自然に溶け込んだコサック、チェチェン人、露軍での生活、将校、兵士とのつきあい、ギャンブル、戦闘など

・山内昌之『世界の歴史20：近代イスラームの挑戦』（中公文庫）、2008年、381－397頁。
・山内昌之『ラディカル・ヒストリー——ロシア史とイスラム史のフロンティア』（中公新書）、1991年、109－141頁。
・Сергеенко А.П. Хаджи-Мурат Льва Толстого. История создания повести. М.: Современник, 1983. この本の第2部には、ハジ・ムラート関連の資料が整理されて収められている。
・Казиев Ш.М. Имам Шамиль. Серия «Жизнь замечательных людей» (ЖЗЛ). М.: Молодая гвардия, 2010. С.214-228.

¹⁶¹ 『コサック』草稿。ゲーセフI、291頁を参照。

をルポ風にしたものだ。『襲撃』、『森を伐る』、1853年に起稿される『コサック』などが代表例である。しかしそのいずれもが、大学時代にはじまった実験の一環である点ではおなじで、「偶然と運命」を超えるなにものかを目指していた。

偶然と運命を超えた、不条理な死を超えた、世界の調和。その基盤には、女性の愛と家庭。しかし、こうした作家の理想は、エロスと死の猛威のまえに、つねに崩壊寸前だった。

こういう問題の全貌が、ここカフカスで浮かび上がってくる。その解決の糸口のひとつは、まさしくチェチェンである。それこそは、実は、トルストイがみた最も理想的な世界であり、エロスと母性が、悠久の自然のなかで、死と戦いとさえ溶け合っているように思われた。

しかし、この世界を作家が描きえたのは、ようやく10年後、1862年12月のことだ。この長いプロセスは、彼が、コサック、チェチェンの世界を断念する過程である。それが自分に無縁であることを納得する過程だ。『コサック』で、トルストイの全問題は、最も美しい純粹な総合的表現を得たが、それは見果てぬ夢としてであった。問題は、そのまま残ったのである。しかし、それはまだ先の話だ。順を追って、第二系列を最初からみていこう。

第二系列の作品

第2系列では、黙々となすべきことをなす、謙虚なフローポフ大尉（『襲撃』）、懲遷と死んでいく兵士たちが浮かび上がってくる。『森を伐る』には、木の根元に置き去りにされる兵士の話がでてくるが、これは『戦争と平和』のプラトン・カラターエフの死を思わせる。

『ロシアの兵士はどんな死にかたをするか Как умирают русские солдаты』では、兵士ボンダリチュークの死が描かれ、「スラヴ民族の運命は偉大である！ この民族に、この魂の沈着な力、偉大なる単純さ、大いなる意識されざる力が授けられたのはゆえなきことではない！...」*«Велики судьбы славянского народа! Недаром дана ему эта спокойная сила души, эта великая простота и бессознательность силы!...»*と作者は感嘆する。これらの兵士はみな、あの不可解で恐ろしい農民、たがいに絶望的に憎みあっていてどんな接点もないように思えた農民だ。その彼らが、いかに生き死ねべきか、その秘密に徹している！...

第二系列の出発点に位置するのは、名作『襲撃』だ。立ちどまってくわしくみよう。

ビリュコフ版『襲撃』は、トルストイの「実験」の原型に近い

前にちょっと書いたが、政治、宗教、戦争など差しさわりのあるテーマがふくまれる作品で、トルストイが、ほんとうに書きたいことを遠慮会釈なく書いた作品は、『懺悔』以降の後期作品を別とすれば、皆無である。検閲を意識せずに書くことは不可能だったからだ。しかし、そのなかでもいちばん率直に、韜晦せずに書けた作品はといえば、まさにこの『襲撃』である。

なるほど、処女作『幼年時代』は、作家が検閲の実情をまだよく知らなかったこともあり、わりあい自由に書いた。だが作家が、最終稿（第4稿）のコピーをとっておかなかったため、

検閲でずたずたになって発表された版しか残っていない（ゲーセフ I、374 頁）。

次作の『襲撃』の場合、トルストイは、もう検閲の「洗礼」を受けていたが、どうしても書きたいことがあった。なにをどう書きたかったか、どこで妥協を強いられたか、これだけは譲れぬという線をどこに引いたか——その創作過程、そして、苦しみながらもたどり着いた最終稿は、再現可能である。というのは、さいわいにして、草稿と最終稿の未発表部分とがちゃんと保存されており、しかも、どの箇所が検閲で削られたかが、「マコヴィツキー・ノート」に記録されたトルストイ自身の証言により特定できるからだ。

1910年に、ソフィア夫人は、夫の新著作集の刊行準備をすすめていたのだが、長男セルゲイは、『襲撃』の最終稿を確かめようとして、未発表部分をぜんぶ父に読んで聞かせた。父は、それらはぜんぶ、検閲で削られたと証言している。

L.N.は覚えていた。それらは、ネクラーフによって削られたわけではなく、彼の文学上の判断によるものでもなく、検閲によるものであった。たとえば、正義はだれの側にあるか、ボロをまとい、自分の家族と小屋と家財道具を守ろうとするチェチェン人の側にか、それとも、副官のポストをねらっているロシア人士官か、ザクセンの将校（*ローゼン克蘭ツ中尉のこと——佐藤）の側にか、という長いすぐれた考察である。L.N.は、この考察が削られて腹が立ったことを覚えていた。また彼は、現在とまったく同じ、このような考えを当時すでに表していたとは驚きだ、と言った。

「削られた箇所は入れなければならない」とL.N.は言った。

（『マコヴィツキー・ノート』1910年4月18日）¹⁶²

トルストイの証言と希望にもとづき、最終稿を再現したのが、ビリュコーフ版である。だから、『襲撃』は、彼の思考と感情による「実験」の原型を比較的ありのままにみせてくれる点で、じつに貴重なのだ。こういうケースを考えると、無条件に90巻全集を定本にするのは問題であり、ケース・バイ・ケースで考えるべきだろう。

それにしても、検閲の斧は、若い未経験なトルストイにとって、その希望的観測よりもはるかに強力だったようだ。

ぼくの短編が載った本（*「現代人」）を受けとったが、短編は、惨憺たる状態にされていた。（1853年4月28日日記〈46,160〉）

雑誌「現代人」編集長、詩人ネクラーフも、そのひどさを認めて、作家をなだめる。

¹⁶² ニコライ・ゲーセフは、このマコヴィツキーの記述にもとづいて、「ネクラーフが検閲上の配慮で削った」と述べている。ケアレミスである（ゲーセフI、413-414頁）。

正直申しますが、わたしは、さんざん汚された校正刷をみて、長いこと考えました——そして、ついに印刷する決意をしました。なるほど、ひどく損なわれはしたが、それでもまだ良い点がたくさん残っているとはっきり確信したからです。（1853年4月6日付書簡¹⁶³）

検閲の実例については、あとで述べるが、一例を挙げておくと、最終稿（ビリュコーフ版）に、ロシア軍によるチェチェン部落の略奪の場面があった。草稿では、ロシア兵がチェチェン女性を赤ん坊もろとも斬殺するのだが、最終稿では、無人の部落で家屋に火を放ったり破壊したり、麦袋や鶏を奪ったりするだけ。「現代人」に発表された版、1856年版、90巻全集版にいたっては、略奪そのものが削除されてしまう。

「さあ、どうかね、大佐」と将軍は言いはじめた。「略奪をゆるしたら。もうみんなうずうずしているようじゃないか」。彼は、笑いながら、コサックたちのほうを指して、言い足した。（ビリュコーフ版『襲撃』9章）

『襲撃』のあとでは、こういうことはぜんぶ織り込みずみで、自己検閲しながら作品を書かねばならなくなった、ということなのだ。では、その「作品」をみよう——もちろん、ビリュコーフ版で。

「真の勇気とはなにか」

冒頭でトルストイは、真の勇気とはなにか、と問う。

勇気とはいったいなんだろうか？ あらゆる時代、あらゆる民族において尊重されている、この資質は、なんなのか？ この良い資質であるはずのものが、ほかの資質とはちがって、ときに不道德な人間のなかにもみいだされるのはなぜか？ いったい勇気とは、平気で危険に堪えられる肉体的能力にすぎず、高い背丈とか強壮な体格などとおなじように尊重されるだけなのだろうか？ 鞭をおそれて、断崖からむこうみずに飛び降り、転落死する馬を、勇者と呼ぶことができるだろうか？ 罰をこわがって無鉄砲に森に駆け込み迷子になる子供や、恥辱をおそれて自分の子供を殺し罰せられる女や、虚栄心から自分とおなじ人間を殺す気になり、自分が殺される危険に身をさらす男を勇者と呼べるものだろうか？（『襲撃』1章）¹⁶⁴

いかにもトルストイらしく肺腑を突く言だが、この部分は、検閲でばっさり削られている。

¹⁶³ Некрасов Н.А. Полн. собр. соч. и писем. М., 1952. Т.10. С.190-191.

¹⁶⁴ Полное собрание сочинений Льва Николаевича Толстого. Под редакцией и с примечаниями П.И.Бирюкова. Издание Т-ва И.Д.Сытина, 1912. Т.2. С. 5-6.

さて、この冒頭の考察では、真の勇気とはなにか、という問いは、最大の恐怖とはなにか、そしてそれをいかに克服すべきかという問いに置き換えられる。罰、恥辱、死...などのうち、なにがいちばん怖いかは、一概には言えないし、たんに無鉄砲に危険にむかって突進する「勇士」は、馬なみに考えられている。

だから、『襲撃』の問いは、『幼年時代』と通底しているわけだ。女中頭ナターリア・サーヴィシナが死んだとき、ニコレンカは、「彼女は、人間として最も偉大なことをなした。恐怖も心残りもなしに死んだのだ」と実感した。

なぜ恐怖を感じなかったかという、死に滅ぼされないなにもものかがあることを信じていたからにちがいない。これは、ママンの、死をまえにしての確信に通じており、真の勇気といえるのではないか？ ということは、自分もまた、その確信に達することができるならば、幼年時代のあの世界がいまなお現前しているさまをみることができるだろう。そのとき、死は克服されるだろう。だとすれば、「真の勇気」は、自分の理想への突破口になりうる——。こうトルストイは考えたはずである。

『襲撃』にもどると、この問題提起のあとに、「わたし」の尊敬するフローポフ大尉との会話がつづく。大尉は小地主の息子で、白髪の年配者だ。給料が割り増しされるというので、ずっとカフカスに勤務して、老母にせつせと仕送りしている。彼との会話から「わたし」は、勇気とは「恐れるべきものだけを恐れ、恐れるべきでないものは恐れないこと」と理解する。では、恐れるべきものとはなんなのか。死は恐れるべきでないのか。どうしたらそんなことが可能になるのか。

「わたし」は、この問いの答えを、ヒントを、いたるところに探し求める。上は將軍から下は一兵卒にいたる、ありとあらゆる将兵の言動に、荘厳なる自然に、そして自分の心の動きに——。彼が、「感情と理性の双方をもって」、一切の事象にどこまで肉迫し、凝視し、分解したかは、つぎのような一見さりげない自然描写にさえ、はっきりみてとれよう。

部隊には、その全体にわたって、深い静寂がゆきわたり、神秘的な魅惑にみちた、夜のありとあらゆる響きが溶け合うさまが、はっきり聞き分けられるほどだった。山犬たちの哀しげな遠吠えは、ときにやけな泣き声、ときに笑い声に似ている。コオロギ、蛙、うずらのよく響く単調な歌、またなにかのどよめきが近づいてくるが、その原因はわたしにはどうしてもわからない。そして、かすかに聞きとれるだけで、その理由もわからず、正体も不明な、自然のすべての動きが、ひとつの美しい音に溶け合うのだった。こういう音を、われわれは、夜のしじまと呼んでいるのだ。この静寂は、ゆっくり移動する部隊がたてる、にぶい馬蹄の響きと丈高い草のそよぎで、破られるというよりは、むしろそれと溶け合うのだった。（『襲撃』6章）

そのうち、実戦をはじめて眼にする機会がやってくる。兵士が砲弾を浴びて、ぐしゃりと

潰れるのを目撃した「わたし」は、「この恐ろしい光景を忘れるためなら、どんな代償を払ってもいい！」と震え上がる。死は「恐れるべきでない」どころじゃないのだ。死と自然をまえに、人間の営為は、どれもこれもその空しさと卑小さをさらけ出す。

「向こう見ずな勇士」として全連隊に知られているローゼンクランツ中尉はどうだったか？ 彼は、「いつもより青ざめながらも」、たえず叫び、射ちまくり、散兵線のはしからはしまで馬を飛ばしながら、中隊を指揮しているが、戦況に影響があるのかないのかよく分からない。

チェチェンの勇士を気どり、いつもそれ風の服装をしている、このザクセン人には、はっきりしたモデル、ピストリコルス二等大尉がいた。トルストイは、「ローゼンクランツを書いたせいで、ピストリコルスにののしられた」と日記に記している（1853年12月16日付）。かつてカフカスに長く勤務した軍事史家アルノルド・ジッセルマン（Арнольд Львович Зиссерман）もまた、回想『カフカスの二十五年』のなかで、ピストリコルスがモデルだと証言しているのだが、それより興味ぶかいのは、こういう「チェチェンかぶれ」が少なからずいたと言っていることだ。「ピストリコルスのような手合いは少なくなかった。なかには、イスラムを受け入れて完全にチェチェン化しかねないほど惚れ込む者までいた」とのこと¹⁶⁵。その点は、『コサック』のオレーニンも同じだったから、ローゼンクランツという戯画は、あるていど作家その人に向けられたものでもあったことになる。作家自身の「チェチェン化」がしょせん物まねに終わらざるをえないことが、すでにこの時期から自覚されつつあったわけだ。いくらそれらしい格好をしても、チェチェン人のクナーク（親友）をもっても、愛人を囲っても、そのものにはなれない、と。

が、そんななかであって、フローポフ大尉は、まったくいつもどおりの態度で中隊を指揮しており、必要最小限の指示しかしない。なぜなら、「兵士はみな自分のやるべきことをわきまえてちゃんと実行していたので、いまさら命令することはなかった」（第10章）。大尉はどこがちがう、と「わたし」に思わせる。

彼は、いつもわたしがみているままの彼だった。おなじ落ち着いた動作、おなじなだらかな声、おなじ、美しくはないが純朴な顔立ちの、率直な表情。ただ、ふだんより輝いているまなざしに、落ち着いて自分の仕事にいそしんでいる人の注意力がみとめられるばかりだった。いつもとおなじ、と口でいうのはやさしい。しかし、ほかの人たちには、わたしはどれだけ多くのさまざまな陰影をみたことだろう。（『襲撃』10章。下線部は原文イタリック）

砲弾が降り注ぐなかで、平時に馬の世話でもするように、自分の仕事にいそしめる、とは

¹⁶⁵ Зиссерман А.Л. «Двадцать пять лет на Кавказе, 1842—1867», ч. II, СПб., 1879. С. 326. Грәсеф I, 409—410 頁。

どういうことか？ なぞを解く鍵は、やはり大尉にありそうだ、と「わたし」が感じていると、こんな場面に際会する。

学校を出立てのアラーニン少尉補が、初陣で舞い上がり、むちゃな突撃をして、致命傷を受ける（彼は、『戦争と平和』のペーチャ・ロストフ、『八月のセヴァストーポリ』のコゼリツォフ弟の原型だ）。将校はみな、瀕死の若者を励ますが、彼は、絶望と孤独感にうちめめされている。勇士気どりのローゼン克蘭ツ中尉の磊落ぶったことばや、軍医のかたちだけの「治療」は、彼をいらだたせるだけだ。酔っ払った軍医は、震える手で傷口をかきまわすのだが、この箇所は検閲で削除される。

「ああ、かわいそうに！」。わたしは、この悲しい光景から顔をそむけ、思わずひとりごちた。

「そりゃあ、かわいそうでさあ」と、わたしのかたわらに、暗いきびしい顔つきで、銃によりかかって立っていた老兵が言った。「あの人は、怖いということを知らなかったんだよ。とんでもねえことだ！」と、じっと負傷者に見入りながら、つけくわえた。

「まだ考えがたりなかったんで、罰があたったんだよ」

「じゃあ、おまえは怖いのかい？」わたしは聞いた。

「怖くなくてどうしますね！」

（『襲撃』10章）

死は怖いのがあたりまえで、ローゼン克蘭ツみたいにやせ我慢してみせても、なんの意味もない。では、勇気とはなんなのか、救いはどこにあるのか——。「わたし」は、振り出しにもどってしまう。すると、フローポフがアラーニンのところへやってくる。

「どうだね、アナトーリー・イワーヌイチ？」と彼は、わたしの思いもよらなかった、やさしい同情のこもった声で尋ねた。「どうやら、神さまの思し召らしいね」

傷ついた少尉は眼をむけた。蒼白な顔が、悲しげな微笑を浮かべ、生気を帯びた。

「あなたのおっしゃることを聞かなかったものですから」

「神さまの思し召しだと言ったほうがいいよ」と大尉はくりかえした。

（『襲撃』11章）

「〈大尉のやさしい人柄を知っていた〉わたしでさえ思いもよらなかった、ふかい同情、そして「神のみ心」——これだけが、絶望した若者をなぐさめる。

死はたしかに怖い、それより畏怖すべきものがある。それは神である——。そのことをほんとうに知る者が、真に勇気ある者である。そこから、同情心も同胞愛も流れ出し、死生観も定まる。それを体得しているのは、フローポフや一兵卒である。これが、『襲撃』のひ

とつの結論であった。なるほど、いまの自分は、「真の勇者」にはほど遠い。しかし、勇者は少なからずいる、それらもごく身近なところにいる。自分の母や老女中頭やフローポフのような将校、そしてすくなからぬ兵士たち。これはまぎれもない現実であり、自分は、彼らに学び、認識し、生きることが可能であるはずだ。

ちなみにフローポフ大尉（капитан Хлопов）にも、トルストイが自認するように、具体的なモデル、ヒルコフスキー（Хилковский）がいたのだが、おもしろいのは、家出と死の年、1910年にいたっても、長男セルゲイに「落ち着いた、物静かな、すばらしい人だった」と回想していることだ（マコヴィツキー・ノート、1910年4月18日。グーセフ I、411頁）。この人物の思い出は、トルストイ主義が創造された後でもなお色あせなかった。というよりも、トルストイ主義の根の一つがこの人物にあった、『襲撃』から文豪の死にいたるまで一筋の道が通じていた、ということだろう。

すばらしい老人！——単純で（良い意味で）、勇敢だ。

（1852年3月21日付け日記（46, 97））

年配のヒルコフスキー大尉は、ウラル・コサックの出身で、単純ですが、高貴で、勇敢で、善良な人です。

（叔母ヨールゴリスカヤあて 1851年6月22日付け書簡〈第59巻、書簡45〉）

ヒルコフスキーは、トルストイがカフカスを去ってまもなく、1854年に死んだ（46, 353）。

なお、グーセフは、作家の長兄ニコライにも、フローポフと共通した点が多々あったと指摘し、モデルのひとりとなった可能性を示唆している（グーセフ I、411頁）。

さて、第一の結論から第二の結論が導き出される。

『幼年時代』のやさしさの反面のはげしさ

フローポフ大尉は、ロシア軍の略奪にはくわわらない。神を畏れる者からすれば、それは犯罪にほかならないからだ。したがって、にやにやしなながら略奪を「許可」する将軍や幕僚は、犯罪者である。こういう略奪、侵略を本質とした戦争をはじめたニコライ一世は、その元凶だ——。

なるほど、最終稿（ビリュコーフ版）には、カフカス戦争に自衛の側面があるとの指摘があり、「わたし」が、あるていど、この戦争を擁護しているように受けとれなくもないが、その前の版には、こうした文言はいっさいない。それどころか、「この戦争に利益と満足のみいだすように、あらゆる人間に強制した人物」という意味深長な箇所もある。グーセフは、「これがニコライ一世その人を指すことは明々白々だ」と言い切っている（グーセフ I、415頁）。しかも、最終稿でさえ、つぎのようなロシア側へのはげしい批判があるから、グーセ

フは、自衛云々の文句は検閲対策だと推測している。筆者も、それは明白だと思う。

ロシア人対山人の戦争において、自己保存の感情から流れ出た正義が、わがほうにあることをだれが疑うであろう？ もしこの戦いがなかったら、何が隣接した富裕な、ひらけたロシアの領土を、野蛮で好戦的な国民の略奪や、殺害や、襲撃から保証するか？ しかしここはまず、双方の個人を例にとってみよう。はたしてどちらのがわに自己保存の感情、すなわち正義があるか。あのぼろ服をまとったどこかのジェミー——ロシア人の接近を知って、呪いの言葉とともに壁から旋条銃をとりおろし、容易にははなため三、四発の弾薬を用意して、異端者どものほうへ駆け出し、ロシア人が依然として前進をつづけ、彼らの播きつけた畑へ踏みこんでそれを荒らし、彼の小屋を焼き、彼の母や妻子が恐れにふるえながらかくれている谷間のほうへ進んでくるのを見て、これでは自分を幸福にしてくれるものをなにもかもとりあげられてしまうのだと考え——力ない憤怒に絶望の叫びを上げて、まもっていたぼろぼろの外套をかなぐり捨て、銃を地べたへたたきつけて、帽子を目の上まで引き下げ、臨終のうたをうたって、短剣さか手に、死にも狂いにロシア兵の銃剣のなかへとびこんで行く男のほうにあるか？ それともまた、将軍の幕僚のひとりで、私たちのそばをとおりすぎるたびにいかにもうまくフランスの歌をうたう、あの将校のほうにあるのか？ 彼はロシア本国に家族を持ち、親戚を持ち、友人を持ち、百姓を持って、彼らとの関係ではいろんな義務を持っているけれども、山人と戦うべきなんの理由も希望も持ち合わせてはいなくせに、カフカーズへやって来た男である...ただ漫然と、自分の勇気を示したいばかりに。それともまた、これもやはり、ただすこしも早く大尉に昇進して、いい地位にすわりたいと、そればかり望んでいて、こんどほんの偶然に山人どもの敵になったような、私の知人の副官のほうにあるのだろうか？ さらにまた、あのつよいドイツ訛りのアクセントで、砲兵から火薬杖を要求していたあの若いドイツ人がわにあるのだろうか？ カスパル・ラヴレンチイチは、私の知るかぎりでは、サクソニヤ生まれの男である。この男に、カフカーズの山人となんの交渉があるか？ どんな魔が彼を祖国から連れだして、こんな遠くまでこさせたのか？ いったいなんの理由があって、サクソニヤのカスパル・ラヴレンチイチが、不安な隣人たちとのわれわれの血まみれ騒ぎに介入するのか？¹⁶⁶

もちろん、この箇所は、検閲でまるごと削除された。帝政時代、ソ連時代をへて今日にいたるまで、最終稿ではなく 1856 年版が「決定稿」とみなされている理由は明らかだろう。ち

¹⁶⁶ 中村白葉訳『侵入』、『トルストイ全集 2』所収、河出書房新社、279 頁。
この全集では、『襲撃』を訳すのに、ビリュコーフ版が使われている。翻訳者と編集者の見識だ。

なみに、プーチン時代に出た「新全集」でもそうである（第2巻収録、2002年刊）¹⁶⁷。『襲撃』の状況は今なおアクチュアルであり、そこでの「わたし」の激的な批判は、多くのロシア人を反発させるのだ。

それにしても、さきに引用した、当のトルストイ自身の言い分を聞くと、56年版を踏襲し続けているのは、いかにも理不尽である。なにしろ、当の作者が削除箇所を特定したうえで、元にもどしてほしい、と言っているのだ！

筆者は、現在刊行中の新全集の第2巻が出る前、いくらなんでも今度は削除箇所が復元されるだろうと期待した。第2巻でテキストを確定し解説を書いたのは、ニーナ・イリダーロヴァ・ブルナシヨワ氏で、優秀な研究者であり、おまけにタタール人だから、多少は被差別者側にコミットするのでは、と思ったのだが、期待はずれに終わった。「56年版を生前のトルストイが黙認していたから」という理由で、この版を採用していたのだ。採用せざるをえなかったところに——長いものに巻かれざるをえなかったところに——、帝政時代から現代にまでいたるロシアの問題がある。換言すれば、『襲撃』の今日性とラディカルさがあるのだ。

この作品のまえに書かれた『幼年時代』を読むと、一見、感傷的で牧歌的な母性愛賛歌にすぎないようにみえるが、それは実は、暴力の徹底した排除、批判の反面だったということである。そのことが、『襲撃』ではっきりわかる。『幼年』のやさしさは、非常なはげしさを蔵していたのだ。

もうひとつ重要なのは、トルストイが、『襲撃』で、農民を再発見したということだ。神を畏れる真の勇者は、一兵卒やナターリア・サーヴィシナなど、最下層の農民出身が多い。また、ロシア人だけとはかぎらず、露軍の敵である山岳民にも、勇者がたくさんいた。人種、階層を超えて、彼らに学ばねばならない。これが、トルストイのリベラリズムのひとつの根源である。そこで、次作『森を伐る』では、兵士の徹底した観察がなされることになるのだ。

次章では、『森を伐る』を通して、「農民の再発見」の内実を捉えるよう努める。問題は、発見の中身だ。

¹⁶⁷ Толстой Л. Н. Полное собрание сочинений: В 100 т. Художественные произведения: В 18 т. / РАН; Ин-т мировой лит. им. А. М. Горького; Ред. коллегия: Г. Я. Галаган, Л. Д. Громова - Опульская (гл.ред.), Ф. Ф. Кузнецов, К. Н. Ломунов, П. В. Палиевский, А. М. Панченко, С. М. Толстая, В. И. Толстой. М.: Наука, 2000—...

Т. 2. Художественные произведения, 1852—1856 / Подг. текста и коммент.: Н. И. Бурнашева; Ред. тома Л. Д. Громова - Опульская, 2002.

ブルナシヨワ氏にはほかに、『襲撃』の最後の場面（エイヘンバウムが梓付けと呼んだ、自然と部隊の帰還を描いた場面）が、執筆の過程で、ヴァリエーションごとにどう変化したかを追った論文がある。それ自体は、徹底した優れた論考だが、上のような問題を期待して読むと、肩透かしを食う。差しさわりのある要素はみごとに避けられている。現在の政権は、チェチェン問題にはきわめて神経質で、それはほぼタブー化している。

Бурнашева Н.И. История текста финальной сцены рассказа «Набег» // Яснополянский сборник 1998. С.20-28.

第7章 『森を伐る』: 兵士のキリスト

『森を伐る』

『森を伐る』の問題意識は今述べたとおりで、はげしい倫理性を秘めているのだが、それはほとんど表にでてこない。道徳的な結論めいた部分は皆無にちかい。安易な結論は出さないという意志がはっきり感じられる。とにかく自分の身のまわりの兵士と将校を凝視することに目標をしばった観がある。この作品では、兵隊言葉が縦横に駆使されているが、これも、そのひとつの成果だろう（ゲーセフ I、557 頁）。徹底したルポ性が、この作品の魅力であり、われわれは、『戦争と平和』の重要な思想とプラトン・カラターエフとが生まれる現場に立ち会うことができる。

『森を伐る』は、トルストイがすでにクリミアにあった 1855 年 6 月に完成されているが、素材となった事件はカフカス時代に起きているし、『襲撃』との連続性を押える必要もあるので、ここで扱うことにする。

ちなみに、語り手「わたし」の名は、ニコライ・ペトロヴィッチ。自伝三部作とおなじくニコレンカである。長兄への敬愛の念からだろう。

『森を伐る』の構造

この作品のいわば「横糸」は、作者が日常身近に接していた兵士と将校の群像である。この作品にも、フローポフ大尉がちょっと出てくるのだが、彼をのぞけば、見習い士官¹⁶⁸である「わたし」が敬愛しているような将校はいない。むしろ、だれに対しても、程度の差こそあれ、侮蔑の念を感じているようだ。一方、自分の小隊の兵士たちには、例外なく敬意と共感を覚えている。これは、だれしも一読すれば明らかなので、一つだけ例を挙げるにとどめておこう。

「わたし」は、将校連のなかでは、ボルホフ（Болхов）中尉にわりあい親近感をもっている。中尉は、露悪趣味がかったほどの正直さがとりえて、カフカス戦争は「最悪の悲劇」だと言う（明確な戦略もないまま、双方のいろんな集団のくだらない利益のために、だらだらとつづける戦争であり、略奪と予算分配とその横領と勲章、賞与のばらまき以外なにもなく、いたずらに犠牲を増やし、双方の憎しみを深くするばかり、ということだと思われる）。その中尉と「わたし」がカツレツを食っていると、敵の砲弾がまともに飛んでくる。それが飛来するまでのあいだ、「わたし」と中尉は、恐怖に縮み上がったくせに、見栄をはって、むりに気取ったセリフを吐き合う。

¹⁶⁸ 見習士官（юнкер）は、貴族出身の下士官で、一定期間の勤務ののち試験に合格すれば士官になれた。

「あなたは、酒をどこで手に入れられたのですか？」私はものうげな口調でボルホーフにこうきいたが、その間も心の奥深いところでは、二つの声が同じように、はっきりとものを言っているのだった——一つは、主よ、どうか私の魂を平和のうちにお受けくださいという声で、いま一つは——弾丸が飛んでくる時に身をかがめたりなどしないで、笑っていたいものだという声であった。と、ちょうどその瞬間に、なにやらおそろしく不愉快なものが、頭上をひゅっとかすめとおったと思うと、私たちから二歩のところ、一個砲弾がどっと落下した。

「やれやれ、もしぼくがナポレオンかフレデリックだったら」とこの時ボルホーフが完全に冷静な態度で、私のほうを向いて、言った。「ぼくもきっと、何か気のきいたことを言うはずですがね」

「ところが、げんにあなたは言ってるじゃありませんか」と私は、いま過ぎたばかりの危険によって呼びおこされた胸さわぎを、からくも押しかくしながら、答えた。

「だって、言ったところでどうなるものか——それも書きつけといてくれるではなし」

「ぼくが書きつけときますよ」

「いくら君が書きつけてくれたって、ミシチェンコフのいわゆる批評のぎせいになるだけさ」と彼はほほえみながら言いたした。

「ちえっ、ちくしょうめ！」とこの時私たちのうしろで、アントーノフが、いまいましげにわきのほうへべっと唾を吐きながら、言った。「もうちっとで足をやられるところだった」

この素朴な叫びを聞くと、冷静をよそおうとする私の全努力も、私たちの狡知を弄した名文句も、私には急に、たまらなくばかばかしいものに思われてきた。¹⁶⁹

中尉の正直さなど、せいぜいこんなもの、というわけだ。自分たち貴族は、どうやっても自分をこう見せたいとか、ああ見せたいという虚栄心から自由になれない。それというのも、なにが真実か知らないからである。真実を知らないから、すべてが嘘になってしまう。虚栄心の徹底した暴露が、トルストイ屈指の名作『五月のセヴァストーポリ』の課題になったのは、こういうところからきている。

もうひとつ、作品の「横糸」に関連して重要なのは、「なぜカフカスくんだりまでやって来たか」という問題である。これは、トルストイ自身のカフカス行きの意義を考えるうえで大事だ。ボルホーフは、「伝説」にやられたという。永遠の処女氷、岩をかむ激流、短剣、チェルケス女などに引かれてきたものの、今となっては、ここの危ない勤務がいやでたまらない。にもかかわらず、ここにとどまっているのは、比較的かんたんにアンナ勲章とウラジーミル勲章がもらえ、佐官に昇進できるからだ、と。某少佐も、それがカフカスのうまみだと言

¹⁶⁹ 中村白葉訳『森林伐採』、『トルストイ全集2』所収、河出書房新社、305頁。

い、二つの勲章をもった佐官であるおかげで、ロシア本国では女性に大いにもてたと自慢している。「わたし」、ひいてはトルストイ自身の場合も、伝説と「うまみ」は、動機に入っていた。彼は、カフカスで勇士のしるしである聖ゲオルギー十字勲章をほしがっていたのである（ゲーセフ I、556 頁）。それが主要動機ではなかったとしても。

『森を伐る』の「縦糸」は、「わたし」とその小隊が参加した森林伐採作戦の顛末である。その軸となるのは、兵士ヴェレンチュークの死と、最古参兵ジダーノフの悲哀だ。

兵士ヴェレンチュークの死と、最古参兵ジダーノフの悲哀

ジダーノフは、勤続 25 年という大ベテランで、酒もタバコも博打もやらず、人の悪口は言わず、ひまなときには、靴づくりにはげみ¹⁷⁰、祭日には教会に通い（その場所に教会があっ て通うことができればだが）、自分の読める唯一の書物である詩篇をひもとく、という人物である。後輩の面倒見もすごくよく、なにかと助けてやる。また、職務を知り尽くしており、勇敢で、頼りになる人物だ。模範生を絵に描いたような男なのだが、だれとも付き合わないという、どこか孤独の影の濃い男。ちょっと見には目立たないので、昇進も遅れているが、当人はそれを苦にしているようすもない。彼のたったひとつの喜び、いや情熱は、歌だった。自分では歌えないが、聞くのが大好きだ。日に焼けたしわだらけの、一見きびしい顔つきをしているようだが、よくみると、「大きなまるい目は、とくに笑ったときは（彼は唇ではけっして笑わなかった）、なみなみならず柔和で、ほとんど子供のようななにものかが、突然現れて、はっとさせるのだった」

さて、出発の朝。気のいい正直者の古参兵、ヴェレンチュークは、出発前に、いったんちゃんと起床したのに、またぐっすり眠り込んでしまい、点呼に遅れる。当人の言によると、「やつがおれをひつつかみ、地べたへ投げつけやがった」

作戦のほうは、森林を 3 キロにわたって切り開くのに成功するが、退却する途中に、不運にも、流れ弾がヴェレンチュークの腹部に当たる。部隊が野営地にたどりついてからも、彼のことが「わたし」の頭から離れない。

ヴェレンチュークのことが、わたしの頭から離れなかった。彼の兵隊としての単純な一生が、わたしの脳裏にまとわりついて離れなかったのだ。

彼の最期の数分も、その全生涯のように澄み切った、落ち着いたものだった。彼は、この決定的瞬間に来世の天国への純朴な信仰がゆらぐには、あまりにも正直かつ単純に生きてきたのだ。

¹⁷⁰ 「靴づくりにはげみ」の原文は «занимался сапожным мастерством»なので、靴作りか修繕か、その両方かである。

これが、作品の唯一の結論めいた部分である。ヴェレンチュークの小隊の仲間たちは、その死をいたんでいるようだが、口には出さない。朝寝坊したのは、「死神がとりついた」せいだった、などとぼつりと口にするだけ。

というのも、「わたし」のみるところでは、危機に際しては、無益に仲間の気を乱すようなことは口にせず、意識をなにかほかのことに向けて、精神の平衡を保つのに長けているからである。彼らは、ヴェレンチュークのことは話さないが、1845年に死んだ兵隊、シェフチェンコのことを思い出す。腹部に負傷した彼を、仲間たちは二日間にわたって砲車で運ぶが、敵が迫り、中隊からもはぐれてしまい、万事休する。シェフチェンコは、自分を置いて逃げてくれと頼む。きれいなシャツに着替えさせ、木に寄りかからせてもらって、仲間たちと別れを告げる。

話題は、年次休暇のことから故郷におよぶ。ジダーノフは、「わたし」に尋ねられて、しぶしぶ自分の家のことを切れ切れに話す。ずっとふるさとに帰っていないこと。二人兄弟であること。家はごく貧しく、彼を食わす余裕はないこと。二度手紙をだしたが、返事がないこと——。とにかく帰ってこられてはこまる、ということなのか、ジダーノフが言っているように、手紙をだす金もないのか、それとも死んでしまったのか。はっきりしているのは、彼にはもう帰る家がない、ふるさとなさがない、ということだ。

ジダーノフは、歌のうまいアントノフに「白樺 Березушка」を歌うように頼む。彼は聞きながら泣いているように、「わたし」には思われた。やがて、歩哨の交代が告げられ、ジダーノフは、とぼとぼ歩きだす——。ここで、『森を伐る』は終わっている。

死を得る工夫と信仰

一読して明らかなように、ジダーノフは、そっくりそのまま『戦争と平和』のプラトン・カラターエフとっていい——家の状況もふくめて。カラターエフも歌が大好きで、「愛しいお前、小さな白樺よ、わが心のやるせなさ」«родимая, березанька и тошненько мне»というのがお気に入りの歌だ（『戦争と平和』4巻1編13章）。そして、木の根元に置き去りになる兵士の運命も、カラターエフのものとなるだろう¹⁷¹。

だが、このジダーノフは、架空の人物ではない。トルストイの日記からわれわれは、彼が実在の人物であることを知る。

兵隊のジダーノフは、貧しい新兵に金とシャツを与えている。——いまの軍曹ルービ

¹⁷¹ 仏軍がモスクワから退却を始めると、プラトン・カラターエフは、主人公ピエールら他の捕虜とともに悲惨きわまる行軍を強いられるが、やがて熱病がぶり返して、ついに力尽きる。彼は、自ら白樺の根元に座り、寄りかかる。落伍することは即銃殺を意味した。捕虜たちがパルチザン隊に救われたのは、その翌日のことである。

こうしてみると、白樺は象徴的な意味を帯びてくる。「愛しいお前、小さな白樺よ、わが心のやるせなさ」...

ンが、かつて新兵だったころ、やはり彼から助けてもらい、教え諭されたのだが、そのとき、「おじさん（原文イタリック）、いつ返したらいいんだい？」と聞いた。すると、「そうさなあ、もしおれが死ななかつたら、返してもらおうか。もし死んだら、どうでもいいじゃねえか、金はだれかの役に立つさ」と答えた。（1854年1月6日の日記〈46, 222〉）

ジダーノフという姓も「おじさん」というあだ名も、現実のものだった。そして、『森を伐る』には、これとまったく同じエピソードが出てくるのだ。

今は軍曹になっているマクシーモフが、自分で私に話したところによると、十年前に彼が新兵として入隊して間もなく、飲んだくれの古参兵どもにたかられて、ありがねを全部飲んでしまった時、ジダーノフは彼の不幸な状態を知ると、彼を呼びつけてきびしくその行為を叱ったうえ、打擲までして意見を加え、軍人の本分について訓戒を垂れてから、肌着までなくしていた彼にシャツ一枚と、五十コペイカ銀貨を一枚くれて、放免した。「私を人間にしてくれたのは、あの人です」マクシーモフは、彼の噂をするときはいつも、尊敬と感謝にみたされてこう言うのだった。¹⁷²

「私を人間にしてくれたのは、あの人です」。この言葉に、「おじさん」へのどれほどの尊敬と感謝と愛情がこめられていることか。ピエールもまた、カラターエフについて、まったく同じことを言うことができただろう。カラターエフには、いかなる理想化もない。新兵ルービン（作品ではマクシーモフ）は、絶望のさなかに、老兵ジダーノフのなかにカラターエフを見ただろう。

トルストイは、兵士たちとその信仰を理解しようと努めつつ、軍記物を書く。それは本質においてルポである。なぜなら、彼は、あるがままの彼らの世界に参入したかったからだ。

それにしても、兵士たちの死にかたはみごとである。たえず仲間の死に遭い、自分が死ぬ危険にさらされるなかで、『戦争と平和』でピエールがあの死の行軍のちに体得した「精神の平衡を保つ安全弁」を、ごく自然なかたちで身につけている。常日ごろから、死に備えている。悲しみは、たとえば、歌とかたちで表現し、認識し、克服する。これ以上なにが必要か。なにがありうるか。将校連は、これを超える死生観をもっているか、と「わたし」は思うのである。

では、どうすれば自分は彼らに近づけるか。自分の信仰が必要である。

¹⁷² 中村白葉訳『森林伐採』、297頁。

第8章 カフカスの高みとは

トルストイは『幼年時代』完成と前後して、ルソー『エミール』の「サヴォアの助任司祭の信仰告白」と対決しつつ、自分の信仰告白をつくる。「唯一の理解しがたい善なる神、靈魂不滅、われわれの行いにたいする永遠の報いを信じる。三位一体や神の子誕生の神秘は理解できないが、自分の父祖の信仰は拒否しない」（1852年11月14日付け日記〈46, 149〉）。

しかし、この箇条書き風の一般論だけをみても、トルストイの真意は分かるまい。この信仰告白の背景には、彼のカフカスでのあらゆる見聞、体験、思索、創造があるからだ。

また一方で、トルストイの信仰告白は、「サヴォアの助任司祭の信仰告白」に立脚しているわけだが、これまた、その結論だけ切りはなして眺めてもしょうがない。ルソー独自のものの考えかた、感じかた、動揺、ためらい、留保、ニュアンスなどを追っていかなければ意味がない（一言で靈魂不滅といっても、たとえば、ルソーと神秘思想家サン・マルタンではぜんぜんちがう）。そのうえではじめて、両者の対決のすがたをすくいあげることができる。したがって、本章の記述は一見くたしくなるが、トルストイがいかに彼に反発した寄り添ったかを具体的にみるためには、そうせざるをえない。あらかじめご承知おきいただきたい。

ルソーとトルストイ

トルストイにとってルソーは、まさに特筆大書すべき大先達で、その意義の大きさを否定する人はいない。だいたいトルストイ自身がそのことを繰り返し語っている。しかし、藤沼貴氏は、つぎのような留保をつけている。

そのなかでルソーは別格だった。若いころのトルストイは相当な怠け者だったから、ルソー全集二十巻を読破したというのは、にわかに信じがたい。それに、十八歳の時に書いた論文でルソーの意見に全面的に賛成はしていないし、その後の苦しい思索の過程でも、ルソーがどの程度役割をはたしていたかはっきりしないので、十五の年から心酔しきっていたように言うのも首をかしげる。しかし、そういう枝葉末節を気にしなければ、ルソーはトルストイがくり返し読み、大きな影響を受け、その恩恵に謙虚に感謝していた、生涯でただ一人の人だった。トルストイが共感し、惹かれたのはルソーの思想ばかりでなく、かれが理論とともに感覚や創造力も駆使していたこと、失敗や低迷の苦しみのなかで思索をしていたことなどでもあったのだろう。（『トルストイ』第三章、170頁）。

* 下線は佐藤。

「十八歳の時に書いた論文でルソーの意見に全面的に賛成はしていないし、その後の苦しい思索の過程でも、ルソーがどの程度役割をはたしていたかはっきりしない」。たしかにそのとおりなのだが、問題は、その部分的賛成（または反対）の中身である。

トルストイの論は非常に鋭く、これを見ると、「その後の苦しい思索の過程」——というのは、トルストイが50年6月に再び日記をつけはじめ規則をつくりだした時期のことだと思うが——、実はこの時期でもルソーが重要な役割をはたしていた可能性があると思われる。

「十八歳の時に書いた論文」とは、「ジャン＝ジャック・ルソーの発言に対する哲学的指摘」(1, 221-225) のことで、ルソーの『学問芸術論』を論じたものだ。ここでのトルストイのルソー批判でいちばん面白くまた本質的なのは、「ルソーの意見が成り立つのは『性悪説』を前提とする場合のみだ」というところだと思う（ほかの批判のなかには的を外れているものもあるし、だいたい『学問芸術論』は、ルソーとしてはかなり修辭的な文章で、論が粗いところも多々あるので、噛みつこうと思えばいくらでも噛みつける）。

トルストイによれば、学問・芸術が、人間と社会、文明の墮落を助長するとしたら、「人間は、生まれながらにして悪へ引かれる傾向を秘めていることになってしまう」。なぜなら、学問・芸術が発達し、知識が増大するにしたがって、人間は、動物のような、思考、行動のパターンが限定された状態を抜け出していくはずである。より自由に考え、行動できるようになり、その本性がのびのびと現れるはずだ。その結果現れたものが悪だということは、人間の本性もまた悪であることになる。人間が生まれながらに善である場合も、善悪相半ばする場合も、こんなことはありえない。ルソー自身、こんな「たわごと」は夢にも思っていなかったはずだ——。

しかしトルストイは、ほんとうに「たわごと」と一蹴しえたのか？ トルストイもルソーも、性悪説を夢にも思ったことがなかったか？ 近代の文明、社会のありかたが人間の本質への疑いを呼び起こしたことはなかったのか？ ルソーが「孤独な散歩者」に追い込まれたのはなぜか？

国とか法律とかは、こうして集められた人々に安全と物質的な充足を保証しますが、おそらくそれらよりもやさしくはあってもはるかに強い力を持つ学問や文学や芸術が、人々をつないでいる鉄の鎖に花輪をかけて、生まれつき持っているはずの自由に対する気持を封じ込めて、束縛された状態を気に入るようにしていきます。こうしていわゆる文化的な国民が生まれるのです。（ルソー『学問芸術論』第1部）

トルストイも引用している有名なくだりだが、こういう考えには、彼が当時すでにいっていた根本的な問題意識にふれるものがあつたのではないか？ 藤沼氏が詳細に分析されている日記の第1ページにおいても、哲学的断片においても（1, 226）、トルストイはこう言う。この世界にはたしかになにか根源的なもの、真理があると感じられるが、それは自明なもの

ではなく、それと一致することは至難である。社会は、「全体」の一部にすぎず、矛盾だらけで取るに足らず、人間を押しつぶすことさえある、と。

こういう問題意識は、ルソーのそれと重なり合うのではないか？ 真理と善が実在するなら、究極的に真理と善が悪より強いなら、現実の社会、文明、文明の精華である学問・芸術が矛盾だらけなのはなぜか？ ほんとうは真理も善も存在しないのではないか？ 後年のトルストイの表現を借りれば、煎じ詰めると、「一切は、邪悪な霊の嘲笑にすぎないのではないか？...」

では、どうしたらいいか。すでに述べたことを思い出していただきたいのだが、「哲学的断片」(1, 226)によると、トルストイは、究極の「単一の原理がある」という仮定のもとで、あらゆる具体的事物、矛盾を意識と感情の両方で、倫理的、実践的な態度でとらえていこうとしたのだった。このトルストイの生涯を貫く方法には、ほかならぬルソー『告白』の「ロマネスク」な方法と重なり合う面があるのだ。

では、トルストイが自分の論文で『学問芸術論』への批判に終始したのはなぜか。グーセフによれば、この論文は大学の授業のノートに書かれたものらしいが、とすると、教師がときどき点検するから、差しさわりのありそうな本音は吐けない（今も昔もロシアの学生は、政治的発言には極度に慎重である）。前に述べたように、メイエル教授の素性も怪しいところがあるし、大っぴらなルソー賛美は、当時の状況では不可能だろう。

実際、日記のほうでは、一本筋の通った倫理的な啓蒙主義的（潜在的）無政府主義者ともいうべき若きトルストイの面目は明らかであり、彼が啓蒙主義思想にインスパイアされたのはまちががなく、その筆頭はなんといってもルソーだった。これについてもすでに述べた。

以上、筆者がなにを言いたかったかという、18歳の若きトルストイはすでに、並々ならぬ深さで、ルソーと対決しつつ自分の問題意識を掘り下げており、その後の思索においても、ルソーは精神的支柱でありつづけたにちがいない、ということなのだ。

もうひとつ、これに関連して付け加えておくと、ドンナ・オールヴィン氏が指摘するように、とかくトルストイは、哲学をまるごと全否定したがる癖がある。これはとくに、『アンナ・カレーニナ』の終章（第8章）に露わだ。懐疑に陥った主人公レーヴィンは、いろんな哲学を耽読するが、理性、理屈の筋道にしたがって読み進んでいる間は、なにか意味があるような気がするけれども、本を置いて、ふたたび生と死の問題にもろにさらされてみると、ぜんぶ吹っ飛んでしまうと言ひ、哲学を全否定する。だが、これは額面どおりには受けとれないと、オールヴィン氏は言う。トルストイは、根底で良心を信じており、いかにその「声」をダイレクトに聞き取るかが問題であった。だから、心に直に耳を澄まさず、理性、論理を間におく哲学には、根本的な反発があった、と推測する。だが、そうした考え自体が、ほか

ならぬルソーの哲学に多くを負っているのではないか——。以上が氏の見解だ。¹⁷³

筆者はこれに賛成である。だからこそ、ルソーとの徹底した対決が必要になったのだ。

なぜルソーなのか

ここで整理しておこう。なぜルソーなのか。なぜトルストイは、自分のあらゆる「実験」を引っさげて、解決の糸口を求めてぶつかるべき相手に、余人ならぬルソーを選んだか。

二人の著作を読むと、彼らは、なんというか、とても近い魂だという思いにおそわれる。それは証明できる類のことではないけれども、ただ、こういうことは言える。まず、彼らが生きた場に共通点があったこと。それは、アンシャンレジム（旧体制）と旧来のイデオロギーが崩壊しつつあった時代だ。その危機に際会して、彼らが、感情と理性の双方をもって、予めいかなる枠も設けずに、自分の身をもって実験台としたことも同じである（そして、ルソーは「ロマネスク」な方法を生み出し、トルストイはそれを受け継いだ）。二人の思想、創作とジャンルの異常な幅広さ、多様さは、その直接の結果だ。

そして二人とも、世界は、あらゆる矛盾、深淵にもかかわらず、いずれは調和すべき、善なるものであると、深いところで信じていたのだが、その一方で、いわば「失樂園」のトラウマを抱えていたのである。その失われた樂園とは、トルストイにとっては幼年時代（母）であり、ルソーにとっては「母にして愛人」のヴァラン夫人だった（ついに未完に終わった『孤独な散歩者の夢想』は、彼女についての回想で途切れている）。トルストイの生涯と創作における探求は、樂園への回帰の試みである、という点については、これまで再三述べたが、これはルソーにも当てはまると思われる。

ルソーが樂園回帰について限界まで考え抜いたのが、ほかならぬ「サヴォアの助任司祭の信仰告白」であり、長年ルソーを読み込んできたトルストイは、そのことをはっきり知っていたはずだ。『エミール』でルソーが創造した理想の男女、エミールとソフィーは、いわば新たなアダムとエヴァなのである。

¹⁷³ Донна Орвин «Л.Н.Толстой и философия открытого отказа от философии» // Толстовский ежегодник 2002. С.416.

ショーペンハウアーについて、筆者の意見を補足しておこう。彼は、文学、芸術のセンスも抜群で、主著『意志と表象としての世界』では、その天才を傾けて、人類が絶望的な病人であることを、有無を言わず納得させてくれる。では、どうすればいいかというと、結論としては、これがおもしろいところだが、「私もよくわからないが、東西の聖賢に謙虚に学ぶしかあるまい」というのだ…。

このあたり、トルストイの問題意識に深く触れるところがあったはずで、『アンナ・カレニナ』全編の構成にも、影を落としていたかもしれない。

アンナの自殺で、人間なんて、生まれて苦しんで死ぬだけだ、という結論が出てしまったあとで（ショーペンハウアーの言う、盲目的意志に翻弄される人間と世界も、これと同根だろう）、レーヴィンが——トルストイが——とにかく立ち上がろうとする。『アンナ』というのは、こんな作品だからだ。

にもかかわらずトルストイは、彼の哲学をも、理性、理屈の上に建てられた砂上の楼閣として、否定してしまう。ショーペンハウアーは苦笑したことだろう。

トルストイの信仰告白

以上の点から、トルストイが自分の信仰について思索するとき、ルソーを拠りどころとしたのは、理解できることだ。

トルストイがとくに集中的に考えたのは、『幼年時代』完成まぎわである。これは偶然ではなく、彼の思索は、『幼年』の世界とべつものではなく、表裏一体をなしていると考えられる。

表裏一体だというわけは、日記を読むかぎり、信仰告白のおもなポイントは、二つにしばられるからだ。一つは、霊魂不滅を認めるか否か。これは、ママンの魂は不死かという問いと重なる。もう一つは、善と悪をいかに知り、善をおこなうか、である。ルソーの表現を借りると、「良心という魂の声を、情念という肉体の声からいかに聞き分けるか」。これは、要するに、いかに生くべきの問題にほかならない。したがって、ママンは不死だと信じられたが、いかに生くべきかは分からぬ、という『幼年時代』が後に残した課題に対応しているわけだ。

ところで、ルソーにも、本質的にこれと同じ問題意識があったと思われる。今は亡きあの女（ヴァラン夫人）は今どこにいるのか、という問はそのまま、霊魂不滅をめぐる間に置き換えられる。そして、この寄る辺なき、自由と孤独の時代にあつて真に指針たりうるのは、良心（あるいは、その「声」を発するなにものか）しかあり得ない、という考えに自ずと導かれることも理解できよう。そして、その最高の原理（良心）を見出すことができれば、楽園への回帰、その復活にも、なんらかの形でつながり得るであろう、とルソーが夢想したことも。

おそらくトルストイは、ルソーの問題意識をはっきり見抜いたうえで、それを共有して、彼に対したと思われる。

さて、そのルソーの信仰告白においてトルストイは、二つの問いへの答えを見出したのだろうか。霊魂不滅にかんしては、彼はルソーに拠って確かめえた。だが、善の問題は、後期の彼にもみられないほど徹底的に考え抜くのだが、明答はついに得られなかったのである。その思索のプロセスをみてみよう。

① 霊魂不滅

まずは以下に、霊魂不滅にかんするトルストイの思索を引く。

「サヴォアの助任司祭の信仰告白」を読了。――矛盾とあいまいな、つまり抽象的な箇所となみなみならぬ美しさとにみちている。ぼくがそこから汲みとったことはすべて、霊魂不滅に対する確信である。――もし、その不死の観念が成り立つために、前世の記

憶が必要だとすれば、われわれは不死ではなかったことになる。一方からいえば、ぼくの理性は不滅ということを理解するのをこぼむ。ある人が、真実のしるしは、明晰さである、と言った。——もっとも、これには反論することも可能だが、やはり**明晰さ**（原文イタリック）は真実の最高のしるしであることに変わりはなく、つねに自分の判断をそれによって検証する必要がある。（1852年6月29日付け日記〈46, 127〉）

これは、ルソー「信仰告白」のつぎの箇所のあいまいさを突いた批判である。「わたしの同一性は記憶によってのみたもたれるく...」。そして、じっさいに同一のものであるためには、わたしは以前にもあったことを思い出す必要がある¹⁷⁴

ルソーの考えによれば、魂の不死の観念が成り立つためには、前世の記憶が保たれていなければならないが、そんなものはない、とトルストイは批判するのだ。しかし、トルストイのこの問題をめぐる考察はほとんどこれで尽きており（すくなくとも日記にみえるかぎりでは）、11月14日に靈魂不滅を認めるにいたる。その際に、さっき引用したように、「靈魂不滅、われわれの行いにたいする永遠の報いを信じる」と付け加えている。これは、ルソーの次の考えに対応している。

魂は非物質的なものであるなら、それは肉体が滅びたあとにも生き残ることになるし、魂は肉体の滅びたあとにも生き残るものなら、摂理の正しさが証明される。魂の非物質性ということについては、この世における悪人の勝利と正しい人の迫害ということのほかにはわたしは証拠をもたないとしたところで、それだけでもわたしは疑いをもつ気にはなれないだろう。（中巻、156頁）

この世で勝利した悪人と迫害された義人が、死後に報いを受けないとは考えられぬが、とすれば、靈魂は不滅であるはずだ、というわけである。すなわち、「靈魂不滅、われわれの行いにたいする永遠の報いを信じる」

しかし、トルストイが靈魂不滅の問題を考えると、なにより心にあったのは、自分の母のことであり、『幼年時代』のママンのことである。これは前に『幼年』について述べたところから明らかだろう。作家は母の魂の不死を信じざるをえず、上のようなもっともらしい反証を出してみたが、結局、確信は揺るがなかった、ということだと思われる。

② 善の問題（良心の声を情念の声からいかに聞き分けるか）

だが、善の問題のほうはそうはいかなかった。それというのも、ルソーの論では、まさにこの点が最大の弱点となっていたからだ。彼自身、「それがすべての人の心に語りかけるも

¹⁷⁴ 岩波文庫・今野一雄訳『エミール』中巻、157-158頁。以下、この章での本書からの引用は、本文中に括弧で、巻と頁数のみ示す。

のなら、そのことばを聞く人がごく少ないというのはいったいなぜだろう」（中巻、173頁）と自問しながら、確答は示せない。

「不徳に毒され、情念のとりこになってから」では手遅れだから、「わたしたちの習慣がまだできあがらないうちに、わたしたちの精神がめざめてくるときに、知らないことを評価するために知っていなければならないことをよく勉強させることができればいいのだ」。こうルソーは言うにとどまる（同 178 頁）。

なるほど、そういう理想的な人間の教育方法を示すために『エミール』全巻が書かれたわけだが、情念の最たるもの、「性の目覚め」にたいする処方箋はといえば――

- ・性的な妄想にふけられないようにするため、親または教育者は、同じ部屋で寝る。
 - ・「ねむくてやりきれなくなるまで床につかせない」
 - ・自慰行為を知ったら、「もうだめだ」。「いつまでも虚弱な体と心をもつことになる」から、絶対阻止する。
 - ・自慰行為の習慣をおぼえさせるくらいなら、女性と性行為をさせる。なぜなら、「どんなことになるにしても、わたしはきみを、きみ自身からよりも女性たちのほうからのほうがいっそう容易にひきはなせるだろう」
- （同 263－264 頁）

トルストイは愕然としたかもしれぬ。ルソーともあろうものが、あれほどの探求の果てに、こんなことであっさり躓いてしまうとは！ なにかが間違っているのではないか？…

トルストイは、自分なりに善について徹底的に考え直すことで、ルソーが力尽きた場所から、あらんかぎりの力で前へ進もうとする。彼がのちに言い表したところでは、「私は、人間が人生でたった一度だけこのようにものを考える力をもっているかのように、考えはじめた」
«Я стал думать так, как только раз в жизни люди имеют силу думать»（1859年の叔母アレクサンドラ・トルスタヤあて書簡〈60, 293〉）

*この章の末尾に付録として、善にかんするトルストイの思索の全文とその拙訳を掲げる（1852年6月29－30日付け日記〈46, 128－130〉）

だが…この善にかんする思索は、きわめて矛盾した印象を与えるのである。若きトルストイの異常なまでの粘り強さと追求力に驚かされる一方で、ある種の空回りを感じないわけにはいかないのだ。そこには、いわば二つの立場があって、その一方がたえず他方を押し出そうとする結果、全般的な混乱に陥っているようにみえる。

善とはなにか？ 一方からすると、簡単明瞭である。

ぼくが善を愛しているのは、それが気持ちのよいことで、したがって有益だからである。（1852年6月29日付け日記〈46, 128〉）

自分の欲求をみたすことが（*つまり、「気持ちよくなる」ことが。これが善の一つのしるしとして挙げられていた——佐藤）善でありうるかどうかは、次の点にかかっている。その欲求充足が、隣人にたいする善をどれだけうながすか、その程度だ。（*太字は原文イタリック。1852年6月30日付け日記〈46, 129〉）

煎じ詰めれば、善とは、隣人に善をなすという魂の欲求で、その充足は、当然、気持ちのよいことであり、有益である。簡単明瞭ではないか。ところが、あたかも「べつの声が」この声をたえずさえぎり、反対しようとするかのようなのだ。

とはいえ、この（*良心の声を他の声から区別する——佐藤）微妙な差異は——つまり、よいことであり有益なことであるということは——果たして真実のしるし、明晰さをもっているだろうか？（ところで、「気持ちのよいこと」という特徴のほうは、どう考えたらいいだろうか？）。 否。（1852年6月29日付け日記〈46, 128〉）

善く生きるための手段は、善悪の知識である。だが、善悪を知るのには、一生かけても十分だろうか？それに一生かければ、われわれはもはや過つことなく、心ならずも悪をなすことがなくなるとでもいうのだろうか？（1852年6月29日付け日記〈46, 129〉）

では、隣人にたいする善とはなんなのか。なにが個人にとってよいことかは無条件に明らかだが、隣人にたいする善はそうではない。〈...〉 守銭奴は、もし人に金を与えるならば、善良である。賢者は、自分の知識を人に教えれば、善良だ。なまけ者は、他人のために働くなら、善良だ。——しかし、こういう見かたには、疑問がある。なぜなら、それは客観的だからだ。——人々の苦しみをやわらげることは、主観的な善行である。だが、苦しみと労苦とのあいだのどこに境目があるのか？——肉体的な苦しみははっきりした現象だが、習慣次第で苦しみが苦しみでなくなる相対的なものだ。（1852年6月30日付け日記〈46, 129—130〉）

要するに、善は、ごく漠然とした相対的な観念にすぎず、人間は決してそれを正確に知ることはできない...

いったいトルストイは、正しく進んでいると信じていたのだろうか。空回りしている感じ

はあったと思われる。「懷疑は自分を病的な状態にまでもっていった」と自認しているからだ（7月15日日記）。彼はまるで、ある一点に近づくことを欲していると同時に、それを避けているようでもある…。

彼は、ルソーの警告を思い出したかもしれない。「わたしたちが微妙な推論に助けをもとめるのは、良心をごまかそうとするときだけなのだ。〈…〉 理性はわたしたちをだますことがあまりにも多い」（同 164 頁）

作家はふと我に返り、思ったかもしれない——。ルソーの言うとおりに、このもつれは、まさに情念のなせるわざかもしれぬ、だとすれば、それはいったいなんの情念か、と… 彼は、突然、「推論」をやめ、このもつれそのものを暫定的な結論とする。

昨日、ぼくを次の問題が立ち止まらせていた。ためにならぬ満足は悪か否かということだ。今日ぼくは、それが悪だと断定する。真の善を悟った人間は、ほかのことを望みはしないだろう。そして、善行のなんたるかを認識するために一分たりとも骨惜しみしないことが、完成ということなのである。隣人の利益を探し求めず、それを自分のために犠牲にすることは悪である。その両者のあいだには——より大なる行為と小なる行為のあいだには——巨大な空間がある。そこに、創造者は人間を置き、選択する権能を与えたのだ。——就寝。11時。（1852年6月30日付け日記〈46, 130〉）

このもつれのなか、大いなる空間のなかで、選択するのが人間である。ただし、この「原則は、行為によって裏づけられねばならぬ。そうすれば、行為は、原則によって裏書きされることにもなる。働かねばならぬ」（1852年7月4日付け日記〈46, 131〉）

そしてこの結論が、「他者の幸福のために生きる」と定式化されるにいたる（1852年8月18日付け日記〈46, 139〉）。

結局のところ、この善をめぐる思索で、なにが明らかになったのか？

後年彼は、「後にも先にも、これほど**彼方**をのぞきみたことはない」¹⁷⁵と回想するのだが、その「彼方」は、おそらく、こんなふうに見えたことになる。

トルストイが、自分の限界を超えて考えていくと、神と悪魔が、良心と情念が縄のように無限に縊り合わさっているのがみえた。しかも、悪魔はしばしば神のふうをしていた。神、悪魔、神、悪魔…。そこに明滅する点のように、「他者のために生きる」、「思弁に止まらず実践することで善に達しうる」という予感が現れた——。

では、いかに実践し、情念の蜘蛛の糸をふりはらえばいいのか、いかに善を、良心を情念

¹⁷⁵ 叔母アレクサンドラ・トルスタヤへの手紙（1859年4月末—5月3日〈60, 293〉）。太字は原文イタリック。

から解放したらいいのか。自分にとって最大の情念はなにか、それをどう始末したらいいか——。カフカスでの思索は、この課題に収斂する。そして、ずっと後に、その課題をトルストイが果たしたときに初めて、ルソーの挫折の容易ならぬ意味が明らかになるだろう。

それからもうひとつ、トルストイの信仰告白で注意を要するのは、最後の「三位一体や神の子誕生の神秘は理解できないが、自分の父祖の信仰は拒否しない」。ルソーの場合、同様の定式の背後にカトリック、プロテスタントの教会と教義、および護教論的発想に対するすさまじいばかりの批判があるわけだが、作家もまた、すでに内心正教会に批判的だったと推測される。叔母アレクサンドラ・トルスタヤへの手紙にこうあるからだ。

子供のときは私は、熱烈に、感傷的に、そして無反省に信じていました。その後、14歳くらいのときに、人生全般について考えるようになり、宗教というものにぶつかったのです。それは、私の理論にうまく合いませんでした。それで当然、宗教を破壊することを手柄だとみなしたわけです。宗教がなくなると、私は10年ほどは、とても平静な気分でした。すべてが私の前に、明晰に論理的に開示され、分類されたので、宗教を容れる余地はなくなってしまいました。その後、すべてが明らかになり、人生に神秘はまったくなくなったが、人生そのものが意義を失い始めるという時がやってきました。（1859年4月末—5月3日〈60,293〉）

大学時代の『訓令』と『法の精神』の比較（日記）をあわせて考えれば、若きトルストイのラディカルさは、ルソーにおさおさ劣るものではなかったろう。

しかし、そのラディカルさは当面、胸底に秘められる。やがて、トルストイが自分を「殺す」ことで自分を解放する、そのときまで…。そのとき、「三位一体や神の子誕生の神秘は理解できないから、自分の父祖の信仰は拒否する」と、テーゼが逆転することになる。そして、「権力とエロスを享受する地主貴族は、もし…なら、善良である」という定式が明瞭に現れよう。

以上が、彼のカフカス時代までの思想的展開である。トルストイ時に弱冠24歳——。ここでようやく、この時期に現れたもうひとつの謎、「理想の女」について語る事ができる。それは、彼の「情念」に直接かかわるものであった。

付録：トルストイは「サヴォアの助任司祭の信仰告白」をどう読んだか

——「魂の不滅」と「善」にかんするトルストイの考察の全文——

前に述べたように、1852年6月27日にトルストイは、「サヴォアの助任司祭の信仰告白」を再読しはじめたらしい。6月29日には読み終え、29日と30日の日記にくわしく感想を記している(46, 127-130)。以下、当該箇所をまとめて訳出しよう。

6月29日。9時起床。医者がきた。ぼくをジェレズノヴォーツクにやるつもりだ。最後の数章を書き直した¹⁷⁶。昼飯を食い、書き、鉱水を飲み、水浴し、とても衰弱した状態で帰宅。「サヴォアの助任司祭の信仰告白」を読了。——矛盾とあいまいな、つまり抽象的な箇所となみなみならぬ美しさとにみちている。ぼくがそこから汲みとったことはすべて、靈魂不滅にたいする確信である。——もし、その不死の観念が成り立つために、前世の記憶が必要だとすれば、われわれは不死ではなかったことになる¹⁷⁷。一方からいえば、ぼくの理性は、不滅ということを理解するのをこぼむ。ある人が、真実のしるしは、明晰さである、と言った。——もつとも、これには反論することも可能だが、やはり**明晰さ**は真実の最高のしるしであることに変わりはなく、つねに自分の判断をそれによって検証する必要がある。**良心**はわたしたちの最良にして最も確かな導き手である¹⁷⁸、と言うのだが、どこにその声を他の声から区別するしるしがあるのか?... 虚栄心の声だっておなじくらい強い。その一例は、だれかに対して怒ったが報復していないときだ。自分の幸せが目的である人間は、悪人である。他人の意見が目的である人間は、弱者である。他者の幸福が目的である人間は、有徳の人である。神が目的である人間は、偉大だ¹⁷⁹。だが、神が目的である人間は、そこに幸せをみいだすものだろうか? ばかばかしい! それなのに、かつて自分にはすばらしい思想だと思われたのだ¹⁸⁰。ぼくは善を信じ、愛しているが、なにがぼくに善を指し示すのかは知らない¹⁸¹。——個人的利

¹⁷⁶ 『幼年時代』の最後の数章のこと。ということは、ママンの手紙と死と、「信仰告白」再読とのあいだにかかわりがあることを示唆していよう。

¹⁷⁷ これは、「信仰告白」のつぎの箇所のあいまいさを突いた批判である。「わたしの同一性は記憶によってのみたもたれる<...>。そして、じっさいに同一のものであるためには、わたしは以前にもあったことを思い出す必要がある」(中巻 157-158 頁)

¹⁷⁸ この文は、「信仰告白」からの引用。

¹⁷⁹ この定義は、「信仰告白」を自分なりに要約したもの。

¹⁸⁰ 人の幸せを自分の幸せにすることなら、まあわかる。善ということなら、人間の手の届くところにあると感じられるが、神となると、理解を絶しており、目的になりえない。ルソーだって、神の存在は感じられるが、その本質は人知を超えている、と言っているのではないか、ということだろう。

¹⁸¹ 「信仰告白」では、神にあっさり、ほとんど説明ぬきで「善性」がむすびつけられていた。「宇宙を動かす、万物に秩序を与えている存在者、この存在者をわたしは神と呼ぶ。わたしはこの名称に英知と力と意志の観念をまとめて結びつけ、さらにその必然的な結果である善性の観念を結びつける」(中巻 143 頁)。また「信仰告白」では、いかに良心の声を聞くか、つまり、いかにして、なにが善でなにが悪

益が追求されていないことが、善のしるしではないだろうか。しかし、ぼくが善を愛しているのは、それが気持ちのよいことで、したがって有益だからである。——ぼくにとって有益なことは、なにかのために有益なのであり、それがよいことであるのは、ぼくにとってよいことであるからであり、ぼくにとってぴったりくることだからなのだ。——これが良心の声を他の声から区別するしるしである。とはいえ、この微妙な差異は——つまり、よいことであり、有益なことであるということは（「気持ちのよいこと」という特徴は、どう考えたらいいだろう？）——はたして、真実のしるし、明晰さをもっているだろうか？ 否。善をなにによって知っているか、などということは知らずに、善をなしたほうがいいのだ。そして、善について考えたりしないほうがいいのだ。最高の叡智は、そんなものが存在しないことを知っていることだ、とつい言いたくなるころだ——。¹⁸²

ぼくにとって悪いことは、ほかの人にとっても悪い。ぼくにとって良いことは、ほかの人にとっても良い。これがいつも良心が語ることだ。しかし、欲求が問題なのか行為が問題なのか？ ぼくの行為が、善良な意図をもってなされたとしても、悪い結果をもたらした場合、良心はぼくを責める。生の目的は善である。この感情は、われわれの魂に固有のものだ。善く生きるための手段は、善悪の知識である。だが、善悪を知るのには、一生かけても十分だろうか？ それに一生かければ、われわれはもはや過つことなく、心ならずも悪をなすことがなくなるとでもいうのだろうか？——われわれが善良であるのは、われわれの全精力が絶えずこの目的に傾注されている場合だ。なにが善でなにが悪であるか、完全には知らずに、善をなすこともありうる。だが、なにが最も差し迫った目的であろうか？ 善悪を学ぶことか、それとも行動することか？ われわれの心の傾向と運命は、選ぶべき道を指し示すが、われわれはいつも、善なる目的をもって働かねばならない。いったい、他者のためにならない、ありとあらゆる気晴らし、満足は、悪なのであるか？ そういうことに耽っても、良心は咎めないどころか、是認する。だが、それは良心の声ではない。良心は、遅かれ早かれ、益をもたらさずに（たとえ害をもたらさなくとも）費やされた瞬間瞬間について、責めることになる。仕事が多様であることは、満足をもたらす。就寝、11時15分前——。（1852年6月29日付け日記）

か正しく認識し、行動するかが、明晰に語られていなかった。トルストイは、ルソーが力尽きた場所から、あらんかぎりの力で前へ進もうとするのである。

¹⁸² あらゆる問題にぶつかっていく気迫と追求力はすごい。いちばん縛れているところにまっしぐらに突っ込んでいく。

6月30日。<...> 良心の満足をもたらす善、すなわち隣人に対する善行を含めて、善というものはおよそどんなものでも、相対的で、常ならぬもので、ぼくの意志の外にある¹⁸³。これら三つの条件すべてが、あらゆる善を隣人に対する善において統合する。自分の欲求をみたすことが¹⁸⁴善でありうるかどうかは、つぎの点にかかっている。その欲求充足が、隣人にたいする善をどれだけうながすか、その程度だ。欲求をみたすことは手段である。では、隣人にたいする善とはなんなのか。なにが個人にとってよいことかは無条件に明らかだが、隣人にたいする善はそうではない。あるいは、自分の理解と心の傾向から善と思われるものも。ということは、心の傾向と、知性の程度とは、その人間の尊厳に影響しないことになる。守銭奴は、もし人に金を与えるならば、善良である。賢者は、自分の知識を人に教えれば、善良だ。なまけ者は、他人のために働くなら、善良だ。——しかし、こういう見かたには、疑問がある。なぜなら、それは客観的だからだ。——人々の苦しみをやわらげることは、主観的な善行である。だが、苦しみと労苦とのあいだのどこに境目があるのか？——肉体的な苦しみははっきりした現象だが、習慣次第で苦しみは苦しみでなくなる相対的なものだ。善をおこなうということは、他者におなじことをおこなう可能性を与えることであり、そこにいたるあらゆる障害——窮乏、無知、そして墮落——をとりのぞく可能性を与えることだと、ぼくは言いたい。しかし、またも明晰でない。

昨日、ぼくをつぎの問題が立ち止まらせていた。ためにならぬ満足は悪か否かということだ。今日ぼくは、それが悪だと断定する。真の善を悟った人間は、ほかのことを望みはしないだろう。そして、善行のなんたるかを認識するために一分たりとも骨惜しみしないことが、完成ということなのである。隣人の利益を探し求めず、それを自分のために犠牲にすることは悪である。その両者のあいだには——より大なる行為と小なる行為のあいだには——巨大な空間がある。そこに、創造者は人間を置き、選択する権能を与えたのだ。——就寝。11時。（1852年6月30日付け日記）

*太字は原文イタリック。

*** Выдержки из дневника Л.Н. Толстого, посвященные его размышлениям о Добре (29 — 30 июня 1852 г. (46, 127 — 130)).**

«29 июня. Встал в 9. Был доктор. Он посылает на Жел[езноводск]. Переписал последние главы. Обедал, писал, пил воды, купался и пришел домой очень слабый. Прочел Profession de foi du vicaire savoyard. — Она наполнена противоречиями, неясными — отвлеченными

¹⁸³ この文は原文に矛盾があるようである。下の原文および注釈を参照されたい。

¹⁸⁴ つまり、「気持ちよくなる」ことが。これが善のひとつのしるしとして挙げられていた。

местами и необыкновенными красотами. Все, что я почерпнул из нее, это убеждение в небезсмертии души. — Ежели для понятия о бессмертии необходимо понятие воспоминания о предыдущей жизни, то мы не были бессмертны. А ум мой отказывается понять бесконечность с одной стороны. Кто-то сказал, что признак правды есть ясность. — Хотя можно спорить против этого, все-таки *ясность* останется лучшим признаком, и всегда нужно верить им свои суждения.

— Совесть есть лучший и вернейший наш путеводитель, но где признаки, отличающие этот голос от других голосов?.. Голос тщеславия говорит так же сильно. Пример — неотомщенная обида. Тот человек, которого цель есть собственное счастье, дурен; тот, которого цель есть мнение других, слаб; тот, которого цель есть счастье других, добродетелен; тот, которого цель — Бог — велик. Но разве тот, которого цель Бог, находит в том счастье? Как глупо! А казалось, какие были прекрасные мысли. Я верю в добро и люблю его, но что указывает мне его, не знаю. — Не отсутствие ли личной пользы есть признак добра. Но я люблю добро; потому что оно приятно, следовательно, оно полезно. То, что мне полезно, полезно для чего-нибудь и хорошо только потому, что хорошо, сообразно со мной. Вот и признак, отличающий голос совести от других голосов. А разве это тонкое различие — что хорошо и полезно (а куда я дену приятное), имеет признак правды — ясность? Нет. Лучше делать добро, не зная, почему я его знаю, и не думать о нем. Невольно скажешь, что величайшая мудрость есть знание того, что ее нет.—

Дурно для меня то, что дурно для др[угих]. Хорошо для меня то, что хорошо для др[угих]. Вот что всегда говорит совесть. Желание или действие? Совесть упрекает меня в поступках, сделанных с добрым намерением, но имевших дурные следствия. *Цель жизни есть добро.* Это чувство присуще душе нашей. *Средство к доброй жизни есть знание добра и зла.* Но достаточно ли для этого целой жизни? И ежели всю жизнь посвятить на это, разве мы не будем ошибаться и невольно делать зло? — Мы будем добры тогда, когда все силы наши постоянно будут устремлены к этой цели. Можно делать добро, не имея полного знания того, что есть добро и зло. Но какая ближайшая цель: изучение или действия? Отсутствие зла есть ли добро? Наклонности и судьба указывают на путь, который мы должны избрать, но мы должны всегда трудиться с целью доброю. Неужели всякое развлечение, удовольствие, не приносящее пользы другим, есть зло? Совесть меня не упрекает в них; напротив, она одобряет. Это не голос совести. Совесть рано или поздно упрекает во всякой минуте, употребленной без пользы (хотя бы и без вреда). Разнообразие труда есть удовольствие. Ложусь, без 1/4 11. —» (46, 128 — 129).

«30 июня.<...> Всякое добро, **исключая добра** (*このフレーズは、文脈からして、おそらく **не** が抜けており、**не исключая добра** が正しいので、そのように訳してある——佐藤), состоящего в довольстве совести, то есть в делании добра ближнему, условно, непостоянно и независимо от меня. Все три условия эти соединяет добро в добре ближнему.

Удовлетворение собственных потребностей есть добро только в той мере, в которой оно может способствовать к добру ближнего. Оно есть средство. В чем состоит добро ближнего? Оно не безусловно как личное добро. Или добро то, что я нахожу таким по моим понятиям и наклонностям. Поэтому наклонности и мера разума не имеют влияния на достоинство человека. Сребролюбец добр, ежели он дает денег; мудрый добр, ежели он поучает; ленивый добр, ежели он трудится для других. — Но взгляд этот подлежит сомнению, потому что он объективен. — Облегчать страдания людей есть добро субъективное. Но где граница между страданием и трудом? — Страдание физическое ясно, и то условно от привычек. Хочется мне сказать, что делать добро — давать возможность другим делать то же, устранять все препятствия к этому — лишения, невежество и разврат. Но опять нет ясности.

Вчера меня останавливал вопрос, неужели удовольствия без пользы дурны; нынче я утверждаю это. Человек, который поймет истинное добро, не будет желать другого. Притом не терять ни одной минуты власти для познания делания добра есть совершенство. Не искать пользы ближнего и жертвовать ею для себя есть зло. Между тем и другим — большей или меньшей мерой деятельности — есть огромное пространство, в котором поставил творец людей и дал им власть избирать. — Ложусь. 11 ча[сов]. — » (46, 129 — 130)

第9章 理想の女性像

出現

マリアーナは、可愛いというタイプではなく、まさに**美女**であった！ 彼女の顔立ちは、きっぱりしすぎているように、ほとんど粗野にさえ見えたかもしれない——もし、そのすらりと伸びた上背と、たくましい豊かな胸と肩、それにとりわけ、黒い眉の下の影におおわれた、きびしいと同時に優しい切れ長な黒い眼、いつくしむような口許の表情と微笑がなかったならば。彼女は、めったに微笑まなかったが、しかしその微笑は、いつも驚嘆させた。微笑みから、乙女の力強さと健やかさがあふれでるのであった。どの娘も美しかったが、しかし、娘たち自身も、ベレツキーも、糖蜜菓子をもってきた従卒も——みな思わず知らずマリアーナの方に目をやり、娘たちみんなに話しかけるつもりが、彼女に向かって話すようなぐあいになるのだった。彼女は、他の者たちの間にあって、誇り高く陽気な女王のように見えた。(『コサック』(6, 97-98))

*太字は原文イタリック。

作家の創作における最初の「トルストイ的美女」は、『コサック』のヒロイン、マリアーナだ。彼女は、現チェチェン共和国北部のテレク川左岸に住むコサック娘である。

テレク・コサック女性(гребенские казачки)は、若きトルストイを魅了したが、これは偶然ではない。彼は、『コサック』のなかでこう言っている。「テレク河岸の女性の美しさは、最も純粋なチェルケス女の容貌と、北方の豊満で力強い女性美とが融合している点で、まさに驚嘆すべきものだ」(『コサック』(6, 17))

なぜこういう「驚嘆すべき融合」が生じたかについて、オリシェフスキー将軍(Мелентий Яковлевич Ольшевский, 1816—1895)が説明している。彼はちょうどおなじころ、この地域に勤務していた。

テレク・コサックは、クムイク人とチェチェン人に接して暮しながら、たいていの面で彼らと敵対的な関係にあった。たがいに襲撃し合い、家畜と馬を奪い、女を略奪して、妻や愛人にしてきた。

だから、テレク・コサックが、たんに衣服、生活様式、習慣だけでなく、威風堂々たる歩調、歩き方、馬の乗りこなし方まで、多くの物事をこの敵対的隣人からとりいれたとしても、驚くにはあたらない。風貌にさえ、アジア的特徴が少なからずある。今日にいたるまで、テレク・コサックのなかには、ほかのコサックの連隊にくらべると、クム

イク語とチェチェン語を話すものが比較的多い。¹⁸⁵

Живя между кумыками и чеченцами, они большею частью находились во враждебных отношениях с ними. Друг на друга делали набег, отбивали скот и лошадей, захватывали пленниц, которых и делали своими женами или наложницами.

Поэтому неудивительно, что гребенцы многое переняли от своих враждебных соседей не только в одежде, образе жизни и обычаях, но и в поступки, походке, посадке на коне; даже в облике лица есть не мало азиатского. До сих пор между гребенцами сравнительно более говорящих по-кумыкски и чеченски, нежели в других казачьих полках.

ニコライ・グーセフも、この点にかんするトルストイの同時代人たちの「証言」を集めているが、それらも将軍の言うことを裏書きしている（グーセフ I、670 頁）。

はるか昔にテレク河岸に住みついたコサックたちは、そのほとんどが分離派教徒だが、隣接する山岳民族と親しく交わり、その習俗の多くを自分たちの生活にとりいれた。テレク河岸に移住した最初のころに、女を略奪する慣習をも自分たちのものにし、この面で、「師匠」に匹敵する成功をおさめた。その結果、それだけでなくとも美しいコサック女に、山岳民族女性の美の要素が入りこんだ。こうして、テレク・コサック女性は、他の北カフカス諸民族からかなり際立った美貌を得たのである。（A.V.『回想』）¹⁸⁶

テレク・コサック女性は、容貌の点で二つのタイプに分かれる。タタール・ロシア・タイプとロシア・チェチェン・タイプだ。<...> 彼女たちは、いつも元気ではち切れんばかりだ。いわば女傑であって、生命力とコケットリーと優雅さにあふれている。<...> 歴史的に形成された独特な、テレク・コサックの生活様式の結果、彼女たちは、家庭における唯一の主人となり、また完全に独立した行動がとれるようになった。（A.ルジェヴスキー『テレク・コサック』）¹⁸⁷

こういう「チェチェン化」の結果、テレク・コサック女性は、大ざっぱに言って、半分チェチェン女性になったわけである。このいわゆる「ロシア・チェチェン・タイプ」の女性の魅力は、トルストイの他のヒロインにも受け継がれていく。ナターシャ・ロストワ、アンナ・カレーニナらロシアの代表的ヒロインは、実は、あるていどチェチェン起源であることになるのだ。

テレク・コサック女性のなかでもとくに美貌で有名だったのが、コサック村チェルヴリョーンナヤの女たちだった。1846年にカフカスで勤務したコサック軍少尉（当時）、ガガーリン

¹⁸⁵ Ольшевский М.Я. Кавказ с 1841 по 1866 год. СПб., 2003, Часть I, II.

¹⁸⁶ А.В-ий «Воспоминания о былом» // «Военный сборник», 1872. Т.2. С.316.

¹⁸⁷ Ржевуский А. Терцы. Владикавказ, 1888. С.248 — 250.

公爵¹⁸⁸は、テレク・コサック村、チェルヴリョーンナヤ（станция Червленная）で住まいをあてがわれた。住居の家主は、ドゥーニカ・ドガディハ（Дунька Догадиха）という既婚の女性であった。ガガーリンは、彼女についての思い出を書きのこしている。

彼女は、もう三十才過ぎであったが、すばらしい女性だった。背が高く、彼女の乳房は、どんな男の目にも飛びこんできた。抜群のプロポーションで、肌は雪白、眼は青くつぶら、髪は漆黒——驚くべき容姿だった。私は、こんな女性には一度もお目にかかったことがない。彼女の部屋に入るときは、私は、そわそわし茫然自失の体であった。私は、普通のコサック女のなかにこんな優美な女性がいようとは、夢にも思わなかった。

（G.A.トカチーフ『コサック村チェルヴリョーンナヤ』¹⁸⁹）



『チェルヴリョーンナヤ村のコサック娘、アクシーニャ・フェデューシキナ（Аксинья Федюшкина）』、グリゴリー・ガガーリン画（1842年）、国立ロシア美術館所蔵¹⁹⁰

¹⁸⁸ グリゴリー・ガガーリン（Григорий Григорьевич Гагарин, 1810-1893）は、画家、軍人（1858年に少将）で、詩人レールモントフの友人だった。絵は、『ポンペイ最期の日』などで名高いカルル・ブリュローフに師事。ロシア帝国美術アカデミー副総裁（1859-1872）。同アカデミーにおける、イワン・クラムスコイが率いた「14人の反乱」は、彼の在職当時の1863年に起きている。この事件については、第3部第6章『『見知らぬひと』はアンナ・カレーニナか？』で詳述する。

¹⁸⁹ Ткачев Г.А. Станица Червленная. Исторический очерк. Владикавказ, 1912. С.116.

ドゥーニカ・ドガディハ（Дунька Догадиха）は、詩人ユーリー・レールモントフの創作にも現れる。言い伝えによると、詩人はあるとき、チェルヴリョーンナヤ村で、うら若いコサック女、ドゥーニカ・ドガディハが赤ん坊を寝かしつけているようすをみて、その印象から『コサックの子守唄 Казачья колыбельная песня』（1838）を書いたという。

По Лермонтовским местам (Второе, дополненное издание). М., Профиздат, 1989. С.263.

¹⁹⁰ <http://vsdn.ru/museum/catalogue/exhibit7173.htm>（2015年9月5日最終閲覧）



『ハジ・ムラート：チフリスにて』、グリゴリー・ガガーリン作（鉛筆、1852年）¹⁹¹

国立ロシア美術館所蔵

ところで、このコサックの女性、ドゥーニカ・ドガディハ（Дунька Догадиха）こそは、グーセフの見解によれば、おそらくマリアーナのモデルの一人なのだ。したがって、トルストイの「理想の女」の一源泉でもあることになる（グーセフ I、673-675 頁）。

その理由は、第一に、『コサック』の草稿の一つ（№14）では、マリアーナは、マリアーナ・ドガディヒナ（Догадихина）と名付けられていたことだ。

また、ドゥーニカ・ドガディハが住んでいたチェルヴリョンナヤ村を、トルストイは、再三訪れている。このことは、日記からあきらかだ。

¹⁹¹ <http://www.zdravrussia.ru/galereja/xixvekvtorajapolovina/?info=3458&ffiltr=&img=11884>（2015年9月5日最終閲覧）

ガガーリンによるハジ・ムラートのリトグラフも広く知られている。たとえば、サイト <http://drawingforall.ru/> のグリゴリー・ガガーリンの項目を参照されたい。

それというのも、チェルヴリョーンナヤ村は、当時、ロシア軍士官たちの「歓楽の地」であり（ゲーセフ I、309 頁）、トルストイがふだん住んでいたスタログラドコフスカヤ村から同村までは約 45 km の距離しかなかったからである。

さらに、『コサック』第一稿では、マリアーナは、その描写から推測すると、既婚女性であること（決定稿では未婚の娘）。

以上のゲーセフの挙げる根拠に、筆者はさらに次のことを付け加えることができる。

- 1) ルカーシカ（マリアーナの恋人）の愛人の名は、ほかならぬドゥーニカである（Дунька または Дунайка と呼ばれる。これは妖艶な人妻のようだ）。
- 2) 作家は、まさにここチェルヴリョーンナヤ村において、1853 年 4 月 16 日に、のちに『コサック』に発展した詩「おい、マリアーナ、仕事をやめろよ」（«Эй, Марьяна, брось работу»）を書いた。『コサック』14 章にも、この村についての言及がある。

ところで、ゲーセフは、チェルヴリョーンナヤ村が「歓楽の地」だと言うのだが、具体的にどんなところなのだろうか。そこでトルストイはなにをしていたのか。ドゥーニカ・ドガディハは、たんなる大家だったのだろうか。前にでてきたオリシェフスキー将軍が、おなじ回想のなかでこの点も明らかにしてくれる。彼いわく、コサックは軍務や狩猟でしょっちゅう家を留守にするのに、妻たちはあまりさびしがらない。そのわけは――

妻たちは、夫が不在でも、それほど寂しがりはしなかった。というのは、少しでも綺麗なコサック女なら、「二人目 побочина」がいたからだ。とくにチェルヴリョーンナヤ村の女性にとっては、そういう男をつかまえるのはなんの造作もなかった。というのは、ペテルブルクから遠征にやってきた若い金持ちの貴族たちは皆、チェルヴリョーンナヤ村を訪れ、コサック娘を口説くのを義務と心得ていたからだ。

しかし、テレク・コサックは、「二人目」のことで女房を咎めはしなかった。もし、その男が気前が良くて、自分にも小銭のおこぼれがあればだが。いわんや、贈り物に馬をくれたり、きれいなチェルケスカ（*カフカスの裾長のコート――佐藤）でも縫ってくれた日には、もう言うことはなかった。逆に、こういう気前のいい愛人がいないと、たぶん妻は、散々文句を言われただろう。それはつまり、彼女が不器量であるか手練手管がないため、隣の女房がいい目を見ているような愛人をつかまえられなかった、ということだから。この手の愛人は、結婚前の娘にもいることがあったが、両親はたんに目をつぶるばかりでなく、なんの心配もしなかった。ただ、そいつが、娘にも自分にも十分な儲けになりさえすれば。¹⁹²

<...> жены не слишком печалились отсутствием своих мужей, потому что мало-мальски

¹⁹² Ольшевский М.Я. Там же.

смазливая казачка имела «побочина», которого в особенности легко было приобрести жительнице станицы Червленной, где каждый из молодых аристократов-богачей, приезжавших из Петербурга в экспедиции, считал своею обязанностью побывать в Червленной и поволочиться за казачками. Гребенский казак не укорял жену за побочина, если он был до того тароват, что на долю мужа перепала щербатая копейка, а тем более, если на его приношения заводился новый конь или шилась красивая черкеска. Напротив, скорее сыпались упреки на жену, если она не имела такого тароватого побочина: значит, она не красива, или не ловка, что не умела захватить в свои руки такого человека, которым воспользовалась ее соседка. Случалось, что побочины были и у девиц, и родители не только смотрели сквозь пальцы, но и нимало не беспокоились этим; был бы до того человек достаточный, чтобы можно было извлечь для дочки и для себя хорошую поживу.

おそらくトルストイは、こういう女性をめあてにチェルヴリョーンナヤ村にしばしば遠乗りしたのである。そして、あるとき美女ドゥーニカ・ドガディハに出会った——。もっとも、この女性がマリアーナの唯一のモデルであるという証拠はない。

たぶんマリアーナという女性像は、集合的なものである。最終稿では、未婚の娘になっていることでもあり、ほかのコサック娘のおもかげも入りこんでいる可能性がある。たとえば、トルストイがふだん住んでいたスタログラドコフスカヤ村のコサック娘、ソロモニーダだ。作家がこの娘にしばしば惹かれていたことは、日記からわかるのである（この日記の記述はぜんぶまとめて章末に示す）。だが、重要なのは、コサック娘だけではなく、チェチェン女性もマリアーナのモデルになった可能性があることだ。

チェチェン女性とマリアーナ

『コサック』と『ハジ・ムラート』を注意深く読めば、トルストイは、コサック娘よりも、チェチェン、ダゲスタンの女性に魅了されていたと推測することができる。もっとも、彼とチェチェン女性との交流を裏づける資料は、今のところみつかっていないが。

『ハジ・ムラート』における最も美しい女性像は、主人公の母である。『コサック』では、作者のチェチェン人への賛嘆が紙背から透けてみえる。

殺された者の兄弟は、すらりと長身で、あごひげを刈り込み、赤く染めていた。チェルケスカとパパーハ（*カフカスの裾長のコートと円筒形の毛皮帽——佐藤）は、破れ放題だったが、泰然たるようすで、ツァーリのように威風堂々としていた。この勇士（джигит）の顔のきびしい威厳ある表情はオレーンをはっとさせた。（『コサック』21章）

Брат убитого, высокий, стройный, с подстриженной и выкрашенной красною бородой, несмотря на то, что был в оборванной черкеске и папахе, был спокоен и величав, как

царь. <...> Оленина поразила величественность и строгость выражения на лице джигита.

この勇士（джигит）は、作品の最後にもう一度現れ、オレーニンをもう一度驚かす。自分の兄弟の仇であるルカーシカを殺し、ハジ・ムラートのそれを髣髴させるすさまじい最期を遂げるのだ。

だから、『コサック』のいちばん奥にあるのは、実は勇猛果敢なチェチェン人への驚嘆なのである。チェチェンの勇士の「ツァーリのような」偉大さと静謐さ、巻末の壮烈な死、これらを超えるものは、この作品にはないし、実はほかの作品にもない...。¹⁹³トルストイは実際に、こういう死をみたことがあったにちがいない。

トルストイとチェチェン人の接点は、彼の身近なところにもあり、その勇敢さと義理堅さに彼はしばしば感じ入っている。たとえば、彼には、帰順したチェチェン人のなかにサド（Садо Мисербиев）という親友がいて、戦闘中、絶体絶命の窮地からトルストイを救ってくれたことがある。

とはいうものの、チェチェン人に惹かれていたのは、べつにトルストイにかぎったことではない。この点を強調しておきたい。当時は、作家マルリンスキー、詩人レールモントフのカフカスものの愛読者、チェチェン、ダゲスタンなど山岳民の勇士やチェルケス娘の崇拜者は、掃いて捨てるほどいた。トルストイ自身も、晩年にいたるまでマルリンスキー・ファンだったと自認している（ゲーセフ I、163-164 頁）。軍事史家ジッセルマンは、自著『カフカスでの 25 年』のなかで、自分の同僚、ピストリコルス二等大尉を思い出しながら、こう指摘している。この男は、「シックなチェルケスの衣装を身にまとい、生粋のジギット（勇士）のあらゆるしぐさを猿真似して駆け回って」いたが、けっして例外というわけではなかった、と。

こういうピストリコルス二等大尉みたいな男は、少なからずおり、なかには、すんでのところではイスラムに入信し、完全にチェチェン化することも厭わないという手合いもいた。<...> 近くの帰順していない部落に住むチェチェン人二、三人とぐるになって、深夜に、ほかならぬ自分の陣地やコサック村に忍び込んで、馬を盗んだり、とにかくな

¹⁹³ 先回りして言うが、彼が全生涯で最も手放しに感動を込めて書いたものは、キリスト教のモラルでも、農民の自己犠牲でもなく、コサックさえ問題にならないようなチェチェン人の勇猛果敢さ、チェチェン女性の美と力だった。自分の作品は、要するにルサンチマンにすぎない、「おれの才能は、要するに羨望の念が化けたものにすぎない」（1858 年 6-7 月の日記〈48, 16〉）とトルストイは率直に書いている。

彼は、トルストイ主義が完成したのち最晩年に、『復活』と平行して『ハジ・ムラート』を書くが、これは、トルストイ主義とチェチェンの重さをもう一度量りなおす作業だった。量りなおした結果、やはり 50 年前とおなじく、針はチェチェン側に傾いたのである。チェチェン、ダゲスタンの勇者の武勇、鉄壁の信義と団結、ハジ・ムラートの母の美と力と愛——これらが、50 年の歳月を超えて自分の魂の奥底から、おなじ生々しさで甦り、トルストイ主義を圧倒するさまを老作家はみるだろう——。

んでもいいから掠め取るという連中もいた。それがただもう、危険を思い切り味わい、
なにかの秘密や待ち伏せにぶつかりさえすればそれでいいのである。〈...〉ここでは
もちろん、馬や羊が問題なのではなく、略奪の過程や、深夜に腹ばいになったりすることや、歩哨を欺くための、ありとあらゆる巧妙で敏捷な動きや、大胆不敵さ、獲物を持って明け方に部落にもどったときの熱狂的賞賛が肝心なのだ。¹⁹⁴

〈...〉 таких Пистолькорсов было не мало, и увлекались некоторые до того, что готовы были чуть не перейти в мусульманство и совсем очечениться... Были такие, что в товариществе с двумя-тремя чеченцами ближайшего непокорного аула пробирались ночью в свое же укрепление или станицу, чтобы увести лошадь или вообще что-нибудь утащить, лишь бы испытать сильное ощущение опасности, наткнуться на секрет, на засаду... Тут дело шло, конечно, не о лошади или баране, а обо всем процессе его увода, об этом ползании ночью, о разных хитрых, увертливых движениях для введения в заблуждение часовых, об удали и восторженных похвалах, когда удавалось к рассвету возвратиться в аул с добычей...

という状況だったから、トルストイがコサック娘だけでなくチェチェン女性とつきあったことは十分考えられるのである。たとえば、帰順したチェチェン人の親友サド（Садо Мисербиев）は、自分の住む部落スタールイ・ユルト（Старый Юрт）の自宅に作家をクナーク（кунак 〈друг〉）として招いている（1852年1月6日付の叔母ヨールゴリスカヤ宛の手紙〈59, 145 — 152〉）。そこには当然女性もいたわけで、なんらかの接触はあったはずだ。ちなみに、スタールイ・ユルトは、あのチェルヴリョーンナヤ村のすぐそばにあった。

にもかかわらず、ロシアでは、チェチェンにかんするテーマがとりあげられることはかなり稀である。これは、チェチェンとの昔からの「複雑な」関係によるところが大きいだろう。トルストイ自身も、チェチェン人への賛嘆をあまりあからさまに表すことはできず、微妙に韜晦せざるをえなかった。その結果、『コサック』は、いわば「二重底」の作品となったのである。

したがって、マリアーナについて考える場合も、こういったことをすべて考慮しなくてはならない。おそらくは、彼女もまた二重底の女性像である。トルストイ最初の理想の女性像とは、こういったものだったのだ。

「理想の女」は、トルストイの世界観においてどんな役割を演じたか

こういう理想像をどう理解したらいいだろう。それは、その後のトルストイの人生でどんな意味をもったのだろうか。どうやら、彼は、女性にとてつもない美と力とエロスを、「原初の豊かな自然そのもの」¹⁹⁵を求めていたところがあったように感じられる。「アマゾネス・コンプレックス」とでもいったものを胸中秘めていたようだ。作家はコサックとチェチェンの

¹⁹⁴ Зиссерман А.Л. Там же. С.326; Гусев I, 409 — 410.

¹⁹⁵ «Кзаки». Вариант № 3. — 6, 194.

女を目の当たりにして、これらの「生命力とコケットリーと優雅さにあふれた女傑」¹⁹⁶に、自分の憧れを投影したのである。しかし、これまた、トルストイにかぎったことではなかったのだが。

テレク・コサックの娘に、どうして夢中にならずにいられようか。たとえ、彼女が美しくないとしても、彼女が、夫か兄弟の騎馬の鎧にすくと立ち、片手で彼の胸を抱いて、片手でチヒーリを満たした杯かチュブルク¹⁹⁷を持ち、全速力で疾駆し、自分も飲み、騎乗の男にも飲ませるようなとき。あるいは、長身の娘が、ベシメート（*カフカスの男子用の上着——佐藤）をぴったりと姿よく身にまとい、輪舞の音頭をとったり、自ら優雅にロシアの踊りやレズギンカを舞うようなときには。¹⁹⁸

Как не увлечься гребенской казачкой, хотя она была бы и некрасива, когда она, стоя на стремени своего мужа или брата и обхватив его стан одной рукой и держа в другой стакан или чупурку, наполненную чихирем, мчится во весь карьер и пьет сама и поит вином того, с кем скачет. Как не восхищаться высокой девушкой, стройно затянутой в бешмет, водящей хоровод или грациозно танцующей русскую или лезгинку.

しかしこうなると、「理想の女」というよりは、文字どおりの「運命の女」になってくる。それは、『幼年時代』でトルストイが描いたような世界の調和の理想を破綻させる（その理想が、母性愛と家庭にもとづいていたことを思いだそう）。なぜなら、ロシアの地主貴族で伯爵たる彼が、こういう女と結婚し家庭を築くことなど問題にならないからである。コサック女は、トルストイにとっては「異邦人」だ（チェチェン女性はいわずもがなである）。コサックの世界は、トルストイにとってきわめて心に近く、共感できるところがたくさんあったが、彼が『コサック』で描いているように、同時にかぎりなく遠い別世界だった——コサックも、ロシア人であり正教徒（古儀式派）ではあるが。

だから作家は、はじめからコサック女と深い関係をもとうとはしない。しかも、トルストイという人は、きわめて女好きである反面、内気で真面目であって、ゆきずりの軽いロマンスを楽しむことができないタイプだった。彼の女性関係を調べてみると、娼婦買いと、結婚を前提とした超真面目な恋愛の二とおりしかない。女性にいくら惹かれても、結婚の対象にならないと、最初からあきらめてしまう。『アンナ・カレーニナ』のレーヴィンとおなじく、「結婚を抜きにしては恋愛を考えられなかった」（18, 101）。その結果彼は、日記からわかるように、傍らからおずおずと美女たちに見とれているだけで、娼婦たちと表面的に付き合う

¹⁹⁶ Ржевусский А. Там же.

¹⁹⁷ チュブルカ（Чупурка）は、木製の細首の容器。チヒーリ（*カフカスの自家製赤ワイン——佐藤）は、ふつうこれに入れて出す。コサックが非番のときは、テーブルの上にはいつでもチュブルカが置かれていて、チヒーリが切れることはない。——オリシェフスキー原注（Ольшевский М.Я. Там же）。

¹⁹⁸ Ольшевский М.Я. Там же.

にとどまったのである。

コサック女に憧れながらどうしても踏み出せない——。その実例を章末に掲げておこう。トルストイのコサック女との関係が多少なりとも再現できるのは、前にちょっとふれたソロモニーダだけなのだが、彼のためらいぶりが実によくわかるのだ。

とはいうものの、若きトルストイは、『コサック』の主人公オレーニンと同じく、「すべてを捨てて、コサックの仲間入りをし、小屋を買って、コサック娘と結婚する」(6, 102) ことを夢見たことがあったかもしれない。理屈のうえでは、自分の権力と富を捨てて、彼女たちの敵であることをやめることはできる（その結果、自分の社会からは締め出されてしまうが）。

しかも、もしかすると、これこそが「善をなし」、「他人の幸福のために生きる」ということではないだろうか？...

ちなみに、『幼年時代』執筆、ルソーとの対決は、これらの女性との「交渉」と並行して行われている¹⁹⁹。

しかし、こういう社会的自殺行為さえも、すべての問題を解決するわけではない。どっちみち、オレーニンが、ルカーシカ（マリアーナの恋人）のような「原初の豊かな自然そのもの」になれるはずはあるまい？... オレーニンから見ると、ルカーシカは、野蛮で強く美しい、ほとんどスーパーマンである。

ぼくは絶望して自問した。ぼくはどうすべきか？ 馬鹿げた夢をめぐらしつつ、ぼくは彼女を自分の愛人として思い描いたり、妻として想像したりしたが、いずれの考えをも嫌悪の念をもって追い払った。彼女を情婦にするなんてひどい。これは殺人にひとしい。われわれの士官の一人がこのコサック娘と結婚したように、彼女を貴婦人に、ドミトリー・アンドレーヴィチ・オレーニンの妻とするのはなおさら悪い。かりに、ぼくがコサックになることができたなら、つまりルカーシカになって、馬群を盗み、チヒーリを痛飲し、放歌高吟し、人を殺し、酔っ払ったまま、夜中に彼女の部屋の窓に這いこみ、自分は何者かとか、なぜ自分がこんなことをするのか、なんてことは考えないとす

¹⁹⁹ 時期を確認しておく、トルストイがテレク・コサック村、スタログラドコフスカヤ村に断続的に長期滞在していたのは、1851年5月30日から53年7月初旬までの期間で、合計およそ1年、22歳から24才にかけてだ。

1851年10月25日から翌52年8月7日まで、トルストイは、ほとんどスタログラドコフスカヤにいなかった。この間、彼は、グルジアのチフリス（現トビリシ）で見習士官になるための試験を受けて合格し正式に軍隊に入り、軍の遠征、チェチェン人との戦闘に参加する一方、「病氣」にかかってピャチゴルスクで治療を受けるなどしていたのである。

ルソー『エミール』の「サヴォアの助任司祭の信仰告白」との対決でとくに集中的に思索したのは、すでにみたように、1852年6月29日と30日。これと並行して、『幼年時代』の最後の数章を（つまり、ママンの手紙も）書き直している。ピャチゴルスクで治療していた時期だ。

そして、そしてこの思索と創作の結論が、「他者の幸福のために生きる」と定式化されるにいたるのは、スタログラドコフスカヤにもどった直後の1852年8月18日。

「病氣」になってあれこれ考えるというのは、大学時代に日記を付け出したときの状況を思い出させる。怪我の功名というべきか。

れば、そうなれば話はべつで、そうなれば、われわれはおたがいに分かり合えるし、ぼくは幸せになれるだろう。（『コサック』33章）

オレーニンの恋は、トルストイの憧れは、不条理である。だが、それを心から抜き取ることはできない。

さてここで、この「運命の女」が、作家にとっての唯一の問題ではない、ということを出さなければならない。それだけが、「世界の調和」をさまたげているわけではないのだ。『幼年時代』でみたように、現実の不条理と死が——トルストイが『幼年時代』の草稿でもちいた言葉を借りれば、「偶然と運命」が——作者と主人公の、世界の調和のイメージを破壊していた。つまり、このイメージは、現実の試練に耐え得なかったのだった。「運命の女」はそれをさらに裏づける。

なるほど、作家が軍記物で描いたように、農民＝兵士は、立派に生き、従容と死んでいく。だが、彼らの世界は、コサックとチェチェン人の世界とおなじく、不可解で手の届かないものである。しかも、農民たちは、この残酷な現実を前にして無力である。なぜなら、彼らはそれを変えることはできないのだから。

ということは、第一の問題（運命の女）と第二の問題（不条理な現実）とは、結局のところ、ひとつの問題に帰するということだ。すなわち、世界は不条理なのか？

「出てきたのは、偶然と...運命だけだ！」(1, 103)。世界は、偶然と運命の集積にすぎないのだろうか？

この問いは、トルストイのルソーとの対決のところでみたように、「悪魔は神より強いのか？」と言い換えることもできるだろう。

トルストイは、「後にも先にも、これほど**彼方**をのぞきみたことはな」かったが(60, 293)、しかし、その「彼方」には、神と悪魔が、良心と情念が縄のように無限に縊り合わさって伸びており、悪魔はしばしば神のふうをしていたのである。

この問に対する答えをどうやってみつけたらいいだろうか？ カフカスではもう、みるべきものはみて、やるべきことはやった、という感じをトルストイはもっていたと思われる。

そこへ突然、クリミア戦争がはじまる。彼はまっしぐらに戦場へむかう。生と死の極限状況で、地獄のまっただなかで、問への答えを見出すためだ。その答が、『セヴァストーポリ三部作』である。

補説：ソロモニーダとの淡すぎる関係

トルストイが長期滞在していたテレク・コサック村、スタログラドコフスカヤ村に、ソロモニーダという娘がいた。彼女が、マリアーナのモデルのひとりだったかもしれないことは本文で述べた。しかし、トルストイの彼女に対する態度は、どうも煮えきらず、一貫しなかったのである。

トルストイの日記から、ソロモニーダにかんする言及をすべてひろってみよう。彼がスタログラドコフスカヤで生活していたのは、断続的に、1851年5月30日から53年7月初旬までの期間で、合計およそ1年。22歳から24才にかけてだ。

1851年8月26日。酔っぱらったヤピーシカは昨日、ソロモニーダのことは、うまくいっていると書いた（*ヤピーシカは、『コサック』のエローシカ老人のモデル——佐藤）。なんとか彼女をぼくのものにして、あか抜けさせたいものだ。（46, 87）

1851年10月25日から翌52年8月7日まで、トルストイは、ほとんどスタログラドコフスカヤにいなかった。前に書いたように、この間彼は、グルジアのチフリス（現トビリシ）で見習士官になるための試験を受けて合格し正式に軍隊に入り、軍の遠征、チェチェン人との戦闘に参加する一方、「病氣」にかかってピャチゴルスクで治療を受けるなどしていたのである。

1853年4月18日。昼飯の後、ヤピーシカのところへ行き、ソロモニーダと話した。彼女の乳房は、以前より魅力的でなくなりましたが、それでも彼女のことは、まだとても気に入っている。（46, 159）

同年6月26日。何度かヤピーシカのところへ行ったが、ソロモニーダの件は進んでいない。<...> ぼくは決心した——なにがなんでも、彼女とヤルぞ。<...> ソロモニーダからはっきりした返事をもらうのだ。（46, 164—165）

同年6月27日。ぼくのソロモニーダに対する態度は、どうも一貫していない。ヤピーシカは、どうやら、ぼくの気持ちをあおっているようだ。とにかく明日だ。<...> 明日、昼飯を食べたら、是が非でも、ソロモニーダの件をかたづけるのだ。（46, 165）

同年6月28日。ヤピーシカは留守だった。昼飯の後は、なにもしなかった。（46, 165）

前日トルストイは、あんなに固く決心したのに…。

同年6月29日。明日は、朝から晩まで執筆し（*創作のこと——佐藤）、あの娘とヤルため、あらゆる手をつくすぞ。（46, 166）

同年6月30日。明日は、朝早くあの娘の件をかたづける。フェドーシャとソロモニーダのところへ行くこと。（46, 166）。

同年7月2日。ソロモニーダは、完全に去ってしまった。（46, 166）

いつ、どこへ、何のために「完全に去ってしまった」のかは分からない。しかし、このときをもって、トルストイとソロモニーダの淡すぎる関係は、永遠に終わりを告げたのである。まもなく、7月10日ごろ、トルストイ自身もまた、スタログラドコフスカヤを後にする（46, 166）。²⁰⁰

²⁰⁰ チェチェン共和国・スタログラドコフスカヤ村のトルストイ文学民俗博物館では、当時のテレク・コサックの家屋が復元されている。

Сайт Комитета Правительства Чеченской Республики по туризму
<http://chechentourism.com/?p=907>（2015年9月5日最終閲覧）

第10章 袋小路

トルストイはなぜ、みずから志願してクリミア戦争に行ったか

世界は結局のところ不条理なのか——。作家はこの間に答えるために、わざわざ自分で志願して大戦争に出かけていったと、先回りして断定的に書いたが、これにはゲーセフのべつの意見もある。彼の見解とすり合わせながら、検証してみよう。それによって、トルストイの問題意識がより鮮明に浮かび上がるはずである。

クリミア戦争が始まる前、そもそも作家はどんな心境にあったのだろうか？『幼年時代』を書き、軍記物、信仰告白を書き、「運命の女」とも出会い、あらゆる自分の問題と「使命」を自覚しつつあった彼。その彼にとってはもはや、「軍隊勤務は使命をさまたげる」（1852年10月8日の日記）。もう軍隊にいるのは無意味だということだ。

10月8日[1852年] ぼくは、これまでのいつにもまして、退役することを固く決心した。たとえ、どんな条件を呑むことになろうとも、だ。軍隊勤務は、ぼくが自分のうちに唯一自覚した、二つの使命を妨げる。とりわけ、より良い、より高貴な、より大切なほうの使命を。ぼくは、まさにその使命においてこそ、平安と幸福を見出せると、より強く確信しているのだ。（46, 144）

8 октября [1852 г.]. Я больше, чем когда-нибудь, решил выйти в отставку; на каких бы то ни было условиях. Служба мешает двум призваниям, к[оторые] единственно я сознал в себе, особенно лучшему, благороднейшему, главному, и в том, в к[отором] я более уверен найти успокоение и счастье.

まさにこの時期、トルストイが自分の信仰について集中的に思索していたことを思い出そう。ついには、軍隊勤務そのものが、「不正な、悪い行為」と断罪されるにいたる。

1853年1月6日。グロズナヤ要塞。ばかげたパレードがあった。だれもかれもが——とくに兄が——酔っぱらっている。すごく不快だ。戦争はまったくまちがった悪い行為だから、戦争をしている者たちは心のなかで良心の声を押し殺そうとつとめている。私のしていることはいいことなのか？ もし悪いことだとしたら、神よ、教え導きたまえ、許したまえ。（46, 155）

6 [января 1853 г. Грозная]. Был дурацкий парад. — Все — особенно брат — пьют, и мне это очень неприятно. Война такое несправедливое и дурное дело, что те, к[оторые] воюют, стараются заглушить в себе голос совести. Хорошо ли я делаю? Боже, настави меня и прости, ежели я делаю дурно.

兄ニコライが2月19日に退職したことも手伝って、ついに1853年5月10日、トルストイは退職願を提出した。ところが退職願は受理されなかった。クリミア戦争（1853年10月－1856年2月）が勃発したからである。するとトルストイは、すでに戦争そのものを断罪していたのに、みずから志願してクリミアにおもむくのである。彼自身は、その理由をはっきり語っていない。

チェチェン人相手の戦争は不正だが、クリミア戦争は戦うべき理由があると思ったのだろうか？ この戦争の性格をかんたんに振り返ってみよう。

ナポレオン戦争後、戦勝国は、フランス革命前の領土を復活させ、自由主義とナショナリズムは押さえ込み、たがいに妥協できるところは妥協して、戦争はやらずに、共通の利益を守っていこうとした。このいわゆるウィーン体制は、いってみれば、旧勢力の利益を真空パックすることをもくろんだわけだ。ロシアのニコライ一世にいたっては、「鉄道は、社会を流動化させて危険」だということで、なるべく鉄道も建設させなかった²⁰¹。

しかし、産業革命の進行、市民社会の成熟、1830年と1848年の革命のうねり、トルコの弱体化と被支配層、被支配民族の騒乱、蜂起、ナショナリズムの高まりは、真空パック体制を不可能にした。かくしてヨーロッパ列強は、トルコの利権をめぐる数十年ぶりに正面から激突することになった。²⁰²

それにしても人間というやつは、利益を追求できる状況になりさえすれば、必ずとことん追及する、食欲きわまりない、度しがたい生き物だ——。と、すでに軍隊と戦争に嫌気がさしていたはずのトルストイは思わなかったのだろうか。

ニコライ・グーセフは、作家のクリミア行きを敵愾心と愛国心で説明している。

まず、グーセフは、トルコが「ロシアにとって歴史的につねに敵国だったから」と言う。何世紀も数え切れないほど戦ってきたので、トルストイも、トルコ＝戦うべき敵と考えた、と（グーセフ I、489 頁）。しかしカフカスの「山民」だって、つねに敵だったのではないか。

グーセフはもうひとつの理由として、トルコ軍による残虐行為がトルストイに影響したかもしれないと言う（グーセフ I、489 頁）。残虐行為というのは、1853年10月16日、黒海東岸のトルコ国境で、トルコの非正規軍がロシアの守備隊を襲った際に、ロシアの税関職員を磔にしたり、妊婦の腹を割いたりした事件などである。だが、トルストイがカフカスからの転属を願い出たのは、それらの事件が起こる前の10月6日のことだ（59, 248－250）。

作家自身は転属のほんとうの理由をはっきり言わないのだが、しかし実は、その後の彼の行動が雄弁に物語っている。

²⁰¹ 1823年－1844年に大蔵大臣を務めたエゴール・カンクリンは、鉄道は「現代の社会的病弊」であり、民衆の間に過度の流動性を引き起こし、平等主義を蔓延させると危惧していた。

『ロシア史2』（世界歴史体系）、山川出版社、1994、160頁。

²⁰² クリミア戦争にかんするこの一節は、かつて筆者が「ロシアNOW」紙電子版の「今日は何の日」に書いたものである（2012年10月16日付の「クリミア戦争勃発」）。

<http://jp.rbth.com/articles/2012/10/16/39471>（2015年8月8日最終閲覧）

1854年3月12日、トルストイはブカレストに到着し、ドナウ方面軍司令官、ミハイル・ゴルチャコフ公爵²⁰³のもとに出頭した。叔母ヨールゴリスカヤへの手紙によると、「公爵は、わたしを文字どおり『親類』として迎え」、「なんども熱烈にキスしてくれて、毎日昼食にできるように言い、君を自分のもとに置きたいと思っている、と言ってくれました」(3月13—22日付け (59, 257—261))

4月19日、作家は、南方軍砲兵隊司令部 (штаб артиллерии Южной Армии) に配属される。これは昇進を意味した²⁰⁴。

こういうめぐまれた立場で、昇進の見通しも立ち、トルストイは、『少年時代』の仕上げをしながら、叔母に書く²⁰⁵。

ぼくはブカレストでのんびり暮らし、散歩したり、音楽をやったり、アイスクリームを食べたりしています。

ところが実は、彼にとっては、「こういういさかばけつとした、まったく無為で、金のかかる生活は、<...>おそろしく気に食わなかった」²⁰⁶のである。

なぜか？ 同年、1854年6月15日の日記(47, 4)によると、司令部への配属は「虚栄心をくすぐった」と白状しながらも、虚栄心は自分の「持病」だと言い、「自分の腐り果てた生活」を責め立てるのである。この日の日記をみると、まさにこのとき、トルストイの心中でなにかが爆発したかのようだ。

このぼくの病は——それが起ると、もっぱら善を目的とする、以前からの仕事と誠実な労働の軌道に戻ることさえできなくなるのだが——、ぼくがどれほど損なわれているか、ぼくに証明してくれた。ぼくが、世間一般の意見では高まれば高まるほど、自分自身の意見では低くなる。ぼくは何度か女と関係し、嘘をつき、見栄を張り、そしてこれがいちばん恐ろしいことだが、戦火のもとで、自分で期待していたような行動をとれなかった——。 <...> これを最後に自分に言う。

もし、人々のためになにをなすこともなく、三日間が過ぎ去るようなことがあったら、ぼくは自殺する——。

主よ、われを助けたまえ——。

Болезнь моя, во время которой я не мог даже вернуться на старую колею занятий и

²⁰³ ミハイル・ゴルチャコフ公爵 (Михаил Дмитриевич Горчаков) は、トルストイの三親等の叔父にあたる。ポロジノの会戦をはじめ、1812—1814年の戦役に参加した (59, 249)。

²⁰⁴ 5月24日付け叔母ヨールゴリスカヤあて書簡 (59, 262—266)。また、日記 (47, 225) も参照せよ。

²⁰⁵ 同書簡 (59, 262—266)。

²⁰⁶ 同書簡 (59, 262—266)。

честного труда с одной целью добра, доказала мне, до какой степени я испортился. Чем выше я становлюсь в общественном мнении, тем ниже я становлюсь в собственном. Я имел несколько раз женщин, лгал, тщеславился и, что всего ужаснее, под огнем вел себя не так, как надеялся от самого себя. —

<...> В последний раз говорю себе:

Ежели пройдет три дня, во время которых я ничего не сделаю для пользы людей, я убью себя. —

Помоги мне, господи. —

* 下線は佐藤。

まさにここから、以後の彼の行為がそのままてくる。彼は、クリミア方面軍（Крымская армия）への転属願いを出し（1854年の6月11日と23日の二度にわたって提出している。このことから、腰のすわった決断だったのが察せられる）、11月7日にセヴァストーポリに到着する。翌1855年4月3日ころから5月15日まで、最大の激戦地、文字どおり砲弾が雨のように降り注ぐ第四堡塁で勤務する（47, 226—227）…。

まっしぐらに危険のなかへ、死のただなかへ。あたかも、まさにそれこそが、彼に必要なかのように。これはどうてい、たんなる敵愾心や愛国心では説明できるものではない。そう、彼には、生と死の「実験」が必要だったのだ。実験を、最も強力な塙のなかでやりたかったのである。世界は、結局のところ、不条理なのか？——

灼熱した塙は、どちらかの答えをだすだろう。肯定するか、否定するか、いずれかの。その回答、『セヴァストーポリ三部作』をつぎにみる。

ところで、トルストイは、カフカスからドナウ方面軍に転出するとき、途中ヤースナヤ・ポリャーナに寄り、親類縁者に別れを告げ、遺言状も書いた。このとき兄たちといっしょにとった記念写真²⁰⁷があるが、トルストイは気迫みなぎる、ただならぬ顔をしている。このとき兄弟のだれよりも死に近づいていた彼が生き残り、二人の兄、ドミトリーとニコライが数年を経ずして亡くなるとは、運命とはわからないものである。

²⁰⁷ サイト「トルストイ・ルー」の「写真：トルストイの親族 Окружение Толстого」に掲載されている。このサイトは、国立トルストイ博物館とヤースナヤ・ポリャーナが共同で運営している。

<http://tolstoy.ru/media/photos/>（2015年9月1日最終閲覧）

セヴァストーポリ三部作：栄光と裏腹の思想の行き止まり

さて、『セヴァストーポリ三部作』は、「世界は不条理か否か」の問にどう答えたか。

第一作『十二月のセヴァストーポリ』は、迫真のルポだ。同地での激戦と悲惨とロシア兵の愛国心は、トルストイのあらゆる予想を超えた。砲弾にやられて「みんな、ゆるしてくれ」と言いながら死んでいく兵士のすがたは、どんな人をも動かすだろう。セヴァストーポリを自分の目でみるまで、トルストイはどこか「百姓」を馬鹿にしていたろうが、これで彼らを心から尊敬できる、和解することができる、という可能性がみえた。だが、いつ果てるともしれぬ砲火と無数の死、死、死…。これらすべてはなんのためか？ 荘厳な海の夜明けと日没だけが、なにか絶対的なものの存在を、救いの可能性を暗示する。こういう作品だ。

第二作『五月のセヴァストーポリ』。この暗鬱な作品は、トルストイの全作品のなかで独自の一角をしめている。どんな人間、どんなヒロイズムのなかにも負の要素がある。人間というものは、さまざまな感情、欲求、想念、行為が脈絡なく連なったものにすぎず、そこにはいいものも悪いものもある。「だれもかれも善人でもあれば悪人でもある」。どんな人間も、世界全体も、ときに美しい火花を散らすものの、結局のところ、どうしようもなく破壊と死へ向かっていく。世界の根底には破壊と死があり、それが世界の本質にほかならない。作者は、そのことを比類のない迫力とリアリティーでしめした。

その絶頂は、これといった特徴のないごくふつうの将校プラスクーヒンの死だ。彼は散弾に吹き飛ばされて即死するが、その瞬間に彼の脳裏に明滅したことがらが、延々二ページにわたって描かれる。ここで人間の意識は極限まで分析され、最小の断片にまで分解されるが、それらをひとつにむすびつけ意味を与えるべき原理は、どこにもみいだされない。プラスクーヒンは死に、あとには脈絡なき、こなごなの断片が残るのみ。そして、それらもまた跡形もなく消えてしまう。それだけだ。トルストイの「魂の弁証法」は、たとえば、ヘーゲルのような、肯定的で整然たる体系をかたちづくることはない。

プラスクーヒンの死からたくまずして感じられる、いわくいいがたいおぞましさと滑稽さは、どこことなく画家ゴヤが対ナポレオン戦争の惨禍を描いた絵画を思わせるところがある。ゴヤとおなじくトルストイにとっても、「掘るべきものは、真実というミューズのみ」だったのだが、その最後のよりどころ、すなわち、一切を疑い破壊しつくさずにはやまない批判力もまた、世界の破壊と死と同根なのではないか。真実追求もまた、この不可解な世界の道具にすぎないのではないか。

第三作『八月のセヴァストーポリ』は、ふたりの兄弟に描写がしばられる。兄は沈着な勇士で、弟は純情な美少年。兄は、絶望的な戦況のなか、『戦争と平和』のアウステルリッツの会戦におけるアンドレイのように突撃するが、致命傷を受ける。弟は、同日砲兵を指揮し

て奮戦するが、たまたま飛来した砲弾につぶされる。「なにやらぼろきれのようなものが横たわっていた」。ふたりの超人的な働きと精神力は、巨大で無意味な現実のなかに、なんの痕跡も残さない。²⁰⁸

こうして、トルストイの「実験」は終わった。答えは否定的なものであった。彼にとって、いまや現実が不条理かつ無意味であることはあきらかとなった。セヴァストーポリ三部作は、作家に文学的栄光を与え、創造に一時代を画したが、同時に危機をはらむものでもあった。世界観の探求でも、小説作法でも、行き止まりに来てしまったからである。

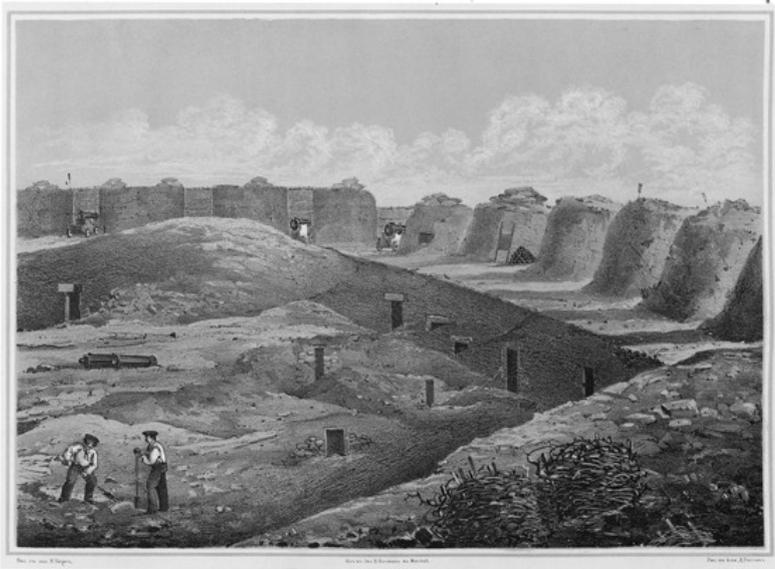
さて、どうするか？ トルストイは、現実そのものを変えようと試みる。

²⁰⁸ セヴァストーポリ陥落の体験：『戦争と平和』のモスクワ放棄と大火のベースに

1855年8月27日（グレゴリオ暦9月8日）、連合軍は、セヴァストーポリ要塞に総攻撃をかけた（これに先立ち24日から、これが第6回目となる猛烈な砲撃を行っていた）。次々に防衛拠点を破壊され、しかも要のマラホフ砲台を奪取されたことから、総司令官ミハイル・ゴルチャコフ公爵は、これ以上の防衛は不可能と判断し、要塞を放棄し、市の北岸に橋を渡って撤退することを決断する。27日から28日にかけて、夜を徹して撤退作業が行われた。一晩中嵐が吹き荒れ、街の丘陵は巨大な焚き火のように燃え上がっていたという。要塞陥落は奇しくも、トルストイの27歳の誕生日と重なった。

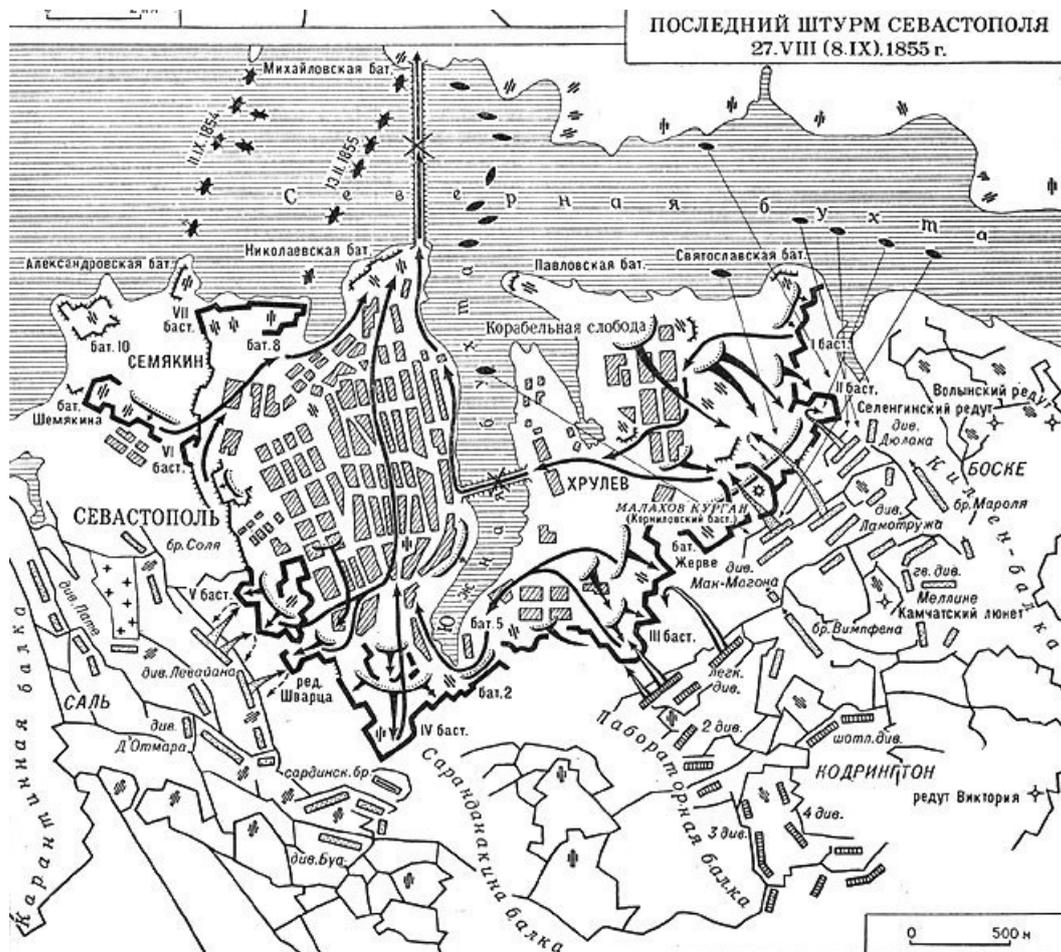
彼は、この最後の戦闘に、5つの砲兵中隊を率いて参加した。「街が炎に包まれ、砲台にフランス国旗をが翻っているのを目にしたとき、自分は泣いた」と、彼はタチアーナ叔母に9月4日に書いている。28日、彼はまだ市に留まっており、友人を病院に見舞ったりしているが、同日2時ごろ、要塞北端のパヴロフスキー堡壘が、露軍の手で爆破された（トルストイの知人イリインスキーがボートで堡壘に行き、しかけてあった爆薬に点火した。任務を終え帰還した彼を、作家は見ている）。この強力な堡壘を無傷で敵に渡すと、市全体が射程に入ってしまうからだ。だが、その際、付近の野戦病院に収容されていた500人の重傷者もみな爆死してしまった。後に当局は、そのことを隠そうとしたが、「事実はそうだったことを私は知っている」と作家は証言する（グーセフI、589-591頁；『マコヴィツキー・ノート』第2巻、178頁、1906年7月17日付）

街の放棄、撤退、街を包む業火、作戦の犠牲になり焼け死んだ多数の将兵…。トルストイが後に『戦争と平和』でモスクワ放棄と大火を生々しく描きえたとき、そこにはセヴァストーポリ体験が重ね合わされていたはずだ。



ВНУТРЕННОСТЬ ОДНОГО ИЗ ЧЕТВЕРТАК БАШТОНА

トルストイが勤務
した第四堡壘²⁰⁹



²⁰⁹ N.ベルグ『セヴァストーポリ・アルバム』（1858年）所収。

Севастопольский альбом Н. Берга. Издание К. Солдатенкова и Н. Щепкина. Москва, типография Каткова и Ко, 1858.

<http://www.raruss.ru/bind-edition/bindings2/2403-berg-sebastopol.html> (2015年9月5日最終閲覧)

地図1 セヴァストープリ防衛戦

全市が要塞化されており、**第四堡壘**（IV баст.）は南端の要の位置にある。下の地図に見るように、連合軍に直に対峙する最前線であった。要塞南西の**マラホフ砲台**（Малахов курган）、北端の**パヴロフスキー堡壘**（Павловская бат.）、北岸に架かる**橋**の位置も確認されたい。

ロシア軍は、黒海艦隊の基地のあるセヴァストープリへの英仏土連合軍の進軍を許したが、旧式の軍艦などを自沈させて港湾を封鎖、街全体を要塞化したため、長期の攻囲戦となった。²¹⁰

²¹⁰ Военные действия в Крыму 8.IX.1854 г. - 27.VIII.1855 г. // Советская историческая энциклопедия. М.: Советская энциклопедия. Под ред. Е. М. Жукова. 1973—1982.

以下も参照。

・ «Словари и энциклопедии на Академике» (<http://dic.academic.ru/>)
<http://dic.academic.ru/dic.nsf/sie/15697/%D0%A1%D0%95%D0%92%D0%90%D0%A1%D0%A2%D0%9E%D0%9F%D0%9E%D0%9B%D0%AC%D0%A1%D0%9A%D0%90%D0%AF>（2015年9月5日最終閲覧）

・ Операции в Крыму: театр военных действий
http://www.e-reading.club/chapter.php/1003108/7/Nive_Petr_-_Istoriya_russkoy_armii._Tom_tretiy.html
（2015年9月5日最終閲覧）

補説：「魂の弁証法」について

革命的民主主義者ニコライ・チェルヌイシェフスキーは、1856年以降、雑誌「現代人」の編集にたずさわっていたが、1856年に同誌第12号にすぐれたトルストイ論を書いている。そのなかで、この作家の特長として、独特の心理描写を挙げ、これを「魂の弁証法」と規定した。その最もめざましい例として、チェルヌイシェフスキーは、ほかならぬプラスクーヒンの死の描写を全文引用し、こう解説している。²¹¹

トルストイ伯の注意は何よりもまず、ある感情や思想が他の感情や思想のなかからいかにして展開してくるかということに向けられる。氏にとっては、与えられた状況や印象からじかに発生する感情が、追憶の影響や、空想が描くいろんな連想の力にあやつられて、いかにして他の感情へと移行し、ふたたび前の出発点に帰って来、さらにふたたび、連鎖的な思い出のかずかずを経めぐって変転をとげてゆくかを、最初の感じから生まれる想念がいかにして他の想念へと転化し、さきへさきへと惹かれていって、夢想を現実のいろんな現実の感じと融けあわせ、将来に関する空想を現在に対する反省と混ぜあわせてゆくかを観察することに興味がある。

手にとるように分かるが、しかし、これだけでは、ルソーの『告白』にはじまる「ロマネスクな方法」とどこが本質的にちがうのか判然としない。読者としては、ヘーゲルの『精神現象学』などの弁証法的展開を漠然と思い浮かべ、心理と行動のプロセスに当てはめるだけだ。

では、トルストイ独自の「魂の弁証法」とはなんなのか。『戦争と平和』のところで、その実相についてくわしく考察することにする。

さて、チェルヌイシェフスキーは、トルストイの作品の特徴としてさらにもう一つ、「直情的な、まるで清らかな幼い時代からまったく清純無垢な形で保持されてきたように見える、倫理観のみずみずしさ」を指摘している。

これも至当な指摘である。トルストイは、「幼年時代の清らかさ」をいかに復活させるかを考えつづけ、そのおもな材料として、自己の感情と思考と行動の観察を飽くことなく重ねた人であり、そのなかで、「魂の弁証法」が鍛えられていったからだ。チェルヌイシェフスキーは、この二つの特徴がじつは表裏一体であることには思い至っていないが。

²¹¹ 北垣信行訳「幼年時代および少年時代」「L・N・トルストイの軍隊短編小説集」(『トルストイ全集別巻』、1978年、114-115頁)。

第 11 章 現実そのものを変える：農業経営と教育活動

トルストイは行き詰まりからの活路を文学以外のところにもとめる。それは、現実そのものの変革をめざした、二つのきわめて野心的な活動だった。その一つは農業である。作家は、自分の農奴を解放するとともに経営を近代化しようとした。そうすることによって、自分（地主）と農民との関係を根本的に改善しようとしたのである。この農奴解放の試みは、1856年から農奴解放令が公布された1861年までおこなわれた。

そして、この農業活動と並行して、トルストイと、現実の「理想の女」との恋愛が始まる。相手は、農婦の人妻、アクシーニャ・バズイキナ（Аксинья Базыкина, 1836—1919）である。じつは、これらすべては、あるひとつの大きな試みであった。つまり、現実を変え、農民に近づき、「理想の女」との愛を成就させる、ということだ。

第二の活動は、農民の子弟の教育である。その目的は、「小さな農民」に近づくことと、言ってみれば、自由な「新人類」を創造することだったのである。

では、農業、教育、恋愛の順にくわしくみていこう。それらはいわば互いに照射し合い、それぞれの特徴をそれぞれの角度から浮かび上がらせてくれるはずである。

I.トルストイの農奴解放の試み：地主をやめるのはむずかしかった...²¹²

トルストイは、1855年末にクリミア戦争から帰ってすぐに、自分の領地の農奴解放にとりくみはじめた。あとでくわしくみるように、19世紀前半には、農奴制はもう底の抜けたバケツさながらの非効率な経営に成り下がっていたから、実は、地主のほうが農奴から解放されねばならなかったといえるが、上でかんたんに述べたとおり、作家にとって解放は、もっと大きな問題だった。

トルストイは、農奴解放を通じて、主人（地主）と奴隷（農民）の対立、敵意、差別を乗り越えようとした。つまり、トルストイにとって解放は、たんなる損得勘定ではなく、社会的、倫理的、宗教的問題でもあったわけだが、これはもはや証明済みだろう。肝心なのは、それが彼の「理想の女」にかかわる問題でもあったことである。1858年—1860年代はじめ、彼には、愛人がいた。農婦の人妻、アクシーニャ・バズイキナだ。

作家の農奴解放の試みは、アクシーニャとのどろどろの関係と裏腹であり、ひとつの大きな理想の追求にほかならなかった。だからこそ、作家の農奴解放を可能なかぎりくわしく検討する意味がでてくる。彼がどこまで農民に、アクシーニャに近づきえたか、理想に肉迫し

²¹² I 「トルストイの農奴解放の試み：地主をやめるのはむずかしかった...」は、日本トルストイ協会報「緑の杖」第6号（2011年）に掲載された同名の拙稿に加筆修正したものである。

たか、どこでつまづいたか、リアルかつ具体的にみせてくれるからだ。

以上の理由により、ここでは、解放の具体的内容をできるだけ掘り下げることに照準を合わせる。

さいわい、1856年から1861年の農奴解放令公布にいたるまでのトルストイの試みについては、米川哲夫氏のすぐれた研究、「トルストイと農奴解放」があり²¹³、筆者は多くのことを教えられたが、いくつかの論点を追加することができる。当時、農奴制がどのくらい空洞化していたか、トルストイ自身の経営はどうだったか、彼の解放案はどのくらい地主に有利だったか、政府の解放令とくらべてどうか、といった問題の細部だ。これらはそのまま、作家と農民との具体的関係を表すことになるから、だいじなのである。

とくに解放令については、「極度に反動的で、地主に圧倒的に有利！」といった先入観がいまだに根を張っているが²¹⁴、これとトルストイ案を詳細に比較することで、意外な結論に導かれることになった。それは、作家と農民、愛人の関係をも新たな光で照らし出すだろう。

もうひとつ、この点を解明するうえで重要なのが、未公開資料「農業メモ」である。トルストイは、1858年はじめから1860年なかばにかけて、農業経営のためのメモを克明につけていた。筆者はさる1999年4月に、その校正刷りのコピーを、故リディア・オプリスカヤ氏からいただいた。彼女によると、この「農業メモ Хозяйственные записи」はもともと、90巻全集のメモの部に入る予定で、校正刷りもでたのだが、「こんな細かい農業メモは、創作と関係ない」という理由でカットされてしまったと²¹⁵。だが、このメモは、作家がどれほどの知

²¹³ 米川哲夫「トルストイと農奴解放——1856年の試み——」、東京大学教養学部外国語科編「外国語科研究紀要」第27巻第4号、1980年3月。

米川哲夫「トルストイと農奴解放——1856年から1861年へ——」、「ロシア史研究」№33、1981年4月。

²¹⁴ たとえば、比較的最近のクルチコフの研究でも、トルストイ案のほうが1861年の農奴解放令よりも進歩的で農民に有利であるという図式が踏襲されており、両者の厳密な比較はなされていない（下記論文の354—355頁をみよ）。

Крутиков В.И. Л.Н.Толстой и яснополянские крестьяне: попытка освобождения до реформы 1861 г. // Яснополянский сборник 1998. С.352-357.

²¹⁵ このメモをいただいた経緯は次のとおり。筆者が読売新聞文化欄（1999年5月10日付夕刊）に「等身大のトルストイ像は？——新全集120巻、ロシアで刊行へ——」という記事を書いた際、新全集編纂を統括していたオプリスカヤ氏に、何か目玉になる発見や資料はないか、お尋ねしたところ、「じゃ、これをあげよう」と、「農業メモ」の校正刷り（54頁）をくださった。それを筆者は記事に少し書いたのである。

その後、できれば、この貴重な資料をすべて公開したく思い、2008年11月25日、世界文学研究所に、オプリスカヤ氏逝去後に全集編纂を引き継がれたマリーナ・シェルバコーワ氏を訪ねた。すると、意外なことに、シェルバコーワ氏は、農業メモの存在はご存知だったが、この校正刷りは未見だったという。

メモの校正刷りは複数存在するようで、そのうちの 하나가、オプリスカヤ氏個人の手持ちの資料にあったのである。シェルバコーワ氏は「こんなものがあったとは！」と驚いていた。つまり、オプリスカヤ氏は、だれも知らない未公開資料を個人的に所有し、使用していた、ということになる。こういう資料管理事情を考えると、まだまだ知られざる重要文書があるかもしれない。

「農業メモ」の公開については、論文で一部引用するのはかまわないが、全体の公開は、オリジナル・メモと複数の校正刷りを擦り合わせる編集作業が終わってからにしてほしい、ということだった（こ

識と情熱をもって経営にあたっていたか、如実に示す。そして、彼の運命の日をあざやかに再現してくれるのである。

*なお、ひとつお断りしておくが、農奴解放の試みを多少なりとも突っ込んで論じようとすると、いろいろ煩瑣な計算が必要になり、論述がくどくなるのはどうしても避けられない。読者諸賢のご寛恕を乞う。

1. 農奴制をとりまく状況

① 19世紀前半、農奴制が空洞化。中小の地主貴族は借金地獄へ

ロシアの地主貴族は、国家にとっては、人頭税という国税徴収の番人だった。番人を務めるために国家勤務から解放され、農民が逃亡しないように目を光らせ管理してきたのだが、トルストイが生まれた1828年ごろは、ちょうど歴史の変わり目にあたっていた。地主貴族の非効率な経営は、もう社会のお荷物で、それはトルストイ家の家計にも現れている。作家の父ニコライが死んだ1837年の総収入の6割ほどが、「後見会議」への借金と利子の返済に消えている（グーセフ I、128頁）。

しかも、全収入の4分の1ちかくは、ニコライが1837年に買ったばかりの「金の成る」ピロゴヴォ村からのものだ。ということは、37年までは同村からの収入はなかったわけだから、これをのぞくと、収入は3万4千ルーブル、支出は4万7千ルーブル強、うち2万6千が後見会議への支払いという大赤字だったことになる。まさに「倒産寸前」だ。

ニコライは、大浪費家の父イリヤとはちがい、経営に熱心だったのに、それでもなお破綻状態に陥るのは、地主経営全般の危機を物語っている。実際、この時代に中小の地主は、急速に没落しつつあり、ニコライも、危ない橋を渡ってでもピロゴヴォを手に入れざるをえなかったが、それが彼の死を早める結果となった²¹⁶。

19世紀前半の地主の収支にかんするデータをみると、トルストイ家はけっして例外ではない。地主経営に必死にとりくんでも収益は伸びず、収入の6割ていどを後見会議にもっていかれる——こんなケースは、とくに中小の地主ではぜんぜんめずらしくなかった。チャーホフの『桜の園』のように、借金で首が回らなくなり、領地を競売にかけられる場合も相次いでいた。

こういう状況で、地主たちの多くは土地を抵当に入れて後見会議から金を借りるわけだが、この金融機関は高利貸し的、サラ金的手法を用いていた。地主の金回りが苦しくなると、利

れはまことにもっともな話である)。という次第で、オリジナル・メモも、校正刷りも、今のところ未公開だ。

²¹⁶ 1837年6月21日、トルストイが8歳のとき、父ニコライはなぞの死をとげた。

彼の死については、第3章「トルストイのほんとうの生い立ちは？」の「父は殺された？ 父は犯罪者？」で、くわしく述べた。

率を上げるなどローンの条件をきびしくするかわりに、さらに金を貸してやる。これがいわゆる「抵当の入れ直し」だ。なお、後見会議そのものは国の機関だが、ここで運用される資金は国庫から出たものではない。だから、ローンが貸し倒れになっても、政府はべつにどうということもない。担保の土地もあるのだし²¹⁷。

トルストイが農奴解放にとりくみはじめた1856年には、3月30日にアレクサンドル二世の「下から起こるより上から起こるほうがずっといい」という演説がなされるほど、情勢は切迫していた。おまけに展望は不透明で、下手をすると農民側に有利に転ぶ可能性もなきにしもあらず。もしや、いまや社会の寄生虫になりさがった貴族が権力から切り捨てられるかたちで、農奴解放がなされるのでは?... いずれにせよ貴族が没落していくのは必至だし、一揆、暴動も頻発していた。

② なぜ農奴制は空洞化したか？

地主経営全般、農奴制全般が空洞化したのはなぜか。まさに19世紀前半から中ごろにかけて、ロシア農業に大きな変化が起きたのだ。19世紀はじめは、まだ昔ながらの三圃式農法がおこなわれており、生産性は、穀物を1キロ植えて、収穫は3-4キロといったところ。

しかし、19世紀半ばになると、ホップ、タバコ、亜麻などの工芸作物が普及し、1840年代には、じゃがいもが「第二のパン」になると同時に、食品工業の原材料ともなった。砂糖大根（ビート）のような新しい工芸作物もひろまり、製糖工場（предприятия по переработке сахарной свеклы）も出現する。トルストイ領の位置するトゥーラ県のデータがあるが、それによると、同県最初の製糖工場が建てられたのは、1802年のこと。1834年には34工場、1848年には300強と、どんどん伸びた。

ここでビート普及の背景について一言。1745年、ドイツの化学者アンドレアス・マルクグラーフ（Andreas Sigismund Marggraf, 1709—1782）が、飼料用ビートから砂糖を分離することに成功した。その後、マルクグラーフの弟子、フランツ・アチャー（Franz Karl Achard, 1753—1821）が、1802年に製糖工場を建設する。遠いロシアのトゥーラ県にも、早くも同年に製糖工場第一号が出現している。

ビートによる製糖業普及に猛烈な拍車をかけたのが、ナポレオンである。1806年—1813年の大陸封鎖のせいで、ヨーロッパに砂糖が入らなくなった。そこで、砂糖自給のため、欧州各地にビートが急激に広がったわけだ。

ビートひとつとっても、自然科学、化学の発達、産業革命、ナポレオンの出現という流れから無縁ではない。この流れが、結局、ロシアの地主経営の根底をも掘りくずしていったのである。

²¹⁷ 後見会議については、つぎの事典の「後見と抵当」（Опека и залог）の項目を参照。

Федосюк Ю.А. «ЧТО НЕПОНЯТНО У КЛАССИКОВ, или Энциклопедия русского быта XIX века». М.: Флинта, Наука, 2001. 4 издание. ГЛАВА ДЕВЯТАЯ.

特筆すべきは、大陸封鎖がロシア農業にあたえた壊滅的打撃だ。ロシアは、穀物をイギリスに輸出できなくなり、最大の得意先を失ったのである。やっと戦争が終わったと思ったら、こんどは英国があまり穀物輸入を必要としなくなっていた。同国は、大陸封鎖で穀倉のロシアから切り離されたので、国内の地主を保護し、穀物増産に励んだからだ。1815年制定の穀物条例は、安価な穀物の輸入を禁じた。こうして19世紀前半に、ロシアの地主は、輸出減と近代化という二つの大波にみまわれたのである。

新しい農具（脱穀機、とうみ、種まき機、刈取り機など）も取り入れられはじめた。雇いの作男（наемные работники）も急速に増え、1850年代には、総数70万人におよんだ。農奴による耕作より、作男によるそのほうが、はるかに効率的で安上がりになった。こういう状況のなか、昔風の地主経営は、借金地獄に堕ちていったのである。19世紀はじめには、抵当に入っている農奴数は全体の5パーセントにすぎなかったが、1850年代には65パーセントを超えた²¹⁸。

貴族の地主経営は、にっちもさっちもいかなくなってきたわけだが、ここに、その原因のひとつ、賦役と自由耕作のコスト差をしめす資料がある。地主丸抱えの農奴は金を食うし、労働意欲もないというのは当然だが、たいへんな差だ。

この資料をまとめたのは、A.P.ザブロツキー＝デシャトフスキー（А. П. Заблоцкий-Десятовский, 1807-1881）という人物である。経済学者で国有財産省（министерство государственных имуществ）に勤めていたが、大臣パーヴェル・キセリョフに依頼されて、1841年夏に、ロシア各地を回って、賦役と自由耕作の効率を調べた²¹⁹。

ヤースナヤ・ポリャーナの在るトゥーラ県の例をみてみよう。トゥーラ県の地主Aは、各チャグロに対して8デシャチーナ（1デシャチーナ＝1.09ヘクタール）をあてがっていた。チャグロ（тягло）というのは課税単位で、男女一人ずつの一组が多い。ふつうは夫婦だが、三人一组の場合もある。年齢的にはだいたい、男は18－55歳、女は結婚から50歳までの働きざかりだ。

休耕地、秋まき、春まきの耕地のそれぞれに2デシャチーナずつ、牧草地に1デシャチーナ、宅地、菜園に1デシャチーナの計8デシャチーナである。収穫は地主と折半。1チャグロの維持に要する経費は、年間288ルーブル。

しかし自由耕作なら、優秀な男女一组の働き手を年間170ルーブルで雇える。その内訳は、

給料..... 60 ルーブル

食費40 ルーブル

馬、馬具、農具、宿舎などにかかる諸経費、利子70 ルーブル以下

²¹⁸ Экономика России 19 века. 1.2. Сельское хозяйство

<http://www.refbank.ru/ir/55/ir55.html> (2015年9月7日最終閲覧)

²¹⁹ О крепостном состоянии в России, 1841. См.: Хрестоматия по истории СССР. Т. 2 / Сост. С. С. Дмитриев и М. В. Нечкина. М., 1949. С. 593-594.

計..... 170 ルーブル

したがって、トゥーラ県の地主 A の領地では、自由耕作は賦役より 1 チャグロあたり 118 ルーブル以上も安上がりだ。前者は後者の 59% の出費ですむ。

ちなみに、トルストイの「農業メモ」84 頁に作男への経費の額が記されている。

1858 年 6 月

ライ麦 3 デシャチーナを耕すこと。

1 週間につき 2 銀貨ルーブル²²⁰。

つまり、1 ヶ月 8 銀ルーブルだから、さっきのケースと似たような額になる。もうひとつ、賦役についていうと、農民に勤労意欲がないのは当然だが（なにしろただ働きだから）、それにくわえて、サボりやすく、貢租よりごまかしやすいという、農民にとっての「利点」があった。これも農奴制の非効率と空洞化に大いに与っていたろう。平均週 3 日間の賦役が、トルストイのところでは実際のところ、何日おこなわれていたのか、また、ほんとうに全員労働だったのか、きわめて疑問だ。

1856 年に農奴解放提案が拒否されたあと、トルストイは、「延べ年間 5000 日ですむ賦役を、帳簿上は 10500 日もかけてやっている」という意味のことを書いている（1856 年 6 月 9 日の日記〈47, 80〉）。筆者の考えでは、5000 日ですむものはやはり 5000 日程度しか働いておらず、農民たちは管理人らに帳簿をごまかしてもらっていた。そのかわり管理人のために働いたり、賄賂をやったりした。残りの 5000 日は自分のために働いていた、というのが、今も昔も変わらぬロシアの常識で、それなりの利益配分のバランスがあっただろう。

要するに、農奴たちは、地主丸抱えで適当にサボりながら働いていたと思われるが、これをトルストイはどう「解放」しようとしたか。

2. 1856 年の試み：独自の解放案を農民に提示するが拒否される

① トルストイ案

トルストイ案は、いわゆる有償方式で、農民が土地を買いとる。その金額は、一口で言うと、週 3 日の賦役を貢租に換算したものだ。しかし、後見会議への借金、約 2 万ルーブルも上乗せした（5, 243）。自分がこしらえた借金をちゃっかり肩代わりさせようとしたわけだ。領地が抵当に入ったままだと、土地付きで解放することがむずかしい。といって、自分で金をつくる当てもないから、という理屈である。

ちなみに、彼が一時結婚を考えていたヴァレーリア・アルセーニエヴァ嬢あての手紙によると、領地からの現金収入は年間 2 千ルーブルていどだから（1856 年 11 月 12-13 日付〈60, 108

²²⁰ 紙幣ルーブルは 1840 年に廃止され、以後銀貨ルーブルが主要な単位となった。

ー109))、借金総額は年収の10倍にのぼる(もうひとつの収入源、原稿料のほうは、年平均約1000ルーブルと計算している)。

トルストイ案は具体的に言うと、各チャグロに、従来の分与地5.5デシャチーナ+無償分与地1デシャチーナ=6.5デシャチーナを与える。無償分与地とは、無料で分与する土地。米川氏が指摘されているように、借金を上乗せした代償と考えられる²²¹。

従前の分与地の内訳はというと、耕地4.5デシャチーナ(一圃が1.5、三圃で4.5)+草地1デシャチーナ=5.5デシャチーナ。これに宅地とそれに付属する菜園がくわわる。

では、トルストイ案では、その計6.5デシャチーナの耕地と草地を、各チャグロにいくらで「買い取ら」せようとしたのか。

作家は、各チャグロあたり年27.5ルーブルずつ、24ヵ年にわたり払わせるつもりだった(あとで年26ルーブルに値下げした)。宅地および菜園は、無償で引き渡す。最初の17年で土地代金は完済。あとの7年はトルストイの債務2万ルーブルの肩代わりだ。なぜ旦那がこしらえた借金を自分たちが払うのか、農民たちは納得いかなかったろう。合計金額は、660ルーブル(貢租26ルーブルなら624ルーブル)。チャグロの総数は、90前後と考えられるので²²²、作家は、 $660 \times 90 = 59400$ ルーブルを得るはずだった。

1チャグロあたり毎年27.5ルーブルという貢租の額そのものは、たしかにトゥーラ県における124の領地の平均、38ルーブル²²³よりはかなり低い、ヤースナヤ・ポリャーナの生産性の低さも考えねばならない²²⁴。収益のあまり上がらぬ土地で年27.5ルーブルは、はたしてそんなに安かったかどうか。1人あたり0.5デシャチーナの分与地が無償で追加されたことを考慮しても、だ。

トルストイ案の内容については、大全集第5巻収録の関連資料から知ることができる(5, 241-258)。とくに、内務次官A.I.レフシンあて上申書に、数字の具体的根拠がまとめて示されている(5, 247-248)。米川論文は、めんどろな計算をふくむ雑多な資料を時系列に沿っ

²²¹ 前掲「トルストイと農奴解放——1856年の試み——」、15頁。

²²² チャグロの総数の算出方法はつぎのとおり。

先に本文で述べたように、課税単位チャグロは、男女一組(夫婦)がふつうで、年齢的にはだいたい、男は18-55歳、女は結婚から50歳まで。チャグロの数は、したがって、18-55歳の男子の数にひとしい。この働きざかりの年齢層は、登録農民数(男子全員)のおおよそ3分の1になるから、チャグロ数もまた登録農民の3分の1となる。

トルストイ領の場合、1847年の相続時に登録農民が330人だったが、そのあと2つの村(1847年時の農奴数60)を売却しているから、56年当時は300人弱と考えられる(ゲーセフI、232-233頁)。よって、チャグロ数は、その3分の1、すなわち90ほどと思われる。

米川氏は、1856年6月9、10日の日記の数字をもとに、べつの方法でも概算している。つまり、男子の賦役が年間延べ10500日、1チャグロあたり年130日以下なので、各チャグロから男子が一人ずつ年120日賦役にかりだされたとすれば87チャグロ、110日ずつとすれば95チャグロとなる(前掲「トルストイと農奴解放——1856年の試み——」、7-8、22頁)。

²²³ Игнатович И.И. «Помещичьи крестьяне накануне освобождения». М., 1910. С.298, табл.4.

²²⁴ ヤースナヤ・ポリャーナの生産性の低さについては、本稿第1部の第2章(ヤースナヤ・ポリャーナ前史:祖父ニコライ・ヴォルコンスキーの生涯)でくわしく述べた。

てみごとに整理、総合しており、トルストイ案の細部から全体まで一望しうる。

結局、農民たちはトルストイ案を蹴り、1861年公布の農奴解放令にしたがって、ぜんぜんべつの条件で解放された。その選択は、じつは正しかったのだ。

② トルストイ案と農奴解放令の比較

農奴解放令では、年間の貢租額の16.666... 倍が、土地の買取り金額である。つまり、年間の貢租額は、買取り金額の6パーセントに相当する（ $16.666... \times 6 = 100$ ）。農民一人あたりの標準分与地（最大分与地 *высший душевой надел*）の面積、および貢租の額は、地域によってことなる。黒土地帯のような実入りのいいところほど、面積が小さくなる。トルストイの領地のあるトゥーラ県でも、南部の肥沃地帯のほうが小さい。

地域ごとの標準分与地、貢租の額については、農奴解放令の地方規定を参照²²⁵。また、電子版「1861年2月19日公布の法令」をみられたい²²⁶。

トルストイ領の位置する地域では、農民一人あたりの標準分与地は、3デシャチーナ（グーセフII、435-436頁）。3デシャチーナに対する貢租額は、年10ルーブル（同地方規定および電子版資料、132頁）。1チャグロあたりなら、数字はその倍になるわけで、標準分与地は6デシャチーナ、貢租額は年20ルーブルとなる。

ここでひとつ注意すべきは、**標準分与地を下回ると、規定によって、貢租額が面積に対して割高になることだ**（地方規定第169条、および電子版資料の133、140頁）。つまり、地主にしてみると、分与地を減らしても、その割には、税収は減らないのである。地主保護の「手品」の一つだ。

たとえば、非黒土地帯の場合は、トルストイ領のある地域のように標準分与地が3デシャチーナで、それに対する貢租額が10ルーブルなら、つぎのようになる。

基準どおり3ルーブル分与された場合は、最初の1デシャチーナに規定貢租額の50%=5ルーブルが課せられ、もうひとつの1デシャチーナに25%=2.5ルーブル、3番目の1デシャチーナに25%=2.5ルーブル。こういう不均等な課税がなされるのだが、こいつが曲者なのだ。

計2.5デシャチーナしか与えられない場合は――

5ルーブル（最初の1デシャチーナ）+2.5ルーブル（2番目の1デシャチーナ）+1.25ルーブル（残りの0.5デシャチーナ）=8.75ルーブル

²²⁵ «Местное положение о поземельном устройстве крестьян, водворенных на помещичьих землях в губерниях: великороссийских, новороссийских и белорусских»
<http://istmat.info/node/33359>（2015年9月7日最終閲覧）

²²⁶ «Положения 19 февраля 1861 г.». С.126-137.

<http://www.historichka.ru/materials/zaionchkovskii/3.html>（2015年9月7日最終閲覧）

以下、書名を略し、（電子版資料、○○頁）と記す。

というわけで、貢租は、8.75ルーブルになる。貢租10ルーブルが、面積に比例して減るなら、2.5デシャチーナには、8.333ルーブル課せられるだけだから、農民にはかなり損だ。

標準分与地の3分の2、つまり2デシャチーナしか与えられなくても、貢租は5ルーブル（最初の1デシャチーナ）+2.5ルーブル（2番目の1デシャチーナ）=7.5ルーブル。規定貢租額の75%が確保される仕組み。

トルストイもまた、この特権を享受した。1856年のトルストイ案では、1チャグロあたり6.5デシャチーナ、つまり一人あたり3.25デシャチーナ与える気だったのに、解放令施行に際しては、3デシャチーナ以下しか与えなかったのだ。彼は後年、農奴解放を振り返り、ビリュコフに手紙でこう回想している。

私は、「解放約定証書 *уставная грамота*」を作成するに際し（1861年11月）、法令にしたがって、農民が現在使用している土地をそのまま残してやりました。それは、一人あたり3デシャチーナをいくぶん下回っていましたが、恥ずかしいことに、それ以上なにも付け加えなかったのです。私のなした唯一の善事は、あるいは悪事でないことは、人の勧めにもかかわらず、農民の配置換えをおこなわなかったこと、そして、放牧場をそのまま農民に使わせておいたことです。²²⁷

До освобождения, года за четыре или за три, я отпустил крестьян на оброк. При составлении уставной грамоты я оставил у крестьян, как следовало по положению, ту землю, которая была в их пользовании, - это было несколько менее трех десятин на душу, и, к стыду своему, ничего не прибавил. Одно, что я сделал, или не сделал дурного, это то, что не переселял крестьян, как мне советовали, и оставил в их пользовании выгон; вообще не проявил тогда никаких бескорыстных чувств на деле.

トルストイ領での分与地面積は、残されている資料の数字から概算できる。1870年発効の「買戻し申請書」（61, 366-368）に、ヤースナヤ・ポリャーナ村では、農業適地357.450デシャチーナを農民側にひきわたすとある。同村のチャグロ数は、1858年に書かれた未完のルポ、『村の一夏』によると65だ（5, 263）。この間にチャグロ数はそんなに変わっていないだろうから、357.450デシャチーナ÷65チャグロ=5.499デシャチーナと考えていいだろう。チャグロは男女一組だから、一人あたりは、その半分の2.75となる。

ちなみに、ニコライ・グーセフは、作家が標準分与地の3デシャチーナを与えたとしているが、事実と反する（グーセフII、435-436頁）。グーセフが、買戻し申請書と作家の『思い出』を知らないわけがないので、不可解だ。グーセフの自己検閲かもしれない。

要するに、1チャグロあたり、耕地4.5+草地1=5.5という、農民が使用してきた土地をそのまま分与したわけで、作家の回想が裏付けられる。

²²⁷ ビリュコフ宛の1905年12月24日付手紙（76, 66）。

(トルストイ案にあった無償分与地1デシャチーナは、なぜ撤回したのか？ あとに述べるような理由で、解放令がトルストイ案より地主側にずっと不利だからだろう。そう、上のような「手品」にもかかわらず、前者のほうが、全体としては、地主にきびしかったのである…。)

この5.5デシャチーナに対する貢租額はいくらになるか。それが面積に比例するならば、2.75デシャチーナは、9.166ルーブルだが、規定では、9.375ルーブルにはね上がる。計算式はつぎのとおり。

$$5 \text{ルーブル (最初の1デシャチーナの額)} + 2.5 \text{ルーブル (2番目の1デシャチーナ)} + 1.875 \text{ルーブル (=} 2.5 \times 0.75 \text{ (最後の0.75デシャチーナ)) = } 9.375 \text{ルーブル}$$

このように、政府の農奴解放令においては、**作家の領地での一人あたりの年間貢租額は、9.375ルーブル**となる。

よって、一人あたりの買戻し金額は、 **$9.375 \times 16.67 = 156.28$ ルーブル**。

1チャグロあたりの買戻し金額は、その倍だから、312.56ルーブル。

一括払いできない、あるいははしたくない農民は（ほとんどがそうだった）、分割払いになる。すなわち、政府が、その80%、250.05ルーブルを立て替え、五分利の国立銀行券（пятипроцентные государственные банковые билеты）で地主に支払う。ただし、**領地が抵当に入っている場合は、その借金分が差し引かれる**（電子版資料、139頁）。

これは地主にとって重大だ！ トルストイ案では、借金を農民に払わせたのに、解放令では、逆に差引かれるのだ！ 1850年代には、大半の地主領が抵当に入っていたことを思い出そう。この点にかんするかぎり、**トルストイ案は解放令より、地主に圧倒的に有利である！**

さて一方、農民（各チャグロ）は、その250.05ルーブルの6パーセント、すなわち、15.003ルーブルを毎年、49年間国に払いつづける（この節の最初に述べたように、農奴解放令では、年間の貢租額は、買取り金額の6パーセントに相当する）。したがって、49年間の支払い総額は、735.147ルーブルとなる。

残り20%分は、トルストイの領地の農民は払わなくてよい。なぜなら、作家と農民が土地買戻しの条件で折り合わず、地主のみの署名で1870年に「買戻し申請書」が発効しているので、買戻し規定第68条2項により²²⁸、地主は20%分を請求する権利がないからである（電子版

²²⁸ «Положении о выкупе крестьянами, вышедшими из крепостной зависимости, их усадебной оседлости и о содействии правительства к приобретению ими крестьянами в собственность полевых угодий», статьи 66, 68 из «Высочайше утвержденные Его Императорским Величеством 19 февраля 1861 года Положения о крестьянах, вышедших из крепостной зависимости. СПб., 1861.» // **«Крестьянская реформа в России 1861 года. Сборник законодательных актов»** / под ред. К.А. Софроненко. М.: М.: Госюриздат, 1954. С.106-108.

この法令集には、農奴解放令がすべて収められている。

資料、137-141頁)。

まとめると、トルストイ案では、各チャグロは、6.5デシャチーナに対して、624ルーブルを毎年26ルーブルずつ24年で払うが、政府案では、5.5デシャチーナに対して、735ルーブルを年15ルーブルずつ49年で払うこととなる。

ちなみに、地主と農民間の土地配分の比率にかんしては、農奴解放令では、地主は、農業の適地の3分の1から2分の1までは、無条件に保留することができた。しかし、トルストイ案では、2分の1以上を保留しようとした。

なぜそう言えるかという、まず総面積は、1847年の相続時には、1470デシャチーナ、農奴330人だった(男子のみの数)。そのあと2つの村(1847年当時の農奴数60)を売却しているから、すこし減っているだろう。人数比で概算すると、1200デシャチーナ前後か。そのうち森は、175デシャチーナだ(グーセフI、232-233頁)。

これをトルストイ案ではどう分割しようとしたか。まず、高収入をもたらす森は、解放後も地主の所有である。そして、総数約90のチャグロに対して、耕地4.5デシャチーナ+草地1デシャチーナ+無償分与地1デシャチーナ=6.5デシャチーナをひきわたすということだから、分与地面積は計585デシャチーナにとどまる。

農奴解放令後はどうなったかという、トルストイは、1チャグロあたり5.5デシャチーナしか与えなかったから、もっと減っている。1861年作成の解放約定証書には、農業適地483.1039デシャチーナ、不適地34.1100デシャチーナをひきわたすとある(買戻し申請書〈61, 367〉)。

こうみえてくると、トルストイ案は、分与地こそちょっと多いものの、農奴解放令よりも農民に有利、とは言い切れなくなってくる。物価上昇を考慮すると、ふところ具合によっては、「解放令のほうがマシ」という農民もいたはずだ。そこでつぎに、当時の農民の収入、物価、インフレをみて、両者を比較しよう。

しかし、現時点でもつぎのことは言える。トルストイ案は、悪名高い解放令とくらべてさえ、その優劣は定かでなく、ましてや「進歩的」などとはお世辞にも呼べない、ということだ。

とにかく、トルストイ案では、半分以上が自分の所有で、引き渡した土地からも、向こう24年間にわたって毎年2340ルーブルずつ入る(各チャグロの貢租26ルーブル×90チャグロ=2340ルーブル)。これだけで、1856年当時の現金収入2千ルーブルを上回る。自分がこしらえた借金も、農民に払わせる——解放令では逆に、借金分を差引かれるというのに。おまけに、農民はもう農奴ではない、つまり自分の所有物として丸抱えにする必要もないから、経費もかからない。なんと結構づくめな「解放」ではないか!というのが、農地改革で土地をとりあげられた地主の孫である筆者の感想だ。

だから、農民がトルストイ案を一蹴したのは、地主への抜きがたい不信の念、土地に対す

る独自の考え方、「自分たちは地主さまのものだが、土地はわしらのものだ」²²⁹、無償の土地付き解放のうわさといったことのほかに、上に述べたような損得勘定もあったはずだ。

3. 農民の収入、物価、インフレを考慮して両案を比較する

まずは、先にみた賦役と自由耕作の比較では、男女一組の年間の給与が、60ルーブルだったことを思い出そう（1841年のデータ）。トルストイ案（年26ルーブル）と解放令（年15ルーブル）の差、11ルーブルは、ばかにならない。

つぎに物価をみてみよう。「19世紀中葉のペテルブルグでは、家具、暖房、サモワール、召使つきのみすぼらしい部屋が、1ヶ月5ルーブルした。食事は、1日15-20コペイカで足りた。しかし、こんな条件さえ、手の届かない官吏がたくさんいた」²³⁰

「みすぼらしい部屋」というのは、現代のワンルームマンションと考えていいだろう。ちなみに、ドストエフスキー『貧しき人々』（1846年）のマカール・ジェーヴシキンの住む台所の片隅は、1ヶ月の家賃が7紙幣ルーブル（当時、約2銀貨ルーブルに相当）、食事代が銀貨5ルーブル。

いまのロシアでも、間借りする人は多いし、『罪と罰』のマルメラードフのアパートみたいに、一部屋に何人も雑居するケースもよくある。間借りなら、もちろん、ロケーションによってちがうが、2010年1月現在の相場は100-300米ドルか。

また、ジェーヴシキンは、8月4日の手紙で、銀貨1ルーブルで靴を買うつもりだと言っている。この値で、それなりの革靴を買えるわけだ。

ドストエフスキー『死の家の記録』の主人公、ゴリヤンチコフは、シベリアの小さな町Kで、1回につき銀貨で30コペイカの謝礼で、週4回、「客好きな、功労ある老官吏」の娘たちにフランス語を教えている。ゴリヤンチコフは35、6歳だから、作者の年齢にあてはめれば、1856-1857年ころになる。いまのロシアでは、家庭教師代は、ロシア語、英語なら、600-1000ルーブルていど。つまり、20-33ドルだ（2010年1月現在、1米ドル=約30ルーブル=約90円）。

トルストイ『一八五五年八月のセヴァストーポリ』の主人公コゼリツォーフ陸軍中尉の年俸は、180ルーブル（15節）。また、「いつも困窮している」20年勤続の大尉の年俸は、300ルーブル（同19節）。

²²⁹ 国家評議会法律局長兼科学アカデミー総裁、ドミトリー・ブルードフ伯爵宛書簡の下書き（5, 256）。ちなみに、「мы ваши, а земля наша」ということばは、デカブリスト、イワン・ドミートリエヴィッチ・ヤクーシキンの回想、ドストエフスキー「作家の日記」などにもでてくる。

・ Записки, статьи, письма декабриста И. Д. Якушкина, М., 1951. С.29.

・ Ф.М.Достоевский ДНЕВНИК ПИСАТЕЛЯ, Ежемесячное издание 1876, ИЮЛЬ И АВГУСТ, Гл.4.Земля и дети.

ヤクーシキンは、自分の農奴に解放をもちかけたのだが、彼らは、宅地以外の土地は地主の所有だと知り、「じゃあ、いまのままがいい。わしらはだんなさまのもの、土地はわしらのものじゃ」と答えた。

²³⁰ Писарькова Л.Ф. РОССИЙСКИЙ ЧИНОВНИК НА СЛУЖБЕ в конце XVIII - первой половине XIX века. «ЧЕЛОВЕК» № 3, 1995.

トルストイの中編『悪魔』で、地主の主人公は、農婦を森番に「紹介」してもらい、彼に1ルーブルにぎらせる。つまり、売春の相場は、だいたい1ルーブルということになるろうか。現在は100ドル前後である。これはいつごろの話かといえば、作家と愛人の関係がしたじきになっているので、1858年のことになる。

以上総合すると、**おおよそ1ルーブル=100米ドル**といったところか。トゥーラ県の男女一組が1年間で60ルーブル=6000ドル稼ぐというのは、今のロシアと近い。モスクワ、サンクト・ペテルブルグなど大都市以外では、庶民の平均収入は、だいたいこんなものだろう。この収入では、トルストイ案と解放令の差、11ルーブルは、かなり重い。

もうひとつ、両者をくらべるうえで見逃せないのは、インフレだ。当時、農村にも貨幣経済、金融資本が急速に浸透していた。銀行は、貸した以上に金もどってこなければ利益にならない。だから、経済はたえず成長せねばならず、それはどうしてもあるていどのインフレを招く。無利子のイスラム経済ならいざ知らず。

49年もの買い戻しの期間に、ルーブルがかなり下落することは、農民も予想していたはずだ（しかも、1906年には、第一次革命の余波で、買い戻し金支払いは停止されたので、農民の負担はさらに軽減された）。半世紀後、インフレはどれだけ進んでいたか。1913年当時のくわしいデータがある²³¹。

表1 1913年当時の職種ごとの平均給与

職種	1ヶ月あたりの給与、手当 (単位はルーブル)
荷役労働者、沖仕、いかだ乗り（ドニエプル沿岸およびキエフ市）、石鹼工場とコルク工場の労働者	約 20
未熟練労働者（サンクトペテルブルクの冶金と金属加工の大工場）	20 - 35
熟練労働者——旋盤工、手仕上工、フライス工など（サンクトペテルブルクの冶金と金属加工の大工場）	75 - 120
陸軍少尉	70
陸軍中尉	80
陸軍二等大尉	90
陸軍大尉	105

²³¹ Владимир Широкогоров. Цены и оклады: дореволюционная Россия. Пачём цырковой слон (Запрос в Яндекс). <http://www.p-marketing.ru/publications/general-questions/social-dynamics/prices-salaries-before-wwi/print> (2015年9月7日最終閲覧)

将校に対する住居手当	8-25 (都市によりことなる)
第一ドゥーマ (国会) 議員 (1906年) *4等文官、陸軍少将の平均給与に相当	350
ギムナジウムの神学教師 (Шуйская женская гимназия)	102
雇いの召使 (ボルガ沿岸の都市ツァリョーヴォコクシャイスク «Царёвококшайск») (現マリ・エル共和国首都、ヨシユカル・オラ) -男 -女	5-8 1,5-5
同市の教員 - 初等学校 - 女子ギムナジウム	25 85-105
同市地方自治会 (ゼムストヴォ) の病院職員 - 院長 - 准医師	125 37-55

1855年当時、陸軍中尉の年俸は180ルーブルだったが、1913年には960ルーブル。20年勤続の大尉の年俸は300ルーブルがいまや1260ルーブルに。4倍強となっている。しかし、通貨があまり下落せずに所得が伸びることもありうる。食料品の小売価格はどうか。

表2 1913年当時の食料品の小売価格²³²

種類	品目	単位	価格 (ルーブル)
乾燥食品	小麦粉	フント	0.08
乾燥食品	米	フント	0.12
乾燥食品	砂糖	フント	0.12
乾燥食品	塩	フント	0.02
乳製品	牛乳	一瓶	0.08
乳製品	バター	フント	0.56
乳製品	サワークリーム	フント	0.28

²³² ロシアの単位フントは409,5グラム。牛乳瓶は、штоф (1.23リットル) の半分で、615ミリリットル。表2はモスクワの価格で、つぎの文献による。

Записки по курсу кулинарной школы. М.: Издательство Всесоюзного заочного политехнического института, 1989 (Факсимильное переиздание сборника, составленного в начале 20 века «Обществом распространения между образованными женщинами практических знаний»).

乳製品	コテージチーズ	フント	0.08
牛肉	肩バラ、肩ロース	フント	0.20
野菜	じゃがいも	10個	0.05
野菜	にんじん	1個	0.01
野菜	キャベツ	フント	0.05
野菜	ビート	1個	0.02
野菜	トマト	フント	0.20
鳥肉	鶏肉	1羽	0.70
果物	レモン	1個	0.05
果物	りんご	1個	0.03
卵	卵	1個	0.03

各商品を基準に、当時のルーブルの価値を概算してみよう。小麦粉は、2010年1月現在、平均すると、およそ1キロ=16ルーブル（0.533ドル）前後。1913年の価格は、1キロ換算で0.20ルーブル。当時の1ルーブルでは、小麦粉5キロしか買えないことになる。この0.20ルーブルが、現在の0.533ドルにあたるわけだから、1913年の1ルーブルは、いまの**2.67ドル**に相当。以下この要領で、食品の現在の値段、そこから割り出されるルーブルの価値を示す。ただし、量が明らかで比べやすい食品についてのみ。

表3 食品の価格の比較（2010年1月現在と1913年当時）。そこから割り出される1913年当時の1ルーブルの価値

食品	2010年1月現在の価格	1913年当時の価格	1913年当時の1ルーブルの価値 (現在のドルの価値で示す。なお、今のレートは、1ドル=30ルーブル=90円)
小麦粉	1キロ=16ルーブル	1キロ=0.20ルーブル	2.67ドル
米	1キロ=50ルーブル	1キロ=0.29ルーブル	5.75ドル
砂糖	1キロ=23ルーブル	1キロ=0.29ルーブル	2.64ドル
塩	1キロ=9ルーブル	1キロ=0.05ルーブル	6ドル
牛乳	1リットル=25ルーブル	1リットル=0.13ルーブル	6.41ドル

バター	1キロ=175 ルーブル	1キロ=1.37 ルーブル	4.26 ドル
サワークリーム	1キロ=80 ルーブル	1キロ=0.68 ルーブル	3.92 ドル
コテージチーズ	1キロ=150 ルーブル	1キロ=0.20 ルーブル (今よりずいぶん安い)	25 ドル
牛肉(肩バラ、肩ロース)	1キロ=200 ルーブル	1キロ=0.48 ルーブル	13.89 ドル
トマト	1キロ=50 ルーブル	1キロ=0.48 ルーブル	3.47 ドル
卵	10個=40 ルーブル	10個=0.3 ルーブル	4.4 ドル

こういう状況だ。正確な数字は示すのが難しいが、1913年当時の1ルーブルが現在の10ドルを切っているのは確実だろう。1913年当時の各食品の価格から、1ルーブルで何キロ、何リットルの食品が買えるか、換算して見ていただきたい。買えるのは、およそ5キロの小麦粉、3キロの米、3キロの砂糖、8リットルの牛乳、牛肉2キロ、トマト2キロ、卵30個…。1ルーブルの価値について、具体的イメージがわいてくるだろう。**現在のドルに換算すれば、1861年の農奴解放令公布から、半世紀後の土地買取り終了までに、1ルーブルは、今の100ドル相当から10ドル以下にまで下落してしまったのである。**

これを考えれば、トルストイ案より解放令のほうが、農民にとってもはるかに有利になることは明らかだ！半世紀後にどれだけ下がるか、正確な予想はできなかつたにせよ、向こう数十年間でインフレが加速するのは、欧州列強のなりゆきをみれば、分かりきったことではなかつたか。ロシアでは、1857年に鉄道建設勅令が発布され、ようやく工業発展がはじまろうとしていた。

4.トルストイ案と農奴解放令の評価：前者の完敗…

とはいえ、トルストイは、決してありきたりの強欲地主だったわけではない。米川氏が正しく指摘されているように、作家は、農奴解放令施行に際し、農民側の利益をかなり考慮したようだ²³³。というのは、解放令の規定では、地主は、農民の承諾をえずに、一方的に土地買戻しの条件を決め、買戻し申請書を発効させることができたのに、作家はそうしなかつた。ただし、一方的申請だと、前に書いたように、地主は買取金額の20%を失うことにはなるが。

地主と農民の利害が真っ向から対立するのはあたりまえで、トルストイの場合も、いくつか深刻な争点があった。ひとつは、農民が採草地として利用していた森を灌木林とみなすか森とみなすかという問題である。灌木林なら、採草地として使われてきたので、農民の所有

²³³ 前掲「トルストイと農奴解放——1856年から1861年へ——」、31-35頁。

になり、森なら地主のものだ（大ロシア地方規程第29条）。

もうひとつは、土地の交換にかんする問題である。作家は、分散していた地主の土地を一箇所に集めて、経営の便をはかろうとしたのだが、農民は配置換えに反対した。ところがトルストイは、一方的に申請しようとはせず、10年間にわたって利害を調整しつづけたのである。

作家はたんに買取金の20%を惜しんだにすぎないという向きもあるが、それは正しくない。これまた米川氏が周到に指摘されているように、買取条件のいかんにかかわらず、農民は署名しなかったろうから。署名さえしなければ、20%を払わなくていいのだ。

先に引いたとおり、作家は、「私のなした唯一の善事は、あるいは悪事でないことは、人の勧めにもかかわらず、農民の配置換えをおこなわなかったこと、そして、放牧場をそのまま農民に使わせておいたことだ」と回想しているが、これは事実合致するのである。

以上述べてきたところを総合すると、トルストイ家にかぎらず地主経営はまさに存亡の危機で、農奴解放して合理化するしかないが、作家は解放に際し、地主の立場から農民の利益をそれなりに慮った、と言っている。にもかかわらず、地主が考えるような解放案はしよせん、農民からみるとお笑い種にしかならない。まことに対立の溝は深い。そして、地主が地主であることをやめるのはかんたんなことではなかったという結論だ。

トルストイ案と解放令の比較で言えば、**農奴解放令はとにかく反動的で、トルストイはそれよりは進歩的という図式は、ニコライ・グーセフをはじめ、ほとんどの論者にみられるものだが、事実は逆なのである。とはいえ、トルストイ案は、地主が地主でありつづけるためには、まずぎりぎりの線だった——。こんな評価がおおよそ妥当なところだろう。そして、解放令は、じつは、地主にとってきわめてきびしかったのだ！**

1856年当時のトルストイの家計を例にとろう。かりに、この年に解放令が実施されていたとしたら、どうだったか？ 彼のふところに入るのは、前に述べたように、買取金額の80パーセントから、後見会議への借金約2万ルーブルを差し引いた額だ。

各チャグロの買取金額の80%、すなわち $250.05\text{ルーブル} \times 90\text{チャグロ} = 22504.5\text{ルーブル}$ 。
 $22504.5\text{ルーブル} - 20000\text{ルーブル} = 2504.5\text{ルーブル}$

作家が手にするのは、総額で約2500ルーブルにすぎない。年間の現金収入、2000ルーブルを少し上回るていど。しかし、トルストイ案では、56160ルーブルも入るから、雲泥の差なのだ（各チャグロの年間貢租額 $26\text{ルーブル} \times 24\text{カ年} \times 90\text{チャグロ} = 56160\text{ルーブル}$ ）。

ちなみに、買戻し申請書（1870年）によれば、買戻し金総額は25018ルーブル。作家が受けとれるのは、彼が自分で申請書に書いているように、「この金額の5分の4（*つまり80%、 20014.4ルーブル ——佐藤）から負債を差し引いた額」（61,368）。額が56年当時よりすこし減っているが、これは、56年から70年のあいだに何人かが個別に解放されたためだ。

要するに、半分の領地と引き換えに、借金を帳消しにしてもらっただけのことだ。他の地主たちも大なり小なり似たような状況だったろう。しかし、彼らはこれからどうするというのか?... 新時代を泳ぐすべを身につけた者がどれだけいたか? 革命を待つまでもなく大半の地主が没落していったことを、われわれは知っている。政府にしてみれば、どうせ滅びる地主貴族をむりに支える意味はなかった。

では、農民にとって解放令は? 近代化の波が押し寄せ、農村が全般的に貧困化していく一方で、地主による丸抱えがなくなった状況では、裸で放り出されたにひとしかつたろう。ちなみに、詩人ネクラソフの『ロシアはだれに住みよいか』は、解放令後の荒涼たる農村を描いたものだ。

というわけで、トルストイが夢見た地主と農民の関係など、「絵に描いた餅」でしかない。それどころか、地主貴族の存在そのものが歴史に押し流されようとしていた。理想が画餅に帰し、存在基盤の崩壊を味わった作家の心のうちはどうだったか? 実際のところ、彼はなにと戦い、なにを守ろうとしていたのか?... 1858年夏にさかのぼり、明から暗への決定的転回点となった日々をみてみよう。

5. 泥仕合を演じつつ「各戸」撃破したものの...

前に書いたように、1856年6月にトルストイは、村会であえなく解放案を拒否されたので、作戦を変えた。自分の領地の農民ひとりひとりを説得して、従来の賦役から解放案の方式の貢租払いに移行させようとしたのだ。58年秋には、ヤースナヤ・ポリャーナ村の3チャグロが頑強に抵抗していたものの、だいたい移行がすんだ(『村の一夏』5, 263)。これを実現するためには、各農家の経営実態を知り尽くしたうえで解放の「メリット」を納得させねばならなかったわけだが、「農業メモ」は、トルストイが実際に経営の細部まで把握しており、管理人も顔負けの経営者に成長していたことを示している。

「農業メモ」86頁(1858年6-7月)

ずる休みは見逃さない。

道路(複数)をならす。

干草のやまをもっとたくさん積む。

穀物置場をもっと大きくし、垣で囲む。

馬は群れへ放牧に。

干草は鍵をかけて保管すること、草一束だって重さを量らずには出し入れさせないぞ。

石の置いてある先は、グレッツォフカ村の者に刈らせる。

温室の地点から刈りはじめる。

干草のやまの量が正しくない。

Рабоч[их]. Кто пропустил записать.
Амбар на дворню.
Кулака на дом. ⁸³⁰
Якова. ⁸³¹
Эникеева. ⁸³²
Ивестка.
Табун рабочи[й]
Картофель полоть
срубы на дрова
Резать сажени.
Пильники.
Лпки.
Косы и сохи запасные.
Кирпич[ный] завод —
~~Кильмо-пшраб[пшкы]. ⁸³³~~
на Груманте] дрова.
Навозить под гречиху
Таратайку
Седло.
Недорезки перевести.
двор на Груманте].
По списку сбрую.
Смотреть за оранж[ереей].
Лошадей на привязь
Варок застелить.

Не пропускать прогулов.
дороги — ровнять.
Копны — больше.
Гумно увеличи[ть]
и городить
Лошадей в табун.
Сено на забор, без весу ни клок.
За камнем —
за Грецовскими.
Косцов от оранжер[ей].
Копны неверны.

Резать парницу ⁸³⁴ —

86

トルストイの「農業メモ」の当該箇所

露語原文

Не пропускать прогулов,

Дороги — ровнять.

Копны — больше.

Гумно увеличи[ть]

и городить

Лошадей в табун.

Сено на запор, без весу ни клока.

За камнем —

за Грецовскими.

Косцов от оранжер[еи].

Копны неверны.

しかし、作家の心は暗かったようだ。同時期、58年6—7月の日記（48, 16）をみると——

[7月19日] 6月16日—7月19日。書かず、読まず、考えず。全身どっぴり経営に漬かっている。戦いたけなわだ。百姓たちは、手を変え品を変え、頑強に抵抗している。グルマント村の連中は、陰気で押し黙っている。おれは自分で自分が怖い。かつて知らなかった復讐の念がおれのなかでうごめきはじめた。そして、ミール（農村共同体）²³⁴への復讐心だ。自分が不正なことをしでかすんじゃないかと怖い…。おれの才能は、**羨望の念**（*原文イタリック——佐藤）が化けたものにすぎない。フェートから手紙²³⁵と“Continental Review”²³⁶の論文、それにチチャーリンの手紙²³⁷を受けとった。今日はトゥーラへいくぞ！

[7月22日] 7月20, 21, 22日。トゥーラで、カプイロフ²³⁸との一件を片づけた。だが、作男たちがいない。鼻欠けの生意気な兵隊どもだけだ²³⁹。器量よしの刈り手。まわりに百姓どもが群がっている。争いは、賦役に出ていいかどうか、ということ。賦役に5人、あの百姓のほうに4人。イヴァン・イヴァーヌイチは、熱心なとてもいい庭師だ。家で寄り合いがあった。刈り手を登録。少年たちのことで叫び声。

²³⁴ 原語は мирь。世界、共同体といった意味である（ちなみに、平和は мирь）。米川氏は、ミール（農村共同体）と訳されている。この文脈では、それが正しいように思えるが、なんとなく変な感じもする。共同体に対して、まるで生きた人間に対するように復讐心をいざととは？…

「世界への復讐心」が正しいかもしれない。とすると、大変な意味になってしまうが、案外それが正解かもしれない。

²³⁵ 友人の詩人フェートからの手紙は、長兄ニコライと作家ツルゲーネフの来訪を知らせてよこしたもの（48, 434—435）。

²³⁶ イギリスの文芸誌（48, 434—435）。トルストイは、Continental Revue と誤記している。ケアレスミスか。Review などより、パリでフレンチ・カンカンなどの Revue でも見物したい気分だったのかもしれない。

²³⁷ В.Н.チチャーリンは、トリノから外国旅行の印象を書き送ってきた（48, 435）。

²³⁸ 正しくは、コプイロフ（Николай Федотович Копылов）。トゥーラの商人。作家は彼となんらかの金銭関係があった（48, 435）。

²³⁹ まともな雇える作男がいない。梅毒にかかって軍隊をお払い箱になった元兵隊たちしか見当たらない、という意味。

明日は草刈だ。昨日、ガヴリーラ・ボールヒン²⁴⁰が作男たちを解散させたが、私は、彼を呼び出し、ポクロフの日（*ユリウス暦 10 月 1 日の生神女庇護祭——佐藤）まで働くよう命じた。

アニーシムが許しを乞うた。今年の夏について書こうという考えが浮かぶ。どんな形式になるか。（48,16）

[19 июля.] С 16 июня по 19 июля. Не пишу, не читаю, не думаю. Весь в хозяйстве.

Сражение в полном разгаре. Мужики пробуют, упираются. Груманские пасмурны, но молчат. Я боюсь самого себя. Прежде незнакомое мне чувство мести начинает говорить во мне; и месть к миру. Боюсь несправедливости... Талант мой — *зависть*. Получил письмо от Фета с статьей ContinentalRevue и письмо Чичерина. Нынче еду в Тулу! —

[22 июля.] 20, 21, 22 июля. В Туле уладил дело с Капыловым, но рабочих нет. Безносые, гордые солдаты. Жничиха хорошенькая; около нее мужики. Спор о том, можно ли быть на барщине. На барщину 5, к мужику 4. Иван Иванович страстный и славный садовник. Дома сходка. Записываются косить, о мальчик[ах] крик. — На другой день косьба. Вчера Гавр[ила] Болхин разбивал рабочих, я призывал его и велел работать до покрова. — Анисим просил прощенья. Приходит мысль описать нынешнее лето. Какая форма выйдет.

「おれは自分で自分が怖い。かつて知らなかった復讐の念がおれのなかでうごめきはじめて」とは半端ではない。しかも、トルストイは、草刈などをめぐって農民とトラブルになっていたらしい。作家の気分からしてトラブルは深刻だったようだが、詳細は不明だった。それが、さっき引用した「農業メモ」をあわせ読むことで、はっきりするのだ。

「干草のやまの量が正しくない」

「干草は鍵をかけてしまうこと、草一束だって重さを量らずには出し入れさせないぞ」
(メモ86頁)

これで、まさにあの『アンナ・カレーニナ』(3章11-12節)にあるようなトラブルだったのがわかる。つまり、農民たちが刈りとった干草の量をすくなめに申告してごまかしたので、地主さまの逆鱗に触れたのだ。

『アンナ・カレーニナ』の主人公レーヴィンは、姉の領地の干草の分配に「不正」があるのをみつける。彼が実地検分したところでは、地主側つまり姉の取り分、荷馬車 50 台分が、実際には 32 台分しかなかった。押し問答のあげく、再配分を承知させる。干草のやまの上に

²⁴⁰ ヤースナヤ・ポリャーナの農民 (48, 435)。

陣どって、百姓たちの仕事を監督しつつ²⁴¹、若く美しく豊満な農婦とその夫の仲のよいパワフルな仕事ぶりにみとれ、おれも百姓女と結婚しようかな、こういう健康な労働生活はいいなあ、などと夢想する。未明に帰途につくが、偶然すれちがった馬車に、キティーが乗っていた。レーヴィンは、夢から覚め、「いくらこっちの生活（*農民の生活——佐藤）がよくても、もどれない。おれは彼女を愛しているんだ」とひとりごつ。「こっちの生活」に後ろ髪を引かれながら。

『アンナ』のこの場面とくらべることで、7月22日の日記に書かれた現実の状況がわかるのだ。グルマント村の抵抗と敵意などで落ち込んでいたところへ、干草の過少申告事件が発覚。『アンナ』では、「被害者」はレーヴィンの姉だが、ほんとうはトルストイ自身だった。雇いの作男（干草の刈り手）とヤースナヤ・ポリャーナの農民、ガヴリーラ・ボールヒンらがぐるになって干草をごまかしたらしい。草刈場では、美女の刈り手が男どもといちゃついている。作男たちは、作業が終わるやさっさと解散（「作男たちがいない」）。作家は、すぐさま寄り合いを招集し、干草の積みなおし、再配分を主張。農民たちは、賦役に出なければならぬ、人がいない、と反論。トルストイ側が、じゃあ、少年たちを出せばいいじゃないか、という、不満の叫び声。激しいやりとりのすえ、農民側は折れる。地主用に積んだ分は、自分たちが引きとり、地主のために新たに刈り直すことに同意。明日刈りはじめるということで、刈り手の登録がはじまる。作男たちには、ポクロフの日まで働くよう命じる。作家は、この夏についてなにか書きたいと思う——。

だから、『アンナ・カレーニナ』だけ読むと、あの場面は一見リリックに見えるが、実はそんなにおめでたいものではない。この場面の背後には、トルストイの農民に対する愛憎がうずまいている。そういうことがメモのおかげではっきり分かる。そして、彼が、ときに「草一束」を争うような泥仕合まで演じたあげく、やっとのことで解放案の方式の貢租払いに移していったさまがよくみえてくるのだ。もしかして、ほかならぬこの日、トルストイの心中で、アクシーニャに対する思いが切れてしまったのかもしれないことも…。

だが作家は、それで解放までこぎつけることはできなかった。すでに書いたように、貢租払いにほぼ移行してから2年ほどたった61年2月に、農民にずっと有利な農奴解放令が発布されてしまったからである。

6. 農奴解放の試みはトルストイになにをもたらしただか？

ついにトルストイは、「こっちの人間」になることはできなかった。おれの才能は、こっちに入れなかった男の恨みつらみにすぎない。それは、おれが何ものかをけっして捨てられないからだ…。

²⁴¹ ちなみに、サイト「トルストイ・ルー」の「写真：ヤースナヤ・ポリャーナ」に、ソフィア夫人が1899年に撮影した、ヤースナヤ・ポリャーナの農民の干草積み作業が掲載されている。
<http://tolstoy.ru/media/photos/>（2015年9月1日最終閲覧）

結局、作家の農奴解放の試みは、年来の理想の崩壊で終わった。「こっちの世界の女」と幸福な家庭を築き、それを基盤として世界を愛と調和でむすびつけること——それは見果てぬ夢となったのである。

それにしても、トルストイが捨てられなかったものとは、なんなのか？ 土地か金か、地主としての累代の生活様式か？... ここで、次のことを思い出す必要がある。作家にとって、自分の領地ヤースナヤ・ポリャーナは、自分の屋敷は、たんなる屋敷ではなく、『アンナ・カレーニナ』のレーヴィンの場合とおなじく、家庭生活のイメージからどうしても切り離せないものだ、ということだ。

この家は、レーヴィンにとっては、まったきひとつの世界であった。これは、彼の父と母が生き、死んでいった世界であった。ふたりが生きた生は、レーヴィンにとっては、あらゆる完成の理想と思われ、彼はそれを、自分の妻そして家族とともに再現することを夢見ていたのである。（『アンナ・カレーニナ』1章27節）

Дом этот был целый мир для Левина. Это был мир, в котором жили и умерли его отец и мать. Они жили тою жизнью, которая для Левина казалась идеалом всякого совершенства и которую он мечтал возобновить с своею женой, с своею семьей.

とはいえ、こういうヤースナヤの小宇宙への執着が、トルストイの農奴解放という正義をさまたげるとするならば、それはやはり悪であり、ルソーの言う「情念」ではないのか？... こうした疑惑は、かならずや作家の脳裏に浮かんだはずである。にもかかわらず、彼は、この情念を断つことができなかつた。彼は、苦しみながらも、ヤースナヤの主人でありつづけることを選んだ。

だが、これまで再三述べたように、トルストイが地主でありつづけ、ヤースナヤの主でありつづけながら、しかも、農奴を彼らにとってまあまあ満足のいく条件で解放するということは、どだい不可能なことである。作家の苦渋の選択は、自分と農民との関係を本質的には変更せず、という選択でもあつた。このことは、アクシーニャとの愛の行方をもあらかじめ決めることになろう。

とはいえ、農奴解放の試みをつうじて、トルストイは自分の情念の正体に近づいた。

私は、ヤースナヤ・ポリャーナをぬきしては、ロシアというものをイメージすることがむずかしいし、自分のロシア観といったものも考えにくい。ヤースナヤ・ポリャーナがなければ、もしかすると私は、わが国にどんな一般的な法則が必要かもっとはっきり分かるかもしれないが、しかしこんなに祖国に愛着することはないだろう。

Без своей Ясной Поляны я трудно могу себе представить Россию и мое отношение к ней. Без Ясной Поляны я, может быть, яснее увижу общие законы, необходимые для моего

отечества, но я не буду до пристрастия любить его.

(『村の一夏 Лето в деревне』〈5, 262〉)

この未完のルポ『村の一夏』は、ついさっき述べた、草刈をめぐるトラブルのあとで、解放の試みの総括として、1858年に書かれたものである。トルストイは、まさにこのヤースナヤが鍵であること、そしてそれが「善」と「悪」の両面をはらんでいること、にもかかわらず、それに対する自分の執着を断ち切るのが至難であることを認識しているのだ。

そして、その情念の根のひとつが、祖父ニコライ・ヴォルコンスキーが築いた「生に対する防波堤」と「箱庭」に伸びていることにも、おそらく、彼は気付きつつあった。なぜなら、彼の言うことをかんたんに砕くと、「ヤースナヤ・ポリャーナのおかげで、幻想的なロシア観をもつことができ、そのためにロシアを安心して熱愛できる」ということだから。

こういうヤースナヤだからこそ、後年作家は、それを捨てること、つまり家出にあんなにこだわったのではないか？...

II.教育活動：子供の生命の発見²⁴²

ここまで述べてきたように、トルストイの農奴解放の試みは、それ自体は失敗だったが、その失敗を通じて、おのれの情念の正体に近づくことができたといえる。一方、もうひとつの活動、農民の子弟の教育のほうは、かなりの成功をおさめた。教育活動は、当時の作家にとって最後の希望であったわけだが、しかし、当局につぶされる憂き目に遭った。

トルストイが生涯を通じて農民に最も近づき得たのは、まさにこの教育活動によってだった。これが、作家があれほどの情熱を教育にかたむけた理由のひとつだ。1874年に書いた『国民教育論 О народном образовании』では、1860—1862年ころの自らの活動を振り返りつつ、「自分は熱情をもって教育にあたり、およそ40人の『小さな百姓たち』ときわめて近い関係になった」と誇りをもって回想している(17, 103—104)。実際、当時の彼の授業日誌を読むと、農民の子供とまさにひとつになった瞬間があったことが実感され、子供たちの生き生きした歓声が聞こえてくるようである(『ヤースナヤ・ポリャーナ学校 11—12月』)²⁴³。

トルストイの教育活動については、藤沼貴氏が『トルストイ』(第三文明社、2010年)のなかでくわしく突っ込んで論じている。これは本書の圧巻で、筆者として、これに付け加えられることはほとんどないが、作家の教育活動の「無政府主義」ともいうべき側面を強調しておこう。

「教育学の唯一の基準は自由であり、唯一の方法は経験だ」(『国民教育論』、1874年)²⁴⁴。まさにこれが、不動の教育理念でなければならず、しかもそれは教育のありとあらゆる領域に押し広められなければならない、とトルストイは言う。それは具体的になにを意味するのだろうか。彼は、ヤースナヤ・ポリャーナに最初の学校を開いてまもない、1860年3月にはもう、この点をつまびらかにしている。「国民教育がうまくいくためには、それを社会の手にゆだねなければならない」

そして彼は、純民間団体、「国民教育協会 Общество народного образования」を設立し、国民教育にかんする事業をすべてやらせることを提唱する。指導要領、カリキュラム作成から学校設置、教員の選抜、配置、教育の監督、会計監査など管理運営全般にいたるまで、ぜんぶだ。

「協会」の財源は、会員の会費、生徒の授業料(授業料を払えるところでは)、「協会」の出版物販売による利益、寄付金に求める。以上のことがらを、トルストイは、軍隊時代の友人、エゴール・コワレフスキー(Егор Петрович Ковалевский)あての手紙のなかで書いて

²⁴² この節は、つぎの拙稿に大幅に加筆修正したものである。

「文豪トルストイの『初等教科書』が出版」、ロシアNOW電子版、「今日は何の日」(2012年11月13日)。<http://jp.rbth.com/articles/2012/11/13/39907.html> (2015年8月8日最終閲覧)

²⁴³ «Ясно-полянская школа за ноябрь и декабрь месяцы» (8, 29 — 125).

²⁴⁴ «О народном образовании» (1874). — 17, 105.

いる (60, 328-333)。

要するに、教育を国家権力から完全に独立させることをめざしたわけだ。作家は、コワレフスキーに、こうした考えを彼の兄、すなわち時の文部大臣にみせるように頼んでいる！

トルストイは、『国民教育論』(1874年)のなかで、自分の考えをつぎのように要約しており、そのラディカルな本質がよくわかる。

社会に、学校運営にかんする最大の権限をゆだねなければならない。<...> (*教育にかかわる——佐藤) あらゆることがらは、完全に農民にゆだねなければならない。

<...> предоставлять обществу наибольшую власть в устройстве школ. <...> все это должно быть вполне предоставлено крестьянам. (17, 124)

これはほとんど「ソビエトに全権力を！」を連想させる。トルストイがこんな考えをいだいたひとつのきっかけは、第一回西欧旅行だろう。どんな「先進国」、「民主主義国家」でも、国民は巧妙に洗脳され、政権に好都合な権力的思考を植えつけられる。彼はこのことをとくにパリの公開処刑で痛感した(1857年3月25日〈グレゴリウス暦4月6日〉)²⁴⁵。そうさせないためには、教育を権力から分離するしかない、というのが彼の結論だったと思われる。

作家は、自分の考えの実現に着手する。1859年の農繁期後の秋、彼は、ヤースナヤ・ポリャーナの屋敷の一室に、農民の子供のための学校を開いた。学校は、農民たちにたいへん気に入られ、生徒数はどんどん増えていった。その結果、1861年にはもう、新たに21校を開くことになる(8, 497)。足りない教師は、61年秋の学生騒動で退学させられた学生から採用した。この農奴解放令公布の年は、社会情勢が騒然としており、農民の一揆、地主邸の焼き討ち、殺害なども相次いだ。ちなみに、ドストエフスキー『罪と罰』のラスコーリニコフやラズミールも、このときの退学学生だった。ラスコーリニコフが「完全な自由と国家権力からの独立」を公然とめざす学校で、「小さな農民たち」に授業するさまを想像してみたい！

教育の成果については、トゥーラ市の教育学者エフゲニー・マルコフ(Евгений Львович Марков)が、当時ヤースナヤ・ポリャーナの学校をしばしば訪れ、その「驚くべき成功」について語っている。「トルストイ伯の、わらじをはいた生徒たち」は、「読み書きを教わりだしてからわずか数ヶ月で、かなり文法的に正確な作文を自由に書けるようになっている」と²⁴⁶。その読み書きをふくめて、トルストイの学校の授業が具体的にどうおこなわれたかに

²⁴⁵ この日の日記、および同日書かれたヴァシーリー・ポートキンへの手紙をみよ(47, 121-122; 60, 167-169)。

²⁴⁶ «Вестник Европы», 1900, №2. С.582.

かんしては、作家自身が自分の雑誌『ヤースナヤ・ポリャーナ学校 11-12月』²⁴⁷に書いている。

トルストイの教育活動があらゆる点で、政府にとって危険なものになっていったことは明らかであり、それが彼の学校の運命を決めることになった。1862年7月、官憲による家宅捜索。閉校...

にもかかわらず、教育活動は、トルストイに多くのものをもたらし、啓示を与えた。

第一に、いまや彼の視界には、まったく新しい人間のすがたがみえていた。いわば、教育ある自由なプラトン・カラターエフたちである。のちに作家は、自分の教育活動をよりグローバルなかたちで復活させることになるだろう。世界と人類の改造である。

第二に、トルストイの国家権力に対する態度がよりはっきりと定まった。権力は、彼にとって最もだいじな活動をさまたげ、つぶした。ということは、権力は彼の敵である。

第三に、子供の生命の発見。子供は、大人がもつ、いろんな幻想や自己欺瞞を知らず、無防備で裸である。だが子供は、大人ならつぶされてしまうような苦しみ、逆境をはねかえし、乗り越えることができる。作家の論文（『ヤースナヤ・ポリャーナ学校 11-12月』）でいちばん印象的なのは、まさにこの子供の生命に対する感嘆である。子供のなかに彼は、生命そのもの、その原型をみたのである...。しかし、この発見が十分自覚され表現されるには、『戦争と平和』をまたなくてはならない。

ところで、彼の授業で子供たちがいちばん熱狂したのが、まさにその1812年の祖国戦争の話だった（8, 101-103）。

だが、教育活動の多くの成果にもかかわらず、いまのところ出口はみえない...。おそらく、彼はこんな疑惑に苦しんでいたはずだ——。

新人類の創造か！？... なるほど、けっこうなことだが、どうやって実現するのか？ 学校はもう権力につぶされてしまったというのに。かりに、新人類なるものがいつの日か実際に生まれたとして、彼らと地主のあいだにどんな関係が成り立つというのか。知識その他で武装した「カラターエフ」たちは、地主どもを切り殺すのが落ちではないか...。なのに自分は、地主でありつづけながら、コサック女だの農婦だのと結婚し、その「愛」と家庭のうえに世界の調和に達する、などということを見ている。まったく幻想もいいところじゃないか。しかも、やがて避けられぬ死がやってきて、二人の兄のように、一切を失わねばならぬ。かりに、ルソーの言うように、霊魂が不滅で、来世があり、死後にめでたく、どこかの世界に生まれ変わったとしても、似たような生活と意識をぶらさげていたのでは、また「悪魔」にしてやられて、「やっぱり今度もだめだったか」となるのが落ちだ。悪魔と神、もしくは情念と良心の無限の連鎖が、物理的な死を超えて、何万年続こうが結局おなじことではない

²⁴⁷ «Ясно-полянская школа за ноябрь и декабрь месяцы» (8, 29 — 125).

か。だからこそ、生活と意識の変革が必要なのだが、それを具体的にどう変えればいいのか？ 「彼方」に光は見えない！...

なるほど、トルストイが子供のなかに見出した生命の原型は、この世界に生きることはできる！ということを教えてくれた。権力、暴力、その他ありとあらゆる不条理にもかかわらず、人間に生まれながらにして備わった、ある内的な特質、力のおかげで、生きることができるのだ。だから、その力は、この世のどんな条件も状況も超えているだろう。だが、トルストイ自身は、この先、具体的にどうやって生きていけばいいのか？

ここで、農婦の愛人アクシーニャとの愛が、一定の指針を与えてくれたことに触れる番だ。

第12章 農婦の愛人：アクシーニャ・バズイキナ

1. 醒めた「恋愛」

アクシーニャについて語るまえに、その前史ともいべき奇妙な「恋愛」について触れておこう。これは、アクシーニャという「完全な女」との恋愛とは、なんというか、ちょうど逆のケースだったのだ。「完全」ではないし、したがってあまり夢中にはなれないのだが、貴族の令嬢だから、ヤースナヤの屋敷におさまるには、なんの問題もない。この娘を教育して人格改造すれば、どうにかなるんじゃないか——。こういう妥協と希望的観測にもとづく代物だったのである。

トルストイがこんな「恋愛」をしたのは、とにかく結婚願望だけは高まっていたからだ。セヴァストーポリ陥落後、1855年末に帰国し退役してからは、世間一般の常識では、年齢といい（27歳）、境遇といい、身を固めるにふさわしかった。ちなみに、これに先立って、1852年1月12日付けの叔母ヨールゴリスカヤあての手紙（現・北オセチア共和国のモズドク発）で、彼は将来の家庭への夢を語っているが、それは『アンナ・カレーニナ』のレーヴィンそのままの、父母の家庭の世界を再現するということだった。

ぼくは結婚しています——妻は慎ましやかで、善良で、愛情深く、ぼくとおなじように、伯母さまを愛しています。われわれの子供たちは、伯母さまを「おばあちゃん」と呼びます。伯母さまは、大きなほうの家の上の階に住んでいます。かつて祖母が住んでいたあの部屋です。家はすべてが以前どおり。パパの生前の秩序のまま、私たちはまったくおなじ暮らしをします。ただ、役割を替えるだけです。（59, 162-163）

問題は、誰と、どうやって？ということなのだが、そこへたまたま、1856年の農奴解放の試みが失敗して落ち込んでいたところへ、友人の地主、ディヤコフが、隣村の地主の娘、ヴァレーリア・アルセーニエヴァと結婚したら、と勧めた。トルストイは、この令嬢の父が亡くなってから後見役を務めていたので、昔からよく知っていたこともあり、まあ、そういうこともあるかな、という気になった。

だが、「女」不在の恋は、はじめから実に奇妙なものだった。トルストイは、自分たちの家庭生活がどのようなものになるか、事細かに予想し、それをそのまま、ヴァレーリア嬢に書き送る！（1856年11月28日付書簡）。その内容たるや——

自分たちは田舎に住み、おもに農業を仕事とするだろう。しかし、お嬢さん育ちで、ひ弱でなんの生きがいもない妻を、自分はほんとうには愛することができない。妻のほうも、退屈し「反乱」を起こす。音楽教師などといちゃつき、自分は妄想的嫉妬に苦しむ。やがてどうにもがまんできなくなり、家出するか、ピストル自殺するだろう——。

こういう途方もないもので、それはのちにソフィア夫人との生活でほとんどそのまま実現してしまう（夫人の音楽教師であった作曲家タネエフへのヤキモチもふくめて）。当時書かれた『家庭の幸福』、後年の『クロイツェル・ソナタ』は、まさにこうした予言的モチーフをふくんでいる。

この種の予言といえ、『アンナ・カレーニナ』にもある。主人公レーヴィンの兄ニコライは、鉄道の中で病が重くなり、駅前のホテルで凄惨な死を遂げるが、気持ち悪いのは、トルストイその人がちょうどニコライと似たような死にかたをする破目になったことだ。

結婚、夫婦げんか、音楽教師への嫉妬、家出、鉄道での発病、駅前で死——すべての中！ しかし、これは思うに、偶然でも怪談でもない。トルストイの心中を推し量るとこうなろうか。

妻とうまくいかなければ、おたがいに欲求不満になる。妻は、やりがいのある仕事でもなければ、火遊びをはじめ、自分が妄想的嫉妬に苦しむようになるのも、大いにありうること。浮気相手として音楽教師は、お決まりのパターンだ。おまけに、音楽というのは要りもしない情熱を掻き立てる。どうにもがまんできなくなって、家出、妻殺し、あるいは自殺。しかし、家出がいちばん穏当だろう。家出するとなると、まあ、鉄道を使うだろうが、（当時の）鉄道での長旅は、かなりしんどい。とくに寒い季節だと命とりになりかねない。車中で発病すれば、沿線のホテルなんかで孤独に死ぬんだらうなあ…。

ちなみに、トルストイは、1910年10月28日に家出するわけだが、その日は、わずか105露里（1露里=1.067キロメートル）を6時間25分もかかって走った。おまけに、タバコの煙がひどいので、すきま風がびゅうびゅう吹く連結器のちかくに何時間も立ちつくした結果、身体を冷やして風邪を引き、こじらせて肺炎になってしまう。

だから、トルストイの予言はじつは予言などではなく、リアルそのものの、おそろしく徹底した思考の結果にすぎない。われわれは、あるていど考えを進めていくと不気味になって、やめてしまうが、トルストイはぎりぎりまで考え詰める。突き抜ける。そして、その予想は、事実で裏付けられることになる。作家は、こういう仮借なきリアリストなのだ。実際、彼は、自分の人生も他人のそれも、そして、世界の行く末も、おそろしくよく見えていたにちがいない。トルストイ主義は、こういう人が考えぬき、練り上げた結論であることを忘れるべきではない…。

ヴァレーリア嬢に話をもどすと、作家は彼女を説教しまくって改造し、暗い展望を変えようとあがくのだが、結局、やりきれなくなり、みずから自認する「ひとり相撲」を1856年末に一方的に打ち切る。

それにしても、こういう醒めきった、妥協の産物のような「恋愛」の相手にされたヴァレーリア嬢こそ、いい面の皮だ。

あの暗い『家庭の幸福』は、こういう状況と気分の産物だったのである。この自他ともに認める失敗作は、本稿の第1部第10章で述べた思想的行き詰まりとあいまって、しばらくト

ルストイに文筆活動を放棄させる。

アクシーニャ・バズイキナ

アクシーニャ・バズイキナ (Аксинья Александровна Базыкина, 1836—1919)²⁴⁸との関係は、トルストイの日記、ソフィア夫人の日記、および作家がアクシーニャとの関係を下敷きにして書いた中編小説『悪魔』(1889年—...)から、おおよそ再現できる²⁴⁹。

1858年当時、トルストイは、ヤースナヤ・ポリャーナで、農業経営と文学に打ちこんでいたが、田舎で禁欲生活がつづき欲求不満が高じて、どうにもならなくなった。彼は、「健康のため」、58年5月から、既婚の農婦を愛人にした。この農婦の夫、エルミール・バズイキンは、トルストイのかつての教え子であった！(作家が1849年にヤースナヤ・ポリャーナに開いた農民学校の生徒だ。その彼が、作家の死後の1911年に、学校の思い出を語っていたのであった)

ふたりの関係は、丸四年間以上つづいた。ソフィア夫人をのぞけば、トルストイの生涯に、これほど長く深刻な恋愛はひとつもない。

日記からふたりの関係をみてみると——

1858年5月13日。アクシーニャとつかの間のあいびき。とてもきれいだ。ここ数日むなしく待っていた。今日、大きな古い森のなかで。息子の嫁と密通するのと同じじやな

²⁴⁸ アクシーニャの晩年の写真(1910年代)が、以下のサイトと著書に掲載されている。

・「トルストイ・ルー」の「写真：トルストイの周辺 *Окружение Толстого*」のいちばん最後の頁を見よ。<http://tolstoy.ru/media/photos/> (2015年9月1日最終閲覧)

・Толстой С.М. «Дети Толстого» (Пер. с франц.). Тула, 1993.

高齢にもかかわらず、非常な長身で、しっかりした体格が印象的だ。

²⁴⁹ 『悪魔』の自伝的要素としてはほかに、16歳で女性を知ったというのも、トルストイと同じだし、主人公エヴゲーニー・イルターネフ(Иргенев)の姓は、自伝三部作のニコレンカ・イルターニエフ(Иргеньев)を連想させ、やはり作家とのつながりを暗示している。

『悪魔』には、トルストイと料理女ドームナ(кухарка Домна)との関係も反映していると思われる。彼女は1870年代末にトルストイ家で働いていた女性で、当時の子供たちの家庭教師ヴァシーリー・アレクセーエフの回想によると、「22—23歳で、美人というのではないが血色がよく、背が高く豊満で健康で魅力的な農家の嫁だった」(85, 88)

トルストイはこの女性に惚れ込み、逢引の約束までしたが、逢引に行く途中でたまたま息子のイリヤに声をかけられ我に返った。しかし、依然欲情は去らないので、アレクセーエフに頼んで、散歩中はいつも付き添ってもらうようにしたが、それでも思いを断ち切れず、ついにドームナの職場を替えさせたという。まったく同じ話を1884年7月24日付けのウラジーミル・チェルトコフ宛の手紙でも告白しているので事実だろう(85, 80)。90巻全集の解説によれば、このできごととは1880年8月に起きた(85, 88)。

このほか、『悪魔』にはもう一つ、トゥーラの予審判事フリドリクス(Н.Н.Фридрихс)が貴族の娘と結婚した3ヵ月後に、かつての農婦の愛人ステパニーダ・ムニツィナ(Степанида Муницына)の腹をピストルで撃ち、射殺した事件が重なっている。トゥーラ管区裁判所は、殺人は病気のためだとして無罪の判決を下した。この判事は、殺人から2ヵ月後、鉄道で轢死体で見された。彼の近眼のための事故か自殺かは謎として残った。

Опульская Л. Д. Лев Николаевич Толстой: Материалы к биографии с 1886 по 1892 год / АН СССР. Ин-т мировой лит. им. А. М. Горького; Отв.ред. К. Н. Ломунов. М.: Наука, 1979. С.177-178.

いか。おれはばかだ。畜生だ。首筋の赤い日焼け。ギムブトのところで（*森番——佐藤）。こんなに人を好きになったことはない。ほかのことはなにも考えられぬ。苦しい。明日も、なにがなんでも。（*太字は、原文イタリック——佐藤）。

この最初の逢い引きは、『悪魔』のなかで再現されている。それは、ちょうど日記のくわしい解説になっているので、引用してみよう。

終日、エヴゲーニーは、上の空だった。翌日十二時に彼は、番小屋にでかけた。ダニエーラは戸口に立っており、森の方へ向かって、黙って意味ありげにうなずいてみせた。エヴゲーニーの心臓に血がどっと押しよせ、彼は心臓の鼓動を感じ、菜園の方向に歩きだした。だれもいない。風呂場にやって来たが、やはり、だれもいない。中をのぞいて外に出たとき、突然、枝の折れる音がした。彼がふりむくと、女が、窪地の向こう側の茂みのなかに立っていた。彼はそこへ向かって、窪地をつきつて突進した。窪地にはイラクサが生えていたが、目に入らなかった。イラクサに刺され、鼻めがねを落としたが、かまわず真向かいの窪地の上に駆けあがった。刺繍をした白い前掛け、赤褐色のスカートで、鮮やかな赤のプラトークをかぶって、しっかりしたからだつきのみずみずしく美しい女が、はだしで立って、内気そうに微笑んでいた。

『そこに小道がありますから、回っていらっしゃればよかったのに』女は言った。『もうさっきから待っていました。ずいぶんと』

彼は女に近づき、あたりを見回して、彼女のからだに触れた。

十五分後、ふたりは別れた。彼は、鼻めがねを見つけて、ダニエーラのところへ寄った。『だんな、ご満足で？』という彼の問いに対する答えに、一ループルを握らせ、家に帰った。（27, 485）

トルストイの日記にもどろう。

1859年10月9日。アクシーニャとだけ（*原文イタリック——佐藤）会いつづけている」（48, 21）

1860年5月25日。彼女がおれにいかに近い存在か、恐ろしくさえなる。（48, 24-25）

同年5月26日。もう、さかりのついた牡鹿の感情じゃない。夫婦の気持ちだ。（48, 25）

「夫婦の気持ち」！ しかも、やがてふたりの間には、息子チモフェイ²⁵⁰が生まれる。にもかかわらず、彼らは別れざるをえなかった。理由は、第一に、離婚のむずかしさ。ふたりが結婚するためには、まずアクシーニャが夫と離婚しなければならないが、ロシア正教会は、基本的には、離婚を認めていなかった²⁵¹。第二に、モラル上の問題。トルストイは、自分の教え子の妻を、権力と金で「買っていた」。第三に、かりに離婚が成立したとしても、トルストイのような貴族が農民の女と正式に結婚することは、一種の反社会的行為であること。彼の実兄、セルゲイは、ジプシーと結婚した結果、上流社会から閉めだされた。第四に、地主と農民との、抜きがたい敵対的な関係。

事は「運命の女」だけにとどまらない。トルストイの対農民関係全般にかかわる。彼が、アクシーニャと関係していた時期に、農奴解放を試みていたことを思い出そう。農奴である愛人との重苦しい関係は、トルストイに自分の「解放」の意義を疑わせなかつただろうか？
…

トルストイは、アクシーニャとの関係を絶ち、彼女を捨て²⁵²、1862年9月に宮廷侍医の令嬢ソフィア・ベルス——18才の「少女」（1863年1月5日の日記〈48, 49〉）——と結婚する²⁵³。

²⁵⁰ チモフェイの写真が、セルゲイ・トルストイ『トルストイの子供たち』に載っている。

Толстой С.М. Там же.

また、チモフェイ（あだ名は「アニカンキン Аниканкин」）について、ヤースナヤ・ポリャーナの女性の次のような回想が残っている。

とても賢い百姓で、弁が立ち、洒落や地口を交えてしゃべった。トルストイの息子たちに似ていた。村にはあまりおらず、トルストイの息子たちの御者を務めていた。そこから、二番目の女房、リザヴェータを連れてきたわけだ。最初の妻からは娘アニーシヤが、後妻からは息子ピョートルが生まれた（戦死）。ピョートルは、モルドバ人のマルシャ・マニニナと結婚した。その息子ヴィクトルは、コサーヤ・ゴラー（斜め山）に住んでいる。

Сафонова О.Ю. Словарь яснополянских крестьян и их потомков, составленный по устным воспоминаниям А.П.Головиной, М.П.Зябревой и Т.А.Румянцевой // Яснополянский сборник 2002. С.330.

この回想は、1980—90年代の聞き書きで、3人の語り手の女性は、いずれも1910年前後の生まれだ。

²⁵¹ 当時の離婚のむずかしさとその方法については、『アンナ・カレニナ』のところで、くわしく述べる。

²⁵² トルストイの結婚後のアクシーニャについて、ヤースナヤ・ポリャーナの女性の次のような証言がある。

彼女は背が高く、とても美しいというのではないが、感じのよい外見の女性だった。村の女たちの赤ん坊を取り上げていた。あるとき、隣家のアグラフェーナ・コンスタンチーノヴナ・ズャブレワの娘アンナを取り上げたとき、床に落としてしまった。赤ん坊は、箒の上に落ちた（*幸い、直に床に落ちず、箒がクッションになったおかげで、大事は免れた——佐藤）。トルストイの結婚後、アクシーニャは煙草を嗅ぎはじめ、酒浸りになりだしたため、赤ん坊を取り落としたのである。赤ん坊が生まれる前に、一杯注いでやったので、手から滑り落ちたのだ。（Сафонова О.Ю. Там же. С.329-330）

²⁵³ 少女時代の夫人の写真が複数、サイト「トルストイ・ルー」の「写真：ソフィア・アンドレーエヴナ」に掲載されている。<http://tolstoy.ru/media/photos/>（2015年9月1日最終閲覧）

だが、新婚当時から妻によって完全には満たされず、老年にいたるまで、元愛人に未練を残している。日記によると、彼は、結婚初夜に、アクシーニャの「重苦しい夢」を見てぞっとしているらしい。

1862年9月24日。結婚当日に、恐怖、不信、逃げだしたい気持ち。<...>夜、重苦しい夢。彼女ではなかった——。(48, 46)

「彼女」つまり新妻ではない女が夢にでてきた。では、だれか？——おそらく、アクシーニャだ²⁵⁴。

ソフィア夫人も、元愛人のことを知る。

私は、いつか嫉妬のために自殺するような気がする。『こんなに人を好きになったことはない』（*トルストイの日記の引用——佐藤）。ただの百姓女じゃないの。でぶで、色の白い——ひどいわ。私は、魅入られるように、ナイフ、銃をながめた。一撃でおしまい——かんたんだ。(ソフィア夫人の日記、1862年12月16日)²⁵⁵

しばらく時がたっても、ソフィア夫人の動揺は去らない。

²⁵⁴ 「彼女ではなかった」の解釈について

「彼女ではなかった」——夢に現れたのはアクシーニャだった、という筆者の推測について、ロシアのトルストイ研究者ナジェージュダ・ババーエワは、たしかに、作家とアクシーニャのそれまでの関係を考えてその可能性は小さくないが、それが唯一の解釈ではあるまいと言う。そして、パーヴェル・バシンスキーの説を挙げたうえ、「無意識から立ち昇ってきた女性像」である可能性も捨て切れずとしている。(Бабаева Н.О. Комментарий к докладам первой части международного симпозиума «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» (6 ноября 2010 года, г. Кумамото, Япония) // «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» edited by NAKAMURA Tadashi, 2011 by the Slavic Research. C.42-43)

そのバシンスキーは、「彼女」について、作家の1859年2月16日の日記を引き、そこに記された夢に出てくる「彼女」を指しているのでは、と言う(Басинский П.В. Там же. С.170)。

夢を見た——いちご、並木道、彼女。一度も会ったことはないのに、すぐにそれと分かった。そして、チャプイジ(*「Чепыж Чепыж」は、ヤースナヤ・ポリャーナの屋敷のすぐそばにある榎の森の名前——佐藤)は、みずみずしい若葉におおわれ、枯れた枝葉はひとつもなかった。(48, 20)

Видел один сон — клубника, аллея, она, сразу узнавшая, хотя никогда не виданная, и Чапыж в свежих дубовых листьях без единой сухой ветки и листика.

なるほど、トルストイの『青年時代』(1857)、『アリベルト』(1858)、『夢』(1857-1863)などの作品では、主人公の夢や想像に、理想の女性像とおぼしき「彼女」が出現する。「彼女」は、白衣をまとい月夜に、水のモチーフをともなって現れることが多い(『クロイツェル・ソナタ』には、そのパロディーがみられる。主人公は、月夜に未来の妻とボート遊びをしたあとで“致命的な”恋に落ちる)。

筆者も、ババーエワ説、バシンスキー説の可能性もあると思うが、しかし、トルストイはアクシーニャに、まさにこうした女性像を重ね合わせているのだ。だから、いずれにせよ、「彼女ではない」の意味するところは、方向としては同じだろう。ソフィアは、理想の女性、完全な女、アクシーニャではなかったという失望、幻滅だから。

²⁵⁵ С.А.Толстая. Дневники в двух томах. М.: «Художественная литература», 1978. Т.1. С.44.

私は、ここモスクワにいても、あの女のことを考えると苦しい。夫の過去が私を苦しめるのであって、これは本当の嫉妬ではない。夫は、身と心を完全に私にゆだねることができないのだ——私はすっかり彼にささげているのに。

(夫人の日記、63年1月14日)²⁵⁶

もちろん、トルストイ夫婦の間には、幸福な調和した時期もあった。「家庭の幸福」もあったし、芸術創造においてふたりが協力し結びついていた時期もあった。しかし、「夫は、身と心を完全に私にゆだねることができない」…。その原因が消えることはなかった。

トルストイの家出と死まで2年たらずという1909年になって、ソフィアは初めて、中編『悪魔』の存在を知った（トルストイは夫人の気持ちを慮り、隠していたのだ）。彼女は、一読すると、強度のヒステリーに陥った。このことは、夫人のトラウマの深さを示している。

百姓女の強靱な肢体と日焼けした素足を舌なめずりしている。これこそ、むかし夫があんなに惹きつけられたものだ。輝かしい眼をしたあのアクシーニャが、ほとんど無意識のうちに、八十才の今になって、むかしの記憶と感覚の深みからふたたび立ちのぼってきたのだ。<...>。こうしたことすべてが、私にはショックで、どうにもやり切れない。(夫人の日記、1909年1月14日)²⁵⁷

見果てぬ夢

話をトルストイとアクシーニャのどろどろの恋愛、それと並行しておこなわれた農奴解放の試みの当時にもどし、彼の理想追求の顛末を総括してみよう。

トルストイは、不条理な現実を変え、「理想の女」への愛を成就させようと、さまざまに試みてきたわけだが、それらはすべて失敗に終わった。

農業活動が失敗したのは、作家がヤースナヤ・ポリャーナへの、そこでの家庭生活への執着を断ち切れなかったからである。ところが、彼がヤースナヤの主であり地主であるかぎりには、「理想の女」は「運命の女」にとどまらざるをえない。そのことが、アクシーニャとの愛を通じて明らかになった。

では、もし彼が地主であることをやめ自分の権力と富を捨てれば（あまり現実的でないが）、目的を達することができるのだろうか？ 否。だんなは、やっぱりだんなであり、農婦は農婦である…。

トルストイは「妥協」をはかろうとする。「少女」と結婚するのだ。まだ成熟していない彼女が、どんな「女性性」を秘めているかは、いまのところ未知数である。そのかわり、ヤースナヤで「家庭の幸福」を実現できる可能性はあるだろう…。『戦争と平和』の若いころのス

²⁵⁶ Там же. Т.1. С.47.

²⁵⁷ Там же. Т.2. С.118 — 119.

リムで可憐なナターシャや、『アンナ・カレーニナ』のキティーは、トルストイが見出そうと努めた少女美の「成果」である。

だがしばらく経つと、この「少女」ソフィアが、作家の「理想」のすべてを持ち合わせてはいないことが分かった。まあ、人生、こんなもんだ！... そのかわり、ソフィア夫人はいわゆる良妻賢母になり、トルストイもまた、家庭生活をよりよいものにしようと、いろいろ努力する。増収をはかり、領地を増やし、経営を改善し、子供たちにより教育を与え、等々。

とくに、結婚してから 1880 年代はじめまでトルストイは、土地の買い漁りと蓄財に熱中する。法橋和彦氏の表現をお借りすれば、「妻と二人三脚で土地バブルに狂奔する」²⁵⁸。内面が空虚だとなにか外面的なもので埋めようとするのが人の常だが、トルストイも例外ではなかった。

だが作家は、彼らの生活が、農民の労働に物質的に依存していることを、忘れることができない。しかも、その物質的基盤は、はげしく揺らいでいた。ロシアで工業化がはじまり、結婚の 1 年前の 1861 年には、農奴制が廃止され、農村は（農民も地主も）急速に荒廃しつつあった。詩人ネクラソフの『ロシアはだれに住みよいか』などに描かれているように。

²⁵⁸ 「改心」後のトルストイの考えでは、軍勢力と土地所有というのが、国家権力を支える二大暴力であった。その軍勢力において、かつてトルストイは軍人として加害者側に立っていたが、土地所有においても、「土地バブルに狂奔した」大地主だった。法橋和彦氏は、著書『古典として読む『イワンの馬鹿』』（未知谷、2012 年）で、作家夫妻が二人三脚で土地買収と蓄財にせつせと励むようすを、まるで目に見えるように鮮やかに再現する（74-84、89-90、163-186 頁）。

とりわけ、民話『多くの土地が人に必要か』と、その一背景をなす、「バブル絶頂期」のサマールでのドンちゃん騒ぎについての記述は、不気味なユーモアさえ湛えており、ある日突然、トルストイが襲われた空しさと恐怖が実感される（グーセフ III、212-213 頁も参照）。トルストイは、この民話の主人公と同じく、何度も悪魔に嘲笑される夢をみたにちがいないと、法橋氏は言うが（166 頁）、筆者も同感である。

トルストイは「改心」して、土地買収・蓄財を全否定するものの、それでも救われない。夫婦の二人三脚が解消されたことは、ソフィア夫人に、「家庭内における夫婦同権意識の解消を強制的に迫る」。その結果、彼女の夫への言動は、「日ましに精神疾患的な異常性を帯びる」にいたり、ついには人格崩壊、家庭崩壊の様相を呈し、トルストイの心身も蝕む。これはとくに『クロイツェル・ソナタ』に露わである。

トルストイは、土地にハマったおかげで、悪魔と「山の神」に挟撃される破目となった。氏は、トルストイの妻への、一見細やかな愛情にみちた書簡が、じつは「怒れる『山の神』の鎮静をひたすらに乞う、祈りの手紙にほかな」らないと喝破する（178 頁）。こうして悪魔は、改心後のトルストイをも翻弄しつづける...

氏が「参考資料 1 トルストイと悪魔について」で詳述するように、トルストイの作品に悪魔が頻出するようになったのは、この転換後の時期である。

以上をふまえて法橋氏は、トルストイの革命的思想について、ずばり言う。「トルストイにとって革命の対象は政府や国家や教義神学ではなく、あくまで土地問題の解決であったことをあらためて銘記すべきである」。そして、その背景には、「土地を所有することへの呪詛」があった、と（90 頁）。

以上の見解に、筆者は全面的に賛成だ。ただ、トルストイの土地への執着（のちには呪詛）は、これまで本文でみてきたように、「理想の女性」および小宇宙としてのヤースナヤ・ポリャーナと不可分であった。それはひとつのコンプレックスであり、夢であった。その夢が破れたからこそ、その代償として、あそこまで「土地バブルに狂奔」しなければならなかったのである。だから、悪魔は、土地のみならず、女ともむすびついて出てくるのだ。これについては、本文で追々述べる。

これらすべてがあいまって、昔ながらの地主の家庭生活は、もはやトルストイには、「あらゆる完成の理想 идеал всякого совершенства」(『アンナ・カレーニナ』1章27節)とは思えなくなっていたはずだ。だが、もはや家庭を捨てることはできない。人生をかけて「実験」をやり、絶対的な善と愛に到達することはいよいよむずかしくなった。

1862年12月、トルストイはようやく『コサック』(1853-1862)出版に踏みきる。アクシーニャとの恋愛、ソフィアとの結婚をへた後のことであった。このことはつまり、この作品がどのようなものであるべきか、ついに彼が悟った、あるいは踏ん切りをつけた、ということの意味する。『コサック』は、彼の見果てぬ夢——コサックの世界、マリアーナ、チェチェン...——を描くべきものなのだ。それらが夢にすぎないことを、いまや彼は理解している…。

259

もはや出口はないように思われた。だが、彼は、思いがけぬ方法で、そこからみごとに抜け出すのだ。

²⁵⁹ とはいえ、カフカスへの憧れ、アクシーニャへの未練、「自然で単純な労働の生活」への憧憬が渾然一体となって、フラッシュバックのようにトルストイの胸中に湧き上がることはあったようだ。

ポルドミンスキーが指摘するように、ソフィア夫人はこう書いている。「彼はかつて、労働者——ロシアの女——を連れて、移住者たちとともに、新生活を送るべく密かに立ち去ろうと夢見ていた」(Краткая автобиография гр. София Андреевны Толстой // Начала. 1921. №1. С.137-138)。

一方、トルストイも、『悪魔』の草稿の一つで、つぎのような数行を書いて、抹殺している。「彼は、自分の生活がいかに空虚でつまらないか、いかにあそこには——あの強く、澁刺とした、いつも陽気な女といっしょのときは——本当の生活があるかを考えた。彼女を連れ出し、馬車と汽車に乗せ、ステップかアメリカに行き、すっかり姿を消してしまうのだ」(27, 727)

ポルドミンスキーは、こうした願望のちの家出につながるものをもっているという意見で、実際そのとおりだろう (Порудоминский В.И. «О Толстом». СПб.: Алетейя, 2005. С.149)。

1851年のカフカス行きがそうであったように、なんらかの家出、脱出、隠遁、変身(他人になりすます)により、自分の生活を一変し、従来では断ち切りがたい情念を断ち切り、意識と生活を根底から変える——。こういう熾烈な志向は、トルストイの実生活と創作を生涯にわたって貫いている。『戦争と平和』のピエールも、アンナ・カレーニナも、『フォードル・クージミチの手記』のアレクサンドルー世も、『光あるうちに光のなかを歩め』のユリウスも、『生ける屍』のフェージャも、『光は闇に輝く』のニコライ・イワーノヴィチも、神父セルギイ等々も、まさにこの情熱を分かち与えられている。

たしかにトルストイは、非常なマイホーム志向の持ち主でもあったのだが、それは、これまでみたようにきわめて独特のものであり、しかも、こういう脱出、家出願望と並存し、かつ混ざり合っていたのであった。なぜなら、家庭は世界と調和し、宇宙大に広がらねばならないからだ。そうでなければ、家庭は桎梏に変わるのである。これでは、ソフィア夫人との夫婦生活のそもそも最初から波乱含みといわねばなるまい。

第2部 1812年と『戦争と平和』

I 1812年

はじめに

本稿の第2部に入るに当たり、これまでに述べてきたところを簡単にまとめておこう。

トルストイには、世界というものは、幸福な家庭を基礎として調和すべきものだという、抜きがたい思いが、ごく若い頃からあった。その幸福な家庭のイメージは、自身の幼年時代と、母の愛にみちた家庭にもとづいているのだが、そこには、母の死とともに滅びてしまうことのない、不滅なものがある、彼には感じられていた。そのなにかを、自分の家庭生活で再現し、世界に愛と調和を実現したい、というのが、カフカス時代までの若いトルストイに一貫した志向だった。

ところが、トルストイの伴侶たるべき女性というのが、まず問題だった。彼は、貴族の令嬢ではなく、チェチェン、ダゲスタン、コサック、農民などの力強い女性に惹かれる傾向があり、この「アマゾネス・コンプレックス」とも言うべき「情念」は、彼の宿願の実現を難しくした。

それにもうひとつ、彼が天国さながらに愛着していた、幼年時代の愛と調和の内実とは、そもそもなんであつたらうか？

子供たちへの愛に自分を捧げた母親と、献身的な召使たちに囲まれた環境は、幼いトルストイには、あたかも羊水のなかを漂っているように快適であつたらうが、これには農奴制あつての人工空間という面があつたから、ある種の危うさと腐敗の因子を彼に感じさせていたと思われる。それは、社会のお荷物に成り下がりつつあつた地主貴族の虚無感であり、さらにその奥底に広がる人間存在そのものの闇であつた。

地主貴族というのは、自分の「王国」で先祖代々思うがままの生活を享受しながら、「人間はけっして幸福になれない」ということが骨身に沁み人々である。この絶望を引っくり返すに足るなにかが見出されないかぎり（それはおそろしく難しいことだ）、ウサーヂバ（屋敷）にじっと腰を据えて、「終わりの日」を待たうがマシである…。トルストイのヤースナヤ・ポリャーナへの、もはや血肉と化した執着はここに起因する。絶望と裏腹の執着なのだ。

そういうヤースナヤの小宇宙に内在する、あるいはその奥にある肯定的なものとは一体なにか？ それはトルストイにも、のちのちまで定かならぬものだった——ただひとつ、母性愛をのぞいては。

彼がこうした生の謎をはっきり自覚したのはカフカスの戦地においてで、そのあらゆる惨禍のさなかにあつて、己の運命のみならず、世界そのものの不条理をも深く認識していった。

世界は不条理なのか？ 後年の『アンナ・カレーニナ』の表現を借りれば、「世界は邪悪な霊の嘲笑にすぎないのか？」。この問いを引っさげてトルストイは、クリミア戦争の最大の激戦地に自ら志願して飛び込んだわけだが、そこでの体験は、彼の疑惑を裏書きした。然り、世界は不条理である。

この体験を描いたのが名作『セヴァストポリ物語』であり、これは彼の創作の一頂点を画し、名声をもたらしたものの、その実トルストイはここで、実生活でも思想でも行き詰まってしまった。

絶望的な結論を得た彼は——これがいかにもトルストイらしいところだが——、今度はその不条理な現実そのものを変えようとする。これがほぼ同時に行われた、農奴解放の試み、教育活動、そして農婦の愛人アクシーニャ・バズイキナとの恋愛だ。

これらは実は、ある一つの大きな活動をなしており、いずれも、貴族と農民の壁を崩し、農民そしてアクシーニャにできるかぎり近づくことを目的としていた。彼の教育活動は、さらにその上に行く遠大な目標を含んでおり、国家権力から切り離されたトルストイ学校において、いわば「啓蒙されたプラトン・カラターエフ」を続々と生み出し、人類を「改造」しようとして密かにもくろんでいた。

ところが、学校は、当局の圧力で閉鎖せざるを得なくなり、農奴解放と恋愛のほうも、トルストイの内なる情念のせいで、自壊した。彼には、ほかならぬヤースナヤ・ポリャーナで、先祖累代の地主貴族としての家庭生活を営みたいという、実に根深い「情念」があり、彼はこれを断念することができなかつたのである。祖父以来の「絶望」は克服されなかつたのだ。

トルストイは、ソフィア夫人と結婚してヤースナヤで家庭を築くものの、元愛人への未練を断ち切れない。このことは、夫婦関係に初めから暗い影を投げかけた。

彼がおよそ10年間書きついできた『コサック』を、見果てぬ夢としてまとめ、出版したのは、まさにこの時である。そう、それは現実であることを止め、見果てぬ夢に終わったのだ。

しかし、彼には、あるヒントが残されていた。農民の子供たちとの交流で心に刻まれた、生命の力である。生命というものが、いかなる逆境でもはねかえす不可思議な力を秘めているのなら、自分にも活路はあるはずだ。

そして、トルストイの授業で子供たちが最も熱狂した「祖国戦争」があつた。全国民の生命が一つになった、そして今なお一つにし得る1812年の記憶だ。

さらに、これと関連して、彼の頭には、クリミア戦争後によりやく帰還を許されたデカブリストたちのことがあつた。トルストイは、親戚のセルゲイ・ヴォルコンスキーやマトヴェ

イ・ムラヴィヨフ＝アポストルら、何人かのデカブリストに会っているが、彼らは、1812年のあの厳冬期、夜は兵士たちと同じ外套にくるまって寝ながら、勇敢に戦いつづけたのである。全国民が一つになったというのは決して空言ではない。それを可能にした生命力とは？ その団結のすがたとはどのようなものか？ ここにこそ、袋小路からの脱出の糸口があるのではないか？——トルストイの問題意識は、この一点に収斂する。

彼は1812年を徹底的に研究し、それが『戦争と平和』に結実することになる。

だが、この作品そのものを論じる前に、まずやっておかねばならない面倒な作業がある。

史実とかけ離れた『戦争と平和』

これまでの『戦争と平和』論には、大きな欠落がある。この作品の舞台になっているのは、1805年から1819年までで、とくに1812年のナポレオンのロシア遠征、ロシア人の言う「祖国戦争」だ。『戦争と平和』だけ読むと、あまりにも迫真的に描かれているため、それが事実だと思いきみがちだが、じつは、それは多くの点で史実とは似ても似つかないものである。

いわゆる「歴史小説」では、歴史を舞台にいろいろな人物が——歴史的人物も架空のそれも——虚実入り乱れて出てきて、史実も厳密には踏まえられていないものが多い。そういう作品ではたいてい、歴史を舞台とする必然性もほんとうはないのだ。歴史的事件は、せいぜいロマンチックな背景であるにすぎない。三文芝居の舞台の書割みたいなものである。

しかし、『戦争と平和』はそういう作品ではない。

祖国戦争関連の資料を細かく読んでみると、当時入手可能な資料でトルストイが見逃したものはまずほとんどない。「足も大いに使い」、ボロジノの平原を訪れて精査した後、「神がもし私に健康と平安を与えてさえくれば、私はいまだかつてなかったような、すばらしいボロジノ会戦記をものしてみせる」と、妻あての手紙（1867年9月27日付）で豪語し、完成後に、「一蔵書（целая библиотека книг）をなすほどの資料を利用した」（『戦争と平和』について数言をついやす」（16, 13）と書いているのは、けっしてはったりではない。

作家が真摯に、祖国戦争について可能なかぎりのことを知ろうとしたことは間違いない²⁶⁰。

²⁶⁰ ドストエフスキーは、フリスチーナ・アルチューフスカヤ宛の手紙（1876年4月9日付け）で、こんなことを言っている。

私は、反駁の余地のない結論に達したのですが、作家というものは——詩はべつとして小説を書くときは——自分が描く現実を、細大もらさず完璧に知っていなければなりません。私の見るところ、わが国においてその点で優れているのは、ただ一人レフ・トルストイ伯しかいません。

я вывел неотразимое заключение, что писатель — художественный, кроме поэмы должен знать до мельчайшей точности (исторической и текущей) изображаемую действительность. У нас, по-моему, один только блистает этим — граф Лев Толстой.

Достоевский Ф.М. Собрание сочинений в 15 томах. Л., 1988—1996. Т.15. С.518.

もっとも、ここでドストエフスキーの念頭にあったのは、なによりも当時連載中だった『アンナ・カレーニナ』だと思われるけれども。

つまり、祖国戦争の真実を知ることがトルストイにとっては絶対に必要であった。そして、作家は、その真実を知ったうえで、ある意図とコンセプトに基づいて、その歴史的事実を確信犯で再構成し、あえていえば歪曲した——こういうことになる。

そのトルストイの意図とはなにか？ それを知ることが、『戦争と平和』を理解するには必須である。そして、そのためには、われわれもまた祖国戦争の真実を知り、それとこの作品を比較対照するしかない。まさにそれが、これまでの『戦争と平和』論では欠けていたというのである。

祖国戦争史も隠蔽、神話化

そこで祖国戦争史を調べはじめると、あることに気がつく。事実が神話化され、真相がいまだに隠されている、ということだ。

ひとつ例をあげると、あのモスクワの大火だ。原因はなんだろうか？ ナポレオンとフランス軍がモスクワに入城した直後から、市内のあちこちで火の手が上がった。火は瞬く間に燃え広がり、市の4分の3が灰燼に帰した。負傷して置き去りにになっていた露軍のおよそ2万数千人におよぶ将兵も、その大半が焼け死んだ。

トルストイは、仏軍の火の不始末と自然発火だというのが、これはどうみても無理がある。

フリスチーナ・ダニーロヴナ・アルチェーフスカヤ（Христи́на Дани́ловна Алчѐвская, 1841–1920）は、ロシアとウクライナの教育活動家で、民衆のための教育制度と教育法の発案、整備、関連の出版活動などに尽力した女性である。

夫のアレクセイ・アルチェーフスキー（Алексе́й Кири́ллович Алчѐвский, 1835-1901）もたいへん興味深い人物で、実業家、パトロン。貧しい商人の家に生まれ、青年時代は詩人タラス・シェフチェンコに傾倒し、左派ナロードニキ（人民主義者）に共感を寄せていたが、実業で大いに成功し、現ウクライナ南東部の金融、製鉄、炭鉱業を発展させた中心人物の一人となる。ところが、1899–1902年の欧州の不況に際し、政府（大蔵省）から支援を断られ、ペテルブルクのツァールスコエ・セロー駅で鉄道自殺した（他殺説もある）。当時の蔵相は、あのセルゲイ・ウィッテである。ちなみに、このときの不況が1905年革命につながっていく…。

ドストエフスキーが、1870年代にこういう「新時代の旗手」と付き合っていたことには、彼なりに「現実を知り尽くす」意志が働いていただろう。というのは、彼は上の手紙で、自分は「とても大きなロマン」を構想しており、それに関連して、「若い世代と、最近20年で一変してしまった家庭のありかた」を細大もらさず知るために、『作家の日記』も書いていると言っているからだ。両文豪は、その問題意識と探求の徹底において、重なり合うものをもっていた。

なお、ウィッテの挫折は、現代ロシアともパラレルの面があるので、ここでのテーマとは直接関係ないが、一言ふれておこう。

彼は、1892年に大蔵大臣に就任して、いわゆる第二次産業革命を推し進めたが、ロシア社会の「ひずみ」は克服できず、それが不況で噴き出した形となった。そのひずみとは、表面的に見れば、①もっぱら外資と外国の技術、機械に頼って工業化を進めざるを得なかったこと、②天然資源、農産物など一次産品の輸出に依存する構造から抜け出せなかったこと、③国の支配層が大土地所有者、資源の所有者だったので、抜本的な改革は必ずしも望んでいなかったこと、④これらの結果としての労働者の賃金が、農村に準ずる低水準にとどまったこと、⑤これらすべてがあいまって、不況によるダメージが甚大であったこと、などである。以上の点にかんするかぎり、大方の見方は一致しているだろう。

だがなぜ、こういう失敗、破局がくり返されるのか？ おそらく、「改革者」たちが考えているより、問題の根はもっと深いのである。ドストエフスキーもトルストイも、「改革者」が究極のビジョンを欠いたまま物質文明に便乗するがゆえに、精神の全般的空洞化と「万人の万人に対する闘争」を招来し、危機をいよいよ深刻化させる構造を洞察して、憂いていた。

ロシア側による放火のたしかな証拠があまりにもたくさんあるからだ。仏軍入城に先立って、消火器材はすべて搬出されたり、壊されて使用できなくされたりしていた。消火器材の持ち出しに多数の荷車を当てる一方で、露軍の負傷した多くの将兵は置いていかれたわけだが、だれがそんな決定を下したのだろうか。

モスクワ総督フォードル・ロストプチンだという研究者が多い。たしかに彼が放火に関与しているのはまちがいないが、軍も放火には関わっており、消火器材は軍が搬出している。では、露軍の総司令官のミハイル・クトゥーゾフだろうか？…彼が、ボロジノの会戦などで命がけで戦った部下を置き去りにして、「聖都」に火を放ったのだろうか？…

祖国戦争の真実はおぞましいがゆえに隠蔽されている。真実を知る歴史家も、それを語ることはいまだに容易ではない。その真実は、いろんな点でまさにロシア的である。

トルストイは事実を突き止め、確信犯で歪曲

じつは、トルストイはこの真実をつきとめていた。つきとめたことは、『戦争と平和』におけるさまざまな資料の引用のしかたからみて、まちがいない。「私はこの資料をちゃんと知っているし、それがなにを意味しているかも承知している」という書きかたをしているからだ。

そして、トルストイは、つきとめた真実のうえに立って、ひとつの神話を創り出したのである。祖国戦争はこうであってほしかった、その本質はこうであるにちがいない、というかたちで。その神話は多くのロシア人の心をとらえ、祖国戦争のイメージを決定してしまった。もういまさらなにを言ってもむだである、というくらいに。

ロシア的真実のうえにロシア的神話が結晶した。これが『戦争と平和』なのだ。だから、かなり道草を食うようだが、まずは、祖国戦争の時系列に沿って事件を再現しつつ、真実を一つひとつ確かめていかなければならない。そして、未解決の問題をあぶりだし、それに対する筆者なりの解答をしめす。それとともに、実際の祖国戦争を、『戦争と平和』の記述と比較し、トルストイが事実をどう再構成したか跡づけていこう。これが、この「**第 2 部 1812 年と『戦争と平和』**」の前段で、「**I 1812 年**」だ。

このようにして、祖国戦争の真相および、それと『戦争と平和』との乖離をたしかめたいうえで、この作品の本質を論じる。この部分は、純然たる作品論になる。「**II 『戦争と平和』論**」である。

なお、そのあとに、本稿の第 1 部、第 2 部のまとめと、第 3 部『アンナ・カレーニナ』への橋渡しをかねて、「**III 『作者の逸脱』と視点の問題**」を挟んでおく。思想面、作品の形式面からみた総まとめだ。

最後に、補遺として、祖国戦争にかんするいくつかの証言、研究をまとめて紹介する。断片を引用するのではなく、各証言ごとに要約して、どういう立場にある人物が、なにについて、どう証言しているか、どこで嘘をついているかが分かるようにパラフレーズする。これ

が、「補遺：個別の証言と研究」だ。このように対置していくことで、それらの証言が 1812 年の実像をそれぞれの角度から照らし出してくれると思うからである。複数の立場からみられた、複眼的な全体像の再現だ。複数の視点が交差するところに、真相がおのずと浮かび上がってくるはずである。

それらの証言をまずライトモチーフ的に紹介しておく――

1) 陸軍中将ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記²⁶¹

ドミトリー・ヴォルコンスキーは、トルストイの祖父ニコライの甥で、名門ヴォルコンスキー族に属しており、両者は親交があった。軍高官だったので、やはり同族のピョートル・ヴォルコンスキー（アレクサンドル 1 世の側近で、戦略、軍事問題のブレーン）はもちろん、クトゥーゾフ、モスクワ総督ロストプチンなどのキーパーソンとも親しかった。デカブリストのセルゲイ・ヴォルコンスキーも近親だ。

機密にも通じている一方で、1812 年のモスクワの実情を生々しく日記に書き記しているばかりか、ニコライにも書き送っている（ドミトリー・ヴォルコンスキーは負傷して一時退役しており、1812 年は、モスクワ放棄までずっと同市にいたので、自分の目で事態の推移をつぶさに見ていた。モスクワ放棄後、彼は軍に復帰し、「諸国民の戦争」では各地を転戦する）。モスクワ放棄後の混乱のなかを、ニコライと娘マリアの身を案じ、ヤースナヤ・ポリャーナを訪ねてもいる。

ドミトリーの日記は、長らく未公開だったが、ペレストロイカ末期の 1990 年にはじめて、祖国戦争時の部分のみ公開された。彼は、1820 年代までずっと日記をつけていたので、デカブリストにかんしても、じつに貴重な資料なのだが、なぜかその部分は「行方不明」だという。

とにかく、彼の日記をみると、1812 年にモスクワが全体としてどんな状況だったかよくわかるのだ。

2) セルゲイ・グリンカの『1812 年についての回想』²⁶²

彼は、ツァーリに放火を任せられた男である。その回想によると、7 月 27 日（15 日）に、アレクサンドル一世が政府首脳とともにモスクワをおとずれた際に、グリンカは、今後の戦況次第ではモスクワの放棄と放火もやむなし、「モスクワの放棄は、ロシアとヨーロッパにとって救いとなるであります」と献策し、放火の意義を約 1 時間にわたり力説した。これは、スモレンスクの会戦以前のことで、仏軍はヴィテブスクに迫っていた。

その結果、彼は、モスクワ総督ロストプチンと協力して放火を計画、実行するように、政

²⁶¹ Волконский Д.М. Дневник 1812—1814 гг. // 1812 год... Военные дневники / сост., вступ. ст. А. Г. Тартаковский, худож. Г. Г. Федоров. М.: Советская Россия, 1990. С.114-184.

²⁶² Глинка С.Н. Из записок о 1812 годе // «1812 год в русской поэзии и воспоминаниях современников». М.: Правда, 1987. С.394-425.

府よりゆだねられた、という。

通説では、モスクワ放棄は、ボロジノの会戦後に、モスクワ手前のフィリの軍議でようやく決まったことになっている。だが、これは考えてみればじつに変な話である。モスクワを放棄せずに済むシナリオというのは、世界最大最強のナポレオンの「大陸軍」を撃滅する場合しかないが、そんなことはありそうになかったからだ。

モスクワまでナポレオンが止まらないことがほぼ確実であることは考えるまでもなかった。となると、すくなくとも一つの、きわめて可能性の大きい選択肢として、モスクワ放棄は予定されていなければならない。そして、もし放棄するなら、どうしても焼かなければならない。そのケースにそなえ、準備しておかねばならない。グリーンカの手記はそうした推測を裏づけるものだ。

トルストイはこの手記を『戦争と平和』に引用している——その意味を故意にねじ曲げて。

3) マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの手記²⁶³

マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストル（1793－1886）は、祖国戦争の全戦役に参加し、ボロジノでは勇戦して、兵士、下士官用の聖ゲオルギー十字勲章（солдатский Георгиевский крест）を授けられている。これは真の勇士の証だ。

三兄弟（マトヴェイ、セルゲイ、イッポリト）は、いずれもデカブリストとなった。セルゲイは処刑、イッポリトは自殺、マトヴェイはシベリア流刑。

マトヴェイは、戦争のあらゆる惨禍と露仏両軍の非情きわまる作戦を目の当たりにしながら、なおかつ、「自分たちには大きな愛があった」と回想する。

彼の感動的でもありおぞましくもある手記には、なぜトルストイがデカブリストと 1812 年に生涯あれほどの興味をもちつづけたか、その答が含まれているように感じられる。このマトヴェイを、トルストイは何度か訪れている。

一方、マトヴェイは、作家が 1812 年を書こうとしていることについて、こんな感想をヤクーシキン（В.Е.Якушкин）にもらしている。

トルストイは、彼が選んだ時代を、選んだ人々を描くことができるだろうか…。当時のロシアの真実の状態を描かなければならない。ロシア国民を押しひしいでいた、あらゆる恐るべき災いを正確に描かなければならない。だが、これらの災いを十全に描くことは、トルストイ伯はできない。たとえ、彼がそうすることを欲したとしても、許されない²⁶⁴。

²⁶³ Воспоминания и письма М.И.Муравьева-Апостола. В кн. Мемуары декабристов. Южное общество. Под ред. И.В.Пороха и В.А.Федорова. М.: Изд-во Моск.ун-та, 1982.

²⁶⁴ «Русская старина», 1886, №7. С.158.

あの時代のすべてを描くことはできない…。政府も一般人も許さないだろう、ということだ。では、なにが書けるのか。なにを書くべきなのか。「愛」だ。

しかし、その愛を入れる「器」は、事実そのままというわけにはいかない。トルストイは、独自の器を創らねばならなかった。それはごく大ざっぱにいえば、「ロシアの偉大なる軍司令官（полководец）」クトゥーゾフを頂点として、全ロシア国民が一致団結するというもので、そのロシア的愛から普遍的愛をかいま見る、という形であった。

4) ミハイロフスキー＝ダニレフスキーによる最初の公式の祖国戦争史²⁶⁵

ミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、祖国戦争当時はクトゥーゾフの副官だった。本書は、その彼が 1830 年代末に、ニコライ一世の命令で書いた、最初の公式の祖国戦争史である。

だから、嘘だらけかと思いきや、そんなことはない。とくにソ連時代の研究は、一にクトゥーゾフ、二にバグラチオン、あとはおまけ、という図式がほとんどで、大家エフゲニー・タルレでさえ、かならずしも例外ではない。つまり、バルクライ・ド・トーリ、ベニグセン、ヴンツェングローデなどの「ドイツ人」、「外国人」の功績を小さく見せるか無視しているわけだが、この本にはそういうヒエラルキーはまだない。モスクワの放火についても、モスクワ総督ロストプチンの単独犯行という「通説」はまだ固まっていなかったので、軍の果たした役目など、あけすけに書いている。

「外国人」の扱いという点でちょっと例を挙げておくと、たとえば、ボロジノの会戦のくだりでは、バルクライの決死の奮戦に相応の紙幅を割り、英雄として描いている。記述も具体的で、乗馬 5 頭がつぎつぎに倒れたことなどにも触れている。

トルストイは、もちろん、当たれるだけの資料は当たっており、バルクライのことも承知している。まったく無視というわけにはいかないのが、彼が考え出したのは、軽薄なドイツ人、ベルグにおなじく「ドイツ人」のバルクライの手柄を吹聴させるというものだった（バルクライはじつはスコットランド系なのだが）。

こうした理由で、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーの本は、まちがいもあるが、なんといっても貴重な資料であり、19 世紀なかばには、まだ 1812 年神話はかたちづくられていなかったことを確かめさせてくれる。神話形成に決定的な役割を演じたのが、ほかならぬ『戦争と平和』であり、専門家たちがこの作品を批判したのもこれと関係がある。たんにまちがいだらけだと思ったのだ。

5) スターリン時代の大家エフゲニー・タルレ

タルレは、非常にすぐれた研究者だが、主著のひとつで、われわれにとって最も重要な

²⁶⁵ Михайловский-Данилевский А. И. Описание Отечественной войны в 1812 году по высочайшему повелению сочиненное Генерал-Лейтенантом Михайловским-Данилевским : Ч. 1-4. СПб, 1839.

『ロシア遠征』²⁶⁶は、1937年という、スターリンの大粛清の年に書かれたことをまず頭におかねばならない。

タルレは、クトゥーゾフの発言は、鵜呑みにしてはならず、それが、だれに対して、なんのために言われたのか常に考える必要がある、と書いているが、それは彼自身の仕事にかんしても当てはまる。

概して言えば、ボロジノの会戦のような目立つところでは、思い切り愛国調の記述にしておいて、モスクワ放棄→大火→カルーガ街道への移動のくだりでは、一転、力量を発揮している。しかし、全体としては、『戦争と平和』風の図式に収まるように、慎重に按配されている。「偉大なロシアの司令官」クトゥーゾフの背後に、大元帥スターリンが透けてみえる。

6) シクロフスキーの『戦争と平和』の素材と文体』

この本の後半（第5―第10章）については、本稿冒頭の「先行研究」のところでもう検討したので、ここでは、前半部分（第1―第4章）の「素材」にかんする論考のみをみる。『戦争と平和』では、どんな資料（戦史、回想録、日記、書簡など）が用いられているのか、どんな観点から資料の取捨選択が行われたか、などが論点になっている。それは、シクロフスキーの考えでは、トルストイの祖国戦争観をも反映しているはずである。

本稿の第2部の構成は、したがって、大略次のようになる。目次と重複するが、分量が長大なので、論旨を見やすくするために再度記しておく。

第2部 1812年と『戦争と平和』

I 1812年

II 『戦争と平和』論：夢と夢の出会い、そして生命の誕生

III 「作者の逸脱」と視点の問題

補遺：祖国戦争にかんする個別の証言と研究

1) 陸軍中将ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記

2) セルゲイ・グリンカの『1812年についての回想』

——ツァーリに放火をまかせられた男——

3) デカプリスト、マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの手記

——祖国戦争の残したものは？——

4) ミハイロフスキー＝ダニレフスキーによる最初の公式の祖国戦争史

5) スターリン時代の大家エフゲニー・タルレ

6) ヴィクトル・シクロフスキーの『戦争と平和』の素材と文体』

²⁶⁶ Тарле Е.В. Нашествие Наполеона на Россию // 1812 год. М.: Академии Наук СССР, 1961.

*なお、回想録などの資料のうち重要なものは、翻訳だけでなく原文も併せて示すことにする。

まずは、これまでの研究で明らかになっている範囲で、祖国戦争の概略を振り返り、未解決の問題を示して、それらに対する筆者なりの答を出してみよう。そして随時、『戦争と平和』の記述と比較する。

第1章 ナポレオンはなぜロシア遠征を敢行したか？²⁶⁷

祖国戦争はなぜ起きたのか、つまり、ナポレオンはなぜロシアに侵攻したのか。たいていの論者は3つの理由を挙げる。①大陸封鎖令にかんする問題、②ポーランド問題、③個人的怨恨——。しかしこれだけでは、なぜナポレオンが、スペイン情勢が泥沼化している状況で、あのむりな遠征にあえて踏み切ったか、十分説明できるかどうかは疑問なのだが、まずは順次みていこう。

1) ナポレオンの「大陸封鎖令」(1806年のベルリン勅令と1807年のミラノ勅令)にかんする問題

ロシアは、1807年6月14日のフリートラントの戦いでナポレオン軍に負けて、「ティルジットの和約」をむすんだ。その結果、フランスの宿敵イギリスに対する「大陸封鎖」への参加をよぎなくされた。大陸封鎖は、ナポレオンが欧州全域に対して英国との貿易を禁じたものである。

しかし、ロシアにとって英国は主要貿易国で、英国向けに穀物、木材などの第一次産品を輸出し、英国からは工業製品（繊維製品、鉄鋼など）、植民地の物産（砂糖、コーヒー、綿花など）を輸入していたから、たちまちロシアは苦しくなり、貴族の政府に対する不満も高まった（砂糖不足の影響については、「トルストイの農奴解放の試み」のところで触れた）。やむなくアメリカ等の中立国の船舶の寄港をみとめるなど、緩和措置をとらざるをえなくなった。

「世界の工場」イギリスを失って苦境に陥ったのはロシアだけではなく、ほかの欧州諸国も同様で、フランスにしてからが勅令を一部ゆるめる体たらくであったから（飼料トウモロコシの英国への輸出など）、大陸封鎖がうまくいかないのは自明だったのに、なぜかナポレオンはこれに固執し、ロシアを非難した。

大陸封鎖令の背景について

1805年にナポレオンは、英国本土上陸作戦を敢行しようとしたが、フランス海軍がトラファルガーの海戦でネルソン提督に敗れ、制海権を奪うことができず断念し、経済封鎖に切り替えることにした。しかし、英国を海軍力で海上封鎖できるなら短期間で効果があがるが、制海権を英国が握っている以上、ナポレオンとしては、力づくで欧州全域にみずから対英貿易をやめさせるしかなかった。

²⁶⁷ この一節「ナポレオンはなぜロシア遠征を敢行したか？」は、かつて筆者が「ロシアNOW」紙電子版の「今日は何の日」に書いたものに、加筆修正した（2013年6月24日付の「ナポレオンの大陸軍がロシア領内に侵攻」）。

<http://jp.rbth.com/arts/2013/06/24/43741.html>（2015年8月8日最終閲覧）

フランスは、その余禄で経済が一部活況を呈し、貿易収支は黒字になり、繊維産業は伸びたが、産業革命進行中の英国にとってかわることはできなかった（英国は、技術の流出をふせぐため、1774年に機械輸出禁止令をだしていた。フランスなど欧州のほかの国で産業革命が始まるのは、それが解除された1830年代以降のことだ）。

大陸封鎖令で困窮した欧州諸国は、あからさまに協力をしぶったり、密貿易で切り抜けようとしたりと、苦肉の策にでる。ナポレオンはそれを力で抑え込もうとする。

1807年には、ポルトガルが封鎖令にしたがわないというので、ジュノー軍団を送り込んだ。そのためには、スペイン領内の軍隊の通過と駐留を認めさせねばならなかった。こうしてナポレオンは、スペインに深入りしていく。彼が自認する「最大の愚挙」も、もとはといえば、大陸封鎖令に発しているのである。

ナポレオンは、一方で、英国の工業力と経済力について、また一方で、自分の武力について、大局的な判断を誤ったことになる。²⁶⁸

2) ポーランド問題

ティルジットの和約で、ナポレオンは、プロイセンの旧ポーランド領を奪って、自分の帝国の衛星国として、ワルシャワ公国を建国した。ポーランドは、18世紀後半の、ロシア、プロイセン、オーストリアによる、3度にわたる分割で消滅していた。

形式上は独立国だったが、事実上の主権はフランスにあり、その資源と軍隊はナポレオンの意のままに利用された。公国の陸軍大臣ユゼフ・ポニャトフスキは、フランス軍の元帥でもあり、ロシア遠征にも従軍し、1813年のライプツィヒの戦い（諸国民の戦い）では、殿軍として仏軍を撤退させ、戦死をとげた。

ナポレオンは公国を、プロイセンとロシアそれぞれに対する緩衝地帯とし、ポーランド・リトアニア共和国再興の可能性をちらつかせることで、外交カードとして利用した。

公国の建国は、ロシアを大いに刺激した。ポーランドと複雑な歴史的関係をもつロシアにとっては、いかなるかたちであれポーランド国家の復活は、ただちに反露政策と受けとられたからだ。

しかし、そのあたりをナポレオンがどう認識していたかは微妙な問題である。彼が、ティルジットの和約をむすび、公国を建てた際に、さっそくロシアと事を構える気があったとは考えにくいからだ。思いがけず火種をつくってしまい、次第に抜き差しならなくなった、と

²⁶⁸ 大陸封鎖とその影響については、詳しくは以下の論文、著書を参照。

・小宮正弘「ナポレオン帝国衰亡史における「大陸封鎖」の位置」、「静岡産業大学国際情報学部研究紀要」(7)、2005年、191-204頁。

・重富公生「ナポレオン戦争期イギリス農業の位置づけをめぐって：「農業革命」論との関連を中心に」、「愛媛経済論集」8(2)、1988年、73-95頁。

・武田元有「フランス革命・ナポレオン戦争とロシア南下政策——バルト海貿易の危機と黒海貿易の成長」、「鳥取大学教育センター紀要」(6)、2009年、15-88頁。

・両角良彦『反ナポレオン考：時代と人間』（朝日選書）、1998年、169-173、135-155頁。

いう面があるかもしれない。

3) 個人的怨恨

ナポレオンは 1810 年、アレクサンドル一世の妹エカテリーナが嫁いでいたオルデンブルク公国を併合した。アレクサンドルは、とくにこの妹を溺愛しており、近親相姦の説もあるほどだ（たとえば、エフゲニー・タルレ「ナポレオンのロシア侵攻」をみよ）。

これに先立って、ナポレオンが、跡継ぎを産まぬ妻ジョゼフィーヌを離婚して、アレクサンドルの妹のエカテリーナかアンナとの結婚の意向を伝えてきたとき、ツァーリは婉曲に断った経緯がある。

個人的怨恨ということと言うと、これよりだいぶ前だが、フランス王族コンデ家のアンギアン公の処刑（1804 年 3 月 21 日銃殺）をめぐる応酬も、おたがいに根にもっていたかもしれない。

ナポレオンが権力を自分に集中していくにつれて、王党派、共和派などとの権力闘争が激化し、暗殺事件も頻発する。ナポレオンは、反対派をつぎつぎにつぶし、権力を固めていくが、そのハイライトが、『戦争と平和』冒頭のアンナ・シェーレルの夜会でも話題の中心になっているアンギアン公の拉致、処刑だった。

公は、勇名をはせた王党派の若きホープで、ナポレオン暗殺事件に関与していたという確かな証拠もなかった。しかも、フランス領外の公の邸（バーデン大公領エッテンハイムにあり、フランス国境から 24 キロ地点）から公を拉致してくる、という強引なやり口だ。

アレクサンドルがフランス政府あてに声明を出し、「国民の権利と中立地帯の侵犯」を非難すると、ナポレオンはこうやり返した。

「かりにイギリスがパーヴェル一世の暗殺をくわだてて、陰謀の主犯たちが国境近くに潜んでいることが分かった場合、彼らを捕らえるための行動をとらなかつたら、どんなものか」

要するに、ナポレオンは、パーヴェルは公式発表のように「卒中で死んだ」のではなく暗殺されたのであり、アレクサンドルは父の暗殺犯を罰しなかった、いや、もしかすると直接関与していたのでは、と露骨にあてこすったわけである。まさに痛いところをつかれてアレクサンドルは、怒り心頭に発したはずだ。²⁶⁹

ついでに、アンギアン公の処刑の意義と影響について、すこし付け加えておこう。『戦争と平和』第 1 巻のアウステルリッツの会戦にいたる筋の展開に直接かかわるので。

公の処刑でナポレオンは、全ヨーロッパから轟々たる非難を浴び、敵対勢力の結集を許してしまう。「生涯最大の失策」と評される反面、しかし、これ以降、ナポレオンに対する組織的陰謀はあとを絶つ。また、王政復活の可能性がなくなったこと、ナポレオンにさらなる権力強化の口実をあたえたこと、ルイ 16 世処刑で手を汚した連中が、ナポレオンも王族殺し

²⁶⁹ アンギアン公の拉致、処刑の経緯については以下を参照。
両角良彦、前掲書、41-64 頁。

の同罪となることで安堵し、彼の権力に参加するようになったこと——これら政治的にプラスの面も大きかった——。以上は通説となっている。そして、同年末の12月2日には、帝政がはじまる。

こうした状況のもと、ヨーロッパではふたたび大戦争が避けがたくなり、ナポレオンは、大陸支配を強化する。アンナ・シェーレルが憤慨しているジェノア併合も、その一環だ。1805年4月には、イギリスとロシアが同盟し、8月にはオーストリアがくわわり、第三次対仏大同盟結成となる。

『戦争と平和』は、1805年7月にはじまる（1巻1編1章）。

トルストイ：「原因はない。全体の力を跡づけるのみ」

しかし、トルストイの見方はちがう。彼は、ナポレオンのロシア遠征の原因について3巻冒頭でこう書いている。

この異常な事件を引き起こしたものは何だろうか？ <...> ナポレオンにとって、戦争の原因がイギリスの陰謀だと思われたことは理解できる（彼がセント・ヘレナ島でそう述べているように）。イギリスの国会議員にとって、戦争の原因がナポレオンの権勢欲だと思われたことも理解できる。オルデンブルク公には、戦争の原因は、彼にくわえられた暴力だと思われ、商人には、ヨーロッパを荒廃させた大陸封鎖だと思われ、古参兵や將軍連には、彼らを実戦に投入する必要性だと思われ、当時の正統主義者たちには、「正義 *les bons principes*」の復興であり、外交官たちには、1809年のロシアとオーストリアの同盟が十分巧妙に隠されず、覚書第178号が拙劣に書かれたために、すべてが起きたと思われた。同時代人たちの目には、これらの原因が、そしてさらに、視点の無数の相違から生じる、厩大な数限りない原因が思い浮かんだことは理解できよう。だが、すでに起きてしまった事件の全貌を眺め、その単純にして恐るべき意義に徹しようとしている、後世のわれわれにとっては、これらの理由は十分だとは思われない。数百万のキリスト教徒たちが殺し合い苦しめ合ったその原因が、ナポレオンの権勢欲が強く、アレクサンドルが頑固で、オルデンブルク公が侮辱されたからだ、などというのは不可解である。これらの状況と、殺人と暴力という事実の間にどんな関係があるのか、分からないからだ。なぜ、公が侮辱されたからといって、何十万という人間が欧州の端からわざわざ出かけて、スモレンスク県とモスクワ県の人々を殺し略奪し、また自分たちも彼らによって殺されたのか。

これはたしかにそのとおりである。いま述べたような状況——大陸封鎖令、ポーランド問題をめぐる対立、個人的怨恨等々——があっても、戦争になるとはかぎらない。殴られても、

かならず殴り返すとはかぎらないからだ。これをふまえて、トルストイはつづける。

原因の探求の過程そのものに夢中になっている歴史家ではなく、それゆえに曇りない良識で事件を捉えている、われわれ後世の人間にとっては、事件の原因は無数にあると思われる。我々が原因の探求にのめり込むほど、いよいよ多くの原因が見出される。そして、それらは、個々の原因をとっても、複数の一続きの原因をとっても、それ自体、同等にもっともらしくも見え、嘘くさくも見える。事件の巨大さに比してあまりに取るに足りないからだ。また、同時に他の原因が生起しなければそもそも事件が起き得なかったという点で、実体のないものとも見える。ナポレオンが、ヴィスラ川の対岸に兵を引くことを断ったとか、オルデンブルク公国の返還を拒絶したとかいったことは、たとえば、フランス軍の一伍長が再度の勤務を望む望まないといったことと同等の原因でしかないと思える。なぜなら、彼が勤務を望まず、それに続いて第二、第三の伍長が嫌だと言い出し、ついには何万という伍長、兵卒が拒否したとすれば、ナポレオンの軍隊は激減し、戦争は起こり得なかったからだ。

もしナポレオンがヴィスラ川の対岸への撤退要求に侮辱を感じず、軍に侵攻を命じなかったら、戦争は起きなかつただろう。だが、すべての下士官が再度の勤務を望まなかった場合でも、戦争は起きなかつたろう。イギリスの陰謀がなかった場合も戦争は起きなかつた。さらに、オルデンブルク公がおらず、アレクサンドルが侮辱を感じなかつた場合、また、そもそもロシアに専制がなく、フランス革命が起こらず、それに独裁、帝政が続かず、フランス革命をもたらしたあらゆる事柄が存在しなかつた場合は……といくらでも続けることができる。これらの原因のうちただ一つでも欠けていたら、なにも起こらなかつたのだ。ということは、これら何十億という原因は、起こつたことを起こすために、一致して生起したということになる。したがって、事件の特別な原因などというものは存在せず、事件が起つたのは、それが単に起こらねばならなかつたからだ。

トルストイが言うとおりに、これら無数の原因のどれひとつが欠けても事件は起こらなかつた。無数の原因が、その事件が起きるように、ちょうどまくらみ合つたのだが、なぜそういうことになつたのか……。結局のところ、起こるべくして起こつた、何者かが人知の及ばぬ目的のために、そうなるように導いた、という神秘説になつてもしかたがない、とトルストイは言うのである。

非合理的な現象（つまり、その合理性をわれわれが理解できない現象）を説明するには、歴史においては宿命論が避けられない。われわれが歴史上のこれらの現象を合理的に説明しようと努めるほど、それらは、われわれにとってはますます不合理で不可解なものとなる。

なるほど、人間には自由意志があるから、すべてを起こるべくして起こった必然とみなすことはできない、という反論もあろう——。と、いったん留保を挟んだうえで、作家は意想外な論を展開し、徹底した独自の結論にいたる。その骨子は以下のとおり。

たしかに、われわれは、自分が自由であると感じており、あれこれの行動をすることもできるし、しないこともできると感じている。だが、時間を置いて振り返ってみると、あるいは他人の「自由な」行動を、傍から距離を置いてみると、それは必然的にみえてくる。なぜなら、ある力（ある行動をしたいという欲求）が生じたとして、それを当事者として直接感じていようと、時間と距離をおいてみていようと、いずれにしても、それがなぜ生じたのかという謎は残るからだ。なぜ、その時その場でそういう欲求が生じたのか。なぜ多種多様な無数の力が生じ、うまく噛み合い、祖国戦争のような巨大な運動を起こしたのか、という問に投げ返されるからである——。

したがって、作家によれば、われわれにできるのは、原因を問うことではなくて、そういう力がいかに生じ、なにをもたらしたかを包括的に、その全体像をとらえることである、という。これが、『戦争と平和』のエピローグ第二部のいわゆる「歴史哲学」の核心をもなしている（これについては、また改めて述べる）。

ナポレオンの言う「力」とは？

トルストイの意見はまことにもっともで、異論のありようがない。ただし、彼がその「全体像」の各局面をいかに具体的にとらえているか、という段になると、話はべつだ。

作家は、事件は無数の要因が結合して起こるものだから、たとえば、ある戦闘でだれが指揮しているかというようなことは意味をもたないと言う。では、アウステルリッツで、ナポレオンの代わりに、かりに素人が指揮してもおなじ結果になったとでもいうのか？ この会戦でのナポレオンの作戦勝ちをだれがみても動かしようのないところで、だから、ほかならぬトルストイもそのように描き、自家撞着におちいつている。要因にも大小いろいろある。

さらに、トルストイはこう決めつけている。ナポレオンは、上に述べたような歴史の真相はぜんぜんわからず、自分が全能だと思い込んでいる阿呆だ、と。だが、はたしてそうか？

一つのすぐれた力が私を私の知らない一つの目的へと駆り立てる。
その目的が達せられない限り、私は不死身であり、堅忍不拔であろう。しかし私がその目的にとって必要でなくなるや否や、たった一匹の蠅でも私を倒すのに十分であろう²⁷⁰。

ナポレオン自身の言葉だ。彼が感じていたという力が、トルストイのいうそれと同じであることには、疑問の余地がない。

²⁷⁰ 『ナポレオン言行録』（オクターヴ・オブリ編/大塚幸男訳）、岩波文庫、1983年、241頁。

それにしても、この力とは、目的とは、どんなものだったのだろうか？... ナポレオンとその周辺の人々をたえず動かしていた力とはなにか？

マルモン元帥は、「われわれは一種の光芒に包まれて進軍しているような感じだった。私は五十年後の今でさえ、そのぬくもりを感じる事が出来る」と回想する²⁷¹。

たんに、ナポレオンの野心（ロシア遠征にインドの地図までもっていったというから桁外れではある）とカリスマ性に引っぱられたというようなことだろうか？

作家スタンダールは、ナポレオンのイタリア遠征にもロシア遠征にも参加し、ボロジノの会戦も、モスクワの大火も、退却の悲惨も目の当たりにした。飢えるあまり、自分の指を食べるフランス兵までいたというが、そのスタンダールが『パルムの僧院』のような作品を最晩年に書く。まさに天馬空を行く情熱、天を衝く意気...。ナポレオンへの、イタリア遠征時の「情熱」への驚嘆は揺るがなかったとしか思えない²⁷²。その情熱ははたしてなんだったのか？...

一言で野心とわかったように言うが、それは自明のものだろうか？

最後に、人は私の野心を非難するであろうか？ ああ！なるほど、歴史家は私の裡に野心を、それも多くの野心を見出すであろう。しかしそれはおそらくかつて存在した最も偉大な野心、最も高い野心なのである。すなわち、理性の帝国を建設し、ついにそれを押しも压されもせぬものにしようとの野心、そして人間のあらゆる機能の十全な行使、全的な享受を可能ならしめたいとの野心なのである！そしてここで歴史家はおそらく、このような野心が達成されず満たされなかったことを、当然、遺憾とすることになるであろう！.....つづめていけば、以上が私の全歴史である。²⁷³

これはナポレオンの自己弁護として一刀両断されることが多いが、まったくの空言だろうか？

フランス革命の衝撃は巨大だった。政治、経済のシステムはもちろん、抛り所たりうる思想、宗教も崩壊し、人間は巨大な自由を得る代わり、孤独に陥り、すべて自力でやっていかねばならないことになった。自由と孤独。こうした状況は、じつは今日にいたるまで基本的

²⁷¹ ナイジェル・ニコルソン『ナポレオン 1812 年』（白須英子訳）、中公文庫、1990 年、15 頁。

オーギュスト・マルモン（1774-1852）は、ナポレオンが世に出る契機となったトゥーロン攻囲戦（1793）からはじまって、無数の戦役に従軍し、1814 年にはパリ防衛を任されていたのだが、敵軍の圧倒的優性をみて降伏し、敵に寝返った人物だ。その結果ナポレオンは退位を余儀なくされた。ナポレオンは彼を裏切り者と呼び、非難しつつも、遺言書では許している。

²⁷² スタンダールのナポレオン観については以下の論文を参照。

・西川長夫「スタンダールのナポレオン II respecta un seul homme : Napoléon」[Essais d'Autobiographie (v)]、"Francia 4"、1960 年、41-51 頁。

・小泉隆雄「スタンダールのナポレオン観」、「大阪府立大学紀要 人文・社会科学」(10)、1962 年。

²⁷³ ラス・カーズ『セント・ヘレナの物語』（『ナポレオン言行録』所収）、200-201 頁。

に変わっていない。

そこへ、超人ともみえる人間が現れ、かつてない自己実現の可能性、理想社会建設の可能性をかいまみせてくれた——。案外、こうすなおに考えるのが、当たらずといえども遠からずではないか。

なるほど、その結果は嘆かわしいことになったが、今日にいたるまで、人々は幻滅しつつも、ある可能性への憧憬の念は残り、それがナポレオン伝説の核をなしているように、筆者には感じられるのだが…。

スペインのカルロス四世の寵臣で、ナポレオン戦争の渦中にあったマヌエル・デ・ゴドイは、こう言う。

これから先、もはやナポレオンは出現しないだろう。彼はあの種の人物としては最初で最後の存在だった。<…> 輝かしくも、血腥い流星、善悪入り乱れた混合物だったナポレオンは、世紀の奇跡といえた。<…> しかし後に残ったものはただ空しい煙だけであり、もっと悪いことには、人類は完全には倖せになれないという絶望的な確信だけである。²⁷⁴

これも同じことを指し示しているのではあるまいか。「完全に幸福になれる」という夢を見せられたことがあった、と…。

²⁷⁴ 両角良彦、前掲書、309頁。

第2章 ナポレオンのロシア侵入からスモレンスクの会戦まで

1812年6月22日（ユリウス暦10日）、ナポレオンは、当時のロシア国境だったネマン川の岸边に達し、舟橋をかける工事をはじめた。24日（12日）、ダヴー軍団のモラン師団から渡河開始。ちなみに、1941年にドイツ軍がソ連に侵入したのも6月22日だった。

じっさいにネマン川を越えた「大陸軍」は約50万人。当時、ナポレオンは、スペインにも35万人を駐留させていた。

ロシア側は、仏軍の出方がわからないので、あちこちに軍隊を分散させていた。主力は総司令官ミハイル・バルクライ・ド・トーリの第1軍（約13万）とピョートル・バグラチオンの第2軍（約5万）だったが、前者は北、後者は南にあり、ちょうどその真ん中に仏軍の主力が割って入ったかたちだ。

ロシアは同年5月28日にトルコと講和条約をむすんだばかりで、南方に展開していた軍隊を使えることになったが、移動には時間がかかり、当面あてにできない。

ナポレオンは、主力でバルクライ軍を、ダヴー軍とジェローム（ナポレオンの弟）軍でバグラチオン軍を追い、なるべく国境から近いところで、各個撃破をはかったが、捕捉できず、ロシアの両軍はスモレンスクで合流し、ここで最初の会戦となる。

ロシア側には、広大な国土をフルに使って、撤退しつつ焦土戦術を展開し、国土の奥深く誘い込み、冬を待つという作戦が、アイデアとしては戦前からあった（たとえば、アレクサンドル一世のコランクール仏大使やナルボンヌ伯への発言をみよ。また、ツァーリはバルクライにピョートル一世の焦土戦術（対カール十二世）にかんする本を読ませている²⁷⁵。

セルゲイ・グリンカの『1812年についての回想』によると、ツァーリはバルクライに「ピョートル一世の軍事日誌を何度も何度も読み返してくれ」と言ったという²⁷⁶。

²⁷⁵ Томсинов В.А., Аракчеев (серия "ЖЗЛ"). Издание 2-е. М.: Молодая гвардия, 2010. С.250.

Сергей Николаевич Глинка «Из записок о 1812 году» // 1812 год в русской поэзии и воспоминаниях современников. М.: Правда, 1987. С.405-406.

²⁷⁶ 1707年8月、軍事的天才をうたわれたカール十二世率いるスウェーデン軍4万5千は、ザクセンからロシア中央部、モスクワに向かったが、ピョートル大帝は徹底した焦土作戦の準備をしていた。

「敵を複数の部隊による攻撃で脅かし、食糧を奪い、渡河を困難ならしめ、絶えざる攻撃で疲弊させよ」（1707年5月の軍事会議でのピョートルの指令。上記グリンカ『1812年についての回想』による）。

作戦は功を奏し、スウェーデン軍は食糧など補給物資の欠乏と悪天候、パルチザン的な攻撃に苦しんだ。しかも、馬車5千台で補給物資を運ぶ別働隊が、ピョートル自ら率いる部隊の攻撃で、ほとんどの物資を奪われてしまう。

ここで、カールは、200年後のヒトラーを思わせる転進を行う。別働隊の残兵をまとめて南ウクライナに向うのである。

これはウクライナ的首領マゼッパが密かにカールに通じていたためでもあるが、転進は裏目に出た。

スウェーデン軍はウクライナでも、絶えず露軍や住民の攻撃にさらされながら、1708から1709

じっさいに起きたところをみると、ロシアの第1軍も第2軍も、撤退しつつ焦土戦術をおこなっているのが、アイデアが実施されたように見える。露軍は、食料、飼料は残さず、井戸は馬の死体を投げ込むなどして汚染し、家屋は焼き払った。

クラウゼヴィッツは、回想の『1812年』で、とにかくこの戦争では、両軍とも水不足に苦しんだことを強調している。ときには、汚い水たまりの水も飲まなければならなかったという²⁷⁷。参謀本部の将校でもこのありさまだとすると、露軍が荒らしたあとを行く仏軍の苦労は、水ひとつとってもたいへんだっただろう。

この焦土作戦が、どのていど当初の計画に沿ったものだったか、あるいは逆に、成り行きでそうなったかは、議論の余地があるが、いずれにせよ、仏軍のほうが圧倒的に優勢なので、ロシアの両軍としてはとにかく撤退し、合流するしかなかった。その際に、食料等を残さないのは当然だろう。

しかし、焦土戦術がおよそ徹底していたことは、コランクール（当時は馬事総監²⁷⁸で、前ロシア大使、のちに外相）やセギュール（ナポレオンの副官）などの回想録でたしかめられる。そして、戦術の効果のほどは、仏軍がスモレンスクにたどりついたときには、18万5千人に激減していたことから知れる。仏軍の行軍は、補給線が延びるにしたがって、いよいよ困難になっていった。

年にかけて同地で越冬する羽目になる。おまけにこの冬はとくに寒く、スウェーデン軍は消耗していく。

1709年4月、カールはポルタヴァ要塞を包囲し、攻撃を開始する。

だが、要塞の守備隊が持ちこたえている間に、ピョートル率いる大軍がやって来る。兵力4万2千（砲102門）。対するスウェーデン軍は今や兵力3万、砲40門以下になっていた。

しかもカールは、要塞の攻囲戦で、狙撃兵に撃たれて足を負傷し、指揮をレーンスケルド将軍に委譲していた。

カールは、本来の戦略目標から逸脱し、補給もままならない状態でロシア奥地に迷い込んでしまったわけで、この時点で、すでにほぼ勝負あったといえるだろう。この点と、戦争全体のターニングポイントになったという点で、ポルタヴァの戦いにはスターリングラード攻防戦を思わせるものがある。

*ポルタヴァの戦いにかんするこの文章は、かつて筆者が「ロシア NOW」紙電子版の「今日は何の日」に書いたものである（2013年7月8日付の「ポルタヴァの戦いでロシア軍が大勝」）。

<http://jp.rbth.com/arts/2013/07/08/43965.html>（2015年8月8日最終閲覧）

²⁷⁷ Карл фон Клаузевиц «1812 год. Поход в Россию». М.: Захаров, 2004. С.99.

同書は邦訳がある。フオン・クラウゼヴィッツ『一八一二年ロシア戦役史』（外山卯三郎訳）みたま出版、1944年。

²⁷⁸ 馬事総監は、駿馬の育成をはじめ、全軍の軍馬の統轄にかんする総責任を負うとともに、軍令伝達の責任をも兼ねていた。戦場では常に皇帝ナポレオンの左脇にびたり随行することが義務付けられ、皇帝の馬が戦闘などで倒れた場合は直ちに自分の乗馬を替わりに提供する。昼夜を分かたぬナポレオンの指令、軍令に対応するため、常時身辺にあって立ち居をとともにする——。こういう軍のかなめをなす要職であった。

・アルマン・ドゥ・コレンクール『ナポレオン——ロシア大遠征軍潰走の記』（小宮正弘訳）、時事通信社、1981年、317頁（訳者あとがき）。

のちにナポレオンが、敗残の、ほぼ壊滅した大陸軍を置き去りにして単身パリに向けて脱出したとき、護衛の騎兵などをのぞいて唯一の随行員に選んだのが、このコランクールであった。

露軍は、8月3日（7月22日）にスモレンスク付近で合流した。兵力は、計12万5千人。まだ人数的には仏軍のほうがだいぶ優勢だが、露軍の将兵は、撤退一方で不満たらたらだったところ、主要都市で合流を果たしたことで、一気に戦意が高まった。

「なるべくしてなった」というトルストイ説

さて、トルストイの見方というのは、開戦からスモレンスクにいたるまでの経緯は、そうなるべくしてそうなった、というもので、さっき引用したのとおなじ考えだ（3巻2編の冒頭）。無数の原因が寄り集まって、たまたまそうなったにすぎず、どれ一つが欠けても、事件は起こらなかった。だから、特定の原因をとりだすのは不可能で、要するに「神の摂理」だと言う。ただ、これでは木で鼻をくくったようで、さすがに気が引けたのか、こう付け加えている。

軍は戦争当初、分断された。わが軍は、決戦によって敵の侵入を阻もうというはっきりした目的をもって、相互の連絡に努めた。しかし、こうして連絡に努力しているあいだに、強敵と戦うことを避けて、知らず知らず互いに鋭角をつくりながら退却したので、ついにフランス軍をスモレンスクまで近づけてしまった。

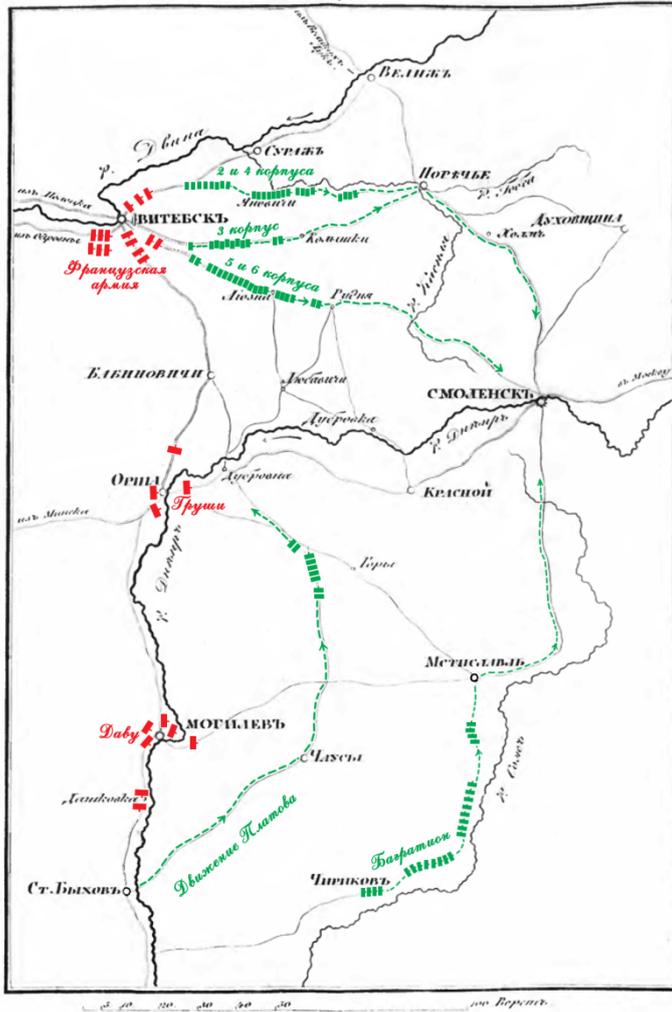
トルストイが、露軍は「決戦によって敵の侵入を阻もうというはっきりした目的をもって」いたと断じているのは、いく人かの論者が言うように、当初から敵を奥深く誘い込むつもりなら、ただ逃げればいいので、相互に連絡をとったり、合流する必要はないからだ、という「理由」による。だが、これは詭弁である。てんでんばらばらにただ遁走するだけでは、士気を保てず、軍が崩壊してしまうだろう。

トルストイ説では、つまるところ、すべては偶然のなりゆき、すなわち、人知を超えた高度な必然性（運命または神慮）ということであった。これは裏返せば、人間が意識的に事件に働きかけることは、根本において不可能ということだ。あらゆる原因とその「合力」がどっちに向くか、前もって予想することはできないからである。こういう考え方は、トルストイの祖国戦争観をつらぬいている。本多秋五の『『戦争と平和』論』の筆法を借りれば、一切が必然に圧倒されており、自由の余地はないということになる。

それにしても、なぜ作家はこんな見方をするのか？… 究極的にそれは正しいとしても、生活のあらゆる局面に、あまりにも直線的に適用するのは…。これでは、前もってなにか計画を立てそれに沿って行動することは、どんな場合でもありえないことになる。トルストイはほんとうにそんなことを信じていたのか、それともなにか深い考えあつての強弁か？

これは『戦争と平和』の重要なポイントの一つである。答えは、祖国戦争の真相と、この作品における表現とを徹底的にすり合わせていくなかで、おのずと浮かび上がるだろう。

Движение 1^{ой} и 2^{ой} армий къ СМОЛЕНСКУ.



地図1 スモレンスクの会戦：露軍の第1軍と第2軍の合流（緑が露軍で、赤が仏軍）²⁷⁹

北からバルクライ率いる第1軍、南からバグラチオン率いる第2軍が、スモレンスクで合流しようとする。

スモレンスクの会戦

バルクライは、さらに撤退・焦土戦術をつづけるべきだと考えていたが、軍議で一戦まじえることに決まった。

スモレンスク市は、ドニエプル川の切り立った南岸にあり、周囲を城壁で囲まれている（地図2）。赤レンガづくりの城壁はボリス・ゴドゥノフの時代に造られたもので、高さは

²⁷⁹ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. «ОПИСАНИЕ ОТЕЧЕСТВЕННОЙ ВОЙНЫ В 1812 ГОДУ. ЧАСТЬ 1». СПб, 1839. С.344-345.

電子図書館「ルニバース」の地図セクションもみよ。

http://www.runivers.ru/mp/maps-detail.php?ID=468765&SECTION_ID=7819 (2015年9月10日最終閲覧)

13-19m、厚さは5-6mもあり、3つの城門に、銃眼と稜堡を備えている²⁸⁰。

川の北岸（右岸）とは橋でむすばれており、右岸にはペテルブルク村があった。川の北側を、川とほぼ並行して、モスクワにいたるスモレンスク街道が通っている。

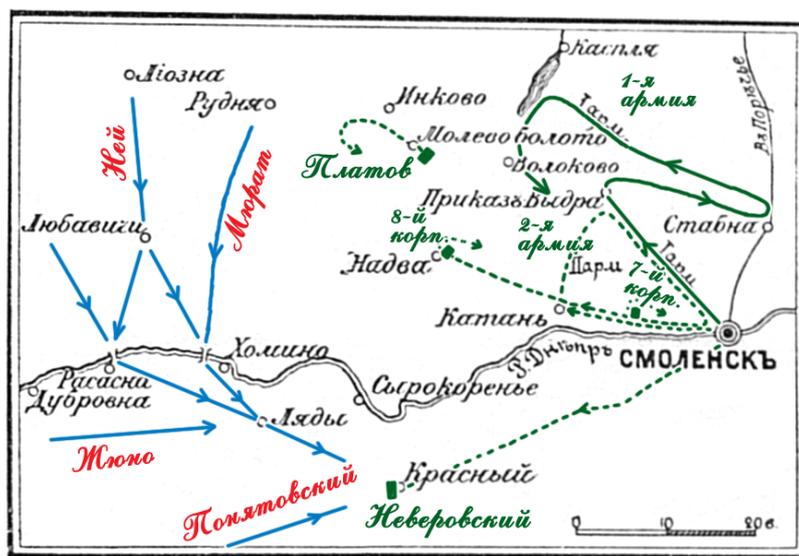
守るに堅固な城砦ではあったが、これにこだわると、仏軍に迂回されて、街道で後手に回る危険があった。仏軍に先回りされて、退路を絶たれるのがいちばん怖い。中世の城塞都市の攻防戦なら、城を取るか取られるかですべて決まりだが。

8月8日（7月27日）に、バルクライの第1軍は、ルードニャ方面に敵軍の捕捉に出発し、ラエーフスキー軍は砦のなか（市内）に残った。仏軍の配置と出方がわからなかったため、万一に備えて、南岸のクラスヌイにもネヴェロフスキー師団を配置した。

一方のナポレオンは、露軍が北岸にあることを知った。ルードニャ付近で、露軍のプラートフ将軍のコサック軍と、仏軍の部隊とのあいだで戦闘が起きたためだ。

8月14日（2日）、ナポレオンは、露軍の意表を突こうと、オルシャの先で全軍に渡河させた。砦に南方から迫り、一気に占領しようという作戦だ。

しかし、ネヴェロフスキー師団の奮戦で（セギュールなど敵側も賞賛している）、露軍は時間を稼ぐことができた。同師団は、ラエーフスキー軍（1万5千）と合流し、砦のなかと、その周りの村に陣取った。地図2を参照されたい。



地図2 スモレンスクの会戦：ネヴェロフスキー師団が奮戦している間に、バルクライ軍（第1軍）がもどってくる（緑の実線と破線が露軍、青の実線が仏軍の動き）²⁸¹

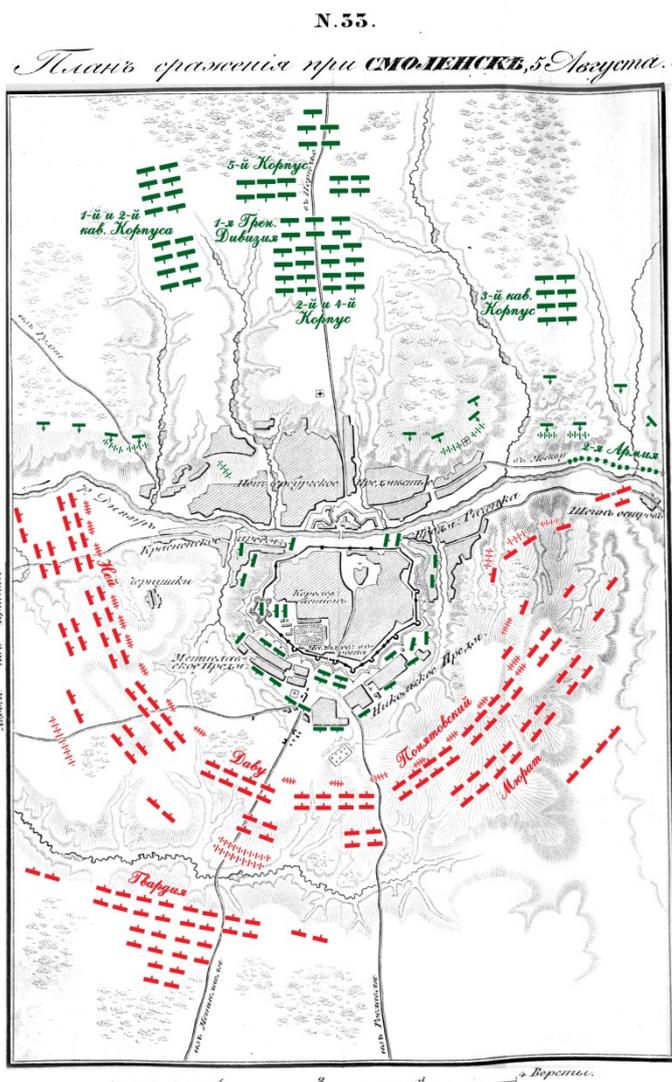
²⁸⁰ この通称「王の砦」は、ポーランド・リトアニア共和国の国王ジグムント三世が造らせた。王は大動乱時代のロシアに介入し、1610年にモスクワを、1611年にはスモレンスクを占領している。

²⁸¹ 以下の事典の第4巻、「1812年8月2日のクラスヌイ付近の戦闘 Бой 2 августа 1812 года у гор.Красный」の項目をみよ。

Военная энциклопедия: Всего томов 18. СПб.: Тип. Т-ва И.Д. Сытина, 1911-1915.

やがて、仏軍全軍がそろったが、それを向こうに回して、8月16日の夕方5時ごろにバグラチオン軍、さらに晩にはバルクライ軍が帰ってくるまで持ちこたえた。もっとも、この日、仏軍は砲撃するだけで、突撃はしなかったけれども。バルクライは、もしまえの用心深さから、ルドニャ方面に深入りせず、数日間停止していたのだが、それがさいわいした。

ナポレオンは、地図3にみるように、砦を南側からぐるりと囲むように、軍を配置した。露軍の第1軍、第2軍は川の北岸にある。ここまでがスモレンスクの会戦の第1幕だ。



地図3 スモレンスクの会戦：17日の戦闘と露仏両軍の配置

仏軍は城砦を南からぐるりと取り囲む²⁸²

電子図書館「ルニバース」の地図セクションも参照。

http://www.runivers.ru/mp/maps-detail.php?ID=468754&SECTION_ID=7819 (2015年9月10日最終閲覧)

²⁸² Михайловский-Данилевский А.И. «Описание Отечественной войны в 1812 году. Часть 2». СПб, 1839. С.114-115.

以下の著書にも同様の地図が収められている。

ついに大会戦とナポレオンは張り切ったが（セギュールによると「ついにつかまえたぞ！」と叫んで手を叩いていたという）、16日（4日）夜、バルクライは、街道を遮断されることをおそれ、バグラチオン軍を街道の先のヴァルーチノに遣り、「退路を守らせる」こととした。これは事実上の退却の開始にひとしい。

17日（5日）、ナポレオンは、バグラチオンの退却を知り、浅瀬をみつけて、部隊を再渡河させ、露軍を分断しようと図る一方、砦への砲撃を開始し、午後一時にはさまざまな方向から突撃をこころみたが、堅固な城壁と露軍の猛烈な砲火で突破できなかった。

いずれの証言も、露軍の奮戦は非常なものだったという。スモレンスクでの露軍の士気の高さは見逃せない。ここまで退却つづきだったが、うちにすさまじい闘志を秘めていたわけだ。

日没とともに戦場は静まっていったが、夜になると市内にすさまじい火の手があがった。市と、北岸にかかる橋とは、まだ露軍の手中にあったので、火災の原因は、露軍自身の放火だと考えられる。コランクールは次のように証言している。

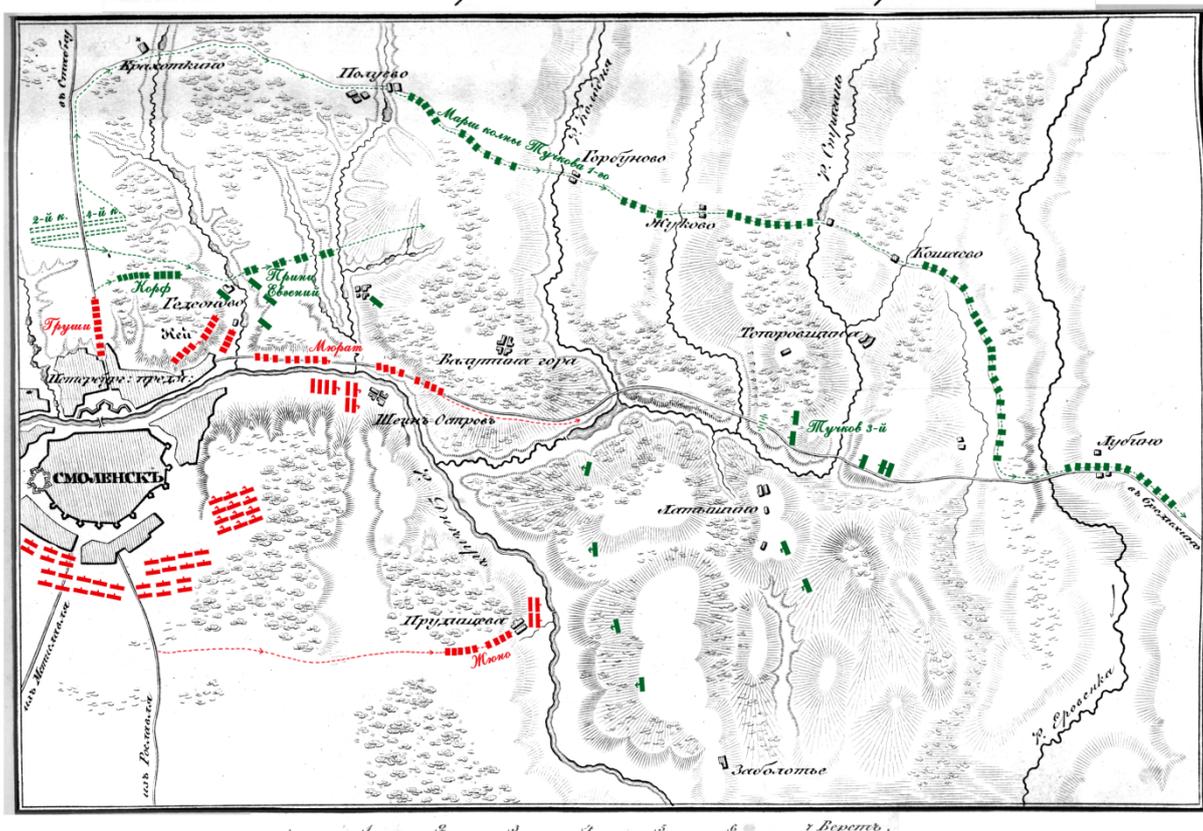
夕方近く、敵の退却の動きは、見た目にも明らかになってきた。そして、朝から、街には火の手があがっていた。敵自身の手で放たれた火は、その後もいっこうに熄むようすをみせなかった。それどころか、夜の間にいっそう火勢を強めた。恐ろしい光景だった。これこそ、われわれがのちにモスクワで出会うことの、酷烈な前兆にほかならなかったのだ。²⁸³

17日から18日にかけての深夜、軍議で、市を放棄して撤退することが決まり、ただちに、第1軍、そしてラエーフスキーに代わって砦を守っていたドフトゥロフ軍が橋を焼いて退却した。ここまでが第2幕。

19日（7日）中に仏軍は、橋を修理し、退却する露軍を急追する。街道はドニエプル川に並行しているので、南岸沿いでも追いかけ、砲火を浴びせた。街道は仏軍の射程距離内だった。

Богданович М.И. История Отечественной войны 1812 года: Том I. СПб, 1859. С.250-251.
電子図書館「ルニバース」の地図セクションもみよ。
http://www.runivers.ru/mp/maps-detail.php?ID=468781&SECTION_ID=7819（2015年9月10日最終閲覧）

²⁸³ アルマン・ドゥ・コレンクール、前掲書、59頁。

Планъ битвы при **СМОЛЕНСКѢ** французскѣхъ войскъ.

地図4 スモレンスクの会戦：露軍（緑）は北に大きく迂回し、仏軍（赤）の追撃をかわそうとする²⁸⁴

そこで露軍はコースを変え、地図4のように、北に大きく迂回することにした。南岸沿いに追っていた仏軍のジュノー軍は、プルディシチェヴォ付近で北岸に渡河し、街道を遮断して、露軍の第1軍を挟み撃ちにしようとしたが、渡河に時間を食い、沼地で迷ったりして、間に合わなかった（地図5）。露軍は、北岸を追ってきた仏軍と激しい戦闘を演じたが（双方から約3万人が参加した）、どうにか脱出に成功した。

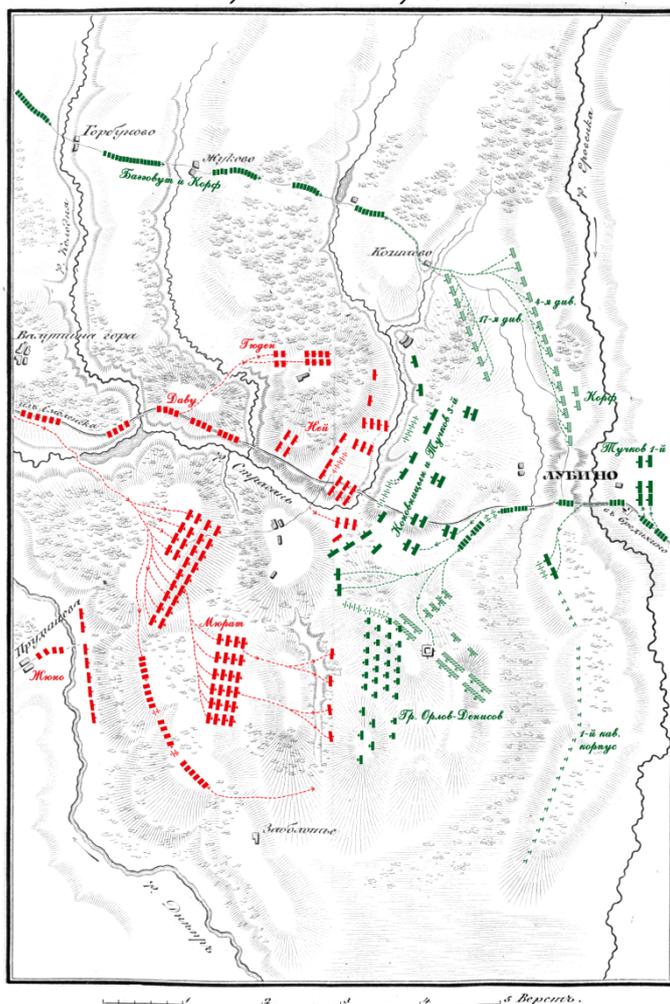
これが、スモレンスク東方約20キロの地点で演じられた「ヴァルチノの丘の戦い」で、第3幕だ。

²⁸⁴ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ. С.128-129.

電子図書館「ルニバース」の地図セクションも参照。

http://www.runivers.ru/mp/maps-detail.php?ID=468781&SECTION_ID=7819 (2015年9月10日最終閲覧)

Планъ сраженія при ЛЪВИНѢ.



地図5 スモレンスクの会戦：ヴァルチノの丘の戦い

緑が露軍、赤が仏軍。地図でいちばん西に位置しているジュノー軍団が、大きく南方から迂回して露軍を挟み撃ちにしようとしたが間に合わなかった²⁸⁵

以上がスモレンスクの会戦の経過だが、露軍にしてみると、一戦を交え、敵も認める奮戦をみせ、やれる！という自信をもって、ぶじ退却できたことで、この時点での目的は達したといえる（またも退却することで、将兵は、司令部に不満を抱いたけれども）。現時点で、

²⁸⁵ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ. С.138-139.

電子図書館「ルニバース」の地図セクション。

http://www.runivers.ru/mp/maps-detail.php?ID=468782&SECTION_ID=7819 (2015年9月10日最終閲覧)

“Maps and Pictures of War of 1812”も参照。

http://mapswar2.x10host.com/maps_war_1812.htm#_maps_ggg (2015年9月10日最終閲覧)

仏軍と大会戦をやって撃滅し戦争を終わりにできると思っていた人は、すくなくとも軍の上層部ではいなかっただろうから。

もっとも、これまでずっと退却つづきで、主要都市をいくつも失ったというので、将軍たちはアリバイ作りに、おたがいに陰口をたたきあつた。とくにバグラチオンは、アレクサンドルー世の側近中の側近アラクチャーエフやモスクワ総督ロストプチンなどに、バルクライの悪口を散々書き送っている。が、それはまたべつの話だ。

一方、ナポレオンはといえば、クラウゼヴィッツが言うとおりに、失敗だったかもしれない。彼の目的はあくまでも、露軍の撃滅だ。スモレンスクの砦を落とすことではない。全軍をわざわざ渡河させたりしなければ、露軍はもっと捕まえやすかつたはずだ。ましてや、露軍のほうから、自分の 2 倍近くも優勢な仏軍を「捕捉」するため、少ない軍勢をさらに分散させて、飛んで火にいる夏の虫よろしく、向かって来ていたのだから。それを砦にこだわつたために、みずから獲物から遠ざかつてしまった。

もうひとつ、若いころのナポレオンなら、ロシアの第 1 軍を挟撃するために、ジュノーを遣つたりせず、自分で出向いたのではないか。²⁸⁶

トルストイはスモレンスクの会戦をどう描いたか

フランス軍は思いがけず、ネヴェロフスキー師団に遭遇し、スモレンスクの城壁の前に出た。

わが軍の連絡を保つために、スモレンスクで思いがけない会戦に応じなければならなかつた。会戦は始まり、双方とも数千の将兵を失つた。

スモレンスクは、皇帝と全国民の意志に反して、放棄された。〈...〉 ナポレオンはさらに前進し、わが軍は退却した。そして、ナポレオンを敗退させることになる、まさにそのことが成就していった。(3 巻 2 編 1 章)

『戦争と平和』の 3 巻以降は、事件の理論的、概括的説明がときおり出てくるのだが、スモレンスクの会戦についても、やはり、すべては偶然の産物だと作者はいう。まあ、それは物の見方だから置くとしても、あんまりかんたんすぎるようだ。しかも、さっきこの会戦について見たことから明らかなように、「双方とも数千の将兵を失つた」点以外は、事実反している。

両軍とも最初から戦う気で戦闘に入ったのだし、ネヴェロフスキー師団は、用心深いバル

²⁸⁶ スモレンスクの戦いについては、かつて筆者は「ロシア NOW」紙電子版の「今日は何の日」に簡単に書いたことがある(2012 年 8 月 16 日付の「ナポレオンとロシア軍がスモレンスクで激突」)。

<http://jp.rbth.com/articles/2012/08/16/38507.html> (2015 年 8 月 8 日最終閲覧)

クライが予め配置しておいたのである。また、スモレンスク放棄は、皇帝と宮廷、軍にとって織り込み済みだった。

一切が、同じ方向にねじ曲げられる。すなわち、事は思惑どおりに運ばず（トルストイによれば、そんなことはそもそも不可能である）、たまたまそうなった、と。偶然（人知を超えた必然）が、あらゆる人間を十把ひとからげに翻弄する――。

ところが、そうした偶然の支配のなかで、この名作でも屈指の、すばらしい多様な人間ドラマが展開していくのだ。十把ひとからげどころではない。

ニコライ老公爵の領地「禿山」は、スモレンスク街道沿い（街道から 3 露里）にあり、同市から 60 露里モスクワ寄りに位置しているが（3 巻 2 編 4 章）、「恍惚の人」になりかかっている彼は、第 1 軍で連隊を指揮している息子のアンドレイから再三避難するよう手紙を受けとっているのに、状況がさっぱりのみこめず、支配人のアルパーティチを、こともあろうにスモレンスクに買い物にやる。この老支配人は、十年一日の日常生活のなかで化石したような人物で、砲声がとどろく同市に入っても、そこが戦場だとはすぐには分からない。その彼の頑固な意識のなかに、否応なしに戦争が乱入してくる。炎上する家屋の前で呆然と立ちすくんでいる老人の前を、「偶然」アンドレイが通りかかり、「お前、こんなところでなにしてるんだ？」と叫ぶ。若主人をみとめたアルパーティチがいきなりわっと泣き出すさまがすごい。

スモレンスクからの撤退の途中でアンドレイは、いまや無人となった「禿山」に立ち寄り（彼がアルパーティチを通じ、父と妹マリアを避難させたのである）。父があれほど経営に腐心した「禿山」は、打ち棄てられ、先行する露軍の部隊に荒らされていた。廃墟と化した、生命を失ったヤースナヤ・ポリャーナの幻視かもしれない。『戦争と平和』の極北の世界だ。青いすももを盗む少女たちは、かつてアンドレイが月夜に出会ったナターシャのかすかなりフレーンである。死の幻視と生命の追憶…。

アンドレイが連隊にもどると、兵士たちは汚い池で水浴びをしていた。無数の裸体が池にひしめき、歓声をあげている。彼は不可解な恐怖と嫌悪を感じつづやく。「肉、体、大砲の餌食！」

偶然＝必然の猛威のなかで展開する死と破壊と腐敗のドラマである。それが読み手にこんなに強く迫るのはどういうわけか。トルストイの意図はどこにあるのか。ここでは問題を提起するにとどめよう。

第3章 スモレンスクからボロジノまで

第1軍はまさに虎口を脱し、露軍は撤退をつづけたが、その後衛と仏軍の前衛とのあいだではほとんど毎日げしい戦闘がおこなわれ、両軍とも疲弊していった。仏軍はあいかわらず露軍の焦土戦術にも苦しんだ。

当時、馬事総監であったアルマン・コランクールAlman de Coignyの回想録によれば、「敵はひとり人間もあとに残さず、商店を破壊し、諸施設はおろか大きな個人用住宅にまで火を放っていった<...>。われわれに多大の物資を提供するというわけでもない非軍事用施設や、さらに個人的住宅まですべて破壊しつくして、いったいロシア人にどんな利益があるのか、私には合点がいかなかった」

このように焦土戦術があんまり徹底しているのだから、コランクールによると、ナポレオンは、彼の弟のオーギュスト・コランクール将軍を強力な分遣隊とともに、露軍の後衛部隊に接近させて、放火の状況を調査させた。その結果は、予想を上回るものであった。

さて家屋内に残った何人かの住民と、わけてもたいへん利発なパン屋の少年の証言によって、事の次第は非常にはっきりしたものとなった。すなわち、火を放ち火災を大きくするための準備は、敵後衛のコサックの分遣隊によって、われわれの到着するかなり以前からなされており、われわれの姿が認められるやただちに火が放たれはじめたのだという。事実、さまざまの家屋内に、それもとくに食糧品などの貯えが隠し置かれている家屋には、燃えやすいものがきちんと用意され、火をつけられるばかりになっているのが発見されたのである。結局、この地でもまた、これまでと同じように、また今後もそうであるように、火災が、前もって指令され準備された段取りの実行にほかならないという証拠は、歴然たるものがあつた。

右のような詳細は、これまでの町や村のわずかな住民たちから、すでに知らされていたことではあつたが、われわれは容易に信じようとはしてこなかつた。しかし、前進するほどに、もはやそれは動かしようもなく確かなことになった。驚かぬ者はいなかつた。皇帝ですら全軍の兵士たちと同様であつた。しかし、皇帝は、表面上は、敵のこの新しい戦法を茶化すようにしていた。皇帝はしばしばふざけ半分に、「ここの連中ときたら、まったく一夜の寝床を貸すのが嫌さに、自分の家に火をつけてしまうのだから」と言った。²⁸⁷

トルストイは焦土作戦をどう描いたか

²⁸⁷ コランクール、前掲書、64-65頁。

トルストイは、露軍が徹底的におこなった焦土作戦をどう描いているだろうか。

スモレンスクは、皇帝と全国民の意志に反して、放棄された。しかし、スモレンスクは、知事にだまされた住民自身の手で焼かれた。そして、困窮した住民は、他のロシア人にも手本を示しつつ、モスクワへ向った。その際、自分の損害のことばかり考え、敵への憎しみをたぎらせた。ナポレオンはさらに前進し、わが軍は退却した。そして、ナポレオンを敗退させることになる、まさにそのことが成就していった。(3巻2編1章)

これだけだ。だが、小説的な部分での描かれかたは、とても含蓄に富んでいる。まず、スモレンスクで商人フェラポントフが、やけくそで商品を一切合財兵士たちに分けてやり、自分で店に火をつけるさまが描かれる。

「みんな、さあ、ぜんぶ持ってきなさい！ 悪魔どもの手に入らんようにな！」。こう叫ぶと彼は自分で袋をひつつかんで、往来に投げはじめた。何人かの兵隊はびっくりして逃げ出したが、ほかの者はせっせと袋に詰めつづけていた。アルパーティチを見ると、フェラポントフは彼にこう言った。

「おしまいだ！ ロシアはおしまいだ！」。彼は叫んだ。「アルパーティチ！ おしまいだ！ 自分で火をつけてやる。おしまいだ…」(3巻2編4章)

アルパーティチは、フェラポントフ一家に馬車に乗せられて、スモレンスク市街から避難しようとするのだが、ドニエプル川にかかる橋のほうに下っていく通りで、渋滞で立ち往生する。時間つぶしにアルパーティチは馬車を降りて、ちかくの横丁の火事を見物しようと、そっちに曲がると、放火の現場を目撃する。

兵士たちは、火事場付近をたえずあっちに行ったりこっちに行ったりしていた。アルパーティチは二人の兵隊と粗ラシャ外套を着た一人の男が、火事場から通りの向かいに、燃える丸太を運んでいるのを見た。他の者たちは乾草を抱えて運んでいた。(3巻2編4章)

その場にアンドレイが偶然通りかかり、前に引用した場面となるわけだが、そこへドイツ人のベルグ(当時、第1軍の司令部に勤務)もぼったりゆきあわせ、最初はアンドレイとは分からずに、「目の前で放火しているのに、なぜ放置するのか」と難詰した後、気がついてこう弁解する。「私がこんなことを申したのは、命令を履行しなければならないからです。私はいつも正確に履行していますので。ごめんなさい」

この一連の描写は、何重にも「保険」がかけられている。焦土作戦は、じっさいには軍が

徹底的に実行し、仏軍を苦しめたのに、トルストイとしてはそうは言いたくない。露軍自らが、自国民を追い立て、あるいは避難を強い、その家財産を焼き、「戦略的效果」を上げた、残酷きわまる作戦であった——そんなことは、けっして認めることができない。それは『戦争と平和』の世界に収まらないのだ。

とはいえ、軍が関与しているのは厳然たる事実である。そこで作者が考えついたのは、まず住民がやけくそで徴発を許し、火を放つ。住民が OK したということで、この「自己犠牲」に兵士が「協力」する。軍当局は、表立っては放火を認めないが、黙認する、というかたちで描くことあった。その「自己犠牲」が理解できない「ドイツ人」ベルグは、「ドイツ人的几帳面さ」で、「命令を履行する」という次第だ（こうして、ロシア人対ドイツ人または外国人という図式も鮮明になっていく）。

ところでピエールは、のちのモスクワ陥落に際して、「犠牲を払い、苦痛を味わいたい」という気持ちから、家出してナポレオンを暗殺しようとするときに、突然、ある感情を覚えるのだが、おそらくそれが、フェラポントフの心の底にもあるのだと思われる。

富も権力も生命も——人がたいへんな努力を払って築き上げ大事にしている、ありとあらゆるものに——もしなんらかの価値があるとすれば、それらすべてを棄て去るとき
の快感のためにすぎない。（3巻3編27章）

これは「必然」と死のただなかに立ち上がる「自由」と生命につながるものである。このことについては後で、「第2章 『戦争と平和』論」でくわしく述べる。さて、われわれの祖国戦争の記述にもどろう。

とどまるべきか進むべきか

ナポレオンは迷っていた。パリ、欧州との連絡と補給はますます困難になった。か細く延び切った補給線をねらってバルクライは、部下のフェルディナンド・ヴィンツェンゲローデに、ロシア初のパルチザン部隊を編成させた²⁸⁸。ヴィンツェンゲローデは、さっそく8月19日（7日）に、大胆不敵にもヴィテブスクを襲い、800人を捕虜にしている。

スモレンスクにとどまるか、防衛線を築いていったん適当な都市へ退くか、前進か（モスクワまでわずか378キロだ！）、モスクワを落として越冬か、しかし、皇帝として数ヶ月もパリを留守にできるか…。

スモレンスクの会戦後、ナポレオンは、負傷して捕虜になったツチコフ少将や、彼の身を

²⁸⁸ ロシア初のパルチザンといえば、いまだに一般のロシア人は、デニス・ダヴィドフだと思
い込んでいる。これは、彼をモデルにした『戦争と平和』のワーシカ・デニーソフのイメージ
と、とくにソ連時代の史家の確信犯での宣伝が大きい。問題はヴィンツェンゲローデがドイツ人
だということなのだ…。

案じて休戦旗をかかげてやってきたオルロフ伯などを通じて、アレクサンドル一世に和平の打診をするが無視された。結局ナポレオンは、敵はいくらなんでもモスクワはだまって明け渡すまい、その前面で受けて立つであろう、そこで完敗させれば有利な講和をむすべる、と皮算用して、前進する。

一方、露軍のほうも深刻で、問題は戦況だけではなく。まず、バルクライが総スカン状態で、スモレンスク以前から大問題になっていた。露軍が「撤退一方で、主要都市をいくつも失った」のは、これはもうしかたなかったのだが、ひとりでその責任をなすりつけられた格好だ。彼が「外国人である」²⁸⁹ことも手伝って、軍でも上流社会でも宮廷でも非難、誹謗、中傷は喧しく、前線の将兵にも不人気で、公然と裏切り者呼ばわりする者さえ少なくなかったのである。その急先鋒になったのが、ほかならぬ第2軍の司令官バグラチオンだ。

この二人がもともと不仲だったことが、軍の「二重権力状態」にますます拍車をかけた。二人ともロシア史に残る名将ではあったが、ナポレオンいわく「優秀な司令官が二人いるより、凡将一人のほうがましだ」

バルクライとバグラチオンが不仲だったわけ

二人が陰悪だったのには、ほかにもいろいろ理由がある。出る杭は打たれる——。ミハイル・バルクライ・ド・トーリの目もくらむような出世と否定のしようもない功績は、多くの先輩の將軍連の反感を買った。彼は、1807年のアイラウの戦いで右手首を粉碎骨折した後、アレクサンドル一世の見舞いを受け、親しく話し合った。以来、バルクライの栄達は目覚しく、当時、陸軍中將は、バルクライをふくめて61人もおり、彼の序列は47番目にすぎなかったのに、1809年には、46人を抜いて大將になり、翌1810年には陸軍大臣を拝命する。こういうごぼう抜き人事に不満で辞表を提出した將軍も何人かいた。

なるほど、バルクライは、陸軍大臣として軍改革に尽力し、大きな成果をあげる。とくに、フランスの軍団制の導入は重要だった。仏軍の強さは、各軍団が、歩兵、騎兵、砲兵などの各部隊をそなえ、指揮官の裁量で臨機応変に動ける、かなり独立したミニ軍隊である点にもあった。

バルクライはまた、ナポレオンとの戦いを想定し、ヴォルガ川まで戦術的に撤退する焦土作戦も作成した。

前線でも活躍し、第二次ロシア・スウェーデン戦争では、1808—1809年の冬期にクヴァルケン海峡（フィンランドとスウェーデンのあいだの約80キロの海峡）を渡るのに成功して、勝利の立役者となっている。しかし、それだけにこの「外国人」への羨望と嫉妬は、軍と宮廷に渦巻いており、それが、露軍の撤退つづきで、格好のはけ口を得た。

一方、バグラチオンは、名将スヴォーロフのイタリア、スイス遠征（フランス革命戦争）

²⁸⁹ スコットランドの家系だが、ロシア帝国に仕官してすでに三代目だから、外国人とはいえない。

では、前衛を指揮して勇名を馳せ、1805年には、シェングラーベンで露軍の後衛を率いて、数倍の兵力の敵を食い止めて、主力部隊を撤退させるのに成功し、第二次ロシア・スウェーデン戦争でも活躍し...というぐあいに、行くとして可ならざるは無し、と思われたが、突然、祖国戦争の前に、アレクサンドル一世の寵を失うことになった。原因は...ツァーリが溺愛していた妹、大公女エカテリーナ・パーヴロヴナとの恋愛事件だ。ツァーリの溺愛ぶりは常軌を逸したところがあり、その妹あての手紙の内容などからして、ソ連時代の史家エフゲニー・タルレをはじめとして、二人は近親相姦だったとと勘ぐる人も多い。

このスキャンダル（と兄の妹への嫉妬？）のために、バグラチオンは左遷され、祖国戦争がはじまっても、ついに総司令官には任命されず、事実上、第1軍を率いるバルクライの指揮下に入った。

もし、この恋愛沙汰がなかったら、バグラチオンは総司令官になったかもしれず、そうなれば、戦争の経過がかなり違ったものになったかもしれない。この闘将が総司令官だったら、バルクライのように首尾一貫して撤退、焦土作戦をとれたかどうかは疑問で、乾坤一擲、大会戦を挑み、ナポレオンに壊滅させられていたかもしれない。こう空想をたくましくすることはあながち不可能ではない。

だが、アレクサンドル一世のバグラチオンに対する評価が必ずしも高くなかったのは、まさにその辺もあるようだ。

エカテリーナがモスクワ放棄を知り、兄の「モスクワに対する裏切り」を手紙で責めてよこしたとき、その兄は、9月30日（18日）付けでこう書き送った。

人間にとって、自分の最良の確信にしたがう以上のなにができようか？ まさにそれだけが私を導いてきたのだ。また、それこそが私に、バルクライを第1軍の総司令官に任命させた——過去の対フランス、スウェーデン戦争で彼が得た評判にもとづいて。この確信によって、私は、彼がその認識においてバグラチオンよりも高いと思ったのだ。
<...> バグラチオンは、戦略のことはまったく分からない。²⁹⁰

補説：バグラチオンと大公女エカテリーナ・パーヴロヴナとの恋愛事件

ここでの大筋からははずれるが、バグラチオンと大公女エカテリーナ・パーヴロヴナとの恋愛事件はなかなか興味ぶかい。

バグラチオンの評伝を書いた E.アニシモフは、二人のあいだにロマンスが生まれた時期は、1807年の6月—10月と推測している。この間、バグラチオンは、パヴロフスクの総督を務め

²⁹⁰ Переписка императора Александра I с сестрой великой княгиней Екатериной Павловной. СПб., 1910. С.86.

Тарле Е.В. Там же. С.595.

ており、エカテリーナはそこに住んでいたからだ。二人の関係がどんなものだったかは分からない。

まもなく、翌年 1808 年初めに、第二次ロシア・スウェーデン戦争がはじまり、バグラチオンは出征する。1809 年には、彼は凍結したボスニア湾を渡って、オーランド諸島を占領して、スウェーデン本国に達し、バルクライとともに勝利の立役者となる。

ところが凱旋したバグラチオンを待っていたのは、モルダヴィア軍司令官への左遷であり（1809 年 7 月－1810 年 3 月）、その直後の 1809 年 8 月 3 日には、大公女エカテリーナは、ロシアに亡命していたオルデンブルク公ゲオルクと結婚し（結婚させられ）、トヴェーリに移った。

これで二人の関係は終わりだが、後日談がある。

祖国戦争からほぼ 1 世紀をへた 1910 年に、皇族で歴史家だったニコライ・ミハイロヴィチ大公が、『アレクサンドルー世と、その妹、大公女エカテリーナ・パーヴロヴナとの往復書簡』²⁹¹を上梓した。

それによると、バグラチオンがボロジノで負傷して、1812 年 9 月 24 日（12 日）深夜 1 時に、ウラジーミル県シマ村で、壊疽と敗血症のために亡くなった、その翌 25 日（13 日）に、エカテリーナは、ヤロスラヴリからペテルブルクのアレクサンドルー世にあてて、つぎのような手紙を書いている。

バグラチオンが昨夜亡くなりました。<...> お兄さまは、私と彼のご存知ですわね。彼が、もし他人の手に渡れば、私の面目が丸つぶれになる文書を持っていたことも、ご存知です。彼は、それらは破棄したと百回も誓いましたが、私は彼の性格を知っているので、ずっと疑ってきました。お兄さまお一人に、この私にとっては限りなく重要で、二人だけの秘密にとどめねばならぬ事柄を申し上げます。私は、それらの文書をお兄さまに封印、保存していただいて、後で私が目を通し、私に関係のあるものを抜き出したいのです。それらの手紙は、サラゴフ公爵（Семен Салагов, 1756-1820. ロシア軍に勤務していたグルジア貴族で陸軍中將）のところにあります。<...>

アレクサンドルー世が、妹への返事書に書いているところによると、彼はさっそくサラゴフに連絡をとり、バグラチオンが残した「厩大な文書」をぜんぶ持ってこさせた。サラゴフは、これらはみな勤務関係の文書だと請合ったが、アレクサンドルは、一人で、何日もかけて、しらみつぶしに調べたというから、事の重大さが知られる。それでも何も出てこなかったが、思いがけず、文書の行方が分かったので、ツァーリは妹にこう報告した。

私は、サラゴフの言うとおりで、ここには何もないと確信しました。そこへちょうど、

²⁹¹ Переписка императора Александра I с сестрой великой княгиней Екатериной Павловной. Там же.

彼の書類を管理していた（バグラチオンの）副官ブレジンスキーがやって来たので、私はあとで自分を責めないで済むように、最後の努力をすることにしました。私は彼に、自分は故人には多くの文書があったことを知っているが、それらがここにはない、と言って、尋問したのです。彼は、自分はぜんぶ封印した、見逃したものはない、と言い張りました。これについて、サラゴフが私にこう言いました。バグラチオンが、モルダヴィア軍に去るに際し、いくつかの書類を焼いていたのを自分は見た、ここにはないものは焼かれたにちがいない、と。<...>もし、焼かれてしまったのなら、もう同じことではありませんか！

バグラチオンは、エカテリーナにもアレクサンドルにも、言いたいことはいろいろあったと思われるが、かつての恋人に不利になるようなことは、ついに誰にも言わずじまいだった……。



ピョートル・イヴァーノヴィチ・バグラチオン
(1765—1812)

George Dawe 画、1820 年代

エルミタージュ美術館（軍事ギャラリー）所蔵²⁹²

クトゥーゾフが総司令官に任命

こうして、第 1、第 2 軍を統括する総司令官の任命が急務となり、8 月 17 日（5 日）に委員会が開かれた。委員は、アラクチャーエフ、コチュベイー、警察大臣アレクサンドル・バラショーフなど、側近中の側近、重鎮中の重鎮で、満場一致でミハイル・イラリオノヴィチ・クトゥーゾフ（1745—1813、当時 66 歳）が選出された²⁹³。はじめ、ベニグセン、バグラチオン、引退していたピョートル・パーレン（パーヴェルー世暗殺の立役者）などが候補に挙げた

²⁹² Gallerix. <http://gallerix.ru/album/Hermitage-4/pic/glrx-216207885>（2015 年 9 月 10 日最終閲覧）

²⁹³ Hopwood により 1813 年に描かれた肖像画がある。

The McGill University Napoleon Collection

<http://web.library.mcgill.ca/napoleon/search/printsdetail.php?doctype=Prints&ID=6410&sitelanguage=english>（2015 年 9 月 10 日最終閲覧）

が決まらず、最後にクトゥーゾフの名が出るや議論は直ちに止んだ、という点で、証言は一致している。

今度こそ自分の出番かと思っていたにちがいないバグラチオンは、この任命に対して不満をぶちまけている。彼は8月28日(16日)に、モスクワ総督のロストプチンにこう書く。

公爵だの首領だのと言われて、けっこうな鷲鳥じゃありませんか！もし彼が、攻勢に出るように特別に命令を受けていないんだったら、私は請合ってもいいですが、彼もバルクライ同様に、ナポレオンをあなたのところにご案内申し上げますでしょう…。今やわれらが首領さまのところでは、女の腐ったような誹謗中傷と陰謀がはびこることでしょうな。²⁹⁴

クトゥーゾフは、8月23日(11日)にペテルブルクを立ち、最初の宿駅で、スモレンスク陥落を知って、「モスクワの鍵を奪われた」とつぶやいたという²⁹⁵。

8月28日(16日)にグジャーツク(Гжатск〈現スモレンスク州のガガーリン市〉)に着いたクトゥーゾフは、翌8月29日(17日)に、ロストプチンに書き送っている。

まだ陸軍大臣(*バルクライのこと——佐藤)に会っておらず、軍の兵力、装備、備品などの状態がよく分からないので、今後の軍の行動については、まだなんら肯定的なことを申し上げることができません。次の問題もまだ決まっていません。すなわち、軍を失うべきか、モスクワを失うべきか。私の考えでは、モスクワを失うことは、全ロシアの喪失につながります。²⁹⁶

おどろくべき発言だが、しかし、考えてみれば当然だ。スモレンスクで止められなかった敵軍はモスクワでもたぶん止められないだろう。しかし、戦わずにモスクワを明け渡すわけにもいくまい。世論が許すまいし、第一将兵が納得せず、士気がた落ちとなり、軍が自壊するおそれがある…。

これはクトゥーゾフならずとも考えるところだ。

しかし、問題はそのさきだ。一步進んで考えると、結局のところ、かりに一戦交えたとしても、スモレンスクでそうであったように、結局はモスクワを明け渡すことになる公算が大である。となると、当然、それを焼かなければならない。それがどれほどの犠牲であれ、焼

²⁹⁴ Троицкий Н.А. "1812 великий год России. Новый взгляд на Отечественную войну 1812 года". М.: Омега, 2007. С.241.

「女の腐ったような誹謗中傷と陰謀がはびこることでしょうな」というのは、クトゥーゾフの陰謀家としての側面をあてこすっている。

²⁹⁵ Михайловский-Данилевский А.И. «Описание Отечественной войны в 1812 году. Часть 2», 1839. С.197.

²⁹⁶ Михайловский-Данилевский А.И. Там же. С.199.

Богданович М.И. История Отечественной войны 1812 года: Том II. СПб, 1859. С.232.

かねば戦略的に意味をなさない。だれが、どういう方法で、それをやるか。また、モスクワ放棄後どこへ撤退するか――。

クトゥーゾフとその周辺、そして宮廷の中枢でも、こういうことが議論されていなかったはずはないと思うのだが、どうだろうか。モスクワ放棄とカルーガ街道への撤退は、通説となっているように、ほんとうにクトゥーゾフひとりの、そしてボロジノの会戦後の決定であったか？... 実際の経過を順次みていこう。そのなかで答えはおのずと現れよう。

クトゥーゾフは同 8 月 29 日（17 日）、ツァリョーヴォ・ザイミシチェ（Царево-Займище）に到着し、軍に合流する。最初の閲兵で、「こんな勇者ぞろいで、退却ばかりとはな」と言いながらも、退却継続を命じた。そして、8 月 31 日（19 日）に、ツァーリあてに軍の疲弊した現状を報告し、増援を請う一方で、急迫してくる仏軍を迎え撃てるような、布陣に適した場所を探させた。

まもなく適当な場所が見つかったとの報告があり、クトゥーゾフはそこへ 9 月 3 日（8 月 22 日）に出向いた。その村の名はボロジノ。

第4章 ボロジノの会戦

ボロジノの会戦で露軍は異常なまでに奮戦したが、この会戦にはわからないことがたくさんある。たとえば、露軍の陣地は、じっさいのところ、どのくらい堅固で妥当なものだったか？ 比較的平坦な土地での布陣としては理想的という意見から（たとえば、ナイジェル・ニコルソン）、ベニグセン参謀総長やトルストイのように、ほとんど無防備にひとしいという全否定までいろいろある。ソ連時代の史家はおおむね肯定的な評価をしているが、エルモーロフ将軍やバグラチオンは批判的だった。

両軍の兵力にかんしても、仏軍は、約 12 万-13 万でだいたい見解が一致しているのに、露軍のほうは、約 12 万から 16 万までとかなり差がある。

両軍の損失（死傷者）についても、研究者によって大差がある。ちなみに、負傷者も、医療サービスが劣悪なために感染症などで死んだり、置き去りにされたりして、死亡率がきわめて高かったことを考慮しなければならない。

仏軍の損失は、仏国防省の資料をはじめとして（戦死 6567、負傷 21519 で、計 28086）、西側の研究者の挙げる数字では、だいたい 2-3 万なのだが、ロシアの研究者の「意見」では、3 万弱から約 6 万までと幅ひろい。露軍の損失についても、似たような状況で、4 万弱から約 6 万までいろいろある²⁹⁷。

こういう基本的な数字は、軍の名簿や死傷者のリストなどで、じつはそれなりに残っており、あるていど確定できる。それがこんなにバラつくのは、故意の粉飾、歪曲がなされているからだと思われる。要するに、「大本営発表」で、自軍の兵力と損害をできるだけ少なくみせかけ、敵に与えた損失は大きくみせるということだ。

そして、ニコライ・トロイツキーが指摘しているように、「大本営発表」の傾向は、帝政時代よりソ連時代のほうがはなはだしい。

ちなみに大砲の数は、露軍の 640 門に対し、仏軍は 587 門と、露軍がやや優勢。しかも、露軍の砲の性能は、あとで述べるように、アラクチャーエフらの努力で改良が間に合い、従来型よりも口径が拡大された一方、軽量化されており、仏軍のものより性能がすぐれていた。

かりに露軍が 16 万で仏軍が 12 万だったとすると、どうなるか？... 会戦のあとで、両軍の損失も含めて、さまざまな説を併記しくわしく比較考量するときにあらためて述べるが、じつはこの数字が正しいのだ。

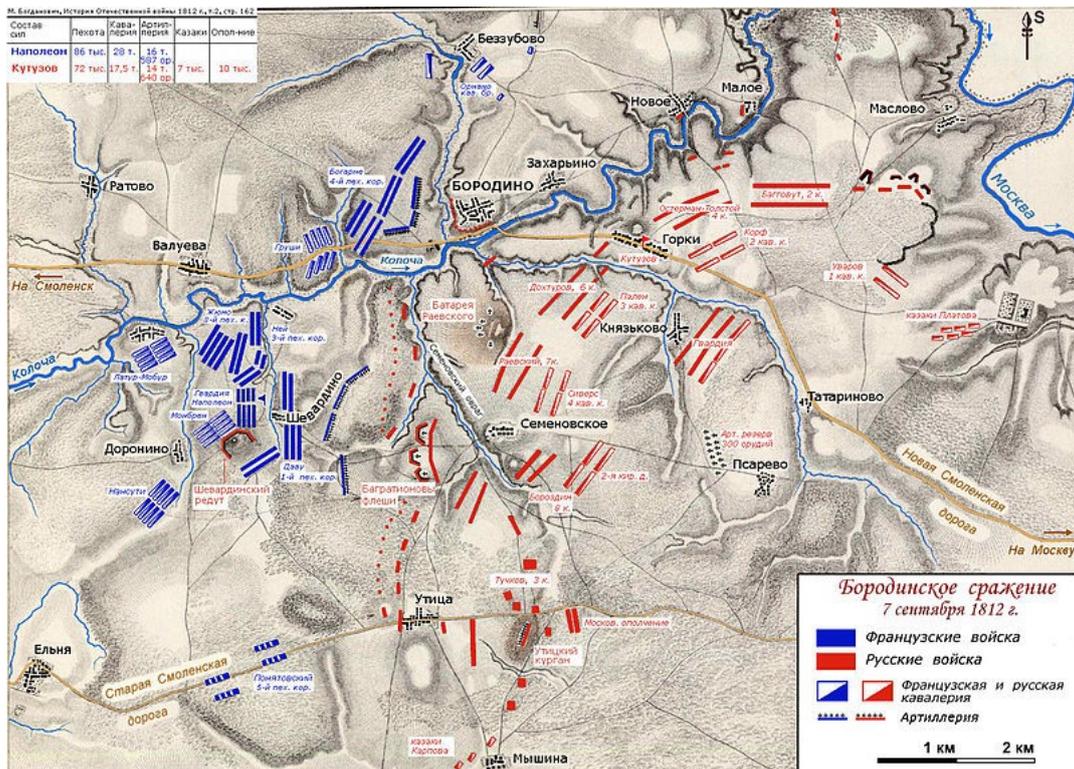
仏軍が最後まで予備の古参近衛軍を使わなかった点を考慮すれば、16 万（露）対 10 万（仏）の戦いだった。砲兵部隊も露軍が優勢。それで、仏軍の損失が 3 万弱で、露軍が 6 万におよぶとすれば、会戦の評価はどうなるだろう？...

²⁹⁷ Троицкий Н.А. Там же. С.289-291.

基本的な数字でさえこれだから、主観の入りやすい、戦略、作戦の評価となると、なおさら十人十色といったところである。

以下、両軍の布陣、作戦、そして、戦闘の経過と、順次みていこう。ボロジノの会戦については、概してニコライ・トロイツキーの優れた研究に負うところが大きい²⁹⁸。

布陣



地図1 ボロジノの会戦。地形と両軍の配置（赤が露軍、青が仏軍）。図の左から右上に蛇行しているコロチャ（コロチ）川の位置に注意されたい。²⁹⁹

ワートルローの会戦（1815）でナポレオンに勝ったウェリントン公（アーサー・ウェルズリー）は、「ナポレオンが戦場にすがたを現すだけで、兵士4万に匹敵する」（I used to say of

²⁹⁸ Там же. С.249–302.

²⁹⁹ Plate 75 from Atlas to Alison's History of Europe by Alison & Johnston Battle of Borodino, 7 September 1812 (Original in 1850. Modified by Vissarion in 2007) <http://www.maproom.org/00/13/present.php?m=0075> (2015年9月10日最終閲覧)

以下の地図も参照。

・ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ. С.258-259.

・ 電子図書館「ルニバース」の地図セクション

http://www.runivers.ru/mp/maps-detail.php?ID=469659&SECTION_ID=7819 (2015年9月10日最終閲覧)

him that his presence on the field made the difference of forty thousand men.) と言った³⁰⁰。一方、クトゥーフは、総司令官に任命されてサンクトペテルブルクを出立したとき、彼を見送った甥にこう尋ねられたという。「叔父上、まさかほんとうにナポレオンをやっつけられると思っただけでは？」。クトゥーフはこう答えた。「やっつける？ そりゃ無理だと思うが、騙すことはできるんじゃないかな」«Разбить? Нет, не надеюсь разбить! А обмануть — надеюсь!»³⁰¹

この見通しは正しく、騙すことはできたものの、正面から戦いを挑んで勝つことはついにできなかったのである。ナポレオンへの畏怖の念は、この二人にしてこれほどだったということだ。

しかも、この世界最強、史上最強の軍隊を露軍は、平地で迎え撃たなければならなかった。スモレンスクからモスクワまでは平坦な土地がほとんどなので、たとえば、山間の隘路を進んでくる敵を高地から迎撃するというようなわけにはいかず、したがって、ポロジノでの布陣はいずれにせよ苦渋の選択だったことをまず頭に入れておく必要がある。

さらに、前に述べたように、退却する露軍の後衛は、仏軍の前衛にほとんど毎日攻撃されていたので、じっくり場所を選び、堅固な陣地、堡壘を造る余裕もなかった。

地図 1 をみてのとおり、露軍の右翼は、コロチャ川の溪谷を前に布陣していた。右翼は、新旧二本のスモレンスク街道（いずれもモスクワに至る）のうちの新道をおさえている。新道のほうがモスクワにちかく、モスクワへの最短路なので、突破されたら事だが、しかし、右翼は、コロチャ川の切り立った岸辺で正面と右側面を守られており、その高台に布陣しているので、防御しやすい。川岸は高さ 20 メートル以上ある（写真を参照）。

露軍の 66 歳の総司令官クトゥーフは、ほぼ終日、右翼のゴールキ村に腰をすえていた。ここからは戦場を直接目にはできなかったが、彼は動かなかった。

このように、右翼は比較的守りが堅い一方で、左翼（バグラチオン指揮する第 2 軍）は、旧道沿いにウチーツアの森があるものの、正面はがら空きで、2 つの堡壘だけが頼りだ。セミョーフスコエ村の突角堡（フレッシュ）と大角面堡壘（ラエーフスキー堡壘）である³⁰²。

³⁰⁰ Philip Henry Stanhope “Notes of Conversation with the Duke of Wellington”, 1831-1851 (1886, reprinted 1998).

³⁰¹ Тарле Е. В. Сочинения в 12 томах. М.: Издательство Академии наук СССР, 1957—1962. Т.7. С.558.

³⁰² **大角面堡壘**は、天然の丘陵のまわりに堀をめぐらし、土壁で囲い、砲 18 門を備えていた。仏軍の陣地に向いていた西側は、かなりの急傾斜になっているので、守りは固く、砲撃に適していたが、東側は開口部で、そこから砲車や兵馬が入れるようになっていた。傾斜もゆるいので、敵にこちに回り込まれると弱い。実際、オーギュスト・コランクール将軍がここから突入して陥落させることになる。ラエーフスキー中将の第 7 歩兵軍団の指揮下にあったので、**ラエーフスキー堡壘**とも呼ばれた。

シェワールジノの堡壘は、すでに 24 日に、激戦のすえ仏軍に奪われていた。にもかかわらず、露軍の兵力は、開戦まで左翼のほうが手薄だったのである。

戦前に、バルクライは、ナポレオンは左翼を集中的に攻撃してくるとみて、もっと左翼の兵力を増やすよう進言したが、クトゥーゾフは拒んだ。なぜだろう？... はたせるかな、左翼が主戦場となり、露軍は、砲火の下での移動をよぎなくされた。



コロチャ川の切り立った岸部。クトゥーゾフが終日腰をすえていたゴールキ村近く。³⁰³

一方の仏軍は、露軍の布陣からして当然だが、右翼が厚く、露軍の手薄な左翼を突く構えだ。ナポレオン自身も、奪取したシェワールジノの堡壘近くの高台に本陣を置いており、クトゥーゾフとはちがって、そこから戦場全体を見晴らすことができた。精鋭中の精鋭、ダヴー、ネイ、ミュラーの各軍団も右翼に位置していた。左翼は、イタリア副王ウージェーヌの軍団が中心だ。

布陣にかんするトルストイ説

両軍の布陣について語ろうとすると、どうしてもここでトルストイの説を紹介しないわけにはいかない。彼は、地図 2（彼が丸一日、現地を歩き回って調査して作ったもの）のように、もともと露軍はコロチャ川に沿って布陣するつもりだったと推測する。これなら、左翼も、川にくわえて 3 つの砲台で守られ、防御力はぐんとます。左翼の端にシェワールジノ堡壘、

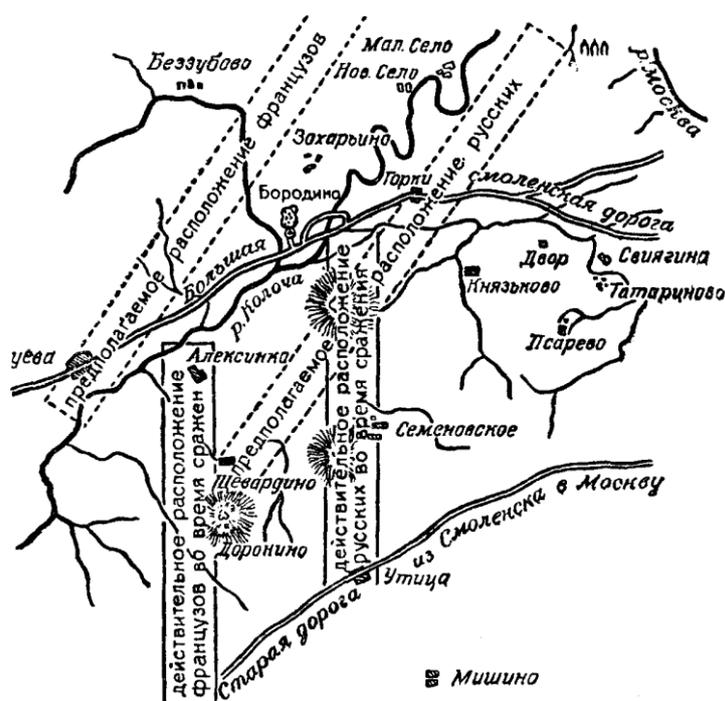
突角堡（フレッシュ）の名は、仏語のfleche=矢から来ている。くさび形の、鋭角に曲がった陣地（銃眼つきの砲座）で、ボロジノでは3つ築かれ、2つが前方、1つが後方を守りつつ、相互に掩護しあった。いずれについても、この節の写真を参照されたい。

³⁰³ この写真は帝政時代の絵葉書である。

http://igor-grek.com/publ/hronos/1812_borodino/8-1-0-879 (2015年9月10日最終閲覧)

全軍の中央に大角面堡壘（ラエーフスキー堡壘）、さらに、この二つの堡壘の真ん中の少し下がったところにセミョーフスコエ村の突角堡（フレッシュ）という位置関係になる。

ところが、相手の陣形をいち早くみてとったナポレオンは、さっき書いたように、9月5日（8月24日）にシェワールジノ堡壘に猛攻撃をかけ、何度もとったりとられたりしたあげく、陥落させてしまった。その結果、露軍の左翼全体が後退し、仏軍は川を越えて布陣することができた。これで仏軍は、二つの堡壘以外の遮蔽物なしに露軍を攻撃できる態勢となった。露軍は集中砲火をいのように浴びせられて、壊走は時間の問題、という条件で、会戦ははじまった——。こう作家は言うのである。こと布陣にかんするかぎり、彼の意見は正しいと思う。



地図 2 トルストイが作った地図 (11, 188)

予定の陣地（破線）と実際の陣地（実線）が記されている。

コロチャ川と3つの堡壘、および新旧2本のスモレンスク街道の位置関係に注意されたい。

作戦は無手勝流？

両軍はそれぞれ相手の兵力をどう見積もっていたのだろうか？ 正確に見積もらなければ適切な作戦は立てられないわけだが、この点、両軍とも誤っている。クトゥーゾフは、斥候の報告と捕虜の尋問から、16万5千という数字を得たが、「実数よりやや多いかもしれない」と言っている。一方、ナポレオンは、強気でプラス思考の彼らしく、12-13万と実際より低くみている³⁰⁴。

だから、クトゥーゾフの頭のなかにあった数字は、露軍16万対仏軍14-15万といったと

³⁰⁴ Троицкий Н.А. Там же. С.258-259.

ころだったと思われる。互角以上なのに、クトゥーゾフには、とくに作戦らしい作戦というものはなく、相手の動きにしたがって、部隊を動かしたり、援軍を出したりするだけで、防御一辺倒だった。しかも、その防御も、さっき書いたように問題があった。ラエーフスキー将軍が、「まるでだれも指揮していないようなものだった」³⁰⁵とこきおろしたのも、理解できなくはない。

こういうクトゥーゾフの「指揮」をどう考えるか？ おそらく彼は、露軍の崩壊を防ぎ、退路を確保するという最小限の目標を優先したのかもしれない。モスクワへの最短路であるスモレンスク街道の新道を敵に迂回されれば、露軍は、モスクワと南部の補給地から遮断され、壊滅していただろうから。この司令官の判断が正しかったかどうかは、会戦そのものの経過と結果であきらかになるだろう。

ナポレオンの作戦

ナポレオンの作戦は、露軍の弱い左翼を集中攻撃して、二つの堡塁を落とし、左翼と中央を突破し崩壊させること。そうなれば、露軍は、コロチャ川とモスクワ川の合流する断崖に袋のネズミとなるか、新道を潰走することになるろう。

で、ナポレオンは、会戦を控えた深夜の 2 時から夜明けまで、自軍の大部隊をこっそりと露軍の左翼間近に移動させた。これは仏軍の資料だけでなく、革命前の露側の資料とクラウゼヴィッツの証言からも裏付けられるのだが、ソ連時代および現代のロシアの研究者のほとんどが黙殺している。この移動で、シェワールジノ堡塁を奪われて弱くなった露軍左翼は、ますます苦しい戦いをよぎなくされることになった。

さらにダヴー元帥は会戦前夜、兵 4 万でウチーツァ側から迂回し、露軍左翼を背面から突くことを提案した。ナポレオンは「すばらしい！」と感心しながらも、ちょっと考えて、この献策を退けた。「クトゥーゾフがびっくりして」、また逃げてしまうのでは、という理由で。その結果、仏軍は、露軍左翼を正面から集中攻撃することになった³⁰⁶。

ナポレオンのこの判断が正しかったかどうかは議論の余地がある。露軍の将兵には逃げる気などさらさらなく、すさまじい消耗戦になってしまったからだ。さすがのナポレオンも、露軍の士気の高さは予想外だった。おそらくはクトゥーゾフ自身さえも…。

開戦、突角堡をめぐる戦い

9月7日（8月26日）早朝³⁰⁷、ナポレオンは敵の意表をついて、露軍の右翼を攻撃した。ウ

³⁰⁵ «1812-1814: Реяции. Письма. Дневники» / Ред. Афанасьев А.К., Быстрова Н.Б., Зубова Н.Л. и др. М.: Терра, 1992. С.218.

Троицкий Н.А. Там же. С.301.

³⁰⁶ Троицкий Н.А. Там же. С.263–264.

³⁰⁷ 正確な時刻は、露側でも仏側でも、資料により異なるため分からない。4時から7時まで、いくつもの説があるが、いちばん多いのは5時と6時だ。

ージェーヌ軍団の部隊が、ボロジノ村とコロチャ川の橋を占領し、さらに一時、ここから数百メートルの大角面堡まで奪ったが、すぐに奪回され、川向こうに押し返された。

すなわち、9時か10時ころに、ウージェーヌ麾下のボナミ将軍が堡塁に侵入したのだが、露軍のエルモーロフ少将、クタイソフ少将や、バルクライがいち早く派遣した部隊などが、堡塁を奪い返し、ボナミを捕虜にした。クタイソフはここで戦死した³⁰⁸。彼は弱冠28歳だったが、ロシア砲兵隊の総司令官で、きわめて優秀な人物だった。彼を失ったことで、砲兵隊の組織的、効果的な運用という面で、すくなからぬ支障が生じた。

ウージェーヌは、ボロジノ村の高地に38門の大砲を据えて、露軍の左翼での戦況をにらみつつ、午前中いっぱい露軍の中央に砲火を浴びせつづける。



突角堡（Багратионовы флеши）の跡³⁰⁹

³⁰⁸ Троицкий Н.А. Там же. С.280.

³⁰⁹ ナジェージダ・ババーエワ（筆者の妻）が、2012年6月24日に撮影。

以下の写真も参照（2015年9月10日最終閲覧）。

・ "homeland-weekend.ru/" : Экскурсии Бородино (<http://homeland-weekend.ru/docs/c-f-e/>)
・ "PRO ГОРОД" (<http://pg21.ru/node/56033>)

これとほぼ同時に、ダヴー、ネイ、ミュラーらの部隊が、入れかわり立ちかわり、あるいはいっしょに露軍左翼の突角堡に攻撃をかける。堡壘を守っていたのは、ミハイル・セミョーノヴィッチ・ヴォロンツォーフ少将（のち元帥、1782－1856）の師団とそれを支援するネヴェロフスキーの師団だ。

前者は、われわれにはおなじみのアレクサンドル・ヴォロンツォーフの弟セミョーンの息子だ。トルストイ『ハジ・ムラート』には「狐のような顔をした」狡猾な廷臣としてでてくる。1844－1854年に、カフカス総司令官兼総督を務めた。後者は、前に述べたように、スモレンスクで奮戦し、露軍全軍が帰ってくるまで時間を稼いだ。

まず、前々日の9月5日（8月24日）にシェワールジノ堡壘を落としたコンパン将軍（ダヴー軍団）が攻撃したが負傷し、この知らせを聞いてナポレオンが送り出したジャン・ラップ将軍も負傷する（通算22回目）。こんどはダヴーみずからが攻撃するも、脳挫傷を受けて落馬する。最初、「死亡」の誤報がナポレオンに伝えられた。

このあたりで仏軍は、今までとは勝手がちがうと実感したはずだ。

しかし、仏軍にチャンスがおとずれる。さっき書いたように、ウージェーヌ軍団は一時、大角面堡を奪い、突角堡に砲火を浴びせる。ポニャトフスキー軍団も、ウチーツァ村付近で、ツチコフの部隊を攻撃し、露軍左翼を迂回しようとする。ナポレオンは、突角堡への砲撃を強化したうえで、ダヴーとネイの軍団に正面攻撃を命じる一方、ジュノーの2師団に、突角堡とウチーツァのあいだをぬけて、バグラチオンを側面から突くことを命令する。コランクールの回想録によると、「午前7時、かつて耳にしたことのない砲撃音と射撃音が轟き渡った」という。ところが、ジュノーはウチーツァちかくで、思いがけず、カルル・バゴヴァート中将の部隊（歩兵連隊）と遭遇し、撃退されてしまった。バルクライがあらかじめ右翼からここへ移動させておいたのである。ポニャトフスキーもツチコフに食い止められた。ポニャトフスキーは、結局、ウチーツァは占領したものの、それ以上進出できずに終わった³¹⁰。

ナポレオンは、全587門の大砲のうちの400門をここに集中した。集中砲火に援護されて、ダヴーとネイの軍団が突撃する。

これを見たバグラチオンは、左翼全軍（2万人）に突撃を命じる。左翼全体がいっせいに動き出した光景を、のちのデカブリストで会戦に参加したフォードル・グリーンカが、驚異と感動をこめて回想している³¹¹。

元帥たちの意図を見抜き、仏軍の恐るべき動きを目の当たりにしたバグラチオン公は、

³¹⁰ Троицкий Н.А. Там же. С.267-268.

³¹¹ «Очерки Бородинского сражения: воспоминания о 1812 году». Ч.8 // «1812 год в русской поэзии и воспоминаниях современников». М.: Правда, 1987. С.371.

大いなる行動を企てた。命令は下され、わが軍の全左翼が動き出し、早足で突撃した！両軍が激突！... この乱戦、肉弾戦、絶え間なき響きを、数万の人々の生涯最後となったこの戦いを描きうる言葉は私にはない。

Постигнув намерение маршалов и видя грозное движение французских сил, князь Багратион замыслил великое дело. Приказания отданы, и все левое крыло наше во всей длине своей двинулось с места и пошло скорым шагом в штыки! Сошлись!.. У нас нет языка, чтоб описать эту свалку, этот сшиб, этот протяжный треск, это последнее борение тысячей!

露側の証言によると、仏軍は、露軍の猛烈な射撃に応射もせず、まっしぐらに突撃した。さすがのバグラチオンも感嘆し、「ブラヴォー」と叫んだが、その瞬間、砲弾の破片が左足のすねを砕いた。はじめ彼は、負傷を隠して指揮をつづけようとしたが、出血で意識もうろうとなり、前線から運び出された。露軍は大いに動揺、落胆した（複数の証言）。

バグラチオンは、医師団が足の切断をすすめるのを拒み、18日後の9月25日に壊疽で死んだ。

仏軍は、突角堡を何度もとったりとりかえされたりした挙句、ついに占領する。あまりの乱戦であったため、その時刻ははっきりしない。12時ごろにバグラチオンが負傷し、堡壘を奪われたという説もあれば、9時前に負傷し、10時ころにとられた、というもある。ちなみに、突角堡を守っていたヴォロンツォーフ少将の師団4千人のうち、会戦後に残ったのは300人以下だった³¹²。

露軍に危機がおとずれた。

露軍の左翼は、まだ崩壊していないが、突角堡を失い、残る堡壘は大角面堡のみ。これを失うと、露軍の左翼と中央は、まったく遮蔽物のない、むき出しの状態になり、左翼と中央が崩壊する可能性が高まる。そうなれば、露軍全軍は、断崖に追い込められるか、モスクワに壊走し、軍の消滅という最悪の事態になりかねない...

仏軍右翼のかく乱で、大角面堡への総攻撃が遅れる

ここでクトゥーゾフは、側近中の側近トリー大佐の進言にしたがい、仏軍をかく乱する手に出る。ウヴァーロフ将軍（第一騎兵軍団司令官）に騎兵2500人とコサック2000人、計4500騎を率いさせて、コロチャ川の浅瀬をひそかに渡らせ、仏軍左翼（ウージェーヌ軍団）を迂回して攻撃させた。クラウゼヴィッツは、この作戦の経緯についてくわしく回想している。

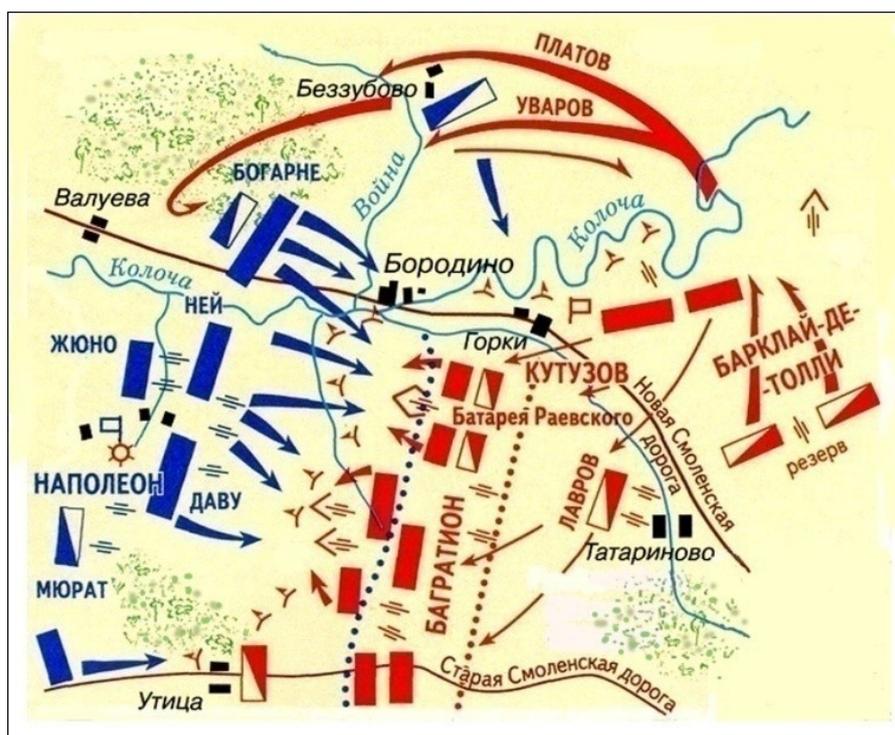
この作戦で仏軍はたしかに虚をつかれ、ナポレオン自身も、背後に回られることを警戒して、わざわざ様子を見にやってきた。もともと仏軍は、この攻撃では直接の損失はほとんど受けなかった。ウヴァーロフ隊は騎兵隊だけで、歩兵はなく、大砲は12門のみだったので、

³¹² Троицкий Н.А. Там же. С.267, 270.

はじめから大した戦果は望めなかった。これはクトゥーゾフも織り込みずみだったろう。ただし、この攻撃のために、仏軍の大角面堡への大攻勢は、2 時間ほど遅れ、14 時頃からになった。結果的に、露軍はあるていど仏軍をかく乱し、貴重な時間を稼ぐことができた。

その間に、崩れかけていた露軍の左翼の指揮は、一時ピョートル・コノヴニツィンが代わり、さらにドフトウロフが引き継いだ。バルクライは、オステルマン=トルストイの部隊を右翼から左翼に移し、クトゥーゾフも予備軍から部隊を派遣した。露軍は奮闘し、セミョーノフスコエ村を放棄して 1 キロほど後退したところで、なんとか陣容を整えなおし、一時仏軍を押しもどした³¹³。コランクールによると、とくに大角面堡からの砲撃、銃撃はすさまじく、「大堡壘からの攻撃で、わが中央はさながら地獄絵図であった」という³¹⁴。

ウヴァーロフの攻撃に対する評価は、「戦局を一変させた英断」から「仏軍の不意をつき、時間を稼いだ」までいろいろあるが（概して、ソ連時代の史家は評価が高い）、あるていどの成功を収めたという点では、意見は一致している。



地図3 ウヴァーロフ将軍とコサック部隊（プラートフ軍団）のかく乱³¹⁵
図の一番上の赤い矢印が、同部隊の動きを示す。

³¹³ コレンクール、前掲書、77 頁。

Троицкий Н.А. Там же. С.269-270.

³¹⁴ 前掲書、77 頁。

³¹⁵ 200 лет Отечественной войне 1812 года : «Гроза двенадцатого года»: размышления по поводу юбилея // Журнал "Санкт-Петербургский университет", №16 (3858) 28 декабря 2012.

<http://journal.spbu.ru/?cat=219> (2015 年 9 月 10 日最終閲覧)

にもかかわらず、おもしろいのは、クトゥーゾフ自身は、この攻撃に不満だったらしいことだ。ウヴァーロフが帰ってくると、冷淡に迎え、「私はぜんぶ知っているよ。神が君をお許しくださるだろう」と言ったという。会戦後、クトゥーゾフは、ウヴァーロフとプラートフにかんしてのみは、勲章、褒賞の申請をしなかった（プラートフ将軍はコサック軍団の総帥である）。アレクサンドル一世から理由を聞かれると、「この二人は褒章に値しません」と答えた³¹⁶。

クラウゼヴィッツによると、要するに、ウヴァーロフは、ウージェーヌ軍団との物量差に圧倒されて、及び腰の「攻撃」に終わり、一方的に反撃、追撃されて逃げ帰ってきた。しかし、もともと四つに組める戦力がなかったのだから、作戦そのものに問題があったと言うのだが、クトゥーゾフの考えはちがったようだ。

彼は、ウヴァーロフが決死隊になることを期待したのではないだろうか。あの戦況ではどっちにしろ、あれ以上の戦力をウヴァーロフに割くことはできない。会戦の帰趨は、そしてロシアの運命は、大角面堡をどれだけもちこたえさせるかにかかっている。この堡壘が「運命の角面堡壘」と呼ばれたのは故なきことではない。1805年のシェングラーベンでのバグラチオンのように、全滅の覚悟で1時間でもよけいに仏軍をかき回してくれれば、と期待した。ウヴァーロフも当然自分の意を汲んでくれた、とクトゥーゾフは思っていたのではないだろうか。

このエピソードは、クトゥーゾフの指揮についても考えさせる。彼の指揮はけっしてゼロではなかった。相手次第の成り行きまかせで、いくつかの判断にまちがいはあったが、戦況は深く洞察しており、自分の力のおよぶかぎり有利に導こうとしていたのはたしかだと思われる。

大角面堡壘が陥落、露軍は最大の危機をむかえる

大角面堡壘への仏軍の総攻撃は14時ころにはじまる。ちなみに、『戦争と平和』のボロジノの会戦の場面で、ピエールが終日いたのがここだった。

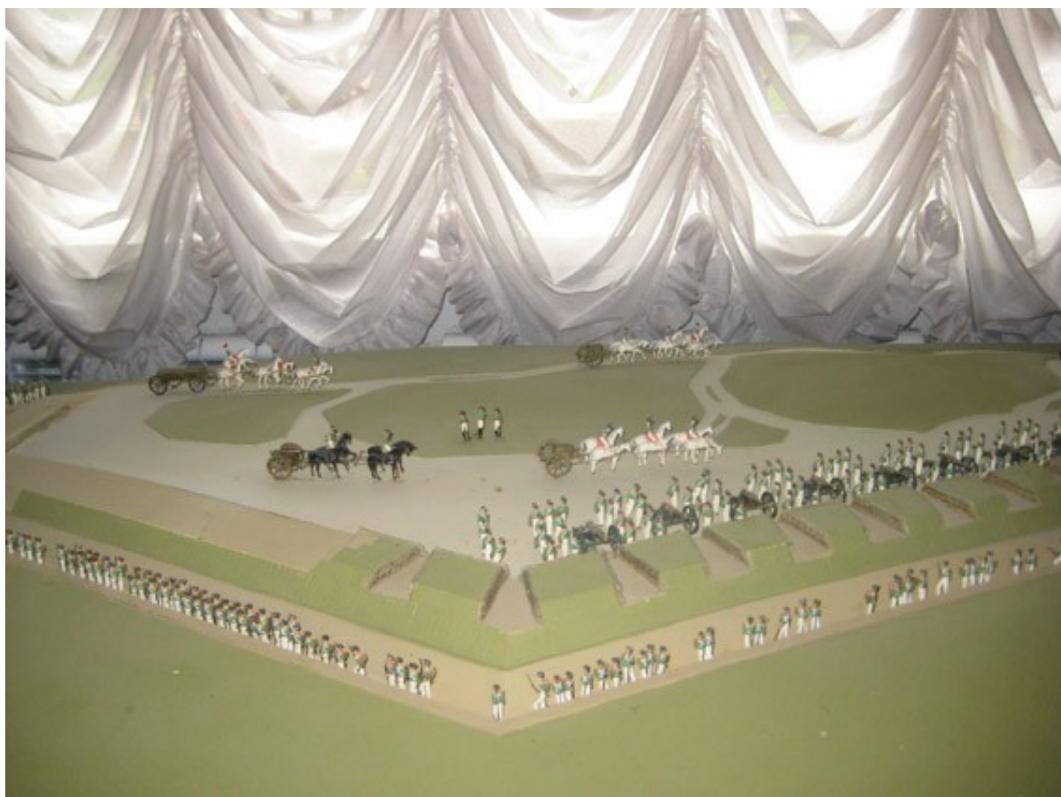
ナポレオンは堡壘に、正面とボロジノ村、セミョーフスコエ村の3方向から、砲200門で集中砲火を浴びせる。砲火の援護のもと、堡壘の正面からウージェーヌ軍団が攻撃する。一方、コランクールの弟、オーギュスト・コランクール将軍率いる胸甲騎兵隊が、はじめ堡壘の右側を走りぬけるとみせて、いきなり方向転換し、堡壘のうしろの開口部から突入した。

堡壘の守備隊は、銃剣、銃床、短剣、砲身の火かき棒、梃子などで戦い、全滅した。守備隊を指揮していたリハチョフ将軍は負傷して、捕虜となった（仏軍は、服装から将軍だとみてとって、殺さずに銃床でなぐり、捕虜にした。この日、露軍の将官で捕虜になったのは彼

³¹⁶ Троицкий Н.А. Там же. С.278.

だけである)。一方、コランクール将軍も、銃弾を胸に受けて戦死した³¹⁷。

15 時ころ、ついに大角面堡は陥落した。露軍は最大の危機をむかえた。



大角面堡（Батарея Раевского）の模型³¹⁸

³¹⁷ オーギュスト・コランクール将軍と仏第 5 胸甲騎兵連隊が大角面堡を奪ったことはほぼ通説となっており、戦闘後に出された大陸軍公報やコランクール、セギュールの回想録などの史料によっても裏付けられているが、公報は、政治的な文章であり、ナポレオンもコランクールもセギュールも、大角面堡の近くにいたわけではない。ここから、彼らがいたシェワールジノの本陣までは、3 キロ以上あり、硝煙を通して直接目撃できたかどうかは疑問だ。

ザクセン騎兵による大角面堡奪取説もある。こちらの強みは、実際に突撃に参加した士官たちが証言を残していることだ (Digby Smith "Borodino". The Windrush press, 1998. P.124)。

ロシアのモデスト・ボグダノーヴィチもおなじ説である。

「ティールマン将軍とザクセン近衛騎兵連隊は掘割と塁壁を越えて大角面堡内へ突入した。ロシア軍歩兵は必死で防戦した。守備隊の指揮官だったリハチョフ将軍は、大角面堡内の隅に椅子に座っていた。彼は病気で弱っていたが、意気軒昂だった」(Богданович М.И. История Отечественной войны 1812 года, по достоверным источникам. Том 2, 1859. С.210—212)。

「大陸軍：その虚像と実像」も参照されたい。

http://www.asahi-net.or.jp/~uq9h-mzgc/g_armee/raevski.html (2015 年 9 月 10 日最終閲覧)

³¹⁸ 鉄道のパロジノ駅に、パロジノの会戦関連の博物館があり、大角面堡（Батарея Раевского）の模型も展示されている。写真は同博物館のサイトより転載。

<http://www.borodino.ru/index.php?page=content&DocID=106> (2015 年 9 月 10 日最終閲覧)



現在の大角面堡跡³¹⁹

不退転の露軍：大会戦 終わる

露軍が大角面堡から 800 メートルほど後退すると、仏騎兵隊が殺到してくる。だがバルクライは、みずから露軍の隊列をととのえ、また自分の騎兵隊をここへ移動させて、仏軍を食い止めた。

露軍の将帥のなかでも、バルクライの奮闘と功績はとくに目立つ。終日、戦場を駆け回り、的確な指示を出し、みずから最前線で部隊を指揮し、戦った。彼の乗馬は 5 頭まで敵弾に倒れ、傍らにあった副官 12 人のうち 9 人が死んだ。

何人かの同時代人や論者が言うように、退却つづきで汚名を着せられた彼は、「死地をもとめていた」印象を受けるが、彼はここで死ぬ運命になかった。

17 時ころ、露軍は、厩大な損害をこうむり、二つの堡壘を失い、ボロジノからウチーツァまでの前線から数百メートル後退したものの、なお反撃のかまえて、左翼から中央までの隊列は乱れていなかった。右翼は、地形によって堅固に守られている。

³¹⁹ ナジェージダ・ババーエワ（筆者の妻）が、2012年6月24日に撮影。

はじめに書いたように、仏軍の損害もいちじるしく、露軍におとらず消耗、疲労しており、勝敗がはっきりしないまま日が暮れようとしていた。

会戦後のクトゥーゾフの心中

会戦後の夜、クトゥーゾフは、右翼と左翼の司令官、バルクライとドフトゥロフにつぎのように書き送る。

敵のあらゆる動きをみると、敵がこの会戦でわが軍におとらず弱体化していることはあきらかである。したがって、今夜、全軍をととのえ、砲兵隊には弾薬を補充し、明日、戦いを再開することを決断した。

露軍は、この知らせを聞いて「大いによろこんだ」

多くの論者が推測しているように、クトゥーゾフが自分の書いたことを信じていたとは思えない。自軍の大損害と疲弊ぶりについて彼は絶えずくわしい報告を受けていたし、仏軍は最強の予備軍（約2万の古参近衛軍）を温存していたのだから。

アレクサンドルー世への報告書に彼はこう書いている。

こうして、わが軍は、ほぼすべての持ち場を守り、その場に踏みとどまりました。

しかし、私は、これほどの激戦のあとで各部隊が大損害を被り、混乱に陥っているのを見て、また敵の兵力の優勢に鑑み、軍をまとめるために、モジャイスク付近の高地に退却させました。³²⁰

Таким образом, войски наши, удержав почти все свои места, оставались на оных.

Я, заметя большую убыль и расстройство в баталионах после столь кровопролитного сражения и превосходства сил неприятеля, для соединения армии оттянул войски на высоту, близ Можайска лежащую.

クトゥーゾフは、明日戦うことなどできないのを承知のうえで、士気を維持し高めるために、攻撃再開の触れを出した、という大方の見方が正しいだろう。いずれにせよ、これから退却せざるをえず、大增援を受けないかぎり戦えないが、しかし退却すれば、将兵は、またか！ボロジノでなんのために血を流したのか、と落胆するにちがいない。その気持ちの崩れをすこしでも食い止めたかったのだろう。

両軍の戦前の兵力と損失は？

まず、戦前の露軍の兵力だが、ニコライ・トロイツキーが各部隊の名簿などにもとづき計

³²⁰ ДОНЕСЕНИЕ М. И. КУТУЗОВА АЛЕКСАНДРУ I О СРАЖЕНИИ ПРИ БОРОДИНЕ // Кутузов М. И. Сборник документов. М., 1954-1955, т. 4, ч. 1-2.

算したところ、コサックと義勇兵をのぞいた正規軍は、第1軍が75541人、第2軍が39761人で、計115302人。これにコサック11000人と義勇兵28500人をくわえて、154800人。

一方、仏軍の兵力は、だいたいどの論者も12-13万という数字だ。各部隊の員数も示しているシャンプレによれば、133819人だということから、このあたりでまちがいあるまい。

大砲の数は、露軍の640門に対し、仏軍は587門と、露軍がやや優勢で、性能もすぐれていたことは前に述べた。

さて、両軍の損失だが、仏軍については、仏国防省の資料をはじめとして（戦死6567、負傷21519で、計28086）、西側の研究者の挙げる数字では、だいたい2-3万なのに、ロシア側はそれをはるかにふくらませてきた。

帝政時代は、仏軍の損害は、ロストプチンが1813年に発表した数字52482人を挙げるのが通例だったが、この数字は、仏軍の投降者、A.シュミット少佐が、ロストプチンのために「計算」したもので、かなり水増しされていると考えられる。シュミットは、仏軍の戦前の兵力についても、リガ付近に展開していた第10軍団までふくめ、18万500人としているなど、信用できない。

ところが、この数字はソ連時代には、さらに58487人にまでふくらんで定着し、ソ連崩壊後も「仏軍の損失は約6万」というのが、ロシア国内でのみ、まかり通っている。

一方、露軍の損失は、ロシア以外のほとんどの研究者と、1954年までのロシア・ソ連の史家は、5-6万人という数字を挙げていた。だが、1954年に、38500人という数字が発表されて以来、みな「右へならえ」するようになった。だが、この数字には多数の部隊の損害が含まれていない。S.V.シュヴェードフは、これを修正して計算しなおし、5万3千という数字を出した。振り出しにもどったわけだ。

ところが、「ロシア国立軍事史古文書館 РГВИА」（Российский государственный военно-исторический архив）に保管されているロシア帝国参謀本部の資料には、じつは、戦死者と負傷者の名簿が残っていたのだ（！）。それによると、45600人である。ソ連、ロシアの史家の多くは、これを知らないふりをして、大本営発表をやっていたことになる…。

という次第で、仏軍の損失は最低28086人、露軍は最低45600人とみるのが妥当だろう。

将官の損失は、仏軍では、ミュラーにつぐ騎兵隊指揮官だったモンブラン将軍、オーギュスト・コランクール将軍をはじめとして、戦死10人、負傷39人の計49人、露軍では、バグラチオン、砲兵隊司令官クタイソフ以下、戦死6人、負傷23人の計29人である。

まとめると、露軍154800人と仏軍133819人が戦い、前者は戦死と負傷合わせて45600人以上、後者は28086人以上の損失をこうむった。

仏軍が約2万の古参近衛軍を温存したことを考えれば、露軍15万5千と仏軍11万4千が戦って、前者は4万6千以上、後者は2万8千以上を失ったということになる。

ちなみに、クトゥーゾフは、戦前に斥候と捕虜の尋問から、仏軍は16万5千と推測していたのに対し、ナポレオンは露軍が12-13万とみていたことはすでに述べた。クトゥーゾフの

全体に受身な戦い方は、これとも関係していると思われる³²¹。

以上の数字と、仏軍が一方的に圧していた戦闘の経過をみれば、仏軍の勝利は一見明らか
なようだが、快勝にはほど遠く、ナポレオンの指揮にも数々の問題点が指摘されている。

予備軍（最強部隊の古参近衛軍）を投入しなかったのは正しいか

なぜ、ナポレオンは、大角面堡を落とした 15 時の段階で、温存されていた予備軍（古参近
衛軍）を投入して、露軍を撃滅しようとしなかったのか？ これはいまだに論者の意見が分
かれる問題だ。たしかに、無疵の最強部隊 2 万をくわえて、疲れ切った露軍に攻撃をかけれ
ば、露軍がもちこたえられなかった可能性はある。露軍はそれまでに予備軍をぜんぶ投入し
ており、余力はもうなかった。

クラウゼヴィッツは、投入しなかったのは正しいという意見だ。露軍は頑強でそうかんた
んには撃破できない。しかも、退路のスモレンスク街道の新道は広く、退却しやすい。隊列
を組み、砲兵隊を展開させながら退くことができる。予備軍を投入しても、失敗する可能性
が少なくないのにくわえ、ナポレオンにとって、最終目標は、アレクサンドル一世に講和を
むすばせることである。それまで予備軍を温存しなければならなかった、と言う³²²。

クラウゼヴィッツの意見は一理ある。露軍は容易に補給を受け、増強される、あるいは後
方で新部隊が編成されるが、仏軍の補給はいよいよ困難になってくる。ポロジノだけで 9 万
発もの砲弾を使ってしまった³²³。

しかし、ナポレオンの副官だったセギュールは、べつの意見だ。皇帝にはかつてのような
活力と閃きがみられず、幕僚はみんなびっくりしたと言う。露軍の奮戦を差し引いても、皇
帝の体調を割り引いても（ひどい風邪と膀胱炎再発で苦しんでいた）、こんなはずではなか
った、ナポレオンはかつてのナポレオンではない、という失望があらわだ。昔の彼なら、こ
こぞというところで近衛軍を使い、圧勝していただろうと、はっきりは書いてないが、そう
いう考えのようだ³²⁴。

³²¹ Троицкий Н.А. Там же. С.255—259, 289—291.

³²² Карл фон Клаузевиц. Там же. С.90—91.

³²³ 一方の露軍は 6 万発ほどで、だいぶすくない（仏軍 6 万発、露軍 2 万発というデータもあ
る）。常に仏軍がイニシアチブをとり、露軍は受身で、はるかに多い砲火、銃火を浴びた。じっさ
いに戦った兵力は、露軍のほうが多く、大砲の数でも優勢だったにもかかわらずだ。これが、露
軍の損害が仏軍より多かった理由の一つである（Троицкий Н.А. Там же. С.300—301）。

会戦に参加した将来のデカブリスト、フョードル・グリンカの証言でも、露軍は、砲火の集中
力で劣り、「散発的」に聞こえたと言う（«Очерки Бородинского сражения: воспоминания о 1812
годе» // «1812 год в русской поэзии и воспоминаниях современников». М.: Правда, 1987. С.339）。

敵は、仕掛けた側として、自らが望む地点から、望むような形で、「集中的に」行動した。
一方、わが軍は、受け手として、布陣している場所が許すかぎりで行動しており、それがた
めに、行動はしばしばバラバラで、「散発的」だった。

³²⁴ ちなみに、ナポレオンは、ロシア遠征中にスモレンスクで、42 歳の誕生日をむかえている。
厄年だからというわけではないが、なんととっても、心と体の曲がり角だ。彼はもはやイタリア

ナポレオンの指揮については、近衛軍の投入以外にも、疑問の余地がある。トロイツキーが批判するのは以下の点だ。

- ・ダヴーの進言にしたがわなかったこと（兵 4 万でウチーツァ村の側から迂回し、露軍左翼を背面から突く）、その結果、頑強きわまる敵との消耗戦になってしまったこと。
- ・露軍右翼をもっと攻撃して、右翼から左翼への部隊の移動をさまたげなかったこと。
- ・突角堡を落としたときに、露軍左翼に対して集中攻撃をつづけなかったこと。中央（大角面堡壘）への総攻撃に切り替えたため、二つの堡壘は落とせたものの、露軍の左翼と中央は、整然と数百メートル後退したにとどまった³²⁵。

露軍の指揮については、本文中で述べたとおりだ。

筆者（佐藤）の印象では、ナポレオンのロシア遠征全体をふりかえると、大角面堡壘を落とした時点での予備軍投入が仏軍にとって唯一のチャンスだったかもしれない…。露軍が撃滅されていれば、アレクサンドル一世と宮廷の衝撃は甚大だったろう。さすがに講和に傾いたかもしれない。

露側が弱気にならなければ、実際に起きたことが起きることになる。ナポレオンはモスクワに入り、そこで講和を待ちながら長居するだろう。露側にその気がないことを知らずに。ロシアの短い夏は終わりつつあり、行く手にすさまじい冬が待っていることを知らずに。コランクールが書いているように、ナポレオンはロシアの冬将軍の猛威を最後まで軽視していた。馬襦も、鋏つきの蹄鉄も、手袋も、皮で裏打ちした外套も、なにも用意されずじまいだったのだ。モスクワに無尽蔵にあった衣類、食糧は大火が灰にしてしまうだろう…。

祖国戦争の転回点

露軍は、ボロジノの会戦で、あのナポレオンとその世界最強の軍隊と四つに組んで、最後まで持ちこたえた³²⁶。多くの証言によると、戦後の仏軍の気分が、ナポレオンと幕僚から将

遠征時のボナパルト将軍でなかった。

セギュールの回想によると、ナポレオンは、アウステルリッツの会戦（1805年）に際し、こんなことを言っていたという。「戦争をやるにも適した年齢というものがある。自分もあと6年くらいはもつだろうが、その後はやめざるを得なくなるだろう！」

Граф Филипп-Поль де Сегюр. Поход в Россию. М.: «Захаров», 2002. С.109.

両角良彦氏は、『反ナポレオン考：時代と人間』（朝日選書、1998年）で、ナポレオンの「心身のカルテ」を整理されているが、それによると、「肉体の変調は一八一一年ごろにははっきりとした形をとり、肥満が始まり、居眠りが増え、それに精神的な衰弱が加わった」。翌1812年のロシア遠征当時のナポレオンは、胃痛、胃けいれん、膀胱炎、排尿困難などに苦しんでいた。ボロジノの会戦に際しては、膀胱炎が再発しかかり、ひどい風邪をひいていた。

³²⁵ Троицкий Н.А. Там же. С.270.

³²⁶ トロイツキー、前掲書には、5時－9時、9時－12時、12時－14時、14時－18時の両軍陣形が地図で示されているが、凄まじい白兵戦、消耗戦になりながら、双方とも最後まで陣形がまっ

兵にいたるまで沈んでいたのに、露側では、勝った、勝った！という歓声さえあがった。

ボロジノの会戦を戦い抜いて、おれたちはやれる！という自信を得て、とにかく軍を保つことで、まだはっきりと目には見えないが、祖国戦争は大きく転回したのである。

なるほど、クラウゼヴィッツらが言うように、ボロジノの会戦は仏軍の勝利ではある。相手の前線と陣地（堡壘）を奪い、相手ははるかに大きな損害をだして退却し、モスクワを明け渡したのだから。会戦の内容をみても、ナポレオンは会戦でたえず主導権をにぎり攻勢に出ていたのに、露軍は出たところ勝負で対応するのが精一杯だった。

しかし、露軍は負けたといえるのか？ ナポレオンはのちに流刑地セント・ヘレナ島で、「モスクワ河畔の会戦は、最大の力を傾けながら最小の成果しかえられなかった戦いのひとつだ」³²⁷、「この会戦は、余の生涯で最も凄惨な戦いで、仏軍は勝利者であり、露軍は不屈であることをみせつけた」と言っている。ボロジノで仏軍は勝ったが、露軍は不屈だった。その不屈が、ほかの条件を活かし、最後の勝利をえた。そういうことだった。

ソ連時代の史家エフゲニー・タルレは、ボロジノの意義を総括してこう言う。

クトゥーゾフは、ボロジノの会戦後、露軍の損害のすさまじさを確認し、「最終的にモスクワ放棄を決断した。もっと正確にいうなら、今や新たに戦わなくとも、モスクワを明け渡すことが許される——こうみてとったのである」³²⁸

なるほど、ボロジノでの決戦で、ナポレオンをやっつけて戦争を終わらせるなどということは、軍と宮廷の指導部では、ほとんどだれも考えていなかったはずだが、ボロジノの結果、ほかのシナリオは完全にありえなくなった、ということだ。

その意味で、タルレの言うとおりでらう。しかし、だれが、「明け渡すことを許す」のか？ クトゥーゾフに許可を与える者とは？...

そしてタルレは、ボロジノ会戦後のこの時点から、モスクワを放棄しカルーガ街道へ移動する作戦が実行段階に入った、としている。これもそのとおりでらう³²⁹。

トルストイはボロジノの会戦をどう捉えたか

トルストイは『戦争と平和』で、ボロジノの会戦をどう捉えているか。やはりここでも、無意識的、本能的な集団的行動で、自然にそうなったという方向に引っぱっているのは変わらないのだが、しかし、まさにこのボロジノが祖国戦争全体の転回点になったと彼はみており、一元的、力学的な比喩をもちいて、そのことを表そうとする。

二つの転がる球が衝突し、一方の球が大きな衝撃を受けて、しばらくは惰性で転がったあと停止したとか、突進してきた獅子が致命傷を受け、しばらく狂奔したのち倒れた、といっ

たく崩れていない。

Троицкий Н.А. Там же. С.192-193.

³²⁷ Троицкий Н.А. Там же. С.295-296.

³²⁸ Тарле Е.В. Нашествие Наполеона на Россию // 1812 год. М., 1961. С.562.

³²⁹ Там же.

た言い方をする。

では、なぜボロジノは転回点になったのか。言い換えれば、なぜここで露軍は実質的な勝利を収めえたのか。

作者は、ボロジノの平原に四方八方に広がる露軍全体を、ざわめき波立つ大海原に比すなど、一元的、力学的なイメージを重ねつつ、露軍は、「愛国心の潜熱」を共有し、結びついていると言う。描写はおもに、「兵士を兵士たらしめているものにひたすら撤しよう」とし、一つの目と化したピエールを通してなされる。ピエールが、会戦前日にボロジノにやってくると、十字行（奉神礼として聖堂外で行われる行列）が目に入る。

これはスモレンスクから運び出されたアイコンで、以来、軍隊とともに運ばれていた。アイコンの後ろや回りや前を、四方八方から脱帽した将兵が走ったり、地面に額づいたりしていた。（3巻2編21章）

「愛国心の潜熱」は、愛国心につきものの残酷さ、排他性、優越感などを突き抜け、或る普遍的愛につながるものとされる。人間を翻弄する偶然を突破し、神慮に達した、と言ってもいい。

露軍というひとつの大きな塊は、こうした「愛国心の潜熱」で結びつき、より熱く、より高密度で、ゆえにより大きなエネルギーを秘めている。だから勝った。作戦などというものはない。

そして、クトゥーゾフはその神秘的な運動を洞察するが、ナポレオンはわからない。

クトゥーゾフは、報告を聞きながらも、語られる言葉の意味ではなく、報告する人間の表情や語調に現れるなにもものかに興味があるようだった。長年の軍隊生活の体験と老人の叡智により、死と戦っている数十万の人間を一人の人間が指揮することなどできないことを、彼は知っていた。そして、戦いの運命を決するのは、総司令官の命令でも、軍隊が占めている場所でも、大砲の数でも、戦死者の数でもなく、士気と呼ばれる捉えがたい力であることを知っていたので、彼の力のおよぶかぎり、この力を注視し導いていたのである。（3巻2編35章）

だが、ナポレオンはもちろん分かっていた。分かっていたが、ボロジノが戦役全体の転回点になるだろうことは分からなかった。

第5章 祖国戦争後半の焦点：「問題はいかに実行するかだ」（クラウゼヴィッツ）

タルレが述べたように、ボロジノの会戦以降、モスクワを放棄しカルーガ街道に移動する作戦は、いよいよ実行段階に入った。ボロジノで仏軍は、ナポレオン自身の言葉を借りれば、露軍が「不屈であることをみせつけ」られたうえ、ロシアの奥深く誘い込まれて、補給も心もとない。時期はすでに初秋である。露軍としてはあとは、モスクワに仏軍を入城させたうえで焼き払い、自分は武器と食糧の補給基地に近いカルーガ街道に移動すればいい…。いや、決して事はそうかんたんではなかった。

問題は、クラウゼヴィッツが言うとおおり、いかにそれを実行するか、だ。ボロジノで近衛軍2万を温存した仏軍は、まだ圧倒的に優勢で、ぴったり追尾してくるばかりか、連日、前衛部隊が攻撃をしかけてくる。一方の露軍は、甚大な損害を受け、疲弊しきっており、やや先走るが、モスクワ放棄後の士気の低下はいちじるしく、脱走者があいつぎ、自壊の危機に陥った（これは、放棄前から十分予想できたことだ）。そういう崩壊寸前の敗残軍を統率し、仏軍を振り切り、うまく撒かねばならなかった。

また、モスクワを焼き払うといっても、仏軍占領下であれほどの大都市を灰にするには、よほど練られた計画と人員と組織力が必須である。

しかし、露軍は、ものの見事にそんな離れ業をやったのけた。おかげで、この間大きな戦闘は一つもなかったのに、形勢はもう目に見えるかたちで、露軍有利に逆転する。それはたんなる僥倖でも成り行きでもなかった。

クトゥーゾフ、バルクライ以下の露軍は具体的にいかにそれをやったのか？それが、ボロジノ以降の、いわば祖国戦争の後半戦における焦点となる。

なお、この時期は、事実の神話化と故意の歪曲、粉飾が最もはなはだしく、真相はいまだに「藪の中」なので、とり扱いにはとくに注意を要する。

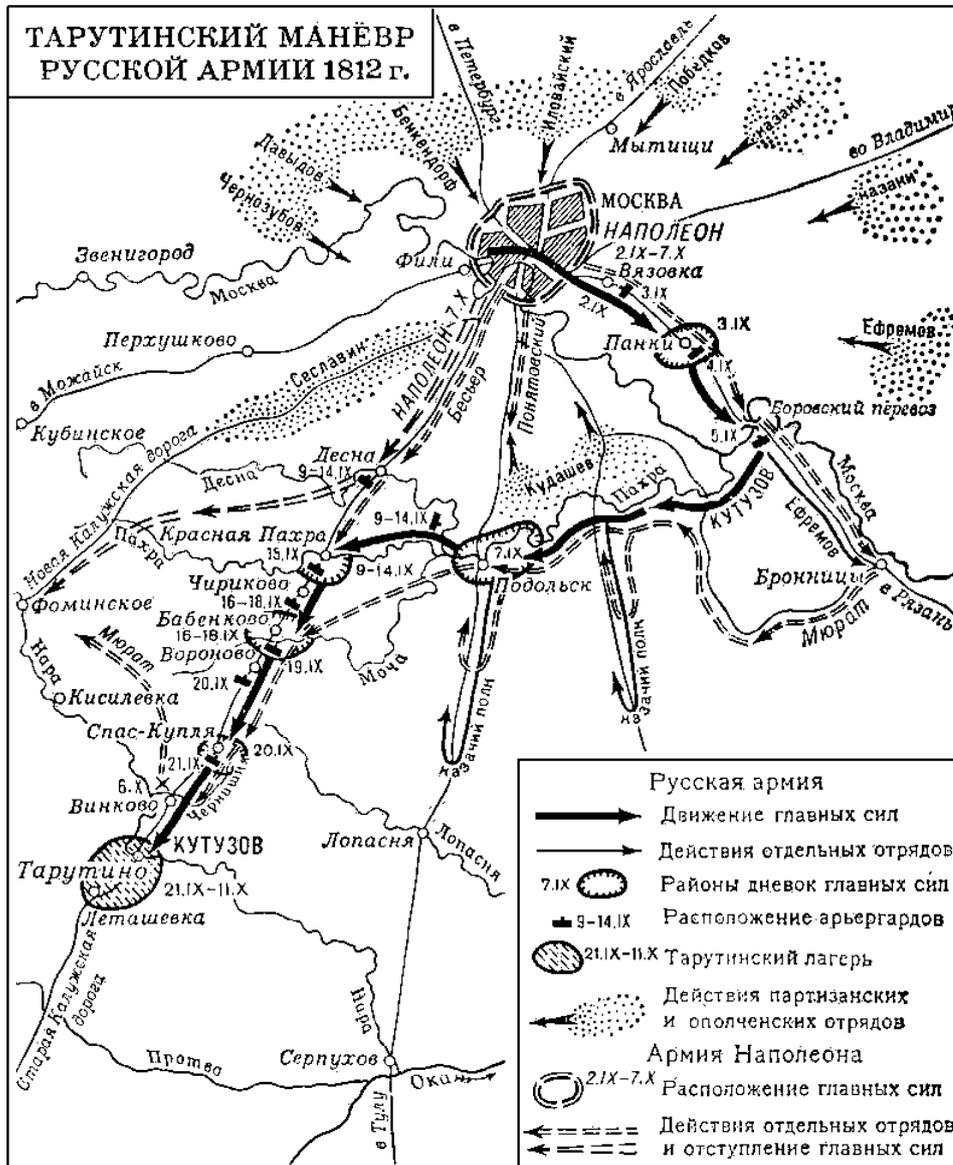
後半戦の事実関係を整理

まず、両軍の動きを、時系列に沿って事実のみかんたんに記すところなる。

露軍はボロジノの会戦後、**9月7-8日（8月26-27日）深夜**に、モスクワへ撤退し、**9月13日（9月1日）**にモスクワ放棄を決め、東南方向へリャザン街道を撤退する。一方、ナポレオンは、**9月14日（2日）**にモスクワへ入城する。**同日夜**、モスクワで大火が発生し、18日まで燃えつづけ、市の4分の3を焼く。**9月16日（4日）**、露軍は、リャザン街道でモスクワ川を渡り、西に折れる。**9月18日（6日）**にポドリスクに達し、**9月21日（9日）**、旧カルーガ街道のクラスナヤ・パフラー村に到着し、ここにしばらく留まる。**10月2日**、露軍は、同街道を南に移動してタルーチノ村に落ち着く。

これを年表と地図で整理すると――

9月7-8日(8月26-27日)深夜	ポロジノの会戦後、露軍は、モスクワ方面へ撤退する。
9月13日(9月1日)	露軍は、フィリ村での軍議でモスクワ放棄を決め、東南方向へリャザン街道を撤退していく。
9月14日(2日)	ナポレオン、モスクワに入城する。
同日夜	モスクワで大火が発生し、18日まで燃えつづけ、市の4分の3を焼く。
9月16日(4日)	露軍は、リャザン街道のモスクワ川を渡ったところで西に折れる。
9月18日(6日)	露軍、ポドリスクに達する。
9月21日(9日)	露軍、旧カルーガ街道のクラスナヤ・パプラー村に着き、しばらく留まる。
10月2日	露軍、同街道を南に移動してタルーチノ村に落ち着く。



地図1 露軍の撤退経路：モスクワ→リャザン街道→カルーガ街道のタルーチノ

黒の実線矢印が露軍の動きである³³⁰。旧カルーガ街道に位置するタルーチノ村と、補給基地のあるカルーガ（地図にはないが、タルーチノの南方に位置する）、新カルーガ街道、およびスモレンスク街道の位置関係をご覧いただきたい。タルーチノ村がいかに戦略上好都合な位置にあるかがわかる。

これは事実を因果関係ぬきでかんたんになぞっただけだが、なぜほかならぬ旧カルーガ街道のクラスナヤ・パフラー村とタルーチノ村なのかは、もうはっきりしている。まず、ここはカルーガとトゥーラの大きな補給基地に近く、露軍は急速に力を盛り返し、仏軍との力関係は逆転した。これについてはすでに触れた。

また、露軍が滞陣しているところは、仏軍がどちらへ移動しても、対応しやすい位置だ。仏軍がスモレンスク街道を通って退却すれば、新カルーガ街道のポロフスクを經由して近道で追いかけることができる。万一ペテルブルクを脅かすようなら追撃すればよい。

一方、モスクワの大火は、無尽蔵にあった食糧、備品を奪った。

疑問点と作業仮説

しかし——ここが肝心なところだが——モスクワ放棄、放火、タルーチノへの移動を、だれがいつ立案し、どのようなかたちで具体的にやったのか、つまり、だれがどうやって、モスクワを丸焼けにしたうえで、ぴたりと追尾してくる優勢な仏軍をまんまと出し抜いたのか、という点になると、納得のゆく見解はいまだに出されていない。

モスクワ放棄とカルーガ街道への移動は、クトゥーゾフがボロジノの会戦後に、放棄前日のフィリ村での軍議で、諸般の状況を考慮して決断したというのが通説となっている。大火のほうは、モスクワ総督ロストプチンがクトゥーゾフの同市放棄の決定を知って独断でやった、とする見解がほとんどだ。しかしこれには、今まで再三述べたことから明らかなように、無数の反証をあげることができる。くどいようだが、祖国戦争の「後半戦」に入るに当たり、まとめて整理しておこう。

首都放棄は、ほんとうにこの時点まで予想外のことであったか？ むしろ、現状の最終確認といったものではなかったか。

³³⁰ Тарутинский манёвр русской армии 1812 г. // Большая советская энциклопедия. М.: Советская энциклопедия. 1969—1978.

以下の地図も参照。

・ Михайловский-Данилевский А.И. Там же. С.414-415.

・ Троицкий Н.А. Там же. С.368-369.

・ 電子図書館「ルニバース」の地図セクション

http://www.runivers.ru/mp/maps-detail.php?ID=469636&SECTION_ID=7819（2015年9月10日最終閲覧）

ボロジノの会戦で大損害をこうむった露軍が、増援を受けずに、最強の近衛軍を温存している仏軍と戦える、とほんとうに信じていた軍首脳は、あまりいなかったろう。自分がモスクワ放棄の言い出しっぺになって責任をとるのがいやで、首都防衛を主張する、というのはもちろん理解できるが。戦えなければ明け渡すことになる。そうなる可能性がいちばん高いのだから、その後どうするか、どこへ退却するか、細かい点まで話し合っていて当然ではないか？

かりに一戦まじえたところで、負けて退く可能性が大である。いずれにせよ、モスクワ放棄という結果はおなじだ。これは、軍首脳といわず、ツァーリと側近たち（アラクチェーフはじめ）といわず、共通の見解というか、もう前提になっていたはずだ。

モスクワ放棄やむなしということになれば、当然、焼くことになるだろう。「聖都」を灰にするのがいくら苦しい決断でも、戦略上の効果は絶大になる。だいたい、国境からここまで、ほとんどの都市を焼いてきたのではなかったか。モスクワ放棄と大火はセットになっていたはずだ。

以上のことを考えるのに、とくべつの叡智が必要だろうか。問題は、それをいかに実行するかである。

モスクワ住民も、あとでくわしくみるように、モスクワ放棄と炎上は避けがたし、と考えたからこそ、早くもスモレンスクの会戦以降から、続々と逃げ出したのである（「ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記」）。

しかし、フランス軍占領下のモスクワを丸焼けにするのはかんたんではない。かなり組織的な放火が必要だ。と同時に、「聖都」を焼くのは、ロストプチンやクトゥーゾフのような一宮仕えが独断で決められることだろうか？ ツァーリはじめ宮廷の了解を得ていたと考えるのが自然ではないか？ 宮仕えはまず第一に自分の責任を考えるものだ。ちなみに、モスクワ放棄と放火の件では、だれも罰せられていない。

もしそうだとすると、いつごろから計画を練り、準備に入ったのだろう。スモレンスクの陥落を聞いたクトゥーゾフは、「モスクワの鍵を奪われた」と言った。スモレンスク以降だろうか？ ナポレオンがモスクワまで止まりそうもないという見通しがついたのは、もっと早かったのではないか？

政府以下、早くから、モスクワ放棄と放火のオプションの可能性が高いとみて、ほかのオプションの可能性もにらみつつ、それにそなえていた。その具体的実行は、クトゥーゾフやロストプチンなどの現場に一任されていた——。こう考えるのが自然ではないか？ これが筆者の作業仮説である。

以下、順次検証していこう。まずは、ボロジノの会戦後の退却からモスクワ放棄決定までだ。

第6章 ボロジノの会戦後の退却からモスクワ放棄決定まで

軍と宮廷のあいだで最終確認？

ボロジノの会戦が終わったその日の深夜、つまり9月7日—8日（8月26—27日）の夜に、クトゥーゾフは退却を命じる。露軍の後衛はミロラドヴィッチが指揮し、仏軍の前衛はミュラー率いる騎兵隊だ。

退却中は、クラウゼヴィッツによると、仏軍はあまり攻撃してこず、大きな戦闘は1回しかなかった（9月10日）。そのときも、あまり力が入っていないように感じたと言う³³¹。会戦前とは対照的だ。やはり、両軍とも精力を使い果たしていたのだろう。

クトゥーゾフは、増援の可能性を何度か問い合わせたが、9月11日に、すくなくともモスクワまでは得られないことがツァーリの書簡からわかった。かわりにツァーリから、10万ルーブルと元帥杖を与えられただけだった。これでは戦えない！とは、クトゥーゾフはもちろん表向きには言わず、断固モスクワを守ると請け合ったが。³³²

この二人のやりとりをどう考えるか？ クトゥーゾフが本気で増援を期待していたとは

³³¹ Карл фон Клаузевиц. Там же. С.94—95.

³³² 「クトゥーゾフは、ボロジノの陣地からの退却は、モスクワの喪失を招き得ることを知っていたが、首都を犠牲にするか、彼に委ねられた軍を犠牲にするか以外にどうしようもなかった」

軍事史家（陸軍中將）、モデスト・ボグダノヴィチ（1805—1882）は、クトゥーゾフの心中をこう推し量っている。その根拠は、露軍は増援を受けられず、二倍も優勢な敵を受けて立てるような陣地を見つけることも不可能であったから。しかし、クトゥーゾフは、士気を低下させないため、真意は隠し、再び戦う気であるようなふりをしていて、とボグダノヴィチは考える（Богданович М.И. История Отечественной войны 1812 года: Том II. СПб, 1859. С.227-228.）。

筆者はもちろんこれに賛成だが、しかし、残念なことに、ボグダノヴィチの考察はここで止ってしまう。

彼の『祖国戦争史』は1859年、つまり、『戦争と平和』が書かれるすぐ前に出ており、豊富な資料を含んだ大部（3巻本）の著作で、トルストイもしばしば引用している。だが、軍の高官で公認の軍事史家（официальный военный историограф）であった彼の記述は、同じ立場にあったミハイロフスキー＝ダニレフスキーと比べてもより慎重であり、重要な判断は保留にすることが多い。

たとえば、クトゥーゾフがいつどこで、「首都を犠牲にするか、軍を犠牲にするか」の決断を下したか、モスクワ放棄後にカルーガ街道方面に転進することをどの時点で決めたかといった問題については、いずれも「クトゥーゾフは自身の考えは、事を決行するまで決してだれにも明かさないので、よく分からないとしている（Там же. С.232, 252）。

もっとも、カルーガ街道方面への転進にかんしては、クトゥーゾフの側近のトーリ大佐がすでにそのような提案をしていたことから、「クトゥーゾフが提案したか、もしくはその案の作成に参加したことを疑う理由はないだろう」と付け加えてはいるものの、「いつ、どこで」という肝心の点については沈黙している（このトーリの提案については、すぐこの後、本文でみる）。

だいたい、このような重要な案の作成、採用に総司令官たるクトゥーゾフが「参加」もしていなかったら、それこそ変ではないか。これではほとんどなにも言わないにひとしい。

筆者が察するに、ボグダノヴィチの手持ちの豊富な資料からして、より突っ込んだ論を立てるのはむずかしくなかったはずだが、そうなると、軍と宮廷を巻き込むことになる。大会戦でナポレオンを撃滅できる可能性がほとんどない以上、モスクワ放棄＋放火は、前々から論じられていたはずだという推論、傍証が容易に飛び出してくるからだ。こういう論の「暴走」を抑制するため、奥歯に物が挟まったような書き方をしているのだろう。

思えない。南部の補給基地まではかなりの距離がある。トルマーソフ将軍は、開戦当初、南部でオーストリア軍をけん制しており、チチャゴフ提督率いるダニューブ（ドナウ）軍は、1812年5月28日のブカレスト和平条約締結後、対トルコ戦から解放され、北上しつつあったものの、まだはるか遠くにあった。チチャゴフ軍がクトゥーゾフ率いる主力軍に合流したのはようやく、ナポレオンが11月26-29日（グレゴリオ暦）にベレジナ川渡河に成功したときのことである。

こうした状況を見ると、ボロジノ後のクトゥーゾフと皇帝のやりとりは、むしろ、モスクワ放棄と放火、そしてカルーガ街道方面への移動以外のシナリオが完全に消えた（つまり、モスクワまでナポレオンは止められない）という最終確認のようなものではなかったか。

だれがいつ策定したか

では、そのモスクワを放棄してカルーガ街道方面へ移動する案は、いつごろだれによって策定されたのだろうか。

クラウゼヴィッツは、ボロジノの会戦後、退却路について、大きな補給基地に近いカルーガ街道という選択肢もふくめて、参謀本部の若い将校たちとさかんに論議していたと回想する。カルーガには食糧基地があり、トゥーラには兵器工場がある。

クラウゼヴィッツによると、クトゥーゾフの側近中の側近、カルル・トーリ大佐³³³は、「モスクワ以遠の退却は、これまでの方向ではなく、南に曲がるべきだ」と、再三言っていた。当時、両者は、仕事でしばしば会っていた。「南に曲がる」理由は、軍の補給、補充が容易になり、敵に対してうまく布陣できるから、ということであった。

クラウゼヴィッツいわく、モスクワ以遠の退却ルートの問題は、参謀本部において、「完全に練り上げられてはいなかったとしても、あらゆる細部にいたるまで論議されていた」³³⁴

という次第で、モスクワ→カルーガ街道は、おそらくボロジノの会戦の前から、細かく検討されていたのが、会戦の結果を受けて（つまり、ここで仏軍を撃滅するという淡い可能性

³³³ カルル・フォードロヴィチ（ヴィリゲリム）・トーリ（1777-1842）は、クトゥーゾフの愛弟子で、側近中の側近である。祖国戦争当時は、クトゥーゾフが総司令官に就任してからは、彼とおなじ宿舎で寝起きして、そのかたわらで勤務し、まだ大佐にすぎなかったのに、事実上 генерал-квартирмейстер の務めを果たしていた。

現在のエストニアに位置するエストリヤンド県（Эстляндская губерния）に生まれる。生家は、オランダ系の世襲貴族で、11世紀初めから知られるという名門である。父は陸軍少将。

トーリは、陸軍貴族幼年学校で学んでいたとき、校長だったクトゥーゾフに可愛がられ、以後つねに厚く信頼され、庇護を受けた。

この経歴、出自から想像されるとおり、『戦争と平和』ではトーリはネガティブに描かれている（4巻2編16章、同4編4章）。「外国人」の参謀は、彼にかぎらずみんな、うぬぼれの強い頭でっかちにすぎず、なんら実質的な貢献をなしえない有象無象という扱いだ。トーリもプフルもすべて一緒にたにステレオタイプ化され、なで斬りにされてしまう。

クラウゼヴィッツの印象では、トーリはきわめて教養があるが、真の戦略的思考は欠けている。しかし、手近な作戦を遂行する能力はあり、意志強固だと言う（Карл фон Клаузевиц. Там же. С.37）。

³³⁴ Карл фон Клаузевиц. Там же. С.102—106.

が消えたことで)、いよいよ実行に向けて最終的な詰めに入った、ということだと考えられる。もう一つ、傍証がある。

ボロジノの会戦の二日後の9月9日(8月28日)、クトゥーゾフは、そのカルーガ県知事に書簡を送り、同県に戒厳令を布告する³³⁵。そのなかに次のような注目すべきくだりがある。

敵が近づいてきたら、食糧をあらゆる手段で廃棄、焼却すること。オリョール県から送られてくる分については、水路でコロムナ市に転送し、そこで、モスクワ市政府の指示を待つこと。その他の地域から送られてくる食糧は、陸路で、もし安全ならば、旧カルーガ街道³³⁶からポドリスク経由でモスクワに送ること。

万一、仏軍がカルーガにも進軍してきた場合は、カルーガをも焦土化し、当地にまだ送られてきていない食糧は安全地帯に運べ、という命令だが、おもしろいのは、カルーガ街道——ポドリスク——モスクワは、露軍がモスクワを放棄後にたどった、まさにそのルートなのだ！ したがって、この方向で食糧を運べば、必ずどこかの地点で、撤退してくる露軍と出会うことになる。

しかもこのルートは、モスクワ川およびそれと合流しているパフラー川の南を通る。川幅はかなり広く、河岸も切り立っているので、比較的安全なルートである(地図1を参照)。

また、モスクワ放棄後に9月25日(9月13日)付で同市の総督ロストプチンがアレクサンドルー世に送った手紙によると、9月10日(8月29日)にロストプチンは、モスクワの食糧をカルーガ街道へ運び出せ、とクトゥーゾフから命じられたと言っている(9月10日といえば、9月7日のボロジノの会戦の3日後、9月13日のフィリ村でのモスクワ放棄正式決定の3日前に当たる)。ロストプチンは、だから、この命令は、クトゥーゾフがこのときすでにモスクワ放棄を決めていたことを証明している、と述べている³³⁷。

この手紙に先立って、やはりロストプチンから、モスクワ放棄とリャザン街道撤退の報告を受けたアレクサンドルー世は、側近で軍事問題のブレーンであるピョートル・ヴォルコンスキーを呼び出し、「なぜカルーガ街道へ向かわなかったのだろうか？」と質したという³³⁸。

なぜ元帥がリャザン街道へ向かったのかわからない。カルーガ街道へ向かわねばならなかったはずだ。あなたは、ただちに元帥のところへ行き、なぜこちらの方向をとった

³³⁵ Кутузов М.И. Письма, записки. М.: Воениздат, 1989. С.337.

³³⁶ なぜ、食糧を新カルーガ街道ではなく旧道で送るかということ、旧道のほうが、新道よりも南寄り、ナポレオンが進軍してくるスモレンスク街道から離れているからだ。前章の地図2「マロヤロスラーヴェッツの会戦」を参照されたい。

³³⁷ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. «ОПИСАНИЕ ОТЕЧЕСТВЕННОЙ ВОЙНЫ В 1812 ГОДУ. ЧАСТЬ 2». СПБ, 1839. С.397-398.

Богданович М.И. Там же. Том II. С.312.

³³⁸ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ. С.417—418.

のか聞いてきてほしい。また、軍の状態と今後の元帥の意向についてよく質してほしい。

カールガ街道行きが共通の了解になっていたことになるが、これはやはり、ボロジノ以前からだろう。ボロジノから首都放棄までの数日で、軍と宮廷がこれだけの事柄についてやりとりをして詰められるはずはないからだ。

(なお、ここできわめて重要なのは、アレクサンドル一世の反応から分かるように、リャザン街道を經由してからカールガ街道に入ることは、現場の軍のアイデアだったらしいことである。この点を記憶されたい)。

だめ押しは、つぎのクトゥーゾフの書簡だ。彼は、カールガ県のタルーサ (Таруса) に住む娘アンナ (Анна Михайловна Хитрово) に、「戦場から遠くに逃げてもらいたい。なにがなんでも、子供をつれて避難しなさい」と、早くも 8 月 31 日付 (19 日付) で、書き送っていた。タルーサは、露軍の大きな補給基地があるカールガとトゥーラからほぼ等距離にある (カールガの北東 70 キロ)。8 月 31 日といえば、クトゥーゾフが総司令官として軍に合流、着任した直後で、ツァーリあてに軍の疲弊した現状を報告し、増援を請うていた日だ。さて、その娘あての手紙は――

はっきり言わねばならないが、お前がタルーサ近郊にいるのは、まったく気に入らない。お前たちは容易に危険に巻き込まれうる。いざというとき、女だけで、しかも子供連れでなにができようか。だから、戦場からもっと遠くに逃げてほしい。娘よ、逃げなさい！ ただ、私が言ったことはすべて極秘にしなさい。このことが知れると、わたしは非常に困ったことになるのだ。

もしニコライ (*夫の Н.Ф.Хитрово――佐藤) が知事から移動を許されない場合には、お前たちだけで立たねばならない。そのときは私が、夫は妻子に付き添わねばならぬ、と知事に言って、話をつける。しかし、お前たちは、なにがなんでも逃げなさい。³³⁹

この切迫した手紙をみると、(モスクワまでナポレオンを止められない場合に) カールガ方面へ移動する作戦は、クトゥーゾフの総司令官着任直後にはすでに最上層部の共通の了解になっており、極秘事項だったようだ。ということは、クトゥーゾフがまだペテルブルクにいたときに、彼をふくむ軍、宮廷、政府の首脳が話し合っていて決めていたと推測される。

前に書いたように、クトゥーゾフは、8 月 23 日 (11 日) にペテルブルクを立ち、最初の宿駅で、スモレンスクの陥落を知り、「モスクワへの鍵」を奪われたと呟いた。この「鍵」に仏軍が迫りつつあったときにはもう、その防衛は難しいとみて、カールガ行きの作戦を国の最上層部で策定した、ということだろう。

以上まとめると、モスクワ退却→ポドリスク→旧カールガ街道の撤退ルートが、スモレン

³³⁹ Кутузов М.И. Там же. С.310.

スクの会戦以前から、軍と宮廷の首脳によって具体的に論議され、大筋で了承されていたことは確実である。

残る大難関

さて、ボロジノの会戦後の露軍に話をもどすと、なにより恐れていたのは、仏軍がカルーガ方向にも進出することだったろう。これは作戦が根底からくつがえる悪夢であったにちがいないのだが、その悪夢が一部実現してしまう。仏軍の一部が新カルーガ街道に入り、ヴェレヤー→ボロフスク経由でモスクワに進軍してきたのだ。

というのは、仏軍としても、側面に回りこまれることが怖かったので、できるだけ広い隊列を組み、スモレンスク街道のほか、その南の新カルーガ街道と北のヴォロコラムスク街道（ルーザ経由）の3街道を通過してモスクワに向かったわけである。なにしろ、大海原のように広い野原のただなかを進まねばならないので、迂回されたり、遮断されたりする恐怖は強かった。

クトゥーゾフはこれを知って肝を冷やした³⁴⁰。しかし、仏軍は、結局、この時点ではこれ以上カルーガ方面に深入りしなかった。

だが、このまさに冷や汗もののエピソードは、残る課題とその実現の至難さを如実に物語る。

露軍が、モスクワ→ポドリスク→旧カルーガ街道と、とくに策を講じずに漫然と進んで行った場合、南部の補給基地を目指していることは自明だから、仏軍はたちまちそれを見破り、カルーガ方面に先回りしかねなかった！

いかに仏軍を撒いて、うまく目をくらまし、カルーガ方面から引き離すか？——これは要するに、いかに仏軍の前からいったん姿を消して見せるか、ということだ！…こちらが機動性のある小部隊ならともかく、疲弊しきった、そして首都放棄で極度に落胆するであろう数万の大部隊を率いて、百戦錬磨のナポレオン、前衛の名にし負う騎兵隊指揮官ミュラーを向こうにまわし、そんな陽動作戦がそもそも可能なものだろうか？

しかも当面、露軍将兵のほとんどは、聖都の前面で一戦まじえる気にいるから、まずは軍議を開き、戦いが不可能なことを将帥たちに納得させ、撤退、およびそのルート、陽動作戦の細部を正式決定しなければならない。

で、その発案、実行の楽屋裏をくわしく見ていこう。

不利な陣地

露軍は、こういう大難問を抱え、神経戦を戦いながら、ついにモスクワ近くまでやって来た。ここでクトゥーゾフは、いちおう、参謀総長ベニグセンに陣地を選ばせる³⁴¹。これは、

³⁴⁰ Кутузов М.И. Там же. С.339—340.

³⁴¹ Ермолов А.П. Записки. 1798-1826. М.: «Высшая школа», 1991.

クトゥーフとしては、もはや単なる形式にすぎなかったであろうが。

バルクライ、エルモーロフ（当時少将）、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーによると、その陣地の右翼の端はフィリ村にあり、そこから、セトゥニ川の流れる低地を通して、雀が丘まで伸びている。これが左翼の端だ。

この陣地がきわめて戦いにくいということは、選んだ当のベニグセンをのぞいて、諸将の一致した見解だったようだ。その見解をまとめると、おおよそつぎのような難点があった。

セトゥニ川周辺は、急傾斜が多い湿地帯で、移動がむずかしい（筆者も最近、この辺を歩き回ってみたが、いまだにそうだった）。また、左翼の雀が丘は、背後に崖とモスクワ川があるので、文字どおり背水の陣となってしまう。川にはいくつかの舟橋がかかっているが、

また、敗走した場合には、道路が網の目のように走っている大都市のなかを逃げることになるので、市中で四散し、軍隊が消滅するおそれがある――。

バルクライとエルモーロフは、その回想で、陣地の欠点を微に入り細を穿ち、くわしく論じていて、この点にかんするかぎり、疑問の余地はない³⁴²。

³⁴² この陣地のぐあいの悪さとモスクワ放棄の理由については、アレクサンドル・ベンケンドルフ（1783－1844）もメモを残している（Записки Бенкендорфа. 1812 год. Отечественная война. 1813 год. Освобождение Нидерландов. М., 2001. С.60-61）。

彼は、のちに秘密政治警察「第三部」（正式名称「皇帝直属官房第三部」）の初代長官兼憲兵隊長として悪名をはせる人物であるが、当時は、バルクライが創った初のパルチザン部隊（ヴィンツェンゲローデが指揮）の前衛を率いていた。仏軍のモスクワ占領時に、ペテルブルク街道などで、彼の部隊は約8千人の仏軍将兵を捕虜にするなど活躍した（Там же. С.16—17）。

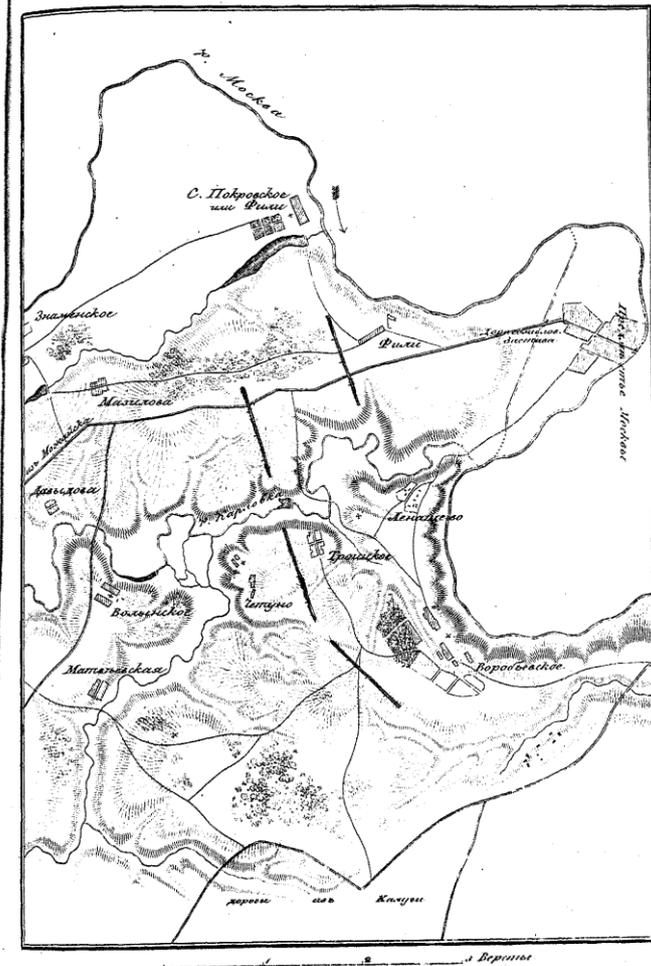
このとき、元帥（*クトゥーフ――佐藤）の本営では、重要で難しい問題が話し合われていた。モスクワを放棄すべきか否か、だ。何世紀にもわたり尊崇を受けてきたモスクワ、そして黄金で覆われた聖堂群、過去のツァーリたちの霊廟である聖堂、国民が崇める聖者が憩う聖堂を放棄すべきか否か。モスクワの住民は、敵がモスクワに入り、わが全軍が、偉大な帝国の砦であるこの都市の防衛を要請するような事態は、想像さえできなかった。

とはいえ、この不利な陣形で一戦交えるのは、きわめて危険である。背後には、巨大な都市を控えており、敵は側面から回りこんで、市内に侵入する可能性がある。都市がすぐ間近にあることで、混乱を招きかねず、また、言うまでもなく、秩序だった撤退は不可能だ。

また、わが軍は、まだ兵力で優勢である敵と戦わねばならないことになる。敵にとって救いは勝利であり、かねて約束されていた窮乏生活の終わりをいまや目前にしていた。それはすなわち、慧眼なナポレオンが不満のうずまく兵士たちに約束していた、食糧、財産、快適さをそなえた都市である。

かくして、モスクワ放棄が決定された。この決定は、途方もない損失であり、困難な決断であった。大群衆が、あらゆる城門から奔流のように溢れ出し、あらゆる方向の諸県に向かっていった。いたるところに恐怖を伝染させ、その窮乏のありさまで、国民の狂乱をいよいよ煽った。

だれがモスクワ放棄を決定したと一言も書いていない慎重さは、いかにもだ。さすが秘密警察長官になった切れ者らしい。



地図3 モスクワでの布陣の案（ベニグセンによる）

図中央の、縦に走る黒い実線が陣地だ。川の蛇行する低地をまたぎ、モスクワ川を後ろにした「背水の陣」になっている³⁴³

ところが、エルモローフの回想によると、9月13日朝、彼がこの陣地では敵を持ちこたえられないのでは、と疑念を表すと、クトゥーゾフは諸将の面前で、エルモローフの脈をさぐり、「君、病気じゃないか」と言ったという。さすがになかなかの狸だ。

にもかかわらず、夕方近く、バルクライが「この陣地では戦えない、モスクワは放棄すべきだ」と説得しはじめると、クトゥーゾフは「注意深くバルクライの言うところを聞き、退却を自分が言い出したのでないことで、満足感を隠せず、さらにできるだけ自分への非難をかわすために、8時までに諸将を軍議に招集するよう命じた」³⁴⁴。今後の軍の行動を正式に最

³⁴³ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. Там же. С.320—321.

³⁴⁴ Ермолов А.П. Там же. С.203.

終決定するためである。

このことはバルクライの回想でも裏付けられる。彼は陣地を見て愕然とし、まずベニグセン、それからクトゥーフのもとに赴き、その難点を詳細に説明したという（ただし、軍議の開始時間は、多少食い違っており、バルクライの回想では、4時までに諸将が集合し、6時にベニグセンが来たところで会議をはじめたとある）。³⁴⁵

こうした状況をみると、一面から言えば、軍議は形式に近く、問題はもはや、ここで一戦交えるかどうかではなく、だれが責任を負うか、ということだったのが、あらためて首肯される。

しかし、この史上有名な軍議は、いろんな面からきわめて興味深い。各将帥の見解、雰囲気は、実際のところ、どうだったのか、仏軍を撤く、起死回生の秘策がいつどのような形で出てきて、実行されていったのかについて、重要な示唆を与えてくれるからだ。そこで、まずは、ボロジノからモスクワまでの露軍の後退をトルストイがどう描いたか確認したうえで、次節でこの軍議をできるかぎりくわしく正確に再現していこう。

ボロジノからモスクワまでの露軍の後退をトルストイはどう描いたか

ボロジノの会戦のところで述べたように、トルストイは、仏軍を獣や球にたとえ、それが致命傷を被り（または、露軍というもう一つの球とぶつかって、大きな衝撃を受け）、血を流しながらも（または運動エネルギーを失いながらも）、それまでの勢いの惰性で（慣性力で）、モスクワまでたどり着き（転がって）、そこで力尽きて止った、と述べている。あるいは、露軍が、目に見えにくい精神的勝利をおさめながらも、なお優勢な敵に、モスクワから押し出されたという言い方もしている。

これはたしかに、本質を突いているが、その半面、無数の原因の結果そうなった、すべてが偶然のなりゆきだったという強弁も相変わらずだ。総司令官は忙しすぎて、もろもろの事情に動かされるので、意識的になにか決断し実行することはそもそも不可能だと断ずる。この理屈だと、およそこの世には、戦略や作戦はおろか、いかなる計画的行動の余地もないことになってしまう。

こういう強弁のせいで、『戦争と平和』の描写は、あちこちで馬脚を現しており、それは、ここでも例外ではない。作者によると、クトゥーフは、モスクワ手前の陣地を自分の目で見ると、モスクワを戦わずして明け渡すことなど考えていなかった。それが陣地を実見してはじめて、「モスクワを守る物理的可能性がない」ことを悟ったという。しかも作者は、「下級の指揮官も、兵卒さえも、この陣地では戦えないと認めていた」と付け加える（3巻3編3章）。至極当然である。これでは、洞察力もないものではないか。

それでも読者が違和感をおぼえずに描写にひっぱられていくのは、個々の登場人物あるい

³⁴⁵ Барклай де-Толли М.Б. «Изображение военных действий 1812 года». СПб.: Тип.П.П.Сойкина, 1912. С.36.

は事件の一瞬一瞬を大写しにする方法が、ほかのどんな文学作品とも異なり、比類を絶したリアリティーを生んでいるからだ。これについては、あとで『戦争と平和』論プロパーのところで、別箇にくわしく分析することにする。

第7章 フィリの軍議

フィリ村でおこなわれた名高い軍議は、出席したクトゥーゾフ³⁴⁶、バルクライ、エルモーロフがくわしいメモ、回想を残しているの、かなり具体的に再現できる。開始時刻、出席者、個々の発言などで多少ちがっているところはあるが、大筋では一致している。

しかし、これらの資料を読むに当たっては、出席者の韜晦を頭に置かねばならない。当然のことだが、当時はだれも、「戦わずしてモスクワ放棄」の言い出しっぺになりたくはなかった。自分が「猫に鈴を付ける」のは御免であった。それで会戦を主張した人がいる。エルモーロフは、自分もそうだったと白状している。

ところが、モスクワ放棄の決定が、のちに、天晴れ英断、一身の評判をかえりみない自己犠牲と言われるようになってくると、今度はそちらに組したくなる。これが人情というものだろう。

出席者は、クトゥーゾフの軍事日誌によると、クトゥーゾフ以下、バルクライ、ベニグセン、ドフトウロフ、オステルマン＝トルストイ、コノヴニーツィン、エルモーロフ、トーリ。ミロラドヴィッチは、後衛を指揮していたので、出席できなかった。なお、バルクライとエルモーロフによると、ラエーフスキーも出席している（エルモーロフは、ウヴァーロフも出ていたという）。

バルクライが口火を切り、理路整然と撤退を主張

口火を切ったのはバルクライで、陣地の不利を指摘し、戦わずして撤退することを主張した。これはどの資料も一致しており、その発言の内容もおなじなので、いちばんくわしいエルモーロフから引用しよう。

陸軍大臣（*バルクライ——佐藤）はまず、現在の状況を次のように説明した。「わが軍の布陣はきわめて不利で、ここで敵を迎え撃つのは危険至極だ。優勢な敵に勝てる見込みはほとんどないだろう。かりに、戦いで陣地をもちこたえたとしても、ボロジノでのような損害を被れば、これほど広い都市を守ることはできないだろう。モスクワを失うことは陛下にとって痛手だが、予想外というわけではあるまいし、陛下を戦争終結に傾かせることもないであろう。断固戦争をつづける意志をおもちだ。かりにモスクワを守ったとしても、ロシアは、残酷きわまる、国土を消耗させる戦いを避けられるわけでもない。だが、軍を温存すれば、祖国の希望は残り、救済の唯一の方法である戦争を、より有利な形でつづけることができる。モスクワ外のさまざまな場所で、増援の準備を整え、合流する時間を稼げる。それらの場所にすでに、時を逸せず、新兵のすべての基

³⁴⁶ Кутузов М. И. Сборник документов. М., 1954—1955, т. 4, ч. 1—2.

地を移してある。カザンには新たに冶金工場がつくられ、キエフでも新兵器廠が建設され、トゥーラの兵器廠では、残りの金属で製造した兵器が完成間近だ。キエフの兵器、装備はすでに搬出した。つまり、キエフの各工場で生産した火薬で、すでに砲弾その他の弾薬が製造され、ロシア内陸に送られた」。また陸軍大臣は、皇室が在るペテルブルクとの連絡を保つため、ウラジーミル方面への撤退が望ましいと思う、と述べた。³⁴⁷

Военный министр начал объяснение настоящего положения дел следующим образом: «Позиция весьма невыгодна, дожидаться в ней неприятеля весьма опасно; превозмочь его, располагающего превосходными силами, более нежели сомнительно. Если бы после сражения могли мы удержать место, но такой же потерпели урон, как при Бородине, то не будем в состоянии защищать столько обширного города. Потеря Москвы будет чувствительною для государя, но не будет внезапным для него происшествием, к окончанию войны его не склонит и решительная воля его продолжать ее с твердостью. Сохранив Москву, Россия не сохраняется от войны жестокой, разорительной; но сберегши армию, еще не уничтожаются надежды отечества, и война, единое средство к спасению, может продолжаться с удобством. Успеют присоединиться, в разных местах за Москвою приуготовляемые, войска; туда же благовременно перемещены все рекрутские депо. В Казани учрежден вновь литейный завод; основан новый ружейный завод Киевский; в Туле оканчиваются ружья из остатков прежнего металла. Киевский арсенал вывезен; порох, изготовленный в заводах, переделан в артиллерийские снаряды и патроны и отправлен внутрь России». Военный министр предпочитал взять направление на город Владимир в намерении сохранить сообщение с Петербургом, где находилась царская фамилия.

高度に意識的だった撤退ルートを選定

バルクライの撤退論は、具体的で理路整然としており、じつにみごとである。しかも、彼は自分が「言い出しっぺ」になり、汚名を着せられることを恐れなかった。クトゥーゾフは喜んだことだろう。しかし、かりに撤退やむなしとしても、ウラジーミル方面でよいのか。エルモーロフは、そちらは不適當との意見を述べた（彼の回想によると、クトゥーゾフは、バルクライの発言のあとで、エルモーロフに意見を求めた）。

クトゥーゾフ公は、従来の順序にしたがい、階級の下の方からということで、私に意見を求めた。私は、陸軍大臣の提案の根拠には完全に納得しながらも、ウラジーミル方向への撤退は状況からみて不適當ではないか、と敢えて指摘した。皇室にかんして言えば、いざという場合は、ペテルブルクを出て、いろんな場所に移ることができる——しかも、まったく安全で有利な場所に。そうすれば、軍が不利な撤退路を強いられて、南部諸県との連絡がむずかしくなることはない。南部には、軍に必要なさまざまな物資が

³⁴⁷ Ермолов А.П. Там же. С.203-204.

潤沢にある。また、トルマーソフ将軍とチチャゴフ提督との連絡が極めて困難になるような事態もさけられる。³⁴⁸

Князь Кутузов приказал мне, начиная с младшего в чине, по прежнему порядку, объявить мое мнение. Совершенно убежденный в основательности предложения военного министра, я осмелился заметить одно направление на Владимир, не согласующееся с обстоятельствами. Царская фамилия, оставя Петербург, могла назначить пребывание свое во многих местах, совершенно от опасности удобных, не порабощая армию невыгодному ей направлению, которое нарушало связь нашу с полуденными областями, изобилующими разными для армии потребностями, и чрезвычайно затрудняло сообщение с армиями генерала Торماسова и адмирала Чичагова.

さっき述べたように、トルマーソフ将軍は、開戦当初、南部でオーストリア軍をけん制しており、チチャゴフ提督率いるダニューブ（ドナウ）軍は、トルコと戦っていたが、1812年5月28日のブカレスト和平条約締結後、対トルコ戦から解放され、北上しつつあった。

だから、東のウラジーミル方面に退いたのでは、これらの部隊との連絡がむずかしくなるのは事実であり、さらにそれ以外にも、難点があった。

というのは、ウラジーミル方面に退いた場合でも、補給はやはり、物資の豊かな南部から受けるのが望ましいのだが、秋にオカ川が増水、氾濫する可能性が大きい。そうなると、南部から切り離されてしまう。この点で、エルモーロフが言うとおりに、できるだけ南部つまりカルーガ、トゥーラに近づくに越したことはないのだ。³⁴⁹

で、クトゥーゾフは、エルモーロフの発言を受けて、軍議の最後に、リャザン街道を通じて撤退すべし、と命じて終わるわけだが、撤退ルートの話はこれ以上軍議には出てこないで、ここで前もって、なぜリャザン街道なのか、なぜ直ちにカルーガ街道に入らなかったか、整理して説明しておこう。リャザン街道は、モスクワから南東方向に延びているので、かなりの大回りになる——仏軍を南方から引き離す陽動作戦にはなるが。

かりに、露軍が直ちにカルーガ街道に入ろうとした場合、すでに触れたように、行く先をナポレオンに見破られ、スモレンスク街道からカルーガ街道に回り込まれて挟撃されかねない。カルーガに補給基地があり、トゥーラにはロシア最大の兵器廠があることは、もちろん仏軍も承知していたから、その危険は少なくなかった。

しかも、露軍がフィリからすぐカルーガ街道に入ろうとすると、急傾斜、川、ぬかるみを越えねばならぬのにくわえ、仏軍に対し横腹をみせて進まねばならない。

となると、残るは、リャザン街道ということになる（仏軍が進攻してくる西方も、ペテルブルク方向つまり北方も問題外である——補給難に陥るし、これから秋、冬がくる）。

³⁴⁸ Ермолов А.П. Там же. С.204.

³⁴⁹ Кожевников А.А. Русская армия в период от сдачи Москвы до Тарутина // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.93-109.

リヤザン街道なら、前に書いたとおり、モスクワ川を渡ってしまえば——そして、その際にうまく橋を破壊できるならば——比較的安全だ。このあたりでモスクワ川はかなりの川幅になり、河岸も急峻である。

だが、追撃する仏軍の攻撃にさらされながら、うまくモスクワ川を渡れるだろうか？ かりに渡れたとしても、カルーガ方面までは遠い。むしろ仏軍のほうが近くなる…。しかもそのうえで、仏軍を撒き、いったん姿を消して見せ、先んじてカルーガ方面に着かねばならない！…

だが、クトゥーゾフらはあえて冒険に踏み切った。なぜなら、後でみるように、彼と幕僚は、さらなる秘策を用意していたからだ…。これは、祖国戦争全体を通じ最大の賭けの一つだった。

以上のことを考えると、撤退ルートを選定も、高度に意識的な作業であったことがよくわかる。クラウゼヴィッツが書いているように、クトゥーゾフと幕僚は前もって、複数の撤退ルートについて徹底的に検討を重ねていたのである。

アリバイづくりと責任逃れの主戦論も

軍議に話をもどし、諸将の発言、気分を押えておこう。ここにも、クトゥーゾフらが戦わねばならなかった「敵」が現れている。

バルクライの撤退論に対して、陣地を選んだベニグセンが反論する。ただし、その内容は、証言によってくいちがっている。クトゥーゾフとエルモーロフによると、ベニグセンは予定の陣地で敵を迎え撃つことを主張したと言う。一方、バルクライによれば、ベニグセンは、ならば陣地を変更してはどうか、と言い出した。つまり、「右翼はそのままとし、左翼はすべて濠の後ろに下げて、敵の右翼を攻撃する」ことを提案したという。要するに、左翼を雀が丘からモスクワ川の対岸に移動し、背水の陣でなくする、ということだろう。

これに対し、バルクライはこう反駁した。今からでは遅すぎる。昼間陣地を視察していたときなら、その余裕はあったが、暗闇のなかで、敵前で移動するのは危険だ。しかも、ポロジノで多くの経験豊かな将校が死んでしまった。彼らの代わりに、経験の浅い将校にそういうむずかしいことをやらせるのはむりだ——³⁵⁰。

ここでクトゥーゾフは口をはさみ、敵前で移動して失敗した例に、1807年6月14日のフリーラントの戦いを挙げて、あてこする。この戦いを指揮していたのはほかならぬベニグセンだったのだ。ベニグセンがここでナポレオン軍に負けた結果、ロシアは「ティルジットの和約」をむすばざるをえなくなった。そして、フランスの宿敵イギリスに対する「大陸封鎖」への参加をよぎなくされたのだった。

このやりとりは非常に具体的なので、バルクライの記憶ちがいということはないだろう。

³⁵⁰ Барклай де-Толли М.Б. Там же. С.37.

おそらく、ベニグセンははじめ、自分の選んだ陣地を弁護したが、批判されて代案を出したのではないと思われる。

ほかの將軍連はどうだったかという、バルクライに賛成する者も、ベニグセンを支持する者もいたが、やはり今の陣地は危ないという点でだいたい一致した。ならばいっそのこと、こちらから打って出て、仏軍を攻撃すべし、という意見もあった。しかし、開けた街道を進軍してくる優勢な仏軍に神風のように突っ込むというのか？...

エルモーロフは、そのむりを承知のうえで、アリバイづくりをする。

私はまだあまり知られた将校ではなかったので、同胞の非難を恐れ、モスクワ放棄に賛成する踏ん切りがつかなかった。それで、十分根拠があるとはいえぬ自説を貫かずに、敵を攻撃することを提案した。すなわち、900 露里もずっと撤退しつづけてきたので、敵は我方からのそうした行動を予期していないだろうから、この突然の攻撃を受けて、防御態勢に移る際に、大混乱に陥ることは疑いない。老獪な司令官である公爵（*クトゥーゾフ——佐藤）は、これに乗じて、戦局を大きく変えることができる、と。クトゥーゾフ公は不満げに、君は責任がないからそんな意見を吐くのだ、と言った。³⁵¹

Не решился я, как офицер, не довольно еще известный, страшась обвинения соотечественников, дать согласие на оставление Москвы и, не защищая мнения моего, вполне не основательного, предложил атаковать неприятеля. Девятьсот верст непрерывного отступления не располагают его к ожиданию подобного со стороны нашей предприятия; что внезапность сия, при переходе войск его в оборонительное состояние, без сомнения произведет между ними большое замешательство, которым его светлости как искусному полководцу предлежит воспользоваться, и что это может произвести большой оборот в наших делах. С неудовольствием князь Кутузов сказал мне, что такое мнение я даю потому, что не на мне лежит ответственность.

アリバイづくりと責任逃れのために、一戦まじえるべしと主張した人は、エルモーロフ以外にもいただろう。

「モスクワを敵にくれてやることで、敵の必然的滅亡を準備する」

とにかく、以上でだいたい意見は出尽くし、最後にクトゥーゾフがリャザン街道を通過して撤退することを命じて終わる。以下に、クトゥーゾフの軍事日誌から引用する。

このあと、元帥は、出席者たちに向かってこう言った——。モスクワを失うことは、まだロシアを失うことではない。自分の第一の義務は、軍を守り、軍の増援におもむきつつある部隊と合流することである。そして、モスクワを敵にくれてやることで、敵の

³⁵¹ Ермолов А.П. Там же. С.204.

必然的滅亡を準備することだ。以上のことに鑑み、モスクワ市内を通過し、リャザン街道を通過して退却するつもりである――。

元帥は、こう言ってから、軍に退却の準備をするよう命じた…。³⁵²

これはバルクライの意見をほぼそのままなぞったものだが、「モスクワを敵にくれてやることで、敵の必然的滅亡を準備する」という一句がざらりと光っている。自分が撤退を言い出すのはいやだから、わざとバルクライの尻馬に乗ってみせながらも、最後にこういう問答無用の決め文句を吐く。撤退の戦略的意味についてずっと熟考を重ねてきたことが透けてみえないだろうか。

エルモーロフもそういう感想をもったようである。

おなじ意見（*モスクワ放棄――佐藤）の人すべてにとって、陸軍大臣（*バルクライ――佐藤）の提案が指針になった。彼らがどんな理由を挙げて説明しようと、これ以上徹底した論拠はありえなかったからだ。クトゥーゾフ公爵は、彼に完全に同意しつつ、撤退の命令書を作成するよう命じた。威厳にみちた重々しい態度で、諸将の意見をひとつひとつ聞きながら、彼は、自分の意志ではなく、要求されて撤退するということで、満足の念を隠せなかった。もっとも彼は、うわべでは、一戦まじえる覚悟であるように見られたがっていたが。³⁵³

Всем одинакового мнения служило руководством предложение военного министра, без всякого со стороны их объяснения причин, и конечно не могло быть места более основательному рассуждению. Разделяя его вполне, князь Кутузов приказал сделать диспозицию к отступлению. С приличным достоинством и важностию, выслушивая мнения генералов, не мог он скрыть удовольствия, что оставление Москвы было требованием, не дающим места его воле, хотя по наружности желал он казаться готовым принять сражение.

エルモーロフの観察はたぶん正しいだろう。ここで仏軍と戦おうが戦うまいが、どっちみちモスクワを明け渡さざるをえなくなる公算が大なのだ。それならば、軍の損害を避けて、そのまま退くに越したことはないのだから。そして、「モスクワを敵にくれてやることで、敵の必然的滅亡を準備する」ことができる。しかも、バルクライが言い出しっぺになつてくれたのだ。言うことないではないか。

クトゥーゾフは、会議の締めくくりに、こう言ったという。

³⁵² «Из журнала военных действий о военном совете в Филях 1 сентября 1812 г» в кн.: "Клятву верности сдержали": 1812 год в русской литературе. М., "Московский рабочий", 1987.

³⁵³ Ермолов А.П. Там же. С.205.

ナポレオンは奔流だ。われわれはまだそれを止めることができないが、モスクワがスポンジになって、吸い込んでくれるよ。³⁵⁴

クトゥーゾフの副官であったミハイロフスキー＝ダニレフスキーによると、早くもボロジノの会戦の直後に、「敵がモスクワを占領しても、水中のスポンジみたいにふやけるさ」と言ったという³⁵⁵。

しかし、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーなどによると、軍事会議のあとの夜、クトゥーゾフは何度も泣いていた。

一晩中クトゥーゾフは沈み込んでおり、彼が最も信頼し愛していた士官（*カイサーロフ〈Пайсий Сергеевич Кайсаров〉——原注）の証言によると、何度か悲しげに泣いていた。³⁵⁶

だが、クトゥーゾフには感傷にふけっている暇はなかった。

モスクワ放棄を決めると（*つまり、フィリの会議後ということである——佐藤）、<...>クトゥーゾフは主計将官（経理部長）のランスコーイを呼び、食糧の手配を命じた。「われわれはどこに行くのですか？」とランスコーイは尋ねた。「リャザン街道だ」。「そっちへ食糧を運ぶのはむずかしいです。カルーガ、トゥーラ、オリョール、シンビルスクの諸県に集められていますし、食糧を積み込んだ輜重は大部分、セルプホフに向っています」。「よろしい」とクトゥーゾフは答えた。「そのことは明日、その場所に着いたところで、話そう」³⁵⁷

セルプホフは、ポドリスクからトゥーラ街道を南下したところに位置し、モスクワとトゥーラのほぼ中間点である。ポドリスクは、前にみたように、撤退ルートの中ばに位置する経由地点だ。その南方に、前もって食糧を集めていたわけである。準備は整っていた。あとは、リャザン街道でモスクワ川を渡河し³⁵⁸、仏軍をうまく撤くことさえできれば！…

³⁵⁴ Троицкий Н.А. Там же. С.308.

Военский К. А. Отечественная война 1812 года в записках современников (Материалы воен.-учен. архива). СПб, 1911. С.70.

³⁵⁵ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ. С.284.

³⁵⁶ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ. С.332.

Троицкий Н.А. Там же. С.310.

³⁵⁷ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ; Богданович М.И. Там же. Том II. С.252-253.

³⁵⁸ この地点には現在、新リャザン街道のザオゼリエとチュルコヴォを結ぶ車両用鉄橋（Автомобильный мост через Москва-реку на Новорязанском шоссе между Заозерьем и Чулково）が架かっている。この鉄橋は1955年に造られたもので、筆者の通勤路でもある。以下に写真がある。

<http://titovo-online.ru/2014/09/kogda-postroyat-most-v-chulkovo/>（2015年9月10日最終閲覧）

トルストイはフィリの軍議をどう描いたか

『戦争と平和』では、一言でいうと、バルクライの役割はほぼ完全に無視され——「フィリの近くで防衛戦を戦うことは不可能というバルクライその他の説」という一句があるのみだ——、悪玉ベニグセンと善玉クトゥーゾフの一対一の対決にすりかえられてしまう。

いわく、クトゥーゾフの見るところ、ベニグセンは、「モスクワ防衛が不成功の場合は、戦わずして雀が丘まで軍を退却させたクトゥーゾフに罪をなすりつけ、成功した場合は自分のでがらにする。自分の案が採用されなかった場合は、モスクワ放棄の罪を免れる」(3巻3編3章)目算であった。しかし、クトゥーゾフただひとは、「事件の必然的進行をみるすべを知って」おり、大きな「無私」をそなえた人物で、「自分のものがなにもない」という(3巻2編16章)。そういう彼のみが、一身に責任を負うことをおそれず、退却を決断する——。

『戦争と平和』について数言をついやすで、トルストイは、「これは小説ではない」と述べているが、それにならって、「これは歴史ではない」と言い得るだろう。では、それはなんなのか?... この辺で『戦争と平和』の問題点を整理しておこう。

小説でもなく歴史でもない『戦争と平和』とは？

祖国戦争に対するトルストイの見方は、これまで何度も述べてきたように、一言でいうと、そうなるべくしてなった、というものだ。無数の原因が寄り集まって、たまたまそうなったにすぎず、どれ一つが欠けても、事件は起こらなかった。だから、特定の原因をとりだすのは不可能である。すべては、あたかもその事件を起こさんがための「偶然」のなりゆき、すなわち、人知を超えた高度な必然性(運命または「神の摂理」)だということであった。これは裏返せば、人間が意識的に事件に働きかけることは、根本において不可能ということだ。あらゆる原因とその「合力」がどっちに向くか、前もって予想することはできないからである。一切が必然に圧倒されており、自由の余地はない——。

しかし実はこれは、決して見た目ほどの極論ではない。われわれの日常生活を眺めても、そのときはいっばし自分の頭で考えて自発的に行動しているように感じられたとしても、あとから振り返ると、あるいは巨視的に距離を置いてみると、たんに事件に翻弄されていたにすぎず、そうするしかなかった、というケースがほとんどだからだ。人生において真の自由、独創はまことに稀である。軍隊で立てられる作戦も、個々の戦闘も、大半はこのたぐいだ。この点でトルストイは誤ってはいない。彼がエピローグ第2部の「歴史哲学」で述べているとおりののだ。

トルストイは当時ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』を愛読していたが、ここに根本的な接点がある。個々の人間は、世界の不可解な「意志」に弄ばれているにすぎず、やがて、死という人生最大の、しかし最もありふれた必然が、個人の生を跡形もなく消

し去ってしまうだろう。

では、トルストイの考えでは、祖国戦争という事件もまた、たんなる成り行きにすぎないのか。それは、仏軍と露軍という二つの歯車の不可解な運動にすぎず、参加者はみな十把ひとからげに弄ばれていたのか？

決してそうではない。ボロジノの会戦で露軍の将兵は、「愛国心の潜熱」で結びつき、より熱く、より高密度で、ゆえにより大きなエネルギーを生み出し、仏軍という「塊」^{かたまり}に致命的な衝撃を与えることができた。

「愛国心の潜熱」は、愛国心につきものの残酷さ、排他性、優越感などを突き抜け、或る普遍的な愛につながるものとされる。人間を翻弄する偶然を突破し、神慮に触れた、と言ってもよく、これは、したがって、必然の奴隷である状態を突破する行為であった。

トルストイによれば、ナポレオン麾下の仏軍には、こういう深い層に達したものはない。クトゥーゾフと兵士は、正教の「ソボルノスチ」を思わせる、或るロシア的原理で結びついている。クトゥーゾフは、大きな「無私」の人であり、ほかのだれよりも深く神秘的な運動を洞察し、神意に参入している。ロシアの将兵は、それを直観して彼を戴き、彼に従う。

『戦争と平和』では、ロシア対外国（ドイツ）という図式が露わであり、しかも、クトゥーゾフばかりに焦点が当たり、あとはその他大勢という扱いになっているが、これは、作者のこうした捉え方から出てくる。

なるほど、アレクサンドル・ネフスキーやドミトリー・ドンスコイなどの偉大な軍司令官と兵士たちの伝説を思わせるような、あまりにも古風な図式だ。しかし、こうした集团的アーキタイプ（元型）が、1812年に現実に現れたことをトルストイは信じていたようだ。そして、このアーキタイプがロシアの読者に強烈に作用するであろうことも、過たず見抜いていた。個々の事実の歪曲、無視などは、どうでもいい。すべては、主要なイデーを際立たせるための処理であった。ナポレオンを、歴史の本質が分からぬ阿呆に仕立てたのも、そのためだった。

では露軍は、1812年の現実の世界において、どのようにして必然に抗しつつ、ついに勝利を収めたのであろうか。そして、『戦争と平和』でピエールとトルストイは、この露軍の「自由の勝利」をいかに認識し、そこに自らも参入しようとするのだろうか。それを、以後のモスクワ大火とカルーガ街道への転進で見していこう。トルストイは、核心の部分では、決して誤っていない。

第8章 露軍がモスクワを放棄し、仏軍が入城

露軍の苦渋の首都撤退

バルクライの回想によると、フィリの軍議後、命令では、「ただちにすべての輜重と砲兵隊の大部分が出発し、軍は深夜 2 時にリャザン街道を通過して撤退するはずであった」。しかし、「秩序立っての撤退とはお世辞にも言えず」、バルクライは、病身を押して、尋常ならざる努力を強いられたと言う。「先導役はおらず、道路、橋の状態を管理すべき者も、我勝ちに進み、逆に交通を妨げた」³⁵⁹

戦わずして撤退ということで、軍の落胆、士気の低下はいちじるしかったという³⁶⁰。軍がこういう状態で大都市のなかを退却していくのは、とても危険なことで、落伍者の増加、軍の分散、消滅の危険があり、指揮官の苦労はなみたいていではなかった。バルクライは撤退の間、18 時間にわたって一度も馬から降りなかった³⁶¹。

エルモーロフの回想では、軍は夜 10 時に、二手に分かれて撤退を開始する。要するに、会議が終わるとすぐに順番に出発していったようだ。軍の半分は、ドロゴミーロフスキー橋を通り、もう半分は、いわゆる「川向こう」→カーメンヌイ橋のルートで進み、いずれもリャザン街道に向かった。

しかし、「川を渡らなければならなかったし、通りはせまいし、輜重は大量にあり、おまけに戦闘にそなえて部隊のすぐそばで運んでいたのも、極度にごった返していた。かてて加えて、予備の砲兵隊と弾薬、避難するモスクワの住民の群れで、軍の移動は難渋し、昼になっても、市外に出られなかった」³⁶²

ミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、この状況を「モスクワがモスクワから出ていく」*«Москва уходит из Москвы»*と一言で言い表している。この表現はほかの文書にも出てくるので、人口に膾炙していたようだが、なかなかの名文句ではないか。

あんまり渋滞がひどいので、クトゥーゾフはエルモーロフを露軍後衛を指揮するミロラドヴィチのところに派遣した。できるかぎり敵を食い止めるか、一時休戦に応じさせて、軍と輜重をぶじ市外に撤退させるためだ。³⁶³

ミロラドヴィチは、仏軍後衛の指揮官のひとり、セバスティアーニ将軍に、モスクワから

³⁵⁹ Барклай де-Толли М.Б. Там же. С.38.

³⁶⁰ 「多くの者は軍服を破り捨て、恥ずべきモスクワ放棄のあとでは、勤務を望まなかった」(Маевский С.И. Мой век, или История генерала Маевского // Русская старина. 1873. № 8. С.143)。

Троицкий Н.А. Там же. С.310.

³⁶¹ Кожевников А.А. Там же. С.93-109.

以下の文献も参照。

Троицкий Н.А. Там же. С.311—312.

Левенштерн В.И. Записки // Русская старина. 1901. № 1. С.106.

³⁶² Ермолов А.П. Там же. С.205.

³⁶³ Ермолов А.П. Там же. С.205-206.

退却するまでのあいだの休戦を申し込んだ。二人は旧知の間柄だった。ミロラドヴィチは、もし仏軍が休戦に応じなければ、徹底的に戦い、モスクワは廃墟となる、と脅した。仏軍前衛を率いるミュラー元帥は承諾し、同日 14 日（2 日）の夕方に、翌 15 日（3 日）の朝 7 時までの休戦に同意するとつたえてきた。おかげで、露軍と住民はぶじ退去できた。

しかし、負傷した多数の将兵が置き去りとなった。「負傷者のうめき声に魂をかきむしられた」³⁶⁴

エルモーロフの説明では、グジャーツク（現スモレンスク州ガガーリン市）で、クトゥーゾフが負傷者をモスクワに運ぶ指令を出していたので、ここに大量の負傷者が集まってしまったのだ。エルモーロフは、「後先のことを考えない判断」と非難しているが³⁶⁵、しかし、実際問題として、荷車を割いて、負傷者をカルーガ方面や北の方に分散して送れたかどうか、きわめて疑問だ。

クラウゼヴィッツも、これらの負傷者を目の当たりにしている。

いちばん重苦しい光景は、置き去りにされた多数の負傷者であった。彼らは、家々に沿って、長い列をなして横たわっており、連れて行ってくれ、と空しく頼みつづけた。

これらの不幸な人たちはすべて、死を運命づけられていた。³⁶⁶

なぜ彼らが「死を運命づけられていた」というと、露軍がモスクワを抜けるとすぐに火災がはじまったからだ…。

その置き去りになった、負傷した将兵の数は、ニコライ・トロイツキーが各種資料を整理して推算しているとおり、2 万を超えるのは確実である。国家評議会の公式の数字によれば 2 万 2500 人、モスクワ総督ロストプチンは 2 万 2000 人、クラウゼヴィッツは 2 万 6000 人という数字を挙げている。トロイツキーは、「そのほとんどではないにせよ、非常に多くが焼け死んだ」と述べている。しかも、これに先立って、ボロジノからモスクワへの退却途上、モジャイスクで、1 万人から 1 万 7000 人（資料により数字が異なる）の負傷者を、やはり置き去りにして、街に火を放ち、結果的に焼き殺している。このモジャイスクの悲劇は、ペレストロイカ末期の 1989 年に初めてあきらかにされた。³⁶⁷

これら見棄てられた負傷者のなかには、避難民に救われた者もいたかもしれないが（『戦争と平和』でロストフ家に荷馬車を提供されて避難できた負傷者のように）、その一方で、かりに焼死を免れたとしても、飢えや傷の悪化で死亡した者もきわめて多かったはずだ。

³⁶⁴ Ермолов А.П. Там же. С.206.

³⁶⁵ Ермолов А.П. Там же. С.206.

³⁶⁶ Карл фон Клаузевиц. Там же. С.101.

³⁶⁷ Троицкий Н.А. Там же. С.317-318, 528.

Кутузов М. И. Сборник документов. М., 1954—1955. Ч.1. С.471.

Русский архив. 1901. № 8. С.462.

Куковенко В.И. Забытая страница войны 1812 г. // Вопросы истории. 1989. № 12. С.173-176.

クトゥーズフ以下、露軍の苦悩は、聖都の放棄以上に、ボロジノなどで命をかけて戦った戦友たちを見殺しにせざるをえなかったことにあったと思われる。1812年の焦土戦術で亡くなったり、なんらかの被害をこうむったりした国民の総数となると、はたしてどれほどの数にのぼるであろうか？...

しかし、モスクワを焼き尽くすことになる大火について——2万超の負傷者を置き去りにせざるを得なかった事情もふくめ——くわしく述べるまえに、いったん場面を首都に入城するナポレオンに移そう。

ナポレオン、もぬけの殻のモスクワへ入城：住民はなぜ逃げたか³⁶⁸

ついにナポレオンはポクロンナヤの丘³⁶⁹に達し、そこでしばし感慨にふけり、首都の代表団を待たせたが、待てど暮らせど、だれも来なかったばかりか、市が文字どおりもぬけの殻になっていると聞き、仰天した。このあたりは、コランクールやセギュールがくわしく回想している。

当時のモスクワの人口は27万ほどだが、残った数はというと、タルレは「数千人」だという。正確な統計はないし、ありえない、と³⁷⁰。

*1812年1月20日にモスクワ警察署長 P.A.イワシキン (П. А. Ивашкин) が報告したところによると、1811年当時、モスクワの人口は計270184人(男性157152人、女性113032人)である。警察の他の報告書によれば、次の表(オリジナルと翻訳を示す)にみるように、275281人だ。

³⁶⁸ ナポレオンのモスクワ入城については、かつて筆者は「ロシアNOW」紙電子版の「今日は何の日」に簡単に書いたことがある(2012年9月14日付の「ナポレオンの「大陸軍」がモスクワに入城」)。

<http://jp.rbth.com/articles/2012/09/14/38987.html> (2015年8月8日最終閲覧)

³⁶⁹ ポクロンナヤの丘 (Покло́нная го́ра) は、モスクワ都心から西方にのびるクトゥーズフスキー大通り沿いにあり、セトゥニ川とフィリカ川の上に位置する。1812年当時は、まだモスクワの郊外で、そこから同市と近郊のパノラマが一望できた。

古来より旅人は、ここでたたずみ、首都をながめ、「四十の四十倍」の教会にぬかずいた。ここからポクロンナヤの丘の名がある(ポクロン=叩頭)。

また、かつてはここで外国の使節団などの賓客を迎えた。この故事にしたがって、ナポレオンはクレムリンの鍵をもった代表団をむなしく待ちつづけたわけである。(前掲書)

³⁷⁰ Тарле Е.В. Там же. С.580.

Сословная группа	Численность	В %
Дворяне	17 432	6,3
Купцы московские	15 839	5,8
Купцы иногородние	3 285	1,2
Мещане московские	15 131	5,5
Мещане иногородние	3 007	1,1
Цеховые	8 000	2,9
Дворовые, приписанные к домам	12 674	4,6
Дворовые, не приписанные к домам	76 866	27,9
Крестьяне казенные	37 523	13,6
» помещичьи	41 153	14,9
Фабричные	4 275	1,6
Разночинцы	10 771	3,9
Приказнослужащие	375	0,1
Церковнослужители и монахи	5 104	1,9
Нижние чины, военнослужащие и отставные	19 079	6,9
Иностранцы	3 214	1,2
Ямщики	1 553	0,6
Всего	275 281	

身分	人口	%
貴族	17432	6.3
モスクワの商人	15839	5.8
他の都市の商人	3285	1.2
モスクワの町人	15131	5.5
他の都市の町人	3007	1.1
職人 (手工業団体のツェーフに登録した者)	8000	2.9
屋敷付きの召使	12674	4.6
屋敷付きでない召使	76866	27.9
国有地農民	37523	13.6
農奴	41153	14.9
工場労働者	4275	1.6
雑階級	10771	3.9
下級官吏 (一等官—十四等官の官等表に含まれず、したがって官等をもたず、主に筆耕、清書などの補助的な仕事を行った者。 коллежские / канцелярские / конторские / приказные служители などと呼ばれた)	375	0.1
聖職者、修道士	5104	1.9
下級官吏 (九等官—十四等官)、軍人 (退役軍人をふくむ)	19079	6.9
外国人	3214	1.2
御者	1553	0.6
合計	275281	

1811年時点でのモスクワの人口構成³⁷¹

³⁷¹ ・ Федеральный портал PROTOWN.RU

<http://protown.ru/russia/city/articles/4623.html> (2015年8月17日最終閲覧)

・ Горностаев М.В. Граф Ф.В. Ростопчин – истинный патриот России // журнал «Русская Мысль», 2009, № 1-12. С.66.

・ Горностаев М.В. Государственная и общественная деятельность Ф.В. Ростопчина в 1796-1825 гг. Глава 3. 1 (дисс.канд.ист.наук, 2003, Московский государственный областной университет).

なお、祖国戦争前夜のモスクワの人口構成に関連し、ロシア近代の身分制について一言。これは、18

陸軍中将ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記（11月28、29日〈16、17日〉）によると、彼は11月27日（15日）にモスクワ入りして状況をつぶさにみているが、仏軍占領時に残っていたロシア人は「1万人以下」だったという。なお、彼がこのときモスクワ大火の被害状況について聞いたところでは、モスクワの全戸数1万戸のうち焼け残ったのは、2300戸（4分の1弱）³⁷²にすぎなかった。大火の被害についてはあとでくわしくみる。

ほぼ全市民が退去したことについて、エルモーロフもトルストイも、前代未聞の愛国心の発露と賞賛しているが（『戦争と平和』3巻3編5章）、はたしてそうだろうか？ ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記から実際の状況がうかがえる。

モスクワ住民はみな、すべての家屋が焼かれることを恐れ、多数が退去しつつある³⁷³。
（8月31日〈ユリウス暦8月19日〉の日記）

ドミトリーは、早くも8月23（11日）には、18日（6日）のスマレンスク陥落と大火、都市の壊滅を知っている（火を放ったのは、すでにみたように、焦土戦術をおこなってきた露軍自身である。それがいかに徹底したものだったかは、仏側のコランクール、セギュールなどの回想でもあきらかだ）。

世紀にピョートル大帝が西欧の身分制を取り入れたもので、皇族、世襲貴族を頂点に、一代貴族、聖職者、名誉市民、商人、町人、職人、農民、コサックなどからなっており、それぞれが特定の法的地位、特権、義務を有していた。おもな身分の定義を箇条書きにしてみよう。

世襲貴族：一族の先祖の功績に発する身分だが、新たにこの身分を得ることも可能だった。そのための条件は、武官では大佐、文官では4等官になるか、四等聖ウラジーミル勲章を授与されること。県ごとに貴族団を構成し、地方行政で大きな権限をもった。

一代貴族：武官では尉官、文官では9等官になるか、何らかの勲章をもらうこと。

聖職者：聖職者とその妻。

世襲名誉市民：一代貴族と聖職者の子に与えられる。例を挙げると、ドストエフスキーの名作『白痴』の主要登場人物の一人、パルフォン・ロゴージンは世襲名誉市民だ。

一代名誉市民：貴族と世襲名誉市民の養子、帝国大学の卒業者、官吏。

商人：ギルドに登録し商業を営む者とその家族。

町人（メシチャニン *мещанин*）：一代名誉市民の子、商業活動を止め商人身分を失った者。

職人：手工業団体（ギルド）のツェーフ（*цех*）に登録した者。

農民：農村共同体「ミール」に登録している者。

*以下を参照

・「ロシア NOW」の電子版に掲載された拙稿「今日は何の日：ソビエト政府が身分制廃止令を布告」（2012年11月23日付け）

<http://jp.rbth.com/articles/2012/11/23/40157.html>（2015年8月8日最終閲覧）

・『ロシア・ソ連を知る事典』（平凡社、1989年）、「身分」の項目。

・РОССИЙСКИЙ ЧИНОВНИК НА СЛУЖБЕ в конце XVIII - первой половине XIX века Л.Ф. Писарькова // журнал "Человек", № 3, 1995.

³⁷² Волконский Д.М. Там же. С.152.

³⁷³ Волконский Д.М. Там же. С.141.

その翌日には、ドミトリーはただちにモスクワ退却の準備をはじめ、荷車、馬 20 頭を買う（8月26日〈14日〉の記述）。9月4日（8月23日）には、ウグリッチ、イロヴナ（Иловна）³⁷⁴に家族全員を出発させ、ドミトリー自身は軍に復帰するつもりだったので、残る（当時、妻は出産をひかえていた。にもかかわらず、馬車での長旅を決断せざるをえなくなった、ということだ）。9月1日（8月20日）には、外交文書の搬出がはじまる。9月3日（8月22日）までには、国と市の資産の多くが運び出される（武器、資金、財宝、書類...）――。

スモレンスク陥落と炎上がつたわるや、住民の大半が、まさに雪崩を打ったように逃げ出しはじめたのがわかる。まだ、9月7日（8月26日）のボロジノの会戦のだいぶ前だ。

どんな都市でも、スモレンスクのような聖都でもなんでも、露軍（お上）は焼く。ナポレオンはちょっとやそっとのことでは止まらない。ということは、モスクワも焼かれる！という結論を出した人が大多数だったということになる。

タルレもまた、住民が群れをなして続々逃げ出したことについて、こう言う。

モスクワの住民は、ありとあらゆるルートで、情報をキャッチしていた。〈...〉しかも、ロシアの半分は火事で焼けていたのだ。³⁷⁵

情報とうわさの出所は？ ひとつには、事態の成り行きを推測だろう。今述べたように、スモレンスクが落ちれば、もうモスクワまでナポレオンを止めるのはむずかしい。そうなれば、露軍は撤退し、モスクワは露軍自らの手で焼かれることになろう。これまでの徹底した焦土戦術から、そういう展開になりそう。スモレンスクのような聖都でさえ、例外ではなかったのだから、というわけだ。

もうひとつ、やや先走るが、ロシア側による放火計画がもれた、という可能性もあるだろう。あとで詳しくみるように、これくらい大がかりな計画だと極秘にことを運ぶのはむずかしい。すくなくとも近親者には知らせて無事に逃がしたいと思うのが人情だ。

それどころか、モスクワに住んでいたフランス人の女優、ルイーザ・フューズィーの自宅には、警官が立ち寄り、「まもなく火が放たれることになっている。消防ポンプは撤去されているので、退去してください」と避難勧告をしたという³⁷⁶。

無人のモスクワで肩透かしを食ったナポレオンは、とにもかくにもクレムリンに入るが、早くもその夜に、大火で度肝をぬかれ、命からがら猛火のなかを脱出することになる。さて、こんどはその大火を見る番だ。

³⁷⁴ イロヴナ（Иловна）は、ヤロスラヴリ県に位置し、ドミトリー・ヴォルコンスキーの妻の実家であるムーシン＝プーシキン家の屋敷があった。ドミトリーの岳父は、『イーゴリ軍記』を出版したアレクセイ・ムーシン＝プーシキンである。

³⁷⁵ Тарле Е.В. Там же. С.575.

³⁷⁶ ナイジェル・ニコルソン、前掲書、162頁。

Fusil, Louise «Souvenirs d'une Femme sur la retraite de Russie», Paris, 1910.

第9章 モスクワの大火

今も残る謎

モスクワの大火という歴史的な大事件には、いろいろと不可解なところがある。この空前の大火災により、大都市は、わずか数日ではほぼ4分の3が完全に灰燼に帰した。約10万の兵力を擁する仏軍の占領下でありながら、こうも「効率的」に燃えたのはなぜか。仏軍の目を盗んで数ヶ所に火をつけたくらいでは、これほどの「戦果」は得られなかっただろう。ナポレオンが兵士に約束してきた「潤沢な補給品」と「快適な冬営地」を一気に奪った大火は、たしかに甚大な戦略的効果を上げた。

翻ってみれば、露軍がこれまで一貫して焦土戦術を徹底的に展開してきたことは、これまでたしかめたとおりである。とすると、モスクワ大火もその延長で、入念に練られた作戦としておこなわれたのだろうか。

ここで前もって述べておくと、モスクワ総督フョードル・ロストプチンが放火に直接関与していることは、なにしろ証拠がたくさんありすぎて、今日では疑う人はまずいない。現在、論者の大半がロストプチン単独犯行説をとっている。

しかし、後でみるように、クトゥーゾフ率いる露軍が放火に関わっていることもまた疑問の余地がない。となると、ロストプチンと軍が示し合わせて（あるいは別々に？）、ボロジノの会戦などで戦った2万数千の負傷した戦友を置き去りにしたうえで、「聖都」に火を放った、ということになるのか...

これらの謎を解くには、事件の全貌をくまなく再現することが必須である。どこから出火し、どう燃え広がっていったか、出火場所と延焼の経過をもれなく跡づけ、さらに放火犯にかんする情報を総ざらいしていくなかで、真実が自ずと現れよう。

事件の概要

まず初めにごく大まかな経緯を確認しておく、つぎのようになる。

9月13日(9月1日)	露軍は夕刻から夜にかけて、フィリの会議でモスクワ放棄を決め、14日(2日)にかけての深夜、撤退を開始する。
9月14日(2日)	露軍は、モスクワ市内を通り、撤退をつづける。前後して、ミューラー指揮する仏軍前衛(約2万5千人)が、クレムリンを占領する。ナポレオンの主力部隊も、夕方、モスクワ入り。ナポレオンは、モスクワ西方の関所の近くにあるドロゴミーロフスカヤ村(Дорогомилловская слобода)に泊まる。この夜、キタイ・ゴロド(Китай-город)、ヤウザ地区(Яузская часть)などでつぎつぎに出火する。
9月15日(3日)	朝、ナポレオンは近衛軍とともにクレムリンに入城する。このとき、すでにキタイ・ゴロド全体が燃えていた。
同日夜(15日-16日(3日-4日))	クレムリン周辺をふくめ、モスクワは火の海につつまれる。

9月16日(4日)	早朝、ナポレオンは、クレムリンから命からがら避難し、市北東部にあるペトロフスキー宮殿(Петровский путевой дворец)に移る。大火は、18日まで燃えつづけ、市のおよそ4分の3を焼く。
9月18日(6日)	ナポレオン、クレムリンにもどる。
10月18-19日(6-7日)	仏軍、モスクワから撤退する(ナポレオンの言葉を借りると、カルーガ方面へ「進軍」する)。

いつ、どこから、どういう順番に出火し、どこが燃えたかは、だいたいあきらかになっている。大著『祖国戦争とロシア社会』所収の関連論文³⁷⁷と、ソ連時代の史家タルレの著作では、それが時系列にそって整理されており、とくに前者はくわしく網羅されている。全貌をイメージしやすくするため、まずその概略をみると――。

9月14日(2日)の夕方、ナポレオンは、「なんとという恐るべき砂漠だ!」と呆れながら空のモスクワに入り、その夜は、ドロゴミーロフスカヤ村(Дорогомиловская слобода)に泊まるのだが、就寝する前からつぎつぎに伝令や副官がやってきて、火事の報告をする³⁷⁸。

夜の2時すぎには、市の中心部でも出火する。また、仏軍のいなかった家々でも火の手が上がる。

この大火でまず初めに出火したのは、酒屋(винный двор)だった。ちなみに、あらかじめ酒樽や瓶を叩き壊しておくように指令がでていた。火薬を扱っていた店も、早い時期に爆発している。また、「工場という工場はすべて燃えた」³⁷⁹

9月15日(3日)朝、ナポレオンは近衛軍とともにクレムリンに入城するが、すでにキタイ・ゴロド(Китай-город)全体が燃えていた。こういう状況だ。

出火、延焼の経緯

こんどは、『祖国戦争とロシア社会』のI.M.カターエフ「モスクワ大火」にしたがって、突っ込んで網羅的にみていこう³⁸⁰。この論文では、大火の発端となった9月14-15日(2-3日)の出火場所が時系列にそって詳細に再現されている。以下がその引用だ。

同時代人たちが一致して証言しているところでは、火事は、フランス軍がモスクワに入ったその日、9月2日月曜日の夕方にはじまった。

実際、夜8-9時に、いくつかの地点で出火している。まず、ソリャンカの孤児院の近く、キタイゴロドの金物屋や、ペンキ、にかわ、油脂などの油化製品を売る店、および新しいマーケットで(原注――クレムリンの城壁と、ニコリスキエ門、スパスキエ門のあいだにあった)、それからヤウザ橋の向こうの、シヴィヴァヤ丘(Швивая горка)方

³⁷⁷ «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М., 1911. Т.4. С.141—171.

³⁷⁸ Тарле Е.В. Там же. С.581.

³⁷⁹ Тарле Е.В. Там же. С.583.

³⁸⁰ Катаев И.М. Пожар Москвы // «Отечественная война и Русское общество». Т.4. С.141-151.

向で出火した。<...>

トゥトルミンと部下たちは、孤児院付近の火事はなんとか消し止めたが、それ以外の場所ではいよいよ燃え盛った。とくに恐るべき光景を呈したのが、翌 9 月 3 日火曜日正午ごろ、赤の広場のマーケットの火事だった。この間、ナポレオンと随員は、一泊したドロゴミーロヴォを出てクレムリンに向かい、それにつづいて彼の軍隊は、モスクワのそれぞれに予めあてがわれた場所を占めはじめた。<...>

ヤウザ近くの火事もいよいよ燃え盛り、シヴィヴァヤ丘および長輔祭ステファン教会付近の木造家屋に延焼した。<...>

この頃、つまり 9 月 3 日に、ポクロフカでも激しい火災が発生しており、ドイツ人区とイリヤ教会近くを焼いた。またこの日の朝、モスクヴォレツキー橋に突如コサクたちが現れ、敵の面前で橋を焼いた。それにつづいて、モスクワ川の岸辺で、官営のパン屋（複数）に火の手があがり、砲兵隊の弾薬庫が轟音とともに吹き飛んだ。

これをみると、初期の出火場所は、クレムリン周辺に集中していることがわかる。コサクたちは放火部隊で、彼らが弾薬庫に火を放ったと考えられる。

9 月 15-16 日（3-4 日）には、タイムリーに強風がふく。こうして――

9 月 3 日から 4 日にかけての夜がやってきた。目撃者たちの言う「恐るべき夜」だ。この夜は強風が起こり、まもなく真の暴風変わった。突風は、市の四方八方に炎を飛ばし、明け方には、モスクワはもう荒れ狂う巨大な炎の海となっていた。

大火のクライマックスだ。この夜は、ナポレオンのクレムリンでの最初の一夜である。猛火がクレムリンに迫り、大量の火の粉が飛んでくる。クレムリンには、露軍が大量の弾薬を残していったのにくわえ、ナポレオンの副官セギュールの回想によると、ナポレオンの寝所の真向かいには、仏砲兵隊がうかつにも、弾薬を置いてしまっていた。

実のところ、クレムリンには火薬庫があったばかりでなく――これについてわれわれは全然知らなかったが――、まさにこの夜、きわめてぞんざいに配置されてその後寝込んでしまった歩哨たちが、弾薬がまるごとクレムリンに運び込まれナポレオンの居室のすぐ窓下に置かれるのを見逃してしまったのだ。

これは、四方から炎が荒れ狂い、強風が炎をクレムリンに吹き寄せ、この巨大な「焚き火」が、刻一刻とその威力を増している、まさにその時のことだった。われわれの頭上に飛んでくる火の粉が、たった一つでも弾薬箱に落ちれば、皇帝の選りすぐりの部隊も、皇帝自身も、まちがいなく死んでいたはずだ。だから、数時間にわたり、全軍の運

命は、周囲を飛び交う火の粉次第だったのである。³⁸¹

「午前四時になって、火勢のもはやとどめようもないのを悟ったわれわれは、ついに皇帝を起すことにした」とコランクールは書いている³⁸²。

火の粉ひとつで、クレムリンはナポレオンごと吹っ飛んでもおかしくなかった。まさに一触即発の事態となった。近衛軍が決死で消火にあたるなか、ナポレオンは、状況をみきわめるため、高さ 81 メートルの「イワン大帝の鐘楼」に駆け上がった。眼下の光景に、ナポレオンは息を呑む。周囲一面が火の海と化していた。³⁸³

この「恐るべき夜」（ナポレオンのクレムリンでの第一夜と重なる）が明けたときの状況を、コランクールはつぎのように描いている。

火災は、発生地点の廓外地区のはずれから徐々に拡がってきて、この頃にはすでにクレムリンのまわりの家屋に燃え移るまでになっていた。少し西に変わった風は、怖ろしいほどの火焰をあおりたて、途方もない量の火の粉を、かなりの遠方まで運んでゆく。それらは炎上する家々から二キロ以上にもわたって火の雨さながらに地に降りそそぐと、さらに火焰を呼び起こした。そうとう豪胆な者でも、そんな付近に恐怖を抱かずに踏みとどまっていられるのは至難であった。白昼の空は真っ赤に焦げていた。おびただしい樅材の火の粉だった。兵器庫の金属片で葺いた屋根を支える木の柱も、火を吹き出した。クレムリンの厨房が辛くも延焼をまぬがれたのは、箒や手桶を手に火の粉を払い落とし屋根に水をうつ兵士たちが配されたお蔭である。それにしても兵器庫の火災を鎮火にまでこぎつけた努力は、実に前代未聞というべきであった。そこには皇帝が立ち合っていた。近衛兵にとっては、皇帝がいるだけで、すべてが可能になった。〈...〉

しかし、空気が燃えていた。呼吸とともに吸い込まれるのは火そのものだった。吸い込んだ火の名残に、肺はしばらくは耐えていなければならぬ。

クレムリン南方の橋は、火焰や降りそそぐ火の粉を浴びて、たえずあちこちで炎を上げていた。近衛兵とわけても工兵たちが、名誉にかけてその橋を守ろうとしていた。私は近衛師団の将官と皇帝付き副官らとともにその場にのぞんだ。われわれもみずから作業に手を貸さねばならなかった。火に包まれながら立ち働く兵士たちの気力を維持させるためにも、猛り狂う火炎の真只中に、われわれもまた踏みとどまった。おそらくふつう、ひとはこのような場にももの一分たりともとどまっていられようか。擲弾兵の頭上で、帽子の飾り毛がみるみる焼け焦げていった。

すでに、見紛うかたのない大火であった。市の北部一帯、それに、われわれが入城後

³⁸¹ Сегюр. Там же. С.133-134.

³⁸² コランクール、前掲書、101 頁。

³⁸³ ナイジェル・ニコルソン、前掲書、164 頁。

通り抜けてきた西部地区の大半は、美しい劇場も多数の立派な建造物も含めて、あらかた火焰に舐めつくされた。われわれは炎の海のただなかで呼吸した。西風はいつときも止むことがなかった。火は勢いをますばかりで、いつ、どのようにして熄むものともしれなかった。もはや手の施しようがなかった。火焰はクレムリンの上をも這っていた。河が、ただ、東部一帯を延焼から救ってくれるかもしれぬと思われるのみだった。³⁸⁴

あわよくばナポレオン爆殺をもねらった組織的、計画的放火

以上のような大火の経過が、トルストイの主張する「自然発火」とはどうてい考えられまい。

最初に出火したところには、仏軍の警戒が嚴重だったクレムリンの近くもある。これは仏軍のしわざではありえないし、たんなる火の不始末でもありえない。しかも、露軍はクレムリンにわざわざ大量の火薬を残していった³⁸⁵。

これは露側の組織的、計画的放火にほかならず、あわよくばナポレオンの爆殺をもねらったものとしか思えない。しかも、近衛軍の大車輪の消火活動がなければ、成功していた可能性が高い。

「ロシア人は、たんに組織的に街を焼くだけでなく、まさにナポレオンを殺さんがため、クレムリンに照準をしぼった説」があると、タルレは書いているが、彼自身これに与しているのは、その記述からあきらかだ³⁸⁶。

ナポレオンは、一瞬にして、事の次第を了解しただろう。「肉を切らせて骨を断つ」ではなく、骨を断たせて肉を切り、勝つやりかたを。ナポレオンと幕僚を、聖都と 2 万の自軍の負傷兵もろとも焼き殺す、いわば国家的カミカゼを。

「なんという恐ろしい光景か！自分で火を放つとは。すばらしい建物があんなにたくさんあったのに。なんという決断力。なんという奴らだ。スキタイ人め！」。ナポレオンは絶叫する。³⁸⁷

彼は、側近に懇願されて、クレムリンから猛火のなかを命からがら避難する。これは同行したセギュールとコランクールコランクールの回想が生々しい。

ナポレオンは、ようやく鎮火した 9 月 18 日 (6 日) に、皇后マリア・ルイザあてに手紙を書いている。

この都にはナポレオンのエリゼ宮にも劣らず立派な、信じられないほどの贅を尽くし

³⁸⁴ コレンクール、前掲書、103-105 頁。

³⁸⁵ この日、ナポレオンがクレムリンに入った 15 日 (3 日) には、ロシアの守備隊が置いていった大量の榴弾、爆弾も、火の粉で爆発している (Тарле Е.В. Там же. С.584)。

³⁸⁶ Тарле Е.В. Там же. С.585.

³⁸⁷ Сегюр. Там же. С.136.

てフランス風に飾った五百五十の宮殿と、いくつかの皇居と、兵営と、豪華な病院とがあったのだ。ところがみんな無くなってしまった。火が四日以来この都を焼き尽くしているのだ。市民の小さな家はすべて木造なので、マッチのように燃える。総督とロシア人どもが、戦いに敗れたのを憤って、この美しい都に火を放ったのだ。<...> あの言語道断な輩は慎重にもポンプを奪ったり破壊したりするところまで行ったのだ。³⁸⁸

5日に雨が降り、さしもの猛火もようやく衰えはじめる…。

被害状況

大火による被害状況については、ピョートル・イワシキン・モスクワ県警察署長³⁸⁹が、仏軍退却後に首都に入り調査した数字がある。以下は、その被害状況にかんする公式の報告書で、モスクワ総督ロストプチンに提出されたものだ³⁹⁰。

聖堂、教会、修道院は、敵の蛮行で汚され、クレムリンは5箇所爆破され、グラノヴィータヤ宮殿と、他の宮殿の一部、いくつかの官庁、6496戸の石造および木造の一般家屋が焼け、通りには多数の人と馬の死骸が散乱していた。すべてこれらが、人でなしどもの蛮行の恐るべき真実を示していた。

ちなみに、1812年当時、モスクワには、木造6584戸と石造2567戸、計9151戸の家屋があった³⁹¹。

I.M.カターエフは、さらに補足する。

マーケットと屋台も、倉庫と商品ごと灰になり、工場、工房の大半も焼けた。329の教会のうち122が全焼し、残りも被害を受けたり、略奪に遭ったりした。一連の文化、教育施設も灰燼に帰した。そのなかにはモスクワ大学とその寄宿舎、それにモスクワで有名だったブトゥルリン伯爵の蔵書（4万巻）と絵画の大きなコレクションもふくまれていた。劇場、貴族団の会館、イギリス・クラブも焼けた。

こういう惨状で、9151戸のうち、実に6496戸が焼けている。約71%だ。地図にみるよう

³⁸⁸ 『ナポレオン言行録』、143-144頁。

³⁸⁹ ピョートル・イワシキン（Петр Алексеевич Ивашкин, 1862-1823）。1808-1813年にモスクワ県警察署長（московский обер-полицмейстер）を務める。陸軍少将。モスクワ放火の主な組織者の一人。

³⁹⁰ Катаев И.М. Там же.

³⁹¹ Стат. табл. о состоянии Москвы // Бумаги, относящиеся до Отечественной войны 1812 года, собранные и изданные П. И. Щукиным. М., 1900. Ч. IV, с. 230-231.

Катаев И.М. Там же. Примечание 13.

に、被害をまぬがれた地区というのは、現在のサドーヴォエ環状道路のなかでいうと、クレムリンの北に東西に帯状にのびる地区だけだ。ここだけは、風向きの変動と放火犯の都合で助かったわけだが、あとは完全に丸焼けとなっているのがわかる。



モスクワの大火（9月14-18日）で燃えた地区³⁹²

³⁹² この地図は、以下の本の付録である（著者名は「一モスクワ住民」となっており、匿名だ）。
Булгакова А.Я. «Русские и Наполеон Бонапарте». М, 1813.

第10章 犯人はだれか？

モスクワ総督ロストプチンが、モスクワ市警察などに指令を出して放火させた、という点にかんしては、なにしろ証拠がありすぎるし、仏側と露側の証言も多数あって、それがみな、おおむね一致しているので、現在の研究者でうたがう人はいない。では、彼らの独断か？ 宮仕えの身で、聖都と歴代ツァーリの霊廟、それに 2 万強の負傷者をまるごと焼く蛮行が——それがいかに「戦略的に」意味があろうと——そんな残酷きわまる決断が、単独で下せるものだろうか？…

以下、放火に関係する事実を、ロストプチンと警察にかんするものもふくめて、網羅的にみていこう。全体の状況からおのずと真実が現れると期待するからだ。

大火にかんするコランクールの証言

まずコランクールから引用しよう³⁹³。ナポレオンのクレムリンでの第一夜に、いかに仏側が火事に遭遇したか、いかに放火犯を捕らえ、どんな証言が得られたかが詳しく語られている。

9月15日(3日)正午、彼はナポレオンとともにクレムリンに入城する。アレクサンドル一世の広い居室がナポレオンのためにしつらえられた。同日夜8時に、クレムリン外の一画で火災発生が伝えられ、いちおう兵が派遣されたが、部隊の失火でいどとみなされ、大した関心は払われなかった。ナポレオンが自室に退いたので、コランクールも寝に就くが、夜10時半に召使にたたき起こされる。

彼は、街が火につつまれている、もう四、五〇分は経っている、と叫んでいた。眼を開いた私に、それを疑う余地はなかった。部屋の片隅でも灯りなしでものが読めるほどの火の明かりだった。ベッドからすべりおりると私はデュロック³⁹⁴を起こしに召使いを走らせ、急いで軍服を身につけた。

火災現場はそれでもまだクレムリンからは離れていたもので、コランクールとデュロックは、ひとまず司令部に兵を派遣して急を告げ、近衛兵に武装を整えさせるとともに、馬に飛び乗り、現場に急行する。15日から16日(3日から4日)にかけての「恐るべき夜」のことだ。以下の証言にみるように、コランクールの眼前で、つぎつぎに別々の場所でも火が起り、瞬く間

³⁹³ コランクール、前掲書、97-108頁。

³⁹⁴ ジェラルド・クリストフ・ミシェル・デュロック(1772-1813)。宮廷大元帥。ナポレオンが名を上げたトゥーロン攻囲戦で知り合い、以来、イタリア遠征をはじめ、多くの戦いに幕僚として参加した。ナポレオンが政権を握った1799年のクーデターにもくわわっている。スペイン、ロシア遠征にも随行。1813年、ドイツの「バウツェンの戦い」の翌日、砲弾の直撃を受けて戦死した。ナポレオンが最も信頼を寄せた部下の一人だった。

に手の施しようがなくなっていく。

風は北から吹き寄せてきていた。出火場所と思われる二ヶ所辺から、それはとくに強く吹きつけてくる。火焰は風に荒れ狂って、市の中央部に押し寄せてきた。零時半頃、少し西寄りに、第三の火災が発生した。すぐつづいて、四番目の火災が別のところで起った。ほんの少し西に変わった風に、それらの火は同じように煽られて炎をあげた。午前四時になって、火勢のもはやとどめようもないのを悟ったわれわれは、ついに皇帝を起すことにした。皇帝は直ちに士官たちを新たに繰り出し、事の次第と原因の糾明に急遽あたらせただった。

ナポレオンのクレムリン第一夜がこのような「恐るべき夜」となったのは偶然ではなく、前に述べたように、おそらくは、露側が彼の爆殺をねらったためである。さてこの間に、各部隊はすでに武装をととのえ待機し、少数の残留民は教会に難を逃れていた。前日から探していた消防ポンプが運ばれてきたが、使えないように破壊されていた。しばらくすると、放火の現行犯が逮捕されてくる。

そのうち、士官や兵士らが、あちこちの家々にひそんでいたロシア人警官や農民を連行してきた。彼らが屋内でかねて用意の可燃性の物に火を放ち家屋を焼き払おうとしていたところを、取り押さえたものという。また、ポーランド兵からは、すでに何人かの放火者を逮捕、殺害したことを報せてきた。彼らは、それらの放火者や一部住民の白状したこととして、全市を夜のあいだに焼き払えとの命令がモスクワ総督から警官たちに伝えられたのだと断言していた。誰にも、とても信じられぬ報せであった。

さすがのナポレオンも、「強い不安」を顔に表すようになる。午前 9 時半ごろ、ナポレオンの前で、警官の制服を着た「現行犯」の尋問がおこなわれる。彼らの供述によると、

彼らはすべてを焼き払うよう上官から命令を受けた。火を放つ家屋はあらかじめ指示されていた。どの地区でも、そのために準備が万端ととのっていた。すべてロストプチン総督の命令によるものと彼らは聞かされていた。指揮官は彼らをいくつかの区域ごとにそれぞれ小隊編成で分けした。決行の命令は、前日の夕方に出され、今朝、再び、彼らの上官から指令が出た、等々であった。

ほかの放火犯の供述も完全に一致した。彼らのうち若干名が裁判にかけられ、8-10 名が処刑されたという。

また、コランクールによると、物的証拠として、あちこちの公館、邸宅から「おなじ方法

でつくられた導火線」が見つかった。

市内のさまざまな公館や個人の邸宅から、すべて同じ方法でつくられた導火線が見出されたのは事実であり、私も他の多くの人々同様その事実の証人である。それらの導火線を、私は現場で実見した。そのうちの何本かは皇帝のもとにもたらされた。われわれがモスクワ入城の際通過してきた廓外地区からもそれらの導火線は見出されたし、クレムリンの寝室のなかからさえ発見されたのである。

クレムリンの寝室のなかからさえ、導火線が発見された！　これが事実なら、その計画性もさることながら、モスクワ総督と警察の一存ではできないことではないだろうか？

最後にコランクールは、ナポレオンが9月14日（2日）にモスクワ入りした際に捕えられたロシア人警部の「火災工作の全般にわたる詳細な」証言を挙げている。この警部はもともと、ナポレオンが市代表を探していたときに見つけられたのだが、その晩、部隊の失火と思われた小火災が望見されたとき、彼は「今によそでも火事が起るぞ」と言い、大火の始まりのときは「街はみんな焼けてしまうぞ、そういうように命令が出ているんだ」と叫んだ。そこで、この警部はあらためて尋問され、ほかの放火犯が明かした事実にくわえて、こう語った。

ロストプチン総督の出発の前日、数人の警部が総督の指定した場所に集められた。そして、その場で、彼らは火災を起すためのあらゆる準備を命じられた。また、命令一ただちに放火の実行ができる態勢をととのえておくよう指示された。この時から、各指揮官は、常にそれぞれのグループで、警部補とのあいだに連絡の徹底をはかった。決行の当日、かねて総督指定の午前一時、各指揮官は命令を受けとり、ただちにそれぞれの担当区の警部補たちに指令を発して放火の実行にあたらせたのである。また消防ポンプは消防夫とともに持ち去られた。牽いてゆくことのできないポンプは、命令によって使用できぬように毀され取りかたづけられた。

以上がコランクールの大火にかんする回想だ。ロストプチンをはじめとするロシア側の放火だったことは明らかで、その計画性、組織性に驚かされるとともに、ロストプチン（と警察）単独犯行説に対する疑念がますます湧いてくる。言い換えると、軍、政府、さらには皇帝が関与していないのかが、ここでの最大のポイントだが、まずは仏側と露側の関係資料を整理し、全体の状況を押えておこう。そのために、ロストプチン関連の情報もぜんぶ確認する。そこにもヒントが潜んでいるからだ。

仏側と露側の関係資料を整理する

大著『祖国戦争とロシア社会』所収の S.P.メリグノフの論文「だれがモスクワを焼いたか？」では、仏側と露側の関係資料が網羅され、整理されている³⁹⁵。

この論文では、まず仏側の多数の証言を整理しているが、それらがいずれも異口同音に、可燃物 (горючие материалы) をみつけた、と言っている。これを、トルストイのように、十把ひとからげに嘘と決めつけるのはむりだろう、というのがメリグノフの立場だ。

とくにおもしろいのは、じっさいにパトロールにあたっていたブルゴーニュ軍曹 (Adrien Bourgogne) の証言だ。彼は、下士官としてはめずらしく回想録を残しており、貴重である。彼はパトロール中に、複数の人間が松明で家屋につぎつぎに放火しているのに遭遇した、と語っている。

これらの不幸者たち (パトロールで拘束された者) の三分の二は囚人だった…。ほかの者は、中どころの市民と警官で、警官は制服ですぐにそれとわかった。

ブルゴーニュ軍曹はまた、ルビャンカにあったロストプチン宅に入るとすぐに、煙突のなかで、導火線の入った筒、ロケット (!) その他をみつけている。

これは、ボーセ (Louis-Francois-Joseph de Bausset-Roquefort) の回想でも裏付けられる。彼によると、ロストプチン宅に住んでいたジョアンノ軍医は、ペチカの煙突のなかで爆発物と可燃物を見つけた、と述べたという³⁹⁶。

だが、当のロストプチンはのちに、自分をことさらに犯人にしたてるために、自分がモスクワを退去したあとで、わざと「証拠」をでっちあげたのだろう、と反論している。

私の家に宿泊していたあるフランス人医師が、ペチカの一つで小銃の実包をいくつか見つけたと、私に話した。〈...〉これは、私にモスクワを焼き払う意図があったと思わせるように、その憶測の口実をさらに与えるため、私が退去したあとで置いた可能性がある。ロケットについても同様だ。〈...〉どこか民間の施設から持ってきたものかもしれない。³⁹⁷

Один французский медик, стоявший в моем доме, сказывал мне, что нашли в одной печи несколько ружейных патронов... они могли быть положены после моего выезда, чтобы через то подать еще более повода думать, что я имел намерение сжечь Москву. Равномерно и ракеты... могли быть взяты в частных заведениях.

³⁹⁵ Мельгунов С.П. Кто сжег Москву? // «Отечественная война и Русское общество». М., 1911. Т.4. С.162-171.

³⁹⁶ ボーセ (Louis-Francois-Joseph de Bausset-Roquefort, 1770—1835) は、ナポレオンの宮廷の廷臣、男爵。1805—1815年に宮内長官を務める。ボロジノの会戦の前夜、ナポレオンに、息子のローマ王の肖像画を届けたエピソードは、『戦争と平和』で皮肉に描かれている。

³⁹⁷ Ростопчин Ф.В. Правда о пожаре Москвы. // Сочинения. Спб., 1853. С. 206-207.
Мельгунов С.П. Там же. Примечание 6.

ロストプチンの関与は確実だが...

それならば、というわけでメリグノフ（「だれがモスクワに放火したか？」）は、こんどはロストプチン関連の資料を整理しなおす。その結果メリグノフは、ロストプチンとモスクワ警察の関与は動かないとするのだが、このあたりの論述は説得力十分で、筆者もまったく異論がない。すこし長いが引用しよう。

外国人たちが回想で伝えている、どれも似たような事実は、いずれにせよ、ロストプチンを頭とするモスクワの警察が火事に関与していたことを示している。そして、これら外国の同時代人の証言に、ロシア側のそれを加えることができる（たとえば、レヴェンシュテルン将軍は、いくつかの家に可燃物が隠されていたこと、ロストプチンに雇われた者たちが放火したこと、などを語っている³⁹⁸）。しかし、とくに注目すべきは、1812年の夏秋の証言者、目撃者のうち最も信頼できる一人であるベストウージェフ＝リュミンの証言だ。彼は、みずからの『短いスケッチ Краткое описание』で、街の様子を見にいったときのことを物語っている（当時、フランス軍はまだモスクワに入っていなかった）。「クレムリンのスパスキエ門に近いロブノエ・ミェスト³⁹⁹や赤の広場は、人がいっぱい、ごった返していた。油化製品を商う店がすでに焼かれていたので、大気中には耐えがたい悪臭が漂っていた。聞くところによると、警察分署長のなんとか公爵がみずから火を放ったということだった」⁴⁰⁰...。これらの事実を、ロストプチンが9月1日にイワシキン警察署長に対して消火ポンプ運び出すよう命令していることと合わせれば、また、アルコールとウォツカの樽を割るよう命令していること、シーモノフ修道院とクラスヌイ・ホルム（赤い丘）付近の、補給物資を積んだ厩を焼くよう命じていることと照合するならば（これは、ヴォロネンコ警察署長の報告によると、「敵の面前で、夜10時まで可能なかぎり」実行された）、モスクワ警察が、初期の放火にかなり活発に参加していたことはより明瞭になる。ロストプチンは、モスクワにフランス軍が入るや否や同市は焼ける、と完全に確信していたと明言している。われわれは何も

³⁹⁸ «Русская старина», 1901, I, 105.

³⁹⁹ 赤の広場に現在も残る円形の台「ロブノエ・ミェスト Лобное место」は、16世紀半ばから年代記に現れ、主にツァーリの勅令、布告を読み上げる場所であったが（イワン雷帝が自ら演説したこともある）、たまに刑場として使われることもあった。たとえば、1698年には、ピョートル一世による銃兵の処刑がこの傍らで行われ（ワシーリー・スーリコフが絵に描いている）、1606年の「大動乱」に際しては、偽ドミートリー一世の死体が、この階段に横たえられたりしている。

⁴⁰⁰ メリグノフによる原注

セルゲイ・グリーンカは、『モスクワについての覚書 Записки о Москве』で異説を伝えている。「モスクワ放棄の日に、版画家のオシポフが、マーケットの傍を通りかかった。私はその彼から、油化製品を商う店には爆弾が投げこまれたと聞いた」

ここで、つぎのような事実を引き合いに出そうというのではない。すなわち、モスクワ市民への布告や、以前のバグラチオンあての手紙や、エルモーロフとの会話でロストプチンが仄めかしたこと⁴⁰¹、あるいは、彼がモスクワを去る前に下の息子に、「モスクワはこれが見納めだ。半時間後に火につつまれる」と言ったという、かなりアポクリファ⁴⁰²的な話（これをのちに、ロストプチンの孫がセギュールに伝えている）、あるいはまた、ヴェルテンブルク公エフゲニーの証言、すなわち、モスクワをフランス軍にくれてやるくらいなら焼いたほうがまだ、とロストプチンが言ったという話⁴⁰³——これらを引き合いに出すより、つぎの9月1日付の2通の手紙を援用したほうがよい。1通は皇帝アレクサンドルあて、もう1通は妻あてだ。「ボナパルトの手に落ちたモスクワは、砂

⁴⁰¹ 9月13日（9月1日）に露軍は、夕刻から夜にかけて、フィリの軍議でモスクワ放棄を最終的に正式決定し、14日（2日）にかけての深夜に撤退を開始するわけだが、エルモーロフが9月13日（1日）にクトゥーゾフのところに行ったとき、そこに居合わせたロストプチンから次のようなことを聞いている。

クトゥーゾフ公爵のところには、ロストプチン伯がおり、彼と公爵は、（私が知ったところでは）とても長いあいだ話し合っていた。伯爵は私を目にすると、脇のほうへ連れていき、こう尋ねた。

「敵がモスクワを占領しても、なんの益にもならないというときに、なぜあなたがたが、なにがなんでもモスクワを守ろうとするのか、私にはわかりません。国家の宝物とあらゆる資産は運び出しました。教会も、多少の例外はありますが、貴重品や高価な金銀の装飾品を搬出しました。最も重要な国の古文書も救い出しましたし、民間の人々も、いちばん大事な財産は隠したり運び出したりしました。モスクワに残るのは、ほかに避難する場所のない、5万人以下の最貧層だけです」。彼の最後の言葉はきわめて注目すべきものだった。「もし、あなたがたがモスクワを無血で放棄されれば、そのあとで、この街が炎に包まれるさまをごらんになるでしょう！」（Ермолов А.П. Там же. С.201—202）

果たせるかな、翌14日、露軍がモスクワを抜けたところで、モスクワで爆発音と巨大な火の手が上がり、エルモーロフは、前日の会話を「思い出す」のである。

ついに軍はモスクワを抜けた。

市境から遠くないところで、私はクトゥーゾフ公をみつけ、私がミロラドヴィチ将軍に伝えた、公の命令のてん末について報告した（*前に本文で触れたように、クトゥーゾフは、モスクワ市内の大渋滞をみて、エルモーロフを露軍後衛を指揮するミロラドヴィチのところに派遣していた。できるかぎり敵を食い止めるか、一時休戦に応じさせて、軍と輜重をぶじ市外に撤退させるためだ——佐藤）。それからまもなく、モスクワで爆発が二回聞こえ、大火災がみえた。私は前日ロストプチン伯から聞いた言葉を思い出した。モスクワは、受けた恥辱を廢墟と灰のなかに隠したのである！ われわれ自らの手で、モスクワを貪り食う炎は方々に広げられた。敵に罪を着せるのは、そして、国民の名誉を高めてくれたこと（*大火のこと——佐藤）で弁解するのは、無益なことだ。一人ひとりのロシア人が、市全体が、共通の利益のために、自らを惜しむことなく犠牲に捧げた。この自発的な、モスクワの破壊のなかに、敵はみずからの災厄の予兆をかいまみた。（Ермолов А.П. Там же. С.207）

「一人ひとりのロシア人が自らを惜しむことなく犠牲に捧げた」かどうかは疑問だが、「われわれ自らの手で、モスクワを貪り食う炎は方々に広げられた」と、エルモーロフは明言している。

⁴⁰² アポクリファは外典と訳される。聖書の正典に加えられなかった文書のこと。この場合は、「怪しげな言い伝え」という意味だろう。

⁴⁰³ メリグノフによる原注

ヴェルテンブルク公によると、フィリの軍議の前に、ロストプチンは彼にこう言った。「もし私が聞かれたとしたら、こう答えるでしょう。この街を敵に渡す前に焼き払え、と」

漠となるであります。かりに炎が焼き尽くさないとしても、彼にとっての墓場となるであります」⁴⁰⁴。妻にはつぎのように書いている。「街はもう略奪されているが、消防ポンプがないので、焼けてしまうと確信している」⁴⁰⁵。ほぼ1週間後の9月9日にはこう書いている。「火事が不可避であることは、私はよく知っていた」。なるほど、その2日後には彼は、自分には放火のアイデアだけがあって、実行はできなかつたように書いている。「悪人どもが入ってくる前に街を焼くという私の考えは、有益なものだった。だが、クトゥーゾフが私を欺いた……もう後の祭りだったのだ……」。こう彼は9月11日に妻に書き送っている。一ヵ月後の10月13日には、ほとんど同じことをアレクサンドルに対しても繰り返している。「クトゥーゾフがモスクワを放棄すると、あと2日早く私に言ってくれていれば、私は住民を避難させて、街を焼いたことでしょう」⁴⁰⁶。この最後のほうの手紙をみて、多くの人が、ロストプチンはモスクワを焼く考えを暖めてはいたものの、実際には関与しなかつたのでは、と思いたがっている。だが、ここでの当人の否定が、前に挙げた証言の数々を覆し得るとはとうてい思えない。モスクワを焼くという話や灰めかしは、いろいろ飛び交ってはいたが、同時代人たちの生きていた現実と意識は、そういう可能性からはかけ離れていた。モスクワ大火がロシア人たちに与えた印象からして、また、フランス軍の蛮行に対する彼らの激怒ぶりからして、ロストプチンが放火への関与を認めることは——たとえそれが愛国的目的から出たものであったとしても——言語道断に思われ、おそらく憤激を呼び起こしたであろう。ロストプチンは、自分の「愛国的な」功績について口をつぐんでいるしかなかった。

ソ連時代の史家タルレも、ロストプチンとモスクワ警察が放火に関与していたという点については異存なく、その論拠も同様だ。たとえば、警察署長（пристав）ヴォロネンコのモスクワ県警察本部（イワシキン）への報告にふれ、それが事実によって裏付けられている、としている。

つまり、ヴォロネンコは、ロストプチンの命令で、酒屋（винный двор）をはじめとし、できるかぎりありとあらゆるものを焼き払うよう努力したと報告しているが、酒屋はたしかに、いちばん最初に燃えていると、タルレは言う⁴⁰⁷。

軍と宮廷、ツァーリも関与？

しかし、ロストプチンとモスクワ警察だけなのだろうか？ 軍は？政府は？という疑問が、大火が起きた全般的状況から当然湧いてくるわけだが、この点は、メリグノフもタルレも、

⁴⁰⁴ «Русский архив». М.: Университетская типография, 1892, VIII, 530.

⁴⁰⁵ «Русский архив», 1901, VIII, 464.

⁴⁰⁶ «Русский архив», 1892, VIII, 555.

⁴⁰⁷ Тарле Е.В. Там же. С.583—584.

ほかのどの研究者も一様に素通りしてしまう。

大火の真相に肉薄しているメリグノフでも、あれだけ緻密な考察を積み重ねてきながら、最後に、とってつけたように、ロストプチン単独犯行を主張して、尻切れトンボ風に終わる。

メリグノフは、放火は「極度に苛立たしい状態にあった」男の「盲目的な憎悪」によるもので、「政府の組織的放火などというものはなかった」ことを強調する。

だが、さっきみたように、ロストプチンは、フィリの軍議があった 9 月 1 日付けで、ツァーリに書簡を送り、「モスクワは灰燼に帰し、ボナパルトの墓場となるでしょう」と書いていた。かりに、これが「盲目的な憎悪」にすぎなくても、それをツァーリは黙認したことにはなるではないか。

また最初の公式の祖国戦争史を書いたミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、露軍の放火への関与を事実上認めている。

同書によると、撤退に際し、軍は、モスクワにあった消火器材の一部をわざわざウラジーミル方面へ運び出した⁴⁰⁸。器材の一部は破壊された。

ミハイロフスキー＝ダニレフスキーの文脈からすると、消火器材搬出の指令は、クトゥーゾフから、と読める。

撤退でごった返しているときに、2 万以上の負傷兵を置き去りにしてまで、消火器に荷車を回して搬出する必要とはなにか？

ロストプチン自身の証言によると、「2100 人の消防隊員と 96 台の消防ポンプを搬出させる命令を出した」⁴⁰⁹

また、クトゥーゾフ自身の命令で軍は、弾薬を積んだ船に火を放ってもいる⁴¹⁰。木造家屋が密集した大都市で、こんなことをすれば、弾薬と炎が四散し、大火災になるのは当然だ。しかも、火を消す住民も、器材も残っていないのだ。

これは放火の準備およびその実行にほかなるまい。ということは軍も放火に直接関与していたことになる。ミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、四散した弾薬が、「最初の出火原因の一つ」だと明言している⁴¹¹。

一方、クトゥーゾフ公爵は、砲兵隊の艇がその重みで止まってしまったため、その後ろに続いていた、調達物資を積んだ艇を敵から救う手だてがまったくなくなったことを知り、それらの艇を焼き払い、沈めることを命じた⁴¹²。これと時を同じくして、武器、

⁴⁰⁸ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. Часть 2. С.353, 374, 398, 399.

* このあと詳説するセルゲイ・グリーンカの回想録も参照。

⁴⁰⁹ Троицкий Н.А. Там же. С.316.

Ростопчин Ф.В. Соч. СПб., 1853. С.211.

⁴¹⁰ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. Там же. С.353, 374, 398, 399.

⁴¹¹ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. Там же. С.399.

⁴¹² ここに原注がついており、「国家評議会の見解、1817年5月7日」とある。国家評議会が、この件でこうした見解を示した、ということだろう。

軍服以外の装備も燃え出し、砲弾は空中に四散し始めた。

最初の火災の原因はこのようなものであった。

以上のことを総合して考えると、皇帝（宮廷）と軍は、巨大な犠牲をとめない犯罪的でもあった大火からみずからを免責し、残酷きわまる戦略から自分を切り離して、ロストプチンひとりに泥をかぶせようとした——。皇帝（宮廷）と軍の間にこういう暗黙の了解があったような印象を、筆者（佐藤）はどうしてもぬぐえない。ロストプチンのモスクワ大火前後の奇妙な苛立ちは、このことと関係あるのではないだろうか。自分を「二階に上げて梯子を外した」軍と宮廷に対して怒っていたのではないか。

じつは、メリグノフ自身、文中でさりげなく、ツァーリ真犯人説を紹介している。

D.P.ルーニチ（Дмитрий Павлович Рунич）は、回想録のなかでさらにその先を行っている。「モスクワ大火については、さまざまな互いに矛盾し合った意見が述べられており、それを聞くと迷路に陥ってしまうわけだが、そこから抜け出す道は、常識ある人間にとってはただ一つだ。皇帝アレクサンドルだけがこういう手段を決められたことは明らかである」⁴¹³

«Для всякого здравомыслящего человека есть один только исход, чтобы выйти из того лабиринта, в котором он очутился, прислушиваясь к разноречивым мнениям, которые были высказаны по поводу пожара Москвы. Несомненно только император Александр мог остановиться на этой мере».

筆者は外国人（日本人）だから、ロシア人のタブーにつきあう必要はない。メリグノフが自己検閲した先を考えてみよう。

真犯人はツァーリと宮廷

これまでみてきたように、ロストプチンが放火に深く関与していたのはまちがいない。しかし、ロストプチン単独犯行説には、つぎのように、それと矛盾する点、無理な点が多すぎる。

- ・露軍は、開戦以来、モスクワにいたるまで、徹底した焦土戦術をとってきた。これはツァーリと政府の方針でもあった。
- ・大都市や、スモレンスクのような、いわゆる聖都でも例外ではなかった。
- ・軍の関与は、消火器のウラジーミル方面への搬出、弾薬を積んだ船の爆破などで、あきらかである。

⁴¹³ «Русская старина», 1901, III, 604.

・クレムリン周辺での発火状況などをみると、軍と官（ロストプチン以下）のみごとな関係プレーがあったと考えられる。クレムリンにわざわざ大量の火薬を残し、寝室にまで導火線を置いたうえで、仏軍の警戒をかいくぐって放火に成功し、ナポレオンをあわや爆殺という窮地におとし入れたのだから。こういうことは、もちろん、ロストプチン単独ではできないし、彼と軍（クトゥーゾフ）が、首都放棄の土壇場でちょっと話し合っただけでもない。彼らよりも上のレベルで練り上げられた計画であったと思われる。戴冠式がおこなわれるウスペンスキー寺院や、ピョートル大帝以前のツァーリと皇族が葬られているアルハンゲリスキー大聖堂（聖天使首大聖堂）に火をかける——。こんな決断が「上」の裁可なしに下せるはずがない。

以上の点から、開戦後かなり早い段階で、政府と軍の上層部で計画が練られており、ナポレオンがモスクワまで迫ったときには、軍と官（モスクワ総督ロストプチン）の現場の判断で放火を組織し、首都に火を放ち、ナポレオン爆殺をねらうことが決まっていた、と考えられる。アレクサンドル一世も承認していた。一言でいえば、真犯人はツァーリと政府、宮廷の最上層部だ。

クラウゼヴィッツも、おなじ意見のようだ。やはり差しさわりがあると感じたのか、いかにも歯切れは悪いが、その考えの経路がおもしろいので、パラフレーズしておこう。

彼は、まず「現在では知られるようになった、ありとあらゆる証言、なかんずくロストプチン伯の指図で出版された、ほとんど説得力のない、弁明のための回想録を読んだあとでは、筆者（クラウゼヴィッツ）は、ロストプチンが、みずからの責任において、政府に無断で、モスクワを焼くよう命じたことを、ほぼ確信するにいたった」という。

しかし、なぞは残る。スモレンスクの陥落後、モスクワからの主だった住民や役所の避難が、政府の課題に入っていたとすれば、そこから放火までは一步にすぎない、とクラウゼヴィッツは首をかしげる。

たしかに彼のいうとおり、モスクワから住民、役所を避難させるということは、この都市を放棄することであり、放棄するなら、焼かねばなるまい？

ここでクラウゼヴィッツは、ツァーリ真犯人説に近づくのだが、いちおうそれを打ち消す。「政府、とりわけアレクサンドル皇帝が、放火を望み、予め指令を出していたなどということは、ありえない。それは、皇帝の柔和な性格にあまりにも矛盾するし、同様に政府の性格にもそぐわない。この政府は、大きな人民の集会（*議会など、民意を反映させる機関のことだろう——佐藤）の興奮や狂信から孤立し、それに依拠していなかったのだから」

しかし、ここでクラウゼヴィッツが挙げている根拠は薄弱ではあるまいか。「柔和な」アレクサンドルが父親のパーヴェル一世をどう始末し即位したかは、同時代人はみな知っていた。政府についていえば、「衆愚」の熱狂や気分から隔離していればいるほど、それに左右

されず、決定をくだすことができる。実際、露軍がモスクワに退却するまで、徹底した焦土作戦を断行し、国の半分を焼いてきたではないか。

とにかく、クラウゼヴィッツは、ツァーリと政府が指令を出した可能性はありえない、と強弁するのだが、とすると、ロストプチンが単独で、ツァーリと政府に無断で実行したことになる。だが、クラウゼヴィッツはこれにも首をひねる。

ロストプチンが単独でやったとすると、「ロストプチンがみずから引き受けた責任は巨大である」。「もし、彼が自分でやったのだとすると、彼は極度の興奮、憎悪に陥っていたに相違なく、それが彼に、決定する力を与えたということだろう。その決定の実行は、彼にとって危険で、いかなる感謝も名誉ももたらしえないものだったのに」

これは、前述のメリグノフの結論でもある（彼は、放火は「極度に苛立たしい状態にあった」男の「盲目的な憎悪」によるものだと言う）。なるほど、だれがみても巨大な責任がとれない犯罪的でさえある行為を、「上」の許可を得ずに、単独で断行できるのは、逆上した、あるいは狂信的な人間だけかもしれない。

だが、ロストプチンと面識のあったクラウゼヴィッツは、これにも納得できない。「ロストプチンの人柄は、そんなものではなかった。彼の行動の原動力が、熱狂や粗暴な狂信であるなどとは考えられない。彼は老獺な世慣れた人物で、世間知も持ち合わせており、それが、いかにもロシア的な性格に接木されている」

アレクサンドルは、モスクワ放火の命令を出すには、「柔和すぎる」。さりとて、ロストプチンは、それを単独でやるような人間ではない。

以上をふまえて、クラウゼヴィッツはこう結ぶ。この歴史的な大事件は「不実な愛の果実に似て、父がいない。そして、どうやら、永遠に不明のままということになりそうだ」

これはレトリックだ。ロストプチンが直接関与したことはたしかで、その彼が「父」でないというのなら、父であり得るのはだれか？ アレクサンドル一世と政府しかいないではないか⁴¹⁴。そうでない根拠をクラウゼヴィッツは示していない。

以上、大火をめぐる状況を総合して考えると、ツァーリと政府が大筋で指令を出し、ロストプチン、警察、クトゥーゾフ麾下の軍などがきわめて計画的、組織的にモスクワに放火した。こう考えるのが、あらゆる点からみて妥当である。

もちろん、このことは、残った住民や仏軍の火の不始末など、ほかの原因もあったことを否定するものではない。あくまでも主たる原因ということだ。ミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、一部住民の「自発的放火」もあったと言っている⁴¹⁵。

セルゲイ・グリーンカの回想録：ツァーリに放火をまかせられた男

⁴¹⁴ Карл фон Клаузевиц Там же. С.106-108.

⁴¹⁵ МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ. С.398-401.

モスクワ大火について最後に、だめ押しに傍証をひとつ挙げておこう。セルゲイ・グリンカは、『1812年についての回想』⁴¹⁶で、ツァーリと政府の方針として、官と軍による計画的、組織的放火が承認されていた、と示唆している。

同書によると、7月27日(15日)に、アレクサンドル一世が政府首脳とともにモスクワをおとす際に、グリンカは、今後の戦況次第では放火もやむなし、「モスクワの放棄は、ロシアとヨーロッパにとって救いとなるであります」と献策し、放火の意義を約1時間にわたり力説した(これは、スモレンスクの会戦以前のことで、仏軍はヴィテブスクに迫っていた)。

その結果、彼は、モスクワ総督ロストプチンと協力して放火を計画、実行するように、政府よりゆだねられた、という。「陛下はあなたに特別の任務をお授けになりました」。グリンカは、ロストプチンとの最初の突っ込んだ会合で、彼からこう告げられている。

グリンカの回想については、のちほど「補遺：個別の証言と研究」のところで、まとめてくわしく述べる。かなり韜晦した書き方なので、大量の引用が必要になる。

こういう回想が研究であまり触れられないのは、奇妙なことではあるが、理解できなくもない。ツァーリを放火の張本人にするのは不都合だからだ。彼が、負傷兵を置き去りにして、父祖の霊廟とともに焼いたというのではやりきれなさすぎる。こういう真実は史実として根付かない。

だが、いままでみてきた、それぞれの立場からの、自己弁護をふくんだ発言が交差するところに、おのずと真実が現れていないだろうか？...

トルストイはモスクワの大火をどう描いたか

トルストイのモスクワ大火にかんする考えは一筋縄ではいかない。

一見すると、トルストイの説は、ロストプチン単独犯行説でもなく、ツァーリ真犯人説でもなく、いわば自然発火説である。仏軍は、「砂地に吸い込まれる水のように」、モスクワに吸い込まれ、「略奪兵と呼ばれる中間的存在に変貌した」。残ったのは、破壊、放火...。「かんな屑の山に火の粉が落ちつづけるのと同じ」ような状況で、自然発火、焼失するのも当然だった――。

こういう理屈である。「砂地に吸い込まれる水のように」というのは、クトゥーフがファイリの軍議のしめくりに吐いたという言葉から着想したものかもしれない。クトゥーフいわく、「ナポレオンは奔流だ。われわれはまだそれを止めることができないが、モスクワがスポンジになって、やつを干上がらせてくれるよ」⁴¹⁷

⁴¹⁶ Глинка С.Н. Из записок о 1812 году // «1812 год в русской поэзии и воспоминаниях современников». М.: Правда, 1987. С.394-425.

⁴¹⁷ Троицкий Н.А. Там же. С.308.

なるほど、仏軍がモスクワに「吸い込まれて干上がった」という点のみにかんしては、これはたしかに本質を突いているが、モスクワに吸い込まれた仏軍→略奪兵という中間的存在→破壊、放火、自然発火...と、ぜんぶ十把ひとからげにして、金太郎飴的イメージでつないでいく、トルストイのやり方は手品である。

とはいえ、この手品に、火事場をさまようピエールの目から見た生々しい描写がくわえられると、読者はころりとだまされてしまう。

ところが...実は、トルストイのモスクワ大火にかんする見解には、もうひとつ奥があり、彼が大火の真相を推察していたことは明白なのだ。

彼はつぎのように書いている。「スモレンスクをはじめとするあらゆる都市では、モスクワと同じことが起きた」、すなわち、「富者は財産を置いて去り、貧者がそれを焼き亡ぼした」と。そのうえで彼は、モスクワの状況についてこう言う。

モスクワが占領されるだろうという予感、1812年のモスクワの社会にあった。早くも7月—8月初めにモスクワから立ち退きはじめた人々は、それを待ち受けていたと、その行動で示したことになる。<...> フランス人の支配下に甘んじることはできない。それは最悪であった。彼らは、ボロジノの会戦の前にも逃げ出したが、会戦後は避難がいよいよ急になった。(3巻3編5章)

とすると作者は、7月以前からモスクワが放棄され焼かれることは、一般人のあいだでも織り込みずみであり、焼いたのはロシア人自身だと認めているわけだ。では、だれが焼いたのか？ 避難に際して貴族が召使を残して放火させた？ まさか！ では、モスクワに残った最貧層が自発的に放火したとほんとうに思っていたのか？ そんなことはありそうにないし、作者自身、そうは描いていない。

ここで、さきに引用したスモレンスクの火事の描写を思い出そう。スモレンスクが敵の手に渡るなら、しかたない、焼いてしまえ！と住民は思っていた。その「愛国心」を「お上」が実現した。「モスクワでも同じことが起きた」というわけだ。

ただし、作者としては、そうは明言できない。この考えをたぐると、容易に軍と政府の果たした役割に行き着く。ましてや、大量の負傷兵が置き去りにされた事実を目をつぶるわけにはいかず、それに作品のなかで触れているのだから、なおさらである(3巻3編9, 12, 15章)。お上が彼らを置き去りにしたうえ、火をかけたことが暴露されてしまう。

意識的行動、戦略、お上の犯罪などの要素は、うまく灰汁抜きしなければならない。そうでないと、作品の構図が破綻する。すべてを必然が——あまり残酷にでなく、ニュートラルなかたちで——圧倒せねばならない。一切は運命であった....

Военский К. А. Отечественная война 1812 года в записках современников (Материалы воен.-учен. архива). СПб, 1911. С.70.

だから作者は、ロストプチン、軍らによる放火を示唆する事実は、徹底的にとりのぞいている。「ロストプチンの命令で艇を焼いた警察署長」や「モスクワ川で燃えている艇」には触れても、それに弾薬が積んであったことには口を拭っている（3巻3編23, 33章）。モスクワの消防隊は、ロストプチンが「腹立ちまぎれに」ウラジーミルに送ったことにしてしまう（3巻3編24章）。

また負傷者のことも、ロストプチンが30両の荷車の大半を提供するエピソードに巧妙につなげて、うやむやにする⁴¹⁸。読者は、こっちに目をとられて、ほかの放置された負傷者のことは忘れてしまう。街の混乱、略奪、乱暴狼藉は、群集を距離を置いて描くことで、細部をぼかす。大海原のような全体の状況に埋没させてしまうのだ。

例外は、補遺の1（陸軍中將ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記）の補説でくわしく述べるヴェレシチャーギン惨殺事件であるが、これは、ヒステリーに陥ったモスクワ総督ロストプチンの個人的犯罪の面が強いように描かれている⁴¹⁹。

『戦争と平和』の必然、運命は、多くの面でこういう強引なものだが、歴史を知らずに読むかぎりでは、説得力十分である。だいたいこれは歴史そのものではなく、トルストイが「『戦争と平和』について数言をついやす」で明言しているとおおり、「筆者が表現し得たところのもの」にすぎないのだから、史実とのちがいをあれこれ言ってもはじまらないかもしれない。ロストプチンや「外国人」の軍人たちは、いい面の皮ではあるが。

しかし、にもかかわらず、最後の結論の部分では、作者は正しいのだ。ナポレオンはモスクワまで止められぬ。いかに惜しかろうと、放棄し焼かねばならぬ。それは運命であった…。

⁴¹⁸ 8月31日、ロストプチンは、荷車を分けてくれと懇願する負傷兵をよそに、荷造りに大わらわである。そこに、軽薄なドイツ人、ベルグがやって来て、バルクライのボロジノでの奮戦を吹聴する。そのようすをじっと見ていたナターシャが、「あたしたちはドイツ人か何かなの?!」と絶叫し、荷車から荷物をおろして、負傷兵に提供する。バルクライの功績をあやしくし、ドイツ嫌いを煽り、なおかつ露軍の負傷者置き去りを糊塗するという、一石三鳥だ。

⁴¹⁹ ところで、このロストプチンの描写も、ひどい歪曲と言わざるをえない。作者の考えでは、ロストプチンは自尊心ばかりつよい見栄っぱりにすぎない。首都の放棄の決定も、住民の避難も、彼抜きにどんどん行われて、立場がなくなり、右往左往したあげくヒステリーに陥ったことになっている。「歴史の哀れな道化」という役を作者に振られた点で、ナポレオンとおなじだ。だが、いくら道化でも、「腹立ちまぎれに」消防隊をウラジーミルに送ったという設定はおそまつで、そんなことがあるはずがない。

試みに、セルゲイ・グリーンカの『1812年についての回想』における8月30日の記述（本稿の補遺に全訳）と、『戦争と平和』の、やはり8月30日のそれとを比較してみていただきたい（3巻3編10-11章）。ちなみに、トルストイはグリーンカを読んでおり、作品のなかに引用もしている（グリーンカの抄訳を参照）。

前者では、ロストプチンはグリーンカに、露軍が戦わずしてモスクワを明け渡しカルーガ街道方面へ向うことを告げ（まだフィリの軍議での正式決定の前である!）、グリーンカにかねての計画の実行をうながす。戦略の中枢にあって、それを着々と実行に移す、情理をわきまえた人物という印象だ。

ところが『戦争と平和』では、権勢をかさに着る、ヒステリックで浅薄な男で、いかにも嫌らしく描かれている。頭越しにモスクワ放棄を決定されて怒り、ヴェレシチャーギン事件に関連して呼びつけたピエールに、本題とはなんの関係もなく、彼の妻の不倫のことなど露骨にあてこすり、八つ当たりする。読んでいて、ロストプチンが気の毒になるくらいだ。

その運命のなかで、ピエールも必死にあがく。彼はモスクワに残り、ナポレオン暗殺をくわだてるが、なにか違う、自分は無意味なことをやっている、という違和感につきまわれつつ、燃えるモスクワをさまよう。そこで突然ピエールは、ある「出口」を見つける。火事場で女の子とカフカスの美女を救うのだ（あのカフカスのモチーフがかすかに響いている）。そして、ピエールが仏軍兵士からカフカス女性を救ったのは、“偶然”、ロストフ家のすぐ近くでのことであった。これは、もうひとつ深い運命、神慮の存在を暗示する）。ここでの突然の生命感の噴出はみごとであり、感動的だ。

この出口は、ひとつの予感であり、プラトン・カラターエフとの出会いを通じての彼の再生を先どりする。なぜ彼は再生しえたのか？　そこで彼はなにをつかんだのか？...　これこそが『戦争と平和』の核心だが、これについては、祖国戦争の分析を終えたあとで、別個に考察しなければならない。

モスクワの大火については以上である。

第11章 モスクワからタルーチノまで

露軍の秘策とは

さて、話をモスクワ放棄後の露軍にもどそう。

思い起こしていただきたいのだが、露軍は、9月13日（9月1日）に、フィリの軍議でモスクワ放棄を決め、東南方向へリャザン街道を撤退していった。地図1（露軍の撤退ルート：リャザン街道→カルーガ街道）を参照されたい。

目指すはカルーガ街道方面。そこは、カルーガの食糧基地とトゥーラの兵器工場に近く、ブリャンスクにも兵器工場がある。

露軍がただちに、モスクワから南西方向にあたるカルーガ街道に入らず、南東方向のリャザン街道を経由し、わざわざ大回りした理由についても、すでに述べた。

フィリからすぐカルーガ街道に入ろうとすると、急傾斜、川、ぬかるみを越えねばならぬのにくわえ、仏軍に対し横腹をみせて進まねばならない。リャザン街道は、モスクワ川を渡ってしまえば、比較的安全で、このあたりでモスクワ川は、かなりの川幅になり、河岸も切り立っている。

が、問題は、それをいかに実行するかだ。ナポレオンやクラウゼヴィッツが言うように、作戦そのものを考えるのは、べつにむずかしいことではない。

露軍がうかつな動きをみせれば、あっさりカルーガ街道を封鎖されてしまっただろう。前にみたように、仏軍の一部は、カルーガ街道を経由してモスクワ入りしたのだ。露軍がモスクワをぶじに抜けるだけでも容易なことではなかった。首都放棄による軍の落胆、士気の低下、市内の大混乱、大渋滞…。やっとのことでリャザン街道に抜けても、後ろからは名将ミュラー指揮する前衛がびったり追ってくる。仏軍は、近衛軍を温存しており、まだまだはるかに優勢だ。そして、露軍の前方には、モスクワ川渡河という難題が待ちかまえており、かりに渡河に成功したとしても、カルーガ方面までは遠い。しかも、行く先を仏軍に見破られたら、すべてがご破算となる…。

こういう困難きわまる状況にありながら、露軍はまんまとミュラーを撒き、仏軍はしばらく露軍を見失った。みつけたときには、すでに形成が逆転しつつあった。

これを、クトゥーゾフ以下の軍の首脳は、いかになすとげたのか。それこそが、ここでの最大のポイントだ。

以下、リャザン街道→カルーガ街道の移動について、時系列にしたがって状況を具体的にみていくことで真相に迫りたい。

モスクワからモスクワ川まで

モスクワ→タルーチノの移動の事実関係については、『祖国戦争とロシア社会』第4巻の第7章「モスクワ放棄からタルーチノまで」が網羅的で、分析もすぐれている⁴²⁰。

9月13日（9月1日）から14日（2日）にかけての深夜、露軍は、撤退を開始したが、2日の昼になっても、モスクワを抜けられなかったため、クトゥーゾフは、後衛のミロラドヴィチを遣わし、仏軍前衛のミュラー元帥に一時休戦を申し込ませた。ミュラーは、同日14日（2日）の夕方に、翌15日（3日）の朝7時までの休戦に同意するとつたえてきた。ここまでは前にみたとおりだ。

15日（3日）に、露軍の後衛も、ぶじ戦わずして、首都から6露里（1露里=1066,8m）のヴァゾフカ村（Вязовка）まで退いた。15日（3日）も、仏軍は攻撃をしかけてこなかったため、クトゥーゾフは、軍を休養させることにした。これは、疲れ切った軍に一服させるとともに、落伍者に追いつくいとまを与えた。またこの間に、避難民でごった返していた道路は、かなり通行しやすくなったので、この休養はかなり意味のあることであった⁴²¹。

しかし、この休養は、祖国戦争全体を通じて最大の作戦の決行をひかえ、満を持すものでもあった。

9月16-17日に全軍がモスクワ川を渡り、一気に60露里西進！

翌9月16日（4日）から17日（5日）にかけて、露軍全軍は、リャザン街道のボロフスキー渡し場（Боровский мост）でモスクワ川を渡る。

16日中には、主力部隊はすべて渡河し、後衛（ミロラドヴィチからラエーフスキーに交代）のみが左岸に残っていた。

すでに渡河がはじまっていたときに、ジリノ村（Жилино）の本営にあったクトゥーゾフは、皇帝あてにモスクワ放棄の報告書をしたため、ミショー大佐に託して送り出した（ミショーがペテルブルクに着いたのは9月21日〈9日〉だ）。

さて、驚かされるのはこの後だ。追撃してくる仏軍を振り切ってやっと渡河したのも束の間、露軍主力は、ミャフコヴォ村（село Мягово）の向かいの丘に短時間夜営したあと、翌9月17日（5日）未明、パフラー川の右岸（南岸）を、西に90度方向転換し、まずはポドリスクを目指して、一気に60露里（！）前進する。

先発隊は深夜1時には出発しているから⁴²²、渡河をやり終えたその直後、ろくに睡眠もとらずに、田舎道や森のなかを60露里も猛スピードで突進したのだ。恐るべき強行軍であった。

そして、その夜は、カシルスカヤ街道（Каширская дорога）に夜営する。翌18日（6日）には、主力軍は、目論見どおりポドリスクに達した。19日（7日）は、同地で休養し、20日（8日）には、当面の目標であった旧カルーガ街道のゴールキ村（Горки）に到達する。ここ

⁴²⁰ Кожевников А.А. Там же. С.93-109.

⁴²¹ Там же.

⁴²² Липранди И.П. «Выписка из дневника1812 года, сентября 3-го и 4-го дня» // 1812 год... Военные дневники. М., 1990. С.240.

とクラスナヤ・パフラー（Красная Пахра）に数日間滞陣する。

一方、後衛軍は、9月17日（5日）に、夜遅くまで仏軍の激しい攻撃にさらされるなかを、渡河しなければならなかった。しかし、ワシリチコフ将軍指揮する騎兵隊が渡河を援護し、とにかく全軍、歩兵も砲兵隊も渡河に成功し、クラコヴォ村（Кулаково）付近で陣容をととのえる。最後に騎兵隊が渡り、橋も破壊できた。そして、後衛軍は主力軍のあとを追う。

ワシリチコフ将軍がコサックの2連隊（エフレーモフ大佐が指揮）を囷として、そのままリヤザン街道を進ませたこともあり、追ってきたミュラー軍は、完全に撒かれてしまう。仏軍前衛のセバスティアーニ将軍が、ブローニツィ（Бронницы）まで行ったところで、ようやくくだまされたのに気がつき、「露軍が消えてしまった」と報告したのは、21-22日（9-10日）の深夜のことだ。ワシリチコフ将軍は、近くのほかの街道にも抜け目なく、コサックの囷連隊を配していた。

その後、露軍は、9月28日（16日）には、旧カルーガ街道を南下して、バベンコヴォ村（Бабенково）に移動する（後衛はクラスナヤ・パフラーに布陣）。

なぜ旧カルーガ街道をさらに南下したかという、つぎのような事情があった。

モスクワからカルーガにいたる街道は3本ある。①旧カルーガ街道（クラスナヤ・パフラーとタルーチノを通る）、②新カルーガ街道（ボロフスクとマールイ・ヤロスラーヴェツを通る）、③トゥーラ街道（セルプホヴォとタルーサを通る）。

旧カルーガ街道はその真ん中なのだが、クラスナヤ・パフラーのあたりでは、3本の街道間の距離がかなりあり、仏軍の動きをみはりにくい。ところが、3本の街道は南に行くほど、たがいに狭まっていくので、その点好都合なのだ。10月2日（9月20日）には、露軍は、同街道をさらに南に移動してタルーチノ村に落ち着く。

以上が、モスクワ→タルーチノの移動の事実関係だ。こう事実をさらただけでも、どれほど高度に意識的で、非常な集中力をもっておこなわれた作戦だったかが分かってしまうのだ。作戦を遂行した当事者たちの弁を聞いてみよう。

バルクライとクトゥーゾフの証言

この作戦は、公爵（クトゥーゾフ）が着任してから行われたもののなかで、最も重要にしてかつ見事に遂行されたものである。この作戦によって、われわれは、この戦争を敵の完全な撃滅によって終えることが可能になった。（バルクライの覚書）⁴²³

Сие движение есть важнейшее и приличнейшее по обстоятельствам из совершенного со времени прибытия князя (Кутузова). Сие действие доставило нам возможность довершить войну совершенным истреблением неприятеля.

⁴²³ Барклай де-Толли М.Б. Там же. С.38.

これがバルクライの評で、要するに、戦局全体をひっくりかえした名作戦ということだ。彼が自分の発案ともクトゥーフのそれとも述べていないことに注意されたい。

総司令官クトゥーフは、なんとやっているだろうか。彼がモスクワ川渡河に際して皇帝あてに書いた報告書（9月16日〈4日〉付け）をみよう。

ジャリノ（Жялино）村⁴²⁴にて

8月26日の戦い（*ボロジノの会戦——佐藤）は、勝利を得たとはいいながら、凄惨きわまるもので、そのあとでは、ボロジノの陣地を後にしなければなりません。その理由について、ここに陛下にご報告申し上げます。会戦後、わが軍は極度の損害をこうむり、とくに第2軍（*バグラチオンが指揮していた左翼——佐藤）の損失は甚だしいものがあります。このように弱体化してモスクワに近づきながら、毎日、敵の前衛と激しい戦闘を交えねばなりません。こう敵と距離が詰まっておりますは、敵を十分受けて立てるような陣地は見つかりませんでした。合流を期待していた増援部隊はまだ到着できません。一方、敵は、新たに2つの部隊を、1つはボロフスカヤ街道に、もう1つはズヴェニゴロツカヤ街道に派遣し、モスクワでわが軍の背後に回りこもうとしておりますので、私としましては、敢えて一戦交えることはできませんでした。その結果は、たんにわが残軍が壊滅したであろうのみならず、モスクワそのものも灰燼に帰することになったでありますから。こうした極めて不分明な状況で、主だった諸将と軍議を行い、なかには反対する者もおりましたが、私は、敵にモスクワを明け渡すことを決断せねばなりません。あらゆる宝物、武器弾薬をはじめ、官民の所有を問わず、すべての財産を運び出し、貴族は市内に一人も残っておりません。

敢えて陛下に申し上げますが、敵のモスクワ入城は、まだロシア征服ではありません。それどころか私は、救い得た軍を率い、トゥーラ街道に転進しつつあります。この転進により、私は、最も重要な兵器廠が温存されているトゥーラ市、やはり重要な冶金工場があるブリャンスク市を守り、わが豊穡な諸県に準備されているあらゆる物資を守ることができるのです。他の方向では、どちらに向っても、わが軍はこれらの物資から切り離され、トルマーソフ軍とチチャゴフ軍との連絡も、もしこれらの部隊が、敵の右翼を脅かすために活発に動いた場合には、途絶えたであります。

もちろん、敵による首都の占領が痛手であることは否定のしようもありませんが、わが軍を温存して上のような利益を得られることを考えれば、私は動揺しませんでした。そして今私は、トゥーラ街道とカルーガ街道をはじめとし、敵の補給線すべてを遮断するように、全軍を配置する方針です。補給線は、スモレンスクからモスクワまで、か細く延び切っています。それを遮断すれば、敵は後方で物資を獲得できなくなります。そ

⁴²⁴ ジリノ村（Жилино）のこと。

して、敵に窮境を悟らせて、モスクワを放棄させ、戦局全体を一変させることができましょう。

ヴィンツェンゲローデ將軍には、クリン街道またはトヴェリ街道（Клинская или Тверская дорога）に留まるよう命じました。ちなみに、ヤロスラヴリ街道にはコサック連隊があり、住民を敵から守っています。

今や、モスクワから程近い地点で、私は軍をまとめ、敵を受けて立てる構えです。陛下の軍隊は健在であり、周知のとおり勇敢さで、我々の熱意にも応えてくれます。したがって、モスクワの喪失は挽回できますし、祖国そのものの喪失を意味しません。ちなみに、陛下は、事ここに至ったことは、スモレンスクの喪失および、私が着任したときの軍の弱体ぶりと不可分であることにご賛成いただけるものと思います。ミシヨー大佐が、陛下に状況をご説明申し上げます。⁴²⁵

Рапорт М. И. Кутузова Александру I о причинах оставления Москвы

1812 г. сентября 4

Жялино

После столь кровопролитного, хотя и победоносного с нашей стороны, от 26-го числа августа, сражения должен я был оставить позицию при Бородине по причинам, о которых имел щастие донести вашему императорскому величеству. После сражения того армия была приведена в крайнее расстройство, вторая армия весьма уже ослабела. В таком истощении сил приближались мы к Москве, имея ежедневно большие дела с авангардом неприятельским, и на сем недалеком расстоянии не представилось позиции, на которой мог бы я с надежностью принять неприятеля. Войски, с которыми надеялись мы соединиться, не могли еще притти; неприятель же пустил две новые колонны – одну по Боровской, а другую по Звенигородской дорогам, стараясь действовать на тыл мой от Москвы, а потому не мог я никак отважиться на баталию, которой невыгоды имели бы последствием не только разрушение остатков армии, но и кровопролитнейшее разрушение и превращение в пепел самой Москвы. В таком крайне сумнительном положении, по совещании с первенствующими нашими генералами; из которых некоторые были противного мнения, должен я был решиться попустить неприятеля взойти в Москву, из коей все сокровища, арсенал и все почти имущества как казенные, так и частные вывезены и ни один дворянин в ней не остался.

Осмеливаюсь всеподданнейше донести вам, всемилостивейший государь, что вступление неприятеля в Москву не есть еще покорение России. Напротив того, с войсками, которых успел я спасти, делаю я движение на Тульской дороге. Сие приведет меня в состояние защищать город Тулу, где хранится важнейший оружейный завод, и Брянск, в котором столь же важный литейный двор, и прикрывает мне все ресурсы, в

⁴²⁵ Кутузов М. И. Сборник документов. М., 1954-1955, т. 4, ч. 1-2.

обильнейших наших губерниях заготовленные. Всякое другое направление пресекло бы мне оные, равно и связь с армиями Торماسова и Чичагова, если бы они показали большую деятельность на угрожение правого фланга неприятельского.

Хотя не отвергаю того, чтобы занятие столицы не было раною чувствительнейшею, но, не колеблясь между сим происшествием и теми событиями, могущими последовать в пользу нашу с сохранением армии, я принимаю теперь в операцию со всеми силами линию, посредством которой, начиная с дорог Тульской и Калужской, партиями моими буду пересекать всю линию неприятельскую, растянутую от Смоленска до Москвы, и тем самым, отвращая всякое пособие, которое бы неприятельская армия с тылу своего иметь могла, и обратив на себя внимание неприятеля, надеюсь принудить его оставить Москву и переменить всю свою операционную линию.

Генералу Винценгероде предписано от меня держаться самому на Клинской или Тверской дороге, имея между тем по Ярославской казачий полк для охранения жителей от набегов неприятельских партий.

Теперь, в недалеком расстоянии от Москвы, собрав мои войски, твердою ногою могу ожидать неприятеля, и пока армия вашего императорского величества цела и подвижна известною храбростию и нашим усердием, дотоле еще возвратная потеря Москвы не есть потеря отечества. Впрочем, ваше императорское величество всемилостивейше согласитесь изволите, что последствия сии нераздельно связаны с потерю Смоленска и с тем расстроенным совершенно состоянием войск, в котором я оные застал. Полковник Мишо объяснит вашему императорскому величеству обстоятельнее положение наших дел.

Генерал от инфантерии князь [Оленищев]-Кутузов

この報告から、クトゥーフがカルーガ街道への移動の意義を十二分に認識し、先を読んでいたのがわかる⁴²⁶。しかし、疑問は残る。

渡河のあとすぐさま、罔を残して一気に 60 露里西進したのは、あらかじめ練り上げた作戦だったろうか？ それとも臨機応変の行動だったのか？ その辺のところがこの報告書だけではよく見えない。

そこで、9月4-8日のクトゥーフの軍事日誌を、すこし長いが全文引用しよう。いつ、どの時点で、なんのために、どんな手を打ったのか、時系列に沿って記されているので、その点の推測がつきやすいからだ。

⁴²⁶ とはいえ、この報告書の内容には引かかる点もある。「貴族は一人も残っていない」というのは驚く。置き去りになり、ほとんどが焼け死んだ2万以上の負傷兵は数に入らないのか？

もうひとつは、「事ここに至ったのは、スモレンスクを失ったから」と述べている点だ。なるほど、彼がボロジノの前に言っていたように、「スモレンスク陥落で、敵は首都の鍵を手に入れた」。しかし、スモレンスクを守り、敵を食い止めることが可能だったというのか？ となると、すべてはバルクライとバグラチオンの責任ということになってしまう。責任逃れの面が、この報告書にはないではない。

9月4日

ロシア軍は、リャザン街道で行軍をつづけ、モスクワ川右岸のボロフスキー渡し場（Боровский перевоз）に陣取った。本営は、クラコヴォ村（Кулаково）にあった。クトゥーフ元帥は、ロシアの南部諸県を守ることの重要性を知悉しており、モスクワ放棄後、故意にリャザン街道を通して撤退した。これは、わが方の方針として、そのまままっすぐ撤退していったと敵に信じ込ませることで、わが方の真の計画を隠すためであった。その目的で、上に述べたように、歩兵と騎兵から成るかなり強力な部隊が、ニジェゴロド街道を撤退していった。それとともに、ヴィンツェンゲローデ侍従武官長が、ヤロスラフスカヤおよびトヴェルスカヤの両街道を占めていた。こうしたわが軍の布陣で、敵はとまどい、上に挙げたすべての街道に強力な軍団を配置することになった。わが軍の主力部隊についていえば、ナポリ王（ミュラー）率いる6万の軍勢が追尾していた。その前衛は、セヴァスティアーン将軍が指揮し、この日にジリノ村（Жилино）付近に退却したわが後衛を見張っていた。

その間、クトゥーフ元帥は、リャザン街道から旧カルーガ街道への転進に着手した。その目的は、この動きによって南部諸県を守り、あらゆる補給基地と、わが軍に向いつつある増援部隊に近づくためだけでなく、モスクワ—モジャイスク—ヴァージマースモレンスクと経由してヴィリナ（現ヴィリニユス）にいたる敵の補給線を脅かすことであった。この転進を敵に隠すため、後衛の司令官のミロラドヴィチ将軍に、一日遅れで、やはり転進するよう指令が出された。その際、後衛は、それまで占めていた地点に、砲兵隊をもつかなり強力な騎兵隊を置いていくこととされた。その後の状況は以下のとおりである。（*太字は佐藤）

9月5日

二列縦隊で左折した（*西に折れた——佐藤）軍は、ポドリスク市に向った。ミロラドヴィチ将軍と後衛は、ボロフスキー渡し場まで退却して、モスクワ川左岸に強力な前哨を置いた。

9月6日

わが軍はポドリスクに近づき、セルプホフスカヤ街道に陣取った。本営はクトゥーフヴォ村（Кутузово）にあった。

9月7日

わが軍は、旧カルーガ街道に向って行軍をつづけ、パフラー川左岸のクラスナヤ・パフラー村に布陣した。ミロラドヴィチ将軍は、エフレーモフ大佐と、かなり強力な騎

兵隊、および歩兵の一部を、モスクワ川右岸のボロフスキー渡し場に残していった。その際、大佐は、敵が近づいてきたら、ブローニツィ方面に退却し（*つまり、リャザン街道をそのまままっすぐ退却し——佐藤）、わが軍の主力がこの方向に退いていったと思わせるよう、命じられた。ミロラドヴィチ将軍自身は、彼に託された後衛とともに、密かにやはり左に折れ、モスクワに通じるさまざまな街道に部隊を分散させたが、多少の略奪兵をのぞけば、敵はまったく見当たらなかった。

9月8日

ミロラドヴィチ将軍と、後衛の一部（第8軍団、第1騎兵連隊およびコサック連隊）は、カルーガ街道に到着し、デスナー川（*река Десна は、前出のパフラー川の支流——佐藤）沿いに布陣した。ラエーフスキー中将率いる後衛の他の部隊（第7軍団、第4騎兵連隊およびコサック連隊）は、側面部隊（боковой корпус）として、セルプホフスカヤ街道に残った。この日、わが軍は休息することができた……⁴²⁷

Кутузов Михаил Илларионович

Из журнала военных действий с 4 по 8 сентября 1812 г.

4 [сентября]. Российская армия продолжала марш свой по Рязанской дороге и заняла лагерь при Боровском перевозе на правом берегу реки Москвы. Главная квартира была в деревне Кулакове. Фельдмаршал князь Кутузов, чувствуя всю важность сохранения полуденных губерний России, после оставления Москвы умышленно отступил по Рязанской дороге, дабы удостоверить неприятеля, что в правилах наших принято одно перпендикулярное отступление, и тем самым скрыть от него настоящий план наших действий, для чего, как выше сказано, довольно сильной отряд из пехоты и кавалерии отступил также и по Нижегородской дороге. В то же время отряд генерал-адъютанта барона Винценгероде занимал Ярославскую и Тверскую дороги. Тако[во]е расположение войск наших привело неприятеля в недоумение и заставило его на всех вышеупомянутых дорогах расположиться сильными корпусами. За главною же нашею армиею последовали неприятельские силы в числе 60 000 под предводительством короля неаполитанского, имея авангард под командою генерала Себастиани, который наблюдал движение нашего арьергарда, отступившего в сей день к селу Жилину.

Между тем фельдмаршал князь Кутузов предпринял фланговое движение армии с Рязанской на Старую Калугскую дорогу, дабы сим положением не только прикрыть полуденные губернии России и сблизиться ко всем запасам и подкреплениям, к армии

⁴²⁷ ИЗ ЖУРНАЛА ВОЕННЫХ ДЕЙСТВИЙ с 4 по 8 сентября 1812 г. // Кутузов М. И. Сборник документов. М., 1954-1955, т. 4, ч. 1-2.

следовавшим, но и в то же время угрожать неприятельской операционной линии, от Москвы чрез Можайск, Вязьму и Смоленск на Вильну идущей. А чтобы скрыть сие фланговое движение от неприятеля, приказано было командиру арьергарда генералу Милорадовичу днем позже произвести параллельно армия тоже фланговое движение, оставляя на прежде им занимаемых местах довольно сильные отряды кавалерии с конною артиллериею, вследствие чего:

5 [сентября] армия, выступя левым флангом двумя параллельными колоннами, направилась к г. Подольску. Генерал Милорадович с арьергардом отступил к Боровскому перевозу, оставя сильные посты на левом берегу реки Москвы.

6 [сентября]. Подошед к г. Подольску, армия расположилась лагерем на Серпуховской дороге. Главная квартира в деревне Кутузовой.

7 [сентября]. Армия продолжала свое движение на Старую Калугскую дорогу и заняла лагерь при деревне Красной Пахре на левом берегу реки Пахры. Генерал Милорадович, оставя полковника Ефремова с значущим отрядом кавалерии и части пехоты на правом берегу реки Москвы при Боровском перевозе, дал ему повеление на случай приближения неприятеля отступать к Бронницам и тем заставить его думать, что главная наша армия отступила в сем же направлении. Сам же генерал Милорадович со вверенным ему арьергардом двинулся скрытно влево, распространяясь партиями своими по разным дорогам, ведущим к Москве, по которым никакого не открыл неприятеля, исключая некоторых мародеров.

8 [сентября]. Генерал Милорадович с 8-м корпусом, 1-м кавалерийским и казачьими полками, составляющими часть нашего арьергарда, прибыл на Калугскую дорогу и расположился при реке Десне. Другая же часть из 7-го корпуса и 4-го кавалерийского с казачьими полками под командою генерал-лейтенанта Раевского осталась на Серпуховской дороге как боковой корпус. Армия в сей же день имела растах...

「この日、わが軍は休息することができた」。なんとこの言葉が重く響くことか！...

とくに9月4-5日(ユリウス暦)の記述をみると、渡河直後に一気に60露里西進するというオプションは、かなり前からあらかじめ練り上げられた「秘策」であった印象が強い。危険な渡河をどうにかやり終えて疲弊しきった状態で、わずか数時間で考えついて実行できるようなものではないだろう。仏軍を振り切って渡河に成功した時点で、かねて練り上げたこの作戦が実行可能と見て、クトゥーゾフ以下の軍首脳が断行したことはまちがいあるまい。

発案者はだれか？

これに関連して、エルモーロフの証言が残っている。彼の回想によると、この作戦は、渡河の後で、参謀総長のベニグセンが主張し、実行させたのだという。

ボロフスキー渡し場でのモスクワ川の渡河は、モスクワからの避難民の大量の荷車で、

困難をきわめ、途方もない大混乱のうちに行われた。後衛軍のほうで砲声は聞こえたが、敵は圧迫してこなかった（*前にみたように、後衛は、9月17日〈5日〉に、夜遅くまで仏軍の激しい攻撃にさらされるなかを、ワシリチコフ将軍指揮する騎兵隊の援護で、どうにか渡河に成功し、最後に騎兵隊が渡って、橋を破壊することができた——佐藤）。ここで、陸軍大臣（*バルクライ——佐藤）が提案したウラジーミル方面への撤退がとりやめられ、トゥーラ街道に進出することが決められた。これは、ベニグセン将軍の考えであり、彼はできるだけ早くカルーガ街道に移動することを主張した。この大胆かつ断固たる転進は、敵が近くにいたので、安全ではなかったが、支障なく行われ、わが軍は、この最も暗澹たる時期、ひどい田舎道を通してポドリスクに達した。ここでクトゥーフ公爵は、まったく必要がないのに、まだカルーガ街道に出ないまま、二昼夜とどまった。これは、敵が機先を制する恐れはない、と確信していたためではない。わが方のこの一つのミスに対し、敵は二つのお粗末な誤りを犯した。モスクワで略奪、飲酒、放埒にはまり込み、目の前を撤退していくわが軍しか目に入らず、ほかのことは何も頭になかったのだ。わが軍のモスクワからの動きの遅さからして、モスクワ川の右岸を通過して、わが軍の渡河を妨げるとか、すくなくとも、わが軍をリャザン方向に押し出し、他の街道から遮断することができたはずだ。おまけに、勇敢なエフレーモフ大佐率いるコサックの部隊を、わが軍の後衛と勘違いし（*これは、リャザン街道を退いていった囮部隊だった——佐藤）、ブローニツイまで追っていった。一杯食わされたと気付いて、急ぎモスクワに戻ったときは、時すでに遅し、わが軍はもうカルーガ街道のクラスナヤ・パフラー村に達していた。⁴²⁸

Переправа армии через Москву-реку у Боровского перевоза, по множеству обозов спасающихся из Москвы жителей, совершилась с чрезвычайным затруднением и в неимоверном беспорядке. Слышны были пушечные выстрелы в артиллергарде, но неприятель не теснил его. Здесь отменено было предложенное военным министром направление на Владимир и решено выйти на Тульскую дорогу. Мысль сия принадлежит генералу барону Беннингсену, и он настаивал, чтобы скорее перейти на Калужскую дорогу. Смелое и решительное фланговое сие движение, по близости неприятеля небезопасное, совершено беспрепятственно, и армия в самое ненастное время, гнусными проселочными дорогами была у города Подольска. Здесь без всякой надобности князь Кутузов пробыл двое суток, **не переходя на Калужскую дорогу не от того, что уверен он не был, что неприятель не может предупредить его.** (→このフレーズには文法的まちがいがある) За одну сию ошибку неприятель сделал две грубейшие. Удержанный в Москве грабежом, пьянством и распутством, он имел в виду одну отступающую нашу армию и ни о чем не заботился. По медленности движения нашего из Москвы он правым берегом Москвы-реки мог предупредить нас на переправе или по крайней мере отбросить нас на Рязань,

⁴²⁸ Ермолов А.П. Там же. С.207-208.

преграждая все прочие пути. Сверх того, приняв за арриергард нашей армии небольшой казачий отряд в команде храброго полковника Ефремова, преследовал его к Бронницам и, поздно увидев себя обманутым, возвратился поспешно в Москву, но армия была уже на Калужской дороге у селения Красной Пахры.

ベニグセンは、バルクライ、ヴィンツェンゲローデなどとおなじく、「外国人」というレッテルをはられて、『戦争と平和』のなかではもちろん、歴史研究でも過小評価されている一人だが、決して凡将ではない⁴²⁹。じっさい彼は、渡河後に、まだ近くに仏軍がいる状況を勘案し、「できるだけ早くカルーガ街道に移動することを主張した」のかもしれない。いや、それどころか、渡河後に直ちに西進するアイデア自体が、彼の発案になるものだった、とエ

⁴²⁹ ここでベニグセンについて一言。この人は、ドイツ人であることと、運命のいたずらと、『戦争と平和』のせいで、不当に評価されつづけている。

レオンチー（レーヴィン）・ベニグセン（1745–1826）は、ハノーヴァーの古い男爵家の生まれで、クトゥーゾフと同年である。軍歴は古く、14歳から数え切れないほどの戦役に参加し（なにしろ七年戦争から「諸国民の戦い」まで、前線で戦っている）、1773年から招かれて、ロシア軍に勤務するようになった。トルストイの祖父ニコライ・ヴォルコンスキーも参加した、熾烈を極めたオチャコフ要塞攻防戦にも加わっている。一步ずつ軍歴を重ね、パーヴェル時代には中将に昇進していたが、ズーボフ一族と親しかったため、1798年9月末に退役をよぎなくされる。

パーヴェルの暗殺では、参加者たちの証言によると、たんに暗殺者の一人であったばかりでなく、きわめて重要な役割を演じている。将校たちが初め、ミハイロフスキー城に入ろうとしたとき、衛兵はもう遅い時刻だと言って、通そうとしなかった。すると、ベニグセンが、その時計は壊れている、もう朝方だと言って、うまくだました。寝室では、すぐにはパーヴェルが見つからず、ズーボフは「鳥は飛び去ってしまった」と諦めかけたが、ベニグセンは、寝床を手で探り、「まだ温かい、遠くには行っていないはずだ」と言った。まもなく、カーテンの後ろに隠れているパーヴェルが見つかった…。

もっとも、ベニグセン自身の回想では、そのあと一時退出して、殺害の現場には居合わせなかったように書いているが（これは鵜呑みにはできない）、「陛下、あなたは逮捕されました！」とパーヴェルに言ったのは、ほかならぬベニグセンらだったと、彼自身が証言している（Л.Л.Беннигсен. записки // Русские мемуары. Избранные страницы. 1800–1825 гг. М.: Правда, 1989. С.34-35）。

とにかく、ベニグセンという人、並外れて沈着で、抜け目がなかったのはたしかなようだ。

その後彼は、他の暗殺者同様に、一時左遷され、しばらく自分の領地で過ごすのが、そのおかげで、1805年の負け戦のアウステルリッツには参加せずすみ、1806、1807年の対フランス戦で起用されることになった。

1806年12月にはポーランドのPułtuskで、4万–4万5千のロシア軍を指揮して、名将ランヌ元帥率いる2万7千–3万のフランス軍と、激戦のすえ、引き分けた。

翌1807年2月には、東プロイセンのアイラウで、ナポレオン率いる6万5千の仏軍と、7万2千–7万3千のロシア・プロイセン連合軍を率いて、仏軍を潰走寸前まで追い込んでいる。雪嵐のなか戦況を注視していたベニグセンは、敵の中央が弱いとみて、歩兵による突撃を敢行した。ナポレオン自身、あわや戦死するか捕虜になるかというところで、ミュラーの騎兵隊が駆けつけ、危急を救った。この後も激しい戦闘がつづき、結局、勝敗が判然とせずに終わった。

全盛期のナポレオンがここまで追い詰められた例は、ほかにはほとんどない。

だが、同年6月のフリートラントの戦いでは、初め窮屈な陣形をとって、そのあと敵の目の前で陣形を変えろという失策を犯し、大敗する。これがティルジットの和約につながり、ベニグセンはふたたび失寵の憂き目を見る。

1812年になると、彼は参謀総長に就任するが、海千山千の陰謀家クトゥーゾフを相手に自分の意見と意志を通すのはむずかしく、本領を発揮できない立場だった。それでもボロジノでは、左翼とラエフスキー堡壘に増援部隊を送るなど、クトゥーゾフのミスを補っている。

ルモーロフが示唆しているようにも読める。

ただ、いずれにせよ、この作戦は、渡河の前から、一つの選択肢として軍首脳の了解事項になっていただろう。すでに何度もみたように、カルーガ方面への移動は、ウラジーミル方面にくらべるといくつもの点でたしかに有利なのだが、仏軍に捕捉される危険が高く、いかに敵を振り切るかが最大の課題になっていたからだ。無策で成り行きにまかせてモスクワ川を渡河したはずがない。

なお、エルモーロフの回想の引用部分には、ほかにも疑問点がある。まず、渡河後にはじめて、バルクライのウラジーミル撤退論がすてられた、というのはなっとくできない。リャザン街道からウラジーミル街道への移動はたいへんだし、無意味に遠回りすることになる。もし、ウラジーミル撤退論が生きていたのなら、わざわざリャザン街道を経由するのはおかしい。

「ポドリスクになんの必要もなく丸二昼夜とどまった」というのも、事実にあわない。1日休養しているにすぎないし、ポドリスクは重要な中継地点だから、各方面との連絡、命令の伝達、情報収集など、やるべきことはあったろう。

また、エルモーロフの言うように、たしかに理屈のうえでは、仏軍が露軍の渡河を阻止するとか、リャザン方向に追い出すとかいうことは可能だが、あの長く苦しい遠征の後やっとモスクワに入ったばかりのときに、それは無理な注文というものだったろう。クトゥーゾフ以下の露軍首脳部も、「モスクワがスポンジになって仏軍を干上がらせる」と読んでいた。

では、リャザン街道からカルーガ街道へ直ちに転進する作戦の発案者は、いったいだれなのか。この点については、クトゥーゾフ自身のイニシアティヴだとの証言もある。リブランディ（Иван Петрович Липранди, 1790-1880）の日記がそれだ⁴³⁰。

リブランディは若いころ、決闘屋として名を馳せ、詩人アレクサンドル・プーシキンとも付き合いがあった。父はスペインの古い家柄の出である。『ベールキン物語』所収の『その一発』に、シルヴィオという印象的な射撃の名手がでてくるが、そのモデルが彼だ。後年、彼は、ドストエフスキーが連座したペトラシェフスキー事件の摘発や分離派の迫害などで、辣腕をふるうことになる。祖国戦争当時、彼は、ドフトゥロフ（Дмитрий Сергеевич Дохтуров）の第6歩兵軍団に補給係将校（обер-квартирмейстер）として勤務し、スモレンスク、ボロジノなど多くの戦闘に参加した。その彼が、モスクワ川渡河の前後の日記を残しているのだ。

これによると、渡河直後のカルーガ方面への強行軍は、ぎりぎりまでクトゥーゾフひとりの腹の中に秘められており、側近中の側近で「秘蔵っ子」のトーリ大佐さえ知らず、ドフトゥロフも「まったく予期しておらず」、知らされたのは渡河の後だという。リブランディは、補給係将校だったので、移動の命令をトーリからいち早く伝えられた。その命令書はつぎの

⁴³⁰ Липранди И.П. Там же. С.226—241.

ようなものであったと、リブランディは記している。

9月5日深夜1時に、第6、第5軍団は左折して、パフラー川の右岸を上流へ、ジェレヴァトヴォ（Жеребятово）を經由してドモドヴォ（Домодово）へ進む。この縦隊は、ドフトゥロフ歩兵大将が指揮する。⁴³¹

В час ночи пополуночи 5 сентября 6-й и 5-й корпуса выступают левым флангом вверх по правому берегу Пахры через Жеребятово в Домодово. Колонна эта состоит под начальством генерала от инфантерии Дохтурова.

その際、トーリは、緊張の極でびりびりしており、同僚の大佐に「命令の読み方が下手くそだ！」と当り散らしたという。

しかし、この日記も鵜呑みにはできない。ドフトゥロフは、じつはこの前日の9月15日（3日）に妻あてに、「おそらくカルーガ街道へ向かうことになるだろう」と書き送っているからだ。

自己弁護したり宣伝したり、他人の足を引っぱったり、韜晦したりと、ためにする発言が多いが、ひとつははっきり言えることは、これはあくまでも作戦であり、トルストイの言う「自然な生命の発露」などではない、ということだ。そして、軍の首脳がその戦略的意義を認識し共有していたことである。

驚異の構想力と集中力

最後にもうひとつ、このときの強行軍に参加した、将来のデカブリストの回想を挙げておこう。

9月2日、われわれはパンキ村で止まった。総司令官は兵士に食事を与えるよう命じた。同日4時、われわれはリャザン街道を出発した。モスクワ川の手前で、リャザン街道から右に折れ、舗装していない村道を、一気に、休みなしに60露里踏破した。要するに、われわれは名高い転進を遂行したのだ。これによって敵軍は、戦闘で荒らされていない南部を通過して退却することができなくなり、モスクワへの往路であった、荒れ果てた街道を通過しての退却を強いられたのである。⁴³²

モスクワ川の手前で右折とあるのがよく分からないが、とにかく、露軍首脳は、地形や仏軍の動きなどあらゆる条件を勘案して秘策を練り上げ、それにしたがって、自壊の危機に瀕していた露軍をみごとに統率してモスクワ川の渡河に成功し、ぴったり追尾してくる百戦錬磨の仏軍をまんまと撒き、「舗装もされていない村道を、一気に、休みなしに60露里踏破した」のだ。

⁴³¹ Липранди И.П. Там же. С.240.

⁴³² Воспоминания и письма М.И.Муравьева-Апостола. 1982. С.172.

しかも、下に示す年表でわかるように、モスクワ川渡河と 60 露里西進という作戦の最大の山場は、大火のピークと重なっている。おそらくは、これも偶然ではなく、のるかそるかの勝負どころで仏軍を火事で振り回すように、予め仕組んだのである！…

クトゥーゾフ以下の露軍の構想力と決断力と集中力に脱帽する。

事件年表

9月7-8日 (8月26-27日) 深夜	ポロジノの会戦後、露軍は、モスクワ方面へ撤退をはじめ。
9月13日 (9月1日)	露軍は夕刻から夜にかけて、フィリの会議でモスクワ放棄を正式に決め、2日にかけての深夜、撤退を開始する。
9月14日 (2日)	露軍は、モスクワ市内を通り、撤退をつづける。前後して、ミュラー指揮する仏軍前衛（約2万5千人）が、クレムリンを占領する。ナポレオンの主力部隊も、夕方、モスクワ入り。ナポレオンは、モスクワ西方の関所の近くにあるドロゴミーロフスカヤ村（Дорогомиловская слобода）に泊まる。この夜、キタイ・ゴロド（Китай-город）、ヤウザ地区（Яузская часть）などでつぎつぎに出火する。
9月15日 (3日)	朝、ナポレオンは近衛軍とともにクレムリンに入城する。このとき、すでにキタイ・ゴロド全体が燃えていた。
同日夜（15日-16日） （3日-4日）	クレムリン周辺をふくめ、モスクワは火の海につつまれる。
9月16日 (4日)	早朝、ナポレオンはクレムリンから命からがら避難し、市北東部にあるペトロフスキー宮殿（Петровский путевой дворец）に移る。大火は、18日まで燃えつづけ、市のおよそ4分の3を焼く。
同9月16日（4日） -17日（5日）	露軍は、リャザン街道でモスクワ川を渡った直後、ただちに西進する。
9月18日 (6日)	ナポレオン、クレムリンにもどる。
同9月18日（6日）	露軍、ポドリスクに達する。
9月21日 (9日)	露軍 旧カルーガ街道のクラスナヤ・パフラー村に着き、しばらく留まる。
10月2日	露軍、同街道を南に移動してタルーチノ村に落ち着く。
10月18-19日（6-7日）	仏軍、モスクワから撤退を開始する（ナポレオンの言葉を借りれば、カルーガ方面へ「進軍」）。

第12章 タルーチノで日々力関係が逆転

露軍は、旧カルーガ街道を南下して、10月2日（9月20日）にタルーチノ村に落ち着くと、十分な補給と補充を受け、兵力もどんどん増えていった。わずか2週間足らずで、クトゥーゾフの本営には、装備の整った8万の部隊がそろっていた（他の部隊とコサックはのぞく）。すでに述べたように、タルーチノ村は、カルーガの食糧基地とトゥーラの兵器工場にちかく、ブリャンスクにも兵器工場があった。

また、タルーチノは位置的にもたいへん好都合で、仏軍がどちらへ移動しても、対応しやすい。仏軍がスモレンスク街道を通過して退却すれば、新カルーガ街道のボロフスクを経由して近道で追いかけることができる。万一ペテルブルクを脅かすようなら追撃すればよい。そして、もうひとつの強力無比な援軍、冬将軍が日々近づいてくる。

その一方で、「フランス軍の損害、ダメージは、日々大きくなっていった。パルチザンの活動はますます活発になり、西方との連絡をいやがうえにも困難にした。モスクワ周辺で飼葉が手に入らないため、騎兵隊は、パルチザンとの戦いに欠かせないのに、弱体化していった。そして、焼かれたモスクワでの露営で、仏軍本隊も弱っていった」⁴³³。こんな状況であった。

ナポレオンは、9月20日（グレゴリオ暦）付けで、親書をペテルブルクに送ったのをはじめとし、10月14日（同）までに、ロシア側に3度和平提案を行ったが、いずれも一蹴された。

フョードル・グリーンカ（未来のデカブリストでセルゲイの弟）は、パイナップルまで食卓にのぼったという、タルーチノの太平天国ぶりをこう描いている。露軍がタルーチノに着いて10日後のことだ（10月12日（9月30日））。

この最後の市場では、ロシアの地方の豊穡さがそのあらゆる実りを与えてくれた。ここでは、日用品以外に、スイカ、ブドウやパイナップルさえ買えるのだ！...

兵士たちは、フランス兵から分捕ったいろいろなものを売った。銀、衣服、指輪等々。コサックたちは馬を乗り回している（*実戦がないので、馬を運動させている——佐藤）。商人はぶどう酒とウォツカを商う。ここは、軍隊勤務から一休みする人でごった返っていて、騒々しく、歌や音楽が聞こえ、一時、戦時だということを忘れる（『ロシアの将校の手紙』）⁴³⁴。

На сих последних (рынках) изобилие русских краев выставляет все дары свои. Здесь, сверх необходимых жизненных припасов, можно покупать арбузы, виноград и даже ананасы!..

⁴³³ Кожевников А.А. Там же.

⁴³⁴ Глинка Ф.Н. «Письма русского офицера о Польше, Австрийских владениях, Пруссии и Франции, с подробным описанием Отечественной и заграничной войны с 1812 по 1814 год». М., 1870. С.39.

Солдаты продают отнятые у французов вещи: серебро, платье, часы, перстни и проч. Казаки водят лошадей. Маркитанты торгуют вином и водкою. Здесь в шумной толпе; отдохнувших от трудов воинов, среди их песен и музыки, забываешь на минуту и военное время <...>.

この当時、グリンカたちは、のちの追撃戦での食糧難は想像できなかつたろう。11月7日（ユリウス暦）、クラスノエ村（現スモレンスク州）付近で、彼はこんなことを書く羽目になる。

戦利品はたくさんあった。ところが、その月桂冠は貰い手がなく、パンはといえば一切れもない…。どんなにわれわれが腹ペコか、君は信じられないだろう！…金を袋で量っているところに、パンがひとかけもないなんて！⁴³⁵

Трофеев у нас много; лавров давать негде; а хлеба — ни куска... Ты не поверишь, как мы голодны!.. Там, где меряют мешками деньги, нет ни крохи хлеба!

仏軍の状況はといえば…互いに食い合う兵士たちを、グリンカは同日に目撃している…。

クトゥーゾフもタルーチノで、やっと一息ついたようだ。

「偉人伝シリーズ」の『アラクチャーエフ』によると、タルーチノで「べんべんとしている」クトゥーゾフの「無為」に対する批判が、宮廷でも高まり、軍事評議会⁴³⁶でも非難が出たが、アラクチャーエフ、アレクサンドル・シニコフ⁴³⁷、警察大臣アレクサンドル・バラシヨーフ（Алекса́ндр Дми́триевич Балашо́в）らがクトゥーゾフを弁護した。「一日18時間も寝ている」という避難に対し、クノーリング（Карл Богданович Кнорринг）は、「けっこうじゃ

⁴³⁵ Там же. С.53.

⁴³⁶ 軍事評議会（Военный совет）は、ロシア帝国の軍政全般を司った機関で、1812年に創設され、1918年3月まで存続した。

⁴³⁷ Алекса́ндр Семёнович Шишко́в（1754—1841）は、海軍軍人、保守派の論客、政治家。フランス語偏重の教育の弊害を指弾、教会スラブ語とロシア語を擁護する論陣を張り、愛国心を大いに鼓吹した。1812年、祖国戦争直前に改革者ミハイル・スペランスキーが追放されると、彼の後任に任命され1814年まで務めた（そのポスト、государственный секретарьは、スペランスキーが創設した皇帝の諮問機関、国家評議会を統括するものであった）。祖国戦争当時の最も重要な勅令、詔書、布告はすべて彼が書いている。1813—1841年、ロシア語の研究機関であるロシア・アカデミーの総裁、1824—1828年、教育大臣を務める。

またシニコフは、作家ニコライ・カラムジンの言語改革に反対して結成された「ロシア語愛好者談話会」の中心人物でもあったが、しかし、この「新文体派」と「古文体派」の対立は、けっして単純な新旧の争闘などではなかった。いずれの文体も、新旧さまざまな要素が複雑に絡み合っており、次第に変容を遂げていく。そして両者は、たがいに影響を与え合いつつ、やがて詩人アレクサンドル・プーシキンの文体に統合されるにいたる——。この間の事情については、以下のロトマンとウスペンスキーの論文を参照されたい。

Лотман Ю.М. Успенский Б.А. Споры о языке в начале XIX как факт русской культуры // Лотман Ю.М. История и типология русской культуры. СПб.: Искусство—СПб, 2002.

ないですか。一日の無為は、一つの勝利に値する」と答えた。休養し、補充し、時間をかせぐほど、力関係が逆転し、冬が近づいて露軍が有利になる、というわけだ。また、「コサック女の服を着せた愛人を連れ歩いている」という批判には、「ルミャンツェフは4人も同伴してますよ」との「弁護」がなされた（だれが言ったかは、当人の「名誉」にかかわるせいか、書かれていない）⁴³⁸。

この「コサック服を着た若い娘」については、ロストプチンもバラショーフあての手紙（ユリウス暦8月13日付）で、クトゥーゾフへの批判を書き連ねたなかに挙げている。⁴³⁹

露軍首脳内部の対立がぶりかえす

露軍はようやく一息つけたわけだが、悪いこともあった。最大の危機が去ってみると、また軍首脳内部の対立がぶりかえしたのだ。ベニグセンとクトゥーゾフは、露軍がどこに移動するか、仏軍に戦いを挑むか否か、などをめぐって激しく対立し、バルクライも、9月24日（10月5日）付けのツァーリあての手紙で、クトゥーゾフとベニグセンを批判している。それによると、クトゥーゾフは「無為無策で、総司令官になって満足しきっている。しかも、いざというときは、自分（バルクライ）に責任をなすりつけられると思って、ほくそ笑んでいる」⁴⁴⁰

バルクライは、妻あての私信のなかでも、「もし自分に対する罪をつぐなう気がないのなら、もう命を危険にさらすのはやめたよ」⁴⁴¹などと「激白」している。

だれが「つぐなう」のか？ 将軍たちだけでなく、結局、アレクサンドルー世、アラクチャーエフらではないか？ おそろしく難しい危険きわまる仕事をやらされて、しかも汚名を着せられるのではたまったものではない。

バルクライは、よほど腹にすえかねたのか、これから勝利の行進が始まるというときに、「病気」を理由に、辞表を出して軍を去ってしまう。体調がガタガタだったのは事実だが…⁴⁴²。

ちなみに、詩人アレクサンドル・プーシキンのバルクライ観は、彼の詩『軍司令官』⁴⁴³にみるように、きわめて同情的であった（偉人伝シリーズ『アラクチャーエフ』、259頁）。

もっとも、こういう内輪もめも、一面から言えば、余裕がでてきた現われでもある。とくにボロジノ以降の苦しいときは、一致団結するしかなかったのだから。

⁴³⁸ Томсинов В. А. Аракчеев. М., 2010. С.266.

⁴³⁹ Кожевников А.А. Там же. Примечание 3.

⁴⁴⁰ Томсинов В.А. Там же. С.266—267.

⁴⁴¹ Тарле Е.В. Там же. С.565.

⁴⁴² Барклай де-Толли М.Б. Там же. С.42.

Кожевников А.А. Там же. С.102-109.

⁴⁴³ 補遺：個別の証言と研究の(3)「デカプリスト、マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの手記」の末尾に訳出してある。

戦闘で力関係の逆転が明白に

力関係の逆転は、戦闘でもはっきりみえるようになる。

ナポレオンはついにがまんできなくなり、動きだす。10月18-19日（6-7日）、モスクワに守備隊を残して、全軍、カールガへ「進軍を再開」したのだが、今度ははっきり勝手がちがった。

マロヤロスラーヴェッツ（現カールガ州に位置）で露軍と遭遇して、激戦となり、町をなんどもとったりとられたりしたあげく、イタリア副王ウージェーヌ率いるイタリア軍が奮戦して勝った。

しかし...だからなんだというのか。この天然の要害は手に入れたが、露軍はあっさり後退してしまう。通行不能の湿地帯にへだてられていて、仏軍はおいそれとは攻撃できない。ナポレオンは、「どうもつきが落ちてしまったようだ.....やつらは、いくらやっつけても切りがない」と気落ちした⁴⁴⁴。

偵察にでかけたナポレオンは、コサック部隊と出くわして、あやうく殺されるか捕虜になるところだった。このあとの諸将が勢ぞろいした軍議で、ついに「退却」が決定する。

その意味では、マロヤロスラーヴェッツの会戦は、転回点になったにはちがいないが、しかし、大局的にみれば...。露軍が悠然とこの町を放棄できるのも、すでに物理的、精神的に優位に立って、相手の弱みを見澄ましているからだ。ナポレオンがいちばん衝撃を受けたのは、まさにこの点だと思われる。

こうして「大陸軍」の逃避行がはじまるが――

しかし、冬将軍の追手からはついに逃げ切れなかった。マロヤロスラーヴェッツの会戦の後、どのルートをとろうと、結局、軍隊は壊滅していただろう。⁴⁴⁵

やがて、冬将軍が猛威を振るいはじめると、従軍していた、後の作家スタンダールが目撃したところによれば、飢えて自分の指を食べ、血を飲む兵士たちさえいた⁴⁴⁶。

追う露軍も、飢えと寒さで苦しかった。12月6日（11月24日）には、マイナス38度を記録している。ちなみに、『戦争と平和』で、仏軍の捕虜となっていたピエールがパルチザン部隊によって解放されたのは、11月4日（10月23日）のことであり⁴⁴⁷、本格的な寒波が襲来するまさに直前であった。初雪が降ったのは、その翌日の11月5日である。

⁴⁴⁴ ナイジェル・ニコルソン、前掲書、194-196頁。

⁴⁴⁵ ナイジェル・ニコルソン、前掲書、201頁。

⁴⁴⁶ ナイジェル・ニコルソン、前掲書、285頁。

⁴⁴⁷ 『戦争と平和』4巻4編3章の記述から、デニソフ率いるパルチザン部隊が10月23日に仏輸送隊を襲い、ピエールをふくむ捕虜を解放したことがわかる。

第13章 「ただ逃げること」の難しさ

ここにいたるまでの祖国戦争の流れを振り返ってみると、タルーチノへうまく移動できたことで、勝負あった、という感じがする。

もっとも、こういう極論もある。どんなシナリオをたどろうが、仏軍はいずれ退却せざるをえなくなって、冬将軍にやられていただろう。そもそも補給、通信の面でむりな遠征だった。露軍はただ逃げていればよかったのだ。白旗さえ掲げなければいい、と。

だが、この白旗を掲げないことが、「ただ逃げる」ことがいかに難しいことだったか考える必要がある。スモレンスクの前後で、ボロジノで、首都放棄の混乱のなかで、軍が壊滅する危機はいくつもあったのだ。

ここで、その「ただ逃げる」ということの意味を突っ込んで掘り下げ、しっかり押えておきたい。それは、祖国戦争の理解に必須であるにもかかわらず、根本的に誤解されていると思うからだ。

概して、兵士たちは、敵に向っていくときは恐いから、「群れ」になる、つまり密集するのが自然だが、自国の領内をひたすら逃げるとなれば、たえず落伍、離脱、逃亡の誘惑にかられ、軍がバラけやすいのはこれまた自然の理だ。しかも、露軍は開戦以来、徹底的な焦土作戦を行った。これは、自分で自分の家と財産を焼き、生活を破壊しつくすことにほかならない。兵士は農民であり、彼ら自身が加害者にして被害者なのだ。いくら焦土作戦の必要性を認識していたとしても、嫌気がさして当然である。

しかも、これにくわえて、撤退中の行軍の物理的条件は過酷をきわめた。前に述べたように、参謀本部に勤務するクラウゼヴィッツでさえ、しばしば水溜りの泥水を飲まねばならなかったと言う。当初、約50万の兵力を誇った仏軍が、スモレンスクでは十数万に激減していたが、露軍の行軍の厳しさも、おさおさこれに劣るものではなかった。

もっとも、露軍としては、第1軍と第2軍の合流までは、兎にも角にも退却せざるを得なかったのも事実で、いずれ合流の暁には一泡吹かせてくれよう、という思いが支えになり、軍の崩壊を食い止めていた。

だが、スモレンスクで、中途半端な戦闘で空しく犠牲を出してまた退却し出したときには（と将兵の多くは思ったにちがいない——『戦争と平和』のアンドレイもそうだった）、気持ち崩れかかり、総司令官格のバルクライへの憤懣はもう抑えようがなくなった。ここでの総司令官交代は必至であり、大会戦もまた必然であった。

その大会戦のボロジノであのような戦いをなしえたからこそ、その後の再度の退却でも、軍は完全崩壊を免れたのだと筆者は確信する。ボロジノを訪れた人は、露軍の凄まじいばかりの戦いぶりを容易に想像できるだろう。あの意外なほどの至近距離で（ほとんど真ん前から撃たれているような感じだ）、しかも開けっ放しの平地で、十字砲火を浴びてなぎ倒され、

兵力の3分の1強を失いつつ、なおも一步も退かない——。それはなにを意味するか。

デカブリスト、フョードル・グリーンカ（セルゲイの弟）は、会戦前にイコンに額づく兵士たちを感動をこめて描いているが（これはトルストイの創作ではない）、たしかに兵士たちの心中には端倪すべからざるものがあつた。

しかし、ここにはもう一つ、落とし穴があつた。士気の高さにまかせて、猪突猛進に勝ちに行っていたら、機動力で圧倒的にまさる仏軍の術中にはまっていたかもしれない。だからこそ、クトゥーフは、モスクワへの最短路をがっちり押え、軍の壊滅、敵による迂回だけは避けるという守りの姿勢をとつたのである。

が、その結果として、露軍は、きわめて不利な消耗戦を強いられることになってしまった。クトゥーフが守りを固めた結果、軍の左翼は手薄になり、身を守る遮蔽物もほとんどないまま、仏軍の集中砲火を浴びつづけたからである。それはナポレオンの側近のコランクールでさえ、「いまだかつて聞いたことがない」というほどの砲火だったが、露軍の将兵は、クトゥーフに対し怒ったり、意気阻喪したり、潰走したりするどころか、ついに最後まで整然たる隊形を崩さなかつた。これは驚くべきことである。

こうした、目に見えにくい、ほとんど不可能に近い戦いをものにし、確かな精神的手ごたえを得たことで、その後のモスクワ放棄、放火に、露軍は耐えることができた。換言すれば、露軍は、ボロジノであれだけ奮闘したからこそ、その後も、どうにか軍を保ちつつ退却できたのである。逆説的に聞こえるかもしれないが、「ただ逃げる」ためには、**ボロジノが必要であつた。**

ボロジノが今日にいたるまでロシアで輝かしい神話として残っているのは、こうした理由による。この会戦こそが、困難きわまる全戦役に勝利をもたらしたからである。

そして、こうした戦いを可能にしたものは、デカブリストのフョードル・グリーンカとマトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストル、そしてトルストイの確信したところによれば、「大きな愛」であつた。戦争という「必然」を深く突き抜け、その彼方の自由、神、「大きな愛」に達し、それを共有したことが、露軍をあゝの十字砲火に耐えさせた。『戦争と平和』の感動は、結局のところ、ここにもとづく。これが信じられなければ、『戦争と平和』の世界は崩壊するだろう。

と同時に、露軍が必然を突破して、自由と神に近づいたさまをトルストイが感得したことは、彼が戦争から離れる転回点ともなつた。戦争から始まり、脱戦争で終わるのである。トルストイの後年の平和主義の芽は、なによりもボロジノにあつたと考えることができる。これこそが、この作品が『戦争と平和』と名付けられた、もう一つ突っ込んだ事情であり、たんに戦争と平和の場面が交錯するというようなことではない。戦争と平和は通底しているのだ。

ちなみに、この戦争から平和への転回点が明瞭に現れているのが、プラトン・カラターエ

フの人物像だ。彼は「アプシェロン連隊 Апшеронский полк」に所属しているので、ボロジノでは戦っていないのだが、当初のトルストイの構想では、プラトンは、スモレンスクでも、ボロジノでもまさに激戦中の激戦を転戦するはずだったのである。これについては、故ゲオルギー・クラスノフの指摘がある⁴⁴⁸。

すなわち、『戦争と平和』第1稿では、プラトン・カラターエフは、「トムスク連隊の下士官 унтер-офицер Томского полка」とされていた。この部隊は、あのドミトリー・ドフトゥロフ率いる「第6歩兵軍団 6-й пехотный корпус」に属していた。ドフトゥロフは、最も困難な場所で最も困難な仕事をみごとに遂行した、不言実行の名将として、『戦争と平和』のなかで絶賛されている人物だ。軍記物の第一作『襲撃』に、フローポフという寡黙で謙虚な二等大尉が出てくるが、まるで彼が将軍になったようだ——とトルストイは感じているように思われる（4巻2編15章）。

だからプラトンは、初めの構想では、こういうドフトゥロフの指揮のもとで、炎上するスモレンスクから最後に撤退した部隊にいたのであり、ボロジノでは、バグラチオンの負傷で崩れかかった左翼を支えた将兵の一人だった。

ところが最終稿ではプラトンは、「アプシェロン連隊の兵士」（солдаты Апшеронского полка）となっている。これは「第3西方軍 3-я Западная армия」（アレクサンドル・トルマーソフ Александр Петрович Тормасов が率いる）に属し、1806—1812年には露土戦争に参加しているので、ボロジノには間に合っていない。しかも、プラトンは熱病にかかったので、戦闘には長く参加していないことになる。以上がクラスノフの指摘だ。

しかし、ここにはもう一つ面白いニュアンスがあると思う。このアプシェロン連隊の戦歴は、まことにすさまじいもので、1799年には、名将スヴォーロフのあのイタリア遠征に参加して、絶体絶命の窮地をアルプス越えて脱し、1805年には、『戦争と平和』1巻のハイライトでもある、シェングラーベン、アウステルリッツの戦いに参加しているのだ。

シェングラーベンは、クトゥーゾフ麾下の露軍本隊を仏軍の挟撃から脱出させるために、バグラチオンが決死隊を率いて、仏軍を食い止めた戦いであった。

つまり、プラトンもまた、戦争というもののあらゆる困難と悲惨をくぐり抜けたあとで、「丸い」百姓風の風貌に戻った人物だったということだ。そこには、『戦争と平和』の全精神的プロセスが凝集していると言える。⁴⁴⁹

⁴⁴⁸ Л. Н. Толстой. Собрание сочинений в 22 томах (комплект из 20 книг). М.: «Художественная литература», 1978—1985. Т.7. С.403.

（トルストイ 22巻選集 7巻の52頁への注、403頁）

⁴⁴⁹ 以上のことを考え合わせると、アプシェロン連隊の戦歴は『戦争と平和』では触れられていないものの、カラターエフをこの部隊へ所属させたのは、作者の意識的な選択だったにちがいない。『戦争と平和』の草稿（№256）には——ここで初めてカラターエフが現れるのだが——、「十年兵のときに〔スヴォーロフの——抹消〕遠征に参加した」と、カラターエフが語っていることから、そのことが裏付けられる（15, 27）。

補説：ベレジナ川でナポレオンを捕捉、撃滅する作戦の計画書

「大陸軍」の逃避行の悲惨さはよく知られている。最悪の悲劇は、11月末のベレジナ川の渡河であった。

前に述べたように、トルマーソフ将軍は、開戦当初、南部でオーストリア軍をけん制しており、チチャゴフ提督率いるダニューブ（ドナウ）軍は、トルコと戦っていたが、1812年5月28日のブカレスト和平条約締結後、対トルコ戦から解放され、北上しつつあった。ヴィトゲンシュタイン伯爵の部隊は、開戦当時リガを守っていた。

露軍は、仏軍がベレジナ川を渡らねばならないのを見越し、三方向から挟み撃ちにしようとする。南西方向からチチャゴフ軍が、北東からヴィトゲンシュタイン軍が、そして、後方からクトゥーゾフの主力軍が追走してくる。仏軍にとって不運なことに、この時期、寒さが一時的にゆるみ、ベレジナ川は凍結しておらず、橋を架けねば渡れなかった。

だが仏軍は、三方から殺到する露軍をかわし、浅瀬を発見して速やかに架橋し、11月26—29日（グレゴリオ暦）に渡河に成功する。とはいえ、それまで5万弱の兵力があった仏軍は、渡河に際しての戦闘で約2万5千を失い、非戦闘員にもそれ以上の犠牲者を出して、この時点で「大陸軍」はほぼ壊滅したといえる。

ナポレオンを絶体絶命の窮地に追い込んだこの作戦は、いつごろ立てられたのだろうか？
じつは、そのはるか前の、ボロジノの会戦直後には策定されていたのだ。

9月21日（9日）、クトゥーゾフと露軍本隊が旧カルーガ街道のクラスナヤ・パフラー村に着くその前日、サンクトペテルブルクからアレクサンドル一世により派遣されたアレクサンドル・チェルヌイショーフ大佐（のちの陸軍大臣）が、クトゥーゾフのもとに到着し、ある作戦計画書を手渡した。

作戦計画書に付された皇帝の手紙は、9月12日（8月31日）付になっており、その内容はおおよそ次のとおりだ。

「8月24日および26日の仏軍の攻撃」（*つまりボロジノの会戦——佐藤）にかんするクトゥーゾフの報告を受け、それを踏まえて、「トルマーソフ将軍、チチャゴフ提督、ヴィトゲンシュタイン伯爵の部隊、およびリガから振り向けられるシュテインゲリ伯爵の部隊の攻撃行動にかんする作戦計画書」を作成したので、「クトゥーゾフ公爵自身の判断で、必要とあらば使ってほしい」。「作戦の実施時期は、公爵の判断によることなので、白紙になっている」⁴⁵⁰

これは要するに、クトゥーゾフの本隊が、南北に展開していた別働隊と連携して、3方向か

⁴⁵⁰ Кутузов М.И. Сборник документов. Т. IV. Ч. 1. М., 1954. С.194-195.

らナポレオン軍を挟み撃ちにして退路を絶ち、撃滅するというもので、後に、ナポレオンのベレジナ渡河に際しほぼそのままあわや成功するところであった、まさにその作戦なのだ。

アレクサンドル一世が、ボロジノの会戦にかんするクトゥーゾフの報告書を受け取ったのは、9月11日(8月30日)である。早くもその翌日に、このような作戦計画書がクトゥーゾフに送られていることはなにを意味するのか？

軍事史家 A.N.アプフチンは、クトゥーゾフの報告書が「勝利の印象を与えたので」、こんなものを送ってきたと述べているが⁴⁵¹、これは事実と反する。

クトゥーゾフの報告書には、非常な損害をこうむり「6露里退却することを決定した」と書いてあった。しかも、彼は「勝利」という言葉を使っていない。報告書は沈着でバランスがとれている。そして、これを読んだアレクサンドル一世は、妹エカテリーナあての9月30日(9月18日)付の手紙で、「この運命的な6露里が、勝利のもたらしたあらゆる満足を損なった」と言っているのだ(『祖国戦争とロシア社会』4巻所収の「ボロジノ」の注6を参照)。

この運命的な6露里が、勝利のもたらしたあらゆる満足を損ない、私に次の報告を待たせることとなった。われわれの前途には災厄のみが待ちかまえていることを、この6露里ははっきりと示していた。⁴⁵²

Эти фатальные шесть верст, отравляя все удовлетворение, которое доставили мне победа, заставили ждать меня следующего донесения; а оно ясно показало мне, что впереди нас ждут одни бедствия.

このクトゥーゾフの報告書を、アラクチャーエフが改ざんして朗読させたから、公式には「勝利」にすりかわっただけのことで、ツァーリもそれを承知のうえで、いっしょに芝居を打っていた⁴⁵³。

しかし実際には、ボロジノの会戦のような大事は、複数のルートで時々刻々と報告が来ていなければおかしい。事態は迅速かつ的確につかんでいたはずだ。たとえば、こういう事実がある。

⁴⁵¹ Апухтин А.Н. Березинская операция // «Отечественная война и Русское общество». Том IV.

⁴⁵² Переписка императора Александра I с сестрой великой княгиней Екатериной Павловной. СПб., 1910. С.90.

⁴⁵³ 9月21日(9日)に、ツァーリは、ミショー大佐のモスクワ放棄の報に接して、悲嘆にくれてみせる。「なんと！ 会戦に負けたというのか？ あるいは戦わずして、古都を敵手にゆだねたというのか？」。くさい芝居だが、トルストイは、これをそのまま事実として引き写している。

アレクサンドル一世の側近であったピョートル・ヴォルコンスキーの副官、ニコライ・ドゥルノヴォ（Николай Дмитриевич Дурново, 1792—1828）は、その日記によると、ペテルブルクにいて、9月11日（8月30日）には、ボロジノの結果を知っている⁴⁵⁴。

急使がわが主力軍から、26日にボロジノ村で行われた会戦について、知らせをもってきた。あらゆる点で敵に勝利したと主張しているが、勝利にもかかわらず、翌日撤退しなければならなかった。これは疑惑を呼び起こす。われわれは途方もない損害をこうむった。近衛軍もすべて戦いに投入された。バグラチオン公爵、ゴルチャコフ公爵、トゥチコフ、クレトフ、ヴォロンツォーフ伯爵、バフメーテフの二人の兄弟などが負傷した。クタイソフ伯爵は行方不明だ。捕虜になったと考えられている。トゥチコフ兄弟のうちのひとりには戦死した。

ボロジノの会戦からわずか4日目に、きわめて正確な情報を得ており、判断も的確だ。これが一副官で、弱冠20歳の若者であることに注意したい（モスクワの一般人でさえ、非常な情報収集能力と判断力をもっていたことは、この後まとめて示す、セルゲイ・グリーンカの回想録とドミトリー・ヴォルコンスキーの日記から明らかだ）。

こういう次第だから、ツァーリと宮廷がボロジノの「勝利」に舞い上がってナポレオン撃滅計画をクトゥーゾフに送ってよこした、などということはあるにないのだ。

そもそも、わずか1日でこのような作戦を策定して送り返すなどということは物理的に不可能である。この作戦は、ほかの多くの作戦がそうであったように、はるか以前から大局を洞察し、熟慮のうえ練り上げられたものだろう。

ロシアの奥地深く入り込んだナポレオンは、いずれ退却せざるをえなくなる。皇帝としてはパリをそんなに長く留守にしていられないし、補給線はか細い。冬がくる前に退かなければ、半年間モスクワに缶詰になる。ナポレオンが退いたら、北上してくるチチャゴフ軍とトルマーソフ軍、リガから南下してくるヴィトゲンシュタイン軍、そしてクトゥーゾフの主力軍で、三方から挟撃する――。こうした巨視的な認識を、宮廷も政府も共有していたということだ。

ナポレオンがベレジナ渡河に成功し逃げられたのは奇跡に近い。こういう地に足の着いた戦略を、ボロジノの会戦の衝撃のなかで展開できたとは驚くべきことである。

⁴⁵⁴ Дурново Н.Д. Дневник 1812 года // 1812 год... Военные дневники. М., 1990. С.90—91.

カルーガ街道への転進をトルストイはどう描いているか

軍隊にとって最良の位置が（攻撃されていない場合）食糧のより多い場所であることを理解するには、大して頭を使う必要はない。だれだって、たとえ愚かな十三歳の少年でさえも、1812年のモスクワ放棄後、軍にとって最も有利な位置がカルーガ街道であったことは、難なく理解できたろう。（『戦争と平和』4巻2編1章）

作者は、こう読者をまず煙に巻いた後で、もしもモスクワが焼けていなかったらどうだったか、もしミュラーが露軍を見失わなかったらどうだったか、もしナポレオンが無為に日を過ごさなかったらどうか...と並べ立て、これらの「無数の偶然の要因」が重ならなかったら、露軍はモスクワからカルーガ街道方面に行けなかった。すべては自然な成り行きで、要するに、腹が減った動物が本能的に餌に吸い寄せられるように、カルーガ街道に行き着いたのだ、とお決まりの論を展開する。だが、そのように漫然とカルーガ方向に進んでいったのでは、ぶじにたどり着けたはずはなかった。

クトゥーゾフ以下の露軍首脳が、いかにありとあらゆる要因をあらかじめ計算し、みごとに所期の作戦を実行したかは、すでに詳しくみたとおりである。トルストイのこの——敢えて言うが——詭弁もまた、モスクワ大火のところで述べたとおり、一切が必然であり、人々はそれに押し流されていったことを際立たせるための演出なのだ。

だが、なぜそんな演出が必要なのであろうか?... これはじつは、人間の心理に深く根ざしているのだと思われる。

すべては運命であった。そうであるよりほかはなかった。だれが悪いのでもない——。巨大な悲劇、暴力に襲われた人間は、いずれこう思ったがるようになっていく。人災ではない、天災だと。

話をわかりやすくするために、やや突飛に思われるかもしれないけれども、広島原爆を例にとってみよう。あれは、アメリカの特定の人間が具体的な目論見のもとに投下したのであるが、日本人の目には、あたかも原爆が自分で降ってきたかのような、なんとというか、ニュートラルな悲劇の色彩を帯びるようになっていく。だれかの悪意、暴力、シニカルな政治的、軍事的目論見などのせいではない。そういうことを考えるのは辛すぎる...

生々しい暴力は、われわれの意識のなかで灰汁抜きされ、人間の痕跡を残さぬ、中性的な「災難」にすり替えられてしまう。ドロドロした自由は、ニュートラルな必然に変貌していく。このような天災に対しては、受身で耐えるしかない。復讐？ とんでもない。そこには相手になる人間がないのだから...

1812年に話をもどすと、だから、この『戦争と平和』という灰汁抜きされた必然の世界で

は、極端な悪人は出てこない。真に邪悪なばかりごともない。天才などというものはありえない（ナポレオンが矮小化されるのはこのためである）。モスクワに置き去りにされ焼け死んだ兵士はなにを思ったか？ ということには触れない。

『戦争と平和』に描かれた 1812 年は、その意味で、現実ではない。神話である。あるいは、神話のメカニズムを見切ったトルストイが、その論理を徹底させた実験室の白昼夢である。換言すれば、トルストイは、漠然と漂っていた 1812 年神話に形を与えたのだ。『戦争と平和』は、小説でも歴史でも現実でもない。

この作品のなかでロシア人が戦った必然とはこういうものであった。その必然の奥底に参入すると、生命が現れ出る。これが自由である。そのことを最も深く認識し、本多秋五の言葉借りれば、「自由を内面化する」のはピエールである...。⁴⁵⁵

こうみてくると、なんだという感じだが、読後感はまさに圧倒的であり、作品から生命感と自由感が湧き上がってくる。なぜだろう？... これが『戦争と平和』の最大の眼目なのだ。

トルストイの生涯と創作について、これまで述べてきたことを思い出していただきたいのだが、『戦争と平和』を書く前の彼もまた、1812 年のロシア人とおなじく、完全な袋小路に追い込まれていた。必然に圧倒され、絶体絶命に陥っていた。その彼が、1812 年神話に目を向けたとき、そこには、現実を乗り越えるに足る、なにかが含まれていると思った。1812 年は、彼自身の夢ともなった。それを突き詰めたものが、ピエールのつかんだ生命と自由にはほかならない。ようやく、それについて考えるときがきたようだ。

しかし、その前にここで 1812 年の総括をしておこう。まずは、実際の祖国戦争と『戦争と平和』との食い違い、史実の歪曲をまとめて指摘しておく。内外の読者の多くは、この作品に書かれていることがら事実だと思い込んできた。その結果、たとえば、バルクライ、ベニグセン、ヴィンツェンゲローデをはじめとする「外国人」、「ドイツ人」は、今日にいた

⁴⁵⁵ 本多秋五は、その歴大な『戦争と平和』論の骨子を、「小林秀雄論」で、以下のように端的に言い切っている。

どうにもならぬ現実の必然を、どうにもならぬと承認する客観肯定の深みから、どうにもならぬ自我内部の必然が湧き上がり、この必然もまた客観的必然の一部として承認される。外なる必然と内なる必然が渾然一体化し、一つのものとして了得される。それが自由だ。これは僕等が戦争中に苦い体験の底から汲みとったぎりぎりの真実でもあったのだ。（初出「近代文学」1946 年第三号、未来社刊『転向文学論』所収、40 頁）

「外なる必然と内なる必然が渾然一体化」...。そのビジョンを、本多はこれ以上説明してはいないが、彼には、これで十分だったのかもしれない。だいたい、この遺書として書かれたすぐれた評論に、彼として書き残したことなど、あるわけがない。

しかも、本多が、ピエールと同じく、そうした啓示を得て、それによって——もっぱらそれだけによって——戦時下の生を支えたことは、『戦争と平和』論に漲る気魄と確信が、有無を言わず納得させてくれる。だが、われわれはあえてその先を、そのビジョンの内実を考えてみよう。

るまで不当に貶められ、それが歴史研究にも影を落としている。ほかにもいろんな問題点があったことは、これまで見たとおりだ。しかしこれらの歪曲や神話は、なにも『戦争と平和』が初めて無から捻り出したものではない。それ以前に胚胎していた或るものに、この作品が形を与えただけだ。その潜在していたものとはなんなのか？ そして、それはどこから来るのか？... 本稿は、「外国人」をはじめ、祖国戦争の真実の復権にむけてのささやかな試みでもある。

このように『戦争と平和』の負の側面——それは 1812 年神話それ自体が含んでいるものであり、祖国戦争研究が引きずっている負の遺産でもある——を指摘した後で、1812 年とは、祖国戦争とは何であったのか、改めてその全体像の概略を端的に示す。そうして、『戦争と平和』論プロパーにつなげるという段取りだ。

第14章 トルストイによる祖国戦争の歪曲と真実と

歪曲の根は？

『戦争と平和』が或る普遍的な愛と生命の表現を目指し、それに大きな成功を収めていることは、なによりも読後感が如実に物語っている。だが、それと同時に、これまで述べたことからあきらかなように、排他的、独善的な大ロシア主義の面があることも否定できない。ロシア人には口当たりがよく、自尊心に媚びるところがある。

具体的にいうと、まず第一に、トルストイは、ロシア人の「外国人」ぎらいに、うまく形をつけ、吐け口を与えたといえる。

善玉は、すべてクトゥーゾフ以下、ロシア人で（じつは彼はタタール系だが）、外国人はみな、悪玉か、「ロシアの心」がわからぬ阿呆という図式に、整理されてしまった。例外はほとんどない。「外国人」を「にがり」にして、神話を結晶させてしまった、ひとつの旋律に仕立ててしまった、ということだ。トルストイ以前には、こういう、外国人ぎらいの結晶化はなかった。

というのも、現実はこんなにきれいさっぱり単純であろうはずがないからだ。バルクライをはじめとする「外国人」の功績は否定のしようがないし、ロシア人も、クトゥーゾフとバグラチオン以下、全将兵が『戦争と平和』のように、一致団結していたわけでもなかった。たとえば、バグラチオンがクトゥーゾフもバルクライもこっぴどくこき下ろしていることは、すでにみた。それにバグラチオンはいわゆる「生粋のロシア人」ではなく、グルジアの出身だ。

ところが、『戦争と平和』では、クトゥーゾフとバグラチオンはまさに一心同体である。ロシア第一の猛将バグラチオンと「真にロシア的な將軍」とは関係が良くなくてはいけないのだ。

とはいえ、火のないところに煙は立たない。とくに祖国戦争当時、ロシア社会では外国人嫌いがくすぶっていたのはたしかである。ここでそれを整理して押えておこう。

祖国戦争時の外国人嫌い

祖国戦争の当時から、ドイツぎらい、外国人ぎらい、はなはだしくは外国人＝スパイ説は、上から下まで多くの人に共有されていた。

バグラチオンは、ロストプチンあての手紙で、「陛下は、バルクライに会戦をおこなうことを禁じたので、ずっと退却しっぱなしだ」と露骨に非難している。

バルクライのような「外国人」⁴⁵⁶は、こういう作戦上の批判が容易にスパイ説に転化した
が、クトゥーゾフの場合は、いくら悪口を言われても、スパイということはなかった。

実際にはクトゥーゾフは、バルクライの方針を継承してスモレンスクからモスクワへ退却
したばかりか、首都放棄までやってのけたというのに…。

ドイツのマイニンゲン出身のヴォリツォーゲン⁴⁵⁷も、スパイ説があったし、彼がバルクラ
イを動かしているとの風説もあった。

宮廷の実態

「外国人」への批判、非難は、彼らを使っている宮廷と皇帝にも向けられる。ウラジーミ
ル・トムシノフは、自著『アラクチャーエフ』で、こう簡潔に言う。「アレクサンドルがい
ちばん頼っていたのはバルクライとアラクチャーエフだろう。だから、この二人に憎しみが
集中した」⁴⁵⁸

それだけに、彼らの祖国戦争への貢献は、過小評価され、それがいまだに尾を引いている。

バルクライの功績は、1812年にかぎっても巨大だが、戦前の陸軍大臣としてのものもある。
フランスの軍制をとり入れたこと。とくに軍団制の導入だ。仏軍では、ダヴー軍団、ネイ軍
団など、それぞれがミニ軍隊としての体裁をもち、砲兵、歩兵、騎兵などの各部隊に衛生班
もそなえており、戦闘行動のかなりの部分が指揮官の裁量にまかされているので、臨機応変
の対応が可能だった。

ちなみに、アレクサンドルは、ピョートル一世の焦土戦術（対カール十二世）をバルクラ
イに読ませて、来る大焦土戦にそなえさせている⁴⁵⁹。これもツァーリの信頼の厚さを物語る。

露軍の大砲は、祖国戦争の前に改良され、軽量化された一方で、口径も性能も仏軍を上回
っていたが、これはおもにアレクセイ・アラクチャーエフ（1769－1834）の功績だ。彼は、
大砲および砲兵隊のすぐれた専門家であり、内外の専門文献にも通曉していた。アレクサン
ドル一世は、父帝パーヴェル一世の時代から、アラクチャーエフと親密で、彼のこの方面の
能力をよく知っていた。アレクサンドルによって、1803年5月に全軍の砲兵監に任命された
アラクチャーエフは、とくに1805年のアウステルリッツでの大敗の後、きわめて精力的に、
大砲と砲兵隊全般の全般的な改革にとりくみ、早くも1806－1807年の対フランス戦役では、

⁴⁵⁶ バルクライ・ド・トリーは、もともとスコットランドの家系だが、17世紀には、バルトのリ
フランド県（リヴォニア＝現在のラトヴィア東北部からエストニア南部にかけての地方）に移住
し、ロシア皇帝に仕えるようになった。ツァーリの臣下になって3代目がバルクライだ。だから
、じっさいには外国人とはいえない。

⁴⁵⁷ ヴォリツォーゲン（1774－1845, Ludwig von Wolzogen）は、ザクセンの貴族の家庭に生まれ、
はじめはヴェルテンベルク公国の軍隊に勤務したが、公国がナポレオンの支配化に入ると、プロ
イセンと戦うことを嫌って、ロシア軍に移る。祖国戦争と「諸国民の戦い」の数多くの戦闘に参
加し、1815年に少将としてプロイセン軍に移る。翌1816年から皇太子ヴィルヘルム（のちの初代
ドイツ帝国皇帝）に軍学を講ずる。

⁴⁵⁸ Томсинов В.А. Там же. С.261.

⁴⁵⁹ Томсинов В.А. Там же. С.250.

「アラクチャーエフの砲兵隊」の威力を示し、アレクサンドルを驚喜させた⁴⁶⁰。

アラクチャーエフは「対仏戦は、私の手を通しておこなわれた」と言っていたし、「すべてを知っていた」⁴⁶¹

アラクチャーエフは、戦前の 1812 年 4 月 3 日に、弟あての私信で（郵便によらず、使いの者が直接手渡した）、こうはっきり言っていた。

戦争は不可避だ。<...> この戦争は、この上なく残酷で、熾烈で、長くつづき、ありとあらゆる厳しさをともなうものになるだろう。その厳しさについては、4 部からなる、すでに承認済みの指令が出されている。⁴⁶²

戦争は避けられず、しかも、会戦で片がつくような短期戦にはならない。厳しい徴発、動員を行い、一大焦土作戦を展開することになる。そうでなければ勝てない。この点で、宮廷と政府はすでに合意済みで、すでに具体的措置を定め、実行段階に入っている——。アラクチャーエフは、こうはっきり認めているわけだ。そして、その戦略の中枢に彼自身がいた。

ヴァーゼムスキーの手紙をみると、アラクチャーエフがいちばん近い側近であることは常識だったようだが⁴⁶³、まさにそれが反発を呼ぶ。

アラクチャーエフは、アレクサンドル一世の寝室にまで自由に出入りできた⁴⁶⁴。細かい戦術や詔書の内容まで、いちいち二人で意見をつき合わせている⁴⁶⁵。まさに一心同体だ。

アラクチャーエフは、アレクサンドルの、心理学的な意味での「影」の代行者であり、手足であり、暴力であったようだ。アレクサンドルにとっては、彼が傍らにすることが不可欠だった。

こうした特異な関係も手伝って、反感と非難はツァーリと宮廷そのものにも向く。

デカブリスト、セルゲイ・ヴォルコンスキーの回想には、「陛下とアラクチャーエフの、なんというか二重人格的なゲーム」とか「アラクチャーエフの陛下に対する力の証明」といった露骨な反感、批判がでてくる⁴⁶⁶。

ちなみに、セルゲイ・ヴォルコンスキーは、ベンケンドルフとおなじく、ヴィンツェンゲローデのもとで軍務についていた。前に述べたように、ヴィンツェンゲローデは、バルクライの発案で、仏軍の補給線をおびやかすべく、最初のパルチザン部隊をつくった人物だ。

ヴァーゼムスキーの手紙 2 通には、「外国人だらけ」という文句がでてくる。「宮廷の放埒のせいで、外国人がやたら入り込み、祖国はいまやこの体たらく」とも。「宮廷の放埒」

⁴⁶⁰ Томсинов В.А. Там же. С.162-179.

⁴⁶¹ Томсинов В.А. Там же. С.253, 261-267.

⁴⁶² Томсинов В.А. Там же. С.248-249.

⁴⁶³ Томсинов В.А. Там же. С.261.

⁴⁶⁴ Томсинов В.А. Там же. С.254.

⁴⁶⁵ Томсинов В.А. Там же. С.261—262.

⁴⁶⁶ Томсинов В.А. Там же. С.264.

というのは、アレクサンドル一世が、ポーランド人の愛国者、アダム・チャルトリスキを外相にし、皇后エリザヴェータを「共有」していたことや、妹のエカテリーナとの近親相姦のうわさなども念頭に置いているのだろう。たしかに、アレクサンドルとチャルトリスキの関係などは、不可解ではある…。

トルストイによる歴史の虚構

トルストイは、こういう現実の状況を根本的に変えてしまう。アレクサンドルは、何も知らない、何もできない、赤ん坊のようなお人よしに祭り上げる。19世紀のフォードル一世と行ったところだ。ロシア人は、こういうタイプがきらいではない。

祖国戦争の立役者バルクライ以下の外国人は、思い切りよく無視するか、スパイか阿呆にってしまう。『戦争と平和』のボロジノとフィリの軍議での、バルクライの無視ぶりが好例だ。

その一方で、「ロシア人」クトゥーゾフとプラトン・カラターエフを軸とするヒエラルキーをがっちり固める。偉大なる司令官（великий полководец）と兵士、民衆だ。これはつまり、地主貴族と農奴の団結ということでもある。かくして、ロシア人のソボルノスチへの渴望が癒されるのである…。

戦略、作戦は無意味？

前にも述べたように、トルストイは、事件は無数の要因が結合して起こるものだから、たとえば、ある戦闘でだれが指揮しているかというようなことは意味をもたないと言う。

しかし、たとえば、アウステルリッツの会戦でのナポレオンの作戦勝ちとはだれがみても動かしようのないところで、だからほかならぬトルストイもそのように描き、自家撞着におちいつている。

にもかかわらず、トルストイは、ナポレオンは自分が全能だと思い込んでいる馬鹿だ、という。ここで作家の論は破綻している、と最初に指摘しておいた。

破綻してはいるが、読者は、圧倒的な筆力でねじ伏せられるので、『戦争と平和』を読むと、ナポレオンも、クラウゼヴィッツも屁理屈しか分からない、頭でっかちの間抜けである、という印象が残ってしまう。

トルストイいわく、無数の要因がいつしかむすびつき、事件が起きる。それらをむすびつける「力」とはなんなのか？ これは、作戦だの戦略だのという屁理屈を去り、直観的、直接的に全身全霊で把握しなければわからない。その力をみごとに洞察していたのがクトゥーゾフである。この力の背後には神があり、力の認識は、神の認識にほかならない。「ロシアの心」は、その認識を可能にする。そうした宗教的な体験において、クトゥーゾフとロシアの民衆はひとつになる――。

というわけで、トルストイの所論は、排他的な優越感を秘めている。この優越感から、ナ

ポレオンもクラウゼヴィッツも、その戦略、作戦も、屁理屈として見下され、「外国人」一般も、縁なき衆生として切り捨てられてしまう。

だが、はたしてクラウゼヴィッツのいう戦略とはこんなものか？

彼によると、ボロジノの会戦のあとで、クトゥーゾフの側近、トーリ大佐は彼に、「モスクワの向こうへの撤退は、従前通りの方向にでなく、南へ曲がるべきだ」と言ったという。理由は、補給基地に近い点と「空間的ファクター」だ。この会話をふまえて、クラウゼヴィッツはこう書く――。

参謀本部では、ボロジノの後どう行動すべきかは詳細に論じられていた。意見そのものはいくらかあった。問題は、それをいかに実行するかだった。戦争というものは、無数の偶然、思いもかけぬ困難にぶつかる。いってみれば、空気のなかを進むのではなく、水の中を、無数の、しかも予測不可能な抵抗力のなかを進まねばならぬ巨大な機械のようなものである。こうした条件下で正しい決断をするには、ずばぬけた直観力が必要である、と⁴⁶⁷。

クラウゼヴィッツは、こうした理解のうえに立って、トーリにこう自分の意見を述べたという。

私はあなたの意見に賛成だ。なぜなら「空間的ファクター」を存分に活用すべきだから。ロシアという巨大な空間にまよいこんだナポレオンは、いくら広大な地域を占領しても意味がない。それを守ることも不可能だから、結局、退却せざるをえない――。

これのどこが屁理屈なのか、どこがクトゥーゾフの洞察とちがうのか？ トルストイは、クラウゼヴィッツのこの著書を読んで、つぎのように「引用」しているが、それはどうみても歪曲であり、フェアではない。ボロジノの会戦の前日、ピエールがアンドレイを尋ねる場面である（3巻2編25章）。

「いや、公爵殿、ほんとうです。まったくそのとおりです」とチモーヒンは言った。

「こんなときにどうしてわが身を惜しんでいられましょう！ 私の大隊じゃ、どうでしょう、ウォッカを飲まなくなりました。そんな日じゃない、と申しまして」。みな口をつぐんだ。

将校たちは立ち上がった。アンドレイ公爵は、彼らといっしょに納屋の向こう側に行き、副官に最後の命令を与えた。将校たちが行ってしまうと、ピエールはアンドレイ公爵に近寄り、話をはじめようとしたが、そのとき、納屋の脇の路を3頭の馬が進んでくるのが聞こえた。アンドレイ公爵がそちらに目をやると、コサックをともなったヴォリツォーゲンとクラウゼヴィッツだった。彼らは、話をつづけながら、すぐそばを通りすぎたので、次のような会話が耳に入った。

「戦争は空間に移すべきだ。ぼくは、この意見をいくら自慢してもし切れない気がす

⁴⁶⁷ Карл фон Клаузевиц. Там же. С.102-104.

るね」と一人が言った。

「そのとおり」ともう一人が言った。「目的は敵を弱めることにあるのだから、個々の損失なんかにかまってはられないさ」

「そうだ」。最初の声が賛成した。

「ふん、『空間へ移さねばならない』か」。彼らが行ってしまうと、アンドレイ公爵は憎々しげに鼻を鳴らしながら、くり返した。

「その『空間』に、ぼくの父も息子も妹も、禿山でとり残されたんだ。あいつには、なんだっていいのさ。これがつまり、ぼくが君に言ったことだ——あのドイツの先生方じゃ、明日の戦いには勝てっこない。ただ、力の及ぶかぎりぶち壊しにするだけさ。なぜなら、あのドイツ的頭にあるのは、卵の食べ殻ほどの値打ちもない屁理屈だけで、明日唯一必要なもの——つまり、チモーヒンがもっているもの——を心のなかにもっていないからだ。あの連中はヨーロッパをまるごと彼にくれてやったくせに、われわれを教えにやって来たのさ——立派な先生だよ！」。また彼は金切り声になった。

作戦、戦略などというものは、屁理屈にすぎず、そもそもありえない。真理は、「偉大なる司令官」のみが洞察している（司令官の上には、無垢な赤ん坊のような「善良なるツァーリ」が祭り上げられている）。したがって、「司令官」の戦略や作戦をあげつらうのは無意味である。そんなものはないのだから。「外国人」は、これが分からぬ縁なき衆生で、おまけにスパイを働くこともあるから剣呑である。トルストイの描くところを露骨にパラフレーズすると、こうなる。

こういう考えかたは、はじめから権力に対する批判を封殺できて好都合である一方で、ロシア人の「ソボルノスチ」への渴望に触れるので、いったん根付くと容易なことでは動かない。

この『戦争と平和』の図式を、のちにスターリンがじつにうまく利用することになる。それは、たとえば、1943年製作のソ連映画『クトゥーゾフ Кутузов』⁴⁶⁸をみると、剥き出しなので、よくわかる。このバルクライは、ドイツなまりで、いかにも嫌らしくしゃべる。祖国戦争関連以外でも、エイゼンシュタインの『アレクサンドル・ネフスキー』（1938）などを筆頭に、枚挙にいとまがない（芸術的な出来不出来は、もちろん別の話だ）。

現在のロシアの政権も、ずっと拙劣にはあるが、同様の図式を利用するのに熱心だ。

「祖国戦争」研究史における『戦争と平和』

これは当然、祖国戦争の研究のありかたにも、逆にはねかえることになる。前に触れたように、エフゲニー・タルレによると、帝政時代は、アレクサンドルの役割を強調していたが、

⁴⁶⁸ <http://morewar.ru/main/2150-kutuzov-1943.html> (2015年9月10日最終閲覧)

ソ連時代は、ナロード（民衆）と司令官（полководцы）の役割を目いっぱい押し出す⁴⁶⁹。そして、これら将帥に君臨し導くのは、クトゥーゾフ一人あるのみだ。これと大元帥スターリンが重ね合わされる。

こういう次第だから、『戦争と平和』的図式が貫徹する以前の研究は、この作品やソ連時代の研究よりも、はるかにリアルであることがめずらしくない。ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記のような、検閲、自己検閲をまぬがれた資料は、とくに貴重であるが、そういう資料にかぎって、あまり言及されない。

トルストイは、晩年、アレクサンドル一世を主人公とした『フォードル・クジミッチの手記』を書きはじめたものの、未完に終わった。ツァーリの幼年時代で終わっているが、女帝エカテリーナ二世などの容赦ない描写から推して（彼女の加齢臭まであけすけに書かれている）、パーヴェル暗殺や1812年が裏面からありのままに書かれるはずだったと思われる。

では、いったいトルストイは、『戦争と平和』でなにを言いたかったのか？ なんのための歪曲か？ 最後に、祖国戦争について総まとめをしながら、それについて考えてみよう。

⁴⁶⁹ Тарле Е.В. Там же. С.6.

結論：祖国戦争の真実と夢

1. 真相について

まず、祖国戦争の真相についてかんたんにまとめると、現在公開されている資料だけみても、つぎのことがあきらかだ。世界史上最大最強の軍隊をまえに、とれる作戦は、大筋でひとつしかなかった。退却してできるだけ奥深く敵を誘いこみこむ。そして焦土作戦だ。つまり、各都市を食糧、補給物資もろとも焼き払う。

ナポレオンがモスクワまで止まりそうもないこと、彼を止められそうもないことも、はじめから分かっており、モスクワ放棄、放火も織り込み済みだった。

問題は、軍隊とその士気を保ちつつ、いかにそれを実行するかだ（軍をやられてしまえば、国家は終わりだから）。まさにその点に、実際に軍を指揮し戦ったクトゥーゾフ、バルクライ・ド・トーリらの功績があるわけだ。ナポレオンやクラウゼヴィッツが言うとおりに、「作戦なんていくらでも考えられる。問題はそれをどう実行するかだ」

本稿で詳述したとおり、露軍将兵が屈辱的な撤退とモスクワ放棄に耐えるには、ボロジノの会戦での大奮戦と、そこから勝ち得た自信が必要であった。また、モスクワ放棄後、びったり追尾してくる優勢な仏軍を撒くには、奇想天外な秘策が——モスクワ川の渡河直後の方向転換、60 露里のすさまじい強行軍が——必要であった。

首都放棄につづく放火については、早くから宮廷、軍上層部が協議し、具体的な準備に入っていた。7 月はじめにアレクサンドル一世がモスクワにやって来たときは（ちなみに、スモレンスク陥落は 8 月 6 日だから、それよりずっと前のことだ）、どう焼くか、だれが焼くか、その細部を決めたのである（セルゲイ・グリーンカの回想『1812 年についての回想』その他）。そのうわさ、憶測は、いろんなルートで流布した（ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記）。市民はそのために逃げたのだ。

モスクワ放棄の際、露軍とロストプチン・モスクワ総督、警察らは、全市の焦土化のみならず、ナポレオン爆殺をねらい、クレムリンを含む要所要所に大量の爆薬を残し、放火した（タルレの『ナポレオンのロシア遠征』）。出火の場所と時間もわかっている。ナポレオンは、命からがらようやく脱出する。

仏軍に消火させないため、あらかじめ消火器材は荷車で搬出し、運びきれない分は、破壊した。そのためもあり、多数の銃砲が放棄されたほか（砲 156 門、小銃約 8 万丁。ボロジノで使われた砲の総数が 600 ほどだから、たいへんな数だ）、露軍の 2 万数千人におよぶ負傷者が置き去りになり、その大半が大火で焼け死んだ。生きながら焼かれる彼らの姿を、仏軍将兵が目撃している。ナポレオンが、「スキタイ人め！」と叫んだのは、こういう、言ってみれば「骨を断たせて肉を切り、勝つ」自殺行為、国家的自爆テロに驚愕したのだ。

モスクワ放棄後カルーガ街道へ移動することもあらかじめ決定されていたが、その具体的

な実施方法は、クトゥゾフに任されていた。「なぜ、カルーガ街道ではなく、リャザン街道へ行ったのだ？」というアレクサンドル一世の言葉がそれを裏付ける。

なぜカルーガ方面かという、ペテルブルク方向に退却したのでは、十分な補給が受けられない。それができるのは、南部のトゥーラ、カルーガで、そこには兵器工場と食糧の備蓄がある。まずウラジーミル方面に退いて、南部から補給を受けることも考えられなくはないが、秋にオカ川が増水、氾濫する可能性が大きい。そうなると、南部から切り離されてしまう。というわけで、カルーガ方面しかないのだ。

では、なぜクトゥゾフはただちにカルーガ街道に入らず、リャザン街道を經由したか。それが、カルーガ街道方面からできるだけ仏軍を引き離す陽動作戦であるのはもちろんだが、ほかにも重要な理由があった。

フィリからすぐカルーガ街道に入ろうとすると、急傾斜、川、ぬかるみを越えねばならぬのにくわえ、仏軍に対し横腹をみせて進まねばならない。リャザン街道は、モスクワ川を渡ってしまえば、比較的安全である。このあたりでモスクワ川はかなりの川幅になり、河岸も急峻だ。

アレクサンドル一世以下の政府がみずからの手で、父祖の廟のある首都を、ボロジノ等で命をかけて戦った傷病兵もろとも焼き払う——。こういう、いわば国家的カミカゼだから、とうてい真実をそのまま語ることはできなかった。アレクサンドルはもちろん、作戦、焼き討ちを実行した軍、モスクワ総督ロストプチン、セルゲイ・グリーンからも、沈黙するか他に責任転嫁した。

2. 「大きな愛」による神話化

しかし、真相よりもっと驚くのは、国民が「祖国戦争」をどうとらえたかだ。ナポレオンは、悲惨きわまりない焦土作戦がロシアの農民を動揺させ、離反させると期待した。ロシア貴族のなかにも、そういう危惧をいだいたものがいた。ところがそうはならなかった。

デカブリストのマトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルは、当時のあらゆる惨禍を振り返りつつ、すべてを承知のうえで、「1812年には大きな愛があった」と感動を込めて語る。国土と国民と戦友を「作戦」のために焼かれ、なおかつ「大きな愛」でむすばれるという精神を、筆者は想像することができない。だがまさに、この点にロシアのおぞましさと凄さがある。

そして、この「大きな愛」が、神話をつむぎだす。「祖国戦争」は、その醜怪さにもかかわらず、本質はこうだった、という確信のうえで、「祖国戦争」はこうであって欲しかったという夢が結晶していく。

しかし、これは事件の粉飾であり、理想化であり、現実逃避にすぎないのではないか？ かりに、マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルにこの問いをぶついたら、「断じてそうではない」と言下に否定したうえ、こんなふうに答えるだろう。

この夢は、根本において真実だ。君は、ツァーリとその政府は自分の将兵を平気の平左で焼き殺した、という「客観的事実」を教えてくれる。だが、そんなことは承知している。君は、彼らがどういう気持ちで焼き殺されたか、われわれがどんな気持ちで耐えたか、その底まではわからない。われわれは、かくも大きな犠牲を払い、血を流した。そうしてこの「愛」と夢を贖ったのだ。その夢が、われわれの生を支え、ひとつにむすびつけていることを、君はわからない。われわれの夢は、君の言う真実よりも深いのだ。

「大祖国戦争」についてもまったくおなじことがいえる。これもまた、「祖国戦争」とおなじ神話と夢である。いや、それをも超える巨大な夢なのだ。

トルストイ自身のなかにも、この夢があったし、彼の学校の児童の心にもそれはあった。トルストイは、それをたしかめ、その夢のなかに、自分の主人公たちを送り込み、生かすことにしたのである。トルストイもまた、現実とぎりぎりまで戦い、もはやそこに身をおく余地はなく、夢に生きるしかなかった。彼は、現実におけるとおなじく、いやそれよりも真剣に夢に生き、そうすることで生きる力を得ようとしたのだ。

トルストイは、「祖国戦争」というロシア国民の夢に、自分の夢を託した。夢と夢とが出会ったのである。

祖国戦争については以上である。いよいよ『戦争と平和』そのもののなかに入っていくときが来た。

II 『戦争と平和』論：夢と夢の出会い、そして生命の誕生

「ママ！どんなケーキが出るの？」とナターシャの声が、さらに思いきりよく、うわ
ずりもせず、響きわたった。

伯爵夫人は、顔をしかめようとしたができなかった。マリア・ドミートリエヴナは、
太い指でおどかした。

「このコサック娘！」と威嚇するように彼女は言った。

(『戦争と平和』1巻1編16章)

トルストイは、『戦争と平和』で、ピエールとナターシャを創造し、コンプレックスを虚構
の世界で乗り越える。ピエールもナターシャも、自分のうちに貴族性と庶民性を融合させて
いる。ピエールは、大貴族の庶子として生まれた。彼の母親は、彼の巨大な体躯、腕力、ま
た雰囲気、態度からして、たぶん農民の女である——おそらく、トルストイのかつての愛人
アクシーニャのように強健な。ナターシャはといえば、マリア・アフローシモワが呼んでい
るように、「コサック娘」だ。言ってみれば、ナターシャは、貴族の家庭に生まれたコサック
娘、マリアーナ（『コサック』のヒロイン）なのだ。

さらに、ナターシャという女性像は、作家のもう一つの、青年時代からずっともちこされ
てきた課題を解決した。彼女は、二つの異なる女性タイプを併せもっている——トルストイ
的の美女と理想の母親とを。なぜなら、ナターシャは、妖艶な「魔性の女 волшебница」（エピ
ローグ1部11章）のみならず、「強く美しい多産な牝」と「良妻賢母」（同10章）を具現して
いるからである。

こうして、ピエールというトルストイの分身は、美貌の「コサック娘」と理想の母をとも
に体现するナターシャと結ばれる。彼らの周囲に、彼らの愛のまわりに、世界の調和が実現
する。しかも、ナターシャとピエールが生きているのは、1850年代、60年代ではなく、偉大
な時代——祖国防衛のために、社会のすべての階層がひとつにまとまった（と神話化されて
いる）、「大いなる愛」の時代だ。一切の社会的不調和は、この壮大なフィクションの世界、
幸福な人間賛歌の夢のなかで消え去る。

こうした例外的な調和の条件のもとで、作者は言うことができる——「生はすべてである。
生は神である」（4巻3編15章）。「生あるかぎり幸福もある」（4巻4編17章）。この意味にお
いて、『戦争と平和』は、生の賛歌なのである。⁴⁷⁰

⁴⁷⁰ 『戦争と平和』が稀有な生命の賛歌であることは、なによりもその読後感が物語っている。
だが、その反面、主人公ピエールについてはある種の胡散臭さ、人工臭を感じる人は少なくない。
これは考えてみると不思議なことだ。D.H.ロレンスは「小説論」で、ピエールについてきわめて
辛らつにこう述べた。

だが、そう言っただけでは足りない。トルストイは、この作品で生命の秘奥に深く徹し、その本質をとらえた。そうしてできた作品は、それ自体が生命となったのである。『戦争と平和』とは文字どおりの意味で生命にほかならない。生命を表現したものではなく、生命そのものである。これが、いちばん説明しにくいことがらなのだが、やってみよう。⁴⁷¹

『戦争と平和』における生命の秘密とは：ピエールの「水滴でできた地球儀」の夢

『戦争と平和』の終わり近くで、主人公ピエールは、表面に無数の水滴がびっしりくっついた地球儀を夢に見る。水滴は、どれもできるだけ大きくなろうとして、押し合ったり、つぶれたり、溶け合ったりしている。ピエールが昔教わった先生が「これが生きるということなんだ」と言う。

突然、とっくに忘れていた、スイスでピエールに地理を教えた温和な老教師のすがたが、まざまざとピエールの目の前に浮かんだ。「ちょっとお待ち」と老教師は言った。そして彼は、ピエールに地球儀を見せた。その地球儀は、一定の大きさをもたぬ生きて揺れ動く球であった。球の表面は、一面ぴったりくっつき合った水滴からできていた。そしてこれらの水滴は、みんな動き、移動し、いくつかの水滴が一つに溶け合ったり、一つがいくつかに分かれたりしていた。どの水滴もできるだけ広がって、なるべく広い場所を占めようとするが、他の水滴がやはり同じことを望んで、それを圧迫し、ときに押しつぶし、ときには一つに溶け合ったりした。

ピエールは思想、練齒磨、神、人々、食物、汽車、シルク・ハット、悲哀、ジフテリアに対しては全く立派な関係を持っている。けれども雪や太陽や、猫や稲妻や男根や、つりうきそうや、トイレトペーパーに対する彼の関係は不精で混乱している。彼は十分生きていないのだ。

ほんとうに生きたものは、トルストイは殺すか、滅茶苦茶にするかを好んだのである。真のボルシェヴィストのように。ひとはあのピエールに嫁いだナターシャに幾らか混乱した新鮮でないものを感じざるを得ないのである。（『トルストイ全集別巻』、河出書房新社、105頁）

ピエールにある種の胡散臭さ、張りぼて風のなにかを感じるという点では、本多秋五もおなじだ。『戦争と平和』斜め横断読みで彼は、ピエールは「ところどころ粘土細工の部分を混えぬではない」と述べている。

たしかに、ピエールも、ナターシャも、最初から民衆との接点をインプットされているという点で、ご都合主義的な作り物だとは言える。だが、その結果、『戦争と平和』という実験室のなかで、生命が爆発した。錬金術で、レトルトのなかに一定の条件を設定したことで、爆発的な反応が起り、ホムンクルスが誕生したようなものだ。この作品のあの生命感、ピエールの「張りぼて」がなければ生まれなかった。この点は、ロレンスも本多も看過しているように思われる。

⁴⁷¹ この『戦争と平和』プロパーの部分は、以下の拙文に大幅に加筆、修正したものである。

Юсуке Саго. Сон Пьера о глобусе в «Войне и мире» Л.Н.Толстого: возрождение идеи «соборности» // Толстовский сборник-2001. Материалы XXVII Международных Толстовских чтений. Тула: издательство Тульского государственного педагогического университета им.Л.Н.Толстого. 2002.

「ほら、これが人生だよ」と老教師は言った。(4巻3編15章)

ロシアの研究者たちは、この不思議な夢を、西欧の個人主義に対立する『戦争と平和』のイデーの象徴と考えてきた。つまり、夢は、ロシアの伝統的集団主義と、「祖国戦争」での国民の一致団結のシンボルである。さらに、歴史を動かすものは、少数の政治家や軍人ではなく、民衆全体だという思想を表しているというのだ。しかし、はたして、それだけだろうか。

地球儀の個々の水滴が人間を表していることは、うたがない。しかし、「いくつかの水滴が一つに溶け合ったり、一つがいくつかに分かれたりしていた」とはどういうことだろうか？人間が、まるでアメーバのように、他の人間とくっついたり、複数に分かれたりするのとはなぜか？ 言い換えれば、なぜ人間は、はっきりした境界をもたない水滴として表現されたのか？ なぜ、たとえば、原子のようなはっきりした単位で表されなかったのか？ また、地球儀の上にはおよそ空間というものがない。そこには、水滴しかなく、それらがひとつの海をかたちづくっている。このことは何を意味するのだろうか？

こうした疑問に答えるためには、この作品で人間が具体的にどう描かれているかを見なければなるまい。そして、人間と人間との関係、人間と周囲の状況との関係がいかにか描かれているか、じっくり見る必要がある。そのことによって、作者独自の生命観、人間観、世界観に迫ることができるだろう。そして、あらゆる人間を翻弄する「必然」に抗しそれと戦い、ついにそれを突破する「自由」の本質がなんであるか、ということにも。

1. 人間の描写

多くの文学作品においては、登場人物に一定の性格が与えられる。登場人物は、その性格にしたがって行動し、作品を展開するわけである。ツルゲーネフ『父と子』のニヒリスト、バザーロフ、ドストエフスキー『罪と罰』の絶対的なものに憑かれた夢想家、ラスコーリニコフ、チャーホフ『可愛い女』の、男を食ってしまう可愛いオーレニカなど、たくさんの例を思い浮かべることができる。

ところが、『戦争と平和』においては、そうではないのだ。この作品では、性格そのものが描かれることはない。作者は、ナターシャ、ピエール、アンドレイの性格について、何も語っていない。ナターシャは奔放な性格である、だから、彼女はアンドレイを捨ててアナトリーに走ったのだ、というふうには、作者は割り切らない。

では、登場人物の何が描写されるのか？ 描写されるのは、さまざまな顔の表情、動作、行為、感情、欲求、考えなどだけだ。それらが人物に現れる様子がそのまま描かれているにすぎない。ナターシャに、これこれの表情が浮かんだ、これこれの感情が生まれた、これこれの欲求が芽生え、これこれの考えが浮かんだ、これこれの行動をした——それだけだ。

もう一つ重要なのは、その人物がなぜそのように行動したのか、考えたのか、そうした感情をいだいたのか、分からないことが多いということだ。つまり、それらの動作、行為、感

情等々がなぜ現れたのか、いつもあきらかだとはかぎらない。

アンナ・パーヴロヴナが皇太后の名を口にしたとき、彼女の顔は、突然、深い、心からの忠誠と尊敬の表情を示した。(1 巻 1 編 1 章)⁴⁷²

そのときワシーリー公爵は、口元にできたしわのなかに、なにか思いがけず粗野で不快なものを、はっきり表した。(1, 1, 1)

公爵夫人（*アンドレイの妻リーザ——佐藤）は、ほほえんでみんなと話しながら、突然席を替え、座ると楽しげにいずまいを正した。(1, 1, 3)

「ねえ、アンネット」とワシーリー公爵は、突然相手の手をとって、なぜかそれを下の方へ引っ張りながら言った。(1, 1, 1)

イタリア人（*モリオ僧正——佐藤）の顔は、突然一変して、人をばかにしたような、わざとらしい甘ったるい表情をおびた。(1, 1, 3)

アンドレイ公爵は、微笑しているピエールの顔を見ると、思いがけず善良そうな快い笑みを浮かべた。(1, 1, 3)

動作、行為、感情は、「突然」、「思いがけず」現れ、変化する。「突然」、「思いがけず」、「不意に」、「なぜか」といった言葉が、冒頭の夜会の場面だけで 30 回以上、特定の人物に限定されずに、用いられている。

このようなわけで、われわれ読者の前には、動作、行為、感情などの、人間の断片の連なりだけがあることになる。そして、それら断片のつながりの因果関係は、しばしば不明なのだ。

また、『戦争と平和』では、「あたかも...であるかのように」、「まるで...したかのように」、「...と思われる」などの表現がよく使われるが、これも同じ事情にもとづくと考えられる。つまり、この作品の語り手は、こう言っているのだ。「私には、この人物がなぜこのように行動するのか、よく分からない。彼は、まるで、こう思ったかのようにだ...」

彼（*ピエールの父——佐藤）の顔に、彼の容貌に似合わぬ弱々しい苦しげな微笑が浮かんだ。あたかも、自分の無力を嘲っているかのようにだった。(1, 1, 20)

⁴⁷² 以下、本稿の『戦争と平和』論におけるこの作品からの引用は、(1, 1, 1) のように、数字のみを示す。

「いや、もうたくさんですよ」と法務官は、ナイーヴな、またずるそうな微笑に顔を輝かせて言った。まるで彼は、自分がジェルコフに嘲笑されるのがうれしく、わざと実際よりも愚かに見えるように努めているかのようだった。(1, 2, 18)

さらに、次のようなフレーズがひんぱんに用いられることにもご注意いただきたい。「微笑が浮かんだ」。「彼の脳裏に次のような考えが浮かんだ」。「イタリア人の顔は甘ったるい表情をおびた」。「彼の顔に恐怖の表情が現れた」。すなわち、「微笑」、「考え」、「顔」、「表情」は、センテンスの主語である。語り手は、「彼は微笑した」、「彼は考えた」、「彼は甘ったるい表情を浮かべた」、「彼は恐怖の表情を浮かべた」とは言わないのだ。

この作品では、あらゆる登場人物において、考え、感情、欲求、表情、動作等々が、主語になることが多い。その理由は、それらが、登場人物たちの意志、意識にかかわりなく生じ、彼らを動かすという意味で、実際に、サブジェクト、主体であるからだろう。

というわけで、これまでに明らかになったことをまとめると――

『戦争と平和』では、人間は、表情、動作、行為、感情、欲求、考えなど、小さな主体の連なりとして描かれる。そして、それら主体の相互関係は、かならずしも明瞭でない。

どうやら、作者は、人間には、本質的に曖昧なところがあると考えているようだ。人間の意識と行動を完全に規定することは不可能であると。

2. 人間と状況

さて今度は、人間と、その周囲の状況との関係を見よう。われわれの観察を具体的なものにするために、場面をピエールとエレン（ワシーリー公爵の娘）の結婚の場面にしぼろう。一見すると、ピエールがエレンと結婚したのは、ワシーリー公爵の打算のため、彼の意志のためと見える。ところが、実際は...

ワシーリー公爵は、自分の計画を綿密に考えるということをしなかったし、自分の利益を得るために他人に害を与えようなどとは、なおさら思っていなかった。<...> さまざまな状況に遭遇し人々に出会うにしたがって、彼には、さまざまな計画や考えが生まれた。彼自身はつきりその意味を意識することはなかったけれども、実は、それらは彼の生活における興味のすべてだったのである。こうした計画や考えは、一つや二つではなく、何十と進行していた。それらのうちには、やっと浮かんだばかりのものもあれば、実現しつつあるものもあり、立ち消えになりかかっているものもあった。<...> 何かが彼を、より力のある者、より富める者へと絶えず引きよせていた。(1, 3, 1)

ワシーリー公爵の意志にかかわりなく、状況にしたがって、彼には、さまざまな計画や考えが生まれては消えてゆく——あたかも、川の流れにあぶくが浮かんでは消えるように。ワシーリー公爵と、彼をとりまく状況は、ひとつのダイナミックな場をかたちづくっているようだ。

それはこの場面だけではない。この作品の個々の場面を見てみると、軍隊などの大集団、群集が、しばしば、ひとつのかたまりのように描かれるのに気がつく。たとえば、それらは、海にたとえられて、波がうねり、ぶつかり合うように描写される。モスクワから撤退を開始したフランス軍の様子は——

四方八方から、まるで海鳴りのように、わだちの轟きや軍靴の音や腹立たしげな叫び声や罵声が、絶間なく聞こえていた。<...> 人間も馬もことごとくなにか目に見えぬ力に追い立てられているようだった。(4, 2, 14)

ボロジノの会戦におけるロシア軍兵士たちの愛国心は、「潜熱」(3, 2, 25)にたとえられる(潜熱とは、熱力学の概念で、内にひそんでいる熱を意味する)。したがって、兵士たちが、巨大な蒸気のかたまりのようにとらえられているわけである。

また、作者は、ボロジノの会戦での露仏両軍の激突を、二つの球の衝突にたとえている。一つの球(フランス軍)が、モスクワという目的地を目指して、すさまじい速度で転がってきたが、もう一つの球(ロシア軍)は、それよりゆっくりと後退していった。両者はボロジノでぶつかり、その結果必然的に、ロシア軍はさらに後退し、フランス軍は前進することになった、というのだ。以上、要約すると、『戦争と平和』では、状況が、ひとかたまりに、一元的に、かつ力学的に把握され表現される傾向がある、ということになる。

人間とその周囲の状況との関係を、もっと微視的なレベルで観察してみよう。ピエールが、エレンとの結婚がどうしても避けられないと直観する場面だ。

ピエールは、エレンの体温や香水のにおいを感じ、息づかいにともなうコルセットのきしみを聞いた。彼が見たのは、衣装と一体になっている彼女の大理石のような美しさではなかった。彼は、わずかに衣装一枚でかくされているにすぎない彼女の肉体の魅力のすべてを見、感じた。<...> 『そう、わたしは、だれのものにでも、あなたのものにだってなれる女よ』彼女のまなざしが言った。この瞬間ピエールは、エレンは自分の妻になる可能性があったのだというだけでなく、そうなるにちがいない、それよりほかにありようはない、と感じた。<...> 彼女は彼にとっておそろしく近い存在になった。彼女はすでに、彼に対して力をもっていた。(1, 3, 1)

この場面では、ピエールにとっての状況は、エレンだ。そして彼女は、静的な、一枚岩の、

完結した存在ではない。エレンは、体温、匂い、コルセットのきしみ、視線などの、それぞればらばらな作用である。そして、それらの作用は、ばらばらなまま、相互のちがいを保ったまま、一つの「力」を形成している。この力が、ピエールに働きかけ、否応なしに結婚へ引っぱっていったのである。

こうして、人間と状況は、一つの力学的な場を、「力の場」をかたちづくる。人間たちは、普通は、この場を意識しない。しかし、この場こそが、事件を引き起こす本当の原因なのだ。

3. 水滴の意味

『戦争と平和』4巻のいくつかの場面が、水滴の意味を完全にあきらかにしてくれる。フランス軍が、ロシア人捕虜を引き連れて、モスクワから撤退を始める。捕虜たちのなかに、ピエールと、その恩人の農民、プラトン・カラターエフがいる。行軍は悲惨をきわめ、落伍者は容赦なく射殺されていく。

ピエールはいまはじめて、人間の生命力のいっさいと、人間に与えられた注意転換という救済力とを悟った。それは、蒸気の圧力が基準をこえると余分の蒸気を放出する、蒸気機関の安全弁のようなものだった。

落後した捕虜がもう百人以上も銃殺されたにもかかわらず、その様子は、ピエールの目にも耳にも入らなかった。彼は、日ごとに衰弱して行って早晚同じ運命に見舞われるにちがいないカラターエフのことも考えなかった。ましてや自分のことはなおさら考えなかった。彼の境遇が苦しくなればなるほど、未来が恐ろしくなればなるほど、いよいよ彼がおかれている境遇とはかかわりなく、喜びとなぐさめに満ちた想念や思い出やイメージが浮かんでくるのだった。(4, 3, 12)

ピエールをとりまく状況——彼の眼前での、百人をこえるロシア人捕虜の銃殺、病気で衰弱したプラトン、彼をまちかまえる恐ろしい運命——は、ピエールに働きかけ、彼の内的な平衡状態をくずそうとする。すると、彼のうちに、喜びとなぐさめに満ちた想念や思い出やイメージが浮かび、外からの恐ろしい作用を押し返したり、中和したりする。想念、思い出、イメージは、平衡状態を維持、回復しようとする力、エネルギーとして生じる。

このようなわけで、外的な状況だけでなく人間自身もまた、力なのだ。状況と人間は、はっきりした境界を失い、ひとつながりの「力の場」をかたちづくる。

さて、この場面の数日後、病が悪化して動けなくなったプラトンは、フランス兵に射殺されてしまう。だが、ピエールは、彼が死んだことを理解できない。いや、理解しようとしな

い。

彼が殺された夜、ピエールは、水滴でできた地球儀の夢を見る。夢から覚めたとき、プラ

トンが可愛がっていた藤色の子犬が、ピエールのそばにいた。彼は、すんでのところプラトンが殺されたことを悟るところだったが、まさにその瞬間...

目をこらすと、それは、例の藤色の子犬が尾を振りながら兵士のそばに座っていたのだ。

「あ、来たのか？」とピエールは言った。「あ、プラ...」と言いかけて彼はやめた。突然、彼の脳裏に、プラトンが樹の下にすわったまま彼を見たときのまなざしや、そこで聞こえた銃声や、犬の鳴き声や、彼のそばを駆けぬけていった二人のフランス兵の罪人らしい表情や、手に握ったままの煙のでている銃や、この野営にカラターエフのいないことや——そうした思い出が、いちどにたがいにつながり合いながら浮かび上がり、すんでのところカラターエフは殺されたのだということを悟るところだったが、まさにその瞬間、どこからともなく、ある夏キエフの別邸のバルコニーで美しいポーランド女性と過ごした一夜の思い出が、ピエールの心に浮かんだ。それでやはり、今日の思い出をつなぐ、それらについての結論を出さずに、ピエールは目を閉じた。すると、夏の自然の光景が、水浴や、液体の揺れ動く球の思い出とまざり合い、彼は、どこか水中に沈んでいって、頭上は水におおわれてしまった。(4, 3, 15)

ありとあらゆるできごと、事物、人間、人間の内面の思い出、想念、イメージ——これらはみな、エネルギーのかたまりである。それが水滴で表されていたのだ。これら無数の水滴は、「たがいにつながり合いながら」、一つの全体をかたちづくる。こうして、世界は、大小無限の水滴に埋めつくされる「水滴の場」となるのだ。しかし同時に、それぞれの水滴は、自分だけの特徴を、他にかけがえのない個性をもっているのである。

4. 水滴＝霊的エネルギー

これまでにあきらかになったように、水滴とはエネルギーである。では、どのようなエネルギーか？ たんなる物理的なエネルギーなのだろうか？ 農民プラトン・カラターエフの具体的な描写を見て考えてみよう。

プラトンが初めてピエールの前に現れるのは、ロシア人捕虜のバラックだ。ピエールは、仲間の捕虜たちの残酷な処刑を目の当たりにして、放心状態にある。

ピエールのすぐそばに、一人の小柄な男が、背中をかがめて座っていた。この男の存在にピエールが気がついたのは、最初は、強烈な汗のにおいでだった。においは、この男が身体を動かすたびに発散していた。この男は、暗闇のなかで自分の足になにかしていた。ピエールには、彼の顔は見えなかったけれども、この男がしきりに自分をながめ

ているのを感じた。暗闇のなかで眼をこらすと、この男が靴をぬいでいることが分かった。どんなふうにぬいでいるのかという興味がわいてきた。

一方の足をゆわえている紐をほどくと、彼はその紐をていねいに巻いて、ピエールの方をながめながら、すぐにもう一方の足にとりかかった。まだ一方の手が、ほどいた紐をかけている間に、もう片方の手は、別の方のひもを解きはじめていた。そんなふうに、少しのよどみもなくそれからそれへとつながる丸い動作で、ていねいに靴をぬぐと、男は、靴を頭の上に打ってある杭にかけ、こんどは小刀をとりだして何かを切り、またそれをたたんで枕の下にしまい、座り具合を直して、立てたひざを両手で抱きながら、ひたとピエールを見つめた。ピエールには、これらのよどみのない動作にも、一隅の具合のよさそうな世帯ぶりにも、この男のにおいにさえも、なにか快い、心の安らぐような、なにか丸いものを感じられたので、眼をそらさずにこの男を見つめていた。(4, 1, 12)

ピエールは、闇のなかにおいてほとんど何も見えなかったにもかかわらず、「なにか丸いもの」をたしかに感じとる。外的な条件（闇）は、ピエールがプラトンのある本質をとらえることを妨げなかったのである。

このときだけでなく、いつでもどこでも、ピエールは、プラトンの、文字どおりあらゆるところに、「丸いもの」を感じる——すがた全体、頭、背中、胸、肩、手、微笑、目、顔の小じわ、話ぶり、歯等々に。また、匂い（!）にさえも。

もちろん、プラトンの身体の状態、意識、彼の生活の外的条件は、たえず変化している。にもかかわらず、彼が何をしようとして、何を考えていようと、何を感じていようと、「丸いもの」は不変である、プラトンは、どんな状況でも、どんな生の条件のもとでも、自分のすべての行為に、思考に、感情に、自分の刻印を押してゆく。こうして、「丸いもの」とは、なにか絶対的なものとなる。なぜなら、それは、あらゆる条件の外にあるのだから——。こうして、プラトンという水滴（＝エネルギー）は、「丸いもの」という絶対的な個性をもっていることになる。

もう一つ例をあげてみよう。フリーメーソン会員、ヨシフ・バズジェーエフ（ピエールのもう一人の恩人）の描写だ。ピエールと彼の最初の出会いは次のように描かれている。

その厳しく、聡明らしい、見通すような眼差しは、ピエールをはっとさせた。〈...〉老人は、眼を開き、そのきつとした厳しい視線をまともにピエールの顔にそそいだ。

ピエールは、どぎまぎして眼をそらそうとしたけれども、炯々たる老人の眼は否応なしに彼を引きよせるのであった。〈...〉 旅客の顔は無愛想であり、冷ややかで厳しくさえあった。しかし、それにもかかわらず、その初対面の老人のこぼれ顔つきも、抗しがたい力でピエールを引きつけるのであった。(2, 2, 1)

バズジェーエフのまなざし、顔、話ぶりは、ピエールに「厳しく」作用する。バズジェーエフは、あらゆる面に、「厳しい」トーンをおびている。このトーンは、プラトンの「丸いもの」と同じく、常に不変なのだ。

『戦争と平和』のあらゆる登場人物は、それぞれ特有のトーンを帯びている。それらは、彼らの身体、意識の状態、彼らがおかれた状況に左右されない。この意味で、人間のトーンは、つまり人間というエネルギーの個性は、絶対的で、不変なのだ。

このようなわけで、水滴とは、たんなる物理的なエネルギーではなく、霊的なエネルギーであると結論することができる。水滴＝霊的エネルギー。端的に、靈魂不滅といってもいい。これは、トルストイが長年模索してきた、ルソーの「靈魂不滅」への回答でもある。

ちなみに、はじめに掲げたピエールの夢は、つぎのようにつづく。

「中心に神がいる。ひとつひとつの水滴はひろがって、できるだけ大きく神を映し出そうとする。そして、大きくなって、ほかの水滴と溶け合ったり、縮んだり、はじけて表面から消えたりする。いったん内奥に帰って、ふたたび浮かび上がってくるのだ。ほら、カラターエフも、あふれてひろがり、消えてしまった」。「わかったろう（仏語）」と教師が言った。（4, 3, 15）

プラトンの霊は、地球儀の内部、神のもとに帰っていったが、やがて「また浮かび上がってくる」。プラトンの霊は、つねにどこかにいる。そして回帰する…。その回帰のひとつのさまを、次にみよう。

5. 相即相入——霊の相互乗り入れ

まさに九死に一生をえたピエールは、モスクワに帰り、ナターシャと再会する。そして、捕虜としての生活、プラトンのこと、彼の死について物語るのだが、その描写はきわめて独特だ。

「彼（プラトン）は、ほとんど私の目の前で殺されたのです」。ピエールは、退却の最後の時期、カラターエフの発病（彼の声はたえず震えていた）、そして彼の死について物語りはじめた。

<...> ナターシャは自分でも気がつかないうちに全身注意そのものと化していた。彼女は、ピエールの語る一言も、声の震えも、まなざしも、顔の筋肉の震えも、動作も、なにひとつ見逃さなかった。彼がまだ言い終わらぬ言葉を宙でとらえ、そのまま自分の開かれた心にとりこみ、彼の魂の動き全体がもつ神秘的意味を洞察するのだった。（4, 4, 17）

*下線は佐藤

— Его убили почти при мне. — И Пьер стал рассказывать последнее время их отступления, болезнь Каратаева (голос его дрожал беспрестанно) и его смерть.

<...> Наташа, сама не зная этого, была вся внимание: она не упускала ни слова, ни колебания голоса, ни взгляда, ни вздрагиванья мускула лица, ни жеста Пьера. Она на лету ловила еще не высказанное слово и прямо вносила в свое раскрытое сердце, угадывая тайный смысл всей душевной работы Пьера.

これはたんなる生々しい回想などというものではなく、ピエールの心に生きていた思い出が、プラトンのことが、そっくりそのまま生き返ってくる。その思い出は、波動（絶えず震えるピエールの声、顔面の筋肉の震え...）を通じてダイレクトにナターシャに伝えられる。というより、この波動は、プラトンの霊にほかならない。プラトンの霊＝波動（すなわち、揺れ動く水滴）は、ピエールの内部にとりこまれ、生きていたのである。そしてナターシャは、プラトンの思い出を、彼の霊を、ピエールと共有する。それによって、彼女の霊も、ピエールのそれとひとつにむすびつく。

ピエールのなかにそのまま生きていたプラトンは、こんどはナターシャのなかでも生きはじめる。いってみれば、分霊（分け御霊）である。人間同士がかけがえのない交わりをむすんだとき、彼らの霊はおたがいのなかに生きはじめる。彼らを直接知らない人間にも、霊は伝わり、そこでも生きることができる。そして、ことあるごとに新たな意味を語りかけてくる。

結局のところ、こうしてあらゆる人間の霊は、たがいにむすびつき、いたるところに遍在して、世界全体を満たし、過去・現在・未来をつらぬく。その全体が生命であり、神である。この生命は、個々の人知にははかりしれぬ目的に向かって進んでいく。全体的生命のなかで、ひとりひとりの人間は、独自の意義をもっており、しかもたえず新たな意味を開示していく。これが『戦争と平和』のメッセージだ。

太陽も、エーテル⁴⁷³の各原子も、それ自体完結した球だが、同時に、人知を超えた巨大な全体の一原子にすぎない。それとおなじように、すべての人間は、自分自身のなかに、それぞれの目的をもっているが、それは、人知におよばぬ全体の目的に奉仕するためなのである。（エピローグ 1 部 4 章）

⁴⁷³ 19 世紀の物理学では、光は波動だと考えられており、光を伝える媒質、エーテルの存在が仮定されていた。エーテルは、不定形の物質で、宇宙全体に充滿している。したがって、エーテルは、宇宙をすみずみまで複雑微妙な波動で満たしているわけである。こういう物質が比喻に用いられていることに注意されたい。

6. 共時性

ピエールの地球儀の夢には、さらにもうひとつ重要なメッセージがある。さきほどの引用のつづきをみよう。老教師が「わかったろう」と言うと...

「わかったろう（仏語）」と教師が言った。

「わかったろう、この野郎（仏語）」。叫ぶ声がして、ピエールは目を覚ました。

彼は身を起こして座った。たったいまロシア兵を突き飛ばしたばかりのフランス人が、焚き火のそばにしゃがみ、銃のさく杖に刺した肉をあぶっていた。（4, 3, 15）

— Vous avez compris, mon enfant, — сказал учитель.

— Vous avez compris, sacré nom, — закричал голос, и Пьер проснулся.

Он приподнялся и сел. У костра, присев на корточках, сидел француз, только что оттолкнувший русского солдата, и жарил надетое на шомпол мясо.

夢の老教師と、現実の仏軍兵士とが、全然ちがう状況のなかで、おなじことばを同時に発していた。教師は、ピエールに人生の意味を明かしたうえで、「わかったろう」と念を押したのだが、まさにその瞬間、兵士は、ロシア人捕虜に「わかったろう」と罵言を浴びせたのである。ふたつの互いに独立した流れが、奇しくも交差したことになる。

これは「共時性」といわれる現象で、すくなくならぬ人が「正夢」などで経験するものだ。夢のなかで、知人が死んださまをみた。そしたら、実際そのときに、彼が死んでいた、というような話は、無数にある。

トルストイはこの作品を書く以前から、こうした夢のふしぎに興味をもち、いくつかの作品の勘所で描いているが（いちばん強烈で不気味な例は、アンナ・カレーニナが繰り返し夢でみる「小さなひげもじやの男」だろう）、概して『戦争と平和』は共時的現象に満ちている。

ピエールの地球儀の夢の場面前後だけをとっても、ピエールのラインと、デニーソフ、ドーロホフ、ペーチャ・ロストフ（ナターシャの弟）のラインとが、それぞれ別々に進んできて、ここで交わる。ピエールは、かつてドーロホフと決闘して重傷を負わせた。デニーソフはそのとき、介添え人を務めている。まさにそのふたりに、ピエールは救われることになった。その際、ひとりのピョートル（ピエール）が助かったかわりに、もうひとりのピョートル（ペーチャ）が死ぬ。また、ピエール救出は、まさに厳冬期到来直前のことで、もう二、三日遅れたら、助からなかった。

詩人ボリス・パステルナークは、当人の語るところによると、『戦争と平和』と「相対性理論」にインスパイアされて、『ドクトル・ジバゴ』のドラマを創造したという。女主人公ラーラは革命前に、当時の恋人パーシャとささやかなアパートに住んでいた。ラーラは、長い歲月ののち、ジバゴとの恋と別れをへて、ふたたびそのアパートを訪れることになる。そこには、ジバゴの亡骸が安置されていた。これが、ふたりの最後の出会いになる...

要するに、共時性とは、理屈では説明できない相関関係で、ときには、そこに神の摂理を感じたくなることもある、ということだが、『戦争と平和』の共時性は、それだけではない。いささか場違いだが、話をわかりやすくするため、あえて個人的体験を述べてみよう。

6年ほど前の深夜のこと。筆者（佐藤）の自宅寝室でロウソクが燃えていたが、それが倒れて、たんすに燃え移った。寝室では、当時4歳の息子がひとりで寝ていた。筆者と妻は隣室にいたが、たんすがすっかり燃え上がってからやっと、扉からもれる光で火事に気がついた。あわてふためいて水をぶっかけ、間一髪消火！

息子はそのあいだ熟睡していたが、あとで聞くと、ひいおじいさんが火事を消す夢をみていたという。妻の祖父は、40年も前に亡くなっているが、長年、モスクワ州ヴォスクレセンスク市の消防所長を務めた。その祖父が消防車に乗り込み、息子いわく「すごく真剣な顔で」街はずれの火事場に駆けつけ、消し止めた、と。妻の母に夢をくわしく話すと、実際にそういう火事があったとのこと。

筆者の頭に最初にうかんだのは、「祖父が息子を助けてくれた」ということだった。つまり、半世紀も前の祖父の行為が、息子を救ったのである。

『戦争と平和』に話をもどすと、プラトン・カラターエフは、死んでからも、ピエールやナターシャにさまざまな力をおよぼしつづける。逆に、ピエールの現在の行為が、見も知らぬ他人や、死者の霊にまで作用する、というようなことを作者は暗示しているのではないか？...なるほど、個人という水滴は、大海の一滴にすぎない。しかし、その波紋は海全体に、過去・現在・未来におよぶ。その波動は、けっして消え去ることがなく、ほかの水滴とともに、無限に変化する、永遠の交響曲を奏でることができるのだ、と。

7. カラターエフの「馬のお祭り」

最後にひとつ、そうした例を『戦争と平和』から挙げて、おしまいにしよう。

1812年9月20日（ユリウス暦9月8日）、ピエールは、放火の容疑者の処刑に立ち会わされたあと、バラックに入れられて、そこでプラトンと出会い精神的に甦るわけだが、その日の最後に、つぎのような会話を交わす。

プラトンはしばらく口を噤んでから、立ち上がった。

「どうだね、もう眠いだろうね？」と彼は言うなり、すばやく十字を切って、こう唱えた。

「主イエス・キリストさま、聖者ニコライさま、フローラとラヴラさま、主イエス・キリストさま、聖者ニコライさま、フローラとラヴラさま、主イエス・キリストさま、

われらを憐れみたまえ、救いたまえ！」。こうお祈りを結ぶと彼は、地面に額づき、立ち上がって、吐息をつくと、自分の藁にすわった。「これでよしと。神さま、石のように眠らせ、白パンのように起こしたまえ」。こう言うと横になり、外套を引っかぶった。

「今お前が唱えたのはどういうお祈りだね？」とピエールは尋ねた。

「なんだったって？」とプラトンは言った（彼はもう眠りかかっていた）。「なにを唱えたかって？神さまにお祈りしたんだよ。お前さんはお祈りしないのかい？」

「いや、ぼくもお祈りするけど」とピエールは言った。「ただ、なんて言ったんだい、フローラとラヴラ？」

「もちろんさ」とプラトンは早口で答えた。「馬のお祭りだよ。動物だってかわいかってやらなきゃなあ」(4, 1, 12)

聖者伝のフロルスとラウルス

フロルスとラウルスは兄弟であり、ローマ帝国の属州イリュリクム（アルバニアから旧ユーゴスラビアにかけて広がっていた地域）で、2世紀に殉教したと伝えられるが、その事績は聖者伝にしか載っていない。

それによると、二人は有名な石工で、若いときにキリスト教徒になった。あるとき、イリュリクムの代官は、隣の属州に異教の新たな神殿を建てるために、二人を派遣した。

ところが兄弟は、もらった金を貧者に施したうえ、彼らにキリスト教の説教をした。兄弟がいくつかの奇跡を顕したこともあって、布教は大いに成功した。とくに、異教の祭司の息子が雇っていた病を癒したため、父子ともに改宗したのが大きかった。

神殿を建てる時、その中で、新たにキリスト教に改宗した信徒たちと祈禱を行った。そして、そこに安置するはずだった異教の偶像を破壊した。

彼らは全員捕縛されて、火あぶりとなり、フロルスとラウルスの兄弟は、井戸に投げ込まれて、上から土をかぶせられ、生き埋めとなった。

後に、彼らの遺体を引き上げたところ、腐敗していなかったため、コンスタンティノープルに運んだ。

ロシアからの巡礼アントニーとステファンが、兄弟の不朽体をそれぞれ1200年と1350年に見たという。

言い伝えによると、兄弟の遺体を井戸から引き上げるや、家畜の斃死が止んだ。そこで、ロシアでは「馬の守護聖人」として尊崇されてきた。兄弟を描いた古代のイコンでは、必ず馬を描き入れる慣わしだった。その祭日は、8月31日（ユリウス暦18日）。

カトリックでは、この殉教者フロルスとラウルス（フロールとラヴル）の祭日は8月18日だ。

日付の食い違いは何を意味するか？

一つ謎が残る。ピエールが放火の容疑者の処刑に立ち会わされたあと、バラックに入れられたのは9月20日（ユリウス暦9月8日）と、作品に明記されている。だが、馬のお祭りは、8月31日（ユリウス暦8月18日）だ。こんなことをトルストイが知らなかったはずはない。カラターエフは、なにか考えがあって、フロルスとラウルスの名を唱えたのだろうか？

ちなみに、9月20日（ユリウス暦9月8日）という日付は偶然ではない。これは、ロシア軍がモスクワ放棄後、凄まじい強行軍で、リャザン街道から旧カルーガ街道への移動を完了し、1812年の祖国戦争がはじまって以来初めて、全軍が一息つけた日なのである。

「この日、わが軍は休息することができた」と、総司令官ミハイル・クトゥゾフは、軍事日誌に書いている。この言葉は重い。

目に見えないところで、ロシア軍とフランス軍の運命の秤が逆転し、ロシアが復活への端緒をつかんだ、まさにその日、ピエールもまた精神的に甦る。さて、軍馬も労わってやらなきゃなあ。今日は馬のためのお祭りだ…。

もちろん、こんな全体の状況をカラターエフが知っていたというのではない。しかし、トルストイは、さりげなく、自分のメッセージを潜ませていたのだと思う。

この世界には、目に見えないつながりがある。ロシアの復活とピエールの復活とは、どこかでつながっている。そういうつながりが世界を支えている。だから、神秘的な働きで、カラターエフが、馬のお祭りのことをふと思い出しても不思議はない。そして、それがいかにピエールの心を動かしたかを見てほしい、と。

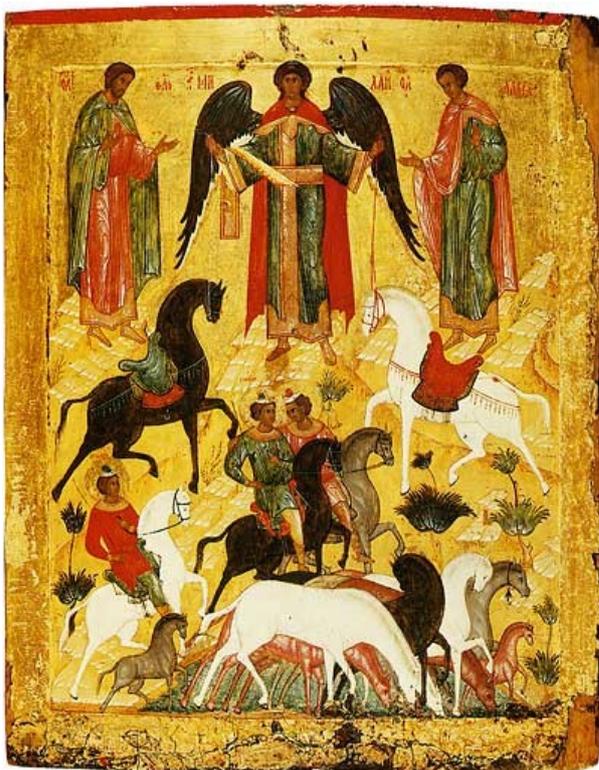
だが…『戦争と平和』には、こういう理屈を超えた奥の深さがある。読み返すたびに、この作品そのものが生命であることを実感する。はじめに述べたように、これは生命を描いた作品ではなく、生命自体である、ということだ。

マリア公爵令嬢の目が、暖かく透徹した光を放射するとき、われわれ読者は、その光の温かみを実際に感じるができる。どこからともなく生命の霊的エネルギーが湧き起こり、登場人物たちを導くとき、そのエネルギーを実際に感じる。

マリアがニコライ・ロストフと再会したときの彼女の変貌をだれが予測できようか。「この愛しい優しい顔を見た瞬間から、ある新しい生命力が彼女の全身をとらえた」（4巻1編6章）。どこからともなくやって来て燃え上がる生命。人間が一変する。それはあらゆる「必然」を超えている。これを確かに信ずることができる。

これはひとつの奇跡である。そして、おそらく、けっして分析の届かないことがらなのだ。

しかし…夢はぎりぎりまで見られてしまった。夢は終わった。目を覚まし、現実にもどらねばならない。



イコン「フロルスとラウルスに関する奇跡

Чудо о Флоре и Лавре]

(ノヴゴロド、15世紀末)

トレチャコフ美術館所蔵⁴⁷⁴

⁴⁷⁴ Христианство в искусстве: иконы, фрески, мозаики...

http://www.icon-art.info/masterpiece.php?lng=ru&mst_id=501 (2015年9月10日最終閲覧)

補説：二つのディテール：「下あごのくぼみ」と「絶えず働こうと用意しているような手」

『戦争と平和』の、ありとあらゆるコンプレックス、恨みつらみを「夢」のなかで昇華したような性格は、作品の一見ちょっとしたディテールにも現れている。

ニーナ・ブルナショーワ氏は、その優れた論文「いかにニコライ・ロストフはニコライ・イルターニエフのために復讐したか」⁴⁷⁵で、そうしたディテールの一つをとりあげている。かんたんに要約してみよう――。

『少年時代』を読まれた方は、いかにも憎々しげに描かれたフランス人家庭教師サン・ジェローム、および彼が主人公ニコレンカの悪戯を鞭で打って罰した場面をご記憶だろう。ニコレンカは、怒りと絶望のあまり、将来自分が将軍になって、この憎むべき「敵」を切り殺すことを夢想する。

このフランス人のモデルが、トルストイ家の実在の家庭教師サン・トーマであることは、作家の証言などからあきらかになっているが、最近フランスで発見された1842年当時の、彼のパスポートから、年齢、容貌も、作家の描写と一致していることがわかった（当時のパスポートには、外貌も書き込まれていた）。

『少年時代』のすべての草稿では、サン・ジェロームの外見上の特徴の一つが、いわばトレードマークのようにくり返し出てくる。それは「下あごのくぼみ」だ。なぜか、決定稿ではこの細部が削られてしまうけれども。

だが、十数年を経て、この細部は、『戦争と平和』のなかで、まったくちがった文脈において甦る。

ニコライ・ロストフが、フランス竜騎兵を追撃し、サーベルで切りつけ、薄手を負わせたとき、ふと、その顔を見て、サーベルを引く。その顔は、「若い、下あごにくぼみのある、水色の瞳をした、およそ戦場や敵にふさわしくない、単純な家庭的な顔立ちだった」

ニコライは、この「手柄」で、勇士のしるし、聖ゲオルギー十字勲章をもらうが、どうも釈然としない……。

トルストイは『戦争と平和』のなかで、自身の個人的な怒り、恨み、民族の対立、戦争を乗り越えようとした。そのことが、この一見ささいなディテールの変容からもうかがわれる――。

以上がブルナショーワ氏の指摘だ。こういう論考は、個々の作品のみならず、その草稿を知悉し、しかも、その一つひとつの細部が、全作品を貫いてどう展開していくか、それがいかなる意味をもつか、常に考えていないと書けるものではない。

⁴⁷⁵ Бурнашева Н.И. Как Николай Ростов отомстил за Николеньку Иртеньева (Из наблюдений над художественной деталью в произведениях Л.Н.Толстого) // Толстовский ежегодник 2003. С.203-211.

なお、フランス人家庭教師サン・トーマについては、同国の戸籍などから、その経歴が明らかになっているほか⁴⁷⁶、サン・トーマのロシア旅行記なるものも残っており、やはり「トルストイ年鑑」に掲載されている⁴⁷⁷。たとえば、こんな感想がある。

ロシアの奴隷は...いかなる試練に対しても稀な精力と忍耐を発揮することができる。彼らはしばしば、驚くべきストイックさで、飢え、寒さ、ありとあらゆる窮乏、そして死を耐え忍ぶ。<...> 彼らを支えるのは、神への信仰、確固たる圧政の基盤だ。「何事も神の御心です」。彼らはこう言い、不平一つこぼさず、頭を垂れるのだ。⁴⁷⁸

なお、ブルナショーワ氏はふれていないけれども、トルストイ家の家庭教師サン・トーマの名は、そのまま『戦争と平和』に出てくる。ピエールは、1812年に放火犯として仏軍に逮捕、収容されたバラックで、あるフランス人伍長と親しくなるのだが、その彼の名がサン・トーマなのだ（4巻2編11章）。

さらに筆者（佐藤）は、次のような、やはりトルストイの内的変化にともなう、ディテールの変遷を付け加えることができる。

トルストイは、農婦の愛人アクシーニャ・バズイキナと付き合っていた当時（二人の関係については本稿の第1部「カフカス」でくわしく述べた）、つまり、1850年代の末から60年代の初めにかけて、『牧歌』、『チーホンとマラーニャ』、『ポリクーシカ』などの一連の農民物を書いている。これは、以前の作品とは異なり、農民の言葉で農民の視点から——いわば農民の内側から——農民の世界を書こうとしたもので、やはり農民に近づこうとする努力の一環だったと考えられるのだが、ここにも興味深いディテールの変化がみられるのだ。

『牧歌』には、マラーニャという既婚の妖艶な農婦が出てくる。身体を動かすと「足と胸がぶるぶる震え ноги да груди подрагивают」（4章）、干草積みでは、「一度に三プード（*1プード=16.38キロ——佐藤）ずつも熊手にかける」（3章）という、いかにもトルストイ好みのアマゾネス的なタイプだ。

モデルが愛人アクシーニャであることはあきらかなのだが、その名は、マラーニャ（マラーニカ）・ドゥナイーハ（Маланька Дунайха）である。すでにみたように、『コサック』のヒロインのマリアーナは、草稿のひとつ（№14）では、マリアーナ・ドガディヒナ

⁴⁷⁶ Полосина А.Н. Гувернер Л.Н.Толстого-Проспер Сен-Тома (по материалам французских архивов)// Яснополянский ежегодник 2001. С.413-422.

⁴⁷⁷ Полосина А.Н. Гувернер Л.Н.Толстого-Проспер Сен-Тома о России и русских// Яснополянский ежегодник 2002. С.505-514.

⁴⁷⁸ Там же. С.511.

(Догадихина) と名付けられていた。そして、そのモデルのひとりと目される、テレク・コサック村、チェルヴリョーンナヤの美女は、ドゥーニカ・ドガディハ (Дунька Догадиха)。

これは、アクシーニャ——マラーニャ——カフカスという内的連関を示唆していると思われる。要するに、トルストイのなかでは、愛人アクシーニャは、カフカスのイメージを重ね合わされていたということだ。これがまず重要な点である。

さて、マラーニャという農婦は、『チーホンとマラーニャ』にも出てくる。タイプも同じで、歌でも踊りでもとにかく目立つタイプだ。はちきれんばかりに元気で、やはり「胸をぶるぶる震わせて *вздрагивая грудью*」歩く (1章)。

こっちのマラーニャにもやはり、カフカスと愛人アクシーニャが投影されているわけなのだが、マラーニャの夫は——これがまた注目される点だ——、チーホン・エルミーリン (Тихон Ермилин) といい、御者をしている。愛人アクシーニャの夫が、これによく似たエルミール (Ермил) という名で、やはり御者をしていたことを思い出していただきたい。

マラーニャは、その夫が久しぶりで帰ってくると、驚喜して彼をひょいと抱き上げる (1章)。恐れ入った膂力だが、エルミーリンのほうも元気一杯の働き者で、「絶えず働こうと用意しているような手」 (1章) をしている。この表現にどこか見覚えはないだろうか？

彼はこうして、一つのことを終わるとすぐ、べつに急ぎもしないが、瞬時もおかず次の仕事にかかるのだった…。彼の手にかかると、なに一つとして、引っかかったり、転がったり、手からこぼれたりするものはなく、まるですべてが油でもさしたように、すらすらと調子よく運ぶのだった。

もう手のなかになにもなくなると、彼の手の大きな指は、なおもなにかをつかんで働きたがっているかのように、手首からずっと遠くへ、思い切り広がっていた。(『チーホンとマラーニャ』の冒頭)

これもまた、『戦争と平和』に受け継がれる。そう、プラトン・カラターエフの描写にそのまま！…

トルストイは、カフカス・コンプレックスを投影していた愛人の夫を、理想の農民、理想の人間に変容させたのだ。

III 「作者の逸脱」と視点の問題

以上、トルストイの幼年時代から『戦争と平和』にいたるまでの歩みをみてきた。今度は、「夢から現実にもどる」番なのだが、その前にちょっと立ち止まり、これまで述べたところをまた別の角度から補強しておきたい。すなわち、彼の初期作品から『戦争と平和』までの作品を、いわゆる「作者の逸脱」と視点の面から捉えなおしてみよう。

作者の逸脱とは、作中で突然作者があからさまに顔を出し、歴史的、道徳的な意義付けをおこなうような場合を指す。一方、視点とは、語り手がどういう視点から観察し、描き、叙述しているか、である。したがって、作者が逸脱するということは、そこで作品を語りだす視点とスタンスが何らかの理由で変化したことになる。

各作品における作者の逸脱と視点の特徴を追うことで、トルストイの創作が、また別の「視点」から照らし出だされるとともに、そのユニークなジャンルの特徴もあきらかになると期待する。

「概括」と「細かさ」のジレンマ

トルストイの作品における「作者の逸脱」の例として挙げられるのは、たとえば、『戦争と平和』のエピローグ第2部のいわゆる「歴史哲学」をふくむ、歴史的考察や、『セヴァストポリ物語』の道徳的な結論などである。こうした現象は他の作家にもかなり広くみられるものだが、トルストイの場合それらは、彼の知覚、思考のパターン、特性および世界観と不可分であり、きわめて独特の様相を呈している。

ボリス・エイヘンバウムの見解によれば、トルストイにはごく若いころから「概括 генерализации」と「細かさ мелочности」の傾向がみられるという。すなわち、この作家は一方で、人々、事件、状況、そして自分自身を論理的、客観的に分析し、一般的な結論を引き出し、最終的にいかに生くべきかの原則を見出そうとする。その一方で彼には、人間というもの、様々な考え、感情、欲求、言葉、行為の集積にすぎぬと思われた。しかも、それらはしばしば非論理的に生起し、変化、消滅する。そして、トルストイの世界観によれば、ある人間なり事件なりの単一の客観的表象、イメージなどというものは、そもそも存在しない。だれもが、自分の視点から自分なりに人間と事物を見ることができただけだ。

これらすべては、エイヘンバウムによると、つぎのような創作上の問題となつてはね返ってくる。トルストイは自分の作品に、単一の客観的な語り手を持ちこむことはできない（そんなものはありえないのだから）。そして、なにか特定の性格を担い、それにしたがって行動するような登場人物も導入できない、ということになる。

というのは、エイヘンバウムの考えを敷衍すると、性格が行動を一義的に規定するようなタイプの人物は、言ってみれば、ある属性をもつ原子（アトム）のような存在であり、した

がって、そういうものがこの世にありうるとすれば、人間の行動と相関関係は、すべて論理的に記述できることになる。たいへん都合な考えであり、科学技術の進歩に支えられて時流にも乗ったので、多くの作家がそのような前提に立ったが、そんなものは、トルストイに言わせれば、幻想にすぎない。

エイヘンバウムにもどると、トルストイの初期作品の多くがルポルタージュ的なものとなったのはまさにそのためである（ルポは、具体的な特定の人間の視点から描かれる）。そして、このルポでは、作者がときおり「逸脱」して、道徳的、哲学的概括をおこなう。

トルストイが自伝的な連作を中断せざるをえなくなったのも、おなじ理由による。たった一人の人間（ニコレンカ）の思考、感情、欲求の雑然たる生起、変化、消滅を描く「魂の弁証法」（前に本文中で述べたとおり、チェルヌイシェフスキーの命名）にのみ依拠しつつ、なんらかのまとまったストーリー（сюжет）を紡ぎ出すのは、至難の業だからだ。

その結果、トルストイの作品では、人間と事物の断片が浮遊しているばかりで、社会全体、世界全体は再現されえない。ということは、「大きな問題」には取り組めないということだ（地主貴族と農民の壁をいかに乗り越えるか、ロシアはいかなる道を進むべきか、いかに生きるべきか、いかに神を認識すべきか、云々）。以上が、エイヘンバウムの指摘である。⁴⁷⁹

「概括」と「細かさ」とはなにか？

エイヘンバウムの見解は、たしかに、トルストイの創造原理の根幹に触れている。なぜなら、これまで何度か述べたように、単一の原理、真理への予感をいだきつつ、あらゆる具体的事物、矛盾を「意識」と「感情」の両方で、倫理的、実践的な態度でとらえていく、というのがトルストイの若いころからの創作原理だったからだ。エイヘンバウムはこれを、作品構成上の手法の問題として、「概括」と「細かさ」と定義したわけである。

ただし、筆者は、エイヘンバウムの意見には必ずしも賛成できない。『幼年時代』、『地主の朝』、『セヴァストーポリ物語』などの作品が、「大きな問題」にとりくんでいないなどと言えるだろうか？ これらは、それぞれの時点でのトルストイの自己表現、世界表現のすべてである。「人間と事物の断片が浮遊しているばかりで、社会全体、世界全体は再現されえない」と言うが、『五月のセヴァストーポリ』で見たように、「無秩序、無意味に浮遊する断片しか存在しない」というのが、トルストイがこのときに世界について突き詰めた、ぎりぎりの完璧な表現であった。「概括」と「細かさ」という手法が足を引っ張り、表現が偏頗に終わったというのは正しくない。

とはいえ、結果的にみれば、ばらばらの断片の集積と、時折あがる苦悶の叫びとか抗議の声といったものが、トルストイのこの時点における創作の行き止まりであったことにちがいはない。そこへ、『戦争と平和』というビジョンが彼を見舞ったことも、すでに述べたとお

⁴⁷⁹ Эйхенбаум Б.М. «Молодой Толстой». Петербург-Берлин, изд.3.И.Гржебина, 1922.

りで、ここではそれを、「作者の逸脱」と視点の面からのみ見ていくことにする。

『戦争と平和』のジレンマ

私見では、『戦争と平和』は、トルストイが抱えていたあらゆる主要な課題を解決しようとした、巨大な実験室である。まずはこの作品全体の基本的コンセプトをかんたんに振り返っておこう。作者はそれについて、エピローグ第2部で明快に説明している。

ナポレオンのロシア遠征という巨大な事件はなんだったのか？ それは彼の「自由意志」にもとづくものか、諸々の原因による「必然的な」ものか？あるいは両者の混交か？しかし、自由とはなにか、必然とはなにか？ ナポレオンは、そうしようと思えば、遠征を始めずにすんだのか？ この問題を解決せずに適当に按配するのでは、世界と歴史の全貌を十全に描くことなどできまい。そこで作者は真正面から問う。自由と必然とはそもそもなんなのか、と。

作者の考察によれば、われわれは、自分が自由であると感じており、あれこれの行動をすることもできるし、しないこともできると感じている。だが、時間を置いて振り返ってみると、あるいは他人の「自由な」行動を、傍から距離を置いてみると、それは必然的にみえてくる。

なぜなら、ある力（たとえば、ある行動をしたいという欲求）が生じたとして、それを、すなわち「その瞬間の、規定し得ない生命の感触」*«мгновенное, неопределимое ощущение жизни»*（12, 337）を、当事者として直接感じていようと、時間と距離をおいてみていようと、いずれにしても、それがなぜ生じたのかという謎は残るからだ。なぜ、その時その場でそういう欲求が生じたのか。なぜ多種多様な無数の力が生じ、うまく噛み合い、祖国戦争のような巨大な運動を起こしたのか、という問に投げ返されるからである。

したがって、作者によれば、われわれにできるのは、原因を問うことではなくて、そういう力がいかに生じ、なにをもたらしたかを包括的に、その全体像をとらえることのみである。「自由」と「必然」は、「内容」と「形式」のように、本来不可分の一体をなしている、と作者は言う。それを一体のものとして認識し表現すべきであるというのが、『戦争と平和』のエピローグ第二部のいわゆる「歴史哲学」の骨子にはかならない。では、作者はそれをいかにして実現したのか？

作者の絶えざる逸脱

「自由」と「必然」を、「内容」と「形式」のように、不可分の一体としてまるごと認識し表現する——。こうしたコンセプトを実現するために作者がやったのは、一つの視点から別の視点に絶えず「逸脱」するということであつた。そうすることで、人間と人間がおかれた状況とを、無限に多様な視点から描き出していくのである。

作者は、さまざまな仕方で、登場人物たちの視点を共有し、あるいはまた、彼らとは別箇

に、独自の具体的な視点から、登場人物たちと個々の状況について、一瞬ごとに、未知の新たな側面を開示し、と同時に新たな謎を発見していく。作者は、このように次々に新たな視点に「逸脱」しつづけ、絶えず新たなイメージ、表象を積み重ねるなかで、世界を認識していくのだ。

このトルストイのアプローチは空前のもので、人間の認識というものの秘密と同時に、現実世界の本質的な多層性をあきらかにする。そして、このアプローチの特徴は、作品の冒頭から明示されている。

「〈ねえ、公爵。ジェノヴァもルッカも、ボナパルト家の領地になってしまったのではございませんか。いいえ、わたくし前もってお断りしておきますけど、もしもあなたが戦争などないとおっしゃったり、まだあのアンチキリスト（ほんとに、わたくし、あの男がアンチキリストだと信じておりますのよ）のあれやこれやの忌まわしい、恐ろしい所業を弁護したりなされると——もうわたくしあなたと絶交いたします。あなたはもうわたくしの親友でもなければ、忠実なる奴隷でもありませんわよ〉。まあ、でも、よくいらっしゃいました、よくいらっしゃいました。〈わたくしあなたをびっくりさせたらしゅうございますわね〉。おかけになって、お話しくさませ」

1805年7月、皇太后マリア・フョードロヴナのお側近く仕えている有名な女官アンナ・パーヴロヴナ・シェーレルは、彼女の夜会に最初にやってきた顯官ワシーリー公爵を迎えてこう言った。アンナ・パーヴロヴナは数日咳が出ていた。彼女は、自分で言っていたように、インフルエンザにかかっていたのである（インフルエンザというのは、当時の新しい言葉で、少数の人にしか用いられていなかった）。（9,3）

* 〈〉はフランス語。

この作品は、今のところどこの誰とも知れぬ、何者かの言葉を、いきなり話の途中から、いっさいの説明抜きで長々と、自動的に速記あるいは録音するかのようにして始まる。したがって、ここでの語り手は、速記者を思わせるのだが、そのあと、語り手は、叙事的、回顧的な視点に移り、いちおう状況を説明するものの、そこでまた、ふと思いついたかのように、この女官がインフルエンザにかかっていたなどという、一見とるに足らぬことを付け加える。事実、彼女のインフルエンザは、これっきり言及されることもなく、これ以降のストーリーになんの痕跡も残さない。あたかも語り手は、たまたまこんな些事を思い出し、何の気なしに言い足したかのようなのだ。このことは、語り手が、客観的でも非人称でもないことをすでに示唆している。

ところがこのあと、語り手は、こともなげに、夜会の招待状の文面を示す。これは、女官とその招待客以外知らないはずのものだから、ここで語り手はまたしても、すべてを知る、全知のそれに近づいている。が、その直後、またしても案に相違して、語り手はこんなこと

を述べる。

彼（ワシーリー公爵）は、われわれの祖父たちがたんに話すばかりでなく考えるのにさえ使ったという、洗練されたフランス語で、そしてまた社交界や宮廷で年老いた高位高官の人物特有の、落ち着いた、庇護者的な口調で話した。（9,4）

「われわれの祖父たちが」と言っているのだから、ここでの語り手は、ワシーリー公爵の階層に属し、その孫の世代に当たることになる。非人称、全知の語り手のあとに、特定の階層、世代に属す立場が、突然現れるわけだ。矛盾である。

その先に行くところでは、それとも矛盾する記述にぶつかる。

熱情家であることが彼女の社会的立場になっていたもので、ときには、気乗りがしない場合でさえも、彼女を知っている人々の期待を裏切らぬために、熱情家になった。アンナ・パーヴロヴナの顔に絶えず躍っている控えめな微笑は、彼女の盛りをすぎた容貌にはうつらななかったが、甘やかされた子供によくあるように、自分の愛すべき欠点を常に意識していることを現していた。この欠点を彼女は改めるつもりもなければ、できもせず、またその必要を認めもしなかった。（9,5）

これは、この女官のかなり身近な人間（家族、親友、同僚など）でなければもち得ないような類の意見だ。

このように、冒頭からわずか 2 頁ほどのあいだに、語り手は——忠実な速記——客観的、叙事的な回想——女官のインフルエンザの（無意味な、あるいは気まぐれな）想起——非人称、全知の記述——具体的な階層と世代に属する立場からの描写——身近な人間による個人的意見——というふうに一見無秩序に、その脈絡が読者に明らかでないままに、飛躍、交代していく。いままでの語り手が瞬時に消え、別の語り手が現れる。

これはすなわち、速記（ルポ）——叙事詩——偶然の気まぐれな記述——非人称、全知の記述——同じ階層に属する孫の世代による回想——身近な人間による個人的観察、意見の記述...と、一瞬ごとに新たなジャンルの特徴が現れることを意味する。

作者のこうした絶えざる逸脱の結果、未だかつてなかった広大で多層的な世界が描き出されていく。そして、それは、現実世界の多層性と多元性を開示し、空前のリアリティーを獲得したのである。

先行研究の問題点

『戦争と平和』における「作者の逸脱」にかんする先行研究の問題点は、ほとんどの論者が、「作者の逸脱」すなわち「歴史的、哲学的逸脱」としていることである。言い換えると、

作者は、歴史的、哲学的逸脱以外には、いっさい逸脱していないことになる。

たとえば、エイヘンバウムによると、作者は「ジャンルを高め」、「叙事詩のジャンルに移行する」ために、叙事詩（エポペーヤ）的ジャンルの要素として、「ホメロスの逸脱」をおこなわなければならなかった、と言う⁴⁸⁰。なるほど、第3巻のナポレオンのロシア遠征開始以降、この手の逸脱は増えていくので、別のジャンルに移行しているようにみえなくもない。

しかし A.A.サブローフは、エイヘンバウムを批判してこう主張する。「トルストイにおいては、逸脱が現れるのは、芸術家としての仕事と思想家としてのそれを組み合わせ、歴史的な情報を盛り込むことが必要だからであり、ジャンルについての考慮からではまったくない」⁴⁸¹

だが、いずれの論者も、「逸脱」で同じことを、つまり「歴史的、哲学的逸脱」を念頭に置いている点では同じだ。なぜそれが作者に必要なになったか、という理由の点で意見が分かれるにすぎない。したがって、サブローフもエイヘンバウムも結局、『戦争と平和』＝小説的部分＋叙事的、思想的逸脱、であると考えているわけで、ロマン・エポペーヤ説に落ち着くのである。この説は非常に根強く、ほぼ通説化しており、後年のリディア・オプリスカヤ⁴⁸²も、比較的最近のアーシャ・エサルネーク⁴⁸³も、同様の説をとっている。

チェルネーツのように、「ロマン」と「エポペーヤ」に一つ要素を追加した「ロマン・エポペーヤ・風俗小説的作品」なる説⁴⁸⁴もあるが、これでは、この作品の根本的な新しさを説明し切れない。

初めて『戦争と平和』における逸脱のラディカルな性格に着目したのは、ボリス・ウスペンスキーである。彼の意見によると、この作品には二人の語り手が存在する。そのうちの一人は、あたかもすべてを知っているかのようで、登場人物たちの過去も、意識下にあることさえ知ることができるが、彼らの将来は知りえない。もう一人の語り手は、登場人物たちのそばにいて、彼らを観察しているかにみえる。ウスペンスキーは、これら二人の語り手を、別のものとして区別する。なぜなら、後者は、登場人物たちの心の中にあることは分からないようだからである⁴⁸⁵。だが、ウスペンスキーの流儀で行くと、この作品には、二人どころか何人もの語り手がいることになってしまう。

筆者の考えでは、『戦争と平和』の語り手は、やはり一人しかいない。というのは、語り手が、登場人物を傍から距離を置いて観察するとき、その心中にあることがらが視野に入

⁴⁸⁰ Эйхенбаум Б.М. «Лев Толстой». Книга вторая (60-ые годы). Л.-М., 1931. С.376.

⁴⁸¹ Сабуров А.А. ««Война и мир» Л.Н.Толстого. Проблематика и поэтика». М.: изд-во московского университета, 1959. С.463.

⁴⁸² Опульская Л. Д. Роман-эпопея Л. Н. Толстого "Война и мир": книга для учителя. М.: Просвещение, 1987.

⁴⁸³ Эсалнек А.Я. Основы литературоведения: анализ романного текста. М., 2004. С.100-115.

⁴⁸⁴ Чернец Л.В. Литературные жанры// Проблемы типологии и поэтики. М.: Изд-во МГУ, 1982.

⁴⁸⁵ Успенский Б.А. «Поэтика композиции». М., 1970.

ってこないのは当然である。一方、いわば登場人物に同化し、「直接的な生命の感触（自由）」を共有するときは、こんどは逆に、外的状況は目に入らない。そこにはいかなる不思議も矛盾もないのだ。

もし、われわれが、単一の客観的な認識なる幻想を捨て去るならば——作者の主張しており、「自由」と「必然」を分離せず、「内容」と「形式」のように本来一体のものとして、それに対するならば——『戦争と平和』の冒頭にみられた、二人どころか、複数の語り手は、じつは認識の位相の違いにすぎず、実は一人であることが分かるだろう。

たとえば、われわれが遠い少年時代に思いを馳せるとき、たちまちかつての「現在」と「自由」と希望が甦り、未来を志向して生きはじめるのを感じるだろう。たとえ、それが遙か昔に完結してしまった過去であろうとも。

だから、『戦争と平和』がいかに多層的、多元的であろうとも、結局は、一人の語り手の認識と表現に帰するのであり、その意味では、ミハイル・バフチンの「トルストイの世界は一枚岩的なモノログだ」⁴⁸⁶という評言は正しい。ただし彼は、この作品の今見たような多層的、多元的特徴は見過ごしているが。

しかし、中世ロシア文学研究者ドミトリー・リハチョフは、「その独自の視点から」、『戦争と平和』の本質に迫っている。

歴史的考察は、『戦争と平和』の記念碑な性格を強めており、中世ロシアの年代記作者たちが語られている事柄から逸脱するのに似たところがある。すなわち、『戦争と平和』における歴史的考察には、年代記作者たちと同じくらい、事件の事実そのものから離れたところがあって、あるていど内的な矛盾をはらんでいる。つまり、それらの考察には、年代記作者において自然と湧き起こる、読者への道徳的訓戒を思わせるものがあるのだ。

487

Исторические рассуждения усиливают художественный монументализм «Войны и мира» и сходны с отступлениями древнерусских летописцев от рассказываемого. В той же мере, что и у летописцев, эти исторические рассуждения расходятся в «Войне и мире» с фактической стороной дела и в известной мере внутренне противоречивы. Они напоминают стихийно возникающие у летописца моральные наставления читателям.

このように、『戦争と平和』において、トルストイの探求は、中世ロシアの文化的伝統と触れ合いつつ、人間の認識一般に深く立脚する、前代未聞の多層的、多元的なジャンルを生み出した。

⁴⁸⁶ Бахтин М.М. «Проблемы поэтики Достоевского». Изд.4-е. М.: «Сов.Россия», 1979. С.65.

⁴⁸⁷ Лихачев Д.С. «Лев Толстой и традиции древней русской литературы» (в кн.«Литература — реальность — литература: Статьи»). Л.: Сов.писатель, 1984. С.107.

これは小説ではない。叙事詩ではなおさらないし、ましてや歴史的記録ではない。
『戦争と平和』は、それが表現されているような形に、作者が表現することを望み、かつ表現しえたところのものである。（『戦争と平和』について数言を費やす）

トルストイの言葉は非常に正確であった。なぜなら、このような、あらゆるジャンルでもあればそうでもないようなものは、かつて存在しなかったのだから。

もっとも、自然発生的な視点の移り変わりにしたがって作品を書いていくと、無形式におちいるので、トルストイも、その点はいろいろと工夫している。そのうちの一つが、交響曲の形式を踏んでいることだ。「戦争」と「平和」が第一、第二主題で、その主題の提示から始まって、アダージョ風の第二巻、スケルツォ風の第三巻（ここでボロジノの会戦が描かれる）と展開していく。

とはいえ、こういうことだけなら、たとえば、ヴァーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』の4部作についても言える。『戦争と平和』の本質はあくまでも今述べてきた、人間の認識に根ざした多次元的統一といった点にある。

「細かさ」の消滅

『戦争と平和』後、トルストイの「概括」と「細かさ」、および「作者の逸脱」のあり方は、根本的に変化し、したがって、作品のジャンルの特徴も一変する。そのわけは、「魂の弁証法」の探求——すなわち、想念、感情、欲求などがいかに生まれ、変化し、消えていくかを観察すること——が、この作品で限界に達し、彼にとってもはやアクチュアリティを失ったからである。

というのは、すでに述べたように、『戦争と平和』で作者が、登場人物たちの想念、感情、欲求などの無限に多様な運動に見入っているうちに、それらが個々の人物ごとに特有のトーン（調子）を帯びていることを発見したからだ。そのトーンは、ある種の波動のようなものだといえようが、彼らの身体、意識の状態、彼らがおかれた状況に左右されない。この意味で、人間のトーンは、あらゆる物理的条件を超えており、絶対的で不変であり、霊的なエネルギーである。まさにこのことが、ピエールが夢で見た「揺れ動く水滴」（12, 158）に表されていた。

こうして、無限に多様な「魂の弁証法」は、「揺れ動く水滴」という簡潔きわまりないイメージに帰したのである。人間は弁証法から波動に縮小した。これはつまり、彼の創作から「細かさ」が消えることを意味する。

「細かさ」のないルボ

これは一つの見事な解決であったが、それはまた新たな別の問題をトルストイに突きつけることになった。『戦争と平和』という、特殊な条件を設定した「実験室」では、個々の水滴

たちはみごとに調和してひとつの地球儀をかたちづくっていたが、現実世界ではどうか、ということだ。

『アンナ・カレーナ』で男性の主人公レーヴィンが疑ったように、「なにか邪悪な力の残酷な嘲笑」(19, 371)を浴びて、「この泡はしばらくもったあと、はじけてしまう」«пузырек этот подержится и лопнет» (19, 370) のではないか？…

ここでライトモチーフ的に、本稿の第3部で論じる『アンナ・カレーナ』について、簡単に述べておこう。

『アンナ・カレーナ』の課題は、要するに、「水滴の地球儀」を現実世界で検証することであった。そのために作者は、部分的にルポルタージュの方法を用いる。つまり作者は、この課題にとりくむトルストイ自身を、レーヴィンというかたちで、同時進行でルポ的に描いたわけだ。

ただしそこでは、以前の作品に比べて、「細かさ」はずっと少なくなっており、たとえば、『五月のセヴァストーポリ』におけるプラスクーヒンの死のような、思い切り拡大された「魂の弁証法」を見ることは稀だ。その一方で、「概括」のほうは、はるかに多様になり、深まり、より具体的な問題を取りあげるようになっている（現代文明、鉄道、農業、現代音楽、科学、哲学、宗教などについての考察）。

こういう性格をもつレーヴィンのラインと、アンナのラインとの違いは甚だしく、その不協和は露わとなっている。作者はほとんど、ロマンそのものから逸脱しかかっているといってもいいくらいだ——とくに最後の第8章では。

文学からの逸脱

実際、『アンナ・カレーナ』の後では、文学作品からの「作者の逸脱」が生じることになる。作者はいまや、文学作品の枠外で、各分野のモノグラフ（単一テーマの著作）というかたちで、宗教的、哲学的、美学的、社会評論的等々の「概括」をおこなうことになる。一方、文学作品のほうはといえば、生と死の、神と「邪悪な力」の簡潔なドラマとなった。

このように、ついにトルストイは、文学そのものからも「逸脱」したわけだが、それはあくまでも、彼の創造の内的論理の帰結であり、真理の探究のためであった。その探求からは、彼は決して「逸脱」したことはない。

補遺：祖国戦争にかんする個別の証言と研究

本稿の第2部「1812年と『戦争と平和』」の最終章は、補遺あるいは資料集といってもいいのだが、独自の狙いをもっており、いくつかの証言と研究を、それぞれ個別に紹介する。断片の引用ではなく、各証言ごとにまとめて、どういう立場にある人間が、どんな理由でどんなことを言っているか、韜晦しているかがわかるように抄訳またはパラフレーズする。これらの証言と研究は、1812年というきわめてユニークな事件をそれぞれの角度から照射するはずだ。

いわば、『戦争と平和』の「歴史哲学」のひそみに倣いつつ、さまざまな視点に「逸脱」していくことで、多層的、多次的にこの大事件の全体像を捉えるべく努めようというのである。

蛇足と思われる向きもあろうが、この事件はかぎりなく深い。その深みから、ロシア人の精神が今日にいたるまで糧を得ており、そこからほかならぬ『戦争と平和』も生まれたことを忘れまい。その事件の大きさと深さが、このように「内容と形式を一体のものとして」跡づけることを要求するのである。

1) 陸軍中将ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記⁴⁸⁸



無名の画家による肖像画⁴⁸⁹

国立ルイビンスク歴史・建築・美術博物館所蔵

⁴⁸⁸ Волконский Д.М. Дневник1812—1814гг. // 1812 год... Военные дневники. М., 1990. С.114-184.

⁴⁸⁹ <http://www.rybmuseum.ru/query/SPage?paicode=00000168&page=1117> (2015年9月10日最終閲覧)

ドミトリー・ヴォルコンスキーの生涯

まずは、このきわめてユニークな日記の作者の生涯をかんたんに記しておこう。

ドミトリー・ミハイロヴィチ・ヴォルコンスキー（Дмитрий Михайлович Волконский, 1770－1835年5月7日）は、公爵、陸軍中將。名門ヴォルコンスキー家の出身で、トルストイの祖父ニコライ・セルゲーエヴィチは叔父（父の弟）。

1788年に、プレオブラジェンスキー連隊の少尉に任官。1788－1789のスウェーデンとの戦争で、四等聖ゲオルギー勲章とサーベルをその「勇気に対して」授与される。まことに前途洋々たるものがあった。1791年にトルコとの戦争に、1794年にポーランドへの軍事介入に参加し、1797年には大佐に昇進。1798年4月に少将に昇進し、モスクワ守備隊司令官となる。スヴォーロフのイタリア、スイス遠征に参加し、その功績で、1800年12月に中將に昇進（まだ30歳である）。1803年、グルジア駐留軍司令官に任命。1805年には、クトゥーゾフの司令部で当直将官（дежурный генерал）⁴⁹⁰となり、アウステルリッツで負傷。1806年に第6師団司令官に任命され、1806－1807年、フランス軍と戦う。フリートラントの会戦で、右腕を榴弾の破片で負傷。この間の功績により、ダイヤモンド付きの黄金のサーベルと、一等聖アンナ勲章を授与される。

ところが、負傷後彼は、1807年9月に退役してしまう。軍に復帰したのは1812年であるが、実際に着任したのは12月で、すでに仏軍は国境のネマン川を渡り、潰走していた。第3軍の歩兵軍団司令官に任命される。ダンツィヒ包圍戦を指揮し、その功績で、三等聖ゲオルギー勲章、二等聖ウラジーミル勲章、およびプロイセンの一等赤鷲勲章を受章する。ナポレオン戦争が終わると、1816年2月に中將で退役。モスクワの元老院議員となり、同市に移り住む。1835年、モスクワで死去。ノヴォデヴィチ修道院に葬られる。彼の家族の廟がここにある。

ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記：祖国戦争の裏面史

そのドミトリー・ミハイロヴィチ・ヴォルコンスキーの日記であるが、付されているタルタコフスキー（А.Г.Тартаковский）の解説によると、彼は、1800年から最晩年の1834年までほぼ毎日日記をつけており、量はノートで42冊という膨大なもので、きちんと番号がふられていた。しかし、残っているのは28冊だけで、14冊は行方不明だ。

その14冊のなかには、1825年10月－1826年12月という、デカブリストの乱の前後もふくまれる。彼には、近親（三親等の従兄弟）のセルゲイ・グリゴーリエヴィチ・ヴォルコンスキーをはじめ、デカブリストの知り合いが何人もおり、いろいろ興味ぶかいことが（そしてぐあいの悪いことも）書いてあったと思われ、行方不明になったのは、そういうこととも関

⁴⁹⁰ ロシア帝国では、当直将官（дежурный генерал）の役職は1812年から設けられ、総司令部をはじめ、各司令部に置かれた。当直将官は、命令、指令が然るべく伝達、遂行されているかを監督し、軍の状態、戦闘能力にかんする情報を集め報告し、また通信、補給の状況を監督する。つまり、当直将官というのは、副官たちの作業を束ねるのが仕事で、その意味で司令官の最高の補佐役であり、文字通りの右腕と言える。

係があるかもしれない。

祖国戦争との関連でいえば、ドミトリー・ヴォルコンスキーは、われわれにとってきわめて好都合な立場にあり、国家機密とモスクワの市井の両方に通じていた。ここが肝心なところだ。

彼は軍の高官で、名門ヴォルコンスキー一族に属していたので、いろいろな人と親交があった。同族のトルストイの祖父ニコライ、ピョートル・ヴォルコンスキー（アレクサンドルー世の側近で、戦略、軍事問題のブレーン）、デカブリストのセルゲイ・ヴォルコンスキーなどは近親で、よく知っていたし、クトゥーゾフ、バルクライ・ド・トーリ、モスクワ総督ロストプチンなど、祖国戦争の立役者たちとも親しかった。クトゥーゾフも親類で、その娘のプラスコーヴィヤは幼なじみだった（ユリウス暦 1834 年 6 月 3 日付の日記）。

このあと詳しく述べる、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーとも親しかった（ユリウス暦 1819 年 3 月 6 日の日記）。彼はこれまでも再三引用したが、クトゥーゾフの副官を務め、最初の公式の祖国戦争史を書いた人物である。

また、当時の代表的な文人たちとも親交があった。これはドミトリー自身がなかなかの教養人だったのにくわえ、1811 年に結婚した妻ナターリア・アレクセーエヴナ（1784－1829）が、『イーゴリ軍記』を出版したアレクセイ・ムーシン＝プーシキンの娘だったのも手伝っている。作家で歴史家のニコライ・カラムジンや、縁続きにあたる詩人ピョートル・ヴァーゼムスキーとは、とくに親しかった。カラムジンからは、イワン雷帝の蛮行をいろいろ聞かされて呆れたりしている（ユリウス暦 1812 年 5 月 26 日）。これは、カラムジンの本音もうかがわせるエピソードでおもしろい。

プーシキンとも 1820 年 7 月 27 日（ユリウス暦）に会ったことがあり、「たいへんな詩才のもちぬしだ」と感心している。

その一方で、フリートランドの戦い（1807）において榴弾の破片で右腕を負傷して退役し、ナポレオンのロシア侵入からモスクワ放棄まではずっとモスクワにあって、市井の状況の推移をつぶさにみていたので、要するに、彼の日記は、みごとに 1812 年の全体像をみせてくれるのだ——それも検閲と自己検閲ぬきに。そのせいか、祖国戦争の部分がまとめて公開されたのは、この本書『1812 年...軍事日記』が初めてとなった⁴⁹¹。執筆から実に 200 年近くが経過していた。

このように彼は、1812 年のモスクワの実情を生々しく日記に書き記しているばかりか、もうひとつおもしろいのは、トルストイの祖父ニコライ・ヴォルコンスキーにも、それを何度か書き送っていることだ。その手紙は、残っていないことになっているが、どこへ行ったのだろうか？

⁴⁹¹ Там же же. С.114-184.

トルストイとの関連

トルストイとの関連で付け加えておくと、ドミトリーは、叔父ニコライを「第二の父」と呼ぶほど慕っていた。若いころから可愛がってくれて、教育にも気を配り、軍でも、イズマイロフスキー連隊に移してくれたおかげで、すぐ少尉に任官できたと言っている（ユリウス暦 1833 年 6 月 15 日の日記）⁴⁹²。ニコライは息子がいなかったから、ドミトリーを実の息子のように思っていたのかもしれない。

ドミトリーは、ニコライの娘マリア、そしてその夫ニコライ・トルストイとも親しかった（要するに、トルストイの両親をよく知っていた）。

またニコライは、将来のデカブリスト、セルゲイ・ヴォルコンスキーとも面識があったのだが、それも、この日記につきのような記述があることで、はじめて確認された。

「私は、ニキータ公爵、セルゲイ・グリゴリーエヴィチ公爵とともに、ニコライ・セルゲーエヴィチのところで、昼食をごちそうになった」（ユリウス暦 1817 年 3 月 14 日の日記）⁴⁹³。

トルストイの母マリアが亡くなったときは、「幼い子 5 人を残して亡くなった。神よ、彼女の魂に平安を与えたまえ」と、悼んでいる。その一ヵ月後には、夫のニコライ・トルストイがやって来て、「妻は、神経発作をとまなう重い熱病（*сильная нервическая горячка*）で亡くなりました」とドミトリーに言ったという（ユリウス暦 1830 年 9 月 24 日）⁴⁹⁴。やはり、マリアの死因は、精神錯乱をとまなうものであったようだ⁴⁹⁵。

という次第で、トルストイ自身にとっても、この日記はさまざまな点で興味津々の内容をふくんでいるのだが、彼はこの日記を知っていたのだろうか？ 解説者 A.G.タルタコフスキーの意見では、この日記は、ドミトリーの子孫が 20 世紀はじめまで篋底に秘めていたので知らなかったし、ドミトリー自身についても、作品、日記、書簡などでまったく言及していないところをみれば、よく知らなかっただろう、と推測している。ただし、トルストイの母マリアの従妹ワルワラ・アレクサンドロヴナ・ヴォルコンスカヤ、セルゲイ・ヴォルコンスキー（デカブリスト）のような共通の知人を通じて、いろんな話は聞いていただろう、と言う。

だが筆者は、どうもこれには賛成できない。貴族の世界はせまい。一族だというのに——しかも、トルストイはこれからほかならぬ祖国戦争の歴史を語ろうとしているのに——これだけおもしろい文書の存在を知りもしなかったと考えにくい。こっそり見せてもらったことぐらいあってもおかしくないではないか？ また、かりに見たとしても、こういう内容のものを公言するのははばかれたらう。デカブリストがようやく許されて帰還したのは、つい 1856 年のことなのだ。ドミトリーについて語ることは、この日記について語ることである…。

⁴⁹² タルタコフスキーによる 118—119 頁の解説も参照。

⁴⁹³ タルタコフスキーによる 119 頁の解説も参照。

⁴⁹⁴ タルタコフスキーによる 121 頁の解説も参照。

⁴⁹⁵ 本稿の第 1 部 3 章 1 節「男っばい母と、その不可解な死」を参照。

筆者は、想像をたくましくするのだが、名門ヴォルコンスキー家の出身で、トルストイの祖父ニコライが実の息子のように可愛がり、スヴォーロフのイタリア、スイス遠征でも手柄を立て、1800年には早くも、30歳の若さで陸軍中將に昇進しながら、1807年、フリートラントの会戦で右腕に重傷を負い、軍を退役してしまった、この若き貴公子に、たとえば、『戦争と平和』のアンドレイ公爵のおもかげはないだろうか？

それにしても、人生とはわからないものだ。ほぼ時をおなじくして、1807年のアイラウの戦いで、やはり右腕を負傷したバルクライは、それをきっかけに、ロシアの軍政全般を担い、祖国戦争では勝利の立役者になるというのに…。

祖国戦争関連でおもしろい点

さて、そのドミトリー・ヴォルコンスキーの日記の内容だが、時系列に沿って抄訳を示す前に、祖国戦争関連で、とくにおもしろいポイントを指摘しておこう。

まず、モスクワの住民は、あらゆるルートでいち早く情報をキャッチしていたという。モスクワ放棄と大火についていえば、そのかなり前から、火が放たれるといううわさが流れ、住民は大挙して避難をはじめたとドミトリーは記している。

ドミトリーのような立場にある人間が、「あらゆるルートでいち早く情報をキャッチ」というくらいだから、それは実際かなりのものだったろうと思われるが、そのうわさの元はなんだろうか？

何度か書いたように、ナポレオンがモスクワに来るまでに露軍に撃滅される可能性はほとんどなかったから、モスクワ放棄、放火は早くから十分予想できたことだ。とくに、スモレンスクの会戦のあとではほとんど確定と考えるのがむしろ当然だった。

だが、そういう理屈だけではなかったようだ。というのは、スモレンスクの会戦の約3週間前のこと、仏軍がヴィテブスクに迫っていた7月27日（15日）に、皇帝が政府首脳とともにモスクワを訪れると、その後、街の雰囲気ガラリと変わってしまった、とドミトリーは書いているからだ。つまり、それまでは、もしかしたらなんとかなるかも、と人々は思っていたのが、「もうだめだ」と変わったということなのだが、これは、なにを意味しているのだろうか？

ここで思い出していただきたいのが、前に触れたセルゲイ・格林カの回想だ。彼は、皇帝のモスクワ訪問に際し、今後の戦況次第ではモスクワの放棄と放火もやむなしと献策し、その結果、彼は、モスクワ総督ロストプチンと協力して放火を計画、実行するように、政府より委ねられた、と自著『1812年についての回想』で示唆している。

この回想については、ドミトリーの日記のつぎに、まとめて詳述、抄訳するが、さまざまな状況を総合すると、事実としか考えられない。とすれば、おそらく、この情報が伝わったか、住民がそれと察したということではないだろうか？ 決定の当事者たちも、家族、召使、財産の避難にそなえねばならないから、こういう情報はどうしても漏れるだろう。

そして、8月18日（6日）のスモレンスク陥落と大火、都市の壊滅がいち早くモスクワにつたわると、住民は大挙して避難しはじめた、とドミトリーは記している。これはもう当然の動きということになる。

『戦争と平和』では、ロストブチン以下、住民は、モスクワが露軍に放棄されることをぎりぎりまで知らなかったことになっているが、そんなことはなかった。また、ほぼ全市民が退去した理由も、「愛国心の発露」などではなかった。

ドミトリーの日記によると、モスクワ放棄前後の大混乱はすさまじかった。略奪、殺人、強姦…。コサックはロシア人を略奪した。彼は、「こうしたことをすべて」、ニコライ・ヴォルコンスキー（トルストイの祖父）に手紙で書き送ったという。

ドミトリーの記述は、非常に沈着で、ときにかなり辛らつであり、激して書いたような部分は皆無だ。以下、日記の1812年にかかわる部分をまとめて抄訳、パラフレーズしてみよう。とにかくその全体像がおもしろいのだ。

なお、日記本文の引用、パラフレーズ以外の、佐藤の意見、解説は、記述の混乱を避けるため、改行して行頭に*をつけて示す。

ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記の抄訳

7月23日（ユリウス暦11日）

警察がモスクワに、ツァーリの布告をもたらした。それ以来、モスクワの雰囲気はがらりと暗転した。それまでは、筆者ドミトリーも、自宅の建設などにいそしんでいたのに…。

*この布告は、ナポレオンがロシアに侵入して1ヶ月弱後の7月16日（6日）に、ポロツク（現在はベラルーシ共和国に所属）に在った第1軍の陣中で、アレクサンドル一世が出したものである。その内容は、モスクワの住民に対して戦争の危険を警告し、同市はじめ全国で義勇兵を募る、というもので、つぎがその抄訳だ。

「モスクワに告ぐ。敵は大軍を率い、ロシア国境内に侵入した。敵は、わが愛する祖国を荒廃させんと進みつつある。〈…〉 わが忠良なる臣民らに、彼らを脅かす危険を警告せざるを得ない。それは、我らの不注意により、敵が優位を占めぬようにするためでもある。それゆえに、最も確実な防衛のため、新たな国内軍を募るべく、我らは第一に、我らが父祖の古の都に要請するものである。〈…〉」⁴⁹⁶

以下に、ドミトリーのこの日の日記を全訳する。

⁴⁹⁶ Государя Императора воззвание к жителям Московской Столицы. 6 июля 1812. Первопрестольной Столице Нашей Москве // «Исторический, статистический и географический журнал», 1812, ч.3, кн.1 (июль). С.66-67.

11 日朝、警察がモスクワ市に、迫りくる危機と、あらゆる階層の人々の速やかなる武装にかんする布告をもたらした。この知らせは、すべての人を驚倒させ、最も不愉快な憶測も呼んだ。しかし、それとともにわれわれは、陛下が軍を離れ、こちらに向かわれていることも知った。ここへすべてこれらの知らせをもたらしたのは、副官将官（генерал-атъютант）⁴⁹⁷であるトルベツコーイ公爵だ。私は直ちにロストプチン総督のもとへ赴き、つぎのことを知った。陛下が今夕クレムリン宮殿に到着されること、そして、わが軍は無傷で、戦闘はなかったことだ。前の知らせにおとらず、街全体が動揺した。一晩中、9 時まで、われわれの多くと民衆が陛下を待ったが、到着は明日になると知り、人々は散った。陛下は深夜に着かれ、翌 12 日朝、私は宮殿に参内した。陛下は聖堂で祈祷式に参列されていた。すさまじい人混みで、ウラーと叫びながら、陛下を拝もうと押し合っていた。陛下とともに、アラクチャーエフ、バラショーフ、シシコフ、コマロフスコイ、ピョートル・ヴォルコンスキー公爵がやって来た。私は彼と差しで話した。それによると、当初の作戦はどうも具合が悪く、軍は広がりすぎており（*会戦当時、第 1 軍、第 2 軍以下が、あちこちの地域に分散していたことを指す——佐藤）、遠くまで退却したため、敵は、オルシャを突破し、スモレンスクに迫っている。スモレンスクに迫ったのはまだ小部隊だけで、その後退却したものの、敵の兵力は優勢で、モスクワを目指しているのはあきらかだと思われる。多くの者が怯え、村からやって来た（*村にいるのは不安なので、情報の得られるモスクワに出てきた——佐藤）。軍からは多数の輜重が戻ってきており、スモレンスクからさえ火薬がここへ運ばれてきた。妻は、私の身を案じ、ヴァルーエヴォ村からやって来て、私のもとに留まった。

11-го поутру от полиции принесли указ городу Москве о предстоящей опасности и о скорейшем вооружении всякого звания людей. Сие известие всех поразило и произвело даже в народе самые неприятные толки. Вместе с сим узнали, что и государь едит сюда из армии. Все же сии известия привез сюда ген.-атъютант князь Трубецкой. Я тотчас поехал к РаSTOPчину, узнал, что государь будет к вечеру в Кремлевской дворец, но что наши армии ничево не потеряли и баталии не было; не менее все встревожено в городе. Вечер весь до 9 час. множество нас и народу дожидались государя, но, узнав, что он будет только на другой день, все разъехались, он приехал в ночь, а 12-го поутру я поехал во дворец. Государь был у молебну в Соборе. Народу стечение ужасное, кричали «Ура» и теснились смотреть ево. Приехали с ним Аракчеев, Балашов, Шишков, Комаровской и Волконской, князь Петр. Я с ним говорил наедине; начальные меры, кажется, были неудобны, растянуты войски и далеко ретировались, неприятель пробрался к Орше и приблизился к Смоленску, но с малою частию, и отступил, но силы ево превосходны и, кажется, явно намерен итти на Москву. Многие уже испугались, приехали из деревень, а из армии множество обозов воротились, порох даже из Смоленска привезли сюда. Жена, беспокоясь обо мне, приехала из Валуева и

⁴⁹⁷ 副官将官（генерал-атъютант）は、皇帝の副官を務める役職。

осталась со мною.

* ツァーリの来訪で「モスクワの雰囲気がからりと変わ」ったのは、『戦争と平和』に描かれているような、うわついた愛国熱の高まりのせいなどではなく、逆に、ナポレオンがまずまちがいなくモスクワにやって来ることが分かったからだ。そして、ツァーリと側近がモスクワの指導部と対応策を決めるために来訪したことも、人々は察していた。

7月27日（ユリウス暦15日）

ツァーリ臨席のもとで、モスクワの貴族と商人の集会が開かれる。その集会での、100人の農民のうち10人を兵隊に出すというとり決めにしたが、選抜がはじまった。

8月5日（7月24日）

この選抜で「農民たちが落ち込んでいるので、元気づけるように努めた」

8月14日（2日）

だが、兵隊にとられる農民の妻子たちは...。「百姓たちの妻子の号泣とうめき声は、恐ろしいものだった」

8月23（11日）

この日、18日（6日）のモレンスク陥落と大火、都市の壊滅を知る（*前にみたように、火を放ったのは、これまでおよそ徹底した焦土戦術をおこなってきた露軍自身である——佐藤）。

その翌日にドミトリーは、直ちにモスクワ退去の準備をはじめ、荷車、馬20頭を買う。以下、当該部分を訳出。

11日に私はモレンスクが占領されたことを知り、直ちにモスクワへポロシコフを派遣した。今やその彼とともに、状況をくわしく描き出すことができる。たしかにわが軍は攻撃され、モレンスクは焼かれ、失われた。わが軍の本営は、ドロゴブージ（*現モレンスク州に位置する——佐藤）にあり、すでにバルクライは、プスコフ、モレンスク、カルーガの諸県の住民に死守せよとの布告を出した。仏軍とロシアの不心得者どもがこれらの諸県に侵入したからだ。

11-го узнал я, что Смоленск взят, тотчас послал в Москву Порошкова, с ним уже подробно **описывают** (*おそらく、описываю のまちがいだろう——佐藤), что точно наши были атакованы и Смоленск сожгли и потеряли. Главная наша квартира в Дорогобуже, и уже Барклай издал прокламацию жителям губерний Псковской, Смоленской и Калужской защищаться грудью, что мародеры французы и наши злонамеренные ворвались в сии

губернии.

*バルクライの布告は、ユリウス暦で7月20日過ぎに出されている。要するに、広く農民たちにパルチザン戦を呼びかけたものだ。すでに述べたように、7月21日（グレゴリオ暦8月2日）に、バルクライはヴィンツェンゲローデに、敵の補給路を脅かすべく1300人の部隊を与え、この戦役初のパルチザン部隊を創設している

8月31日（ユリウス暦8月19日）

「モスクワ住民はみな、すべての家屋が焼かれることを恐れ、多数が退去しつつある」（*まだ、ボロジノの会戦の1週間も前のことだ——佐藤）。この日の記述を以下に訳出する。

19日に、希望者は武器を買えるという布告が出た。わが軍はもうこちらへ向って、ヴァージマ方向に撤退している。クトゥーゾフはすでに到着し、指揮権を引き継いだ。だけれども、バルクライを非難し、絶望している。<...> モスクワからは多くの者が逃げ出している。皆、すべての家屋が焼かれるという恐怖に駆られている。皆が唯一の希望を託しているのは、クトゥーゾフの指揮と軍の勇敢さだ。当地に陛下が来訪されると人々は期待している。そうなれば、私は自分の身の上についての決定を知ることできる（*つまり軍への復帰を許されるかどうか——佐藤）。わが家で働いていた職人は全員去ってしまった（*ドミトリーの家を建てていた職人のこと——佐藤）。今はうちの者たちだけが橋を造り、窓枠と外の扉をはめている。

19-го было объявлено, чтобы желающие покупали оружие, а наши войска отступили уже по сю сторону Вязмы. Кутузов уже приехал и принял команду. Все винят Баркляя и отчаяваются. Бывал я у Маркова, он взял к себе князя Сергия Александровича Волконского. Из Москвы множество выезжают и все в страхе, что все дома будут жечь. Единую надежду все полагают на распоряжения Кутузова и храбрость войск. Ожидают сюда государя, и я тогда о себе узнаю решение. У меня в доме все мастеровые ушли, а свои работают мост и вставляют рамы и наружные двери.

*スモレンスクが陥落したということは、もうモスクワまでナポレオンは止められず、この街も焼かれるにちがいない、という受けとりかたが一般的だったようで、じっさい、それは正しかった。藁をもつかむ思いで、クトゥーゾフと軍に希望を託したわけだが、すでに多数が逃げ出していたところをみれば、期待はあまり大きくなかった（これも正しかった）。ドミトリーの自宅の普請は、途中で放り出すわけにもいかず、ほとんど無意味だと思いながらもつづけたのだろうが、これが後で役に立つことになる。

9月1日（8月20日）

「カメンスキーたちが我々のところに人を寄こして、外交文書を搬出するよう命じられた、と伝えてきた」

*もはや事態は明々白々だ。しかし、仏軍侵攻にともない農民の反乱が起きるのではないか、ナポレオンが農奴を解放するのではないか、といった危惧は、すくなくともこの時点では出てきていない。カメンスキーとは、古文献学者、歴史学者で、モスクワ外交文書館館長であったニコライ・カメンスキー（Николай Николаевич Бантыш-Каменский, 1737-1814）⁴⁹⁸。いろんなところにアンテナが、双方向で張りめぐらされていたわけだ。

9月3日（8月22日）

この日までには、国と市の資産の多くが運び出される（武器、資金、財宝、書類...）。下に当該箇所を訳出する。

22日に私はロストプチン伯爵を訪れ、ヴェリョフキンの提案について話した⁴⁹⁹。これに対して彼は、もう手遅れだと言ったが、それでも、手紙とともに一件書類をすべて送るよう命じ、この件について報告すると言った。私は、明日全員で出発できるように、荷車を用意し、荷物を梱包するよう指図した。概して人々は、軍についてたいへん不安がっている。国の財宝が運び出された——クレムリンの武器庫、グラノヴィータヤ宮殿、銀行、外務省の文書等々だ。大勢が避難しつつある。政府は、人々をなだめつつ、気球が完成したと発表した。これは50人以下を乗せて飛行し、空から敵を攻撃できるという。小さい気球はすでに実験済みとか。

22-го был я у графа Растропчина и говорил с ним о предложении Вережкина, на сие сказал он мне, что поздно, однако же велел при письме прислать по сему все бумаги, что он по ним доложит. Велел я изготовить обоз и укладывать, дабы завтра отправляться всем. Публика вообще очень беспокойна на счет армии. Отправлены казенные сокровища, Оружейная и Грановитая палаты, банки, архив иностр. дел, и множество выезжают. Правительство, успокаивая народ, объявило, что сделан шар, которой полетит, на нем до 50-ти человек людей, и с него будут поражать неприятеля, а малым шаром делали уже и пробу.

*この人は、モスクワ総督のロストプチンと親しかったようで、度々会っている。日記には書いてないが、いろんなことを突っ込んで尋ねたのではないか？ おそらく、彼との会話で、駄目押しの感触を得て、避難を決断したにちがいない。翌日には、家族全員を立てせて

⁴⁹⁸ А. Г. ТартаковскийとВ.Н.Сажинによる、本書『1812年…軍事日記 «1812 год... Военные дневники»』への原注。以下、たんに原注と記す。

⁴⁹⁹ ミハイル・ヴェリョフキン（Михаил Михайлович Вережкин）は陸軍少将で、当時カフカスに勤務しており（原注）、ドミトリーは前日、彼から手紙を受けとっていた。そのなかでヴェリョフキンは、カフカスで騎兵を編成することを提案していた。

いるから、相当に切羽つまった感じをもったはずだ。市内は、騒然たる雰囲気だったろう。ボロジノの会戦の4日前のことだ。

9月4日(8月23日)

ウグリッチ、イロヴナに家族全員を出発させ、ドミトリー自身は軍に復帰するつもりだったので、残る(*Иловнаは、ヤロスラヴリ県に位置し、彼の妻の実家、ムーシン=プーシキン家の屋敷があった——佐藤)。⁵⁰⁰

*当時、ドミトリーの妻は出産をひかえていた。にもかかわらず、馬車での長旅を決断せざるをえなくなった、ということだ。

*この時期の彼の日記を通してみても、くどいようだが、スモレンスク陥落と炎上がつたわるや、住民の大半が、まさに雪崩を打ったように逃げ出しはじめたのがわかる。まだ、9月7日(8月26日)のボロジノの会戦のだいぶ前だ。ナポレオンは、もうモスクワまで止まりそうもなく、お上(露軍)は、どんな都市でも焼く。スモレンスクのような「聖都」でさえ焼く。モスクワの運命も定まれば、というわけだ。

9月8日(8月27日)

ドミトリーは、ボロジノの会戦の翌日には、その模様をかなりの的確に知る。以下にその部分を訳出する。

27日にわれわれは、26日にわが軍の中央と左翼が攻撃されたことを知った。激戦で、わが軍の砲台はそのほとんどが占領された。だが、甚大な損害を被りながらも奪回した。敵の戦死者は4万以下、わが軍は2万以下と考えられている。負傷者は多数にのぼり、すべてここに運ばれつつある。わが軍の将官も多くが戦死または負傷した。夕方、クジマ・グリゴリエフが馬とともに、イロヴナから伯爵によって送られてきた。

27-го узнали мы, что 26-го наша армия была атакована в центре и на левом фланге. Жестокое было дело, батареи наши все были взяты почти, но отбиты с потерей ужасною. Неприятеля, полагают, убито до 40 т., у нас убито до 20 т., а раненых множество, коих всех сюда привозят. Генералов наших много убито и ранено. Багратион сюда привезен, Воронцов, и многие даже обозы присылают из армии. Вечеру Кузма Григорьев с лошадьми прислан сюда от графа из Иловны.

*「中央と左翼が攻撃された」という表現は、まったくその通りだ。本文のボロジノの会

⁵⁰⁰ この屋敷は1930年代まで残っていたが、30年代後半に、巨大な人造湖、ルイビンスク貯水池(4580 km²)の出現にともない、水底に沈んだ。

戦のところでみたように、右翼は守りが堅く、激戦になったのはラエーフスキー堡壘を要とした中央と、バグラチオンが指揮した左翼で、突角堡（フレッシュ）がここの要だった。また露軍は、相手の攻撃に場当たりの対応するという受身な戦い方だったので、「攻撃された」という表現も正しい。しかし、堡壘は奪回できなかった。

仏軍の戦死者 4 万は、実際よりかなり多めだが（ドミトリーが鵜呑みにしたかどうか）、露軍の戦死者 2 万というのはそれほどかけ離れていない。双方の名簿によると、戦死と負傷を合わせて、仏軍の損失は最低で 28086 人、露軍は最低 45600 人であることはすでにみた。また、露軍の負傷者が、モジャイスクとモスクワで合計およそ 4 万人、置き去りにされたことも…。

9月13日（1日）

ドミトリーは朝 5 時にクトゥーフにいきなり面会に行き、会っている。バルクライとも面会した。

クトゥーフは、「敵のほうが多く、広範囲にわたって布陣することができないので、ポクロンナヤの丘に後退している、とあけすけに言った」

*これはほとんどモスクワ放棄を示唆しているだろう。優勢な敵を相手に（しかも近衛を温存している）、大都市モスクワの前面で広く展開して戦えないのは分かりきった話だから、後退している。その後は...というわけだ。現在、軍に在籍していないドミトリーにさえ、こういうことをあっさり打ち明けるとは！ モスクワ撤退はすでに公然の秘密、いや既成事実だったことが、ここでも裏づけられよう。

同9月13日（1日）

「市内は酔っ払いの兵隊だらけで、しらふの者も居酒屋をぶっこわしている」

*これは、夕刻にフィリの軍議がおこなわれた、その日だ。モスクワ放棄を決めた会議の前から、こういう状況だったわけである。将兵の落胆、やけくそぶりが推察される。こんな状態の軍を指揮して、道路や路地が網の目のように縦横に走っている大都市を撤退していかねばならない。指揮官の苦勞のほどがわかる。なんといってもたいへんな危機だったのだ。

バルクライはドミトリーに、「(ボロジノの会戦の結果) 士官の数ががた減りした」と言った。フィリの軍議についても、ドミトリーは、その結果をすぐに知っている（彼の聞いたところによれば、会議で最初に撤退を主張したのは、やはりバルクライであった）。

*いくら中将でも、このときは退役しているのに、こう筒抜けとは驚く。上のクトゥーフ

フとの会話とあわせて考えると、軍の機密保持はけっこうゆるかったという印象だ。以上、9月13日（1日）は重要な日だから、その前日もふくめて、全文を訳出しておこう。

31日にわれわれは、すでにクトゥーゾフが10露里のところまで来ていることを知った。晩に私がそこへ赴くと、関所にわが軍の司令部があり、野原一面に兵士が散って、火が焚かれていた。私が司令部に行き着いたのは夜10時で、モジャイスク街道をわずか10露里行ったところだった。その夜は馬車の中で明かし、朝5時にクトゥーゾフと会った（*ここから9月1日となる——佐藤）。彼は私に、軍に勤めてもらおうと言い、私を軍に採用するよう陛下に手紙を書くことと約束してくれた。ロバノフ公爵も私のことを陛下に話してくれたという。私はクトゥーゾフと、軍の状況について話し合ってから、バルクライ・ド・トーリのところにも行った。彼とも軍のことを話した。クトゥーゾフは私にあけすけにこう言った。敵のほうが多く、広範囲にわたって布陣することができないので、全軍がポクロンナヤの丘へ、フィリ村の方向に後退している、と。私がそこから戻る際には、すでにすべての連隊が、砲兵隊とともに進んでいた。私は、ソロボフの弟（брат Соловова）に会えたが、彼はもう出発するところだった。父は、プロゾロフスカヤ公爵夫人のイヴァノフスコエ村（Ивановское Прозоровской княгини）へ立った。父あての手紙はボゴロツク（Богороцк）に送ることになる。市内は酔っ払いの兵隊だらけで、しらふの者も居酒屋をぶっこわしている。ロストプチンは檄文で呼びかけたが、だれも、モスクワを守るために、ポクロンナヤの丘に来る者はいなかった。士官がほとんどいなくなった、とバルクライも私に言った（*ボロジノの会戦の結果、激減したことを言っている——佐藤）。軍の行軍は無秩序をきわめたもので、私はそれを9月1日の朝、クトゥーゾフのもとを辞したときに、目の当たりにした。ニコライ・イヴァーノヴィチ・ラヴロフ（*陸軍中将——原注）が私に燕麦（*馬の飼料——佐藤）を送ってくれと言ってきたので、葡萄酒も送ってやった。夜、私はフィリにいた軍に赴き、クトゥーゾフ公が数人の将官を会議に招集したことを知った。ポクロンナヤの丘では戦えないのに、敵が、モスクワを迂回すべく部隊を派遣したので、どうすべきかを話し合うためだ。バルクライが最初に、全軍でモスクワを抜けて、リャザン街道を撤退すべきだと提案した。オステルマンも、意外なことに同じ意見で、ベニグセンら多くの者はこれに反対した。私は、このモスクワ放棄の決定について、ベニグセンから聞いた。彼のところには、ヴェルテンベルク公とオルデンブルク公がいた。彼らはみな、だれにも予告せずにモスクワ放棄をこのように急いで決めたことに、驚愕していた。武器庫には4万丁以上の小銃があり、民衆にも配っていたが、これを仏軍が入手することはうたがない。わが全軍は、深夜にモスクワを通過し、リャザン街道を撤退するよう命じられ、これが不幸千万にも、国民への約束に背き、モスクワ近くで一戦も交えることなく、履行されたのである。かくして2日には、街は警察不在となり、略奪者で溢れ、だれもが盗みは

じめ、ありとあらゆる居酒屋、商店を破壊し、泥酔し、人々は自分の身を守るのに必死で、いたるところで同胞の同胞に対する略奪がはじまった。

31-го узнали мы, что уже Кутузов в 10-ти верстах. Вечеру я туда поехал, нашел, что на заставе армейская команда и везде по всему полю рассеяны солдаты и зажжены огни. Я доехал в 10 часов вечера до Главной квартиры, всего 10 верст по Можайской дороге, переночевал в коляске, а поутру в 5 часов видел Кутузова. Он сказал

Сентябрь

мне, что употребит меня и напишет государю принять меня в службу, ему обо мне и князь Лобанов говорил. Я, переговора с ним о делах армии, был у Барклая-де-Толия. С ним также говорил об армии. Кутузов откровенно сказал, что неприятель многочисленнее нас и что не могли держать пространную позицию и потому отступают все войска на Поклонную гору к Филям. Я, оттуда возвращаясь, уже все полками ехал и с артиллериею, брата Соловова еще застал, но был уже готов ехать, а батюшка уехал в Ивановское Прозоровской княгини, писать же к нему в Богороцк. В Москве столько шатающихся солдат, что и здоровые даже кабаки разбивают. Растопчин афишкою клич кликнул, но никто не бывал на Поклонную гору для защиты Москвы. В армии офицеров очень мало, о чем и Барклай мне говорил, и очень беспорядочно войска идут, что я мог заметить утром 1-го сентября, ехав от Кутузова. Лавров Ник. Ив. присылал ко мне за овсом, и вина ему я послал. Вечеру приехал я в армию на Фили, узнал, что князь Кутузов приглашал некоторых генералов на совещание, что делать, ибо на Поклонной горе драться нельзя, а неприятель послал в обход на Москву. Барклай предложил первой, чтобы отступить всей армии по Резанской дороге через Москву. Остерман неожиданно был того же мнения противу Бенигсена и многих. Я о сем решении оставить Москву узнал у Бенигсена, где находился принц Виртембергской и Олденбургской. Все они были поражены сею поспешностию оставить Москву, не предупредя никого. Даже в арсенале ружей более 40 т. раздавали народу, от коева без сумнения французы отберут. Армии всей велено в ночь проходить Москву и итти по Резанской дороге, что и исполнено к общему нещастию, не дав под Москвою ни единого сражения, что обещали жителям. Итак, 2-го город без полиции, наполнен мародерами, кои все начали грабить, разбили все кабаки и лавки, перепились пьяные, народ в отчаянии защищает себя, и повсюду начались грабительства от своих.

9月14日 (2日)

すさまじい略奪（ロシア人のロシア人に対する）、泥酔、混乱、無秩序…。いたるところで発砲している。ドミトリーも、軍の護衛のおかげで、やっとモスクワを脱出する。

*この時期はやはり、『戦争と平和』に描かれているような、愛国心に燃え一致団結した偉大なるロシア国民、というわけでは必ずしもなかったようだ。状況と雰囲気がよくわかり、具体的に描かれているので、全文訳出する。

こういう恐るべき動乱のなかを、2日朝、私はわが軍がほんとうに退却したのかどうか知るために出かけた。アルバートに近づくと、軍はもう通り過ぎたあとで、竜騎兵の部隊が、地下倉と商店の略奪を抑えようとしていた。私は指揮官から、2名の下士官と6名の竜騎兵を借り受け、サモチョーカ⁵⁰¹（Самотёка）の自宅に向った。途中いたところで略奪がおこなわれていたので、やめさせるように努め、多くの泥棒どもを追い払うことができた。それから荷造りを命じた。午後2時半に、あちこちで銃声が轟き、荒れ狂った民衆と落伍兵の人波のなかを、竜騎兵に護衛されてどうにか抜け出し、通り抜けることができた。もはや街のいたるところで発砲し、ありとあらゆるものを強奪していた。みんな泥酔していた。こういう惨憺たる状況のなかを、やっとのことで市内から関所へ抜け出すことができた。ここはもう、人々と荷物がごった返して道を塞いでいた。逃げられる者はみんな逃げようとしていたからだ。こんな混乱のさなか、敵の銃声が聞こえたので、やつらが市内に入ったことがわかり、われわれは辛くも人垣を押し分けて先へ進み、ようやく深夜に、わが軍の本営に着いた。リヤザン街道を15露里行った地点だ。ところで、私は時計を忘れたので、家を出るとすぐに竜騎兵を取りにやらせたのだが、彼はもう戻ってこなかった。捕虜になったのかもしれない。イラクリ・イワーノヴィチ・マルコフ伯爵のところに泊めてもらった。彼には前にも泊めて貰ったことがある。ここでやっとい休みできた。

В таком ужасном волнении 2-го числа поутру поехал я узнать, подлинно ли армии отступили. Подъехал к Арбату, нашел, что войски уже все прошли, а драгунская команда унимает разграбление погребов и лавок. Я взял у начальника 2-х ундер-офицеров и 6-ть драгун, с ними поехал домой на Самотеку. Едучи, нашел везде грабежи, кои старался прекращать, и успел выгнать многих мародеров, потом велел уложиться своим повозкам и 2 ½ часа пополудни, при стрельбе и стечении буйственного народа и отсталых солдат едва мог с прикрытием драгун выехать и проехать. Везде уже стреляли по улицам и грабили всех. Люди наши также перепились. В таком ужасном положении едва успел я выехать из городу за заставу. Тут уже кучами столпился народ и повозок тьма заставили всю дорогу, ибо все жители кто мог уезжал. В таком беспорядке, слыша выстрелы неприятеля и зная, что они взошли в город, мы едва продвигались, и только в глубокую ночь приехал я в Главную квартиру, 15-ть верст по Резанскому тракту. Я забыл часы и послал, вскоре выехав, драгуна, но он уже не воротился, может быть в полону. Остановился я жить с графом Ираклием Иван.

⁵⁰¹ サモチョーカ（Самотёка）は地名で、現在のサドーヴォエ環状道路とスヴォーロフ広場の間にあり、地下鉄でいうと、ドストエフスカヤ駅とツヴェトノイ・ブリヴァール駅の中間に位置する。

9月16日（4日）

ドミトリーは軍に追いつく。軍はクラコヴォ村（Кулаково）にあった。多数の大砲、銃、その他の武器弾薬をモスクワに置いてきた、と書いている。また、仏軍が市内に入るや火事が始まり、すさまじい火柱が絶えず眼前に見えていた、と言う（*これは、放火犯が仏軍の入城をてぐすね引いて待っていたということだ——佐藤）。

また、目撃者（市から脱出してきた人たち）の話として、すさまじい略奪の状況が語られる——ロシア人自身の手によるそれをふくめて。地下倉、商店、民家はもちろん、教会、アイコンも容赦されなかった。人々は酔っ払い、ありとあらゆる婦女暴行が行われた。

コサックも、ドミトリーの聞いたところでは、軍の周辺で略奪、殺人をほしいままにしており、そのため、コサック軍団司令官のアタマン、マトヴェイ・プラートフは、指揮権をとりあげられるにいたり、仏軍への内通さえ疑われているという。軍の全般的な規律と士気の低下は目を覆うばかりだ。

*軍の内部崩壊の危機だ。もともとコサックにくずぶっている政権への反感もあり、コサックは、要するに、風向き次第でどっちにも転がる野盗集団といった面が露わになったようだ。この辺も、『戦争と平和』のラヴルーシカに代表される愛国的コサック神話と矛盾する。この日も、以下に全文訳出する。

4日にわが軍は、ボロフスキー渡船場（Боровский перевоз）に舟橋をかけて、さらに退却した。渡船場から4露里のクラコヴォ村（дер. Кулаково）でわが軍は停止し、われわれはそこで宿営した。正午ごろ、われわれの宿営地に退却してきたわが前衛部隊と、仏軍とのあいだで戦闘がはじまった。ここで、補給物資を満載していた複数の舳を焼き捨てねばならなくなった。舳は座礁し、大量の弾薬は水中に沈み、物資は焼いた。ここでの損失は、当然、1000万ルーブルを超えた。全軍のために麻布、ラシャなどが用意されていたからだ。モスクワの損害ははかり知れない。多くの大砲も小銃もサーベルもまろごと武器庫に置いてきたのだから。ロストプチンでさえ多くを運び出すいとまはなく、自分の荷車もなく、ほとんど着の身着のまま退去した。軍は多くの輜重を失った。退却とともにモスクワで出火した。炎々と燃え盛る火柱は、われわれのところからも見えた。この恐るべき恥辱は絶えずわれわれの目の前に突きつけられていたが、夜になると、見るも恐ろしいありさまとなった。モスクワから逃れてきた人たちは語った。いたるところで火災が発生し、家々が略奪され、地下倉が破られ、人々は泥酔し、教会も聖像も容赦されず、婦女子に対しては文字通りありとあらゆる暴行がくわえられており、力づく

で人を拉致して、こき使ったり、殺したりしている、と。なにより嘆かわしいのは、ロシア人とコサックたちが、軍の周辺で略奪したり殺したりしている、という話で、そのため、プラートフは、指揮権をとりあげられ、コサック軍は、敵への内通を疑われているということだ。わが軍は、どの部隊も無秩序をきわめており、あらゆる面で規律がゆるんでいるだけでなく、モスクワ喪失とともに、士気も目だって低下している。にもかかわらず、ベニグセンは、戦略的な移動の計画を作成している。

4-го армия пошла далее отступать, устроив пантоны на Боровском перевозе, откуда верстах в 4-х остановилась в дер. Кулакове, и мы тут же стояли в квартарах. Около полуден началось сражение с авангардом нашим, которой отступил туда, где мы ночевали. Тут принуждены были сжечь барки, кои были нагружены комиссариатскими вещами, они замелели, множество пороха и свинцу потопили, а вещи сожгли. Тут потеряно, конечно, более 10-ти миллионов, потому что на всю армию холст, сукно и прочее было заготовлено. Потеря Москвы неищтна. Пушек много осталось, ружей, сабель и всего в арсенале. Даже Растопчин не успел вывести многое и обозу своего не имеет, ниже рубашки своей. Многие армейские лишились обозов своих. С самой ретирады нашей начался пожар в Москве, и пылающие колонны огненные даже видны от нас. Ужасное сие позорище ежечасно перед нашими глазами, а паче страшно видеть ночью. Выходящие из Москвы говорят, что повсюду пожары, грабят дома, ломают погреба, пьют, не щадят церквей и образов, словом, всевозможные делаются насилия с женщинами, забирают силою людей на службу и убивают. Горестнее всего слышать, что свои мародеры и казаки вокруг армии грабят и убивают людей — у Платова отнята вся команда, и даже подозревают и войско их в сношениях с неприятелем. Армия крайне беспорядочна во всех частях, и не токмо ослаблено повиновение во всех, но даже и дух храбрости приметно ослаб с потерей Москвы. Не менее Бенигсен делает планы стратегических движений.

* 「ベニグセンは、戦略的な移動の計画を作成している」とは、先に本文でみたエルモローフの回想⁵⁰²とあわせて考えると、モスクワ川の渡河後にカルーガ街道に向けて直ちに転進することだろう。翌 17 日（5 日）には、この大作戦がもののみごとに断行される。

9月17日（5日）

軍は前衛を残して、トゥーラ街道（*カルーガ街道——佐藤）へ向けて、舗装していない田舎道と森を 50 露里移動する！

5 日に私は、2 列縦隊になった軍とともに、前衛部隊をあとに残して、トゥーラ街道を

⁵⁰² 「これは、ベニグセン将軍の考えであり、彼はできるだけ早くカルーガ街道に移動することを主張した。この大胆かつ断固たる転進は、敵が近くにいたので、安全ではなかったが、支障なく行われ、わが軍は、この最も暗澹たる時期、ひどい田舎道を通してポドリスクに達した」
Ермолов А.П. Там же. С.207-208.

ポドリスクへ向けて出発した。舗装していない田舎道、そしてもちろん森のなかも通って、50 露里近く移動した。第 2 列は非常に遅れたので、もし敵がその気になれば、あるいは知っていたとしたら、わが軍を分断することができただろう。われわれは、ようやく深夜にポドリスクに着き、モスクワから 34 露里のクトゥーゾヴォ村（Кутузово）に布陣、夜営した。総司令官には、敵の一部を分断し、そのポーランド方面との連絡を絶ち、チチャゴフ軍、トルマーソフ軍と合流する意図があった。

5-го выступили мы с армиею двумя колоннами за Подольск на Тульскую дорогу, оставя авангард. Переход делали проселками и лесами, конечно, до 50-ти верст. Вторая колонна отстала далеко, так, что, естли бы неприятель захотел или знал, мог отрезать армию. Мы едва в ночь прибыли к Подольску на кварталы в деревню Кутузове от Москвы 34 версты, где войска и заняли позицию. Намерение главнокомандующего отрезать часть неприятеля и все его сношения с Польшею и соединиться с Чичаговым и Тормасовым.

*やはり、高度に意識的で、周到に準備され、すさまじい集中力で決行された作戦だったことが、ドミトリーの日記でも裏付けられよう。そして、この大作戦の立案の中心になったのは、もしかすると、じっさい参謀総長ベニグセンだったかもしれない。ドミトリーのほか、前に見たように、エルモーロフもそうだと言っているのだから。とすれば、彼のこの点での功績はまったく知られていないことになる…。

9月18日（6日）

ドミトリーは、軍復帰の希望をクトゥーゾフに申し出るとともに、トゥーラの近郊のヤースナヤ・ポリャーナに叔父ニコライ・ヴォルコンスキー（トルストイの母方の祖父）の安否をたずねるべく、トゥーラへ向う。

私はクトゥーゾフ公爵と話すことにし、彼のもとへ出向いて、トゥーラ県のヤースナヤ・ポリャーナ村の叔父を訪ねるつもりだと言った。また、もし私が軍で役に立てるのであれば、私のことを陛下にお話し願いたいと述べた。軍に採用される場合は、トゥーラに連絡するようマルコフ伯爵に頼んだ。総司令官は、私に一軍団を任せたいので、私のことを手紙に書くと言ってくれた。また私に、フックスと話すようにと言った。彼とはいっしょにイタリア戦役に従軍した旧知の仲だ。

Я решился объясниться с князем Кутузовым, пришел к нему и объявил, что я намерен ехать к дяде в тульскую деревню Ясную Поляну, а что естли я могу быть полезен на службу, то чтоб обо мне представили государю. Естли я буду принят в службу, то чтоб за мной прислали в Тулу, о чем просил я г-фа Маркова. Главнокомандующий сказал, что хочет мне дать корпус и напишет обо мне, велел самому мне переговорить с Фуксом, которой давно мне знаком, служа вместе в Италии.

9月22日(10日)

ドミトリーは、ヤースナヤ・ポリャーナに叔父ニコライを訪ねるが、すでに2日前にタンボフへ避難したあとだった。下士官にニコライのことを尋ねると、粗暴な態度で、民衆がいかに動揺しているかを如実に知る。

10日朝、アレクサンドル・A・プーシキンに、カフカスからの道すがらヤースナヤ・ポリャーナの私のところへ寄るようにと置手紙をして、私はひとり、ドロシキ(*屋根なしの一、二人乗り軽四輪馬車——佐藤)に乗って、叔父のところへ出かけた。途中居酒屋に寄って、叔父はヤースナヤ・ポリャーナにいるか、と尋ねようすると、酔っ払った下士官がおり、その乱暴な受け答えで、いかに民衆が騒乱の瀬戸際にあるかを証明してくれた。彼は、もうみんな敵から逃げ出してしまったと思っていたのだ。村に着くと私は、叔父が娘を連れて、二日前にタンボフ県のゴリーツィナ伯爵夫人の持ち村に向けて立ったことを知った。民衆が秩序を失いはじめ、動揺しだしたため、叔父は立たざるを得なくなったのだ。

10-го поутру оставил я письмо к Александре А. Пушкину, чтоб в проезд с Кавказу заехал ко мне в Ясную Поляну, а я поехал один в дрожках к дяде. Заехал на дороге в кабаке узнать, тут ли дядя, нашел пьяного ундер-офицера, которой доказал мне грубостию, сколь народ готов уже к волнению, полагая, что все уходят от неприятеля. Приехав в деревню, узнал я, что дядя и с дочерью поехали тому два дни в Тамбовскую деревню княгини Голицыной, начавшиеся беспорядки и волнение в народе его понудили.

*この辺、『戦争と平和』で、マリア・ボルコンスカヤが自分の領地ボグチャーロヴォから避難するようす、そして、アンドレイが空き家になった「禿山」(モデルはヤースナヤ・ポリャーナ)を訪れる場面をほうふつとさせる。ドミトリーの日記の解説者タルタコフスキーも指摘しているとおり、仏軍来襲よりも、「民衆の動揺」で避難せざるを得なくなった点が注目される。トゥーラは、モスクワから170キロも離れており、ロシア最大の兵器工場がある一大戦略拠点だ。しかも、露軍は、ここから比較的近い旧カルーガ街道にいる。それでもこういう状況とは!... この時期の危機の深刻さが察せられる。

さて、ここで一つ補説を挟んでおく。

補説：ヤースナヤ・ポリャーナと「禿山」

——なぜモレンスク近くにスライドさせたか——

『戦争と平和』のボルコンスキー家の領地ルイスイエ・ゴールイ(禿山)は、トルストイ

の生地ヤースナヤ・ポリャーナがモデルだが、スモレンスク街道沿いにある。スモレンスク市の東方 60 露里の地点だ (3 巻 2 編 4 章をみよ)。なぜ作者は、トゥーラ県のヤースナヤ・ポリャーナを、ナポレオンの侵攻路、スモレンスク街道に「スライド」させたのか。

作者にしてみると、ぜひヤースナヤ・ポリャーナを、いわば、ロシアという大きな「家族」の一つの縮図、小宇宙として作品に登場させたい。しかし、トゥーラは戦場にならなかったため、位置関係がそのままだと、主要な事件とのかかわりが薄くなってしまう。そこで、大激戦になったスモレンスクの近くにもってきた、ということではないか。

ルイスイエ・ゴールイがヤースナヤ・ポリャーナをベースにしていることはあきらかで (正面の広い並木道「プレシペクト прешпект」、池など)、これについては、ニコライ・グーセフの指摘もある (グーセフ II、700 頁)。

やはりボルコンスキー家の領地で、1812 年に農民が反乱を起こしかかるボグチャーロヴォの位置関係については、3 巻 2 編 13 章に、8 月 17 日 (ユリウス暦) の時点で露軍と仏軍のあいだに挟まれていた、とある。

8 月 17 日といえば、ヴァージマ (Вязьма) より少しモスクワ寄りのツァリョーヴォ・ザイミシチェ (Царево-Займище) で、クトゥーゾフが総司令官に着任した日だ。だから、ボグチャーロヴォもだいたいこの辺り、つまり、大ざっぱに言って、スモレンスクとモスクワの中間にあるとみていいのではないだろうか。

ちなみに、作者が、マリア・ボルコンスカヤとニコライ・ロストフの出会いを、このロシア国民にとって記念すべき 8 月 17 日に合わせているのはおもしろい。

なお、ロストフ家の領地オトラードノエにかんしては、2 巻 3 編 2 章の冒頭に、こういう記述がある。アンドレイ公爵は、リャザンにある領地の後見の件で、郡の貴族団長、イリヤ・ロストフ伯爵に会わねばならなかった。それでオトラードノエに彼を訪ねた、というのだ。ここから、オトラードノエは、リャザン県にあったと考えられる。

なぜ、リャザンかというと、1812 年にロシア軍がモスクワ放棄後リャザン街道を撤退したのとの関係があるかもしれない。当初トルストイには、ロストフ家の運命を、この歴史的な大事件と絡める構想があったのでは、と筆者は推測している。もっとも最終稿では、モスクワにいたロストフ家は、避難路を北にとり、ヤロスラーヴリに逃れることになるが。

さて、ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記にもどろう。

9 月 25 日 (13 日)

ドミトリーは、トゥーラで戦況について聞く。

トゥーラで次のことを知った。わが軍はカルーガ街道のクラスノエに布陣している。敵は、ほぼ全軍を引き連れて、モスクワを出て、露軍に会戦をいどむ準備をしており、

一方、わが軍の騎兵斥候も、スモレンスク街道で、パリから来た、またパリへ向う急使を捕えた、と。だが、トゥーラでは、軍の現在の状況はほとんどわからない。

*時たま急使を捕えていたのは事実だが、仏全軍がモスクワを出て、決戦を挑まんと準備中というのはガセネタだ。これはドミトリーも鵜呑みにしていない。

最近モスクワから逃げてきた薬剤師の助手が、市のようすを話してくれる。

「放火しているのはロシア人のほうが多い」

「いたるところで放火している。ナポレオンは、腹を立てて、消火を命じるのをやめた」

「負傷者と病人は、運び出された者もいるが、多くは焼け死んだ」

*だいたいこういう内容だが、生々しい聞き書きなので、当該箇所をまとめて引用する。

私のところに、最近フランス軍占領下のモスクワから逃げだしたという、薬剤師の助手を連れてきてくれた。彼は、フランス人たちの略奪ぶりについて話してくれた。放火しているのはロシア人のほうが多いという。2日の朝、牢から囚人を解き放したときには、こんなことまで起った。ロシア人たちは、ヴェレンチャーギンを捕まえ（*ドミトリーの日記の末尾に付した補説を参照——佐藤）、足を縛って頭を下にして、舗装道路上をトヴェルスカヤ通りまで引きずり、総督（*ロストプチン——佐藤）の家の真前で虐殺した。それから泥酔と略奪がはじまった。ナポレオンは、3つの家に入ったが、どこでも放火に遭った。腹を立てたナポレオンは、消火を命じるのを止めてしまった。それから彼は、近衛部隊をともなってクレムリンに入った。フランス軍は、市内中に散らばったので、だれも表に出ることができなくなってしまった。何でもかんでも、シャツまでも略奪されるからだ。フランス人たちは住民に、家を壊させて、物を運び出させ、市外の仏軍の陣営まで持っていかせた。多くの人が殺され、あちこちの通りに横たわっていた。しかしこれは、ロシア人が負傷者や病人を殺したのであり、生きて運び出された者もいるという話もある。だが、大勢が焼け死んだ。火事はいたるところで起こり、石の壁さえ焼けた。この薬剤師助手の言うところでは、隠れるところはどこにもなく、森を抜けて、ツァリーツィノからトゥーラへ逃げてきたのだという。状況からみて、私の家も焼け、略奪されつくしたことだろう。ガヴリールは生きていますかどうか分からない。神の怒りは、われわれの罪のために、われわれすべてに下ったのだ。助手によると、教会もすべて略奪され、聖像は引っぺがされて、悪人どもはそれを、鍋で煮炊きするときに蓋に使っているという。

Приводили ко мне аптекарского ученика гезеля, которой ушел недавно из Москвы от французов. Рассказывает ужасы о их грабежах, зажигают же более свои, даже поутру 2-го

числа, когда отворили тюрьмы, наш народ, взяв Верещагина, привезали за ноги и так головою по мостовой влчили до Тверской и противу дому главнокомандующего убили тирански. Потом и пошло пьянство и грабежи. Наполеон в три дома въезжал, но всегда зажигали. Тогда он рассердился и не велел тушить. Потом он жил в Кремле с гвардиєю ево. Армия, взойдя, разсеялась по городу, и никто не мог появиться на улице, чтобы не ограбили до рубашки, и заставляли наших ломать строения и вытаскивать вещи и переносить к ним в лагерь за город. Множество побито и по улицам лежат, но и их убивал народ — раненых и больных, иных, говорят, выслали, а многие сгорели. Пожары везде, даже каменные стены разгарались ужасно. Сей гезель сказывал, что нигде укрыться не мог и едва ушел лесом на Царицыно и в Тулу. Судя по сему, мой дом сгорел и разграблен, а о Гавриле не знаю, жив ли он. Гнев божий на всех нас, за грехи наши. Церкви, сказывал, все ограблены, образа вынуты, и ими котлы накрывают злодеи.

9月29日(17日)

「17日に、私は、こういったことすべてを、ニコライ・セルゲーエヴィチ（*トルストイの祖父——佐藤）に書き送った」

*この手紙は、トルストイ家に保存されていなかったのだろうか？ 保存されていたとしたら、トルストイは当然読んだろうし、読まずとも、こうした話は、近親者を通じて伝わっていたのではあるまいか。ほかにもこの手の書簡は同家になかったのだろうか。現在、それらはどこにいったのだろうか。案外、国立トルストイ博物館に未公開で保管されているかもしれない。

ドミトリーはこの日、今後の予定を決める。「もし、何もなければ、20日（グレゴリオ暦10月2日）まで、ここにとどまり、軍に復帰を許されるという知らせがなければ、リャザン、ウラジーミル、さらにイロヴナの妻のところへ行く」

同日？

仏軍がコロムナに達したという途方もない噂が流れる。

私は常にトゥーラに使いを送り、軍からのニュース、知らせを問い合わせていたが、何も書いて寄こさず（*ということは、このころドミトリーは、トゥーラではなく、ヤースナヤ・ポリャーナにいたわけだ。トゥーラにはロシア最大の兵器工場があるから、軍との連絡があるはずだと思っていたのだろう——佐藤）、フランス軍がコロムナに入ったと聞かされる。これはありえない。なぜなら、敵の全軍は、カルーガ街道のわが軍と対峙しているからだ。しかし、私は20日（グレゴリオ暦10月2日）に、ヤースナヤ・ポリャーナ*から、ニコライ・アレクサンドロヴィチ・エンガルイチェフ公爵とと

もに、トゥーラへ出かけ、ワシーリー・イヴァーノヴィチ・ポフヴォスネフ（*トゥーラ県貴族団長——原注）のところに泊った（*虚報だと思いながらも、真偽をたしかめに出かけたのだろう。この日に立つ予定でもあったし——佐藤）。

Я всегда посылал в Тулу узнавать о известиях из армии, но ничево не писали, а уведомляют, будто французы взошли в Коломну, что невероятно, потому что все силы неприятельские обращены к нашей армии на Калужскую дорогу, но 20-го я поехал из Ясной Поляны с князем Ник. Александр. Енгальчевым в Тулу, где и остановились у Василья Ивановича Похвоснева.

*このころは、この世の終わりという気分の人が多かっただろう。軍はすでに旧カルーガ街道にあったが、そのことを知っていた人でも、形成が静かに逆転しつつあったことを見抜いていた者はわずかだったにちがいない。

なお、ドミトリーは、文中の「ヤースナヤ・ポリャーナ」の語に注（*）をつけている（下線を付した部分）。それはトルストイの母と関係があり、こういう内容だ。「私は、マリア・ニコラエヴナ公爵令嬢の手になる、彼女の父とその性格についての興味ぶかい描写をみつけた」

*この「興味ぶかい描写」は残っていない（ことになっている）。日記の解説者タルタコフスキーが言うように（130頁）、ニコライの一筋縄でいかない性格と、父娘の微妙な関係を物語ったものだったかもしれない。ひょっとしてトルストイは、このスケッチを利用しなかったらうか？

10月3日（9月21日）

この日は、ドミトリーの名の日だ。ポフヴォスネフ（*トゥーラ県貴族団長——原注）のところで朝食をしたため、リャザンに出発する。

10月5日（9月23日）

リャザン着。ドミトリー・ドフトゥロフの妻マリア・ペトローヴナのところで夕食をご馳走になる。

*ドフトゥロフ（Дми́трий Серге́евич Дохтуро́в）は、スモレンスクの会戦では、城塞のなかで戦いつづけて、ようやく深夜に燃える同市から退却し、ボロジノでは、バグラチオン負傷のあと、全左翼を指揮して踏みとどまった、あの勇将だ。

10月8日（9月26日）

リャザンを立ち、カシモフ（Касимов）に着く。軍の病院は、混乱の極で、あつかいは非人間的だった。医薬品もない。民衆は茫然自失し、田舎の貴族は見るも哀れな状態だ。

10月15日（3日）

ぶじウラジーミルに着くと、思いもかけず、ドミトリーの父もここに避難してきていた。父は、息子との再会を果たし、感極まるが、絶望的な病人になっていた…。父の向かいには、モスクワ総督ロストプチンが住んでいた。

*カシモフ着からウラジーミルでの父との再会までは、一続きの記述になっており、きわめてドラマティックで感動的だ。以下に訳出する。

9月26日に私は、伝書使（*軍で機密文書を運んだ——佐藤）を通じて軍に手紙を書き送り、リャザンからカシモフへ出発した。からっとした素晴らしい天気がつづいていた。こんな好天は何年ぶりだろうか。カシモフには、タタール人がたくさん住んでいる。ロシア人の集落もあるが、タタール風の名前で、エラフトウル、クストルスといったぐあいだ。カシモフにはイスラム教の礼拝堂もあり、タタール人は、清潔で裕福に暮しており、きわめて従順である。カシモフには軍の病院があるが、混乱の極で、負傷者の移送は非人間的でさえある。医薬品もなく、監督もなされていない。私は、イワン・イワノヴィチ・デミドフの持ち村で彼の家に泊まった。ここには、元老院議員のバグラチオン公爵夫妻（*あのピョートル・バグラチオン將軍の叔父であるキリール・アレクサンドロヴィチ——原注）が住んでいる。そこで私はルーニンに会った。だれも、なにひとつ良いことは期待していない。いたるところ、民衆は茫然自失の体で、田舎の貴族は見るも哀れな状態にある。この動乱のなか、私は、神のご加護により、10月3日に、ぶじウラジーミルに行き着いた（*「動乱」はスムータという言葉を使っている。17世紀初めのあのスムータすなわち大動乱を思わせる状況だったということだ——佐藤）。天気はといえば、驚くほど暖かい好天がつづいていた。ウラジーミルにヴァルーエフ一家がいたので立ち寄ると、彼らから、父もここにいると聞かされた。仏軍が迫ってきたので、イヴァノフスコエ村から逃れざるをえなくなったのである。父は絶望的な病人になっていた。道中の負担と心労で痛風が胃に上がり、望みはなかった。父は私と再会して感極まったが、すでに呂律が回らなくなっていた。父の向かいには、ロストプチン伯爵が住んでいた。

26-го писал я в армию чрез фельдъегеря и, пообедавши, поехал из Резани. Время продолжалось сухое и прекрастное, такова давно не запомнят, ехал я на Касимов. Тут много татар, и есть селения русские, названные по татарски Ерахтур, Куструс и проч. Есть и в Касимове мечети, татары чисто и зажиточно живут, смиренны очень, в Касимове гошпиталь,

но в большом беспорядке, а перевозки раненых даже бесчеловечны, без пособий и надзору. Ночевал я у Ив. Ив. Демидова в его деревне, где и сенатор князь Багратион с женою живет. Тут видел я Лунина. Никто ничего себе утешительного не ожидает, повсюду народ рассеян и дворяне по селениям проживают в жалком положении. Я, однако же, при сих смутных обстоятельствах благодаря бога доехал благополучно до Владимира 3-го числа октября, погода же продолжалась удивительно ясная и теплая; тут жили Валуевы, и я к ним пошел, от них узнал, что и батюшка тут, принужден был выехать из Ивановскова по приближению французов. Я его нашел отчаянно больново. Подагра поднялась в желудок от дороги и волнения души, он безнадежен, увидился со мною с большим чувством, но уже говорил худо; противу его квартиры жил граф Раstopчин.

*まさに運命というべきか...

10月16日(4日)

翌日早朝、ドミトリーのところへ迎えがくる。

4日朝、私を迎えに来た。父は、聖傳機密(せいふきみつ=塗油)を受けており、大いなる信仰をもって、この聖なる義務を果たした。私はこれに立ち会った。

4-го числа поутру прислали за мною, я нашел, что батюшка приобщается святых тайн, и с большою верою исполнил сей священный долг. Я при сем был.

それからロstopプчин宅へ。

そのあと私はロstopプчин伯のもとへ寄った。貴官(*ドミトリー——佐藤)はモスクワ義勇軍にあるべしとの勅命を陛下より受けた、と彼は言った。私は彼と、軍のモスクワからの不幸な撤退についてたくさん話した。彼は私に、クトゥーゾフ公あての、きわめて辛らつな手紙を読んで聞かせた。手紙は、軍が村々で行っている略奪その他にかんするものだ。どうやら、彼らはお互いに足を引っぱり合っているらしい。

Зашол я к г-фу Раstopчину, которой сказал мне, что получил рескрипт от государя, чтоб мне быть при Московском ополчении. Я много с ним говорил о несчастном отступлении армии из Москвы. Читал он мне весьма колкое его письмо князю Кутузову об грабительствах, чинимых армиею по селениям и проч. Видимо, они злодействуют взаимно и вредят.

*ロstopプчинがわざわざドミトリーに、クトゥーゾフあての、こういう手紙を読んで聞かせたのは、アリバイ作りもあるだろうが、それだけではないかもしれない。これまでみてきたように、両者は、モスクワの大火の「共犯」だが、老獪なクトゥーゾフは、どうも相手

をうまく「二階に上らせ梯子を外した」観がある。彼はロストプチンほどは直接関与の証拠を残さず、知らぬふりを決め込んだようだ。もっともクトゥーフにしてみれば、モスクワ放棄の責任をぜんぶ被せられただけでもたくさんだよ、というところだろうが。

10月17日（5日）

「敵がモスクワを出て、モスクワがわが軍に占領されたという快いうわさが流れる。だが、これについての確かな情報はだれも知らない」

*ついに来たか！という感じか。じっさいに退却を開始したのは19日（7日）だが。ナポレオン側からの和平の打診、露軍の状態の改善など、情報はあていど耳に入っていたろうから、この日が近いという予感があったろう。

10月17日（5日）

「ロストプチンはいつも私にクトゥーフの悪口を言う。彼は、健康を口実にして、ここに住んでいるようだ」

*やはりロストプチンはクトゥーフに対してかなり怒っているようだ。

父の容体はいよいよ悪い——。「父は良くならない。ときどき気を失い、ろれつが回らなくなる。胃に痛風があり、医者によると、望みはほとんどない」

10月18日（6日）

すでにモスクワの自宅のことを考えはじめる。戦況について明るい確信が生まれてきた証拠だ。

ベレンスと会い、6日には、彼に手紙を残してきた。その中で、フランス軍がモスクワから出ていった場合のことだが、自分の家のことと、ヴォルコンスキー一族のことを頼んだ。

*前日にドミトリーは、別々の人から、自分の家が残っており、囚人が収容されていると聞かされていた。

しかし、父の死...

朝、父のもとへ。意識はなかったが、私のことが分かったようで、かろうじて口をきくことさえできた。私の立会いのもとで、臨終祈禱を行った。そして午前12時近く、父

は 68 歳で亡くなった。こうして神は、父の死に立ち会わせんがために、私をウラジーミルに導き給うた。翌 7 日、葬式を執り行い、聖ウラジーミル教会付属の墓所に葬った。至聖所の向かいの、墓石の後ろである。

Поехал поутру к бабушке, нашол его без памяти, но, кажется, меня узнал и уже едва мог выговаривать. Прочли при мне ему отходную, и в исходе одиннадцати часов утра он скончался на 69-м году от рождения. И так привел меня бог приехать сюда во Владимир, чтобы быть свидетелем ево кончины, а 7-го отпевали и похоронили тело на кладбище при церкви святого Володимера, противу самого алтаря, за надгробным камнем, тут бывшим.

*ウラジーミルに来てみたら、そこに奇しくも、死にゆく父がいて、再会できた。父の葬式の日、10月19日(7日)、すなわちナポレオン撤退開始の日であった。これは、このときはまだ分からなかったが...

さらに思いがけないことに、バルクライが当地にやってくる。

バルクライが軍からウラジーミルにやって来た。旅の途中で立ち寄ったのだという。私は、悲しい儀式を終えて、イロヴナへの旅支度をした(*身重の妻がここに避難している——佐藤)。

Барклай-де-Толли приехал из армии во Владимир и, говорят, проездом. Я, оконча печальную церемонию, собрался ехать в Иловну.

*バルクライが、これから勝利の行進が始まるというときに、「病氣」を理由に、辞表を出して軍を去ったことはすでに書いた。ドミトリーは彼と会わなかったのか？ 日記には書いていない。

また、この日、モスクワからきた人からつぎのような話を聞く。「フランス軍の援軍は撃退されたという。仏軍は困窮をきわめ、將軍たちでさえ、カラスを食っているという話だ」

*これは不正確だが、仏軍の苦しい状況を反映してはいる。

また、(コサック軍団を率いる)プラトフ將軍をふくむ多数の部隊が、敵の補給を遮断するため、スモレンスク街道へ送られた。仏軍は、**ネマン川の外での**(*つまり、戦前のロシア国境外での——佐藤) 和平交渉を提案してきたが、こちらはそれを蹴ったという話だ。

Армия наша стоит на том же месте, у Нарышкиной в деревне по Калужской дороге, и много послано отрядов к Смоленской дороге, в том числе Платов, чтоб не допускать ничево к неприятелю. Французы, говорят, предлагали даже трактовать о мире за Неменом, но на сие

не согласились.

*こちらは、おおむね正しい（「ネマン川の外での」という意味不明な一句をのぞけば。仏軍がモスクワを占領している状況で、わざわざネマン川の外での和平交渉を提案してくるはずがない。「ネマン川の外に撤兵する条件での和平」という意味でもあるまい。こちらも、とてもありそうにない話だ）。したがって、記述の前半の部分とは、もともとのニュース・ソースがちがうかもしれない。

しかし、ドミトリーは、この 10 月 19 日（7 日）あたりから、はっきり希望がみえてきたようだ。この日はまた、さっきみたように、ナポレオン撤退開始と、父の葬式が重なっている。ドミトリーの人生で最も数奇な日だったろう。こういうドラマは、トルストイも聞いていて、彼をインスパイアしたかもしれないという気がする。

10 月 20 日（8 日）

翌 20 日、ドミトリーは、260 ルーブルでドロシキ（*屋根なしの、1-2 人用軽 4 輪馬車——佐藤）を買い、料理人、御者、女中とともに、午後 2 時にウラジーミルを立つ。アブラシチハ（Абращица）、ロストフ、ウグリチの旅程だ。

10 月 23 日（11 日）

ロストフの修道院で、奇跡者ドミトリー（*自分の守護聖人の чудотворец Димитрий ——佐藤）に祈禱を執り行う。

10 月 25 日（13 日）

ウグリチ着。当地で、ナポレオン退却について知る（6 日遅れ）。

クレムリンが爆破され、イワン大帝の鐘楼と聖堂一つと元老院しか残らなかったという噂を聞く。

ここでわれわれは、つぎのような話を聞いた。敵は、モスクワを棄てて、スモレンスク街道に略奪品を積んだ貨物をすべて送り、6 日（グレゴリオ暦 18 日）に、軍隊はミュラーとともに、わが軍に向かってカルーガ街道を進んだ（*ミュラーは前衛を率いて、露軍の前衛とずっと対峙していた。攻撃をしかけたのは、ミュラーではなく、ベニグセンが指揮した露軍の部隊のほうだ——佐藤）。だが、ベニグセンが彼を破ると（*ミュラーは 2500 人の死傷者を出して後退した——佐藤）、ナポレオンが急遽モスクワを離れ、救援にやって来た（*ナポレオンは、ミュラーの敗戦をひとつのきっかけに、モスクワを出る——佐藤）。11 日には、クレムリンが爆破され、その恐るべき蛮行の結果、イワン大帝の鐘楼と聖堂一つと元老院しか残らなかった——。こういう話だ。あとはぜんぶ

破壊されてしまったという。この事件については、まもなく至急報で知った。

Тут узнали мы, что неприятель оставил Москву, отправя по Смоленской дороге все транспорты с ограбленными вещами, а войска пошли противу нашей армии по Калужской дороге 6-го числа с Мюратом, но ево Бенигсен побил, то и сам Наполеон поспешно оставил Москву и пошел к нему на помощь, а уже 11-го числа подорвал Кремль, в коем от сего ужасного злодейства, сказывают, остался только Ив. Великой, один из соборов и Сенат. Протчее все погибло. О сем происшествии узнали скоро чрез летучую почту.

*クレムリンの被害は誇張されている。また、仏軍は、歴大な戦利品とともに「進軍」した。それ以外は正確である。総じて、ドミトリーの情報収集力はかなりのものだ。

10月27日(15日)

イロヴナ着、妻子と再会！ 「昼ごろ、イロヴナに着いた。神の恩寵により、妻も息子も、ほかの者もみな元気だ」

ほかにも知らせが待っていた。

敵がモスクワを出たことについては、当地でも、確実な知らせを得ていた。また私はここで、ピョートル・ミハイロヴィチ・ヴォルコンスキー公爵（*皇帝の側近で軍事問題のブレーン——佐藤）が、道すがらトゥーラで、私に置手紙をしていったことを知った。私にクトゥーフのもとに、つまり軍に赴くようにとのことで、私に軍団が委ねられたという。だが、私は何も受けとらず、何も知らなかったので、ここへ来てしまった。そこで16日に、ピョートル・ミハイロヴィチ公爵あてにペテルブルクへ、ヒートロヴォを通じて手紙を書き送った。私が軍に採用されるのか、それともここに残るべきかを知るためだ。

О выступлении неприятеля из Москвы уже и тут было достоверно известно. Узнал я тут, что князь Петр Мих. Волконской проездом из армии оставил ко мне письмо в Туле, дабы я ехал в армию к Кутузову и что мне назначен был корпус, но я, не получая ничего и не знав о сем, доехал сюда, и потому 16-го писал к князю Петр. Мих. в Петербург чрез Хитрова, дабы узнать, буду ли я принят в службу или оставаться мне здесь.

*ドミトリーは、心機一転！という心境だったろう。

*上に出てくるアレクセイ・ヒートロヴォ（Алексей Захарьевич Хитрово, 1776-1854）は当時、四等文官で、元老院の第五局長。ドミトリー・ヴォルコンスキーの妻の姉であるマリヤ・アレクセーエヴナ・ムーシナ＝プーシキナと結婚していた（原注）。このアレクセイの弟ニコライの妻が、クトゥーフの次女アンナ・ミハイロヴナである。クトゥーフが、総司令官に着任早々、「カルーガ付近は戦場になるから早く逃げなさい」という切迫した手紙

を書き送った、あの女性だ。おそらく、祖国戦争の戦略のかなりの部分が、この辺りの上層階級では共有されていたことだろう。

こういうことを考え合わせると、ドミトリーも、知っていながら敢えて文字に残さなかった事柄がいろいろあると思われる。

10月31日（19日）

この日、仏軍のモスクワ退去を受けて、ロストプチンとモスクワ県警が、モスクワに戻ることを知ったので、ドミトリーも、市内の状況や自分の家のことを知るため、自分の召使を派遣する。そのほか、戦況についての知らせもあった。

夕方、われわれは、敵がノヴォヤロスラヴェツ付近で、また負けたことを知った。これは、ロシアが悪人どもから解放され、悪人どもが滅ぶ希望を与えてくれる（*この人が、これほどの確信を語ったのは初めてだ——佐藤）。われわれの住まいはかなり窮屈だ。妻はもうとても身重で、われわれはお産のことをいろいろ考えはじめた。

Вечеру узнали мы о новом поражении неприятеля при Новоярославце, что подает надежду, что освободится Россия от злодея и что могут они погибнуть. Мы жили в Иловне довольно тесно, и жена уже была очень тяжела, то и начали мы помышлять о ее родах.

*いろんなことが一度に起きてきた....

11月11日（10月30日）

「退却する仏軍の損害状況について、軍の非常郵便（летучая почта）で、しばしば知らせを受ける」

11月17日（11月5日）

ヒートロヴォ（Алексей Захарьевич Хитрово）から、自分が10月20日付で、軍への復帰を許され、クトゥーゾフのもとに出頭するよう命じられていたことを知る。「この知らせを聞いて、妻は悲しんだ」。出発と妻の出産に向けて（アンドレーエフスコエ村での普請など）、大わらわで準備に奔走する。

11月22日（11月10日）

「10日は妻の誕生日。祈祷式を執り行い、夜、ウグリチへ立つ」

11月25日（11月13日）

13日から14日にかけての深夜、セルギエフ・ポサードに着く。「至聖三者聖セルギイ大修道院に立ち寄り、聖者たちの聖骸に額づく。聖堂には、モスクワ府主教プラトンの遺体が安

置されていた」

*モスクワ府主教プラトンは重病で、モスクワから当地に避難させられ、11日に亡くなっていた。

*ドミトリーは、この修道院を開いた聖者ラドネジのセルギイのこと、彼がタタールとの戦いに赴くモスクワ大公ドミトリー・ドンスコイに祝福を与えたこと、そして、ルーシ諸侯の連合軍がクリコヴォの戦い（1380年）でキプチャク・ハン国のママイに勝って、モンゴル不敗の神話を砕き、「タタールのくびき」から脱するきっかけをつかんだことなどに思いを馳せたにちがいない。

いささか脱線するが、クリコヴォの戦いもまた、欧州から中央アジアにかけての国際政治の綱引きのなかで起きた大事件だった。⁵⁰³

キプチャク・ハン国（ジョチ・ウルス）は、チンギス・ハンの長男ジョチの子孫が支配した国だが、14世紀後半に、ティムールが大帝国を建設し、ママイのライバルであったトクタミシュを支援したため、ママイは対抗策として、リトアニア、ジェノヴァと同盟して、ロシアへの支配を強化しようとしたからだ。

風雲児ティムールとキプチャク・ハン国のお家騒動とが、ロシアに新たな国難をもたらし、クリコヴォの平原（現トゥーラ州に位置）での対決につながっていったことになる。

11月27日（11月15日）

モスクワ入り。一面の焼け野原…。放火するためにわざと人を残したのだ、と皆断言する（*つまり、露側の計画的放火ということだ——佐藤）。ドミトリーは、ロストプチンが、市街戦を想定して火をつけたのだらうと考える。

15日。モスクワに入る手前から、火災と略奪の悲しむべき光景が目に入ってきた。モスクワの大半が焼けてしまった。自宅の庭に入ると、幸いにして焼けてはいなかったが、財産はすっかり略奪され、多くの人間が住み着いていたので、脇屋にやっと自分の部屋を確保した。プーシキンは、ツェリグ司祭のところに泊まっている。人々は、放火するためにわざと人を残したのだと断言している。どうやら、ロストプチンが、市街戦を想定して、予めこういう手を打ったのだらう。

15-го числа. Горестное зрелище созжения и ограбления началось еще за Москвою, большая часть Москвы созжена. Я въехал к себе на двор, которой благодаря бога несозжен, но в нем разграблено имущество, множество нашел я живущих и едва мог очистить себе

⁵⁰³ 三浦清美『ロシアの源流——中心なき森と草原から第三のローマへ』（講談社選書メチエ）、2003年、162–165頁。

покой во флигеле. Пушкин остановился у абата Церига. Утвердительно сказывают, что нарочно оставлены были люди зажигать. Видно, Ростопчин сии меры принял заранее, полагая, что будут драться в улицах.

*ツェリグ司祭（Аббат-Сюррюг〈Цурик, Цериг〉Анриен）は、カトリック司祭で、このあと間もなく 1812 年 12 月 20 日に亡くなっている。フランスのエミグレ（亡命者）で、1790 年代からロシアに住み、ドミトリーの岳父であるアレクセイ・ムーシン＝プーシキン⁵⁰⁴の家で家庭教師を務め、モスクワの聖ルイ教会の主任司祭であった（настоятель французского католического собора Св. Людовика в Москве）——原注。

*焼け野原のモスクワを目の当たりにしたドミトリーの衝撃が思いやられる。しかし、賢明であちこちに情報源をもつ彼は、これまで見てきたように、モスクワ放棄の以前からこういう成り行きを予想していた。一戦交えずに明け渡したのは、彼としては予想外だったようだが。

11月28日（11月16日）

ロストプチンおよびモスクワ県警察署長ピョートル・イワシキン⁵⁰⁴と会う（*二人はモスクワの放火の組織者、指揮者だ——佐藤）。

*筆者は、ロストプチンに、放火の真相を質したと思われるが、なぜか、それについては記していない。

11月29日（11月17日）

ふたたびロストプチンと会う。

カラバノフのところへ行き、ロストプチンのところで昼食をした。そこで、ネイ軍団が撃破され、ナポレオンが側近たちと逃げたことを読んだ。モスクワには 1 万戸以上の家屋があったが、焼け残ったのは 2300 戸以下。仏軍占領時に、最後まで残っていたロシア人は、1 万人以下と推測されている。警察は、コサックの 3 日後にやって来たが、略奪はつづいている。

Был у Карабанова, обедал у Ростопчина, тут читал о разобитии корпуса Нея и что Наполеон ушел с приближенными. В Москве осталось от 10 т. и более домов до 2300, народу, полагают, на конец оставалось не более 10 т. при французах. Полицыя пришла 3 дни после казаков, и продолжают грабить.

⁵⁰⁴ ピョートル・イワシキンは、本稿第 2 部第 9—10 章で書いたように、1808-1813 年にモスクワ県警察署長を務め、モスクワ放火の主な組織者の一人となった。

* 仏軍の後衛だったネイ軍団が数千の兵力で、露軍 8 万に包囲されるなか、奇跡的に脱出に成功し本隊に合流したのは、11 月 21 日（グレゴリオ暦）。ナポレオンは彼を「勇者のなかの勇者」と讃えたが、この脱出行でネイ軍団は 800 人にまで減り、事実上壊滅した。

仏軍のベレジナ川の渡河は 11 月 26—29 日（グレゴリオ暦）である。三方から迫る露軍をかわして渡河に成功したものの、そのときの戦闘で多くの犠牲者を出し、渡河できた兵士は 3 万にすぎなかった。ナポレオンがコランクールを連れて、軍を離れパリに向ったのは 12 月 5 日（グレゴリオ暦）のこと。

ドミトリーは、もう勝負あった、肝心なときに遅れてしまった...と焦ったかもしれない。

モスクワの大火の被害状況については、イワシキンら警察の調査結果をロストプチンから聞いたのだろう。数字は、すでにみたように、だいたい正しい。

11 月 30 日（11 月 18 日）

ヴェレシチャーギン事件について聞く。

カトリック神父（* 15 日の記述に出てきたツェリグ司祭——佐藤）が私のところへやって来て、ヴェレシチャーギンを民衆に引き渡して処刑させたのは、ロストプチン自身だと断言した。

* 筆者は、モスクワ放棄と放火の状況をいろいろ思いめぐらしていたにちがいない。日記に書いてはいないが。あえて文字に残さなかったのか、この日記の刊行に際して伏せられたのか？

なお、ヴェレシチャーギン事件は、『戦争と平和』でも多くの紙幅が割かれて、生々しく——しかし歪曲されて——描かれているので、ドミトリーの日記の末尾に、これにかんする補説を付しておこう。

12 月 1 日（11 月 19 日）

19 日に、家で昼食をすませ、用事を終えて、午後 2 時すぎに、トゥーラ街道を出発した。雪がほとんどなかったので、馬を苦しめながら、深夜にやっとポドリスクに着き、そこで夜を明かした。ここで自分の馬は帰し、郵便（駅通）馬車に乗り換えた。セルプホフからカルーガに向ったが、ここでも雪が少なく難儀した。

19-го пообедавши дома и конча дела мои, поехал в путь в третьем часу пополудни по Тульской дороге. Дорогою очень мало снега, и я, измуча лошадей, едва доехал в ночь до Подольска, где и ночевал. Отпустил своих лошадей и поехал на почтовых. С Серпухова поехал я на Калугу, но и тут я мучился, снегу мало.

21-го в ночь приехал я в Калугу.

12月3日(11月21日)

深夜、カルーガ着。しかし、スモレンスクに行く郵便(駅通)馬車はないので、メシチョフスク(Мещовск)で農民の馬を徴発すべく、同地に向けて立つ。

12月5日(11月23日)

深夜、メシチョフスクに着く。仏軍の惨状は目を覆うばかりだ。捕虜たちは服もなく、食事もほとんど与えられない。「絶望のあまり、やけくそで、死にかかった僚友を食っているということだ」。露軍も食糧が不足している。農民たちは冬食べるものがない。

*12月5日(11月23日)ー12月8日(11月26日)の記述はひとつづきになっていて、先入観なしに、この地獄絵図を伝える。全文引用しよう。

23日深夜、メシチョフスク市に着き、ここに翌24日も滞在した。アレクサンドル・プーシキンは、ここから7露里の自分の持ち村に出かけ、晩に5頭の馬を連れてきた。それに乗って私は25日に出発した。必要な手直しをしてプーシキンは先に出かけ、自分の馬車を私に残してくれた。私は街道をまっすぐロスラヴリ市に向った。凍てはこの上なく酷く、街道のいたるところで、食糧を積んだ荷車を見たが、とんでもない高値だったので、ペンザ県からも運んでくるほどであった(*食糧の高騰をみて、遠隔地からも搬送、販売していたのだろう——佐藤)。さまざまな民族からなる仏軍の捕虜も見かけたが、死に瀕していた。夜営では、服も食糧もほとんど与えられぬままに、立たされている。多くの者が路上で死につつあった。絶望のあまり、死にかかった僚友を食っているということだ。こうした哀れな光景は、深夜も、通りすがりに目にした。彼らは焚き火の傍にすわっていた。気温は零下20度以下。戦慄せずに見ることはできなかった。街道沿いのどこでも、民衆は戦争で困窮しており、お互い同士でも略奪し合っていた。農民は冬に食べる物がなかった。

23-го в ночь я доехал до города Мещовска, где и пробыл 24-е число. Александра Пушкин поехал в свою деревню, оттуда в 7-ми верстах и вечеру прислал лошадей мне 5-ть, на коих я и поехал 25-го. Исправя, что нужно, Пушкин поехал вперед, а повоска ево со мною. Я ехал прямою дорогою на город Рославль. Морозы были пресильные, по всей дороге встречал я обозы с провиантом для армии, но дороговизна продовольствия такова, что не стоил и провиант, которой везут даже из Пензы. Встретил я пленных французов и разных с ними народов, оне в гибельном положении, их ставят на биваках без одежды и даже почти без пищи, то их множество по дороге умирает, даже говорят, в отчаянии они людей умирающих едят. Жалкое сие зрелище имел я проездом в ночь, они сидели при огнях, мороз же был

свеже 20-ти градусов, без содрогания сего видеть невозможно. По всей дороге видно, что народ разоряется войною, свои даже их разоряют, и крестьянин не знает, что будет есть зиму.

12月9日(11月27日)

凄まじい雪嵐で、真昼間に道に迷うほどだったが、四苦八苦しつつ、堀や谷を越えて、どうにか地主宅に行き着く。ロスラヴリまで 25 露里の地点だ。一晩中嵐が荒れ狂っていたので、一泊する。

12月10日(11月28日)

28日朝、ロスラヴリ、さらにその彼方に向けて出発する。依然、強い凍てがつづいていた。いたるところに、フランス軍の行軍と略奪の跡があった。ここのロシアとポーランドの地主貴族はみな、彼らを全力で助けようとしたが、民衆とユダヤ人は、この荒廃をみて、ロシアの臣民でありつづけることを望んだ、というのが一般的な意見だ。聞くところによれば、ナポレオンは、近衛軍とわずかな残軍とともに、ミタワ（*現ラトヴィア共和国のイェルガヴァ——佐藤）から向いつつあるマクドナル軍と合流すべく、退却中だ。

Они меня приняли к себе, угостили, и я ночевал, ибо метель была ужасная всю ночь, а 28-го поутру поехал в Рославль и далее. Морозы продолжались сильные. Повсюду видны следы прохождения и грабительства французов. Общее мнение, что все дворяне и шляхта всеми силами помогали им, но народ и жидаы, чувствуя разорение, желают быть поданными России. Слышно, что Наполеон с одною гвардиею своею и малыми остатками разбитых корпусов уходит,, стараясь соединиться с Магдональдом, которой идет от Митавы.

*ロスラヴリは、現在はスモレンスク州にあり、ベラルーシ国境に近く、1408-1667年は、リトアニアの領土であった。当時は、ポーランド再興を願ってナポレオンを支持していた者も少なくなかったのだろう。

12月13日(12月1日)

シーロフ(シロフ)着。

12月15日(12月3日)

ボープル(Бобр)に着き、昼食をとって、ボリーソフへ(*ベレジナ渡河の舞台となった沿岸の街である——佐藤)。ボリーソフでは、同市の警備司令官ニカノール・スヴェトチン(Никанор Михайлович Светчин)のもとに泊る。

12月16日（12月4日）

スヴェトチンに、若い少尉ドミトリー・シェリゴフを推薦されたので、事務方に採用する（*Дмитрий Потапович Шелигов 〈1792—1854〉は、1810年代の末から20年代の初めにかけて、デカブリストたちと親しかった——原注）。

また、ベレジナの渡河について聞く。

4日、スヴェトチンは私に、モスクワの義勇軍のなかから、ドミトリー・ポターポヴィチ・シェリゴフ少尉を推薦してくれた。彼はモスクワ大学で学んでいた。私は彼を事務方に採用し、ボリソフからは彼といっしょに出かけた。ここで私は、チチャゴフがフランスの残軍を撃滅する機会を逸した、と聞かされた。ヴィトゲンシュタインも、来るには来たが、時すでに遅し。それでも、敵は大損害をこうむり、道路中に死体が散乱しており、森のなかをさ迷い歩いている者も数多いという。

4-е, он (Светчин) рекомендовал мне из московского ополчения подпоручика Дмитрия Потаповича Шелигова, он учился в Московском университете, я его взял с собою для употребления по канцелярии, с ним уже я и выехал из Борисова. Тут сказывали мне, что Чичагов пропустил случай истребить остатки французской армии, а Вильиенштейн хотя и пришел, но поздно, при всем том неприятель потерял множество и вся дорога усеяна телами, многие даже шатаются по лесам.

*それにしても仏軍の状況は悲惨だ....。

12月17日（12月5日）

ミンスク着。

12月18日（12月6日）

「昼食後ミンスクを立ち、総司令部のあるヴィリナ（現ヴィリニユス）へ」

12月19日（12月7日）

19日（7日）から20日（8日）にかけての夜は、街道沿いに夜営していたドフトゥロフ軍団の司令部に泊る。久々の再会だ。

12月20日（12月8日）

12月20日から21日にかけての夜は、街道から少し離れたところに夜営する。そのわけは....。

8日から9日にかけての晩は、街道からちょっと離れたところで夜営した。というのは、街道沿いはすべて敵が荒らし、ミンスクからヴィリナにいたるまで、仏軍の凍死体が多

数転がっているからだ。居酒屋や空いた小屋にまで、死体がたくさんあった。おまけに、これら不幸者の多くが、半裸で食べ物もなく彷徨しており、確実な死を待っているのだ。いたるところに、大砲、箱、馬車が打ち棄ててあった。敵はすべてを棄てて逃げたのだ。ネマン川を渡れたのは3万に満たないと推測されている。それも衰弱し切り、凍死しかかった将兵たちだ。そんな状態にありながらなお、わがコサック軍と、フランスの残軍を撃滅する機会を逸したチチャゴフ軍の一部によって、追撃されているのだ。

На 9-е ночевал я в стороне от дороги, потому что по дороге везде неприятель разорил и от Минска до Вильны множество замерзших французов. Даже в корчмах и пустых избах множество тел, сверх того многие из сих несчастных шатаются полунагие и без пропитания, ожидая верной смерти своей. Повсюду оставлены пушки, ящики и повоски. Неприятель бежал, оставляя все вещи. Чрез Немен перешел он, полагают, не более 30 т., и то изнуренные и почти замерзшие люди, но и там преследуемы нашими козаками и частью армии Чичагова, которой пропустил случай совершенно истребить остаток французских войск.

12月21日（12月9日）

「夕方ヴィリナに着き、当直将官⁵⁰⁵のコノヴニーツィン將軍（дежурного генерала Коновницына）のもとに出頭する」

12月22日（12月10日）

クトゥーゾフと諸將に迎えられ、夜にはツァーリが来訪する。街はイルミネーションで飾られた。そして、もうひとつ、嬉しい知らせが来る。

10日に私は、元帥・クトゥーゾフ公爵を訪れた。彼はたいへん愛想よく私を迎えてくれ、昼食をごちそうになった。夕方、宿舎を受けとってから、コノヴニーツィン將軍に、アレクサンドル・プーシキンを軍に置いてくれるよう頼み、オステルマンをはじめ、諸將と会う。ここで、イヴァン・アレクセーエヴィチ・ムーシン＝プーシキン（*ドミトリーの義兄で、1812年にペテルブルク義勇軍にくわり、後に少将——原注）とも再会する。

10日夜、陛下が来訪。街はイルミネーションで飾られる。オーストリア軍はまだ国境付近に残っており、そのシュヴァルツェンベルク軍は、スロニムにあって、4万の兵力を擁していた。これに対してドフトゥロフが差し向けられたところ、どうやら退却の形勢で、わが軍は、国境を越えて、ワルシャワ、ヴィスラに向うことになる。このことは皆、予期していた。陛下は来訪されると、クトゥーゾフ公に、勲一等聖ゲオルギー勲章を授与された。

⁵⁰⁵ 当直将官（дежурный генерал）については、384頁の注を参照されたい。

11 日朝、われわれは宮殿に勢ぞろいし、陛下は諸将に、その務めに対し、謝意を表された。それから閲兵の交代に立ち会った。妻から手紙を受けとった。神のご加護で、祖母（*妻の母のことか——佐藤）が来るまもなく、11 月 16 日にぶじ息子アレクセイを出産したという。

10-го был у фельдмаршала князя Кутузова. Он меня очень милостиво принял, и я у него обедал. Вечеру получил себе квартиру и переехал, просил я Коновницына, чтоб Александру Пушкина оставили при армии, виделся я с Остерманом и со всеми генералами, тут же нашел я и Ив. Алексеев. Пушкина.

10-го вечеру приехал государь, и город был иллюминирован, цесарцы еще оставались в наших границах, принц Шварценберг был в Слониме с 40 т., противу него послан Дохтуров, по-видимому он отретурируется, и наши войска пойдут за границу в Варшаву и на Вислу. Сего все ожидают, по приезде государь пожаловал князю Кутузову 1-го класу Георгия.

11-го поутру были мы во дворце и государь благодарил вообще всех генералов за их службу, потом был у разводу. Получил я письмо от жены, что она, благодаря бога, родила благополучно сына Алексея ноября 16-го, даже и бабушка не успела приехать.

*こうして、ドミトリー・ヴォルコンスキーの 1812 年は終わろうとしている。彼は、戦闘には参加できなかったものの、彼なりの困難な戦いを戦い抜いてきた。日記では以下、「諸国民の戦い」へとつづいていくが、ひとまずここで彼とはお別れだ。

最後に強調したいのは、1812 年がロシアにとっていかに困難な時だったかということだ。それは、『戦争と平和』に描かれたような、ある意味で調和し完結したコスモスなどではなく、いわば、あちこちが破綻し、底なしの穴が開いていた。政府も軍も国民も、総崩れの危機に瀕し、人間の獣性がむき出しになった暗い時だった。ナポレオン相手に、まともにぶつかって勝てるとも思えず（クトゥーゾフ自身が戦前に漏らしたとおり）、事実、最後まで勝てなかった。こういう残酷な状況にあたり、政府と軍の首脳は、残酷な作戦を、残酷に貫くことでのみ、勝つことができた。その暗さを直視し伝えているのが、この日記だ。

補説：ミハイル・ヴェレシチャーギン惨殺事件

ミハイル・ヴェレシチャーギン（Михаил Николаевич Верещагин, 1789-1812）は、商人の息子でプロの翻訳家であり、3ヶ国語を知っていた。ナポレオンの演説と書簡を、検閲を経ずに翻訳したかどで逮捕され、流刑を宣告されたが、モスクワ放棄の混乱のなかで、いわば人身御供になるかたちで虐殺された。この場面は、『戦争と平和』にきわめて印象的に描かれているが、事実関係を正確に網羅しているわけではない。

ナポレオンの演説と書簡を翻訳

ヴェレシチャーギンが翻訳したとされたのは、ナポレオンの演説と書簡である。前者は、ライン同盟の君主たちに対する演説で、後者はプロイセン国王への書簡だ。ハンブルクの新新聞などに掲載されていた。

前者には、「私の友情をないがしろにした野蛮人どもを罰したい」、「6ヶ月以内に、欧州の二つの北方の首都は、その城壁内に、全世界の勝利者を目にするだろう」«прежде шести месяцев две северные столицы Европы будут видеть в стенах своих победителей света»、後者には、「ジンギスカンの末裔ども」などといった景気のいい文句はあるが、それ以外に、政治的、戦略的に重要な情報はない。なにしろ、ソースがオープンな新聞記事なのだから。ところが、こんな記事が大事件を引き起こすことになる。

出所をたぐるとヴェレシチャーギンに

1812年6月に、この翻訳が市内に広まり、それに気付いた当局が出所をたぐっていったところ、ヴェレシチャーギンに行き着いた。この文書をもっていた者に、「お前はだれからもらったか」とつぎつぎに芋づる式に聞いていったわけだ。

捜査当局の調べによると、ヴェレシチャーギンが翻訳したのは1812年6月17日で、翌18日に彼が、知人の退職官吏メシコフ（県の書記）にこれを見せると、メシコフは興味を示し、頼んで書き写させてもらったという。メシコフも、このために逮捕されることになる。

元々のソースであるが、ヴェレシチャーギンは、尋問で、クズネツキー・モスト（鍛冶橋）のフランス人商店前で拾った新聞だと述べた。これだけなら、事件はあんなに悲惨なことにはならなかったかもしれないが...

反仏、反フリーメーソン

事件が俄然ロストプチンの関心を引きはじめたのは、郵便局長フョードル・クルチャリョフ（Фёдор Петрович Ключарёв, 1751-1822）につながる線が出てきたからだ。ヴェレシチャーギンが父に「クルチャリョフの息子から新聞をもらった」と言ったとの証言が得られたので

ある。もっとも、ヴェレシチャーギン本人はこれを否定したが。

クルチャリョフは、ロシアでマルティニストと呼ばれた、ローゼンクロイツェル系のフリーメーソンであり、ノヴィコフ、イヴァン・シュヴァルツ（Иван Григорьевич Шварц）、カラムジン、さらにはスペランスキーとも親しかった。ちなみに、『戦争と平和』に出てくるフリーメーソンは、ピエールとその師バズデーエフをはじめとして、すべてこの系統であり、トルストイの祖父ニコライもそうだったらしいことは、すでにみた。

一方、ロストプチンは、文筆家としても有名な人物で、ティルジットの和約（1807年）のころから既に、反仏、反メーソン、反イエズス会の論陣を盛んに張っていた。

ロストプチンの妻がカトリックに改宗

これには、彼の私生活もからんでいたと思われる。妻のエカテリーナが、ロストプチン家と付き合いのあった、かのジョゼフ・ド・メストルの影響で、1806年にカトリックに密かに改宗してしまったからだ。1806年といえば、1806、1807年の対仏戦のさなかだ（イエナ、アウエルシュタット、アイラウ、フリートラントの一連の戦役）。

この話はたちまち広まり、ロストプチンは非常にむずかしい立場に追い込まれた。彼としてはいやがうえにも反仏の立場を鮮明にするよう迫られたわけだ。

ちなみに、この「妻がカトリックの毒牙にかかる」エピソードは、『戦争と平和』では、ロストプチンにかんしては言及されず、ピエールに使われている。彼の妻である絶世の美女エレンは、イエズス会士ジョベールと関係をもち、カトリックに改宗する。これは「若い外国の大公（принц）」と結婚するため、ジョベールの紹介で修道院長に会い、ピエールとの離婚の許可をもらう（3巻3編6-7章）。その後、エレンは、イタリア人医師から治療（墮胎）を受けているときに、頓死する（4巻1編1-2章）。

ロストプチンに話を戻そう。運命というのはわからないもので、しばらく宮廷から干されていた彼は、その反仏キャンペーンのおかげで、やはり反仏派の中心人物であったエカテリーナ・パーヴロヴナ大公女（アレクサンドル一世の妹）に気に入られることになった。ロストプチンは、パーヴェル一世と皇太子時代から親しく、重用されていたので、その暗殺後は、宮廷から遠ざけられていたのだ。

やがて、対仏関係が険悪になるにつれて、彼は時の人となり、政治的に彼を起用する意味も出てきて、1812年5月24日にモスクワ総督に任命されたのである。

執拗なロストプチン

話をもとにもどすと、ヴェレシチャーギン事件に、メーソンの大物につながる線が出てきたために、ロストプチンは俄然張り切りだし、みずからヴェレシチャーギンを尋問し、ツアーリには何度も手紙を書いて、「フリーメーソンの危険」を訴え、厳罰に処することを進言した。

7月11日に、ツァーリがモスクワに来訪したときには、ロストプチンは直接この話を持ちだしたが、ツァーリは取り合わなかったと、ロストプチンは回想している。

結局、ヴェレシチャーギンは商人の子なので、法律上、死刑に処することはできず、7月15日に、25回の鞭打ちのあと、ネルチンスクに徒刑という判決を下した。

だが、フリーメーソンのクルチャリョフに対しては、はっきりした証拠もないのに、ボロネジへ追放してしまった。警察大臣でツァーリの側近であるアレクサンドル・バラシヨーフは、この独断専行を聞いて、仰天したという。

とにかくロストプチンのしつこさは相当なもので、7月23日にはバラシヨーフに対し、バラシヨーフがクルチャリョフとこっそり会ったという噂が広がっている、と書き送ったり、ツァーリ宛には、8月6日に、ロシアの破滅はパーヴェルー世の死に対する天罰だという噂がモスクワにまん延しているが、「こんな恥知らずな噂を広めたのは、ロプヒン（Пётр Васи́льевич Лопухи́н）、クルチャリョフ、クトゥーゾフ（Па́вел Ива́нович Голени́щев - Куту́зов）、ルビャノフスキー（Фёдор Петрович Лубяновский）らの輩であることを疑いません」と書いたりしている。

これはかなり露骨で拙劣なやり口であり、ツァーリも苛立ったと思われる。もっとも、時あたかもスモレンスクの会戦のころで、時局は、こんな小事件どころではなかった。ところが、急転直下、悲劇的結末がやって来る。

人身御供

ナポレオンのモスクワ入城直前の9月2日午前10時ごろに、モスクワ放棄に憤激した群集が、モスクワ総督フョードル・ロストプチンの邸宅前に集まった。

ロストプチンは市民に対し、8月31日に「三山 Три горы」（現 улица Трёхгорный Вал 付近で、地下鉄「1905年駅」近く）に首都防衛のため集まるように、檄文で呼びかけ、自分も参加すると約束していたのに、首都は戦わずして放棄され、総督も「三山」に姿を見せなかったため、市民が怒ったのである。

ロストプチンは、収監されていたヴェレシチャーギンを竜騎兵2名に引き出させ、群集に対し、「こいつが裏切り者だ！ こいつのせいでモスクワは滅ぶのだ」と叫び、竜騎兵に「斬れ！」と命じた。ヴェレシチャーギンの死体は、群集によって市内を引きずり回された。この間、ロストプチンは、随員にともなわれて急いで邸宅に戻り、その裏口から、ドロシキ（屋根なしの一、二人乗り軽四輪馬車）に乗ってモスクワを脱出した。

戦後

戦後、クルチャリョフは、地位も名誉も俸給も回復され、ヴェレシチャーギンの翻訳を書き写したメシコフも、アレクサンドル一世が恩赦した。

また、1816年、モスクワを訪れたツァーリは、ヴェレシチャーギンの父を招き、話をした。

翌日、指環と2万ルーブルを贈ったという。

アレクサンドルは事件を振り返り、ロストプチンにこう書き送った。

あの極めて困難な状況下では、貴下の行為に、私は十分満足したことだろう——もし、ヴェレシチャーギン事件がなければ、いや、より正確には、事件のあのような結末がなければ。私は、貴下にまったく率直に話している。そうしないためには、私はあまりにも正直だ。ヴェレシチャーギンを処刑する必要はなかった。とくに、あんな形で行うことは。絞首刑か銃殺のほうがまだましだったろう。⁵⁰⁶

Я был бы вполне доволен вашим образом действий при этих весьма затруднительных обстоятельствах, если бы не дело Верещагина, или, лучше сказать, не окончание этого дела. Я слишком правдив, чтобы говорить с вами иначе, как с полной откровенностью. Его казнь была не нужна, в особенности её не следовало производить подобным образом. Повесить или расстрелять было бы лучше.

にもかかわらず、帝政ロシア、ソ連を通じて、政権が正式にヴェレシチャーギンの処刑が誤りだったと認めたことはない。そして、アレクサンドル一世は、「貴下の行為」、すなわちモスクワの放火にはほんとうに「十分満足していた」のだろうか？

⁵⁰⁶ Земцов В. Н. "Михаил Верещагин. Житие «несвятого» мученика. Сборник материалов к 200-летию Отечественной войны 1812 года. Том 9. Эпоха 1812 года. Исследования. Источники. Историография. Труды Государственного исторического музея Выпуск 183. Москва. 2010 год. С.193.

2) セルゲイ・グリнкаの『1812年についての回想』⁵⁰⁷

——ツァーリに放火をまかせられた男——

セルゲイ・ニコラエヴィチ・グリнка（1776–1847）は歴史家、作家、ジャーナリスト。スモレンスクの貴族の家庭に生まれ、幼年学校を卒業し、軍務に服するが、1800年、父の死に遭い、少佐で退役する。1808年には、月刊誌「ロシア報知」を創刊し、愛国主義、反仏の論陣を張り、政府上層部の支持も得た。デカブリストのフョードル・グリнкаは実弟。詩、小説、戯曲、歴史書、『1812年についての回想』など、多数の著作がある。

まえに述べたように、セルゲイ・グリнкаの『1812年についての回想』によると、7月27日（15日）にアレクサンドル一世が政府首脳とともにモスクワをおとずれた際に、グリнкаは、今後の戦況次第ではモスクワの放棄と放火もやむなし、「モスクワの放棄は、ロシアとヨーロッパにとって救いとなるであります」と献策し、放火の意義を約1時間にわたり力説した。これは、スモレンスクの会戦の約3週間前のことで、仏軍はヴィテブスクに迫っていた。

その結果、グリнкаは、モスクワ総督ロストプチンと協力して放火を計画、実行するように、政府よりゆだねられた、という。グリнкаによると、ロストプチンとの最初の突っ込んだ会合で彼から、「陛下はあなたに特別の任務をお授けになりました」と告げられた。

戦争のそもそもの最初から、ナポレオンがモスクワまで止まりそうにないこと、止められそうにないことはあきらかだった。となると、自動的に、モスクワ放棄ということになる。放棄するなら、戦略上、どうしても焼かねばならない。焼かねば、仏軍は、首都を占領したうえ、ナポレオンが兵士に約束した「潤沢な食糧、物資と快適な冬営地」を得てしまう。だが、焼けば、補給が至難なところへ、早晩冬将軍がやってくる。したがって、政府と軍は、このほぼ確実なシナリオを念頭に置いて、そのための準備をしていたはずだ。グリнкаの手記はそうした推測を裏づけるばかりか、宮廷とモスクワがいつどのようなかたちで、このシナリオの実行をすり合わせ決定したかを示唆してくれる。こういうことは、モスクワの代表者と宮廷の主だった面々が直接一堂に会して、調整しなければならないからだ。ツァーリ以下の指導部がわざわざモスクワに出向いた主な目的はまさにここにあったと考えられる。士気の高揚、軍資金集め、義勇軍の組織は表向きの理由だった。

また、この手記は、放火の組織、実行のコーディネーター役がだれだったかも教えてくれる。放火に際しては、それを組織、実行した三者、すなわち軍、モスクワ総督ロストプチン、モ

⁵⁰⁷ Глинка С.Н. Из записок о 1812 году // «1812 год в русской поэзии и воспоминаниях современников». М., 1987. С.394-425.

スクワ県警をつなぐ人物が必要だったはずだ。三者の活動を調整、コーディネートして、現場で指揮できる、しかもあまり目立たない人物。それがグリーンカだったということだ。

しかし、この回想は研究ではあまり触れられない。ツァーリ本人が、自分と祖国のために命をかけて戦った負傷兵を置き去りにして、父祖の霊廟とともに焼き殺したというのでは…。これが真実だったとしても、こういう真実は史実として根付かない。グリーンカの回想がかなり韜晦した書き方なのはそのためだ。トルストイは、『戦争と平和』のなかで、この回想を引用しているが、意味を歪曲している。これもおなじ理由による。

以下、順を追って、セルゲイ・グリーンカの回想をみていこう。そこに出てくる日付はユリウス暦である。グレゴリオ暦に直すには12日をくわえればいい。

回想の体裁は日記とは異なり、見出しをつけて（「7月15日：ツァーリ臨席のもとでの貴族と商人の集会」、「スモレンスク陥落」、「バククライ・ド・トーリ」…など）、注目すべきトピックを取り上げつつ、時系列に沿って事件を振り返っていくという形をとっている。

なお、日記本文の引用、パラフレーズ以外の、佐藤の意見、解説は、記述の混乱を避けるため、改行して行頭に*をつけて示す。

セルゲイ・グリーンカの『1812年についての回想』の抄訳

1812年7月11日

当時、筆者グリーンカは、モスクワのドロゴミーロフスキー橋の近くに住まいを借りていたが、7月11日早朝に、家主の女性がやって来て、たたき起こされる。彼女は「私たちはもうおしまいだ、破滅だ！」と叫び、涙ながらに、印刷された文書を見せた。例の「モスクワよ！武装せよ！」というツァーリの布告である。モスクワの全住民に対し、迫りくる危機を警告し、あらゆる階層の人々の速やかなる武装を勧告する内容で、ポロツク（現ベラルーシ共和国北東部）で7月6日付けで出されたものだった⁵⁰⁸。

*こういう布告が出る以上、ツァーリはモスクワ防衛に自信がないといっているに等しい、という判断を一般人がしているのがおもしろい。そして、その判断は、もちろん正しかった。

グリーンカはその足で、ソコーリニキのモスクワ総督ロストプチンの別荘に出かける。まだ朝の5時なのに、人々は起きて仕事していた。ロストプチンはほかの用事でいそがしく、彼とは会えなかったものの、モスクワ義勇兵にいの一番に登録し、銀300ルーブルを寄付してきた。

同日午後、街中の人々は、ツァーリがモスクワに来訪するというので高揚している。グリ

⁵⁰⁸ この文書については、「ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記」の最初に抄訳を示した。

ンカが夕方 5 時すぎにポクロンナヤの丘に行ってみると、人々は布告を読んだり、意見を交わしたりしていた。

7月14-15日に、ツァーリ臨席のもとで貴族と商人の集会が開かれるとの通知があった。

*その集会当日の15日の記述は、トルストイが『戦争と平和』に長々と、ただし歪曲して引用しているので、その両者を引いて比べてみよう。まずはグリーンカから。

7月15日：ツァーリ臨席のもとでの貴族と商人の集会

その間にも、貴族と商人の集会の行われるホールは、刻々と人で埋まっていったが、貴族のホールの手前で熱した会話がはじまった。貴族の官吏のひとりが、「陛下に、われわれの軍隊はどのくらいの兵力があり、今どこにいるのかお尋ねしなければなりませんね」と言うと、ステパン・ステパーノヴィチ・アプラクシンがこう反論した。「かりにわれわれにそのことをお尋ねする権利があるとしても、陛下はわれわれに満足のいくようなお答をなさることはできません。わが軍は敵の動きに応じて移動しています。その敵の動きは時々刻々と変化しているのです。兵力もまた刻々と変わっています」。それにつづいて、男性が声を張り上げた。彼は四十がらみで、長身で肩幅広く、均整のとれた身体つきで、上品な顔立ちをしており、ロシア語で雄弁に語った。「今や議論しているときではありません。行動すべきときです。尋常ならざる戦いが今やたけなわです。敵が襲来し、国内で戦いが行われています。この戦いは、諸都市を墓だらけにするでしょう。国民に多くの犠牲を強いるでしょう。しかし、ロシアは戦い抜かねばなりません。この戦いはまた、かつてなかったような手段を要求します。われわれは、数十万の数で、手当たり次第のもので武装し、動き出しましょう。素早く敵の背後を突き、騎兵の義勇兵を編成し、いたるところでナポレオンを脅かすのです。彼をヨーロッパから切り離し、ロシア全体がロシアのために立ち上がったことを欧州に見せてやろうではありませんか！」

15 ИЮЛЯ 1812 ГОДА.

СОБРАНИЕ ДВОРЯНСКОЕ И КУПЕЧЕСКОЕ. СОВЕЩАНИЕ В ДВОРЯНСКОМ СОБРАНИИ

Между тем, когда час от часу более наполнялись залы Дворянского и Купеческого собрания, в комнате, перед залом Дворянскою, завязался жаркий разговор. Один из чиновных бояр сказал: "Мы — должны спросить у государя, сколько у нас войска и где наше войско?" Степан Степанович Апраксин возразил: "Если б мы и вправе были спросить об этом у государя, то государь не мог бы нам дать удовлетворительного ответа. Войска наши движутся сообразно движениям неприятеля, которые могут изменяться каждый час: такому же изменению подлежит и число войск". Вслед за этим мужчина лет в сорок, высокий ростом, плечистый, статный, благовидный, речистый в русском слове и в мундире без

эполетов (следственно отставной), о имени его некогда было спросить, возвыся голос, сказал: "Теперь не время рассуждать: надобно действовать. Кипит война необычайная, война нашествия, война внутренняя. Она изроет могилы и городам и народу. Россия должна выдержать сильную борьбу, а эта борьба требует и небывалой доселе меры. Двинемся сотнями тысяч, вооружимся чем можем. Двинемся быстро в тыл неприятеля, составим дружины конные, будем везде тревожить Наполеона,отрежем его от Европы и покажем Европе, что Россия восстает за Россию!"

*これはパルチザン戦を示唆しているだろう。実際、スモレンスクの会戦の後で、バルクライがパルチザン部隊を組織して仏軍の補給を脅かしたことは、すでに述べたとおり。このあと、グリーンカが口を開く――

魂から情熱がほとばしるままに、私の声も響いた。私は叫んだ。「地獄は地獄をもって撃退しなければなりません。わたしはあるとき、稲妻が走り雷鳴が轟くなかで笑っている赤ん坊を見たことがあります。でも、これは赤ん坊の話で、われわれはそうではありません。われわれは危険を理解し、それに抗することができます」。人々はみな黙り、私の話は熱を帯びた。私は次第に、ホールのなかへ押されていった。そこでは、緑のラシャをかけたテーブルの両側に、70人以上の綬をかけた大官、高官たちが座っていた。私は押しまわられて、その椅子の後ろの壁際で、後列の真ん中あたりで止まった。私は話しやめずに、というよりいよいよ熱しつつ、祖国の安全と防衛のためのさまざまな対策を提案した。ついに私は言った。「われわれは恐れてはなりません。モスクワは放棄されるでありましょう」。この運命の言葉が私の口から出るや否や、何人かの大官、高官は立ち上がった。ひとは叫んだ。「だれがあなたにそのことを言ったのです?」。ほかの何人かは私に聞いた。「なぜあなたはそれをご存知なのですか?」。私は当惑せずにつづけた。「みなさま! 第一に、ネマン川からモスクワまでは、強敵を止められるような天然の障害物も、人工のそれ也没有せん。

第二に、祖国のあらゆる年代史が証しているところでは、モスクワはロシアのために苦しむのが習いです。

第三に(どうか、この私の言葉が成就せんことを!)、モスクワの放棄は、ロシアとヨーロッパの救いとなるからです」

私の演説は、いろいろな人から説明を求められて、それに答えたりしながら、およそ1時間つづいた。

В пылу рвения душевного раздался и мой голос, я воскликнул: "Ад должно отражать адом. Я видел однажды младенца, который улыбался при блеске молнии и при раскатах грома, но то был младенец. Мы не младенцы: мы видим, мы понимаем опасность, мы должны противоборствовать опасности". Среди общего безмолвия пламенела моя речь. И меня час

от часу более вдвигали в залу собрания, где по обеим сторонам стола, накрытого зеленым сукном, сидело более семидесяти чиновных вельмож в лентах. Сжатый отовсюду, я принужден был остановиться за стульями к стене посреди заднего ряда. Не прерывая слов моих, или, лучше сказать, увлекаясь душою, я предлагал различные меры ко внутренней безопасности и к обороне Отечества. Наконец сказал: "Мы не должны ужасаться, Москва будет сдана". Едва вырвалось из уст моих это роковое слово, некоторые из вельмож и превосходительных привстали.

Одни кричали: "Кто вам это сказал?" Другие спрашивали: "Почему вы это знаете?" Не смущаясь духом, я продолжал: "Милостивые государи! Во-первых, от Немана до Москвы нет ни природной, ни искусственной обороны, достаточной к остановлению сильного неприятеля.

Во-вторых, из всех отечественных летописей наших явствует, что Москва привыкла страдать за Россию,

В-третьих (и дай бог, чтоб сбылись мои слова), сдача Москвы будет спасением России и Европы".

Речь мою, продолжавшуюся около часа с различными пояснениями, требуемыми различными лицами, прервал вход графа Ростопчина. Все оборотились к нему. Высвободясь из осады, я поспешил к московскому градоначальнику. Указывая на залу Купеческого собрания, граф сказал: "Оттуда польются к нам миллионы, а наше дело выставить ополчение и не щадить себя".

После мгновенного совещания положено было выставить в ратники десятого.

* 「地獄は地獄によってお返しする」。 「モスクワは放棄されるであります」。 「なぜ、貴殿はそのことをご存知なのですか?」。 実に意味深長だ。そして、1時間にわたり、質疑応答、議論をまじえ、話し合う——。モスクワ放棄と放火のシナリオについて話したとしか考えられない。

このあとグリーンカは、ピョートル・ステパーノヴィチ・ヴァルーエフ（Петр Степанович Валуев）が、「あなたを陛下にご紹介しよう」というのを遠慮して帰宅したという。

トルストイによる換骨奪胎

以上の部分をトルストイは『戦争と平和』のなかで、つぎのように換骨奪胎した。

「私は思うのですが、これらの問題について話し合う前に」とピエールはつづけた。
「われわれは陛下にお尋ねしなければなりません。わが方にどれだけの兵力があり、どんな状態にあるのか、ご説明くださるよう、陛下にお願い申し上げねばなりません。そ

うすれば...」

ところがピエールが言い終わらぬうちに、突然、三方から彼を攻撃しだした。いちばん猛烈に反対したのは、彼の古い知り合いで、いつも彼に好意を示していたボストン好きの男（*ボストンはトランプ遊びの一種——佐藤）、ステパン・ステパーノヴィチ・アプラクシンだった。彼は制服を着ていたが、その制服のせい、それとも、なにか他の理由のせい、ピエールのすぐ目の前に立っていたのは、いつもと全然ちがう男だった。ステパン・ステパーノヴィチはいきなり年寄りらしい憎悪を顔に表し、ピエールをどなりつけた。

「あんたに言っときますがね、まず第一に、そんなことを陛下にお尋ねする権利はわれわれにはありません。第二に、かりにそんな権利がロシア貴族にあったとしても、陛下はお答えになることはできません。わが軍は、敵の動きに応じて動いておって、しょっちゅう増えたり減ったりしとるんだから...」

他の声が、ピエールに近づき、アプラクシンをさえぎった。中背で四十がらみの男で、ピエールは以前に、ジプシーたちのところで見かけたことがあり、たちの悪いばくち打ちとして知っていたが、彼も制服を着て、人が変わってしまっていた。

「だいたい、もう話し合いなんかやってるときじゃない」。この貴族の声があった。「行動すべきときだ。戦争がロシアで始まっているんです。敵は、ロシアを滅ぼし、われらの父祖の墓を穢し、妻子を奪い去ろうと、進んできています」。貴族は胸をどんと打った。「われわれはみな一人残らず決起し、父とも仰ぐ陛下のために、敵に立ち向かうべきです!」。彼は血走った目をむき出しながら、叫んだ。何人かの「そうだ、そうだ」という声が群集のなかから聞こえた。

「われらロシア人は、信仰と玉座と祖国を守るためには、自分の血を惜しみやしません。われらが祖国の子であるなら、たわ言をほざいている場合じゃない。ヨーロッパに対して、ロシアがロシアのために立ち上がるさまを見せてやろうじゃありませんか」。貴族は絶叫した。

ピエールは反論したくなかったが、一言も発することができなかった。彼の声は、それがどんな考えを含んでいるかに関係なく、威勢のいい貴族の声にかき消されてしまうと感じたのである。イリヤ・アンドレーエヴィチ（*ロストフ老伯爵——佐藤）は、人混みの後ろのほうから頷いていた。何人かは、演説している人間の話の切れ目ごとに、勢いよく肩をひねって言った。

「そうだ、そうだ! その通り!」

ピエールは、自分は金銭も百姓も自分の身をも惜しむものではないけれども、援助するためには状況を知っておく必要があると言いたかったのだが、口にすることはできなかった。多くの声が叫び、いっしょにしゃべりだすので、イリヤ・アンドレーエヴィチも全員に頷き切れないほどだった。そうこうしているうちにも、群集は増えていき、い

くつかの群れに割れたり、またくっついたりしながら、わんわんがなり立てつつ、大ホールのかな大きなテーブルのほうに動いていった。ピエールは、しゃべらせてもらえなかったどころか、荒っぽくさえぎられたり小突かれたり、まるで共通の敵でもあるかのようになり、顔を背けられたりした。これは、彼の話の意味に不満だったからこうなったのではなく——だいたい、そんなものは、彼につづく多数の演説の後では忘れられてしまっていた——群集を活気づけるには、目に見える愛の対象と敵とが必要だったからである。ピエールは後者になってしまった。威勢のいい貴族の後で大勢が演説したが、みな同じような調子であった。気の利いた雄弁をふるう者も多かった。

『ロシア報知』を出しているグリーンカ（彼を見てそれと気がついたらしく、「文士だ、文士だ！」という声がかき混みから聞こえた）は、こんなことを言った。地獄は地獄をもって撃退しなければならない。自分はあるとき、稲妻が走り雷鳴が轟くなかで笑っている赤ん坊を見たことがある。われわれはこんな赤ん坊にならないようにしよう、などと。

「そうだ、そうだ、雷鳴の轟くなかで！」。後ろの列のほうで、賛意を表すように、こうくり返していた。

群集は、大テーブルのところまでやって来た。そこには、制服を着て綬をつけた、ごま塩やはげ頭の、七十歳になんなんとする老大官たちが座っていた。そのほとんどが、家では道化を侍らせたり、クラブではボストンをやったりしている連中で、ピエールはかねてから見知っていた。群集はテーブルに近づいても、鳴りをひそめなかった。入れかわり立ちかわり、ときには二人同時に、押し寄せる群集に、高い椅子の背にぎゅうぎゅう圧しつけられながら、演説をぶつのだった。

後ろの方に立っている連中は、演説でなにか言い落としたことに気がつくやうに、急いでそれを言い足そうとした。また、ある者は、この暑さと立錐の余地もないなかで、なにかうまい考えはないものかと頭をひねり、それを口にしようとするのだった。ピエールの知り合いの老大官たちは、座って、あっちを見たり、こっちを見たりしていたが、そのほとんどの顔は、暑くてたまらん、ということしか語っていなかった。ピエールは、しかし、自分が興奮してきたのを感じた。なんだって平気さ、ということを示したいという一同の欲求は、演説の意味よりも声音や顔の表情によけいに現れるのであったが、それが彼にも伝染したのである。彼は、自分の考えを撤回したわけではないが、なんとなくばつが悪く感じ、弁解したくなった。

「私はただ、寄付をするにしても、どこにその必要があるのか知っておいたほうがいい、と言いたかっただけなんです」。彼は他の声を叫び負かそうとしながら、こう言った。

すぐ近くにいた老人が、彼のほうに振り向いたが、すぐに、テーブルの反対側で起った叫び声に注意をそらされてしまった。

「そうです、モスクワは放棄されるであります！それは身代わりとなるでしょ

う！」と一人が叫んだ。

「あいつは人類の敵だ！」。他の者が叫んだ。「私にも言わせてくれ...諸君、君たちは私を押しつぶしてしまうじゃないか...」

(『戦争と平和』3巻1編22章)

*トルストイは、グリーンカのきわどい部分はばっさり削り、軽薄で無内容な混乱した集会という方向に、強引にもっていつている。

7月19日：モスクワ総督ロストプチンとの最初の会合

グリーンカの手記にもどると、集会后、19日に、モスクワ総督のロストプチンから呼び出しがくる。行ってみると、「陛下が、あなたの執筆その他の活動に示された愛国心に対し、四等聖ウラジーミル勲章を授ける」とのこと。そして、ロストプチンはこう告げた。

陛下の名において、貴殿の舌を、祖国を益するあらゆる事柄のために解放し、また貴殿の手を、臨時の下賜金 30 万ルーブルに対して解放します。陛下は貴殿に特別な任務をお授けになりました。その件で、貴殿はこれから私と協議していくことになります。

Священным именем государя императора развязываю вам язык на все полезное для Отечества, а руки на триста тысяч экстраординарной суммы. Государь возлагает на вас особенные поручения, по которым будете совещаться со мною.

*30 万ルーブルとは半端な額ではない。そのような大金を要する特別な任務が、グリーンカとロストプチンに授けられた。その任務のために、この大金と「舌＝言葉」を自由に使うかまわない。何をしても、何をしゃべってもかまわない、ということだ。しかしその内容については、グリーンカは、手記の最後にいたるまではっきり明らかにしていない。にもかかわらず彼は、この「任務」に再三言及する。きわめて重要だが明言できないものだということになる。

ところで、この 30 万ルーブルだが、グリーンカはまったく手を付けず、のちに全額を国庫に返還している。

7月19日：特別な任務

グリーンカは、7月19日付けで、「ただちに特別な任務の遂行に入った」と記している。「この任務のせいで、モスクワでもその外でも、しばしば生命の危険があった」。しかし、「神は、私が善良なる市民の魂を奮い立たせつつ、頭脳を冷静にさせ、用心の方法を教え、彼らの遠慮、気詰まりをとりのぞき、怯えからくる拙速を防止するのを助けたもうた」という。モスクワ放棄まであと40日あまりであった。

また、グリーンカはほぼ毎日、「義勇軍委員会」に顔を出していたが、まもなくこの委員会は、アレクセイ・アラクチャーエフが委員長を務めるペテルブルクのそのの直属となった。

*アラクチャーエフは、ツァーリの側近中の側近というよりも、一心同体の「影」ともいうべき人物で、当人いわく「祖国戦争にかんする決定はすべて自分の手を通じてなされた」。「義勇軍委員会」がその彼の直属となったということは、ツァーリ、アラクチャーエフからの指令、連絡が、この委員会を通じて、モスクワのグリーンカ、ロストプチンらに送られていたことを示唆するのではないか。

スモレンスク陥落

やがて、スモレンスクが焼かれ、陥落した報がモスクワにつたわると、「この知らせは文字どおり、モスクワを打ち砕いた。通りでも広場でも住民たちの陰鬱な叫びが響いた。『モスクワへの門が開かれた！』。各都市、郡、村からの避難がはじまった」

スモレンスク陥落後、ロストプチンはグリーンカにこう言ったという。「私の主な仕事はいまや、貴族たちを保護し、各郡から退去させることです。国内の状況がどう転ぶかわかりませんからね」

バルクライ・ド・トーリ

グリーンカによれば、ナポレオンはモスクワを目指すと考えられたものの、ロシア側としては、南に向う可能性もすて切れなかったという。仏軍が南進すると、南部の補給基地と兵器廠がおびやかされるばかりか、和平をむすんだばかりのトルコも再び戦端を開くかもしれない。

だがバルクライは、退却による不満、非難を抑えつつ、仏軍を一定の方向に深く引き入れるのに成功した。グリーンカはバルクライを、古代ローマの将軍ファビアン（クイントゥス・ファビウス・マクシムス）⁵⁰⁹になぞらえつつ、最大限の賛辞で称えている。

*のちの 1812 年史では、バルクライは「ドイツ人」＝裏切り者という紋切り型が定着することになるのだが、「愛国的な」グリーンカではまだそういうことはないのに注意されたい。この先鞭をつけたのがほかならぬ『戦争と平和』なのだ。

8月17日のクトゥーゾフの総司令官着任

⁵⁰⁹ ファビウスは、名将ハンニバル率いるカルタゴ軍に対し、正面から戦いを挑むのを避け、相手の補給の弱さを突く作戦をとった。カルタゴ軍はアフリカの本国から遠く離れ、補給はもっぱら略奪に頼っていたからである。ファビウスは、カルタゴ軍の予想される進路を予め焦土化して、消耗を待った。もくろみどおり、カルタゴ軍は次第に疲弊し、本国への帰還をよぎなくされる。

当初、ファビウスの持久戦略は理解を得られなかったが、のちにファビアン戦略と呼ばれ、彼は「ローマの盾」と称えられることになった。

グリーンカは、バルクライに賛辞を捧げたあとで、8月17日のクトゥーゾフの総司令官着任について、実に注目すべきことを書いている。

この老獪な指導者は、その翼を広げ、モスクワへの退却の準備をしていた。モスクワを敵より守るためではなく、モスクワをまたぎ、モスクワによってロシアをさえぎり、守るために。<…> クトゥーゾフは、ボロジノの会戦のほぼ1週間前に（*つまり着任早々である——佐藤）、リャザン街道へ騎兵数中隊を派遣した。そのなかには、私の従兄弟ウラジーミル・アンドレーエヴィチ・グリーンカの中隊も含まれていた。

Хитрый вожьд под размахом крыл его, готовил отступление к Москве, не за отбой Москвы, но чтобы, перешагнув за Москву, заслонить ею Россию и отстаивать Россию. <…> Кутузов почти за неделю до битвы Бородинской отправил несколько рот конной артиллерии по Рязанской дороге. В том числе была и рота двоюродного брата моего Владимира Андреевича Глинки.

*つまり、クトゥーゾフは着任早々から、モスクワ→リャザン街道→カールガ街道の撤退のシナリオにそなえ、ルートの下見などの準備をしているわけである。その分遣隊のなかには、グリーンカの従兄弟ウラジーミル・アンドレーエヴィチ・グリーンカの中隊も含まれていた、というのだから、たしかな情報だろう。早くも当時から、クトゥーゾフとその周辺の頭のなかには、そういうオプションがあったばかりか、その実行に向けて具体的に動いていたことがここでも裏付けられる。

ボロジノの会戦前のモスクワ

モスクワ市内の状況については、グリーンカはこう描写している。

スモレンスク街道とドロゴミーロフスカヤ街道を除きすべての通りで、関所にむかって、ばね付き四輪箱馬車、ばね付き四輪幌馬車、ばねなし馬車、幌馬車、荷物を満載した荷車の列が伸びていた。ある者は木造の平底貨物船でありとあらゆる家財道具を送り、ある者は、子供たちの家庭教師たちを連れていった。べつに非難するのではないが、ただ、こうした持ち出し、脱出は、庶民をきわめて苛立たせ、怒らせた。モスクワからモスクワが出ていくように思われた（*このセリフは、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーも使っているから、人口に膾炙していたのだろう——佐藤）。とはいえ、大っぴらに伝えることはできなかった。そんなことをすれば、モスクワは、敵が入城するまでもなく、瓦解してしまっただろうから。

*なにを「大っぴらに伝えることはできなかった」のか？ モスクワが焼かれることではないか？…

こういう状況であった。なお、イワシキン・モスクワ県警察署長は、当時大きな木造の家をノヴィンスキー・ヴァール（現ノヴィンスキー・ブリヴァール）に建てていたが、通りすがりの人々は、「ほら、まだ家を建てようなんて奴がいる」と忌々しげに話していた。

*ここは現在アメリカ大使館などがある大通りだが、1812年の大火ではとくに焼け方がひどく、ほとんどすべての家屋が灰になった。ひょっとすると、イワシキン自身が、この区域も「担当」していたかもしれない。彼は、前に見たように、モスクワ放火の主な立役者のひとりとなる。

しかし、こんな状況、雰囲気でも、人々のトランプ中毒は直らなかった。「敵はどこか、まだ遠いかと、使いの者に聞きにやらせ、返事をもらって、戦況について数分話していたかと思うと、『ボストン！ ヴィスト！』と、またもや大声でおっぱじめるのだった」

*こういう描写はトルストイ的でもあり、彼をインスパイアしたかもしれない。

皇帝からの特別の命令

8月14日から15日にかけての深夜3時に、グリーンカは、カラウロフ大佐（義勇軍隊長）から書付を受けとる。大佐は、チチェーリン中将の指揮下にある。メモは、中将のもとへ行けという指令だった。

*ワシーリー・ニコラエヴィチ・チチェーリン（Василий Николаевич Чичерин, 1754-1825）は当時、義勇軍総司令官。1804－1809年にはトゥーラ兵器廠の長官を務め、兵器の増産に功績があり、1809年に退役していた。

グリーンカがただちに出頭すると、チチェーリンは「陛下の名において、貴下はモスクワに残られるようにとの命令です。貴下の任務はモスクワで必要となります」と言う。

*これはいうまでもなく、ナポレオン入城後もモスクワに残れ、ということだ。おそらく、この時点まで、グリーンカは、放火の実行犯の選定、教育、訓練、各所のコーディネートなどをしてきたと推測されるが、今度の指令は、放火に際して、現場で指揮、連絡に当たれ、ということだろう。

ここでもうひとつ注目されるのは、やはり義勇軍委員会（カラウロフ）が、ペテルブルクからの連絡の環であった、ということだ。そして、チチェーリンが直接呼び出すのではなく、カラウロフを通じて夜中に呼ぶという念の入った伝達方法をとっていることである。

ボロジノの会戦まであと10日、仏軍のモスクワ入城まで2週間あまりであった。

ボロジノの会戦後のモスクワ

グリーンカは、ボロジノの会戦後のようすについて、こんなふうを生々しく伝えている。

わが軍が退却してくるにつれて、ボロジノの暗鬱な平原が、モスクワの中に、その恐るべき戦死者の規模そのままに入ってきたかのようなようだった。通りはがらんとしていた。道行く人も、どこへ行くべきか分からなかった。知り合い同士が遭っても、無言で通り過ぎていくのだった。家々に人影の見えることは稀だった。

по мере отступления наших войск гробовая равнина Бородинская вдвигалась в стены Москвы в ужасном, могильном своем объеме! Солнце светило и не светило. Улицы пустели. А кто шел, тот не знал, куда идти. Знакомые, встречаясь друг с другом, молча проходили мимо. В домах редко где мелькали люди.

そして、大量の負傷者が運び込まれてくる。

その間にも、埃のとばりの下を、負傷者を乗せた荷車の列がゆっくりと進んでいった。私が住んでいるスモレンスク市場の近くでは、スモレンスクとボロジノで負傷した戦士たちが、マントと藁の上に横たわっていた。住民たちが急いで、血糊の固まった傷口を洗い、ハンカチやタオルやシャツを裂いて作った包帯で縛っていた。ちょうど私がひとりの負傷者の包帯を代えていたとき、ドロシキ（軽四輪馬車）で通りかかった警備司令官のゲッセが、馬車から飛び降りて、私を抱き接吻した。

А между тем под завесою пыли медленно тянулись повозки с ранеными. Около Смоленского рынка, близ которого я жил, множество воинов, раненных под Смоленском и под Бородиным, лежали на плащах и на соломе. Обыватели спешили обмывать запекшиеся их раны и обвязывали и платками, и полотенцами, и бинтами из разрезанных рубашек. В тот самый миг, когда я перевязывал раненого, ехал на дрожках тогдашний комендант Гессе. Соскоча с дрожек, он обнял и поцеловал меня.

*グリーンカは彼らと自分の運命に思いを馳せなかったろうか？ グリーンカ自らが彼らを焼き殺すであろうことを…。このことひとつとっても、自分が放火を指揮したなどどうして明言できようか。

ロストプチン総督との、モスクワ放棄前の最後の会合

モスクワ放棄の直前の 8 月 30 日、グリーンカはモスクワ総督ロストプチンと、首都放棄前の最後の会合をもっている。

グリーンカは、2 人の会話を正確に再現したと言っているのです、その部分を引用しよう。ここにも驚くべきことが語られている。

私：「閣下！私は家族を出発させます」

伯爵：「私はもう立たせました」

彼の目に涙が光った。ちょっと口をつぐんでから、彼はつづけた。「セルゲイ・ニコラエヴィチ！祖国の子として話しましょう。もし、モスクワが明け渡されるとしたら、どう思いますか？」

私：「ご存知のとおり、7月15日に貴族の集会で、私はもうそのことを敢えて申しました。しかし、伯爵、正直におっしゃってください。モスクワはどう明け渡されるのですか？血を流してですか、無血でですか？」

伯爵：「無血でです」

Вот разговор наш без примеси и в точности исторической.

Я. "Ваше сиятельство! Я отправляю мое семейство".

Граф. "А я уже отправил своих".

Тут слезы блеснули в глазах его. Несколько помолчав, он продолжал: "Сергей Николаевич! Будем говорить как сыны Отечества. Что вы думаете, если Москва будет сдана?"

Я. "Вам известно, что я отважился объявить это пятнадцатого июля в зале Дворянского собрания. Но скажите, граф, откровенно: как будет Москва сдана, с кровью или без крови?"

Граф. "Без крови".

*公式には、9月1日（グレゴリオ暦13日）に行われたフィリでの軍議で、モスクワの無血開城を決めたことになっているのに、その前に、ロストプチンがそのことをはっきり知っている！この日記はあらためて、本稿の結論を裏づける。つまり、軍議の前に、モスクワ放棄は事実上決められていたということだ。そして、放火の担当者すなわちロストプチンに、いち早く知らせていた。

もう一つ注目されるのは、いずれ明け渡さざるをえないとしても、一戦まじえるか否かは、100パーセントの既定事項ではなかったらしいことだ。これはボロジノ後のいずれかの時点で現場の指揮をとるクトゥーゾフらが最終決断したと推測される。

二人の会話のつづきをみよう。もうひとつ、興味深いことが語られる。

その言葉を聞いて、私は立ち上がり、地図でモスクワとそれに隣接する諸県を示した。「モスクワを明け渡せば、この街を南部の諸県から切り離すことになります。それらの県を守るために、わが軍はどこに布陣するのですか？」

伯爵：「旧カルーガ街道です。そこに私の村ヴォロノヴォ（Вороново）もありますが、焼き払います」（実際にヴォロノヴォは、伯爵自らの手で焼き払われた）

伯爵がこれらすべてについて話したのは、8月30日の午前10時だった。モスクワ明け渡しにかんする軍議は8月31日から9月1日にかけての夜に行われたが、伯爵は招かれ

なかった。してみると、彼は自らの推測で、どこにロシア軍が腰を据えて、わが国の南部を攻撃から守るか、その場所を示したのだ。

При этом слове я привстал и, указывая на карте на Москву и на смежные с нею губернии, Указал: "Сдача Москвы отделит ее от полуденных наших областей. Где же армия к обороне их займет позицию?"

Граф. "На старой Калужской дороге, где и село мое Вороново, я сожгу его". (И Вороново было сожжено собственной рукою графа.)

Граф говорил все это в десять часов утра 30 августа, а совещание о сдаче Москвы происходило 31 августа в ночь на первое сентября. Граф не был приглашен. Следственно, он по собственному соображению указал то место, где русское войско станет твердою ногою и заслонит от нашествия полуденный наш край.

*モスクワ放棄後のカルーガ街道行きシナリオも知っている！ やはり、これまでみてきたとおり、ボロジノのずっと前から決まっていただけでなく、それにそなえて準備もしてきており、放火の組織者ロストプチンもそれに加わっていたことが裏づけられよう。

「ロストプチンの推測だろう」という部分は、グリーンカがとぼけているのだろう。総督が無血開城を知っていたことも、彼自身の推測だとでもいうのか？

*8月31日の軍議とあるのは、9月1日の誤りである。とすると、この2人の会見も、30日ではなく31日かもしれない。

モスクワ放棄に向けてのクトゥーゾフの指令

グリーンカによると、モスクワ放棄に向けて、クトゥーゾフは以下の指令を発した。

第一に、住民をモスクワから退去させるために、クトゥーゾフは、騎乗した官吏を派遣した。彼らは、9月1日の夜近く、ドロゴミーロフスカヤ関所またはスモレンスカヤ関所から疾駆しながら、「逃げなさい！逃げなさい！」と叫んだ。

РАСПОРЯЖЕНИЯ КУТУЗОВА К СДАЧЕ МОСКВЫ

К безоборонной сдаче Москвы Кутузов сделал следующие распоряжения:

Во-первых, для удаления обывателей из Москвы Кутузов посылал конных чиновников, которые к вечеру 1 сентября от Драгомиловской или Смоленской заставы, мчась вихрем по улицам, кричали: "Спасайтесь! Спасайтесь!"

*これも痛し痒し。作戦上、撤退まぎわにほんのおしるしだけの避難勧告をするしかなかった。なにしろ、大量の負傷者を置き去りにせざるをえないのだから…。住民としてはたまったものではない。

第二に、自軍のモスクワ市内での動きを敵から隠すため、ロストプチン伯ではなく、当時のモスクワ県警察署長であるイワシキンにつきのことを要求した。最も経験豊かな直属の警察分署長に道案内させて、さまざまな関所を経由しつつ敵の目を欺き、ロシア軍を所期のリャザン街道に導くことである。

Во-вторых, к утаению от неприятеля движений своих в Москве, он вытребовал не у графа Ростопчина, но у тогдашнего обер-полицмейстера Ивашкина опытейших частных приставов для провождения его дальнейшими дорогами, чтобы, коснувшись различных застав, развлечь внимание неприятеля, а войско русское вывести на предположенную Рязанскую дорогу.

*ここに、放火の主な組織者のひとりであるイワシキン警察署長が登場することに注意されたい。彼は、軍の撤退と放火の双方にかかわっていたことになる。

第三に、モスクワの外でも敵を欺くために、クトゥーゾフは、D.I.ロバノフ公爵がウラジーミルで新たに編成した軍隊を、ウラジーミル街道に留め置いた。本隊は、モスクワから20露里、後衛は4露里のノーヴァヤ村にあった。ナポレオンの目に、あたかもロシア軍と輜重がカザン方向に進んでいるように見せるため、クトゥーゾフは、モスクワ県警察署長イワシキンに（やはりロストプチン伯を介さずに）命じた。「すべての消火器材をウラジーミル方向に運び出せ」。その搬出のために騎兵数隊を付けてやった。私は、クトゥーゾフがみずから鉛筆で署名した、イワシキン宛の命令書二通をこの目で見た。また私はつぎのことを耳にした。ボロジノの戦いの前に、輜重に対してウラジーミル街道またはカザン街道に曲がるように命じられていたことである。

В-третьих, к уловлению неприятеля за Москвою Кутузов остановил на Владимирской дороге войско, вновь устроенное князем Д. И. Лобановым во Владимире. Главный корпус находился в двадцати, авангард в четырех верстах от Москвы в Новой деревне. А чтобы показать Наполеону, будто бы и войско и обозы движутся к Казани, Кутузов приказал обер-полицмейстеру (также мимо графа Ростопчина): "Пустить по Владимирке весь огнегасительный снаряд", — к которому прикинул несколько конных отрядов. Я видел оба предписания Кутузова Ивашкину, начертанные карандашом собственною его рукою. Слышал я также, что перед Бородинскою битвою и обозам приказано было повернуть на Владимирскую или Казанскую дорогу.

*じつに用意周到だ。くどいようだが、これだけのことが、9月1日のフィリの軍議のあとの数時間で全部決めて実行できるわけがない。じっさい、ボロジノの戦いの前に、輜重に対して、このような移動の命令が出ているではないか。モスクワ放棄に向けて、政府、軍、モスクワ市、警察がボロジノ以前から協力して準備していたことは、この指令一つをとってもあきらかだ。

モスクワの放火についても、ほかならぬ軍の総司令官であるクトゥーゾフがイワシキンに消火器材の搬出を命じている。その際、露軍が撤退するリャザン街道ではなく、ウラジーミル街道に運んだのは、敵を撒くためであり、放火と軍の陽動作戦とがセットになっていた。そして、その「合わせ技」にかんする総司令官の署名入り指令を、グリーンカが目にしていた…。

軍、警察の放火に際しての協力、そしてグリーンカのコーディネートも明白なわけだが、ひとつ引っかかるのは「ロストプチン伯を介さずに（頭越しに）」とわざわざ断っていることだ。

おそらく、グリーンカは、のちのロストプチンがそうだったように、放火を組織したことを、言いたくもあれば言いたくもなし、という気持ちがあったのではないか。自分は、指導部に献策して、ツァーリ直々に特別の任務を与えられ、モスクワに残って命がけで遂行した。だが、そのために、聖都は失われ、負傷兵2万余が焼け死んだ…。

ところで、トルストイは『戦争と平和』で、大火の原因を論じたくだり、この消火器材の搬出についても触れ、これは火事の原因とは無関係と主張している。

百数十の旧式のポンプがあろうとなかろうと、住民がいなくなった、木造家屋が密集した都市は焼けざるを得なかった。モスクワは焼けるべくして焼けたのだ、とトルストイは言うのだが、では、なんのためにわざわざ消火器を運び出したのか？ トルストイ説は、すでに見たように、ためにする議論、強弁と言わざるをえない。『戦争と平和』は現実に根ざしているが、フィクションであることを忘れまい。

モスクワ放棄後の第一夜

モスクワ放棄後、グリーンカは、関所から1露里のところ、ヤコフ・デサングレンと会う。彼はグリーンカに、総司令部に行こうと誘った。

*ヤコフ・デサングレン（Яков Иванович Десанглен）は、バルクライが創設した軍事警察（軍の諜報機関）の長官である。その彼が、総司令部に行こうと誘ったということは、グリーンカの任務がひとまず終わったということだろう。

やがて、グリーンカは、巨大な爆発音と炎が上がるのを見る…。

そうこうしているうちに、見捨てられたモスクワの上に垂れ込める宵闇は濃くなっていった。モスクワの外では、軍の行進とごった返す大群衆と輜重から、埃が柱状に舞い上がり、モスクワ上空の消え行く夕日を遮っていた。突然、雷のような爆発音が轟き、炎がパッと上がった。それは、シーモノフ付近で、補給物資を積んだ解が爆発したものであった。炎は、燃え出した酒屋（винный двор）から、「川向こう」に燃え広がった。兵士たちはモスクワの方に振り向きざま、哀しげに叫んだ。「燃えてる！母なるモスク

ワが燃えてる！」。私は重苦しい、陰鬱な悲しみに心を閉ざされて、馬から身を投げた。苦い涙が滝のように流れ、それが埃と混ざった。弟のフョードル・ニコラエヴィチが私を抱き起こして言った。「兄さんは自分で、モスクワの運命を予言していたじゃありませんか。今ご自分の目でご覧になっていることを予期していたじゃないですか」。私は答えた。「たしかに私は、モスクワが明け渡されるだろうと言ったよ。火事の運命が見舞うことも予期していた。でも、モスクワから我々の古の聖物や遺物を運び出すだろうと期待していたんだ。それが焼かれて灰になってしまうんじゃ、気持ちと考えのやり場がないじゃないか？」

ПЕРВЫЙ ВЕЧЕР ЗА МОСКВОЮ

Между тем угрюмо сгущался сумрак вечерний над осиротевшею Москвою; а за нею отхода войск, от столпившихся сонмов народа и от теснившихся повозок, пыль вилась столбами и застилала угасавшие лучи заходящего солнца над Москвою. Внезапно раздался громовой грохот и вспыхнуло пламя. То был взрыв под Симоновым барки с комиссариатскими вещами, а пламя неслось от загоревшегося винного двора за Москвою-рекою. Быстро оглянулись воины наши на Москву и горестно воскликнули: "Горит матушка Москва! Горит!" Объятый тяжкою, гробовою скорбью, я ринулся на землю с лошади и ручьи горячих слез мешались с прахом и пылью. Приподнимая меня, брат Федор Николаевич говорил: "Вы сами предсказали жребий Москвы, вы ожидали того, что теперь в глазах ваших". — "Я говорил о сдаче Москвы, — отвечал я, — я предвидел, что ее постигнет пожарный жребий. Но я мечтал, что из нее вывезут и вековую нашу святыню и вековые наши памятники. А если это все истлеет в пламени, то к чему будет приютиться мысли и сердцу?"

* 「補給物資を積んだ斛」とあるが、これは、クトゥーゾフの副官だったミハイロフスキー＝ダニレフスキーなどが書いているように、露軍が置いていった弾薬である——放火のために。

こうして、グリーンからのモスクワ放火の任務は成功したわけだが、彼は、こんなこととは思わなかったと嘆く。つまり、聖物や負傷兵はちゃんと運び出すと思ったから、放火を引き受けたのに、これでは気持ちのやり場がないと言っているわけだ。

「モスクワ大火はあなたの仕事だ」

グリーンによると、彼がこの手記『1812年についての回想』を公にする前から、彼がモスクワの放火で重要な役割を果たしたとの推測はあったという。

『回想』によれば、ブトゥルリン将軍（Дмитрий Петрович Бутурлин）は、ロストプチンの書いた「モスクワ大火の真実」⁵¹⁰を読んで、ロストプチンのもとには、大火の「偉業」をな

⁵¹⁰ Ростопчин Ф.В. Правда о пожаре Москвы. Сочинение графа Ф.В. Ростопчина / Пер. с франц. А. 441

しとげた、決断力のある人物がいたはずだ、と推測した。

また 1835 年 9 月には、グリンカの友人である文士がやってきて、彼をみるやこう叫んだという。

だれがモスクワを焼いたか、ずい分探したよ。それはあなただ。あなたが、特別の使命を帯びてロストプチン伯のもとにいたのだ。私は、自分の手記に書いて、後世に伝えるよ。モスクワ大火はあなたの仕事だ、と。

"Отыскал, отыскал того, кто сжег Москву: это вы. Вы были у графа Ростопчина при особенных поручениях, и я передам потомству в записках моих, что пожар московский ваше дело".

これに対してグリンカは一応否定する。「たしかに、私は 1812 年に特別な使命を帯びていた。人々の精神を導いたが、でも、モスクワは焼いていない」

しかし、これにつづけてグリンカは、こんな含みの多いことを、その友人に言っている。

モスクワを運命の時が見舞ったのなら、クセルクセスに攻撃されて、アテネを炎にゆだねたアテネ市民のように、われらロシアの子らも、モスクワに同様の運命を負わせねばならぬことを、よもや疑いはすまい。再びくりかえす。モスクワは天の火が焼いたのだ。<...> 後世の人々は、1812 年の全貌をみて、こう言うだろう。「モスクワは焼けた。焼けねばならなかったのだ。消防ポンプは運び出され、あちこちの通りには、夜営の火が燃えていた。それらの火を消すべき人間はいなかった。モスクワ市内では、戦闘、飢え、炎、そして火事」

если над Москвою ударит роковой час, то, подобно афинянам, обречшим пламени Афины при нашествии Ксеркса, и мы, сыны России, не усумнимся подвергнуть Москву такому же жребию. Снова и теперь повторяю: Москву жег огонь небесный. <...> Потомство не станет из пучины пожара московского выкликивать имен. Взглянув на объем 1812 года, оно скажет: "Москва горела и должна была сгореть. Трубы были вывезены, огни бивачные пылали по улицам, гасить их никто не подряжался. В стенах Москвы воевали и голод, и страх, и огонь, и пожар".

* グリンカの表現を借りれば、「スモレンスクからモスクワまで炎の海 *огненное море*」にならねばならなかったのは、大きな運命である。「モスクワに同様の運命を負わせねばならなかった」のも、運命である。そのために、消防ポンプを運び出した。「天の火 *огонь небесный*」である――。

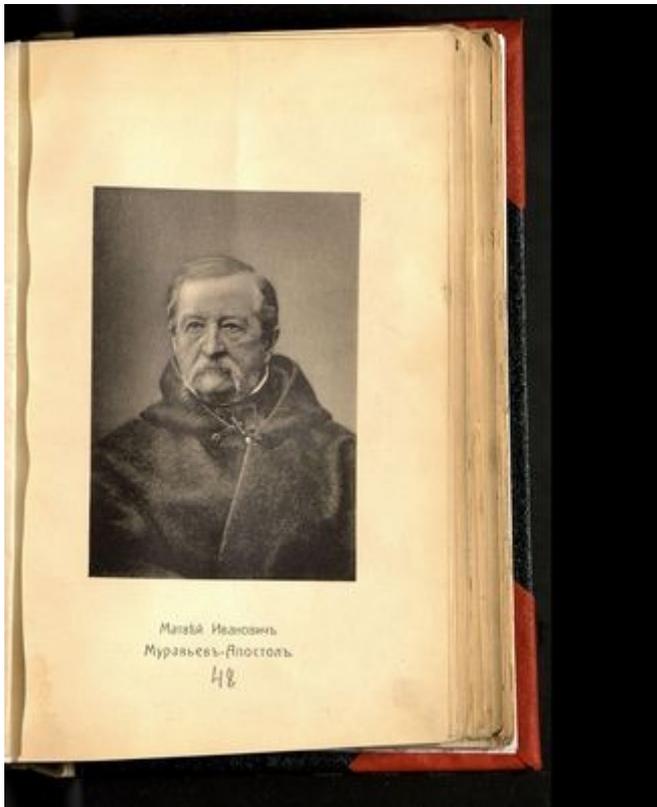
トルストイの表現に酷似しているのがおもしろい。彼は、ほかならぬグリンカからヒント

を得たのではあるまいか。

だれがモスクワを焼いたのか？ ツァーリ、政府、クトゥーゾフ以下の軍、ロストプチン・モスクワ総督、イワシキン・モスクワ県警察署長、セルゲイ・グリーンカ、および彼らの配下にあった者たちが協力してやったのだ。それは運命であった…。

3) デカブリスト、マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの手記

——祖国戦争の残したものは？——



マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストル (1793－1886) ⁵¹¹

まず、マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストル (Матвѣй Ива́нович Муравѣев-Апóстол) の経歴をみておこう。

ムラヴィヨフ＝アポストル家は、名門ムラヴィヨフ＝アポストル門に属しており、父イワン (1762－1851) は、3500 人ほどの農奴を所有していた。パーヴェル一世暗殺の首謀者の一人となるニキータ・ペトローヴィチ・パーニンに引き立てられて、外交官として出世街道を順調に歩み、1801 年には外交参議会副総裁になっていた。同年 3 月のパーヴェル暗殺にも、何らかのかたちで関与したことは確実である。ところが、アレクサンドルが即位すると、パーニンにつづき、彼自身も失寵の憂き目に遭う。1805 年には職を退いて、以後 1824 年までまったく勤務しなかった。息子のマトヴェイは、その回想からうかがえるように、アレクサンドルにはネガ

⁵¹¹ Головачев П. М. Декабристы: 86 портретов, вид Петровского завода и 2 бытовых рисунка того времени. М., 1906. *本書の 146 頁と 147 頁の間にマトヴェイの写真がある。

<http://elib.shpl.ru/ru/nodes/16345#page/275/mode/inspect/zoom/4> (2015 年 9 月 10 日最終閲覧)

ティヴな感情を抱いていたと思われるが（これについては後述する）、その根は、ひとつにはこの辺にありそうだ。

イワンの3人の息子、マトヴェイ、セルゲイ（1796–1826）、イッポリト（1806–1826）は、いずれもデカブリストとなった。

マトヴェイとセルゲイは、1802年までパリの私立の寄宿学校で教育を受けた。1809年に帰国し、1811年末から軍務に就く。祖国戦争が勃発すると、全戦役に参加し、ボロジノでは勇戦して、兵士および下士官用の聖ゲオルギー十字勲章（солдатский Георгиевский крест）を授けられている。これは真の勇士の証だ。「諸国民の戦い」にも加わり、1814年に帰国する。以後、順調に軍歴を重ねていく。1822年には、ポルタワ歩兵連隊少佐に昇進するが、翌23年に中佐で退役してしまう。

1816年には、デカブリストの最初の秘密結社、「救済同盟 Союз спасения」の創設者の一人となる。その後1821年に、後身の「福祉同盟 Союз благоденствия」が南方結社と北方結社に分裂すると、前者の中心メンバーの一人として、再統一を目指し、交渉に当たる。

1825年の反乱に際しては、ウクライナのチェルニゴフ連隊の反乱に加わる。弟セルゲイがこの反乱を指揮していたが、政府軍に散弾を浴びせられてかんたんに鎮圧されてしまう。弟イッポリトは、負傷したセルゲイを見て、死んだと勘違いし、ピストル自殺する。マトヴェイとセルゲイは捕えられた。

特別法廷での裁判の結果、セルゲイは処刑され、マトヴェイはシベリア流刑となる。1827年にヴィリュイスク（現サハ共和国）に送られると、当地で学校を開き、地元民の啓蒙に努めた。医者がいなかったので、医療活動にも従事している。1832年、司祭の娘、マリア・コンスタンチノワ（1810–1883）と結婚する。1856年、アレクサンドル二世即位にともなう恩赦で、シベリアから帰還した。

死の3年前に回想を口述筆記し、また、自身の記憶にもとづき、デカブリストたちの埋葬地のリストを作成する。1886年にモスクワで死去し、ノヴォデヴィチ修道院に葬られる。

話を祖国戦争にもどそう。

結局のところ、祖国戦争とはロシア人にとってなんだったのか。これまで述べてきたような悲惨さやおぞましきは、直接参加した将兵の多くが承知していたと思われるが、にもかかわらず、輝かしい神話に結晶する。その神話をかたちづくったものはなんなのか。それは現実の祖国戦争とつながっているのか、それとも美しい夢物語か。

デカブリストのマトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストル（1793–1886）の回想は、こうした間に答えてくれるように思われる。

マトヴェイは、祖国戦争の厳冬期をこう振り返る。

もう一度くりかえすが、われわれには、短い毛皮外套もなかった。しかし、凍えた兵

士はおろか、凍えかかった者さえ、ひとりもみたことがない。夜になると、中隊は、みんなの外套の一部を雪上に敷き、体をぴったりくっつけ合って寝た。ほかの外套は、みんな共通の毛布代わりになった。われわれ特務曹長は兵隊たちのあいだに寝た。寒さを感じず安らかに眠り、朝がくると、共通の寝床から明るく元気に起き上がった。士官たちは、テントを縫わせて、馬に積んで運んでいた。⁵¹²

これは驚くべきことだ！ 雪上に直に寝る。しかも、兵士のあいだに、おなじ外套にくるまって。そして朝は元気に起き上がる…。驚嘆すべき連帯感と士気の高さだ。

今現在から離れて、あの過ぎ去りし時に思いを馳せるとき、そこにはるかに多くの温かみを見出す。両者のちがいは、一言で言い表される。「愛していた」のだ。われわれは 1812 年の子だ。祖国のために、あらゆるものを犠牲に供することは——たとえ命そのものでも——心の欲求だった。われわれの感情はエゴイズムとは無縁だった。神がそれを証される…⁵¹³

こうして、記憶のなかで「愛」に収斂していく。

デカブリストの「愛」から外れるツァーリ

しかし、これはどういう愛だろうか？ その「愛の環」に入るのはだれか？ もちろん、マトヴェイら下士官と兵士たち、おしなべて前線で戦った将兵たちだろう——そして農民たちも。兵士とは農民だ。

だが、「テントを縫わせて、馬に積んで運んでいた士官たち」はどうだろう。参謀本部の将校たちは？ 将官たちは？ このあたりになると、かなり環から外れる人たちが出てきそう。宮廷とアレクサンドル一世は？ あきらかに外れるだろう。やはりデカブリストになったセルゲイ・ヴォルコンスキーの反発を思い出していただきたい。

マトヴェイもまた、アレクサンドル一世についてこんな話を書いている。父帝パーヴェル一世暗殺にまつわる話だ。すこし長くなるし、ここでの本筋からも逸れるが、マトヴェイらのアレクサンドル一世と宮廷に対する侮蔑と嫌悪が明らかに感じられるので、要約する。

1820 年に、モスクワのイギリス・クラブで、アルガマコフ（Аргамаков）は多数の聴き手を前に、自分がパーヴェル一世暗殺に巻き込まれた経緯を話した。マトヴェイは、これを直接自分の耳で聞いたのである。アルガマコフは、1801 年の暗殺前夜、ミハイロフスキー城警備

⁵¹² Воспоминания и письма М.И.Мурavyева-Апостола. В кн. Мемуары декабристов. Южное общество. М., 1982. С.174.

*マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポステルの回想は、1886 年に発表された。正確な執筆時期は、本書には示されていない。

⁵¹³ Мурavyева-Апостола М.И. Там же. С. 177—178.

連隊副官（полковой адъютант и плац-майор Михайловского замка）だった。

それによると、惨劇の舞台となったミハイロフスキー城は、周囲を堀で囲まれ、橋は、当時は跳ね橋だった。したがって、アルガマコフの協力なしには、深夜、城に侵入することは不可能だった。彼ははじめ、陰謀に加わることを拒んでいたが、ほかならぬアレクサンドル一世が、ミハイロフスキー城でアルマゴフに会ったときに、これを咎めたという。

アレクサンドル・パーヴロヴィチは、ミハイロフスキー城の廊下でアルガマコフに会うと、この件で彼を咎め、自分（*アレクサンドル——佐藤）のためにではなくロシアのために陰謀にくわわるよう頼んだ。アルガマコフは同意せざるをえなかった。⁵¹⁴

マトヴェイは、祖国戦争に際し参謀総長を務めることになるベニグセン⁵¹⁵が、この陰謀に加担した動機についても触れている。要するに、ズーボフ一族と親しかったために、1798年9月30日に退役させられていたベニグセンは、自分の身の安全のために暗殺に加わったにすぎない、と言う⁵¹⁶。

マトヴェイの考えを推し量ってみると、ベニグセンは、自分かわいさでツァーリ殺しをあえてしたくせに、「偶然巻き込まれた」とか「殺害の現場にはいなかったとか」、口を拭いている。そんなベニグセンを、父殺しのアレクサンドルは重用するが、陰謀の立役者ピョートル・パーレンのほうは、「犯罪者」呼ばわりして、遠ざけてしまう。

アレクサンドルとベニグセンは弱さと弱さでむすびついたような感じを受ける。アラクチャーエフとの特異な、異常なまでに近い関係などを考えても、どうもアレクサンドルには陰湿、陰険なところがある。こんな印象をマトヴェイは抱いていたように思われる。

将軍たちのなかで「愛の輪」に入るのは？

話を「愛」にもどすと、だから、その「環」に入るのは、前線で命をかけて戦った将兵と農民、そして、やはりほんとうに命がけで彼らを導き、戦った将帥たちだ。とはいえ、バグラチオン、ラエーフスキー、ミロラドヴィッチなどの奮戦は見えやすかっただろうが、クトゥーゾフの真価は分かりにくかったのではないか。彼の功績と人となりを見抜き、その最も本質的な面を明らかに示し、しかも彼の評価を不動のものとした点で、『戦争と平和』の果たした役割は、なんととっても大きい。しかし、クトゥーゾフをもしのぐバルクライ・ド・トーリの功業は？... バグラチオンの口吻を借りれば、この「ナポレオンをロシアに案内した外国人」の真価をマトヴェイが理解していたかどうかは分からない。

ちなみに、デカブリストたちと親しかった詩人アレクサンドル・プーシキンは、バルクラ

⁵¹⁴ Муравьева-Апостола М.И. Там же. С. 170.

⁵¹⁵ ベニグセンについては、本稿第2部の328頁の注を参照。

⁵¹⁶ Муравьева-Апостола М.И. Там же. С. 169—170.

イについて、「軍司令官」(1835)という詩を書いている。大詩人の眼力を物語ってあまりあるものだが、ロシアでも一般にはさほど知られていないので、訳出しておこう。詩人は、バルクライと自らの孤独を重ね合わせている。

アレクサンドル・プーシキン

軍司令官

ロシアのツァーリの宮殿にはひとつの部屋がある
その富は黄金のゆえでも羅紗のゆえでもない
ガラスのなかに王冠のダイヤモンドが保存されているのでもない
しかし、上から下まで、部屋の長さいっぱい、ぐるりと一面に
自在で伸びやかな筆で
部屋一面に画家がその慧眼をもって絵を描いた
ここには田園のニンフもマドンナもなく
杯もつファウヌスも胸の豊かな妻たちもない
踊りも狩りもなく、皆、マントを羽織りサーベルを帯びている
そしていずれも勇気みなぎる面魂
画家はところせましとかけ連ねた
ここにあるのはわが国民の軍隊の指導者たち
奇跡の行軍の栄光に覆われ
1812年の永遠の記念を刻された
私はしばしば彼らの間をゆっくりと歩む
そして、なじんだ容貌を見つめる
そして、彼らの雄叫びが聞こえる心地がする
彼らのなかの多くの者はすでになく、
鮮やかな画布のなかでは若々しい者たちも
すでに年老い、静寂のなかになだれている
その月桂冠を戴いた頭を...

だが、この峻厳なる人々のなかで
一人が他のだれにも増して私を引きつける。思いを新たに
いつでも彼の前に立ち止まる——そして
彼から目を離すことができない。長く見つめるほどに
いよいよ重苦しい悲しみにさいなまれる。

彼は全身像を描かれている。額はむき出しの頭蓋骨のようで、高く光沢があり、深く根を下ろしてしまったように思える、大いなる悲哀が。周囲には靄が立ちこめている彼の背後には陣営。落ち着いて沈鬱な彼は侮蔑の念をいだいて眺めているように思える。画家は自分の考えを正確に表したのか、彼をこのように描いたときに、それとも、思い設けぬ靈感であったのか——いずれにせよ、ドウ（*画家 George Dawe ——佐藤）は彼にこのような表情を与えた。

ああ、不幸な指導者よ！...あなたの運命は険しかったすべてをあなたは、あなたにとって異郷の地に捧げた。物の分からぬ俗衆の理解を絶したあなたは黙して、ひとり偉大な思想をいだきつつ歩んだあなたの名の耳慣れぬ響きを嫌い、誹謗中傷を事とし、人々は、あなたに密かに救われたのに、あなたの聖なる白髪をののしり、鋭い知恵であなたを理解しえた者も、自分に都合よきよう、狡猾に非難した...にもかかわらず、長きにわたり、強固な確信に支えられ、人々の迷いを前に、あなたは確固不拔であったにもかかわらず、道半ばにして無言で譲らねばならなかった、月桂冠も、権力も、深く考え抜いた構想も——そして、一司令官として孤独に隠れねばならなかった（*クトゥーフに総司令官を譲らねばならなかったことを指している——佐藤）。

だが、あそこでは（*ボロジノの会戦では——佐藤）、疲れ果てたる指導者よ！ 若き戦士さながらに、陽気な弾丸のうなりを真っ先に聞き、戦火のなかに身を投じた、待ち望んだ死を求めて——されど望みはかなわず！——

.....

.....

ああ、人々よ！ 涙と笑いが相応の哀れなる者どもよ！
束の間に奉仕する者たちよ、成功の跪拝者たちよ！
なんとしばしば、君たちのかたわらを通り過ぎていくことか、
盲目の荒れ騒いだ時代が嘲笑した人間が、
だが、その崇高なる容貌は、次の世代において
詩人を驚嘆と感動に導くだろう！

ПОЛКОВОДЕЦ.

У русского царя в чертогах есть палата:
Она не золотом, не бархатом богата;
Не в ней алмаз венца хранится за стеклом:
Но сверху до низу, во всю длину, кругом,
Своею кистию свободной и широкой
Ее разрисовал художник быстро-окой.
Тут нет ни сельских нимф, ни девственных мадон,
Ни фавнов с чашами, ни полногрудых жен,
Ни плясок, ни охот, — а всё плащи, да шпаги,
Да лица, полные воинственной отваги.
Толпою тесною художник поместил
Сюда начальников народных наших сил,
Покрытых славою чудесного похода
И вечной памятью двенадцатого года.
Нередко медленно меж ими я брожу
И на знакомые их образы гляжу,
И, мнится, слышу их воинственные клики.
Из них уж многих нет; другие, коих лики
Еще так молоды на ярком полотне,
Уже состарелись и никнут в тишине
Главою лавровой...
Но в сей толпе суровой
Один меня влечет всех больше. С думой новой
Всегда остановлюсь пред ним — и не свожу
С него моих очей. Чем долее гляжу,
Тем более томим я грустию тяжелой.

Он писан во весь рост. Чело, как череп голый,
Высоко лоснится, и, мнится, залегла
Там грусть великая. Кругом — густая мгла;

За ним — военный стан. Спокойный и угрюмый,
Он, кажется, глядит с презрительною думой.
Свою ли точно мысль художник обнажил,
Когда он таковым его изобразил,
Или невольное то было вдохновенье, —
Но Доу дал ему такое выраженье.

О вождь несчастливый!... Суров был жребий твой:
Всё в жертву ты принес земле тебе чужой.
Непроницаемый для взгляда черни дикой,
В молчаньи шел один ты с мыслию великой,
И в имени твоём звук чуждый не взлюбя,
Своими криками преследуя тебя,
Народ, таинственно спасаемый тобою,
Ругался над твоей священной сединою.
И тот, чей острый ум тебя и постигал,
В угоду им тебя лукаво порицал...
И долго, укреплен могущим убежденьем,
Ты был неколебим пред общим заблужденьем;
И на полу-пути был должен наконец
Безмолвно уступить и лавровый венец,
И власть, и замысел, обдуманый глубоко,—
И в полковых рядах сокрыться одиноко.
Там, устарелый вождь! как ратник молодой,
Свинца веселый свист слышавший впервой,
Бросался ты в огонь, ища желанной смерти, —
Вотще! —

.....
.....

О люди! Жалкий род, достойный слез и смеха!
Жрецы минутного, поклонники успеха!
Как часто мимо вас проходит человек,
Над кем ругается слепой и буйный век,
Но чей высокий лик в грядущем поколеньи
Поэта приведет в восторг и в умиленьи!⁵¹⁷

⁵¹⁷ Пушкин А. С. Полководец: ("У русского царя в чертогах есть палата...") // Пушкин А. С. Полное собрание сочинений: В 16 т. М.; Л.: Изд-во АН СССР, 1937—1959. Т. 3, кн. 1. Стихотворения, 1826—1836. Сказки. — 1948. С. 378—380.



George Dawe による
バルクライ・ド・トーリの肖像画（1829）

エルミタージュ美術館所蔵⁵¹⁸

「トルストイはすべてを書くことはできない」

さて、マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルに話をもどすと、彼をトルストイは何度か訪れている。マトヴェイは、作家が 1812 年について書こうとしていることに関し、こんな感想をヤクーシキン（В.Е.Якушкин）にもらしている。

⁵¹⁸ <http://en.gallerix.ru/album/Hermitage-4/pic/glrx-114859008>（2015 年 9 月 10 日最終閲覧）

トルストイは、彼が選んだ時代を、選んだ人々を描くことができるだろうか…。当時のロシアの真実の状態を描かなければならない。ロシア国民を押しひしいでいた、あらゆる恐るべき災いを正確に描かなければならない。だが、これらの災いを十全に描くことは、トルストイ伯はできない。たとえ、彼がそうすることを欲したとしても、許されない。⁵¹⁹

あの時代のすべてを描くことはできない…。政府も一般人も許さないだろう。では、なにが書けるのか。なにを書くべきなのか。「愛」だ。

しかし、その愛を入れる「器」は、事実そのままというわけにはいかない。トルストイは、独自の器を創らねばならなかった。それが『戦争と平和』にほかならない。

⁵¹⁹ «Русская старина», 1886, №7. С.158.

4) ミハイロフスキー＝ダニレフスキーによる最初の公式の祖国戦争史

案外リアルな最初の正史ミハイロフスキー＝ダニレフスキー：

『戦争と平和』以前の祖国戦争史はどんなものか？

『戦争と平和』が書かれる前と後では、祖国戦争のイメージがずいぶんちがうのに驚かされる。これは、トルストイの創った「器」の成功を物語るとともに、器と事実との乖離を示すものでもある。その乖離は、たとえば、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーの祖国戦争史をみると実感される。

アレクサンドル・イワーノヴィチ・ミハイロフスキー＝ダニレフスキー（1789－1848）は、陸軍中將、軍事史家で、ニコライ一世の命令で、1839年に、最初の公式の『1812年祖国戦争史』（4巻）⁵²⁰をまとめる。

父はゲッティンゲン大学で医学博士号を取得し、銀行（ЗЕМСКИЙ БАНК）に勤めていた。父の死後、遺産を得て、1808－1811年にゲッティンゲンに留学し、芸術史、政治、財政、法学などを聴講する。1811年に帰国後、大蔵省に勤務していたが、祖国戦争が始まるとペテルブルクで義勇兵に志願し、クトゥーゾフに副官に選ばれる。主にフランス語での通信に携わっていた。ボロジノの会戦ではじめて実戦に参加し、四等聖アンナ勲章を授与される。タルーチノの戦闘で重傷を負う。その後、参謀本部に勤務し、1814年－1815年の戦役に加わる。以後も、対トルコ戦争（1828－1829）、対ポーランド戦争（1831）などに参加し、1835年には、元老院議員および軍事検閲委員会委員長に任命される。

さて、そのミハイロフスキー＝ダニレフスキーの手になる祖国戦争史の注目すべきポイントを挙げてみよう。

外国人アレルギーがまだないこと

本書でまず注目されるのは、ドイツ人、外国人へのアレルギーがまだない、ということだ。『戦争と平和』以降は、クトゥーゾフ、バグラチオン以下の「ロシアの偉大な司令官」が民衆を率いるという図式に収斂していく。とくにソ連時代になると、一にクトゥーゾフ、二にバグラチオン、あとはおまけ、という構図がほとんどで、大家エフゲニー・タルレでさえ、かならずしも例外ではない。

『戦争と平和』以降のドイツ人、外国人アレルギーは、たんに彼らの役割を矮小化するだけでなく、事実の歪曲にまでおよんでいる。たとえば、祖国戦争でパルチザン部隊を創設したのはデニース・ダヴィドフだと、一般のロシア人はだれしも思いこんでいる。専門家はべ

⁵²⁰ Михайловский-Данилевский А. И. Описание Отечественной войны в 1812 году по высочайшему повелению сочиненное Генерал-Лейтенантом Михайловским-Данилевским : Ч. 1-4. СПб, 1839.

つだが、しかし、専門書にもそう書いてあるものがすくなくない。これに先鞭をつけたのは、やはりトルストイであり、デニーソフ（モデルはデニース・ダヴィドフ）がパルチザン部隊創設をクトゥゾフに進言し、みずからも部隊を率いて大活躍したことになる。ついでに言うと、仏軍の捕虜になったピエールを解放するのも彼の部隊だ。

ところが実際には、パルチザン部隊を創ったのは、すでに何度も述べたように、バルクライ・ド・トーリである。スモレンスクの会戦の前に、バルクライの第 1 軍とバグラチオンの第 2 軍が、8 月 2 日（7 月 21 日）にスモレンスク近郊で合流するや直ちに、フェルディナンド・ヴィンツェンゲローデ（1770—1818）に、仏軍の補給線を脅かすために兵 1300 を与えた。ヴィンツェンゲローデは、トヴェーリ街道を占領して、仏軍の後方および側面で、パルチザン戦を展開した。つまり、仏軍の馬糧徴発隊や略奪兵を捕らえ、諜報活動をおこなったのだが、これこそが祖国戦争最初のパルチザン部隊である。

ヴィンツェンゲローデは、ドイツ中部にあったヘッセン大公国の貴族出身で、男爵。トルストイは、こういう「ドイツの男爵たち」にまとめてネガティヴなレッテルを貼り、それを定着させるという離れ業をやったのけた。だが、この本にはそういう図式はまだない。

たとえば、ボロジノの会戦では、バルクライの決死の奮戦に相応のページが割かれ、英雄として描かれている。記述も具体的で、乗馬 5 頭がつぎつぎに倒れたことなどにも触れている。

トルストイは、もちろん、当たれるだけの資料は当たっており、バルクライのことも承知している。まったく無視というわけにはいかないのが、彼が考え出したのは、軽薄なドイツ人、ベルグにバルクライのことを吹聴させるというものだった。

ミハイロフスキー＝ダニレフスキーからやや話が逸れるが、『戦争と平和』がいかに外国人アレルギーをつくりだし定着させるのに成功したか、よくわかるケースなので、ここで引用しておこう。

モスクワから避難するために、荷造りに大わらわなロストフ家に、ベルグがやって来て、ボロジノの会戦とバルクライについて次のように言う。ちなみに、ベルグは、ラトビアの「リフリヤンド県出身の馬の骨」で（2 巻 3 編 11 章）、バルクライと同郷である。

「ただひとり無窮なる神のみがですね、お父さん」とベルグは言った。「祖国の命運を決しうるのです。軍は英雄的精神に燃えておりまして、今は、司令官たちが、なんといいですか、会議に参集しております。どうなるかはわかりません。でも、概して申し上げればですね、お父さん、かくも英雄的なる精神、ロシア軍の真に古武士的精神を、彼らが——じゃなかった彼が——とベルグは言いなおした——この 26 日の戦いで示した、いや発揮したんですが、それはまさに筆舌に尽くしがたきものでありまして…。私は申し上げますがね、お父さん（彼はどんと胸を打った。ちょうど、彼の前で物語った將軍そっくりに打ったのだったが、ちょっとタイミングが遅かった。「ロシア軍」というと

ころで打たなければならなかったのである)、私は率直に申し上げますがね、われわれ上に立つ者は、たんにその、兵士を追い立てるとか、そんなたぐいのことをやる必要がなかったばかりか、無理に、この、この...そうだ、勇武なる、古武士的勳しを抑えに回ったくらいでして」と彼は早口で言った。

「バルクライ・ド・トーリ將軍などはですね、至るところで、一身をもかえりみず軍の先頭に立たれたのです。わが軍団はというと、山の斜面に配置されました。いや、もうご想像もつかんでしょう!」。ここでベルグは、今までに耳にして覚えている、ありったけの話を並べ立てた。ナターシャは、まるでなにかの問題の解決を彼の顔に探しているかのように、じっと目をはなさずにながめていたが、その視線は彼をまごつかせた。

「概して、ロシアの戦士たちが発揮した英雄的精神は、あらゆる想像を絶し、絶賛に値します!」。ベルグは、ナターシャの顔をちらちら見て、彼女の執拗な視線に対して、取り入るかのように微笑みかけながら、言った...。「『ロシアは、モスクワのなかにあらずして、その子らの心中にあり!』。そうじゃないですか、お父さん?」とベルグは言った。

(『戦争と平和』3巻3編16章)

お前たちドイツ人にロシアの心のことなど云々する資格はない、と言わんばかりの露骨なカリカチュアだ。このあと、ナターシャはいきなり両親に、「わたしたちはドイツ人かなんかなの?」食ってかかり、荷車から家財道具を降ろして、負傷兵たちを乗せる。読者は、負傷者のことも忘れなかった「ロシアの心」に感動する。そして、それと同時にドイツ人アレルギーもしっかりインプットされるという仕組みだ。

「敵がモスクワを占領しても、水中のスポンジみたいにふやけるだけさ」(クトゥーフ)

ミハイロフスキー=ダニレフスキーに話をもどすと、前に書いたように、ボロジノ会戦の直後にクトゥーフは、「敵がモスクワを占領しても、水中のスポンジみたいにふやけるだけさ」と言ったという。まだ、フィリの軍議の前である。これがほんとうなら(なんといっても副官の証言だ)、モスクワ放棄が予想されており、当然、それに備えて準備もしていた、という結論を読者は出すだろう。

だから、この発言は、クトゥーフの慧眼をよく示しているにもかかわらず、トルストイは引用しない。

ボロジノの会戦にかんするクトゥーフの報告書も、ミハイロフスキー=ダニレフスキーはそのまま引用している⁵²¹。これには、会戦後「6 露里後退することに決定した」と明記されているので、アレクサンドル一世が状況をリアルに理解していたことも分かるのである。

⁵²¹ Михайловский-Данилевский А.И. «Описание Отечественной войны в 1812 году. Часть 2». СПб, 1839. С.287-288.

ミハイロフスキー＝ダニレフスキーには、クトゥーゾフの報告書へのツァーリの返書もそのまま載っている。「古よりの首都の防衛」を、一見強く押し出ししながら、くたびれ果てた軍には、ただ金を送る、という内容だ⁵²²。

これでは戦えるわけではないから、ここは退くしかない、という結論を、クトゥーゾフもアレクサンドルー世も出していたであろうことが、読者は推測できる。ツァーリが軍の苦境を承知のうえで、責任を自分から切り離して、クトゥーゾフに負わせようとしていたことも分かる。

また、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、バルクライを焦土作戦の立役者とみなし、この作戦を天才的だと言っている。

このように、焦土作戦、ボロジノの会戦、モスクワ放棄など主な事件と、バルクライら「外国人」をめぐる記述は妥当なものであり、祖国戦争の全体像は十分うかがえるのである。

フィリの軍議とモスクワ放棄のかなり忠実な再現

フィリの軍議も、バルクライの発言をはじめ、ほぼ事実通りにくわしく再現されている⁵²³。『戦争と平和』では、バルクライがほとんど無視されていることはすでにみた。

そしてこの軍議のあとで、軍の撤退が始まるとともに、ウラジーミル方面へ消防隊が運び出された、とミハイロフスキー＝ダニレフスキーは書いている。その直接の指令は、文脈からすると、クトゥーゾフから、ということになり、あっさり放火への軍の関与を示唆している(353, 374, 398, 399)。

露軍がモスクワに置いていった武器弾薬、負傷者などもかなり詳しく記しており、自軍の大損害(そして仏軍の戦利品の厩大さ)を隠さない。大砲156門、銃8万丁、砲弾2万7千発、火薬2万ポンド、負傷者1万人、古い旗などが、荷車の不足で残された。負傷者は飢え、火事などでほとんど死んだ、とある。負傷者数のみは、すでにみたように2万人以上に上るのでまちがっているが(もしかすると、わざと少なめに書いたのかもしれない)、ほかの数字はおおむね正しい⁵²⁴。

そうなる——ここが肝心なところだが——、軍としては、その足りない荷車を、負傷者と武器弾薬を棄ててまで、消火器材搬出などに当てる必要があった、放火はそれほど重要であり、厩大な武器弾薬、人命を犠牲にしても断行されるべき戦略であった、という認識が、読者には当然湧いてくるわけだ。

⁵²² МИХАЙЛОВСКИЙ-ДАНИЛЕВСКИЙ А.И. ТАМ ЖЕ. С. 290—294.

⁵²³ ТАМ ЖЕ. С. 322—332.

以下、この節での本書からの引用は、本文中に () で頁数のみ示す。

⁵²⁴ 大砲156門、銃74974丁、砲弾27119発、サーベル39846本である。

Троицкий Н.А. Там же. С.317.

Кутузов М. И. Сборник документов. М., 1954—1955. Ч.2. С.515-516.

ロストプチンの発言を矛盾ごと収める

また本書には、大火の件での、モスクワ総督ロストプチンのアレクサンドルー一世あて書簡 2 通が収められている。それによると、9月13日（9月1日）のフィリの軍議に先立ち、9月10日（8月29日）にロストプチンは、モスクワの食糧をカルーガ街道へ運び出せ、とクトゥーゾフから命じられたと言っている。ロストプチンは、だから、このことは、クトゥーゾフがこのときすでにモスクワ放棄を決めていたことを証明している、と述べている（397-398）。

放火については、ロストプチンは、「自分がやった」と認めこそしないが、この状況ではやるのが当然だと言ひ、その論拠をツァーリに向って並べ立てる。要するに、魚心あれば水心、自分がやったことを分かってほしい、放火の重要性も分かってほしいが、自分から責任を切り離しておきたい、ということだろう。

手紙のこのくだりを読むと、読者は自然とそういう考えに誘われる。それをミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、そのまま掲げているのだ。

大火の原因

大火の原因については、前に引用したように、軍は、消防隊を運び出した一方で、出航が間に合わなかった、弾薬を積んだ船を焼いたという。そのために市中に飛散した弾薬が火災の最初の原因の一つになったと、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーは述べている。

これは、クトゥーゾフと軍が放火に関わったと言っているにひとしい。もっとも、一部住民の「自発的放火」もあった、と書いているが。

アレクサンドルー一世の「芝居」

モスクワ放棄を知ったツァーリは、側近のピョートル・ヴォルコンスキーに、「なぜ元帥（*クトゥーゾフ——佐藤）がリャザン街道に向ったのかわからない。カルーガ街道に向かわねばならなかったはずだ」と言ったことが記されている（417-418）。モスクワを放棄した場合どこへ行くか、といったことが突っ込んで論議されていなければ、こういう発言は出てこないはずだ、と読者は思う。

読者は、このくだりを読んでから、9月21日（9日）にミショー大佐が、クトゥーゾフの報告書を皇帝に届けた場面に接することになる（418-423）。

ツァーリは、ミショー大佐のモスクワ放棄の報に接して悲嘆にくれてみせる。「なんと！ 会戦に負けたというのか？ あるいは戦わずして古都を敵手にゆだねたというのか？」。くさい芝居だ、と思わないわけにはいかないではないか。

これは、ミショーの証言にもとづくのだが、タルレは、いくらなんでもと感じたらしく、ミショーの嘘か記憶違いに帰している⁵²⁵。

⁵²⁵ Тарле Е.В. Там же. С.590-592.

という次第で、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、基本的にあったとおりのことを、さしさわりの悪いことはボカして書いた、という印象だ。とはいえ、トルストイのように、根本的にべつのお話を創るというものではないので、行間からおおよその事実は推測できるのである。

5) スターリン時代の大家エフゲニー・タルレ

エフゲニー・ヴィクトロトヴィチ・タルレ（1874－1955）は、ロシア、ソ連の歴史学者。『ナポレオン』（1936）、『ナポレオンのロシア遠征』（1937）、『クリミア戦争』（1944）などの研究で内外で知られる。

キエフのユダヤ人の家庭に生まれ、グリゴリーと名づけられる。両親は企業を経営しており、教育熱心だった。父は、ドイツ語をよくし、ドストエフスキーの翻訳なども手がけていた。母の家系には、ツァッディーク（ハシディズム〈敬虔主義〉の指導者）が多くいる。はじめはノヴォロシースク大学で、ついでキエフ大学で学ぶ。1893年にキリスト教に改宗するが、これはロシア貴族の女性、オリガ・ミハイロワと結婚するためであったという。以来、洗礼名エフゲニーを名乗る。

革命家のサークルに出入りし、何度か逮捕される。修士論文は、『ユートピア』で知られるイギリスの思想家、法律家トマス・モアにかんするもので、単行本として出版された。1903年にペテルブルク大学に迎えられる。交友関係は広く、アンナ・ドストエフスカヤ（作家の未亡人）、歴史家セルゲイ・プラトーノフ、また、フョードル・ソログープ、ウラジーミル・コロレンコ、コルネイ・チュコフスキーなどの作家や、宗教学者・画家のニコライ・レーリヒ、トルストイに『復活』の素材を提供した法律家アナトーリ・コーニなど、分野も世代も多岐にわたる。

1911年に、博士論文『フランスの革命期の労働階級』を執筆。1927年、科学アカデミー会員に選出される。

1917年の社会主義革命は、懸念をもって受け止めたという。事実、彼自身からして、粛清はまぬがれず、1929－1931年のセルゲイ・プラトーノフの事件に連座し、ソ連政権転覆を凶ったとして、カザフスタンのアルマトイに流刑となった。代表作の一つ『ナポレオン』は、同地で執筆を始めている。1937年3月に赦されてモスクワに戻ったのも束の間、同年6月、「プラウダ」、「イズベスチヤ」紙上で、『ナポレオン』が「敵の反攻の明らかな見本」*«яркий образец вражеской вылазки»*だとして猛烈に批判された。しかし、タルレは処罰をまぬがれた。スターリン個人の意向が働いていたと推測されている。

タルレは、非常にすぐれた研究者だが、主著の一つで、われわれにとって最も重要な『ナポレオンのロシア遠征』⁵²⁶は、1937年というスターリンの大粛清の年に書かれたことをまづ念頭におかねばならない。

⁵²⁶ Тарле Е.В. Нашествие Наполеона на Россию // 1812 год. М.: Академии Наук СССР, 1961.
以下、この節での本書からの引用は、本文中に（）で頁数のみ示す。

タルレは、クトゥーゾフの発言は、鵜呑みにしてはならず、それが、だれに対して、なんのために言われたのか常に考える必要がある、と書いているが、それは彼自身の仕事にかんしても当てはまる。

概して言えば、ボロジノの会戦のような目立つところでは、思い切り愛国調、「C調」の記述にしておいて、モスクワ放棄→大火→カルーガ街道への移動では、一転、力量を発揮している。しかし、全体としては、『戦争と平和』風の図式に収まるように、慎重に按配されている。

タルレを読むと、どんな研究をどこまでやれたかという点で、スターリン時代の一面がわかる。

それはともかく、タルレのような大権威が『戦争と平和』の構図を踏襲したことで、これはがっちりと固定されてしまった。とくに一般のロシア人の祖国戦争観、1812年観はもう変わることはないだろう。

これに対する本質的批判は、連邦崩壊前後に刊行されたニコライ・トロイツキーの仕事をもたねばならない。だが、その彼にしても、批判の矛先はクトゥーゾフ神話にとどまり、ツァーリと政府によるモスクワ放棄、放火の可能性には触れていない。

愛国一点ばりのボロジノ

さて、そのタルレの『ナポレオンのロシア遠征』であるが、ボロジノの会戦では、双方の兵力など、かなり細かくデータを挙げて「科学的外観」を装ってはいるものの、おもな焦点は、クトゥーゾフとバグラチオンに当たっている。それ以外の將軍連は、バルクライもふくめて、その他大勢というあつかいだ（554）。

その一方で、兵士の奮戦は強調されており、仏側の資料も援用されている。セギュールの回想の「露軍の負傷者はうめき声ひとつ立てなかった」とか、ナポレオンの「露軍は、不撓不屈であることを示した」（セントヘレナの回想）といった箇所が我田引水的に引用される（559）。読者は、ロシア人としての自尊心をくすぐられて、偉大なる司令官と民衆という図式が頭に残るしくみだ。

戦闘の描写は細かいが、トーンは、愛国心、奮戦一点ばりだ。しかし、バルクライの奮闘はほとんど無視される。

会戦の勝敗については、露軍の指揮官のあいだでも意見が分かれたのに、タルレはこう断ずる。

ツァーリとそのとりまきは、クトゥーゾフを憎んでいたもので、ボロジノは敗戦という説を喜んでとった（559）。

帝政時代とちがって、ツァーリはいまや悪役である。

そして、タルレは、敗戦説を唱えた指揮官の例として、ヴィンツェンゲローデ、ロバート・ウィルソン、クラウゼヴィッツ、ジョミニを挙げている。みな外国人というところがミソだ（559-560）。

タルレ自身はといえば、「負けたと思ったほうが負けたのだ」ということわざを引き合いにだして（561）、こう締めくくる。

クトゥーフは、ヴィンツェンゲローデやクラウゼヴィッツの輩の見ることのできぬものを見ていた。ボロジノは、結局、偉大なロシアの勝利だったのだ。（561）

『戦争と平和』の気持ち悪いところを増幅した感があるが、タルレの場合、これは必ずしも字義通りには受けとれない。序文でさりげなく、帝政時代の研究は概して、アレクサンドルの役割を強調していたが、ソ連時代は、ナロード（民衆）と司令官（полководцы）の役割を目いっぱい押し出している（序文6頁）、と釘を刺していたからだ。

煙幕を張ってから持論を展開

タルレは、こうして、ボロジノの描写で義理を果たすと、持論を展開しはじめる。本文中にかなりたくさん引用したので、彼の考えはもう明らかだと思うが、かんたんにまとめるとこうなる。

クトゥーフもバルクライも、「最も偉大な人間のひとり」を倒すために、焦土作戦を高度に意識的に粘り強く遂行した。きわめて早い時期から、モスクワを放棄しカルーガ街道へ移動する策略を考え、そのために準備していた。ボロジノは、それを可能にしてくれた。そうなることは、戦前から織り込み済みで、そのすさまじい損失も覚悟のうえだった。大会戦をせずにモスクワを明け渡すことは許されないからだ（537-538, 562）。

クトゥーフは、ボロジノの会戦後、露軍の甚大な損害を確認し、「最終的にモスクワ放棄を決断した。もっと正確にいうなら、いまや新たに戦わなくとも、モスクワを明け渡すことが許される——こうみてとったのである」（562）。タルレはこう意味深長に述べる。

これは言い換えると、大会戦でナポレオンをやっつけて戦争を終わらせるなどということは、軍と宮廷の指導部では、初めからほとんどだれも考えていなかったけれども、ボロジノの結果、ほかのシナリオは完全にありえなくなった、ということだ。

そして、タルレは、ボロジノ会戦後のこの時点から、モスクワ放棄→カルーガ街道の作戦が、「実行段階に入った」としている。

しかし、だれが、「明け渡すことを許す」のか？ クトゥーフに許可を与える者とは？ ツァーリと宮廷上層部しかありえないが、この先をタルレは追及しようとしな。ナロード（民衆）と偉大な司令官という図式がこわれてしまうからだ。それに、ロシアの最高権力は無謬でなければならぬ。

つまり、タルレの問題点は、すべてをクトゥーフとほかの将帥たち（полководцы）の功績に帰していること、あるいはそうせざるをえなかったことだ。

じっさいには、アレクサンドル一世、アラクチャーエフら宮廷の上層部とコーディネートされていた、とタルレはみていたのでは？ 彼の意味深長な物言いから、そう感じられる。

陰影のあるクトゥーフ像

クトゥーフの描きかたも、陰影に富んだもので、賢さの反面の狡猾さやシニカルさを見逃していない。「ずるい！賢い！切れる！だれも奴をだませんよ」という名将スヴォーロフの単刀直入な評言（534）につづけて、ナポレオン戦争に参加した陸軍軍人、セルゲイ・マエフスキー（Сергей Ива́нович Маёвский, 1779-1848）の特徴ある評も引いている。

クトゥーフは、だれかと手柄を分け合わねばならぬのをかぎつけると、芋虫が、自分の好きな、あるいは嫌いな樹を食うように、目立たぬように食っていくのだった。
(535)⁵²⁷

クトゥーフのじっさいの行動の面でも、目的のためには手段を選ばぬ、情け容赦のなさを見過ごしてはいない。たとえば、モスクワに置き去りになり「生きながら焼かれた多数の負傷者たち」のことに言及している。

モスクワ大火とナポレオン爆殺計画

本文中で述べたように、いつ、どこから、どういう順番に発火し、どこが燃えたかは、だいたい明らかになっており、タルレの著作では、それが時系列にそって整理されている。

本文のくり返しになるが、タルレ自身の叙述を要約し、その見解を確認しておこう。

9月14日（2日）の夕方、ナポレオンが唾然としつつ、もぬけの空のモスクワに入り、モスクワ西方の関所の近くのドロゴミーロフスカヤ村（Дорогомиловская слобода）に泊まると、就寝するまえからつぎつぎに伝令や副官がやってきて、火事の報告をする（581）。

夜の2時すぎには、市の中心部でも火の手が上がる。また、仏軍のいなかった家々でも出火する。

この大火でまず初めに火出したのは、酒屋だった。ちなみに、あらかじめ酒樽や瓶を叩き壊しておくように指令がでていた。また、火薬を扱っていた店も、早期に爆発している。「工場という工場はすべて燃えた」（583）。

9月15日（3日）朝、ナポレオンは近衛軍とともにクレムリン入城するが、すでにクレムリンに隣接するキタイ・ゴロド（Китай-город）全体が燃えていた（584）。

このように、初期の出火場所がクレムリン周辺に集中していることを、タルレは確認する。

⁵²⁷ Мой век или история С.И.Маевского // Русская старина, 1873, август. С.154.

9月15-16日(3-4日)の夜、すなわち、ナポレオンのクレムリンでの最初の一夜には、早くも猛火がクレムリンに迫り、大量の火の粉が飛んでくる。クレムリンには、露軍が大量の弾薬を残していったのにくわえ、ナポレオンの寝所の真向かいには、仏砲兵隊がうかつにも、弾薬を置いてしまっていた。そのため、火の粉ひとつで、クレムリンはナポレオンごと吹っ飛んでもおかしくなかった。なお、この日、ナポレオンがクレムリンに入った15日(3日)には、ロシアの守備隊が置いていった大量の榴弾、爆弾も、火の粉で爆発している(584)。

タルレはこうした状況全体を踏まえて、こう言う。「ロシア人は、たんに組織的に街を焼くだけでなく、まさにナポレオンを殺さんがため、クレムリンに照準をしばったという説」がある、と(585)。彼自身これに与しているのは、その記述から明らかだ。

犯人は？

タルレも、ロストプチンとモスクワ警察が放火に関与していたという点については異存なく、たとえば、警察分署長(Пристав) ヴォロネンコのモスクワ県警察本部(モスクワ警察署長イワシキンへの報告にふれ、それが事実によって裏付けられている、としている。

つまり、ヴォロネンコは、ロストプチンの命令で、酒屋をはじめとし、できるかぎりありとあらゆるものを焼き払うよう努力したと報告しているが、酒屋はたしかに最初に燃えている、と(583-584)。

ロストプチン自身の発言についても触れており、このモスクワ総督はときどき、いざというときはロシア式のやり方にのっとり、モスクワを敵に明け渡すくらいなら焼き払ったほうがよい、と言っていたことを指摘している(573-574)。

また、住民の疑心暗鬼についても、こんなエピソードを紹介している。

ロストプチンは、市中を歩きながら、「ナロード(民衆)」と話をしたが、「とんでもない意見と質問を浴びて、やりこめられることがたびたびあった」(574)

これまで徹底した焦土作戦がとられ、ロシア国境からモスクワにいたるほとんどの都市が露軍の手で焼かれてきたのだから、モスクワもまたそうなるのが当然だ。お前(ロストプチン)はそのことについてなにか知っているだろう？ お前自身、放火を組織しているんじゃないか？ そんな噂もあるぞ。とまあ、こんな質問を住民はロストプチンにぶつけたと思われる。そのことをタルレは仄めかしているわけだ。

このエピソードにつづけて、タルレは、住民の情報収集力と予想的確かさを強調する。

モスクワの住民は、ありとあらゆるルートで情報をキャッチしていた。<...> しかも、ロシアの半分は火事で焼けていたのだ。(575)

しかし、放火はロストプチンの独断か？ 軍は？ 政府は？ こういう疑問が、大火が起

きた全般的状況から当然わいてくるわけだが、この点は、タルレも、ほかの研究者とおなじく、読者の推測にまかせて素通りしてしまっているかにみえるが...

じつはツァーリと宮廷ぐるみを示唆

だが、じつはそうではない。タルレは、つぎのような奇妙なエピソードを記しているからだ。

9月13日(9月1日)のフィリの軍議のあと、夜11時に、皇族2人がロストプチンを訪れ、モスクワを明け渡さないようにクトゥーゾフを説得してくれ、と要請する。ロストプチンが、あなたがたが自分で行ったらいいでしょう、あなたがたのほうが私などよりエライんだから、と言うと、皇族は、クトゥーゾフは寝ていて通してくれなかった、と答えたという。

タルレは、事実のみを記し、論評を避けているが、じつに変な話だ。堂々たる皇族を、クトゥーゾフあるいは彼の側近が、そんな理由で門前払いするとは考えにくい。しかも、皇族が仲介をロストプチンに頼むとは!

これは、宮廷のアリバイ作りだったのではないだろうか。モスクワ放棄も、このあと起きるはずの大火も、自分たちとは関係がない、ツァーリも宮廷も関係がない、という証拠を残そうとしたのではあるまいか。

しかも、この皇族は、クトゥーゾフを散々けなして帰ったという。事ここに至ったのは、ぜんぶ彼の責任だというわけだろう。

このエピソードは、モスクワ放棄と大火が、ツァーリと宮廷ぐるみだったことを示唆している、とタルレは仄めかしているのだと思われる。

6) ヴィクトル・シクロフスキーの『『戦争と平和』の素材と文体』

「補遺」の最後に、ヴィクトル・シクロフスキー『『戦争と平和』の素材と文体』⁵²⁸の「素材」の部分について述べておこう。いまやようやく、シクロフスキーの論の可否を判断できるところまでこぎつけたからだ。

この「素材」の部分というのは、同書の第1-4章の前半部分に当たる。『戦争と平和』でどんな資料（戦史、回想録、日記、書簡など）が利用されているか、ほかならぬその資料が使われた理由はなにか、といった問題が論じられている。なお、同書後半の「文体」の部分については、すでに「先行研究」のところで検討済みだ。

「比較的少ない資料」

まず、シクロフスキーは、トルストイが使った資料が「比較的少ない」と指摘する。シクロフスキーが作ったリスト（248-249）では、それは54点にすぎないと言う。トルストイ自身が、50点ていどの資料を「多い」と思い込んでおり、追従者たちも、彼に都合のよいことばかり書いたために、歴大な資料という伝説が生まれた、と（40-41）。

だが、90巻全集16巻141-145頁で挙げられている文献目録では、74点である。しかも、これにしても完全なものではなく、例えば、「ピョートル・チトフの日記」⁵²⁹のようなきわめて重要なものが入っていない。

いずれにせよ、トルストイとしては、デカブリストらとの会見、ボロジノでの実地調査なども経て、「もういい、分かった」というぎりぎりのところまで持っていったことは確実である。「比較的少ない」と言い切るのはどうだろうか。

ミハイロフスキー＝ダニレフスキーをたたき台にしたのはなぜか

ついでシクロフスキーは、トルストイが「ミハイロフスキー＝ダニレフスキーに沿って歴史の叙述を進めている」点に、疑問を呈する（31）。ロシアの軍事史家モデスト・ボグダノーヴィチ⁵³⁰や、フランスの政治家アドルフ・ティエールの『執政政府と第一帝政の歴史』など、より新しい著作が出ていたのになぜか、というわけだ。

しかも、シクロフスキーが触れているように、たしかにトルストイは、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーについては批判的で、軍記物『襲撃』のなかで、こう皮肉っていた。「ミハイロフスキー＝ダニレフスキーを読みたまえ。いい本だ。そこには細かくすべてのことが書いてある——どこにどの軍団がいたか、どのように戦闘が行われたか、ということまでね...」

⁵²⁸ Шкловский В. Б. Материал и стиль в романе Льва Толстого «Война и мир». М., 1928.

以下、この節での本書からの引用は、本文中に（）で頁数のみ示す。

⁵²⁹ 本稿 65-68 頁を参照。

⁵³⁰ 本稿の 272 頁の注を参照。

シクロフスキーの考えでは、「ミハイロフスキー＝ダニレフスキーはすでに古びてしまっていたが」、「トルストイにとっては、なによりも反駁のための資料が必要であった。その時代に対する視点がトルストイを反発させるような人間が必要だったのである」(44)

シクロフスキーによると、その点、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーはうってつけであった。「公式的うそつきであるミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、賢明なボグダノーヴィチよりも、刺激剤として具合がよかった。また一方からすれば、後者のいくぶんの懐疑主義が、トルストイに距離を置かせたのかもしれない。トルストイは、そのテーマからいって、復古主義者であった。1856年に本を書いた人間（*ボグダノーヴィチのこと——佐藤）による1812年の受容は、あまりにも現代的である。さりとて、1820年代の受容はリアルすぎた。最大限の英雄化がなされた1840年代、すなわちミハイロフスキー＝ダニレフスキーが祖国戦争史を書いた時期こそが必要だったので」(44)

結論は正しいが

ここでのシクロフスキーの見解には賛成できない。さきほど本稿でくわしくみたように、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーは、祖国戦争の実像をかなり忠実に伝えており、極端な「英雄化」などなされていないのに、ボグダノーヴィチは、より多くの資料を用いてはいるものの、肝心の箇所では韜晦が目立つ。

筆者の考えでは、トルストイがミハイロフスキー＝ダニレフスキーを「たたき台」に選んだのは、まさにそれがリアルな戦史で、しかも多くの読者をもっていたからであって、それに自身の神話をぶつけようとしたのだろう。

しかし、シクロフスキーに言わせると、トルストイは「事実の信憑性によって選んだのではなく、その素材がどれだけ好都合であるかによって（по принципу удобства материала）選んだのである」

(35)。つまり、自分の芸術上の課題を実現するうえで便利なものを選んだ、と主張する。ということは、論理必然的に、『戦争と平和』は、1812年史を知るための歴史的資料または手段には、決してなり得ない」

この結論の部分だけは正しい。『戦争と平和』が「歴史ではない」ことは、これまで散々見たとおりの通りだ。トルストイはこの作品では、一定の目論見のもとにあえて史実を曲げることも辞さない。

だいたい、『戦争と平和』の本質が歴史ではないということは、シクロフスキーが引用しているように、トルストイ自身が示唆を与えている。

本稿でみたとおり、『戦争と平和』の原型をなしたのは、彼がヤースナヤ・ポリャーナの学校で子供たちに話した1812年の物語だが、それについて彼はこう書いている。「私の話は、歴史ではなく、国民感情を呼び起こすおとぎ話（сказка）だ」(54, «Яснополянская школа» за ноябрь и декабрь месяцы)。

けれども、その「おとぎ話」の「芸術上の課題」とはなにか。言い換えれば、文学作品としての『戦争と平和』が畢竟なにを表現しているのか、という段になると、残念ながら、シクロフスキー

はほとんどなにも語っていない。

雑階級人はナポレオンとスペランスキー

やや先走ったが、シクロフスキーの、『戦争と平和』および祖国戦争にかんする個々の指摘には面白いものがあるので、ひとわり見ておこう。

まず、『戦争と平和』には雑階級がないという批判は、刊行当時からあり、一般的であったが、これについてシクロフスキーはこう述べている。

「雑階級人は、『戦争と平和』のなかに隠れたかたちで存在している。それはスペランスキーとナポレオンだ。彼らは、トルストイにあっては、いずれも白い手をしていることで、芸術的にむすびつくのである。その白い手は、そうあって然るべき、貴族的な手ではなく、室内に長くこもっていた農民あるいは兵隊の顔色にたとえられるようなものだ」(57)

シクロフスキーの考察はここで止っているが、ここには、農民は農民、貴族は貴族であるべきであり、それを崩す潮流には、生理的違和感さえ感じるという、トルストイ独自の保守的感覚と危機感が看取されよう。

牽強付会

またシクロフスキーは、義勇兵について、トルストイも用いているヴォルコワ (М.А.Волкова) のランスカヤ (В.И.Ланская)宛ての手紙を引きながら、「戦意のない粗暴で無秩序な集団だった」と断じている。おまけに、モスクワに大量の武器があったのに、義勇兵には与えられず、したがって、彼らは戦闘にも参加しなかったと、セルゲイ・グリンカの回想等いくつかの資料を引用しつつ主張する。だから、彼らが愛国的に「全国民一丸となって всем народом」戦ったとするトルストイの見解はまちがいだ、と言う (62-63)。

(ここでは詳しく述べないが、シクロフスキーの資料の使い方には問題があり、しばしば文脈を無視して、いくつかの断片を切り取って継ぎ合わせ、無理やりこじつけることがある)。

なるほど、たんなるごろつきのような義勇兵もいたのはたしかだが、シクロフスキーが援用しているセルゲイ・グリンカもまた義勇兵 (その第1号) である。彼の果たした役割については詳細に見たとおりだ。ボロジノの会戦に義勇兵 28500 人が参加していたことも述べた。

しかし、シクロフスキーが、「国民戦争の諸場面は、ずっと恐ろしいものだった。<...> トルストイはここでも資料にもとづいていない」と言っているのは正しい (68)。シクロフスキーも引用しているように、農民たちは身の毛もよだつようなさまざまなやり方でフランス兵を欺き、惨殺したのだが、これをあけすけに描くと作品のバランスが崩れるので、トルストイは「ルールを無視して棍棒で滅多打ちにした」という一般的な言い方にとどめているのである。

とはいえ、国家的カミカゼとも言うべき、モスクワの大火にかんしては、シクロフスキーは知っ
てか知らずか、口を噤んでいる。

もう一つ、おかしな点がある。シクロフスキーは、農民たちの残虐行為を長々と引用しているくせに、ロシアのパルチザンは、「至急報ひとつ奪うこともできず」、いかなる役割も果たさなかったと言う(69)。しかし、彼が依拠しているのは、デニス・ダヴィドフ(『戦争と平和』のデニソフのモデル)とイリヤ・ラドジツキー(И.Т.Раджицкий)の回想で、パルチザン部隊第一号のヴィンツェンゲローデやベンケンドルフのことは視野に入っていない。

ボロジノの会戦についても、シクロフスキーは勇み足をしている。

「トルストイは、クトゥーゾフがボロジノの会戦で300門の大砲のことを忘れ、戦闘に用いなかったことを言い忘れている(*大砲の数は、露軍が計640門、仏軍は587門だった——佐藤)。双方の損失の差はこのことで説明されるのに。トルストイの同時代人たちはこの誤りを指摘した」(70-71)

だが、シクロフスキーが引用している同時代人の証言は、正確には、「予備の大砲300門はほとんど使われなかったか、少なくとも、集中的に用いられることはなかった」というものだ。それを、シクロフスキーのように、「300門の大砲のことを忘れていた」とパラフレーズしてしまうのはまずいだろう。

なるほど、本文でみたように、会戦早々、砲兵隊司令官のクタイソフが戦死してしまったこと、露軍全体が守りを固め、受身な戦い方をしたこともあり、砲火の集中度では仏軍がはるかに勝ったのは事実ではある。しかし、そこには、クトゥーゾフなりの苦渋の選択があったわけで、単にど忘れしたというのとは全然違う。これもシクロフスキーの牽強附会の一例だ。

「ボグチャーロヴォの反抗」の歴史的背景

とはいえ、『戦争と平和』の「ボグチャーロヴォの反抗」のエピソードをめぐるシクロフスキーの考察は、問題点もあるが、なかなかおもしろい。これは、1812年にアンドレイ公爵の妹、マリア・ボルコンスカヤが、仏軍が迫るなかで自領の農奴たちが反乱を起こしかけたため、危うく立ち往生しそうになる場面だ。

シクロフスキーは、『戦争と平和』以降、民衆が一致団結していたこと(единодушие)は一般的見解となったが、実は、農民がみなナポレオンに対して憎悪を燃やしていたわけではない。地主に対する蜂起の試みさえあったが、これは、「ボグチャーロヴォの反抗」に痕跡をとどめるのみである、と指摘している(64-67, 76)。

この指摘は正しい。「トルストイの同時代人たちにとって、『ボグチャーロヴォの反抗』がきわめてアクチュアルであった」と言っているのも正しい。1850-1860年代は、作家が住むトゥーラ県もふくめ、農民一揆、地主邸の焼き討ちが相次いでいたからだ。

これについては、ゲオルギー・クラスノフがその精密、周到な論文「ボグチャーロヴォの反抗と

その社会的・歴史的源泉」⁵³¹で、整理している。

なお、この論文によると、トゥーラ、オリョール両県の農民の間に、クバーニで自由と扶助が与えられるという奇妙な噂が広がり、さまざまな地主の農奴たちが家族ごと移住していったことが、1850年の「第三部（秘密警察）」への報告に記されている。これがボグチャーロヴォの物語にも持ち込まれたわけなのだ。

マリア・ボルコンスカヤの脱出の状況は歴史的に正しいか

という次第で、シクロフスキーによれば、「ボグチャーロヴォの反抗」には、1812年の歴史的状況と現代（1850－1860年代）とが反映しているのだが、しかし、このエピソードには歴史的にみて変な点がある、と彼は言う。つまり、当時の状況ではああいう脱出行はあり得ないと、シクロフスキーは主張するのだ。「マリア公爵令嬢の脱出の状況は、歴史的にみるとおかしい」

なぜなら、「なるほど、ロシアの地主たちはモスクワを捨てたが、それは彼らがモスクワとそれほど強く結びついていなかったからである。だが、自分の村を捨てることは、そんなにかんたんなことではなかった」

どうということかという、シクロフスキーによれば、モスクワは、貴族たちの冬季の滞在地にすぎなかった。蓄えはあったが、主として食料品、雑貨であり、主食のパンはほとんどなかった。つまり、農村こそ生活の基盤だったから、ということだ。ナポレオンは、その辺を見抜けず、モスクワをウィーンのように考えて失敗した、とシクロフスキーは言う。

だから、シクロフスキーの意見では、貴族たちがモスクワから村に去ったのは至極当然のことなのに、これが『戦争と平和』では「愛国的偉業」と持ち上げられることになった。だが、生活の基盤である村を捨てるのは、ぜんぜん別の話で、事実、マリア・ボルコンスカヤと同郷のスモレンスク県の地主のなかには残留した者がある。にもかかわらず、トルストイは、「愛国的偉業」を村にも持ち込んでいる（78－79）――。

これがシクロフスキーの見解だが、しかし、一つ見落としがある。マリアの屋敷は、仏軍と露軍の主な行軍ルートとなったスモレンスク街道に面しており、徹底した焦土作戦が行われた地域だ。しかも、農民が反乱を起こしかけているのに、どうやって残留するというのか？…

以上まとめると、『戦争と平和』における資料の選択にかんし、トルストイは「事実の信憑性によって選んだのではなく、その素材が芸術的課題を遂行するうえでどれだけ好都合であるかによって選んだ」という結論部分だけは正しい。が、それ以外の部分では、興味深い指摘はあるものの、間違いや論の運びの粗さが目立ち、この作品の「芸術的課題」そのものについても、言及されずに終わっている。

⁵³¹ Краснов Г.В. Богучаровский бунт и его социально-исторические источники // Л.Н.Толстой: статьи и материалы V. Горький, 1963. С.133-149.

第3部『アンナ・カレニナ』

はじめに

『戦争と平和』は書き終えられた。夢はぎりぎりまで見られてしまった。夢は終わった。トルストイは、ふたたび現実について考えないわけにはいかない。夢は、現実そのものを変えはしないではないか？... 実際には、ナターシャのような貴婦人＋コサック娘など存在しないのだ。夢ではなく、この現実において、人生の闇——運命と偶然——のなかから、「水滴の地球儀」は現れるだろうか？ 必然に抗して自由は立ち上がることができるか？

夢になかに生き、虚構の創造で自分の生を支えられるようなタイプの人間なら、『戦争と平和』のなかにとどまることもできたかもしれない。だが、トルストイはそういう人間ではなかった。これほどの創造をなしとげた後に、逆に、虚脱感のみならず途方もない虚無感に襲われようとは！ これは、抜群の自意識家である彼にも、この作品を書き終えるまでは予想できなかったし、そうなる理由もそうかんたんには腑に落ちなかった。

だから、『戦争と平和』執筆後に虚無感にさいなまれながらも、トルストイはなかなか「現実にもどる」ふんざりがつかなかったようだ。夢のなかにとどまって、『戦争と平和』とおなじコンセプトで、ピョートル一世時代を舞台にした作品を書こうとする。さらには、夢を拡大し、ピョートル時代から、デカブリストがシベリアから帰還する 19 世紀なかばまでをカバーする、一大歴史小説を構想したりしている。夢をひろげることで、現実の不条理を解く鍵を手に入れられるのでは、と期待したようだが、うまくいかなかった。

その現実の不条理とは、どのようなものとして作家に感じられていたか、思い出しておこう。彼にとってコサック娘マリアーナ、農婦の愛人アクシーニャのような「トルストイ的美女」は——彼にとっての「完全な女性」は——宿命的に手が届かない。いやそれどころか敵対的すらある「運命の女」である。そして、その敵対的關係とパラレルである、「自分と民衆とのあいだの乗り越えがたい壁」(непреодолимая стена между собой и народом)⁵³²が立ち上がる。

そういう女との愛を成就させるとともに、民衆と真に和解しなければ、家庭の幸福も、世界の調和も実現できない。作家は、家庭の幸福を根底におかずには、世界の調和というものが考えられないのだから。

にもかかわらずトルストイは、農奴解放に失敗し、アクシーニャとの愛にも破れる。先祖代々のウサーヂバ(屋敷)、ヤースナヤ・ポリャーナを失うことに耐えられず、地主であることをやめられなかったからだ。なぜか？

「なにをやってもむださ。一つの壁が崩れれば、別の壁が現れる。人間は決して幸福には

⁵³² «Анна Каренина». Вариант No 177. — 20, 505.

なれない。心に闇を抱えながら、できるだけ楽に過ごせるように、私たちはお前にヤースナヤを残してやったのだ。ここにふさわしい妻を迎えて、その母性、『女性的なるもの』で、この『箱庭』に温かい血を通わせるんだな。そうすれば、けっこう快適になるよ…。ひよっとして、こんな声が、どこからともなくトルストイに聞こえてきたのではないかと、筆者は空想する。

すべてこれらの彼の生活の跡は、あたかも一時に彼をとりまいて、こう彼に言うかのようであった。「いや、お前は、われわれから逃げることはできないし、別人になることもできやしない。元のままだろうよ。いろんな疑惑にさいなまれ、永遠に自分に不満で、自分を改造しようと空しく試みては転落し、永久に幸福を待ち望んでいるが、そんなものはお前には与えられなかったし、これからも与えられないのだ」(『アンナ・カレーニナ』1章26節)

Все эти следы его жизни как будто охватили его и говорили ему: «Нет, ты не уйдешь от нас и не будешь другим, а будешь такой же, каков был: с сомнениями, вечным недовольством собой, напрасными попытками исправления и падениями и вечным ожиданием счастья, которое не далось и невозможно тебе».

トルストイは、「少女」ソフィアとの結婚で、現実と妥協をはかろうとしたのだが、夫婦関係にははじめからすきま風が吹いていた。そればかりか、自分が愛着してやまない、ヤースナヤ・ポリャーナでの累代の地主生活も、根本から揺らいでいた。急激に進む工業化、農村の荒廃…。妻と二人三脚で土地買収と蓄財に励んだものの、内面の空虚は埋められず、夫婦の溝も埋まらない。自分自身の生活はいうまでもなく、世界全体が矛盾をふかめ、いよいよ残酷になっていくようだ。宿命的に調和しえず、破綻しているように見える世界とはなにか、それを動かしているのは何者か――。

ここにいたり、処女作『幼年時代』の愛と調和の再現という夢はほぼ解体した。現実における再現も、虚構での再現も、破綻してしまった。『戦争と平和』は、『幼年』を虚構の次元で、宇宙大にまで拡大、深化させたものだったが、あれほどの創造をもってしても生を支えるには足りない…。

そのことが分かったと、後に残ったのは、「女性的なるもの」、その母性愛への信仰と、尊敬しつつも自分のものとはなしえない、不可解な農民の死生観のみ。それだけが、幼年時代から繰り返し襲われてきた「発作」、すなわち人生の闇への圧倒的な恐怖感から、自分をあていど守ってくれる。

ところが、その「女性的なるもの」、母性愛も、いまやトルストイの世界観の磐石の基盤とはいなくなってきた。一つには、すでに述べたように、ソフィア夫人と結婚したことで、もはやその憧れを現実に満たす可能性がほぼ失われたこと。

もう一つは、概して、女性性、母性愛がトルストイの心中で、『戦争と平和』執筆と前後して、或る問題を鋭く突きつけられるようになったことだ（この問題は、以前はトルストイにとってそれほど切実には感じられなかった）。

それは、母性とエロスの矛盾、相克ということである。なるほど、『戦争と平和』という「夢」の世界をみるかぎり、この問題はそんなに深刻には現れていない。ナターシャは、妖艶な「魔性の女」（12, 270）であるのみならず、「強く美しい多産な牝」と「良妻賢母」（12, 266）でもあるから。

にもかかわらず、いわばご都合主義で創られた虚構である、そのナターシャにおいてさえ、エロスと恋愛と母性がつねにうまく調和しているとはかぎらない。彼女の、美男子アナトーリ・クラーギンへの恋をみよ！ 彼女の激しい情熱と豊かな感情は、ピエールによって完全に満たされているのだろうか？

トルストイがこの問題、エロスと母性の矛盾を鋭く感じるようになったのは、妹マリアと義妹タチアーナ・ベルスの「姦淫」と悲劇を目の当たりにしてからだろう。マリアの夫、ヴァレリアンはなぞの死を遂げ、タチアーナは自殺をはかった。しかも、おそらくは、作家自身にも、悲劇にすくなからぬ責任があった。

こうして作家は、新たな問題に直面することになったのである。すなわち、「女性的なるもの」のなかには、エロスも母性もふくまれているわけだが、もしも、その女性性その本質において矛盾をはらんだものであるならば、はたしてそれは、世界の調和のゆるぎない基盤たりうるか？ 換言すれば、女性性のなかで、母性とエロスを調和させ統合することができるか？ できなければ、トルストイの世界像は根底から覆ることになる。

この問題を解決するために、トルストイは、『アンナ・カレーニナ』（1873-1877）を書いた。しかし、問題は、またしても、最もラディカルな、思いもかけぬ方法で解決されたのである。作家は、女主人公アンナにおいて、自分の内面の「理想の女性」を具象化し、それを葬り去り、そうすることによって問題自体を消去しようとするのだ。

第1章 トルストイは「殺人者」か：二つの悲恋にかんする藤沼貴氏の未発表の説

では、まずは二つの不倫の恋からみていこう。トルストイがみた女性性のはらむ矛盾、母性とエロスの相克を具体的にイメージするためである。

この二つの不倫の恋と『アンナ・カレーニナ』の関連をとりあげたのは、故藤沼貴氏が最初である。これらの事件の意義がソ連でもまだあまり注目されていないときに、藤沼氏はいち早く、『アンナ・カレーニナ』の素材⁵³³で的確に指摘されているのだが、ここでは、それとあわせて、氏がついに生前発表されなかった説についてご紹介したい。この話は、2001年から2002年にかけての冬にモスクワで、筆者が電話でご本人からお聞きしたものである。

藤沼氏の文学作品の読みかたは、要するに、作家が生きていたその場に、全身で身を置いてみるということであり、それにもちまへの直観力と学識があいまって、驚嘆すべき深みに達することがしばしばあった。氏がついに発表されなかった、トルストイにかんするこの新説もその見事な一例で、文豪が妹マリアの夫、ヴァレリアン・トルストイを心ならずも自殺に追い込んでしまったことが骨子となっている。

筆者の推測では、おそらく藤沼氏は、自説がトルストイに「殺人者」の汚名を着せてしまい、それがスキャンダラスにひとり歩きすることを恐れ、ついに発表されなかったのであるが⁵³⁴、しかし、この説は、文豪の人生と創造の最大の謎のひとつに光を当ててくれると思う。

事は、トルストイの妹マリア（1830－1912）の「姦通」と、彼女の夫ヴァレリアン・トルストイ（1813－1865）の悲劇的な死に関係している。ヴァレリアンの死をめぐる状況はきわめて謎めいており、そこにトルストイがどうかかわっていたのかも分からなかった。ところが、藤沼氏はじつは、人知れずこの謎を解かれていたのであった。

はじめに、事件の概要と謎の部分をおさらいし、そのうえで、藤沼氏の解答をご紹介しよう。まずは、トルストイの兄セルゲイと義妹タチアーナの恋からはじめる。

① 兄セルゲイと義妹タチアーナの恋、そして彼女の自殺未遂

事件の一つは、トルストイの兄セルゲイとタチアーナ・ベルス（ソフィア夫人の妹）との不幸な恋愛、そして、タチアーナの自殺未遂だ。タチアーナは、一連のできごとについて、回想録『わが家とヤースナヤ・ポリャーナでのわたしの生活』⁵³⁵で、くわしく物語っている。

⁵³³ 藤沼貴「『アンナ・カレーニナ』の素材」、「Studium」№1、1962年、1－11頁。

⁵³⁴ 藤沼氏は評伝『トルストイ』（338頁）で、ヴァレリアンの急死について、あえて詳しい状況を記さず、「自殺説もある」というあいまいな言い方にとどめている。自説としてはっきりした形では発表されなかった。

⁵³⁵ Кузминская Т.А. Моя жизнь дома и в Ясной Поляне. Киев.: «Мистецтво», 1987.

セルゲイとタチアーナは、1863年夏、熱烈な恋におち、セルゲイは、その年の秋には早くもプロポーズをしている。プロポーズは受け入れられたが、ふたりの近親者は、この恋愛をあまりよろこばなかった。その理由の第一は、年令の差だ。当時タチアーナは16才の若さだったが（1846年10月29日生まれ）、セルゲイは37才になっていた（1826年2月17日生まれ）。

第二に、セルゲイは、ジプシーの女性マリアとすでに16年間内縁関係にあり、何人もの子どもがいた（このことについて、タチアーナは、のちのちまで、はっきりとは知らされなかった。彼女は、セルゲイはマリアとは別居しており、子どもは一人だけだと思っていたという）。

このような事情であるため、トルストイのすすめもあり、結婚は1年先ということに決められた。猶予期間に、若いタチアーナはよく自分の気持ちをたしかめ、セルゲイは——もし可能であるならば——内縁関係を清算すべし、というわけだ。

内縁の妻マリアは、おとなしく身を引く態度を見せたが、マリアの両親は激怒し、訴訟をおこしてでもタチアーナとの結婚をはばむと言い、実際に告訴状を作成するにいたった。苦悩したセルゲイは、許嫁に対しては家庭の事情をほとんど語らぬまま、内密のうちに問題を処理しようと焦った。

こうした状況をよく承知していたトルストイは、タチアーナとの会話のなかで、兄の家庭の事情をあるていど打ち明けたうえで、1864年1月初めに彼女に手紙を送った。マリアは苦しんでいる——しかも彼女は、兄の子の出産をひかえている——、「君は、感情に流されてはいけない」、と。おそらく、トルストイは、もろもろの事情を考えあわせ、ふたりを別れさせようとしたのだろう。

人生における選択がむずかしければむずかしいほど、生きることが苦しければ苦しいほど、自分をしっかり制御しなければなりません。（1864年1月1...3日〈61, 31-33〉）

タチアーナは、手紙を一読するや、ただちに婚約を解消する決心をして、セルゲイに手紙を書いた。

セルゲイ・ニコラエヴィッチ！ リョーヴォチカ（*レフの愛称形——佐藤）から手紙をいただきました。この手紙で、以前は知らなかったことがたくさん分かりました。もしかすると、知りたくなかったことを——。この手紙のために、あなたとのお約束を取り消さねばならないことになりました。あなたはご自由です！ せいぜい、お幸せにお暮らしあそばせ——もしお幸せになれるものならば⁵³⁶。

⁵³⁶ Кузминская Т.А. Там же. С.301.

タチアーナは絶望し、毒（ミョウバンの水溶液）を飲んだが、さいわい手当が早く、助かった。トルストイの驚きと苦しみ（そして悔恨）は、想像するにかたくない。彼は、黒髪で、元気潑刺として、美声と音楽的才能にめぐまれたタチアーナをたいへん可愛がっていた。たんなる義妹に対する愛情を超えていたふしもある。ところが結果的に、あたかも彼自身が、義妹を自殺未遂に追いやったようなものではないか。

3年後、1867年7月、二十歳になったタチアーナは、幼なじみの初恋の人、アレクサンドル・クズミンスキーと結婚した。

私は、初恋よりも深刻な恋愛を体験したけれども、そこには幸福が見つからなかった。すると私は、わが身の保護でも求めるみたいに、いわば安全な岸边に向かって手をさしのべ、あの清らかで朗らかだった初恋に立ち帰ったのだった。⁵³⁷

『戦争と平和』でナターシャは、以上の体験をすべてくり返すことになる。ずっと年上の男性との情熱的な恋、婚約、結婚までの一年間の猶予、恋の破局、自殺未遂、そして、生の嵐から「安全な岸边」へ、つまり、ピエールとの結婚と家庭生活へ（ちなみに、結婚したときナターシャは、タチアーナとおなじ二十歳だった）。

タチアーナは、事件から半世紀以上たったロシア革命後に、ヤースナヤ・ポリャーナの屋敷で余生を送りながら、この回想を書いた（セルゲイもトルストイも姉ソフィアも夫アレクサンドルも、とっくに亡くなり、子供たちは亡命していた）。しかし、セルゲイとの逢瀬をまるで昨日のことのよう思いを込めて描いているのをみると、はたしてトルストイの行為が正しかったかどうか、疑問を感じずにはいられない。



1915年のタチアーナ・クズミンスカヤ（ソフィア夫人の妹）⁵³⁸

⁵³⁷ Кузминская Т.А. Там же. С.400.

⁵³⁸ Там же. С.288-289.

② 妹マリアの不倫の恋：トルストイは、義弟ヴァレリアンを死に追いやった？

もう一つの事件は、トルストイの妹マリア（1830－1912）の「姦通」と、彼女の夫ヴァレリアン・トルストイ（1813－1865）の悲劇的な死だ。

妹マリアの家出

1857年の夏、トルストイの妹マリアは、3人の子どもを連れて、夫のもとを去った。理由は、彼の「きわめて淫蕩な生活」である。トルストイの孫であるセルゲイ・ミハイロヴィッチ・トルストイによると、当時、ヴァレリアンには4人の愛人がいたという（セルゲイ・トルストイの典拠は、トルストイ家の言い伝えだ）⁵³⁹。

マリアが伝記作者ニコライ・グーセフに直接語ったところでは、彼女は家出に際し、「私はもう、あなたのハーレムの後でいるのはまっぴらです」と夫に向かって言い放ったという（グーセフ II、226頁）。『成長の四つの時代』の第2プランによると、「妹の結婚とその夫の猟色」が書かれるはずだったが（2,244）、これもこうした事情の反映かもしれない。

ヴァレリアンは「永遠の夫」？

だが、これらはみな、マリア側の言い分である。ヴァレリアン側の証言、反論は残っていないので、鵜呑みにはできない。

マリアに家出をすすめたのは、ほかならぬトルストイであるらしい。義妹タチアーナ・クズミンスカヤ（ソフィア夫人の妹）は、彼との次のような会話を書きとめている。

ぼくはいつも自責の念にかられることが一つある。それは、ぼくがマーシェンカを説きふせて、夫を捨てて永久に別れるように仕向けたことだ。これはよくない。『神のあわせ給いしもの、人これを分かつべからず』だ（*「マタイによる福音書」19, 6——佐藤）。妹は、神から与えられた試練をすべて、しんぼう強く我慢すべきだった。⁵⁴⁰

おそらく、マリアの家出は、作家イワン・ツルゲーネフとかかわっている。マリアとツルゲーネフは、1854年10月に知り合い、おたがいに夢中になる。マリアは、玄人はだしのピアノの名手で、ツルゲーネフによると、いわく言いがたい魔性の魅力があったという⁵⁴¹。

ツルゲーネフは、パーヴェル・アンネンコフへの手紙（1854年11月1日付け）で、マリアについて、かなり興奮状態でつぎのように書いている。

⁵³⁹ Толстой С.М. Единственная сестра // Прометей: Историко-биографический альманах серии «Жизнь замечательных людей» / Сост.Ю.Селезнев. Т.12. М.: Мол. гвардия, 1980. С.272.

⁵⁴⁰ Кузминская Т.А. Там же. С.337.

⁵⁴¹ Толстой С.М. Там же. С.270-272.

私がおよそこれまでに会ったなかで、最も魅力的な存在のひとりです。愛らしく、賢く、飾り気がなく、目を奪われます。もういい加減な年なのに（4日前に36歳になりました（*ツルゲーネフは、ユリウス暦で1818年10月28日の生まれ——佐藤）——ほとんど恋してしまいました。私は、あなたの目が丸くなり——それから唇も開いて、クハ、クハという音が出てくるのが、目に見えるようですよ——これがあなたの笑い声です...しかし、心臓をぐさりとやられたことは、隠しようがありません。これほどの優雅さ、琴線にふれる魅惑に出会ったのは、久しぶりです...。まあ、大げさにならないように、この辺でやめておきますが——これは秘密にしておいてください。夫妻は、この冬はモスクワで過ごします。⁵⁴²

一方、ワシーリー・ボートキン、マリアのぐあいはどうかというツルゲーネフの問い合わせに、こう答えている（1855年3月4日〈16日〉）。「ぐあい」というのは、三角関係による「恋の病」を念頭において言っていると思われる。

ええ、あの女は病^{ひと}気です。たまたま、あの女の大きな、濡れた、或る深い表情を湛えた瞳をのぞきこむことがあると、なにか恐くなります...。伯爵夫人を見て、私は思わずひとり眩くのです。ほら、ここに運命に魅入られた女がいると...。この女性のなみはずれた無邪気さと自然さは、ある種の深い尊敬の念を私に呼び起こします。それとともに、彼女には、極度に繊細な神経が備わっているように感じます。私は生まれて初めて、このような純粋なタイプの女性を見ました。⁵⁴³

第三者で傍観者のボートキンがこんな印象を受けたことをみても、トルストイの妹に対する溺愛ぶりをみても、マリアという女性には、どこか男を夢中にさせる魔力があったようだ。

マリアの家出に話をもどすと、トルストイは、ツルゲーネフの気持ちをあてにして、つまり、彼との結婚を期待して、妹にそう仕向けたのかもしれない。しかし、ツルゲーネフのマリアに対する態度は、まるで彼の小説の主人公たちのように優柔不断で、情事の域をこえようとはせず、しかも、彼はもう、終生の恋人であるフランスのオペラ歌手、ポリヌ・ヴィアルドーとつきあっていた。

ところで、マリアとツルゲーネフの情事でひとつ分からないのは、夫ヴァレリアンの態度である。夫妻は当時、1854年から1856年にかけて、ツルゲーネフとおたがいに行き来し合い、

⁵⁴² Пузин Н.П., Архангельская Т.П. «Вокруг Толстого». Тула: Приок.кн.изд-во, 1982. С.47-48.

トルストイの妹マリアと作家ツルゲーネフの関係については、このプージンの著作が最もくわしく、すぐれている。なおプージンは、マリアがツルゲーネフの中編『ファウスト』のヒロイン、ヴェーラのモデルとなったと推測しているが、十分な説得力がある。

⁵⁴³ Пузин Н.П., Архангельская Т.П. Там же. С.50.

ときに長逗留したりさせたりして、親密に交際している⁵⁴⁴。マリアとツルゲーネフの関係はなかば公然のもので、トルストイも長兄ニコライもやきもきし、あれこれ書き残しているくらいだ。

だから、ヴァレリアンは、妻の情事を知らなかったはずはないのに、いったいどういうつもりで妻におとなしくつきあったのだろうか。ヴァレリアンはもしかすると「永遠の夫」ふうの男で、完全に妻の言いなりになっていたのでは、という疑問さえわいてくる。とにかく奇怪な三角関係である…。

スウェーデンの子爵の私生児を産む

1860年初め、フランスのエクス・レ・バン (Aix-Les-Bains)⁵⁴⁵で、「ヴァレリアンにはずかしめられ、ツルゲーネフにだまされたマリア」は、スウェーデンの子爵、ヘクトル・ド・クレン (Гектор де Клен <Viscount Victor-Hector de Kleen>, 1831-1873) と知り合い、恋に落ちた。そして、1863年9月20日にはジュネーブで、彼の娘エレナを産んでしまった⁵⁴⁶。

当時のロシアの貴族社会では、隠れて浮気することはむしろ奨励されるくらいだったが (トルストイの叔母ヨールゴリスカヤも、彼に手紙で、上流婦人との情事をすすめたりしている)、公式に離婚していないうちに私生児を産んだとなると、大スキャンダルで、反社会的行為となる。マリアからこの一件を手紙で知らされたトルストイは、つぎのような激した返事を書いた。

可愛い可愛い、大切な大切な、かぎりなく大切なマーシェンカ。おまえの手紙を読んだときの気持ちはとても口では言えない。ぼくは泣いた。今も返事を書きながら泣いている。<…> 今すべきことは何か？ 第一に、彼と結婚すること。第二に、赤ん坊は、ぜったいに自分ではひきとらず、ぼくに渡すこと。第三に——これが肝心なことだが——子どもたちと世間から隠しておくことだ。(1863年10月10?—15?日 (61, 22))

トルストイの奔走

1864年1月、トルストイと次兄のセルゲイは、ヴァレリアンを説得し、離婚の請願書を書かせた⁵⁴⁷。当然、兄弟は、マリアとクレンの関係と出産を伏せていたはずで、そうでなければ、ヴァレリアンは、こんな虫のいい離婚を承諾しなかったろう。

その証拠に、ヴァレリアンは、しばらくしてから、マリアに直接手紙を送り、離婚は自分

⁵⁴⁴ Чернов Н.М. Провинциальный Тургенев. М.: Центрполиграф, 2003. С.112, 265-283, 310.

⁵⁴⁵ フランスのサヴォア県の温泉保養地。ブルジェ湖 (le Lac Bourget) のほとりにある。

⁵⁴⁶ Толстой С.М. Там же. С.274.

⁵⁴⁷ Там же. С.274.

のキャリアにさしつかえるから思いとどまってくれ、と懇願しているが⁵⁴⁸、もしヴァレリアンが事実関係を知っていたら、こんな低姿勢はとらなかったはずだ。

とにかくヴァレリアンを押し切り、離婚を承知させたトルストイは、こんどは大主教のもとへおもむき、期待のもとでそんな返事をもたらした⁵⁴⁹。1864年3月末に、トルストイは、妹に途中経過を報告している。

ヴァレリアンはすべて承諾した。<...> ぼくはまだ、離婚の請願書は提出していないが、いろいろと情報を集めた結果、離婚はとてめにかんたんで、期日どおり6ヶ月でかたづくだろうと確信した。でも今のところ、おまえが帰国するまで、あるいはおまえが返事をくれるまでは、請願書の提出を待つことにするよ。(1864年3月24日〈61, 40-42〉)

元気づいたトルストイは、こんどは、ヴァレリアンから養育費をもらうための奔走をはじめた。

ヴァレリアンの謎の死

ところが、事態は急変する。1865年1月6日、ヴァレリアンが急死してしまったのである……。

彼の死をめぐる状況はミステリアスだ。トルストイの、叔母アレクサンドラ・トルスタヤあての手紙を見ると、ヴァレリアンは、死の二日前に遺言状を作成し、遺産の大半を「同棲していた女」に贈っている。「何もかもこの女にやってしまったのです」(1865年9月14日〈61, 103-105〉)

そのうえヴァレリアンは、この女性に、第三者の名義で、1万8千ルーブルの借用証書を与えた。おかげで、 MARIAとその子どもが相続するはずであったヴァレリアンの領地は、差し押さえられてしまった。

こうした尋常でない行動を見れば、彼が MARIA とトルストイ家の人々にどんな感情をいだいていたかはあきらかだ。彼は、死の直前に、トルストイ家のたくらみを知ったと推察される。

それにしても、なぜ、ヴァレリアンは死んだのか。病気でか、それともほかの原因でか。彼の近親者は、なぜか、みな一様に口をつぐんでいる。

以上が事件のあらましだ。

⁵⁴⁸ 『アンナ・カレーニナ』などにみるように、当時の離婚はかなりむずかしかった。離婚するためには、夫婦のどちらかが、まず姦通の罪を引き受ける。引き受けたほうは、証拠を提出しなければならぬので、しばしばそのものずばりの場面をわざわざ演出した。やっとな罪が認められると、こんどは教会での懺悔(покаяние)を刑として科せられる。しかもそのうえ、ふたたび結婚する資格を失う、というたいへんなものだった。くわしくは、「参考資料1: 19世紀ロシアの離婚事情について」を参照されたい。

⁵⁴⁹ Там же. С.274.

ヴァレリアンは自殺？

この事件について、筆者が藤沼氏と電話で話したとき、氏は単刀直入にこうおっしゃった。「ヴァレリアンは自殺かもしれない。あのときの状況と、トルストイの異常なほどのショックをみるとね」

筆者は驚愕したが、それが真相だと直覚した。

もし、ヴァレリアンが、死ぬほどの重病だったのなら、もちろん、離婚など必要ない。死ぬのを待てばいい。事故死ということも考えにくい。なぜなら、ヴァレリアンは、あらかじめ自分が死ぬことを知っており、そのために今みたような手の込んだ準備をしているからだ。そうすると、考えられるのは自殺ということになる…。

ちなみに、トルストイの義妹タチアーナが、不思議なエピソードを伝えている（彼女はこの話を、マリアの娘の一人から聞いたという）⁵⁵⁰。それによると、マリアは、ヤースナヤ・ポリャーナに滞在中だった或る日、自分の娘たち、ソフィア夫人らと、ヨールゴリスカヤ叔母の部屋におり、自分はみなに背を向けて、テーブルの傍に立って何か縫いものをしていた。ところが突然、マリアは振り返りざま、「私の肩をぶったのはだれ？ そんな冗談はするものじゃないわ」と怒ったような声で言った。みな呆気にとられたが、マリアは、たしかに強い衝撃を感じたと言う。ヨールゴリスカヤは、変だと思ったのか、このできごとの日時をメモ帳に控えておいた。すると、その数日後、ヴァレリアンが亡くなったという知らせが届き、その死亡時刻は、メモのそれと一致していた、というのだ。

「肩の衝撃」というのは、猟銃、拳銃などによる自殺を暗示しているような気もする…。

ヴァレリアンの死を知ったトルストイは、叔母アレクサンドラ・トルスタヤへの書簡で心中を吐露している。

死のいちばんよくないところは、ある人が死んでしまったとき、その人に対してした悪いことを、あるいは彼に良いことをしなかったことを、もはや改めることができないことです。(1865年1月18...23日〈61, 69-71〉)⁵⁵¹

「おれがヴァレリアンを殺した」

おれがヴァレリアンを殺した——。トルストイはそう思ったのではないだろうか。おれは人殺しだ、と。

もし、藤沼説が正しければ——筆者はそれを確信するが——トルストイの生涯と創造における最大の断層があるていど理解できる。文豪の愛読者は、『戦争と平和』と『アンナ・カレ

⁵⁵⁰ Кузминская Т.А. Там же. С.360-361.

⁵⁵¹ ヴアレリアン・トルストイの1850年代初めの写真が、サイト「トルストイ・ルー」の「写真：トルストイの親族」に掲載されている。

[http://tolstoy.ru/media/photos/?topic\[\]=298](http://tolstoy.ru/media/photos/?topic[]=298) (2015年9月1日最終閲覧)

『安娜』のあいだになにかが起きたことを実感せずにはいられない。あの暗転は、彼がヴァレリアンを自殺に追い込んだことと関係しているのではあるまいか。

『戦争と平和』は、その内的論理にしたがって完成されるが、実人生は新たな問題をトルストイに突きつけ、世界観の根本的見直しを迫ったのではないか。『戦争と平和』は、祖国戦争という国民が一致団結した時代をとりあげ、そこに、貴族と民衆の両面を兼ね備える主人公とヒロインを送り込んだという、「実験室」での作品であり、大団円は初めからあるていど保証されていた。

だが、現実の世界では、ピエールやナターシャの場合のように、苦悩と絶望のはてに神と信仰がおのずと現れるとはかぎらず、悪魔がでてきて、思わず知らず殺人者になってしまうことだってある。

実人生の多くのことがらは、「善悪の彼岸」にあり、その解決のない無明の境は、しばしば死をよぶ。トルストイも妹マリアも、しばらく自殺の誘惑をふりはらうことができなかった。生には、根本的に解決不能な謎がある。その謎は、人間を死にむかって引きずっていく。この謎に対して立ち上がったところから、トルストイの後期がはじまったのではなかったか。

これは藤沼貴氏が、トルストイから受けとった最大の課題のひとつでもあったと思う。しかし氏は、課題のみを受けとり、この自説はついに発表されなかった。そして、亡くなられるまで毎年、ヤースナヤ・ポリャーナの墓参りを欠かさなかった。そういう方であった。

最後に、妹マリアが、1876年3月16日（28日）付けでハイデルベルクから、兄トルストイに送った手紙を全訳しておこう。マリアの内縁の夫クレンはすでに1873年に死亡し、彼女は文字どおり身の置き所がなくなっていた。一方、トルストイは、『安娜・カレーニナ』を連載中であった。

愛するリョーヴォチカ、用事のことで兄さんに手紙を書かねばならないのが忌々しいくらいです。私がソーニャ（*ソフィア夫人——佐藤）の手紙と兄さんのメモに返事をしなかったのは、ただもう誰にも手紙を書くことができなかったからです——まったく書けないのです。こんな嫌悪すべき精神状態にあって、孤独は恐ろしく私を押しひしぎます。心労の絶えることはなく、それが、私のうえに剣のようにぶら下がっているのです。昼も夜も考えるのはそのことばかりで、ときどき私は恐ろしくなります。自殺についての考えが私につきまとうようになりました。そう、脳裏からまったく離れることなくつきまとうので、まるで病気か錯乱のようになってしまいました。でも、なにか異常なことが起ったなどと思わないでください。娘（*クレンとの間の娘、エレナのこと——佐藤）のことがなにもかもうまく運ばず、どうやってもだめなのです。やっと身の振り方を見つけてやったと思ったら、また元の木阿弥。なにをしてもちぐはぐで、まともならず、じゃ、どうすればいいかという、わからないのです——もうぜんぜんわから

ない。健康の許すかぎり、ロシアに行って冬を過ごそうかと思っていたけど、また娘のために戻ってこなくちゃならない。そして、それからどこへ行くのか？——やっぱりわからない。娘を手元に引きとろうと試みたけど、できない。そんなことをしたら、私はまったく人付き合いを断って、みんなから隠れて暮さねばならない。これは自分の娘ですと公言することはできないし、他人の娘だといつわることもできない。嘘をついて、へどもどして——。誰も助けてくれないときは、破廉恥な女であるのはたいへんなことね。スホチナー（Сухогина）とか、ロドゥイジェンスカヤ（Лодыженская）とかいった女はいいわね——二人の夫が支えてくれるから。でも私は、いまだにこんな事実はみたことがありません。よほどの鉄面皮でもないかぎり、私たちの世界の女が、私生児を手もとに引きとって、たった一人で、誰の助けもなく、「ほら、ごらんささい、これが私の不義の娘よ」と公言する勇気をもったようなためしは。私にはこれはできない。そして、私たちのうちの誰かが死ぬということよりほかに、出口は見えないのです。

というわけで、私は誰にも手紙を書けないのです。お金を受けとれるときを首を長くして待っています。そうしたら、すぐにロシアに行きます。誰よりも兄さんに会いたい。兄さんの追伸を読んで涙があふれました。どんなに兄さんたちといっしょに暮して、ソーニャの仕事を手助けし、心を休めたいことでしょう。でも、だめです。私の十字架がそれを許さないのです。

ああ、もしあのアンナ・カレーニナたちが、先になにが待ちかまえているか、知っていたなら。そうしたら、一瞬の快楽から逃げ出したことでしょう。それは決して快楽などではありません。なぜなら、掟に適わぬことはすべて、幸福とはなりえないからです。

いや、そんな気がするだけだ、ただそんな風に思えるだけだと、私たちはみな感じています。そして、自分にこう信じ込ませるのです。私はとても幸せだ、愛し愛されることはなんて幸せなんだろう、と！

人生の難問に対する回答はすべて福音書にあります。もし私が福音書をもうちよつと頻りに手にとっていたら、私が故なくして、夫との不幸な生活を強いられていたとき、これは、主が私につかわされた十字架なのだと思つたでしょう。「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」（*「マタイによる福音書」10, 23——佐藤）。でも、私は自分を解き放つことを望み、主の御心から逃げ出したのです。その結果、別の十字架を受けとったのです——もっと重い十字架を。

ポリーナ伯母さまの死は、さらに私を憂愁に追いやりました。私は冬のひと時を伯母さまと兄さんたちと過ごそうと夢見ていたのに。

どうか早くピロゴーフ⁵⁵²に送ってください。一刻も早くロシアに帰りたい。⁵⁵³

⁵⁵²この富裕な領地は、トルストイの父ニコライが買ったもので、その直後、ニコライが変死を

(*下線は原文イタリック——佐藤)

遂げたことは、すでに述べた。次兄セルゲイと MARIA が、この領地を分割相続したが、ここは後に二人の不倫の恋の舞台となった。こういう因縁の地だ。

⁵⁵³ Переписка Л.Н.Толстого с сестрой и братьями. М.: Худож.лит., 1990. С.352-353.

第2章 「アルザマス一夜」と、もう一人のアンナの鉄道自殺

アルザマス一夜

二つの不倫の恋でこういう人生の底なしの深淵に直面したのち、トルストイはかつてない体験をし、それを「アルザマス一夜」と呼んだ。『戦争と平和』完成（1869年）の直前のことで、彼は、この体験を『狂人の手記』という短編に表わしている。この作品の主人公は、土地に投資しようと、ペンザ県へ、売り地を見にでかけたのだが、旅の途中で自分のしていることがばかばかしくなり、気がふさぎだす。憂愁はどんどん高まって、アルザマスで夜宿屋に入ると、どうにも耐えがたくなる。売り地のことなど、もうどうでもよい。

「なんでおれはこんなに気がめいるのか。おれは何が怖いのか」と彼が自問すると——『わたしだ』と死の聲が、音もなく聞こえた。『わたしはここにいる』

彼は、この瞬間から「生と死がひとつに溶け合い」、「何か新しいものが胸の底に根をおろし、これまでの人生すべてを損なってしまった」ことを感じるのである。

「生には何もない。あるのは死だけだ」（『狂人の手記』）。死こそは真の実体であり、しかも、ある日突然理由もなくやってきて、われわれをさらっていく。だから、死は、けっして人間の思考の網にはかからず、人間の支配に屈することがない、とトルストイは考えた。こうして、不条理な死が、生の虚構を破壊し去ったのだ。

遮蔽物なしで「闇」に直面

このできごとだけ取り出してみると、一見いかにも唐突に思われるが、そこにいたる経過を跡づければ、それが起るべくして起きたことが分かる。

二つの恋愛——とくに妹マリアの恋と夫ヴァレリアンの死——は、トルストイの女性性、母性への信仰を根底から揺さぶった。これはつまり、彼が幼年時代から引きずってきた「闇」に、もはや遮蔽物なしで直面せねばならないことを意味する。『幼年時代』の明暗の明の部分はすでに滅びつつあり、それが抑えていた暗の部分が噴き出したのだ。

だが…ほんとうに女性性、母性はもう抛り所たりえないのか？… ^{なま}生のままの現在を舞台として、リアルな女性性——母性もエロスもそのままにふくむ——をもつヒロインを、リアルな貴族の家庭に住まわせてみたら、どうだろう？ 彼女は夫、子供、恋人について、また自らの生活環境に対し、なにを思い、どんな行動に出るであろうか？ トルストイがそんな文学的、思想的実験に向かって踏み出すことは必至であった。

或るまぼろし

こうした水面下での胎動は、やがて打って一丸となり、やがてひとつのビジョンと構想を生み出すにいたるのだが、これに関連し、V.イストミンは回想記で、そのビジョンについて、

つぎのようなトルストイの言葉を伝えている。

「それは、今とちょうど同じような、午餐後のひとときで、私はひとりソファーに横になり、一服していた。すっかり考え込んでいたのか、それとも眠気とたたかっていたのかは覚えていないが、突然、私の目の前に、優雅な貴族的な女性の腕の、裸の肘が閃いた。思わず私は、このまぼろしに見入りはじめた。すると、肩、首、ついには、舞踏会の衣装をまとった美しい女性の全身のすがたが現れ、あたかも、なにごとかを哀願するかのように、悲しげな眼差しでじっと私を見つめるのだった。まぼろしは消えたが、私はもはやその印象から自由になることはできず、それは昼も夜も私につきまとった。それから解放されるためには、私は、その具現化の方法を探さねばならなかった。これが、『アンナ・カレニナ』のはじまりだ」。こう伯爵はむすんだ。⁵⁵⁴

«Это было так же, как теперь, после обеда, я лежал один на этом диване и курил. Задумался ли я очень или боролся с дремотою, не знаю, но только вдруг передо мною промелькнул обнаженный женский локоть изящной аристократической руки. Я невольно начал вглядываться в видение. Появились плечо, шея, и, наконец, целый образ красивой женщины в бальном костюме, как бы просительно вглядывавшейся в меня грустными глазами. Видение исчезло, но я уже не мог освободиться от его впечатления, оно преследовало меня и дни и ночи, и, чтобы избавиться от него, я должен был искать ему воплощения. Вот начало „Анны Карениной“», — закончил граф.

ここにあきらかに感じられる哀惜の念は、自分の魂を殺さねばならぬ無念さをさきどりしたものだかもしれない…。こういう愛憎相半ばする、いまだ定かならぬビジョン——それは、自分自身の心の一部にほかならないのだが——を始末するには、すなわち、そこから「解放されるためには」、なんらかの方法が必要である。それが作品の構想だ。その最初の着想について、ソフィア夫人は、1870年2月24日の日記にこう書いている。

昨晚彼は、上流社会の貴婦人で、結婚しているのに自分を見失ってしまった女性のタイプが脳裏に浮かんだ、と私に語った。自分の課題は、この女性をひたすら哀れな、罪のないものとするこゝとで、このタイプが現れるやいなや、以前頭に浮かんでいたすべての登場人物とすべての男性のタイプが、それぞれの場所を得て、この女性のまわりに集まったのだそうだ。「いまや、一切がはっきりした」と彼は言った。⁵⁵⁵

⁵⁵⁴ Воспоминания В. Истомина о Л. Н. Толстом: «На закате» (впервые опубликованы в кн. Жданова В. А. «Творческая история „Анны Карениной“». М., 1957. С. 243).

Жданов В. А., Зайденшнур Э. Е. История создания романа "Анна Каренина" // Толстой Л. Н. Анна Каренина: Роман в восьми частях / АН СССР; Изд. подгот. В. А. Жданов и Э. Е. Зайденшнур. М.: Наука, 1970. (Лит. памятники). С.816.

⁵⁵⁵ С.А.Толстая. Дневники в двух томах. Т.1. С.497.

この構想が『アンナ・カレーニナ』につながるものである点で、論者の見解は一致している。だが、これがそのまま『アンナ』で実現したわけではない。ザイデンシヌールが指摘しているように、トルストイは、アンナを「ひたすら哀れな、罪のないもの」としたわけではないからだ⁵⁵⁶。

なるほど、作家にとっては、妹マリアも義妹タチアーナも哀れである。しかし、彼女らにまったく罪がないとすれば、だれに悲劇の責任があるのか？ たまたま成り行きでそうなったのか？ 出会い頭の事故のようなものか？ 社会の後進性が原因か？ では、進歩すれば、この種の悲劇はなくなるのか？ それとも、人間に内在するエロスが原因か？ それを抑制するか否かという意志の問題に帰するのか？

まもなく、ある事件が起こり、トルストイに構想の再考を強いることになる。

「アンナ」の鉄道自殺

1872年1月4日、新たな作品を準備する四つめの、そして最後の事件が起きた。トルストイの知人、アンナ・ステパーノヴナ・ピロゴヴァの不幸な内縁関係と鉄道自殺だ。ニコライ・グーセフは、彼女の事件を詳細に調査、再現している。

1872年1月8日、『トゥーラ県報知』に、次のようなニュースが載った。

1月4日午後7時、身元不明の、きちんとした身なりの若い女性が、モスクワークルスク鉄道線のヤーセンキ駅（クラピーヴェンスキー郡）で、貨物列車第77号通過の際、レールに近づき十字を切り、列車の下に身を投げた。女性の身体は、真っ二つに切断された。事件は現在取調中である。

まもなく、この女性の身元が判明した。女性の名は、アンナ・ステパーノヴナ・ピロゴヴァ。彼女は、ヤースナヤ・ポリャーナから3露里（1露里は1.067キロメートル）のところにあるチェリャーチンキ村の地主ビビコフの家に住んでいた。ビビコフはやもめ。アンナは彼の家政婦で、内縁の妻だった。トルストイ夫妻は、ビビコフをときどき訪れ、アンナのこともよく知っていた。ソフィア夫人の言葉によると、アンナは「背の高い豊満な女性で、容貌も性格もロシア的。黒髪で、目は灰色。美しくはなかったが、たいへん感じがよかった」

自殺の原因は、ビビコフがアンナに、お前と別れて、息子の女家庭教師と結婚する、と宣言したことにあった。アンナはトゥーラに行き、その数日後、下着の着替えだけを入れた小さな包み（узелок）⁵⁵⁷を持って、チェリャーチンキ村最寄りの鉄道駅、ヤーセンキ駅（現シェーキノ駅）にやってきた。そこから彼女は、ビビコフあての手紙を、御者に彼のところへ持

⁵⁵⁶ Жданов В.А., Зайденшнур Э.Е. Там же. С.803.

⁵⁵⁷ この小さな包みは、アンナ・カレーニナが持っている「赤い袋」のひとつの原型かもしれない。

っていかせた。ビビコフは手紙を受けとろうとしなかったが、手紙には次のように書かれていた。

あなたが、私を殺したのです。あなたは、あの女と幸せになるがいい——もしも、人殺しが幸福になれるものならば。私にお会いになりたければ、ヤーセンキ駅のレールの上で、私の死体を見ることができるでしょう（グーセフ III、134-135 頁）。

アンナの死体は、ヤーセンキ駅の駅舎に運ばれた。トルストイは、アンナの死体解剖を見に行った。「印象は恐ろしく、彼の心に深く刻みこまれた」とソフィア夫人は日記に記している⁵⁵⁸。

凄惨な鉄道自殺からわずか 2 ヶ月後、3 月 18 日にはすでに、トルストイは新しい長編小説『アンナ・カレーニナ』（1873-1877）を書きはじめた。作家はいかに、生と死の不条理という「古くて新しい問題」を解決したであろうか。

⁵⁵⁸この死体解剖の検分は、『アンナ・カレーニナ』に直接痕跡を残している。草稿では、トルストイによく似た主人公レーヴィンも、トルストイと同じように、アンナの轢死体を駅舎に見に行くからだ。その箇所を訳出しておこう。

アンナが自殺したといううわさがモスクワに広まった。レーヴィンは駅へ行き、そこで、アンナの醜く損なわれた身体と、美しい死に顔とを見た。そして、ヴロンスキーが、ズボンをつまみあげ無帽で、よろめきながら駅舎の外へ引きずられてくるのが、目に入った。（草稿 №198 〈20, 562〉）

レーヴィンは、とりわけ兄ニコライが死んだときなど、ときおり絶望的な気分におそわれていたが、7 章では、キティーの出産のおかげでまさに幸福いっぱいだった。それが、アンナの死後の終章、第 8 章では、いきなり人生に対する猛烈な懐疑に落ち込み、自殺を恐れる毎日となる。いくらなんでも唐突すぎるだろう。なにがきっかけになったかは書いてないが、アンナの自殺が引き金になったとしか考えられない。ほかになにも直接のきっかけが見当たらないし、レーヴィンの絶望が、ちょうどアンナが死んだころから始まるからである。そして、草稿とおなじく、当時モスクワにいた彼は、彼女の死体を見に行ったのかもしれない——彼は、彼女が死ぬ直前にはじめて会い、魅了されているから。そして、「印象は恐ろしく、彼の心に深く刻みこまれた」。そうすれば、説明がつく。

第3章 「女性的なるもの」を殺し、葬る

アンナ・カレーニナ——この若い母親こそは、トルストイにとって最高の女性像だ（年齢は、決定稿にははっきり示されていないが、草稿では作品冒頭で 27 歳）⁵⁵⁹。彼女にはすべてがある。彼好みの美貌、魅力、愛、エロス、高い精神性と知性、驚くほど多方面にわたる才

⁵⁵⁹ ちなみに、『戦争と平和』のヒロイン、ナターシャも、エピローグで 27 歳になっていた。『復活』のカチューシャも、法廷でネフリュードフと運命的な再会をとげたときは 27 歳だ（32, 36）。殺人事件に巻き込まれたときは 26 歳で（32, 11）、そのあと裁判まで半年間拘禁されるという設定である（ただし、この作品の年代とカチューシャの年齢には、あちこちに不整合がある）。

女の 27 歳という年齢は、トルストイにとってとくべつな意味合いをもつようだ。

ソフィア夫人（1844 年 8 月 22 日生まれ）が 27 歳だったのは、1871—1872 年だが、夫人の 71 年 8 月 18 日の日記でも（С.А.Толстая. Дневники в двух томах. Т.1. С.84）、作家の日記でも、このころ夫婦間に危機があったらしいことが分かる。「14 年前からはじまったのだ——弦が切れ、私が自分の孤独を意識するようになってから」（1884 年 6 月 7 日）

孤独をつよく感じるようになり、心のなかでなにかが切れてしまった、とふたりとも言っているから、かなり深刻で、傷を残したと思われる。

私もリョーヴォチカもひどい病気をしたこの前の冬から、私たちの生活のなかで、なにかが壊れてしまった。かつては私のなかにあった、幸福と生命への確固たる信仰が壊れてしまったことを、私は知っている。私は、揺るぎない感じを失ってしまい、今ではいつでも或る恐怖を感じている——なにかが起るといふ恐怖を。そして、実際に起っているのだ。ターニャ（妹）は行ってしまった。リョーヴォチカは健康じゃない。この二人を私はこの世のだれよりも愛しているのだけれど、二人ともいなくなってしまう。というのは、リョーヴォチカは、全然前の彼じゃないからだ。彼は「齢だよ」と言うけれど、私は「病気よ」と言う。でも、このなにかが私たちを引き離しはじめたのだ。（*太字は原文イタリック——佐藤）

トルストイにとって、この時期が概して危機の時代だったのは、本文でみたとおりで、その危機はもともと夫婦関係と表裏一体だったわけだが、なにか具体的なことが二人のあいだにあったのかもしれない。「リョーヴォチカは、わたしを自分の沈んだ気分引きずりこむ」、「幸福への信仰が失われた」などの言葉は、その可能性を示しているようだ。

トルストイ夫妻が結婚 8—9 年目に危機をむかえたことは、つぎのことがらにも反映している。『アンナ・カレーニナ』冒頭のオブロンスキーの浮気は結婚 8 年目で、アンナの息子セリョージャは 8 歳という設定になっていることだ。まあ、「七年目の浮気」というくらいで、一般の傾向かもしれないが、問題はそこの中身なのだ。

ウラジーミル・ジダーノフとパーヴェル・バシンスキーは、一つの要因として、1871 年 2 月 12 日の次女マリアの誕生との関連を指摘する。ソフィア夫人は、産褥熱で危うく死にそうになり、医師はこれ以上子供を産まないことを勧めたのに、トルストイは言うことを聞かず、翌 72 年にピョートル、73 年にニコライ、75 年にワルワラと次々に子供を産ませたが、いずれも乳児のうちに死亡している（Жданов В.А. Любовь в жизни Льва Толстого. М., 1993. С.97; Басинский П.В. Там же. С.223-224, 261-264）。

避妊は悪、つまり、出産をとまなわないう性交は罪悪である、とトルストイは考える一方で、性欲はやたらと強かったから、こういうことになった。『アンナ・カレーニナ』で良妻賢母として描かれているドリーが、アンナが避妊しているのを聞いて、「あまりにも複雑な問題のあまりにも安易な解決」だと驚き反発する場面があるが、そこにはトルストイの考え方が反映している。

いずれにせよ、ソフィア夫人の悲哀と苦痛は並大抵ではなかったに相違なく、これが夫婦間の危機の主な原因ではないにしても、一因をなしたことはたしかだろう。時期的にも、「この前の冬から」という夫人の言葉と符合している。

ちなみに、バシンスキーは、次女マリアの誕生日を 8 月 12 日と誤記しているので注意されたい。

能——そして、ゆたかな母性。

作者は、そうしたアンナを、困難な生の渦のなかに放りこむ。彼は、ヒロインに最上流階級で特権的生活を享受させたい恋に陥らせることで、作品のテーマと直面させるのだ。テーマとは、すなわち、生活が、不自然で利己的なものであるならば、愛もまた、不自然で利己的なものになる。

こういう生の条件のもとで、アンナは、愛とエロスと母性をうまく調和させられるであろうか？ 虚構の世界では、ナターシャ・ロストワは、それをなしえたが——。こうして、アンナに、**愛とエロスと母性とを統合する課題**が与えられる。

試練を課されたアンナは、自分のありあまる美点をよりどころにして、それにうち勝たなければならぬ。しかし、トルストイは、最初からヒロインが試練に敗れることを予期していた。彼は、作品執筆のそもそもの始めから一貫して、アンナの破局を予定していたのである。「アンナは家を出て、身を投げる」⁵⁶⁰

アンナは、抗しがたい力で、悲劇に向かって引きずられていく。彼女の母性愛も、高度な知性、精神性も、自己実現の欲求と仕事も（病院建設、農村の学校での授業、猛烈な読書、子供のための小説の執筆）、さらには、明晰な自己認識さえも（彼女は、自分の悲劇の原因を完全に自覚している）、すべて役に立たない。諸悪の根源は——彼女の女性性そのもの、なか

⁵⁶⁰ № 1 (рук. № 1). — 20, 5.

『アンナ・カレニナ』のテーマのパロディーとしての『リア王』

『アンナ・カレニナ』のテーマにかんして述べたところで、それに関連し、トルストイの特異なシェイクスピア観、とくに『リア王』に対する独特の感じ方について触れておこう。

7章5節でレーヴィンは、幻想曲『荒野のリア王』を聞く。この「永遠に女性的なるものが運命との戦いに入る」架空の交響詩は、多くの論者が言うように、たんに標題音楽のパロディーなのではない。『アンナ・カレニナ』のテーマそのもののパロディーとなっている。しかも、「女性的なるもの」＝コーディリアが、リア王＝トルストイを救えなかったのも同じだ。

概してトルストイはシェイクスピアが嫌いであった。晩年の『シェイクスピア論』（1900年）では、その作品が論文『芸術とはなにか』の立場から全否定される。いわく、無宗教的で、世界感覚がシニカルで（よい感情、内容がない）、不自然で大げさである（誠実でない。ほんとうに感じたことを表現していない）。トルストイは、シェイクスピアの読後に残る、あのいわく言いがたい、黒々と広がる闇の濃さが耐えられなかったのかもしれない。

そのトルストイがとくに槍玉に挙げたのが他ならぬこの『リア王』だった。これは理解できないではない。家出願望、彼と次女マリアとの近すぎる関係、家族への財産贈与——これらすべてが並々ならぬ深さでパロディー化されてしまう。老いたる独りよがりな王（作家）が財産を棄て（たつもりで）、愛してくれる者としてはファザコンの娘ひとり。ついに家出して、荒野をさまよひ、孤独に耐え切れず、頭がおかしくなり、野垂れ死ぬ——。トルストイが自分と重ね合わせて考えなかったはずはないから。

ジョージ・オーウェルは、論文「リアとトルストイと道化」（平凡社刊『オーウェル著作集IV』所収）で、トルストイの『シェイクスピア論』に反論し、リア王を思い浮かべると、奇妙なことにトルストイに似ている、と言う。しかも、似ているのは、風貌だけではなく、「トルストイが、リア王と同じく間違った動機で行動を起こし、彼が自分で望んだような結果は得られなかった点」だと。

善（と自分で思い込んだもの）に対して悪で報いられるのが現実だとは、トルストイももちろん承知しているが、その非情さをそのまま突きつけるシェイクスピアは、彼には「無宗教でシニカル」だと感じられ、神経を逆なでしたのだろう。

んずくエロスだ。

もしも、わたしが、あの人の愛撫だけを熱烈に愛する愛人以外のなにかになれたら。
でも、だめだわ。(7章30節)

しかし、エロスは、「女性的なるもの」と不可分である。ということは、女性性は致命的な矛盾を内包していることになる。だから、それはもはや、生のよりどころたりえず、世界の調和の基礎になりえない——。このことを、いまやトルストイは確信した。

かつて、アクシーニャとの苦しい恋のさなかにも、「女性的なるもの」の否定が、作家の脳裏を予感のようによぎったことがあった。

「わたしは、いく晩も眠れぬおそろしい夜をすごしながら、わたしを苦しめるこの愛をこなごなに砕き、壊そうとした。でもわたしは、それをすっかり破壊はしなかった。ただわたしを苦しめるものだけを破壊し、また心の落ち着きをとりもどした。そして、いまでもやはりおまえのことを愛している。でも、べつの愛で愛しているのだ」

(『家庭の幸福』2編9章)

こうしてトルストイは、女主人公、アンナを殺し、自分の内面の女性像を葬り、「女性性」を解体して、ニュートラルな裸のイデー、「善」と「愛」だけを残す。彼はいまや、ニュートラルな「善」と「愛」によって、自分の目的を、現実において達しようとする。彼は、万人に対して、善と愛によって結合せよと呼びかけるのだ。これこそが、トルストイの「転回」の本質であり、ここから、彼の創作活動の後期がはじまる。

「転回」の結果、かつて世界の調和の基盤であった女性性は、破壊要因となり、さらには巨大な悪の根源へと変わっていく。『クロイツェル・ソナタ』(1887-1890)ではもはや、「女嫌い」、女性に対する憎悪があらわだ。この作品で作者が興味をもっているのは、ポズドヌイシェフの妻自身、彼女の個性ではなく、彼女の裸の女性性とエロスにすぎない。女性性を再度殺害すること——これこそが、この作品が書かれたおもな動機だ。

なるほど、「転回」のあとも、トルストイは、『復活』のカチューシャ・マースロワという美しい女性像を創造している。だが彼女でさえ、かつてのアクチュアルな意義を失っており、「理想の女」の回想、リフレーションにすぎない。作家は、「トルストイ主義」がほぼ完成したとき、「理想の女」をいわば冥府から呼び出して、両者を秤にかけてみたのである。

1889年、トルストイは、『悪魔』という中編を書いた。これは、前に述べたように、若い地主と、農婦の愛人との不倫の関係を描いたもので、かつてのアクシーニャとの関係を下敷きにして。主人公は、貴族の令嬢と結婚した後も女の魅力から逃れられず、ついにピスト

ル自殺してしまう。べつのヴァリエーションでは、主人公が女を殺す。いずれにせよ、欲望が解決不能という点ではおなじだ。「女性性」はいまや、「悪魔」に変貌したのである。⁵⁶¹

アンナの破滅は必然か、それとも作者の呪詛か

こうしてアンナは、作家の予想どおり（あるいは希望どおり）、生の不条理との戦いに敗れたわけだが、では、その生の不条理は、いったい具体的にどのように捉えられているのか。

彼の世界認識が、この作品ほどの深さと徹底に達したことはかつてない。その認識の果てに、彼は、アンナ＝女性性をこの世に調和したかたちで入れる余地はないことを確認し、それを葬り去った。換言すれば、アンナは、全力でぎりぎりまで不条理な世界と戦い、破滅したが、その原因は、たんに彼女が女だからであった（！）。

そういう世界とはなんなのか。それは、作者の目に、アンナの目にどのように映じ、表現されているか。アンナの悲劇を説明しうるような究極の真理があるのか。つまり、彼女の死にはなにか必然的なものがあるか。あるいは、それは、結局のところ、トルストイの「女嫌い」のためか。つまり、女への愛憎と呪詛で心身を病んだトルストイが、なにがなんでも、自分の「アニマ」を殺したかったということか。

これをみなければ、トルストイがなぜ「女性的なるもの」を殺さざるをえなくなったか、ほんとうのところはわからず、彼の「転回」の理解は片手落ちになってしまう。

次章で、『アンナ・カレーニナ』における世界認識とその表現をみよう。

⁵⁶¹ 本稿の第3章（「女性的なるもの」を殺し、葬る）については、筆者はかつて、ほぼこれと同内容のことがらを、「ヤースナヤ・ポリャーナ文集」に書いたことがある。

Юсуке Саго «Женственность» в творчестве Л.Н.Толстого: ее жизнь и смерть // Ястопольянский сборник 2002. Тула: Издательский дом "Ясная Поляна", 2003.

第4章 ブラックホールとしての世界：『アンナ・カレニナ』における「ひげもじゃの小さな男」と「赤い袋」

『アンナ・カレニナ』における生の不条理とはなにか？ 作者の世界認識はどんなものか？ これまでみたところからだけでも、つぎのような疑問がわいてくる。アンナに、自分以外のものになることを要求する世界とはなんだ、作者とはなんだ、ということだ。

アンナがはっきり自覚しているように、彼女が破滅したのは、要するに、恋人のヴロンスキーなしでは生きられないからだ。それだけである。彼女にとっては、彼のほんとうの愛情さえあれば、あとはどうでもいいのだが、この男のほうはというと、社交界なしでは生きられない、というお決まりの根なし草である。アンナとの不倫の恋は、まさにその社交界への復帰を不可能にするから、彼の恋がさめるのは時間の問題なのだ。しかも、こういう根なし草は、かつてプーシキンが『エヴゲーニー・オネーギン』で喝破したように、人をほんとうに理解し愛することはできない（このたぐいの根なし草は、現代でもいろんな組織にぶらさがっているだろう）。

じっさい彼は、アンナが苦しんでいるのは、「立場のあいまいさのためだ」（7章 25節）と、最後の最後まで信じ込んでいる。つまり、カレニンと離婚⁵⁶²して社交界に戻れば問題はなくなる、という一方的な思い込みで、自分の悩みを相手に投影しているにすぎない。だが、アンナが苦しんでいるのはまさに、「ヴロンスキーは、彼女の苦しみの奥底まで理解することはできない」（5章 29節）からであり、いつかはその恋がさめるという絶えざる恐怖のためなのである。この一見複雑に見える悲恋の本質は、じつは以上で尽きているのだ（次章で、アンナの愛のドラマをくわしくみる）。

要するに、破局に終わるのが最初からみえている恋のために、アンナは捨てられるものも捨てられないものもぜんぶ捨てて、自分を貫いたと言える。だからこそ、彼女は見事にヒロインたりうるのだが、その最高の「自己実現」の結果、破滅させられるのでは、読者としても釈然としないではないか？

そんな世界が（あるいは作者が）、善なるものといえるだろうか。じつは悪なのではないか？ レーヴィンが疑っているように、世界とは、「邪悪な霊の嘲笑」にすぎないのではないか？ 「何者かが、自分をこの世につくりだし、意地悪くまた愚かしく弄んでいる」（『懺悔』4章）...

と、疑問をもって、もういちどこの作品をよくよく見渡してみると、じつに奇妙な「登場人物」がいることに気がつくのである。しかも、この「人物」がアンナの破滅に関係していることは確実にみえる。こいつが、もしかすると、なぞを解く突破口になりはしないだろう

⁵⁶² 当時の離婚をめぐる状況については、「参考資料1：19世紀ロシアの離婚事情について」を参照。

か——。

それは、何者とも知れぬ「小さなひげもじゃの男」と、アンナの「赤い袋」(バッグ)だ。「赤い袋」が描かれると、かならず、この奇妙な男が現れる。そして、ヒロイン、アンナの身にならず、重大な事件が起こるのだ——恋人ヴロンスキーとの出会い、彼の子の出産、そして自殺——。しかもこの男、現実にはヒロインにつきまとうだけでなく、ふたりの夢のなかにも出現する。おまけに、夢の内容がおなじだ。夢で男は、「鉄を鍛えねばならぬ。鉄を砕き、つぶさねばならぬ」と意味不明なことをフランス語でつぶやく。ヒロインは、この男におびえ、凶兆だと思っている。

わたしは、自分の寝室に駆けこむ。わたしは、そこに何かを取りにいかなければならない、何かを知らなければならないの。<...> すると、寝室の隅に何かを立てているのよ。<...> その何かが、くると振り返る。それは、男(мужик)なの——小さな、ひげもじゃで、恐ろしい。わたしは逃げようするのだけど、百姓は、袋に屈みこむと、両手でごそごそかき回しているの... <...> そして、かき回しながら、フランス語を話します。とても早口で、「r」の音をフランス語風に発音しながら、「鉄を鍛えねばならぬ、鉄を砕いて、つぶさねばならぬ」と言うのよ。わたしは恐怖で目を覚ましたくなって、実際に目を覚ます... でも、やっぱり夢のなか。わたしは、これはいったい何を意味するのか、考えはじめる。すると、コルネイ(*夫カレーニンの執事——佐藤)が、わたしに言うの——「お産ですよ、お産で亡くなられるんですよ、奥さま」。そして、わたしは、目を覚ます。(『アンナ・カレーニナ』4章3節)

このほとんど超自然的な、まるで悪霊のような存在が、アンナをすこしずつ死に向かって引きずっていくように見える。アンナ自身がそのように感じ、男を恐れている。とにかく、こんな男は、前作『戦争と平和』には——この壮大な調和の世界には——登場する余地がなかった。

それで、この男について深く考えていくと、まさにそれが上の疑問に答える巨大な象徴であり、同時に生きた存在であることがわかるのだ。

男と袋を突破口として、アンナの悲劇と、作品の世界観と、そして作者の「病気」をあきらかにするように試みよう。しかし、概して象徴というものは、説明、論証に手間を食うので、どうしても論述がくどくなるだろう。あらかじめ寛恕を乞う。

1. 「ひげもじゃの小さな男」と「赤い袋」が現れる場面と両者の特徴

まず、「男」と「袋」が現れる場面をぜんぶ挙げてみよう。

「男」のほうは――

- 1) モスクワのペテルブルク駅（つまり、ペテルブルク方面の列車が発着する駅。1章18節。以下、箇条書きのなかでは、数字のみ略記）。
- 2) アンナが乗っている客車のなか。車掌――罐焚き――車掌（1, 29）。
- 3) ボロゴエ駅（モスクワとペテルブルクのちょうど中間点）のプラットホーム（1, 30）。
- 4) ヴロンスキーがくわわった狩猟（4, 2）。
- 5) ヴロンスキーの夢（4, 2）。
- 6) アンナの夢（4, 3）。
- 7) アンナが自殺する日の早朝にみた夢（7, 26）。
- 8) 自殺の前（7, 31）。
- 9) 自殺したとき（7, 31）。

一方、「袋」のほうは――

- 1) モスクワのペテルブルク駅（1, 18）。
- 2) アンナが乗っている客車のなか（1, 29）。
- 3) アンナの夢（4, 3）。
- 4) 自殺の日（4度でてくる。7, 29-31）。

というわけで、両者はいつもほとんど同時に現れる。その具体的状況は、以下のとおりだ（通し番号は、「男」の出現する場面に合わせてある）。

1. 1873年から74年にかけての冬、アンナは、ペテルブルクからモスクワの兄のもとへ汽車でやってくる。ヴロンスキーは、駅に母親を迎えにきている（母親は、アンナと同じ車室に乗り合わせていた）。さて、汽車が駅に入ってくると――

威勢のよい車掌が、歩きながら呼子を吹き、飛び降りた。彼につづいて、せっかちな乗客たちが、ひとりずつ降りはじめた。まず、近衛士官が、背筋をぴんと伸ばして、あたりを厳めしく眺めまわしながら降りた。つぎに、落ち着いたのない商人が、バッグをもって、にこにこ笑いながら下車、それから、男（*мужик*）が、袋を肩にかついで、降りていった。（1章17節）

上の引用文にでてくる「威勢のよい車掌」が、ヴロンスキーを、彼の母親のいる車室へ案内する。そこで、彼は、アンナと初めて会う。

ところで、どうして、袋をかついだ「男 *мужик*」が、上流婦人たちの乗っている一等車に入

ることができたのか。мужик は、「もと農奴の身分の男、農奴出身の下層階級の男」という意味で、現在のロシアでも「おっさん、百姓」といった意味合いで用いられる。

しかも注目されるのは、草稿では、「男 мужик」は登場しなかったことだ。

客車が入ってきた。乗客たちが、窓から身を乗りだしていた。まず、茶色の二等車、それから、青色の一等車が、入ってきた。威勢のよい車掌が、歩きながら呼子を吹き、後ろ向きに飛び降りた。彼につづいて、せっかちな乗客たちが、まだ汽車が止まらないうちに、ひとりずつ降りはじめた。まず、近衛士官が、背筋をびんと伸ばして、あたりを厳めしく眺めまわしながら下車し、つぎに、商人が、バッグをもって、にこにこ笑いながら降りていった。(20, 145)

というわけで、トルストイが、なんらかの意図をもって、この神出鬼没の「袋をかついだ男」を登場させたことは、まちがいない。しかも、「袋をかついだ男」の出現につづき、二つの重要なできごとが起きる。アンナとヴロンスキーの出会い、そして、線路の見張り番の轢死である。

「見張り番は、酔っていたためか、強い凍てですっぱりと厚着をしていたためか、後退してくる汽車の音が聞こえず、ひき殺されたのだった」(1章 18 節)。アンナは、見張り番の死を、「よくない前兆」だと言い、涙ぐむ(1章 18 節)。

2. アンナは、帰り支度をしている。前夜、彼女は、ヴロンスキーと舞踏会で踊り、強く惹きつけられたが、彼のことを考えぬよう努めている。

アンナは、赤く染まった顔を、ナイトキャップと麻のハンカチをしまっていたかわいらしい袋にうつむけた。アンナの目は、とくべつに光り、たえず涙で覆われていた。(1章 28 節)

上につづく場面(1章 29 節)。アンナはすでに、車中の人となっている。彼女は、「赤い袋」を開いて、クッション(まくら)、ペーパーナイフ、イギリスの小説をとりだす。

アンナは、小さな器用な手で、赤い袋を開いて閉じ、クッションを取りだすと、それを膝の上に置き、ていねいに両足をくるんで、ゆったりと座った<...>。アンナは、袋から、ペーパーナイフとイギリスの小説を取りだした。<...> アンヌシカ(アンナの小間使い)は、赤い袋を、手袋をした幅広の手で、膝の上にもち、もうまどろんでいた。手袋の一方は、破れていた。(1章 29 節)

車室に、何人かの「男」(ムジーク)がすがたをみせる。最初は車掌だ。「すっぽりと厚着をし、雪まみれだった」(1章 29 節)。ちなみに、轢死した見張り番も「すっぽりと厚着をしていた」。なんとなく袋のかたちを連想させるのではないか。

アンナは、ふとヴロンスキーのことを思い出して、気持ちが高ぶり、次第に、幻覚とも忘我ともつかぬ状態に陥っていく。どこからともなく、「暖かいぞ、すごく暖かいぞ、熱いぞ」(1章 29 節)と奇妙な声が聞こえる。突然、車室にやせたムジークが入ってきて、温度計をみる。罐焚きだった。

「この腰の長い男は、壁のなかの何かに噛みつきだした。老婦人は、客車の長さいっぱい足伸ばしはじめ、客車を黒い雲で充満させてしまった。それから、まるでだれかを引き裂いてでもいるかのように、何かが恐ろしい音できしり、ガンガンたたきはじめた。そのあと赤い炎がアンナの目をくらませた。そして、すべてが壁によって閉ざされてしまった。アンナは、自分が転がり落ちた(провалилась)のを感じた」(1章 29 節)。そして、「すっぽりと厚着をし、雪まみれの男(*さきほど出てきた車掌——佐藤)の音が、彼女の耳元で、なにごとかがなり立てた」(1章 29 節)。ポロゴエ駅に着いたのだった。やっとアンナはわれに返り、一息つきにホームに降りることにする。

1 と 2 では、いくつかのモチーフがくり返しでてくる。「すっぽりと厚着をしたムジーク」と轢死のイメージ(「だれかを引き裂いてでもいるかのように」)。さて、引き裂かれたのは、見張り番か、それとも——アンナ自身か?

3. プラットホームに、ふたたび「男」(ムジーク)が現れる——「屈んだ人の影が、アンナの足下をすべりぬけ、ハンマーで鉄をたたく音が聞こえた」(1章 30 節)。「ハンマーと鉄」というモチーフを覚えておこう。これは重要なポイントになる。

さて、文字どおりその直後、彼女は、偶然、ヴロンスキーと遭う。そこでの「つかの間の会話は、ふたりを恐ろしく近づけた」(1章 30 節)。ふたりのあいだの距離は、ほとんど消えてしまう。

いまや、「男」が出現するとアンナとヴロンスキーにとってなにか重大事が起きることはあきらかだ。まるで、「男」が、アンナを忘我に引き入れ、さまざまな幻覚をみせ(彼女の轢死の幻視もふくめ)、ヴロンスキーとの出会いに導いた——こんな印象まで浮かんでくる。

4, 5, 6 (4章 1-3 節)

冬。ふたりが知り合って一年と少し経ち、アンナは、ヴロンスキーの子を妊娠している。ヴロンスキーは、一週間ぶっとおしで、外国の王子のお付きをさせられ、最後の日は、夜を徹して熊狩りに付き合わされる。朝方、彼は、疲れ切って帰宅し、すぐソファーに横になって眠りに落ちるが、悪夢で目覚める。

なんだ、これは？なんだ？おれが夢で見た恐ろしいものは？そうだ。百姓（Мужик）の勢子だ。小さい、ひげもじゃで汚らしい男（мужик）だ。そいつが身を屈めて、なにかかしていたかと思うと、フランス語でなにか奇妙な言葉をしゃべりだしたのだ。（4章2節）

ヴロンスキーは実際に、この勢子を熊狩りでみている。この男は、熊狩りで「重要な役割を演じた」のだ。

この日の夜、ヴロンスキーがアンナをおとずれると、彼女は「わたしはもうすぐ死ぬ」と言い、自分の見た夢の話をする。アンナは、この夢を「ずっと以前から」くり返し見ていたと言う。

わたしは、自分の寝室に駆けこむ。わたしは、そこに何かを取りにいかなければならない、何かを知らなければならないの。<...> すると、寝室の隅に何か立っているのよ。<...> その何かが、くるりと振り返る。それは、男（мужик）なの——小さな、ひげもじゃで、恐ろしい。わたしは逃げようするのだけど、百姓は、袋に屈みこむと、両手でごそごそかき回しているの... <...> そして、かき回しながら、フランス語を話しだす。とても早口で、rの音をフランス語風に発音しながら、「鉄を鍛えねばならぬ、鉄を砕いて、つぶさねばならぬ」と言うのよ。わたしは恐怖で目を覚ましたくなって、実際に目を覚ます... でも、やっぱり夢のなか。わたしは、これはいったい何を意味するのか、考えはじめる。すると、コルネイ（*夫カレーニンの執事——佐藤）が、わたしに言うの——「お産ですよ、お産で亡くなられるんですよ、奥さま」。そして、わたしは、目を覚ます。（4章3節）

実際、この夢の数日後、アンナは、女の子を出産して危うく産褥熱で死にかかると、アンナ自身、「男」をはっきり凶兆とみなすようになった。もうひとつ注目されるのは、アンナとヴロンスキーが「男」を、夢でも現でもみていること。そして、夢の内容がそっくりなことだ。

7, 8, 9 (7章26-31節)。

アンナ最期の日、「男」は3回、「袋」は4回現れる。

夢の場面から、およそ1年半後の1876年5月⁵⁶³。アンナが鉄道に身を投げる当日の早朝、

⁵⁶³ 草稿では5月28日(20,520)。ちなみに、第1章30節で、アンナがヴロンスキーと嵐のボロゴエ駅で出会ったとき、「こちらへどうぞ、28番です！」という声が響く。

トルストイは、これはやりすぎだと思ったのか、自殺の日には決定稿には入れなかったが、ふたりの関係が、最初から最後まで、否応のない宿命的なものだったことを示そうという意図はうかがえる。

アンナは、悪夢にうなされる。このころ、アンナとヴロンスキーは、ささいなことがきっかけで、いさかいをくり返していたのだが、この日も、ふたりは、つまらぬことで激しく口論する。アンナは、彼と仲直りしないまま、重苦しい眠りに落ちる。

朝、アンナがヴロンスキーと関係を結ぶ以前から何度もくり返して見ていた恐ろしい悪夢が、またも彼女の夢枕に現れ、彼女を目覚めさせた。年とったひげもじゃの小さな男が、わけのわからぬフランス語をしゃべりながら、鉄の上に屈みこんで、なにかしていた。そして彼女は——この夢ではいつもそうなのだが——この男が、自分に注意を向けないのに、鉄のなかで、なにか自分に対して恐ろしいことをしているのを感じた（まさにこの点に、夢の怖さがあったのだ）。（7章 26 節）

アンナはこの夢を、ヴロンスキーと関係する前から何回も見ていた、というのだから、「男」はたえずヒロインに付きまどってきたことになる。

アンナは、ヴロンスキーのところへ行って、彼に思いのたけをぶつけてやろうと、旅支度を始める。「袋」に必要な物を詰め、駅へ出かける。ヴロンスキーは、用事で母親の領地へでかけていた（7章 29 節）。

ニジェゴロド駅に着き、馬車を降りるときに——「アンナは、赤い袋を手に取り、馬車を出た」（7章 30 節）。そして、ヴロンスキーの母の領地のあるオビラロフカ（現モスクワ州ジェレズノドロージヌイ市）行きの切符を買い、汽車に乗る。

アンナは、高い階段を上がり、車室の汚らしいかつては白かったスプリングのきいたソファに、ひとり座った。袋は、スプリングの上でびくりと震え、落ちついた」（7章 31 節）。ふと窓外に目をやると、「男」のすがたがひらめく。「つば付き帽の下から蓬髪のはみでた、汚れた身なりの醜い小さな男が、車輪のほうに屈みこみながら、窓の前を通り過ぎた」（7章 31 節）

アンナは、オビラロフカ駅で降りたものの、途方にくれ、プラットホームの上を歩きまわっている。だが——

貨物列車が近づいてきた。プラットホームが揺れはじめ、アンナには、自分がまた汽車に乗っているように感じられた。突然、彼女は、初めてヴロンスキーと会った日に轢死した男のことを思いだし、自分が何をすべきかを悟った。（7章 31 節）

しかしアンナは、最初に貨車の下に身を投げようとしたときには、失敗する。赤い袋が、彼女を「じゃました」のである。

しかも、この 28 という数字は、トルストイ自身のジグクスでもあった。「参考資料 3：その他のシンボル」を参照されたい。

アンナが手からはずそうとした赤い袋が、彼女をじゃました<...>。ちょうど車輪と車輪のまんなかで彼女の前にきた瞬間、彼女は、赤い袋を投げすて、首をすくめ、両手をついて車両の下に倒れこんだ。(7章31節)

そのとき、「男」が最後に出現する——「小さな男が、なにやらぶつぶつ言いながら、鉄になにかしていた」(7章31節)。

8. 「袋」のイメージのほうは、アンナの死後、もういちど現れる——死にどころを求めて出征していくヴロンスキーとともに。

夕陽が、ホームに乱雑に積み重ねられた俵の山に当たり、斜めに影を落としていた。影のなかをヴロンスキーが、檻に入れられた獣のように歩き回っていた。(8章5節)

俵は、露土戦争の山なす死体をシンボライズしているのもあろうか——ヴロンスキー自身のそれをふくめて。

以上のことから、「男」と「袋」の特徴を箇条書き風にまとめてみると——

「男」の特徴

1. アンナの生涯のターニング・ポイントに出現する。換言すれば、「男」が現れると、重大な事件が起こる。その意味で、前兆である。
2. 変幻自在（一等車からでてくる。夢と現の境をかんたんに越える。仏語をしゃべる、など）。一種超自然的性格をもつようだ。
3. 外見につぎのような特徴がある——背が低い、ひげもじゃ、汚い、醜い。また、屈んでいることが多い。
4. つねに「鉄」のモチーフと結びついている（鉄道、ハンマーで鉄をたたく音、「鉄を鍛えねばならぬ...」というセリフなど）。

「袋」の特徴

1. やはり、アンナのターニング・ポイントに出現。
2. アンナの分身のようなイメージ。
3. 「男」と密接なつながりをもつ（「袋をかついだ男」。「男」が「袋」を引っかきまわすこと、など）。
4. 「男」とほとんど同時にでてくることが多い。

次節では、まず「袋」から、つつこんで分析してみよう。

2. 「袋」の研究史

「袋」に関する研究はほとんどなく、わずかに、ウラジーミル・ナボコフとトルストイ研究家、エドアルド・ババエフの指摘があるのみである。しかし、ナボコフは、興味深い指摘をしている。袋が「成長」しているというのだ⁵⁶⁴。

1章28節、アンナは、兄オブロンスキーの邸宅で、兄嫁ドリーと話しながら、「おもちゃのように可愛らしい」赤い袋に、ナイトキャップと麻のハンカチをしまう。ところが、これにつづく、ペテルブルグへ汽車で帰る場面では、アンナは、この同じ袋から、クッション（まくら）、ペーパーナイフ、「イギリスの小説」をとりだす⁵⁶⁵。

二つの場面は連続しており、二、三ページしか隔たっていない。だから、トルストイがまちがえたとは考えにくい。まちがいにしては粗雑にすぎよう。しかし、ナボコフは、なぜ袋が「成長」するのか、説明してはいない。

エドアルド・ババエフは、袋を「パンドラの箱」とみなしている。神話・民話には、「パンドラの箱」タイプの物語がたくさんある。主人公が、贈り物（箱、壺など）をもらう。その際、箱（壺）を開けてはならぬ、封印を切ってはならぬと言われる。しかし、封印はかならず切られ、災い、悲劇が起きる、という定型だ。わが「浦島太郎」は、その典型である。『アンナ・カレーニナ』のヒロインは、モラル上のタブーという「パンドラの箱」を開けた、というのが、ババエフの主張だ。したがって、彼によれば、袋は、アンナが破る倫理的タブーの象徴ということになる。

しかし、ババエフの説では、袋が描かれるときに、なぜ、「小さいひげもじやの男」もかならず、ほとんど同時に出現するのか理由がわからない。前に述べたように、アンナは、ヴロンスキーと関係する以前から、例の夢をくりかえし見てきたと言っているから、袋と男、彼のセリフ、袋を引っかき回す動作、鉄など、多くのモチーフは、ひとつつながりのコンプレックスをなしているはずである。

さらに、袋のイメージは、災いのつまった「パンドラの箱」には、ふさわしくないところがある。アンナが、自殺する前に、汽車の汚らしいソファに座ると、袋は「びくりと身震いした」。どこか可憐な印象だ。袋は、アンナの立場に立っているようではないか。しかも、袋は、アンナが貨車の下に飛びこもうとしたときに、それを「じゃました」のである。

「パンドラの箱」は、主神ゼウスが、プロメテウスと人類に災いを下してやろうという明

⁵⁶⁴ Набоков В.В. Лекции по русской литературе: Пер.с англ. Предисловие Ив.Толстого. М.: Независимая газета, 1996. С.255 — 268.

邦訳：ウラジーミル・ナボコフ『ロシア文学講義』（小笠原豊樹訳）、TBSブリタニカ、1982年。

⁵⁶⁵ Набоков В.В. Там же. С.258.

確な意志をもって、贈ったものだ（ヘシオドス『神系譜』）。基本的にネガティブである。だから、「パンドラの箱」には、アンナの袋の両義性が収まりきらないのだ。

3. 赤い袋——秘密の隠し場所——無意識

袋の描写を追っていくと、そこにはみごとな連続性があり、袋が、次第にたんなる袋以上の意味を帯びていくのがわかる——アンナが、さまざまな体験を重ねていくなかで。そしてついに、彼女の「無意識」のシンボルとなるのだ。

4章3節の彼女の夢からみてみよう（そのほうが、分析上好都合なので）。

夢の内容は——アンナは、自分の寝室に駆けこむ。彼女は、そこに、何かをとりにつかまなければならない。何かを知らなければならない。すると、寝室の隅に、「小さなひげもじやの男」がいて、袋の上に屈みこみ、両手でごそごそ引っかき回している——。

アンナが寝室に駆けこんだのは、袋をとりにつかまらねばならぬ何かは、袋のなかに隠されていた。その何かを男が引っかき回していた——こう推測される。袋には、なにか大事な秘密が隠されていたのかもしれない。

袋にこういう意味が生じたきっかけは、アンナの袋が最初にでてくる場面にしめされている。この場面は、アンナがヴロンスキーと舞踏会で踊り、たがいに強く惹きつけられる場面の翌日だ。このとき、アンナの心は、キティーへの罪の意識、ヴロンスキーにたいする自分でもはっきりしない感情、将来への漠然たる予感などで、はげしく揺れている。

アンナは、赤く染まった顔を、ナイトキャップと麻のハンカチ⁵⁶⁶をしまっていたかわ

⁵⁶⁶ ハンカチとナイトキャップ（ずきん）

ハンカチは、今日にいたるまで、ヨーロッパ全域で、別離のイメージと関係する。ヨーロッパでは、「もし、恋人にハンカチを贈れば、その恋人と別れることになる」と言われている。ロシアでは、ハンカチは、涙と結びつく——「ハンカチを贈れば、涙を贈ることになる」。いずれも、いまだにとってもポピュラーな迷信である（Энциклопедия суеверий. М.: Миф, Локид, 1995. Статья о беременной. С.329）。

ずきん（чепец、指小形は чепчик）は、18—19世紀の女性・子供用のずきん風帽子で、ロシアでは、結婚・離婚とかかわる。結婚するとずきんをかぶる習慣だったからだ。したがって、「ずきんをかぶる」は、結婚する、「ずきんを投げる（とる）」は、夫と別れることを意味した。

2章9節の、アンナがヴロンスキーと関係を結ぶ直前の場面では、彼女はもう「ずきんをもてあそびはじめる」。

アンナは、今日も、ヴロンスキーといっしょに夜遅くまでサロンで過ごして、真夜中に帰宅、夫カレーニンの待つ寝室に入ってくる。

アンナは、頭を垂れて、防寒ずきんの房ひもをもてあそびながら、入ってきた。彼女の顔は、あざやかに輝いていたが、その輝きは、明るいものではなかった。それは、暗い夜の火事の恐ろしい輝きを思わせた。

しかも、草稿の第4章では、アンナ自身、この慣用句「ずきんをとる」を用いている。ヴロンスキーはアンナに、夫カレーニンと離婚していまの「不愉快な状態」を解消することをしつこく迫るのだが、出産を間近にひかえ、死の予感にとりつかれているアンナは、「お産をするときに、

いらしい袋にうつむけた。アンナの目は、とくべつに光り、たえず涙で覆われていた<...>。

「だれの心にも、イギリス人がいうように、骨“skeletons”があるのよ」（*「骨がある」は、「秘密がある」の意味——佐藤）」（1章28節）

この場面のカギは、袋に物をしまう動作と「骨」（秘密）だ。アンナは、だれにも明かしたくない、自分にも明かしたくない気持ちや考えを、袋に物をしまうように、しまいこんだのではないか。あたかも、秘密を袋のなかに隠した、といったイメージが、彼女の意識の底にかたちづくられたのではないか。アンナの秘密——罪の意識、ヴロンスキーへの密かな感情、将来への予感など——が、袋に封印されたのではないか。

いったん袋に秘密をあずけるようになると、つぎつぎに、新たなアンナの想念、およびそれにまつわる事物が、心理的に袋にむすびついていく。つづく29節（汽車でペテルブルグへ帰る場面）では、「手袋」と「ナイフ」が袋にしまいこまれる。

アンヌシカ（*アンナの小間使い——佐藤）は、赤い袋を、手袋をした幅広の手で、膝の上にもち、もうまどろんでいた。手袋の一方は、破れていた。（1章29節）

赤い袋は、アンヌシカの手の中にあり、彼女の手袋の一方は、破れている。手袋からは、一般に、名誉、純潔、貞操といった観念を連想することができる。たとえば、ロシア語では、決闘を申しこむことを、文字どおり、「手袋を投げる」という。

『戦争と平和』においても、手袋が、純潔、貞操のシンボルとして用いられることがある。主人公ピエールは、フリーメーソン入会の儀式で、女性用の手袋を与えられる。そして、この手袋を汚さずに保ち、未来の妻に出会ったときに、それを「心の潔白」の証として贈るように言いわたされる（2巻2編4章）。

ずきんをとることを考えるなんて」と恋人に失望し、沈黙するのである（20, 264）。

要するに、ずきんは結婚と離婚を、ハンカチは別離、涙を連想させうる。

ちなみに、アンナは、妊娠中に編み物をするというタブーをあえて犯している。妊娠中に編んだり、縫ったり、紡いだり、また自分の着物の穴に継ぎを当てたりするのは、多くのスラヴ諸国で禁忌である。

・ «Славянские древности»: энциклопедический словарь под редакцией Н.И.Толстого. М.: «Международные отношения», 1995. Т.1. С.162.

・ Энциклопедия суеверий. Статья о беременной. С.25-27.

理由は、それらの行為が、新たな生命がまもなくこの世に現れ出る通路を、「縫い合わせ、ふさぎ」、難産を引き起こすと考えられたからだ（Энциклопедия суеверий. Статья о перчатках. С.26）。

アンナがこのタブーを知らないはずはないから、彼女自身、出産で死ぬことを予期し、望んでさえいた、ということになるだろうか？...

『戦争と平和』のアンドレイ公爵の妻リーザも、妊娠中に編み物をし、産褥熱で亡くなった。もともと、キティーも、出産直前に編み物をしてはいるが…（7章13節）

だから、手袋が破れるということは、「心の潔白」が失われる、名誉が汚される、といったことを連想させるわけである。「破れた手袋」が、すでにヴロンスキーへの密かな感情と結びついた赤い袋といっしょにある——このことが、ヴロンスキーと不倫の関係に陥る、名誉を失墜するなどの予感をアンナに呼び起こしても不思議はない。実際、このときにアンナのなかで手袋にそうした観念がリンクしたことは、2章7節であきらかになる。

ヴロンスキーの従姉妹で社交界の女王、ベティーの客間。アンナとヴロンスキーが出会ってから二ヶ月がたっている。ヴロンスキーは、いたるところでアンナを追い回し、彼女を口説く。それが、いつしかアンナにとっても、「人生の興味のすべて」(2章4節)になっていく。この場面、ベティーは、大勢の客の前で、アンナとヴロンスキーを露骨に挑発する。

「わたしは、愛というものを知るには、まず過ちを犯して、それから改めることが必要だと思うの。あなたはどうかお考えになって？」とベティーは、唇にかすかな固い微笑を浮かべ黙って聞いていたアンナに向かって、言った。

「わたしは」とアンナは、脱いだ手袋をもてあそびながら、言った。「わたしは...もしも頭の数だけ知恵があるのだとすれば、心の数だけ愛の種類もあるのだと思うの」(2章7節。*下線は佐藤)。

アンナは、ベティーの挑発をうまくかわすが、つい手が本音を吐いてしまったというところだ。

というわけで、手袋が、貞節、名誉、倫理的潔白などの意味をもっていることはまちがいない。「私は、なによりも大事にしていたものを失うんだわ——貞節な夫人としての名と息子を」(5章8節)。この「貞節な夫人としての名 честное имя」を手袋が象徴している。

さきの車中の場面にもどろう。手袋につづき、こんどはペーパー・ナイフが、赤い袋にリンクする。アンナは、ボロゴエ駅のプラットフォームでヴロンスキーと出会うすぐ前に、袋からペーパー・ナイフをとりだす。

アンナは、袋から、ペーパーナイフとイギリスの小説をとりだした。<...> アンナ・アルカージェヴナは、読んで、書いてあることは分かったが、でも、読むことは、つまり、他人の生の反映を跡づけることは、つまらなかった。彼女は、あまりにも自分自身が生きたかった。<...> しかし、することが何もなかったので、彼女は、小さな両手でなめらかなナイフをもてあそびながら、強いて読みつづけた。

<...> 「いったい何がわたしは恥ずかしいんだろう」と彼女は、侮辱されたように驚き、自問した。彼女は、本を放りだし、椅子の背にもたれ、ペーパーナイフを両手で固く握りしめた。<...> 「いったい、わたしとこの士官の坊やとのあいだに、どの知り合いともあるような関係以外なにかあるんだろうか、あり得るんだろうか？」彼女は、

軽蔑するように笑みを浮かべ、ふたたび本を読みだしたが、もはや、読んでいる内容は、まったく分からなかった。彼女は、ペーパーナイフでガラスをなで、ナイフのなめらかな冷たい表面を頬に当てると、突然彼女をわけもなく襲った喜びで、声を立てて笑いだしそうになった。(1章 29節。*下線は佐藤)。

もうナイフの意味はあきらかだろう。

こうして袋は、アンナの秘密——知りたいが知るのが恐ろしいこと、他人にも自分にも隠したいもの——の隠し場所のシンボルとなり⁵⁶⁷、次第に、彼女のさまざまな体験および体験に関わる事物をとりこんでいく。袋が「成長」するのは、このためだ。袋には、アンナの無意識の願望、感情、意志、思い出などが、心理的に投影され、徐々に蓄積していく。要するに、袋は、アンナの無意識のシンボルになる。その意味で、彼女にとって、一種の分身ともいべき存在となるのだ。

アンナの自殺前に袋が感情と意志をもった生き物のように描かれることは、こうした袋の意味から了解されよう。前に引用したように、車室の汚れたソファーに置かれた袋は、嫌悪と恐怖に身を震わせる。アンナが鉄道に飛びこもうとすると、袋は、アンナの手につまみつき、あたかも、アンナを自殺させまいと引き止めるかのようなようである。しかし、それらのふるまいは、実は、アンナ自身の内心の感情にほかならない。アンナの気持ちが、袋に投影されているのだ。飛び込むのをじゃまするのは彼女自身である。

以上の袋の分析であきらかなように、ナイフ、手袋などさまざまな事物に、登場人物の体験、感情、思いが絶えず重ね合わされていく。こうした心理的投影の結果、事物の意味は、いよいよ深さと広がりを増していく。物は物以上のもの、すなわち、袋のような意味での象徴となる。

そして象徴は、神秘的な不可知性をも帯びることになる。なぜなら、たとえば、ナイフにつまみつきアンナの情熱がどこからやってくるのか、だれがなんのためにそれをアンナに与えるのか、結局だれにもわからないからである。それは無意識かもしれない。その「暗い穴」の向こうにいるなにかの「霊」かもしれない。あるいはその両者は、名前がちがうだけで同じものかもしれないが、どっちにしろ、わからない以上、象徴もまた不可知であるほかはないからだ。

われわれは、こういう神秘的で多義的な無数の象徴のただなかに在る。世界は畢竟「象徴の森」にほかならない。したがって、世界は、象徴を通してしか、象徴的にしか認識できな

⁵⁶⁷ 机の「引き出し」も、同じような意味で用いられることがある——。「カレーニンは、自分の本当の立場を理解することがあまりにも恐ろしかったので、心のなかで、自分の家族に対する感情の入っている引き出しを閉め、鍵をかけ、封印した」(2章 26節)

い⁵⁶⁸。

これは、われわれが日々経験する当たり前のことにすぎないが、作者がどれほど徹底的かつ意識的に象徴を駆使しているかに目を向ける必要がある。読者がはっきり意識していないところに、作者は複雑な意味を与え、読者を誘導することができる。これは、いわばサブリミナルの手法なのである。だからこそ、われわれは、それぞれの場面にでてくる象徴をできるだけ押えていかなければならないのだ。

さて、こんどは、「男」のほうを検討する番だ。こっちは、その不気味なすがたと強烈なリアリティー、それに共時性からして（アンナもヴロンスキーも、男を見る）、たんなる心理的投影とも、文学的手法とも思われなところがある。だとすれば、それはなんなのか？ アンナになにをしているのか？ 実体的な力なのか？ 「男」は、本物の実在するなにかの悪

⁵⁶⁸ トルストイの「象徴の森」を覆い隠したもの：弁証法的唯物論、レーニン、進歩史観

象徴に対するトルストイのこうした考えかたが、ソ連時代の公式的イデオロギーと真っ向から対立するのはあきらかだ。弁証法的唯物論で説明されえない現象はこの世にない。だから、およそ象徴というものが存在する余地はなくなってしまう。

だから、象徴という、不合理で神秘的な側面をもつ現象を、社会主義イデオロギーのもとで研究することはむずかしかったのである。モスクワ大学文学部教授アーシャ・エサルネーク氏は「ソ連時代、トルストイは唯物史観のもとでリアリズム作家として位置づけられていたため、彼の作品の象徴は、研究しにくかった」と、筆者に私的な会話で証言した。

同氏は皮肉まじりに「人間は、合理的な社会的存在であり、象徴的存在などではありえない。もっとも幼児は、まだ社会的存在ではなく、生物学的存在だが」と語った。

レーニンという制約

しかも、ソ連時代のトルストイ研究には、他の作家の研究以上に制約があった。レーニンがみずから、トルストイ論を執筆し、トルストイを「批判的リアリズム」の作家と位置づけたため、この定義から逸脱する研究ができなくなったのである。

批判的リアリズムというのは、社会主義リアリズムの一つ手前の段階で、リアリズムの手法をもって現実を批判することを指す。批判的リアリズムは、文字どおりの批判にとどまり、社会主義のイデオロギーと世界そのものを描き出すことはない。だから、批判的リアリズムは、社会主義リアリズムよりも低い段階だとされた。

進歩の虚構

レーニンの定義は、『アンナ・カレーナ』(1873-1877)の論じられ方にも如実に影響した。ほとんどの『アンナ・カレーナ』論が、帝政ロシアの圧制、社会の後進性がアンナの純粋な愛を踏みこみ、という図式に収まってしまう。悲劇の原因は、遅れた社会だということだ。とくに、離婚のむずかしさである（「参考資料1：19世紀ロシアの離婚事情について」をみよ）。

たしかに、離婚は、アンナの運命を大きく左右した重要なポイントだ。結婚は、キリスト教の秘蹟の一つであり、神聖なものとみなされ、教会によって管理されていた。だから、離婚することは容易でなかった。離婚が許されるのは、基本的に、夫か妻のいずれかが姦通した場合だけ。ということは、離婚すれば、姦通者の烙印を押されることになる。

だからアンナは、夫のもとを去ったとき、愛息セリョージャと別れねばならなかった。息子を引き取りたくても、夫の意志次第であり、夫が嫌だと言えば、諦めるしかない。また、上流婦人が隠れて浮気、ロマンスを楽しむのはかまわないが、アンナのように、本気になって夫を捨てて愛人のもとに走り、その子を産むとなると、反社会的行為であり、社会から閉めだされ糾弾される。

しかし、こういう「社会の後進性」は、現在のロシアにはもうない。アンナの悲劇の原因は、もはや存在しない。となると、彼女の悲恋は、現代人にとっては、アクチュアルなものではないことになる。アンナの悲恋は、いまでは起こりえない過去の悲劇にすぎないのだろうか？

霊の類なのか？… まずは、男の特徴を分析し、いわば意味論的に迫ってみよう。最初に研究史をふまえる。

4. 「小さなひげもじゃの男」の研究史

この奇妙な人物のほうは、多くの研究者の注意を引きつけた。だが、いまのところ、見解はてんでんばらばらだ。

詩人ドミトリー・メレジコフスキーは、自著『トルストイとドストエフスキー』のなかで、この「老人」についてくわしく論じている。ただ、作品に「男」が登場する九つの場面のなかで、彼が「老人」と呼ばれるのは、一箇所すぎないが。アクセントが置き換わり、言ってみれば、「おっさん」が「老人」に格上げされたことで、かなり恣意的な解釈の余地が生まれることになった。詩人は、この「老人」を、「キリスト教以前の神の幻影」、「旧約の神」とみなす。この神は、ある「巨大な機械」の鉄に向かって、永遠に働きつつ、「あらゆる呼吸する、愛する肉体にたいし、その恐るべき仕事を、鉄のなかで遂行している」。「こういう神には、慈悲はない。あるのは、裁きと必然の鉄の法則だけだ——『復讐は我にあり、我これに酬いん』⁵⁶⁹。概して、メレジコフスキーの宗教論は非常に面白いものだが、しかし、汚らしいグロテスクな「男」が旧約の神というのは、どうみても無理があるだろう。

文芸学者ボリス・エイヘンバウムは、『レフ・トルストイ：七十年代』で、「男」をはじめ、いくつかのシンボルとアレゴリーを分析している（ろうそく、嵐、汽笛、鉄道など）。彼によると、「男」は要するに、アンナの幻覚であるが、それが4章の夢にいたって、「ヒロインの運命を示唆するアレゴリー（寓意的表現）」⁵⁷⁰となる。

だが、上でみたように、「男」はたんなる幻覚ではありえないし、その意味も、「運命の寓意」にとどまらないことはあきらかだ。

小説家ウラジーミル・ナボコフの見解も、基本的にエイヘンバウムと同じだ。

「男」は、アンナのいくつかのイメージが組み合わさってできたものである（「巨大な鉄の塊」に押しつぶされた見張り番、車掌、レールの作業員などの鉄道員）。「男」は、アンナの罪のシンボルだ。彼女のヴロンスキーへの情熱には、最初からなにか破壊的な要素がひそんでいた。「男は鉄に対して、アンナの罪深い生活が彼女の魂に対してなすのと、同じことをする——踏みにじり、滅ぼすのだ」。これが、男の伝語の言葉「鉄を砕いて、つぶさねばならぬ」の意味だとナボコフは言う。なぜ、伝語なのかといえば、それは、虚偽のシンボルだからだ。というのは、アンナとヴロンスキーは、虚偽の世界に住んでおり（トルストイの考えでは）、

⁵⁶⁹ Мережковский Д.С. Религия Л.Толстого и Достоевского. СПб., 1902 (=Мережковский Д.С. Л.Толстой и Достоевский. Т. II). С.489, 483-488.

⁵⁷⁰ Эйхенбаум Б.М. Лев Толстой: Семидесятые годы. Л., 1974. С.188-190.

ふつう伝語でしゃべっているからである⁵⁷¹。

一方、ソ連時代の研究者は、「社会的解釈」をとることが多い。

たとえば、**Y.S. ビリンキス**——。「男」は、アンナの夢か幻覚、つまり意識の産物であり、「普遍的な道徳の法則」を体現している。というのは、トルストイにとっては、そうした道徳律は、まさに神にしたがって生きる農民（百姓）の生活に具現されているからだ。ところが、「百姓の生活は、アンナには無縁で不可解な恐ろしいものである。それだけでアンナは、トルストイの立場からすると、罪深い女ということにならざるをえない」⁵⁷²

「男」の背後には百姓の世界がある——このテーゼは、ほかの論者にも共通している。**V.G. オディノーコフ**によると、「男」は、やはり農民の世界と関係をもっている。そして、ヒロインと、レーヴィンの真理探究、民衆の真理とが、近づきうることを示唆しているのだ⁵⁷³。

E.I. デニーソヴァの意見では逆に、「男」はアンナと民衆の真理との悲劇的な乖離を表す、ということになる。つまり、彼女は、「自分の生活が、民衆の単純で自然なそれにくらべると、なにか本当でない損なわれたものであると感じとった」。その結果、ヒロインの意識にこうした醜怪な幻が生まれた⁵⁷⁴。

これらの見解はいずれも批判に耐え得ない。というのは、「男」は多くの場合鉄道員であり、農民ではない。「男」たちは、トルストイの理想的農村に住んでいるわけではなく、工業化の進む新時代に生きているのだから。そしてこの時代は、アンナだけでなく、彼ら自身をも滅ぼすのだから（見張り番の死を思い出そう）。

L.I. エリョーミナは、「男」を二系列の対立するイメージ——「闇 vs 光」と「死 vs 生」——の文脈でとらえようとする。つまり、一方では、闇、暗がりなど、他方では、光、炎などだ。それらは、現実のモノであるとともに、シンボルでもあり、「おたがいに織り合わされ、相関関係にある」。「男は、暗がり、闇、そして死とむすびつく。〈...〉 男は、混濁した（暗くなった）意識の産物だ」⁵⁷⁵。

こうきれいさっぱり整理してしまうと、アンナの目をくらませた「赤い炎」などまでが、光の系列に入ってしまう、本来の意味からずれてくるだろう。

V.I. ネムツェヴァは、ヒロインの「ヴロンスキーへの情熱」、「男」、「鉄」は、「ひとつの連想体系」をなしていると考える。つまり、「鉄」は、「鉄のように頑固な情欲の法則」、「鉄のように峻厳で非人間的な道徳律」、「『すべてがひっくり返ってしまった時代』の悲惨さ」、「不

⁵⁷¹ Набоков В.В. Там же. С.255 — 268.

⁵⁷² Билинчис Я. О творчестве Л.Н. Толстого. Очерки. Л.: Современный писатель, 1959. С.306 — 307.

⁵⁷³ Одиноков В.Г. Характер исторической эпохи и творческая индивидуальность художника (Лев Толстой в 70-е годы. “Анна Каренина”). В кн.: Вопросы творчества и языка русских писателей. Вып. 4. Новосибирск, 1962. С.36, 38.

⁵⁷⁴ Денисова Э.И. Образы “света” и “тьмы” в романе “Анна Каренина”. В кн.: “Яснополянский сборник 1980: Статьи. Материалы. Публикации”. Тула: Приокское книжное издательство, 1981. С.95 — 104.

⁵⁷⁵ Еремина Л.И. Свет как символ и реальность в романе Л. Толстого “Анна Каренина”. В журн.: “Русская речь”, 1978, № 1. С.11 — 18.

正な社会の鉄のような非人道的性格」——こういったものを象徴しているという⁵⁷⁶。

しかし、「鉄のような法則」とか「鉄のような非人間性」とかいうのは、要するに、形容句にすぎないのではないか。はたして、それでなにかが明らかになるだろうか。

とまあ、「男」に関する研究はだいたいこんなところであるが、しかし実は、それらには、共通点がひとつあるのだ。つまり、「男」がシンボリックな、あるいは寓意的な意味をもつという指摘である。そして、彼がヒロインの死を予告するという点でも一致している。だが同時に、いくつもの重要な問題が未解決のままだ。たとえば、「男」の呼び起こす得体の知れぬ恐怖感、たんに彼が凶兆であるからにすぎないのか。彼の特徴ある醜怪な容貌は、何を語っているのか。なぜ彼は、一貫して「鉄」のモチーフとむすびついているのか——。

藤沼貴氏は、「男」が神話的表象の「鍛冶屋」と関係があるという仮説を提出した（1994年）。次節では、この仮説を検証する⁵⁷⁷。

⁵⁷⁶ Немцева В.И. Эволюция психологизма в художественном творчестве Л.Н.Толстого 1870 — 80-х годов: (Особенности изображения героев и конфликтов): Дис.канд.филол.наук / АН СССР. Ин-т мировой лит.им.А.М.Горького. М., 1988. С.11.

⁵⁷⁷ 筆者の「男」に関する研究のこれまでの展開

1994年4月に筆者は、「ひげもじゃの小さな男」と「袋」にかんする報告を藤沼貴氏のゼミでおこなったのだが、それを聞いた藤沼氏は、「男」は神話的鍛冶屋だろうと推測された。筆者は、伊東一郎氏からも、関連文献などについて助言をいただいたうえ、その仮説を検証し、1994年10月にロシア文学学会総会で再度このテーマで報告した。

・『アンナ・カレーニナ』における「内的関係」——「赤い袋」と「小さな髭もじゃの男」について——、「ロシア語ロシア文学研究」（日本ロシア文学会誌）第27号、1995年。

その骨子は、鍛冶屋はアンナの運命の告知者であるとともに、近代という「鉄の時代」の起源を表し、その邪悪な本質を暴露している、というものだった。ただし、袋については、ふいごだろうと見当をつけてはいたものの、それがなにを表現しているのかはよくわからなかった。

その後1997年には、筆者の一連の論考とは関係なく、ノルウェーで類似の視点による、興味深い論文が書かれたが、上の疑問点に答え得るものではなかった。

・ Lönnqvist Barbara: Символика железа в романе Анна Каренина // Grimstad, Knut Andreas – Lunde, Ingun (ed.): Celebrating Creativity – Essays in Honour of Jostein Børtness. Bergen, University of Bergen, 1997. 97–107.

その内容を要約しておく、筆者 Lönnqvist Barbara は、『アンナ・カレーニナ』における「鉄」のイメージを丹念に追ったうえで、「ひげもじゃの男」は、一種の鍛冶屋であろうと推測している。

夢に出てくる男は、一種の鍛冶屋であり（「鉄は鍛えなければならない」）、その風貌に追加されたディテール——もじゃもじゃのあごひげ——は、ヘーパイストスの醜悪なすがたを思い起こさせるので、「愛の情熱の炎」の連想が強められることになる。しかも、ロシアの迷信では、鍛冶屋は予言の能力とむすびついている。「鍛冶屋は運命を鍛える」のだから。

この論文では、民話で鍛冶屋がまさに「結婚を鍛える」ことにも言及されているほか、ヴロンスキーの姓（Вронский）についても、おもしろい指摘がある。

すなわち、Вронский は、「黒毛の馬 вороной конь」との連想で語られることが多いが、そのほか、金属と武器も連想させる。воронить（錆止めのため金属表面に酸化物皮膜を作る、いわゆる青焼処理、ブルーイングをする）、вороненая сталь（青焼処理を施した鋼鉄）、вороненый револьвер（青焼処理を施した回転式連発拳銃）。さらにヴロンスキーの名は「闇」と「不幸」ともむすびつくとして、彼女は次の諺を挙げる。「婚礼の馬車の列に黒馬はつけない」«Вороних лошадей под жениха с невестой в поезд не берут.»（Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка. М., 1955. Т.1. С.244）

5. 神話・フォークロアの鍛冶屋

神話・フォークロアの鍛冶屋は、洋の東西を問わず、民族、時代にかかわらず、だいたい同じような特徴をもっている。そのおもなものは、

1. 天の火（雷、太陽）と関係をもつ。自身、雷神だったり、雷神の助手の役割を果たしたりする。
2. 地底の世界と関係をもつ（地下の鉱石、火山の炎などと）。
3. 天と地、両方につながりを有することから、天と地の仲介者となることがある。さらに、ここから、運命の告知者になりうる。
4. 魔力をもつ——すがたを消す（隠れ頭巾）、無敵の武器をつくるなど。実際、歴史的にも鍛冶屋は、まさに革命的な新技術をあやつる「魔法使い」だった。
5. 特殊な存在とみなされる。祭司、シャーマン等の高い位にあったり、逆に、賤民として差別されたりする。

ただし、この論考では、鍛冶屋は、アンナの「鉄の運命」つまり無慈悲な宿命、情熱などを包括するメタファーであるにとどまっており、文明論的な視点は欠けているし、「袋」との関係も不明であった。

その後筆者（佐藤）は、ロシアの心理学者、ヴェロニカ・ソローキナ氏の協力をえて、上に述べた視点を補うとともに、心理学的分析をつけくわえ（とくに C.G.ユングの象徴、元型にかんする考えかたを参考にした）、論証を補強し、ロシアの学術誌に発表した（Юсуке Саго, Сорокина В.В. «Маленький мужик с взъерошенной бородой»: (Об одном символическом образе в «Анна Карениной») // PHILOLOGICA. 1998. T.5. № 11/13. С.139-153）。

藤沼氏は、1997年にこの論文の草稿を一読され、独自の観点、問題提起をくわえ、ロシア民話研究会で報告された（藤沼貴「ロシアの鍛冶屋」、「ロシア・フォークロア研究」7・8号所収、2000年、45-60頁）。

藤沼論文の骨子はおもに二点あった。ひとつは、日本の鍛冶屋にかんする資料と、それにかんする考察を追加したこと。これで、鍛冶屋の神話的、民話的象徴のもつ意味が、基本的に日本でも同じであることがたしかめられた。もう一点はさらに重要で、なぜ『アンナ・カレニナ』の作者は象徴をもちいたのか、なぜ、こんなにわかりにくい、手の込んだ表現方法を使ったのか、という根本的な問題提起である。

それというのも、この作品を熟読しても、「男」と「袋」の象徴的意味は容易に捉えられず、したがって、本稿の後半で述べるようなことがらは、読みすごしてしまう。とすれば、これは、作品の欠陥にほかならず、象徴が重要な意味をになっている以上は、失敗作とさえ言いうる、と藤沼氏は指摘されたのである。

藤沼氏は、論文の最後に、この問題を提起しつつ、ご自分の解答の「ライトモチーフ」を示されている。トルストイが象徴に重要な役割を負わせたことには、『アンナ・カレニナ』が危機の文学であることが反映している。危機の時代の危機の文学であることが、こうした表現を採らせたのだ、と。

本稿は、この問題に答えようと試みたものであり、同時に、「袋」＝「ふいご」など、他の論点も可能なかぎり補充し、その意味をあきらかにするように努めた。

6. 不具者である——小人、せむし、びっこなど。また、ひげが非常に長かったり、もじゃもじゃだったりする。

これはひとつには、職業病だろう。片足でふいごを踏みつづけるせいで足を悪くしたり、鉱山（地底）での重労働で健康を損ねたりしやすかった。また、あとでくわしく述べるように、鉄器文明のネガティブな面が、「不具」というイメージに結晶した可能性がある。

7. 性的なイメージとむすびつく。ハンマーで鉄床を打つさまが性交にたとえられたり、炉が子宮、女性性器に、ハンマーやふいごが男性性器になぞらえられるなど（ミルチャ・エリアーデ『鍛冶師と錬金術師』⁵⁷⁸）。

8. 男女の仲介者。結婚の媒介者、保護者。

スコットランドのグレットナ・グリーンでは、鍛冶屋が、駆け落ちした男女のために、結婚式を挙げる風習があった⁵⁷⁹。

8 は、もちろん 7 と重なり合う。それから、雷＝天と地の結婚という普遍的なイメージもかかわってしよう。

ざっと以上だ。こうした神話的鍛冶屋の典型としては、ギリシャ神話のヘーパイストス（ローマ神話のウルカヌスに対応）、北欧神話の鍛冶屋の小人族などが思い浮かぶが、ここではコンテキスト上、おもにロシアとその周辺から、いくつか実例を挙げておくことにしよう。

伝説『賢い子ソロモンと悪しき母』

ソロモンは勇士の息子。しかし母親がソロモンにひどくつらく当たったので、家を出ざるをえなくなった。彼はたまたま鍛冶屋に出会い、その弟子にしてもらった。あるときソロモンは、海の底に降りてみたくなったので、鍛冶屋といっしょに長い鎖とガラスの家をこしらえた。鍛冶屋は彼を海底に降ろし、そこで彼はまる七年をすごした。やがてソロモンは、すべてのことを知り、地上に上がった。

それから彼は、天国がどういうところなのか知ることにした。それで鍛冶屋といっしょ

⁵⁷⁸ Eliade, Mircea. *Forgerons et alchimistes / Mircea Eliade*. — Nouv.ed.corr.et augm. Paris: Flammarion, 1977, 188 p.

邦訳：エリアーデ著作集第5巻『鍛冶師と錬金術師』（大室幹雄訳）、1973年。

⁵⁷⁹ **グレットナ・グリーン**

イングランドでは、18世紀中ごろに、結婚にかんする法律が変わり、20歳以下の男女は、親の承諾なしには結婚できなくなった。そこで、たくさんの若いカップルが、親の反対を振り切って、スコットランドに駆け落ちした。というのは、同地では、16歳になれば、本人の意思で結婚できたためだ。国境を越えた最初の宿場町が、グレットナ・グリーン（Gretna Green）で、そこで恋人たちは、鍛冶屋に式を挙げてもらったのである。

現在でも、同地には18世紀の鍛冶場を復元した結婚式場があり、根強い人気をもっている。

に、長い長い鉄の梯子を鍛え上げた。ソロモンは、昇りに昇り、ついに天国に行き着き、そこで神に会った。神はソロモンに、地上から人間をひとりだけ連れてきてもよいと言ったので、彼は鍛冶屋を天国に入れてくれと頼んだ。神は願いを聞き届けた。それでふたりとも、天国で清められた⁵⁸⁰。

ここでは鍛冶屋は、天と地の仲介者である。ちなみに、この伝説には、ソロモンという主人公の名前以外にも、旧約聖書のモチーフがみいだされる。ヤコブが夢で見る「先端が天まで達する階段」と「三日三晩魚の腹の中にいた」ヨナだ。

民話『鍛冶屋と悪魔』

鍛冶屋は、悪魔を絵に描き、毎朝仕事にかかるまえに、そいつにペッと唾をひっかける慣わしだった。怒った悪魔は、青年になりすまし鍛冶屋のところへやってきて、うまく助手にやとわれた。ある日、悪魔は、年とった奥方に、ひとつ身体を「鍛えなおして」、若返ってはいかが？とすすめると、奥方は承知したので、悪魔は、奥方を炉に放りこんだ。奥方は、あら不思議、ぴちぴちした若い女になって、炉からでてきた。この奇跡を聞きつけた老人が鍛冶屋のところへやってきたが、なぜかあいにく悪魔は留守。「わしも若返りたい」という頼みを断るわけにはいかず、鍛冶屋は悪魔のやりかたをまねて、年寄りを炉に放りこんでみた。もちろん、老人は焼け死んだとき（この話にはいくつかヴァリエーションがある）。

この話の炉には、子宮、胎内のイメージが重なっている（そこから生まれ変わる、ということ）。また、鍛冶屋と悪魔（闇、地底の世界）のつながりもみてとれる。

まじないの歌（女性が結婚できるように歌う）

鍛冶屋が仕事場からやってくるよ
栄えあれ！
鍛冶屋が三本の鉄槌をかついでいるよ
栄えあれ！
鍛冶屋さん、わたしに結婚式の黄金の冠をつくっておくれ
栄えあれ！
その切れ端で黄金の指輪をつくっておくれ
栄えあれ！
そのまた切れ端で留め針をつくっておくれ
栄えあれ！
その冠でわたしが結婚式を挙げられるように
栄えあれ！

⁵⁸⁰ Драгоманов М. Малорусскія народныя преданія и рассказы. Київ, 1876. С.105 — 108.

その指輪でわたしが指輪交換をできるように
栄えあれ！
その留め金でスカーフをとめられるように
栄えあれ！
わたしたちがこの歌を歌ってあげる娘さんに、幸運があるように
栄えあれ！
娘さんの願いがかなうように、幸運が通り過ぎないように
栄えあれ！⁵⁸¹

この歌では、鍛冶屋は、男女をむすびつけ、結婚を「打ち固める」祭司である。

ナルト叙事詩のバトラズ

ナルト叙事詩は、北カフカスのオセツト人の口承英雄叙事詩。バトラズ（Баграз）は、ナルト族の英雄。

バトラズは生まれたとき、身体が灼熱した鋼鉄でできていた。身体を冷ますため海に飛びこむと、海水がぜんぶ蒸発、海がからからに干上がった。蒸発した海水は立ち昇って黒雲となり豪雨を降らせ、やがてもとの海がもどった。

バトラズははじめ、海底にすむドンベツトウイル一族に養育される。彼は、天の鍛冶屋、クルダラゴン（Курдалагон）に身体を鍛えてもらおうと思ひ立ち、天に昇る。この鍛冶屋は、英雄たちのために甲冑や武器をつくったり、壊れた頭蓋骨を直したりし、天か死者の国にすんでいる。

バトラズは、鍛冶屋の言いつけで、竜の巣をみつけ、たくさんの竜を殺す。ふたりは、その死体を焼いて炭をつくり、炉に点火。バトラズが炉に入ると、鍛冶屋はまる一週間、十二の方向からふいごで吹く。

十分灼熱したバトラズは、海に飛びこむ。海は沸騰、蒸気は黒雲になる。彼は全身青い鋼鉄に鍛えなおされるが、ただ一か所、腸だけは十分焼きを入れられなかった——海水がぜんぶ蒸発して、もうなかったのだ。やがて豪雨が降り、海はもとのすがたにもどる。バトラズはふだん空にあって、ナルト一族に危険がせまると、稲妻となって降りてくる。

バトラズの非業の死には、6-11世紀にアラン人がキリスト教化された史実が反映している。

この叙事詩には、さきに挙げた鍛冶屋の特徴 1-5 のほか、英雄、鍛冶屋、竜退治という、ジークフリート伝説などでおなじみの組み合わせがみられる（この組み合わせのベースにあるのは、文明の一般的パターンだろう。つまり、人間が鉄を手にするこゝで、大規模な戦争、勝利、敗北が起こるといふ）。

⁵⁸¹ Обрядовая поэзия: Книга I. Календарный фольклор / Сост., вступ. Ст., подгот. Текстов и коммент. Ю.Г.Круглова. М.: Русская книга, 1997. С.303.

ブリヤート（東シベリア、バイカル湖東岸）の伝説『天の鍛冶屋ボジントイとその九人の息子たち』

人間に鍛冶の技術を教えたのは、天の鍛冶屋ボジントイ（Божинтой）とその九人の息子たちだ。ボジントイは、まもなく天にもどったが、息子たちは、地上の女たちと結婚し、鍛冶屋の祖先を生んだ。彼らは、白い鍛冶屋と呼ばれ、人間を守り病気を治し、儀式においては道具類に白いリボンがむすばれる。

彼らとは別に、黒い鍛冶屋がいる。彼らは、人間の魂を食べ、つねに忌まわしいできごとを起こすので、恐れられている。儀式をおこなうときは、顔をすすで黒くする。

ヤクート（東シベリア）の伝説『地下の邪悪な鍛冶神、クダアイ・マクシン』

ヤクート族は、鍛冶の技術を、地下の鍛冶屋で邪悪な神、クダアイ・マクシン（Кыдаай Максин）から学んだという⁵⁸²。「彼は鉄の家に住み、白黒赤まだらの黒い牛を持っている。この家に近づくまで何里にもわたり、地面は燃えている鉄滓でおおわれている。この神の額は、九本の指の厚さのすすでおおわれ、ほおは三本の指の厚さの錆びでおおわれ、顔は山からちぎられた土のかたまりのようである。目はつねに閉じられ、彼が物を見ようとすると、八人の男が上から、別の八人が下から、鉄のかざりばり鉄のまぶたを引き離す」。この地下の神は、鍛冶屋だけでなくシャーマンを地上にもたらし、みずからも地下のイニシエーションにくわわる。彼は、鉄を鍛えるように、シャーマンの魂を鍛える⁵⁸³。

ブリヤートとヤクートの例は、かつて鍛冶の技術があたえた衝撃、違和感を生々しく物語るようだ。それから、クダアイ・マクシンの外見は、作家ニコライ・ゴーゴリが描いた妖怪の頭領ヴィイ、またウクライナの妖怪、ブニャク、カシヤーンなどとよく似ており（類似の特徴をもつ神話的存在はスラヴ全域に見出される）⁵⁸⁴、いずれも鍛冶屋と関連していることがわかる。おそらく、これらの妖怪には、鍛冶場の炉のイメージが重なっているのだ。「重いまぶた」は炉のふたであり、彼らの、あらゆるものを射殺す凶眼は、炉のなかで燃えさかる魔法の火ではないか（ちなみに、ヴィイも「鉄の顔」をしている）。

ゴーゴリの話が出たついでに、もう一つ 19 世紀ロシア文学から例を挙げておこう。詩人アレクサンドル・プーシキンの叙事詩『ルスランとリュドミラ』だ。美女リュドミラをさらう悪役、チェルノモールには、鍛冶屋のイメージが付与されている。——小人であること、せむしであること、長い長いあごひげ、隠れ頭巾、ルスランとリュドミラの結婚に介入するこ

⁵⁸² ヤクート人がさまざまな用途に使いこなすヤクートナイフは、万能ナイフとして有名だ。

⁵⁸³ ブリヤートとヤクートの伝説は、田中克己『鍛冶屋と鉄の文化』に拠った（『日本古代文化の研究・鉄』所収、森浩一編、社会思想社、1974年）。

⁵⁸⁴ 伊東一郎「《ヴィイ》——イメージと名称の起源」、「ヨーロッパ文学研究」第32号、早稲田大学文学部、1984。

栗原成郎『ロシア民俗夜話』（丸善ライブラリー）、1996、63-92頁。

となどだ。しかも、作者の言葉自体がそのことを裏づけている。プーシキンは、チェルノモールを「レムノス島のびっこの鍛冶屋」に、つまり、ギリシャ神話の鍛冶神、ヘーパイストスにたとえているのだから。

以上のような鍛冶屋の特徴は、言語学的な面にも反映している。「スラヴ諸語でもちいられる語源 kovati は（*露語の кузнец「鍛冶屋」、ковать「鍛える」などの語が派生）、他のインド・ヨーロッパ語族では、祭司、詩人、魔法使い・シャーマンなどを意味する⁵⁸⁵。

また、語根 ков-をもつ単語群には、動詞 ковать、名詞 кузнец（鍛冶屋）、кузня（鍛冶場）などととも、「悪だくらみ」の意味をもつ単語がある——козни（陰謀、姦計）、коварный（狡猾な、裏表のある、陰険な）、коварство（狡猾、陰謀）などだ。⁵⁸⁶

さらに、ことわざにも、その片鱗を看取することができる。

«Умудряет Бог слепца, а черт кузнеца»（神はめくらを賢くするが、悪魔は鍛冶屋を利口にする）。

«Кому Бог ума не дал, тому кузнец не прикует»（鍛冶屋は、神が知恵を授けなかった人間を、鍛えることはできない。要するに、馬鹿につける薬はない）。

しかしとくに重要なのは、「Куй железо, пока горячо»だ（鉄は熱いうちに打て〈鍛えよ〉）。

このことわざは、古代ローマにさかのぼり、ラテン語、フランス語、英語、ロシア語の各種文献に現れ⁵⁸⁷、仏語では、露語とおなじく、日常よくもちいられる慣用句だ。

“Il faut le battre le fer quand (=pendant que) il est chaud”.

ところで、例の奇妙なセリフ「鉄を鍛えねばならぬ、鉄を砕いて、つぶさねばならぬ」は、まさにこの慣用句ではじまる。

“Il faut le battre le fer（鉄を鍛えねばならぬ）, le broyer, le pétrir...”.

さて、『アンナ・カレーニナ』にもどろう。

6. 「男」と「袋」＝鍛冶屋とふいご

「男」の特徴——小さくひげもじゃ、鉄とつながっている（ハンマーで鉄をたたき、「鉄を鍛えねばならぬ…」というセリフなど）、変幻自在、運命を告知する（彼が現れると、重大な事件が起こる）、男女関係、出産に介入する（「男」はあたかも、ヒロインとヴロンスキーを出会わせ、むすびつけるかのようだ。また、アンナの夢で、出産への関与が暗示されていた）

⁵⁸⁵ Иванов В.В., Топоров В.Н. Проблема функции кузнеца в свете семиотической типологии культур. В кн.: Материалы Всесоюзного симпозиума по вторичным моделирующим системам, т.1 (5). Тарту, 1974. С.87 — 90.

⁵⁸⁶ Фасмер М. «Этимологический словарь русского языка» в четырех томах. Т.2. М., 1967. С.270, 279, 402.

⁵⁸⁷ Михельсон М.И. Русская мысль и речь: Свое и чужое: Опыт русской фразеологии. СПб., 1902. Т.1. С.487.

——これらは、鍛冶屋の基本的特徴を網羅するものである。

のみならず、アンナとヴロンスキーのドラマは、鍛冶屋の仕事のプロセスと絡み合うような恰好で進んでいくのだ。その際、「赤い袋」は、鍛冶屋のふいごのような役割を果たす（1章 29—30 節）。

①「アンナは、赤い袋を開いて閉じた」（ふいごの送風の動きを思わせる。ちなみに、ふいごは露語では文字どおり、「鍛冶屋の皮袋 *кузнечный мех*」という）。

②「暖かいぞ、すごく暖かいぞ、熱いぞ」⁵⁸⁸という奇妙な声が聞こえ、罐焚きが温度計をみる（鍛冶屋が、ふいごの風で炉の温度の上がるのをたしかめている）。

③「そのあと赤い炎がアンナの目をくらませた」（炉の炎が燃え上がる）。

④「屈んだ人の影が、アンナの足下をすべりぬけ、ハンマーで鉄をたたく音が聞こえた」（鉄を鍛えている）。

⑤この間、外では猛烈な吹雪が荒れ狂っていた（ふいごの送風が強められる）。

問題は、ここでのふいごの風が、何であるかということだ。当然、それなしでは、鍛冶屋は仕事ができないわけだが、それは、ヒロイン自身の心の動きにほかならない——これが肝心なところである。というのは、①—③は、アンナの情熱の隠喩でもあるのだから。それは、彼女の心に吹きすさびはじめる嵐であり、燃え上がる炎である。

ということは、ヒロインの心が動揺し、ヴロンスキーに傾くと——つまり、心＝「袋」が、姦通にむかって開かれると——、そこから風が吹きだして、鍛冶屋は仕事を始める、ということになる。煎じつめると、鍛冶屋は、アンナの心にひそむ暗い情熱をエネルギーとして、働き、ふたりを結びつけていく——このように描かれているわけだ（ちなみに、アンナが死んだ日も、彼女が汽車に乗ると、「微風が、カーテンを揺らしはじめた」（7章 31 節）⁵⁸⁹

⁵⁸⁸ これは、ロシアの遊びを踏まえている。ある物を決めて、探しっこをする。物に近づくにしたら、暖かいぞ、すごく暖かいぞ、熱いぞ、と言って、ヒントを与える。この場合は、何者かの声が、そうだ、お前が求めているのはヴロンスキーだ、と言っているわけだ。

⁵⁸⁹ 袋、ふいご、風について、補足しておこう。

3章 15—16 節

アンナとヴロンスキーが知り合って半年と少したった 7 月中旬、ペテルブルグ近郊のクラスノエ・セローでの競馬の翌日。「風で震えるヤマナラシ」と複数の袋が描かれる。この場面は、「袋」は出てくるが「男」は現れない例外的場面だが、上に述べた「ふいご」の特徴はみてとれる。

競馬をきっかけに、ふたりの運命は、大きく変わる。競馬で、ヴロンスキーが落馬。アンナは、彼が無事だと聞いて、衆人の前で号泣する。それで、ふたりの関係が、明らかになってしまう。夜、彼女は夫カレーニンに、「私は、ヴロンスキーを愛しています。私は、あの人の愛人です」と

4章の夢のなかで、彼女は、「袋」をとりもどそうと思うが、すでに「百姓は、袋に屈みこみ、両手でごそごそかき回している」。これは、袋がもう「男」に支配され、思うさま利用されているということだろう。その仕事の行き着く先は、「鉄を鍛えねばならぬ、鉄を砕いて、

告白する。翌日、アンナは、「これから自分はどうなるのか」と半狂乱でテラスを歩きながら、ふと風景を見る。

アンナは、足を止め、冷やかな陽光に輝く葉を茂らせた、風で震えるヤマナラシの天辺を見た。そのとき彼女は、彼らが自分を許さないであろうこと、すべてのもの、すべての人間が、いまや、自分にたいして、この空と葉のように無慈悲になるだろうことを悟った。(3章15節)

ロシアでは、ヤマナラシは、呪われた木とされる。伝説によれば、イスカリオテのユダは、この木で縊れて死んだ。そのため、ヤマナラシの葉は、わずかな風のそよぎにも戦き、秋には、鮮血のような赤に染まる。

アンナは、息子セリョージャを連れて家を出てモスクワへ行くことにし、荷造りを始める。玄関に袋や箱が運び出される。アンナも自分の「旅行用の袋(バッグ)」に物を詰めている(3章16節)。*袋は二カ所出てくる——佐藤)。

しかし、カレーニンは、息子を取り上げることを持ちかけながら、「愛人と決して会わぬ」ことを手紙でアンナに要求してくる。アンナは、ヴロンスキーとの駆け落ちをも覚悟するが、彼は煮え切らない態度に終始し、彼女の苦しさを理解できない。こうしてアンナは、心の底で、彼に失望しはじめると同時に、人生そのものへの希望も失いだすのだ。

一方、レーヴィンの登場する場面にも、袋、ふいごなどのシンボルは用いられているが、どうも凄みに欠けるきらいがある。しかし、参考までに例を挙げておこう。

3章11-12節

上のアンナの場面とちょうどおなじころに(7月中旬)、レーヴィンはキティーと再会する。

レーヴィンは、ちょうどアンナとヴロンスキーが知り合ったころに、キティーにプロポーズして断られてしまった。その後、彼は、農村経営に打ちこみ、キティーのことを忘れようとつとめてきた。

7月半ばのある日の夜明け前、レーヴィンは、田舎道を歩いている。「風が起こった。あたりは、灰色に、陰気になった。ふつう、夜明けに、光りの闇にたいする完全な勝利に先だつてやってくる暗鬱なときが訪れた」(3章12節)。すると、向こうから馬車がやってくる。馬車の屋根には、複数の箱が積んである。すれちがったときに、彼が馬車の窓を見ると、キティーが乗っている。ふたりの目が合い、レーヴィンは、「おれは、彼女を愛している」とつぶやく。

これは、ふたりの、プロポーズ以来の再会である。アンナとヴロンスキーの運命が暗転したまさにその時期に、レーヴィンとキティーの運命は、上昇しはじめるのだ。

5章18-20節

レーヴィンとキティーは、結婚して三ヶ月目。レーヴィンは、結核にかかっている兄ニコライが同棲している娼婦マリア・ニコラエヴナから、ニコライが汽車のなかで発病した、という手紙を受けとる。レーヴィン夫妻は、ニコライを看取りに出かける。レーヴィンは、「この死んだ肉体が生きた兄であるという恐るべき真実」に圧倒される。部屋は、悪臭を放ち、乱雑をきわめ、壁は痰だらけ。しかし、キティーは、かいがいしく看病にかかる。彼女は、夫に、「わたしの小さな袋のなかからガラス瓶を取ってきて」と頼む(5章18節)。

レーヴィンが瓶をもってくると、部屋の様子は一変。「重苦しい悪臭は、香水を混ぜた酔の匂いに変っていた。キティーは、唇をとがらし、ばら色の頬をふくらませて管を吹き、酔を撒いていた」。そして病人は、「希望の新しい表情をうかべて、眼をはなさずキティーをながめていた」(5章18節)。

十日後、ニコライは死ぬが、その直後にキティーが妊娠していることが分かる(傍線は佐藤)。

このように、レーヴィン・ラインの二つの例では、袋と風とふいごの意味が肯定的に逆転している。

つぶさねばならぬ」。「砕き、つぶす」には、アンナの轢死のイメージが重なっていると考えられるから、要するに、「男」は、ヒロインの運命を「鍛えている」わけだ。

なるほど、アンナの心の悪が、彼女の運命をつくる——それはわかるが、ではなぜ、こんなに手の込んだやりかたで鍛冶屋を導入せねばならなかったのか。たんに運命の象徴だったら、ほかにいくらでも考えられるではないか。要するに、なぜ鍛冶屋なのか。

もうひとつの疑問は、ヒロインの死後、8章にてでくる「乱雑に積み重ねられた俵の山」だ。この大量の袋は、何を意味するのか。なんらかの悲劇が、アンナやヴロンスキーだけでなく、非常に多くの人に起きてることになるのだろうか。

7. 「鉄の時代」

いく人かのロシアの詩人は、19世紀を新たな「鉄の時代」とみなした。

時代は、鉄の道を進む。

人が考えるのは金もうけ。夢見るのは

日々のパンと利益——

恥も外聞もくそくらえ。それでも心はいっぱいさ。

「啓蒙の光」を浴びて、消えちゃった——

詩なんて子どもっぽい夢は。

みんながあくせくするのは、詩なんかじゃない。

いわゆる産業に血道を上げてるのさ。

(エヴゲーニー・バラティンスキー『最後の詩人』、1835年。*訳は佐藤)⁵⁹⁰

バラティンスキーは、古代ギリシャの「黄金時代」に思いをいたし、現代、すなわち「鉄の時代」では、芸術と詩はだれにも無用になってしまったことを嘆く⁵⁹¹。

デカブリストの作家、詩人、哲学者、ガヴリール・バーチェンコフは、A.P.エラーギナ宛の書簡(1853年)に、こう書いている。

⁵⁹⁰ E.A.Баратынский. Полное собрание стихотворений. Л.: Советский писатель, 1989. С.419 (Библиотека поэта. Большая серия).

⁵⁹¹ V.M.セルゲーエヴァの意見によれば、バラティンスキーはこの詩を、イヴァン・キレエフスキーの論文「十九世紀」(“Девятнадцатый век”, 1832 г.)の見解に刺激を受けて書いた。キレエフスキーは、同論文で、ヨーロッパのいわゆる最も進んだ国々では、現代の読者の一般的特徴は、「冷淡で散文的であり、実際的であること、概して、もっぱら実際的活動に意欲をもつことだ」と述べている(*下線部分は、原文イタリック——佐藤)。こうした時代認識がけっして例外ではなかったことがわかる。

Баратынский Е.А. Там же. С.419.

Киреевский И.В. Критика и эстетика. М.: Искусство, 1979. С.85.

わたしは、鉄道を見たことがありませんが——これは、現代の奇跡です。それも真の奇跡です。鍛冶屋が、全世界をひっくり返したのだ。神話は、無意味じゃなかったようです。ふたたびウルカヌス（*ローマ神話の火と鍛冶の神で、ギリシャ神話のヘーパイストスに対応——佐藤）は、天に引き上げられた。<...> しかし彼は、天から落ちて不具になり、まっすぐ歩けず、片側に強くびっこをひいているのだ——「片側に」というのは、たくさんの強烈な欲求のせいで、富がある方向にばかり流れ、蕩尽されているからです。

だから、たしかに鍛冶屋は、モラルを一変させる準備をしているわけです。だが、それをなしとげることは、彼にはできません。（*下線は佐藤）⁵⁹²

バーチェンコフの考えでは、かつて鍛冶屋が鉄器時代を開いたように、現代では、鉄道という現代の鍛冶屋が「全世界をひっくり返している」。しかし、この新時代は、人間の欲望を爆発させ、旧来のモラルを崩壊させる危機の時代である。

アレクサンドル・ブローク『復讐』（1911年—1921年）。この長詩のプロローグに、小人の鍛冶屋、ミーメが、リヒャルト・ヴァーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』から借用されて、登場する。

『指環』では、ミーメの兄で、地底の鍛冶屋の王、アルベリヒが、女性との愛を断念、放棄するかわりに、全世界を支配できる権力を手にいれる。このことが、結局、世界の終わりと「神々のたそがれ」を招いてしまう（同楽劇は、1874年完成、1876年初演。奇しくも、『アンナ・カレーニナ』執筆の時期と重なる）。

楽劇のテーマと、ブロークの『復讐』のそれとは、重なり合っており、詩人は19世紀を、「鉄の時代」と呼んでいる。

十九世紀は鉄の時代、
真に残酷な時代！
お前は、星なき夜の闇に、
呑気な人間を、投げこんだ！
そこにあるものとは、抽象観念、
功利的でちっぽけな仕事、
無力な不平不満、
貧血の魂と貧弱な肉体！
<...>

⁵⁹² Батеньков Г.С. Сочинения и письма. Т.1. Письма / Издание подготовлено А.А.Брегман и Е.П.Федосеевой. Иркутск: Восточно-Сибирское книжное издательство, 1989, № 133. С.281.

19 世紀においては、社会も、人間関係も、愛も、「鉄」によって歪められ損なわれた——ブ
ロックはそう考える。そして、もっと破局的な 20 世紀の悲劇が起きようとしている。いま世
界は、「かつてない変化、動乱」を準備しているのだ（同 1 章）。

二十世紀は...さらに寄る辺なく、
生の闇は、もっと恐ろしい
（ルシフェルの翼の影は、
より黒く、大きい）⁵⁹³

「鉄の時代」とは、ギリシャ神話の残酷で労働と悲しみのやむことのない時代。詩人たち
は、これに、自分たちの時代をなぞらえたのである。ヘシオドスは、『仕事と日々』で、「鉄
の時代」をこう描いている。

昼間は労働と悲嘆のやむときがなく、夜は夜とて少しも命のすり減らされるに変わり
はない。神々はつらい悩みを寄越されようから。それでもとにかくこういった禍にも多
少のよいものが混ぜられていようかも知れぬ。

ゼウスはまたこの死すべき人間の族をも滅ぼされるであろう、彼らが生まれながらに、
こめかみに白髪をまじえるようになったら。また父親は子供らと一致せず、子供らもま
た一向一致しない、客は主人に、友は友に一致しないで、兄弟とてもむかしのよう
に親しくはなくなるだろう。それで親たちがすぐに年を取るので、（子供らは父母を）馬鹿に
して敬うまい。また彼らはともかく年老いた親たちに、養育の恩を報じようともし
ないだろう。腕力を正しいこととし、そして互いに他の都を劫略しあう。また誓約を守
ろうとて、正しいこと善いことをしようとして、けして賞められはせず、むしろ悪
事をはたらき、乱暴をする人間を皆がたたえることであろう。⁵⁹⁴

ギリシャ神話の「鉄の時代」には、歴史上の「鉄器時代」が反映している。鉄器時代にな
って、人類史上初めて、大量生産と大量殺戮が可能になり、人類の生活形態と意識が一変し
た。鉄製の農具、その他の道具で、生産力が飛躍的に増大し、同時に、人間の欲望も爆発的
に拡大する。欲望と欲望のぶつかり合いは、大規模な戦争を頻発させる。また、農産物など
の生産物を蓄積することで、人間は、飢饉等の自然の力から、より自由になる。つまり、自
然に対する権力を獲得する。自然は、不可知な力であり、神の領域と重なっているから、こ
のことは、人間の、神からの解放をも意味する。その一方で、人間の社会自体は、巨大化し、

⁵⁹³ Блок А.А. Собрание сочинений: В 8 т. М.; Л., 1960 — 1963. Т.3. С.304-305.

⁵⁹⁴ 呉茂一『ギリシャ神話』〈上〉、新潮文庫、1979年、55—56頁。

貧富の差が広がって、大権力が出現する。こうした一大変革の否定的側面が、神話に結晶したのだ。

洋の東西と民族を問わず、鉄器時代は、このような意味をもっている。

ミルチャ・エリアーデは、鉄器時代到来にともなう意識の変化について、次のように考えた。

人間は、冶金・鍛造の技術を獲得したことで、神の位置に立つことができるようになった。というのは、一般に、鉱石は、おのずと成長して金属となる「大地の胎児」と考えられていた。つまり、金属をつくることができるのは、神と自然だけだったのだ。ところが、人間は、冶金・鍛造技術を用いて「大地の胎児」——鉱石——の成長を人工的に早め、それによって、自然の過程という「神の領域」に介入したのである⁵⁹⁵。

歴史上の鉄器時代と神話の「鉄の時代」には、あきらかに、近代の本質に通じるところがある。だから、少なからぬ思想家と詩人が、近代を、新たな「鉄の時代」とみなし、そうみなすことによって、近代を批判したのである。

そして、新「鉄の時代」の鍛冶屋は、バーチェンコフが言うように、鉄道である。なぜなら、鉄道こそは、産業革命、近代という時代の、文字どおりの牽引車だったからだ⁵⁹⁶。だからこそ、『アンナ・カレーニナ』の鍛冶屋は、おもに鉄道に出現するわけである。

主人公レーヴィンも、その点を指摘している。いまロシアでは、都市と工業、金融、投機、奢侈贅沢が異常に発達し、そのことが農村と農業を圧迫、衰退させている。その結果、国は、ある器官だけが肥大した人体のようになり、全体の成長が疎外されている。この傾向を他の何にもまして助長しているのが、鉄道をはじめとする交通・通信手段だ、と。

ボリス・エイヘンバウムの意見というか感じ方も、方向としては同じであるようだ。彼は、著書『レフ・トルストイ 70年代』のなかで、『アンナ・カレーニナ』において鉄道は、概して、なにか不吉な神秘的な役割を果たしており<...>、文明の悪と、人生の虚偽と、情欲の恐ろしさを体現している」と述べている。⁵⁹⁷

⁵⁹⁵ エリアーデ著作集第5巻『鍛冶師と錬金術師』（大室幹雄訳）、1973年。

⁵⁹⁶ ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』で、ホフラコーヴァ夫人は「現代は、鉄道の時代でございますからね！」（“Нынче век железных дорог”）と言う。

Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений: В 30 т. Л., 1972 — 1990. Т.14. С.348 — 349.

鉄道は、上に述べたように、最先端技術であると同時に、近代文明の牽引車という象徴的意味をもったから、ロシアでも多くの作家、詩人が鉄道を作品に登場させた。

Н.А.Некрасов (“Железная дорога”), С.П.Шевырев (“Думой сильного владыки...”), Д.Ю.Струйский (“До сей поры тяжелый паровоз...”), Я.П.Полонский (“На железной дороге”), А.А.Блок (“На железной дороге”)...

鉄道に対する見方は、作家により肯定論から否定論までさまざまだが、つぎの認識は共通している。鉄道が時代を画する大発明であること、それが全世界を、そして個々人の生活を根底から変えつつあること、である。

近代文明の本家、イギリスにかんしては、小池滋氏の名著『英国鉄道物語』（晶文社、初版 1979、再版 2006）を参照されたい。

⁵⁹⁷ トルストイの鉄道嫌い

『アンナ』の鉄道の暗いイメージは、トルストイの後の作品にも引きつがれていく。『復活』の

もちろん、新「鉄の時代」肯定論もたくさんある。近代に新たな「鉄の時代」を見てとりながらも、科学の発展、大量生産、富の集積などを肯定的にとらえ、明るく力強い鍛冶屋の登場する文学作品を書いた——こうした詩人・作家も、枚挙にいとまがない。エミール・ヴェルハラン『鍛冶屋』、フィリップ・シクリョーフ『鍛冶屋たち』（1906年）などだ。これらの作品における鍛冶屋は、人類の進歩と「明るい未来」のシンボルである（また、労働歌「インターナショナル」における溶鉱炉など、社会主義者は、鍛冶屋、製鉄のイメージを、新社会建設のプロパガンダに広くもちいた⁵⁹⁸。スターリンすなわち鋼鉄の人というペンネームもその一例だろう）。数としては、むしろ、新「鉄の時代」肯定派の方が圧倒的に多い。これは、そういう思潮のほうが主流であり、時代をかたちづくっていったことを思えば、当然である。

トルストイ自身の新「鉄の時代」観はというと、日露戦争当時に書かれた論文『思い直せ！』（1904）に明快にしめされている。

作家によれば、現代という神なき時代にあつては、人間は、いかに生きるべきかについての最高の原理を失い、その関心とエネルギーを、もっぱら応用科学的な分野に向けている。その結果人間は、自然に対して巨大な力を獲得したが、それをどう用いるべきかという指針をもっていないので、いきおいエゴイズム、低劣な欲望のために利用することになる。すなわち、「淫欲、娯楽、墮落、殺し合いのために」。こうした人間の状態は、「火薬やガスを

女主人公、カチューシャは、恋人に妊娠させられ捨てられて、鉄道自殺しようとする——「車両の下に飛びこめば終わりだ！」

『クロイツェル・ソナタ』の主人公は、鉄道での旅の途中、「鉄道の人間にたいする作用のためか」、客車にガタガタ揺られているうちに妻への妄想的嫉妬が異常にたかまり、絶望のあまり鉄道自殺まで考える。そして自宅に飛んで帰って、妻を刺し殺す。彼は、のちにこのときの状況を思い返し、「私は鉄道が怖い！」とヒステリックに叫ぶのだ。

そもそもトルストイ自身が鉄道に対して、異常なくらいの嫌悪感をもっていた。ソフィア夫人の実弟ステパン・アンドレーヴィチ・ベルスの回想によると、「レフ・ニコラエヴッチは、いつも、鉄道というものが、がまんできなかつた。彼は、しばしば、自分の作品のなかで、この嫌悪感を表している。鉄道に乗ったあとには、彼は、客車のなかで味わった気分をこぼすのがつねだった」（Берс С. А. Воспоминания о графе Л. Н. Толстом: (В октябре и ноябре 1891 г.). Смоленск, 1893. С.29—30)。

またトルストイは、ツルゲーネフへの手紙（1857年3月28日〈4月9日〉）で、こう書いている——「鉄道の旅行に対する関係は、ちょうど、売春宿の愛に対する関係みたいなものです。どちらも便利ではありますが、非人間的なほどに機械的で、殺人的なほどに単調です」（60, 170）

本稿の第12章「農婦の愛人」のところで述べたように、こういう嫌悪感は、ひとつには、鉄道が自分の死に場所になりそうなことを作家が予見していたことと関係があるだろうが、それだけではあるまい。おそらく彼は、アンナと同じく、鉄道という「黒い箱」の彼方から「霊」が立ち昇ってくるのを実感していたのである。

*以下の拙稿を参照。

佐藤雄亮「トルストイ新潮流第2回——『アンナ・カレーニナ』と鉄道——」、読売新聞欧州版、1999年5月21日付。

⁵⁹⁸ 一例として、1924—27年発行のソ連の50コペイカ銀貨には、鍛冶屋が描かれている。

サイト「ロシアのお金：起源から現代まで Деньги России: от истоков до современности」
<http://www.russian-money.ru/Articles.aspx?type=content&id=37>（2015年9月15日最終閲覧）

おもちゃに与えられた子供にひとしい」

現代人が有する巨大な力を目の当たりにし、彼らがその力をどう用いているかをみてみると、こう感じられる——人間は、その精神的発達の段階からして、たんに鉄道、蒸気、電気、電話、写真、無線などを使う権利をもたないだけでなく、単純な鉄・鋼鉄の加工技術を利用する権利さえない。なぜなら、すべてこれらの進歩と技術を彼らは、ひたすら自分の欲望を満たすために、なぐさみと墮落のために、おたがいを殺し尽くすために利用しているからだ、と。(36, 123. *下線は佐藤)。

あきらかに、トルストイは、近代の根源のひとつを歴史的・神話的「鉄の時代」にみている。それが、下線部からはっきり裏づけられる⁵⁹⁹。と同時に彼は、空前の大量生産、大量消費、大量殺戮の時代、未聞の「鉄の時代」の到来を予見していたのである。

『アンナ・カレーニナ』の鍛冶屋は、あたかも人の心にひそむ悪をエネルギーに使うかのようにして、鉄を鍛えていた。これは、作家の文明観を端的に表したものだ。つまり、人が、悪に陥れば陥るほど、袋＝心から神の声を聞かなくなればなるほど、この文明は、成長していくというわけである。また 8 章で、鉄道（プラットホーム）に、まるで死体の山のように、たくさんの袋が折り重なっていたが、これは、時代の行く末を暗示したものだろう。

ところで、この鍛冶屋には、伝話をしゃべるという妙な特徴があった。これも、われわれの文脈でみると、容易に理解できる。トルストイは、伝話を、まがいもの、虚偽などのイメージで使うことが多い。だから、鍛冶屋に伝話をしゃべらせることで、偽文明の烙印を押したと考えられる。

さらに個人的な事情が、トルストイの鉄にたいするイメージに影を落としている。トルス

⁵⁹⁹ このことは、イメージの面からもたしかめられる。というのは、『アンナ・カレーニナ』に描かれる鉄道は、昔ながらの鍛冶屋の仕事場とダブって描かれているからだ。鉄と火、ハンマーで鉄をたたく音、鉄（レール）の打撃音、炉、立ちのぼる蒸気、蒸気のシューシューという音、ふいごのイメージ…

当然、鉄そのものも、ネガティブな意味をもつことがある。たとえば、リャビーニンという、やり手のブローカーが、オブロンスキーをうまくだまし、彼の所有する森を安く買い叩くが、この悪徳ブローカーの馬車は、「鉄を張りめぐらしている」（«туго обтянутая железом и кожей тележка», 2 章 16 節）。

ちなみに、このエピソードは、『桜の園』を思わせるところがある。いずれも背景にあるのは、農奴解放後の貴族の全般的没落、農村の荒廃、変貌、貨幣経済の浸透、工業化、「張りめぐらされる鉄道網」…。

リャビーニンのような、新たな状況に適応したムジークたち（мужики）が、残酷な新時代の主人公となるだろう。

カレーニンが、アンナとの離婚について相談する辣腕弁護士も、そういう新時代の人間だ（4 章 5 節）。彼は、百姓ふうの（мужицкое）顔つきで、小柄（маленький）。あの「男」に通じるなにものかをもっていることが暗示される。カレーニンは、弁護士の目に、かつて妻の眼差しにみたとおなじような「不吉な輝き」（зловещий блеск）をみる。

トイの故郷、トゥーラは、昔から製鉄業で知られている。17世紀にはトゥーラに、ロシア最初の高炉がつくられた。ヤースナヤ・ポリャーナ近郊では、ピョートル一世時代以前から、鉄鉱石が採掘され、鉄が生産されていた。それで、トルストイは、鉱山での労働を具体的によく知っていたのである⁶⁰⁰。彼は、論文『こうでなければならないのか?』で、鉱山の労働を次のように描写している。

この工場（*ベルギー資本の製鉄工場——佐藤）と、工場に属する鉱山では、労働者たちが、蟻のように掘っている（копаются）。ある者は、地底 100 アルシン（*1 アルシンは約 71 センチメートル——佐藤）で、暗くて狭い、蒸し暑くじめじめした通路でたえず死に脅かされながら、朝から深夜まで、あるいは深夜から朝まで、鉱石を掘りだしている。またある者は、闇のなかで、屈んで（согнувшись）この鉱石と粘土を豎坑に運んでは、空の荷車を持って帰り、また荷車をいっぱいにする——こういう具合にして、1日 12、14 時間、1 週間ぶっとおしで働くのだ。（34, 216）

この論文の第 1 稿には、こう書かれていた——「この工場でも、また工場に属する鉱山でも、労働者たちが、蟻のように、ごそごそ掘り進んでいる（копшатся）」（34, 504）。

下線部の言葉は、アンナの夢における「ひげもじやの男」の描写にも用いられていたことを思い出していただきたい。「男は、袋に屈みこんで、両手でなにかごそごそやっている」
«Он（мужик）нагнулся над мешком и руками что-то копшится там...»（4 章 3 節）。この夢にかぎらず、男は、ほとんどいつも屈んでいる。これは、偶然とは考えられない。トルストイが見聞した過酷な鉱山労働が、彼の鉄（鉄鉱山、冶金・鍛造）についてのイメージをよけい暗くし、『アンナ・カレーニナ』における鉄と鍛冶屋の形象に入りこんだのである。

『アンナ・カレーニナ』の舞台、1870 年代のロシアでは、ときあたかも第一次産業革命が始まり、「鉄の時代」が本格化しようとしていた⁶⁰¹。残酷で、神を喪失し、欲望をひたすら肥大させ、どこへゆきつくか分からぬ、新たな「鉄の時代」——その象徴、「ひげもじやの男」が、執ようにアンナにつきまとう。そればかりか彼女は、鉄道の車輪に——「鉄」に——押しつぶされて死ぬ。このことは、アンナの愛の悲劇が、個人的なものであるばかりでなく、新「鉄の時代」全体の悲劇に根をもつことを暗示している。そして、その根は、遠い「鉄器

⁶⁰⁰ ヤースナヤ・ポリャーナからコサーヤ・ゴラー（Косая Гора 斜め山）の鉄鉱山、製鉄工場（ロシア・ベルギー合弁のスタゴフスキー製鉄工場）までは、6-7 キロの距離で、小道が通じていた。トルストイはしばしばそこを訪れ、1897 年 5 月 8 日の工場開所式にも立ち会っている。電子図書館 “Lib.Ru” に関連写真が複数収められている。

http://samlib.ru/s/sizowa_a_s/kosajagoraizglubinwekow-tropinkiktolstomu.shtml（2015 年 9 月 15 日最終閲覧）

⁶⁰¹ この作品の舞台となっているのは、1873 年から 1874 年にかけての冬から、1876 年 7 月まで。産業革命の牽引車、鉄道の総キロ数は、1865 年に 3800 キロだったのが、1874 年には 18200 キロ、83 年には 24100 キロと、飛躍的に伸びた。

『ロシア史〈2 18-19 世紀〉』（世界歴史大系）、田中陽児、倉持俊一、和田春樹、山川出版社、1994 年、283 頁。

時代」に起こった人類の生活の激変と本質的におなじ面をもつ、とトルストイは考えるのだ。

8. 男＝運命の告知者

翻ってみれば、アンナの悲劇は、あるていどトルストイ自身のものもであった。新たな「鉄の時代」＝「ひげもじやの男」が、彼があんなに執着していた、あの昔ながらの農村を、ヤースナヤ・ポリャーナの小宇宙を破壊していく…。

しかし——ここが肝心なところだが——、彼の土地所有も、ロシアの農奴制も、もとはといえば、やはり「鉄」の産物ではなかったか。およそあらゆる文明に、いや人間そのものに内在する「鉄的ななにか」が、今日の問題をもたらしたのだから。そして、彼の歪んだエロスもまた、結局はそこに発するのではないか。

なぜなら、鉄自体はニュートラルなものにすぎず、問題の根は、それを利用する人間の権力的思考と、それと不可分の性に行き着くからだ。最初にみたように、トルストイの祖父は、そうした暴力から逃れるために、ヤースナヤ・ポリャーナという「箱庭」を築き、そこに閉じこもったのであった。

「ひげもじやの男」は、だから、あらゆる人間の内部にひそむもの、人類を不可逆的に破滅に向って駆り立てる何者か、ということになる。その何者かは、アンナだけでなく、トルストイ自身をもつねに脅かしてきた——。

彼はもしかすると、こういう「霊」を、アンナのように、夢かなにかで見たことがあったのかもしれない。そして、アンナ同様、「よくないしるし」として、暗い運命の告知者として、感じていたかもしれぬ（ちなみに、「運命の告知者」であることもまた、神話的鍛冶屋のおもな特徴のひとつだ）。

さて…ここで一つ重要な問題が生じる。アンナの「運命」は、あらかじめ宿命的に決定されてしまっているのか否か、ということだ。

然り！ 決定されている。前に述べたが、アンナ自身がはっきり自覚しているように、彼女が破滅したのは、「ヴロンスキーの愛撫」なしでは生きられないからだ。それだけである。彼女の行動の余地をくわしく探ってみても、それはゼロに近く、しかもそのうえ作者は、アンナを破滅させるべく次々に陥穽をしかける（次章を参照）。

したがって、当然のことながら、アンナの必然的、暴力的宿命の「黒子」である男の不吉な予言はほぼ100%当たっているのだが、たったひとつだけ、外れたケースがある。これがなにを意味するか、押えておかねばなるまい。

アンナの夢が、彼女に、はっきり死を予告したことを思いだそう——「お産ですよ、お産で亡くなられるんですよ、奥さま」（4章3節）。にもかかわらず、彼女は死ななかつた。なぜか？ ヴロンスキーの女兒を出産して危篤に陥ったアンナは、カレーニンに告白する。

「わたしのなかには、別の女がいるの。わたしはその女が怖い——その女が、あの人を好きになったのよ。それで、わたしはあなたを憎もうとしたのだけれど、以前の自分を忘れることはできなかった。あの女はわたしではなかったの。でも、いまではわたしは、ほんとうの自分になった、ひとつになった。わたしはもう死ぬわく...」。わたしに必要なのはひとつだけ——。どうかわたしを許して、すっかり許して！<...> いいえ、あなたは許せないわね。こんなことが許せないのはわかっているの！いいえ、いいえ、出て行って、あなたはあまりにも善良すぎるわ！」<...> カレーニンは、ひざまずき、頭を、アンナの腕の関節に押しつけた——それは彼を、ブラウスを通して炎のように焼いた——そして彼は、子どものように泣いた。(4章17節)

カレーニンをも動かした懺悔のあと、アンナはまさに奇跡的に快方に向かう。この懺悔は、彼女の運命を明るい方向に転じ、生命を救ったのである。そうとしか受けとれない。

この場面をみるかぎり、アンナの運命は、彼女の行動によって、彼女の選択によって、変わりうる。まさしく、「だれもが、おのれの運命を鍛える鍛冶屋」*«Каждый человек — кузнец своего счастья»*なのだ(ロシアの慣用句)。

この世界は、けっして「神なき世界」ではない。「男」のでてくる夢がアンナに死を予告したにもかかわらず、彼女の懺悔は死を追いやった。しかし問題は、この神は——すくなくともこの世においては——あまりにも無力であることなのだ。

アンナが死にかかり、当人も死を覚悟し、もはや肉体もエロスも意味をもたなくなったときは、彼女は肉体から解放され、「彼女の霊があらわになる」(この言葉は、出産の朝のキティーについて言われたものであるが、ここでのアンナもまさにそうだ。7章13節)。彼女の恋は、エロスから解放され、神的な愛となった。それは、カレーニンの「霊」にもはたらきかける。

ところが...アンナの肉体が回復するにつれて、エロスも、カレーニンへのどうしようもない嫌悪感も、すっかり元通りになってしまう。そして、ここが肝心なのだが、この過程は、まさにそれ以外ではありえない、暴力的、強制的なものとして描かれていて、アンナには選択の余地はないようなのだ。神よりも強い暴力が、「粗野な、より強力な力 *грубая, более властная сила*」(4章19節)が、「なにかの戦いの邪悪な霊 *злой дух какой-то борьбы*」(7章12節)が、つねに働き、アンナの意志を封じてしまう。

この神は、だから、すくなくとも彼女が生きているあいだはあまり現れてくれず、無力なのである。暴力的恋は、彼女をかならずや破滅まで引きずっていく。

アンナの心の底からは、なぜか、彼女を一貫して破滅にみちびく衝動ばかりが、どこからともなく湧き起こってくる。彼女は、それに抵抗するすべを知らず、一步また一步死にむかって確実に滑り落ちていく——。神の声は、せいぜい明滅する信号といったところで、破滅

的衝動に圧倒されている⁶⁰²。

だから、象徴に即して言うならば、アンナの心＝「赤い袋」は、なるほど、彼女の無意識の守護者、代弁者ではあるが、そんなに強力な守護者ではない。むしろ、この袋は、その底から破滅的衝動が立ち昇り、死が浸透してくるブラックホールなのだ！ 袋の底は破れており、どこへともなくつながっているのである（この作品には、いたるところ、このようなブラックホールが口を開けている。それを整理して章末に示す）。

端的に言えば、この世界では、「神」よりも「邪悪な霊」のほうが強いのである。「邪悪な霊」は、アンナのみならずほかの登場人物たちをも、いやそれどころか、「鉄の時代」の全体を、不可逆的に奈落に吸い込んでいく。

言い換えれば、女が女であるがゆえに滅びなければならない、人間が人間であるがゆえに破滅しなければならない、そういう世界だ。この世界には、トルストイの真の洞察と呪詛が混在している。しかし、その呪詛もまた、自身の不条理な宿命の洞察にもとづいているのであった。その根源にあって、「鉄」を鍛えているもの、それが「ひげもじゃの男」にほかならない。

⁶⁰² アンナは、彼女の将来がむずかしく絶望的になるにしたがって、自分の選択の意味、自分の運命を直視しなくなっていく。そして、それらを意識下に抑圧する——つまり、「赤い袋」のなかにしまいこむ。

ヴロンスキーの領地、ヴォズドヴィージェンスコエにアンナをおとずれたドリーは、「アンナの、目を細める奇妙な新しい癖」に気がつく。「アンナが目を細めるのは、まさに話題が生活の内奥に触れたときであるのを、ドリーは思い出した。『まるで彼女は自分の生活に対して目を細めているみたいだわ——すべてを見ないようにするために』とドリーは思った」（6章 21 節）

（アンナが目を細めるのが描かれるのは、1章の舞踏会が最初だ。彼女は、キティーがヴロンスキーに恋しているのを知りながら、彼と踊る。キティーが驚愕してアンナを凝視すると、アンナは「目を細め」、キティーに微笑み返す。このころはまだ癖ではなかったが、このときのことは、心の底に刻まれたであろう。

社交界を上手に泳いでいる、アンナの友人、ベティー・トヴェルスカーヤ公爵夫人にも、「目を細める癖」がある。彼女も、話が微妙な点に及んだりすると、目を細める（3章 17 節）。だから、癖の意味合いは、アンナの場合とおなじだろう。アンナの癖は、彼女からうつったのだろう。「見たくないもの」がそれほどたくさんないときは、こんな癖は必要なかった。

とはいっても、アンナの無意識は、動揺しないわけにはいかない——とくにアンナが、悲劇に向かって新たな一步を踏みだしたときには。そこで無意識は、「なにかを知らねばならぬ」と警告を発する。そうしたとき、無意識のシンボル、「赤い袋」が彼女の視野に入ることになる。そして——「小さなひげもじゃの男」が出現するのだ。

男は、アンナが罪に墜ちる（あるいは引き込まれる）にしたがい、だんだん変貌していく。

男の現れる 9 つの場面を思い出していただきたいのだが、初めはたんなる「男」だったのが（1）、「南京木綿の外套のボタンがとれている」、「腰が長い」というように、だらしなく不格好になる（2）。やがて、「汚らしい」（5）、「恐ろしい」（6）となり、ついには、「醜悪な、グロテスクな уродливый мужик」というところまでいく（8）。原語「уродливый」には、たんに「醜い」だけでなく「不具」の意味がふくまれる。

こうして、天と地の仲介者、鍛冶屋は、彼女の行為が「天」に対してもつネガティブな意味を、その無気味なすがたによって、忠実に映しだす。つまり鍛冶屋とは、アンナのこの瞬間における運命のシンボルにほかならない。男は、「復讐は我にあり、我これに酬いん」という、運命を司る者の声を、無言のうちに仲介するのだ。しかし問題は、それがニュートラルな審判者ではない、ということである…。

「男」は、狭義の神話的鍛冶屋と鉄の時代のイメージを超え、世界の彼方からさまざまなかたちで人間に働きかける、不定形の「霊」である。彼は、鉄の時代以前から、つねに世界と人間とともにあった。だからこそトルストイは、「男」をあまりにも固定した、限定的イメージで描くことを避け、一見してそれと分からぬ、いわば集合的シンボルとして描き、隠れた、しかし強烈なサブリミナル効果で読者に働きかけるようにしたのだと思われる。

宗教がすでに死につつあった、この時代、「すべてがひっくり返ったこの時代」に、不安な意識の底から噴き出してくる力はもはや、宗教という象徴体系の「網」にはかかからない。アンナは、キリストも角と尻尾の生えた悪魔も信じてはいないが、「ひげもじゃの小さな男」は確かに信じている。個々の人間が個々の事物に、その力を投影して戦慄する。世界は不安な「象徴の森」と化す。

こうした心理的メカニズムを見切ったうえで逆手にとり、それ自体を作品の構成原理としたのが『アンナ・カレーニナ』である。換言すれば、われわれは、この作品において、象徴主義の誕生する場に居合わせているのだ。なるほど、現代では、文学流派としてのシンボリズムは死んだかもしれないが、『アンナ』の提起した問題は、むしろアクチュアリティを増しているだろう。

9. 「ひげもじゃの男」は実在するか？

ひとつだけ問題が残っている。いったいトルストイは、悪魔、悪霊のたぐいが実在すると思っていたのだろうか？

彼は、やたらと 28 という数字のジンクスにこだわったりして、案外「迷信深い」ところがある⁶⁰³。

(もっとも、日本人がいわゆる科学迷信に染まりすぎているかもしれない。帝政時代はもちろん、ソ連時代以降も、邪視とか生霊のたぐいは、少なからぬロシア人にとって現実である)。

「ひげもじゃの男」のリアリティをみても、ドリーに輪廻転生を信じさせたりしているのをみても(3章8節)、転生、悪魔、悪霊、奇跡などの類のいわゆる超自然現象は無きにしても非ずと、トルストイは思っていたのではないか。しかも、霊魂不滅については、カフカス時代のところのみたように、ルソーに依拠しながら、思考と感情を極限まで働かせて思索したすえ、肯定していた。そして、トルストイの思想の転回点には、あのアルザマスの一夜に出てきた、擬人化された「死」がいる。

とはいいいながら、魂の不滅、来世の実在だけでは、トルストイには救いにならなかっただ

⁶⁰³ 「参考資料3：その他のシンボル」をみよ。

ろう。

『カルマ Karma』（1894）のような翻案を出した彼は、それらが実在しようがしまいが、結局大した違いはない、と達観していただろうと、筆者は想像する。かりに魂が不滅で、来世があり、死後にめでたく生まれ変わったとしても、似たような意識をぶらさげていたのでは、また「悪魔」にしてやられて、「やっぱり今度もだめだったか」となるのが落ちだ。物理的な死を隔てて、悪魔と神、または情念と良心の連鎖が、たとえ何千年、何万年つづこうと、それがなんだろうか。問題は、それがどれだけ続くかではなく、それに勝てるかどうかだ。しかし、なんによって、悪魔に勝とうというのか？ 善と神の力によって？…

ここでひとつの問題が派生する。なぜトルストイは、キリストの奇跡を聖書から徹底的に排除したのだろうか（1881年に完成した『四福音書の統合と翻訳』など）？ もし悪魔の実在の可能性を許容するなら、この神の力の現れをも認めるのが当然なのに？…

法橋和彦氏の意見では、なるほどトルストイは奇跡を一切認めず、イエスの復活も認めないが、それは俗流の合理主義などではない。「トルストイは復活を否認することによって悪魔の力を相殺しようとしたのである」

なぜなら、トルストイにとって、「悪魔」の力はまことに強大で、「つねに神の力に拮抗しうる」ものであり、「トルストイはイエスが行う奇跡をすべて否認することでしか、強大な悪魔の力を制止することができなかった」からである。⁶⁰⁴

つまり、トルストイは、「邪悪な霊」、「ひげもじゃの男」が人間の意識において世界を、宇宙を、その過去・現在・未来を席卷する事態を避けるべく、悪魔の力の「平衡錘」たるキリストの奇跡を認めなかったということになるろうか。

悪の力は、それをなんと呼ぼうと、宇宙全体に遍満し人間を弄ぶほどに強大で、一見それと分からず「善」、「神」の顔をしているほどに狡猾である（カフカスでの思索を思い出していただきたい）。そして、トルストイが『アンナ・カレーニナ』で最終確認したところでは、それに対する神の力は、かくも微弱なのだ…。然り、悪魔も神も文字どおり実在する、だが、悪魔のほうが遥かに強い——こういう認識は人間の精神にとって危険ではあるまいか。それほどまでに強大な悪（悪魔）と、いったいどうやって戦えるというのか！…

これに関連し、法橋氏はこう指摘する。トルストイの主人公たちの「悪魔」との戦いは、一見狂気とも精神異常とも思えるほど過激なものであることがある——中編『悪魔』の主人公エフゲニー・イルテーネフのように自殺したり愛人を殺したり、神父セルギイのように、女の誘惑に屈しないために指を切り落としたり。ところが、トルストイは『悪魔』の巻末で、犯罪を犯した際のエフゲニーは決して精神病患者ではなかった、もし彼が精神病患者なら、あらゆる人が精神病患者であることになる、とわざわざ断っている。

⁶⁰⁴ 『古典として読む『イワンの馬鹿』』、188—189頁。

つまり、エフゲニーが襲われた肉欲は、だれがなんと言おうと悪（悪魔）であり、それとの戦いが強い行為は、まっとうな、ふつうの行為である、ということになる！

トルストイは実生活における妻の狂気をも、妻を棄てようとする自分の狂気をも、異常なものとしてではなく、ごく普通のこととして受けとめようとすることに努めたのです。異常そのものはすべて「悪魔」のせいにしてきり棄ててしまえばよいのです。晩年のトルストイはその精神をつらぬきました。

トルストイの思想がやどる契機がここにあります。こうして形成された思想によってトルストイの精神の強靱さが裏打ちされていることをあらためて実感しないわけにはまいません。⁶⁰⁵

法橋氏の見解を筆者が理解しえたかぎりで敷衍し、それにこれまでの考察を付け加えると、おそらく、トルストイは、強大きわる悪との戦いについて、こんなふうに考えていたことになる。

およそ人間の思想と行動に、「異常」とか「奇妙」とかいう、許容可能な、甘ったるい偏差はあるべきでない。善と悪しかない。善でないものは悪でなければならぬ。自分の内なる女性像も、ヤースナヤ・ポリャーナという「箱庭」も、悪であることが分かった以上は、解体し、切り捨てねばならぬ。なるほど、こういう態度をとると、人はたいていノイローゼになって、ほんとうに「悪魔」を見るのが落ちだと、君たち現代人は笑うかもしれない（トルストイ自身そのふしがある、と）。だが、そういう君たち自身、内面に空虚をかかえ、いろんな「悪魔に憑かれている」くせに、それにコンプレックスという名前をつけただけで安心している、その呑気さはどうだ。どこからともなく聞こえてくる「悪の囁き」を悪魔、悪霊と呼ぼうが、情念と呼ぼうが、コンプレックスその他の名で呼ぼうが、べつだん変わりはない。君たちの「悪魔憑き」は、内攻し慢性化し拡散しているので、目に付きにくいだけのことで、実はひどくなる一方なのだ。内なる空虚と「悪魔」は、放置すれば必ず増大し、ついにはその人間を飲み込むほかはない。そういう私も、じつは似たり寄つたりの状況なのだが、ただ自分は、「悪魔」をコンプレックスだの「個人的な性癖」だのと呼んで、ごまかしはしない。それこそ、「悪魔」の思う壺だ――。

こうしてトルストイは、善と悪を徹底的に峻別し、意識変革の道を真っ向微塵に直進する。自分のカフカスへの憧れを殺し、アニマを殺し、ヤースナヤ・ポリャーナ（ウサーヂバ）への執着を殺し…。その結果、さらにさまざまな悪魔が増える仕儀となるが⁶⁰⁶、それでも戦い

⁶⁰⁵ 前掲書、185－186頁。

⁶⁰⁶ これに関連して、ナロードニキ（人民主義者）、ニコライ・ミハイロフスキー（1842－1904）の有名なトルストイ論「……ふたたび L・N・トルストイ伯について」に触れておこう（藤沼貴訳、『トルストイ全集別巻』所収、河出書房新社、30－49頁）。これは、おもにトルストイの「改心」

後の民話をとりあげて、その思想の矛盾点を鋭くついたものだ。

まず、ミハイロフスキーは、トルストイの民話に悪魔や超自然現象がしばしば出てくることについて、「いわゆる文化的で教養ある者たちのために書いているときは、リアリズムの極地を誇示しているのに」、なぜ民衆には、このようなものを持ち出しているのか、馬鹿にしているのではないかと反発している。

第二に、人間の善意をうたいあげたはずの『ろうそく』で、残酷な支配人が、非を悟って後悔したあとになって、たまたま尖った杭に腹から落ちて、それが「腹をさいて、はらわたがすっかり地面に流れ出してしまった」という無残な結末に疑問を呈する。

まさにこのようにしておとなしい百姓の善意のこもった願いではなく、それとはうらはらに、「あいつの腹がやぶれて、はらわたが流れ出りゃいい」と言った、別の百姓の悪意のこもった願いがなしとげられる。わたしの感じでは、こうしたすべてのことからつくりだすことのできる結論は、トルストイがつくっているのとは正反対のもの、つまり——よいことのなかにはなく、罪なことのなかに力がある、というものだ。よいことは奇跡にまでたかまって、それでもやはり、のぞましいものに到達しなかったのに、罪の方はたったひとこと言っただけで、そのことばどおりに、びっくりするほど正確に実現してしまったのだ。

第三に、民話『イリヤス』などに出てくる「心のやさしい主人（地主）」と、主人に誠心誠意尽くしている、「気にかけているのはただ、ご主人さまに仕えることだけ」という作男に着目する。ミハイロフスキーによると、これは、現代でもさまざまな形で存在している隷属、奴隷制と日雇い労働の賛美にほかならない。

第四に、トルストイの女性観が俎上にのせられる。彼によると、女性は「本来の使命」である出産と育児に没頭すべきであって、学校などに通う必要はない、「ただ福音書を読み、目や、耳や、とくに、心をとじないようにすることだけが必要なのです」

ミハイロフスキーは、キリストは女性が学校に行くことを禁止しなかったし、「旧約聖書のなかには、苦しんで子供を産む女ばかりでなく、女予言者も、女の医者も、ユディトのような女英雄も登場する」と皮肉る。

これらの点を指摘したあとで、ミハイロフスキーはこう論をむすぶ。

民主的な、「ナロードニキ的な」作家が——普通トルストイはそういう作家と考えられている——まるで民衆に奴隷制と日雇い労働のすばらしさを説教するようなことがどうしておこりえたのだろうか？ きっと、かれは故意にそんな説教をおこなっているのではない。かれはただ、さまざまな複雑な形をもった生活を軽蔑しているにすぎない。かれは「モミの木の下に草庵」をしつらえていて、みんながそこに敬意を表しにくることを許され、自分自身はそこからしゃば全体を、さげすむように見つめているのだ——奴隷と自由人、日雇いと一本立ちの主人——そんなものはみなとるにたりないことだ！ 何もかも——どっちでもおなじことだ、何もかも——吹けばとぶようなものだ、ただただモミの木の下に草庵の隠者の話に耳をかたむけて、悪に抵抗しなければいい……その人こそ、その隠者こそが、奴隷や日雇い労働者より、殺された女のむすこや、しいたげられた者の兄弟より、よくものがわかっている。どうして、まったくの話、そんな連中にわかるというのか？ そんな連中はただ日雇い労働で生活しているにすぎない（「気にかけているのはただ、ご主人さまに仕えることだけ」）。かれらはただ母親が殺され、兄が苦しめられたにすぎない、ところが、かれは……かれはモミの木の下に草庵にすわっているのだから！……

以上がミハイロフスキーの意見だ。たしかに、トルストイには、自分には人に先んじて、深淵の奥底を見たという意識はあったろうし、そこから来る自信のようなものも感じていたかもしれない。しかし、彼は到底、こんな中途半端な懷疑に安住していただける人間ではなかった（ミハイロフスキーは、仏教の隠者の通俗的なイメージをかぶせてもいるようだ）。それは、このあとのトルストイの全活動が示している。

悪魔や超自然現象、共時的現象について言えば、これまでにみたように、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』にも、世界観の根幹にかかわる形で出てきている。ミハイロフスキーが見落としていただけだ。そして、その悪魔が、とくに「女（家族）」と「土地（ヤースナヤ・ポリャーナ）」に対する執着、「情念」とむすびついていることも。

は放棄しない。放棄したら、「ブラックホール」に吸い込まれるだけだからだ。

この世界はたしかに「邪悪な霊の嘲弄」だが、一筋の可能性は、アンナの懺悔に示されていた。トルストイは、あそこでの彼女に匹敵するような自己放棄を敢えてしてでも、その可能性に賭けようとするのである。

つづく第5章「アンナ・カレーニナの愛のドラマ」と第6章「『見知らぬひと』はアンナ・カレーニナか？」では、これまでこの作品について述べたことを、それぞれ別の角度から補強する。その後で、後期のトルストイについて、作業仮説をライトモチーフ的に示し、ひとまずこの論文を閉じることにする。

トルストイの「女殺し」、「女嫌い」は、『クロイツェル・ソナタ』にみるようなす黒いものであり、しばしばそれが、激烈かつ奇矯な論となって現れる。一方、土地については、逆に、地主貴族の生活を享受している自分への自己弁護が顔を出す。心やさしい主人と作男の賛美はその一例だ。

しかし、いくら自分のなかの情念を殺そうとしても殺しきれず、悪魔から解放されないのでは…との疑惑は、トルストイに生涯つきまとった。「よいことのなかにではなく、罪なことのなかに力がある」…。そう彼が疑っていたのは事実である。

補説：ブラックホールとしての世界の表現

この作品には、「赤い袋」にかぎらず、ブラックホールの象徴がたくさんあり、いたるところで口を開けている（ロシアでは、ブラックホールは、「黒い穴 черная дыра」という）。なにか「邪悪な力」が感じられると、そうした感触が、なんらかの「黒い穴」に投影され、シンボルとなるのだ。たとえば――

1章 29節

アンナとヴロンスキーが嵐のプラットホームで出会う直前に、車室のなかで彼女は奇怪な幻想に襲われ、「穴に転がり落ちる」

この腰の長い男は、壁のなかの何かに噛みつきだした。老婦人は、客車の長さいっばいに足を伸ばしはじめ、客車を黒い雲で充満させてしまった。それから、まるでだれかを引き裂いてでもいるかのように、何かが恐ろしい音できしり、ガンガンたたきはじめた。そのあと赤い炎がアンナの目をくらませた。そして、すべてが壁によって閉ざされてしまった。アンナは、自分が転がり落ちた (провалилась) のを感じた。

問題は、「転がり落ちた провалилась」という動詞にある。この動詞は、「崩れ落ちる」という意味と、「(穴などに) 転がり落ちる、落ちこむ」という意味とがあるが、この場合、全体の文脈からして後者、すなわち、「穴に落ちこむ」だと考えられる⁶⁰⁷。

⁶⁰⁷ トルストイの中編『イワン・イリッチの死』には、「黒い袋」と「黒い穴」が現れる。イワン・イリッチは、死ぬ前の三日間、「目に見えぬ抗しがたい力」によって、「黒い袋」または「黒い穴」に押しこまれ、袋のなかでもがきつつける。しかし、やがて――「突然、なにものかの力が、彼の胸、わき腹を突き、さらに強く呼吸を圧迫し、彼は、穴のなかに転がり落ちた。そして、穴の終わりに、なにかが光りはじめた」。これは、イワン・イリッチが死ぬ三時間前のことである。

イワン・イリッチが袋に落ちこむときにもやはり、「落ち込む провалился」という動詞が、二度にわたって使われている。

この動詞は、ロシア民話『地獄に行って来たバイオリン弾き Скрипач в аду』の主人公が地獄に落ちこむときにも、二度使われている――「バイオリン弾きが、酒宴に、歩いて向かっていた。すると彼は、突然、地面のなかにずぶりと落ちこんだ。落ちこんだ先は、地獄だった」(«Библиотека русского фольклора», т.2 (в 3-х книгах), книга 2, М.: Советская Россия, 1989. С.463)。要するに、動詞「провалиться」は、「人が、袋(穴)に落ちこんで死ぬ、あるいは異界に行く」ということを指す決まり言葉なのである。

このように、「黒い袋(穴)」とは、彼岸への通路である。トルストイの『イワンの馬鹿』では、悪魔がイワンにやっつけられると、姿がかき消え、地面に穴だけが残る。ロシア民話『奇跡の小箱 Чудесный ящик』では、主人公は、谷間の穴を通して、地底の王国へ降りる(「奇跡の箱」は、「アラジンの魔法のランプ」のロシア版といったところだ。Там же. С.64-67)。

『アンナ・カレーニナ』では、「黒い袋」が、『イワン・イリッチの死』におけるように、あからさまに描かれることはない。しかし、「黒い穴」のほうはといえば、この作品のいたるところに出現する。

レーヴィンのラインにもある。

3章31節

レーヴィンは、ちょうどアンナとヴロンスキーが知り合ったところに、キティーにプロポーズして断られてしまった。その後、彼は、農村経営に打ちこみ、心の痛みをまぎらしてキティーのことを忘れようとつとめてきた。ようやく、経営が軌道に乗りはじめ、心の痛みも薄らぎだしたころ、突然、兄ニコライが来訪する。結核を病んだ彼は、「皮におおわれた骸骨」になり果て、その「大きな奇妙に光る目」を、一瞬も弟の顔から離そうとしない。「ようやく、いかに生きるべきか、という問題が、レーヴィンに少し分かりかけてきたと思ったら、新たな解決不能な問題——死——が現れたのであった」。「おれは、すべてに終わりがあることを、死があることを忘れていた」。ニコライの「黒い大きな恐ろしい目」(2章30節など)は、彼に会う者に、つねに死のことを思い出させる。

レーヴィンの「全生活を覆う暗黒 (мрак)」(5章15節)も、これと直接つながっている。

とはいえ、「黒い穴」がネガティブであるとはかぎらない。そこから「至高なるものがすがたを現す」こともある。

レーヴィンは、兄ニコライの死と、妻キティーの出産のときに、なにか神秘的な穴が開くように感じる。レーヴィンの言葉を借りると、「なにか至高なるものがすがたを現す穴」だ。

あの悲しみも、この喜びも、ひとしく、あらゆる通常の生の条件の外にあった。この通常の生のなかに、あたたかも、穴が開いて、そこから至高なるなにものかが、すがたを現したかのようであった。(7章14節)

穴とは、生命がやってくるところ、そして、生命が去っていくところ。どこか別の世界への入り口なのである⁶⁰⁸。

⁶⁰⁸ 異界への通路としての穴

穴が異界への通路であるのは、ロシアにかぎったことではない。ヨーロッパ全般で、洞穴、地面の裂け目を通して、冥界にいたるケースは多い。たとえば、ヴェルギリウスの叙事詩『アイネイアス』の冥府行きがそれだ。呉茂一『ギリシャ神話』によると、古代ギリシャでは、地方伝説でも、またこれに影響された文学作品でも、ギリシャの各地に冥界への出入り口とされる場所が、何カ所かあった。それはたいてい、深い洞くつで、その底が冥界に通じていると信じられていた。たとえば、ペロポネソス半島南端、タイナロン岬に近い洞くつ、アルゴリスの半島部、ヘルミオネー市の井戸などだ(呉茂一『ギリシャ神話』〈上〉、新潮文庫、1979年、「冥府」の章)。

数多くの民族の神話・民話において、袋(無意識)と袋(彼岸への通路)とが重なり合って、ひとつの象徴をかたちづくっているのが見いだされる。そうした神話・民話の一つの典型が、巨人、あるいは怪物の内部、あるいは腹に呑みこまれ、またはみずから入り、しばらくのちに、そこから脱出するというパターンだ。たとえば、旧約聖書の「ヨナ書」である。

神は、ヨナに、ニネベ(アッシリアの首都)へ行き、人々に悪の道を離れるよう呼びかけよ、と言う。しかし、ヨナは、神から逃れようとして、タルシシュ行きの船に乗りこむ。神が、大風を海に向かって放ったので、海は大荒れとなり、船はいまにも砕けんばかりとなった。ヨナは、船の人々に、自分が神の前から逃げてきたことを白状し、自分を海に放りこんでくれと言う。乗

だが、「至高なるものがすがたを現す穴」は、比較的まれにしか出てこない。あるいは、人間が「至高なるもののすがた」を目にとめ、その声を聞くことはすくない。そして、全体として破滅のほうへ、死のほうへと引っぱられていく。

4章 21節

アンナは、出産の後で、兄オブロンスキーに、「私は、自分がなにかの深淵に向かって、頭から落ちていくような気がする」«лечу головой вниз в какую-то пропасть»と言う。そして、「救いはないと感じる」と。

7章 25節

自殺の日。アンナとヴロンスキーは、前夜もけんかして発作的に和解したのに、朝からさ

組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、海はますます大荒れとなり、やむなくヨナを海中に放りこむ。

さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。

苦難の中で、わたしが叫ぶと

主は答えてくださった。

陰府（よみ）の底から、助けを求めると

わたしの声を聞いてくださった。

あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。

<...>

大水がわたしを襲って喉に達する。

深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。

わたしは山々の基まで、地の底まで沈み

地はわたしの上に永久に扉を閉ざす

しかし、わが神、主よ

あなたは命を

滅びの穴から引き上げてくださった

<...>

偽りの神々に従う者たちが

忠節を捨て去ろうとも

わたしは感謝の声をあげ

いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。

救いは、主にこそある。（日本聖書協会、新共同訳〈*下線は佐藤〉）

神が命じると、魚はヨナを陸地に吐き出す。ヨナは、直ちにニネベに行き人々に呼びかける。人々は、ヨナの言葉を聞き、悪の道を離れ、滅亡を免れるのである。

この袋（魚）は、ヨナ自身の心にほかならず、彼岸への通路をもつ。袋にあって、彼岸からの「神の声」を聞けば、この袋は恩寵、賜物となる。そして、ヨナを新たに産む神秘的な胎内となる。「神の声」を聞かなければ、この袋は、災いとなり、死の「黒い袋」となる。

こうした意味をもつ袋が変形し、箱、樽となることもある。ロシア民話では、たとえば、『かますの命令によって』が有名な例だ。いつも暖炉の上に寝そべっている、『三年寝太郎』のようなぐうたらな青年がいる。彼は、樽に押しこまれて川に流され、しばらく漂流したのちに岸に着く。そこで、彼は、魔法の力をもつカマスのおかげで、「絵にも描けないような」立派な王子様に変身するのだ。

っそく、つまらぬことでまたけんかしてしまう。「いきなり、アンナの顔つきが、がらりと変わる」。すると、ヴロンスキーの目のなかにも、「冷たく残酷な審判者」が現れる。アンナは、「心のなかに嵐が吹きすさび、人生の岐路に立っていることを感じる」が、踏みとどまることはできない。「黒い穴」が開き、不吉な風が吹き出してくると、第1章のあの嵐の場面のよ
うに、もはやなにものも彼女を止められないのだ。

7章27節

アンナは、ヴロンスキーとの、これが最後になったいさかいの後、なかば狂乱状態になる。ひとりであるのが怖くなった彼女は、子ども部屋に行く。

女の子は（*ヴロンスキーとの娘、アニー——佐藤）、机の脇に座って、コルク栓で、しつこく、強く机を叩いていた。そして、母親を、スグリのよ
うな黒い二つの眼で、無意味にながめた。

「死のモチーフ」（連続する打撃音）につづき、「黒い穴」が、自分の娘にまで現れる。アンナは、まもなく鉄道へ行き、そこでまた「男」をみるだろう。これを最後に——。

いたるところに種々のブラックホールが口を開け、不吉な風が吹いてくる。鍛冶屋と鉄道は、それをエネルギーにして、まるで癌細胞のように巨大化し、やがて一切をのみこんでしまう。要するに、世界の全体が、巨大なブラックホールにほかならず、鍛冶屋と鉄道の背後にいる何者かが、われわれの生をたえず奈落の底に引っぱっていく——。

『アンナ・カレーニナ』の世界とは、こういうものなのであった。世界とは、「邪悪な力の残酷な嘲弄だった」（8章9節）。トルストイは、この作品でそのことを確認した。

ブラックホール出現の音

アニー（アンナの娘）の死のモチーフもそうだが、『アンナ・カレーニナ』では、登場人物たちの運命が決せられるような重要な場面で、さまざまな種類の音が聞こえてくることが多い。たいていの場合、それらは耳をつんざく金属音、キンキンする高音だ。汽笛の音、犬のキャンキャンという吠え声、車掌の呼子（以上、アンナとヴロンスキーの最初の出会い）、嵐の風を切る音、剥がれかかった鉄板がバタバタいう音、機関車の汽笛（ふたりのボロゴエ駅でのめぐり合い）、汽車の出発のベル、アンナの身体をひきずり、軋む貨車（自殺）。そして、全編をつらぬく、「ハンマーで鉄をたたく音」、汽車のガタンガタン揺れる音。カレーニンのパイパイいう甲高い声も、こうした音の一例だ。これらはみな、鉄と死のモチーフのヴァリエーションであり、やはり前兆、彼岸からの不吉なシグナルである。それらは、いわば空中に拡散し漂いながら、作品の世界全体をつつむ。



「天上界への飛翔」

ヒエロニムス・ボス (Hieronymus Bosch, 1453–1516) ⁶⁰⁹

⁶⁰⁹ ヴェネツィア、パラッツォ・グリマーニ美術館 (Museo del Palazzo Grimani)
<http://www.palazzogrimani.org/news/le-visioni-dellaldila-di-hieronymus-bosch/attachment/boschvisionialdila/> (2015年9月15日最終閲覧)

第5章 アンナ・カレニナの愛のドラマ

これまで、『アンナ・カレニナ』を論じつつも、アンナの悲恋のなりゆきそのものについては、あまりくわしく述べなかった。彼女の個性と生活にかんしても詳述はしなかったので、ここで補うことにする。とくに重要なのは、自己実現と性の問題である（恋愛、結婚、家庭の問題をふくむ）。およそ人生というものは、いかにこの二つと折り合いをつけるかに尽きる、と言ってもいいからだ。そして、その両者はしばしば入り混じっている。本稿でここまでみてきたのも、要するに、トルストイにおける自己実現と性にはかならなかった。

まずは、ヴロンスキーと恋に落ちるまえのアンナがどんなだったか、その個性と生活をみてみよう。

1. アンナの欲求不満：カレニンとのセックスレス

1章29節、アンナは、嵐のプラットホームでヴロンスキーと出会うすぐ前に、袋からペーパー・ナイフをとりだす。

アンナは、袋から、ペーパーナイフとイギリスの小説を取りだした。<...> アンナ・アルカージェヴナは、読んで、書いてあることは分かったが、でも、読むことは、つまり、他人の生の反映を跡づけることは、つまらなかった。彼女は、あまりにも自分自身が生きたかった。<...> しかし、することが何もなかったので、彼女は、小さな両手でなめらかなナイフをもてあそびながら、強いて読みつづけた。

<...> 「いったい何がわたしは恥ずかしいんだろう」と彼女は、侮辱されたように驚き、自問した。彼女は、本を放りだし、椅子の背にもたれ、ペーパーナイフを両手で固く握りしめた。<...> 「いったい、わたしこの士官の坊やとのあいだに、どの知り合いともあるような関係以外なにかあるんだろうか、あり得るんだろうか？」彼女は、軽蔑するように笑みを浮かべ、ふたたび本を読みだしたが、もはや、読んでいる内容は、まったく分からなかった。彼女は、ペーパーナイフでガラスをなで、ナイフのなめらかな冷たい表面を頬に当てると、突然彼女をわけもなく襲った喜びで、声を立てて笑いだしそうになった。

ナイフのもつ意味はあきらかだが、かんじんなのは、アンナが性的欲求不満に苦しんでいたことなのだ。夫カレニンは、20才年上で（4章21節）、しかも、性的に不能、あるいはそれに近い状態だった。アンナは、8年間の結婚生活（2章26節）⁶¹⁰のあいだ、まったく避

⁶¹⁰ 5章29節には、アンナはペテルブルクのカレニンの屋敷に9年間住んでいたとあり、年数に食いちがいがある。

妊をしていなかった（6章23節）。にもかかわらず、子どもは、セリョージャ一人だけしか生まれていない（セリョージャは8才）。

カレーニンの省が管轄する耕地灌漑計画（3章14節）は、彼の性的不能を暗示している、と考える研究者が何人かいる。この灌漑計画は、膨大な資金を食うだけで、なんの成果も上げられない。そして、この計画が、官吏としてのカレーニンのつまずきの石になる。不毛な大地とむだな灌漑、そこから起きる悲劇——これが、彼の個人生活の悲劇と並行して進んでいく⁶¹¹。

一方のアンナはといえば、まったく対照的だ。彼女は、若いだけでなく、生氣と精力がありあまっている（本文で触れたように、草稿では、ヴロンスキーと出会ったとき、27才だ）。「あたかも、ありあまるなにものが彼女のからだにみなぎって、彼女の意志にかかわらず、眼の輝きに現れたり微笑に現れたりするかのようであった」（1章18節）

アンナは、こわい黒髪をしている。彼女の「いたるところでカールした髪」（1章19節）は、彼女のデモーニッシュなパトスの象徴として、再三強調される。アンナが生まれたオブロン

⁶¹¹ カレーニンの性的なコンプレックスも、やはりペーパー・ナイフで表される。

アンナとヴロンスキーが関係を結ぶ直前の場面。カレーニンは、はじめてふたりの「ぶしつけなふるまい」が気に入り、アンナに意見することに決める。

カレーニンは、自宅へもどると、いつものとおりに書斎に入り、ひじかけ椅子にすわって、教皇制にかんする本の、ペーパー・ナイフをはさんでおいた箇所を開いた。そして、いつものとおりに、一時まで読んだ。ただときどき、なにかを払いのけようとするかのように、高い額をこすったり、頭を振ったりした。（2章8節）。

ここに端的に表現されているように、カレーニンは、自分の性的コンプレックスを、権力と宗教で埋めようとしている。しかし、彼が築いてきた楼閣を、アンナの不倫という現実が、破壊しつつある。

カレーニンは「大きなどっしりした象牙のペーパー・ナイフ」（3章14節）を愛用している。一種の心理的補償かもしれない。アンナが彼に、ヴロンスキーとの関係を告白した夜、彼は自宅で、無意識のうちに、「例のどっしりした象牙のペーパー・ナイフをいじくる」（3章14節）

カレーニンが、アンナの兄嫁ドリーにはじめて、アンナとヴロンスキーの関係を告げる場面でも、やはりナイフを通じて、彼の性にかんするトラウマが表現されている。

ふたりは（カレーニンとドリーは）、防水布をかけた机にすわった。防水布は、ペン・ナイフで傷だらけになっていた。

「わたし、信じられません。そんなこと、とても信じられませんわ!」。ドリーは、彼女の視線を避ける彼の目をとらえようとしながら、言った。

「事実は信じないわけにはいきませんよ、ダーリア・アレクサンドロヴナ」（4章12節）

ふたりとも、身体的・性的コンプレックスに苦しみ、配偶者の浮気で傷ついている。つまり、「ナイフで傷だらけ」という点で、ふたりは共通するわけだ。

カレーニンとドリーと対照的なのが、キティーの姉のナターリアとその夫リヴォフだ。このふたりは、落ち着いた、万事に適応した美男美女である。リヴォフのペーパー・ナイフは「いつもおなじ場所に置かれている」（7章4節）。火を噴くような情熱など薬にたくもないが、妻だけと、それなりに、ということだろう。

スキー公爵家には情熱的な南方の血、セム系民族の血が混ざっていることが暗示されているのだ。

アンナは、いつも軽い足どりで歩く。「彼女は、すばやい足どりで出ていったが、それは、かなり豊満なからだをふしぎなほど軽々と運んでいった」(1章18節)。自殺直前でさえ、アンナの足どりは変わらない。このころの彼女は、モルヒネ中毒と心労で不眠の毎日だったのにである。「彼女は、すばやい軽い足どりで、揚水所からレールに通じる階段を降りると、通過している列車とすれすれのところに立ち止まった」(7章31節)。驚異的な体力のもちぬしとっていい。これでは、カレーニンと調和するのは無理というものだ。

2. なにがアンナを支えていたか：彼女の生きがいとは

ところがアンナは、カレーニンが不能かそれに近かったというのに、浮気は一度もしたことがなく、とにかく身持ちが固いので有名である。そして彼女自身、それを誇りにしていたようだ。ヴロンスキーと関係してから、こうひとりごつ場面があるから。

私は、なによりも大事にしていたものを失おうとしているんだわ——貞節な夫人としての名(честное имя)と息子を。(5章8節)

この「貞節な夫人としての名」を、前章で述べた「手袋」という象徴が表していたわけだが、それはなにを意味するのか。いったん嫁したからには、なにがあろうと貞節を守り、二夫にまみえず、というだけのことではない。この「名」には、「社交界の地位」という要素もくわわってくるからだ。

それはつぎのことから分かる。アンナは、ヴロンスキーとの関係を夫に告白したあとで、愛人とすべてを捨てて駆け落ちすることを夢想しつつも、「私は、社交界の地位を無視して、息子を捨て、愛人のもとに走ることはできない」(3章22節)と感じていることだ。「貞節な夫人としての名」と「社交界の地位」とはほぼ等価であり、重なり合うことになる。

つまり、アンナが「貞節な夫人としての名」を大事にするということは、社交界(貴族社会)において、あらゆる点で模範的にふるまい、そのことを他者にも認められて、名誉ある地位を占めること。こうした名誉が、アンナにとって、息子とならぶ主な生きがいであった、ということになる。

まあ、それはそれでけっこうなことかもしれない——社交界が実質あるものであり、社会に貢献しているのであれば。およそ、なんらかの社会、団体、組織で出世するのが意味をもつか否かは、その団体の内実次第ということになる。

ところが、その社交界の内実がスカスカだったことは、とくに作家の農奴解放の試みのところでくわしく書いたのでくりかえさないが、つぎのことだけ思い出しておこう。

この作品の舞台となっているのは、1873年から1874年にかけての冬から、1876年7月までである。1861年にはすでに農奴が解放されており、『アンナ・カレーニナ』の舞台となった当時のロシアでは、第一次産業革命が進行中だった。その文字どおりの牽引車であった鉄道の総キロ数は、社会の激変の指標である。それは、1865年に3800キロであったのが、1874年には1万2200キロ、83年には2万4100キロと、まさに飛躍的に伸びた。この時期、石炭業、石油業、綿工業などが急速に発展し、ブルジョアジーの形成が進んだ。⁶¹²

無為な生活を送り、社会に貢献することのない貴族はもはや、社会のお荷物であり、早晚消滅、あるいは破滅する宿命にあった。貴族の生活そのものが、存在自体が、社会にとって、歴史にとって非生産的になっていたのである。にもかかわらず、この社会の「余計者」が、強大な国家権力によって、莫大な富を維持している——このような状況であった。

ひとつ強調しておきたいが、当時の貴族の置かれていた状況は、けっして、われわれにとって無縁な過去の現象ではない。重要なのは、そうした状況が、個々の人間の生活と心にどのような意味をもったかということだ。かりに、ある集団なり国家なりが、他の集団を犠牲にしつつ、繁栄をきわめてきたとしよう。繁栄したのは、それだけの理由、存在意義があったからであるが、いまやこの集団は、その意義を失い、可能性をほとんど汲み尽くして、没落しかかっている。けれども、だれも、どうすれば没落を止められるのか分からない。そもそも、たいいていのが、危機感を抱いていない。そして、過去に集積してきた膨大な富を、輝かしい栄光、名声を、まるで空気を吸うようにして、当たり前のように享受し、蕩尽している。いまのところ表面的には、目立った凋落の兆しはない。ただ、人々が、なんとなく退屈し、モラルが全般的に低下しはじめている——。

こうした状況は、歴史上何度もくり返されてきたし、現在もあるし、将来もあるだろう。近代資本主義という大本のシステムが破綻しかかっている現代では、あちこちに、かつてのロシア貴族さながらに空洞化した集団がある。欧米、日本など「先進国」の政財界のエリート等にも。

3. アンナの生活

では、アンナの日常は、どのようなものだったか。彼女のある一日（モスクワからペテルブルクへ帰ってきた日——1章）を、再現してみよう。これが、だいたい平均的なところだろう。

社交界の勢力家で、夫カレーニンの友人、リディア伯爵夫人⁶¹³が来訪。つづいて、アンナ

⁶¹² 『ロシア史（218~19世紀）』、1994年、283頁。

⁶¹³ リディア伯爵夫人は、この作品で黒子的役回りを演じ、アンナの運命をすくなくならず左右する。アンナが不倫の恋に落ちて家をでてから、リディアは、カレーニンを哀れむあまり、ぞっこ

の友人の局長夫人が遊びにきて、午後3時まで長居し、街のニュース、ゴシップをアンナに話す。いつも5時きっかりに始まる正餐までの時間、まず、息子が食事をするそばについてやる。それから、身のまわりの物を片づけたり、たまっていた手紙類を読んでその返事を書いたりする。5時、カレーニンが戻ってきて、正餐。食事が終わると、カレーニンは、会議にでかける。アンナは、仕立て直しに出しておいたドレスができていなかったのので、夜会と劇場に行くのを止める。それで、夜はずっと息子と過ごす。9時半、カレーニン帰宅。カレーニン、零時まで読書。この間、アンナは手紙を書く。いつもどおり零時きっかりに、ふたりは就寝する。

ある程度の母親の役割、付き合い、夜会、劇場——これだけだ。

言うまでもなく、家計、家事は、執事、召使いなど他の人間がやってくれる。育児も、大半は乳母、召使いがする。収入は、領地の農村から上がってくるもののほか、「某省の幹部の一人」である夫カレーニンの高給とさまざまな特権がある。彼女のなさねばならぬことは、あるいはなしうることは、ごくわずかだ。

ん惚れ込んでしまう。その分、アンナへの嫉妬と憎悪も増すのだが、それがアンナの運命に直接影響することになるのだ。

アンナの自殺までもう間もないころ、カレーニンは、アンナに離婚してくれと頼まれる。かつて、彼女の出産直後、いったんは承諾した手前もあって、どうしようか迷う。いまやアンナをはげしく憎んでいるカレーニンは、拒絶したいのが本心だが、寛容を装いたい気持ちもある。

ところでカレーニンは、リディアに誘われたのがきっかけで、当時流行していた神秘主義にハマっていた。彼は、リディアの勧めで、霊媒ランドーのお告げで決めることにする。彼女にあらかじめ言い含められた霊媒は、もちろん、離婚はまかりならぬ、とのお告げを下した（7章20節以下）。

リディアという女は、一見感傷家で、この宗派も盲信しているようにみえるのだが、いかにも勢力家らしくなかなかに食えないところがある。お告げの最中にも、次々に手紙を処理するなど、したたかな実際家の一端をかいまみせる。

ちなみに、この神秘主義のモデルになったサークルの教祖は、イギリス人宣教師、男爵Granville Augustus William Waldegrave (3rd Baron Radstock) である。彼がロシアでつくったサークルの名は、「Общество поощрения духовно-нравственного чтения」という。「聖書を読んで靈感を得て精神を高める会」といったところか。同サークルは、上流階級にもすくなからぬ支持者を得たが、そのおもなパトロンのはひとは、時の鉄道大臣アレクセイ・ボ布林スキー（Бобринский, Алексей Павлович. 1826—1894）だった（Толстой Л.Н. Собрание сочинений в двадцати двух томах. М., 1978—1985. Т.9. С.458）。

彼が鉄道大臣だったのは1871—1874年で、74年にはヨーロッパ・ロシアの鉄道は、合計21000ヴェルスタに達している（1ヴェルスタ=1066,781メートル）。この時期はまた同サークルの全盛期でもあり、彼は、出版、布教のために金を出したほか、みずから説教もするという熱心さだった。

なお彼は、エカテリーナ二世と愛人グリゴリー・オルロフのあいだに生まれたアレクセイ・グリゴリエヴィチ・ボ布林スキーの孫、つまり女帝のひ孫に当たる。

しかし、サークルのプロテスタント的傾向と社会への影響を危険視した政府は、男爵のロシア渡航を禁止し、同サークルの活動を禁ずる処置に出た。

アンナは、鉄道の時代に、鉄道大臣がパトロンになった「偽宗教」が一因で、息子セリョージヤの「鉄道ごっこ」とほぼ同時に、鉄道で死んだ——こういうことになる。

「ねえ、教えてくださいな。どうして寝つけないのかしら？ どうして退屈せずにはいられないのかしら？」

「眠るためには、少し働かなければなりませんな。愉快的気分になるためにも、少し働かねばなりませんよ」

「でも、私の仕事なんてだれにも必要でないのに、なんで働けるかしら」

(3章 18節)

貴婦人リーザ・メルカーロヴァの言葉は、多くの貴族に共通の本音だ。

こうした本質的に退屈で空虚な生活を送りつづけるためには、何かつかい棒が必要である。それが、アンナの場合、「彼女は多分に誇張しているが、ある程度は真実である、息子のために生きる母親の役割」(3章 15節)と、社交界における地位と評判だ。

大権力をもつ社交界(上流貴族社会)における確固たる地位、「非のうちどころのない評判」。これらの美しいイメージ、名前と権力が、空虚な実体を覆い隠してくれる。アンナがいちばん親しくしているリディア伯爵夫人は、社交界最大の勢力家の一人で、政府中枢のポストも動かす。オブロンスキーが、自分が就きたいポストのことで、口添えを頼みに来るくらいだ。だから、アンナの地位の高さも想像できる。

空洞化した生活が、立派な名で呼ばれることで、正当化され、ある程度アンナを支える。だから、アンナの「名誉」には、生の空虚を覆い隠す美名、生を支える「浮き輪」の側面がある。生活が、空虚になればなるほど、名前と権力の重要さは増していく。

その際に、空虚さがあるていどのところで止っていれば、まだしもだが、そうはいかない。なんによらず内面の空虚というものは、放って置けば、ひたすら拡大していく性をもつのだ。その結果、美名は、たんなる虚構と化していく。危機は早晩、必然的に到来するのである。

4. アンナの誇り高さ

アンナがこういう虚名にしがみついていたのには、彼女の性格も手伝っている。彼女はとても「誇り高い гордая」。たとえ、自分がどのような立場に陥ろうとも、おのれを曲げず、卑屈にならない。

彼女はいつも「非常にまっすぐな姿勢」(1章 18節)をしているが、これは、誇り高いまっすぐな性格を現していると感じられる。

アンナはまた、かなりロマンティックで理想家肌のところがある。人生において、何か真に誇るに足ること、美しいことをなすとげたいという熾烈な欲求をもっている(ヴロンスキーとの愛をつらぬくために、家庭も社交界も捨てる。これは、捨て身の行為だ。また、夫の家を出た後、あらゆる危険と困難をおかして、息子セリョージャに会う)。また、自分は何かをなすとげうる人間だ、という漠然とした意識もある。

実際、アンナは、多くのものに恵まれている。圧倒的な美貌。なみなみならぬ体力と知力。異常なまでの才能の豊かさ。家柄（リューリックにさかのぼるオブロンスキー公爵家の出（7章17節））。夫の地位。もつとも、これだけ恵まれていると、悪い意味で「гордая」になっても不思議でない。事実、アンナは、高慢で虚栄心の強いところがある。彼女は、社交界の地位を大いに誇りにしているし、彼女が愛したヴロンスキーも、きわめて名誉心が強く、ごうまんな面がある（3章20節）。とはいえ、一見、あらゆる可能性が彼女の前に開かれている。

しかし、これほど恵まれたアンナにいったい何ができるかという、これが非常にむずかしい。先ほど見たように、貴族の存在そのものが無意味になりつつあるからだ。リーザ・メルカーロヴァではないが、「私の仕事なんてだれにも必要でないのに、なんで働けるかしら」（3章18節）。

たしかに、貴族のなかには、少数だが、レーヴィンのように、自分たちの立場をあるていど自覚し、「自分の無為な人為的な個人的生活を、農民たちのような労働の生活、純粋なすばらしい共同の生活に変える」（3章12節）ことを望み、「自分をはじめ、すべてのロシアの農民と地主は、どうしたら、全体の福祉のために、その数千万の労働力と土地を、最も生産的に活用できるか」（3章29節）を真剣に探し求める者もいた。だが、これは、きわめて困難なことだし、自分自身への刃になりうる。

レーヴィンの探求は、トルストイ自身の農奴解放の試みを下敷きに行っているが、それは、前にくわしく検討したように、真摯さとは裏腹に、きわめて及び腰の取り組みに終わった。

いま振り返ってみると、「余計者」の貴族が、自分たちの土地、財産、社会的立場をかなりの部分残したまま、農民と共存していくというのは、やはり幻想だったろう。当時の貴族はもはや、負んぶに抱っここの生活を根本的に変えることを迫られていた。さもないと破滅してしまう。とはいえ、先祖代々慣れ親しんできた生活を、そうかんたんには変えられない。いや、変革が必要だという認識そのものがない。要するに、無為な生活をつづけながら、自滅を待つしかないのだ——そのことに無自覚のまま。

だから、アンナは、理想を追求する激しい欲求をもち、そのための条件にもこれほど恵まれているが、しかし、打ち込める対象がない。理想追求の欲求は、彼女の心の底でとぐろを巻いている。

もう一つの問題はエゴイズムである。無為な、負んぶに抱っここの生活とは、具体的には、次のようなことがらの連鎖だ。

アンナの御者の太った、老タートル人は、ぴかぴか光る防水外套を着て、凍えきって暴れまわる左側の灰色の脇馬を、やっとのことで、車寄せのところで抑えていた。召使いは、馬車のドアを開けて、立っていた。玄関番は、屋敷の表の扉を押さえたまま、控えていた。アンナは、外套のホックに引っかかった袖のレースを、小さなすばしこい手で外しながら、うつむいて、彼女を送ってきたヴロンスキーがささやく言葉に聞きほれ

ていた。(2章7節)

また、アンナは、服の仕立て直しが思うようにできていなかったため、「かんしゃくを起こし、女の仕立屋をどなりつける」(1章33節)

もっぱら、自分を与えることなく他から奪うことで、生活が成り立っている(1762年の「貴族の自由令」により、貴族は、国家勤務の義務から解放され、勤めもせずに、莫大な不労所得で、豊かな生活を送れるようになった)。こうした生活を何世代にもわたってつづければ、自分を与えること、他者の立場に立つことができなくなっていくのは当然だ。

だから、アンナは、理想追求の欲求に燃えているが、しかし、自分を与えること、他者を理解することをあまり知らない。その彼女が、ヴロンスキーと出会ったとき、捨て身で、本当に死にものぐるいで、愛の理想を追いかける。その結果、皮肉なことに、彼女の愛はいつしか傲慢に変わり、アンナとヴロンスキーとを結びつけるのではなく、逆に引き離すことになるのだ⁶¹⁴。アンナは、愛すれば愛するほど、傲慢になっていく...。これが彼女の愛のパラドクスだ。

⁶¹⁴ 「小さなひげもじやの男」はつねに、アンナの傲慢さに警告を発していると考えられる。というのは、男は、ほとんどいつも「屈みこんでいる」が、うつむく、屈みこむ姿勢は、アンナにとって、誇りが打ち砕かれること、羞恥、恥辱と結びついているからだ。

アンナの動作、「Нагнуться」、「нагнуть голову」(頭をたれる)は、この作品の key word の一つであり、誇りの喪失を表すことがほとんどだ。ちなみに、「нагнуть」は、「下に折り曲げる」の意味である。いくつか例を挙げてみよう。

1章28節

この場面は、アンナがヴロンスキーと舞踏会で踊り、たがいに強く惹きつけられた翌日である。このとき、アンナの心は、キティーへの罪の意識、ヴロンスキーに対する自分でもはっきりしない感情、将来への漠然たる予感などではげしく揺れている。

アンナは、赤く染まった顔を、ナイトキャップと麻のハンカチをしまっていたかわいらしい袋にうつむけた。アンナの目は、とくべつに光り、たえず涙で覆われていた。

2章11節

アンナがヴロンスキーと初めて密通する場面。

アンナは、以前は誇らしく快活だったが今では恥ずかしいその頭を、いよいよ低くたれ、全身を二つに折り曲げると、座っていたソファから床へ、彼の足下へ、崩れ落ちた。

4章4節

アンナが、「愛人を自宅に入れたい」というカレーニンへの約束を破ったために、カレーニンが激怒する場面。

「卑劣だと？もしそんな言葉が使いたいなら教えてあげるが、卑劣とは、愛人のために夫と息子を捨てながら、平気で夫のパンを食っていることを言うのだよ！」

アンナは、頭をたれた。(※傍線は佐藤)。

これらの姿勢は、アンナの特徴の一つである「非常にまっすぐな姿勢」と、鮮明なコントラストをなしている。

(一方で、誇り高さ、真のヒロイズム、理想主義。他方で、傲慢さとエゴイズム。手袋とは、こうした心理的コンプレックスの象徴だったのである) ⁶¹⁵。

ヴロンスキーと出会ったころのアンナの生活は、このようなものであった。

もちろん、こんな生活が——中途半端な自己実現と性が——アンナをほんとうに満足させていたはずがない。だからこそ、最初にみたように、暗い車室で性的な妄想が浮かんできたのだが、それだけではなかった。自己実現のみたされぬ願望も、いっしょに浮上したのであ

⁶¹⁵ アンナ以外の人物の手袋

手袋のシンボルは、アンナ以外の登場人物にも現れる。

2章 26節

カレーニンのかかりつけの医師が、自分の友人であるカレーニンの管理人（支配人）に、アンナの不倫を示唆する。医師は、手袋の指を引っぱりながら、カレーニン氏の健康は良くありません、仕事で神経が極限まで張りつめているところへ、「余計なストレス」もあるから、と言う（2章 26節）。カレーニンが苦勞して維持してきた虚名が、暴露されかかる。

対照的に描かれるのが、キティーが結婚式ではめる手袋だ（5章 6節）。

「シチエルバツキーの三つボタンの手袋をはめた手が、震えながら、冠をかぶせる」

「キティーの、手袋をはめた小さな手が震えだした」（5章 4節）

三つのボタンは、三位一体、聖性などを表しているのだろう。それぞれの人間の生の実体にしたがって、名誉の内実も変わる。虚名か、真実の栄光のしるしか、というわけだが、レーヴィン・ラインの象徴は概して、アンナ・ラインのそれのような凄みがない。小道具の域にとどまっているように感じられる。

レーヴィンは、ぜんぜん気が進まなかったのに、ポーリ（苦痛の意味）伯爵夫人への形式的な答礼を強いられる。彼は、夫人宅の玄関で「片方の手袋を脱ぐ」（7章 6節）。

これは、中途半端な儀礼ということだろう。

7章 26節（アンナの最期の日）

アンナがヴロンスキーを最後に見たのは、彼が馬車に乗り、手袋をはめる姿だった。手袋は、三度も言及される。

アンナとヴロンスキーの、これが最後になった凄絶ないさかいの後、彼は、どこかへ出かけてしまう。アンナが窓から見ていると、ヴロンスキーはふたたび玄関ホールに戻る。そして、だれかが二階に上がってくる。ところが、それは、ヴロンスキーが手袋を忘れたので、侍僕が取りに来たのだった。

彼は、窓の方を見ずに馬車に乗り、いつものように足を組んで座り、手袋をはめると、隅に隠れてしまった。

「行ってしまった！おしまいだ！」（7章 26節）

アンナは、ヴロンスキーが、自分との不名誉な汚れた関係を清算し、社交界に帰ろうとしている、と直観したのではないか。そして、自分がついに、残酷な運命のまえに敗れ去ったことを——

というのは、手袋にかんする、つぎのような迷信が、この場面のベースになっているからである。

もし客が、あなたの家に手袋を忘れて取りに戻ったときには、客は、まずしばらくのあいだ座り、それから立ち上がって手袋をはめねばならない。さもないと、この客は、あなたの家を二度と訪れないだろう——このような、ヨーロッパ全域に広がる迷信がある。

上の場面のエピソードは、これを踏まえている。ヴロンスキーはあえてこの迷信を無視した。アンナは、そのことに、自分への憎しみを見てとり、衝撃を受けたのである（Энциклопедия суеверий. Статья о перчатках. С.324）。

る。

5. 自己実現の夢としての「イギリスの小説」

アンナは、袋から、ペーパーナイフとイギリスの小説を取り出した。〈…〉 アンナは、読んで、書いてあることは分かったが、でも、読むことは、つまり、他人の生の反映を跡づけることは、つまらなかった。彼女は、あまりにも自分自身が生きたかった。小説のヒロインが病人の看護をしているところを読むと、アンナは、自分も足音をしのばせて病室を歩きたくなった。国会議員が演説しているところを読むと、彼女も同じ演説がしたくなった。メリー夫人が馬に乗って動物の群を追いかけ、兄嫁をからかい、みんなをその大胆さで驚かせるのを読むと、彼女自身それと同じことがしたくなった。しかし、することが何もなかったのも、彼女は、小さな両手でなめらかなナイフをもてあそびながら、強いて読みつづけた。

小説の主人公は、もう准男爵の位と領地というイギリス式幸福を手に入れようとしていた。そしてアンナは、彼といっしょにその領地に行きたくなったが、突然、彼女は、彼は恥ずかしいにちがいないと感じ、彼女自身もそれが恥ずかしい気がした。しかし、彼は、いったい何が恥ずかしいのだろうか？「いったい何がわたしは恥ずかしいんだろう？」と彼女は、侮辱されたように驚き、自問した。(1章29節)⁶¹⁶

⁶¹⁶ この「イギリスの小説」は、だれのなんという作品なのか？——もちろん、具体的な作品を踏まえているとすれば、であるが。英米系の研究者たちが、しらみつぶしに調べてきたが、いまだに特定されていない。つぎの論考が代表的なものだ。

・ Cruise, Edwina. Tracking the English novel in *Anna Karenina*: who wrote the English novel that Anna reads? In Orwin, Donna Tussing. ed. *Anniversary Essays on Tolstoy*, University of Toronto, 2010, pp. 159-182.

・ Blumberg, Edwina Jannie. *Tolstoy and the English Novel: A Note on Middlemarch and Anna Karenina*. *Slavic Review* Vol. 30, No. 3, Sep., 1971.

・ Mandelker, Amy. *Framing Anna Karenina: Tolstoy, the woman question, and the Victorian novel*, Ohio State University Press, 1993, pp. 58-67.

アンソニー・トロロープを候補にあげる人が多いが、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ Middlemarch』ではないかとの意見もある (Blumberg)。だが、決め手があるわけではない。というのは、「イギリスの小説」にかんする言及は、上の引用しかないのだが、それがすべてあてはまる作品がみつからないからである。

筆者 (佐藤) の考えでは、トルストイは特定のただひとつの作品を念頭に置いてはいなかったであろう。Mandelker の指摘するとおり、19 世紀後半のイギリス女性にとっては、女性解放、自己実現、結婚、社会的地位と財産というのは、むしろ一般的な幸福の条件だったからだ。

アンナが手にする「イギリスの小説」の大意は、スタンダードなビクトリア朝の小説、とくにアンソニー・トロロープのそのパロディーにだいたいなっている。それらには、国会、狩猟、病気、結婚、財産などのモチーフがそろっているからだ。(Mandelker、前掲書、59 頁)

アンナが羞恥を感じたのは、小説の主人公にヴロンスキーを重ね合わせたからだ。彼女は、心の底で、現在の生活を抜け出して本当の生活をしたい、生きたいと思う。

後にアンナは、実際に家庭を捨てて、ヴロンスキーと暮らす。はたして、彼女の性と自己実現の夢はかなえられたであろうか。以下、鍵になる三つの場面を順次みていこう。

6. 傲慢と幻想

アンナは、ヴロンスキーと関係をむすんでからというもの、深い羞恥の念をいつも感じており、周囲の人々もみな、うすうすとふたりの関係に気がついている。だから、彼女が大事にしてきた「貞節な夫人としての名 честное имя」は、もはや失われようとしている。

アンナとヴロンスキーが知り合ってから半年と少したった7月中旬のこと。アンナは彼の子を妊娠している。ペテルブルグ近郊のクラスノエ・セローで、競馬が開催され、ヴロンスキーも参加するが、この競馬をきっかけに、ふたりの運命は大きく変わるのだ。

アンナの目の前で、ヴロンスキーが落馬し、彼女は茫然自失、しかし、彼が無事だと聞いて、衆人の前で号泣する（これは、この作品の感動的な場面のひとつだ）。それで、ふたりの関係が暴露されてしまう。その夜、彼女は夫カレーニンに、「私は、ヴロンスキーを愛しています。私は、あの人の愛人です」と告白する。

翌日、アンナは、「これから自分はどうなるのか」と恐怖し、またヴロンスキーがもはや自分を重荷に感じているように思われ、彼に憎悪を感じさえる。自分が本当のところ何を欲しているのか分からなくなり分裂状態に陥ったアンナは、「息子のために生きる母親の役割を

一般的な幸福の条件だったからこそ、こういうステレオタイプがあちこちで描かれたわけで、トルストイは、その一般的イメージを念頭に置いていたのではないか。

だが、ほんとうにこれは幸福というものなのか？... アンナは、生きたい！という漠然とした欲求をかきたてられるだけで、「イギリスの小説」のヒロインに完全に自分を投影することはできない。

女性の幸福とははたして？ 当時のトルストイにとっても、自明なことがらではなかったろう。後年、1891年に作家は、論文『最初の段階 Первая ступень』にこう書く。

たいていの場合、なにか高尚で高貴なものを示しているはずの男たちは——『チャイルド・ハロルド』から最近のフイエ（Octave Feuillet）、トロロープ、モーパッサン等にいたるまで——、その実、何にとっても誰にとっても必要のない、墮落した寄食者にほかならない。一方、いろんなかたちで大なり小なり愛人に満足を与えているヒロインたちは、これまた、まったく同様な穀つぶしで、贅沢に血道を上げている連中なのだ。

В большинстве случаев мужчины, долженствующие представить нечто возвышенное и благородное, начиная с Чайльд-Гарольда и до последних героев Фелье, Троллопа, Мопассана, -- суть не что иное, как развратные тунеядцы, ни на что, ни для кого не нужные; героини же -- это так или иначе, более или менее доставляющие наслаждение мужчинам любовницы, точно так же праздные и преданные роскоши. (29, 63).

だがトルストイは、この徹底にいきつくためには、アンナとともに自分の情熱の行く末を見届けなければならなかった。

思い出し」、それにしがみついて、息子セリョージャを連れて家を出てモスクワへ行くことにする。

しかし、カレーニンは、息子を取り上げることをちらつかせながら、「愛人と決して会わぬ」ことを手紙でアンナに要求してくる。そして、「表面上は、これまでどおりの夫婦生活の体裁をつづけ、起こったことを、社交界の眼からひた隠しにする」(3章13節)ことを求める。彼女は、嫌悪と絶望で泣き伏す。

アンナは、ヴロンスキーに希望を託し、彼と会って、夫に告白したことを伝える。「私はあの人に、すべてのことを言ってしまったの...私はあなたの妻でいるわけにはいかないって...そして、すべて言ってしまったの」(3章22節)

もしヴロンスキーが、この知らせを聞いて、断固として、情熱的に、一瞬も躊躇せず、「すべてを捨てて、ぼくといっしょに行こう」と行ってくれたなら、アンナは息子さえ置いて、彼と駆け落ちしたであろう。だが、この知らせはヴロンスキーに、彼女が期待していたところのものを呼び起こさなかった。(3章22節)

アンナは苛立ち、夫の手紙をヴロンスキーに読ませる。「アンナは、手袋から、夫の手紙をとりだした」(*傍線は佐藤)。ところが、「彼のまなざしには、きっぱりとしたところがなかった」。彼の脳裏には、「自分で自分をしばらないほうがいい」という考えがひらめき、煮え切らない態度に終始する。ヴロンスキーの愛情にすがって、それだけを支えに、また誇りにして生きていこうとしたアンナは、完全に絶望する。(3章22節)

「私に残されているのは一つだけ——あなたの愛情だけよ。もしそれが私のものなら、私は自分をとても誇らしく、しっかりしたものに感じるから、私にとっては、屈辱なんてありえないの。私が自分の状態を誇りに思うのは、そのわけは...誇りに思うわけは...」アンナは、自分が何を誇りに思うのか、最後まで言うことができなかった。羞恥と絶望の涙が、彼女の声をとぎれさせた。彼女は立ち止まって、泣きくずれた。(3章22節)

アンナからしてみると、いまや自分の誇りはヴロンスキーの愛情のみであり、それさえあれば、どんな屈辱もありえない。彼女は、すべてを捨ててヴロンスキーのもとに走る覚悟を固めていた。ところが、彼女は愛にすべてを託したというのに、彼はそうではなかった——こうアンナは悟ったのである。しかし実際には、これはまちがいでないが、一面的だ。

夫の手紙を受けとったとき、アンナは、すでに心の奥底では知っていた——すべては、いままでどおりのままだろう、私は、社交界の地位を無視して、息子を捨て、愛人のもとに走ることはできない、と。(3章22節)

アンナは、心の奥底では、社交界の地位と息子を捨てられないことを知っていた。だから、カレーニンの手紙の内容は、まさに彼女の求めていたものに他ならなかったのだ。つまり、世間体をとりにくろい、社交界の地位と息子を捨てないで、ひそかにヴロンスキーと会いつづけるということである（カレーニンは、隠れてヴロンスキーと会うぶんには黙認することを匂わせている）。カレーニンの手紙は、アンナの愛のロマンティックな幻想をくずし、まさしく急所を突いた。それで、彼女は衝撃を受けたのである⁶¹⁷。

にもかかわらず、アンナの意識には、かなり一面的でロマンティックなイメージが残る——自分のヒロイックな愛情の立派さ、ヴロンスキーの情けなさ、無理解。こうしたアンナの思いが、4章の草稿では、やや説明的に語られている。

アンナの下あごがふるえだし、彼女は沈黙した。彼女は言いたかった——「あなたは、つらいとか苦しいとか考えている。でも、いったい、わたしたちの立場で——わたしたちが、人生ではなく、人生以上のものをかけて、ゲームをしているとき——こんな立場にいるときに、つらいこととか、苦しいこととかが、あり得るものかしら？まるで、お産をしている最中に、『ずきんをとる（*離婚するの意——佐藤）』ことを考えるようなものよ。この人にとっては、問題は、愉快だとか不愉快だとかいうことなんだわ。なぜって、この人は、ゲームに人生のすべてをかけなかったから。でも、わたしにとっては——わたしの名誉も、息子も、これから生まれる子どもも——すべてが、滅んでしまった。それも、ずっと前に。わたしは、ずいぶん前からそのことが分かっていた。それなのに、この人は、つらいとか、不愉快だとか、言っている」（№ 69—20, 264）

これは真実であり、感動的である。しかし一面的だし、こういう孤独感をもちつづけるのはつらい。そこで、アンナは、ヴロンスキーを理想化し、自分自身の高さまで、いやそれ以上の高さに祭り上げるようになる。

彼女は、どの逢い引きのときもそうであるように、彼女の想像した彼のイメージを（それは、たとえようもなくすばらしく、現実にはありえないものだった）、実際の彼といっしょにした。（4章2節）

彼に失望することがあると、また元にもどり、自分の愛情の高みからヴロンスキーを見下し、悲しむ。こうして、二つの極を行ったり来たりする。二つの極の距離はだんだん大きく

⁶¹⁷ 「手袋のなかに入っているカレーニンの手紙」という形象はだから、アンナのひそかな欲求を象徴する。草稿では、「アンナは、ヴロンスキーに手紙を渡した」（20, 306）とあるだけで、どこに手紙が入っていたかは、書かれていない。だから、作者が後で手袋を意図的に付け加えたことは、まちがいない。

なり、後には、どうにも統合できないところまで達してしまう。そのさまを、5章28-33節でみることになるだろう。この一連の場面に、アンナの性と自己実現の問題を解き明かす、二つ目の鍵がひそんでいる。

それにしてもなぜ、ヴロンスキーは、きっぱりとした態度がとれなかったのだろうか。なるほど、彼自身考えているように、駆け落ちするということは、彼が愛着をもっている軍隊勤務を辞めねばならないということだ。また、彼は、アンナとの逢い引きの直前に、友人から「女はつまずきの石だ」などと言われ、ヴロンスキー自身も、「自分をしばらない方がいい」と思う。たしかに、自分の職業、地位、社会的立場を危うくしたくない、ということは理解できる。

とはいえ、ヴロンスキーには、年収約10万ルーブルにおよぶ莫大な資産があり、軍を辞めても、また、駆け落ちしたために社交界から閉めだされたとしても、生活にはまったく困らない。それどころか、田舎の領地に行けば、アンナとの関係のために、人目をはばかったり、嘘をついたりする必要もなくなる（正直でプライドの高い彼は、このことを大いに苦痛に感じている。彼は、だれにも後ろ指を指されずに、昂然と頭を反らしていたいのだ）。

彼が気にしていたように、田舎での生活を調えるためにある程度の準備と時間が必要だとしても、その覚悟さえあれば、断固たる態度はとれたはずで、アンナを失望させることはなかったろう。彼の軍隊勤務への愛着にしても、そんなに強いわけではない。じっさい彼は、後に軍を退役してからは、軍の仕事についてほとんど思い出さない。

では、結局のところ何が、ヴロンスキーの煮えきらない態度の原因だったのか。それをつぎに考えてみよう。

7. ヴロンスキー

アンナと出会う前のヴロンスキーは、アンナとちがって、自分の生活に、つまり社交界での付き合いと軍隊勤務に、十分満足していた。アンナのように、漠然と生活に空しさを感じる、というようなことはなかったのである。だから、彼は、アンナとの関係のために軍隊を退役して社交界を離れた後は、まったくすることがなくなって、アンナ以上に退屈し、自分で自分をもてあます。

ヴロンスキーは、アンナと知り合ったころは、30才くらいの若さで、侍従武官。軽騎兵連隊の青年士官であった。「名門の出で、輝かしい出世街道を歩んでいた」（1章12節）。彼は、「名誉心がきわめて強く」（3章20節）、華やかな生活を楽しみつつ、さらに大きな権力と名

誉を求めて生きていた⁶¹⁸。

しかし、ヴロンスキーは、アンナと知り合ってから一年少し経ってから、タシケント派遣を断り（もちろん、アンナと離ればなれにならないために）、軍隊を退役する。これで、ヴロンスキーの出世の道は断たれる。退役時には、彼の官等は、すでに三等官に達しており、宮廷の「主馬頭 しゅめのかみ шталмейстер」⁶¹⁹を務めていた（6章29節）。三等官は、大臣相当の官等である。

ヴロンスキーは、軍隊を辞めると、アンナとヨーロッパ旅行にでかける（彼女は、このときに夫の家を出たのである）。ところが彼は、蜜月旅行だというのに、すっかり暇をもてあまし、「ふさぎの虫」にとりつかれる。絵画の趣味をもっていたヴロンスキーは、「愛する女のために名誉を捨てた芸術の愛好家にして、みずからもささやかな芸術家」（5章9節）として生きようと思いつき、中世イタリア風の服装をして、アンナの肖像画などを描いたりするが、じきに飽きてしまう。

旅行から帰国すると、ヴロンスキーは、アンナとの関係のために、社交界からも閉めだされていた。彼は、「社交界の扉」を開こうと試みるが、彼女が離婚しないかぎりにはむだだと分かって、いっしょに田舎の領地に去る。

田舎では、病院をはじめたくさんの建築物を、「小さな町」ほども、無意味に建てる。さらに、5つか6つの公共機関のメンバーになるが（裁判官、地方議会代議員、陪審員等々）、これも、アンナが皮肉るように、「形式的な仕事」で、ひまつぶしにすぎない。このように、社交界と軍隊を離れたヴロンスキーは、迷走をつづける。

ヴロンスキーは、自分の領地に来て半年ほど経ってようやく、「堅実な、危険の少ない農村経営」（6章25節）を行って、自分の資産を管理することにある程度の興味を感じ、打ちこみは始める。もっとも、農村経営に経験を積んだ地主によれば、ヴロンスキーは「資本をただむだにつぎこんでいるだけ」（6章29節）。いずれにせよ、地主貴族の農村経営の「倒産」は時間の問題だから、それほど面白いわけがない。ヴロンスキーは、農村経営によっては、完全には満たされ得ない。

こんなわけで、彼はついに、社交界の外では生活の場を見いだすことができない。社交界

⁶¹⁸ ヴロンスキーという男には、『コサック』のマリアーナの恋人、ルカーシカの面影がある。肌は浅黒く、精悍そのもので、稀な名騎手。自分の肉体的な「集中力」に絶対の自信をもっている。広い頬骨、美しい歯並びなど、細部にも共通点がある。

その彼を、結局、ああいう悲惨な運命に遭わせたことには、トルストイのルサンチマンが、つまり、コサックやチェチェンの勇士への劣等感がなかったか、どうか。作家の「わたしの復讐」という面があったかもしれない。

⁶¹⁹ 「主馬頭（しゅめのかみ） шталмейстер」は、ドイツ語のStallmeisterがそのまま借用されたもの。宮廷の厩舎を管轄する役職で、三等官の廷臣であり、馬に詳しい人間が任命されるのが常だった。宮廷の馬車も、その管轄内である（馬車の性能は非常に重視されていた）。パレードなどで皇帝夫妻が馬車に乗る際に手助けするのも、主馬頭の仕事だ。（Шепелев Л.Е. Чиновный мир России. XVIII - начало XX века. СПб.: «Искусство-СПб», 2001. С.145-146, 399-400, 405）

19世紀-20世紀初めの三等官は、軍人なら少将に相当する（1722年にピョートル大帝が制定した官等表«Табель о рангах»は、基本的にロシア革命まで維持されたが、時代とともに多少の変動があった。制定当時の三等官は中将である）。

における立場、地位の喪失が、ずっと彼を苦しめる。

そして、ヴロンスキーは、こうした自分の気持ちをそのまま、アンナにも投影する。彼女もまた、まさに同じことのために、つまり、社交界から閉めだされた「不自然な立場」のために、苦しんでいると思ひこむ——しかも、アンナの自殺の前日にいたるまで。

「きみがいらいらする原因のほとんどは、立場のあいまいさだってことを確信しているからさ」(7章 25 節)

このように、ヴロンスキーは、生活全般においても、アンナとの関係においても、「不自然な立場」のまわりをぐるぐる空転する(にもかかわらず、彼は、アンナの夫、カレーニンの「不自然な立場」については、全然気にしない)。

ヴロンスキーは、アンナの気持ちが、根本のところ、ほとんど理解できず、ただ自分の思い込みを押しつけている。これは、つまるところ、彼女をちゃんと愛することができない、ということである。愛することができなければ、いつかは自分に飽きて去っていくだろう——これこそが、絶えざるアンナの恐怖である。事実、ヴロンスキーの「愛情」は、だんだん冷めていく。

冷めるにしたがって、どうにかして社交界に復帰したいという欲求も強まる。社交界に復帰しさえすれば、彼の家柄、コネ、富をもってするなら、簡単になんらかの高いポストに就ける、ということもある。

アンナから見ると——なぜ、ヴロンスキーがこれほどまでに、「不自然な立場」に、自分が捨て去った社交界の地位に、こだわるのか、理解できない。しかし、彼がいつもそのことを思い悩み、決してふっきれない、ということは分かる。ヴロンスキーが自分に強く執着しているあいだは、社交界のことはあまり考えないが、執着が薄れるや、頭をもたげる、その意味で、愛情のバロメーターである。

だから、ヴロンスキーが社交界に強くこだわりだすとき、アンナはいらだつばかりでなく、恐怖を感じる。なぜなら、彼が社交界に復活するためには、二つの方法しかない。アンナが夫と離婚してヴロンスキーと結婚するか(法的かつ対世間的に立場を整えるために)、あるいは、ヴロンスキーがアンナと別れるかである。しかし、離婚はむずかしい。そうなると、アンナを捨てるしかないからだ。

ところで、ヴロンスキーの、「不自然な立場」への嫌悪感であるが、その正体を暴露するような場面がある。

彼の愛馬、牝馬フルフルは、アンナのシンボル（またはアレゴリー）になっており、そのこと自体は⁶²⁰、ボリス・エイヘンバウム⁶²¹をはじめ何人もの研究者が指摘しているのだが、落馬直後のヴロンスキーに、ひとつ注目すべき描写があるのだ。はげしく落胆した彼は、背骨を折って立ち上がれないフルフルの腹を、足蹴にする（2章25節）。

競馬の直前、アンナを訪れたヴロンスキーは、彼女が妊娠したことを聞かされていた。そのとき彼は、「なにものかに対する嫌悪感が十倍するのを感じた」（2章22節）。「なにものか」とは「不自然な立場」であり、妊娠は、その立場をいよいよ「不自然な」ものにする。妊娠による動揺、十倍した嫌悪感が、ヴロンスキー自慢の集中力を微妙にそぎ、落馬させる。彼は、妊娠に対する嫌悪感をぶつけるかのように、「美女」フルフルの腹を足蹴にする——。いやな場面だ。

こういう男にあそこまで惚れ込まされる、アンナの運命とは？ 自分の最高のヒロインにそういう運命を与える作者とは？...

8. わがままな愛

つぎに、5章28-33節の一連の場面を見よう。二つ目の「鍵」がここにある。

ヨーロッパ旅行からペテルブルクに帰ると、ヴロンスキーは、自分たちが社交界から閉めだされたことを知り、社交界の自分たちに対する態度を変えさせようと奔走する。

一方、アンナは、息子セリョージャのことで頭がいっぱいだ。息子に会うことが、彼女がわざわざ、夫のいるペテルブルグへ来た目的である。だが、ヴロンスキーにはそのことを隠している。

彼女の悲しみは（*息子のこと——佐藤）、それが彼女ひとりだけのものであるがゆえに、いよいよ強かった。彼女はそれを、ヴロンスキーと分かち合うことはできなかった

⁶²⁰ 馬はしばしばリビドーの象徴となるわけだが、ついでに言うと、アンナが乗っている馬も、どこことなくヴロンスキーに似ている。イギリス種で、あまり大きくないが、がっちりしている（6章17節）。この辺は、トルストイの微妙なユーモアだ。

⁶²¹ Эйхенбаум Б.М. Там же. С.188-190.

エイヘンバウムの考えによれば、ヴロンスキーの愛馬、フルフルの死は、作品全体のストーリーの雛形になっている。フルフルの名がとられた、フランスの戯曲“Frou-Frou”（Ludovic Halévy と Henri Meilhac が 1869 年に書いた戯曲）のヒロインの運命は、アンナのそれと似たところがあり、フルフルの死は、アンナの死を予告している。草稿では、アンナの名はタチアーナであり、馬は、Tiny あるいはターニャであった。さらに、背骨を折ったフルフルの上に、蒼白な顔で下あごをふるわせて立つヴロンスキーと、彼に初めて身を任せたアンナの上に、蒼白な顔で下あごをふるわせて立つヴロンスキー、といった並行関係が、いくつかある。

ちなみに、このフルフルというのは、絹または高価な布の擦れ合う音を表したことばである。この表現はとくに 19 世紀中葉に流行し、軽はずみな行為の意味でももちいられた。当時は、「フルフル」という歌も流行った。

См.: Кирсанова Р.М. Розовая ксандрейка и драдедамовый платок: Костюм-вещь и образ в русской литературе XIX века. М.: Книга, 1989. С. 257.

し、そうしようとしなかった。彼女は、ヴロンスキーが彼女の不幸の主たる原因であるにもかかわらず、彼女が息子に会う問題は、彼にはまったく取るに足らぬものに思えることを知っていた。彼女は、彼が彼女の苦しみの深さの一切を理解するがけっしてできないのを知っていた。彼女は、このことに触れるときの彼の冷淡な調子のせいで、自分が彼を憎むであろう、ということを知っていた。彼女は、このことをこの世の何にもまして恐れていたのも、息子にかんすることはすべて彼に隠していたのである。(5章29節)

アンナは、ひそかに息子と会った後、さびしいホテルの部屋で、ひとり悲しみに沈む。「もうこれでおしまいだ。私はまたひとりぼっちになってしまった」(5章31節)

ふと、アンナの脳裏に、こんな考えが浮かんだ。「『あの人はどこにいるの？なぜ、私を放っておいてひとりで苦しませておくの？』と、アンナは非難がましい気持ちで考えた」(5章31節)

アンナはヴロンスキーを呼ぶが、昨日の昼食のときから会っていないというのに、友だちのヤーシヴィンといっしょに来るといふ返事だった(ヴロンスキーとアンナは、ホテルの別々の部屋に泊まっている。彼が、世間体のためにそうすることを主張したのである)。

アンナの心のなかで、なにかがうごめきだす。「突然、もし、彼が私を嫌いになったら？という奇妙な考えがアンナに浮かんだ」(5章31節)

ところが、やって来たヴロンスキーはアンナに、「ここでの僕たちの生活が、僕にとってどんなにつらかったか、君には分からないだろう」(5章31節)などと言い、アンナの神経を逆なです。自分の愛情だけではそんなに不足なのか、自分の方がよほど苦しいのに、と彼女は、内心怒りを覚える。

そこへたまたま、今晚の劇場の切符が手に入るということを耳にしたアンナは、突然、劇場へ行こうと言い出す。

ヴロンスキーは驚き呆れる。なぜなら、「そんな派手な格好で、だれ一人知らぬ者のない公爵令嬢(*アンナの叔母ワルワラのこと——佐藤)といっしょに劇場にすがたを現すということは——たんに、自分が身を滅ぼした女であることをみずから認めることになるばかりでなく、社交界に挑戦状を叩きつけることに、すなわち、社交界と永遠に絶縁することになる」(5章33節)

「でも、いったいあなたは分からないんですか...」彼は言いだした。

「分かりたくなんかないわ！」彼女はほとんど叫ぶように言った。「分かりたくなんかない。私は自分のしたことを後悔している？いいえ、絶対に。もしまた同じことがあったとしたら、やっぱり同じことになったでしょうよ。私たちにとって、私にとって、そしてあなたにとって、大事なものはひとつだけ。私たちがおたがいに愛し合っているかどうか

か、ということよ。ほかのことなんか考える必要ないわ。なんで、ここでは、私たちは別々に住んでいて会わないの？なんで私は行ってはいけないの？私はあなたを愛しているわ、だからどうだっていいのよ」

(5章 32節)

アンナは、劇場で、ある上流婦人に汚らわしい女と呼ばれ、文字どおり公衆の前で辱められ、さらしものになる。

なぜ、アンナは劇場へ行ったのだろうか？

アンナは、劇場へ行く前、身支度をしながら、「落ち着いて、香りの高い手袋（片方）を折り返す」（5章 32節）。自暴自棄になったアンナは、ヴロンスキーの執着する社交界に「手袋を叩きつけ」、彼の愛の強さをはかろうとしているのだ。自分の行為にたいする彼の反応を見て、彼が自分をとるか、社交界をとるか、見きわめたいのである。それを裏づける箇所が草稿にある。

「私がこんなことをしたのは、あの人が私のことを愛しているかどうか分からないからよ。私は、あの人の愛をためそうとしたんだわ」（20, 453）

アンナの行為は、もちろん、ヴロンスキーに対するデモンストレーションでもある。「大事なものはひとつだけ。私たちがおたがいに愛し合っているかどうか、ということよ。ほかのことなんか考える必要ないわ」——そういう自分の覚悟を、社交界のまわりでうろうろしているヴロンスキーに見せつけるために、アンナはあえて劇場に行き、社交界に挑戦状を叩きつけ、絶縁してみせたのである。

まさに捨て身でヒロイックな行為であるが、しかしアンナは、自分の愛と苦しみのことばかり考え、なぜヴロンスキーがこれほど社交界にこだわるのか、てんから理解しようとしな。自分が捨て去ったものに情けなくいつまでもこだわっている、としか思わず、相手を一方的に切り捨ててしまう。だから、結局、彼を怒らせ、愛情を冷ますことにしかならない。

相手の立場に立とうとせず自分のことだけ考えるという点では、アンナも、ヴロンスキーも同じだ。ふたりとも一歩も譲らず、**彼女の「愛」は、彼の「社交界」と激突する**。本当は、彼の社交界への執着には、前に述べたように、深い根があり、その根は、アンナ自身のコンプレックスとも重なり合うのであるが。

ヴロンスキーと衝突したアンナは、またもやヴロンスキーとその「愛」をロマンティックに美化することで、つまり幻想によって、現実との和解をはかる。だが、その幻想は、かつてのそれよりもはるかに現実離れしている。そして、ヴロンスキーはいまや、それを冷めた目で見ている。

「ありがとう」アンナは、ヴロンスキーが拾ってやったオペラのプログラムを、長い手袋をはめた小さな手で受けとった。するとその瞬間、突然、彼女の美しい顔がぴくりとふるえた。<...>

アンナは、もう家にいた。ヴロンスキーが彼女のところに入っていくと、彼女は、劇場にいたときとまったく同じ装いのままで、ひとりきりだった。彼女は、壁際の、入って最初の安楽椅子に座って、目の前を見つめていた。彼女は、彼に目を向けると、すぐに以前と同じ姿勢をとった。

「アンナ」彼は言った。

「あなたが、あなたがみんな悪いのよ！」彼女は立ち上がり、絶望と悲しみで泣き声になって叫んだ。

「僕は君に行かないように頼んだ、懇願したじゃないか。君が不愉快な目に遭うのは分かっていたのに...」

「不愉快ですって！」彼女は叫んだ。「ひどかったわよ！このことはいつになっても忘れられないわ。あの女は、私のとなりに座るのははげがらわしい、と言ったのよ」

「馬鹿な女の世迷い言じゃないか」と彼は言った。「でもなんだったって、危険をおかして挑発するようなことを...」

「私はあなたが落ち着き払っているのが憎いわ。あなたは、私にこんな目に遭わせちゃいけなかったのよ。もしあなたが私を愛していたとしたら...」

「アンナ！なんでこんなところで僕の愛情を問題にするんだ...」

「そうよ、もしもあなたが、私のように、私のことを愛していたなら、もしもあなたが、私のように苦しんでいたなら...」彼女は、おびえたような表情を浮かべて、彼の顔を見ながら言った。

彼は、彼女が可哀想ではあったが、いまいまくもあった。彼は彼女に愛していると言いつけさせた、なぜなら、いまやそれだけが彼女を安心させることができるのを見てとったからである。そして彼は、彼女のことを、言葉のうえでは非難しなかったが、心のなかでは責めた。

すると彼女は、彼には俗悪に思われ口にするのも恥ずかしかった愛の誓いをむさぼるようにのみこみ、少しずつ落ち着いていった。

(5章 33節。*下線は佐藤)

アンナは、手袋をはめた手で、オペラのプログラムを受けとる。このことは、手袋（アンナのコンプレックス）が、危険な「つくりもの」の愛と結びついたことを表すだろう。

「オペラのプログラム」とは何か。オペラは、多くの場合、男女の純粋な美しい愛を歌い上げる。アンナが劇場で見たオペラは、草稿では、ヴェルディの『アイーダ』(20, 450)。愛のために王位も、生命さえも捨てる男女（エジプトの将軍、ラダメスとエチオピアの王女、

アイダ)の物語だ。

注意しなくてはならないのは、トルストイはオペラが嫌いで、オペラに対して偏見とも見える考えをもっていたことである。トルストイの作品においては、オペラはしばしば、つくりもの、人為性、虚構のシンボルである。要するに、本物ではなく、まがいものの象徴だ。

『戦争と平和』に、ナターシャが、オペラを見た後で、蕩児アナトーリに誘惑される場面がある。ナターシャは、最初は、わざとらしいつくりものと思って、しらけた気分で見物していたが、だんだんその世界のなかにとりこまれ、変な気分になってくる。そして、美男子というよりほか何のとりえもない(とピエールが言っている)アナトーリに誘惑されてしまうのだ。危険な、つくりものの、愛の夢。

アンナは、アイダとラダメスのような恋人を、自分たちに重ね合わせたのである。自分たちがああいうカップルだと信じこもうとしている。たとえ、彼らのように悲劇に見舞われようと、愛だけはまっとうできると。

こうして、新しい幻想が始まる。幻想は、現れるたびに、どんどん現実から乖離していく。この新たな夢は、それまでの幻想と同じく、やがて悪夢に変わるであろう。アンナのコンプレックスと、ヴロンスキーの社交界への執着とが、おのれを思い知らせるだろう。

「私に、まるで魔法のようなことが起こったの。夢を見ていると、それが突然恐ろしいものになって、突然、目が覚める。そして、これらすべての恐ろしいことは存在しない。そんなふうに私は目が覚めたの。私は苦しい、恐ろしい体験を味わったけど、それはもうずっと前のこと。とくにここ(*ヴロンスキーの領地、ヴォズドヴィージェンスコエ村——佐藤)にやって来てからは、すごく幸せなの!...」(6章18節)

「私に、まるで魔法のようなことが起こったの。夢を見ていると、それが突然恐ろしいものになって、目が覚める——そんなことがあるでしょう。私もそうだったの。でも、もしかすると、これもまた夢かもしれないけれど」(草稿(20,474))⁶²²

このように、アンナがヴロンスキーを真剣に愛そうとすればするほど、彼女の愛は、現実から遊離して空転し、傲慢な要求がましいものになっていく。みずからは何もなさず、もっぱら人に頼り切りの生活環境に浸かっていると、社会・歴史から切り離されていく。それだけでなく、個人的な人間関係においても、他者から切り離され、自己回転するようになる。人間関係も、愛もおかしくなっていく——アンナとヴロンスキーの生活は、そのことを如実に見せる。

⁶²² ここでは、草稿でのアンナのほうが、決定稿での彼女よりも、自分の状態についてより深く自覚している。アンナの意識は、決定稿では、しばしば草稿よりも「引き下げられる」ことがある。この点を記憶されたい。

生活が、不自然で利己的なものであるならば、愛もまた、不自然で利己的なものになる。ドストエフスキーの言葉をかりれば、「虚偽の循環にまきこまれた人たちは犯罪をおかして、否応なしに破滅の道をたどる」。そして、現代人がいかにうぬぼれようが、これに対する処方箋など存在しない、と彼は断ずる⁶²³。

だが…アンナとヴロンスキーの愛が、「不自然で利己的」になるのはともかく、あれほどの悲劇に遭う必然性は、はたしてあったのだろうか？… 「不自然で利己的」な連中は、ふたりの周辺にも掃いて棄てるほどいるのではないか。6章での多くの点で満ち足りた生活から鉄道自殺にまでいたる必然性とはなにか？ まずは、6章のふたりの暮らしぶりからみていこう。ここに、アンナの性と自己実現の問題を解く三つ目の、最後の鍵があるのだが、それは、ある「どんでん返し」を、アンナ像にもたらすのだ…。

9. 「イギリスの小説」風的生活——夢の実現？

6章17節-25節に、ヴロンスキーの領地、ヴォズドヴィージェンスコエ村での、アンナとヴロンスキーの生活が描かれている。

ふたりは、多くの点で、「イギリスの小説」を思わせる生活をしている。一見すると、夢の実現だ。

生活は、これ以上望みようがないくらいに見えた。物質的に何不自由なく、健康で、子どももおり、ふたりともそれぞれ仕事をもっていた。(6章25節)

アンナは、息子を置いて夫の家を出て、ヴロンスキーのもとに走り、また社交界からも離れてしまった。彼女は、ヴロンスキーと公然と関係をむすび、しかも、夫と離婚して法的なかたちを整えることもしなかったために、社交界から閉めだされたのだ(隠れてロマンスを楽しむ分にはかまわなかったのだが、社交界の暗黙のルールを破ったわけである)。そして、ヴロンスキーの領地の田舎で、彼とふたりきりで暮らしはじめる。アンナの叔母、ワルワラ公爵令嬢が居候をしているほかは、たまにお客が来るだけ。もちろん、使用人、召使いはたくさんいる。

アンナとヴロンスキーはどのような生活をしているのか、具体的に見てみよう。ふたりの暮らしは、アンナの兄嫁、ドリーの目を通して描かれている。アンナは、何かをなしとげたのか。何を実現しえたのか。

⁶²³ 『作家の日記』1877年7・8月号、2章3節「特殊な意味をもつものとしての『アンナ・カレーニナ』」。以下に収録。

ドストエフスキー『作家の日記』5(小沼文彦訳)、ちくま学芸文庫、91-102頁。

ちなみに、ドストエフスキーに言わせれば、レーヴィンの「解決」も、そうした独りよがりな「処方箋」のうちのひとつにすぎない。

まずドリーが驚くのは、ふたりの異常にぜいたくな暮らしぶりだ。ドリーが最初に通された部屋は、アンナは良くないと言うけれども、「外国の最高級のホテルのように豪華」（6章18節）。ドリーにあてがわれた部屋は、「彼女がイギリスの小説でしか読んだことのないような新式のヨーロッパ式ぜいたくの印象を与えた」（6章19節）。しかも、アンナは、一日に三回、とても高価な服に着替える。

また、アンナは、子ども（ヴロンスキーとのあいだに生まれた女の子、アニー）には、あまり関心がなく、育児を乳母、召使いたちにまかせきりにしているようだ。

ドリーは、いくつかの会話を聞いただけですぐに、アンナと乳母と保母と赤ん坊との間がじっくりいっておらず、母親の訪れることがめったにないことを悟った。アンナは、娘におもちゃをやろうとして、みつけることができなかった。

なによりびっくりしたのは、歯が何本かという質問にアンナがまちがえて答え、最近生えた二本の歯をまったく知らなかったことであった。

「私がここでは余計者のようなのが、ときどきつらくなるわ」（6章19節）

ヴロンスキーとアンナがとくに精力と金をつぎこんでいるのは、病院、その他の建築である。ふたりは早春にここへやって来てから、7月までの間に「小さな町」ほどの建物を建てたり補修したりしている。使用人の住居、工場、厩舎などだ（6章18節）。

ふたりがとりわけ夢中なのは、病院の建設である。「病院の建設も、アンナの興味を引いた。彼女は、たんに手伝っただけでなく、自分でも、多くのことを整えたり考えだしたりした」（6章25節）。

アンナによると、「病院は、彼がここに残す記念碑」である（6章20節）。この病院の建設には10万ルーブル以上かかるだろう、と彼女は言っているから、病院建設費だけで、ヴロンスキーの全年収に匹敵する。他の膨大な建築・補修の費用をあわせると、三、四ヶ月で、年収の何倍もの金が費やされたことになる。

病院を建てることを考えついたのは、ヴロンスキーよりもむしろアンナだろう。というのは、「イギリスの小説」が出てくる場面に、「アンナは、小説のヒロインが病人の看護をしているところを読むと、自分も足音をしのばせて病室を歩きたくなった」（1章29節）という箇所があるからである。病人を看護するイメージが、「生きたい」という欲求と結びついて、アンナの心のなかにずっとあったのではないか。しかも、アンナとヴロンスキーは、自分たちの病院のために、「必要な物を廊下づたいに運ぶ、すこしも音を立てない手押し輪車（複数）」をわざわざ取りよせている（6章20節）。

しかし、病院建設には、金の使い方のすさまじさに加え、いろいろと変なところが見受けられる。病院のとなりに、医者住居兼薬局を建てているが、ヴロンスキーが「設計図なしに建てはじめた」ため、破風が低くなってしまった。また、病院の内部には、手当たり次第に最新設備がもちこまれているにもかかわらず（新式の換気装置、大理石の浴槽、驚くべ

きスプリングのついたベッド、新式の暖炉、音を立てない手押し輪車、車椅子)、農村ではとても必要な産科と伝染病科がない。

「あなたのところには産科はないんですの?」。ドリーは尋ねた。「村ではとても必要ですのに。私はしょっちゅう...」

ヴロンスキーは、礼儀正しさが持ち前なのに、彼女をさえぎった。

「これは、産院ではなく、病院です。そして、伝染病以外のすべての病気に対応しています」(6章20節)。

そんな病院が農村で何の役に立つか、という作者の皮肉が透けて見えるが、この場面の前に、レーヴィンの、病院についての見解が語られているため、ふたりの病院建築のエピソードは、よけい辛辣なトーンを帯びる(3章3節)。

少しばかり病院を建てても、広大な農村(レーヴィンの住む郡は、4千平方キロメートル以上ある)のすみずみまで医療救助の手を差しのべることはできない。しかも、春は、雪解け水で道路が水浸しになり病人を運ぶのがむずかしく、冬は、雪嵐になることもままある。また、農繁期は、病人の輸送に手を割いたり馬車をあてがったりする余裕はない。さらに、そもそも医学自体に、どれだけ人間を救う力があるか疑問だ、というのがレーヴィンの意見だ。

ヴロンスキーが産科を除外した理由は、アンナの出産のつらい思い出と、ヴロンスキーが法律上自分の子どもをもてないことだろう。アンナが夫カレーニンと離婚していないため、アンナとヴロンスキーの子どもは、法律上、カレーニン家の子となるのである。

いずれにせよ、アンナとヴロンスキーは、病院を建てるに際し、だれのために、何のために建てるのかをあまり考えていない。草稿では、この病院は、「中世の城」の外観をもっていた(20,486)。作者はさすがに、これはやりすぎだと思っただけで、最終稿では削除したが、彼の言いたいことはよく分かる。ふたりの病院は、壮大なひまつぶし、自己満足にすぎないということだ⁶²⁴。

家事はどうかというと、支配人、召使いらがやる。しかも、その一部は、することがなくて退屈しているヴロンスキーが手をだす(豪華な晚餐の手配など)。

⁶²⁴ 『アンナ・カレーニナ』の舞台となった1870年代は、ナロードニキ運動が展開した時期だった。地主貴族のあいだでも、病院や学校を建てるのが一種の流行になった。チャーホフ『イオーヌイチ』では、地主貴族夫人がひまつぶしに小説を書いているが、その内容は、若く美しい伯爵夫人が、自分の田舎の領地に学校、病院、図書館を建て、放浪画家に恋する、というものだ(放浪画家とは、イワン・クラムスコイらの「移動展派」を念頭においているだろう。「移動展派」は、絵画におけるナロードニキ運動といえる)。

ヴロンスキーは、知人の地主から、なぜあなたは、病院は建てるのに学校を建設しないのか、と聞かれて、「学校は月並みになってしまいましたからね」と答える。彼の病院建設もまた、こうした流行に乗ったものなのである。

アンナも、スヴィヤジスキーも、公爵令嬢も、ヴェスロフスキーも、自分たちのために用意されたものを享受するという点で、等しくお客さまだった。

アンナが主婦であったのは、一座の会話をうまく進めていく点だけだった。(6章 22節)

つまり、アンナがやらねばならぬこと、本当にしたいと思う仕事はなかった。仕事の面では、何もしないとげることができなかった。それでいきおい、極端なぜいたくとひまつぶしで、日々が流れていく(建築以外では、乗馬、川でのボート遊び、テニスなど)。「イギリスの小説」の内容は、かたちの上でだけ実現したにすぎなかった⁶²⁵。

アンナは、他者に全面的に依存し、実質的になにもしない。その意味で、純粋な寄食者の生活だ。表面は華やかだが、浅薄な人間関係。要するに、かつてのアンナの家庭および社交界での生活が、もっとむきだしのかたちで、グロテスクに再現した——このように、アンナの生活は、徹底的にネガティブに、不毛なものとして描かれている。

ここで、ヴォズドヴィージェンスコエ (Воздвиженское) というふたりが暮す領地の名について述べておこう。この名は、アンナとヴロンスキーにとって、実に皮肉な命名なのだ(悪意にみちた、というべきか)。

ヴォズドヴィージェンスコエの語源は、ヴォズドヴィージェニエ (Воздвижение)、すなわちロシア正教の十字架挙栄祭(カトリック教会の十字架称賛祝日に相当)である。ヴォズドヴィージェニエのもともとの意味は、高く掲げること、建立すること。

言い伝えによると、326年、コンスタンティン(コンスタンティヌス)帝の母、エレーナは、キリストが磔にかけられた十字架を発見するため、エルサレムにおもむいた。長い探索のあとで、ヴィーナスの神殿の下から、キリストの十字架が他の二本の十字架とともに発見された。どれがキリストのものか確かめるため、三本の十字架を順番に死者に近づけたところ、そのうちの一本によって、死者がよみがえった。

キリストの十字架をまつため、エルサレムに教会が新たに建立され、335年9月14日に、教会の成聖式が執り行われた。十字架を見に、いたるところから信者が集まった。総主教マカリイは、できるだけ多くの信者に見えるようにと、十字架を「高く掲げた」。これが、毎年9月14日(旧暦)に祝われる十字架挙栄祭の起源である⁶²⁶。

人はだれしも、自分の十字架を与えられ、あるいはそれを発見して、担っていかなくてはならない。しかし、アンナとヴロンスキーは、十字架を見つけることができず、不毛な生活

⁶²⁵ 「イギリスの小説」とアンナの生活との共通点をもうひとつ挙げておこう。小説のヒロイン、メリーは、「馬で家畜の群を追い、皆をその大胆さで驚かす」(1章 29節)。アンナも、乗馬を趣味にして、みごとに馬を乗りこなす。そして、彼女をおとずれたドリー(アンナの兄オブロンスキーの妻)を、「乗馬すがたで驚かす」(6章 17節)

⁶²⁶ «Христианство»: энциклопедический словарь: в 3 т. М.: Большая энциклопедия, 1993. Т.1, С.370-371. Статья о воздвижении креста господня.

を送っている。彼らの十字架は、歡樂の館（ヴィーナスの神殿）の下にむなしく埋もれている。ふたりは、十字架を掲げるのではなく、無用な建物をむやみと「建立」しているにすぎない。これに対して、コンスタンティン・レーヴィンは、十字架を見いだすことができた——というわけだ。

アンナのイメージを否定的にする象徴は、これだけではない。アンナが、大地、地面を歩く場面は、この長大なロマンのなかでただの一カ所もない（ヴォズドヴィージェンスコエ村を訪れたドリーをみて、アンナが馬から飛び降り、駆け寄る場面をのぞけば。彼女が歩くのは、建物のなか、駅のプラットフォームなど、人工的空間にかぎられる）。唯一の例外は、ヴォズドヴィージェンスコエ村の邸宅の庭園（イギリス式の、やはり人工的空間）を散歩する場面だけだ（6章20節）。このことは、彼女の生活の不毛性を、サブリミナル効果で印象づけることをねらったものだろう。彼女は、大地から乖離した根無し草だ、と作者は言いたいのである。

アンナ自身の描写には、赤と黒以外の色は、ほとんど用いられない（白が若干用いられるのみ）。赤と黒は、ロシアでは、葬式の色だ。葬式の式場は、赤と黒の二色で統一される。またヨーロッパ全域で、赤と黒は、サタンの色で、赤は炎、黒は冥界（闇）を表す。

この二色が現れるのは——彼女のいたるところでカールした、こわい黒髪、赤い唇、黒いドレス、彼女の眼の「暗い夜の火事の恐ろしい輝き」（2章9節）、アンナの死の場面の、闇のなかに燃えるろうそくの炎など。白は、アンナの白い肌、彼女がクラスノエ・セローでの競馬の日に別荘で着ていた白い服など、比較的わずかなケースしかない。

アンナの描写においてどんな色が使われているか、統計をとった研究がある。それによると、赤い色を現す言葉が34語、黒が20語、白が16語である⁶²⁷。

このように、作者は、周到に、アンナのイメージを暗くしている。レーヴィンをきわめて好意的に描いているのにくらべると、不公平な印象を受ける。後で述べるように、作者は、アンナを残酷に破滅させるために、かなり無理な力を加えているのである。

10. 自己実現と性の帰結

ふたりの関係、性について言えば、アンナは、「ヴロンスキーの愛情が冷めたらどうしよう」（6章32節）、という恐怖に絶えずさいなまれている。愛情が冷めだしているという感触と、そのために感じる恐怖は、ますます強まる一方だ。それで、ヴロンスキーを自分にひきつけておくことが、「アンナの生活における唯一の目的」となる。

なんとといっても、アンナがいちばん気をつかったのは、ほかならぬ自分自身のことで

⁶²⁷ Голушкова Е.А., Лебедева И.В. Роль цветописи в создании образов романа Л.Н.Толстого «Анна Каренина» // Проблемы функционирования языка и специфики речевых разновидностей: Межвуз. сб. науч. тр. Пермь, 1985. С.141-148.

あった。つまり、自分はどの程度、ヴロンスキーにとって大事な存在であるか、自分はどれだけ、彼が捨てたもののすべてを埋め合わせることができるか、という意味での自分自身のことだった。彼の気に入るだけでなく、彼の役に立ちたいという欲求は、彼女の生活における唯一の目的となった。ヴロンスキーは、そのことをありがたいとは思っていたが、と同時に、彼女が自分を縛ろうとする「愛の網」⁶²⁸を重荷に感じるようになった。(6章25節)

ヴロンスキーを放さないために、アンナは具体的に何をしたのだろうか。

前に見た、病院などの建設をのぞくと、アンナは、「性」と「読書」にエネルギーを集中する。

アンナは、ヴロンスキーに秘密で、いつも避妊している。彼は子どもを欲しがっているが、彼女はもう産まないことに決めている。

「私には、選択は二つしかないの。妊娠する、つまり病人になってしまうか、それとも自分の夫の——やっぱり夫よね——ガールフレンド、仲間であるか」わざと浮ついた軽薄な調子でアンナは言った。<...> 「私は、妻じゃないのよ。あの人が私を愛してくれるのは、愛情がある間だけだわ。それなら、私はどうやってあの人の愛情をつなぎとめていったらいいの？これで？」彼女は、お腹の前に白い両手を伸ばした。(6章23節)

そして、アンナは、「客が来ないときでも、同じように化粧に念を入れ」(6章25節)、「愛情と魅力で、彼をひきつける」(6章32節) ことに必死である。

性は、本来の目的を喪失して、ヴロンスキーを自分に引きつけておくための純粋な手段になってしまう。そのために、ふたりが満たされていたはずのセックスの魅力まで損なわれていく。

彼女は、彼の顔から目をはなさず、両手で彼の手をとり、自分の腰の方へ引きよせた。

「そりゃ、よかったね」と彼は言い、彼女を、髪のかたちから服まで、じろりと冷ややかにながめまわした。彼は、彼女が彼のためとくべつに着替えたことを知っていた。

それらはみな彼の気に入ったが、それにしても何度おなじことがくりかえされたことであろう！(6章32節)

アンナの読書への熱中のしかたも、すさまじい。

⁶²⁸ これは、鍛冶神ヘーパイストスが、妻アプロディーテーと軍神アレースの密通の現場を押えるのに使った、特製の「網」を連想させる。ここにも鍛冶屋のシンボルとの接点があるわけだ。しかも、アレースとヴロンスキーは、イメージ的に共通する面がある。いずれも軍人で美男で逞しい。

アンナは、大いに本を読んだ——小説でも、硬い本でも、流行しているものなら何でも。彼女は、自分が購読している外国の新聞・雑誌の書評欄で褒められているものは、片っ端からとりよせ、孤独な生活をしているときにしかありえないような注意深さで、読破していった。そればかりか、ヴロンスキーが興味をもっていることがらはすべて、本と専門雑誌で研究していたので、彼はしばしば、農業、建築についてだけでなく、ときには馬匹飼育とスポーツに関する事まで、いきなり彼女に尋ねた。彼は、彼女の知識と記憶力に驚き、はじめのうちは半信半疑で、証拠を見たがった。すると、彼女は、彼に尋ねられたことを本のなかに見つけ、彼に示すのであった。(6章 25 節)

「君が退屈しないといいけどね？」

「そうね」彼女は言った。「きのうゴーチェ⁶²⁹から本が一箱届いたから、たぶん、退屈しないわ」(6章 25 節)

こうして、アンナは、「本とペーパー・ナイフ」に回帰してしまう。いまや、アンナの生と性のすべてが、ヴロンスキーをつかまえて放さないための手段と化してしまった。アンナの生は、「生の反映」にもどったのである。彼女の生は、「本の箱」のなかの生になる——一見、そのように描かれている。だが、はたして本当にそうだったのだろうか。

11. アンナ像の逆転

アンナの自己実現を求めての戦いは、敗北に終わった。「生の反映」のなかに生きているものは、そこから逃れられない。生活を根本的に変革しないかぎりには、中途半端にそこから抜けだしても、かならず、そこへ引き戻されてしまう。アンナの道程は、「イギリスの小説」とペーパー・ナイフから始まって、「本の箱」に終わる。そうならざるをえない。これが、アンナという形象がになうイデーである。

しかし、アンナは、こうした自分の問題点について、まったく無自覚のままだったのだろうか。否。実は、アンナは、それを完全に認識していたのだ。

「私の愛は、たえず、要求がましくわがままになっていく。だから彼の愛は、だんだん消えていく。そのせいで、私たちは、別れるんだわ」(7章 30 節)

アンナは、なぜ、あれほど読書にのめりこんだのか。あからさまには言及されていないが、

⁶²⁹ ゴーチェ (Готье) は、モスクワのクズネツキー・モスト (鍛冶橋の意) にあった書店。

何よりも自分の唯一最大の関心事について、答えを見いだすために決まっている。なぜ、わたしたちは、ちゃんと愛し合うことができないのか、なぜわたしは、本当に生きるために真剣に努力したのに、何もなしとげることができなかったのか——その解答を必死に本のなかで探したのだ（アンナが読んだ本の作者のうち名前が挙がっているのは、フランスの批評家、イッポリート・テーヌ〈6章32節〉と、ゾラ、ドーデである〈7章10節〉）。レーヴィンが、第8章で、自分の根本的疑問をひっさげて必死に読書したのとまったくおなじ意味合いの行為である。そして、本のなかに、結局のところ、答がみつからなかったのもおなじだ。草稿でそのあたりの記述を見てみると——

アンナは、客が来ないときでも、同じように化粧に念を入れ、客の代わりに読書に精力を向けた。ただ、以前のように小説ではなく、いわゆる硬い本——トクヴィル、カーライル（*イギリスの歴史家トーマス・カーライル——佐藤）、ルイス（*イギリスの哲学者ジョージ・ヘンリー・ルイス George Henry Lewes——佐藤）、テーヌなどの、流行している真面目な書物——を読んだのである。彼女はこれらの本を読破し、完全に理解したが、こうした書物を読んだ後にたいいて残る、興奮した気持ちと、なにか満たされない感じとを覚えた。⁶³⁰

こうして、前節で見たアンナの病院建設が、別の意味をおびてくるのである。病院建設は、一見たんなるひまつぶしの印象を与えるが、実は、実践の一環だったのである。「生の反映」、「本の箱」のなかに座して破局を待っているわけにはいかない。無為徒食から生活の変革に、思弁から実践に、踏みださざるをえない。

彼女は、ヴロンスキーの田舎の領地で、学校で授業をしたり、子供のための小説を書いたり、イギリス人調教師一家を物心両面で親身に世話したりしている。これらはいずれも、ヴロンスキーとの愛のために、彼女の自己実現のために生活を変えようとする真剣な試みだったのだ。

そしてアンナは、ヴロンスキーという、社交界の外では生きることができぬ「根なし草」にも、なんとか根っこを生やしてやろうと足掻いたにちがいない。なぜなら、彼という人間が変わらなければ、アンナがいかに自己認識を深めようと、自分の生活を改めようと、しょせんむだだからだ。彼はいずれアンナを捨てて社交界へ帰る。そして彼女は、彼なしでは生きられない。だからこそ、彼の農業経営その他の仕事をできるだけ助けたのである。決して、彼に気に入られることだけを目当てにしたのではない。アンナは、ヴロンスキーとのゆがんだ生活を正し、ゆがんだ愛を正そうとしたのだ。

草稿では、そのことがより鮮明に描かれている。アンナがレーヴィンと出会う唯一の場面

⁶³⁰ 『アンナ・カレーニナ』草稿（20, 487）。

である。

アンナとレーヴィンは、いよいよおたがいのことを深く理解していった。話は、民衆のための本のことになった。レーヴィンは、民衆はわれわれの書いている本を理解できない、と言った。アンナが、自分と民衆とのあいだに乗り越えられない壁を感じて、学校に打ちこむことができなかった、と言うと、レーヴィンは、自分もそうだ、と白状した。

「ほら、ごらんなさい。もし、あなたが——わたしは、あなたのことを何でも存じますけど——これだけ民衆に近いところにいらっしゃるあなたが、そうした壁をお感じになるのなら、都会の人間は、ましてや女は、どうしようがあるでしょう。自分をあざむいてはいけませんわ」(20, 505)

彼女は、建築と病院の整備に強い興味を感じたので、たんに手助けしただけでなく、ほとんどすべてを自分一人で整えた。また女学校も、彼女の興味を引いた。彼女は、自分で授業をした。一時期、彼女は、庭園にも、つまり公園 (парк) を庭園 (сад) につくりかえることにも夢中になった。彼女が手を出すものはなんでもうまくいくのであった。しかし、それらはみな、長続きしなかった。(20, 487)

要するに、アンナは、無為な生活におぼれて、退屈しのぎに病院を建てたり、小説を書いたりしていたのではない。彼女は、そうした生活の恐ろしさを自覚し、そこから抜けだそうと必死で努力していた——たとえ、結果的に、抜けだせなかったとしても。

ここで根本的な疑問がわいてくる。本当のところ、アンナとレーヴィンとの間にどれほどの隔たりがあったのか、ということである。はたしてアンナは、レーヴィンにくらべて、生活を変革しなかったと言えるだろうか。彼女は、とにかく、享受していた生活のかなりの部分を——家庭、社交界における地位、名誉、権力を——捨てたのである。

しかし、レーヴィンはといえば、大地主でありつづけ、ポクロフスコエ村の屋敷も財産も貴族の身分も、放り出すことなど考えていない。ときたま、「地主が 5000 ルーブル稼ぐのに、百姓は 50 ルーブルしか稼げない」不正が脳裏を横切るていどだ (6章 11 節)。ここには、トルストイが中途半端な「農奴解放」しかできなかったことへの自己弁護があるだろう。

さらに、思想的にも、アンナがレーヴィンに劣っていたとは思えない。レーヴィンを救った思想の根本は、あらゆる人間のうちには、善 (добро) があり、それにしたがって生きること、人々はおたがいに結びつくことができ、幸福になれる、ということに尽きる。それと同じことを、アンナも、ヴロンスキーの女兒を出産して危篤に陥ったときに、理屈ではなく全身で悟ったはずだ——おそらく、レーヴィンよりはるかに深く。

「わたしのなかには、別の女がいるの。わたしはその女が怖い——その女が、あの人を好きになったのよ。それで、わたしはあなたを憎もうとしたのだけれど、以前の自分を忘れることはできなかった。あの女はわたしではなかったの。でも、いまではわたしは、ほんとうの自分になった、ひとつになった。わたしはもう死ぬわ<...>。わたしに必要なのはひとつだけ——。どうかわたしを許して、すっかり許して！<...> いいえ、あなたは許せないわね。こんなことが許せないのはわかっているの！いえ、いえ、出て行って、あなたはあまりにも善良すぎるわ！」<...> カレーニンは、ひざまずき、頭を、アンナの腕の関節に押しつけた——それは彼を、ブラウスを通して炎のように焼いた——そして彼は、子どものように泣いた。(4章17節)

しかし、「善にしたがって生きる」ことは、すなわち、不条理な現実のなかで善を見分けることは、困難をきわめる。良心はたしかに存在するが、その声を聞き分けるのは至難である。これこそが、若きトルストイがカフカスでぶつかった壁ではなかったか。レーヴィンの結論は、良心の存在を認めたにすぎない⁶³¹。

ここで、カフカス後のトルストイの歩みを思い出していただきたいのだが、最大の問題は、「トルストイ的美女」とヤースナヤ・ポリャーナの小宇宙への執着だった。ところが、レーヴィンの場合、さっきみたように、ヤースナヤのほうは初めから棚上げになっているし、エロスの問題も素通りしてしまう。もしも、レーヴィンがアンナに会って惚れ込み、不倫に走る展開にでもなれば話はべつだったが（実際、「これこそ女だ！」と賛嘆し、惚れ込みかかる(7章10節)）。

もともとレーヴィンという人物は、トルストイが自分のことを三人称で書いたルポといった筋合いのものだから、本来そうなって然るべきだったのだ。そして、「ああ、もしおれが、アンナの愛撫だけを熱烈に欲する間男以外の何者かになれたなら！」と呻いて鉄道自殺しても、ぜんぜんおかしくはなかったのである…。

まあ、いろいろな理由から、そうは書けなかったのだが、課題はそのまま手付かずで残った。レーヴィン・ラインの説得力の薄さは、まさしくこのためである。

⁶³¹ レーヴィンの「悟り」の意義がいろんな象徴で補強されている。悟ったのは、暗い小屋の中だ。ぼろを着た、縮れたあごひげをもつ百姓フォードルが、機械（脱穀機）を相手に、屈んで働いている。あきらかにこれは、鉄道で働く「ひげもじゃの小さな男」をなぞっている。その百姓が「プラトンは、魂のために生きている。神のことをいつも考えている」と、レーヴィンに啓示を与えるのだ（8章11節）。暗闇のなかでプラトンが啓示を与えるというのは、これまたあきらかに『戦争と平和』を踏襲している（ピエールは、バラックの暗闇のなかでプラトン・カラターエフに会う）。

要するに作者は、いまや正しい道に立ったレーヴィンには、鍛冶屋は善なる啓示をもたらす、と言いたいらしい。

この場面にかぎらず、第8章では多種多様な象徴が駆使されているのだが、アンナの場面のような強い印象は残さない。かんじんの中身が薄いからだ。

話をアンナにもどそう。なぜ、アンナは鉄道自殺までする破目になったのか。なぜアンナだけが?... ベティー・トヴェルスカーヤ公爵夫人やリーザ・メルカーロヴァは、それなりに社交界に、無為と飽食に適応しているではないか?⁶³² なぜ運命は、アンナにだけとくべつ残酷なのか?

もしも、アンナがカレーニンと離婚できていれば、娘のアニーを愛していたならば... (息子はあんなに熱愛していたのに、なぜかアニーには冷淡だ。それにしても、二人の子供の母親が、子供を置いて自殺するのは、やはり不自然ではあるまいか?)。

彼女がモルヒネと阿片の中毒であんなにヒステリックになっていなければ...

(自殺まぎわには、阿片を常用している——7章 26 節。半年前、つまり前年の秋には、まだモルヒネだったから、たいへんなエスカレートぶりだ。はたして、その必然性があるのか?...)。

これらいくつもの「もし...ならば」のうち、たった一つでも、逆の方向に展開していれば、自殺にまでは至らなかったかもしれない。

なるほど、ヴロンスキーという根なし草を人格改造するのはむりな話だから、アンナは幸福にはなれなかったかもしれないが、とくに、離婚できてさえいれば、社交界復帰が可能になり、ふたりともずっと楽になったはずなのだ。

なぜ、こういちいちアンナに不幸に展開するのか? いくら作品を読み返しても、納得のいく答えはみつからない。

しかも、4章でのアンナの出産後、カレーニンは離婚を承諾したというのに、彼女は拒絶してしまった! これはもうまったく不可解だ。

アンナが離婚を蹴った理由は「わたしはあの人の寛大さを受け入れられない」(4章 21 節)。いくら彼女のプライドが高いからといって、こうも意地を張るものだろうか? しかも、カレーニンは、まだ「心が和らいだ状態」にあって、誠意をつくしている。彼女はヴロンスキ

⁶³² ドリーとキティーについても、ここで触れておこう。

ドリーは、レーヴィンいわく「ひよこを可愛がるめん鳥」として、「主婦の理想像」のように描かれているようだ。だが、これは、夫オヴロンスキーが家庭をかえりみず、あらゆる家事が彼女にのしかかり、そのなかで、いってみれば、エロスがすり減ってしまったからでもある。エロスは自動消滅したのである。

かつては魅力的だったドリーは、「小さな、やせこけた、みじめな肉体」のもちぬしとなり、もっぱら育児に生きがいを見出すように強いられた。だから、彼女がエロスを「克服」して「めん鳥」になったのは、なりゆきの産物だという面もある。

一方のキティーという女性像は、どうも中途半端な印象を与える。可愛い「お人形」に、怒ると手がぶるぶる震えるなど、ソフィア夫人のディテールをいくつかくっつけた、としか筆者には思えない。2001年ごろ、故リディア・オプリスカヤ氏に、私的な会話でそう言ったら、「私もそんな気がするなあ」とおっしゃっていた。いずれにせよ、この女性像には、作者に切実な問題はもちこまれておらず、したがって、深い根はもっていないようだ。

なるほど、キティーの出産や、彼女がみとるレーヴィンの兄、ニコライの死などは、全作品でも屈指の場面ではある。だが、出産と死は、普遍的な問題であり、キティーという具体的な女性像と不可分というものではない。

一に、「夫が息子セリョージャのことをどう決めるか分からないのが気がかりだ」と言っているが（4章23節）、カレーニンは、これに先立って、オブロンスキーに対して、息子も渡すと言いつけているのだ（4章22節）。矛盾！ にもかかわらずアンナは、一ヵ月後に、離婚しな
いまま、息子を家に置いて、イタリア行き！ 考えられない！

産褥熱で寝ていたあいだに（一ヶ月以上もある）、冷静に考える時間はいくらでもあったから、ヒステリックな決断というわけでもない…。要するに、作者は、作品を破綻させてでも、アンナを離婚させるわけにはいかなかった、としか考えられないのだ。なんのために？ もちろん、アンナを鉄道自殺させるためだ。女性性の矛盾を証明しただけでは、トルストイには十分でなかった。アンナの肉体を両断することがどうしても必要だったのだ！…

アンナが宿命的に永遠にヴロンスキーという根なし草に惚れ込まれたことで、彼女の理不尽な運命はきわまった。トルストイという地主貴族が「トルストイ的美女」に宿命的に惚れ込んだことで、彼の理不尽な運命はきわまった。その運命をはね返すために、アンナの肉体そのものを破壊し葬ることが、彼にはどうしても必要であった。

こうして、アンナの鉄道自殺が定まったのである…。

なにか巨大な、無慈悲なものが、アンナの頭を押さえつけ、背中をつかんでひきずった。<…> そして、彼女が戦慄と虚偽と悲しみと悪とにみちた書物を読んできたろうそくが、かつてなく明るく燃え上がり、以前は闇のなかに隠れていた一切のことを彼女に照らし出してみせたと思うと、ぱちぱちとはぜて明滅しはじめ、そして永遠に消えてしまった。

このように作者は、作品を敢えて破綻させてまで、無理やりアンナを破滅させた。その彼女は、せめてものことに、死に際して、あるいは死後になんらかの救いを得ることはできたのだろうか？ 「闇のなかに隠れていた一切のこと」のなかに、悲劇の謎への答えを見出せたのだろうか？ 「ブラックホールとしての世界」の彼方に「光」はあったのだろうか？…

どうも疑問だ。やはり、「黒い穴」の彼方で照らし出されたのは、それを操る、あの「男」なのではあるまいか。この最期の場面の示唆するところからしても、そう思われる。生は暗く、死はなお暗い——。とすると、作者は最高のヒロインに救いのない生と死を与えたのである。

ちなみに、ザイデンシヌールが編集した第1完成稿（Первая законченная редакция）では、死の場面はこうなっていた。

彼女は十字を切り、頭を屈め、膝をついて、レールを横切って倒れこんだ。彼女が不安と幸せと悲しみに満ちた本を読んできたろうそくが、ぱちぱちとはぜて、くすみ、暗くなり出したかと思うと、ぱっと燃え上がったが、また暗くなり、消えてしまった。

Она перекрестилась, нагнулась, и упала на колени и поперёк рельсов. Свеча, при которой она читала книгу, исполненную тревог, счастья, горя, свеча затрещала, стемнела, стала меркнуть, вспыхнула, но темно, и потухла.⁶³³

当初は、「なにか巨大な、無慈悲なもの」などなかったし、ろうそくも「永遠に」消えたわけではなかった。そして、彼女が読んできたのは、「不安と幸せと悲しみに満ちた本」にすぎなかった。それが、最終稿では「戦慄と虚偽と悲しみと悪とにみちた書物」と、ネガティブ一色に変わっている！⁶³⁴ 執筆の過程でも、作者がアンナの生涯を——そして世界そのものを——否定的な方向に引っぱったことがうかがわれるのだ⁶³⁵。

しかし、これは翻ってみれば、アンナが——トルストイのうちなる女性像が——、いかにトルストイに抵抗し戦い抜いたかということでもある。ヴロンスキーとの愛を貫くために、家も名も、出産に際しての啓示も、死後の救いさえも捨てた。レーヴィンの中途半端な思想と生活など問題外だった。アンナの、一種独特の研ぎ澄まされ張りつめた美は、ここに由来する。

自分を貫きそれに殉じた鮮烈なヒロイン像の前では、作者があれだけ持ち上げた良妻賢母ドリーは、自分の問題から目をそらして現実と妥協した弱者に見えてきたりする。作者自身がそう感じていたのではあるまいか。

こうして、トルストイは、生活・思想上のゆきづまりを打開するため、『アンナ・カレニ

⁶³³ Первая законченная редакция «Анны Карениной» // Толстой Л.Н. Анна Каренина: Роман в восьми частях / АН СССР; Изд. подгот. В.А.Жданов и Э.Е.Зайденшнур. М., 1970. С.799.

⁶³⁴ 現在編纂中のトルストイ新全集（100巻）では、『アンナ・カレニナ』については、世界文学研究所のインナ・プトゥーシュキナ氏のグループが校訂作業を進めている。その氏によれば、アンナが自殺する場面には、7つの異稿があるという。校訂の過程で、作者のイデーの変化がより鮮明に浮かび上がることを期待したい。

Пушкина И.Г. Финал романа Л. Н. Толстого «Анна Каренина» в редакциях и вариантах // Текстологический семинар (19-21 июня 2009 года, музей-усадьба "Ясная Поляна").

⁶³⁵ 保守派の思想家、**コンスタンチン・レオンチェフ**は、「ろうそくが永遠に消えてしまった」という表現に憤慨している。「死後にもっと暗くなり、なにも見えぬ」などということは、魂が不死である可能性を認める人間には、とうてい考えられぬと言うのだ。不滅の魂が憩うべき彼岸が、生より暗いとは言語道断である、と。

「二つに一つである。不死というものがないなら、一切は闇で『ニルヴァーナ』だ。あるいは、不死があるなら、魂は、自らを押しひしぐ地上の肉体の枷から解き放たれる。言い換えれば、より良くより明瞭に見、聞き、理解するようになる」

レオンチェフはこう前置きしたうえで、アンナの救いのない死と、トルストイの人生観に対し疑問を投げつける。

「それでなくとも、人生は『なにもかもが悪かった』のだ——これは自分の情欲で絶望に至ったアンナの意見であるのみならず、作者のあまりにも厳しすぎる意見でもある...それがいきなり、彼方でも、まったくの無であるか、生よりもはるかに暗いとは」

まことにもっともな意見である。レオンチェフはここで核心に迫っている。

Леонтьев К.Н. О романах гр.Л. Н. Толстого: АНАЛИЗ, СТИЛЬ И ВЕЯНИЕ (КРИТИЧЕСКИЙ этюд). М., 1911. С.65-67.

ナ』において、内なる理想の女性像を——すなわち、自分の魂の一部を——殺し、葬ったのだった。これは、心理的には危険な行為であるが、こうした犠牲がはらわれたがゆえに、この比類のない作品——「女性的なるもの」の美しい葬送の歌——が生まれたのだ。

おそらく、この歌は、アンナが見捨てたトルストイ主義よりも、長く残るだろう。文学のパラドクスである。

補説：カレーニンについて：トルストイのもうひとつの自画像

『アンナ・カレーニナ』には、おそらくはレーヴィンをしのぐ、もうひとつのトルストイの自画像がある。カレーニンである。

カレーニンの描写は圧巻だ。作者の描写は、容赦なく、ときに底意地が悪く、サディスティックでさえある。「寝取られ亭主」の苦悩を舌なめずりせんばかりに描くとは、奇妙なことではないか。

カレーニンはおそらく、トルストイの一側面なのである。重苦しく、女性にもてず、ごうまんな、しかし傷つきやすい「箱に入った男」。レーヴィンの存在もあって、読者はカレーニンがトルストイの分身だなどとはまず思わない。そこで、作者は安心して、マゾヒスティックなまでの自己解剖にふけることができる。

カレーニンには、トルストイの『トニオ・クレーゲル』、さらには『小フリーデマン氏』（トーマス・マン）といったところがある。カレーニンは、自分に向けた刃なのだ。カレーニンは、真の倫理性と純粹さを秘めている一方で、肉体的に弱者という引け目をもつ。その彼にとっては、アンナとヴロンスキーは、別人種である。「びんと張り切ったふくらはぎをもつ、いつも自信満々で、およそ疑うことを知らぬ人種」だ（5章24-25節）。

トルストイもまた、結局のところは、カレーニン側に属している。アンナ、マリアーナ（『コサック』）、ルカーシカ（同）は、向こう側にいるのだ。いかにトルストイが強壮な体力のもちぬしであれ、エロスから疎外されていると感じている以上、カレーニン側なのである。

向こう側にいる妻が、天真爛漫に不倫の恋に身を焦がすとき、カレーニンはひとりごつ。アンナの心中がどうなっているか、どんな欲望と感情をいだいているか、おれは、そんなことに興味をもつべきじゃない。それは、妻の良心の問題だから、宗教の縄張りなわけで、おれには関係ない。おれは、要するに、良心と神にしたがって生きていればいい。ただ、必要とあらば、彼女を指導するために、自分の影響力を行使するまでだ――。

トルストイもまた、アクシーニャやコサック、農民との、そして生の感情、欲望とのほんとうの対決をさけ、宗教、観念（自己犠牲のそれなど）に立てこもるところが、たしかにあった。「おれの才能は、羨望の念が化けたものにすぎない」

カレーニンの感情と思考は、生を避け自分を守るという目的に沿って、予めうまく配列される。感情と思考の動きが、いわば目的論的で功利的だ（カレーニンの感情音痴は、こういうところからくる）。いわば、自分のなかでかくれんぼをし、自分を納得させる。一見、モラルと論理で武装しているが、その実、ご都合主義的な感情と宗教的思弁。

ご都合主義的な神

これまで何度か指摘したように、『アンナ・カレーニナ』の終章（8章）のレーヴィンもそ

うだし、トルストイ自身にもこういうところがある。

『懺悔』の12章では、神の「再発見」が語られるのだが、その再発見たるや、なにものかを信じているときは——神の存在を感じているときは——自分は生命力に満ちる。しかし、理性で疑いだすと死んだようになる。そうだ！「神とは生にとってなくてはならぬあるものなのだ！」。生命を支えてくれるあるものなのだ！ 「この光はもはや私を見捨てることがなかった」——

こう作者は言うのだが、いったいこんな神や信仰があるものだろうか？ 三段論法的、功利的、いや、ご都合主義的な「神」。

『懺悔』では、最後にだめ押しとして、トルストイが見たという、夢が語られる。彼は、柱にとりつけられた紐一本で、身体を支えられている。上と下は深淵。このヒモが信仰なのだ、と言う。

これでは、シンボルどころか、あまりにも単純化されたアレゴリー、いや記号にすぎない。メレジコフスキーの『懺悔』批判の眼目も、まさにこの点にあった。彼は、トルストイの「信仰」には、機械的で功利的な思弁に墮しているところがある、と批判する。⁶³⁶

彼のいわゆる「キリスト教」は、生きた発見でも、彼が幼年時代に夢見たような自由な飛翔でもなかった。それは、たんなる、不動のバランスの「メカニズム」、つまり、なにか機械的で自動的で死んだ、それも自殺的で自己欺瞞的ななにものかであったのだ。

"христианство" его оказалось не живым окрывлением, не вольным полетом, о котором мечтал он в детстве; а именно только "механизмом" неподвижного равновесия, то есть чем-то машинным, автоматическим, мертвенным, и притом самоубийственным и самообманным <...>

この批判は正しいと思う。たしかに、藤沼貴氏が、評伝『トルストイの生涯』などで指摘されているように、『懺悔』は事実そのままでなく、正教批判を効果的に押し出すための演出がなされているのも事実だ。このさっぱりしすぎた夢も、正教の神秘的で不合理な面を切り捨てるための道具立てという面があるかもしれない。

とはいえ、その肝心の神と信仰がこれでは、演出もないものではないか。ちなみに、この夢には、無限の深淵以外、なにも出て来なかった....。

経歴にも共通点

トルストイとカレーニンは、ふたりとも孤児で、経歴にも対応したところがある。カレーニンは、父を知らず、母は10歳のときに死に、叔父に養育される。トルストイは、母をほとんど知らず、父は8歳のときに死に、叔母に養育される。

⁶³⁶ Мережковский Д.С. Там же. Шестая глава.

『アンナ』執筆当時（1873－1877）、作家は40代後半だったが、カレーニンの年齢もおなじくらいだ。カレーニンは、妻より20才年上だから（4章21節）、作品のはじめの時点で47歳ということになる。トルストイとソフィア夫人の年齢差は16歳で、これまただいたいおなじ。

また、自尊心が高い反面、傷つきやすく、非常に孤独なものも、二人に共通する。そして両者とも、女性の愛を断念し、宗教に行く（5章24節）。

参考資料1：19世紀ロシアの離婚事情について

離婚は、アンナ・カレーニナの運命を大きく左右した重要なポイントだ。当時の離婚事情をくわしくみておこう。教会史の専門家、エレナ・ベリャコーヴァの論文「19世紀ロシアの結婚と離婚」⁶³⁷による。

19世紀を通じて、離婚にかんする法律はきわめてきびしく、その結果、深刻な社会問題が生じた。

離婚が許されるのは、つぎの場合にかぎられた。

- 1) 夫婦のいずれかの姦通が証明された場合
- 2) 結婚生活をいとなむ可能性がない場合 (добрачная неспособность к брачному сожитию)。⁶³⁸
- 3) 夫婦の一方が罰せられ、あらゆる権利と財産を剥奪された場合。または、あらゆる権利と財産を剥奪され、シベリアへ流刑に処せられた場合
в случае, когда один из супругов приговорен к наказанию, сопряженному с лишением всех прав состояния, или же сослан на житье в Сибирь с лишением всех прав и преимуществ <...>
- 4) 夫婦の一方が、5年間以上消息不明である場合
- 5) 夫婦の双方が、僧籍に入ることを承諾する場合。ただし、幼児がいない場合にかぎられる

離婚は、主教区庁に訴え出る。主教区庁は、代理人を通じて、離婚を思いとどまるよう教え諭す。説諭が功を奏さなければ、審理がはじまる。「被告」はみずから出廷しなければならない（ということは、姦通者として晒し者になるわけだ）。

注意すべきは、被告（すなわち、たいていの場合姦通者）が罪を認めても、証拠とはみなされなかったということである。証拠として認められるのは――

- 1) 二人もしくは三人の目撃者の証言
- 2) 私生児がいること。ただし、私生児であることが、戸籍簿その他で証明されなければならない
прижитие детей вне законного супружества, доказанное метрическими актами и доводами о незаконной связи с посторонним лицом <...>

⁶³⁷ Белякова Е.В. Брак и развод в России XIX века. (Опубликовано в газете "Первое сентября" №15 2001 года)

⁶³⁸ 身体的な欠陥または精神疾患があるとか、犯罪を犯していたとか、既に結婚していたとか（重婚）、破産したとかいったケースが考えられよう。

この二つが主たるものだが、これら以外に証拠として認められうるのは――

- ・ 姦通を証拠立てる手紙が提出された場合
- ・ たしかな情報またはうわさで姦通の事実を知っている人間が、証言した場合
- ・ 捜査関係者が、被告の姦通について証言した場合
- ・ その他

しかし、これら副次的な証拠が効力をもつのは、主たる証拠がまずあって、その補強材料になる場合か、または副次的な証拠が打って一丸となり、姦通を証する場合にすぎない。

だが問題は、姦通は第三者の面前でおこなわれるものではないから、そもそも目撃者などありえないということなのだ。だから、前に本文で述べたように、そのものずばりの場面をわざわざ演出して証拠づくりをする人さえいたのである。もちろん、ロシアは今も昔もわいろ社会である（ピョートル一世が、役人の給料を低く抑え、各自勝手に「稼がせた」のは有名な話で、社会構造がわいろを前提として成り立っている）。わいろや情実で離婚をかちとる者もいたが、それにしても、離婚は困難をきわめた。

教会関係の各種統計を研究している I. プレオブラジェンスキー（И. Преображенский）は、つぎのような数字を挙げている。

まず離婚件数は――

1840 年—198 件

1880 年— 920 件

1890 年— 942 件

なお、1897 年の国勢調査によると、男性 1000 人のうち離婚者は 1 人、女性 1000 人のうち離婚者は 2 人の割合だった。

20 世紀に入っても状況は変わらない。1913 年には、正教徒人口 9850 万人に対し、離婚件数は 3791 件（0,0038%）。

このように、離婚をむりやり抑えつけているため、どうしても私生児の数が増えてしまう。

サンクトペテルブルクで 1867 年に登録された新生児の数は 19 342 人だが、うち私生児の数は 4305 人（全体の 22,3 %）。1889 年には、新生児 28 640 人に対し、私生児 7907 人（27,6 %）。

私生児のかなりの部分は、孤児院に送られ、劣悪な環境で死亡する者が多かった。ありていに言えば、孤児院は、歓迎されざる子供たちを葬る強制収容所のような面があった、といっても過言ではない。『復活』のカチューシャとネフリュードフの子供も、こうした運命をたどったのである。

1890年の公式統計によると、サンクトペテルブルクで孤児院送りとなった子供の数は9578人。1889年、モスクワでは16 636人。

参考資料 2： アンナが乗った鉄道

鉄道こそは、『アンナ・カレーニナ』の主要な舞台であって、ヒロインが我々読者の前に初めて姿を現し、恋人ヴロンスキーと出会い、そして死んだ場である。それを、できるだけ具体的にイメージするために、ここでは、データ、写真などを通じて、アンナが乗った鉄道を再現してみたい。ここまでの主として心理的、象徴的なアプローチを別の面から補完しようという狙いだ。その際、今でこそ 19 世紀の SL というといかにもレトロだが、当時としては現在の飛行機以上の先端技術だったことを、つねに念頭に置かねばならない。

鉄道駅⁶³⁹

モスクワのレニングラード駅は、モスクワ最古の鉄道駅で、アンナが初めて読者の前に登場する場所だ（この初登場の場面は、1873 年から 74 年にかけての冬という設定である）。1849 年に建設され、当時の皇帝ニコライ 1 世にちなみ、当初はニコラエフスキー駅と呼ばれていた。当時の駅舎は、その後何度か模様がえされたり、改修されたりしたもの、現在もそのまま使われている。

一方、ペテルブルクのモスクワ駅は、初めはサントペテルブルク・ニコラエフスキー駅といい、1847-1851 年に建設された。やはり当時の駅舎が今なお使用されている。



⁶³⁹ 19 世紀半ばのモスクワおよびペテルブルクの鉄道駅のイラスト、写真は、以下の本に整理され掲載されている。

Борисова Е.В. Архитектурное путешествие. Из Москвы по железной дороге. Альбом проектов, эскизов и фотографий. М.: Издательство: Студия 4+4, 2014.

「ロシア鉄道公開株式会社」による電子版ギャラリーも参照。19 世紀中葉に出版された建築家アヴグスト・ペトツォリト（Август Васильевич Петцольт, 1823-1891）による水彩画アルバム（Pettsolt A. V. (Август Васильевич Петцольт) «Виды Санктпетербурго-Московской железной дороги. 1851 г.»）を見ることができる。これは、皇后アレクサンドラ・フォードロワのために制作されたもので、原画は現在、ロシア国立図書館（旧レーニン図書館）に所蔵されている。

<http://www.railway-museum.ru/gallery/1.html#/>（2015 年 9 月 15 日最終閲覧）

ペトツォリトとその建築の代表作については、以下の雑誌論文（追悼文）を参照。

Журнал "Зодчий", 1891, № 11 и 12. С. 81-82.



Санктペテルブルク・ニコラエフスキー駅のプラットホーム（1851年）

その内部と外観

アヴグスト・ペトツォリト画⁶⁴⁰

第1章で、1873年から74年にかけての冬、アンナがモスクワからの帰路にヴロンスキーと再会するのが、吹雪の**ボロゴエ駅**であった。モスクワとペテルブルクのちょうど中間点にあるこの駅は、1851年に正式に開業している。

ボロゴエは、上の地図にみるように、大きな分岐点をなしており、ポロツク（ポラツク）→ヴィテブスクにいたり、モスクワ＝ベルリンの大幹線に接続する。ボロゴエ駅での出会いは、アンナにとっても、ひとつの「分岐点」となった。ちなみに、1907年にボロゴエ＝ポロツク線が建設されたが、この線は、今なお帝政時代の面影を色濃く残しており、鉄道の「屋外博物館」といわれる。



ボロゴエ駅周辺の鉄道網⁶⁴¹

⁶⁴⁰ Pettsolt A. V. (Август Васильевич Петцольт). Там же.

⁶⁴¹ ロシア鉄道公開株式会社（略称：РЖД）のサイト「イノベーション・ダイジェスト」による。
<http://www.rzd-expo.ru/history/bologoe-polotskaya/>（2015年9月15日最終閲覧）



ボロゴエ駅

1875－1887年に改修工事が行われて上階が建て増しされ、現在にいたる。写真はその改修後。アンナがヴロンスキーと出会ったときは、工事の直前で、まだ平屋だった。⁶⁴²

人生の終着駅

駅でもうひとつ重要なのが、アンナ終焉の地となった**オビラロフカ駅**（現ジェレズノドロージナヤ駅つまり「鉄道」駅）だ。ここは現在、モスクワ＝クルスク線（当時はモスクワ＝ニジニ・ノヴゴロド線）にあり、首都から東に24キロ。

トルストイにとってオビラロフカ（現モスクワ州ジェレズノドロージヌイ市）は、馴染みのある場所であった。1869年から1878まで、彼は8回もここを通過している。

最初に彼がここを通ったのは、1869年9月にペンザ県へ、新聞広告で見た売り地を検分に出かけたときで、その途上の9月2日に、あの「アルザマス一夜」を体験している（グーセフⅡ、680－684頁）。この恐るべき一大転機については、本稿の第2部第2章『「アルザマス一夜」ともう一人のアンナの鉄道自殺』で詳述した。

その後も、やはり土地がらみで、サマーラ近郊で一等地を6000デシャチーナ（1デシャチーナは1.09ヘクタール）も買い漁ったり、馬乳酒（クムイス）療法をしたりする際に、オビラロフカを通っている。要するに、本稿の第1部「第12章 農婦の愛人」で触れた、トルストイの「土地バブル絶頂期」および、それと裏腹の人生最大の危機に際して、しばしばオビラロフカを通過していたことになる。

当時のオビラロフカは終着駅（終点）で、治安がとても悪かった。強盗が跋扈し、商人から「金品をすっかり巻き上げていた**обирали**」。そこから「オビラロフカ **Обираловка**」の名がある。「追い剥ぎ駅」といったところだ。当時この駅で降りる客は25人を超えなかったといわれ、いかにも場末の寂しい、そして剣呑な駅であった。

こうしたことが打って一丸となり、トルストイのオビラロフカ駅のイメージは、「地獄の一丁目」というと大げさだが、なにしろ良くなかったと思われる。下に帝政時代のこの駅の写真を掲げてお

⁶⁴² ロシア鉄道（РЖД）のサイト「イノベーション・ダイジェスト」による。
<http://www.rzd-expo.ru/history/bologoe-polotskaya/>（2015年9月15日最終閲覧）

こう。これと照らし合わせると、アンナの最期の状況がまざまざと浮かんでくる――。

『アンナ・カレーニナ』では、オビラロフカにヴロンスキーの母の領地があるという設定になっており、ヒロインの最期となったその日、ヴロンスキーは彼女とけんかして仲直りしないまま、母から委任状に署名をもらうために、その別荘に出かけてしまう（7章 26、29―30 節）。アンナはヴロンスキーに思いのたけをぶつけてやろうと、鉄道でオビラロフカ駅まで行ったものの、途方にくれる。人々のあからさまで淫らな視線、品定め、嫉視、そして木製のプラットホームの立てる喧しい靴音が、いよいよ彼女をやり切れなくさせる。彼女が、人込みを避けて、ホームの端のほうに足早に歩いていくと、つまり、ホーム上を駅舎沿いに揚水塔の方向に歩いていくと、その時――

貨物列車が近づいてきた。プラットホームが揺れはじめ、アンナには、自分がまた汽車に乗っているように感じられた。突然、彼女は、初めてヴロンスキーと会った日に轢死した男のことを思いだし、自分が何をすべきかを悟って、揚水塔から線路に通じる階段を、素早い軽い足どりで降りた。（7章 31 節）



アンナの人生の「終着駅」となったオビラロフカ駅（現ジェレズノドロージナヤ駅）⁶⁴³

速度と運賃

『アンナ・カレーニナ』の主な舞台の一つとなったモスクワ＝サンクトペテルブルク鉄道（ニコラエフスカヤ鉄道）は、1851年8月に645キロ全線開通をみた。このときは、停車時間を含めて、

⁶⁴³ 国営テレビ局「ロシア第1チャンネル」が「アンナ・カレーニナ、蒸気機関車、オビラロフカ Анна Каренина, паровоз, Обираловка」というリポートを2013年3月6日に放映している。

http://www.1tv.ru/sprojects_utro_video/si33/p59291（2015年9月15日最終閲覧）

19 時間で、645 キロを走破しているから、平均時速は 34 キロになる。

正式の開業は同年 11 月で、切符の値段は、1 等が 19 ルーブル、2 等が 17 ルーブル、3 等が 7 ルーブルだった。価格の点でも、現在の飛行機のようなものだ。

1870 年代当時、旅客列車の編成は、蒸気機関車に炭水車、貨車 1 両に客車 5 両というもので、平均速度は時速 40 キロ。停車時間をふくめ、モスクワ・サンクトペテルブルク間を 22 時間かけて走った。一方、貨物列車は、15 両編成、時速 16 キロで、両首都間を 48 時間で結んでいた。本数は、開業直後の 1852 年にはまだ、一昼夜につき旅客列車 2 本、貨物列車 4 本が、それぞれ往復していたにすぎないが、1869 年には、旅客列車 4-5 本、貨物列車 13 本にまで増えていた。⁶⁴⁴

機関車



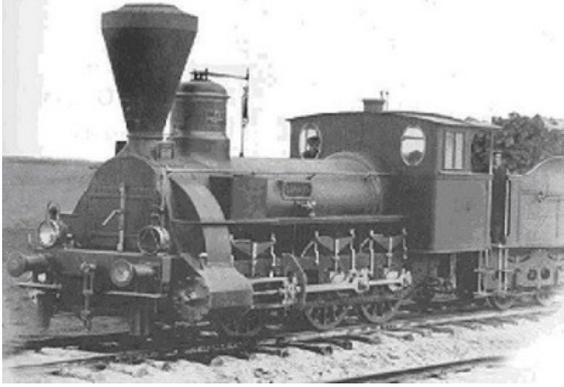
チェレパーノフ父子によるロシア初の国産蒸気機関車

上の写真は、チェレパーノフ父子によるロシア初の国産蒸気機関車（1833 年）で、3.2 トンの重量を時速 16 キロで牽引できた。ロバート・スチーブンソンのロケット号（1829 年）をもとに開発、製造されている。

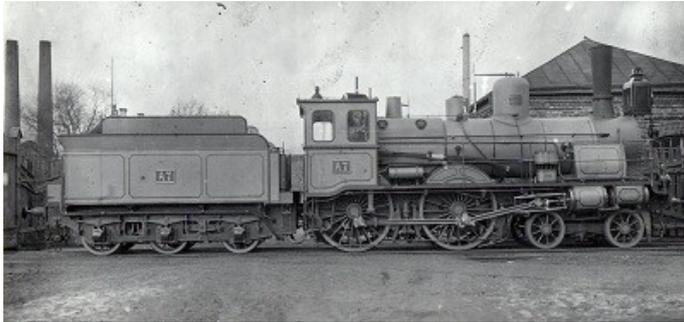
しかし、ロシアの機関車製造を本格化させたのは、やはりモスクワ＝サンクトペテルブルク鉄道の着工（1843 年）、そして 1860 年代後半からの鉄道建設ラッシュだった。1845 年には、ペテルブルクのアレクサンドロフスキー工場で、ロシア初の、0-3-0 タイプの貨物列車用蒸気機関車と、2-2-0 タイプの旅客列車用のそれとが造られている。

⁶⁴⁴ История железнодорожного транспорта России. СПб., 1994. Т. 1. С. 65.

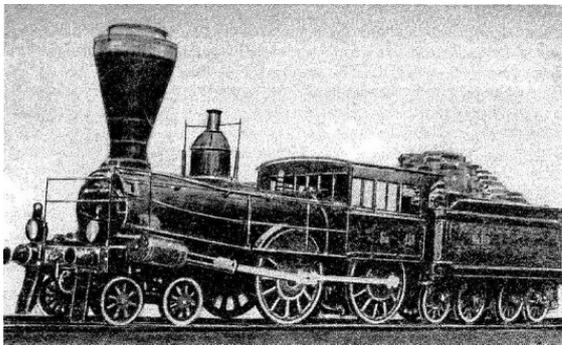
Рихтер Д.И. Николаевская железная дорога // Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона. СПб., 1897. Т. 21. С. 102—106.



0-3-0 タイプ



2-2-0 タイプ

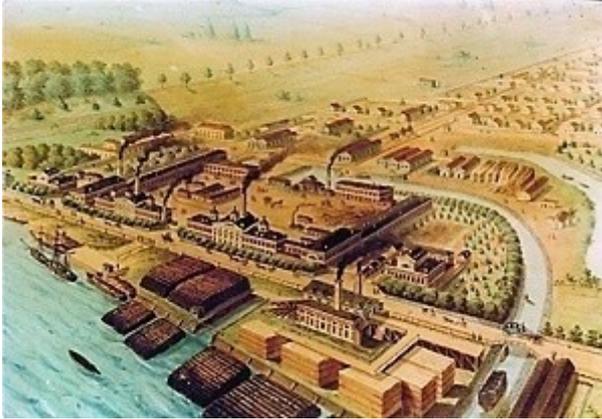


同タイプ

2-2-0 というのは、先輪 2、動輪 2、従輪 0 ということである。0-3-0 はしたがって、動輪 3 つのみのタイプだ。先輪とは、動輪の前にある動力のない車輪のことで、従輪は動輪の後ろの車輪である。ふつう先輪の車軸は、別個の台車に取り付けられている。これを先台車といい、通常はスプリングが組み込まれていて、微妙な横方向の動きに対応できるので、カーブを通り抜けたりするのに便利だ。したがって、先台車のない機関車は、高速運転には不向きであった。19 世紀後半のロシア製 2-2-0 は、最高速度 70-90 キロに達していた。⁶⁴⁵

⁶⁴⁵ 以上、蒸気機関車にかんしては、写真、イラストもふくめ、ロシア鉄道の「イノベーション・ダイジェスト」による。

<http://rzd-expo.ru/history/> (2015 年 9 月 15 日最終閲覧)



ロシアの蒸気機関車、車両製造をリードしたペテルブルクのアレクサンドロフスキー工場。

1845年に同国初の蒸気機関車を製造している（1840年の全景）

客車

ペテルブルクのアレクサンドロフスキー工場は、ニコラエフスキー鉄道開業直前の1850年にすでに、快適な設備をそなえた客車を製造したが、その後の鉄道建設ラッシュ時代に入ると、国産だけでは足りなくなったので、西欧諸国から買入れた。

しかし、ロシアの気候などの諸条件に適合していなかったため、1868–1884年、つまりまさに『アンナ』の時代において、ロシアに合った客車が考案、製造され、贅沢に慣れた上流婦人も快適に旅行できるようになった。

そのロシア製客車では、車体中央を貫く通路を設け、客車の端のデッキは閉鎖し、窓は二重窓にして、外気をしっかり遮断できる断熱構造をもたせた。1863年からは、トイレ、洗面台、ストーブも取り付け、1877年には暖房を、お湯を循環させるセントラルヒーティングに替え、照明も当初はロウソクであったが、77年からはガス灯に、87年からは電灯にした。⁶⁴⁶

客車の等級ごとのちがいをみると、三等車は、定員は一両につき90人で、シートは硬く、そのサイズも1m×40cmと小さかった。

二等車は定員52人で、シートは柔らかく、ひじ掛けで区切られ、幅は64cmとやや大きめで、シート間の間隔ももっと広がった。

一等車となると、定員はわずか28人。長さ1.9mの軟らかいソファが14個、車両を横切る形で置かれており、窓の位置もそれぞれの座席に対応していた。また通路は、中央ではなく、車両の壁際にあった。⁶⁴⁷

⁶⁴⁶ 「イノベーション・ダイジェスト」による（2015年9月15日最終閲覧）。

⁶⁴⁷ Шадур Л.А. Развитие отечественного вагонного парка. М.: Транспорт, 1988. С.42—44.

参考資料3：その他のシンボル

28 という数字

『アンナ・カレーニナ』1章30節で、嵐が吹きすさぶボロゴエ駅のプラットフォームで「ハンマーで鉄を叩く音」が聞こえた直後、そしてアンナとヴロンスキーが出会うまさに直前、一見なにげない声が聞こえる——「どうぞこちらへ！No.28です」

No.28というのは、文脈からすると至急便のようでもあるし、車室の番号のようでもあり、よくわからない。しかし問題は、この28という数字だ。

28という数字は、トルストイにとって特別なものだった。彼は1828年8月28日生まれ。雑誌「現代人」の主宰者、詩人ニコライ・ネクラーフから処女作『幼年時代』を同誌に掲載する旨の手紙を受けとったのが、1852年8月28日（つまり、作家トルストイ誕生の日だ）。『幼年時代』は、全28章だが、これもわざとそうしたのかもしれない。

長男セルゲイは、1863年6月28日生まれ。長女タチアーナの回想によると、「父はそのたびに気を留め、また28だ、と言った」⁶⁴⁸

トルストイが家出したのも、1910年10月28日のことだった。

1856年5月28日に、作家は、満を持して、独自の農奴解放案を農民に提示するが、この人生の大事を28日にセットしたのかもしれない。

『アンナ・カレーニナ』の草稿では、彼女の死も5月28日だ。さらに、長編『復活』のカチューシャの公判も4月28日（1章3節）。この日法廷で、ヒロインの娼婦、カチューシャと、かつて彼女を誘惑して捨てたネフリュードフは、被告と陪審員として、偶然再会し、そこからドラマがはじまる。これらの日付も、意図的な設定だろう。

ところで、28日の裁判、判決というと、これだけではない。

作家の父、ニコライは、前に書いたように、「金の成る」ピロゴーフ村の売買をめぐる訴えられ、その争いのさなかに奇怪な死にかたをした。ニコライが詐欺、横領の罪を犯した可能性、さらには殺害された可能性さえあるものの、裁判は、コネをフルに使った名門トルストイ家側の勝ちとなった。その判決がでた日が、彼の死後4年近くたった、1841年2月28日のことであった（ゲーセフI、150頁）。

未完の戯曲『光は闇に輝く』（1890年代-1900年代）には、トルストイ夫妻を彷彿とさせる、ニコライとマリアの夫婦が出てくるが、ふたりは結婚生活28年目という設定だ。作品では、トルストイの「改心」と、それともなう夫婦の不和、家庭内のごたごたがリアルに描かれており、ニコライは家出を決意している。その幕切れの日、妻は夫にこう言い放つ。「もしあなたがどうしても出て行くなら、私もいっしょについていく。それがだめなら、あなた

⁶⁴⁸ タチアーナ・トルスタヤ『トルストイ』（木村浩・関谷苑子訳）、TBSブリタニカ、1977年、205-206頁。

の乗っている汽車に轢かれて死んでやる！」。28年目にして人生に「判決」が下ろうとしている。

しかし、そんな数字の意味など、一般読者はあずかりしらない。にもかかわらず、トルストイが因縁の数字を、アンナの悲恋の節目にそっとしのばせたことは、作者自身が、ヒロインの運命を、神秘的、宿命的で不条理なものとなししていたからだろう。

鉄道＝炎の川

『アンナ・カレーニナ』の鉄道は、この世とあの世の境界、「炎の川」（ロシア版三途の川）のシンボルだ。この点については、いく人かの研究者が指摘している。

ヒロインが鉄道に飛びこむ場面——「水浴で水のなかに飛びこむときのような感情が、アンナをとらえ、彼女は十字を切った」（7章31節）。なぜ、水に飛びこむのかというと、彼女は無意識のうちに、三途の川を渡ろうとしているのである。

ロシアでもヨーロッパでも、伝統的に、この世とあの世の境界は、川のかたちで想像される。ロシア版三途の川、「炎の川」（Сморódина, Огненная река, Пучай-река）を、アポロン・コリンフスキーは、その著書『民衆のルーシ』でこう描いている⁶⁴⁹。

正しき人（義人）の魂は、天使首ミハイル（ミカエル）が、母親が愛児を抱くように抱擁し、炎の川を渡らせてくれる。しかし、地上に善いことを残さなかった罪人は、炎の川の岸边を、むなしい嘆きと呻きでみたすことになる。この恐るべき、戦を司る大天使が、船に乗せてくれないからである。罪人たちの多くは、炎の波におぼれ、底に——永遠の苦しみに——沈む。

ちなみに、ギリシャ神話にも、「炎の川」がある。アケロンの支流、ピュリプレゲトンである。この川は、その名のとおり、「火で燃え立っている」⁶⁵⁰

ギリシャ神話には、いくつか冥界の川があるが、いちばん代表的なのは、アケロン川だ。『神曲』でダンテも、この川を、ひげもじゃの頑健で気むずかしい老人、渡し守カロンの舟で渡り、地獄へおもむく。そして、この冥界の川は、ときに激しく揺れ動く。ダンテが、古代ローマの詩人ヴェルギリウスと、地獄行きの亡者がひしめく薄暗いアケロン川のほとりに立っていると、「突然暗い野が激しく震動した」。ダンテは、恐怖のあまり昏倒する。

ところで鉄道の震動こそ、トルストイの文学作品の主人公たちに強く作用し、ときに理性を狂わせるものだ。アンナにも、『クロイツェル・ソナタ』のポズドヌイシェフにも——。

⁶⁴⁹ Коринский А.А. Народная русь: Круглый год сказаний, поверий, обычаев и пословиц русского народа. М., 1994. С.541.

⁶⁵⁰ 呉茂一『ギリシャ神話』〈上〉、新潮文庫、1979年、340頁。

この揺れ動く薄闇のなかで、あらゆる形と音が、異常な明瞭さで自分を驚かすのを、彼女は感じた。客車は、前に進んでいるのか、それとも完全に止まっているのか、疑わしくなる瞬間が、たえず彼女をおとずれた。自分のとなりに座っているのは、アンヌシカだろうか、それとも別人だろうか？「あそこの取っ手にかかっているのは、外套かしら、獣かしら？ここにわたし自身は、何だろう？わたし自身かしら、それとも他の女かしら？」彼女は、この忘我に身を任せるのが恐ろしかった。しかし、なにものかが、そのなかへ引っぱっていった。（『アンナ・カレニナ』1章29節）

貨物車が近づいてきた。プラットホームが揺れはじめ、アンナには、自分がまた汽車に乗っているように感じられた。突然、彼女は、初めてヴロンスキーと会った日に轢死した男のことを思いだし、自分が何をすべきかを悟った。（7章31節）

ダンテが、『神曲』創作のよりどころにしたヴェルギリウスの叙事詩『アイネイアス』に、ダンテが気絶した震動の正体が記されている。トロイアの名将で後のローマ建国の祖、アイネイアスは、のちのダンテと同じように、現在のイタリアのキューメー（ラテン名は、クーマエ）にある洞くつから冥界へ降り、冥界の川を渡る。この洞くつは、ヴェスヴィオス火山の近くにある。暗黒色の大地には、いたるところ亀裂が走り、ガスと火炎を吹き上げ、しばしば激しく震動する。当時、この一帯は、陰鬱な森に覆われていたという。アイネイアスが、冥界の女神たちに、生け贄をささげると、地中に轟音が鳴り響いて、大地が震撼し、森全体が揺れ動く。

古代ギリシャ・ローマでは、しばしば、火山の底に、冥界があると想像され、大地の震動は、冥界の不気味な息吹、冥界からのなんらかのメッセージと考えられていた（「大地を揺るがす神」、海神ポセイドンと関係する場合もある）。旧約・新約聖書においても、地震は、なみなみならず重大な、そしてたいていは不吉な、彼岸からの徴（しるし）である。たとえば、「ヨハネの黙示録」における地震（16, 17-19）。「マタイによる福音書」では、イエスが死ぬと地震が起こる。また、「イザヤ書」では、地震は、来るべき神の怒りだ。

万軍の主によってお前は顧みられる。

雷鳴、地震、大音響と共に

つむじ風、嵐、焼き尽くす炎のうちに。

（「イザヤ書」29, 6）

鉄道には、震動のほかにも、冥界のイメージが集中している——冥界の火炎とガス、蒸気、閉鎖的空間。さらに、鉄道と冥界は、色彩の点でも共通する。というのは、冥界は、色彩の面から見れば、黒（闇）と赤（炎）が基調であるが、『アンナ・カレニナ』の鉄道の描写も

そうだからである。

鉄の道を、黒い鉄の塊が、炎々と燃える炉をのせ黒煙と蒸気をあげ、大地を揺るがしながら疾走する――。鉄道は、地獄へひた走る「炎の川」であり、そこへ身を置くものは、思わず知らず、理性を狂わせ、死に引きずられていく。――鉄道は、「邪悪な霊」の息吹にさらされる異次元空間であり、この作品最大の「黒い箱」、「黒い袋」である。

第6章 『見知らぬひと』はアンナ・カレニナか？：

レフ・トルストイと画家イヴァン・クラムスコイ

アンナ・カレニナの張りつめ研ぎすまされた美に魅了された人は、彼女の面影を思い描くときに、ふとイヴァン・クラムスコイの『見知らぬひと』（1883年）を連想することがあるだろう。この美しい絵のモデルはいまだに明らかになっていないが、絵が描かれた当時から今日にいたるまで、アンナ説は根強くある。ここでは、それについて検証しつつ、アンナの魅力に、また別の角度から迫ってみたい。なお、これが『アンナ・カレニナ』論の最終章となる。⁶⁵¹



イヴァン・クラムスコイの『見知らぬひと』（1883年）、トレチャコフ美術館所蔵

モデルはだれか？

19世紀ロシア最大の画家の一人で肖像画の名手として知られるイヴァン・ニコラエヴィチ・クラムスコイ（1837–1887）の『見知らぬひと』は、日本では『忘れえぬひと』という

⁶⁵¹ 第6章は、以下の拙稿に大幅に加筆修正したもので、「むうざ」第30号（2015年）に掲載予定。
Юсуке Сато. Л.Н.Толстой и И.Н.Крамской: «Неизвестная» является Анной Карениной? // Толстовский сборник-2003. Материалы XXIX Международных Толстовских чтений. Тула: издательство Тульского государственного педагогического университета им.Л.Н.Толстого.

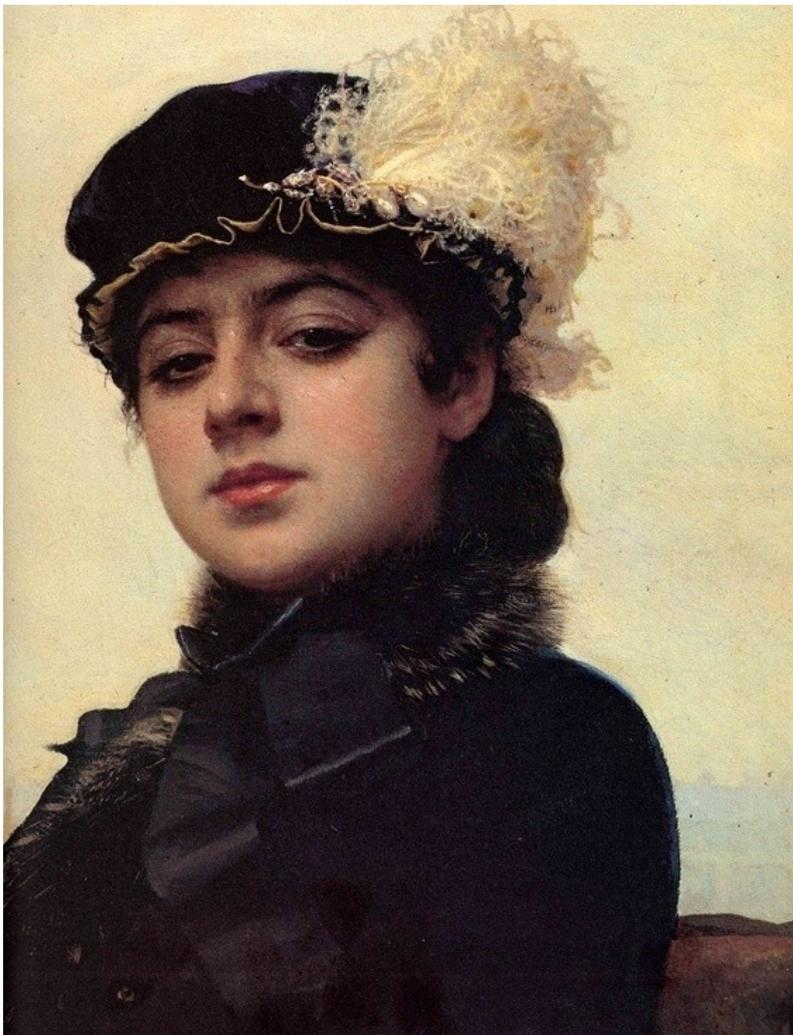
なお、『見知らぬひと』の画像は以下のサイトより転載。

http://artclassic.edu.ru/catalog.asp?cat_ob_no=13018&ob_no=24302（2015年9月15日最終閲覧）

題名で知られているが、原題は『ニエイズヴェースナヤ **Неизвестная**』、つまり「見知らぬひと」とか「正体不明なひと」という意味だ。

この絵の女性には実際に、謎めいた正体不明なところがある。まず、描かれているのがだれなのか未だに判明していない。モデルとして、何人かの貴族、女優の名が挙がってはいるが、決め手はない。さらに、この女性がどのような階層に属しているのかということも分からない。

たしかに、画のヒロインは気品があり、上品で美しい豪華な服装をしており、馬車も高級だ。だから、彼女は貴婦人だと考えられる一方で、実は、女優、さらには高級娼婦だという説まである。というのは、この女性は、あまりにも流行の最先端をゆく高価なファッションで身を固めすぎており、その容貌からして、明らかに生っ粋のロシア人ではないからである。彼女がセム系、つまりジプシー、ユダヤ人、カフカス系（グルジア、アルメニア、チェチェン、ダゲスタンなど）の血を引いていることは、ロシア人が見れば一目瞭然だ。



『見知らぬひと』部分

この絵画の発表当時、芸術批評家ウラジーミル・スターツフは、『見知らぬひと』を「馬車に乗った困い女」と呼び⁶⁵²、批評家ボボルイキンは、彼女の「なかばジプシー風のタイプだが威厳ある美」に目を向けつつ、「この婦人は、堅気の女性か娼婦か分からないが、彼女のなかにはく...>一時代がまるごと感じられる」と述べている⁶⁵³。

彼女の身分、階層にもまして謎めいているのが、その心理状態、気分だ。絵画全体に、張りつめた、悲劇的なトーンが感じられなくもない。T.I.クーロチキナによれば、この女性の眼差しは誇り高く、傲慢で挑戦的な印象さえ与えるが、心になにか悲しみを秘めているようである。そして、「彼女の心理状態と社会的立場には、なにか言い残されたところが、好奇心をそそる謎めいたところがある」⁶⁵⁴

いったいあなたはだれを描いたのか、とクラムスコイに直接聞いた人々もいたが、彼は、なぜか答えるのを避けた⁶⁵⁵。書簡のなかでも彼は、それについて言及していない。

もし、モデルが現実の人物であるとすれば、これほど何のてがかりも残っていないのは、いささか不思議ではある。

20 世紀になってエチュードを発見

『見知らぬひと』のモデル論争に一石を投じたのは、ようやく 20 世紀の後半に知られるようになった、この絵のエチュードだ。プラハの個人コレクションに保存されていた、この下絵が描かれたのは、『見知らぬひと』発表と同じ 1883 年のことで、クラムスコイの署名がある⁶⁵⁶。

エチュードは、『見知らぬひと』によく似ている。女性のポーズ、服装はまったく同じである。ひとつだけ違うのは、帽子のダチョウの羽飾りの色が、白ではなく黒だということ。馬車の様子も、それが斜めを向いているのも同じだが、問題は、エチュードの女性の顔立ちにある。

マシコフツェフは、彼女の容貌について、「取り立てて言うことはなく、美しくない」と言う。「鼻はまくれあがり、耳は大きい。身体とくらべて顔がとても大きい。『見知らぬ人』とは対照的に品がない」

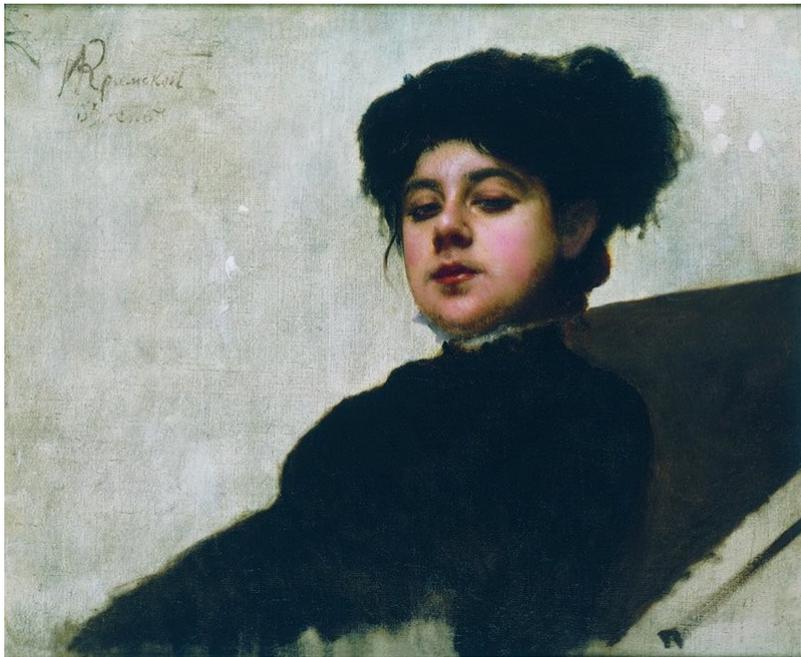
⁶⁵² Курочкина Т.И. Иван Николаевич Крамской. Л.: Художник РСФСР, 1989. С.82.

⁶⁵³ Боборыкин П. Крамской и Репин // Новости и биржевая газета. 1883. 24 марта.

⁶⁵⁴ Курочкина Т.И. Там же. С.82, 84.

⁶⁵⁵ Очерки по истории русского портрета второй половины XIX века. Под общей редакцией Н.Г.Машковцева. М., 1963. С.132.

⁶⁵⁶ Машковцев Н.Г. Там же. С.132.



『見知らぬひと』のエチュード（1883）⁶⁵⁷

ここまで酷評しなくてもと思うが、いずれにせよ、エチュードの「地上的な」女性と『見知らぬひと』との間の大きな隔たりから、クラムスコイは、エチュードの女性自身を描こうとしたのではない、と考える専門家が多い。つまり、彼女は、クラムスコイの心のなかにあったイメージを具象化するための素材で、イメージをのせる土台にすぎなかった。彼女はたんにポーズをとっただけ、というわけだ。この女性がプロの絵画モデルだったと推測する人もいる。換言すれば、『見知らぬひと』の形象は、画家の創造上の構想にしたがった、集合的なものである⁶⁵⁸

なお、エチュードには背景はなく、女性と馬車だけが描かれているが、『見知らぬひと』の背景は、あとで述べるように、実はきわめて重要な意味を秘めていると筆者は考える。

あまり検討されてこなかった文学起源説

さて、そうなると、文学起源説、つまり、なんらかの文学作品のヒロインを描いたという説も再浮上してくる。しかし、この「絵画の構想の文学的性格」⁶⁵⁹は、これまで真剣に検討されてこなかった。

論者は、『アンナ・カレーニナ』の同名のヒロインや、ドストエフスキーの『白痴』のナスターシャ・フィリッポヴナなど、ボボルイキンの表現を借りれば「一時代がまるごと感じら

⁶⁵⁷ Коллекция: мировая художественная культура // Российский общеобразовательный портал.
http://artclassic.edu.ru/catalog.asp?cat_ob_no=13018&ob_no=24289 (2015年9月15日最終閲覧)

⁶⁵⁸ Курочкина Т.И. Там же. С.84.

⁶⁵⁹ Курочкина Т.И. Там же. С.84.

れる」ようなタイプを挙げているが、はっきりした根拠は示していない。

比較的最近、I.V.チュプリナは、『見知らぬひと』のモデルがアレクサンドラ・アリベディンスカヤ（Александра Сергеевна Альбединская 〈урожденная княжна Долгорукова〉）であるという説を発表した。これはアレクサンドル二世の愛人で、ツルゲーネフの『煙』にでてくる美貌の將軍夫人、イリーナ・オシニナのモデルとなった実在の女性である。

この説の主な根拠は外見が似ていることだ。サラトフ裁判鑑定科学研究実験室（Саратовская научно-исследовательская лаборатория судебных экспертиз）の専門家 S.A.コンドラニン（С.А.Кондранин）は、『見知らぬひと』と、チュプリナが提出したアリベディンスカヤの写真を比較して、「おそらく同一人物が描かれている」との鑑定結果を出した⁶⁶⁰。



アレクサンドラ・アリベディンスカヤ（1834—1913）⁶⁶¹

しかし、『見知らぬひと』が描かれた当時、アリベディンスカヤはもう 50 歳に近く、年齢的に合わない。もっとも、女盛りのころの、「エジプトの瞳」をもつ彼女をクラムスコイが見たことがあって、その印象が絵に反映しているという可能性もないではない。ましてや、概

⁶⁶⁰ Чуприна И.В. О реальной основе некоторых произведений И.Н.Крамского и И.С.Тургенева. Саратов: Изд-во Саратов.ун-та, 1994. С.4.

⁶⁶¹ "ДРУГАЯ ДОЛГОРУКАЯ" - АЛЕКСАНДРА СЕРГЕЕВНА АЛЬБЕДИНСКАЯ, УРОЖ. ДОЛГОРУКАЯ. <http://www.liveinternet.ru/users/3561375/post341426710/> (2015 年 9 月 15 日最終閲覧)

して絵画の人物像というものは、かりにそれがはっきりしたモデルをもつ場合でさえ、非常に多義的、多面的であり、しばしばそこに多くの素材が入り込み、渾然一体となっているものだから。

だが、アリベディンスカヤが『見知らぬひと』の主要なモチーフになったと断定するには、外面の相似だけでは根拠不足ではないだろうか。

一方、マシコフツェフは、アンナ・カレーニナ説について言及しつつ、これを退けている。彼の意見によると、『見知らぬひと』は誇り高く、ほとんど傲慢といってもいい貴婦人だが、アンナはちがうタイプだ⁶⁶²

だが、アンナはまさに誇り高い女性である。それに『見知らぬひと』は貴婦人とはかぎらないので、これでは説明になるまい。

トルストイ研究者の故リディア・オプリスカヤは、筆者との私的な会話で、「絵画の執筆時期、トルストイとクラムスコイの交流の深さ、そして何よりも絵のイメージから、アンナの可能性は高い。この絵が発表されたときすでに、多くの人が、なにか心に苦しみを秘めているような『見知らぬひと』にアンナの面影を重ね合わせた」と語ったが、そのオプリスカヤも具体的な根拠は示さなかった。

そこで次章では、クラムスコイとトルストイとのかかわりを、ここでのコンテキストにしたがって包括的に跡づける。そのあとで、アンナ・カレーニナと『見知らぬひと』を比較するという段取りになる。

クラムスコイとトルストイの出会い

1873年、まさにトルストイが『アンナ・カレーニナ』の執筆を始めた年、二人はヤースナヤ・ポリャーナの屋敷で知り合った。

以前からトルストイの肖像画を描きたいと思っていたクラムスコイは、ヤースナヤに出向き、なんとか彼を口説き落とす。はじめ作家は渋ったが、「いずれはあなたの肖像画は描かれることになる——それも、年老いたあなたの。それなら今描いたほうがいいではないか」と画家は食い下がり、しかも、二枚同時に描いて、気に入ったほうをプレゼントするという破格の条件を提示した。熱意にほだされたトルストイは、9月6日から10月3日まで断続的にポーズをとった⁶⁶³。二枚の絵のうち一枚がヤースナヤに、もう一枚がトレチャコフ美術館にある。

この間二人は、しばしば芸術、絵画をめぐる活発な議論をしたと、クラムスコイ自身が、パーヴェル・トレチャコフに手紙で伝えている。

トルストイのソフィア夫人の「覚書 Мои записки разные для справок」（10月4日）による

⁶⁶² Машковцев Н.Г. Там же. С.132.

⁶⁶³ Иван Николаевич Крамской. Письма, статьи. В двух томах. М.: Искусство, 1965. Т.1. С.539.

と、「芸術にかんする議論、会話は毎日のことだった」（ゲーセフ III、149-150 頁）⁶⁶⁴

またソフィア夫人は『わが人生 Моя жизнь』で、二人が向かい合って、それぞれの仕事にそれぞれそしんでいる様子を回想している。「私は覚えている。小さな客間に入って私は、これら二人の芸術家をながめる。一人はトルストイの肖像画を描き、もう一人は自分の小説、つまり『アンナ・カレーニナ』を書いている」⁶⁶⁵

おそらく、彼らは、『アンナ』についてもいろいろと話し合ったことだろう。トルストイの肖像画は、この分野の名手クラムスコイにとっても屈指の傑作となった。とくにトレチャコフ美術館所蔵のものは、まるで、だれにも見えない虚無をのぞきこんでいるかのような深い眼差しが印象的である。ソフィア夫人は「見るのが恐ろしいほど смотреть страшно даже」⁶⁶⁶と言った。

作家の後年の回想（1885 年）によると、絵が二枚ともできあがって、クラムスコイに良いほうを選んでくださいと言われたとき、トルストイが、「自分の顔は分からないなあ、と月並みなとぼけ方をすると、『うそです。だれでも自分の顔は、自分がいちばんよく知っているのです』と、クラムスコイは言った」（ゲーセフ III、150 頁）。自分という人間をみごとに見抜かれてしまった、と作家は感じたかもしれない。

クラムスコイの生い立ちと経歴：画家は語る

事は、たんに二人のすぐれた芸術家が出会い、触発しあったというにとどまらない。クラムスコイという存在は、トルストイにとって、その創造の動機の根幹を揺るがすものをもっていたのだ。

作家の全創作活動は、端的に言って、農民の死生観を意識化し、普遍的な型に鑄直すといったものであった。ところが、それを自らやってのけそうな庶民が登場してしまった！…庶民の自己認識はどこまで推し進められるのか？ トルストイにとってクラムスコイは、そのテストケースであったから、出会いの後も、固唾を飲んで見守らないわけにはいかなかったのである。農民、庶民が自力で、借り物でない、自らの新たな思想、宗教を打ち立てることができれば、自分という存在はもはや無用ではあるまいか？…

で、これに関連し、クラムスコイの生い立ち、経歴を突っ込んで見ておこう。そうしないと、当然、二人のかかわりは明瞭に浮かび上がってこないからだ。

まずは、画家自身が、作家アレクサンドル・シェーレル・ミハイロフ（А.К.Шеллер-Михайлов）あての手紙（1880 年）のなかで回想しているところを聞き、それに必要な注釈を

⁶⁶⁴ С.А.Толстая. Дневники в двух томах. Т.1. С.501.

⁶⁶⁵ Л.Н.Толстой и художники: Л.Н.Толстой об искусстве. Письма, дневники. Воспоминания / Сост.и авт.вступ.статьи И.А.Бродский. М.: Искусство, 1978. С.183.

⁶⁶⁶ Гэсеф III、149 頁（ソフィア夫人の妹タチアーナ・クズミンスカヤあての、9 月 14 日付けの手紙）。

つけていこう。⁶⁶⁷

私は、1837年5月27日（*グレゴリオ暦では6月8日——佐藤）、ヴォロネジ県オストロゴジスキー郡オストロゴジスク（Острогѳжск）市近郊のノーヴァヤ・ソートニヤ村で、地元の町人⁶⁶⁸の家に生まれました。12歳のときに父が亡くなりました。私の覚えているかぎりでは、とてもきつい性格でしたね。父は、市のドゥーマ（議会）に勤めており、私の記憶に間違いがなければ、ジャーナリストでした。祖父もやはり、聞いたところによると、いわゆる軍属（войсковой житель）で、ウクライナでどこかの書記（筆耕）をやっていたそうです。

Я родился в 1837 году в мае (27), в уездном городке Острогѳжске Воронежской губ., в пригородной слободе Новой Согне, от родителей, приписанных к местному мещанству. 12-ти лет от роду я лишился своего отца, человека очень сурового, сколько помню. Отец мой служил в городской думе, если не ошибаюсь, журналистом; дед же мой, по рассказам, был так называемый войсковой житель и, кажется, был тоже каким-то писарем в Украине.

画家は、先祖代々筆耕という下級役人の家に生まれている。生家はごく小さな藁葺きの小屋であった。父の職業の「ジャーナリスト」というのは、この場合、письмоводитель（筆耕、文書係）の意味だ。クラムスコイの長兄も父の跡を継ぎ、生涯この職にあった。ただし、父の生前には、困窮していたわけではなく、市議会の筆耕の月給10ルーブルのほか、ギルドでの副業もあったため、月収60-70ルーブルになることがあったという⁶⁶⁹。しかし、クラムスコイが12歳のときに父が亡くなってからは、家計も苦しくなった。その結果、13歳で郡の学校を卒業すると——

ヴォロネジのギムナジウムに私を入れる金はなかったので——私はとても入りたかったのに——、生まれ育った市に残って私は、ドゥーマで書道を習いはじめたのです。ここでは、父の跡を兄が継いでいました（兄は私より15歳年長です）。その後しばらく、測量士のところに勤めました。

Не имея средств перевести меня в воронежскую гимназию, куда мне очень хотелось, я остался в родном городе и стал упражняться в каллиграфии в той же городской думе, где место моего отца занимал тогда старший брат (старше меня лет на 15). Потом служил несколько времени у посредника по полюбовному межеванию.

⁶⁶⁷ Крамской И.Н. Об искусстве.(Сост.и вступ, ст. Т.М. Коваленской). М.: Изд. АХ СССР, 1960. С.185-188.

⁶⁶⁸ 町人（メシチャニーン мещанин）は、一代名誉市民の子、商業活動を止め商人身分を失った者と規定される。

⁶⁶⁹ 以下の本の第1章「幼年時代と青年時代」を見よ。

Цомакион А.И. Иван Крамской. Его жизнь и художественная деятельность (в серии «Жизнь замечательных людей», осуществленной Павленковым Ф. Ф.). СПб, 1891.

なお、この本には、オストロゴジスク市のクラムスコイの生家と、それが位置する通りの写真（1908年）が収められている。

まあ、丁稚奉公といったところだ。一方、絵画への興味の芽生えについてはこう回想している。

いづろ絵画に引かれはじめたのかは分かりません。ただ、7歳のときに粘土でコサックを作ったこと、それから、小学校を終えるころには、なんでもかんでも描いていたことは覚えています。とはいえ学校では、この方面は、とくに好成績ではなかったですね——退屈だったもので。

Как рано появилось у меня влечение к живописи — не знаю. Помню только, что 7-ми лет я лепил из глины казаков, а потом — по выходе из училища, рисовал все, что мне попадалось, но в училище не отличался по этой части — скучно было.

後年のアカデミーおよび官製芸術への反感の根は、この辺りにも萌芽的に現れているかもしれない。その一方でクラムスコイは、卒業してしばらくたったところに、同郷のアマチュアの画家で写真家のミハイル・トゥリノフ（Михаил Борисович Тулинов, 1823—1889）と知り合って、いよいよ絵画への興味を深め、画家への憧れを募らせていった。トゥリノフは、ロシアの写真家の草分けで、のちにトルストイの結婚写真も撮っている（1862年）。

やがて、1853年、クラムスコイが16歳のときに転機がやってくる。

私がもう16歳になっていたとき、或るハリコフの写真家といっしょに、わが郡から抜け出す機会が生まれました。この人は、わが街に軍隊が集結して、パレードや交代や演習が行われていたので、やって来たのです。この写真家といっしょに私は、写真の修正係兼画家⁶⁷⁰として、3年の間に、ロシアの半分以上を回りましたよ。これは厳しい修行だった——写真家はユダヤ人でした。このころ私は、すごくたくさん本を読み（読書し出したのはこれより前ですけど）、聞いたことはなんでも食欲に吸収しました。

Когда мне было уже 16 лет, мне представился случай вырваться из уездного города с одним харьковским фотографом, приехавшим в наш город по случаю собравшихся войск и бывших парадов, разводов, учений. С этим фотографом я объехал большую половину России в течение трех лет в качестве ретушера и акварелиста. Это была суровая школа — фотограф был еврей. В это время (а начал и раньше) я очень много читал, поглощал все, о чем только мог услышать.

ハリコフの写真家とは、ヤーコフ・ペトローヴィチ・ダニレフスキー（Яков Петрович

⁶⁷⁰ 当時の写真の修正は、技術的なものと、芸術的、絵画的なものの二通りがあった。前者は、ネガを墨などで直すものだが、後者は、鉛筆、筆、墨、水彩絵具、パステル等を使って微妙な修正を行った。その結果、肖像写真が絵画的な特徴を帯びることも珍しくなかったのである。修正係のなかには、プロの肖像画家の水準に達する者もあり、その「作品」に署名することもあった。

Данилевский, 1817 – 1896 年以後に死亡) のことである。彼は、リガ出身の時計屋であったが、1850 年代初めに、ハリコフに町人身分で移り住んだ。53 年、オストロゴジスクに赴く。時あたかもクリミア戦争直前で、軍の大部隊が駐屯していたため、将校たちから肖像写真の注文が入ると当てにしたのである(ちなみに、トルストイも、クリミア戦争に決死の覚悟で出征する前に、兄たちと記念写真を撮っている)。当時の写真撮影は、料金が 10 ルーブル以上(今でいえばざっと 10 万円)で、けっこうな収入になった。

ところが、ダニレフスキーが連れて来ていた写真修正係が飲んだくれはじめたため、彼は地元のアマチュア写真家のトゥリノフに相談した。クラムスコイ少年の才能を知るトゥリノフは、少年に修正の仕方を手ほどきし、ダニレフスキーに推薦したのである。契約期間は 3 年だった。給料は出来高払いで、水彩絵具、パステルなどを使った色つきの修正は、1 枚につき 3 銀貨ルーブル、墨のみによる場合は 1・5 銀貨ルーブル。⁶⁷¹

その 3 年の間に、ダニレフスキーとクラムスコイは、ハリコフ、オリョール、クルスク、モスクワ、トゥーラ、カザン、ニジニ・ノヴゴロドなど、中央ロシアのかなりの部分を回った。クラムスコイは、肖像写真の修正係として、めきめき腕を上げ、優に一本立ちできる実力をたくわえる。その結果、57 年に彼は、芸術観が一致せず、必ずしも良好な関係になかったダニレフスキーとは別れてペテルブルクに移り、当時の代表的な写真家である I.F.アレクサンドロフスキー(И.Ф.Александровский)、A.I.デニエル(А.И.Деньер)などの写真館で働くようになった。クラムスコイは首都の写真家仲間のあいだで、「修正の神様」と呼ばれるにいたる。そして、ペテルブルク美術アカデミーに入学——。⁶⁷²

私は、20 歳のときにペテルブルクにやって来て、1857 年にアカデミーに入学しました。そして、1863 年には、14 名の同志とともに、大金メダルのコンクールへの参加を断り、アカデミーを去ったわけです。

20-ти лет приехал в Петербург и поступил в Академию в 1857 году, а в 1863 году вышел из нее вместе с товарищами в числе 14-ти человек, отказавшись от конкурса на большую золотую медаль.

ロシア美術史上名高い「14 人の反乱」だ。せっかく独学でアカデミーに入るといふ快挙を成し遂げたのに、なぜ自ら、そのような形で退学しなければならなかったのか? クラムスコイが複数の手紙や論文に書いているところでは、彼は入学早々、アカデミーの教授陣と授業の内容、レベルに幻滅し、不満を募らせていくが、直接の引き金になったのは、コンクールだ。

⁶⁷¹ Иван Николаевич Крамской. Его жизнь, переписка и художественно-критические статьи 1837-1887. СПб.: Изд-во Алексея Суворина, 1888. С. 21.

Порудоминский В.И. «Иван Крамской». М, 2001. С.29.

Цомакион А.И. Там же.

⁶⁷² Порудоминский В.И. Там же. С.27-32.

ペテルブルク美術アカデミーでは、毎年、最も優秀な学生たちが、このコンクールに参加する慣わしで、大金メダルを獲得すると、6年間のイタリア留学に送られ、1年間につき金貨で1500ルーブルを与えられた。しかしこのコンクールは、課題（絵のテーマ）が発表されると、エントリーした学生たちはそれぞれアトリエに缶詰にされ、24時間のうちに素描を描かなければならず、いったん描いたら、変更は不可という、クラムスコイらに言わせれば、無用に過酷な条件であった。

1863年11月9日のこと（つまり、農奴解放から間もない世情騒然とした時代である）、クラムスコイらの参加予定者は、アカデミーの大会議室に集められ、その席で絵のテーマが発表された。それは、「ヴァルハラ饗宴」（ヴァルハラは、北欧神話における主神オーディンの宮殿）で、絵画の構図も予め定められていた。オーディンが玉座にすわり、神々と英雄たちに取りまかされている、主神の肩には二羽の鳥がとまり、ヴァルハラのアーチの彼方の雲間に月が浮かび、月を狼が追いかけている、といった調子のもので、クラムスコイは、親友ミハイル・トゥリノフへの11月13日付け書簡で、「たわごと」と言っている。

課題が発表されると、学生側の代表であったクラムスコイは、「私たちはすでに二度にわたり、請願を提出してきましたが（テーマの自由選択、コンクールの条件改善などにかんするものであった）、委員会は、私たちの願いを聞き届ける可能性を見出しませんでした。〈…〉委員会に対し、私たちをコンクールへの参加から外してくださるようお願い申し上げます」と述べ、14人はその場で退場してしまった。クラムスコイは以来、当局のブラックリストに入れられ、監視下に置かれることになった。

以上の「14人の反乱」の経緯については、事件直後の13日、クラムスコイ自身が、トゥリノフに手紙で、生き生きと伝えている。⁶⁷³

「反乱」を率いたクラムスコイは同志たちと「美術家組合 Артель художников」⁶⁷⁴を結成し、さらに1870年11月には、その後身として、「移動展派 Товарищество передвижных художественных выставок(Передви́жники)」を創設する⁶⁷⁵。

⁶⁷³ Порудоминский В.И. Там же. С.65-70.

Цомакион А.И. Иван Крамской. Глава II. Что вынес Крамской из Академии художеств.

⁶⁷⁴ この組合の規約の最初にはこう記されていた。「美術家組合の目的は、第一に、共同の労働により、自身の物質的狀態を堅固ならしめ、また保障し、自身の作品を公衆に販売する可能性を組合員に与えること、第二に、芸術のあらゆる分野にわたる受注を開始すること」

こうして組合は、肖像画、絵画の複製、書籍の挿絵、イコノスタシス（聖障）、金銀製品の彩色、各種彫刻など、ありとあらゆる分野にまたがる注文を旺盛にこなしていく。モスクワの救世主大聖堂の丸屋根の프레스コも、その一環であり、アカデミーでの旧師、マルコフ教授の頼みによるものだった。クラムスコイは4ヶ月間で、50枚のデッサン、8枚の実物大の下絵を描いたというから凄まじい。さすがの彼も、「もう、あんな仕事はごめんだ」というほどであったが、当時の彼の精力と気魄のほどがうかがえよう。

Порудоминский В.И. Там же. С.79-87.

⁶⁷⁵ その規約の第一はこういうものだった。「協会の目的は、帝国のあらゆる都市において、次のような種類の移動展覧会を行うことである。a)地方の住民に、ロシア美術に接する機会を提供すること、b)社会における芸術愛好を涵養すること、c)画家たちの作品販売を容易ならしめること」

Порудоминский В.И. Там же. С.100-102.

この美術家集団（発足時 17 人）は、創設の経緯からうかがわれるように、反権力的な志向をもち、ペテルブルク美術アカデミーの、題材、テーマ、手法などの面での束縛を脱して、民衆の生活を多面的に描きつつ、ロシア各地を巡回して美術展を開き、美術に接する機会の乏しかった地方の民衆の啓蒙に努めた。その意味で、絵画におけるナロードニキ（人民主義者）であったといえる。ゲー、ペローフ、レーピン、サヴラーソフ、シーシキン、ヴァスネツォフ兄弟、クインジ、ポレーノフ、ヤロシェンコ、スーリコフ、マコフスキー、サヴィツキー、レヴィターン、セローフ等々、19 世紀後半の名だたる画家の大半がこの派に属していたといっても過言ではない。記念すべき第一回展覧会は、ペテルブルクで 1871 年 11 月 29 日に行われ、47 作品が展示された。クラムスコイは、『ルサルカたち』を出品。ゴーゴリの『ディカーニカ近郷夜話』収録の『五月の夜（または水死女）』に材をとったものだ⁶⁷⁶。クラムスコイとトルストイの出会いの 2 年足らず前のことであった。



1860 年代のクラムスコイ⁶⁷⁷

⁶⁷⁶ この移動展派のルーツの一つが、写真の修正係兼画家としての、ロシア各地の巡回だったわけだ。その間の「厳しい修行」は、写真と絵画における「画竜点睛」とはなにか、ということ、若きクラムスコイに徹底的に考えさせたにちがいない。そして、それぞれのジャンルの本質についても。

クラムスコイは、写真と絵画の両分野における恩人にして親友のトゥリノフの肖像画を残しているが、どこか写真風の絵である。おそらく、この絵は、絵画と写真という 2 つのジャンルにかんする思索の一つの結論であり、トゥリノフへの恩返しでもあったと思われる。

のちに、クラムスコイは、作家ドストエフスキーが亡くなったとき、その肖像画がヴァシーリー・ペローフの描いたもの一枚しかないことを惜しんで言う。「写真が、人間の顔がもつすべてを捉えることは、稀である」と（«Художественный журнал», 1881, март）。

Порудоминский В.И. Там же. С.32.

⁶⁷⁷ Цомакион А.И. Там же. (第 2 章冒頭に掲載)

http://az.lib.ru/c/comakion_a_i/text_0004.shtml (2015 年 9 月 15 日最終閲覧)

絵画はたんなる絵画にあらず

このように、たしかにクラムスコイは、庶民のなかから生まれた「絵画のナロードニキ」であったが、これには一つ注釈がある。ロシアの絵画は、たんなる絵画ではなかったということで、この点を強調しておきたい。

たとえば、絵画の意識的、自律的な表現の歴史を重ねてきたフランスのポール・セザンヌのような画家なら——彼はクラムスコイより1歳半年下にすぎない——、良くも悪くも「ただの絵」だとは言える。飽くことなくサント・ヴィクトワール山を描きつづけたセザンヌに向って「あなたの描く山は何を意味しているのか」と聞いてもしようがないだろう。

が、ロシアでは事情がぜんぜんちがう。近世、近代の絵画の歴史を欠いたこの国では、クラムスコイらが近代絵画の事実上の第一世代であり、その表現は、「個性化の道」でもあれば、社会的、政治的、倫理的な理想探求でもあり、民衆運動、革命運動などともつながっているからだ。クラムスコイの弟子であったレーピンの回想によると、彼は師にこう忠告されたことがあるという。

もし、あなたが社会に奉仕したいのなら、社会をそのあらゆる関心、現象において知り、理解しなくてはならない。そのためにはあなたは、最高に教養ある人間にならねばならない。画家は社会的現象の批評家だからだ。どんな絵を描こうと、そこには、その画家の世界観が明瞭に映ずることになる。⁶⁷⁸

Если вы хотите служить обществу, вы должны знать и понимать его во всех его интересах, во всех проявлениях; а для этого вы должны быть самым образованным человеком. Ведь художник есть критик общественных явлений: какую бы картину он ни представил, в ней ясно отразится его мирозерцание <...>

クラムスコイがトルストイと会う前年に発表した、代表作『荒野のキリスト』(1872)もまた、後で見るように、そういう個人的かつ普遍的なものを目指した全一的な表現である。トルストイの探求と、本質においてなんら変わらない。ちがうのは、クラムスコイが「下から」出てきたことだけだ。

クラムスコイが生涯、自分がやっていることは本物ではない、なにか足りないという焦燥感にかられつづけたのも、このことと関係があるだろう。どんな絵画表現がやれたとしても、言い尽くせぬ部分は残るのだ。それが、彼の非常に個性的な書簡や論文に溢れ出る。これは、トルストイを絶えず突き動かしていた飢渴と、文学作品からの「逸脱」にも通じるのである。

だから、クラムスコイが率いたこの総合的で熾烈きわまる世界探求、人間探求は、わずか一世代の後に、いわゆる抽象絵画から政治的ポスターにいたるまで、じつに多種多様な傾向

⁶⁷⁸ Порудоминский В.И. Там же. С.50.

Репин И.Е. Далекое близкое. М.: Искусство, 1953. Иван Николаевич Крамской (памяти учителя), IV Учитель.

を生み出すにいたるのだが、これは決して偶然ではない。大ざっぱに言って、それまで一つの形で激しく追求されていったものが、急激に成熟し、膨張の果てに互いに分離したというだけのことだ。

トルストイがクラムスコイと出会った頃は、この画家の指導のもとで一大美術運動が展開されようとしていた、まさしくその時期に当たっていた。このことは銘記すべきである。

『アンナ・カレーナ』を地で行く三角関係

トルストイとの接点、そして『アンナ・カレーナ』との接点を考えるうえで、もう一つ見逃せないのが、クラムスコイの、当時としては尋常でない恋愛、結婚だ（しかも、それが、彼のアカデミー時代の不断の研鑽、試行錯誤と並行して起きている点に注意されたい）。

クラムスコイが、未来の妻——ソフィア・ニコラエヴナ・プローホロワ（1840—1919）——に出会ったのは、1859年のことであったが、彼女は、友人の画家ポポフの内縁の妻で、しかもポポフは別の女性と正式に結婚していた。そのポポフは3年後、ソフィアを置いて、外国に去ってしまう。

クラムスコイは、自分は、「結び目を解くこと（развязка）を、早めはしなかったし、そもそも解くことを考えもしなかった」*«Развязки я не ускорил да и не думал о развязке»*⁶⁷⁹と、結婚前に、恩人で親友のトゥリノフに、手紙で書いているが、しかし、実際にはどうだったろうか。そんな気はなくても、「ちょっとした眼差しや微笑みで」、一瞬で動き出すのが男女関係というものだ（『アンナ・カレーナ』6章2節）。

いずれにせよ、もはや抜き差しならぬところに追い込まれたクラムスコイは、世間や仲間の誹謗中傷を覚悟のうえで、この「淪落の女」と結婚する。「14人の反乱」の前年のことであった。

おそらく、この二つのできごとは、彼の心中でつながっていたと思われる。もし、自分が彼女と結婚しなければ、彼女は完全に孤立し、社会的に葬られてしまう…。それは、社会的、倫理的な問題でもあった。

もし、ぼくが彼女と結婚しなければ、あなたは、ぼくのごことは受け入れるだろうが、彼女のごことは受け入れまい。だめだ、そんなしきたりはない、とか言って。ぼくのごことは尊敬してくれるが、彼女のごことはそうではない。ぼくと正式にではなく暮しているからね。もっとも、あなた一人じゃなくて、みんながそう言うことだろう。（上のトゥリノフ宛の手紙）

Если я не женюсь, Вы принимаете меня, а ее нет, нельзя, не принято. Вы уважаете меня, а ее нет, она живет незаконно со мной, да и не Вы одни, а все так же скажут.

⁶⁷⁹ Порудоминский В.И. Там же. С.87-92.
Иван Николаевич Крамской. Письма, статьи. 1965. Т.1. С.2.

ちなみに、トルストイが、既婚の農婦アクシーニャへの恋愛と並行して、農奴解放の試みに取り組んだのも、まさにこの時期のことであった。しかし、トルストイは踏み越えなかったが、クラムスコイは踏み越えたのである…。「神の名において、道徳と不道徳の境界をぼくに引いて見せてほしい」«Проведите же мне во имя Бога черту между нравственным и безнравственным» (同上)。彼は、苦悩のすえ、決然とこう言う。

だが、重苦しい三角関係の記憶、疑惑、不信、そして社会の偏見は、彼に付いて回るだろう。画家ポポフが、出奔の数年後に死んだとき、クラムスコイは、妻宛の手紙で、こう本音を吐いている。

ぼくは、彼の死を喜んでいるわけではない。でも、彼がもはやいないこの世界で、ぼくは前より楽になった。⁶⁸⁰

Моя дорогая жена теперь, моя любимая Соня, что-то дурное есть во мне, безотчетное, странное, давно забытое с тем, чтобы никогда не возвращаться к нему. Я не рад его смерти, но мне легче на свете без него.

『アンナ・カレーニナ』にも痕跡

こういうクラムスコイだから、後年彼が『アンナ・カレーニナ』に人一倍の関心を寄せたとしても、それはむしろ当然のことであるし、画家との交流がトルストイの心中に、そしてこの作品に深い痕跡を残したことも、驚くに当たらないのだ。

『アンナ・カレーニナ』には、ミハイロフという画家がでてくるが、彼のモデルがクラムスコイであることは、すでに通説となっている。

その根拠は以下のとおりだ。

- ① クラムスコイの弟子であった画家イリヤ・レーピンは、スターツフあての書簡（1878年4月12日付）で「ミハイロフはクラムスコイにそっくりだ！」と述べている⁶⁸¹。
- ② 二人の出自にも共通点がある。ミハイロフは、「モスクワの貴族の従僕（московский камер-лакей⁶⁸²）の息子で、教育はまったく受けなかったが、アカデミーに入った」という設定で、ヴロンスキーの友人で、術学的なゴレニーシチェフは、「近頃よく見かける、新種の野蛮人さ」と言っている（5章9節）。要するに、ミハイロフは、庶民の出で、体系的な教育は受けられず、独学でアカデミーに合格し、画家となった苦労人なわけだが、これは、さきほどみたように、クラムスコイと重なる。

⁶⁸⁰ Там же. Т.1. С.56.

Порудоминский В.И. Там же. С.87-92.

⁶⁸¹ Л.Н.Толстой и художники: Л.Н.Толстой об искусстве. Письма, дневники. Воспоминания / Сост.и авт.вступ.статьи И.А.Бродский. М.: Искусство, 1978. С.68.

⁶⁸² камер-лакейは、宮廷、貴族の宮殿の室内で働いた召使、従僕で、食卓の給仕、扉の開け閉めなどを行った。

- ③ ミハイロフもやはり肖像画の名手であり、しかも、クラムスコイの『荒野のキリスト』(1872)などを思わせるキリスト像を制作して話題を呼んでいる。

だが、筆者(佐藤)の考えでは、この相似は、じつは非常に根が深く、トルストイその人とも通じるものを持っているので、ここで付言しておこう。

『荒野のキリスト』は、1872年秋の移動展派の第2回展覧会に出品され、さまざまな評価、批判を呼んだ。そのなかには、歴史主義的である、つまり、キリストを相対的な歴史的現象として描いているとの批判もあったが、クラムスコイはこう述べている。

私は自分自身のキリストを描いたのです——私だけのキリストを。私という一個の人間が、自分の内面から想像し得るかぎりの人間のタイプがああ絵にはある。それ以上でも以下でもありません。⁶⁸³

Я написал своего собственного Христа, только мне принадлежащего, и насколько я, единица, представляю из себя тип человека, настолько, стало быть, там и есть – ни больше, ни меньше.

一方、ミハイロフは、軽薄なりベラル派のゴレニーシチェフに、あなたが描くキリストは「人神 *человекобог*」だ、と言われて、「私は、自分の魂のなかにはないキリストを描くことはできなかった」と反論したうえ、キリストこそは「芸術に与えられた最大のテーマ」だと思おう、と言っている(『アンナ・カレーニナ』5章11節)。

つまり、ミハイロフにとってもクラムスコイにとっても、キリストを描くことは、人間を探求することであると同時に、自分自身を探求することでもあり、それは真に普遍的な人間像となるべきものであったということだ。ここに、トルストイの思想との接点もあった。作家がこの点を、クラムスコイに突っ込んで質さなかったはずがない。おそらく、ミハイロフの言葉は、トルストイが画家自身の口から聞いたものではなかったか。

- ④ ミハイロフは、『ピラトの説諭 *Увещание Пилатом*』という大作を制作中だが、これは、クラムスコイの未完の超大作『笑い——ユダヤの王、万歳！ *Хохот. Радуйся царю иудейский!*』(1870—1880年代)をほうふつとさせる。いずれも総督ピラトによるキリストの尋問を題材とした作品だ(『マタイによる福音書』27章、『マルコによる福音書』15章など)。クラムスコイの題名は、総督の兵士たちが「ユダヤの王、万歳！」と叫び、キリストを嘲笑したことにもとづく。これは、あとで述べるように、『アンナ・カレーニナ』の主なテーマの一つと重なり合うのだ。
- ⑤ ミハイロフは、「ヴァシリチコヴァの肖像画」を描いているが、クラムスコイもまた、「ヴァシリチコヴァ公爵夫人の肖像画」(Портрет княгини Екатерины Алексеевны

⁶⁸³ Иван Николаевич Крамской. Письма, статьи. 1965. Т.1. С.133. Порудоминский В.И. Там же. С.192.

Васильчиковой, 1867) を描いている——「肖像画家としてはすばらしいよ。君たちはあの男が描いたヴァシリチコヴァの肖像を見たことがないかい？」(『アンナ・カレーニナ』5章9節)。

この「ヴァシリチコヴァ公爵夫人の肖像画」は、クラムスコイとしては、「美術家組合」の旗揚げから間もない、最初期の肖像画で、ヴァシリチコヴァ夫人をふくめ、同家の4人の肖像画を一度に描く仕事だった。すなわち、イラリオン・ヴァシーリエヴィチ

(И.В.Васильчиков, 1777-1847) と、その二人の息子ヴィクトルとイラリオン

(И.И.Васильчикова, 1805-1852, В.И.Васильчикова, 1820-1878)、それに上記の夫人エカテリーナ・アレクセエヴナ (Е.А.Васильчиковой, 1825-1888) だ。そのうち二人は、すでに故人になっていたのもので、写真をもとに制作した⁶⁸⁴。

イラリオン・ヴァシーリエヴィチは、われわれにはおなじみで、1812年の祖国戦争の英雄だ。常に後衛にあつて、ロシア軍がモスクワ放棄後にモスクワ川を渡河するに際しては、騎兵隊を指揮して掩護し、全軍を撤退させる一方、囫部隊を要所要所に配置し、追撃してきたフランス軍前衛をみごとに撒くという大功を立てている。

その息子ヴィクトルもやはり有名な軍人で、クリミア戦争のセヴァストーポリ防衛戦を指揮した。戦闘のほか、医療体制、食糧事情の改善にも成果を上げ、パーヴェル・ナヒモフ提督は、「もし彼が死ぬようなことがあったら、セヴァストーポリには大いなる不幸だ」と言ったという。

こういう一家だったので、セヴァストーポリ防衛戦に参加し、1812年を舞台とした

『戦闘と平和』を書いたトルストイは、とくに深い関心をいただいていたと思われる。クラムスコイによる肖像画のことは、彼と会う以前から知っていたであろうし、会ったときにもその話が出たのではないかと筆者(佐藤)は考える。

以上の点から見て、『アンナ・カレーニナ』におけるミハイロフは、トルストイの総合的なクラムスコイ観であると言える。たんにクラムスコイをモデルとしているばかりでなく、作家の深い理解と共感が込められており、『アンナ』の根底にも触れていることは明らかである。しかも、このミハイロフが、アンナの愛人ヴロンスキーに頼まれて、彼女のみごとな肖像画を描いているのだ。この肖像画を見た主人公レーヴィンは、まるで生きた絶世の美女の前にいるように感じる。

それは絵画などではなかった。生ける美女が、黒髪を波打たせ、両肩と両腕を露わにし、もの思わしげな微笑を、柔かな産毛におおわれた唇に浮かべ、勝ち誇ったように、

⁶⁸⁴ 以上は、これらの作品を所蔵するペルミ国立美術館の公式サイトによる。
http://permgallery.narod.ru/index/kramskoj_i_n_portret_knjagini_e_a_vasilchikovej_1867/0-143
(2015年9月15日最終閲覧)

また優しく、彼を眺め、その眼で彼をどぎまぎさせた。この絵の女性が生きていないとすれば、それはただ、その女性が現実の女としてはあまりにも美しいからにすぎなかった。(7章9節)

Это была не картина, а живая прелестная женщина с черными вьющимися волосами, обнаженными плечами и руками и задумчивой полуулыбкой на покрытых нежным пушком губах, победительно и нежно смотревшая на него (*Левина) смущавшими его глазами. Только потому она была не живая, что она была красивее, чем может быть живая.

そこへ、絵そのままに美しいアンナが、レーヴィンの前に現れる。

この小説を読んだ画家は、トルストイの「クラムスコイ論」と、さらには、自分の傑作までそこに見出してどう思っただろうか。じっさいにアンナを絵画で表現する意欲をかきたてられたとしても不思議はないだろう。自分なりにアンナの本質、そしてトルストイの芸術、思想の急所をずばり突いた絵をものしてやろう。総合的なクラムスコイ観に対しては、総合的なトルストイ観をもって応えねばならぬ、と。



イヴァン・クラムスコイ『笑い——ユダヤの王、万歳！ Хохот. Радуйся царю иудейский!』
(1870—1880年代、ロシア美術館所蔵)⁶⁸⁵

⁶⁸⁵ http://artclassic.edu.ru/catalog.asp?ob_no=24261&cat_ob_no=13018 (2015年9月15日最終閲覧)

1883年という年

そうして、ついに 1883 年に『見知らぬひと』が描かれるのだが、このころクラムスコイは、深刻な危機のさなかにあった。

すでに述べたように、彼は、「移動展派」の組織者、総帥として、ロシア美術を一変させる活動を展開してきたわけだが、アレクサンドル三世即位とともに反動期が来ると、仲間の多くが共同の活動に幻滅し、彼のもとを去っていった（ゲー、ペローフ、クインジなど）。彼らを援助してきた実業家でパトロンのパーヴェル・トレチャコフとの関係もこじれた。クラムスコイの健康も衰えた…。

1880年に画家は、破局が近づきつつあるのを感じ、アレクセイ・スヴォーリンにこう書いている。

時は過ぎ、私ももう 43 歳です。まだ私に持ち時間があるととしても、元気で明晰な意識を保てる期間はせいぜい 5-6 年でしょう。⁶⁸⁶

Время уходит, мне уже 43 года и если я имею время еще, то не больше 5-6 лет бодрых и ясных.

果たせるかな、クラムスコイは、1887年に 49歳で死ぬ。レーピンの回想によると、晩年のクラムスコイは、孤独できわめて苛立たしい状態にあったという。ひどい動脈瘤ができ、アンナ・カレーニナと同様に、モルヒネを常用していた⁶⁸⁷。アンナのモルヒネ中毒とその帰結を読んだ彼はどう思ったろうか。

だが、いちばん深刻な問題は、おそらく、彼の創作のありかたとかかわっており、これが健康状態と気分にも影響していたと思われる。1883年1月20日、彼はトレチャコフへの手紙のなかで心情を吐露している。

私は一般の人から注文を受けて絵を描くのに疲れました。〈…〉私はやむなく必要に迫られて肖像画家になったのですが、もしかすると、実際、それ以外の何者でもないのかもしれませんが。きっと、トルストイと会うために、一日、二日モスクワに行くことになると思います。⁶⁸⁸

Я устал иметь дела с публикой по заказам. 〈…〉 Я сделался портретистом по необходимости. Быть может, я и в самом деле ничего больше, как портретист 〈…〉 Очень возможно, что я приеду на день или два в Москву, чтобы повидаться с Л.Н.Толстым.

⁶⁸⁶ Иван Николаевич Крамской. Письма, статьи. 1965. Т.2. С.57.

⁶⁸⁷ Репин И.Е. Там же. С.184-187.

⁶⁸⁸ Иван Николаевич Крамской. Письма, статьи. 1965. Т.2. С.103.

かつての「絵画のナロードニキ」が、時流に抗するどころか、皇后マリア・フョードロヴナ⁶⁸⁹をはじめ貴顕の肖像画も注文に合わせて描く御用画家になりさがった、と内心忸怩たるものがあったわけだ。そのクラムスコイがなぜ、トルストイに会おうと思いついたのだろうか？ もしかすると彼は、自分の直面する問題について、尊敬する作家と話し合いたかったのかもしれない。そして、自分の将来描くべき作品——「本物の理想的な настоящее и идеальное」作品についても…。

ちなみにトルストイは、前年の1882年に、あの『懺悔』を「ロシア思想」誌に発表していた。自分とはちがう方向にこの人は果敢に踏み出そうとしている、とクラムスコイは驚嘆していたにちがいない。

と同時に、その賞賛は、けっして手放しなものではなかったはずだ。庶民出身の彼からみると、大地主貴族の「懺悔」とはいったいなんだろうか？ 『アンナ・カレーニナ』において、土地、屋敷を捨てることなど思ってもみないレーヴィンを救いながら、すべてを捨てたアンナを破滅させる作者とはなにか？… 畢竟、理想とはなんであるか？ おそらくクラムスコイは、これらすべてについて、腹を割って話したかったのではないだろうか。だが、このとき二人が会うことはなかった。⁶⁹⁰

さて今や、『見知らぬひと』とアンナ・カレーニナを比較することができる。

『見知らぬひと』とアンナ・カレーニナ

まず、アンナの容貌を思い出してみよう。彼女はこわい黒髪をしている。彼女の「いたるところでカールした髪」(18, 72) は、彼女の「ありあまったなにか」(18, 66)、一種デモーニッシュなパトスのシンボルとして、再三強調される。アンナが生まれたオブロンスキー家には、情熱的な南方の血が混ざっていることが暗示されているのだ。しかも、彼女の髪は、「いつも後頭部とこめかみで勝手にカールしている」(18, 84)。

『見知らぬひと』もまた、なにか強烈な情念を秘めているように見え、こめかみなどでできつくカールした黒髪をもつ。

⁶⁸⁹ 1882年に、ペテルブルクのアニチコフ宮殿で描いている。この絵をめぐる、当局との不愉快なアクシデントは、クラムスコイの苦悩をかいま見せるものだ。宮殿の一室で、絵を手直ししているところに、宮廷財務長官が姿を現し、他の人々の前で、「ぜんぜん似ていないじゃないか、料金も高すぎる、ほかの注文者からはこんなに取りたくないせに」などといきなり叫びだし、文字どおり面罵したのである。クラムスコイは帰宅するや、アトリエに飛び込み、首に縄を巻きつけられたキリストの頭部を描いた（これは、大作『笑い』のモチーフにも通底しているだろう）。アニチコフ宮殿は、クラムスコイの心中で、権力の一つのシンボルになったのかもしれない。間もなく本文で述べるが、『見知らぬひと』の背景には、この宮殿の厳しいシルエットが聳えている。

Порудоминский В.И. Там же. С.322-324.

⁶⁹⁰ 1883年5月に、モスクワのウスペンスキー大聖堂で、アレクサンドル三世の戴冠式があり、クラムスコイは、注文で水彩アルバムを描くために、参列しなければならなかった（Порудоминский В.И. Там же. С.318-329）。それで、どうせならヤースナヤ・ポリャーナまで足を延ばそうと思ったのだろうが、すでに体調不良に苦しんでいた画家は、この仕事だけで疲労困憊し、心ならずも断念したのではなかろうか。

さらに、アンナの他の描写をひとつわり見回してみると――

「濃いまつげで黒く見える輝かしい眼」 «Блестящие, казавшиеся темными от густых ресниц, серые глаза» (18, 66)

「かなり豊満な身体」 «довольно полное тело» (18, 68)

「古い象牙を思わせる、研磨したような豊かな肩と胸、手首のほっそりした、まるみのある腕」 «точены, как старой слоновой кости, полные плечи и грудь и округлые руки с тонкою крошечною кистью» (18, 84)

「研磨したような、しっかりした首」 «точеной крепкая шея» (18, 84)

「細い腰」 «тонкая талия» (19, 185)

「彼女はいつものように、ひじょうに真っ直ぐな姿勢で立っていた」 «Она стояла, как и всегда, чрезвычайно прямо держась» (18, 84)

これらアンナの描写すべてが、『見知らぬひと』と完全に一致している。

外見、容貌という点でもう一つ、『見知らぬひと』の重要な特徴をなすのは、この女性がいくぶん目を細めていることだ。あたかも内心を見透かされたくないような、他人に対して構えているような…。ところで、これはまさに、アンナの立場が苦しくなるにつれて彼女に現れた癖であった。ヴロンスキーの領地、ヴォズドヴィーージェンスコエにアンナをおとずれたドリーは、「アンナの、目を細める奇妙な新しい癖」に気がつく。

アンナが目を細めるのは、まさに話題が生活の内奥にふれたときであるのを、ドリーは思い出した。『まるで彼女は自分の生活にたいして目を細めているみたいだわ――すべてを見ないようにするために』とドリーは思った。(6章21節)

赤と黒

絵の色調もアンナを連想させる。絵は黒、赤（とばら色）、白の三色で構成されている。『見知らぬひと』はほぼ黒づくめの服装で、それに帽子のダチョウの羽飾りの白色と唇の紅が鮮やかだ。背景はばら色である。

一方、アンナの描写につかわれる色も、この3色が主で、他の色はほとんど使用されない。

統計によると、赤い色を現す言葉が 34 語、黒が 20 語、白が 16 語である⁶⁹¹。例を挙げると

「黒い、いたるところ波打っている髪」 «черные, везде вьющиеся волосы» (18, 84)

アンナが初めてヴロンスキーと舞踏会で踊ったときに着ていた「深い切込みの入った、黒いビロードのドレス」 «черное, низко срезанное бархатное платье» (18, 84)

「ヴロンスキーがアンナと話すたびに、彼女の目には喜悅の輝きが燃え上がり、幸福の微笑が彼女の赤い唇をゆがめた」 «Каждый раз, как он говорил с Анной, в глазах ее вспыхивал радостный блеск, и улыбка счастья изгибала ее румяные губы» (18, 86)

アンナの顔に現れる「闇夜の火事の恐ろしい輝き」 «Страшный блеск пожара среди темной ночи» (18, 153)

死にゆくアンナが見る「闇のなかで消えつつある蠟燭」 «Потухающая свеча во мраке» (19, 349)

前に述べたように、赤と黒は、アンナの悲劇的運命の象徴となっているだろう。この二色は、ロシアでは葬式を連想させ、また欧州全域でサタンの色である。黒は闇と冥界を表し、赤はそこに燃え上がる炎だ。

アンナの白は、あくまで愛を貫いた彼女の純粋で無垢な面を表しているように、筆者には思える。

流行の先端を行く装い

『見知らぬひと』の装いは、アンナと比べてどうか。唯一この点に、多少の矛盾があるかもしれない。T.ユデンコワによると、『見知らぬひと』は、1880年代の流行の服装をしている。

彼女の装いは——優雅で軽い羽毛で飾った帽子『フランソワ』、ごく薄手の皮で縫った『スウェーデン』の手袋、クロテンの毛皮と紺色の縞子のリボンで飾った『スコベレフ』のコート、マフ、黄金のブレスレット——といったものだ。すべてこれらは、1880年代（*つまり絵画の制作年代——佐藤）に流行した、女性のファッションであり、高価な優雅さを追求した装いである。⁶⁹²

⁶⁹¹ Голушкова Е.А., Лебедева И.В. Там же. С.141-148.

⁶⁹² Мастера живописи. Крамской. М.: Белый город, 1999. С.56

Ее наряд — шляпа «Франциск», отделанная изящными легкими перьями, «шведские» перчатки, сшитые из тончайшей кожи, пальто «Скобелев», украшенное собольим мехом и синими атласными лентами, муфта, золотой браслет — все это модные детали женского костюма 1880-х гг., претендующие на дорогую элегантность.

T.ユデンコワの説明を補足すると、帽子「フランソワ」は、フランス王フランソワ一世時代の帽子を思わせるので、この名があり、1820年代から流行している。また帽子には大粒の真珠のブローチがついていて、効果的なアクセントになっている。「スコベレフ」のコートの素材はビロードだ。黄金のブレスレットの太さにも注目されたい。

一方、『アンナ・カレーニナ』の舞台となっているのは、1873年から1874年にかけての冬から、1876年7月までだから、『見知らぬひと』の服装とは、数年から10年ほどの開きがあることになる。

だが筆者は、この食い違いは本質的な意味をもたないと考える。概してクラムスコイは、肖像画を描くにあたって、服装にあまり注意を向けなかった。

ここで肝心なのは、『見知らぬひと』が最新の流行ファッションをこれ見よがしに誇示する、その意図である。「概して、あまり金をかけずに装うことの上手な」(1章33節)アンナはつねに上品な装いをしていたから、彼女には相応しからぬことではあるまいか？ 否、そうではない。アンナがまさに意図的にそうしたことが一度ある。それは、つぎに述べる、『見知らぬひと』の絵の背景とともに、謎を一気に解いてくれるのである。

謎を解く鍵は絵の背景に

『見知らぬひと』の絵の背景が、サンクトペテルブルクのネフスキー大通りのアニチコフ宮殿付近であることは、すでに専門家らによって確認されており、今日疑う人はいない⁶⁹³。

つまり、『見知らぬひと』はネフスキー大通りを、ネヴァ川の方向から南に馬車を走らせてきて、アニチコフ橋を渡らずに、その手前のアニチコフ宮殿から右に折れて、フォンタンカ川(運河)の河岸通りを進もうとしていることになる。河岸通りを行くと、ニコリスクー聖堂、マリインスキー劇場などがある。

季節と時刻もおおよそ特定できる。背景の木々にはほとんど葉がないのに、『見知らぬひと』はかなり軽装で、合着の毛皮外套(шубка)を着ている。馬車もオープンであることから、季節は早春と考えられる。

時刻は一見して、早朝か日暮れどきだが、光源が左側つまり西にあるので、夕刻だとわかる。

これに似た状況は、『アンナ・カレーニナ』のなかにあるだろうか？ 然り。

1875年の「早春」の夕刻(6章23節)、アンナは——『見知らぬひと』とまったく同じく

⁶⁹³ Порудоминский В.И. Там же. С.334-335.

——短い毛皮外套（шубка）とマフをまとい（5章29節）、ネフスキー大通りを通って、マリインスキー劇場に向おうとしていた——深い悲しみと絶望と、ある決意を秘めて。

運命の日

その運命の日をはさんで数日間、アンナとヴロンスキーは、ペテルブルクでホテル住まいをしていた。このホテルは特定できるので、まずはそれを押えておこう。

ふたりが泊まっていたのは、「最高のホテルの一つ」（5章28節）、草稿では、「最高のペテルブルクのホテル」となっている（20, 436）。おそらくそれは、1875年1月28日（ユリウス暦）に開業した「ヨーロッパホテル гостиница «Европейская»」（現グランド・ホテル・ヨーロッパ Гранд Отель Европа）だろう。ヴロンスキーは見栄っ張りで新し物好きのところがあるから、1875年春に久々にペテルブルクに戻ってきて、創業まもない欧州屈指の高級ホテルに泊まらない手はない。⁶⁹⁴

ちなみに、トルストイが『アンナ・カレーニナ』のこの一連の場面（つまり5章の最後の数章）を書いていたのは、1876年末のことである⁶⁹⁵。

さて、本筋にもどると、アンナのその日は、5章28-33節に描かれる。この日については、本稿の前章でも述べているが、「見知らぬひと」＝アンナの内面をくまなく追体験するため、重複を厭わず、時系列にそって再現する。

早朝彼女は、夫のもとを去ってから初めて（そして最後に）、9歳の誕生日を迎えた息子セリョージャを、人目を忍んで訪れる。興味深いのは、作者がこの場面に「見知らぬひと」という言葉を用いていることだ。

見知らぬひとの当惑に気がついたカピトヌイチ（*セリョージャと仲がよい門番——佐藤）は、自分で彼女のほうに出ていった。（5章29節）

Заметив замешательство неизвестной, сам Капитоныч вышел к ней.

*下線は佐藤。

アンナは、ほんの束の間息子と会った後、さびしいホテルの部屋で、ひとり悲しみに沈む。「もうこれでおしまいだ。私はまたひとりぼっちになってしまった」（5章31節）。

だが、どんなに辛くても彼女は、悲しみを愛人ヴロンスキーと分かち合うことはできない。

彼女の悲しみは（*息子のこと——佐藤）、それが彼女ひとりだけのものであるがゆえに、いよいよ強かった。彼女はそれを、ヴロンスキーと分かち合うことはできなかった

⁶⁹⁴ もう一つの老舗「ホテル・アストリア」はずっと遅れて、1913年の創業である。

⁶⁹⁵ Л.Н.Толстой. Анна Каренина. Изд. Подгот. В.А.Жданов и Э.Е.Зайденшур. М., 1970. С.812.

し、そうしようとしなかった。彼女は、ヴロンスキーが彼女の不幸の主たる原因であるにもかかわらず、彼女が息子に会う問題は、彼にはまったく取るに足らぬものに思えることを知っていた。彼女は、彼が彼女の苦しみの深さの一切を理解するとがけっしてできないのを知っていた。彼女は、このことに触れるときの彼の冷淡な調子のせいで、自分が彼を憎むであろう、ということを知っていた。彼女は、このことをこの世の何にもまして恐れていたのも、息子にかんすることはすべて彼に隠していたのである。(5章 29節)

この間、愛人ヴロンスキーは、自分たちが社交界から閉めだされたことを知り、善後策に奔走している。この男はそれなりに誠実ではあるが、社交界なしでは生きていけない根無し草である。極言すると、ある人工的な環境がないと生きられぬプランクトンのような存在だ。だから、他者への理解と愛情を根本的に欠いているところがある。ということは彼は、自分と不可分の環境にもどるために、遅かれ早かれアンナを棄てるだろう——。アンナはこうはつきり意識しているわけではないが、漠然たる恐怖と、相手の煮え切らなさの不甲斐なさへの怒りをつねに感じている。

たまたま、今晚のマリンスキー劇場の切符が手に入るということを知ったアンナは、全社交界が集まる劇場へ行こうと思いつく。それも、スキャンダルで有名な叔母のワルワラ公爵令嬢といっしょに、思い切り派手に着飾って。

ヴロンスキーは驚き呆れる。なぜなら、「そんな派手な格好で、だれ一人知らぬ者のない公爵令嬢といっしょに劇場にすがたを現すということは——たんに、自分が身を滅ぼした女であることをみずから認めることになるばかりでなく、社交界に挑戦状を叩きつけることに、すなわち、社交界と永遠に絶縁することになる」(5章 33節)

「でも、いったいあなたは分からないんですか...」彼は言いだした。

「分かりたくなんかないわ！」彼女はほとんど叫ぶように言った。「分かりたくなんかない。私は自分のしたことを後悔している？いいえ、絶対に。もしまた同じことがあったとしたら、やっぱり同じことになったでしょうよ。私たちにとって、私にとって、そしてあなたにとって、大事なものはひとつだけ。私たちがおたがいに愛し合っているかどうか、ということよ。ほかのことなんか考える必要ないわ。なんで、ここでは、私たちは別々に住んでいて会わないの？なんで私は行ってはいけないの？私はあなたを愛しているわ、だからどうだっていいのよ」(5章 32節)

アンナは、ヴロンスキーの執着する社交界に「手袋を叩きつけ」、自分の愛情を示すとともに、相手の愛の強さをはかり、自分をとるか社交界をとるか、と迫ったのである。

だから、アンナの行為は、ほかのだれよりもヴロンスキー自身に対する強烈なデモンスト

レーションなのだ。「大事なのはひとつだけ。私たちがおたがいに愛し合っているかどうか、ということよ。ほかのことなんか考える必要ないわ」——そういう自分の覚悟を、社交界のまわりでうろろうしているヴロンスキーに見せつけるために、アンナはあえて劇場に乗り込み、社交界に挑戦状を叩きつけ、絶縁してみせたのである。それが挑戦状にほかならぬことを自他にはっきり示したのが、このときの彼女の、流行の先端を行く華麗な装いであった。

彼女は、パリであつらえた、ビロードをあしらった、胸の開いた明るい絹のドレスを着て、白い高価なレース飾りを頭につけた。これは彼女の顔を縁取り、彼女の鮮やかな美貌をとくに効果的に引き立てていた。(5章32節)

она «одета в светлое шелковое с бархатом платье, которое она сшила в Париже, с открытою грудью, и с белым дорогим кружевом на голове, обрамлявшим ее лицо и особенно выгодно выставлявшим ее яркую красоту» .

まさに捨て身でヒロイックな行為であったが、アンナは劇場で、文字どおり公衆の面前である上流婦人に辱められ、さらし者になる。カルタソワ夫人が、カレーニナと同席するのは汚らわしいと言い放ち、これ見よがしに退席したのだ。

草稿によると、このとき舞台にかかっていたのはヴェルディの『アイーダ』で、イタリアの名歌手カルロッタ・パッティがタイトルロールを歌った(20, 450)⁶⁹⁶。愛のために王位も、生命さえも捨てた恋人たちの物語だ。しかし、劇場に集まった面々には、棧敷で降ってわいたスキャンダルのほうがおもしろい見物だったろう。そこには、ヴロンスキーの母親も居合わせており、息子に面と向ってアンナのことをあざ笑う。が、アンナは最後まで持ちこたえる。

彼女とその取り巻きを知らず、彼女が上流社会に姿を現したこと、それもレースの飾りをつけ自分の美貌を誇示するように現れたことに対する、女たちのあらゆる同情、憤激、驚きの声を耳にしなかった者は、この女性の落ち着きと美貌にみとれるばかりで、彼女が広場の辱めの杭に縛りつけられたさらし者の気分を味わっていることなど思いもよらなかったろう。(5章33節)

Кто не знал ее и ее круга, не слышал всех выражений соболезнования, негодования и удивления женщин, что она позволила себе показаться в свете и показаться так заметно в своем кружевном уборе и со своей красотой, те любовались спокойствием и красотой этой

⁶⁹⁶ 『アイーダ』のロシア初演がサンクトペテルブルクで行われたのは、1875年11月のこと。だから、同年の早春に上演されていたわけではなく、トルストイの事実誤認(あるいはフィクション)だ。タイトルロールを歌ったのも、カルロッタ・パッティではなく、Teresa Stolzである。彼女はちなみに、欧州初演でもアイーダを演じている。

Porter, Andrew "Teresa Stolz" in Stanley Sadie, (Ed.), The New Grove Dictionary of Opera, Vol. Four, pp. 549-550. London: MacMillan Publishers, Inc. 1998.

женщины и не подозревали, что она испытывала чувства человека, выставляемого у позорного столба.

二つのテーマ：アンナに自分を見る

このアンナにとって最も長く辛い日には、クラムスコイが決して素通りできぬ二つのテーマがある。それは、『見知らぬひと』制作当時の彼をのみ込んでいたもので、その一つは、子供を失った母親の悲しみだ。1876年に末子のマルクを亡くした衝撃で、クラムスコイは絵画を着想し、約4年間にわたりこれに取り組んだすえ、傑作『癒されぬ悲しみ Неутешное горе』(1884)に結晶させた。ソフィア・ニコラエヴナ夫人に似た女性が棺のかたわらに立ちすくみ、ハンカチで口元を押えている。



イヴァン・クラムスコイ

『癒されぬ悲しみ Неутешное горе』

(1884年、トレチャコフ美術館所蔵)⁶⁹⁷

もう一つは「笑い」のテーマである。それは、劇場でアンナが浴びた笑いであり、クラムスコイの未完の大作『笑い』のそれでもある。

⁶⁹⁷ http://www.tretyakovgallery.ru/ru/collection/_show/image/_id/194 (2015年9月15日最終閲覧)
ちなみに、トルストイもクラムスコイも、妻の名はソフィアで、末子を亡くしている。

われわれが軽い気分で善行だの誠実さだのについておしゃべりしている間は、われわれは他の者たちとうまくやっけていけるのですが、真面目にキリストの教えを実践しようなどとした日には、みんなの笑い者になることでしょう。この笑いがいたるところで私につきまとうのです。⁶⁹⁸

Пока мы не всерьез болтаем о добре, о честности, мы со всеми в ладу, попробуйте серьезно проводить христианские идеи в жизнь, посмотрите, какой подыметесь хохот кругом. Этот хохот всюду меня преследует.

「この笑いはいたるところで私につきまとう」。それは、俗衆の笑い、マジョリティーの暴力でもあれば、貴顕のさげすみでもあれば、移動展派の「左派」からの非難でもあるというように、いろいろあっただろうが、クラムスコイが感じていたその根源は、トルストイが『アンナ・カレーニナ』でぶつかった「邪悪な力の残酷な嘲笑 жестокая насмешка какой-то злой силы」(8章9節)と同根ではなかっただろうか。世界を翻弄する悪としての「笑い」をこそ彼は描こうとしていたのではなかったか⁶⁹⁹。

それをトルストイが自作でみごとに示し得たこと、そしてそのヒロイン、アンナが、その「笑い」に屈せず、己を貫いたこと、レーヴィンをも、作者トルストイその人をも超えたこと——それをクラムスコイが看過したはずはない。

以上見てきたことから、クラムスコイが、アンナのまさのこの運命の日に、自分自身の問題を見出し、彼女に自分を託したことは十分理解できよう。そして、彼が描いた一コマが、彼女が悲しみと決意を胸にヨーロッパホテルを出て、ネフスキー大通りをまっすぐ南下し、マリインスキー劇場に向けて右へカーブを切った、まさにその「ターニングポイント」であったことも。

⁶⁹⁸ Иван Николаевич Крамской. Письма, статьи. 1965. Т.1. С.219.

クラムスコイが極めて高く評価していた風景画家フォードル・ワシーリエフ宛での、1872年12月1日付けの手紙。

⁶⁹⁹ アンナを一度は許した夫カレーニンは、あらゆる人間の目のなかに、いわく言い難い「嘲笑」を見て、しだいに元の木阿弥になっていくが、これもまたその「笑い」である。

ここで、『笑い——ユダヤの王、万歳!』についてのトルストイの評を紹介しておこう。

L.N.は、賛成できないというふうに頭をふった。「なんかちがう...クラムスコイは、真の芸術家として、自分が誤ったか、自分の手に負えないことを感じて、放棄したのだ」

(Литературное наследство. Том 90. У Толстого. Маковицкий Д.П. Яснополянские записки. 1904-1910. В 4 кн. М.: Наука, 1979. Кн.3. С.233 (23 октября 1908))

一方、クラムスコイの『荒野のキリスト』については、トルストイはしばしば言及し、極めて高く評価していた。たとえば、マコヴィツキー・ノートによると、1907年12月6日、ロシアの絵画に描かれたキリストに話が及んだとき彼は、「最高のキリストはクラムスコイだ」と述べている(Маковицкий Д.П., кн.3. С.582 (6 декабря 1907))。

第7章 後期トルストイ論への序章：『復活』とはどんな作品か

トルストイの後期を代表する長編『復活』とは、どういう作品なのだろうか？　そこで、なぜ作者は「トルストイ的美女」、カチューシャ・マースロワを「復活」させたのか？——このタイプのヒロインは、『アンナ・カレーニナ』で葬り去られ、以後まったく描かれなかったというのに。主人公ネフリュードフとカチューシャの奇妙な「愛」の正体はなにか？　そして、この作品は、最晩年のトルストイの生活と創作にどんな意味をもったのか？

今後の筆者（佐藤）にとっては、当然、後期トルストイ論が課題となるので、その作業仮設もしくは橋頭堡として、以上の点について考えておきたい。

『復活』とはなにか

『復活』がいわゆるトルストイ主義の総括として書かれた点では、研究者の意見は一致している。この思想のあらゆる要素——土地所有（金融）と軍事力という二大暴力装置、およびそれらを基盤とする国家権力への批判、そして国家権力をイデオロギー的に支える正教への批判、作家の現実離れして見える宗教論、倫理観、さらに、これらすべてと不可分である、人間の性についての、どす黒い情念の渦巻く一見奇矯な論など——が、ぜんぶ出そろったところで書かれ、しかも、それらをみな含んでいるからだ。

そのどす黒い情念の背後には、幼年時代の愛と調和の再現という、半生を貫く夢の挫折、そして全否定があったことも確認した。作家は、ブラックホール的世界とそれをあやつる「悪魔」に克つために、あえてこれほどの自己放棄をなしたのであった。

しかし、この作品がトルストイ主義の総括だと言っただけでは不十分である。こういう思想がどんなところから生まれてきたかは、本稿でこれまで確認してきたわけだが、さて、その形成を受けて、作家はこの作品でなにをやろうとしたのか？　たんなる総まとめと、小説という形での宣伝だろうか？　換言すれば、トルストイの生涯と創造の全体において、この作品は、なんであったのか、なんであろうとするのか？　この作品のいわく言いがたい強烈な読後感からして、それがたんなる総括などではないことは明白だろう。

小説ではない

主人公ネフリュードフとヒロイン、カチューシャの「愛」が、なんととっても作品の主軸であり眼目である点には、だれも異論はあるまい。しかしその愛は、一筋縄ではいかない謎である。それは、この矛盾に満ちた大作のなかでも最も奇妙で、ときに嫌悪感すら感じさせながら、なおかつ感動を与えずにはいない。

ふたりの愛の正体はなんなのか——この問はむずかしい。なぜなら、『復活』は、『戦争と平和』よりはるかにラディカルな意味で「小説ではない」。そして、ふたりの愛も、ふつ

うのそれとは根本的にちがうからだ。

まずは、『復活』の「非小説性」からみていこう。藤沼貴氏が『トルストイの生涯』などで書かれているように、主人公ネフリュードフは、「リアリスティックな人物ではなく、一面的なところがある」。本多秋五の表現を借りれば、トルストイ主義を宣伝する「山車」のようなものだ。歩く広告塔兼リポーターといったところか。彼の思想、感情も、とうてい青年のものではない。これまた藤沼氏が指摘されているように、作者、トルストイ翁のそれを負わせている。

だいたい、作品全体が「リアリズムではない」。たとえば、ネフリュードフを、女性にもてる美青年に設定し、不動の信念を吹き込み、悪との戦いに邁進させる。彼は弁舌も爽やかで、農民たちさえ傾聴させる。いつもへどもどしていたレーヴィンとは対照的だ。主人公をこういうスーパー・ヒーローに仕立て、劇画的に押し出すというやりかたは、かつてのトルストイには考えられなかった。

この「非現実性」はどこから来るかという、なによりも、トルストイが『復活』を書いた目的に帰せられるだろう。すなわち、自分の思想を広く伝えること、そして、ロシア国民さらには全人類を、あらゆる文学的、教育学的方法を駆使して教化、救済することだ。文学は二の次であり、目的のためにはしばしば平然と犠牲にされる。

このため、文学的にみればマイナス点も出てくるが、しかしその背後から、世界最高の文学作品を書くなどという目標はとっくの昔に卒業してしまった大人物の気迫が伝わってくる。

現実のトルストイとセットに

これに関連して、もうひとつ面白いのは、読者がネフリュードフにトルストイ自身を重ね合わせて読む仕掛けになっているということだ。当時のトルストイの影響力と存在感は桁外れで、だれもが大なり小なり彼の活動を知っており、そのイメージを主人公に投影する。しかも、専制の支柱であった政治家コンスタンティン・ポベドノースツェフとの対決など、現実のできごとが作品にとりこまれているので、よけいそうしやすい。『復活』は、現実の大ヒーロー、トルストイ伯とセットになっているということだ。読者はネフリュードフ＝トルストイとともに現代ロシアという煉獄と地獄を経巡り、あらゆる悪を断罪する。この作品はそのまま、読者の生きる現実に開かれており、双方向性をもつのだ。

「脱文学」という点で付け加えると、わざわざ、イラストをふんだんに使った人気随一の週刊誌「ニーヴァ Нива」に載せていること、そして、挿絵という視覚的イメージを最大限利用していることも挙げられよう。もしトルストイが現代に生きていれば、マルチメディアを存分に駆使し、作品発表と同時に電子書籍化するのはもちろん、映像化、映画化もおこない、付録に DVD をつけ、専用の Web サイトを立ち上げるくらいのは当然やったと思われる。

トルストイのこういうマルチメディア的発想はまさに図に当たり、『復活』は、商業出版としても空前の成功を収めた。ロシアでは、一雑誌の購読者が 1000 人前後というのが普通のこ

の時代にあつて、『復活』連載当時の「ニーヴァ」は、20万部を突破した。

超現代的な総合性だが、しかしそれは、思想の伝播と教育を第一とした結果でもあるわけだ。敢えて言えば、トルストイにとって、文学はもはや宣伝の一手段にすぎなかった。宣伝のために遠慮会釈なしにありとあらゆる手段を駆使するところから、『復活』のインタラクティブな（双方向の）マルチメディア性が生まれる。だから、ひとつまちがうと、社会主義リアリズムの駄作のようになり兼ねないところなのに、読後感はまさに圧倒的である。読み返すたびに不思議だと思う。

作品として、愛として破綻しているが...

このような意味で、『復活』は、「小説ではない」のに、感動させられる。その眼目たるネフリュードフとカチューシャの愛も、「恋愛ではない」のに——どうにも説明のつかない、変なところがいろいろとあるのに——それでも感動させられる。カチューシャが、ネフリュードフの熱意について動かされ、囚人仲間から酒をすすめられたときに断る場面、シベリア鉄道で護送される彼女を見送る彼、そして最後の別れなど、まぶたに焼きつく。

だが、その一方で、ネフリュードフのカチューシャへの気持ちには、ふつうの意味での恋愛感情はまったく見出すことができない。だから、なぜ彼があんなに結婚にこだわるのか、読者は理解できない。彼女に謝りたい、罪を償いたい、彼女を立ち直らせたいというのは分かるが、それと結婚とはぜんぜん別の話で、藤沼氏が言われるとおり「愛の一方的押し売り」である。女性に対して失礼だろう。

だいたいネフリュードフ自身、こういう無理がたまらなくなってくる。シベリアで貴族宅に招かれたとき、若い夫人のピアノ演奏を聞き（ベートーヴェン『運命』のピアノ版）、かわいらしい子供たちを見て、「おれもこういう生活がしたい！」と呻いている。こんな求婚者があるものか?! この不自然さをうまく説明するのは不可能だろう。あえていえば、ここで『復活』は破綻している。

だがそれでも、ネフリュードフのカチューシャへの「愛」はどこか艶っぽく、恋愛らしい。そして、まぎれもない感動を呼び起こす。これらすべてはどこから来るのか?

「愛の一方的押し売り」が、瑞々しい「恋愛らしきもの」を感じさせる。ぶざまに破綻している作品が真の感動を与える。奇妙なことではないか! ここに凡百の社会主義リアリズムとは比類を絶した輝きがあるのだが、その理由はこれまで十分に説明されてこなかった。

トルストイ的美女とトルストイ主義の勝負

艶っぽい理由は、彼女がまさにトルストイ好みの美女であることと関係している。カチューシャ像の根底には、彼自身のエロスの残滓があるのだ。ソフィア夫人によれば「舌なめずりをしながら描いていた」らしい。

しかし、なんでいまさら、こういう豊満で黒髪の「トルストイ的美女」を登場させねばな

らなかったのか。ここにひとつの鍵がある。本稿でこれまでみてきたように、トルストイはかつて、内なるエロスを殺し葬ることで普遍的愛を得て、トルストイ主義に到達したわけだが、到達した今、おそらく作家は、「運命の女」ともういちど対決しようとしたのである…。トルストイ翁が、自分の思想と感情をネフリュードフという主人公に分かち与え、「運命の女」との愛に投げこみ結婚させたらどうなるか——それによって、思想の軽重を問う実験をやろうとしたのだ。

こうしていったん葬られたエロス、悪魔は、冥界から呼び戻され、カチューシャという、エロスに沈み込んだヒロインが創造される。このトルストイ的美女は、作家の内なるエロスの残滓の生きたシンボルにほかならず、ネフリュードフ＝トルストイ翁は、この甦ったエロスと対決せねばならない。そしてネフリュードフは、ついに、こうした意味を負わされたヒロイン、カチューシャを動かして、淪落の淵から立ち上がらせることに成功する。これはトルストイその人がエロスに克ったことを意味する。

だから、ネフリュードフの愛には、トルストイの生涯全体、思想全体の重みがかかっている。カチューシャが酒をやめたときに我々が感動するのは、かつて大きな犠牲を払ったトルストイがついに運命に打ち克ったことを、漠然とながらも実感するからだ。

こうして、第3部の第5章にいたると、ネフリュードフは、「病院でカチューシャを許したときに感じたような、哀れみと感動の最も単純な感情（самое простое чувство жалости и умиления）を常に感じるようになる」。しかも、こうした感情がカチューシャだけでなくあらゆる人に注がれるようになり、彼は旅のあいだずっと高揚した状態にあった、と言われるにいたる。

閉じたヒロイン

だが、結婚となると話は別だ。こういう「普遍的愛」だけで、男女が結合し、生活をともにしていくことはできない。カフカスの山岳民、チェチェン人、コサック、あるいは農民の世界にほんとうに溶け込み、自然と一体化した強く美しい労働生活を送る——。それには、「普遍的愛」だけでは足りず、チェチェン人やコサックのもつ「特殊性」が必要である…。ということは、この半生の憧れは、トルストイにとって、あくまでも見果てぬ夢にとどまらざるをえない。彼は『復活』で、そのことを改めて確認したのである。

自分は、チェチェン人、コサックはおろか農民さえ、ほんとうには知ることができない。彼らの内面は自分には閉ざされている。だからトルストイは、カチューシャをほとんど外面からしか描かない。内側から描くことも皆無ではないが、かんたんなパラフレーズにとどまる。カチューシャは、ネフリュードフを愛しているのか？ シモンソンのことはどうなのか？ 作者自身、それを知らない。彼女は、作者にとっても閉じた存在なのだ。

カフカス、チェチェンとトルストイ主義を秤にかける

こうして実験は終わり、ネフリュードフとカチューシャは別れねばならないが、見果てぬ夢の牽引力は強烈で、目覚めるのがつらい。この牽引力が、ふたりの別れの切なさの正体にほかならない。トルストイの見果てぬ夢は、『復活』と並行して書かれた傑作『ハジ・ムラート』で紡がれることになる。自分を入れぬ、自分とは無縁の世界として。

トルストイは『ハジ・ムラート』を書くことで、自分にとってのカフカス、チェチェンとトルストイ主義の重さをもういちど量りなおそうとする。彼が全生涯で最も手放しに感動を込めて書いたものは、キリスト教のモラルでも、農民の自己犠牲でもなく、コサックさえ問題にならないようなチェチェン、ダゲスタンの勇士の勇猛果敢さ、かの地の女性の美と力だった。

彼が若いころから疑っているように、自己犠牲だのトルストイ主義だのは、しょせんルサンチマンではあるまいか…。「おれの才能は、羨望の念が化けたものにすぎない」〈Талант мой — зависть〉（日記〈1858年6月17日—7月19日〉）。

量りなおした結果、やはり50年前とおなじく、針はカフカス、チェチェン側に傾いた。チェチェン、ダゲスタンの勇武、鉄壁の信義と団結、ハジ・ムラートの母の美と力と愛——これらが、50年の歳月を超えておのれの魂の奥底から、おなじ生々しきで甦り、トルストイ主義を圧倒するさまを、老作家はみるだろう…。

だが、『復活』の実験が失敗だったとは決していえない。とにかく、トルストイの思想と気迫は、エロスに、あの「運命の女」に克ったのだ。

ネフリュードフは、普遍的愛に達し、カチューシャは、淪落の淵から抜け出して、みごとに復活する。そうしたカチューシャをみて、シモンソンは、彼女を尊敬し好きになる（シモンソンは、ネフリュードフとちがって、ふつうにカチューシャのことが好きになる）。カチューシャもまた、この立派な男に愛されて（彼は、トルストイのひとつの理想像ではないかと思われるくらい、人間離れしたモラルと能力をそなえている）、その愛が「カチューシャの支えとなった」という（3部4章）。

だから、『復活』それ自体の課題は十分に果たされ、トルストイ主義は「運命の女」に克ち、カチューシャは復活し、この作品は明るく力強い幕切れを迎えた（と思われた）。シモンソンとカチューシャはともにシベリアの広野を元気に歩み、「彼女に生じた、また生じつつあった変化は、ネフリュードフのうちに絶えず、とりわけ喜ばしい感情を呼び起こした」（3部4—5章）。

トルストイがここで筆を置いていけば、十分立派な大団円になったことだろう。ところが、彼はそうはしなかった。

大団円の後の暗転

ここが作品最大の急所のひとつなのだが、この場面のあと、作品がまさしく暗転する。ク

ラスノヤルスクらしい街の中継監獄のすさまじい場面で、ありとあらゆる悪がこれでもかこれでもかと描かれる（この都市は、モスクワから5千キロのところにあり、大河の両岸にまたがっているの、クラスノヤルスクだと思われる）。なぜ、トルストイは、作品をぜんぶ引っくり返すようなことを敢えてしたのか。トルストイの気持ちを筆者が忖度するとこんな感じになるだろう――。

私が敢えてそうしたのは、私が自分の運命に克ったことなど、どうでもいいからだ。「いまネフリュードフを苦しめているのは、そのことではなかった」（3部28章）。この世ではいたるところ悪が跳梁しているのに、私の成し遂げたことはごくわずかで、私の生命は尽きかかっている――川の渡し場にでてくる老人のように。今の私にできるのは、とにかく聖書を読んでもください、ということだけだ。なるほど、ささやかだが、しかし、私は自分の小ささと弱さを隠しはしなかった。レフ・トルストイと文学などよりずっと大事なことがあるのだ――。

結論

「レフ・トルストイと文学なんかよりずっとだいじなことがある...」。本稿の最終章で、『復活』をほんの一瞥したところからも、この人がおそろしく自分に正直であったこと、そして、自己実現などをいうものを超えた、要するに、究極の絶対的な真理を終生目指しつづけていたことがよく分かる。トルストイを論じるに際しては、つねにそのことを銘記しなければならないと思う。さて、そういう「究極」の観点からすると、前期トルストイの生活と作品、思想とは、なんだったのだろうか、またなんであろうとするのか？

本稿のコンセプトとオリジナリティー

その思想の全体像を可能なかぎり明らかにするため、本稿では、トルストイの二つの根源的な、しかし互いに相容れぬ動機に着目したのだった。それが、幼年時代の愛と調和の再建への意志と、カフカス、チェチェンにルーツをもつ「トルストイ的美女」への執着だ。

すでに何度もくり返したように、トルストイには、世界は幸福な家庭を基礎として調和すべきものだという、抜きがたい思いが、ごく若い頃からあった。その幸福な家庭のイメージは、自身の幼年時代と、母の愛にみちた家庭にもとづいていたのだが、そこには、母の死とともに滅びてしまうことのない、不滅なものがある、彼には感じられていた。そのなにかを、自分の家庭生活で再現し、世界に愛と調和を実現したい、というのが、カフカス時代までの若いトルストイに一貫した志向だった。

ところが、トルストイの伴侶たるべき女性というのがまず問題だった。彼は、貴族の令嬢ではなく、チェチェン、ダゲスタン、コサック、農民などの力強い女性に惹かれる傾向があり、この「アマゾネス・コンプレックス」とも言うべき「情念」は、彼の宿願の実現を難しくした。

それにもうひとつ、彼が天国さながらに愛着していた、幼年時代の愛と調和の内実も、決して無垢なものではなかった。子供たちへの愛に自分を捧げた母親と、献身的な召使たちに囲まれた環境は、幼いトルストイには、あたかも羊水のなかを漂っているように快適ではあったが、これには農奴制あつての人工培養空間という面があり、ある種の危うさと腐敗の因子を彼に感じさせてもいた。それは、社会のお荷物に成り下がりつつあった地主貴族の虚無感であり、さらにその奥底に広がる人間存在そのものの闇だった。

地主貴族というのは、自分の「王国」で先祖代々思うがままの生活を享受しながら、「人間は決して幸福になれない」ことが骨身に沁みた人々である。この絶望をはね返すに足るなものが見出されないかぎり、ウサーヂバ（屋敷）にじっと腰を据えて、「終わりの日」を待ったほうがましだ...。こうした絶望が、トルストイのヤースナヤ・ポリャーナへの、血肉と化した執着の裏面をなす。

彼はこういう場から考える——自身の幼年時代の奥にある肯定的なものとは一体なにか？「女」への執着は、ヤースナヤへの執着は、はたして善か悪か？地主貴族たることは善か悪か？たとえ農奴を解放し、さらに貴族にしてやったとしても、結局は、われわれのようになるのが落ちではないか（『戦争と平和』のアンドレイ公爵は冗談を言ったわけではなかった）。どうしようもなく破壊と死へ向かっていくとしか見えぬ、この世界とはなにか。

彼はカフカスの戦地において、生の謎をはっきり自覚し、あらゆる惨禍のさなかにあって、己の運命のみならず、世界そのものの不条理をも深く認識していった。後年の『アンナ・カレーニナ』の表現を借りれば、「世界は邪悪な力の嘲笑にすぎないのか？」。これがトルストイの根本的な問題意識であった。

このように筆者は、両者が交響曲の二つの主題のように絡み合うなかに、トルストイのあらゆる問題が生まれ、解決されては、また新たな問題が生じるさまを追ってきた。社会問題も、世界の根本的不条理への絶望も、真理へのかすかな予感も、悪魔と神さえも、そこに浮沈していた。

こうしてトルストイの行き着いたところ、二つの動機は統合できぬという認識が『コサック』となり、虚構の世界での宇宙的統合が『戦争と平和』となり、動機そのものの解体が『アンナ・カレーニナ』となった。

これは従来のトルストイ研究にはない、まったく新しい視点であり、それによる解釈、帰結もすべて本稿のオリジナルということになる。なかでも重要なのは、トルストイの「転換」の重大な一側面をこの視点から説明しえたことだ（第3部『アンナ・カレーニナ』）。

またこれに関連し、ナターシャ・ロストワ、アンナ・カレーニナらロシアの代表的ヒロインが、あるていどカフカスとチェチェンにルーツをもつことも論証した。

もうひとつ、このアプローチの強みは、全体的、統一的把握だ。彼の伝記的事実、思想の根源的動機から個々の作品のイデー、構造、小説作法にいたるまでが、断片的にではなく、一体のものとして捉えられた——トルストイの言葉を借りれば、内容と形式が一体であるように。そして、少なからぬ発見があったと自負する。

以上の発見——つまり、本稿のオリジナリティー——については、この後の「総まとめ：幼年時代の光と闇を食い尽くす」の節で、より具体的に総括するとして、ここではまず、**トルストイの伝記的事実にかかわる発見のうち主なものを簡単に整理しておく。**

・彼の生地ヤースナヤ・ポリャーナの建設者である母方の祖父、ニコライ・ヴォルコンスキーの生涯について可能かぎり再現した（第1部「カフカス」、第2章「ヤースナヤ・ポリャーナ前史：祖父ニコライ・ヴォルコンスキーの生涯」）。このウサーヂバ（屋敷）の小宇宙が少なからずトルストイの生活と精神を「呪縛」していたと推測されるからだ。これは、内

外のトルストイ研究で初めての試みとなる。このユニークな人物が生きた歴史的な場の解明は、作家研究を超えた意味と広がりをもつのではないかと思う。

・大学退学の原因、それと前後するペトラシェフスキー事件とのかかわりでは、資料を精査し、独自の結論にいたった。トルストイは、事件にきわめて近いところに在って事態を注視しつつも、政治という次元だけでものを考える、直線的な「政治主義者」とは一線を画していた（同、第4章「大学時代：『実験』の開始」）。

・軍記物の『森を伐る』において、『戦争と平和』の理想的農民プラトン・カラターエフに直接つながる人物像が、実在の兵士ジダーノフにおいて誕生する点を指摘した（同、第7章『森を伐る』：兵士のキリスト）。

・カフカス時代のトルストイの、ルソーとの思想的対決の真相に可能なかぎり迫った（同、第8章「カフカスの高みとは」）。これまで論者たちは、以下のトルストイの記述のみ取り出し、観念的に「理解」してしまう傾向が強かった。「唯一の理解しがたい善なる神、靈魂不滅、われわれの行いにたいする永遠の報いを信じる。三位一体や神の子誕生の神秘は理解できないが、自分の父祖の信仰は拒否しない」（1852年11月14日付け日記〈46, 149〉）

しかし問題は、靈魂の不滅や良心の承認そのものではない。それは、ルソーにとってもトルストイにとっても出発点にすぎなかった。良心の声をいかに聞きとるかが問題だったのだ。

・カフカス時代のトルストイの生活を調べることで、テレク・コサックやチェチェンなどカフカスをルーツとする女性像の系譜が確かめられた。すなわち、

ドゥーニカ・ドガディハ（Дунька Догадиха）→『コサック』のマリアーナ→農婦の愛人アクシーニャ・バズイキナ→『牧歌』と『チーホンとマラーニャ』のマラーニャ→「コサック娘」のナターシャ・ロストワ（『戦争と平和』）→アンナ・カレーニナ→カチューシャ・マースロワ（『復活』）。

（とくに第1部「カフカス」、第9章「理想の女性像」を参照）

・トルストイは、現実の不条理と激突して、現実そのものを変えるために農奴解放の試みを行ったが、筆者はその実情を明らかにした。その際、米川哲夫氏のすぐれた研究に依拠しつつ、農奴解放令と徹底比較することで、これまでの通説——解放令は反動的でトルストイ案はよりリベラル——を覆した。

また、これまで知られていなかったトルストイの未公開資料「農業メモ」を入手し、既存の資料とつぎ合わせた結果、トルストイと農民との関係における分水嶺ともいべき或る日のドラマを再現した。このできごとは後に、『アンナ・カレーニナ』におけるレーヴィンのターニング・ポイントとして、描かれることになる（同、第11章「現実そのものを変える：農業経営と教育活動」）。

・故藤沼貴氏が生前発表されなかった、トルストイの妹婿ヴァレリアンの死因にかんする説を紹介した。ほかならぬ作家自身が心ならずも、義弟を自殺に追い込んだのである。これは、トルストイの「転回」を考えるうえできわめて重要だ（第3部『アンナ・カレーニナ』、第1章「トルストイは『殺人者』か：二つの悲恋にかんする藤沼貴氏の未発表の説」）。

・トルストイと画家イヴァン・クラムスコイとの交流を追跡しつつ、『見知らぬひと』（邦題「忘れぬひと」、1883年）のモデルがアンナ・カレーニナであることを論証した（同、「第6章 『見知らぬひと』はアンナ・カレーニナか？：レフ・トルストイと画家イヴァン・クラムスコイ」）。

・さらに、本稿のいわば「副産物」として、1812年のナポレオンのロシア遠征、いわゆる「祖国戦争」におけるロシア側の、これまで隠蔽、神話化されてきた真相を解き明かした（第2部「1812年と『戦争と平和』」の、計230頁におよぶ、第1章「1812年」および「補遺：祖国戦争にかんする個別の証言と研究」）。これは独立した論考、つまり「祖国戦争の真実」としても価値をもつと確信する。

これらの知見は、一トルストイにとどまらぬ意義と広がりをもつ、ロシアの思想、文学、歴史の研究にも寄与できるばかりか、その小説作法は現代文学にもヒントになり得るのではあるまいか。と同時に、彼の生涯の全体が、これまで指摘されなかった、ある強烈な独創性に輝いており、今日に生きるわれわれに向けて、無言のメッセージを発していると確信する——とりわけ、『アンナ・カレーニナ』で作者が達した絶望的結論は。

前期トルストイの作品と思想はわれわれになにを語るか

とはいえ、本稿のコンセプトと論の展開を是とされる方も、そこから受ける印象は、おそらく一様ではあるまい。人によっては、トルストイの歩みは、「異常」とも「奇妙」とも思えよう。彼が憑かれた情念——自身の幼年時代と母への憧憬（および、ヤースナヤ・ポリャーナでその世界を再建せんとする執念）と「トルストイ的美女」——からして、なるほど、奇妙な妄執に見えなくもない。そして、その執着から生じた前半生の軌跡は、あまりにも振幅が大きく、捉えどころがないようだ。

トルストイの「異常性」、「偏執性」にかんする誤解は、じつはかなり広く深く根を張っており、ここでそうした疑問に答えておく必要を感じる。でないと、『アンナ』の結論さえも、極言すれば、一変人の躁言にすぎず、なんら普遍妥当性をもたぬものと受けとられかねないからだ。

見た目の奇矯さ

トルストイの前半生は、表面的になぞると、こんな風に見えなくもない。

処女作『幼年時代』は、一見、幸福な幼年時代と亡き母親の、多少センチメンタルな追想と賛美にすぎず（そこにおける「闇」の濃さと、それを突き破ろうとする作者の強靱な意志力は、見落とされがちだ）、カフカス行きもセヴァストポリ行きも、いかにも唐突である（「闇」の威力を確かめるために、彼が自らを実験台として死地に投じたことも見えにくいだろう）。

さらに、ホームドラマ風の『幼年時代』からわずか 10 年余で彼は、『戦争と平和』の目も眩むような、壮大きわまる光の世界へと上昇する。同時代人でこの変貌、飛躍を予見できた者は皆無だった。

ところが、その完成後数年にして、一転、『アンナ・カレーニナ』の底なしの深淵へ降下する。しかも、その結論たるや、人間が人間であるがゆえに必然的に破滅するとは！——ほとんど正気の沙汰とは思えぬふれ方ではないか（じっさい、「改心」後の 1880 年には、トルストイ発狂の噂がモスクワに流れたことがある）。

だがこれは、そう見えるというだけのことだ。トルストイがぎりぎりの結論として、「異常」だの「奇妙」だの「個人的偏差」だのという逃げ道を退けたことを思い出していただきたい。

まず、トルストイの情念は、珍奇どころか、むしろありふれたものだったことを確認しておこう。

滅びゆく地主貴族の一人に生まれ、自身の幼年時代に、こよなきものとして愛着、愛惜する——これ自体はなんら珍しいことではない。貴族の令嬢にあまり魅力を感じず、農民、ジプシー、コサック、チェチェンなどの女に惹かれるのも、ありきたりのルサンチマンの裏返しだったかもしれない（トルストイの兄たちも、ジプシーと内縁関係になったり、娼婦と同棲したりと、だれひとり、「まともな」結婚はしていない）。これらはみな、当時どこにも見られた「邪悪な力の嘲笑」にすぎなかった。

どのウサーヂバ（地主貴族の屋敷）の小宇宙にも明暗がある。ヤースナヤ・ポリャーナだけではない。トルストイはただ、座して破滅を待つのが嫌だったので、明暗を極限まで追求し、その結果、『戦争と平和』と『アンナ・カレーニナ』を生みだして、棄て去っただけだ。振幅の大きさはその結果にすぎない。彼の追及が、こうであるほかはないという強靱な必然性の意識に貫かれているのもそのためである。「邪悪な霊」とのおよそ徹底した戦いが、一見異常に思える生の軌跡、そして高度の内的必然性をもたらした。その追求の凄まじさは、いくら強調してもし足りない。

総まとめ：幼年時代の光と闇を食い尽くす

ここで、本稿の総まとめをかねて、彼が、いかに幼年時代の光と闇をしゃぶりつくしたか、そこからなにを生み出し、なにを棄て去ったかを確認しておこう。

すなわち『戦争と平和』では、幼年時代の愛と調和の再現という自身の夢を、あらゆるロシア人の意識に漠然と漂っていた 1812 年神話を触媒として、世界大、宇宙大にまで拡大した。その際、彼がいかに深く祖国戦争を研究したかは、すでに見たとおりだ。

それにくわえてトルストイは、その夢を完全に生きるために、いってみれば**夢の再現実化**を徹底的に行っている。さまざまな自由と必然が交錯する場である現実世界を、「作者の無限の逸脱」という天才的洞察と着想により再現し、そこに夢を移したのである。

「作者の無限の逸脱」とはすなわち、一つの視点から別の視点に絶えず「逸脱」することであり、人間と人間がおかれた状況とを、無限に多様な視点から描き出していく。このトルストイのアプローチは空前のもので、人間の認識というものの秘密と同時に、現実世界の本質的な多層性を開示する。

しかも、その夢に生きる人々もまた、文学史上空前の様相を呈している。彼らは、それぞれ特有のトーン、波動を帯びた、感情、想念、動作、行動などの「水滴」（霊的エネルギー）の寄り集まったものだ。独立、完結した個体としての人間ではない。

だから、明確な単位としての個人が、それぞれの属性にしたがって関係し合うという古典物理学的、原子論的パラダイムは、『戦争と平和』の世界にはない。この作品のパラダイムはそれとは根本的に異なるのだ。この点に注意されたい⁷⁰⁰。

それは、いわば「**霊的量子**」ともいうべきもので、トルストイの超リアルな人間把握、世界把握と宗教的憧憬がむすびついて前代未聞の人間像、世界像を打ち立てたのである。『戦争と平和』という夢は、神秘性と同時に現実性をも最高度に兼ね備えているのだ。ナターシャという、貴族性と野性をみごとに併せもつ女性像には、こういう夢の実現の歓びが結晶している。⁷⁰¹

ところが、これほどの夢できえ、自分の生を支えるには足りないと思極めるや否や、トルストイはそれを棄て去り、幼年時代の闇に下降していく。『アンナ・カレーニナ』で彼は、最後の抛り所であった母性と女性性を体現した同名のヒロインを創造し、現実世界の暗い渦に投ずる。

この実験によりトルストイは、世界に開いたブラックホールの彼方から噴き出してくる「邪悪な力」がアンナをはじめあらゆる人々を翻弄するさまを見極めた。そして、その力が「象徴の森」を生む心理的メカニズムを見抜いたが、それだけではない。

彼は、それを逆手にとり、その心理的メカニズムと戦慄を完璧に再現するために、独自の

⁷⁰⁰ トルストイが『戦争と平和』のなかで、宇宙空間を埋め尽くすエーテルを比喩的に用いているのは、このためだ。もし当時すでに量子力学があったら、彼は当然、これも使ったろう。

なお、後年彼は、仏教、道教などの東洋思想に深い関心を示すが、その理由の一つは、こうした独自の世界感覚にある。

⁷⁰¹ 本稿では、ボリス・エイヘンバウムとヴィクトル・シクロフスキーのトルストイ論を、とくに『戦争と平和』との関連で、突っ込んで検証、批判している。ここでのような批判的視座も、これまで提出されなかった（先行研究における「トルストイの主要な評伝について」、および第 2 部「1812 年と『戦争と平和』」、補遺の 6）シクロフスキーの『『戦争と平和』の素材と文体』）。

シンボリズムとサブリミナルの手法を、ロシア・シンボリズムにはるかに先駆けて編み出した。だから、この作品は、象徴主義という文学流派が死んでも、今日性を失うことがない。現代という寄り辺ない時代のみならず、どの時代にあっても、ブラックホールはいたるところに開いており、それに翻弄されつづけるのが人間なのだから。

そしてトルストイは、自らの内なる女性像を殺害、解体し、「普遍的な愛」を取り出すという、心理的にはきわめて危険な離れ業を強行した——その普遍的愛を、ブラックホールとしての世界における新たな調和の原理とするために。

強調しておきたいのだが、これは決して字面の話ではない。この精神的自殺と再生が徹底的に行われ、トルストイの精神を一変させたことは、アンナという女性像の凄愴な美をみれば明らかである。そこには、彼の全重量がかかっていたのだ。

トルストイは、それほどまでに、『幼年時代』に胚胎していた明と暗を食い尽くした。そして、その結果、そこになにも見つからないのが分かったと、半生の憧れに別れを告げたのである。そして、これが後年の家出にそのままつながっていく…。

ちなみに、アンナ・カレーニナが、家出したあと、息子セリョージャに会いに行く名高い場面がある（5章29-30節）。ツルゲーネフが「こうまで書けるものか！」と賛嘆した場面だ。ここでアンナは、息子とかつての我が家に別れを告げたのだが（内心、二度と会えないことを悟っているようだ）、それだけではない。トルストイ自身が、家庭と母性と決別しているのだ。

思えば、作家の出発点、『幼年時代』も、母との別れを描いた。だがそれは、あの世界をふたたび見出すための出発点でもあった。ここでは、その長い探求に、憧れに、永遠に終止符を打ったのである…。

「逸脱」をくり返す

トルストイのやったことは、自身の運命——それは実際、「悪魔」の悪戯に似ていた——を全身で受け止め、徹底的に凝視することから、自然と流れ出た。そうすることで、悪魔の悪戯は、そのまま神に至る道に変わったのだ！… それは、換言すれば、運命という、外から与えられた必然を徹底的に内面化し、ついには突破する道にほかならなかった。

その時その時を極限まで追及するなかで、「良心の声」が、「神の声」が聞こえてくる。その声が、「女」を捨て、ヤースナヤ・ポリャーナを捨てよ、と告げる。その声は、そのまま彼の思想となり行動となる。こうしてトルストイは、次から次へと「逸脱」をくり返す——生活においても、思想においても、作品においても、その形式、手法においても。

トルストイも、ピエールも、ニコーレンカも常にそのように生きてきた。絶対絶命の窮地にあって——カフカスの戦地にあって、砲弾が雨注するセヴァストーポリにあって、あるいは、仏軍が侵攻したモスクワにおいて——それ以外に人間になし得ることがあるだろうか！

こういう外的必然の内面化と逸脱を、彼とともに全的に生きてみることに、それがトルスト

イを読むということだ。後期のトルストイをこのように読んでいくこと、これが今後の筆者の課題となる。⁷⁰²

トルストイの隠れた予言

おそらく世界は今、歴史上幾度もなかったような危機に滑り落ちつつある。筆者は、その震源地の一つであるロシアに身を置きつつ、日々思う——やはり、トルストイは正しかったのだと。彼が自殺にも等しい自己放棄で自分と世界を救い出そうとしたことには、それだけの根拠があったのだと。

いかなる科学技術の進歩も、無尽蔵の富も（ミダス王さながらの米連邦準備制度の量的緩和も）、社会制度やインフラの整備も、救いにはならぬどころか、根本的モラルの崩壊のもとでは、人間が

⁷⁰² 前期のトルストイについても、論じ残したことはある。次の論文の消化、吸収である。

法橋和彦「プルタルコス英雄伝を読む少年：『戦争と平和』エピローグ第一部の読み方によせて」、「むうざ」28号、2013年、7-54頁。

この大部の論文には、作家の生涯と創作を貫く一つの大きな流れが示されている。あえて簡単に要約してみると――

『戦争と平和』エピローグ第一部で、アンドレイの遺児ニコレーンカは、『プルタルコス英雄伝』を愛読しており、とくに、敵に捕らわれて自ら右手を焼いた、共和制ローマの英雄ガイウス・ムキウスに憧れている。

『英雄伝』は、仏人文主義者ジャック・アミヨの訳（1559年）で広く読まれ、仏ルネッサンス、大革命、そしてデカブリストに大きな感化を与えた。しかもムキウスは、ルソーの憧れの人でもあった。『告白』によるとルソーは、少年時代にこの英雄を真似て、こんろの上に手をかざしたこともあったという。

こうして、ムキウスの気魄と情熱は、連綿と受け継がれ、ニコレーンカを新たな主人公に成長させる原動力ともなる。またプルタルコスは、モンテーニュが高く評価したとおり、事実の歴史よりも精神の歴史を書こうと努めており、トルストイの「歴史離れ」をインスパイアしたとみられる――。ここまでが論文の前段だ。

これに蛇足を加えると、本稿の第1部第3章で見たように、トルストイを養育したタチアーナ叔母も、少女時代にムキウスに倣って腕を焼いたことがあり、その話が『戦争と平和』のナターシャに取り入れられている。つまり、本編のヒロイン、ナターシャと、未来の主人公ニコレーンカがともに、ムキウスの情熱に「焼かれていた」ことになる。この情熱は、畢竟、絶体絶命の「必然」を突き破る自由と創造にほかならず、『戦争と平和』の本体をなすといっていだろう。

さて、法橋論文の後半である。ニコレーンカは、叔父ニコライの書齋でピエールの言葉を耳にし、胸を高鳴らせるのだが、おそらく、トルストイの兄ニコライは幼いころ、ちょうどそれと同じように、父とその友人のデカブリストの会話を耳にし、規約「緑の書」、重要書類の詰まった「緑の鞆」などについても聞いた。それが彼の心中に、「緑の杖」や「蟻の兄弟」のイメージを生み、トルストイにも伝わったと考えられる

（この「並行関係」は、エイヘンバウムが指摘している。Эйхенбаум Б. Легенда о зеленой палочке // Эйхенбаум Б. О прозе: Сб. ст. / Сост. и подгот. текста И. Ямпольского; Вступ. ст. Г. Бялого. Л.: Худож. лит. Ленингр. отд-ние, 1969. С. 431—438.）

この「緑」のシンボルはさらに、『幼年時代』に「全身を緑のショールで包んで」登場する幼いヒロイン、ソーネチカにも付与されていく。彼女のモデルは、デカブリストのパヴェル・カローシンの娘、ソフィアであり、カローシンは、作家の父と親しく、「緑の書」の作成にも加わっていた。

ソーネチカの形象と「緑」、あるいはその背後の情熱と理想主義は、ナターシャ、アンナ、カチューシャらのヒロインに受け継がれ、彼女らに高貴な輝きを与える。その光輝は、だから、トルストイに生涯持続したデカブリストへの深い関心と表裏一体であり、それらすべてが、『戦争と平和』エピローグ第一部のニコレーンカのイメージに結晶していた――。以上が法橋論文の骨子である。

この視点を、トルストイを再読、三読しつつ、筆者のそれと徹底的にすり合わせることで、今後の大きな課題の一つとなる。『幼年時代』だけとって、ママンが帰らぬ過去だとすれば、ソーネチカは、ママンが秘めていた「宝」を発掘すべき未来として、表裏の関係になっているといえよう。

滅ぼし合うための武器にしかならない。これを彼がはっきり見抜いていたことには、一点の疑いの余地もない。

その証拠を一つ挙げると、『イワンの馬鹿』（1885年）で悪魔は、イワンの兄、太鼓腹のタラスの国に乗り込み、金貨を際限なく供給し（しかもインフレをうまく抑え）、土地をはじめあらゆる資産、商品を買占め、あるいは価格を操作し、ついには王妃の身柄を買い取ろうとする（という噂が流れる）。国家の丸ごとの買収である。この作品が書かれて130年近く経ってようやく、巨大な国際金融機関やヘッジファンドなどが、「金融爆弾」で一国家の運命をどうにでもできる状況になりつつあるが、これがそっくりそのまま、この作品では先取りされており、トルストイの洞察力には驚くほかない。

またこの作品には、高性能機関銃、空中から爆弾投下する飛行機、すべてを焼き尽くす火炎放射器など、はるかに時代に先行する兵器、技術が出てくる⁷⁰³。だから、『イワン』の作品世界は、イテク製品と金があふれた、現代の先進国に置き換えていい。

だが、それだけではない。資本主義というものは、分業システムと市場が地球大にまで拡大し、消費が限界に達して、もう利益が上がらなくなれば、必然的に終焉するのだが（これが今、世界で進行していることだ）、まさにそのことが三兄弟の国に示されている。現代人の多くはまだ、トルストイのこの恐るべき予言の意味に気がついていない…。

国力を傾けて軍産複合体を膨張させたすえ滅んだセミュオン国は、どことなくソ連を思わせる。悪魔が黄金漬けにしたタラス国は、現代世界そのものだ。いずれ遠からず消費と市場の拡大が止れば、技術と生産体制は維持できなくなり、人口も減っていくだろう——しかも、弱肉強食の生存競争、飢餓、戦争など非常な痛みをとまなつて。結局のところ、イワン国のように、手仕事で生き延びるしかなくなるのだ。悪魔の金で膨らむだけ膨らんだ世界は、歴史を後戻りし、自分の手でじゃがいもを植える羽目に陥るといふトルストイの皮肉である。イワン国は、19世紀ロシアの農村ではない。近未来の世界だ。

悪魔にプログラム化された人生

ここまで見抜いていたトルストイが、前期のあれほどの創造を棄て去り、一縷の可能性に賭けたからには、後期の思想にはやはり重大な意義が秘められており、現代人にメッセージを発しつつけているはずだ。筆者はそれを確信する。

だが、彼のメッセージを、曲解せずにそのまま受けとめることは決して容易ではない。受けとり損ねないためには、くどいようだが、彼の内面化と逸脱がいかに徹底したものであったかを銘記しなければなるまい。

それは、前期の彼を跡づけてきたところからも明々白々なのだが、とにかくトルストイは、おそろしくものがよく見えていた人である。そして、おそろしく突き詰めて考えた人だ——

⁷⁰³ 法橋和彦著『古典として読む『イワンの馬鹿』』（未知谷、2012年9月）、115–116頁。

なにしろ、結婚する前から、自分の将来の家庭生活も、不和も、妻の浮気も、自分の家出も、そして鉄道駅での死さえも予見できた。彼はそれほどまでに、「邪悪な霊」の力、すなわち運命、外的必然の作用を如実に感じられた人なのだ。自分の人生が何者かによって予めプログラム化され、弄ばれている、と。

そういう人がぎりぎりの選択として、人生の一瞬一瞬に行った内面化と逸脱を真に跡づけるのは、たしかに容易なことではない。だが、そここのところを捉え損なうと、彼の思想も作品も、死んでしまうだろう——神経症の産物にみえたり、玉ねぎの皮むきのような徒労に思えたり、ルソー、キリスト教、社会主義などの要素に還元したくなったり、はたまた、民話に出てくるような農民や「市井の聖人」をもって、その思想を局限したり…。

が、トルストイとともに生きる覚悟があるならば、そしてその恐るべき深淵に耐えられるならば、彼の後期の思想も、新たな生命を得て、力強く甦ることだろう。そして、われわれ現代人が、非情な運命に打ち克つやすがともなるはずだ——たとえ、彼我の運命が、どんなに隔たっていようと⁷⁰⁴。

⁷⁰⁴ 最後に、徳富蘆花（健次郎、1868—1927）のトルストイ観を紹介しておこう。まさに本質を捉えたみごとな受容であり、本稿の骨子を、独特の仕方で裏付けてくれると思うからだ。

遅咲きで、なかなか芽のでない蘆花は、兄、蘇峰（猪一郎）の経営する国民新聞の社員になり、物心両面で丸抱えになり（21歳から35歳まで）、鬱屈しきって、兄に言いつけられた翻訳、雑文執筆に暮れる毎日がえんえんと数年間もつづく。蘆花がトルストイに出会ったのは、そんなときだった。

きっかけは、蘇峰の出版社「民友社」の「十二文豪」叢書だ。蘆花は、そのうちの一卷「トルストイ」を書き下ろすよう指示された。この本は、生涯、著作の梗概、総論の3部からなり、1897年に出版。作品（英訳）とM. Arnold “Essays in Criticism”などを読んでまとめたものである。なにしろ、日本ばかりか世界的にも、まとまったトルストイ評伝がほとんどなかった時代だから、事実関係のまちがいが散見するのはいたしかたない。だが、体当たりで文豪にぶつかった感動が伝わってくる。

たとえば、蘆花は、『アンナ・カレーニナ』を論じつつ、「トルストイは宿命論者」だという。というのは、この作品にも『戦争と平和』にも、「よく夢の適中、予兆の実現などが書かれているからだ」（つまり、これは、トルストイの世界感覚によるもので、たんなる手法ではない、という考えである）。ところが、作品のテーマは、エピローグにみるように「人間の幸福は自家の願欲が自然の大法と一致するにあつて不幸はその衝突にある」

これは含みの多い言い方である。蘆花の叙述を追っていくと、人がどういう願欲にとりつかれるかは、運命なのだから、幸不幸も運命次第。人生にはいたるところ不幸が口を開けていて、落ちこんだ者は災難だが、救いはない——。蘆花はそこまではっきり言い切ってはいないが、そういうことになる。

だが、蘆花によると、トルストイのすごいのは、世界と人間の奥底から目を逸らさずにこういう絶望的な結論を導きだしながら、トルストイ主義という「劇薬」を処方して、全力で戦っていることである。

「その手段は虫も殺さぬ穏やかなものながら、所論は或点において虚無党も及ばぬ激烈なものとなった」。要するに、究極の理想主義者だというのが、蘆花のみたトルストイであり、このトルストイ観は、生涯変わらなかった。

後年、蘆花はトルストイ主義からは離れたが、終生蘆花の原動力だった、並はずれたひたむきさと率直さは、ほかならぬ文豪から教わったものであった。

蘆花がよく言う「裸になる」の意味は、日記をみるといちばんよくわかる。そこでの自己暴露は、いわゆる露悪趣味などという域をはるかに超えて、類例がない。「作家蘆花の心の奥底のみならず、一般に人間の隠された心の裏面を描き出したもの」なのだ（阿部軍治『徳富蘆花とトル

彼にはいつも、「悪魔のプログラム」がまざまざと見えていた——おそらく他のだれよりも。だが、「緑の杖」を見出すことも、彼は生涯断念しなかった。

ストイ』、250頁)。そうやって、ひたすら赤裸になり、性生活、近親者にはねかえるプライバシーまで、霊肉ひっくるめて一切をさらけだし、懺悔し、肯定することに救いを求めようとしたのである。「和製トルストイ」の文学の本質は、人間がおよそどこまで自分をさらけだし裸になりうるか、その実験だったともいえよう。

その困難きわまる実験を貫くにあたり、蘆花は、ことあるごとにトルストイの言行に拠りどころを求めたし、そんな蘆花のすがたに、日本人は、文豪を重ね合わせつづけた。蘆花はなによりも自らの生きかたで、トルストイを日本に伝え広めたのである。

* 徳富蘆花については、かつてロシアで、以下の事典にほぼ同内容のことがらを書いたことがある。

1. «ЭНЦИКЛОПЕДИЧЕСКИЙ СЛОВАРЬ “ЛЕВ НИКОЛАЕВИЧ ТОЛСТОЙ”» (под ред. Н.И. Бурнашёвой). М.: Просвещение, 2009.

「トルストイ事典」(総監修 N.I.ブルナシヨーフ)、プロスヴェシチェーニエ出版、2009年。筆者は日本関連の項目(森鷗外、徳富蘆花)を分担執筆。

2. Лев Толстой и его современники. Энциклопедия / Под общей редакцией Н.И. Бурнашёвой. М.: Парад, 2008.

事典「レフ・トルストイと同時代人」(総監修 N.I.ブルナシヨーフ)、パラード出版、2008年。筆者は、森鷗外、徳富蘆花、小西増太郎の項目を分担執筆。

文献目録

I 基本文献

トルストイ文献は、研究論文をふくめると、ロシアだけでも数万点という規模だ。基本の基本である全集も、90巻におよぶ。これだけでも通読したトルストイ研究者は、果たしてどのくらいいるだろうか？ しかも問題は分量だけではない。本稿の第1部「カフカス」第6章『『襲撃』：真の勇氣とは？』や、第2部「1812年と『戦争と平和』』のところでもわしく述べたように、検閲、一般の通念という壁もある。懺悔以降の後期作品の海外で刊行されたものをべつとすれば、トルストイがほんとうに自由に、検閲を気にせず書けた作品は皆無だった。それらの「壁」は、作品の本質にまで食い入っている、というより、かなりの部分、作品のあり方を決定してしまった。

作家の真意がどこまで映し出されているか分からぬ、歴大な著作群…。それに、数万の、たえず増大する研究論文がくわわる。こうした見通しの利かぬ大海を泳ぐすべはあるのだろうか？（これは、けっしてこの作家に特有の問題ではないだろう）

結局のところ、トルストイを論じるに当たっては（ほかの作家の場合もそうだが）、あくまでも「感動」とか「直観」、「実感」といったものが基盤になければならぬ、と筆者は思う。でなければ海で溺れるだけだ——かりに当人がそのことに気がついていないとしても…。トルストイの作品、生き方をみて、読者が動かされた、定かならぬ、しかし決して否定できぬ生き生きとした感触を、可能なかぎりはっきりさせるという以外、文学研究でやるべきことなどない、とさえ言いたい。その意味で、文学研究は、読書感想文に始まりそれに終わるべきであるが、その際に、文献学的にできるだけ明瞭化されねばならない。「できるだけ、極限まで」というのが肝要で、この二つの要素が、車の両輪のように絶えずぎりぎりまで協同していることが必須だ。

曖昧な言い方に思われるかもしれないが、こういうことにかんしては、一般読者のほうがはるかに鋭い嗅覚をもっており、的確にそのあたりの出来不出来、胡散臭さをかぎ分けるものだ。ホンモノかニセモノか、面白いか詰まらないか、それがどこまで研ぎ澄まされているか、書き手の心は生動しているか、作品をつねに読み返しているか、頭のなかの固定したイメージを、「研究論文」でことさらに混乱させているだけではないか…。

本稿は、筆者がそうした点を自ら戒めつつ、読書感想文＋文献学の道を自分なりに歩んできた、そのささやかな成果である。

以下に掲げる文献は、本稿について考え、書くなかで、直接かかわってきたものに限定する。まず最初に、全集、作品集、評伝、書誌などの基本文献について一瞥しておこう。

全集、選集

- ・レフ・トルストイ全集（全90巻）

Толстой Л. Н. Полное собрание сочинений в 90 томах. Юбилейное издание. М.: Гослитиздат, 1928—1958. Т.6. С.97-98.

90巻全集が、まさに一時代の文学研究者の精力が結集された大成果であることを否定する人はいないが、今となつては問題点も少なからず指摘できる。本文で詳述したように、日記の「病氣」にかんする部分、「農業メモ」などが収録されておらず、草稿類も、一部が整理され、収められているにすぎない。

残された最大の課題はおそらく『復活』で、事実上ほとんど未整理に近い状態だ。草稿類の分量が『戦争と平和』をも上回るのにくわえ、作品そのものが非常に複雑であるため、さすがのエヴェリーナ・ザイデンシヌールも、本格的な整理、校訂には手をつけずに終わった（『復活』は、一読すれば分かるように、内容、表現、ジャンルなどの面で、さまざまな解決不能に近い問題を孕んでおり、しかもその矛盾自体が作品の力となっている。こういう実にユニークな大作なのだ）。

最近半世紀のあいだに発見された書簡、草稿等の資料の整理収録も今後の課題である。

・ビリュコフ版『トルストイ全集』（スイチン刊）

Толстой Л. Н. Полное собрание сочинений Льва Николаевича Толстого / Под ред. и с примеч. П. И. Бирюкова: в 20 т. М.: Т-во И. Д. Сытина, 1912-1913.

この全集をひもとくと、とくに『復活』の伏字の多さには驚くが、しかし、所与の条件のなかで編集者パーヴェル・ビリュコフが作家の意図を最大限尊重して編集したこの全集には、90巻全集はもちろん、編纂中の新全集と比べても、かけがえのない価値がある。これについては、本文の『襲撃』のところで詳細に述べたとおりだ。

・河出書房刊の『トルストイ全集』

まさにそういう点を踏まえて翻訳、編集されているのがこれで、中村白葉の翻訳もすばらしい。現在絶版になっているのが残念だ。

『トルストイ全集』（中村白葉、中村融訳）、全19巻、河出書房新社、1972—1978年。

・編纂中の新トルストイ全集（100巻）

Толстой Л. Н. Полное собрание сочинений: В 100 т. / РАН. Ин-т мировой лит. им. А. М. Горького; Ред. коллегия: Г. Я. Галаган, Л. Д. Громова-Опульская, Ф. Ф. Кузнецов, К. Н. Ломунов, П. В. Палиевский, А. М. Панченко, С. М. Толстая, В. И. Толстой. М.: Наука, 2000—...

現在刊行中のこの新全集では、「全文学作品の全草稿」を整理して刊行することを最大の目標に掲げ、90巻全集で未解決だった数々の問題を解決したいとしている。しかし、その実現には、90巻全集の陣容にもおとらぬスタッフ、組織力、潤沢な資金、長い歳月が必要なのは自明の理だ。名実ともに国家プロジェクトだった90巻全集では、作家の高弟で、長年その著作の刊行にかかわってきたウラジーミル・チェルトコフが総監修を務め、トルストイの専門家が文字どおり総動員されており、ボリス・エイヘンバウム、ミハイル・バフチンら当代一流の文学者も参加していた。

だが、新全集では、陣容も資金も十分というにはほど遠く、率直に言って、編纂を統括していたリディア・オプリスカヤ氏が死去したあとは、刊行の継続が危ぶまれる状況にある。

また、偏狭で独善的な愛国主義が幅を利かす今のロシアの状況は、ある面で、ソ連時代以上にトルストイには逆風になっているように見える。

新全集の第1巻が刊行されてから15年たつが、これまでに出了のは、以下の数巻のみ。30年間で90巻全集が完結したことを考えれば、今後の道程の困難は、思い半ばに過ぎるものがある。

T. 1. Художественные произведения, 1850—1856 / Тексты и коммент. подгот. Л. Д. Громова-Опульская; Редактор тома К. Н. Ломунов. 2000.

T. 2. Художественные произведения, 1852—1856 / Подг. текста и коммент.: Н. И. Бурнашева; Ред. тома Л. Д. Громова-Опульская. 2002.

T. 4: Художественные произведения, 1853—1863 / Подгот. текста и коммент.: И. П. Видуэцкая, Л. Д. Громова-Опульская, Т. Ю. Пластова, М. А. Соколова; Ред. тома Г. А. Галаган. 2001.

T. 1 (19). Редакции и варианты художественных произведений, 1850—1856 / Тексты и коммент. подгот. Л. Д. Громова-Опульская; Редактор тома К. Н. Ломунов. 2000.

T. 4 (21): Редакции и варианты художественных произведений, 1853—1863 / Подг. текста и коммент.: И. П. Видуэцкая, Л. Д. Громова-Опульская, Т. Ю. Пластова, М. А. Соколова; Ред. тома Г. Я. Галаган. 2002.

T. 8 (25). Кн. 1. Война и мир: Редакция 1873 г. / Ред. тома П. В. Палиевский; Подгот. текста и коммент.: Н. П. Великанова. М.: Наука. 2003.

* 各巻の末尾に、90巻全集版の修正箇所が一覧表で示されている。

とはいえ、新全集編纂では、すでに目立った成果も上がっており、たとえば、『アンナ・カレーニナ』の90巻全集版を700箇所以上修正したザイデンシヌールさえ見落としていた誤植が発見されている。新全集の『アンナ』は未刊行だが、1999年4月に、この巻を担当していたオプリスカヤ氏本人から、筆者は以下のような話を聞いた。

『アンナ』の冒頭は、ヒロインの兄オブロンスキーが朝、書斎で目覚める場面で始まる。だから、彼はいま現に自宅にいるのに、2段落目に、「夫は（オブロンスキー）、三日間家にいなかった」
«мужа третий день не было дома»という意味不明な文がある。

編集グループが草稿類を調べたところ、「夫は、終日家にいなかった」と書かれていたことが判明した。つまり、夫は、一日中外出し、遅い時間に帰宅して、寝室ではなく書斎で寝た、ということだ。それが、印刷の段階でまちがえられ、以来、今日まで改められなかったのである。要するに、ザイデンシヌールも含め、すべての編集者が、「終日 целый день」を「三日間 третий день」と読み誤ってきたのだ。

・トルストイ 22巻選集

Толстой Л. Н. Собрание сочинений в 22 томах (комплект из 20 книг). М.: «Художественная

литература», 1978—1985.

この選集は、入手が容易で安価であるのにくわえ、刊行時点までの最新の成果を盛り込んでおり、90巻全集以降に出たザイデンシヌール版『アンナ・カレーニナ』、『戦争と平和』、オプリスカヤ版『コサック』などが収録されているので、独自の価値を失わない。

ちなみに、90巻全集刊行後のトルストイの作品の校訂で、とくに重要かつ本稿に直接かかわるのは――

・ザイデンシヌール版『戦争と平和』

これは、ザイデンシヌールが校訂した『戦争と平和』で、以下の、90巻全集の普及版である20巻選集に収められている（前述の22巻選集にも収録）。

Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 20 томах. М.: «Художественная литература», 1960.

また彼女は、この校訂作業を踏まえ、『戦争と平和』の創作過程にかんする本も公にしている。

Зайденшнур Э.Е. "Война и мир" Л. Н. Толстого: Создание великой книги. М.: Книга, 1966.

・オプリスカヤ版『コサック』

Толстой Л.Н. Казаки: Кавказская повесть. Издание подготовила Л.Д.Опульская. Иллюстрации Е.Е.Лансере. Ответственный редактор Н.К.Гудзий.

(Москва: Издательство Академии наук СССР, 1963. Серия «Литературные памятники»)

この名著を、オプリスカヤ氏は最晩年にさらに、新全集の4巻および19巻（草稿部門4巻）で改訂された。それが出たときに氏が「でも、やっぱり、マリアーナという人物像がどこから出てきたのかは分からなかったなあ」と筆者に言われたのが、強く印象に残っている。

・ザイデンシヌール版『アンナ・カレーニナ』

Толстой Л. Н. Анна Каренина: Роман в восьми частях / АН СССР; Изд. подгот. В. А. Жданов и Э. Е. Зайденшнур. М.: Наука, 1970.

さっき触れたが、ザイデンシヌールが『アンナ・カレーニナ』の90巻全集版を700箇所以上修正したもの。

本書には、『アンナ・カレーニナ』の創作過程にかんする、ザイデンシヌール、ジダーノフ夫妻の論文も収録されている。

Жданов В.А., Зайденшнур Э.Е. История создания романа "Анна Каренина". С. 803—833.

・オプリスカヤ版『幼年時代』、『少年時代』、『青年時代』

Толстой Л.Н. Детство. Отрочество. Юность / АН СССР; Изд. подгот. Л.Д. Опульская; Отв. ред. Д.Д. Благый. М.: Наука, 1978.

この版については、本稿第1部第1章でくわしく述べた。

未公開資料：トルストイの「農業メモ Хозяйственные записи」

本稿第1部第11章で書いたように、トルストイは、1858年はじめから1860年なかばにかけて、農業経営のための「農業メモ Хозяйственные записи」（全54頁）を克明につけていた。オプリスカヤ氏によると、これはもともと、90巻全集のメモの部に入る予定で、校正刷りも出たのに、「こんな細かい農業メモは、創作と関係ない」という理由でカットされてしまったという。筆者は、さる1999年4月に、その校正刷りのコピーをオプリスカヤ氏からいただき、精査を試みた。その結果、作家の経営実態だけでなく、彼の或る運命の一日もあざやかに浮かび上がってきたのである。この日のできごとは、農民との「壁」の厚さを彼に思い知らせ、若きトルストイの理想追求を打ち砕いた。そしてそれは、のちに形を変えて、『アンナ・カレーニナ』の基底にも入り込んでいる。農業メモを通じて、トルストイとレーヴィンの挫折が生々しく感得される。

評伝

トルストイの評伝については「先行研究」でくわしく書いたので、そちらを参照していただきたい。ここではデータのみ、まとめて示しておく。

1. Апостолов Н.Н. Живой Толстой: Жизнь Льва Николаевича Толстого в воспоминаниях и переписке. СПб.: Лениздат, 1995.
2. Басинский П.В. «Лев Толстой. Бегство из рая». М.: Астрель, 2010.
3. Бирюков П.И. Биография Л. Н. Толстого в четырех томах. М.: Госиздат, 1922—1923.
日本語訳：ビリュコフ『大トルストイ』（原久一郎訳）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、勁草書房、1968—1969年。＊発音はビリュコフのほうが近い。
4. Гусев Н.Н. Лев Николаевич Толстой: материалы к биографии с 1828 по 1855. М., 1954.
5. Гусев Н.Н. Лев Николаевич Толстой: материалы к биографии с 1855 по 1869. М., 1957.
6. Гусев Н.Н. Лев Николаевич Толстой: материалы к биографии с 1870 по 1880. М., 1963.
7. Гусев Н.Н. Лев Николаевич Толстой: материалы к биографии с 1881 по 1885. М., 1970.
8. Гусев Н.Н. Летопись жизни и творчества Льва Николаевича Толстого, 1828—1890. М.: Гослитиздат, 1958.
9. Гусев Н.Н. Летопись жизни и творчества Льва Николаевича Толстого, 1891—1910. М.: Гослитиздат, 1960.
10. Зверев А.М., Туниманов В.А. «Лев Толстой». М.: Молодая гвардия, 2006 (Жизнь замечат. Людей: Сер. Биогр.; Вып. 1016).
11. Никитина Н.А. «Софья Толстая». М.: Молодая гвардия, 2010 (Жизнь замечат. Людей: Сер. Биогр.; Вып. 1229).

12. Опульская Л. Д. Лев Николаевич Толстой: Материалы к биографии с 1886 по 1892 год / АН СССР. Ин-т мировой лит. им. А. М. Горького; Отв.ред. К. Н. Ломунов. М.: Наука, 1979.
13. Опульская Л. Д. Лев Николаевич Толстой: Материалы к биографии с 1892 по 1899 год / АН СССР. Ин-т мировой лит. им. А. М. Горького. М.: Наука, 1998.
14. Жданов В.А. Любовь в жизни Льва Толстого. М.: Планета, 1993.
15. Порудоминский В.И. «О Толстом». СПб., Алетейя, 2005.
16. Эйхенбаум Б.М. Молодой Толстой // О литературе: работы разных лет. М., 1987. С. 33–13
邦訳：ボリス・エイヘンバウム（山田吉二郎訳）『若きトルストイ』みすず書房、1976年。
17. Эйхенбаум Б.М. Лев Толстой. Кн. 1: 50-е годы. Л., 1928.
18. Эйхенбаум Б.М. Лев Толстой. Кн. 2. 60-е годы. Л.-М., 1931.
19. Эйхенбаум Б.М. Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974.
20. Эйхенбаум Б.М. Лев Толстой. Исследования и статьи / Сост. И.Н.Сухих. СПб, 2010.
21. Эйхенбаум Б.М. Толстой и петрашевцы, "Русская литература", 1959, № 4.
22. Шкловский В.Б. Лев Толстой. М.: Мол. гвардия, 1963 (Жизнь замечательных людей; Вып. 6 (363).
邦訳：ヴィクトル・シクロフスキー『トルストイ伝』（川崎淡訳）、河出書房新社、1978。
23. Литературное наследство. Том 90. У Толстого. Маковицкий Д.П. Яснополянские записки. 1904-1910. В 4 кн. М.: Наука, 1979.
この歴大な記録は、晩年のトルストイの侍医（ホーム・ドクター）だったドゥシャ
ン・マコヴィツキーが、日常見聞きした作家の言葉をもれなく記そうとしたもの。そ
の分量、密度、徹底により、作家の時々刻々のすがたが眼前に彷彿とする。伝記文学
としても空前のものだ。

日本で書かれた評伝としては――

- ・藤沼貴『トルストイ』、第三文明社、2009年。
- ・藤沼貴『トルストイの生涯』、第三文明社（レグルス文庫）、1993年。

文献目録

トルストイ関連文献の目録は以下のとおりで、1903年のユーリー・ビトフトによるものが最初の試みだ。1917年以降に出版された文献については、1960年から、国立トルストイ博物館が網羅的に整理してきた。

1. Граф Л. Н. Толстой в литературе и искусстве: Подробный библиогр. указатель рус. и иностранной лит. о гр. Л. Н. Толстом / Сост. Ю. Битовт. М.: И. Д. Сытин, 1903.
2. Жилина Е. Н. Лев Николаевич Толстой: Указатель литературы / Публичная б-ка им. М. Е. Салтыкова-Щедрина. 2-е изд., испр. и доп. Л., 1954.
3. Библиография литературы о Л. Н. Толстом. 1917—1958 / Гос. музей Л. Н. Толстого; Всесоюз. книжная палата; Сост. Н. Г. Шеляпина, А. М. Дрибинский, О. Е. Ершова, И. А. Покровская, А. С. Усачева, Б. М. Шумова; Редкол.: Б. С. Боднарский, Н. Н. Гусев, К. Н. Ломунов. М.: Изд-во Всесоюз. книжной палаты, 1960.
4. Библиография литературы о Л. Н. Толстом. 1959—1961 / Гос. музей Л. Н. Толстого; Сост. Н. Г. Шеляпина, А. С. Усачева, Л. Г. Лисовская; Редкол.: Б. С. Боднарский, Н. Н. Гусев, К. Н. Ломунов. М.: Книга, 1965.
5. Библиография литературы о Л. Н. Толстом. 1962—1967 / Гос. музей Л. Н. Толстого; Сост. Н. Г. Шеляпина, А. С. Усачева, Л. Г. Лисовская; Ред. коллегия: Э. Г. Бабаев, Б. С. Боднарский (гл. ред.), Н. Н. Гусев, К. Н. Ломунов. М.: Книга, 1972.
6. Библиография литературы о Л. Н. Толстом. 1968—1973 / Гос. Музей Л. Н. Толстого; Сост. Н. Г. Шеляпина; Ответств. ред. Э. Г. Бабаев, К. Н. Ломунов. М.: Книга, 1978.
7. Библиографический указатель литературы о Л. Н. Толстом. 1974—1978 / Сост. Н. Г. Шеляпина. М.: Кн. палата, 1990.
8. Библиографический указатель литературы о Л. Н. Толстом. 1979—1984 / Сост. Н. Г. Шеляпина, В. С. Бастрыкина, Н. М. Иванова, А. Е. Шibaева; Отв. ред.: Э. Г. Бабаев, К. Н. Ломунов. М.: ИМЛИ РАН; Наследие, 1999.
9. Библиографический указатель литературы о Л. Н. Толстом. 1985—1990 / Сост. В. С. Бастрыкина, Н. М. Иванова, А. С. Усачева, А. Е. Шibaева; Научный консультант: Л. Д. Громова-Опульская. М.: ИМЛИ РАН; Наследие, 2006.

日本のトルストイ文献目録は、法橋和彦氏が整理されている。

- ・法橋和彦「日本トルストイ文献目録（一）（1886-1911）」、大阪外国語大学学報 57、77-95 頁、1982 年。
- ・法橋和彦「日本トルストイ文献目録（二）」、大阪外国語大学学報 60、85-103 頁、1982 年。
- ・法橋和彦「日本トルストイ文献目録（三）」、大阪外国語大学学報 63、45-57 頁、1983 年。

国立トルストイ博物館附属図書館

こういう場で書くのはどうかとも思うが、なにかトルストイ文献を調べる場合に、てっとり早く、また確実なのは、国立トルストイ博物館附属図書館（Отдел книжных фондов）の館長（図書部長）ヴァレンチナ・バストルイキナ氏（Бастрыкина Валентина Степановна）に相談することである。なにしろ、よく文献のことをご存知だし（さきに挙げた書誌の編集にもずっと携わってきている）、だ

れがいつ来て、どれだけ勉強していたかも見ている。たとえば、最近トルストイの評伝を著したパーヴェル・バシンスキーについては、「ああ、バシンスキーか、しばらく通って虱潰しに調べられるだけ調べていったよ」などとおっしゃるので、なるほど、と思うわけである。トルストイ研究者でこの人のお世話にならなかった人はいないだろう。

ヤースナヤ・ポリャーナの蔵書目録

本文で触れたが、ヤースナヤ・ポリャーナの2万2千冊におよぶ蔵書は、現在までに徹底的な整理がなされ、それぞれの本のデータばかりか、各頁の書き込み、下線が付された箇所などまで分かるようになっている。

Библиотека Льва Николаевича Толстого в Ясной Поляне: библиографическое описание:

T. 1: Книги на русском языке: В двух частях. М.: Книга, 1972.

T. 2: Периодические издания на русском языке. М.: Книга, 1978.

T. 3: Книги на иностранных языках: В двух частях. Тула: Издательский Дом «Ясная поляна», 1999.

トルストイ事典

1. «ЭНЦИКЛОПЕДИЧЕСКИЙ СЛОВАРЬ “ЛЕВ НИКОЛАЕВИЧ ТОЛСТОЙ”» (под ред. Н.И.Бурнашёвой). М.: Просвещение, 2009.

日本関連の項目（森鷗外、徳富蘆花）を筆者が分担執筆。

2. Лев Толстой и его современники. Энциклопедия / Под общей редакцией Н.И.Бурнашёвой. М.: Парад, 2008.

森鷗外、徳富蘆花、小西増太郎の項目を筆者が分担執筆。なお、間もなく出版される本書の第三版に、明治天皇、徳富蘇峰、白石喜之助、原田助、田村寛貞にかんする拙稿が掲載予定。

II 上記の基本文献以外で本稿にかかわるもの

基本文献以外のものについては、トルストイ・プロパーと1812年（祖国戦争）の関連文献に大別し、著者または題名ごとにアルファベット順に示す。ただし、全集、作品集、手紙、日記、回想、事典類は別項目にする（1812年関連は、テーマの性格からして手紙、日記、回想が相当部分を占めるので、別扱いにしない）。

その際、同一著者の著作は執筆順に並べる。思考、テーマの展開を見やすい点で便利だからである。

さらにテーマごとに細分することも考えたが、トルストイのような、いわば実生活と創作が縄を

なうように進んでいく作家にあっては、かえって混乱を招くのではと恐れる。

なお、電子版またはウェブサイトは、名称と URL（アドレス）を示す。

トルストイ関連（外国語）

1. Азарова Н, Никифорова Т. Из биографии матери Л. Н. Толстого : "Всё, что я знаю о ней, всё прекрасно" // Наше Наследие (Иллюстрированный культурно-исторический журнал), № 87, 2008.
2. Алексеев В.Н. «Графы Воронцовы и Воронцовы-Дашковы в истории России». М.: Центрполиграф, 2002.
3. Альтман М.С. “Этюды о творчестве Л.Н.Толстого”, Толстовский сборник: Тезисы докладов и сообщений к Толстовским чтениям. Тула, 1964.
4. Анна Каренина, паровоз, Обираловка
(国営テレビ局「ロシア第1チャンネル」、2013年3月6日放映)
http://www.itv.ru/sprojects_utro_video/si33/p59291 (2015年9月15日最終閲覧)
5. Афанасьев А.Н. Поэтические воззрения славян на природу: В 3 т. М.: Индрик, 1994.
6. Бабаев Э.Г. Роман Льва Толстого «Анна Каренина». Вопросы художественной структуры и стиля. Дисс. канд. филол. наук. М., 1961.
7. Бабаев Э.Г. «Анна Каренина» Л.Н.Толстого. М., 1978.
8. Бабаева Н.О. Комментарий к докладам первой части международного симпозиума «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» (6 ноября 2010 года, г. Кумамото, Япония) // «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» edited by NAKAMURA Tadashi, 2011 by the Slavic Research (GCOE・日本ロシア文学会共同出版『境界を超えるトルストイ』) .
9. Бакунина Т.А. Знаменитые русские масоны. М: Интербук, 1991.
10. Баранская Е.М. Л.Н.Толстой и Петрашевы: биографический и историко-литературный аспекты // Культура народов Причерноморья. Симферополь: Межвузовский центр «Крым», 2002. №44.
11. Баратынский Е.А. Полное собрание стихотворений. Л.: Советский писатель, 1989.
12. Барбазюк В.Ю. Феномен С. Жанлис в России начала XIX века // Русская речь. 2012. N 1.
13. Бахтин М.М. «Проблемы поэтики Достоевского». Изд.4-е. М.: «Сов.Россия», 1979.
14. Белякова Е.В. Брак и развод в России XIX века. (Опубликовано в газете "Первое сентября" №15 2001 года.
15. Берман Б.И. Сокращенный Толстой: религиозные видения и прозрения художественного творчества Льва Николаевича. М., 1992.
16. Билинкис Я. О творчестве Л.Н. Толстого. Очерки. Л.: Современный писатель, 1959.

17. Blumberg, Edwina Jannie. Tolstoy and the English Novel: A Note on Middlemarch and Anna Karenina. *Slavic Review* Vol. 30, No. 3, Sep., 1971.
18. Боборыкин П. Крамской и Репин // Новости и биржевая газета. 1883. 24 марта.
19. Борисова Е.В. Архитектурное путешествие. Из Москвы по железной дороге. Альбом проектов, эскизов и фотографий. М.: Издательство: Студия 4+4, 2014.
20. Бочаров С.Г. Роман Л. Толстого «Война и мир». М.: Худож. лит., 1987.
21. Бурнашева Н.И. История текста финальной сцены рассказа «Набег»// Яснополянский сборник 1998.
22. Бурнашева Н.И. Как Николай Ростов отомстил за Николеньку Иргеньева (Из наблюдений над художественной деталью в произведениях Л.Н.Толстого) // Толстовский ежегодник 2003.
23. Cruise, Edwina. Tracking the English novel in *Anna Karenina*: who wrote the English novel that Anna reads? In Orwin, Donna Tussing. ed. *Anniversary Essays on Tolstoy*, University of Toronto , 2010.
24. Владимиро-Суздальский музей-заповедник
<http://www.vladmuseum.ru/rus/> (2015年9月5日最終閲覧)
25. Врангель Н. Н. Старые усадьбы. Помещичья Россия. Старые годы. 1910. Июль-сентябрь.
26. Галаган Г., Л.Толстой и петрашевцы, "Русская литература", 1965, № 4.
27. Голушкова Е.А., Лебедева И.В. Роль цветописы в создании образов романа Л.Н.Толстого «Анна Каренина» // Проблемы функционирования языка и специфики речевых разновидностей: Межвуз. сб. науч. тр. Пермь, 1985.
28. Громковская Л.Л. Токутоми рока: отшельник из Касуя. М.: Наука, 1983.
29. Денисова Э.И. Образы “света” и “тьмы” в романе “Анна Каренина”. В кн.: “Яснополянский сборник 1980: Статьи. Материалы. Публикации”. Тула: Приокское книжное издательство, 1981.
30. Донна Орвин «Л.Н.Толстой и философия открытого отказа от философии» // Толстовский ежегодник 2002.
31. Драгоманов М. Малорусскія народныя преданія и рассказы. Киев, 1876.
32. "ДРУГАЯ ДОЛГОРУКАЯ" - АЛЕКСАНДРА СЕРГЕЕВНА АЛЬБЕДИНСКАЯ, УРОЖ. ДОЛГОРУКАЯ.
<http://www.liveinternet.ru/users/3561375/post341426710/> (2015年9月15日最終閲覧)
33. Drawingforall.ru (уроки рисования и все об искусстве).
<http://drawingforall.ru/> (2015年9月5日最終閲覧)
34. Eliade, Mircea. Forgerons et alchimistes / Mircea Eliade. — Nouv.ed.corr.et augm. Paris: Flammarion, 1977.
邦訳：エリアーデ著作集第5巻『鍛冶師と錬金術師』（大室幹雄訳）、1973年。

35. Елисеева О.И. Екатерина Великая. М.: Молодая гвардия, 2010 (Жизнь замечательных людей: сер. биогр.; вып. 1267).
36. Емельянова И. А. Юридический факультет Казанского университета в 40 - 50-е годы XIX века // Правоведение 1980, № 5.
37. Еремина Л.И. Свет как символ и реальность в романе Л. Толстого "Анна Каренина". В журн.: "Русская речь", 1978, № 1.
38. Жданов В.А. «Творческая история „Анны Карениной“». М., 1957.
39. "Зодчий", 1891, № 11 и 12. С. 81-82.
40. Иванов В.В., Топоров В.Н. Проблема функции кузнеца в свете семиотической типологии культур. В кн.: Материалы Всесоюзного симпозиума по вторичным моделирующим системам, т.1 (5). Тарту, 1974.
41. Игнатович И.И. «Помещичьи крестьяне накануне освобождения». М., 1910.
42. Из собрания Пермской государственной художественной галереи: КРАМСКОЙ ИВАН НИКОЛАЕВИЧ: Портрет княгини Екатерины Алексеевны Васильчиковой, 1867
http://permgallery.narod.ru/index/kramskoj_i_n_portret_knjagini_e_a_vasilchikovej_1867/0-143 (2015年9月15日最終閲覧)
43. Казиев Ш.М. Имам Шамиль. Серия «Жизнь замечательных людей» (ЖЗЛ). М.: Молодая гвардия, 2010.
44. Карты Руниверс: 1812 (電子図書館「ルニバーズ」、地図セクション、1812年)
http://www.runivers.ru/mp/all-maps.php?SECTION_ID=7819 (2015年9月10日最終閲覧)
45. Киреевский И.В. Критика и эстетика. М.: Искусство, 1979.
46. Кирсанова Р.М. Розовая ксандрейка и драдедамовый платок: Костюм-вещь и образ в русской литературе XIX века. М.: Книга, 1989.
47. Коити Итокава. Толстовство и "Новая деревня" в Японии // Толстовский сборник-2003. Материалы XXIX Международных Толстовских чтений. Тула: издательство Тульского государственного педагогического университета им.Л.Н.Толстого. Ч.1. С.268-272.
48. Коллекция: мировая художественная культура // Российский общеобразовательный портал
http://artclassic.edu.ru/catalog.asp?cat_ob_no=13018&ob_no=24289 (2015年9月15日最終閲覧)
49. Крамской И.Н. Об искусстве.(Сост.и вступ, ст. Т.М. Коваленской). М.: Изд. АХ СССР, 1960.
50. Крестьянская реформа в России 1861 года. Сборник законодательных актов / под ред. К.А. Софроненко. М.: М.: Госюриздат, 1954.
51. Крутиков В.И. Л.Н.Толстой и яснополянские крестьяне: попытка освобождения до реформы 1861 г.// Яснополянский сборник 1998. С.352-357.
52. Курочкина Т.И. Иван Николаевич Крамской. Л.: Художник РСФСР, 1989.

53. МИХАЭЛЬ ЛАЙТМАН «ЗОАР». 3-Е ИЗДАНИЕ. М., 2009.
54. МИХАЭЛЬ ЛАЙТМАН «УЧЕНИЕ ДЕСЯТИ СФИРОТ». ЧАСТЬ 1. М., 2009.
55. Леонтьев К.Н. О романах гр.Л. Н. Толстого: АНАЛИЗ, СТИЛЬ И ВЕЯНИЕ (КРИТИЧЕСКИЙ этюд). М., 1911.
56. “Lib.Ru” (電子図書館)
http://samlib.ru/s/sizowa_a_s/kosajagoraizglubinwekow-tropinkiktolstomu.shtml (2015年9月15日最終閲覧)
57. Лихачев Д.С. «Лев Толстой и традиции древней русской литературы» (в кн. «Литература — реальность — литература: Статьи»). Л.: Сов. писатель, 1984.
58. Lönnqvist Barbara: Символика железа в романе Анна Каренина // Grimstad, Knut Andreas – Lunde, Ingun (ed.): Celebrating Creativity – Essays in Honour of Jostein Børtness. Bergen, University of Bergen, 1997.
59. Лотман Ю.М. Успенский Б.А. Споры о языке в начале XIX как факт русской культуры // Лотман Ю.М. История и типология русской культуры. СПб.: Искусство—СПб, 2002.
60. Mandelker, Amy. *Framing Anna Karenina: Tolstoy, the woman question, and the Victorian novel*, Ohio State University Press, 1993,
61. “Maps and Pictures of War of 1812”
http://mapswar2.x10host.com/maps_war_1812.htm#_maps_ggg (2015年9月10日最終閲覧)
62. Мартинес де Паскуалис «Каббала Мартинеса де Паскуалиса. Трактат о реинтеграции существ». М.: Энигма, 2008.
63. Мастера живописи. Крамской. М.: Белый город, 1999.
64. Мельникова И. Толстовское учение и общественно-религиозное движение Иттоэн : неизвестное письмо Нисиды Тэнко Л.Н Толстому、言語文化 12 (1)、2009年、167-190頁。
65. Мельникова И. В. Трость Толстого (О японских гостях Ясной Поляны) // Толстой и о Толстом. М. : ИМЛИ РАН, 2010. Вып.4: Материалы к комментариям / отв. ред. М. И. Щербакова. С.115—130.
66. Мельникова И. Первые контакты Л.Н.Толстого с питомцами школы Досея、言語文化 14 (2-3)、2012年、191-208頁。
67. Мережковский Д.С. Религия Л.Толстого и Достоевского. СПб., 1902 (=Мережковский Д.С. Л.Толстой и Достоевский. Т. II).
 邦訳：メレヂュコフスキー著『宗教家としてのトルストイとドストイェフスキー』（三宅賢譯）、清教社、1934.

68. «Местное положение о поземельном устройстве крестьян, водворенных на помещичьих землях в губерниях: великороссийских, новороссийских и белорусских»
<http://istmat.info/node/33359> (2015年9月7日最終閲覧)
69. Михельсон М.И. Русская мысль и речь: Свое и чужое: Опыт русской фразеологии. СПб., 1902. Т.1.
70. Морозов А.В. Каталог моего собрания русских гравированных и литографированных портретов. Т.т. 1-4 и Алфавитный указатель. Москва, товарищество скоропечатни А.А. Левенсон, 1912-1913.
71. Museo del Palazzo Grimani (ヴェネツィア、パラッツォ・グリマーニ美術館)
<http://www.palazzogrimani.org/> (2015年9月15日最終閲覧)
72. Набоков В.В. Лекции по русской литературе: Пер.с англ. Предисловие Ив.Толстого. М.: Независимая газета, 1996.
 邦訳: ウラジーミル・ナボコフ 『ロシア文学講義』(小笠原豊樹訳)、TBSブリタニカ、1982年。
73. Немцева В.И. Эволюция психологизма в художественном творчестве Л.Н.Толстого 1870 — 80-х годов: (Особенности изображения героев и конфликтов): Дис.канд.филол.наук / АН СССР. Ин-т мировой лит.им.А.М.Горького. М., 1988.
74. Никонов В.А. Словарь русских фамилий. М.: Школа-пресс, 1993.
75. Новикова С.Д. «Все, что я знаю о ней, все прекрасно...»: О подготовке книги «Духовный облик матери Л.Н.Толстого» (по материалам ОР GMT)// В кн.: Толстовский ежегодник-2002/ Под общей редакцией В.Б.Ремизова. Тула: Власта, 2003.
76. Оболенский Г. Л. Император Павел I; Карнович Е. П. Мальтийские рыцари в России. М.: Дрофа, 1995.
77. Обрядовая поэзия: Книга I. Календарный фольклор / Сост., вступ. Ст., подгот. Текстов и коммент. Ю.Г.Круглова. М.: Русская книга, 1997.
78. Одинокое В.Г. Характер исторической эпохи и творческая индивидуальность художника (Лев Толстой в 70-е годы. “Анна Каренина”). В кн.: Вопросы творчества и языка русских писателей. Вып. 4. Новосибирск, 1962.
79. Операции в Крыму: театр военных действий
http://www.e-reading.club/chapter.php/1003108/7/Nive_Petr_-_Istoriya_russkoy_armii._Tom_tretiy.html (2015年9月5日最終閲覧)
80. Опульская Л. Д. Роман-эпопея Л. Н. Толстого "Война и мир": книга для учителя. – М.: Просвещение, 1987.
81. Очерки по истории русского портрета второй половины XIX века. Под общей редакцией Н.Г.Машковцева. М., 1963.
82. Писарькова Л.Ф. РОССИЙСКИЙ ЧИНОВНИК НА СЛУЖБЕ в конце XVIII - первой половине XIX века. «ЧЕЛОВЕК» № 3, 1995.

83. Платонов О.А. «Тайная история масонства». М., 1996.
84. Подгаецкая Л. Адреса окружения молодого Толстого казанского периода. (Молодой Лев Толстой научная конференция Казань 2001 год)
85. Подковыркин П.Ф. История русской литературы XVIII века
<http://ic.asf.ru/~ppf/main18.html> (2015 年 9 月 5 日最終閲覧)
86. По Лермонтовским местам (Второе, дополненное издание). М., Профиздат, 1989.
87. «Положения о выкупе крестьянами, вышедшими из крепостной зависимости, их усадебной оседлости и о содействии правительства к приобретению сими крестьянами в собственность полевых угодий». С.66, 68 .
<http://istmat.info/node/33358> (2015 年 9 月 7 日最終閲覧)
88. «Положения 19 февраля 1861 г.»
<http://www.historichka.ru/materials/zaionchkovskii/3.html> (2015 年 9 月 7 日最終閲覧)
89. Полосина А.Н. Гувернер Л.Н.Толстого-Проспер Сен-Тома (по материалам французских архивов) // Яснополянский ежегодник 2001.
90. Полосина А.Н. Гувернер Л.Н.Толстого-Проспер Сен-Тома о России и русских// Яснополянский ежегодник 2002.
91. Порудоминский В.И. Иван Крамской. М.: ТЕРРА, 2001.
92. Присяжнюк И.В.Уроки повести Л.Н. Толстого «Хаджи-Мурат»
http://lit.1september.ru/view_article.php?ID=200901210 (2015 年 9 月 5 日最終閲覧)
93. Птушкина И.Г. Финал романа Л. Н. Толстого «Анна Каренина» в редакциях и вариантах // Текстологический семинар (19-21 июня 2009 года, музей-усадьба "Ясная Поляна").
94. Пузин Н.П., Архангельская Т.П. «Вокруг Толстого». Тула: Приок.кн.изд-во, 1982.
95. Пыпин А.Н.«Масонство в России». М.: Век, 1997.
96. Российские самодержцы (1801—1917). М., 1994.
97. РОССИЙСКИЙ ЧИНОВНИК НА СЛУЖБЕ в конце XVIII - первой половине XIX века Л.Ф. Писарькова // журнал "Человек", № 3, 1995.
98. Roy Conrad (publicist) “THE MAP OF CHECHNYA AND GROZNY”.
http://conrad2001.narod.ru/photo/maps_b/008_bm.jpg (2015 年 9 月 5 日最終閲覧)
99. Сабуров А.А. «Война и мир» Л.Н.Толстого. Проблематика и поэтика». М.: изд-во московского университета, 1959.
100. Сайт Комитета Правительства Чеченской Республики по туризму
<http://chechentourism.com/?p=907> (2015 年 9 月 5 日最終閲覧)
101. Ю.Сато «Внутренняя связь» в романе «Анна Каренина» (Образы «красного мешочка» и «мужика») // В кн.: Толстой и о Толстом. Материалы и исследования. Выпуск 1-й. М.: Наследие. 1998. С.253-263.
102. Юсуке Сато, Сорокина В.В. «Маленький мужик с взъерошенной бородой»: (Об одном символическом образе в «Анне Карениной») // PHILOLOGICA. 1998. Т.5. № 11 /13. С.139-154.

103. Юсукэ Сато. Почему я перевел «Розу мира» Д.Л.Андреева на японский язык// Даниил Андреев в культуре XX века. М.: Мир Урании. 2000. С.203-205.
104. Юсукэ Сато. Сон Пьера о глобусе в «Войне и мире» Л.Н.Толстого: возрождение идеи «соборности» // Толстовский сборник-2001. Материалы XXVII Международных Толстовских чтений: Л.Н.Толстой — художник, читатель, мыслитель. Тула: издательство Тульского государственного педагогического университета им.Л.Н.Толстого. 2002. С.39-50.
105. Юсукэ Сато «Женственность» в творчестве Л.Н.Толстого: ее жизнь и смерть // Ястопольянский сборник 2002. Тула: Издательский дом "Ясная Поляна", 2003. С.116-129.
106. Юсукэ Сато. Л.Н.Толстой и И.Н.Крамской: «Неизвестная» является Анной Карениной? // Толстовский сборник-2003. Материалы XXIX Международных Толстовских чтений. Тула: издательство Тульского государственного педагогического университета им.Л.Н.Толстого. Ч.1. С.229-237.
107. Юсукэ Сато «Толстовские героини и непреодолимые «границы»» // «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» edited by NAKAMURA Tadashi, 2011 by the Slavic Research (GCOE・日本ロシア文学会共同出版『境界を超えるトルストイ』). С.5-25.
108. Севастопольский альбом Н. Берга. Издание К. Солдатенкова и Н. Щепкина. Москва, типография Каткова и Ко, 1858.
109. Сергеевко А.П. Хаджи-Мурат Льва Толстого. История создания повести. М.: Современник, 1983.
110. Сергеевко П.А., Молоствов Н.Г. Л.Н.Толстой. Жизнь и творчество. 1828-1908 гг. : Критико-биографическое исследование. СПб, 1909-1910.
111. Толстой и зарубежный мир (Литературное наследство т.75, книга 1-2). М.: Наука, 1965.
112. Л.Н.Толстой и художники: Л.Н.Толстой об искусстве. Письма, дневники. Воспоминания/ Сост.и авт.вступ.статьи И.А.Бродский. М.: Искусство, 1978.
113. Толстой С.Л. Мать и дед Л.Н.Толстого. М., 1928.
114. Толстой С.М. Единственная сестра // Прометей: Историко-биографический альманах серии «Жизнь замечательных людей» / Сост.Ю.Селезнев. Т.12. М.: Мол. гвардия, 1980. С.269-287.
115. Толстой С.М. Дети Толстого (Пер. с франц.). Тула, 1993.
116. Успенский Б.А. «Поэтика композиции». М., 1970.
117. Федосюк Ю.А. «ЧТО НЕПОНЯТНО У КЛАССИКОВ, или Энциклопедия русского быта XIX века». М.: Флинта, Наука, 2001. 4 издание.
118. Хализев В.Е., Кормилов С.И. Роман Л.Н.Толстого "Война и мир". М.: Высшая школа, 1983.
119. Хрестоматия по истории СССР. Т. 2 / Сост. С. С. Дмитриев и М. В. Нечкина. М., 1949.
120. Христианство в искусстве: иконы, фрески, мозаики...
http://www.icon-art.info/masterpiece.php?lng=ru&mst_id=501 (2015年9月10日最終閲覧)

121. Цомакион А. И. Иван Крамской. Его жизнь и художественная деятельность (в серии «Жизнь замечательных людей», осуществленной Павленковым Ф. Ф.). СПб, 1891.
http://az.lib.ru/c/comakion_a_i/text_0004.shtml (2015 年 9 月 15 日最終閲覧)
122. Чернец Л.В. Литературные жанры // Проблемы типологии и поэтики. М.:Изд-во МГУ, 1982.
123. Чернов Н.М. Провинциальный Тургенев. М.: Центрполиграф, 2003.
124. Чуприна И.В. О реальной основе некоторых произведений И.Н.Крамского и И.С.Тургенева. Саратов: Изд-во Сарат.ун-та, 1994.
125. Шадур Л.А. Развитие отечественного вагонного парка. М.: Транспорт, 1988.
126. Шаповал В. В. Цыганская речь у Льва Толстого // Сибирский лингвистический семинар. Новосибирск, 2001, № 2.
127. Шепелев Л.Е. Чиновный мир России. XVIII - начало XX века. СПб. : «Искусство-СПб», 2001.
128. Владимир Широкогоров. Цены и оклады: дореволюционная Россия. Пачём цырковой слон (Запрос в Яндекс)
<http://www.p-marketing.ru/publications/general-questions/social-dynamics/prices-salaries-before-wwi/print> (2015 年 9 月 7 日最終閲覧)
129. Шифман А.И. Был ли Лев Толстой петрашевцем? // Вопросы литературы. 1967. №2.
130. Шифман А.И. Лев Толстой и Восток. М., 1960.
131. Шифман А.И. Лев Толстой и Восток (изд.2) М.: Наука, 1971.
132. Шкловский В.Б. Материал и стиль в романе Льва Толстого "Война и мир". М., 1928.
133. Щербаков В.И. Неизвестный источник «Войны и мира» («Мои записки» масона П.Я.Титова) в жур. «НОВОЕ ЛИТЕРАТУРНОЕ ОБОЗРЕНИЕ» №21 (1996).
134. Эйдельман Н. Грань веков: Политическая борьба в России: Конец XVIII — начало XIX столетия. М., 1986.
135. Эйхенбаум Б.М. Легенда о зеленой палочке // Эйхенбаум Б. О прозе: Сб. ст. / Сост. и подгот. текста И. Ямпольского; Вступ. ст. Г. Бялого. Л.: Худож. лит. Ленингр. отд-ние, 1969. С. 431—438.
136. Экономика России 19 века. 1.2. Сельское хозяйство
<http://www.refbank.ru/ir/55/ir55.html> (2015 年 9 月 7 日最終閲覧)
137. Эсалнек А.Я. Основы литературоведения: анализ романного текста. М., 2004.

作家、詩人の全集、作品集 (外国語)

138. Батеньков Г.С. Сочинения и письма. Т.1. Письма / Издание подготовлено А.А.Брегман и Е.П.Федосеевой. Иркутск: Восточно-Сибирское книжное издательство, 1989, № 133.
139. Блок А.А. Собрание сочинений: В 8 т. М.; Л., 1960 — 1963. Т.3.
140. Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений: В 30 т. Л., 1972 — 1990.

141. Достоевский Ф.М. Собрание сочинений в 15 томах. Ленинград; «Наука». Ленинградское отделение, 1988—1996.
142. Некрасов Н.А. Полное собрание сочинений и писем в 12 т. М., 1948—1953.
143. Некрасов Н.А. Полное собрание сочинений и писем в 15 т. Л.: Наука, 1982.
144. Пушкин А. С. Полководец: ("У русского царя в чертогах есть палата...") // Пушкин А. С. Полное собрание сочинений: В 16 т. М.; Л.: Изд-во АН СССР, 1937—1959. Т. 3, кн. 1. Стихотворения, 1826—1836. Сказки. — 1948.

日記、手紙、回想類 (外国語)

145. Берс С. А. Воспоминания о графе Л. Н. Толстом: (В октябре и ноябре 1891 г.). Смоленск, 1893.
146. «Библиотека русского фольклора», т.2 (в 3-х книгах), книга 2, М.: Советская Россия, 1989.
147. Булгаков В.Ф. О Толстом. Воспоминания и рассказы. Тула, 1978.
148. А. В-ий «Воспоминания о былом» // «Военный сборник», 1872.
149. Воспоминания В. Истомина о Л.Н.Толстом: «На закате» (впервые опубликованы в кн. Жданова В.А. «Творческая история „Анны Карениной“». М., 1957.
150. Воспоминания Ю.М.Огаревой // «Голос минувшего», 1914, № 11.
151. Записки графа Александра Романовича Воронцова // Русский архив. 1883. Кн. 1. Вып. 2.
152. Записки по курсу кулинарной школы. М.: Издательство Всесоюзного заочного политехнического института, 1989.
153. Записки, статьи, письма декабриста И.Д.Якушкина, М., 1951.
154. Зиссерман А.Л. «Двадцать пять лет на Кавказе». СПб., 1879.
155. Исторические рассказы и анекдоты, записанные со слов именитых людей П. Ф. Карабановым // Русская старина, 1872. Т. 5. № 1.
156. Княжна М.Н.Волконская «Дневная записка для собственной памяти» (Подготовка текста и комментарии Т.Г.Никифоровой) // Наше Наследие (Иллюстрированный культурно-исторический журнал), № 87, 2008.
157. Иван Николаевич Крамской. Его жизнь, переписка и художественно-критические статьи 1837-1887. СПб.: Изд-во Алексея Суворина, 1888.
158. Иван Николаевич Крамской. Письма, статьи. В двух томах. М.: Искусство, 1965.
159. Кузминская Т.А. Моя жизнь дома и в Ясной Поляне. Киев.: «Мистецтво», 1987.
160. Лорис-Меликов М.Т. «Записка о Хаджи-Мурате» // «Русская старина», 1881. Т. 30. С.668-679.
161. Мемуары кн. А. Чарторыйского. М., 1912. Т.1.
162. Ольшевский М. Я. Кавказ с 1841 по 1866 год. СПб., 2003.
163. Панаева А.Я. Воспоминания. М.: «Захаров», 2002.
164. Панкратов А. Толстой — школьный учитель, «Русское слово», 1912, № 257 от 7 ноября.

165. Переписка Л.Н.Толстого с сестрой и братьями. М., 1990.
166. Репин И.Е. Далекое близкое. М.: Искусство, 1953.
167. Ржевуский А. Терцы. Владикавказ, 1888.
168. Стахович А. Ключки воспоминаний «Толстовский ежегодник 1912 г.», М., 1912.
169. Сухотина-Толстая Т.Л. Друзья и гости Ясной Поляны. М.: Колос, 1923.
170. Ткачев Г.А. Станица Червленая. Исторический очерк. Владикавказ, 1912.
171. С. А. Толстая. Дневники в двух томах. М.: «Художественная литература», 1978.
172. Л. Н.Толстой в воспоминаниях современников: В 2 т. / Ред. С. А. Макашин; Сост., подгот. текста и коммент. Г. В. Краснова и Н. М. Фортунатова. М.: Худож. лит., 1978. — Т. 1—2. — (Сер. лит. мемуаров / Под общ. ред. В. Э. Вацура, Н. К. Гея, С. А. Макашина, С. И. Машинского, А. С. Мясникова, В. Н. Орлова).

事典類、資料集成など（外国語）

173. Большая советская энциклопедия. М.: Советская энциклопедия. 1969—1978.
174. Бумаги А. А. Прозоровского по делу Н. И. Новикова / Публ. и примеч. А. К. Афанасьева // Российский Архив: История Отечества в свидетельствах и документах XVIII—XX вв.: Альманах. М.: Студия ТРИТЭ: Рос. Архив, 2009.
175. Государственная Третьяковская галерея
http://www.tretyakovgallery.ru/ru/collection/_show/image/_id/194 (2015年9月15日最終閲覧)
176. Государственные деятели России XIX — начала XX в.: Биографический справочник. М., 1995.
177. Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка, 2-е издание, исправленное и значительно умноженное по рукописи автора. С-Петербург—Москва, 1881, т. II: И—О.
178. Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка. М., 1955-1956.
179. Данилов А.А. Справочные материалы по истории России IX—XIX вв. М., 1997.
180. Деньги России: от истоков до современности
<http://www.russian-money.ru/Articles.aspx?type=content&id=37> (2015年9月15日最終閲覧)
181. Инновационный дайджест
ロシア鉄道公開株式会社（略称：РЖД）のサイト「イノベーション・ダイジェスト」
<http://www.rzd-expo.ru/history/> (2015年9月15日最終閲覧)
182. Исторические материалы
<http://istmat.info/node/33358> (2015年9月7日最終閲覧)

183. Коринский А.А. Народная русь: Круглый год сказаний, поверий, обычаев и пословиц русского народа. М., 1994.
184. Porter, Andrew "Teresa Stolz" in Stanley Sadie, (Ed.), The New Grove Dictionary of Opera, Vol. Four, pp. 549-550. London: MacMillan Publishers, Inc. 1998.
185. «Русская старина». СПб.: Печатня В.И. Головина, 1870-1918.
この雑誌は、1870—1899年刊行の100巻が、電子図書館「ルニバーズ」でオンライン化されている。<http://www.runiverse.ru/lib/book4646/> (2015年9月10日最終閲覧)
186. Русский архив. М.: Университетская типография, 1901. № 8.
この雑誌は、1863—1917年に刊行されたもので、その全156巻が、電子図書館「ルニバーズ」でオンライン化されている。<http://www.runivers.ru/lib/book7627/> (2015年9月10日最終閲覧)
187. Русский биографический словарь : в 25-ти томах. — СПб.—М., 1896—1918.
188. Сафонова О.Ю. Словарь яснополянских крестьян и их потомков, составленный по устным воспоминаниям А.П.Головиной, М.П.Зябревой и Т.А.Румянцевой // Яснополянский сборник 2002.
189. «Славянские древности»: энциклопедический словарь в пяти томах под редакцией Н.И.Толстого. М.: «Международные отношения», 1995. Т.1.
190. «Словари и энциклопедии на Академике» (<http://dic.academic.ru/>)
191. Советская историческая энциклопедия. М.: Советская энциклопедия. Под ред. Е. М. Жукова. 1973—1982.
192. Стат. табл. о состоянии Москвы // Бумаги, относящиеся до Отечественной войны 1812 года, собранные и изданные П. И. Щукиным. М., 1900. Ч. IV, с. 230-231.
193. Сухарева О.В. Кто был кто в России от Петра I до Павла I, Москва, 2005.
194. Фасмер М. «Этимологический словарь русского языка» в четырех томах. Т.2. М., 1967.
195. «Христианство»: энциклопедический словарь: в 3 т. М.: Большая энциклопедия, 1993.
196. Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона : в 86 т. (82 т. и 4 доп.). СПб., 1890—1907.
197. Энциклопедия «Санкт-Петербург». 2-е изд., испр. и доп. СПб: ООО «Бизнес-пресса»; М.: Российская политическая энциклопедия (РОССПЭН), 2006.
198. Энциклопедия суеверий. М.: Миф, Локид, 1995.

トルストイ関連 (日本語)

199. アイザイア・バーリン 『ハリねずみと狐——『戦争と平和』の歴史哲学』(岩波文庫)、1997年。
200. 青山太郎 「ロシアの性愛論 (I) : トルストイの『クロイツェル・ソナタ』」、「言語文化論究」6、1995年、149-158頁。
201. 阿部軍治 「『コサック』におけるトルストイの表現方法」、「言語文化論集」(13)、

- 1982年、25-46頁。
202. 阿部軍治「トルストイの宗教思想（一）：『戦争と平和』を中心として」、「比較文化」1、1985年、119-137頁。
203. 阿部軍治「1870年代中期のトルストイの思想をめぐって」、「ロシア語ロシア文学研究」(20)、1988年、99-100頁。
204. 阿部軍治「バフチンのトルストイ論についての一考察」、「文学研究論集」12、1995年、1-15頁。
205. 阿部軍治『徳富蘆花とトルストイ——日露文学交流の足跡』、彩流社、2002年。
206. 阿部軍治「シンポジウム ドストエフスキーとトルストイ」(特集1 文学における〈虚無〉)、「キリスト教文学研究」(23)、2006年、13-21頁。
207. 阿部軍治『白樺派とトルストイ 武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉を中心に』、彩流社、2008年。
208. 荒正人「負け犬」(『第二の青春・負け犬』所収)、富山房、1978年。
209. 『アラン ヴァレリー：世界の名著66』、中央公論社、1980年。
210. 池内紀訳『リヒテンベルク先生の控え帖』、平凡社、1996年。
211. 石川達夫「トルストイと啓蒙：文化批判の手法としての「文明と自然」をめぐって」、「ロシア語ロシア文学研究」(14)、1982年、23-35頁。
212. 石川達夫「「母なる大地」の文化原理：『戦争と平和』のナターシャの形象をめぐって」、「ロシア語ロシア文学研究」(17)、1985年、101-103頁。
213. 石川達夫「『アンナ・カレーニナ』における「場と生活形式」の問題」、「ロシア語ロシア文学研究」(19)、1987年、131-132頁。
214. 石川達夫「『アンナ・カレーニナ』における非リアリズム的要素：隠喩・象徴・風喩・暗示・照応」、「Русистика：東京大学文学部露文研究室年報」5、1988年、25-53頁。
215. 石川達夫「トルストイと「母なる大地」崇拝」、「言語文化研究」(15)、1989年、20-36頁。
216. 石川達夫「文化批判の手法としての「逆説的対照法」と「異化」：トルストイとその先行者たち」、国際文化学創刊、1999年、13-28頁。
217. 石川實「黄金薔薇十字団への序奏」、「大阪産業大学論集・人文科学編」Vol.116。
218. 伊東一郎「《ヴィイ》——イメージと名称の起源」、「ヨーロッパ文学研究」第32号、早稲田大学文学部、1984。
219. 岩上順一『「戦争と平和」論』、河出書房、1946年。
220. 魚津郁夫「幸福について：トルストイ『戦争と平和』をめぐって」、「崇城大学工学部研究報告」29(1)、2004年、1-12頁。
221. 江口満「トルストイと法華経」、「比較思想研究」(30)、2003年、16-20頁。

222. 江口満「L. N. トルストイの青年時代における哲学的模索」、「創価大学大学院紀要」25、2003年、273-285頁。
223. 江口満「ロシアにおけるトルストイ思想の再評価——1990年代以降のトルストイ思想研究の新動向と今後の展望」、「創価大学ロシア・スラヴ論集」(3)、2010年、47-65頁。
224. 『オーウェル著作集』(全四巻)、平凡社刊、1970年。
225. 大川良輔「トルストイ『幼年時代』の語り手の問題」(2002年度学会報告要旨)、「ロシア語ロシア文学研究」(35)、2003年、120頁。
226. 大川良輔「トルストイとゴーリキー、『幼年時代』研究——自己と他者のまなざし」(19世紀ロシア文学という現在)、「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集(10)、2005年、80-91頁。
227. 大川良輔「トルストイ『自伝三部作』における《comme il faut》」、「北海道大学大学院文学研究科研究論集」(6)、2006年、65-78頁。
228. 大川良輔「トルストイ作品における《comme il faut》の概念(文化研究と越境——19世紀ロシアを中心に)——(文化のプラクティス)」、「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集(23)、2008年、57-71頁。
229. 大木昭男「ロシア文学に描かれた女性像——ドストエフスキイとトルストイに見る」(特集 世界文学に見る女性像)、「櫻美林世界文学」(1)、2003年、29-41頁。
230. 大木昭男「ロシア文学に描かれた生と死——ドストエフスキイとトルストイに見る」(特集 世界文学に見る生と死)、「櫻美林世界文学」(2)、2006年、22-30頁。
231. 大木昭男「トルストイの非戦論への道程」(特集 世界文学に見る戦争)、「櫻美林世界文学」(3)、2007年、29-39頁。
232. 大木昭男「トルストイと民衆」(特集 世界文学に見る民衆像)、「櫻美林世界文学」(4)、2008年、60-72頁。
233. 奥村剋三「トルストイの『戦争と平和』——プラトン・カラターエフの形象について」、「福井大学教育学部紀要 第1部 人文科学」(23)、1973年、141-155頁。
234. 奥村剋三「トルストイとスタニスラフスキイ:芸術観の親近について」、「ロシア語ロシア文学研究」(10)、1978年、39-48頁。
235. 奥村剋三「トルストイの『戦争と平和』——ボグチャーロヴォの農民暴動」、「外国文学研究」(45)、1979年、19-33頁。
236. 加賀乙彦「トルストイとドストエフスキイ」(特集 21世紀ドストエフスキイがやってくる)、すばる 29(4)、2007年、232-237頁。
237. 覚張シルビア「レフ・トルストイの作品における夢と記憶」、「Slavistika:東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報」20、2005年、19-33頁。
238. 覚張シルビア「レフ・トルストイと同時代作家における意識の境界状態の心理描写」、

- 「Slavistika : 東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報」
21/22、2006年、1-29頁。
239. 覚張シルビア「Л.トルストイの『戦争と平和』における共鳴システム」、「ロシア語
ロシア文学研究」(39)、2007年、116-124頁。
240. 覚張シルビア「Л.Н.トルストイの主人公達におけるルソー的自然の諸相：『コサッ
ク』、『アンナ・カレーニナ』より」、「Slavistika : 東京大学大学院人文社会系研究科ス
ラヴ語スラヴ文学研究室年報」23、2007年、1-19頁。
241. 覚張シルビア「トルストイとの出会いから研究へ」(特集 トルストイと現代 没後百
年記念シンポジウム)、「ユーラシア研究」(43)、2010年、9-14頁。
242. 笠間啓治「トルストイ『戦争と平和』のピエールのモデルについて」、(早稲田大学
創立百周年記念号)、「早稲田大学大学院文学研究科紀要」(28)、1982年、81-91頁。
243. 笠間啓治「トルストイ『戦争と平和』のピエールのモデルをめぐって」、「ロシア語
ロシア文学研究」(15)、1983年、108頁。
244. 笠間啓治『19世紀ロシア文学とフリーメーソン』、近代文芸社、1997年。
245. 鹿島由紀子『トルストイ——情熱の発見』、白馬書房、1984年。
246. 鎌田幸伸「ピエール・ベズーホフと1812年——精神的真理の探究と発見(Л.Н.トル
ストイ『戦争と平和』)」、「むうざ」(24)、2006年、75-93頁。
247. 鎌田幸伸「キティーの成長——幸福の青い鳥」(チャーホフ生誕150年、トルストイ
没後100年記念特集)、「むうざ」(27)、2011年、154-160頁。
248. 木崎良平「レフ=トルストイの祖先について」(平成6年度特別講演要旨)、「立正大
学人文科学研究所年報」32、1995年、81-82頁。
249. 木村崇「レフ・トルストイ『イワン・イリイチの死』の<死>を巡って」、「文化科学
研究」5(2)、1994年、39-52頁。
250. 木村崇「文学作品にもとづく日露の死生観比較」、*Japanese Slavic and East European
studies* 28、2008年、79-113頁。
251. 栗原成郎『ロシア民俗夜話』(丸善ライブラリー)、1996。
252. 呉茂一『ギリシャ神話』〈上〉、新潮文庫、1979年。
253. コンスタンチン・ケドロフ『星の書物——東方的・詩的宇宙のヴィジョン』(渡辺 雅
司、亀山 郁夫 訳)、岩波書店、1994年。
254. 小池滋『英国鉄道物語』、晶文社、初版1979、再版2006。
255. コルチャギナ、タチアーナ「マコヴィッツキー日記にみるトルストイ」、「學苑」742、
2002年、13-23頁。
256. 今野 喜和人『啓蒙の世紀の神秘思想——サン=マルタンとその時代』、東京大学出版
会、2006年。
257. 坂庭淳史「黒澤明『生きる』とロシア文学：トルストイと、ドストエフスキーと」、

- 「比較文学年誌」(51)、2015年、44-61頁。
258. 坂上陽子「『ポリクーシカ』におけるトルストイの手法」、「ロシア語ロシア文学研究」(29)、1997年、174-175頁。
259. 坂上陽子「レフ・トルストイ『幼年時代』におけるプロットの基盤としての母親の形象」、「Slavistika: 東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報」15、2000年、32-51頁。
260. 坂上陽子「レフ・トルストイ『戦争と平和』におけるライトモチーフとしてのモスクワの形象」、「Slavistika: 東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報」16/17、2001年、22-39頁。
261. 坂上陽子「レフ・トルストイの初期作品における人物描写の方法」、「ロシア語ロシア文学研究」(34)、2002年、109-115頁。
262. 左近毅「賀川豊彦における平和思想の形成過程: トルストイの影響をめぐって」、「人文研究」48(2)、1996年、1-15頁。
263. 左近毅「レフ・トルストイとカナダのドゥホボール集団」、「むうざ」(18)、1999年、96-108頁。
264. 佐々木照央「「進歩」の思想とトルストイ」、「一橋論叢」76(3)、1976年、269-276頁。
265. 佐藤雄亮「『戦争と平和』の発端」、「ヨーロッパ文学研究」第38号、1991年、16-32頁。
266. 佐藤雄亮「『戦争と平和』における認識」(総会報告要旨)、「ロシア語ロシア文学研究」第23号、1991年、90-92頁。
267. 佐藤雄亮「『戦争と平和』の作品構造とジャンル」、「早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊18集」、1991年、99-110頁。
268. 佐藤雄亮「『アンナ・カレーニナ』における「内的関係」——「赤い袋」と「小さな髭もじやの男」について——」、「ロシア語ロシア文学研究」(日本ロシア文学会誌)第27号、1995年、41-52頁。
269. 佐藤雄亮「トルストイ研究の現状」、雑誌「ユーラシア研究」6、1995年、22-27頁。
270. 佐藤雄亮「現在のロシアにおけるトルストイ研究」、「ロシア文化研究」2、早稲田大学ロシア文学会、1995年、146-154頁。
271. 佐藤雄亮「ロシアの神話・フォークロアにおける鍛冶屋について」、「ロシア・フォークロア研究」所収、1996年。
272. 佐藤雄亮「アンドレーエフ『世界の薔薇』——スターリン時代の神秘思想——」、「ユリイカ」1996年第3号。
273. 佐藤雄亮「等身大のトルストイ像は? ——新全集120巻、ロシアで刊行へ——」、読売新聞文化欄(1999年5月10日付夕刊)。

274. 佐藤雄亮「トルストイ新潮流」、読売新聞欧州版に6回連載（1999年5月14日から6月18日まで週一回）
- 第一回『アンナ・カレーニナ』の「ひげもじゃの男」 1999年5月14日
- 第二回『アンナ・カレーニナ』と鉄道 1999年5月21日
- 第三回 クラムスコイの「見知らぬひと」はアンナ・カレーニナか？ 1999年5月28日
- 第四回『戦争と平和』における「なぞの行動」 1999年6月4日
- 第五回『戦争と平和』の「水滴におおわれた地球儀」の夢 1999年6月11日
- 第六回（最終回） 合理的世界観の崩壊 1999年6月18日
275. 佐藤雄亮「オペラ『ハジ・ムラート』初演見聞記——「運命」の便利な使い道——」、日本トルストイ協会報「緑の杖」第1号、2004年。
276. 佐藤雄亮「ロシアにおけるトルストイ研究の問題点——われわれはトルストイの著作を知らない...——」、日本トルストイ協会報「緑の杖」第6号、2009年、33-35頁。
277. 佐藤雄亮「トルストイの原稿みつかる——武者小路実篤が愛蔵していた——」、日本トルストイ協会報「緑の杖」第8号、2011年、45-54頁。
278. 佐藤雄亮「トルストイの農奴解放の試み：地主をやめるのはむずかしかった...」、日本トルストイ協会報「緑の杖」第9号、2012年、4-21頁。
279. 佐藤雄亮「追悼 藤沼貴先生をしのぶ」、「ロシア文化研究」第19号（早稲田大学ロシア文学会）、2012年、95-101頁。
280. 佐藤雄亮「藤沼貴先生の業績について」、「ロシア文化研究」20、早稲田大学ロシア文学会、2013年、81-105頁。
- 藤沼貴先生業績一覧（年代別）、87-105頁。
- （藤沼貴氏が作成されていたデータの編集、補足を佐藤が行い、「ロシア文化研究」編集委員会において小俣智史氏らが細部を確認した）
281. 佐藤雄亮「目の前の仕事をするのみ」、日本トルストイ協会報「緑の杖」第10号、2013年、69-77頁。
- 付記として「藤沼貴氏の未発表のトルストイ論——心ならずも義弟を自殺に追い込む?...——」を含んでいる。本稿第3部『アンナ・カレーニナ』第1章「トルストイは『殺人者』か：二つの悲恋にかんする藤沼貴氏の未発表の説」は、その再録である。
282. 佐藤雄亮「文豪トルストイの原稿みつかる」、ロシアNOWの紙版および電子版、2011年9月17日。
283. 佐藤雄亮「都心を見たら離宮群へ」、ロシアNOWの紙版および電子版、2012年5月

18日。

ロシア NOW (<http://jp.rbth.com/>) は、ロシア政府発行紙「ロシースカヤ・ガゼータ (ロシア新聞)」が、ロシアを紹介するために展開している国際プロジェクト「Russia Beyond the Headlines (<http://rbth.com/>)」の日本語版である。

なお、筆者 (佐藤) は、「ロシア NOW」電子版の「今日は何の日」を、2012年7月11日から2013年9月19日まで毎日担当した。署名入りのものとそうでないものがあるが、自ら執筆しかつ多少なりともオリジナリティーがあると考えたもののみ署名した。それらは、程度の差こそあれ、いずれも本稿にかかわっているので、一括して挙げておく。

<http://jp.rbth.com/search?page=1&query=%E4%BB%8A%E6%97%A5%E3%81%AF%E4%BD%95%E3%81%AE%E6%97%A5&PageRange=all&ResultType=all&Section=all> (2015年8月8日最終閲覧)

- | | | |
|----|----------------------------|-------------|
| a. | 文豪レフ・トルストイの誕生日 | 2012年9月9日 |
| b. | 文豪トルストイがソフィア・ベルスと結婚 | 2012年9月23日 |
| c. | インタビュー：作曲家ショスタコーヴィチのイリーナ夫人 | 2012年9月25日 |
| d. | 文豪トルストイの「初等教科書」が出版 | 2012年11月13日 |
| e. | パーヴェル1世暗殺 | 2013年3月11日 |
| f. | 画家イワン・クラムスコイ死す | 2013年4月5日 |

さらに、筆者が執筆したが無記名のもののなかから、本稿で言及したものも挙げておく。

- | | | |
|----|-------------------|-------------|
| g. | クリミア戦争勃発 | 2012年10月16日 |
| h. | 未来の女帝エカテリーナ2世生まれる | 2013年5月2日 |
| i. | ポルタヴァの戦いでロシア軍が大勝 | 2013年7月8日 |
| j. | オスタンキノ宮殿が完成 | 2013年7月22日 |

284. 島村幸忠「神秘としての死の表象：ジャンケレヴィッチとトルストイにおける微小なもの」(第六十四回美学会全国大会発表要旨)、「美學」64(2)、2013年、129頁。
285. 清水俊行「レフ・トルストイとロシア正教会：探求と離反の運命をめぐる予備的考察(前篇)」、「神戸外大論叢」58(3)、2007年、15-35頁。
286. 清水俊行「レフ・トルストイとロシア正教会——離反と探求の運命をめぐる予備的考察(中篇)」、「神戸外大論叢」59(2)、2008年、95-121頁。
287. 清水俊行「レフ・トルストイとロシア正教会——トルストイとオプチナ修道院(後篇)」、「神戸外大論叢」60(1)、2009年、33-64頁。

288. ゲルショム・ショーレム『カバラとその象徴的表現』（小岸昭、岡部仁訳）〈新装版〉、法政大学出版局（叢書・ユニベルシタス）、2011年。
289. 白石喜之助『古代印度哲学』、教文館、1909年。
290. 白石喜之助『基督教の宇宙観及び人生観：一名・宇宙人生の一元的解釈』、教文館、1913年。
291. 『聖書』、日本聖書協会、新共同訳、1997年。
292. 関啓子「トルストイにおける自由教育論をめぐって」、「一橋論叢 76」(3)、1976年、284-290頁。
293. 関啓子「スヴァーリン文庫のなかのトルストイ」、「一橋大学社会科学古典資料センター年報」14、1994年、15-19頁。
294. 高杉一郎「「巡礼紀行」から「謀叛論」まで——徳富蘆花とレフ・トルストイ」（梅根悟博士喜寿記念論文集）、「和光大学人文学部紀要」(14)、1979年、163-168頁。
295. 高山旭『『戦争と平和』研究』、「ヨーロッパ文学研究」(5)、1964年。
296. 高山旭「「青春と模索」——トルストイの青年時代」、「人文論集」(9)、1972年、135-161頁。
297. 高山旭「トルストイと長篇小説」（早稲田大学創立 100 周年記念号）、「人文論集」(20)、1982年、269-271頁。
298. 田中克己『鍛冶屋と鉄の文化』（『日本古代文化の研究・鉄』所収、森浩一編、社会思想社、1974年）。
299. ダンテ『神曲』（平川祐弘訳）、河出書房新社、1992年。
300. ニコライ・チェルヌイシェフスキー「幼年時代および少年時代」〔L・N・トルストイの軍隊短編小説集〕（北垣信行訳）、『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、1978年、114-115頁。
301. 辻原登、沼野充義、山城むつみ「座談会 10 年代の入口で——文學界 2010 没後百年トルストイを復活させる——その巨大かつ矛盾に満ちた作品と生涯が、二十一世紀の我々に物語るものとは」、「文學界」64 (4)、2010年、144-168頁。
302. 徳富蘆花（健次郎）『トルストイ』、民友社、1897年。
303. ドストエフスキー『作家の日記』5（小沼文彦訳）、ちくま学芸文庫、91-102頁。
304. ドストエフスキー『作家の日記』6（小沼文彦訳）、ちくま学芸文庫、1998年、68-144頁。
305. タチャーナ・トルスタヤ『トルストイ』（木村浩・関谷苑子訳）、TBSブリタニカ、1977年。

306. レフ・トルストイ『侵入』（中村白葉訳）、『トルストイ全集 2』、264-289 頁、河出書房新社、1973 年。
307. レフ・トルストイ『森林伐採』（中村白葉訳）、『トルストイ全集 2』、290-323 頁、河出書房新社、1973 年。
308. レフ・トルストイ『狂人の手記』（中村白葉訳）、『トルストイ全集 9』所収、河出書房新社、1973 年、96-106 頁。
309. トルストイ、レフ「教職者たちへの訴え」(1)、安村 仁志（訳注解）、「中京大学教養論叢」23（4）、1983 年、781-798 頁。
310. トルストイ、レフ「教職者たちへの訴え」(2)、安村 仁志（訳注解）、「中京大学教養論叢」24（1）、1983 年、187-202 頁。
311. トルストイ、レフ「教職者たちへの訴え」(3)、安村 仁志（訳注解）、「中京大学教養論叢」24（2）、1983 年、433-443 頁。
312. 『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』（法橋和彦編）、河出書房新社、1978。
313. 中野好夫『蘆花徳富健次郎』（全 3 巻）、筑摩書房、1972-1974 年。
314. 長野俊一「逸脱と愛と死と——『アンナ・カレーニナ』について——」、「人間・文化・社会」、1997 年、311-328 頁。
315. 長野俊一「性の迷宮——『家庭の幸福』から『クロイツェル・ソナタ』へ——」、「言語と文化の諸相」、1999 年、321-334 頁。
316. 中村唯史「顕示する「私」：トルストイとその受容をめぐる一試論」、「山形大学紀要・人文科学」14（3）、2000 年、127-156 頁。
317. 中村唯史「トルストイ『戦争と平和』における「崇高」の問題」、「山形大学人文学部研究年報」8、113-143 頁、2011 年。
318. 中村唯史「1910-20 年代のエイヘンバウム—— フォルマリズムとの接近と離反の過程——」、「スラヴ研究」No. 59、25-59 頁、2012。
319. 野中進「フォルマリストとバフチン：トルストイアン vs ドストエフスキアンの構図で」、「埼玉大学紀要・教養学部」47（2）、2011 年、219-229 頁。
320. 乗松亨平「トルストイ『コサック』におけるカフカス表象の「現実性」」、「スラヴ研究」No. 51、2004 年、295-320 頁。
321. 芳賀直哉「死にゆく者の最終段階における希望について：トルストイ『イワン・イリツチの死』を手がかりにして」（概要）、「文化と哲学」25、2008 年、33-35 頁。
322. パナーエフ『文学的回想』第一部および第二部（井上満訳）、岩波文庫、2001 年。
323. ミハイル・バフチン『小説の言葉』（伊東一郎訳）、平凡社ライブラリー、1996 年。
324. 原卓也・小泉猛編訳『ドストエフスキーとペトラシエフスキー事件』、集英社、1971 年。

325. 原卓也「トルストイの宗教思想」、「ロシア語ロシア文学研究」(19)、1987年、1-10頁。
326. 坂内徳明「ロシア荘園文化の発見：ニコライ・ヴランゲリと彼の仕事」(一橋大学大学教育研究開発センター、「人文・自然研究」8)、2014年。
327. 平野葵「村上春樹『ねむり』と『アンナ・カレーニナ』」、「北海道大学大学院文学研究科研究論集」(14)、2014年、105-116頁。
328. フィラトフ、ウラジーミル「現代ロシアのトルストイ」(特集 トルストイと現代 没後百年 記念シンポジウム)、「ユーラシア研究」(43)、2010年、3-8頁。
329. ダイアン・フォーチュン『神秘のカバラー』(大沼 忠弘訳)、国書刊行会、1994年。
330. 藤沼貴「『アンナ・カレーニナ』の素材」、「Studium」№1、1962年、1-11頁。
331. 藤沼貴「カチューシャの系譜」、「信州白樺」第34・35号合併号(レフ・トルストイ特集)所収、1979年11月発行、44-57頁。
332. 藤沼貴『近代ロシア文学の原点：ニコライ・カラムジン研究』、れんが書房新社、1997年。
333. 藤沼貴「ロシアの鍛冶屋」、「ロシア・フォークロア研究」7・8号所収、2000年。
334. イワン・ブーニン『トルストイの解脱』(高山旭訳)、富山房、1986年。
335. プルードン〈3〉『所有とは何か』、『連合の原理』(長谷川進、江口幹訳)、(アナキズム叢書)、三一書房、1971年。
336. ゲオルギー・プレハーノフ「カール・マルクスとレフ・トルストイ」(左近毅訳)、『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、河出書房新社、1978年、78-98頁。
337. ジョン・ベイリー『トルストイと小説』(海老根宏訳)、研究社出版、1973年。
338. ヘーゲル『歴史哲学講義』(長谷川宏訳)全2巻、岩波文庫、1994。
339. 法橋和彦「初期トルストイにおける《самолюбие》用語法の諸問題」、「ロシア語ロシア文学研究」(3)、37-60頁、1971年。
340. 法橋和彦「トルストイを語る」、「ロシア・ソビエト研究」(11)、1977年、33-65頁。
341. 法橋和彦『ロシア文学の眺め』、新読書社、1999年。
342. 法橋和彦「トルストイの無抵抗主義(非戦・非暴力の思想)と現代、「むうざ」(21)、2002年、4-16頁。
343. 法橋和彦「『懺悔』の研究(盟友、小野理子の思い出のために)(トルストイ生誕180年、ゴーリキイ生誕140年記念特集)、「むうざ」(26)、2009年、18-90頁。
344. 法橋和彦「トルストイとチェーホフの読書におけるソクラテスとマルクス・アウレリウスの意義」、「むうざ」(27)(チェーホフ生誕150年、トルストイ没後100年記念特集)、119-137頁、2011年。

345. 「文献復刻 トルストイの三人の下僕の話」
黒田乙吉訳（原典：Александр Дроздов. Три свидетеля. "Красная нива"1928, №37, С.12-13）、
法橋和彦解題、むうざ（27）（チェーホフ生誕 150 年、トルストイ没後 100 年記念特集）、
171-184 頁、2011 年。
346. 法橋和彦『古典として読む『イワンの馬鹿』』、未知谷、2012 年。
347. 法橋和彦「プルタルコス英雄伝を読む少年：『戦闘と平和』 エピローグ第一部の読み方に
よせて」、「むうざ」28 号、2013 年、7-54 頁。
348. 法橋和彦「ふたつの『高慢なアゲイの話』：ガルシン読書」、むうざ（29）、143-167 頁、
2014 年。
349. 法橋和彦「藤沼貴とその時代：『トルストイと生きる』によせて」——藤沼貴『トルスト
イと生きる』（春風社、2013 年）、「ロシア文化研究」（22）、73-81 頁、2015 年。
350. 本多顕彰「トルストイと『リア王』：断片」、「外国文学研究」1、1964 年、2-5 頁。
351. 本多秋五「小林秀雄論」、「近代文学」1946 年第三号、未来社刊『転向文学論』所収。
352. 本多秋五『「戦争と平和」論』、鎌倉文庫、1947 年。
353. 前田俊之「資料 レフ・トルストイと R・サイヤンの往復書簡——民話『愛あるところに神
あり』をめぐって」、「立命館文学」（574）、2002 年、859-863 頁。
354. S.L. マグレガー・メイザース『ゾハール 光輝の書——ヴェールを脱いだカバラ』
（判田格訳）、国書刊行会、2000 年。
355. 増田悟「トルストイ：『イヴァン・イリイチの死』」、「Rusistika：東京大学文学部露文
研究室年報」8、1991 年、74-80 頁。
356. 松下裕「わが愛するロシア文学（6）トルストイ『アンナ・カレーニナ』」、「窓」
（120）、2002 年、38-45 頁。
357. ニコライ・ミハイロフスキー「……ふたたび L・N・トルストイ伯について」（藤沼貴訳）、
『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、河出書房新社、1978 年、30-49 頁。
358. 宮坂 和男「トルストイの生命論」、「人間環境学研究」8（広島修道大学）、2010 年。
359. 村田京子「国王ルイ・フィリップの養育掛ジャンリス夫人の女子教育論——『アデルとテ
オドール』」、「女性学研究」（17）、2010 年。
360. 望月哲男「トルストイの長編小説と比喻：『アンナ・カレーニナ』をめぐって」（特集 ト
ルストイと現代 没後百年記念シンポジウム）、「ユーラシア研究」（43）、2010 年、21-26 頁。
361. 望月哲男「比喻から見るトルストイとナボコフ：『アンナ・カレーニナ』論をめぐって」
（シンポジウム ナボコフの『ロシア文学講義』を再読する）、Krug. New series 7、2014 年、
25-33 頁。

362. 八島雅彦『『懺悔』にあらわされたレフ・トルストイの人間学の基礎について』、「ロシア語ロシア文学研究」(18)、1986年、96-97頁。
363. 八島雅彦「レフ・トルストイとアメリカ」、『言語文化研究』7、1989年、91-97頁。
364. 八島雅彦「レフ・トルストイの東洋的側面に関する一考察：その孔子像をめぐる」、『ロシア語ロシア文学研究』(21)、1989年、26-36頁。
365. 八島雅彦「レフ・トルストイの人間観と朱子学：「明德」から「天命」へ」、『言語文化研究』8、1990年、31-37頁。
366. 八島雅彦「日本におけるトルストイの原像」、『人文研究』(138)、1999年、55-76頁。
367. 安村仁志「トルストイの『懺悔』分析表-1-」、『中京大学教養論叢』16(4)、1976年、1184-1155頁。
368. 安村仁志「トルストイの『懺悔』分析表-2-」、『中京大学教養論叢』17(1)、1976年、352-321頁。
369. 安村仁志「トルストイの『懺悔』分析表-3-」、『中京大学教養論叢』17(2)、1976年、602-564頁。
370. 安村仁志「トルストイと神：『懺悔』の分析を終えて」、『中京大学教養論叢』17(3)、1976年、761-792頁。
371. 安村仁志『『懺悔』から『教義神学の研究』へ：トルストイの第二の旅立ち』、『ロシア語ロシア文学研究』(10)、1978年、49-63頁。
372. 柳富子「トルストイへの終わりなき旅——資料収集」、『ロシア文化研究』(2)、1995年、143-145頁。
373. 柳富子『トルストイと日本』、早稲田大学出版部、1998年。
374. 柳富子「懺悔門(1)トルストイの『懺悔』を読む(上)」、『大法輪』69(1)、2002年、144-149頁。
375. 柳富子「懺悔門(2)トルストイの『懺悔』を読む(下)」、『大法輪』69(2)、2002年、150-156頁。
376. 山内昌之『ラディカル・ヒストリー——ロシア史とイスラム史のフロンティア』(中公新書)、1991年。
377. 山内昌之『世界の歴史20：近代イスラームの挑戦』(中公文庫)、2008年。
378. 山田吉二郎「トルストイ作『幼年時代』について」、『スラヴ研究』39、1992年、153-179頁。
379. C.G ユング『ユング自伝——思い出・夢・思想——』(アリエラ・ヤッフエ編集)、(河合隼雄、藤縄昭、出井淑子訳、みすず書房、1973年。
380. C.G ユング『元型論』(林道義訳)、紀伊国屋書店、1982年。
381. C.G ユング『続・元型論』(林道義訳)、紀伊国屋書店、1983年。
382. C.G ユング『タイプ論』(林道義訳)、みすず書房、1987年。

383. C.G ユング『個性化とマンダラ』(林道義訳)、みすず書房、1991年。
384. C.G ユング『変容の象徴—精神分裂病の前駆症状』(野村美紀子訳)、ちくま学芸文庫、1992年。
385. C.G ユング『自我と無意識分析心理学』(松代洋一、渡辺学訳)、第三文明社・レグルス文庫、1995年。
386. C.G ユング 『創造する無意識 ユングの文芸論』(松代洋一編訳)、平凡社ライブラリー、1996年。
387. C.G ユング『転移の心理学』(林道義、磯上恵子訳)、みすず書房、2000年。
388. C.G ユング『分析心理学』(小川捷之訳)、みすず書房、2000年。
389. C.G.ユング, R.ヴィルヘルム『黄金の華の秘密』(湯浅泰雄、定方昭夫訳)、人文書院、2004年。
390. ヨコタ村上孝之「19世紀末から20世紀はじめの日本文学・思想におけるクリミア戦争の表象：レフ・トルストイのセヴァストポール物語とその遺産」、*Japanese Slavic and East European studies* 31、2011年、23-34頁。
391. 吉田正信「蘆花におけるトルストイの受容——『順礼紀行』前後」、『国語国文学報』(50)、1992年、75-85頁。
392. 米川哲夫「トルストイと農奴解放——1856年の試み——」、東京大学教養学部外国語科編「外国語科研究紀要」第27巻第4号、1980年3月。
393. 米川哲夫「トルストイと農奴解放——1856年から1861年へ——」、『ロシア史研究』№33、1981年4月。
394. ローザ・ルクセンブルク「社会を思索したトルストイ」(八木浩訳)、『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、河出書房新社、1978年、68-74頁。
395. ルソー『エミール』(岩波文庫・今野一雄訳)、全3巻、岩波文庫。
396. ウラジーミル・レーニン「ロシア革命の鏡としてのトルストイ」(蔵原惟人訳)、『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、河出書房新社、1978年、63-67頁。
397. 『ロシア史〈2 18~19世紀〉』(世界歴史大系)、田中陽児、倉持俊一、和田春樹、山川出版社、1994年。
398. D.H.ロレンス「小説論」(永松定訳)、『トルストイ研究：トルストイ全集別巻』所収、1978年、100-112頁。
399. ローレンス・スターン『トリストラム・シャンディ』(朱牟田夏雄訳)、岩波文庫(全3冊)、1969年。

全集、作品集、著作集（日本語）

400. 『キリスト教神秘主義著作集 17、サン・マルタン』（村井文夫訳）、教文社、1992。
401. 小林秀雄全集（全 14 巻／別巻 2／補巻 3）、新潮社、2001—2010 年。
402. 谷川健一全集（全 24 巻）、富山房インターナショナル、2006—2013 年。
403. 『蘆花全集』（全 20 巻）、蘆花全集刊行会、1929—1930 年。
404. 『蘆花日記』（7 巻）（中野好夫・横山春一監修）、筑摩書房、1985—1986 年。
405. 藤沼貴『トルストイと生きる』、春風社、2013 年。
藤沼貴のトルストイ論集成。ほぼすべてのトルストイ論（30 篇）が執筆年代順に収められている。筆者（佐藤）は編集に参加し、解説（533—548 頁）を執筆した。
406. 本多秋五『トルストイ論』、河出書房新社、1960 年。
407. 本多秋五『トルストイ論集』、武蔵野書房、1988 年。
408. 『本多秋五全集』（全 16 巻別巻 2）、菁柿堂、1994—2002 年。
409. 『ルソー全集』（小林善彦・作田啓一ほか訳、全 14 巻・別巻 2 冊）、白水社、1979-84 年。

事典類（日本語）

410. 『ロシア・ソ連を知る事典』、平凡社、1989 年。

* 『祖国戦争とロシア社会 Отечественная война и Русское общество』（1911）から、本稿第 1 部第 2 章との関連で参照したものがあるので、ここに一括して、収録順に挙げておく。

411. Василенко Н.П. Отношения между Россией и Францией до французской революции // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.1. С.1-19.
412. Василенко Н.П. Рост французского влияния в России до французской революции // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.1. С.20-25.
413. Бочкарев В.Н. Екатерина и Франция // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.1. С.26-43.
414. Бочкарев В.Н. Русское общество Екатерининской эпохи и французская революция // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.1. С.44-63.
415. Клочков М.В. Павел и Франция // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.1. С.64-73.
416. Дживелегов А.К. Революция и Европа // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.1. С.74-88.

1812 年関連 (外国語)

417. «1812-1814: Реляции. Письма. Дневники» / Ред. Афанасьев А.К., Быстрова Н.Б., Зубова Н.Л. и др. М.: Терра, 1992.
418. 1812 год... Военные дневники/ Сост., вступ.ст.А.Г.Тартаковского. М.: Сов.Россия, 1990.
419. 1812 год в русской поэзии и воспоминаниях современников. М.: Правда, 1987.
420. 200 лет Отечественной войне 1812 года : «Гроза двенадцатого года»: размышления по поводу юбилея // Журнал "Санкт-Петербургский университет", №16 (3858) 28 декабря 2012.
<http://journal.spbu.ru/?cat=219> (2015 年 9 月 10 日最終閲覧)
421. Алексеев В.П. Народная война // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.227-237.
422. Алексеев В.П. Переправа через Березину // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.253-255.
423. Апухтин А.Н. Березинская операция // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.238-252.
424. Барклай де-Толли М.Б. «Изображение военных действий 1812 года». СПб.: Тип.П.П.Сойкина, 1912.
425. Беннигсен Л.Л. Записки // Русские мемуары. Избранные страницы. 1800–1825 гг. М.: Правда, 1989.С.19-36.
426. Богданович М.И. История Отечественной войны 1812 года: Том II. СПб, 1859.
427. Булгакова А.Я. «Русские и Наполеон Бонапарте». М, 1813.
428. Бумаги, относящиеся до Отечественной войны 1812 года, собранные и изданные П. И. Щукиным. М., 1900.
429. Военная энциклопедия: Всего томов 18. СПб.: Тип. Т-ва И.Д. Сытина, 1911-1915.
430. Военский К. А. Отечественная война 1812 года в записках современников (Материалы воен.-учен. архива). СПб, 1911.
431. Волконский Д.М. Дневник1812—1814гг. // 1812 год... Военные дневники / сост., вступ. ст. А. Г. Тартаковский, худож. Г. Г. Федоров. М.: Советская Россия, 1990. С.114-184.
432. Воспоминания и письма М.И.Муравьева-Апостола. В кн. Мемуары декабристов. Южное общество. Под ред. И.В.Пороха и В.А.Федорова. М., Изд-во Моск.ун-та, 1982.
433. Gallerix (<http://en.gallerix.ru/>) (2015 年 9 月 10 日最終閲覧)
434. Глинка С.Н. Из записок о 1812 годе // «1812 год в русской поэзии и воспоминаниях современников». М.: Правда, 1987.
435. Глинка Ф.Н. «Письма русского офицера о Польше, Австрийских владениях, Пруссии и Франции, с подробным описанием Отечественной и заграничной войны с 1812 по 1814 год». М., 1870.

436. Головачев П.М. Декабристы: 86 портретов, вид Петровского завода и 2 бытовых рисунка того времени. М., 1906.
437. Горностаев М.В. Государственная и общественная деятельность Ф.В. Ростопчина в 1796-1825 гг. Глава 3. 1 (дисс.канд.ист.наук, 2003, Московский государственный областной университет).
438. Горностаев М.В. Граф Ф.В. Ростопчин – истинный патриот России // журнал «Русская Мысль», 2009, № 1-12. С.66.
439. Государя Императора воззвание к жителям Московской Столицы. 6 июля 1812. Первопрестольной Столице Нашей Москве // «Исторический, статистический и географический журнал», 1812, ч.3, кн.1 (июль). С.66-67.
440. Готье Ю.В. Французы в Москве // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.110-120.
441. Граф Филипп-Поль де Сегюр. Поход в Россию. М.: «Захаров», 2002.
442. Дживелегов А.К. Наполеон перед отступлением // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.180-185.
443. Digby Smith "Borodino". The Windrush press, 1998.
444. Дурново Н.Д. Дневник 1812 года // 1812 год... Военные дневники / сост., вступ. ст. А. Г. Тартаковский, худож. Г. Г. Федоров. М.: Советская Россия, 1990. С.31—113.
445. Ермолов А.П. Записки. 1798-1826. М.: «Высшая школа», 1991.
446. Жаринов Д.А. Впечатления от пожара и мнения современников // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.152-161.
447. Записки Бенкендорфа. 1812 год. Отечественная война. 1813 год. Освобождение Нидерландов. М., 2001.
448. Земцов В.Н. "Михаил Верещагин. Житие «несвятого» мученика. Сборник материалов к 200-летию Отечественной войны 1812 года. Том 9. Эпоха 1812 года. Исследования. Источники. Историография. Труды Государственного исторического музея Выпуск 183. Москва. 2010 год.
449. "homeland-weekend.ru/" : Экскурсии Бородино
<http://homeland-weekend.ru/docs/c-f-e/> (2015年9月10日最終閲覧)
450. «Из журнала военных действий о военном совете в Филях 1 сентября 1812 г» в кн.: "Клятву верности сдержали": 1812 год в русской литературе. М., "Московский рабочий", 1987.
451. Кабанов А.К. Малоярославец и начало отступления // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.197-207.
452. Карл фон Клаузевиц «1812 год. Поход в Россию». М.: Захаров, 2004.

邦訳：フオン・クラウゼヴィツ『一八一二年ロシア戦役史』（外山卯三郎訳）、みたま出版、1944年。

453. Катаев И.М. Пожар Москвы // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.141-151.
454. Катаев И.М. Переписка о мире между Наполеоном и Александром // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.172-179.
455. Клятву верности сдержали. 1812 год в русской литературе : сборник / сост. С.Р. Серков. М. : Московский рабочий, 1987.
456. Князьков С.А. М. И. Голенищев-Кутузов // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.1-7.
457. Князьков С.А. Оставление французами Москвы // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.190-196.
458. Князьков С.А. Партизаны и партизанская война в 1812 году // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.208-226.
459. Когда построят мост в Чулково?: Автомобильный мост через Москва-реку на Новорязанском шоссе между Заозерьем и Чулково
<http://titovo-online.ru/2014/09/kogda-postroyat-most-v-chulkovo/> (2015年9月10日最終閲覧)
460. Кожевников А.А. Русская армия в период от сдачи Москвы до Тарутина // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.93-109.
461. Кожевников А.А. Бой под Тарутиным // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.186-189.
462. Краснов Г.В. Богучаровский бунт и его социально-исторические источники // Л.Н.Толстой: статьи и материалы V. Горький, 1963.
463. Краснов Г.В. Платон Каратаев и толстовская философия народной жизни // Л.Н.Толстой: статьи и материалы V. Горький, 1963.
464. Куковенко В.И. Забытая страница войны 1812 г. // Вопросы истории. 1989. № 12.
465. «Кутузов» (1943年製作のソ連映画『クトゥーゾフ』)
<http://morewar.ru/main/2150-kutuzov-1943.html> (2015年9月10日最終閲覧)
466. Кутузов М.И. Сборник документов. М., 1950-1956. В 5 томах.
467. Кутузов М.И. Письма, записки. М.: Воениздат, 1989.
468. Левенштерн В.И. Записки // Русская старина. 1901. № 1.
469. Липранди И.П. // 1812 год... Военные дневники / сост., вступ. ст. А. Г. Тартаковский, худож. Г. Г. Федоров. М.: Советская Россия, 1990. С.226—241.
470. Маевский С.И. Мой век, или История генерала Маевского // Русская старина. 1873. № 8.
471. Мельгунов С.П. Ростопчин — московский главнокомандующий // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.34-82.

472. Мельгунов С.П. Кто сжег Москву? // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.162-171.
473. Мендельсон Н.М. Ростопчинские афиши // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.83-91.
474. Михайловский-Данилевский А. И. ОПИСАНИЕ ОТЕЧЕСТВЕННОЙ ВОЙНЫ В 1812 ГОДУ ПО ВЫСОЧАЙШЕМУ ПОВЕЛЕНИЮ СОЧИНЕННОЕ ГЕНЕРАЛ-ЛЕЙТЕНАНТОМ МИХАЙЛОВСКИМ-ДАНИЛЕВСКИМ : Ч. 1-4. СПБ, 1839.
475. Михневич Н.П. Бородино // «ОТЕЧЕСТВЕННАЯ ВОЙНА И РУССКОЕ ОБЩЕСТВО» В 7 ТОМАХ. М.: ИЗДАНИЕ Т-ВА И. Д. СЫТИНА, 1911. Т.4. С.17-29.
476. Михневич Н.П. Фили // «ОТЕЧЕСТВЕННАЯ ВОЙНА И РУССКОЕ ОБЩЕСТВО» В 7 ТОМАХ. М.: ИЗДАНИЕ Т-ВА И. Д. СЫТИНА, 1911. Т.4. С.30-33.
477. МУЗЕЙ-ЗАПОВЕДНИК «БОРОДИНСКОЕ ПОЛЕ»: ВЫСТАВКА НА СТАНЦИИ БОРОДИНО

<http://www.borodino.ru/index.php?page=content&DocID=106> (2015 年 9 月 10 日最終閱覽)
478. «Отечественная война и Русское общество». М., издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911.
479. Переписка императора Александра I с сестрой великой княгиней Екатериной Павловной. СПб., 1910.
480. Philip Henry Stanhope “Notes of Conversation with the Duke of Wellington”, 1831-1851 (1886, reprinted 1998).
481. Plate 75 from Atlas to Alison's History of Europe by Alison & Johnston Battle of Borodino, 7 September 1812 (Original in 1850. Modified by Vissarion in 2007)
<http://www.maproom.org/00/13/present.php?m=0075> (2015 年 9 月 10 日最終閱覽)
482. Пушкин А. С. Полководец: ("У русского царя в чертогах есть палата...") // Пушкин А. С. Полное собрание сочинений: В 16 т. М.; Л.: Изд-во АН СССР, 1937—1959. Т. 3, кн. 1. Стихотворения, 1826—1836. Сказки. — 1948. С. 378—380.
483. Ростопчин Ф.В. Правда о пожаре Москвы. // Сочинения. СПб., 1853.
484. PRO ГОРОД
<http://pg21.ru/node/56033> (2015 年 9 月 10 日最終閱覽)
485. Сегюр Л.-Ф. Пять лет в России при Екатерине Великой. СПб., 1865.
486. Тарле Е.В. 1812 год. М.: Академии Наук СССР, 1961.
487. Тарле Е. В. Сочинения в 12 томах. М.: Издательство Академии наук СССР, 1957—1962.
488. The McGill University Napoleon Collection
<http://web.library.mcgill.ca/napoleon/search/printsdetail.php?doctype=Prints&ID=6410&siteLanguage=english> (2015 年 9 月 10 日最終閱覽)
489. Томсинов В.А., Аракчеев (серия "ЖЗЛ"). Издание 2-е. М.: Молодая гвардия, 2010.
490. Троицкий Н.А. "1812 великий год России. Новый взгляд на Отечественную войну 1812 года". М.: Омега, 2007.

491. Уланов В.Я. Организация управления в занятых французами русских областях // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.121-140.
492. Федеральный портал PROTOWN.RU
<http://protown.ru/russia/city/articles/4623.html> (2015年8月17日最終閲覧)
493. Федоров В.П. От Царева-Займища до Бородина // «Отечественная война и Русское общество» в 7 томах. М.: Издание Т-ва И. Д. Сытина, 1911. Т.4. С.8-16.
494. Fusil, Louise «Souvenirs d'une Femme sur la retraite de Russie», Paris, 1910.

1812年関連（日本語）

495. 井桁貞義「ドストエフスキイとナポレオン——一九世紀ロシア思潮のなかで」、「理想」(552)、1979年、83-104頁。
496. 池本今日子『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』、風行社、2006年。
497. 池本今日子「ロシア皇帝アレクサンドル一世の時代の憲法政策：スペランスキーによる憲法案」、「史観」(158)、2008年、55-73頁。
498. 池本今日子「アレクサンドル一世の世論=社会政策：ナポレオン戦争を背景として」(『祖国戦争200年』に寄せて：軍隊と社会の相克、共通論題報告要旨、2012年度ロシア史研究会大会)、「ロシア史研究」(92)、2013、91頁。
499. 池本今日子「一八一二年の退却とアレクサンドル一世の声明：「ナロードの戦争」考」、「ロシア史研究」(93)、2013年、3-24頁。
500. ヴィゴ＝ルシヨン、フランソワ『ナポレオン戦線従軍記』瀧川好庸訳、中央公論社、1982年。
501. 大岡昇平「ナポレオンの眼」、新潮69(1)、1972年、36-49頁。
502. 小椋公人「クトゥーゾフとカラターエフ」、「法政大学教養部研究報告」(10)、1966年、1-13頁。
503. 笠間啓治「散策のペテルブルグ(14)クトゥーゾフ将軍」、「窓」(106)、1998年、22-25頁。
504. 加瀬俊一『ナポレオン——その情熱的生涯』、「文藝春秋」、1969年。
505. 小泉隆雄「スタンダールのナポレオン観」、「大阪府立大学紀要 人文・社会科学」(10)、1962年。
506. 高野雅之「十九世紀ロシアの保守思想——シシコーフ提督と1812年戦役」、「早稲田大学大学院文学研究科紀要 第2分冊」(41)、1995年、65-80頁。
507. 越野剛「ロシア文学とメスメリズム」、「ロシア語ロシア文学研究」(31)、1999年、15-29頁。

508. 越野剛「ナポレオン戦争と歴史小説（現代文芸研究のフロンティア(7))、「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集（9）、2005年、69-87頁。
509. 越野剛「ナポレオン戦争におけるフォードル・ロストプチンと民衆（ナロード）イメージ」、ロシア語ロシア文学研究（40）、2008年、28-37頁。
510. 小宮正弘「ナポレオン帝国衰亡史における「大陸封鎖」の位置」、「静岡産業大学国際情報学部研究紀要」（7）、2005年、191-204頁。
511. 小宮正弘「『セント=ヘレナ覚書』の予備的考察」、「静岡産業大学情報学部研究紀要」9、2007年、117-127頁。
512. アルマン・ドゥ・コレンクール『ナポレオン—ロシア大遠征軍潰走の記』（小宮正弘訳）、時事通信社、1981年。
513. 「ロシア NOW」 電子版の「今日は何の日」の拙稿
- | | |
|-------------------------|------------|
| a. ナポレオンとロシア軍がスモレンスクで激突 | 2012年8月16日 |
| b. ナポレオンの「大陸軍」がモスクワに入城 | 2012年9月14日 |
| c. 祖国戦争の勝利宣言 | 2013年1月6日 |
| d. ナポレオンの大陸軍がロシア領内に侵攻 | 2013年6月24日 |
| e. “馬の守護聖人”フロルスとラウルの祭日 | 2013年8月31日 |
514. 重富公生「ナポレオン戦争期イギリス農業の位置づけをめぐって：「農業革命」論との関連を中心に」、「愛媛経済論集」8(2)、1988年、73-95頁。
515. 「大陸軍：その虚像と実像」
http://www.asahi-net.or.jp/~uq9h-mzgc/g_armee/raevski.html（2015年9月10日最終閲覧）
516. 高橋誠一郎『ロシアの近代化と若きドストエフスキー ——「祖国戦争」からクリミア戦争へ』、成文社、2007年。
517. 武田元有「フランス革命・ナポレオン戦争とロシア南下政策——バルト海貿易の危機と黒海貿易の成長」、「鳥取大学教育センター紀要」（6）、2009年、15-88頁。
518. 辰野隆「ナポレオン型」、「展望」（52）、1950年、84-88頁。
519. 田中良英「一八世紀前半ロシア陸軍の特質：北方戦争期を中心に」、「ロシア史研究」（92）、2013、3-23頁。
520. 田中良英「一八世紀前半ロシア陸軍の特質」（『祖国戦争200年』に寄せて：軍隊と社会の相克、共通論題報告要旨、2012年度ロシア史研究会大会）、「ロシア史研究」（92）、2013、90頁。
521. 手塚弘保「ナポレオンのロシア侵攻戦（1812年の祖国戦争）研究-4（完）」、「軍事史学」（8）、1967年、54-74頁。
522. 豊原治郎「1812年戦争の経済史的意義」、「商大論集」（53）、1963年、647-662頁。

523. 鳥山祐介「巣箱から飛立つ蜜蜂の群れのように——クルイロフの寓話詩『鴉と鶏』と1812年のモスクワ」、「千葉大学比較文化研究」1、122-137頁、2013年。
524. 鳥山祐介「エカテリーナ期——ナポレオン戦争期のロシア詩の中のヴォルガ：「ロシアの母なる川」が誕生するまで」、「『文化空間としてのヴォルガ』（望月哲男、前田しほ編）、「スラブ・ユーラシア研究報告集」4、35-67頁、2012年。
525. 長塚隆二『ナポレオン』上・下、文藝春秋社〈文春文庫〉、1996年。
526. 『ナポレオン言行録』（オクターヴ・オブリ編/大塚幸男訳）、岩波文庫、1983年。
527. ナイジェル・ニコルソン『ナポレオン1812年』（白須英子訳）、中公文庫、1990年。
528. 西川長夫「スタンダールのナポレオン *Il respecta un seul homme : Napoléon*」 [Essais d'Autobiographie (v)]、"Francia 4"、1960年、41-51頁。
529. 松村岳志「大改革以前のロシア帝国国軍の精神」（『祖国戦争200年』に寄せて：軍隊と社会の相克、共通論題報告、2012年度ロシア史研究会大会）、「ロシア史研究」（92）、2013、76-89頁。
530. 三浦清美『ロシアの源流——中心なき森と草原から第三のローマへ』（講談社選書メチエ）、2003年。
531. 村山磐「ナポレオン軍モスクワ撤退当時の異常気象」、「東北学院大学論集 歴史学・地理学」（12）、1982年、21-41頁。
532. 両角良彦『1812年の雪 モスクワからの敗走』、筑摩書房、1980年。
533. 両角良彦『東方の夢 ボナパルト、エジプトへ征く』、講談社、1982年。
534. 両角良彦『セント・ヘレナ抄 ナポレオン遠島始末』、講談社、1985年。
535. 両角良彦『反ナポレオン考：時代と人間』（朝日選書）、1998年。
536. 山本俊朗「1812年のスペランスキー」 [小林正之先生古稀祝賀退職記念号]、「史観」（94）、1977年、27-36頁。
537. 山本俊朗『アレクサンドル一世時代史の研究』、早稲田大学出版部、1987年。
538. 横山又次郎「ナポレオンの征露軍と地理」、「地学雑誌」47（1）、1935年、1-6頁。
539. 吉原武安「クルイローフの寓意詩——ナポレオンのロシア侵略前後の」、「東京経済大学人文自然科学論集」（10・11）、1965年、891-910頁。